

# 徒然なる中・短編集（元おまけ集）

VISP

拙作「助けて旧神様！」の嘘予告や短編等を集めました。

現在は題名通り、突発的な短編等も投下しています。

禪院直哉の趣味的な人生シリーズを独立させました。

# 目次

嘘予告第一弾	×ゲート	自衛隊彼の地にて斯く戦えり	1
嘘予告第二弾	×F a t e \ Z e r o		17
嘘予告第三弾	×地獄堂霊界通信		25
×ゲート	自衛隊彼の地にて斯く戦えり	第二話 後書き追加	31
×ゲート	自衛隊彼の地にて斯く戦えり	第三話	49
東京喰種ネタ	その1		63
転生美神による横島忠夫改造計画			89
横島忠夫改造計画2			99
F G O 短編	安珍が逝く		125
F G O 短編	フンババが逝く		149
艦これ短編	深海工廠艦が逝く		185

- 艦これ短編 深海工廠艦が逝く2
- 艦これ短編 深海工廠鬼が逝く3
- 艦これ短編 深海工廠鬼が逝く4
- 東方短編 白狼天狗が逝く
- 嘘予告 デモベ×FGO 後書き追加
- 艦これ短編 赤城が作る
- FGO×デモベ第2話
- FGO×デモベ第3話
- FGO短編 フンババが逝く 遊星からの使者編
- GS美神短編 政樹が逝く
- GS美神短編 政樹が逝く2
- GS美神短編 政樹が逝く3 微修正
- 装甲悪鬼短編 無銘が逝く 微修正

ワンパンマン転生 魔法使いが逝く 修正

ワンパンマン転生 魔法少女が逝く2

ワンパンマン転生 魔法少女が逝く3

FGO×デモベ 第4話

FGO×デモベ 5話

IS 転生 三組代表が逝く

IS 転生 三組代表が逝く2

IS 転生 三組代表が逝く3

IS 転生 三組代表が逝く4

IS 転生 三組代表が逝く5

IS 転生 三組代表が逝く6

IS 転生 三組代表が逝く7

IS 転生 三組代表が逝く8

IS 転生 三組代表が逝く 9

IS 転生 三組代表が逝く 10

IS 転生 三組代表が逝く 11

IS 転生 三組代表が逝く 12 微修正

IS 転生 三組代表が逝く 13

S R W O G 転生 テンザンが逝く 1

S R W O G 転生 テンザンが逝く 2 改訂・加筆

IS 転生 三組代表が逝く 14

S R W O G 転生 テンザンが逝く 3

転生モーさんが逝く 1 前書き追加

転生モーさんが逝く 2

艦これ短編 赤城が作る 2

転生モーさんが逝く 3

転生モーさんが逝く 4

転生モーさんが逝く 5

転生モーさんが逝く 6 後書修正

転生モーさんが逝く 7

転生モーさんが逝く 8

転生モーさんが逝く 9

転生モーさんが逝く 10

転生モーさんが逝く 11

転生モーさんが逝く 12 後書修正

転生モーさんが逝く スペック表

転生モーさんが逝く 世界の裏側

転生モーさんが逝く 第四次聖杯戦争編 前編 微修正

転生モーさんが逝く 第四次聖杯戦争中編

転生きよひーが逝く

転生きよひーが逝く スペック表

転生きよひーが逝く カルデア編

F G O 転生 オイフェが逝く

現在考えてる小ネタ集

F G O 転生 オイフェが逝く2 大幅加筆修正

小ネタ集2

血界戦線転生 デザインペビーが逝く

F G O × デモベ 嘘予告 AD × × × × 変異特異点「異界浸食都市アー

カム」

嘘予告 F G O の自鯖を特典にして転生した in 血界戦線

1073 1065

1051 1043 1029 1019 1007 997 991 969

仮面ライダーダークウガ転生 怪人が逝く

IS 転生 魔改造セシリアが逝く

IS 転生 魔改造セシリアが逝く その2

IS 転生 魔改造セシリアが逝く その3

IS 転生 魔改造セシリアが逝く その4

IS 転生 魔改造セシリアが逝く その5

艦これ短編 赤城が作る3

IS 転生 魔改造セシリアが逝く その6

Fate短編 ファフニールが逝く

IS 転生 魔改造セシリアが逝く その7

Fate短編 ファフニールが逝く その2 加筆修正

艦これ短編 赤城が作る4

落第騎士SS 桐原にTS転生

ネタ GATE×???

転生者達が逝く

このすば転生 ガチ女神が逝く

このすば転生 ガチ女神が逝く その2 微修正

このすば転生 ガチ女神が逝く その3

オーバーロード転生一発ネタ 42人目の爺が逝く

このすば転生 ガチ女神が逝く その4 修正

オーバーロード二次 廃課金で逝く

オーバーロード二次 メカオタが逝く

オーバーロード二次 マスクドライバーが逝く

オーバーロード二次 TS モモンガが逝く

オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その1

オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その2 一部加筆修正

オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その3

オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その4

オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その5

オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その6

オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その7 一部修正

オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その8

幼女戦記 信仰者が逝く

オバロ転生 クレマンティーナが逝く

オバロ転生 ドラゴンが逝く

女神転生 短編 「うちの蠅王様」

女神転生安価風SS 「うちの蠅王様」プロローグ

ストパン転生ネタ 101人ウィッチ

ストパン転生ネタ 101人ウィッチ その2

ストパン転生ネタ 101人ウィッチ その3

幼女戦記×101人ウィッチネタ 101人魔導士 加筆修正

幼女戦記×101人ウィッチネタ 101人魔導士 その2 加筆修正

幼女戦記×101人ウィッチネタ 101人魔導士 その3

ヒロアカネタ 願望器が逝く

幼女戦記×101人ウィッチネタ 101人魔導士 その4

ヒロアカTS転生 静謐のアサシンで逝く

ヒロアカ転生 メカが逝く

ヒロアカ転生 BB(偽)が逝く

ヒロアカ転生 BB(偽)が逝く2

ヒロアカTS転生 静謐のアサシンで逝く2

リクエストネタ 嘘予告版

ヒロアカ転生 歌姫が逝く

鬼滅の刃で転生SS 鬼化転生者の話

艦これ短編 赤城が作る5 新年初カレー編

よくある転生作家系サーヴァントの話 序章

よくある転生作家系サーヴァントの話

よくある転生作家系サーヴァントの話 いくつかのイベント編とステータス

なのはクローンの小ネタ SS

t w s t 夢風小説で人外主のお話

藤丸立香成り主（原作終了後）の次なる人生（in 呪術廻線）

呪術廻戦 SS 転生特典はとある PC ゲームでした

呪術廻戦 SS 化け物に化け物ぶつけたら国が滅びかけた件

呪術廻戦 SS ある宿儺成り代わり主の飛騨開拓或いはその後の後世への

### 影響

ある宿儺成り代わり主の飛騨開拓或いはその後の後世への影響その 2

ゆんゆんヒロインで小ネタ考えてみた

嘘予告第一弾 ×ゲート 自衛隊彼の地にて斯く戦えり

或いはこんな結末と始まり

---

もし、あの無限螺旋を「彼或いは彼女」が1人で歩き続けていたら…。

彼は邪神の姦計渦巻く無限螺旋の只中に、何時の間にか巻き込まれていた。

その中で、魔を断つ剣と出会い、彼らと共に長い間戦い続けた。

だが、長い永い螺旋の果てに、心を壊された。

もし彼が白と黒の王の様に、己が伴侶がいればこうはならなかったかもしれない。だが、彼或いは彼女は決してそういう者を置かなかった。

世界が巡れば全ては泡沫と消え去ってしまう、邪神の箱庭で。

自分と同じ様な犠牲者を増やす事を良しとしなかったのか。

それとも、単にそうするだけの気力すらも枯れ果てていたのか…。

最早本人にすら、その理由は解らない。

それでも、彼或いは彼女は、己が肉体を入れ替えながら、ただ惰性のままに無限螺旋を彷徨い続けた。

そして、彼或いは彼女の旅路も、終わりを迎えた。

パリィン、という不意の破碎音に、視線を空へ向けた。

そこにはつい先程まであった巨大な門の形を取った外なる神の一柱、ヨグⅡソトースがその門を閉じながら、虚空に消えていく様があった。

「ああ………。」

全て終わったのだと、彼女は理解した。

次いで、自分が結局は何も成せなかったのだとまざまざと見せつけられた。

(結局、私／オレは単なる道化だったか……)

必死に生き延びる事だけを目指した初期。

無限螺旋から逃げのびる事を目指した中期。

自身の限界に気付き、それを打破しようとした後期。

何もかもがどうでもよくなり、ただ流されるままに生きてきた終期。

(もう、どうでもよいや……)

煌めく程に磨かれ続けた白の王。

哀れな程に汚濁に塗れた黒の王。

それらを掌で弄び続ける混沌。

事の善悪は最早関係無かった。

彼らの姿は余りにも大きく、遠く……そして、眩かった。

それに追い付けない己がただ只管に小さく、弱く……惨めだった。

或いは、彼或いは彼女にも半身たる相棒がいればそれが成し得たかもしれない。

だが、最早全て終わった事だった。

(ああ、これで漸く……)

そして、彼女は堕ちていった。

何処とも知れぬ世界の狭間、何処でも無い世界の隙間に。

何処まで堕ちていくのか、それは混沌の邪神にすら解らなかった。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

何時間か、何日か、何年か、何星霜か…。

そうして堕ちた見知らぬ世界で、彼女は再び歩み始めた。

平和な世界、平和な時代、人類相手の絶滅の危機の無い限定戦争だけの時代。

そこで彼女はまどろむ様に過ごしている。

何も知らなかった在りし日の様に無気力に。

「今日は新刊の発売日、か…。」

てくてくと、小柄な少女が銀座の歩行者天国を呑気に歩き続けている。

真っ白な薄手のワンピースを纏った銀髪碧眼の美少女。

親や供の影もなく、てくてくと彼女は歩いている。

小柄な体躯にはやや大きめな肩掛けカバンには、彼女が自身の魂を除けば唯一持ちだしてきた魔道書が納められている。

今現在、少女の姿を取っている彼或いは彼女だが、普段は向こうで培った一部の技術の特許等を用いて健康的かつどっぷりオタクな趣味を開発しながら生活している。

この世界に堕ちてきた当初は無気力過ぎて殆ど深山に籠る仙人の様な生活をしていたのだが、とある人物が彼女のいた領域に迷い込んできたため、新たに現代人的な生活を始める事となったのだ。

今現在、彼女はその人物とその妻の家の近所のマンションに1人暮らしをしてい  
るのだが：何かと面倒見の良い人達だったらしく、割と頻繁に訪問してくるため、  
何だかんだいって友好的な付き合いが続いている。

オタク趣味が復活したのも、夫婦そろってオタクであるその人達の影響だったり  
する。

平穏な日常と現代の日本での生活。

嘗て彼或いは彼女が単なる彼であった頃を象徴する暮らしに、彼女はすっかり寛

いでいた。

だが、何故だか今日はどうにも「臭う」。

嘗て彼或いは彼女が咽返る程に嗅ぎ続けていた戦乱の気配、濃厚な魔力の残り香。それが神秘の殆ど消えた時代の平和な日本で、何故か濃厚に感じられるのだ。

そして、先程から魔術師として鍛えられた第六感が警鐘を鳴らし続けている。

「来た。」

だからこそ、突然確認した魔術行使の気配にも当然の様に受け止められた。

突如銀座に現れた中世ヨーロッパ風の石造りの門。

そこから現れ始めた怪異の群れは、平和ボケした彼女に嘗て捕らわれた無限螺旋での日々を思い出させるのに十分なものだった。

休日歩く銀座の歩行者達にとって、それは映画の撮影か何かにしか見えなかった。

そして空を舞うワイバーンに騎乗した騎士達が呆然としながらもスマホオのカメ

ラを向ける群衆へと馬上槍を向け、上空から突撃を開始する。

その矛先が哀れな犠牲者に到達するまで既に3秒とかわからないだろう。

ここで坐して見ていれば、異世界の軍隊による銀座への侵攻作戦、その犠牲者はあつと言う間に増える事だろう。

現に目前の得物に勝手気ままに襲い掛かっている怪異達により、既に死傷者が発生している。

既に血は流され、双方ともにただ退く事は許されない。

きっと、今流されていた血が一滴に見える程の膨大な血が流される事態となるだろう。

ここで彼女が何をした所で、二つの世界の歴史は大きな変化は無いだろう。

だが……彼女の脳裏に過ぎる2人の姿が、彼女の心を決して離さない、離してくれない。

それは堕ち続けた彼或いは彼女が見た幻影。

世界の狭間、何処でもない場所。

そこで永劫に戦い続けている最も新しき旧き神の姿。

それは堕ちた今もなお、彼或いは彼女の心を捕えて離さない。

自分が決してソレに成れない事を知っているのに、ついついその背を眼が追ってしまう。

そして、気付けばその真似事をしてしまうのだ。

嘗ての様にリーアを名乗り、今は少女の体を取っているが、混沌としての己のルーツを知った彼或いは彼女は、基本的に不定形の存在である。

即ち、何にでも成り得るのだ。

だが、それは彼或いは彼女が善なる存在だという事ではない。

孤独と絶望と諦観に擦り切れた精神では、強靱すぎる肉体へと追従する事は出来なかった。

だから、彼女の心は空っぽだ。

ただ嘗ての経験を元に模倣しているに過ぎない生き人形。

余りにも眩い姿に憧れ、しかし心折れてしまった弱い怪物。

己が願いを持たない、しかしガラス細工の様に美しく磨かれた無色の王。

だから、降下してくる竜騎兵の槍を弾いたのも、所詮は昔からの習慣に過ぎなかった。

コンマ1秒未満の速さで鍛造したバルザイの偃月刀を、突き出される馬上槍に切り上げる形で叩きつける。

次いで、鍛造したデザートイーグルを連射する。

並外れた動体視力と靈感により、射出された3発の0、54インチ弾は狙い違わずワイバーンの強固な頭蓋と騎士の兜ごと、その中身を貫徹、撒き散らした。

そして、脳を失いながらも残った身体は、その勢いのままに

ドガッシャアアアンツ!!

路肩に停車していたトラックへと轟音と共に衝突した。

余りにも非現実的な光景に、一瞬の静寂が門の前に広がる。

だが、そんな事態を理解できない怪異達が人を殺し、その血肉を喰らい、興奮の

まま突き進み始め：リーアに当たり前の様にその首を無骨な刃で刎ねられ、或は銃撃によって頭蓋を吹き飛ばされていった。

一拍遅れ、噴き出した鮮血や肉片が自身に掛かった事で、群衆は漸く悲鳴と混乱と共に我先に逃げ出していった。

かくして、この時より人類史上初となる異世界間戦争と地球初の魔導師が公的に認知される事となった。

この時、後に特地と呼ばれる異世界に長く伝えられ続ける伝承が生まれる事となる。

怪異を碎き、龍を屠り、神々すら殺戮する魔女のお伽噺。

悪でも善でもない、曇り無きガラス細工の様な白痴の魔女の童話。

その存在は地球と特地、双方において大きな波紋を広げていく事となる。

## 人物紹介

○ リーア・アシュトン

御存知「助けて旧神様！」の主人公のIfの姿。

悪堕ちではなく、「自分では何も変えられなかった」という無気力と諦観、絶望に支配されている。

劣化マスターテリオンかと思いきや、無限螺旋からの解放すらどうでも良くなり、ただ惰性のままに嘗ての憧憬に従って行動している。

基本的に自己の願望というものが希薄で、誰からの頼みでも他人に迷惑がかからないものならホイホイと受ける。

その結果、助けた相手が不幸になろうとも配慮はしない、限り無く無色の願望器。ぶっちゃけアポクリのジークフリードに近い。

だが、他の願いと矛盾するものだった場合、基本的に先に願った方を叶える。

この世界の富士の樹海に堕ち、そこで異界を形成して10年近く眠りに就いてい

だが、特殊作戦群の訓練のために訪れていた伊丹耀司（標的にされる前に逃げ出した）が発見した事から目覚める。

以後、戸籍の無いリーアを伊丹が養子として引き取って現在に至る。

当初はリーアも遠慮していたのだが、可愛いものに目が無い梨紗による着せ替えや同人誌作成の手伝いにより既に彼方に消え去っている。

それでも最後の遠慮として特許取得後は別宅に暮らし、養育費（高校から通信制に入学）も自分で払い、余り伊丹宅に居着かないようにしている（≡夫婦の時間への配慮）。

平和な日常においては伊丹夫婦を最優先で行動しているが、魔術や人外と対した場合や他人に助けを求められた場合はそちらを優先している。

ただ、あんまりじれったいとか距離のある伊丹夫婦を見て、食事に軽めの媚薬（後遺症無し）を仕込んだりと余計な事もしている。

日本国政府が最重要機密として保護しており、国外からは最重要確保目標として目の敵にされている。

だが、本人の武力が一国を単独で殲滅できる程なので、刺客の類は今の所ほぼ独

力で撃退に成功している。

なお、門を勝手に開いて騒乱を起こしたハーディをきっちり締め上げている。

○ 伊丹耀司

「ゲート 自衛隊彼の地にて……」の主人公にして、リアアの養父にあたる。

富士演習場での特殊作戦群の演習中にリアアの構築した異界に紛れ込んでしまい、彼女を目覚めさせてしまつてから今日まで面倒を見ている……のだが、親子ではなくどっちかってーと同年代か年上の同性を相手にしている気分させられている。

二条橋の英雄としてやっぱり有名になつてしまつたが、それ以上に養女が世界的有名人となつてしまい、彼女の身柄の安全確保に四苦八苦する事となる。

特地において、三人娘＋１にフラグを立てる事になるのだが、養女からの監視と何だかんだで待つていてくれる妻の存在があり、今の所靡いていない。

が、＋１こと皇女が淡々と重婚の準備をしているので、油断は一切できなかつたりする。

そして再開通後、何時の間にか子持ちになっていた伊丹はほぼ強制的に重婚への道を歩ませられることとなる。

○ 伊丹梨紗

耀司の後輩にして妻であり、同人誌作成や西洋人形等の可愛いものが大好きな生産系オタク。

夫がいきなり養女を連れてきた事に大層驚き、誘拐を疑ったものの、結局リーアの可憐さに全てを投げ出してOKしてしまった。

最近の趣味はリーアを着飾る事、一緒に同人誌を作る事。

なお、リーア本人はBL系は忌避している事もあって、最近ではロボット系作品の非18禁同人誌を書いてたりコト○キヤ製プラモを作成してたりする。

何気に伊丹が一度休暇で特地从帰還した際に妊娠しており、閉門騒動後に出産、一児の母となったりする。

なお、養育費は何時の間にか振り込まれていたリーアの恩返し資金と耀司の4年分の給料から出ていたりする。

再開通後、凄まじい修羅場を展開する事になったりならなかったり。

# 嘘予告第二弾 ×Fate/Zero

冬木市壊滅間違いなし

---

「来たれ、天秤の守r 「キリツグー、お母様ー！イリヤも混ぜてー！」

「「あ」」

「サーヴァント・セイバー。聖杯の寄る辺に従い参上した。貴方が私のマスターですか？」

「サーヴァント・キャスター。召喚に応じ参上した。君が私のマスターか？」

遠坂の系譜でもないのに「うっかりの呪い」が発動したアインツベルン家から物語は始まる。

「で、私が呼ばれたという訳か？」

「えと、その、ごめんなさい……」

「まあ良いさ。完全に偶発的なものなら、子供の君を責めるのはお門違いだ。で、この先どうするのか考えているかな？」

「???」

(ダメだこりゃ……)

「では私は切嗣らと共に先に冬木入りする。次は現地で会おう。」

「ええ、私達は後からね。キャスター、くれぐれもあの人をお願い。」

「了解。そちらも気をつけてな。観光も良いが…食いすぎて太るなよセイバー？」  
「な!?なんでそこで私を見るのですかキャスター!と云うかサーヴァントである  
我々は太りません!謝罪と賠償のお菓子を要求します!」

(そんなだからだと思わよ、セイバー…。)

そして遂に、全ての英霊が一堂に会した。

「聖杯に招かれし英霊共は!今!此処に集うが良い!なおも顔見せを怖じる様な  
臆病者は、この征服王イスカンダルの侮蔑は免れぬものと知れ!」

「サーヴァント・キャスター。呼び掛けに応じて参上した、が…私もその誘いは  
受けられんな。これでも一途な方だね。」

「なんと!お主程の美女がのう…是非マスター含め、余と轡を並べてほしいもの  
だが…。」

「我が主を見つけ出し、口説いてみせろ。話はそれからだよ。それに…これでも子持ちでね。」

（え、キャスターって結婚してたの？）

斯くして、物語は正史から外れ、明後日の方向へと向かい始めた。

（さて、取り敢えずアイリの体は出来上がったが…。）

「キャスター、アサシンの動向は？」

「やはり情報収集に徹しているな。数で言えば100未満だが…全てのマスターを殺し切る位は朝飯前だろうな。」

「余裕か？それとも何か策が…。」

「見た感じ、アーチャーを最後に残すつもりなんじゃないか？」

「有りと言えば有りだが…あのアサシンを抱えてか？」

「通常の山の翁なら兎も角、あれでは折角の物量も宝の持ち腐れだな。」

同時刻、何処かでうっかり優雅がくしゃみをしていた。

「ほう、魔術師風情と考えていたが…半神にして我と同じく奴らの敵対者であったか。良い、良いぞ。汚泥に塗れながら、それでもお前の美しさは一片の曇りも無い。その磨き抜かれた魂…我の下に侍る事を許そう、半神にして神殺しの魔導士よ。以後、その意思の全てを我のみに向けよ。」

「口説き文句としては評価対象にすらならんよ、古代ウルクの黄金王。原初の英雄ギルガメッシュ。私は私だ。神々が相手だろうが、他の誰にも奪わせん。」

「その怒りも憎悪も、実に心地よい。が、主人に噛み付くのは頂けんな。」

「使うつもりは無かったが、止むを得んな…アーリ！」

「あいあいさー！」

「永劫！時の歯車、裁きの刃、久遠の果てより来る虚無！」

永劫！汝より逃れ得る者は無く、汝の触れし者は死すらも死せん！」

今宵、冬木市は壊滅する（確信）

「で、なんで召喚に応じたん？」

「いや、子供が助けを求めてると思っついでない？」

「全員独り立ちしたからって、それは無いんでない？」

どうやらリーアさんは子供に甘い様です

---

続きません、続きませんからね！（威嚇）

前の方の感想はすみませんが削除させて頂きます（土下座

おわびに×ゲート自衛隊の方を近日中に更新します。



## 嘘予告第三弾 ×地獄堂霊界通信

今日たまたま古本屋で地獄堂霊界通信のコミック版を読んだので執筆。

原作版は小学生の頃に隣の図書館に自転車で30分位かけて行ったなあ（遠い目香月日輪先生の作品は今も私のバイブルの一つです。

あの人の作品、面白いだけでなく色々考えさせてくるから好き。

---

これは何時かの何処かであったかもしれない物語

「朝早くからすまんが、店主はいるかな？注文の品を受け取りに来た。」

これが、上院町の悪ガキ三人組と半神にして神殺したる彼女の出会いだった。同時に、上院町が恐怖のどん底に陥る事件の幕開けだった。

「すつつつげええええ美人だったぜ！髪も銀色で手足もすらっと長くて！」

「かーちゃん達みたいない感じもした！後おっぱいもでかかったよ！」

「銀髪碧眼の美女を絵に描いた様な感じだったね。」

「ひっひっひっひ、そらそうよ。あれは子持ちだし、人ではないからの。」

（（あ、やっぱこっち関係のモノなのね。））

「あれは半神よ。それも随分と質の悪い奴とのな：ひっひっひっひ！」

時同じ頃、上院町で連続行方不明事件が発生する。

上院小の生徒にも被害者が出た時点で、遂に悪ガキ三人組が事件解決に向けて活

動を開始する。

その時、彼らが見たモノとは…

「テケリ・リ。テケリ・リ。テケリ・リ…」

「てけりりてけりりてけりりてけりり…」

「くそ！りょーちん目を覚ませ！」

「ダメだてっちゃん！りょーちんは今正気じゃない！」

「魔刃、鍛造！」

「あれはシヨゴスと言う奉仕種族の一つだ。椎名君は聞いた事ないか、クトゥルー神話って。」

「じゃあ、りょーちんがこうなったのは…。」

「狂気に魅入られたからだな。まあこれ位なら治療は可能だ。」

「でも、他の人たちは違うんだろ。」

「ああ。奴らを召喚した者を撃破しなければ、この事件は収束しないだろう。」

「オレらはどうすりゃいい？」

「良次君と椎名君は治療が完了次第、靈視を行ってほしい。奴らの大本を突き止める。無論、今度はさっきの様な事が起こらない様に精神防壁を張ってだが……きついでぞ？」

「やる。今回はもうりょーちんがやられてる。このまま黙って見てらんない。」

（あれ？オレ今回役立たず？）

そして、悪ガキ3人組と神殺しは上院町郊外の廃墟へと向かう。

そこで彼らが目にしたものは……！！

「」「」「テケリ・リ。テケリ・リ。テケリ・リ……」「」「」

「成程。やはり此処が正解だったか。」

「ど、どーすんのこいつら!？」

「くそ、火も雷も効きやしねえ！」

「いや、こいつら弱点あるから大丈夫だろ。」

「「え？」」

「うむ、椎名君が正解だな。と言う訳で、エルダーサイン！」

「いいか、3人とも。君達が深淵を覗けば、深淵もまた君達を覗いているんだ。その歳で一端の術者を名乗るなら、その事を心に刻め。そして、決して私らの様に踏み込み過ぎてはいけない。戻れなくなってしまう。」

「うん！お姉さんありがとう！」

「あんたは良いのかよ？またどっかで戦うんだろ？」

「今現在ダメな例の大人が言っても説得力無いよね。」

「お前ら少しは意見統一しろよ…。」

地獄堂霊界通信 外伝「悪ガキとフルートの戦慄」  
始まりません！

Q。なんで地獄堂に行ったの？

A。イブンカズイの粉薬とか材料確保すんの面倒なんだよ…。

## ×ゲート 自衛隊彼の地にて斯く戦えり 第二話 後書き追加

事態が変化する始まりは、一つの斬撃からだった。

突如現れた異界からの門、その向こうから目にも止まらぬ速さで疾走して来た影が、リーアへ鋭く弧を描く斬撃を放った。

ギャリン！

頑丈な金属同士が擦れ合う音と共に、疾走してきた影の動きが一瞬止まった。

豊満な肢体を白いボロボロのドレスから零れそうにさせている美女。

だが、その全身に爬虫類の様な鱗と尾、そして竜の様な翼を備えた美女が初めて見る神気を放ちながら、大振りの処刑鎌で切り掛かってきた。

これはもう彼女が人間や獣人の類ではないし、この事態を引き起こした、或は利用している側だと証言しているに等しい。

対するリーアは一瞬にして鍛造した丸形の何処か奇妙なデザインの盾で鎌の刃を防ぎ、今もギチギチと音を立てながら鏝迫り合っている。

『てめえが何か知らねえがなあ…!』

そして、均衡が崩れた。

『主上さんの邪魔すんじゃねええええ!』

翼による推進力、尾を地面に叩き付けた反動を勢いに変えながら、竜の様な美女が大鎌を強引に振り抜いた。

同時、背後に跳躍する事で衝撃の殆どを逃がしたリアは後方に吹き飛ばされながらデザートイーグルを発砲した。

ガウン!

轟音と共に竜女の左顔を吹っ飛ばした、が…

『いってえぞコラあ!!』

左顔を吹き飛ばされ、大きくその顔を仰け反らせた竜女は、しかし、死ななかつた。

それどころか、傷口が泡立たせながら再生していく。

明らかに物理法則を凌駕した光景だった。

だが、それは彼女達にとっては大した事ではない。

不死性も、自己再生も、転生も、彼女達にとっては極々当たり前のものに過ぎないのだ。

ドガシャアン！

吹き飛ばされたリーアは一切の減速無しに近くにあったカフェテラスに背中から突っ込み、瓦礫と埃を巻き上げた。

そして、数秒後には何の変化もなく立ち上がる。

否、先ほどまで血に染まった白のワンピースとは対照的に、丈の短い黒いドレスの様な衣装へと変化した。

単なる布地と侮るなかれ。

見る者が見れば、これそのものが一級の魔術霊装となる程の神秘を有している事が分かるだろう。

『ガアアアアアア!!』

童女が全くダメージを見せないリーアに突貫する。

下より彼女は信仰する神より不死を賜った身であり、躊躇する様な思考も精神も持ち合わせていない。

全ては彼女の信ずる神が欲するままに。

それが彼女の信仰である故に。

「アトラック!! ナチャ！」

対するリーアは左手首から翡翠色に輝く糸を上に向けて射出、アンカーの様に伸縮させる事で、竜女の突進を上空に飛び上る事で回避する。

『逃げんなあ!』

次いで、竜女もその翼を羽ばたかせて飛翔、追撃に移行する。

こうして、銀座事件は次の事態へと移行していく。

.....

自国の首都が何の前触れもなく異世界ファンタジーな軍勢に攻められるという驚

天動地の事態に対し、日本国の対応は普段のグダグダっぷりから考えるに予想以上に早かった。

と言うのも、異世界軍が攻め寄せてきたのが、市民の避難経路として使用されている江戸城、つまりは皇居である。

もう一度言う、皇居である。

皇居、つまり畏きお方のお住まいである。

排他的経済水域やらガス田やら北方領土やらでは及び腰になる日本の、食糧関係と並ぶ、否、それにすら勝る最大の逆鱗に、彼らは触れてしまったのだ。

一時間としない内に警察と自衛隊の出動が決定された。

首都圏の署が全て厳戒態勢に入り応援を派遣し、国内の自衛隊ならば情報を受け取った米軍基地も速やかに戦闘配備となり、出撃準備が行われていく。

後にこの日から続く一連の事件を振り返り、これまで日本に高圧的だった諸外国の殆どはこう眩いたという。

「異世界の連中は日本の地雷を踏み抜いた」と。

斯くして、銀座事件は第二幕へと移行していく。

.....

都心のビル街を、銃声と金属同士の衝突音を伴って二つの人影が飛び交っていく。これが地表ならそれ程違和感は無かっただろう。

だが、今彼女達が居る場所は高層ビルが多く立ち並び、それ以外のものが無い場所。

即ち人の身で空を飛んでいるのだ。

ただ、自前の翼を持つ童女と異なり、リアの方には少々趣が異なる。

両の手首から延びる翡翠色の糸をビル等に伸ばして接続、伸縮と振り子運動を用いて立体的な機動を可能としていた。

無論、自由度ならばどちらが勝るかは言うまでもない。

だが、リアには態々不利になってまで相手の目を釘付けにする必要があった。

(こいつが他にいけば、犠牲が増える…！)

リーアは霊装のあちこちに切れ目を入れながら、それでも一步も譲る事なく銃撃を続けていた。

この世界の地球は未だ魔術やオカルトが表に出ていない。

或は遠い昔に廃れ、それ以来文化としてのみ継承されている。

そんな彼らが不死殺しの業や対策のノウハウなど持っている訳がない。

だからこそ、彼女はこうして一時間近く時間稼ぎに徹している。

絶妙に相手が僅かなりとも有利であり、もう一手で止めを刺せると思えるような、そんな状態を維持するのはかなり神経に負担がかかる。

だが、幸いにも地表では反撃が始まりつつあり、現状を維持するだけで凡そ事態は収束するだろう。

(だが、この事態の原因となった神格の介入も気になる。現状、手下を遣したただけとは言え、油断は…ッ！)

『余所見してんじゃねえ！』

だが、懸念に思考を割いた影響か、動きが僅かに鈍った処に竜女の大鎌が迫る。

真下から急上昇して上へ振り抜く形故に威力は乗らない。

しかし、その一撃は振り子運動を行っているリーアにとって、躲した処で糸を切断される軌跡であり、どの道隙を晒す事となる。

「自、切！」

故にすかさず糸を切断、慣性の法則任せに上方から竜女へと切り掛かる。

ギャリン！

『お、らあ！』

そして、当たり前の様に弾き落とされた。

臂力なら兎も角、体重と翼による推進力を生かされては例え上と取っていても競争勝つのは難しい。

「チィッ！」

落下しながら鍛造したAKMを連射する。

牽制目的でばら撒かれた7・62x39mm弾は正確に目標を捉え、傾斜した鱗に当たり弾かれたものを除き、その全てが目標に着弾、貫徹した。

『が、あああああああああああッ！』

だが、不死身の狂信者という厄介極まりない者を押し留めるにはストップピングパワーが足りなかった。

「ぐうう!？」

大鎌の一撃がリーアを捉える。

如何なる金属で鍛えられたのか、この時代のMBT（主力戦車）の主砲の直撃にすら耐え得る霊装が切り裂かれ、盛大に血飛沫が上がる。

「アトラック!!ナチャ！」

故に即効で対処を行う。

もう数秒程度でコンクリートの地面に激突するという状況で、翡翠の糸が四方八方へと延びて蜘蛛の巣を形成、大きく撓みながらリーアの小軀を受け止め…次いで、トランポリンの様に高く跳ね上げた。

「はあああああ！」

『おらあああああ!』

ギヤァン!

轟音と共に、火花が散る。

人ならぬ両者は一寸も引かずにぶつかり合うが、今回はそれだけで終わらない。先ほどからずっと装備していた左腕の丸盾、その表面にあった「中心から伸びる5本の針」、それがザクザクザクザク！と何かを刻む様な音と共に回転していき：「ドゥマリニーの時計よ！」

『な…!?!』

全ての針が停止した瞬間、その盾の様な時計から光線が発射された。

その一撃は幸いにもビルや飛行物にぶち当たる事こそ無かったが、相当の熱量と光量を放ったらしく、近辺にいた人間や怪異の目が眩む程のものだった。

『ぎゃあああああああッ!?!』

無論、そんなものの直撃を受けた童女がただで済む筈もない。

ほぼ全身の皮膚が焼け爛れ、内部の水分が沸騰して眼球が白濁し、盾の前にあった右半身の殆どが蒸発し、全身が脳へと激痛をがなり立てている。

童女も不死とはいえ五感が存在する身では即座に立て直せず、絶叫と共に空中で身悶えた。

「バルザイの偃月刀、多重召喚！」

無論、その隙を見逃すリーアではない。

再び落下しながらも、決め時と見て本気で仕掛け始める。

召喚された12本もの偃月刀が一斉に飛翔、加速、竜女の残された手足と翼を一斉に貫通、引き裂いた。

『■■■■■■■■■■ ツ!!!!!!』

文字化出来ない様な絶叫と共に、竜女は落下していく。

そして、その行先は…

「本来、こちらの方が正しい使い方だな。」

簡単に逃げ出せると思うな。

言外にそう告げながら、リーアは落ちていく竜女の姿を見据えていた。

.....

事態は収束しつつあった。

門から押し寄せた帝国軍は、しかし、初期の足止めのため、史実よりもその行軍は遅く、犠牲となった者の数も減少していた。

また、史実同様に皇居警察の装備と練度、皇居の城壁を前にして攻めあぐね、とうとう自衛隊、機動隊の出勤というタイムリミットを迎える事となる。

だが、もう一つの勢力である「門を開いた側」からすれば、看過できない事態も起きていた。

自らの手駒である使徒、竜人ジゼルが捕えられた事。

しかも、捕えた者は他の見慣れない装備や服飾の人間達と異なり、明らかに自分達のような神々と戦う術を持っている。

現に、未熟者とは言え使徒であるジゼルが手加減をした状態で翻弄され、捕えられてしまった。

そしてもう一つ、捕えた者の魂の輝きだ。

人の身に収めるには余りに高い、高すぎる純度と輝き。

寧ろ使徒の類と言われた方が納得のいくそれに、冥府の神である彼女は直ぐに魅

せられてしまった。

『あの娘が欲しい。』

捕えて、愛でて、ぐちゃぐちゃのところになるまで混じり合いたい。

以前から目をつけていた狂気の神も使徒ロウリイも相当なものだったが、あの娘は更に別格だった。

『でも、今はまだ時期じゃないわね。』

あの実力、下手に手を出せば火傷では済まない。

ならどうする？

簡単だ、準備万端に整え、自分の領域に引きずり込み、確実に捕える。

『その前に、うちの子を返してもらおうわね？』

そう呟きながら、冥府の神ハーディは深淵の中でにんまりと微笑んだ。

.....

「ッ!?」

周囲の銃声や悲鳴、怒声、衝突音、爆発音。

そういった戦闘音が遠ざかった中、捕縛結界の維持に集中して一人佇んでいたリーアが不意に靈感の囁きのまま全周囲を警戒した。

直後、門から遠く離れたこの場所でありながら、突如「空中」に黒い穴が出現し、そこから大量の翼竜に似た生物が湧き出し、リーア目掛けて襲い掛かった。

「チィ！」

咄嗟に背後へ跳躍しつつ魔銃鍛造によりM-16を鍛造、弾幕を形成する。

が、黒い穴、あの銀座の門と同質の神気を感じるそれらは合計4つあり、弾丸の量よりも翼竜の出ってくる数の方が多い。

そして、現状これら全てを消し飛ばすのは、それこそ「本気」で暴れざるを得ない。

だが、翼竜達はこちらに殆ど攻撃もせず一分としない内に元の穴へと戻っていき、穴も即座に塞がった。

だが、その目的はもう分かっていた。

後には翼竜の死体しか残っておらず、先ほどまでであった結界への魔力供給が途絶えている。

つまり、先ほど捕えた竜女の奪還こそが敵の目的だった。

「やってくれる。だが、次は無い。」

武装を解除し、日が陰り始めた頃。

リーアの気配、それは殺戮者でも英雄でも王でもない。

黒の王の如く只管続く繰り返しに飽いて濁り、しかし白の王の様に一抹の希望を抱く

既に嘗ての無限螺旋のそれへと戻っていた。

## 後書き

よく考えれば、畏きお方に直接危害加えようとしたら、日本国民ガチ切れですよねと。

だからこそ、原作初期の虐殺に近い圧倒的戦果（帝国軍並び連合諸王国軍合わせ軽く10万オーバー）出した訳だろうし。

となると、日本が利益出すにはゲートの開閉&移動技術が必須であり、国家のメソッド的に帝国にどうケジメつけさせるかが大事になる訳だが…はてさて。

## 今回の元ネタ

糸使った立体機動…スパイダーマン、進撃の巨人。

ドリマリニーの時計…実はデモベビヤなく原作の方で持ち主を防衛するため、光線発射する機能があったりする。

リーアの霊装…白部分が黒く反転したホムホムの魔法少女コスチューム。時間操作できる丸盾と銃火器といい、結構似通ってます。





## ×ゲート 自衛隊彼の地にて斯く戦えり 第三話

今回は攻め込む前の準備段階。

そして今回、リーアさんがまーたやらかしますW

銀座襲撃事件から一か月。

日本は何とか凡その事態を把握し、収容した捕虜達の扱いに四苦八苦しながら、異世界と繋がる門の扱いに悩んでいた。

と言うのも、全ては事情聴取のために任意同行（という名の保護&監視）してもらった魔法使いことリーアから驚くべき情報を入手したがためであった。

用心のため、その場には保護者でもある伊丹二尉（銀座事件後に昇進）も同席し、改めてその出自と能力や人格、事件時の行動等に関して事情聴取を行った。

なお、「どうして最初から言わなかった！」という声もあったものの、伊丹二尉の「正直に言いましたけど信じられませんでしたのでカバーストーリー作りまし

た」という身も蓋もない言葉でお咎め無しとされた。

それはさておき、リーアが明らかに荒唐無稽エロゲ世界出身である事、単騎で同質量の核弾頭を超える鬼械神を召喚できる事、自衛を除いて人類間の戦争には関与しない事などが明らかになったが、最大の情報はやはり銀座の門に関するものだった。

「アレ、空間を捻じ曲げて無理矢理繋いでるからな。長期間開けてるとゴムみたいに揺り戻りで空間が弾けるぞ。」

より具体的な被害で言えば、一か月以内に門を閉じない限り、門を中心とした空間震が発生、結果として双方の世界が全宇宙規模で一切の減衰無しに振動すると言

う。

約半年間門を閉じなかった場合、震度4以上の揺れが地球全土を襲う。

その一言は日本及び自衛隊の首脳部、そしてスパイ及び売国奴や外交チャンネルを通じて世界各国へと広がっていった。

ここで一つ疑問がある。

何故リーアの言葉がここまで信用されているのか？

それは情報化社会かつ平和ボケ国家日本であったからだだった。

「銀座に異世界の軍勢現る」

「魔法少女（物理）VS 異世界軍隊IN銀座」

「リアルほむほむ2Pカラー」

「魔法少女VS半竜美女」

こんな題名がついた動画が連日世界中で再生されているからだ。

既に全世界で再生回数3億回を突破しており、今現在も増え続けており、ニュースや新聞、各種情報雑誌でも取沙汰されており、最早秘匿とか隠蔽とかどうしようもないレベルだった。

つまり、形はどうあれ人類は魔法の存在と異世界からの脅威を知ったのだ。

そして、ここまで有名になった人間を不当に拘束すれば、どれだけ現政権が批判されるか分からない。

また、魔法使いという現在唯一無二の貴重なスキルを持った人材である事も相まって、その扱いは極めて丁寧になっていた。

それに加え、彼女が地球人類に対して一切の危害を加えていない事、彼女が現役

自衛官にして二条橋の英雄の養子という事も大きい。

そしてもう一つ、彼女が告げる内容はどれも無視するには余りに重要だった。

「それにあの門は事実上何処にでも繋げられる。明日にはホワイトハウスかモスクワか北京かロンドンか：最悪、真空や深海に繋げられた場合、即座に破壊するしか手は無い。」

こればかりは門の向こうに行つて首謀者を取つちめるしかない、と渋面で告げた少女の言葉は一週間以内に先進国首脳部へと漏れていた。

そして、今までにない速さで各国は動いた。

未知の世界、未知の人類、未知の技術、そして未知の脅威。

国が動くには十分すぎた。

こうして世界各国から巨大な圧力をかけられた日本だが：実は割と知ったこつちやなかった。

既にこの一件で皇居が攻撃を受けた事実、自国の一般市民（外国人含む）の虐殺、そして元寇に連なる歴史上2度目となる侵略戦争に、異例の国会総一致で軍備増強と例外措置としての自衛隊の完全装備での門の向こうへの派遣、そして史実では

もう10年程かかるであろう憲法改正が決定した。

これに関しては国内でも反対の声が多かったものの、遺族らの根強い運動に加えて莫大な利益と巨大な国難を察知した政財界と諸外国の後押しにより可決される事となった。

更に内閣は国外に対しては米国との親密性をアピールする事で国際社会へと対抗した。

無論、見返りとして非公式ルートで捕獲された非人類（オークやゴブリン等）の一部の身柄、現在判明している門の情報の譲渡を行う事となったが、嘗てからの国防上の障害が消えた事に比べれば些細なものだった。

現状、門を開き続ける事のデメリットを考えると、門の向こうに関する知識等は殆ど泡銭扱いだった事も大きい。

そして銀座事件から約3ヵ月後の現在。

自衛隊は門の確保及びその向こうに展開していた軍勢を順調に殲滅しながら、日本の国益の確保ならびケジメを付けて地球を救うべく門周辺の土地を確保、重要拠点として整備する事に腐心していた。

なお、後詰として増員した自衛隊員だけでなく、在日米軍までまだかまだかと控えているので帝国側はどーやっても勝ち目は無かったりする。

「では始める。」

奇妙に折れ曲がった樹木が立ち並ぶ薄暗い森が生い茂る地。

その中で数少ない土だけの地面が露出した此処は富士火力演習場の程近い場所にある。

既に魔法少女コスに変身したリーアの魔術により、僅か10分程度で周辺一帯は平地に均されており、上空から見れば直径1kmの範囲がはっきりと空き、そこに巨大で複雑な魔法陣が描かれているのが分かるだろう。

更にその周辺を囲む様に、自衛隊の特殊作戦群を皮切りに選り抜かれた精鋭達が蟻の子一匹逃がさぬとばかりに警戒している。

それはここで今日、極めて重要な、それこそ人類史に残る程の作業が行われるからだ。

だが、彼らは決してその中心には近づかない。

そう命じられたから、と言えば簡単だが、それだけではない。

彼らは優れた軍人であるが故に何処か本能的に理解しているのだ。

ここから先に進めば無事では済まない、と。

不意にリーアの手の中に一冊の古びた書物が現れた。

語学に通じる者が見れば、その題名がラテン語で記されていた事、そして同時にその本が悍ましい邪悪な知識が記されている事が分かるだろう。

その書の題名は「エイボンの書」。

象牙の書とも言われる、大魔導士エイボンが記した古代ヒューペルボリア時代およびそれ以前の暗黒の知識を集めた魔道書、そのラテン語訳だ。

「ンガイ・ングアグアア・ブグ||シヨゴク・イハア、ヨグ||ソトース、ヨグ||ソトース——」。

そして紡がれるのは異界の言語。

常人にとってはただ聞くだけで精神の均衡を崩し、その魂を汚染する言霊。

決して耳にははいけない禁断の呪文。

その中心にいるリーアの役割は巫女だ。

此処とは異なる次元に存在する超常の存在たる邪神の力のごく一部を借り受け、自らの用意する魔力を持って現実を侵し、犯し、冒す。

魔道の本質は、通常の物理法則を歪ませる事にある。

「外なる虚空の闇に住まい者よ。今一度大地に現れる事を、我は汝に願ひ奉る。時空の彼方に留まりし者よ、我が嘆願を聞き入れたまえ。」

そして詠唱は続いていく。

この時、既に周囲の隊員達からはリーアの姿が歪んで見えていた。

「門にして道たる者よ。顕れ出でたまえ。汝の下僕が呼びたれば。」

別に彼女自身が人外の姿となった訳ではない。

周囲の空間が歪曲し、可視光線すら歪ませてしまっているのだ。

「顕れよ、顕れ出でよ。聞き給え。我は汝の戒めを破り、印を投げ棄てたり。我が汝の強力な印を結ぶ世界へと、関門を抜けて入り給え。」

遂に詠唱が佳境へと入った瞬間、空間の歪曲がこれまでで最大限となる。

この場の誰もが知識が無くとも確信していた。





球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球。

悍ましい程の数の球体が集積する。

それは原初の粘液の泡立つ、触覚のある不定形の生物。

全にして一、一にして全。

それは静止した現在。

それは流動する過去。

それは蓄積した未来。

それは門。

それは鍵。

それは それは――

無数の球体はあらゆる物理法則を無視した軌跡で飛び回り、空間を虹色に染め上げる。

そして、その全てが空に消えたと思った瞬間、虹色に爆発し、異界の光で周囲を照らし、遂に異界の光が結晶化し、実体を結んだ。

「扉……？」

誰かの零した声が夜の平地に響く。

旧支配者ですら遠く及ばない程の厳かで忌まわしい神気を放つそれは、扉の属性を持つ神格なのだ。

但し、その門は30cm弱だった。

《小っせ——!?!?!?》

その時、その場にいた自衛官達の思いは一つとなった。

それから約10分後、日本に二つ目のゲートが開く事となる。

---

Q どうやってリーアさんはヨグⅡソトースさん呼んだん？

A ヨグさんとこの息子さんと割と仲良しだったし、一部では混沌とも血縁と

されるから。

以下、その時の会話内容

ヨグ「やあこんにちは。」

リーア「申し訳ございません、この様な窮屈な呼び方をしてしまい…。」

ヨグ「いいよいよ、うちの子と親しいみたいだしね。あの子も漸く彼女から解かれたみたいだし。」

リーア「喜ばしい事かと。」

ヨグ「今は新婚さんだし、もう少ししてから顔出すと伝えてね。その代り、注文された門はこちらでしっかり作っておくから。」

リーア「ありがとうございます。二人には私の方から伝えておきますので。」

ヨグ「うんうん、じゃあまた機会があればよろしく。」

※ここでの「もう少し」とは外なる神の基準≡星の寿命よりは短い位。

なお、ヨグさんの作った門は一切のデメリットはありません。

但し、位階の低い魔術師や普通の人間が弄ろうとすれば魂が砕けるか発狂します。

Q2 　なんでこんな事になったの？

A2 　特に大きな神殿も生贄も無いんだから、呼べただけでも普通は奇跡。

次回から特地編に移行。

また日記形式、しかも伊丹視点でいきます。

## 東京喰種ネタ その1

活動報告で上げてたネタをSS化。  
大分手抜きですがご容赦を。

---

2、神様転生して風見のうかりん（夜は幽香）ルート

この世界に転生して、もう20余年となる。

幸いと言うべきか、ギリシャ系の匂いがする神からもらった特典は希望通りでも有用で、しかし、それ故に目立ってはいけなさと考えさせられた。

この世界の名は東京喰種、サスペンスホラーダークファンタジーバトル漫画にして某絶望の物語ばりに救いようのない難易度ルナティックな世界である。

だが自分の種族は人間、グール対策さえ気を遣えば大丈夫、問題ない……！（自  
己暗示

取り敢えず、将来は東京から離れる道を選ぶとしよう、うん。

時は飛んで10歳から母方の田舎の実家で暮らし始めた。

八王子の更に奥の方、辛うじて東京都と言う場所で、現在の私は祖父母と共に土  
を耕し、野菜を育てながら暮らしている。

と言うのも10歳になる前に両親が出先で餓えた喰種に襲われて他界したからだ。  
既にその喰種は駆逐されたものの、両親が帰ってくる訳でもない。

喰種対策局ことCCGのアカデミーへの入学も打診されたが、祖父母が是非にと  
言ってくれたので、そちらに引越す事になったのだ。

私もこれ幸いと祖父母の家に移り、二人と共に大好きな農業に励んでいる。

だが、学校生活で問題が起き始めた。

私の転生特典の影響により、私の中の嗜虐願望が急激に強まり始めたのだ。

自分に逆らう相手を捻じ伏せたい、踏み躪りたい。

草花や作物を大事にしない糞の様な連中を八つ裂きにしたい。

そいつらの腹を裂き、臓物を飾り立て、鮮血を撒き散らしたい。

そんなD願望、本来の私には縁の無いものの筈だった。

これも私の転生特典、風見幽香の容姿と能力の副作用によるものと考えられる。

このままでは私の夢見る長閑ならぬ農家な生活から遠ざかってしまう。

態々植物系能力を持った強者を選んだのに、このままではいけない。

唯でさえ物騒なこの世界、そんな実力者なんていたら直ぐに目を点けられてしまう。

ならばこんな時こそ転生チートの出番と、私は私なりに古書店や怪しげなサイトを巡回して、ある程度魔法の知識を仕入れ始めた。

元々活字中毒の気もある私にはさしてきつい行動ではなかったが、そうして得た知識を更に選別して試して使い物にするのは中々に骨が折れた。

幾ら種族は人間として生を受けたとは言え、風見幽香の本質は花の妖怪にしてUC、それが早々に消える事はない。

ならば逆に彼女が出来る事は能力だけでなく、彼女の代名詞の一つとして有名な

あの技の様な事も研究次第によっては可能だと考えたからだ。

幸いにも祖父母が老人らしく早寝早起きだからこそ見つからずに済んだが、これももし両親が生きていた頃で考えると背筋が寒くなったものだ。

うっかり家に呼んでしまった霊を全力でぶん殴ったら消えたのをきっかけに妖力の扱いを覚えたのは今も記憶に新しい。

そうして私は、自分を切り替える術をモノにした。

昼は植物全般を愛し、農業に励む暢気な農香として。

夜は花と暴虐を愛し、虐殺（畑泥棒や害獣相手に）を嗜む幽香として。

それからの8年間は本当に平和だった。

朝は畑に出て、二人で朝食を食べてから登校し、昼は学校で友人達と過ごし、帰ってからは夕飯作りか畑や田んぼに出て、夜は術や妖力の扱い方の練習をしてから眠る。

そんな忙しくも充実した日々は、祖父の死と共に終わった。

高校を卒業し、本格的に農業に従事するようになった頃、祖父は眠る様に自室の布団で亡くなっていた。

祖母は薄々感づいていたのか、泣いて悲しみながら肅々と葬式の準備をした。

私と言えば、愕然として暫く何も出来なかった。

ただ惰性で農業を続けてたが、この時期にもし祖母がいなかったらと思うとゾツとする。

恐らく、そこらへんの木っ端喰種であろうと殺されていただろうからだ。

更に祖父の二回忌と合わせる様に、祖母も亡くなった。

祖父と同じ様に布団の中で眠る様に穏やかに息を引き取っていた。

今度は何とか近所の人の手を借りながら式を全うできた。

こういう時の地域の結束というのは本当にありがたかった。

やはり幼少時からご近所さんとお互い融通したりお手伝いしてたのと、祖父母の人徳によるものだな、うん。

さて、一人になった私だが、それまでと同じく農家は続けるつもりだった。

祖父母の家と墓の世話もあるし、都市の方に行かずともネット通販を使えば近くのコンビニで大抵のものは手に入る。

食料？自給自足と物々交換でどうにかかります。

ただ、どうせだから祖父母がいた時には気になっていたものの手間の関係から止めていたものに手を出した。

それは果物だった。

これなら販売は大通りに面した無人販売所でも良いし、田んぼ程人数が無くてもやっけていく事が出来る。

楽かと言えば厳しいが、田んぼをするのは流石にコスト面できついのだ。

大型の作業機械を一人の収入で維持・保守整備・運転するにはコスト的にきついし、手作業が多めな果樹園は幸いにもこの幽香ボディなら負担にならないし、何より楽しい。

それに能力と術を用いて植物への実験を大がかりにする事も出来るのも嬉しい。土地の方は田んぼを埋めて果樹園にすれば良い。

上手くいけばコストも手間も大幅に減らす事が出来るだろう。

問題なのはその辺りのノウハウが私にあんまり無いのと土の購入と埋め立ての依頼、役所への手続き諸々だったりする。

まあ時間はあるのだし、遺産も結構な額がある。

気長に頑張つて、天国の祖父母と両親を安心させてみせよう。

そして三年目にして漸く果樹園が軌道に乗った。

と言うのも果樹は果樹でも何を育てるか色々として行錯誤した結果だったりする。桃にリンゴ、梨に葡萄、更に祖父の所有だったという里山にアケビや山葡萄、柿にキウイ等も植えた結果、收拾がつかなくなったのだ。

しかも今メインで育てているものはそれらとはまた別であり、ハウスまで建てて一から自分の満足のいくものを育てたのだから差もありなん。

その育てたいものなのだが：何分国内では難易度が高いので、比較的日本でも育てやすそうなものを見繕って能力で促成栽培↓人工交配、更に幾つかの苗から良さげなものを見繕って促成栽培↓人工交配を繰り返して、更に日本の気候でも元気に育つようにと私の魔力と能力でブーストをかけた逸品である。

文字通りこの世に一つしかない種類なのだ。

「すいませーん、コーヒー豆小袋で一つとコーヒーの実大袋で三つお願いしまーす  
！」

「はいー！今行きますー！」

そう、私が苦勞して育てているのはコーヒーノキ。

この世でただ一つの栄養豊富なコーヒーチェリーが成る、日本で唯一のハウス無しで自生可能な品種「四季」は只今大人気発売中なのだ。

…まあ風や虫除けの網はしているのだが。

事の起こりは私が気晴らしに都内の方を散歩しにいった時。

偶然目に入って入店した喫茶店のコーヒーが、あんまりにも美味しかった上に、その店長さんが亡くなった祖父程ではないにしろ素敵なロマンスグレーだったのだ。

混んでない時間帯とは言え、つつい二杯もおかわりした上に話し込んでしまった、その日の出会いは何をメインで育てるか悩んでいた私の心を完璧に方向付けるものだった。

あの時のコーヒーの銘柄も聞き、自宅で何度も練習したものの、美味く淹れる事が出来なかった。

よろしい、ならば豆から拘ってくれる。

何処で思考が逸れたのか、そこからは持ち前の熱意で暴走し、気づけば苗木を育

てるためのビニールハウスを立て、各銘柄の種を取り寄せていた。

そこからは後は先に言った通りだ。

そして努力の結果、固定客も大勢ついてくれた。

今では埋めた田んぼ全てをコーヒー畑にしても足りない程で、近所のご老人達をバイトとして雇って手伝ってもらっている。

作業を少し教えただけ、流石は元祖農家と言うべきか、私よりも素晴らしい手つきで作業してくれた。

それでもまだ足りないので、苗と私の妖力を含んだ上で成分調整した肥料も売りに出している所だ。

とは言え、直で妖力を注いでいる分、どうしても自分で育てた方が質が高いので詐欺商売とも言えるのだが…うん、まあ原理が解明されてないって事で！（目逸らし

にしても、やたらと売れ行きが良いな。

国産品って事でもの珍しさから買うのかな？いや、味は十二分に良いけども。

やっぱり例の喫茶店で店長に宣伝お願いしたのが効いたのだろうか…。

現在、東京都内の喰種業界（と言うのもおかしいが）であるコーヒーの噂で持ち切りになっている。

その噂はある20区の喰種が経営する喫茶店で出すとあるコーヒーが、人肉でも喰種の肉でもないのに、大変美味な上に喰種の栄養にもなり、一杯でも飲めば数日は空腹とおさらばできるといふ、人間を捕食する事に抵抗のある喰種にとっては正に福音となる特別なコーヒーなのだとか。

当初、それは余りな内容に笑い飛ばされていたのだが、実際に平和で知られる20区の喰種がただでさえ少ない捕食を殆ど行わなくなり、他区の喰種が実際にその喫茶店に行つて実証した事で噂は野火の様に広がっていった。

それは勿論、喰種の中で名家や有力者と言われる者達も含めてだった。

うむむ：最近、コーヒーの売れ行きに比例して作物泥棒が増えてきた。

収穫した傍から売れるのは良いのだが：コーヒーばかりに狙うのだ、それも喰種が。

確かに喰種の数少ない嗜好品であるコーヒーを求めるのは解るが、何でまたうちはかり？

まあそんな連中は大抵夜にやってくるので、USCこと幽香の出番である。

彼ら或は彼女らはかなり頑丈であるため、幽香の嗜虐心を程よく満たしてくれるとても便利な存在だ。

散々楽しんで、序でに動けない様にした後、CCGに電話すれば引き取ってもらえる。

昨夜も5人程の喰種の手足を骨が粉々になる程度に殴った後、タコのように関節の無くなった手足を固結びにして放置してやった。

実に良い声で鳴いてくれた…が、直ぐに真夜中に近所迷惑だったので喉の辺りを碎いて静かにした。

最近はあるなりに多いので、CCGの人達が定期的に巡回してくれるのだが…今度から監視カメラでも設置するかね？

後、CCGからの勧誘がウザい。

この前調査協力してから調子に乗ってるのか、私との専属契約とかコーヒー独占

売買だとか言ってくる。

五月蠅いわポケ死ね。

まともな経営が出来ると思うな？おk、んじゃ今後あんたらとその関係者とは取引中止な。

第三者機関なんざ通しても調べれば分かるからなお役所さんよ。

翌日、調子に乗った馬鹿とその上司の上司の上司が菓子折り持って連座で土下座に来た。

な、なにを言っているのか（ry

取り敢えず、価格はそのままだけど量は3割減って事で手打ちになりました。

ああ、月山君も彼女の話が聞きたいの？

うん、他からも依頼されててね。

はいコレ、例のコーヒーの実と豆だよ。

おや、流石の月山君もコーヒーチェリーは初めてだったんだ。

うん、やっぱり私が食べても美味しいし、月山君も気に入ったんだ、良かったね。

あー…流石に常食にするには厳しいか、月山君って舌が肥えてるもんね。

え、軽食や非常食にもなるからもっと買ってくる？

んじゃ後は使用人さんをお願いしてね。

後、くれぐれも彼女を怒らせないでね？

あれ多分死神と同じで、明らかに人類の規格超えてる類の人種だから、幾ら月山君達でも危ないよ。

うん、それじゃ気を付けてね。

その頃、喰種対策局ことCCGでは東京都を中心とした捕食事件の減少に頭を悩ませていた。

それ自体は喜ばしいのだが、その原因がとある農家の女性一人によるものだという事が彼らの矜持に多大なるダメージを与えていた。

風見幽香、国籍日本人、性別女性、年齢22歳、独身、職業コーヒー農家。

緑がかった黒髪と色素が薄いのか、喰種程ではないが赤みがかった瞳、そしてグラマラスなボディを持つ美女だ。

そのプロフィールは大まかな点において極普通の一般人だ。

しかし、絡んできた暴力団員を再起不能にしたあの、お礼参りに現れた暴力団員を事務所ごと潰したただの、逃走中の喰種を生身で制圧したあの、修学旅行先で遭遇したヒグマを殴り殺したあの、某ブラックロック特別捜査官を彷彿とさせるエピソードを大量に持つ辺り、彼女もまた逸一般人なのだろう。

現在、昼は暢気なお百姓さん、夜は害獣駆除に精を出す無慈悲な女王様として切り替えているらしい。

それはさておき、問題は彼女が栽培しているコーヒーにあった。

品種改良により、日本国内という四季がはっきりと存在し、夏には高温多湿となる温帯において自生するコーヒーノキを作り上げ、栽培に成功し、特許を保有している。

これだけなら精々少しだけお茶の間を騒がすだけだが、このコーヒーが問題だった。

なんとこのコーヒーノキから採れる実と種は人と喰種の肉とは全く関係ないのに、摂取すれば喰種の栄養となるのだ。

とは言え、人肉よりもエネルギー効率は悪いのか、保っても精々1週間程らしいが、それでも今までの対喰種研究からすれば常識外の出来事だった。

事の次第を捕獲した喰種の証言から気づき、更に実証する事で完全に把握したCGは即座に件のコーヒーを予算が許す限り購入した。

コソコソと人肉を集めるより、このコーヒーを購入した方が安く、職員の精神安定にも良かったが故の即断即決だった。

そしてCCGとしてはもしもの事を考え、即座に彼女の確保に動いたのだが、余りにも性急に事を進めようとしたため、逆に彼女からの警戒を煽ってしまった、一時は危うく全面取引停止にされる寸前になってしまった。

これにより、CCGとしては彼女との取引をしつつ周辺を監視する事で身辺警護をし、更に取引をしているであろう喰種を割り出す予定になった。

本来なら全面協力を頼みたい所だが、下手に刺激して取引停止は勘弁して頂きたいのが本音だった。

なお、彼女は驚いた事に自分のコーヒーが喰種にとって栄養となる事は知らない。今も彼女にとって、喰種とは畑を荒らすコーヒー泥棒でしかない。

もし彼女が喰種側に行ったとしたらゾットとする事態になっていただろう。

栄養は彼女のコーヒーで摂取し、捕食行動は単なるスリリングな狩りとなり、個体毎の調査の難易度は遥かに跳ね上がる事が予想される。

何せ餓えて一定期間毎に襲うのではなく、完全な娯楽として襲うのだ。

証拠隠滅もタイミングも場所も時間も万全の準備の上で可能となる。

更には人間を積極的に襲わない喰種の発見率もまた極端に低くなる事だろう。

犠牲者が減る事は嬉しい、だが素直に喜ぶ事は出来ない。

それがCCGの本音であった。

だが、ある意味で現在の人類と喰種同士の終わりなき戦いに終止符を打つ可能性の高い発見である事は事実であり、CCG内の研究所ではクインケやRc抑制剤の開発等と共に、このコーヒーの苗木と肥料を元に解析が進められる事が決定された。

取り敢えず様子見と研究を決定したCCGに対し、喰種業界では件のコーヒーに関する扱いは荒れた。

13区を始めとした治安の悪い区に住まう喰種の間では、件のコーヒーで栄養を

取る事は軟弱者、臆病者、人に阿る馬鹿扱いされ、大規模な喰種のグループでは件のコーヒーは負傷時の非常食扱いとして重宝された。

それに対し、所謂穏健派の喰種にとってこのコーヒーは正に福音となった。

人間の4〜7倍程度の身体能力と捕食器官たる赫子を持ち、通常の物理攻撃では極めて効きづらい喰種と言えども近年の技術革新によって生まれたクインケを持った捜査官らの相手は困難であり、現在も多くの喰種が狩られてきた。

だが、喰種が危険なのはその能力に加え、人しか食えないという点に集約される。単に優れたるだけならばまだやりようはあったが、食人という最大の汚点人間との共存を阻む。

しかし、あのコーヒーのお蔭でそれがチャラ、定期的に入手さえできれば人の間で穏やかに暮らす事が出来る。

こうして、主に子持ちの一家や年寄り、女子供を中心とした戦闘が不得手な、或は人の中で生きる事を望んだ喰種は増々20区に、格安で件のコーヒーを提供してくれるあんでいくを目指した。

だが、余りの人数にいくら数日から一週間は保つとは言え、店の規模とコーヒー

の量は少なすぎた。

幸い、コーヒーそのものに関してはこの件の中心である女性から格安で提供してもらっているため、切らす事は滅多にないのだが、それでも連日大量にやってくる人数に従業員もグロッキー状態だった。

また、他区から流入した中には狩りが出来ずに極度の栄養失調になった者もいたため、変わらず自殺者の死体集めは続ける事になった。

取り敢えず店長の指示により応急措置として、従業員向けにしていたコーヒーチェリーもメニューとして出す事である程度負担を減らしたものの、それでもまだ負担は大きい。

古参店員の元部下達にもローテーションで手伝ってもらっているが、そもそも店の処理能力を大幅に超える客足に疲労が溜まり始めていた。

「このままではいけない。やはり、例の計画を実行しよう。」

「例の…ああ二号店ですね。」

「既に十分な資金はある。この状態だと余り喜べないがね…。」

「あはは…そっちは誰に任せます？何ならこの魔猿が」

「いや、そちらは四方君に任せる予定だ。残りの人員は信用のおける者を何人か選別するとしよう。」

「それは良いですけど…店長も少しはお休みしてくださいね。もう御歳なんですから。」

「ははは、まだまだ現役でいるつもりさ。」

（とは言え、このままでは誰か過労で倒れるだろうな…。）

この時期から店長がもしもの時のために二号店（ただし別名）の設立を決意したという。

こうした二極化した対応の中、寧ろ商売のために独占契約を結ぼうと考えた者達、寧ろその農家の女性を捕えて利用しようとした者達もいたが…そうした者達の殆どが、彼女によって死ぬよりも辛い、コクリアばりの拷問を受けた後にCCGへ連行される事となった。

彼女の暴虐ぶりは、まるで嘗て暴れ回った隻眼の梟を彷彿とさせるものであり、多くの喰種は彼女との交渉は平和に行う方が賢いと悟る事となった。

「素晴らしいですね、このコーヒーは。」

「はい、観母様。苗と肥料も入手できましたので、現在総力を挙げて栽培しております。」

「ですが、やはり彼女の育てたものに比べ、味も栄養も落ちている様です。」

「申し訳ございません。」

「いえいえ、松前君。何も私は怒っている訳ではないですし。」

さて、喰種界きつての富豪である月山グループはと言うと、跡取り息子の友人により逸早くこの情報の真偽を確かめ、行動に移っていた。

とは言え、それはあくまで穏便な手段でだが。

（まさかあの黒警特等以外に野良とは言えそれなりの喰種の首を片手で握り潰す人類が存在するとは……）

命からがら帰ってきた部下の言葉に半信半疑だった松前も、その後己の目で見たとあっては流石に信じざるを得なかった。

「習君のお友達には私がとても感謝していたと伝えておいて下さい。」

「畏まりました。」

「くれぐれもこの波に乗り遅れない様に。また同時に転ばない様に細心の注意を

払ってください。」

「はっ。」

ある夜の事だった。

私が久しぶりに本気を出したのは。

相手は恐らく女の子、年の頃は解らないが、随分と小柄で幼児体形だった。

顔は全身を覆うフードと包帯によって隠されて分からない。

だが、片目だけが赫眼の彼女が今まで出会った事が無い程に手練れである事は解った。

「こんばんは、良い夜だね。」

「こんばんはお嬢さん。所で何の御用かしら？」

「あは、散歩を兼ねた視察かな？」

「ごめんなさいね、今の時間は開いてないの。」

「ううん、こっちこそごめんね。」

「あら、単なるお散歩なら歓迎よ？」

「お散歩以外だったら？」

「そうねえ…。」

悪い子にはお仕置きが必要よね？

刹那、双方はほぼ同時に人類処か高位の喰種の知覚すら凌駕する速度で互いに踏み出した。

大気の壁すら重く感じる領域で、私と彼女は拳とトーテムポールの様な不思議な赫子で殴り合った。

10、20、50、100と、互いに一度の衝突だけで衝撃波を撒き散らすこの世界の怪物同士は、しかし互いに手札を切らない故に互角の様でいて、しかし当人達はしっかりと互いの有利不利を悟っていた。

力は兎も角リーチと速度は共に負けると、幽香は瞬時に悟っていた。  
なら別の手を考えよう。

何時ぞやの喰種から奪った鞆を手に取り開封、まるで傘の様な外見をしたクインケを取り出して振るう。

型も何もあったもんじゃない。

ただ只管に圧倒的な身体能力によって暴威を成す。

「…君、本当に人間？」

「さあ？ま、どっちでも良いじゃない。」

「そうだね、うん、その通りだ。」

動きが止まった所で傘の先端に極光が収束、真昼の様に周囲を照らし始めた。

「さあ、豚の様な悲鳴を上げなさい。」

「うん、やっぱ君、人間じゃないわ。」

「さっきも言ったけど、どっちでも良いでしょそんなの。」

直後、傘の先端から極太のビームの様に妖力を発射、流石にヤバいと思ったのか慌てて包帯フードの女が回避に移る。

彼女の持つ反射神経ならこの程度は余裕で回避できる。

だがそれは、彼女が何時も通りならであり、閃光に身を竦ませたが故に、一瞬遅かった。

その足に、幾重にも草木が絡みついていて。

そりゃどんな聡明な人間でも、視界を埋め尽くす程のゴン太ビームが目の前から

迫ってきたら慌てるってもんである。

そして、彼女は光の中に消えていった。

「……っで、たまるかー！」

だから、直線状に抉られた地面の下からぼっこりと彼女が出てきた時は驚いた。

「あらそう。所で貴方、綺麗な声をしてるわね？」

「あの、この場でそれ聞く意図が分からんですが。」

「ふふふ、それはね、貴方に大きくて綺麗な声を出してほしいの。」

「あ、もう遅いんで帰りますねーさよならー。」

「ウッフ、逃がすと思う？」

再度四方八方から伸びる植物の根や蔓を、しかし、エトは赫子でそれらを振り解きながら、先程のゴン太光線の跡地を通る事で植物の妨害の薄い場所を走り抜けていった。

「……退いたか。後で連絡と畑の手直しが必要ね。」

だからこれを使うのは嫌なのよ。

独り言が空しく荒れた夜の畑に響いた。

そして一年後のある日、幽香はお気に入りの喫茶店である少年と出会う事になる。

「あら？ 貴方隻眼なの、珍しいわね。」

「え、あ!?! ごめんなさい！」

「言わないわよ別に。この店はお気に入りの。間違っても閉店させるような事はしないから、安心なさいな。」

「は、はあ…。」

「それよりも注文よろしいかしら？」

「あ、はい！」

物語はその在り様を大きく変え、新しい道を進み始めた。

うーむ、これじゃない感が。

やはり短編でやるには題材が難しい。

原作沿いで某境ホラTRPGみたく、キャラと能力値、ルートだけ大まかに決定して中編で連載すべきか…。

いやしかしメカニカルもそのつもりだったのにうっかり長編になってるしなあ  
(汗)

## 転生美神による横島忠夫改造計画

一応続く予定の試作品の一つ

---

### プロローグ的短編

その出会い自体は些細なものだった。

自分の事務所に職員募集の広告を張る彼女と、それを見た少年。

些細なそれは、しかし当人とその友人知人、そして何より二つの世界全てにとつて、重大なものだった。

「生まれる前から愛してましたー!!」

「シッ!」

「ごべふうっ!?!」

少年が美女に奇声と共に飛び掛かり、美女の拳打によって撃墜された。

二人の始まりはそんなコメディ&スプラッタだった。

「馬鹿だが商才とやる気有り。成長の余地は霊能・人格共に有り……。よし、横島、君を雇用しよう。」

「ま、マジすか!？」

「但し、時給250円な。」

「んな!? それじゃ小学生の小遣い並じゃないすか！」

「ダメかな……?」微笑みながら上目遣い&指先で横島の顎下を擦りながら

「この横島忠夫、全身全霊を尽くさせて頂きます！」

「うむ。では早速明日から頼もう。」(今のままじゃアホな事に使うし、別口に貯金しておくか。後、親御さんとも連絡取らんな。)

「初日！初日からなんでこんなたくさん霊がいるトコなんすかー!?」

「今日の仕事は逃げ回り、生き延びろ。それではミツシヨン開始。」各種除霊装備  
持ちつつ

「いややー！ワイは美人のねーちゃんの胸で死にたいのやー！」

「お、あそこに生前は美人だった霊がいるぞ。」

「生身！ちゃんと生身で！ってゲフウ!?」

「逃げないと死ぬぞ。そら走れ走れ。」（まあ服の裏地にお札仕込んだからこの程度  
の雑霊じゃ死ななご。）

「……………」瞑想中

「……………」視姦中

「……………」横島。」

「はいッ！」

「見るなどは言わんが、煩惱をもつと靈力に変換しろ。勿体無い。」

「はいッ!!」許可が出たので齧り付き

(い、良いのかなー?) 事務所の外付け良心担当

「ほう。狙撃と高機動を両立した中級魔族とは…厄介な。」愉しそうにニヤリ笑い  
(アカン! おキヌちゃん、逃げるんや! 美神さんの阿修羅スイッチが入ってもー  
た!)

(です! 戦術的撤退に入ります!)

「何をしている。こんな時でも役に立て、肉盾(横島)。」

「いややー! 敵も味方も美人だけどぼか死にたくないー!」

「横島。この依頼、おキヌと一緒にやってみろ。手段は問わず、予算も道具もこちらで出してやる。出来なければ首だ。」

「そ、そんな！やり過ぎですよ美神さん！」

「いややー！首はいややー！」

「成功すれば一緒に入浴してやろう。」

「ぼかーやりますよ美神さん！大船に乗った気持ちでいてください！」

「横島さん…。」心底呆れ中

### 後日

「さて、今日は完全にオフだ。楽しむとしよう。」

「何故や…何故皆でプールに…ワイの努力は…。」

「正確には温水プールだ。現に外国では混浴では水着着用が義務付けられている国もあるからな。これも入浴の一つだ。」

「それでも…それでもワイは、美神さんの裸が見たかったんや…ッ!!」

「横島さん…」呆れ中

「んー…私よりも稼いでみせたら考慮せんでもないぞ。」

「なん…だと…?」

以下、プロットのみ

GS 横島 美神令子に転生

今更ながらGS転生もの。

道具使いとしての本質はそのままに、Fateの女バーサーカーことバゼット女史並に地力も鍛えた男前クール系美女となった現実転生系美神。

露出の多いハイレグではなく、自作の耐霊・防弾・耐炎・耐刃素材かつ肩や拳、膝、足裏を装甲化した特注のプロテクターライダースーツ+自作霊具で武装している。

横島との出会いの際、飛び掛かって来たのを殴り倒したが、訴えない代わりに丁稚として奉公（例の時給250円）する事で決着とした。

しかし、影ではしっかりと身辺調査した上でご両親に連絡を取り、今のままの横島では金をやってもつまらない事に使用するだろうから、独立か退所する際に纏めて支払う事を確約し、事務所に雇う事となった。

これにより、横島専用の秘密貯金は通常時給5000円、依頼中は2万円という形でガツガツ増えていく事になる。

また、原作知識により横島の成長を知る美神は横島に基礎の基礎からしっかりと教育していく。

基礎体力に始まり、GSとしての基礎知識や教養だけでなく、学校の勉強まで教えていく。

また、将来事務所を開くための事務処理関係や業界の裏側のヤバイ事なんかも徐々にだが仕事の一環として実地で教えていくという、至れり尽くせりぶり。

横島、クール系美人（頑張ったら頑張った分だけ素直に褒める）の美神に夢中になり、その期待に応えようとスイッチが入り、学校と事務所、私生活においても張

り切る。

美神も美神でその様子に満足し、徐々に時給を引き上げていく。

また、食事に関して仕事帰りにリーズナブルながら穴場のお店を二人で行ったり、御裾分けと称して結構な量の食材を渡しているので、食糧事情も大きく改善する事となった。

最終的に、これなんてオレT u e e e e e e e e e e ! 系? な横島が爆誕、凡その原作の悲劇を美神と共に覆したものの、何とルシオラとくつつかなかった。

美神は驚きつつも「まあ将来は解らんし」と静観するが、高校卒業と同時に半人前卒業&自分の事務所開設の許可を出した所、「美k∴いえ、令子さん! オレと結婚を前提にお付き合いして下さい!」「∴はい?」と公衆の面前で告白され完全にフリーズ。

その後、あれよあれよと言う間に、外堀も埋められ、美智恵や横島夫妻からの許可も降り、更に美神の事務所の稼ぎを横島が倍にした事で、美神本人も「物好きなの奴め∴」と呆れながらOKした。

但し、「お前が私とくつつくと泣く女が多いからな。ちと戸籍を弄って重婚可能

にするぞ。」「へ？」という爆弾付きで。

結果、原作ヒロイン勢の殆どが立候補し、「互いにいがみ合わない&忠夫の不利になる事は絶対しない事」を正式に呪術契約し、横島ハーレムが完成した。

「い、いいんすか？だって…」

「寧ろ必要だ。お前と言う個人を守るためにはな。」

こうして、三界が取り合う人材である横島忠夫は人界有力者と神魔デタント派の連合勢力により囲われ、何だかんだ騒がしくめ平和に生を全うしましたとき。



## 横島忠夫改造計画 2

今更GS系SS でもネタが湧いたので書きます！

### 第一話 出合いⅡコメディ&バイオレンス

念願の東京での一人暮らし。

親や家からの制約もなく、顔馴染みも一人もない土地での高校生活。

強いて不自由していると言えば外国に仕事で長期出張している親からの仕送りが少ないので、どうしてもバイトする必要がある事位。

だがしかし、根っからの根性無しである自分では、短期のバイト位しか出来なかった。

勉強も運動も特に努力していない。

気軽に楽しく過ごせれば良い。

そして機会があれば美人のねーちゃんと一発やりたい。

そんな墮落の限りにあった少年はある日、最近通学路の傍に出来た建物へと何気なく視線を向けた。

すると、そこにいたのだ。

今まで見た事が無い程の美人のねーちゃんか！

ポンツキユッポンのナイスバディに凛々しさを感じる顔立ちとパンツスタイルの  
スーツ！

何処か男性的なストイックさを感じる、正に出来る女って感じのねーちゃんか！  
そしてリビドーが弾けた。

「生まれた時から愛してましたー！」

「シッ！」

「ごべふう!?!」

…のだが、それはどうやらお気に召さなかった様だ。

少年、横島忠夫と師にして相棒となる女性との出会いは、有体に言って最悪なものだった。

.....

GS 美神の世界に銭の亡者にして魔族や神族からすらもえげつなさで恐れられた美神令子に転生して早2（ピー）年。

目の前で土下座する少年の姿に「ああこいつが真の主人公か」と感慨深く眺めていた。

思えばここまで色々あった。

目が覚めれば自分は美神令子で、母親は物心つく頃には自分を捨て、父親は知人であった唐巢神父の下に自分を預けるだけ預けて以来、顔も見えない。

まあ時間遡行者で娘を助けるために死力を尽くしてる美智恵からすれば、自分の娘の魂と人格が異世界出身の成人済み男性と融合？統合？とか、アイデンティティの一つや二つ崩れて育児放棄もするわな。

それから唐巢神父の下で霊能を鍛え、高校からは六道霊能女学院に入学、卒業後はGS資格試験を即効で合格し、自分の事務所を開業して今に至る。

「堪忍、堪忍してつかあさい…！警察だけは勘弁を…！」

「分かった分かった。取り敢えず、顔を上げろ。」

「いいんスカ!？」

「泣くな。うっとおしい。」

なんだかなー、こいつは。

女として見たら変質者そのものと言うかエロガキなんだが…行動に性欲はあっても悪意が無い。

性犯罪者とかになると、性欲以外にも悪意や狂気と言った負の感情が満載なんだが、横島にはそれが一切無いのだ。

流石将来スケコマシになるのが確定しているだけはある。

「今、私はバイトを探していな。」

「やります！荷物持ちでも皿洗いでもなんでも仰って下せーませ！」

「ん？今何でもって言ったな？」

言質は取った。

魔神とか上級魔族の相手とか、正直私一人じゃ手に負えなかったもので、これからみっちり鍛えさせてもらおうとしよう。

「じゃ、君は今日からGS見習いだ。続きは事務所で話そう。」

「へ？GS？」

こうして、私と横島忠夫のGS生活はスタートした。

「じゃ、じゃあ手取り足取り！」

「落ち着け。」

「へぼお!？」

…先ず、「待て」を覚えさせよう、うん。

三日、それが横島がGS見習いとして正式に働き出すまでの時間だった。

書式を整え、GS協会に提出し、念のために私立探偵を雇って横島の経歴を洗い、更に海外のご両親と電話でだが話を通すのにここまでかかった。

結果、分かっていたとは言え、問題らしい問題も無かったので正式に見習いとしてスタートする事となった。なってしまった。

まずは基礎体力の確認と言う事で事務所内のトレーニング設備を使って体力測定を行う。

なお、当事務所は原作初期の雑居ビルではなく、立地から風水的にも拘った4階建てのビルであり、一階に受付及び事務所、二階に倉庫兼資料室、三階に私室と研究室、四階にトレーニング施設（プール・シャワー完備）がある。

勿論、悪霊や妖怪、魔族対策に结界や式神、更に近代兵器（一応GS向けカスタム品なので合法）で殆ど要塞化されている。

これ位は必要経費の範疇であり、勿論もしもの時のために抜け穴や別の拠点なんかも用意してある。

そこで横島の基礎体力を図ったのだが…

「ヒュー…ヒュー…。」

「多少は打たれ強いな。」

まあ煩惱が絡まないならこんなもんだよね、と言うスペックだった。

「ふむ…横島。」

シウルと、ネクタイを緩め、第一ボタンを外す。

「ふおおおおおぐげ!？」

「そこまでだ。」

床に倒れていたのが、カサカサと生理的嫌悪感を煽る感じで近づいてきたのをカウンター気味に顔面に足裏を当てて止める。

「自己ベスト出せたら手料理を作ってやろう。」

「やったろやないけー！」

ここで奢るんじゃないかと、女、それも美女○の手料理と言うのが味噌だ。

まあ自分の夕飯も兼ねてるし、一人分作るのも二人分作るのも手間としては差は殆どない。

この程度で釣れるなら儲けものだ。

「

「全て自己ベスト更新とは…やるな。」

結果、流石の煩惱と言うか…こいつはどうしてそれを別の方面に…いや、横島  
じゃなくなるな、それは。

特別に昨日買った高級和牛ですき焼きでもしてやろう。

鍋ならいくらでも簡単に出来るしな。

.....

美神さんに雇われてから一週間、漸く依頼に出る事が許された。

この一週間、基礎体力の向上と基礎知識の習得として学校が終わったら即効で事務所に来てトレーニングと座学に打ち込む日々だった。

だがしかし、それが学校と違って美人のねーちゃんが隣にいたとなればその価値

は計り知れない…！

その上、学校の勉強もさせてもらったので、成績の関係上有り難くもあった。それはさて置き。

依頼とは言ってもオレがするのは単なる荷物持ちだが、初仕事となれば気合を入れるべきだろう。

「では横島、これより除霊作業に入る。」

「あの、ちょっと聞いていいスカ？」

「何だ。」

「何故にそげな重装備？」

何処の紛争地帯か正規軍人かと言う程に、今の美神さんは重装備だった。

テレビで見た軍人が着る様な服の上にヘルメットとバイザー、防弾ベストや弾倉、手榴弾、そして小銃を装備した姿は明らかにGSと言う世間一般のイメージから離れていた。

「今回の依頼は建設現場に溜まった雑霊の掃除だが、数が多い。こちらで確認した所、数は約30。数だけが多いが、大半が空に浮いている。銃の方が効率が良いん

だ。」

「理屈は解りますけど…オレは？」

そう、そうなのだ。

この重量物を持って、そんな現場に逝くの？オレが？単なる素人のオレが？

「横島」

「はい！」

にっこり笑顔の美神さん。

でも解る。この笑顔は無茶振り前のアレだと、この一週間程で理解した…！

「私の後ろから離れるなよ。死ぬぞ。」

「了解っす！」

真顔で言う美神さんに、オレは漸くGS見習いになった事を後悔した。

結果的に言えば、オレは死ななかつた。

美神さんは本当に効率よく、建設現場に浮遊していた雑霊達を掃討していった。

連射される弾丸は対霊用に加工されたものらしく、雑霊は抵抗も出来ずに強制成仏、消えていった。

勿論、中にはこっちに向かってきた奴もいたが、そいつらは何も出来ずに撃たれて消えた。

時間にして一時間も掛かっていない。

だけどオレは、初めての実戦で完全にビビっていた。

戦闘中、オレは殆ど情けない悲鳴を上げながら、美神さんの後ろについて回った。

「横島。見鬼君で残りがいないか確認しろ。」

「は、はい！」

ふざけた外見の見鬼君だが、性能自体は本物なのはこの一週間の勉強で分かっている。

結果は0。この近辺に霊はいない。

「四方の札も張ったから、後は最後の仕上げだけだが…横島、初陣はどうだった？」

「どうって…メッチャ怖かったツスけど…。」

もしオレ一人だけだったら、あの大量の霊に間違いないとあっと言う間に殺されて

いた。

それを美神さんは装備もあつたとは言え、苦も無く片付けてしまった。

優秀とは聞いていたが、漸く実感した。

「あれらが元は人間だ、と言つても怖いか？」

「え?…あ。」

そう、どの霊も元は人間、乃至生き物だった。

今は死んで肉体を失い、更に擦り切れて怪物染みた姿へと成り果ててはいるものの、それでも彼らは以前は確かな個我を持つ生者だった。

「忘れるな。我々GSはこうした死者の存在の上に成り立つんだ。」

「はい…。」

正直、理屈で習いはしても実感した事は無かった。

祖父母はオレが生まれる前に亡くなったし、両親は外国で元氣だ。

だから、身近な所に死が無いオレでは実感として生き死にを経験した事が無い。だけど、死とはこんな身近な所にも転がっていたのかと、今日漸く思い知らされ

た。

「横島、バックの底の方に経本があるから出せ。」

「ウッス！」

気を取り直して、バックの底から取り出すのは、御坊さんとかが持つてる折り畳み式のアレだ。

法事やお盆の時に触れた事があるが、それ以外だと初めてだった。

「私に続いて唱えろ。しっかり集中してな。」

「はい！」

そして、静かになった建設現場で読経だけが朗々と響き渡る。

霊相手の依頼の時、美神さんは必ずコレをやるんだそうだ。

他のGSはやらないけど、習慣とか戒めみたいなものなんだそーな。

「死人とは言え人に暴力を振るったのだから、これ位はしてやっても罰は当たらんさ。」

例え死んでも人間は人間で、美神さんはその辺りの職業意識というか仁義とか：兎も角、そういった所が高い人なんだという事だけは理解できた。

「後は帰って寝るだけだが：明日は特別に休みだ。ゆっくり休め。」

「うっす！お疲れ様でした！」

取り敢えず、この人の後ろにしっかりついていこうと、改めてそう思えた。

.....

ふう、しんどかった。

今日の依頼は工事現場に湧いた大量の雑霊を薙ぎ払う事だった。

何でも近くの要石がつい最近壊れてしまったらしく、そちらは別のGSが複数雇われ、殉職者を出しながら対処に当たったようだ。

私？弟子の育成に入ったから面倒な依頼（しかもGS協会を經由していない）は基本パスである。

協会を經由した場合、依頼料の5%を手数料として引かれるが、依頼内容と事前情報の齟齬がある場合や所謂「騙して悪いが…」な偽依頼、モグリGSの関わった違

法案件等で危険性が高いと判断されれば、依頼として受け付けないし、依頼料金の引き上げや依頼そのもののキャンセル、果ては依頼人の逮捕等が発生したりする。件の依頼は古い祠（道祖神の類）を壊して強引にビル建設を行った建築会社及び発注した企業が依頼を出したもので、無許可の宗教施設の破壊はオカルト全盛の世界では完全に違法であり、既に責任者は逮捕令状が出ているような。

こちらの依頼はその余波であり、全うな会社からのものだと確認されているので、依頼内容もB程度なため、Sランクの私としては足手纏いを勘案しても大した問題にもならない。

とは言え、暫くは横島の育成に掛かり切りになるので、早々大きな依頼を受ける事は無いだろう。

逆に、横島に経験を積ませる意味で、割と簡単だがバリエーションを増やすためにも色々な依頼を受けてみるべきだろう。

これらに対し、妖怪や幽霊をこちらに引き入れたり、騙したり、罠に嵌めたりと、原作以上の柔軟かつ多様な対応をする事で、横島自身の柔軟性を伸ばさせる方針で行きたい。

それは兎も角として、先ずは基本の基本として体力と知識、そして靈的抵抗力の強化だな。

では横島、先ずは筋トレと座学だ。

マンツーマンでやってやるから寝るなよ？

.....

美神さんに雇われてから、オレの生活は激変した。

と言っても悪い方じゃない。寧ろ恩恵の方が多い。

昼間は学生として、夜はGS見習いとして、一般の学生に比べたらかなり密度の濃い人生が始まった。

GS見習いの訓練は主に基礎体力と知識の確保、それらを定着させるための実技、総復習としての依頼の三段階に分けられている。

基礎体力は普通の筋トレやランニングの他、プールで冷水を浴びながらの読経や詠唱の練習であり、これが中々に辛い。

全身に水を浴びながら（少しは温くしてある）、練習は数時間に及ぶ。

低体温症＋極度の疲労で、それをやった直後は温かい飯を食った直後に力尽きた様に眠る日々。

おかげでここ数週間で体重が一気に減った。

ただ、最近ではこれをしてるとあつと言う間に時間が過ぎるので、それ程苦痛ではなくってきた。

座学は霊能の正しい在り方と邪道としての使い方から始まり、霊や魍魎魎の種類や各種対処法、果ては神魔族の存在について語られる。

そして、実技ではその直後にやった座学を実地で復習させ、身に付いたかテストさせられ、最後に依頼となる。

ここまでそれぞれ一日ずつ使い、身に付いてないと判断されたら振り出しに戻る。後、給料は超少ないながらも支払われている。

その額、なんと時給250円。

無論、抗議したのだが、目の前で電話を取って「もしもし警察ですか？ 実は痴漢に合いました！」と言われたら、どうしょーもない。

だって、だってしゃーないやんか！ あないなねーちゃんと身近に生活して覗くななんてオレにはでけへんのや！

それに、覗くのだって命がけだ。

美神さんの事務所兼自宅であるこのビルは4階建てであり、その中で居住スペースは3階にある。

つまり、覗くには三階の窓、それも浴室にはベランダも出窓もない。

最近鍛え始めた身体能力と自作の道具で辛うじて壁に張り付き、曇りガラスを僅かに開けて、湯煙の向こうを見なければならぬ。

最初は道具無しだったのでやばかったが、今では黒子の恰好で命綱もつけてトライしている。

「出直せ。」

「ごはあ!?!」

が、普通にバレて迎撃される。

だがオレは諦めん！

こういうご褒美があるからこそ、この仕事を止められへんのや！

まあ給料低いからって食いっぱぐれる事だけは無いのもある。

美神さんは割と毎回の様に夕飯奢ったり作ってくれるし、食材なんかもくれたりする。

裁縫も出来るので服とかも偶に繕ってくれるし、衣食に関してほぼ完全に満たされてる。

それを美人のねーちゃんがしてくれるんやで？金に換算できん価値がある。(断言)

しかし、普通のねーちゃんと違って、警察に本気で通報したり、キヤーキヤー騒ぐ事も無い。

泰然自若というか、割り切り方が凄いというか…。

だがしかし、何時かはあのねーちゃんを身も心もワイのものにしたる。

そのためにも今は次のミッション（覗き）に向けて準備を…！

「真面目にやれ。」

「ウツス」

なお、学業の成績が落ちそうになると、監視付きで強制的に勉強が始まる。んで、確認テストで正答しないとリピート。

それは辛いので真面目に勉強させてもらいやす、はい。

.....

正直、よくもそこまで欲望に正直に生きられるものだと思う。

自分があの位の頃だったら、精々エロ本を読み耽る程度だったが…。

うむ、流石は横島、煩惱の化身。

そこに痺れもしないし憧れもない。

しかも、段々と覗きの手段が巧妙化している。

最初は普通に入り口からこっそり↓割と本気の打撃で撃退だったが、窓からの

覗きへと移り、更に暗闇に紛れる黒子の衣装十命綱と、他でその力を発揮しろよと言いたい。

だがこいつの場合、やる気≡煩惱なので、これで正しいっちゃ正しい。

しかも、しっかりと鍛錬と依頼の方でも成果が出てる辺り、流石としか言いようがない。

うーむ、そろそろ雑霊とでも一騎打ちさせてみるかね？

なお、横島の真の給料（時給5000円＋依頼中は時給1万円、出来高でボーナス有り）は順調に溜まっており、細かく連絡を取ってる横島母も生活改善と併せてにっこりしている。

『ほんまにねえ、美神さんにはお世話になってばかりで。』

「私は所詮、原石を磨いているだけです。才能や下地は本人とご両親の教育の賜物です。これで成果を誇ったら、私は単なる道化ですよ。」

『でも、原石を磨くのも職人技よ？その点は誇って良いし、私達も感謝してるんだから。』

「とは言え、今後は本人のやる気次第。今後もこれが続くかは解りません。」

『あら？何かやるなら思いっきりね。そろそろ天狗になってきてるだろうから。』

「鋭いですね。実は近々依頼を一つ任せようと思っっています。」

『で、あの馬鹿の根性を見る、と？』

「この程度で折れるなら、別の専門家に任せるつもりです。」

『その辺はお任せしますわ。あ、やるなら徹底的で。』

「勿論です。」

と言う事で、人骨温泉の依頼を受ける事が決定した。

頑張れ横島。

成功報酬は家事も出来る上に将来有望な美少女の幽霊（蘇生予定）だぞー。

.....

美神さんの事務所で働き出してから丁度一か月、今回は人骨温泉と言う観光地に

来ていた。

何でも、温泉に出てくる幽霊をどうかしてほしいそーな。

ランクはC、出発は金曜の午後なので、そのまま土日はそこで過ごすと言う半ば旅行である。

しかも、しかも！美人のねーちゃんと一緒の温泉旅行である！

と思ったら、やっぱりオチがあった。

途中、俺は現場の確認という事でバスから降りて強制的に徒歩（荷物有り）である。

依頼のあった旅館はまだ遠く、山地だから酸素も薄くて苦しい。

そんな時、俺は彼女、オキヌちゃんと出会った。

.....

結果だけを見れば、鍛えた横島にほぼ全てを任せたものの、凡そ原作どおりに事は進んだ。

まあこの件に関しては介入する余地が極端に少ないのだが。

とは言え、のんびりと話し合う横島とオキヌの二人を横目で見ながら、悪友に対植物妖怪撃滅用の細菌を注文しておく事を心に決めた。

幸い、こちらは原作よりも戦力は多いし、地脈にいる本体に関しても、今回の件で地脈の結節点にセンサー代わりの術を施し、あの草女が動き出した時点で十分対処は出来る。

「ついでにバンカーバスターでも頼んでおくか……。」

「へ？いきなりどうしたんです？」

「何でもない何でもない。」

『あ、お菓子なら飴玉がありますよー。』

さて、美神事務所メンバー3人が揃った所で、これからも頑張りますか。

この美神令子、素手の強さが型月のバゼット女史に並ぶと思ってください。バゼットよりも道具使いとして汎用性が高く、全距離対応型のオールラウンダーです。

そして原作でも美神つてがめたパーツ組んでカオスフライヤー二号とか作ってるんですよー。

後は私のSSの傾向から解りますよね？（にっこり



## FGO短編 安珍が逝く

間違って削除してしまったので再投稿しました。

自分は転生者だ。

とは言え、特にチートだとかそういういたものを持っている訳ではない。

精々が田舎の祖父母のおかげで野草に詳しく、簡単な手当て等が出来るだけだが、それとてこの時代、平安の頃の人々にとってはあって当たり前程度のものでしかない。

一応庄屋？村長？の三男なので、近くの寺である程度学ぶ機会があり、この時代の文字の読み書きは過不足なく行える。

前世知識でチート？この迷信と神秘溢れる時代に下手な事をすれば物の怪に憑かれたとか何とか騒ぎが起こって最悪殺されるだろう。

村長の家とは言え、三男なぞそんなものだ。

そんな自分は寺で経の読み書きや掃除をする時を除くと、村で野良仕事の手伝いをしたり、怪我人や病人の手当て等をしたりする。

無論、この時代ではまともな医療知識も道具も無い。

救えぬ命の方が多いし、精々が苦しみを和らげる程度のものだ。

とは言え、村人からは感謝されてるし、両親や兄弟、寺の和尚等からの受けもよいので、変える気は無いが。

しかし、一応気を付けていたのだが、どうにもならぬ事もある。

流行り病。

こればかりは一介の薬師擬きではどうにも出来なかった。

病そのものが何なのか直ぐに分かった。

結核。

21世紀に至るまで根絶されずに多くの人々を死に追いやってきた感染症だった。予防も難しく、咳や唾、痰の飛沫によって空気感染する。

この時代、栄養状態の良い人間は殆どおらず、一度感染すれば抗菌剤も無いので数年以内に死に至る。

感染を防ぐには患者の隔離位で、後は汚染物の消毒（この時代では焼却）しか思  
い浮かばない。

その事を父である村長を始めとした村の重役達に話すと、全員が重苦しい雰囲気  
に包まれた。

既に村にも数人ながら感染者がおり、近隣の村々でも被害が出ている。

この事が他に漏れれば、先ず間違ひなくパニックになり、感染者とその疑いのあ  
る者は殺されるだろう。

「三太、どうすりゃ良いと思う？」

「…隔離しかない。ただ、何もやらずに飢え死にさせるんは忍びねえ。森の中で家  
作って、そこで暮らしてもらう。足りないものはオレが纏めて届ける。他にも増え  
たらそっちに移す。」

「すまん、頼んだ。」

「良しさ。親父や和尚、村の皆には世話になったからね。」

これしか手は無かった。

その後、村に新たに感染者が出ると、森の中の家に移され、そこで暮らす事に

なった。

無論、それを嫌だと泣き、暴れる者もいたが、何とか皆で抑え付けて連れて行った。

そうしなければもっと危被害が広がるからだ。

そう自分に言い聞かせながら、オレは行動するしかなかった。

……

そうして隔離生活が始まって3年、この家で6人が死んだ。

早めに対処したのが良かったのか、他に感染者は出なかった。

苦しみ続ける6人を、オレは本人らの同意を得た後、最後は眠り薬と毒薬を使って、安楽死させた。

遺体は穴に入れた上で火葬にし、結核菌が残らない様に気を付けた。胸にぽっかりと穴が空いた気分だった。

老いも若きも、男も女も、何の区別もなく死んでいった。

中には稼ぎ時の父親や嫁入りしたばかりの娘もいた。

この時代の命の軽さは解っていたが、それでもやり切れず、悔しくて悲しくて涙

が出た。

でも、6人も家族から離して死なせたせいだろうか、6人目の葬儀が終わった頃にはオレも感染の疑いがあった。

そのため、オレは村に帰る事もせず、必要な荷物を纏めた後、森の中の隔離小屋に火を点け、置手紙ならぬ板を残して立ち去った。

出来るだけ人目につかぬ様にしながら、この時代に既に有名だった熊野へと参拝に向かったのだ。

目的はオレが死なせてしまった6人の冥福と……まあ懺悔だ。

誰かにこの事を話さないまま死ぬとか、もうある種の拷問だったからだ。

罪は裁かれねばならない。

罪悪感を持つ者にとって、裁きと言うのはある種の救いにも感じる。

口元を粗末な布で隠し、勝手に剃髪し、一人称も「私」に変えて、偽名として安珍と名乗った。

対外的には偽名の私度僧と言う奴だが、この時代、寧ろそうした者の方が多い位だった。

況してや真面目に寺で経を学んだお蔭で、大抵の者よりも仏教に詳しくなっていたがために尚更バレル事もなかった。

他者への感染に細心の注意を払いながら、オレは人気の少ない道とも言えない道を選びながら熊野を目指した。

道中の盗賊には病持ち（感染の可能性あり）と話せば大抵は去り、時には有り金を渡せば納得してくれた。

この時代に絶滅していない山野の獣に関しては、毒草や蓼等の劇物一歩手前の草から作った獣除けが効果を発揮してくれたので大丈夫だった。

他にも明らかに物理法則を無視した様な物の怪とか天狗とかにも会ったが、前者は逃げたり経を読んで退散させ、後者は暢気に世間話したり呑み会したりと世話になってしまった。

流石平安日本、幻想が生き生きとしていやがる……！（戦慄）

……

さて、熊野と言えば21世紀にも知られた観光名所であり、この時代でも既にそうだった。

そのため、どうしても熊野近辺は何処に行っても人気が多くなり、紀伊国に入ってから仕方なしに街道から少し外れた場所の宿を取る事にした。

その時、偶々同じ宿に泊まっていた貴族の妻が体調を崩したと耳にした。

それだけなら他の者に任せるのだが、他の医者らしい者は別件で捕まらないとも聞いてしまい、口元を隠す布に気を付けながら、貴族の従者の一人に薬師としての心得もあるから自分に診せてほしいと頼み込んだ。

この際何でも良いとの事で診察した所、貴族の妻（細身で色白、お多福ではない美人）は激烈な腹痛を患っていた。

何でも、道中に山の溪流で釣った魚を食べたとの事。

寄生虫の疑いから、一先ず手持ちの薬草で副作用の少ない痛み止めと虫下しの丸薬を飲ませた所、半刻程で痛みが引き始め、疲労により気絶する様に眠った。

感謝した貴族から報酬に結構な額の金子を提示されたが、宿代を払ってもらうだけで良いと告げ、そのまま自分の部屋へと戻ろうとした。

「あ、あの！」

そんな時、彼女に声をかけられた。

「私、清と申します。先程はありがとうございます、安珍様。お蔭で母の具合も良くなりました。」

先程の奥方によく似た、色白だが子供特有のふっくらと健康的な印象のする美少女だった。

「いえいえ、仏門の者として当然の事をしたまでです。寧ろ御父君から報酬を貰ってしまった事の方が恐縮ですよ。」

「あの、出来れば私と少しだけお話を……。」

「いえ、残念ですが、もう夜分遅くです。今日は床について、明日もう一度奥様の様子を診ますので、その折にでも時間を取らせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「はい！お待ちしております！」

こうして、私は彼女と約束をした。

これが果たされない事になろうとは、この時の私は思いも因らなかつた。

翌朝、私は日がまだ登り切らぬ内に出発した。

宿の者に追加の薬と所用が出来たため、早めに出立するとの伝言を置いてきたので、ギリギリ無礼にはならないだろう。

出来ればあの美少女とはお話してみたかったが、生憎とそういう訳にも行かなかった。

昨夜、唐突に胸の苦しみを覚えたと同時に吐血したからだ。

幸いにも、口元の布のお蔭で血は零れなかったが、出来るだけ進行を抑制してきたのがここに来て限界を迎えつつあった。

それに、長々と彼女と一緒にいれば、感染のリスクも高まってしまう。

力の入らない身体を引き摺る様にして、私は熊野詣へと急いだ。

この時、後の事を思うと少しだけでも時間を取るべきだったと思うが…後悔先に立たずとはよく言ったものである。

………

漸く熊野詣を終え、旅の目的が済んだ私は来た道を引き返し始めた。

とは言え、故郷には恐らく辿りつけないだろう。

何処か人気のない場所で、身体を火葬出来れば良いのだが…。

命数の殆どを使い果たし、最早軽く感じられる身体を動かしながらそんな事を考えていると、上野の里の辺りであの貴族の娘と再会する事になった。

「安珍様：何故、またお会いしてくれなかったのですか…。」

おどろおどろしい気配を纏った清と再会したのだ。

「私を：お嫌いになったのですか…？」

「そんな事はありません。あの時は急いでいまして…。とは言え、今は時間もあります。まずは身を清めてから、改めて話しましょう。」

見れば、清は裸足で歩いてきたのか足袋も履物もないし、素足が結構見えていて（この時代の人としては）かなりはしたない事になっていた。

気付いて赤くなつた清を直ぐに近くの宿に入れ、念入りに身支度する様に金子と共に言いつけておいた。

（正直、もっと早くに出会ってればなあ…。）

彼女はまだまだ若い身空、こんな死に体の男と付き合つて、最悪病にかかる事も無いだろう。

既に自分の身体は全体にガタが来ており、今横になってしまえばそのまま二度と動けなくなるだろう。

今何とか動けているのも、蝋燭の火の最後の輝き、火事場の馬鹿力、死に瀕して

肉体が苦痛を感じなくなっているからだ。

(何とか道成寺まで辿り着かないと……)

あの寺の住職には以前世話になった事があり、こちらの事情も知っている。

既に手紙で自身が亡くなった時は火葬してほしい旨を伝えているので、自身の体調を鑑みて、何とか間に合いそうだった。

だが、それは今から動いて本当にギリギリ間に合うかどうかであり、清と歓談する時間は取れそうになかった。

既に口元を隠す布の内側は己の血で真っ赤に染まっており、刻々とタイムリミットが迫っているのを告げていた。

また、この場で死のうものなら、宿の者達にも風評被害が及ぶ可能性が高い。

そのため、私は宿の者に清への言伝を頼むと、そのまま宿を後にした。

(熊野権現様、どうかあの子が思い詰めて私を追いかけてきませんように。どうか良縁に巡り合えますように。)

念のため、先日も熱心に患者の冥福を祈った相手に再び祈る私だった。

……

日高川を渡り、何とか道成寺に着いた頃、既に全身の感覚が麻痺していた。

今自分が歩いているのか倒れているのかすら判断出来ず、寺の住職達も既に伝えていた手紙で末期を迎えるのを理解してくれていたので、火葬の準備は着々と進んでいた。

先程から吐血が続き、口元の布も既に外から見ても真っ赤に染まっており、畳や寝具を血で汚すのも忍びないので、辛うじて準備が終えるまで鐘に寄り掛かせてほしいと伝える。

もう満足に手足は動かず、今にも意識を失いそうだった。

とは言え、今まで自分が看取って来た人達と同じで、今度は自分の番が来たと言っただけだと思えば、そう恐ろしくもなかった。

ただ、まともに話す機会を設けられなかった清の事だけが少々ならず心残りだった。

……

日もとっぷりと暮れ、所謂逢魔が時と言われる頃、不意に境内が騒がしくなった事に気づき、億劫に思いながらも瞼を開けた。

すると、視界一杯に白い鱗が入って来た。

何とか頭を上げると、やせ細った自分の胴を安々と超える程の太さの胴を持った白い竜が鎌首をもたげてこちらを見下ろしていた。

「何とまあ…見事な…。」

不意に口をついて出た感想はそんな暢気なものだった。

だが、瞬きをした時には白竜の姿は消え、代わりに何故か角を生やし、髪色も淡い若草色へと変じた清が立っていた。

「安珍様…？そのお姿は…。」

心配そうな、しかし変わってしまったても可愛らしい彼女の姿に、これは末期の幻だと思った。

何せ、彼女には「もし自分に怒りを抱いているのなら、どうかこのまま帰って親元で幸せになってほしい」と言伝を頼んでいたからだ。

裏返せば「もし自分を好いてくれるなら、どうかこのまま追ってきてほしい」と言っているのだが…まあ貴族の娘さんにそんな根性も行動力も無いだろう。

素直そうな彼女なら、文字通りの意味を取ってくれると思ったのだ。

「ああ…これは失敬。御夫人にお見せできる姿ではありませんね…。」

そう言えば、彼女と話したかった事を思い出すと、これも末期の幻なのだと考え、私はポツポツと彼女に今までの事を語った。

村長の三男として生まれ、近くの寺で学び、薬師紛いの事をしていた事。

流行り病で手を尽くしたが何人も死なせてしまい、自分も感染した事。

自分が死なせてしまった人達のためにも高名な熊野詣をしたかった事。

清が可愛くて話す時間を設けたかったが、長居してしまえば病気が移ってしまうかもしれないので出来なかった事。

土葬では病気が移るかもしれないので、念入りに火葬してくれるように道成寺の住職に頼んだ事。

何か余計な事を言ったかもしれないが…死にぞこないの戯言として忘れてしまってもらっても構わない事。

言いたい事を言い終えると、急に眠くなってきた。

最早、清の幻すら私には見えなくなっていた。

「安珍様…」

なんですか？

「安珍様はお疲れの様ですから、どうかごゆっくりお休みくださいませ。」  
よろしいのですか？

「ええ。後の事は私にお任せくださいませし。」  
そうですか。

「はい。」

では、休ませていただきます。

ありがとうございます、清。

「……お休みなさいませ、安珍様。」

.....

轟々と、道成寺の境内が燃え盛っていた。

白い大蛇の様な身体を持った竜がその口から灼熱の炎を吐き、鐘に身体を預けていた安珍の遺骸を灰も残さぬとばかりに焼いていた。

『安珍様、貴方様の願いは私が叶えます故…。』

清は、安珍に惚れていた。一目惚れだった。

高い知性を感じさせる面差しに、優しげな瞳。

口元こそ布で包んで隠していたが、それを考慮しても僧にしておくには勿体無い程の美形であった。

だが、母を助けてくれた恩人の上に彼は僧であり、夜這い等とても出来なかった。それでもまた会う事を約束してくれた彼を、清は信じて待った。

だが、二度も安珍はその約束を破った。

一度目は急用を偽り、二度目は身支度を長引かせる事で。

更には熊野権現に祈り、神通力で己を縛って動きを封じもした。

それでも清は驚く程の執着と情念と怒りで以て、安珍を追い続けた。

だが、追いついた時の安珍は、今にも息絶えそうに血を吐いて美貌を汚し、自ら立ち上がる事すら出来そうになかった。

その安珍の口から辛うじて聞かされた事もまた、驚きの連続だった。

それは安珍の人生そのもの。

小さな村の村長の家の三男として生まれ、寺で学を得て、薬師として生計を立てていた事。

しかし流行り病で村人を死なせてしまい、自身も流行り病にかかってしまった事。最後に死なせてしまった村人の成仏のため、態々熊野詣を行った事。

そして、そして…本当は清とゆっくり話をしたかった事、でも病を移してはならないと自戒して会わずに去った事。

清の事を憎からず思っていた事。

万が一にも病が広がらない様にこの寺の住職に自分を火葬してくれる様に頼んだ事。

本当に、嘘偽りなく、全てを語ってくれた。

そして、安珍は清に礼を告げると、眠る様に息を引き取った。

「

ッ！！！！！」

番を失った雌竜の咆哮が境内を超え、近隣一帯に響き渡った。

初めて見た時から心惹かれた。

執念の余りに変じてしまった姿すら見事と言ってくれた。

自分に病を移さぬ様にずっと身を案じてくれた。

最後には、こんな化生に礼まで言って事切れた。

そんな人が、もう自分では決して手に届かぬ所に逝ってしまった

最早人間の可聴域に留まらぬソレは溢れる程の悲哀と悲嘆が込められ、境内にいた僧侶達も先程までの怯えも忘れ、一様に顔を曇らせた。

『ガアアアアアアアアツ!!』

そして、白竜が炎を吐いた。

安珍の願い通り、彼を火葬していく。

その余りの火勢に、鐘を吊り下げていた釣鐘堂は焼失し、真っ赤になった鐘と石造りの土台だけが残っていた。

『安珍様、私も貴方様の下まで参ります…。』

そして、白竜となった清もまた天へと飛び立ち、日高川へと身を投げ、入水した。

この一連の事件は事情を知っていた道成寺の住職らによって書に写され、当時熊野詣を軸とした悲恋の代名詞「安珍・清姫伝説」として語り継がれて、多くの講談や創作の元とされた。

.....

2004年、炎上汚染都市冬木

「ど、わぁっと!？」

寸前まで迫ってきた刃を必死に飛び退いて回避する。

「くそ、本当にここ日本か、よっと!」

先のレイシフトに巻き込まれた関係か、どうやら自分も2004年の冬木市に跳

ばされた様だが：なんだ、このマッポー都市（汗

文明崩壊直後の有様でしょうかね？（滝汗

事の始まりはまーた転生してしまった事だ。

但し、今度は平安時代じゃなくて懐かしの20世紀の日本にだ。

そして、今度は魔術師なる面妖な家に生まれてしまった。

とは言え廃れて久しいらしく、他の家の様に根源への到達に血道を上げると言う事はなく、ライフワーク兼医学研究（特に薬学）の一環として魔術を研究している家だったが。

だが、二度も転生した影響か、どうも魔術回路（チャクラと言うか経絡の一種）が人より多めらしく、研究と後学のためと称して時計塔と言うイギリスの魔術の名門大学（と言うか三つしかないのだが）へと入学する事になった。

んで、ここで家の治療技術が目に残ったのか、アニメスフィア家の現当主からお声がかかったのだ。

結果、給与及び研究環境（魔術師が毛嫌いする科学技術も利用可とか地味に凄い）

を考慮して人理継続保障機関カルデアへと所属する事となった。

いやあ給与も良いし、ネットも出来るし、上司のロマン氏は素晴らしいので万々歳だなあ！と思っていたのだが…。

「これは無い、な！」

強化の魔術を使いながら、必死こいて逃げる逃げる！

この骸骨共、多すぎる！

カルデアからの救援は期待できない。

初の大規模レイシフトの実施につき、現地での医療担当として第二陣の一番後ろで待機していたオレは、辛うじて爆破工作の被害を免れた。

そう、工作だ。

爆心点が明らかに所長がいた位置の真下だった事から、あの爆発は事故なんかじゃなく、相手は明らかに所長に、カルデアに害意を持った何者かなのは明白だった。

「っ…！」

そろそろヤバイ。

強化魔術によって常人の倍近い身体能力を持つのが、30人近い骸骨の化け物なんて捌き切れるものじゃない。

そして、助けが来てくれる可能性は絶望的だ。

「ええいクソ！使いたくなんてなかったんだけどなあ！」

だから、この窮地を突破できる戦力を確保するしかない。

懐に忍ばせていた、金色の札を取り出す。

呼符と言われる、カルデア印の使い捨て礼装だ。

これの効果は一つ、術者側には一切の消費無しの英霊召喚だ。

だが、英霊以外ではなく、元となった冬木の聖杯戦争の術式に縁のある礼装も召喚の対象となってしまうため、デメリットもある。

しかし、現状どう足掻いても詰んでるのなら、礼装でも英霊でも良いから、状況をひっくり返す要素が欲しかった。

最悪、制御不能のバーサーカーでも匣に出来るし、礼装でも何かの足しになるだろう。

ごめんナマ言いましたお願いだから誰かボスけて！

「誰でも良いから来てくれえー!!」

誰も聞く筈のなかったこの叫びを、しかし、聞き届けた者がいた。

「はい、畏まりました。」

轟、と炎が走り、周囲を囲んでいた骸骨達が灰となり、燃え尽きていく。

英霊召喚の残滓たる黄金の粒子、即ちエーテルが舞う中、一人の少女が炎を纏いながら、英霊の座からやってきた。

「サーヴァント清姫、こう見えてバーサーカーですよ？」

炎を背にうっとり微笑む懐かしい彼女の姿に：

「どうか末永くよろしくお願いしますね、安珍様？」

オレは、どうしようもなく見惚れてしまった。



## FGO短編 フンババが逝く

副題「ぼくのかんがえたさいきょうのしんじゅう」

---

私と言う意識が生まれてから、一体どれ程の年月が過ぎただろうか？

大地が蠢き、海が凍り、嵐が吼え、雷が降り注ぎ、火山が吼え、津波が迫る原初の地獄たる地球において、私は生まれた。

地球そのものであるガイア、そこから派生した神霊を除けば、恐らく私は最も古い生命体だった。

まあ特に仲間とかもいなかったもので、基本的にボッチで住処も転々としていたのだけ。

唯一の癒しは何故か燦々と程好く日光を向けてくれる太陽位のものだった。

なんでそんな存在がこうして複雑な思考や知識があるのかって？

それはあれだ、私が所謂転生者とか言う存在だからだ。

とは言え、特に特典とかがあるわけじゃない。

原初の生命と言つても、出来る事は極端に少ない。

精々が地獄の様な環境に適應する様に生き続ける位しかね。

その内に地球上に多くの原始的生命体が誕生し、その後は爆発的な進化を遂げて、竜の樂園とも言うべき状態になった。

ここまで来ると自分に匹敵とは言わないまでも同サイズの生命が多く存在し、彼らの姿を見続ける事で、随分と退屈を紛らわす事が出来た。

しかし、ガイア及び神々による知的生命体の創造と共に、竜達の中でも特に古い個体（自分から見れば若輩だが）の多くは世界の裏側へと去って行き、残った個体はどれもそれ程強くはない者達だった。

だが、未だ人間の文明も碌に発達していない現在（四大文明成立以前）、そんな彼らでも十二分に強者であり、国や民族と言う程ではないが、それに成り得る群集団を絶滅させる事位は簡単。

そして、それでは知的生命体の創造が出来ないとして、神々が人間の生活に手を貸し始めた。

それにより確かに知的生命体としての人類は成長し、同時に神々から多大な迷惑を受けつつも文明としての成長を始めていった訳だ。

そうして漸く文明が形に成り出した頃、自分の下にある神がやってきた。

その名をエンリル。

現在のメソポタミア文明世界において、地球そのものたるガイアを除いた神々における最高神だった。

嵐そのものが輝きを纏い、その中心に人型の本体を持つ彼は、私にある頼み事をしてきた。

曰く、香柏の森の番人となってほしい。

この森は神々の領地であり、元々自然の猛威や魔獣、疫病等の災いを封じるためのものだが、森の少ないこの辺りの土地ではうっかり人間や神々が伐採しかねないので、腕の立つ番人が欲しいのだとか。

まあ基本的にポッチで定住地がある訳でも無いし、時々で良いから食べ物をくれる事、自分に名前を付けてくれる事を条件にして引き受ける事にした。

なお、食べ物基本趣味です。

だって大気中の魔力？とか吸ってればそれだけで健康で過ごせるから、娯楽以上の意義が無い。

まあ身体が嘗てよりかなりデカいから、大雑把なものしか作れないんだけどね……。そもそも過酷過ぎるサバイバル生活は既に飽きていたので、そろそろ平和な森で静かに暮らしたい。

そして名前だが、フンババと付けてもらった。

意味は恐怖で、森を侵す者だけでなく、近づく者にすら恐怖を振りまいてほしいとの事。

それ、名前としてはどうなんですかね最高神……。

………

神々は安堵した。

特に問題も無く、フンババが番人の役を引き受けてくれた事に。

全てはフンババが強すぎたが故だった。

現在の世界を治める天上の神々をして、フンババの存在は危険だった。

あの獣はこの世界で最も古くに生まれ、今なお生きている唯一の生物だった。

原初の地獄だった星の環境に適応して生き延び、その力を身に宿すあの獣は、神々すら恐れる程の実力を持っていた。

本人？が温厚であるから今まで問題になってこなかったが、何らかの首輪をつけなければオチオチ安心する事も出来ない。

かと言って、目の前に立つ事すら生半可な神では出来ず、仕方なく最高神エンリルが出張ったのだ。

結果だけ言えば上々であり、神々も一先ずの安心を得る事が出来た。

また、フンババ自身も懐かしい気配のする香柏の森を気に入っており、今後は余程の事が無い限り彼が森から出る事も外界に関わる事も無かった。

しかし、それは神々自身の手によって破られる事となる。

.....

この森を任されてから、長い長い時間が過ぎた。

人間達の文明が発達し、村や街だけでなく、国々が生まれ、神々へとより多くの信仰（どっちかって言うと言うと荒魂への鎮魂に近い）を捧げる頃、ウルクに一人の王子が生まれる。

名をギルガメツシュ。

後に、人類史の開始者にして、英雄王と讃えられる男だった。

彼は聡明であり、天才であり、生まれながらの英雄だった。

王位に就き、幼き頃は正に名君だった。

しかし、徐々に鬱屈が溜まっていったのか、ギルガメツシュは暴君となり、民に圧制を敷き、近隣の国々と争うようになっていった。

更に、神々から定められた役目、人間と神々を繋ぐ「天の楔」をも放棄している

事から、神々はある決断を下した。

即ち、「天の鎖」たるエルキドゥの地上への投下だった。

ギルガメッシュに対抗するため、天空神アヌの命により、創造神アルルが泥から作った人形。

自身を自在に変化させ、神性に対して絶対の優位性を持つエルキドゥは、即座に地上に投下された。

だが、彼？は辛うじて人型に近い形態を取っているだけで、使命に対する義務感も何もない。

つまり、ハードは完璧でも、ソフトに致命的な欠陥があったのだ。

しかも、投下された場所が問題だった。

そう、そこは香柏の森。

フンババの守護する原初の災いの隔離領域だった。

.....

“ふむ……”

巨大な獅子の頭に巨人の身体を持つフンババは思案した。

先程天から森に落ちてきたこの存在をどうするべきか、と。

彼の職務からすれば排除すべきなのだが、一切の攻撃意思が無く、しかも天上から降ってきたとなれば、それは此処に自身を配置した神々の思惑の上である可能性がある。

迂闊に手を出すべきではない。

“人形よ、一先ず貴方を排除する事はしません。但し、この森の秩序を乱す様な事は禁止します。破れば殺しますが、それさえ守れば好きにしなさい。”

泥人形の反応も見ず、フンババは踵を返した。

……

ちゃんと言葉を聞き、理解していたエルキドゥは、取り敢えず、森で獣達と混じって暮らす事にした。

獣達は素朴であり、純粹であり、無垢だった。

故に、彼が心を、精神を、魂というものを学習するにはこれ以上ない教材だった。獣に混じって暮らす彼は、欠落を知らない故に満たされていた。

そこにはフンババも含まれており、森の番人にして主である彼から、多くの知恵や獣達の生態、自然の働き等を学んでいく。

時折フンババによる原初の地球講座ゝあの日、自分はどう生き残ったかゝが愚痴混じりで開かれる事もあったが：エルキドゥは穏やかに森での日々を過ごしていた。

しかし、そこにギルガメッシュからの王命によって神殿娼婦シャムハトがやってきた事によって、その日々は終わった。

彼女と出会い、彼女から知恵を授けられ、彼女と一時的に身体を繋げた結果、エ

ルキドゥは人としての形を得た。

そして、エルキドゥが人としての形を得た事を、悲し気に見つめていた者もいた。

「エルキドゥ、先ずはおめでとうと言っておきましょう。」

「だが、ここは人が踏み入ってはならぬ隔絶された地。」

「人となってしまう者は、この森にいてはなりません。」

「特別に二名とも見逃す故、此処を立ち去りなさい。」

己の職務上、告げるべき事を告げたフンババの姿は悲し気だった。

何せ、彼からすれば久方ぶりの客人達であり、友人でもあったからだ。

引きこもり生活によるボツチは仕方ないとは言え、それでも知性ある他者との関わりは楽しいものだった。

この七日間、シヤムハトが食料に困らず、外敵に襲われなかったのもフンババのお蔭であり、彼なりの友情だった。

「ありがとう、フンババ。今までありがとう。」

「無遠慮に踏み入ってしまい、誠に申し訳ございませんでした。食料までお世話になって……」

“君達は君達の役目を果たし、また果たそうとしているだけ。この森に立ち入るだけなら許そう。でも、もうこの森に来てはならないよ。その時は殺さねばならないから。”

二人を森の境まで見送った後、フンババはそう言い残して森の奥へと消えていった。

.....

それから幾年かの年月が経った。

フンババは変わらず、己の役目を果たした。

森は変わらずそのまま、原初の記憶のまま。

だが、少しだけ、ほんの少しだけ、エルキドゥがいた日々が恋しかった。

子供の様になんにも興味を持ち、多くを学んでいく彼が好きだった。

無論、男女間のそれではなく、純粹な好意だった。

エルキドゥとの日々は原初の地獄より一人だったフンババにとって、生に飽きた彼にとって、とても良い刺激に満ちた日々だった。

だが、そんな益体の無い日々は終わりを告げた。

他ならぬエルキドゥが、またこの森にやってきた事によって。

.....

“人は立ち入ってはならないと言った筈ですよ、エルキドゥ。”  
気まづげな顔をした友人に、私は告げた。

確かにまた会えた事は嬉しいが、出来ればそれは叶わないでほしかった。それは即ち、彼と戦う事を意味していたからだ。

「ほう、これは確かに恐れられるだけはある。我が朋友が来たがらぬ訳だ。」

金色の人と神の混じった者がいた。

それが恐らく音に聞こえたギルガメッシュ王なのだろう。

うん、確かに傲慢で足元疎かで上から目線だ。

下手に優秀で力を持っているのが余計に質が悪い。

「この森の香柏はこの大地において大きな価値がある。この地の財、我がウルクのために貰いうけるぞ。」

その言い様に呆れつつ、私は無言のまま口を開き、息を吐いた。

途端、口から炎が噴き出て辺りを舐め、焼き尽くす。

何時しか出るようになったこの炎の吐息は出が早い上に威力もそれなりなので、割と重宝している。

が、あくまでそれは不意打ちが有効な相手に限られる。

見れば、炎を遮る様に幾つもの盾がギルガメッシュとエルキドゥを守っている。

恐らく、あれが暴君が掻き集めた財宝とエルキドゥの一部が変化したものなのだろう。

「ハッ！行儀が悪いな番人！」

“……………”

その言葉に何も返さない。

そもそも、この男と何かを話そうとは思っていない。

ただ殲滅すべき相手に、一体何を語ろうとも無駄でしかない。

「やっぱり分かってたけど…怖いなあ…」

「何、その方が戦う甲斐があると言う物だ！」

だが、まあ、エルキドゥが恐怖しながらもずっと彼と離れないのは、少しだけ羨ましかった。

……………

フンババは、原初の獣である。

この星の最も過酷な環境だった原初の時代を適応する事で生き抜き、神代におい

てもなお最強を謳われた存在だ。

獅子の頭に巨人の身体を持ち、その口は死、その吐息は炎、その咆哮は洪水と言われ、「恐怖」の具現として人にも神々にも恐れられた。

また、1000リーグ先(約300〜700km)の音も聞き分ける耳を持つ。

そして、最大の特徴として「七つの輝き」を持っている。

これこそが彼が原初の地獄を乗り越えるために獲得した能力であり、外見上は七色の蠶の様に見える。

原初の地獄と同化、或は相殺するためのものであり、七種類の原初の環境を再現した力を持つ。

溶岩地帯なら氷雪の輝きを、砂漠地帯なら海原の輝きを、氷山地帯なら灼熱の輝きを持って、その環境に打ち勝つ。

逆に環境が強ければ、自分自身をその環境に同化させ、後にその力を得る事も出来る。

即ち、フンババと相対すると言う事は、再現された原初の地獄に再び挑む事にならない。

それは神々が整える前、ただ一つの例外を除いて一切の生物の存在を許さぬ地獄。地球の最も荒々しい頃の姿こそ、フンババのホームグラウンドに他ならない。

.....

この後の戦いを、世界最古の英雄譚であるギルガメッシュ叙事詩ではこう語られている。

「まるで、世界が終わり、また生まれ変わったかのような様だった。

フンババはギルガメッシュとエルキドゥの二人を相手にしても、微塵も恐れずに襲い掛かり、二人を幾度も打ちのめした。

二人は諦めずに挑んだが、フンババの持つ七つの輝きには手も足も出なかつた。七つの輝きとは即ち、この大地の始まりからある七つの力である。

それは地震であり、吹雪であり、嵐であり、雷であり、炎であり、津波であり、

呪いである。

二人の英雄はその輝きを破る事が出来ず、もう止めを刺されるだけにまで至った。しかし、それをエンリル神を除いた天上の神々の多くは良しとしなかった。

二人にはまだまだやるべき事があったからだ。

そして、神々は嵐を巻き起こし、フンババから七つの輝きを奪い去ろうとした。しかし、フンババは七つの輝きの内、嵐の力を使って、神々の起こした嵐を打ち消してしまった。

自分に森の番を任せていた神々の裏切りにフンババは怒り、雷を起こして天上からこちらを見ていた神々を攻撃した。

これに神々は大いに驚き、恐怖し、次いで神々の持つ最も強い神獣であるグガラナを降ろし、フンババにぶつけた。

フンババは怒りのままに、ギルガメッシュとエルキドゥを放置して、その身体を獣のものへと変えてグガラナと戦った。

これに怒ったギルガメッシュは、激しく戦い続ける二体の背後に忍び寄り、チャンス伺った。

二匹の戦いは先程の戦いよりも遥かに凄まじく、大地は割れ、川は干上がり、山は砕け、雲は消し飛び、余波だけで神々も魔獣も恐れ、逃げ惑った。

その果てに、フンババは七つの輝きの内六つを剥がされてしまったが、グガラナ首に食らいつき、そのまま噛み千切ろうとした。

しかし、それ好機と見たギルガメッシュが剣でフンババの首を斬りつけた。

これにはフンババも驚き、グガラナに食らいつきながら、最後の呪いの輝きで抵抗したが、そのままギルガメッシュに首を切り落とされた。

この時、フンババの最後の輝きである呪いによって、ギルガメッシュは決して死の運命から逃げられない事が定められてしまった。

それを見ていたエルキドゥは死に行くフンババに別れを告げ、後に丁寧に葬ったと言う。

こうしてギルガメッシュとエルキドゥのフンババ退治は終わり、香柏の森の木々は彼らのものとなった。

しかし、この件に対して神々含むフンババ討伐に与した者達を最高神たるエンリルは大いに怒り、神々はそれぞれ一時的にその財産を没収された。また、地上では

森に封じられていた多くの災いが解き放たれる事となり、ギルガメッシュとエルキドゥはそうした様々な災害を相手に戦い続ける事となる。」

確かにギルガメッシュ王はウルクに多くの良質な材木を得る事が出来たが、今度はそのによる多くの災害（森の消失による狩猟対象の減少や土壌の流失、保水地が無くなったための洪水や地滑り等）の対策に追われる事となり、結果としてウルクに災いを招き、余計な問題を抱える事となってしまった。

この事から、後世では世界最古の環境破壊と言われ、森林や河川、山地の乱開発等における警句として「フンババの森」が用いられる事となる。

.....

別に、長生きとかしたかった訳ではない。

ただ只管に必死だったただけだ。

原初の地球では自分以外誰も頼れず、厳しすぎる自然だけがあったから。

それに恐怖し、抗い続けて必死に生きる内に、随分と遠くまで来てしまった。

最早嘗て人間だった頃の記憶も薄れ、それでも誰も傷つけたくなって、森で静かに暮らしているつもりだった。

だが、長く生き過ぎた弊害か、或は人と関係を断ち切っていたせいか、こんな最期になってしまった。

「すまない、フンババ。出来れば、君にも色んなものを見てほしかった。」

友人の悲し気な顔に、こちらこそ申し訳なく思ってしまう。

自分は結局の所、単なる怪物になっていたのだ。

人と交わらず、森に潜む事を選んだ時点で、自分は何れ討たれる運命だった。

それに長く生き過ぎた故の諦観や利那的な価値観に支配されもしていた。

最初から勝って生き延びるつもりなら、最初の一撃で七つの輝き全てを使っていた。

要するに、ボケていたのだ。

ボケて周囲の迷惑となってしまうていたのなら、倫理観も育てないこの時代で

はこんな結末も仕方ない。

意識はゆっくりと白くなっていき、既に痛覚も視覚もない。

そんな中で、最後の未練だけを思う。

ああ、願わくば、また嘗ての様に…

“わたしも…ひととして…”

いきで…みたかった…な…。

その思考を最後に、フンババの意識は途絶えた。

………

英霊の座と言われる場所には時間の概念は無い。

そこでフンババは眠りに就いていた。

人に呼ばれる事も、抑止力に使われる事もなく、永劫に時の狭間で揺蕩っていたフンババの意識が唐突に浮上した。

英霊召喚、しかし英霊と言うには大分外れた存在である自分が呼び出される事に疑問を抱きながら、そのまま流れに身を任せる。

そして、呼び出された場所は、実に懐かしい空気に満ち溢れていた。

「ここは…メソポタミアですか。」

そこまで言ってハッと気づく。

自分の喉が獣の形ではなく、人の形だったのだ。

「あーア：あーア：うん、どうやら本当に人間っぽいですね。」

さて、召喚時に与えられた知識では…魔術王ソロモン？が聖杯を人類史の分岐点に配置して、人理を焼却して。

それを覆すためにカルデアなる2016年の人類の組織が時間逆行しながら人理を修復して回っている、と。

うーん、何というか、

「面倒ですね。ああ引き籠りたい…。」

昔の様に何も考えずに香柏の森に引きこもりたい。

だがしかし、これはチャンスでもある。

「今のこの姿なら、もしかしたら人間の中で暮らせる可能性がワンチャン？」

人間の姿なら、ぼっち&引きこもり脱却が出来るかもしれない。

人跡未踏の森でウジウジしてるよりも、世間の荒波に揉まれつつ、様々な刺激の中で生きる方が刺激があるし、ポケ防止にもなる。

となれば、先ずは人のいる場所を目指さねば。

だが…

「えーと…ここは何処かの山の中ですかね？」

明らかに人気の無い場所だった。

が、割と近くに何か悪趣味な建物があるので、そこを目指す事にした。

この後、泣き叫ぶイシュタルを宥めつつ、何とか道を聞き出してウルクに向かう。

すると北壁にいた魔獣達が一斉にフンババの方向を見つめるや否や、あつと言う間に潰走して逃げ去った。

その後、ウルクで賢王ギルと会い、盛大に驚かれる事になる。

.....

真名 フンババ（フワワ）

身長 可変／約50m（真獣形態）

体重 可変／計測不能（真獣形態）

出典 古代メソポタミア神話

地域 メソポタミア

属性 中立中庸

容姿 ストレートロングの金髪金眼、エルキドゥが成長した様な姿と服装

性別 なし

クラス適正 狂・騎

設定

① 穏やかな口調、優しい気な仕草からは想像できない程に苛烈な戦闘能力を持った地球上最古の知的生命体。

メソポタミア文明において、神々や英雄王ギルガメッシュと朋友エルキドゥすらも最強の一角と認めた香柏の森の番人。

地獄であった原初の地球を適応する事で生き延びた唯一の生命であり、単体で完結しながらもそれを厭った獣。

② ギルガメッシュ叙事詩に語られる世界最古の獣。

本来なら伝承通りの獅子頭の巨人か巨大な獅子の姿だが、人類と言う環境に適応するために弱体化する事を承知で敢えて人の形を取った。

現在の姿は友であったエルキドゥに出来るだけ近づけたもの。

状況に応じて、宝具でもある「七つの輝き」と言う原初の地球の七種の環境を極少再現した権能同然の力を振るい、外敵を根絶する。

七つの輝きとは即ち、地震であり、吹雪であり、嵐であり、雷であり、炎であり、津波であり、呪いである。

特に呪いは魔術的なものだけでなく、嘗ては死の呪いとされた数多の疫病をも含む。

③戦闘力は最盛期のギルガメッシュとエルキドゥ二人組を凌駕する。

叙事詩では、二人と戦い消耗した上で、天上の神々を雷で攻撃し、更に天の雄牛とも連戦して七つの輝きが剥がれた所を、ギルガメッシュが不意打ちする事で漸く仕留める事が出来た。

フンババと戦うとは即ち原初の地球を克服する事であり、最低でも天地創造や造りの権能やそれに近い力でなければ太刀打ちできない。

地上に神々が現れて天地創造を終え、環境が落ち着いた頃、エンリル神に乞われるままに香柏の森の番人となったため、カテゴリー上では神獣とされている。

その精神は長すぎる年月によって擦り切れ、老成し、刺激に飢えており、刹那的な思考や諦観が目立つ。

だが、性格は基本的に穏やかで誠実であり、のんびり屋である。

初対面のエンリル神からの頼み事もあっさりと引き受け、森に落ちてきたエルキドゥを保護した事もある。

なお、普段の暮らしぶりは専ら日向ぼっこしつつお昼寝か縄張り内のお散歩なので、やたら年寄りくさい。

④戦闘時は苛烈にも見えるが、それは単に「手早く終わらせる」ためでしかない。或は狩りの時間であり、無駄な消耗は極力避け、争いの無い穏やかな時間を好む。自分以外の生命達には基本的に寛容かつ受動的で、大抵の無礼は笑って受け流す。しかし、番人としての仕事や自身の生命に関わる事となると容赦は消える。

人間に対しては「変化と個体差に富み、見てて決して飽きない者達」として、要観察対象として見ている。

が、弱いのに無茶ばかりしている（フンババの主観で）ので、ヤンチャで危機感の無い孫を見るお祖母ちゃんのように割とハラハラしながら見守る。

⑤スキル面では、そう多くはないが強力なものが揃っている。

怪力A++ 天性の肉体（偽）A 環境適応EX

天性の肉体は努力によって後天的に得たもの。

環境適応は原初の地獄である地球環境を生き延びる程であり、人類絶滅級の大災害でも問題なく生存可能。

宝具「原始惑星・七大罪」セブン・オブ・ディザスター

ランク・EX 種別…対界宝具

地獄の様な原初の地球環境に適応した結果として身に着けた、メソポタミアの神々をも超える権能同然の力。

本来は防御宝具なのだが、それを真の姿である巨大な獅子の姿で解放し、一斉に蠶から放出することで攻撃する技。

それは原初の地球環境の再現であり、あらゆる生命の存在を許さぬ地獄である。

#### ⑥第七特異点攻略後に開放

フンババは獣である。

通常は獣の道理で動くが、人の間にある内は人の道理に合わせて動く。

そのため、狂化は評価規格外のEXとなっている。

そこには人の営み、生き様への憧れがあり、それに触れたいと思っている。

だが、それをうっかり壊しかねないと恐れている。

マスターとの友好度は高いが、獣と人の道理の間に立っているのも、その辺を配慮する必要がある。だがそれ以上に、基本的に燃費が悪いので、通常の魔術師では維持は不可能である。

好きなものは料理とお昼寝、日向ぼっこ、人間観察。

嫌いなものは自分勝手かつ人の話を聞かない奴、環境破壊。

レア度…☆☆☆☆☆

ステータス…筋力A 耐久A 敏捷B 幸運D 魔力D 宝具EX

スキル

怪力A++…攻撃力UP (3T)

天性の肉体(偽) A…自身の弱体化耐性UP (3T) +HP回復

七つの輝き…自身に無敵状態を付与(3回) +防御力UP (3T)

宝具「原始惑星・七大罪」B

敵全体にバフ解除後に防御力無視の強力な全体攻撃(OCで攻撃力UP)。

クラススキル

## 狂化EX

環境適応：弱体化耐性が大幅にUP

カード構成

B2 A2 Q1

イラスト

第一段階 白い貫頭衣に金の長髪と金眼の中性的な人物（20代後半？）

第二段階 獣の牙の首飾りが追加

第三段階 服に七色のラインが追加

最終イラスト 満月の夜の森で空を見上げる巨大な獅子の姿

セリフ集

召喚時「初めましてマスター。私はフンババ。嘗て香柏の森を守護していた者です。」

レベルアップ「もぐもぐ…」

霊基再臨1「わ、進化とはまた違うんですね。」

霊基再臨2「あれ？燃費が悪くなってますね。」

霊基再臨3 「あらまあ、無理しなくてよいんですよ？」

最終再臨 「生前にはまだ遠いですが……まあマスターが無理をしないで済む程度には働いてみせましょう。」

スタート1 「狩りの時間ですね。」

スタート2 「早めに終わらせましょう。」

スキル1 「ちょっと本気を……。」

スキル2 「手加減はいりませんか？」

コマンド1 「お任せを。」

コマンド2 「はい。」

コマンド3 「急ぎましょう。」

宝具カード 「終わらせませす。」

アタック1 「……。」

アタック2 「シッ！」

アタック3 「いただきます。」

エクストラアタック 「ガアアアッ！」

宝具「これぞ原初の星の姿。私が育った地獄…『原始惑星・七大罪』！」

ダメージ 1 「…?」

ダメージ 2 「あいた」

戦闘不能 1 「魔力切れですか…。」

戦闘不能 2 「ふふ、懐かしい感覚…。」

勝利 1 「ああ終わった…。」

勝利 2 「ご馳走様でした。」

会話 1 「くう…くう…。」

会話 2 「私は基本的に貴方に口出しはしません。短い人生、自分の思うままに生きてみて下さい。」

会話 3 「少し待っていてくださいね。今料理が出来上がるので。」

会話 4 「あら？あの子達がいるのですか。」ギルガメッシュ・エルキドゥ所属時

会話 5 「あら？これは…あんまりな様子だったら、お灸を据える必要がありますね。」イシュタル所属時

好きな事「そうですね…料理にお昼寝、日向ぼっこに…人間観察でしょうか。彼

らの営み、生き様は煌めく星々の様で好ましいです。」

嫌いな事「あー…自分勝手に人の話を聞かない人に、環境破壊ですね。もう少し後先考えて行動してほしいものです。」

聖杯「願望器ですか…あんまり変な事に使っちゃダメですし、環境再生でもお願いしましょうか。」

絆1V1「余り無理しちゃダメですよ？」

1V2「戦闘は得意と言う訳では…。」

1V3「私は獣ですし、余り人としての欲は無くて。だから、何をすれば良いのか…。」

1V4「人と獣、その間に立つ私は結局どちらなのか…。」

1V5「よし！うじうじ考えても仕方ないので、取り敢えず貴方と一緒にいる内は人と共に生きてみましょう！そして貴方が寿命を迎えてから判断しましょう！」

イベント中「あら？何か聞こえますね。」

誕生日「あら？マスターの祝い事でしたか。では直ぐに準備しますね。」

## 評価

性能としては☆5バーサーカーの中では最大のHPを持ち、スキルも相まって初期から場に居続けられる。

運用方法はクー・フリーン・オルタに近いが、こちらはバフ解除付きの全体宝具なので、弱体化耐性が高い事もあり、厄介なスキル持ちに強い。

全体火力としては理論上最大火力を発揮できるが、バーサーカーなのでスター発生もNPチャージも低く、介護の必要性が高い。

耐久力を生かしつつ、如何に宝具を撃つ準備を整えるかが肝になる。

書いてて思った。

シンゴルゴーンと殴り合わせてえ……！

第七章の難易度がまた上がるな！

そして先日、何故かピックアップアップでアサシン十その他で回したらゴルゴーンがい

らっしやった(震え声)

書くと出るは真実だったのか(驚愕)



## 艦これ短編 深海工廠艦が逝く

オリ主、オリ設定、深海側主人公につき注意

---

このご時世には珍しく、海で溺死なんてしたのがいけなかったんだと思う。  
仕事は辛く、友人はおらず、相談相手もない。

家族はそれぞれの仕事で滅多に顔を合わせず、家には常に誰もいない。

何とか寂しさとストレスを紛らわそうとゲームや漫画にのめり込もうとしていたが…結局、一部を除いて長続きしなかった。

そんな生活をするようになってから暫くして、海や山、川と言った場所に出掛けようになった。

多少のストレス発散にはなったのだが…次第に目的が変わっていった。

ここでは目立つ、ここでは見つかる、ここでは駄目だ。

ストレスが溜まり続けるに連れて、次第に死に場所を求める様になっていた。

やがて、数年来の職場を止めて、船に乗った。

ただ遠くに行ってみたかったのだが：先日の台風で波が荒れていた事もあって、不意に海に落ちた。

少し酒が入っていた事もあって、そのまま沈んでいった。

特に苦痛も感じる事もなく、ただ暗闇の中にゆっくりと沈んで：眠る様に逝けたと思う。

だが、唐突に意識が戻った。

海底から見る海面は綺麗で、時折嵐や曇り空で濁るものの、その輝きはとても眩かった。

やがて、周りにも海面を見上げる者達がいる事に気付いた。

自分を含め、誰も彼もが黒く靄がかかった姿だが、確かに大勢がいた。

そうした人々？はどんどん増えていき、やがて海底を埋め尽くしていく。

完全に海底の泥が見えなくなった頃、不意に誰かが言った。

ウラヤマシイ

キレイダナ

ネタマシイ

それに次々と賛同の声が上がる。

斯く言う自分もそうだった。

ナンデワタシタチハココニイルンダロウ？

アツチニイキタイ

ワタシタチモアカルイバシヨデイキタイ

それが切っ掛けだった。

人影達で飽和状態だった海底から、次々と人影達は海面を目指して立ち上がり、上へ上へと泳ぎ、昇っていく。

次々と、次々と、こんなにいたのかと思う程、膨大な数の人影が昇っていく。

生者への羨望と嫉妬を胸に、彼女達は海面に見える命の輝きへと引き寄せられていった。

此処に来て、漸く思い出し、気づいた。

深海に棲きる、生者に羨望と嫉妬、憎悪を持つ艦達。

そう、彼女達は深海棲艦。

人類の天敵にして、新しき海の覇者達であり、自分はその誕生と遭遇したのだと。此処は嘗て自分がファンだったゲームの世界なのだ。

他の人影達が次々と海面を目指す中、自分を始めたとして一部の者は海底に残り続けていた。

海面の嘗ていたであろう世界に興味がない訳ではない。

ただ、他の連中の様な熱狂を自分は持っていなかったからだろう。

冷めている、と言っても良い。

なので、残った他の人影達と時折話すだけで、そのまま海底から海面を見つめるだけの日々だった。

だがしかし、暇は暇なので、有意義な使い方をする事にした。

幸いと言うべきか、資源は船の残骸等が種類も大きさも新旧も様々で大量にあるので、色々作るには困らない。

具体的には必要無いのに家屋っぽいものとか、家具を並べて自宅気分浸ったりとかだ。

そうこうする内に、周囲にいた暇してた同類達と一緒に遊ぶようになり：必然的に、遊びの規模も大きくなっていった。

結果、始まってから約一年程で海底なのに乾ドッグ的なものが出来上がっていた。うん、オタクの様な凝り性かつやり込み大好きな者達に、自由にやらかせる状況を与えるべきではないね。

ただまあ、そのお蔭で海底なのに人間同様に快適な生活をおくれるようになった。乾ドッグと言っても、艦娘？（いるらしいが見た事はない）における入梁施設の様なもののだが、艦娘らのそれとは違い、こちらは温水プール風になっている。また、同類達と共に施設は拡張を続け、海底に出戻りしてきた者達を招いての宿泊施設の様な扱いになってきた。

食堂に運動公園、図書館（電子書籍のみ）や訓練施設、更には宿泊用の個室かカップル向けの部屋、低価格の雑魚寝部屋等、様々な施設が要望と必要に応じて多数増築されている。

まあタダではなく、利用者には相応の資源と引き換えなのだが。

で、皆で快適に過ごしていると、一部の戦争狂の連中が横槍を入れてきた。

曰く、深海棲艦として海上の奴らの撃滅に協力せよ、との事だった。

私達はシャーネーターと意思つつ、ドッグを利用してある深海棲艦を開発、その連中の下へと送ってやった。

具体的には浮きドッグ、戦地における補給と修理、整備を可能とする深海棲艦であり、その名も海上船渠鬼と言う。

外見は多数の駆逐イ級が二列分連結した様な艤装に、雷巡チ級（但し完全人型）が乗っている。

外見から分かる通りに既存艦の継ぎ接ぎであり、そのお蔭で鬼級でありながら割と生産性も高く、コストも低い。

ドッグ機能を使用する場合、二列の間に折り畳まれていた軟質のビニールプール染みた簡易入梁施設が多数広がり、そこで修理を受けられる。

外見は生体パーツ多めなのでグロイが、艦娘と同様の高速修復剤等も装備しており、回数制限はあれど、即座に修理完了する事も出来る。

無論、多数の資材を搭載しているの、補給拠点としても機能する。

また、イ級部分には自衛用に駆逐艦級の火器を装備しており、最低限の自衛も出来る。

自身の戦闘力こそ鬼級の中では最低と言って良いが、コイツが戦線にいるだけで自軍の戦線復帰までの時間が大幅に短縮できる。

下級の艦は殆ど使い捨てにしている深海棲艦だが、上位の艦は一度沈むと復活するまでどうしても時間がかかるので、こうした戦闘ではない支援面に特化した艦は今までいなかった。

この深海のドッグにいる自分を始めとした技術者にとって、中々の出来だったと思う。

が、当然ながら打たれ弱いので、是非とも頑張って足手纏いを守ってほしい（ゲス顔

そして、この深海船渠鬼の存在は、人間達にとって多大な脅威となった。

唯でさえ艦娘よりも物量に勝る深海棲艦、その最大の武器の一つである物量を補助する鬼級など、人間達にとっては悪夢でしかない。

無論のこと、見つけ次第優先して殲滅する対象となったのだが、逆にそれを囿として包囲殲滅されたりと、酷い被害を受ける事も多々あった。

かと言って、無視すれば物量で磨り潰される事になるので、人類側は頭を抱えつつも対処する羽目になった。

そして、頭を抱えるのは自分達もだった。

余りにも便利だったので、戦争狂連中が船渠鬼の量産を指示してきたのだ。

無論、資源は挽ぎ取ったのだが、鬼級らしからぬ比較的簡易な構造の艦装もあって割と生産ラインの確立は上手くいったのだが：作れば作る程、もっと作れと言われるのだ（なお、一度完成したラインの運用・維持はグロ可愛い妖精さんがやってくれる）。

人間と艦娘が優先対象としているだけあって、こちら側にも相応の被害が各所で出ており、作った傍から撃破されているのだ。

で、各戦線で充足率がさっぱり上がらないのだ。

結果が、自分達のブラック業務である。

資源があり、生産ラインがあり、施設が十分にあっても、人手が圧倒的に足りな

いのだ。

宿泊施設業務は半ば以上セルフサービス化しているので何とか回っているが（清掃・料理・設備運用等の労働も施設利用費代わりにした）、それでも人手が足りないのだ。

三日徹夜がザラになり、何とか注文を作り終えて一斉に倒れる様に眠ろうとした瞬間に追加注文が来るようになった時、自分達はキレた。

「…ドウスル？」

「逃げる。」

「ドウヤツテ？」

「前に緊急時向けに作った機能があっただろうか？」

一応プランだけだったのだが、この施設の緊急事態向けの機能を使えば、この施設ごと逃げられる。

「タシカニソレナラバイケルデショウケド…。」

「もう義理は十分に果たした。アイツらだけでも自前の方法で量産できるだろう。」

「…ソウネ。ソウシマショウ。」

とは言え、今まで試運転しかしていなかった機能をいきなり使うのは不安が過ぎるので、入念な点検を行ってから使用する事となった。

なお、逃亡に合わせて「リニユールに付きご利用できません。」の告知で、お客様には退避してもらおう予定だ。

そして一ヵ月後、何とか注文を裁きながらも時間を作って計画を進めた自分達は、遂に逃亡を決行した。

「ゼンキカン、セイジヨウニカドウチュウ。」

「カクブ、モンダイナシ。」

「では…全艦、離床開始！」

太平洋、フィリピン海溝の底から、遂に全長1kmにも及ぶ巨大な艦が離床、航行を開始した。

「ソウイエバ、ナマエハドウシマシヨウ？」

「ア。」

「ツテイウカ、リーダーノナマエモナイワヨネ？」

そう言えばそうだった。

自分についてきている彼女達は潜水級三種をメインに、軽巡・重巡・輸送なんかで構成されているメンバー達だが、自分は既存の深海棲艦には無い外見をしているらしく、分類できないし、名前も無かった。

一応、この船も自分の艀装と言う扱い（一応艦の操作だけなら自分だけでも出来るが、内部の施設維持とかには人手がいる）だが、名前が無いのは恰好が付かない。

「じゃあ：深海工廠鬼とかどうかかな？」

「イインジャナイカシラ？」

「サンセイ！」

「デハ工廠鬼艦長、ゴウレイヲドウゾ。」

「よし！深海工廠鬼艦隊、目標地点に向け全速前進！」

「「アイサー！」」

この時、自分は知らなかったのだ。

憩いの場と折角の工廠を無くした深海棲艦達が追ってくる事を。

剩え、人間達にすら自分達の存在を知られてしまい、戦略上超重要な攻略目標とされてしまう事を。

自分が男のまま、周囲の部下達から虎視眈々と貞操を狙われている事を。自分は、まだ知らない。

以下、解説

・海上船渠鬼

戦争大好き、生者大っ嫌いな深海棲艦達の注文により、深海工廠鬼とその部下達が生み出した、海上ドック艦としての機能を持った深海棲艦の一種。

外見は完全な人型になった雷巡チ級が、5隻から10隻程度の駆逐イ級を二列曳航している様に見える。

戦闘能力こそ、最低限の自衛用（10cm連装高角砲相当）を駆逐艦部分に一つずつ装備しているだけで、装甲も駆逐艦並に低い、その真価は浮きドックとしての機能にある。

背面にある大型の艦装、つまり二列の駆逐イ級を左右に展開すると、その間に生

体軟質素材で出来たビニールプールの様なものが多数広がっている。

ここを艦娘が使用しているものに酷似した液状の修復剤で満たし、そこに破損した深海棲艦を入梁させる事で修復する。

また、大型艦としての容量を生かし、多量の資材を格納しており、修復だけでなく補給も可能。

この艦の登場により、元より物量に優れていた深海棲艦における上位艦種の生存性が飛躍的に向上した事（特に鬼・姫級が攻略作戦中に修復される事）から、現在では鬼・姫級とはまた別枠に、最も厄介な存在として認識されている。

破損した傍から次々と修復し、確認された中では最大で10隻も入梁させる事が可能な個体も存在していた事から、現在人類の海上戦力からは最優先で撃破すべき対象となっている。

現在、各戦線における深海棲艦の指揮官である鬼・姫級は最低でも一隻はこの艦を指揮下に置いている。

・深海工廠鬼

深海棲艦きつての変わり者にして、唯一の技術者。

基本的に海底で、白い鯨にも似た巨大な艦装の中で過ごしており、未だ人類とは遭遇していない。

その技術力は本物であり、工廠として高い生産・開発能力も有している上に、白鯨型艦装を海上に浮かべてメガフロートの様な海上拠点としても使用できる。

艦装内部には高級とは言えずとも、レジャー施設程度の宿泊施設と工廠機能を有しており、嘗ては多くの深海棲艦達から唯一の癒しの場所として愛されていた。

しかし、人類との戦争が激化すると、戦争に熱中した他の深海棲艦の指揮官らから協力を命じられ、仕方なく内部の工廠機能を用いて、海上船渠鬼を作り出した。急造ながら中々の自信作となった船渠鬼だが、それ故にひっきりなしに注文が相次ぎ、遂にはブラック業務にキレて新天地を求めて逃げ出した。

現在、深海棲艦からは多額の報奨金と共に情報・身柄共に搜索対象となっている。

また、船渠鬼を開発・量産した様に、新たな艦種を一から開発する事も出来、その存在が知れた場合、人類からも船渠鬼を遥かに超える戦略上の超重要目標として狙われる可能性が高い。

戦闘能力として、巨大な白鯨艦装に魚雷発射管並び生産・格納した多数の一般的な深海棲艦達を内蔵しており、それらを艦載機ばりに射出して戦わせる。

だが、自身を改装する事で、更なる戦力UPも可能なので、今後はどんどん武装が増えていくと思われる。

そして船渠鬼以上の修理・補給能力を持っているので、資源と内部の人員さえあれば、他の姫・鬼級とは別の形で一つの戦線を支える事も出来る。

なお、人型の外見は中学生程度の黒髪・黒目・黒短パンに白長袖シャツの男の娘。深海棲艦唯一の男性個体として、艦内の部下達からは日々性的な視線を向けられている。

続きません。

---

最近、日間その他ランキングでちよくちよく乗る。

何故こんなニッチな短編集が受けるんだろう？

## 艦これ短編 深海工廠艦が逝く2

なんか好評なので続けてみました。

皆さん、毎度感想ありがとうございます。

戦場には多くの噂がある。

謂わば都市伝説の類なのだが、ジnkクス等と同じく、最前線の兵士達は割とこう  
いった事を信じる者が多い。

曰く、たった一機の攻撃機に戦車大隊が壊滅した。

曰く、ムーミン谷には白い死神がいる。

曰く、日本兵士は片腕だけになっても狂った様に戦い続ける。

と言う様な、一見信じられないものも多いが、こういった形で広まる話は割と結構な割合で警句でもあり、それ故に馬鹿にならない。

これは深海棲艦と言う人類の天敵を相手とした戦争において、艦娘と言う特殊過

ざる半ば以上オカルトな兵器が主流となりつつある頃に流れた噂だった。

曰く、ポリネシア諸島の何処かにある無人島で、深海棲艦が平和に暮らしている。

曰く、そこでは野良や脱走した艦娘達も大勢暮らしている。

曰く、そこでの暮らしはまるでこの世の極楽の様だ。

信憑性は一切ない。

しかし、最前線にいる事に倦み疲れた艦娘の間で、この噂は実しやかに囁かれ続けていた。

だが、その噂の出所となった場所では責任者が「どうしてこうなった」と頭を抱えていたのだが。

.....

深海工廠鬼率いる工廠艦隊（仮称）は、現在ポリネシア諸島某所に存在する大きさ約3<sup>2</sup>km程度の無人島に滞在していた。

「此処をキャンプ地とする！」

「(ノ・ω・)ノオオオオオオー！」

公共の電波を違法受信した事で急速なネット文化の汚染を受けている工廠艦隊だが、やる事は極めて真面目だ。

即ち、この無人島を自分達に住みよい物へとする事だ。

とは言え、小さな無人島である。

取れる資源は限られ、北側の岩場に軍港を建設する事を計画しつつも、何とかサバイバルをする必要があった。

資材だけで生きられる深海棲艦と言えど、それ以外の食べ物を美味しく食べたいと言う欲求は当然ながら存在する。

しかし、そのための食材等はやってきたお客様からのもので殆どを賄っていたため、貯蓄はあれども作物や家畜の生産プラント等は用意していなかった。

暫くは通常資源（鋼鉄や燃料、ボーキ等）で腹を満たしつつ、何とかやり繰りする事が決定した。

とは言え、最低限の家屋等は深海工廠鬼の白鯨型艤装から持ち出した組み立て

キットで即日で出来たので、割と順調な滑り出しと言えた。

到着して二日目、最初に取り掛かったのはこの島周辺の詳細な測量と資源調査だった。

周辺には此処よりも大きな無人島は無く、或るのは岩礁より多少はマシ程度の浅瀬だった。

何よりも収穫だったのは、海底資源が割と豊富であると言う事だった。

海底熱水鉱床と言って、高温のマグマが海水で冷却され、その中の鉱物資源が海底に堆積する形で出来る鉱床の事だ。

これが割と近場に幾つもあり、金属資源に関しては困る事は無いと判明した。

海底を主として活動する工廠艦隊にとって、急なマグマの活動さえ注意すれば、この場所は宝の山だった。

だが、このままでは石油や弾薬に関してはこの辺では得られない事が分かった。

まあゲームがおかしいのであって、そう簡単に無人島とかに原油やボーキサイトが湧いて出る訳が無いのだが。

とは言え、弾薬に関しては施設さえあれば、鉄と水素に窒素を用いたハーバー

ボッシュ法でアンモニアを合成してから火薬を生成できるし、何なら肥料を作る事も出来る。

そして石油だが：こちらは近場のオセアニア方面に海底油田が分布しているの  
で、そちらに潜水艦で構成された分艦隊を派遣、資源調査する事になった。

海底油田であっても、海底で作業する深海棲艦なら割とどうとでもなるだろう、  
と言う楽観混じりの考えだったが：海底油田の詳細な分布が判明後、輸送ワ級を海  
底資源採取用にした資源作業ワ級改及び海底に設置した石油汲み上げ装置を合わせ  
て、安定した供給を実現してみせる事となる。

さて、島の大改造だが、こちらは深海棲艦の膂力と工廠艦隊特有の技術力を用い  
て、割とあっさりと進んでいる。

岩や岩盤は素手で容易に砕け、どうしても駄目なら砲撃で除去し、工事はどんど  
ん進んでいった。

半年もする頃には凡その形が出来たものの、どうしてもコンクリートの消費に生  
産が追い付かず、島の要塞化とまでは出来ずとも、港湾設備は形にする事が出来た。  
そこで問題が起きた。

否、判明したと言うべきか。

人手が足りないのだ。

確かに嘗て白鯨型艦装内で行った様な、南国バカンス向けの宿泊施設やレジャー施設の建設及び弾薬の作成、海底から採取した各種資源の精製等が出来る工業設備も揃えた。

だが、それを維持・運用するだけの人手で精いっぱいであり、全員が求めている快適な生活には程遠いブラック環境だった。

どれだけローテーションを見直しても、人手不足だけではどうにもならず、艦装内の深海妖精達（黒くて二頭身の駆逐級3種の頭を持った掌サイズのSD人型）を他の深海棲艦の残骸から回収して増やしてはいるものの、どうしても人手が足りない。しかも、そうなるともしもの時の防衛時に物量で磨り潰される可能性も高くなってくる。

例え百発百中の砲が一門あっても、百発一中の砲が百門あれば負けるのだ。

既に作成済みの武器はどれも前世で言う所のレア以上であり、強力なものなのだ  
が：如何せん疲労が溜まっている上に、艦種が自分を除けば軽巡・重巡・雷巡・潜

水艦・駆逐艦・輸送艦・ついでに船渠鬼のみなので、ある程度島に設置された砲台からの支援を受けられる近海を除けば、正面戦力に不安があった。

もしこちらの対処能力を超える人類勢力及び深海棲艦側の主戦派の大艦隊が来襲してきた場合、この島を放棄するしか選択肢が無かった。

そんな難題に頭を抱えていた時だった。

この島の近海に生きた艦娘が漂流してきたのは。

その艦娘を近海を哨戒していた軽巡率いる駆逐艦隊が曳航してきたのは、未だ昼前の事だった。

通信で知らされて30分も前から軍港に待機していた工廠鬼並び護衛の重巡部隊は、実際には初めて見る艦娘に興味と共に警戒を抱いていたのだが：一目見て即座に入梁させる事を決意した。

その艦娘は当然と言うべきか、沈没寸前であり、虫の息だった。

直ぐに鉄くず同然の艤装を外し、念のために手錠足枷等を嵌めた上で高速修復剤入りの修理施設へと叩き込んだが、修理には高速修復剤を使っているのに、数時間はかかりそうだった。

さて、この艦娘だが、その素性は直ぐに分かった。

と言うか、檻褻切れ状態だが元は黒い制服に赤いネクタイと白いスカーフ、セミロングの黒髪は後ろで三つ編みにされ、何処かボーイッシュさを感じる小中学生程度の少女の外見をした艦娘、と言う辺りで凡そ当たりが付いた。

そう、白露型駆逐艦 2 番艦、その容姿と一人称からよくガンキャノンや男の娘と言われ、何故かヤンデレ枠にされてる時雨である。

三日、それが彼女が目覚めるのにかかった時間だ。

高速修復剤を使用して、損傷こそ治ってなお、彼女の体はとても衰弱し、疲弊していたからこそかかった時間だった。

そして当然と言うべきか、深海棲艦に囲まれ、拘束された状態なのに、目覚めて直ぐに彼女は激しく暴れ出した。

なので、慰めるのもやり方分からんし、燃料もほぼ 0、艀装も無しなので、大人しくなるまで放っておく事にした。

無論、舌を噛み千切られては証言が取りづらくなるので、最初から猿轡を嵌めていたからこそなのだが。

で、結局一時間もしない内に静かになったので、重巡二名に様子を見にいったら、すっきり落ち着いていた。

そして、空腹と言う事なので、こちらの食糧を与えつつ、話を聞いた所：酷かった。

時雨は、元は日本の鎮守府に所属し、仲間達と共に深海棲艦と戦っていた。

大日本帝国海軍ではなく、自衛隊から日本国防衛隊と名を変えても、彼女の戦意に些かの陰りもなかった。

問題が起こったのは、政府野党と過激な人権団体が「艦娘脅威論」を唱え出した時からだった。

それまでの艦娘への扱いは法律上、日本国民と同じ扱いだった。

見目麗しい乙女が、国を守るために命がけで戦い、しかも給料の一部はしっかりと税金として納めているのだ。

これ以上の資格があるだろうか？

しかし、深海棲艦という酷似した性質を持った化け物にシーレーンをズタズタにされ、国土の一部を蹂躪され、大勢の国民を殺された人々は違った。

違ったが、それは極一部の過激な人々の話であり、東アジア地域を中心とした人類の生存圏を守っている艦娘を排斥する訳にはいかない。

しかし、提督と言う特殊な人々の一部はそう考えなかった。

この時代の提督、と言うのは単に海軍の将校と言う意味ではない。

妖精さんと言われる、深海棲艦に対応可能な武器及び艦娘を生み出す事が出来る唯一の存在がいる。

的が小さい癖に第二次大戦中の水上艦艇並の装甲を持つ深海棲艦に対し、核兵器含む大抵の精密誘導兵器が余り有効とは言えない現状、その価値は測り知れなかった。

そして、提督とはそんな妖精さんの姿が見え、触れる事が出来、ひいては艦娘と常人よりも遥かに友好に接触できる人種を指していた。

その適性は誰にあるか一切不明なので、日本では国中を艦娘と妖精さん達と共に虱潰しに探し、見つけ次第片っ端から提督として強制徴用されていた。

そう、強制なのだ。

何せ適正を持つ者は少なく、極めて貴重なのだ。

しかし、そんな事情は将来に自分なりの目標や夢を持ち、それに精一杯努力してきた者達には意味がない。

提督適性があるからと言って、高校生以上かつ任務遂行困難な傷病を持たぬ限り、全ての人間が徴用された。

これに対し、提督らの矛先は艦娘へと向かった。

だが、それで暴力沙汰になる事は殆どなかった（艦娘を人力で殴っても怪我するだけなので）。

だが、時雨の提督は違った。

詳しい話は知らないが、後少しだった子供の頃からの夢を提督と言う仕事によって潰され、その怒りのはけ口を艦娘達に求めたのだ。

直接的な暴力ではなく、それとなく理屈をつけて艦娘達に無理を重ねさせ、撃沈させていったのだ。

軽い時は編成やローテーションの唐突な変更、酷い時には大破進撃や無休憩・無補給出撃等、本当になりふり構わず艦娘を殺そうとしていたと言う。

無論、その事を大本営や憲兵に告げた所で、一見「多少人員の入れ替わりの多い

鎮守府」としか見られないのだ。

戦果はすっかり出しているし、証拠らしい証拠もなく、何より大本営からの指示に提督が従順だった事が災いした。

そして、艦娘と言う資源と設備さえあれば量産可能な戦力を使い潰すのは、一部では寧ろ人間の兵士を使い潰すよりも人道的だと言われてすらいる。

この様に軍内部でも様々な意見がある事から、艦娘は余計な混乱を避けるために原則的に鎮守府で缶詰であり、外との交流が極端に少ない閉鎖空間住まいだった。

これが所謂ブラック鎮守府が表に出る事が無い原因だった。

しかし、提督と言う貴重な人材を運用するためにも、使い捨ての効く艦娘の待遇は無視される傾向があったのも事実だった。

こうして時雨の提督はそれなりの戦果を挙げつつ、多くの艦娘を自身の怒りののけ口として沈めていった。

本当に、嫌になる程陰湿で狡猾な提督だった。

そう、過去形だ。

その提督はもういない。

相棒にして姉妹だった夕立が自分を庇い、深海棲艦に沈められた直後の帰投で、時雨は旗艦としての報告を行うその足で提督を殺害、何とか物資を補給（＝強盗）して逃げ出したのだと言う。

この時雨は、提督（＝上官）殺しだった。

無論、捕まれば死地に送られるか、解体は免れない。

だからこそ、彼女は海の果てまで逃げ続け、遂には人界の果てまで来たのだ。

お前雪風並の幸運はどうした、と言うドン引きな話だった。

これに対し、工廠鬼らは特に罪を問うつもりはなかった。

っていうか、深海棲艦が出現しなければ起きなかった話だし、此処で問題起こさなければどうでも良い話だった。

問題は、人類側がこれでは自分達の様な戦争反対派（暫定）が白旗振っても撃沈される可能性が高いと言う事だ。

まあ、自分達は彼らから見れば侵略&虐殺した側なので仕方ないのだが…。

さて、そこで時雨の扱いだが、取り敢えず暫くはこの島にいてもらう事にした。人手が足りないし、食い扶持と消費した資材分は働いてもらいたかったと言うの

もある。

そして、ある程度こちらに馴染んだら、彼女の様な脛に傷を持っている者や野良の艦娘を集める勧誘員として働いてもらいたかった。

行き場のない者達なら裏切りの心配も少ないし、この島から米国よりの海域はハワイを中心に深海棲艦が日本近海以上に大量に湧いており、此処が行き止まりと言って良い。

そんな人界のどん詰まりと言う場所だが、近隣の島々にはこれといった深海棲艦もおらず、この島の開発が終了次第、近隣の島々の開発に着手する予定なので、上なく行けば大規模な泊地とする事も可能だ。

しかし、それにはやはりマンパワーが足りない。

数こそ力の深海棲艦だが、生憎とぼこじゃか量産できるのは駆逐艦に限る。

駆逐艦については資源と設備さえあれば、それこそ日産100を超えるのだが、生憎と深海棲艦の駆逐艦は知能が低く、手も無いのでとことん作業に向かないのだ。どちらかと言うと、無人兵器に近い。

翻って、次に低コストの軽巡だが、こちらは日産10程度で、10倍近い差がある。

日々食い扶持と資源を消費し、娯楽として食料を消費する日々。

しかも、建造したばかりの艦は経験が足らず、即座に複雑な作業が出来る訳ではない。

その辺りは初期の工廠艦隊の様に、年単位で機械弄りするとはいかずとも、時間をかけて教えていく必要がある。

なので、艦娘と言う程度経験を持った人員増加の機会は見過ごせなかった。

経験の少ない野良であっても、艦時代の経験は生かせるので、一体辺りの質は深海棲艦よりも上なため、野良でも脱走兵でも、採め事を起こさずに仕事をしてくれるなら大歓迎だった。

「デハ、シグレハオキヤクサマトイウコトデ。」

「ああ、お願いするよ。」

そういう事になった。

.....

さて、そんなこんなで時雨を客人として迎え入れたのだが……一週間とせずに馴染んだ。

元々人懐っこい性格なのだろうが、最早無くすものなど無いという意識が彼女に積極性を持たせていた。

また、日本人？として「働かざる者食うべからず」が身に染みているのか、その働きぶり（主に炊事・洗濯・清掃等の雑用）は実に真面目で細やかだった。

一週間目を節目に、労わりとして皆で砂浜エリアでバーベキュー（魚介類と海藻、栽培に成功した少量の野菜のみ）した後、入梁施設と兼用の入浴施設で遊び倒した。そこで全員が艤装を外して水着姿になったのだが……海パンのみの工廠鬼に初めて男だと気づいた時雨が大騒ぎする一幕があったが……まあ些細な事だろう。

この様に十分に仲良くなったみたいなので、もう良いかな？と一カ月目にして、こちらの狙いを説明した。

「成程ね……良いよ、その任務受ける。」

「随分あっさりだね？」

「命の恩人の頼みだし……似た様な思いをしている娘も多いだろうし、ね……。」

故郷の行く末は心配なのだろうが、時雨には最早古巣への愛着など感じられなかった。

やはり、夕立が味方の笈の提督の采配で沈められたのが響いているのだろう。

「じゃあお願い。ある程度噂を広める事が出来たら、成果が無くても帰ってきて良からね。」

「うん、分かってる。また皆でバーベキューしようね。」

「そうだね。その時はお肉やお酒も皆で楽しもう。」

そう言って、工廠艦隊一同は指揮官殺しの時雨を見送った。

そして、一カ月と経たず、徐々にブラック鎮守府から離脱したという艦娘達が島の近海までやってくるようになった。

彼女達は皆疲弊し、ボロボロの状態だったが、提督殺しの時雨から直接、或は噂で間接的にこの島の話の話を聞く事で、この島を一縷の希望と共に目指してきた者達だった。

それを工廠艦隊は快く迎え入れ、回復次第労働を対価として島に受け入れた。

この頃、深海工廠鬼は時雨の流したであろう噂を聞く事となった。

(極楽で：そんな大層なものじゃないんだけどなあ。)

しかし、時雨と同じ様に行き場を無くした艦娘達にとって、深海棲艦だが人類の敵ではなく、自分達を快く受け入れてくれるこの島は確かに現世での極楽だった。しかし、所詮は小島、深海棲艦と艦娘の人数が200を超える頃には随分手狭に感じるようになった。

「しゃーない。周辺諸島も開発しよう。」

幸いと言うべきか、駆逐艦から重巡を中心に既に200を超える人員がいるため、人手不足は解消されていた。

この人員を生かし、周辺の10余りの小さな諸島の制圧を開始した。

とは言え、いるのは駆逐艦から軽巡だけの小艦隊程度で、後は時折前線である日本近海を目指して移動する有力な艦隊が通りがかるだけで、制圧自体は艦娘らのおかげもあってあっさり済んだ。

そして、今まで艦娘らにも秘匿していた工廠鬼の白鯨型大型艦装(約500m)を海面にあげ、各種工具や資材等の運搬を即日開始、日没の頃には全ての搬出を終

えて、また海底に戻っていった。

翌日から始まったのは、岩礁よりも多少マシ程度の小島の開発だった。

本島を守るための支城とするため、各島はコンクリートで補強され、前線拠点としての機能を付与されていく。

武装としては漂着した艦娘の艦装を利用した各種砲台があり、大和級とはいかないが、比較的数量のある金剛級、扶桑級の主砲と多数の10cm連装高角砲を改良して深海棲艦側の妖精達で運用可能としたものを設置した。

更に回収した軽空母の飛行甲板を利用し、艦娘や深海棲艦によらず、妖精達だけで航空機を運用可能とした。

外見は可動式の台座の上に艦装の一部だった飛行甲板が据え付けられ、その上に小さいながらも巻き糸式のボーガンを設置したもので、艦娘の艦載機だけでなく、深海棲艦の艦載機もパチンコの要領で発艦させる事が出来、普段は哨戒任務のみだが、敵が来れば各島の制空権防衛の任に就く。

他にも地下には弾薬や燃料を始めとした各種物資の貯蔵庫を設け、他の島々との連携が途絶えてもある程度持ち堪えられるようになっていく。

これに本島との間に地下通路を掘削する予定もあったが、地下の熱水やトンネル内への海水流入の可能性が高いため、却下されてしまった。

ともあれ、何とか人員を確保した工艦艦隊は順調にその規模を拡大させていった。しかし、今度は拡大したが故に通信量の増大と制海・制空権確保の成功から、深海棲艦の注目を集める事となってしまった。

## 艦これ短編 深海工廠鬼が逝く 3

さて、通信量の増大と指揮下の深海棲艦が沈んだ事で、北米よりの太平洋海域を最大拠点とする深海棲艦の主戦派が戦艦・正規空母を多数含む100隻近い有力な艦隊を派遣した。

とは言え、これは所詮小手調べであり、威力偵察に過ぎない。

例え全滅させた所で、次は本国艦隊が動くだけなのだ。

しかし：

「ゼンカンガシヨウソクフメイダト：？」

「ハイ：。」

全滅したなら分かる。

しかし、消息不明となると意味が分からない。

一応、直前の通信では何の異変も無かったから尚更に。

「イミガワカラン。」

「カイイキゼンタイガツウシンシヨウガイド、サクテキキモミキカンドス。」

「イチオウ、シヨウキボノテイサツカンタイヲダシテオケ。ソレデダメナラシユ  
リヨクカンタイヲゾウキヨウシタノチ、サイコウゲキヲカイシスル。」

「リヨウカイシマシタ。」

これにより、深海工廠艦隊は暫くの間稼ぎに成功した。

.....

で、現地では何が起こったのかと言うと：

「アア、イキカエル……」

「ヤッパリオフロハヨイモノネ……」

深海工廠艦隊の本領、即ち接待攻勢で侵攻してきた深海棲艦は全艦休暇に入っていた。

海域に到達早々「Welcome to 工廠艦隊レジャー施設！」「リニューアルオープン！」とデカデカと幟を上げた艦に、以前常連客だった現地指揮艦があっさりと付いていき、残りの艦達もそれに追従したが故の結果だった。

元々、主戦派と言っても冷や飯食いな連中（だからこそ捨て駒扱いだった）なので士気も低く、彼女達としては嘗て消えてしまった癒しが再び戻って来たので、いっそ此処に移住するもの有りかなあ……とすら考えていた。

駆逐艦達ですら、丁寧な整備と良質なご飯に、既に飼い主として工廠艦隊の面々を登録していたりするので、責める事は出来ないだろう。

「我々の敵がイタリア並だった件……」

「しつかりしてくれ長門。纏め役の君は強制的に現実を見なければいけないんだから。」

余りの事態に、元野良で現艦娘組の纏め役である長門が遠い目をしていた。

しかし、工廠艦隊旗艦として、その辺をしつかり情報収集済みだった工廠鬼としては理想的な結果に胸を撫で下ろしていた。

最悪、嘗ての常連客達と殺し合いをする羽目になっていたのだから、その分安堵も強かった。

「でも、実際に戦闘にならなくて良かったよ。」

実際、諸島全体の迎撃施設の完成度は未だ低く、試験運用なら兎も角、実戦でい

きなりとなると不安も大きかった。

また、深海棲艦と艦娘、更にそれぞれの妖精がちゃんと連携を取れるか不安も大きかった。

「まあ、おいおい訓練を積み重ねていくしかあるまい。」

「とは言え、そう時間は無いよ。あっちの指揮艦は基本的に脳筋だし、米帝ぱりに数揃えて殴れが深海棲艦の基本戦術だしね。」

幸いと言うべきか、今回侵攻してきた艦隊はあっさりとこちらに寝返りそうだが（というか勧誘しなくてもこっちに就くと思う）、次はガチの主力艦隊で侵攻してくるので、その前にどうにかしたい所だった。

「まあチマチマ僕の艦装も改造してたし、一度位なら確実に撃退できるよ。」

「とは言え、それは保険だ。お前無しでもどうにか出来ねば、我々に未来はない。」  
何とか物資も遣り繰り出来てるし、新兵器まで開発している。

しかし、根本的なマンパワーと土地不足はどうにもできない。

「一応、うちの潜水艦隊を使って情報収集はしてる。けど、次が来る前に確実に対処できるようにしないと…。」

「そのための迎撃機の配備か？」

先日、工廠艦隊ではとある迎撃用戦闘機の配備を開始した。

それは現在日本の艦娘が搭載可能な艦載機と比較しても、通常型の烈風に匹敵する程の性能を持っていた。

「艦娘側の艦載機開発のデータが無ければ出来なかったものだけだね。」

「その辺りはブラ鎮出身の連中に感謝すべきだな。」

ブラック鎮守府出身で、長い事抑圧されていた艦娘は、時に反乱を起こす。

無論、憲兵艦隊所属の陸上戦と対艦娘向けの訓練を積んだ艦娘に問答無用で撃破されるのだが、中にはそれを知るが故に素早く逃げる者も多い。

その中で、艦娘の中でも比較的冷静な者達が開発系の資料をドサクサに紛れて入手し、手土産としてここまで持ち込んだのだ。

「既存の艦載機よりも平坦だな？」

「本当はステルスジェット機が良かったんだけどねえ…。」

あくまで推進方式等は既存のものだが、生物型の構造を可能な限り減らし、艦娘側の妖精達でも運用できる様に改良したものだ。

とは言え、陸上の滑走路からしか出撃できないので、艦娘達には余り連携の機会はないが。

「ま、大体わかったし、次はもっと良いのにするよ。」

「で、各砲台群の方は？」

「そっちはもう装甲化も終わったから、いつでも行けるよ。」

諸島を守る各砲台群、それは基本的に対海上用だが、対空用の散弾や時限信管等は準備済みなので、新型迎撃戦闘機も合わせれば、そう簡単に制空権を失う事は無いだろう。

「うーん…もしもの時は回天君達使っても良いからね？」

「余り気が進まんが、了解した。」

回天君、それは深海棲艦の駆逐艦を改装して作った、自走追尾式特攻兵器である。駆逐艦の武装を全て取っ払い、前面と上面の装甲を強化しつつ、側面の装甲を限界まで削った。

これにより結果的だが軽量化により運動性・加速性が上昇し、その速力を生かして内部に積載した爆薬により、敵陣奥深くで自爆させる事を主目的とした兵器だ。

艦娘や妖精でやっていたら反乱を起こされてもおかしくないが、ちょっと休めばまた復活する深海棲艦の駆逐艦なので、余り問題視されなかった。

なお、威力の方は長門に試させてもらった所、「3発が限界だな」との事で、主力戦艦クラスでも3発も直撃すれば沈む程度には威力もあった。

コスト的にも手間的にも安く、練度が低い個体や反抗的な個体を中心に改装していく事が決定した。

「後、火力面に関しては心強い娘が近々完成するから、そっちに期待しててね。」

「楽しみにしている。」

そう言ってニヒルに笑う長門の事を、工廠鬼は美人さんだなぁとほっこりしながら見ていた。

そして、そんな幼気な工廠鬼の様子を、長門は表情に一切出さずにデレデレしつつ見ていた。

.....

さて、この深海工廠艦隊の拠点周辺には、割と漂流物が多い。

その多くは深海棲艦か艦娘の残骸、時折それ以外の艦艇の残骸等だが、稀に生きた漂流物も届く。

それは例えば磁場の影響で方位を見失った海生哺乳類だったり、日本の艦娘だったり、深海棲艦だったりする。

なので、その漂流物が発見された時、工廠艦隊は騒然となった。

残骸となっているが、大和型等の超大型戦艦に匹敵する程の巨砲を備えた艤装。綺麗な金の長髪に我が儘ボディ、そして白人種特有の綺麗な白い肌。

そして極めつけは殆ど破けて残っていないが、星条旗模様のサイハイソックス。そう、アメリカ合衆国が誇る戦艦アイオワ級のフラッグシップ、アイオワ。

祖国のため、孤軍奮闘を続けている筈の彼女が、何の因果か艦娘と深海棲艦の寄り合い所帯のこの島に流れ着いてしまったのだ。

「……どうすべ？」

「うーむ……」

すっかり相談役となった長門と共に、工廠鬼は頭を悩ませていた。

はつきり言って、厄種である。

彼女はその強烈な愛国心と不屈のヤンキースピリットで胸を一杯にしながら、日本側の救援が来るまで戦い続ける筈だった。

しかし、この世界線では何の因果か、彼女は重傷を負い、こんな人界の果てまで漂流してきた。

正直、米帝が完全に制海権を失った可能性を考えると、頭が痛い。

「今まで両アメリカ大陸に張り付けていた戦力がこちら側に来る可能性があるな…。」  
「そうなりやここも終わりかな？」

余りの事態に、責任者二人は頭を抱えた。

だって、そんな事になってたら本当に困るんだもん。

「そうだったら、連れ戻されてまたブラック業務に…。」

「ブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だ  
ブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だ  
ブラ鎮は嫌だブラ鎮は嫌だ…。」

二人して虚ろな目になってブツブツと何事か呟きながら俯く。

だって、務めるならホワイト環境の方が良いんだもん。

「取り敢えず、アイオワには入梁してもらおう。回復次第事情を説明してから、改めて行動を決めてもらおう。」

「止めんのか？」

意外な工廠鬼の言葉に、長門が目を丸くした。

艦隊旗艦として、時に冷徹な判断を下す、見た目だけなら少年の鬼級は、しかし、フルフルと首を振った。

「彼女の信念には応えたい。何せ僕らはそれを無くしたり、元々持ってなかった連中だからね。」

「…良からう。」

（まあ、戦争終わった後のために、米帝様との橋渡し役として恩を売っておきたいのもあるんだけどね。）

この様にして、事態は新たな局面に向かう事となった。





## 艦これ短編 深海工廠鬼が逝く 4

日本政府、正確に言えば海上自衛隊を元とする海上国防軍はここ数カ月に連続して発生する鎮守府での反乱や脱走騒ぎに頭を痛めていた。

元々、深海棲艦との戦争に対し、既存の精密誘導兵器はそのサイズ故に当たらず、機関砲の類では火力が足らず、更に掌サイズの無数の艦載機に人型サイズなのに何か戦艦クラスの威力を持った主砲を持った怪物が、海を埋め尽くす程の物量で攻め寄せてくるのだ。

何とか高高度からの飽和爆撃や、戦車部隊等の上陸時の飽和攻撃によって、辛うじて国土への侵入を防いでいる状態だった。

無論、撃墜の至難な艦載機による攻撃で、沿岸部の人口密集地の多くは壊滅し、滅亡までの時間を長引かせているだけなのだが。

そんな時に偶然鹵獲できた深海棲艦を解析した情報を元に、実用化されたのが艦娘だった。

艦娘は提督と言われる「妖精が見える性質」を持った人間と契約して指揮下に入

り、深海棲艦と同じ性質を持った、唯一の対抗可能な兵器だった。

しかし、提督の適正を持った人間は少なく、生存圏奪還及び確保のためには適正を持った人間を官民間わずに強制徴用してもまだ足りない位だった。

故にどんな経歴であっても、どんな年齢であっても、どんな状態であっても、（職務に支障を来さない範囲で）徹底的に狩り出し、提督とした。

これには提督適正を持った人間の身内を中心に、国内から多くの反発があったものの、「提督及び艦娘の運用に関する法案」の一部として可決された。

提督となった事で人生を滅茶苦茶にされた人間は大勢いる。

しかし、同時にそうせねば今日の日本は防衛圏の確立すら儘ならず、他の国々同様に深海棲艦に滅ぼされていただろう事は想像に難くない。

そんな訳で、艦娘に憎悪を抱く提督は珍しくない。

なにせ艦娘はほぼ全員が人格と容姿、能力に恵まれた美女、美少女だらけであり、一定期間を共に過ごせば、憎悪を飲み込む者が大半だったからだ。

しかし、中には憎悪を抱き続けた者もいる。

そうした提督は艦娘を積極的に使い潰し、時には意味も無く嬲り殺していく。

無論、やり過ぎれば大本営や憲兵隊に検挙され、最前線の更に先の未探索海域で地獄の偵察コース（死亡率9割超）行きにされる。

そのため、現在生き残っている反艦娘派の提督は戦果を出しつつ、艦娘を鎮守府運営に支障のない範囲で働る事を覚えていた。

また、艦娘を単なる物言う兵器として扱い、徹底的に使い潰しながら戦果を上げる者もあり、こちらは主に防衛大や一流大学・企業出身者等が多い。

この様な提督が上に立っている鎮守府は艦娘と良好なコミュニケーションを取り、就業時間等も明確に定めて、健全な運営を行っている鎮守府と比較して、ブラック鎮守府と言われる。

最近、そんなブラック鎮守府で反乱や脱走が相次いでいた。

中には貴重な高性能艦載機等の装備品の設計図や資源、軍事情報等を持って脱走する者もあり、数少ない提督が死亡した例も多く、大本営でも問題視されていた。そんな中、とあるブラック鎮守府の提督が反抗的な艦娘の艀装に発信機を仕掛け、その反応を追跡した所、驚くべき事が判明した。

それは脱走した艦娘の多くが一つの海域を、即ちポリネシア諸島周辺海域を目指

している事だった。

これにより、大本営は脱走した艦娘達が深海棲艦の下へと向かっていると理解した。

だが、向かって何をしているのかまでは不明だった。

追跡していた艦娘はそこまでで通信が途絶え、未帰還となった。

この事態に対し、大本営は目標海域が未探索海域と言う事で、威力偵察も兼ねて大規模な偵察艦隊の編成、出撃を決定した。

.....

その頃、工廠艦隊もといホワイト環境希望組はと言うと……

「ええ〜かき氷、かき氷は如何ですか〜。」

「ミッツクダサイ！オオモリデ！」

太陽の照り付ける砂浜、その一角にある浜茶屋で威勢の良い艦娘の掛け声に、深海棲艦が笑顔で注文する。

何せ赤道付近の南国、暑さも相当なもので、冷たい飲食物の売れ行きは絶好調だった。

反面、煮物や鍋物等は一部を除いて余り売れていない。

「なんでまたバカンス続行なんだ…。」

「仕事はしてるから良いじゃない。」

何気に強制水着姿の長門と、海パン一丁の工廠鬼の責任者コンビだった。

「次の深海棲艦側の艦隊はもうすぐ準備が終わるらしい。そいつらを撃退するまでは暫くお預けだし、まあ多少はね？」

「全く…。」

呆れる長門だが、しかしその恰好では説得力も無い。

そして、工廠艦隊が今もなおローテーションで武器弾薬、深海棲艦の開発と備蓄に励んでいる事も知っているので、余りとやかく言う事は無い。

「あ、長門。僕肌弱いからサンオイル塗ってー。」

「お前、仮にも鬼級だろう…。」

実際、深海棲艦らしく青白い肌をしている工廠鬼は元が生粋のインドア派なので、余り日光で焼きたがらない。

長門は表向き呆れつつも、その身体は欲望に忠実であり、そそくさとオイルを塗

る準備をしていく。

(工廠きゅんの生肌：茹で卵みたいにすべすべ：お尻もプリンプリンで…)

もし内心がバレたら逮捕不可避なビック7であった。

……………

さて、アイオワである。

彼女は漂着後三日で目覚めたが、日本の艦娘と深海棲艦が一緒にいる光景に混乱し、暴れ出しそうになったが、長門を始めとした腕自慢達に抑え込まれながら、この諸島にいる者達の事情を聞かされた。

曰く、ブラック業務に倦み疲れた艦娘と深海棲艦達の楽園。

曰く、年中バカンスしながら外敵を迎え撃つ日々。

曰く、此処以外に行く所が無い。

曰く、喰っちゃ寝最高だけど偶には働かなきゃ…。

一部突っ込みどころはあったが、取り敢えず事情を理解したアイオワは自身の目的を果たす所存だった。

それは祖国防衛のため、日本とコンタクトを取り、救援要請を出す事だった。

無論、祖国を直接的に防衛し続ける事も大事だが、しかしアメリカの艦娘は現在自分1人であり、どうやっても数が足りない。

物量を誇る米国が物量で押し負けると言う事態に、アイオワは何とか抗い続けた。しかし多勢に無勢、彼女は大破しつつも周囲の深海棲艦を撃滅し、その後は沈没手前の航行すら不可能な状態で漂流していたのだ。

その間、彼女が無事だったのは奇跡としか言いようがない。

そんな彼女が至った結論が救援要請であり、自身の実用化のための技術情報の一部を齎してくれた日本との接触だったのだが：

「どうしようかしら…。」

此処にいる者達は深海棲艦からも、日本からも離脱した平和を望む艦達だ。

自身の行いで、彼女達の存在が外部に漏れる事は避けたかった。

祖国を思えば一刻も早く彼女達を説得するか、或はここを出発するのだが、そのどちらも難しい。

なにせ自身の艦装は未だボロボロで、アイオワの艦装に合う砲弾も今現在一から作っている最中であると聞く。

無論、解析もしているのだろうが、どの道今は自分からアクションは出来ない。

「かき氷いかがですか？ソーダもありますよー。」

「Oh::Statesには悪いけど::今はVacationを楽しみましょー！」

しかし、その悩みも今はどうする事も出来ないと悟るや否や、彼女はあっさりとその環境に順応した。

流石はアメリカ人、中々の合理主義かつ豪快さである。

.....

深海工廠鬼艦装内 深海棲艦開発・建造部

「うふ、うふふふふふふふ。。。」

「ツイニセイコウシタワネ明石。」

そこには海上船渠鬼と明石の姿があった。

二人はここでアイオワの艦装から入手した最新鋭戦艦娘の情報を元に、ある深海棲艦の開発を任されていた。

それは工廠鬼肝いりの計画であり、原作のゲームを知る彼故にその重大さを知っていたからだ。

そのため、この計画は艦娘の情報を普通の艦娘以上に知り尽くした明石（人体ならぬ艦娘実験が行き過ぎて解体行きになって脱走）と工廠鬼直々に技術的手解きをされた海上船渠鬼が担当していた。

「アイオワさんのお蔭で、遂に完成しました。」

「コレナラ人間ニモ、戦争ズキナバカドモニモマケナイワ。」

ゴポリと、二人の目の前の培養槽の中で気泡が昇っていく。

その中には、一体の深海棲艦が胎児の様に身体を丸めて浮いていた。

巨大な尾を持つ、幼気な容姿を持ったその深海棲艦は、未だ目覚めていない。

「主力戦艦級の火力とそれ以上の装甲、更に重雷巡級の魚雷、正規空母級の艦載機運用能力。おまけに対潜能力まで……。うふふふふふふふふふ！これぞ正に『わたしのかんがえたさいきょうのせんかん』ですわね！」

「ソノブン、コストモスゴイケドネ。」

深海棲艦、そして人類を相手に二正面作戦を行う事態に陥った場合、物量に勝る敵勢力を確実に粉碎可能な「量産型姫・鬼級」の開発。

後にレ号計画と称される開発計画の結実が、この深海棲艦だった。

工廠鬼の肉体や各地の船渠鬼から入手した情報を元に開発は進み、汎用性を確保しつつも戦闘に特化した鬼・姫級として開発が進められたソレは、艦娘と言う多様な装備を換装可能な兵器の情報、特に最新鋭戦艦のアイオワのデータを参考にすることによって完成した。

そこまで漕ぎ着けるだけでも、既に戦艦数十隻分の資源を消費していた。

今後この艦を量産するとなれば、如何に資源を自給自足できるホワイト環境希望組と言えど、財政破綻待ったなしである。

となれば、少数生産の上で要所要所で打撃を行ってもらおうエース部隊としての活躍が期待された。

少なくとも、相手が全艦大和型とか言う基地外編成でもない限り、正面から負ける事だけは無いだろう。

「じゃあこの子の名前だけど…レ級ちゃんにしましょう。」

「マアヨインジャンナイ？」

「よろしくねレ級ちゃん。早く目覚めてね。」

後に深海棲艦と人類双方から魔王の様に恐れられる深海棲艦と艦娘の相の子は、

未だに目覚める気配が無かった。



## 東方短編 白狼天狗が逝く

オリ主、転生、原作キャラとの恋愛注意。

転生した。

しかも、割と殺伐系な設定で知られる東方世界に。

しかも、種族的には余り強くない白狼天狗に。

鍛えなきや。

そう決意した10歳の頃から、自分を鍛え続けた。

始めは辛かった。

しかし、これも群れに貢献するため、と心配する両親に言って修行に取り組んだ。

幸いと言うべきか、他の群れの仲間達からは好意的に受け取られ、直ぐに大人達

に訓練を付けてもらった。

その際、上位者である烏天狗の皆さんともお会いする機会もあったのだが：何あ

れ？

よく反乱起こされないなって言う位には性根が腐った、或はひん曲がった連中が多かった。

その時点で、自分にとっての群れの仲間には白狼天狗であり、烏天狗は除外される事となった。

とは言え、仕事は仕事である。

自分の好悪で命令に違反する事は無い。

鍛錬し、仕事をし、休み、鍛錬し、仕事をし、休む。

そんな日々を何十、何百年と繰り返していく内に、次第に技も肉体も強く成っていった。

そうそう、程度の能力が自分にもあった。

その名も「千里を走る程度の能力」。

未だ生まれていないが、同じ種族の犬走棍の「千里先を見通す程度の能力」とよく似ている。

自分はこれを単なる速力強化だけでなく、スタミナと脚力の強化も含むものであ

り、ある程度速度を変えられるとも考えている。

何せ千里と言う距離は書いてあっても、完走するまでの時間は書いていない。

つまり、その時間は三日でも一日でも、一秒でも構わないのだ。

千里 $\parallel$ 4000 kmであり、これを24時間かけて走るとすると、時速約166 kmとなる。

高速道路でも早々見ない様な速度だ。

そして、これをもし一秒で走ったとするなら時速1440万 kmとなる。

音速が時速1225 kmなのだから、理論上瞬間最大速度だが、音を超える事が出来るのだ。

無論、そんな真似をしたら空気抵抗で一瞬でバラバラになるので、それに耐え得る肉体強度なり装備なりを持たねばならないが。

ならば、更なる鍛錬を課すのみである。

何時からか始めた感謝の正拳突きならぬ、感謝の素振り1000回。

その時間が短縮される毎に、更に1000回増やし、今はもう1万回振っても日は暮れない。

修行を始めて既に2000年、未だ我が剣速は音を置き去りに出来ていない。

ならばと今度は日に1000回の蹴りを放つ。

徐々に1000ずつ増やしていき、やはりこちらも何時しか1万回やっても日が暮れなくなった。

そして、蹴りに関しては何とか音を置き去りに出来るようになった。

これは恐らく、能力との相性もあったのだろうが、素振りも蹴りも止める事は無かった。

二つとも終えた後は、やはり瞑想する。

自分では未だ心の師匠たるネテロに至れないのなら、それ以上の鍛錬を課すしかないからだ。

瞑想の最中、思うのは仲間達の事だ。

同年代の仲間達は戦で死んだ者もいれば、嫁を取り、子供どころか孫までいる者もいる。

しかし、自分だけは未だ少年の姿で嫁を取っていない。

無論、嫁を取らないかと言われた事もあるが、こんな自己鍛錬と仕事位しか興味

の無い雄に嫁いでくれる者もいる筈もない。

只管に仕事と鍛錬、そして瞑想。

娯楽の少ないこの時代（時折見かける人間の服装等から未だ火縄銃のない戦国時代初期か、それ以前の様だ）、それ位しかする事が無かった。

その頃だった。

天狗が住まう山に鬼がやってきたのは。

「各員、全速で撤退しろ。殿はこちらで引き受ける。」

「しかし、隊長は!？」

「足手纏いだ。行け。」

「ご武運を！」

彼我の戦力差は全員が即座に看破した。

何せこちらには哨戒天狗が一小隊に対して、鬼達は50近い。

そして、種族的な性能を加味すれば、比較すら烏滸がましい。

「おいおい、逃がす訳ないだろう？」

「遅い。」

大将格の鬼が声をかけてくる。

だが、その動作は余りにも遅く、隙だらけだった。

轟、とその場で旋回する様に足を振るう。

それだけで周囲を囲んでいた霧は消え、鬼達は放たれた豪風によって一瞬だが目を瞑り、視界を閉ざす。

それで十分だった。

「ご、が…ッ!?!」

時速にして凡そ100km。

それだけの加速を付けた状態で、やや大柄な女の鬼を遥か彼方へと蹴り飛ばす。

これで暫くは戻ってこれない。

次いで、周囲の鬼達へとやや減速しながらも突撃、その頑丈な首を分厚い鉞の様な剣で刈っていく。

丸ではなく逆三角形のカイトシールドを構え、時に先端での打撃やシールドバツシュも入れるが、自慢の健脚により捕えられる事は無い。

「この野郎が！」

しかし、流石は日本妖怪の中で最強の種族と言うべきか。

10秒も経つ頃にはこちらの速さにもある程度対応する者達が出始めた。

中には口から広範囲に炎を吐く者もおり、仲間への被害なぞ気にしていない様子だ。

否、その程度の火力では燃えないのか、少し体毛が焦げただけで同士討ちと言う程の被害は出ていない。

「ちと硬いな。」

しかし、その程度の硬さは意味がない。

炎よりも、風よりも、時には音よりも早く駆ける自分には遅すぎる。

故に既に刃が欠け始めた剣に代わり、その足で以て心臓を突き抜ける様に蹴りを放つ。

「ごあ!？」

胸に大穴を開けて、火を噴いた鬼が絶命する。

その様に、鬼達の表情が明らかに驚きの形になる。

ああ、そんな風に硬直してしまえば死ぬだけなのに。

「か」

「ぺ」

足刀で二体、山の方へ進もうとしていた鬼の首を刈る。

ポンと飛ぶ様は、退治屋の人間の時と然して変わらなかった。

「……ああああああああああああああああああああああああああああ!!」

鬼達を翻弄し、こちらを遠くから見る視線に注意しながら時間を稼いでいると、絶叫と共に最初に遠くに蹴り飛ばした鬼が戻ってきた。

額に星の印が付いた一本角、金の長髪に女性にしては高い身長と全身の筋肉、そして体操着にも似た上着に丈の長いスカート。

ああ、そういえばコイツは星熊勇儀だったか。

鬼の四天王の一角、「怪力乱神を持つ程度の能力」に剛力と剛体を持った、鬼らしい堂々たる女性だ。

「そいつに手を出すんじゃないよ！アタシの獲物だ！」

うーす、と大将の声に鬼達が従う。

こちらとしても、あの数相手に駆け回り続けるのはちと辛かったので良しとする。

それに、一騎打ちの方が時間を稼げる。

「アタシは星熊山の星熊勇儀だ！アンタは強いが、あの程度でやられたと思われちゃ鬼の名折れだ！アタシと仕合ってもらおうよ！」

「是非も無し。お相手しよう。」

そして、先程よりも早く、鋭く、貫く様な蹴りを放った。

それを勇儀はギリギリの所で視認し、心臓を庇う様に両手を交差させる。

当然命中するが、しかし根を張った巨木のように、その姿が揺らぐ事は無い。来ると分かっていけば、それは当然防がれる。

ましてや鬼の大将格、その頑強さは当然ながら凄まじい。

「オラあ！」

勇儀の拳が振り下ろす様に放たれるが、当然回避する。

しかし、先程まで自分のいた場所がクレーターになるのを見ると、背筋が寒くなる。

回避、回避、回避。

急激なGをかけつつフェイントをかけ、脳を揺らす様に蹴りで顎先を揺らす。

「う、お？」

かくん、と膝を突いた勇儀の顔に、渾身の蹴りを放つ。

先程まで相手をしてしていた鬼達なら、三体は一度に首どころか胴を両断される威力。それを勇儀は角で受け止めていた。

身体が動かない？なら首から上を動かせばよい。

普通は無理だが、流石は鬼、流石は四天王なのだろう。

「か！イイねえイイねえ！」

反撃が届く前に即座に離脱、先程と同じく繰り出される攻撃を回避しながら時折カウンターを入れる。

ボディーブローの様に徐々に効きはしているのだろうが、鬼と言う体力馬鹿の権化みたいな連中の更の上澄み相手では削り切るのは至難の業だ。

ならば、更に早く成ろう。

この鬼達の事だ。

つまらない戦い方をしようものなら、きっと暴れ出すに違いない。

更に加速し、増速し、先へ先へと踏み込んでいく。

「は、ハハハハハハハ！」

笑っていたのは勇儀か、それとも自分か。

それすら分からない程に、自分は戦いに没頭した。

………

久しく無かった死闘に、ついつい冷静さを捨てていた。

気づけば日が暮れ、勇儀と共に地面に倒れ伏していた。

外から見れば勇儀の方が遥かにボロボロだが、無茶して加速し続けたせいでこちらの身体もボロボロだ。

最早指先一つでも動かしたくなかった。

「お前さん、凄いなえ……。」

しみじみと言った感じで、勇儀が呟いた。

「他の天狗もこうなのかい？」

「いや。幾人か強い者もいるが、それ以前に数と連携で戦うのが天狗だ。」

神通力を持ち、空を自由に駆ける山の民にして、山伏達の成れの果て。

それが天狗の本質だ。

鬼の様に絶対的な強さで闘争に生きるのではなく、隠者として生きる者達。

その性質上、強さと言うのは余り重要ではない。

無論、組織として一定以上の武力は絶対に必要なのだが、積極的にそれを行使する事も、増強する事もしない。

まあ、最大の敵は暇して組織内抗争ばかりしてる身内なのだが。

「しかし、負けは負けだ。」

「確かにね。」

しかし、軍配は鬼に上がった。

総大将である伊吹萃香率いる主力が、天狗側の主力を打ち破り、降伏させたからだ。

「んじゃ、攫わせてもらうよ？」

鬼は気に入った人間を攫う。

その後は食料にされるか、伴侶にされるかは分からないが、決して手放す事は無いという。

それは時に人間以外の者も対象となる。

「好きにしろ。」

疲れた、が、本当に清々しく戦えた。

修行に明け暮れ、しかし己の未熟さに悩むよりも、彼女との一時は逢瀬の様に楽しかった。

……………

「それがお父さんとお母さんの馴れ初めなのね！」

「うむ。」

母に似た金の毛並みと自分に似た犬の耳を持った娘が、大層キラキラした瞳でこちらを見つめる。

思えば、あれからもう千年近く経つと思うと、月日とは本当に早いものだと思う。

「ただいまー。」

「只今帰りました！」

そして、妻となった勇儀と白い毛並みに二本の小ぶりの角を持った息子が帰ってきた。

「お帰り。」

「お帰りー！」

「応！旦那に娘、今帰ったよ！」

「色々買ってきました！」

ここは旧地獄の一角。

幻想郷の中であつてなお、隔離された妖怪達の住まう地下。

勇儀に攫われた後、二人して蜜月を過ごして、何時しか夫婦になっていた。

幻想郷が出来て、萃香の号令で天狗も鬼達もその地に住まい、しかし人間がまともに関手をしてくれないからと鬼達は幻想郷の地下、旧地獄へと移り住んだ。

その際、既に娘を妊娠していた勇儀に自分は連行され（いや、付いていくつもりだったが）、こうして旧地獄に家族4人で穏やかに、時に賑やかに暮らしている。「どうだった？」

「今度、地上の連中と会合を持つ事になったよ。そんな時は私も護衛に行く事になった。」

近年、地底の妖怪が地上に勝手に現れる事例が多発していた。

捕えた妖怪の話では、地底から穴を掘ってきたのだと言う。

無論、地底の責任者（を押し付けられた）である古明地さとりもこの件を把握しており、事態の收拾を試みたが、地底の妖怪達は勇儀や萃香達の統率している鬼はまだしも、他の妖怪達はいい加減に地上で暴れたいと考えており、幻想郷の安定を考える八雲の警戒を助長していた。

この事態に対し、近年流行し始めた弹幕ごっこにより、妖怪側のフラストレーションを下げつつも人間との円滑なコミュニケーションを行えばよいという声があり、それについて改めて会合が持たれる事となったのだ。

そして、さとりが護衛として選出したのがペット達ではなく、万年鴛鴦夫婦で有名な勇儀だった。

確かに実力、人格、立場のどれを取っても申し分のない人材だが、夫である身としては余り危険な事に突っ込まないでほしいと思ってしまう。

だが、結局は本人がそういう事が大好きなので、心配するだけ無駄になるのが常なのだが。

「無傷では言わんが…。」

「ああ、必ず勝って帰ってくるさ。」

ぎゅうと、自分より背の高い妻を抱き締める。

すると、鼻に酒と汗と血と土、木くずの匂いが届く。

白狼天狗故の鋭い嗅覚も、匂いの籠もり易いこの地底では余り役に立たないが、妻の匂い位数 km 先からでも嗅ぎ分けられるだろう。

「あー！また二人ともイチャイチャしてるー！」

「お父さんお母さん！僕も僕も！」

抱き締め合う二人に、更に子供達が飛びついてくる。

それを両親が笑顔で受け止め、ぎゅうと大事そうに、愛しそうに抱き締めた。

「何だ何だ二人して。随分と甘えたさんだなあこの！」

「家の中で余りはしゃぐものではないよ。」

「いいさ。元気がないよりはこっちの方が良い。」

そう言って、愛し気に娘を抱き締める勇儀は、出会った頃とはまた違う魅力を放っていた。

今の彼女は鬼であるが、鬼子母神だ。

きっと、子供らに手を出されれば、それこそ噴火する様に怒り狂うのだろう。嘗てからは想像もつかないが、確かに自分も彼女も変わっていた。

「これからもよろしくね、勇儀。」

「何言ってるんだい！末永くよろしく頼むよ！」

旧地獄の地底の一角で、今日も賑やかな鬼と白狼天狗とその子供達が幸せそうに暮らしていた。

なお、夫は外見合法男の娘なので、勇儀の犯罪臭が高い夫婦としても知られてる。後、夫の服装は椀のを大きくして、丈を長くした様な感じで書いてました。

うーん、何かやっつけ感が強いな、没。

## 嘘予告 デモベ×FGO 後書き追加

デモベSSの方に久々に感想が入ってたので書いてみました。

それは地球より遙か彼方。

光の速度でもなお640年を費やさねば届かぬ赤色超巨星ベテルギウス。

そこで、人知及ばぬ死闘が繰り広げられていた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

深淵の宇宙において、なお漆黒の刃金が吼える。

怒りと憎しみ、そして愛しさと悲しさで。



それに対するは隻腕の刃金だ。

巨大な赤き星を背に、白い装甲を自らの力で碎きながら、限界を超えて全てを破



黒の巨神は、泣きながら白い巨神に殴りかかった。

嘗て、長い長い戦いがあった。

無限螺旋と言う、邪神が作ったクラインの壺の中で、未来永劫過去星霜の果てまで、億を超える命が蟲毒の様に戦い、死に、生まれ続けてもなお続く戦いがあった。その中で求められ、生まれ、そして遂に螺旋を打ち破って生まれたのが白の巨神だった。

白の巨神と二人の乗り手、三位一体を成す神殺しの剣にして無垢なる刃。

それが巨神の在り方だった。

それが嘗ての巨神だった。

だが、戦えば戦う程成長していく巨神は、遂には神々を超えた。超え過ぎてしまった。

無垢なる刃の力は世界からはみ出し、他の世界まで波及し：

やがて、たった一つの世界を残して、何もかも壊してしまった。

壊れて、壊れて、壊れて、その果てに

最後に残ったたった一つの世界で、黄昏の女王が生まれ、世界を再生しようとした。

それを白の巨神は感知していた。

女王の目的は善だが、その力は悪であり、神のものだった。

だからこそ、白の巨神は女王を殺そうと動き出した。

だが、それを阻む者がいた。

それは嘗て白の巨神と共にあった者。

白の巨神の先達にして、生みの親の一人であり、戦友であり、師であった者。

黒の巨神とその乗り手が、その身を無から顕現させ、立ちほだかった。

元より黒の巨神は神々の血を引く者。

神々の中でも変身に長ける一族故に、自らを無へと変え、誰にも気づかれる事無く、最後の機会が訪れるまで眠っていたのだ。

そして今、白の巨神を相手に、黒の巨神が最後の戦いを挑んでいた。

「天狼星の弓よ……」

咆哮と共に、影の天狼が宙を往く。

その名が指す様に、天体規模の莫大な光熱を放つ天狼が白の巨神を噛み砕かんと飛翔する。

「散れ！」

白の巨神がその手に召喚した偃月刀で天狼を両断する寸前、その姿が無数の光の矢へと分裂、白の巨神の全身を強かに打ちのめす。

だが、既知の業など無意味とばかりに、地球の地表程度なら焼き尽くせる熱量を浴びながら、白の巨神は前に出る。

しかし、そこにはもう黒の巨神はいない。

だが、白の巨神の目は正確に黒の巨神を見ていた。

白と黒、二体の巨神はとてよく似ていた。

それはそうだ、二人は兄弟であり、師弟なのだから。

だが、黒の巨神は変身を得意とする。

それは他者だけでなく、自分を含んだ世界の認識すら騙し通す程の変身であり、本物と全く変わらない程だ。





そんな光と熱に飲まれ、二体の巨神はこの宇宙から消滅した。

.....

「いやはや全く……見事としか言いようがないね。」

何もない、光や時間すら存在しない虚数の海に、声が響いた。

「私が生み出し、私が殺し、私が鍛え、私が育んだ我が子。」

それは威厳ある男の声だった。

「愛おしいよ、本当に。君は遂に九郎君すら超えて魅せた。」

それは艶やかな女の声だった。

「とは言え、このままでは消えてしまう。君は余りにも消耗してしまった。」

「それはならぬ。貴様はまだまだ私を楽しませてくれる。」

何処から聞こえているのか、何処から見ているのか、何処から響いているのか。

何も分からない。

だが、一つだけ分かっている事がある。

「故に此処とは異なる世界線に。」

「安心してほしい。君と女王の頑張りで、世界は既に再生した。」

「何の憂いもなく、旅立つと良い。」

この声の主に、激しい憎悪を抱いた事だ。

……

ずっと眠っている。

国の、文明の、時代の始まりから終わりまで。

そのどれよりも遥かに長く、永く、久く、眠り続けた。

それでよい。

この世界にとって、この星にとって、自身の知識、自身に流れる血は毒だから。

もし、自分が表に出れば、それは自分の知る神々もまたこの世界に繋がりを持つ

という事。

それは出来ない。

決して平和とは言えないが、それでも確かに幸福や正義もある世界を徒に乱す事は避けたかった。

人間の記録に残る事も無く、神々の目に触れる事もなく、ただこの星だけがソレを見ていた。

だから、それは英霊ではない。

死者でもなければ、伝承にのみ語られる存在でもない。

この大地を除けば、誰もソレの存在を知らない。

しかし、何にでもなれると言う性質を持ったソレは、言い換えればどんな状態であつても、星や人類の危機に現れる状態に変化し、その後に脅威を打ち払う状態になる事が出来ると言う事でもある。

それはガイア\アラヤにとって、この上も無く都合の良い存在だった。

……

特異点 F 炎上汚染都市 冬木市

「はあ…はあ…はあ…！」

走る、走る、走る。

普段運動なんてしない身体では、そう遠くまで走れないと知っていても足を動かす。

何せ、足を止められない理由があるのだ。

ガシャガシャガシャガシャ

背後から骸骨達が自分と言う生者を追って走ってくる。

彼らは恐らく、嘗てはこの街の普通の住人達だった。

それが、この都市の特異点化によって、アンデットとなって彷徨っているのだ。

「う、痛!？」

限界にきた足が纏れて転倒する。

しかし、骸骨達はガシャガシャと、疲れを感じない故に止まらない。

元より骨だけの彼らには自分の身の安全と言う考えもない。

「こ、のお！」

指を指し、呪いを飛ばす。

ガントと言われる北歐由来の呪いの魔術。

それを持って何体かの骸骨を吹き飛ばすが、それ以上に数が多い。

「来ないで！来ないでよお！」

涙声で叫びながら、オルガマリー・アムニスフィアが必死に魔術を行使する。

（なんで、なんでこんな事になったのよお!!）

彼女の人生は幸薄いものだった。

魔術師の名門にしてロードである父の継子として、その期待に応えられる様に、誰かに認めてもらうために、自分を褒めてもらいたくて、必死になって努力してきた。

しかし、そんな自分に父は一切の愛情も見せず、感心も持たなかった。

剩え、正式に自分に当主の位を継がせる前に死んでしまった。

だから、父の事業を継承し、時計塔の他のロードや国連の人間達と丁々発止のやり合いをしてまで、カルデアを維持し、指揮してきた。

なのに、なのに、なのに！

なんで大事な特異点へのレイシフトの時に限って爆発が起き、行く予定の無かつ



呼符が輝きと共に消え去り、同時にオルガマリーの足元に英霊召喚の魔法陣が広がる。

そこに表示されるクラスカードは大剣を持った獣頭の戦士、即ちバーサーカー。ゴツと魔力の発生によって大気がかき乱され、その反動で群がっていた骸骨達が吹き飛ばされる。

直後、収束したエーテルが実体を結び、咆哮と共に一体のサーヴァントが召喚される。

それは紺の装甲を纏った2m程の怪物だった。

長くしなやかな尾、大きく張り出した肩のコンテナ、バイザーに隠された頭部と後ろに伸びる橙色の長髪。

明らかに通常の英霊召喚では呼ばれない様な、イレギュラーな存在。

しかし、この局面で最も重要なものを、そのサーヴァントは持っていた。

「■■■■…！」

戦闘力。

両腕をガトリング砲へと変形させ、魔力を機関銃の様に両腕から放ち、背後から

迫ってきた骸骨には尾の一撃で砕く。

その弾幕、その威力に、脆弱な骸骨はあっと言う間に殲滅された。

「あ、貴方…」

それをオルガマリーは呆然と見ていた。

「貴方、私のサーヴァントなのね!？」

しかし、目の前の存在が何なのか分かるや否や、オルガマリーは喜色満面となった。

「私の！私だけの！私を尊敬して私を守って私を褒めて私を認めてくれる私だけのサーヴァントなのね!？」

「……………」

もし周囲に人間がいれば、ドン引きしていただろう。

オルガマリーが言っているのはそういう内容だし、本人も普段なら絶対に言わないのだが、この危機的状况に籬が外れてしまったらしい。

「■■■■…。」

「痛っ!？」

ベチン、と結構痛そうな音と共に、召喚されたサーヴァントはオルガマリーの額を指で弾いた。

「な、何するのよ!?!」

サーヴァントはその言葉に応じず、黙って指先を横に向ける。

そこにはオルガマリーの部下の中でも特に若い二人が、気不味そうな顔で彼女達を見ていた。

「みみみみみ見たの!?!見ちゃったの!?!」

「その…はい…。」

「ごめんなさい…。」

申し訳なさそうな二人に、オルガマリーは羞恥と怒りで顔を真っ赤にした。

「き…」

「き?..」

「記憶を失えー!」

「うわああああ!?!」

わあああど騒ぐ三人に、バーサーカーはやれやれと肩を竦めて索敵に専念してい

た。

(さて、何が何やら分からんが、取り敢えずこの三人と一緒に行くべきか。)

現状、サーヴァントに擬態している彼女だが、それはつまりサーヴァントとしての在り方に拘束される事に他ならない。

しかし、先程の叫びを聞いていたが故に、それに嫌悪を感じる事は無い。

(うちの子らで子育ては終わりに思っていたんだが…まあ仕方ないな。)

そんな考えを一切表に出す事はなく、バーサーカーは未だぎゃあぎゃあ騒いでいる三人の下へと歩み寄った。

嘘予告 デモベ×FGO (所長救済ルート予定) 続きません

ちよい説明が足りなかったので補足。

旧神様本編↓ダインプルークス↓F G Oとなっております。

なお、息子&娘は死亡済み。

リーア&アーリと鬼械神の三位一体十這い寄る混沌由来の変身能力によって、上位神霊クラスの能力を持って相打ちで渦動破壊神を撃破した後、ナイアさんにF G O時空で「幸せにおなりノシ」されたお話です。

なお、ルキウスもといベディヴィエールの様にサーヴァントに化けてますが、その気になれば何時でも普段のリーア&アーリになります。

但し、基本的なスタンスとして「この世界の事はこの世界の住人が解決すべき」として積極的に干渉しません。

例外として、人理の滅びがほぼ確定した様な大災害がありますが、まあそんな事ないやろと思っただら見事に滅んで原因究明も兼ねてカルデアと共に冒険する事になった訳です。

続きませんよ？

## 艦これ短編 赤城が作る

はい、赤城です。

元は平和な日本で艦これやってたT督ですが、今は何の因果か赤城に転生しています。

で、ですね。

赤城ってゲームでは任務こなして貰える艦なんですけど、私は大破状態で漂流していたのをとある新米提督の鎮守府に拾ってもらった、所謂ドロップ艦なんです。幸いと言うべきか、艦装の使い方や戦闘は私の中の赤城としての記憶と艦装在住の妖精さん達のお蔭でどうにかなりました。

まあこの鎮守府も戦闘の殆どない海域で、提督も戦果戦果と叫ぶよりものんびりしたいと考える方でしたので、轟沈の可能性はかなり低い場所でした。しかし、重大な問題があったのです。

この鎮守府、基本駆逐艦ばかりで間宮さんも鳳翔さん、大淀さんすらいないので

辛うじて明石さんはいませんが、彼女は基本工廠に籠りっぱなしなので、殆ど顔を見せる事はありません。

つまり何かと言うとですね：

ご飯を作るのが得意な方がいません。

間宮さんの喫茶店も、居酒屋鳳翔もない鎮守府なんて、鎮守府じゃない！

これは深刻な問題です。

ですので、お二人がこの鎮守府に着任するまで、暫くの間ですが、私が食堂に勤める事になりました。

先ずは、提督に許可を貰う事からですね。

………

提督から許可を貰いましたので、近場の中古ショップから業務用の家電を、業務用の生鮮食品店から食材を買いました。

そして、近場の港の漁師さん達の護衛をする代わりにその日取れた物を譲ってもらったので、今日は明日の仕込みも含んだ大がかりな調理に入りたいと思います。

とは言え、初日なので簡単なものにしましょう。

私と明石さん以外は皆駆逐艦なので、子供の味覚に合わせた料理にしなければなりませんしね。

という事で、海軍でもお馴染みのカレーとサラダです。

材料のニンジン・ジャガイモ・豚バラ肉ブロックを一口大に切り、豚肉に塩と香辛料の類で下味をつけます。

なお、深海棲艦のせいで胡椒等は輸入がほぼ途絶えているので、山椒や香草、唐辛子なんかが一般的な香辛料となっています。

さて、野菜と豚肉を月桂樹の葉と水と共に圧力鍋にかけます。

この間、玉ねぎを微塵切りと八等分に切り、微塵切りの方を餡色になるまで炒めます。

よく言われますが、この方が甘味が出るんですよ。

ただ、事前に冷凍させていた方が直ぐに餡色になるのですが、今は仕込んだ分が無いので仕方ありません。

まあ余った分は仕込んでしましましょう。

八等分にした方はそのままで、玉ねぎの食感を楽しむためのものです。

そして、圧力鍋で十分に野菜と豚肉が柔らかくなったら、灰汁抜きのために穴あきお玉で具を攫い、次に普通のお玉で灰汁を攫い、最後に目の細かいザルを通して残りの汁から灰汁を取ります。

取った具と汁は業務用寸胴鍋に入れ、先程の玉ねぎを加え、必要なら少しの水、好みでトマト缶、生クリーム等を加えます。

そして弱火で具の全てに火が通るまで煮込みます。

後はレタスとトマト、キュウリでサラダを適当に作り、火が通ったと思ったら、全体の三分の一だけを別の鍋に移し、ルーを別々にします。

これで二種類のカレー、二種類の辛さを楽しむ事が出来る訳ですね。

で、多い方には普通の甘口、中辛程度のルーを溶かした上で、練乳と蜂蜜を加えて甘口に仕上げます。

少ない方にはルーの前に紙パックに入れた鷹の爪を加えて少し煮込んだ上で辛みを増し、最後に辛口のルーと蜂蜜を入れて仕上げます。

なお、蜂蜜を入れるのはカレーの上面の塊が出来ないようにするためのものなので、それが好きな方は入れてはいけません。

いけません。

そして、舌休めを兼ねたデザートに果物の缶詰（国内産の黄桃とミカン、リンゴのみ）を刻んで入れたフルーツヨーグルトを用意して完成です。

で、出来ました、赤城特製甘口&辛口カレー！

早速この日の夕飯に出してみました。

お昼は朝に担当の子と作ったおにぎりとおかず少々にお味噌汁だけでしたので、帰港した駆逐艦の子達は突然の豪華なカレーに提督含めて驚いてくれました。

評判も上々で、カレーの匂いに釣られたのか、明石さんや妖精さん達も工廠から出てきたので、こちらにもカレーとサラダを振る舞います。

勿論、らっきょうの甘酢漬けと福神漬けも一緒に、最後に缶詰の果物と無糖のヨーグルトで作ったフルーツヨーグルトで舌休めです。

結果、寸動鍋一個分のカレーと大きなボウル二つ分のフルーツヨーグルトが見事に空になりました。

流石の食欲ですね…多めに炊いたご飯もすっかり空ですし。

カレーは余ったら寝かせるかドリアにするつもりでしたのに…。

「とは言え、皆さん満足の様ですし、良かった良かった。」

さて、片付けが終わったら、明日の仕込みをしましょうか。

今日もらった鮭が新鮮ですし、朝は塩焼き、夜は洋風に玉ねぎとマヨネーズで焼いてみるのも有りですね。

……

「美味い……！」

ガツガツガツガツ！

そんな擬音が聞こえてきそうな程に、この鎮守府の駆逐艦達は大喜びで朝ご飯を食べていた。

「そんな慌てなくても大丈夫ですよ。」

ホケホケと、お祖母ちゃんのような雰囲気纏う赤城の言葉だが、それだけは頷かない。

見れば、同僚達も少しでも多く！一口でも多く！とご飯をがつつき、おかわり！と元気に茶碗を突き出している。

人参、胡瓜、トマトの浅漬けにワカメと豆腐、長葱の味噌汁、ほうれん草のお浸

し、鮭の塩焼き、つやつやの麦飯、そして納豆と温泉卵、序でに焼き海苔。

正に理想的な朝の和食だった。

「美味い…。」

しみじみと呷く提督に、駆逐艦達も内心で同意する。

何コレ凄い美味い。

「うふふー、舌に合った様で良かったです。」

そう言って笑う赤城は、温泉卵とご飯に醤油、刻み海苔と炒り胡麻を散らした特製卵かけご飯でどんぶり飯を食べていた。

「え、赤城、何それ？」

「何って、卵かけご飯ですよ。今はティーケージーって言うんですけど？」

お祖母ちゃんが無理して横文字を使う様な発音だが、駆逐艦達はそれ処ではない。一斉に我も我もと真似をし始め、あつと言う間にご飯が消えていき、慌てて提督もそれに参戦するのだった。

（ああ、赤城が来てくれてよかった…。）

午前9時頃、執務室で事務仕事しながら提督は思った。

その腹は朝は軽く済ませる派の彼としてはあり得ない程に一杯で、何故か妙に氣力が充実していた。

(駆逐艦の皆も美味しそうに食べてたし、戦力として以外にも凄い助かってるな。) 無論、赤城はこの鎮守府唯一の正規空母であり、出撃の頻度は多い。

しかし、その合間合間に食堂に籠り、皆の食事を用意してくれる。

また、出撃の日も必ずレシピを残してくれるし、非番の日には自発的に買い出しに行ってくれる。

なお、お昼は多くの艦が出撃なりして揃わないので、各種おにぎり朝食同様の浅漬けや甘い卵焼きに焼いたウィンナー等が食堂に置かれ、出撃組にはお弁当として支給される。

士官学校出で、炊事は出来るが特に得意と言う訳でも無いし、異性で年下の駆逐艦達との距離感も今一掴めない。

そんな時に漂流していた赤城を拾ったのは、この鎮守府にとって正に天運だった。「ああ、つつい食べ過ぎちゃいそう……。」

暖かくなった懐もとい胃袋をさすりながら、提督は夕飯を楽しみにしていた。

……

「今夜は鮭の洋風マヨネーズ焼きですよ。」

赤い弓道着から胸当てや肩の飛行甲板、弓矢と言った艤装を外し、白い割烹着を着た赤城の宣言と共に出された料理に、一同が目を見張った。

鮭と言えば日本では主に塩焼き、他にはホイル焼きやちゃんちゃん焼きにスモークが精々、後は寿司ネタが主な消費だが、洋風でかつマヨネーズとなると戦前生まれの駆逐艦達にとっては完全に未知の領域だった。

「頂きます！」

しかし、あの赤城が不味い飯を作る訳がない。

そんな信頼と共に、駆逐艦娘達は一斉に箸を付ける。

優しいコンソメ味の野菜スープ。

ブロッコリーとベーコン、エリンギ入りのキッシュ（生地の部分は食パンを敷き詰めて代用）。

そして、メインディッシュの鮭の洋風マヨネーズ焼き。

特に反応が大きかったのは、やはりメインのマヨネーズ焼きだ。

極普通の塩をふってある鮭の表面に香草類を摺り込み、フライパンに刻んだ玉ねぎ（長葱でも可）を敷き詰め、そこにマヨネーズ適量とレモン酢少々をかけて蒸し焼きにする。

ムニエルやエスカベッシュよりも遥かに簡単（流石にマリネには劣るが）なその料理は、しかし一切の臭みもなく、最初は躊躇もあつた艦娘も提督も妖精達も、一口食べてからは迷いなく箸を進めていく。

最初はレモン酢の酸味であつさりかつマヨネーズでクリーミーだが、蒸した事で適度に塩分の抜けた鮭の美味さに驚き、次いで鮭の塩分と旨味を存分に吸い、蒸した事で甘味の引き立たされた玉ねぎに感動する。

キッシュも食パンから出来たとは思えない程にパリパリとした食感とクリーム部分の濃厚さとポリュームに満足する。

このキッシュ、パンは処分品、クリーム部分は安売りしていたクリームシチューの素で作った濃いめのシチューに卵を入れて作ったものだと信じられるだろうか？  
そして、酸味とクリームの濃厚さで疲れた所に、合間合間に小口大の野菜の入ったコンソメスープが癒し、口直しをしてくれる。

質・量共に大食らいの艦娘（駆逐艦は成人男性並）達が大満足な夕食となった。

「ふふ、デザートだってあるんですよ？」

そして、これである。

赤城が持ってきたのはプリンだ。

それも、大きなラーメンどんぶり一杯に入ったプリンだった。

グラニュー糖に卵、牛乳を混ぜ、レンジで加熱して作ったものだが、お玉で器に分け、そこにカラメルソースをかける豪快さはプリンとはとても思えない。

しかも、お好みでホイップクリームと缶詰の果物、更に緩くして塩を少々加えたこし餡に抹茶粉等のトッピングまで用意してあった。

「美味い……！」

例え、例えデブったとしても、これを食いつ迷す事は出来ない。

デザートの登場に目の色を変えた駆逐艦娘と妖精達に続く形で、提督もまたこの大雑把ながらも豪勢なプリンへと挑むのだった。

この赤城の食事攻勢は、半年後の鳳翔加入まで続いた。

しかし鳳翔加入後、二人による美味しい食事合戦に発展し、鎮守府のエンゲル係数が更なる高まりを見せ、提督の健康診断で問題が発生、提督のみ特別ヘルシーメニユーへと移行する事となる。

なお、特別ヘルシーメニユーも味見した艦娘の発言から結局大人気になり、他の艦娘達も喜んで食べる事となった。

---

書いてたら腹が減ったな…

## FGO×デモベ第2話

拙作「助けて旧神様！」とFGOのクロスです。

『よし、繋がった！誰か、生きているなら応答してくれ！』

三人の混乱が収まったのは、カルデアのロマニ・アーキマンからの通信が入ったからの事だった。

「ロマン!?何で医療部門の貴方が！レフはどうしたの!?!」

『アイエエエ！所長！所長ナンデ!?!』

何故かSRS（所長リアリティショック）を発症したロマンを何とか落ち着かせて話を聞くと、色々とはんでもない事態が明らかになってきた。

カルデアに起きた爆発事故、否、タイミングからして恐らく爆破テロにより、施設能はその殆どを喪失、活動可能な生存者は医療部門を中心に30名程で、コフィンを搭乗していたマスター候補達も全員が重傷であり、危篤状態で、更には外部と

の通信も断たれ、救援は絶望的との事だった。

辛うじてカルデアス等の超重要施設の稼働を維持するための動力炉であるプロメテウスの火は維持されているが、出力は大分低下している状態であり、その影響で通信も後数分で切断する程に不安定な状態だった。

「直ぐにコフィンのコールドスリープ機能を使って！生存が最優先よ！」

『ええ!?しかし、コールドスリープの使用は本人の許諾が無いと…』

「生きてれば言い訳のしようがある！急いで！」

『は、はい！直ぐに取り掛かります！では所長、これにて通信を終了します！幸運を！』

ロマンの激励で終わった通信の内容に、オルガマリーは頭を抱えなくなった。

(なんでこんな事になってんのよおおおオオオオオオオツ!!)

出来れば全てを忘れてベッドに入り、ゴロゴロしたい気分だったが、それも出来ない。

今、自分の傍にいるのは素人同然のマスターと本来よりも能力の下がっているデミ・サーヴァント、そして何かマスターに反抗的なバーサーカーのみ。

下手に弱みを見せようものなら、士気の崩壊すら在り得たし、この状況でそれは死とIIで結ばれる。

(なんとか、なんとかしないと……！)

ぐるぐると頭が空回りする。

元々彼女は事務・研究向きの人材であり、後方で指揮を取る予定だったのだ。

前線指揮など、経験もレイシフトもマスター適正も無い彼女は一切心構えが出来ていなかった。

まあ、元々が優秀なので、経験と覚悟さえ決まれば、やるべき事は出来るだろうが。

しかし、時間も何もかも足りない現状では、どうしようもなかった。

「：取り敢えず、一旦セーフゾーンを確保して、情報収集に努めるべきね。」

「ですが、何処が安全か情報が……。」

何とか絞り出した答えに対するマシユの疑問は当然の事だった。

何せ特異点化しているとは言え、事前情報のあった冬木市と比べ、地形が消し飛んでたり骸骨がうろついていたりするので、何処に行けばよいのか見当もつかない。

かった。

「市内で何か所か質の良い霊地があるから、その中で一番近い場所を目指し、障害があれば排除します。バーサーカー！」

「……………」

所長の声に、正体不明の鋼の狂戦士は黙って視線を向ける。

その目はじっとオルガマリーを見据えており、明らかに知性の、値踏みの色が見えた。

「護衛をお願いします。マシュはまだデミ・サーヴァントに成り立てで、戦闘に不安があります。現状、真名も解らない貴方に頼るのは怖いけど、それでもお願いします。」

頭を下げる。

魔術師が、使い魔でしかないサーヴァントに。

それは魔術師の常識としては明らかかな異常だったが、それでも必要な事だった。何せ、このバーサーカーに対する令呪を、オルガマリーは持っていないのだ。

自分の呼び声に応えこそすれ、この英霊を打ち据える鞭も、嵌める首輪も、力強

い後押しも持っていないオルガマリーには、頼む事しか出来なかった。

「■■■■■■■■」。 (まあ良いだろう。)

それをバーサーカーがどう受け取ったかは定かではない。

しかし、一度頷いた後、真っ直ぐ霊地へと歩き出した事から、この英霊がこちらの指示に従ってくれた事は間違いなかった。

「凄い、扱いの難しいバーサーカーが……」

「さ、行くわよ二人とも！」

「は、はい！」

かくして、カルデアから来た2人とデミ・サーヴァント、そして呼び出されたバーサーカーは歩き始めた。

………

「……………」。

索敵を密にしながら歩き続ける4人を、遠方から見つめる人影があった。

褐色の肌に白髪、黒い胴鎧に護拳の付いた弓を持った男だ。

彼こそはこの地の聖杯戦争に呼び出された弓兵、アーチャー。

彼は鷹の目と言われるスキルを持って、カルデア一行を正確に捕捉していた。

「迂闊だな。地下鉄でも通るべきだった。」

とは言え、街全体が延焼している現在、迂闊に地下に籠ろうものなら、窒息の危険もあったのだが。

「まあ良い。仕事だ。」

いつの間にか右手に握られていた矢を番え、その先を数km先を歩くカルデア一行へと向ける。

「*I am the bone of my sword.*  
体は剣で出来ている。」

詠唱の直後、音速の倍以上の弾速で矢が放たれた。

.....

「！」

最初にそれに反応したのは、最も戦闘経験の長いバーサーカーだった。

彼女は察知と同時に、素早く全身の耐久性及び装甲を強化し、オルガマリーと立香を背後に庇える位置についた。

次に反応したマッシュも、遅れてバーサーカーの防御範囲からやや外れる位置へと移る。

僅か数秒にも満たない間隙で、そこまでの動きが出来たのなら、及第点は超えているだろう。

「■■■■……。」

「っく!!」

「うわ!?!」

「きゃああああ!?!」

雨霰と連射される矢弾に、マスター二人が悲鳴を上げ、サーヴァント二人は耐え凌ぐ。

マッシュはその大楯で、バーサーカーは強化された全身の装甲で受け止め、マスター二人には掠り傷すら負わせない。

これで少なくとも、アーチャーからの狙撃には対応できていた。

「ではライダー、任せたぞ。」

無論、その程度で終わる訳が無いのだが。

「■■■■■■■■■■——ッ！！！！」

咆哮と共に轟音が鳴り響き、一行の背後に当たる位置から進行上にあつたあらゆる障害を碎きながら、ライダーが突撃してきた。

騎兵として呼ばれながら、しかし聖杯の泥による汚染によって狂戦士と化したライダーが襲い掛かる。

黒い肌に金色の入れ墨を彫り、骨で出来た戦車に乗った巨漢の真名をダレイオス三世と言う。

本来の理性あるクラスなら、征服王の好敵手と知られた王らしく、威厳ある立ち居振る舞いをする男のだが、今の彼は周囲のあらゆる者が倒すべき征服王に見えており、憎悪と狂気のままに振る舞う様になっていた。

無論、そんな状態では連携など取れる筈はないのだが、偶々近くに來ていたのをアーチャーが敢えて轟音を立てる様に狙撃を行い、更にダレイオスに対しても矢を

射かけて注意を引き、誘導してみせたのだ。

「■■■■！」

その騎兵突撃に、バーサーカーは過たず反応してみせた。

その両肩、四角いウエポンコンテナの上面が展開、気体が抜ける様な音が連続し、何かが白煙を引きながら垂直に発射される。

その何かはある程度上昇すると一様に反転、地表を指し、ダレイオス目掛けて突き進んでいった。

「■■■■■■■■■■!？」

VLSより発射された、地対地ミサイル。

それらは狙い違わず全てがダレイオスへと命中し、その進路を大きく反らせ、道沿いにあった雑居ビルへと盛大に突っ込ませた。

ほぼ同時、狙撃地点と思われる高層ビルの屋上が発火した。

「っち」

舌打ち一つ残し、自身を狙う生き残りのサーヴァントを視界に収めながら、邪魔が入ったアーチャーは即座に撤退する。

元より、焦る意味は無い。

この戦いは時間稼ぎであり、どうあってもこちらが有利だったから。

「■■■■■■■■■■——ッ！！！」

だが、そんなものはダレイオスに意味は無い。

周囲全てが怨敵に見える彼にとつて、誰も彼もが倒すべき敵でしかないのだから。咆哮と共に再度戦車を走らせ、カルデア一行目掛け突撃してくる。

命中すれば、カルデアの魔術師達は間違いなく彼が先程蹂躪してきたビルのように碎け散るか挽肉にされるだろう。

だがしかし、彼がそれをする事は出来ない。

この場には、二体もの心強い護衛がいるのだから。

「バーサーカーはアタック、マッシュはカバー！」

「はい！」

オルガマリーの指示に、咆哮一つ漏らさぬ狂戦士と共に、盾の乙女が駆ける。

敏捷の差でバーサーカーが前に出て、未だ装甲と耐久性を強化したままの状態で、骨の戦車を受け止めた。



「■■■■■■■■■■!!」

この程度で！

そう言わんばかりに両手に斧を持ち、暴風の様に暴れ回るが、その威力は明らかに先程の騎兵突撃より落ちてている。

「バーサーカー！」

誰かのお蔭でアーチャーが撤退した今、目の前のライダーを倒すのに一辺の迷いもない。

主からの声に、狂戦士は十二分に応えて魅せた。

「■■■■■■■■■■:!!」

先程までの防御一辺倒の姿から、元の機械でありながらも有機的なしなやかさを持った姿へと戻る。

否、その右手だけは更に変質していた。

回転式の弾倉に杭を接続した様な、先程のミサイルの様なハイテクな武装ではなく、弾薬による爆発力で杭を打ち付け、その衝撃を目標へと叩き込む近接武装。

その名をパイルバンカーと言った。

「■■■■■■■■■■」

背面の装甲が開き、魔力を放出する事で爆発的な推進力を得ると同時、バーサーカーは踏み込んだ。

肉体とスラスターの完全な同期による神速に近い域での踏み込みに、理性を失ったダレイオスは迎撃を選択した。

丸太の様に太い両腕で繰り出される斧の双撃は、しかし背面だけでなく、肩部コネクタの背面が開き、スラスターへと変形、更なる加速によって懐に潜られる形で回避されてしまった。

となれば、後はその右手の杭打機を防ぐ術は無い。

ゴ!!

まるで大型トラック同士が正面から衝突した様な音と共に、バーサーカーの右腕の杭がダレイオスの胸部へと突き刺さる。

胸筋を易々と貫いた杭はそのまま胸骨を砕き、心臓に突き刺さり、ダレイオスの3mを優に超える巨体を僅かに浮き上がらせた。

これにより肉体の持つ弾性が失われ、この後の衝撃が余さず肉体内部へと伝達さ

れる準備が出来た。

次瞬、十分に杭が食い込んだと同時に、回転弾倉の撃鉄が下ろされた。

ズドンッ！！！！！！

炸薬の燃焼時の圧力を、杭は余す事なくダレイオスの心臓へと叩き込んだ。

結果、心臓にある霊核をその胸部ごと吹き飛ばされ、肉片がその背後へと放射状に盛大に飛び散った。

霊核を砕き、胸部の大半を消し飛ばす一撃に、戦闘続行を持つにも関わらず、ライダー・ダレイオス三世は断末魔を残す事すら出来ず、肉片共々黄金のエーテルとなって消えていった。

「絶対食らいたくないわね…。」

その光景を見ていたオルガマリーの感想に、マシユと立香の二人は顔を青くしながらコクコクと頷く事しか出来なかった。

## スキル・変化 A

本来の状態よりも弱体化しているが、それでもなお実質的には最上級の A ランクを誇る。

父である ■い ■る ■の能力を受け継いだもので、凡そ何にでも変化できる。現在は主に比較的簡単かつ低コストな機械や銃火器類に変化している。

だが、十分な魔力さえあれば、質量保存の法則を無視した大型兵器や乗り物等にも変化できる。

効果 防御力UP (3T)・攻撃力UP (3T)



## FGO×デモベ第3話

うむむ、まともに描写すると際限なく執筆する事に…某氏の様な300話とか心が折れる（確信）

一応、予定では大差ない部分は全スルーして（例…イベント特異点）、主人公の存在による変化とオルガマリーとの交流を主軸に描写していく予定です。

一つの特異点につき5話前後で、一話辺りは最低三千字位かな？

なお、10話以上になったら個別連載枠にしますので、それまで応援よろしくお願ひします。

---

比較的被害の少ない海岸近く、その一角にある武家屋敷。

辛うじて被災を免れたその場所は、元々は名も無き魔術師の工房であったらしく、簡易ながらも魔術的な警報が仕掛けてあった。

とは言え、既に機能を停止していたので、オルガマリーは手早くそれを復活させ、

更に人除けの結界を重ねた上で、漸く腰を下ろした。

「取り敢えず、状況を整理します。」

そう言って茶の間のテーブルに付くと、オルガマリーは端末から冬木市の地図を表示した。

それは元は平常時の冬木市の地図を指していたものだが、今はデータを更新したのか、レイシフトで出現した新都（大橋より）から現在の旧市街地までは地形の變化が記録されていた。

そこには隕石でも降ってきたかの様な巨大クレーターやビームで焼き払ったかの様な長大な破壊痕が記録されており、この都市の現在の異常性を如実に物語っていた。

「現在、私達は特異点となった冬木市にレイシフト。戦力はこの場の四人のみで、カルデアは消火活動と施設復旧及び要救助者への対処で手一杯。」

そして、テーブルの上に七つのペンを置く。

「恐らく、此処を破壊し、住民を殺傷したであろうサーヴァント達の対処をしつつ、この地の特異点を解消しなければなりません。」

サーヴァント。

本来、制御など絶対できない英霊を人間でも維持・運用できる様に矮小化した最上位の使い魔。

それは熟練の魔術師であっても完全に御し切れるものではなく、最上位のサーヴァントに至っては唯一の安全機構である令呪すら易々と突破してのける。

攻撃力に至っては、個体にもよるが単体で主要国家の軍隊を壊滅する事も可能な、人類が現在まで運用可能な兵器の中では最強の存在だ。

「この地における聖杯戦争と言われる魔術儀式によって召喚された七騎のサーヴァント。彼らがこの事態の原因なら、聖杯をどうにかすれば解決します。」

サーヴァントを運用するには、主に三つのものが必要となる。

一つ、マスター。

二つ、術式。

三つ、魔力。

これらの内どれか一つが欠ければ、一部の例外を除いて、サーヴァントは現世に自身を維持できなくなる。

「あの、聖杯って何ですか？」

素人である立香が質問した。

話の腰を折る形だが、彼は素人であり、当然の疑問でもあった。

「聖杯って言うのは、莫大な魔力を秘めた願望器よ。一部例外があるらしいけど、凡そ人間の想像できる事なら、何だって願いを叶えられる。えーと…ロマネが見ていたアニメでは、ドラ○ンボールが近いわね。」

何やらおかしな単語が出てきたが、純粹なマシユと現在はバーサーカーであるリーア&アーリも沈黙を保っているため、ツッコミ役は不在だった。

魔術師として研鑽を積んでいた筈の彼女に日本のサブカルを教える辺り、ロマンの業は深い。

まあ、本人としてはカルデアにいながら出来るお手軽な娯楽のつもりなのだろうが、それにしても酷い。

「じゃあ、聖杯戦争はそれを奪い合うって事ですか？」

「そうよ。何でも有りのバトルロイヤル形式で、最後に残ったマスターとサーヴァントが聖杯を手にするの。」

だが、そうなるとおかしい事がある。

「じゃあ、何であの狙撃手と黒い大男は協力してたんでしょ？」

「そこがおかしいのよ。聖杯戦争で同盟を組む事はあるらしいけど、あの大男に関しては完全に理性なんて無かった。単に利用されたのか、それとも確たる指揮系統が存在するのか。その辺りも探りたい所ね。」

恐らく、その辺りがこの地が特異点化した理由なのだろうと、オルガマリーは予想していた。

元々聡明な彼女は一先ずの拠点を得た事で、それを取り戻していた。

(意外と優秀だね。ヘタレで未熟だけど。)

(ああ、これなら割と行けそうだな。要訓練だが。)

誰にも聞こえない半身同士の会話でも、オルガマリーは良くも悪くも正確に評価されていた。

「で、こちらの戦力だけ…。」

そこで、オルガマリーの顔が暗くなる。

まあ常識的に考えて絶望的であるので仕方ない。

「まともな魔術師は私だけで令呪無しのパワーサーカー。残りは素人とデミ・サーヴァントに成り立てで宝具も使えない……」

「すみません所長。私の未熟のせいで……」

傍から見れば絶望的だった。

未だに六騎はいるであろう他のサーヴァントとの戦闘を思うと、どうしても戦力が足りないのに、増援の気配は一切ない。

いじめか？と問いたくなる状況だった。

(まあ、マシュに関してはそうしななければならなかったろうがな。)

彼女の持つ大楯から、リーア達は正確にその真名を読み取っていた。

円卓の13席にして純潔の騎士、ギャラハッド又はガラハッド。

父である円卓最強と名高いランスロットを超える実力を持った、聖杯獲得の騎士にして、恐らくこの世で最も清らかな騎士だ。

そんな英霊を受け入れれば、普通は人体がパンクする。

デザインベビーであるマシュは何とか彼を収められる器を持っていた。

だが、そのままギャラハッドが主導権を握れば、未熟な彼女ではそのまま魂も人

格も記憶も、何もかも消えていただろう。

だからこそ、こうして意識を最低レベルまで落とし込み、宝具の解放すら修練無しでは出来ない程に弱体化させる必要があったのだ。

もし彼女が爆破工作によって致命傷を負わなければ、ギャラハッドはマシユの中で彼女が死ぬまで眠り続けただろう。

「なので、可能な限り交戦は控え、目標を達成する必要があります。そのためにも、先ずは情報収集を行います。既に使い魔は飛ばしましたので、多少の収穫は……」

「■■■■」。

不意に、表向き沈黙を保っていたバーサーカーが唸り声を上げ、視線を玄関の方へと向けた。

「どうしたの？」

まさか敵襲か？

そう考えた一同が腰を上げた瞬間、ピンポーン、と極普通のチャイムが鳴り響いた。

「[[[[[.....]]]]」

一瞬、無言で顔を見合わせる一同。

「バーサーカー、対応を。」

「……………」

無言で立ち上がり、玄関へと進むバーサーカー。

だが、その背中からは闘争の気配がない。

「マッシュ、一応私と藤丸の護衛を。」

「はい！」

「藤丸はマッシュの後ろにいなさい。絶対に前に出ず、マッシュから離れないように。」

「わ、分かりました。」

そして、玄関では

「ちーす。ちょっと話したい事があるんだが、時間いーか？」

何かチャラそうな兄ちゃんが現れた。

……………

チャラそうな兄ちゃん、もといキャストターのクー・フリーンからの情報により、凡その事情は把握できた。

曰く、この聖杯戦争は狂ってしまった。

最優の騎士にして、清廉であったセイバーが突如属性反転し、未だ戦争が終わっていないのに聖杯を獲得した。

更には他のサーヴァントに襲い掛かり、仕留めた傍から聖杯の力によって自身の手駒としていった。

残った正常なサーヴァントは己のみであり、事態の解決を目指すなら協力を惜しまない。

それがキャストターの言い分だった。

「分かりました。その話、お受けします。」

「話が早くて助かるぜ。こっちも一人じゃジリ貧だよ。」

事実、キャストターも結構消耗しており、直ぐに危ういと言う程ではないが、宝具の使用は極力控えた方が良いと言うのが実情だった。

「んで、そっちの戦力はどうなってるんだ？」

「それなんだけど……。」

オルガマリーは素直に大英雄に真実を話した。

……

キャスターとの合流から一時間程。

武家屋敷での休憩を挟んだ後、一同は聖杯戦争の中枢である大聖杯がある、事件の首謀者と思われるセイバーの根城へと向かっていた……

「さて、とっとと片さねーとドンドン来るぞー。」

「は、はい！」

のだが、今は大量のスケルトンを相手にマッシュが戦闘訓練をしていた。

「宝具ってのは本能だ。英霊なら誰だって使える。後付けだから自覚し辛いだけだな。」

マッシュはデミ・サーヴァントとして覚醒したものの、未だに英霊の真名も、宝具の解放すら出来ない。

それはいけない。

恐らく防御宝具であろう盾が無ければ、この先に待つセイバーに蹂躪されるだけだ。

「つー訳で訓練だ。何、死なない程度にしてやるから安心しな。」

「ちっとも安心できない！」

立香の叫びはもっともだった。

流石はケルト、戦に関しては修羅勢である。

「なんで私にルーン刻むのよ!？」

「いや、坊主だと自衛も出来ねえだろ？」

勝手に背中にルーンで厄寄せの魔術を刻まれたオルガマリーが憤慨している。

まあ立香にやって死亡しようものなら人理崩壊不可避なので仕方ない。

「バーサーカー！頼むから守ってよ!？」

「……………」

「無視しないでよオオオオオオオオ!!」

絶叫するオルガマリーの横、あらぬ方向を見て直立する鋼の狂戦士は黙して語ら

ない。

まあ狂戦士だしね、会話能力は無いからね、仕方ないよネ。

とは言え、仕事をしていない訳ではない。

(どうだ?)

(通信回線は軍用も含めて全滅。生存反応は周囲数十km内には微生物を除いて無し。)

頭部のブレードアンテナが内部構造を展開、この時代、この国からアクセスできるだろうあらゆる通信を感知しようとしているのだが……全く感知出来ない。

辛うじて都市としての形骸が残っているこの冬木市でも、電波すら殆ど感知出来ない。

それはつまり、この世界の人類はこの場にいる三人とカルデアにいるであろう面々を残して、絶滅したと言う事に他ならない。

(こりゃまた根が深そうだな。)

(後、雲の上のアレだけどさ……。)

二人の目、最高位の千里眼に準ずる、極近い時間帯なら未来も過去も見える二人

の目には、地表を睥睨する光の帯がしっかりと見えていた。

(どうも焼いたのはアレじゃないみたいだ。)

(何?)

(あれ、焼けた地表の熱量を吸収してるぜ。此処はそこまで吸収されてないから、寒くはないけど。)

つまり、あの光帯は手段であって、目的ではない。

確保した熱量を持って、何かをするのが黒幕の目的なのだ。

(：現状では情報が足りなすぎるな。)

(だねえ。)

となれば、先ずは情報収集だろう。

幸い、この三人の所属するカルデアなる組織は元々こうした事態のための組織らしく、態々異なる時間軸からこの時代の冬木市にやってきたらしい。

事実、先程の通信は時間を遡って送られてきていたため、本当の事なのだろう。

(恐らく、彼女達が事態の解決を図る英雄だな。)

(となりゃー、アイツらについてくのが近道か。)

この世界が所謂型月系列である事は以前から分かっていたので、その点に疑問は無い。

強いて言えば、あの菌糸類が仕事したのかー、程度の感慨でしかない。

(黒幕どつくのはまだまだ先って事か。)

(とは言え、現地住民で対処できるなら、その方が良い。)

型月の世界は厄ネタの宝庫であり、世界が滅びるのも極普通に在り得る。

しかも、それを観測する上位存在が何体も確認されているため、下手な行動も取れないのだ。

最悪の場合、鋼の大地へと至るまでもなく、アリストテレス全員との戦争になる可能性すらあった。

(ま、気長に行こうや。)

(だな。)

「お願いだから無視しないでよオオオオオオオオオオ!!」

二度目の絶叫から目を反らしながら、この世界最大の異分子は静かに潜伏を決めた。

漸くCCCコラボ全ミッション終了。

なお、ガチャ結果は二万課金して何とかキアラ以外のご新規を全員ゲットオミヤ？彼は以前の新宿で当てましたので。



## FGO短編 ファンババが逝く 遊星からの使者編

エクステリア遊んでたらネタが降りてきたので投下。

いつも通りネタバレ注意

---

2017年 カルデアにて

「ねえ、ファンババ。」

「はい？」

白い貫頭衣に金の長髪と金の瞳、エンキドゥに似た中性的な容姿を持った太古の怪物に、立香は問うた。

本来なら全長50mもの獅子頭の巨人か、巨大な獅子の姿である原初の獣は、今はサーヴァントとしてカルデアの食堂で緑茶を啜っていた。

「ファンババは怒った事ってあるの？」

基本的に温厚で、自分から誰かに突っかかる事も無く、突っかかれても普段は

距離を取って近づかない位には争いを嫌うのがフンババだ。

まあ、それは無駄な消耗を嫌う獣としての性がそうさせているのだが。

神話では森の番人をしていたため、逃げる訳にもいかなかったのだが、もし番人でもなんでもなかった場合、フンババは今もなおこの星の何処かで生きていたかもしれない。

「ギルガメツシュ王との事は例外として……まあありましたよ。大分昔の事ですが。」  
そんな原初の獣にも例外というものがあつた。

「あれはそう、この時代から1万4千年前の事でしたね。当時の私はガーデニングに凝っていて、それを邪魔されたんですよ。」

……………

1万4千年前、地球へと超文明の被造物が飛来した。

一見して彗星に見えるそれは、兵器だった。

その名を捕食遊星ヴェルバーと言った。

それは神の鞭とも言うべき存在だった。

同格であるムーンセル・オートマトンが神の目であるなら、あらゆる者を執拗に破壊するその存在は、正しく神の鞭だった。

当時の地球にあったあらゆる文明は焼き払われ、あらゆる生物は汚染され、肥大化し、自壊するまで駆け抜けて、更に汚染を広げた果てに死んでいった。

執拗に、執念深く、念入りに、地球上のあらゆるものが焼き払われた。

だが、地上に降り立ったヴェルバーの端末、32mもの女性型の巨人にして、他天体からの増援すら駆逐したセファールが、ある地域を焼いた時、唐突にその身体をくの字に曲げながら吹き飛ばされた。

彼女が焼いた地域、そこはファンババが何年もかけて環境を整えた、己の庭だった。川を引き、湖を掘り、土を山盛りにし、好みの植物を丁寧植え、動物達も暮らせる様にと頑張って作った、ファンババの趣味の産物だった。

ちよっとお昼寝(数か月単位)していたと思ったら、唐突に余所からやってきた妙なのが自分の趣味で作った成果物を焼いたのだ。

許せる訳が無い。

獅子頭の巨人形態であったフンババは状況を把握した直後、白いヴェールの様なものとウサ耳の様な突起を頭から伸ばしている馬鹿に全力で蹴りを入れた。

「■■■■……!？」

この星に、自分を止められる存在はいない。

それがセファールの認識だった。

しかしどうだろう。

今、巨神はこの降り立った星の土を舐めさせられていた。

「■■■■■■■■■■ッ!!」

咆哮し、激情のまま起き上がり、その腕から魔力による刀身を形成し、自身へと無防備に近づいてきた獅子頭の巨人へと振るう。

「■■■■!？」

「……………」

だが、通じない。

巨体でありながら素早い挙動であったが故に、腕の一振りですれこそ隕石の衝突クラスの威力である一撃は、しかし、七つの輝きを持つフンババには通じない。

元より、原初の大气すらまともに存在しなかった地球では宇宙からの隕石などそう珍しくもない。

その程度の威力では、ファンババは小揺るぎもしない。

「……………」

「■っ！ ■!? ■■!!」

ファンババは何も話さない。

ただ自身の怒りのまま、目の前の馬鹿を殺そうと拳を振るい、防御しようとする巨神の両腕を、その防御の上から砕いていく。

滅多にないファンババの怒り、それを前にして破壊する事しか知らなかった巨神は一方的に殴られた。

術理も何もあったものではない。

ただ圧倒的な性能差で、巨神のアルテラは滅多打ちにされた。

「■、■ ■…。」

この星の原種生命全ての天敵であった筈の遊星よりの使者は、今やもうその巨体を力無く地に伏せていた。

魔力吸収による自己強化も、純粋な筋力による打撃を相手にしては意味を成さない。

この星の、否、太陽系全ての生命にとっての天敵である筈のセファールは、此処に敗北した。

知性らしい知性を戦闘に用いなかった、原初の獣を相手に、一方的に蹂躪されたのだ。

「……………」

フンババはセファールの頭部をむんずと掴み上げると、そのまま振り回し始めた。ブオンブオンと回転を始めたセファールは、ただでさえズタボロだった全身の構造体が更にバラバラになっていくが、そんな事はフンババの関知するところではない。

「……………！」

ポツと、大気を引き裂きながら、32mもの巨人が彼方へと投げられた。

50mもの巨体を持つフンババにとっては、多少大きい目のゴミ程度に感じられるセファールは、その勢いのまま一切減速せず、山を越え、雲を突き抜け、成層圏、

中間圏、熱圏を次々と突破し……遂には静止衛星軌道上で地球を観測していた遊星へと突き刺さった。

その衝撃たるや、神の鞭たるヴェルバーにとって完全に未知のものだった。

或は、星を滅ぼす程の大質量の隕石と正面衝突すれば、同程度の威力を観測できるかもしれない。

問題なのは、遊星そのものが崩壊しかねない程の衝撃を受けたと言う事だった。この損傷により、遊星は一年間程活動を停止、月方面への侵攻も中止してまで、自身の修復へと注力し始めた。

これによりムーンセル・オートマトンは自身の中枢を虚数空間へと移す事で、記憶領域への侵攻の完全阻止に成功した。

……………

「ああ、平和だなあ……。」

のんびりと、フンババは燃やされた庭を修復し始めた。

自身の能力で植物の生育に最適な環境へと燃えてしまった土壌を変化させ、更に辛うじて燃え残っていた植物から種を採取し、それを撒いていく。

変質してしまった動物達は泣く泣く殺処分したものの、無事だった者（人間・人外含む）は食料・住居を与えた上で、丁寧に世話をした。

途中から知性を持った者達が積極的に協力してくれた事もあり、修復は思いの他順調に進んだ。

そしてあの大馬鹿者の一件から丁度一年、フンババの感覚に何か引掛かった。見上げれば、宇宙から隕石が降ってきた。

直径だけでも50mを超えるソレにフンババは驚くと共に、既知感を感じ取った。別に隕石だけなら珍しくもない。

大小無数の隕石など、原初の地球ではよく降ってきたものだ。問題なのは、あの一年前の馬鹿と同じ匂いがしていた事だった。

「おし、殺そう。」

フンババは即効で決意した。

基本的に誰も憎まず、恨まない奴だが、縄張りを荒らす者は殺すのが獣としての

流儀だ。

.....

「■■■■.....」

隕石どころか既に小惑星サイズの巨石の中に身を隠し、攻撃の瞬間を待っていたヴェルバー02ことセファールは思った。

即ち、もうやだ帰りたい、と。

何せ今から自分が特攻する相手は、一年前に自分を散々に打ち破り、遊星本体へとダメージを与えた化け物なのだ。

神の鞭たる自分が化け物呼ばわりとはアホな話だが、そうとしか言いようがない。だが、本体であるヴェルバー01には感情は無い。

なもんで、定められた破壊を実行するしか能がなく、破壊し損ねたこの星の生命を今度こそ確実に破壊しようとしていた。

止せば良いのに、この星ごと。

大質量の小惑星と共に端末たるセファールを射出し、衝突の瞬間に最大火力を以て、あの獅子頭の巨人を撃破する。

完全に捨て駒だが、これ以上の攻撃手段はそれこそ遊星本体を地表に激突させる位しかない。

そして、一年かけて修復した遊星は強化したセファールに命じ、地球破壊作戦を実行したのだ。

「■■■■■■■■■■……。」

だが、これでも駄目だったらしい。

地表の巨人から、観測した事が無い程のエネルギーを感知しながら、セファールの心中を諦観が満たしていった。

……………

「『原始惑星・七大罪』！」

必殺技は叫ぶもの。

そんなお約束と共に、ファンババは自身の最強の火力を放った。

それも普段使う様な全方位に広げる浸食型固有結界の様なものではなく、一方向に光線の様に照射する。

それはこの星の神々ですら扱えぬ程の権能を超えた力であり、この星の系統樹に属さぬ異端の力であり、この星の力を一点へと集めたものだった。

この星が最も力強く、ただ一つの例外を除いて一切の生命の存在を許さなかった頃の力を、更に収束させたものを前にしては、嘗て竜達を絶滅させたものと同程度の小惑星として例外ではない。

七色の地獄の具現たる光線は狙い過たずに大気との摩擦で赤熱化していた小惑星に命中、その質量の過半を消滅させた。

残りは爆散し、各地へと降り注ぐだろうが…小惑星の衝突よりはマシだろう。

「…まあこれ位で許してあげましょう。」

大き目の塊がモンゴル方面へと落着するのを確認しつつ、ファンババは庭仕事へと戻った。

…決して（ちょっとやり過ぎたかな？まあ気は晴れたしこの辺で許してあげよ

う）とは思っていない。

.....

「とまあ、こんな事がありましたね。」

ズズズ、とすっかり温くなってしまう緑茶を啜りながら、フンババは朗らかにそう言った。

「そ、そう…。」

対して、立香はドン引きしていた。

どう考えても聞かなかった方が良いトンデモ系の話だった。

正直、全貌を知っているであろう千里眼持ち達に話を聞きたいが、これ以上聞いたらもつとやばいネタに首突っ込む事になるぞ！と人理修復で鍛えられた直感が叫んでいたの、この話はここまでにしたかった。

だって、話の途中で食堂に入ってきた月の聖杯戦争に参加したってメンバーは顔色真っ青、顔面引き攣り状態でこっち見てるんだもの！

アルテラに至っては無表情はそのままに全身がガタガタ音を立てる位に震えてるし！

「と、所で、アルテラに何か思う所はある？」

ビクン！と大きさにアルテラが震えるが、これはマスターとしては聞いておかなければならない。

場合によっては編成や今後のカルデアの運営に関わる事だった。

インド兄弟や頼光と鬼娘二人の様に、顔を合わせれば直ぐに戦争する様では、それこそカルデアが吹き飛びかねないからだ。

「ああ、それなら大丈夫ですよ。あの時暴れたので、鬱憤は大分晴れましたから。」  
のほほんとする様は、普段の日だまりで眠る猫の様に穏やかなファンババだった。  
「そっか…。」

「でも…」

安堵したと同時に、不意にファンババの笑みの形となっていた目がキラリと光り、口元が耳まで裂け、口内の鮫の様な鋭くビッシリと生え揃った牙が剥き出しになる。

「次は、ありませんよ？」

笑顔とは本来攻撃的であり、獣が牙を剥く行為が原点である。

「……………！」

フンババの本気の威嚇と警告に、立香はただ黙って頭をガクガクと頷かせるしか出来なかった。

様子を見ていた英霊達は一様に顔を引き攣らせるか、警戒を露わにしているが、正直英雄王でも一対一では圧倒される様な怪物相手では、如何にカルデアの誇る英霊達でも分が悪かった。

「まあ、もう会う事も無いでしょうけど。」

ズズズと、最後に残った緑茶を啜りながら、フンババはそう締めた。

(フラグ乙。)

だが、フンババのセリフはどう考えても立香にはフラグにしか聞こえなかった。

なお、過去のトラウマが刺激されたのか、アルテラは気絶していた。

……………

音もなく、暗黒の宇宙を一つの小惑星が進んでいく。

それは既に地球上からの光学観測でも確認されており、計算上1万4千年前にも地球に飛来したと言われる大型の彗星だった。

だが、地球上の人類は未だ知らない。

その中に潜む、嘗てこの星の、太陽系の全生命体にとって脅威となった存在を。その存在が嘗ての敗北を忘れておらず、その対策を1万4千年もかけて行っていた事を。

今はまだ、誰も知らない。

セファール「よし、何とか生き延びた…」

聖剣使い「 $\square$ の・、）（ヤァ」

セファール「」

聖剣使い「エクスカリバーー！」

以後、何とか逃げ延びたセファールは仮死状態となって癒えるまで休眠しましたが、ある程度回復すると使い魔（分体）を派遣して情報収集とかしてました。

## GS 美神短編 政樹が逝く

鬼道政樹の転生SS

よく見ると、結構転生先として有望そうなキャラがたくさんいて、こうした作品を書くのが楽しいですね、GSって。

---

気づいたら、GS世界に転生していた。

何を言っているのかry

と言うポルナレフネタは自重して、さてどうすべきだろうか？

テレビからGSや霊現象等の単語、カレンダーの日付から、今現在が原作開始前のGS世界だと分かってしまった。

或はパラレルワールドかもしれないが、それはそれとして色々考える必要がある。

この世界、結構な厄ネタがゴロゴロ転がっており、主人公達GSがその多くを解決する訳だが、例え一般市民でもそれなりの確率で巻き込まれるのだ。

魔神アシュタロス事件を筆頭に、妖怪死津喪比女による日本全域への花粉攻撃やパイパーの様な賞金首がかかった妖怪や悪魔等、一般市民が大勢巻き込まれる大事件も多い。

となれば、自衛手段位は持っていた方が良いだろう。

なら、霊能を鍛えた方が良いと思ったのだが：

「よしよし、お前の名前は政樹にしよう。鬼道家の跡継ぎとして、立派に育つんだぞ。」

ら○ま二分の一の天道早雲の様な見た目のおっさんがまだ赤ん坊のオレを抱き上げて、そう告げた。

鬼道政樹。

それは原作において屑な父親と天然過ぎる幼馴染を持ったが故に人生を思いつきり歪ませられた青年の名だった。

.....

物心ついた頃から訓練・修行・鍛錬の毎日だった。

年頃の子供らしい遊びなんて出来なかった。

まあこの時代のプラモもゲームも、平成20年代のそれに慣れていた自分にも物足りないから別に良かったのだが。

それに、霊能と言う物への探求が予想以上に面白かったと言うのもある。

自分の家の霊能、つまりこの肉体に宿る霊的才能が式神の使役に特化しているだけあり、そっち方面の技術の一つである折り紙の鶴を折って、それを操る技なんて感動すら覚えた。

父親の技は子供の自分とは異なり、確かに研鑽を感じさせるもので、その点に関しては素直に尊敬出来た。

その点だけは、だが…。

何せこの糞親父、女遊びやギャンブル、無軌道な投資や経営をやっており、霊能以外の才能は無いと言って良い。

自覚して堅実な経営と節制に努めれば良いものの、半端に霊能だけは優秀なので、周囲の人間の言う事も聞かずに先祖代々が蓄えてきた財産を急速に食い潰して

いった。

しかも、周囲の人間も諫言していた者は遠ざけられた事から見切りをつけ、優秀な人材は次々と去って行き、残ったのはおべっかを使うだけのイエスマンか密かに財産を懐に入れる様な者達だけで、最早どうにもならない状態だった。

恐らく、自分が学校に入る頃には無一文かそれに近い状態になっている事だろう。  
(うん、見切りつけるか。)

幸いと言うべきか、母親の方も不倫しまくりのビッチ(まあ夫がこれじゃ仕方ない面もあるだろうが)なので、心置きなく見捨てる事が出来る。

幸いにも、既に自分はこの家の最大の財産を持っており、一番大事な準備は出来ていた。

そう、先祖代々から受け継がれた式神、夜叉丸である。

通常は元服と共に式神の譲渡を行うのだが、何を思ったのか、糞親父は六道家の跡取り娘である冥子に対抗して、同じ時期に式神の譲渡を行ったのだ。

現当主である六道冥那に対して糞親父が勝手に確執を持っているが故なのだが……  
まあこの場合は助かったので良しとしよう。

さて、この夜叉丸だが、男性の平安装束を着た人型の外見をしており、武器を使うだけの知能だけでなく、術者からの指示さえあれば、簡単なものだが術を使う事も出来る。

明らかにただの式神ではなかった。

実際、自分からの霊力の供給だけでなく、食事を分けたら嬉しそうに食べていた。特に見た目華やかな甘味の類を。

だが、お酒の類は甘酒や果実酒を除いて、余り強いのは好きじゃないみたいだった。

フルーツタルトをあげた時など、感動で震えてすらいた。

式神として契約しているためか、感情の機微は伝わってくるのだが、夜叉丸から感じる霊力は明らかに式神としてはオーバースペックだった。

恐らくだが、伝承にある役小角の前鬼後鬼夫婦の様に、本来なら名のある鬼や妖怪だったのだろう。

それを調伏して式神としたのが、恐らく平安時代からそれより少し後位の鬼道家の先祖なのだろう。

実際、家系図を見てみたら、平安時代後期辺りから記録が始まっていたので、恐らくだが元々は陰陽寮辺りで術を学んだ術者だったのだろう。

こういった事例は古い家には割とありそうで、是非とも紐解いてみたいものだ。閑話休題／それはさて置き

これにより、夜叉丸の正体が大体絞れた。

丁度その辺りの時代に、夜叉丸かそれに近い名を持つ人物は3人いる。

一人は坂上田村麻呂の家臣となった、犬神丸の手下である鬼人の夜叉丸。

もう一人はあの平将門公の娘にして高名な呪術師でもある滝夜叉姫に仕えた夜叉丸。

そして、少し違うのだが、二番目の夜叉丸の主だった滝夜叉姫だ。

だが、そこで先に上げた食べ物の好みが出てくる。

鬼と言う種族は、昔から強い酒を好む、力の強い種族だが、それに反する様に自分の式神は寧ろ細やかな霊力操作や甘味好きという事で、もうこれは間違いないだろうと思って声をかけてみたのだ。

「ねえ夜叉丸：ううん、五月姫って呼んだ方が良いかな？」

「!!!!」

誰もいない森の中、事前に簡単な式を打って人払いをしていた場所で、自分は遂に我慢できずに夜叉丸の本当の名（恐らくだが）を呼んでみた。

それに対する反応は劇的だった。

ブワツと、風と共に押し込められていた霊力が式神としての殻を破り、結界内を急速に満たし、遂には突き破っていく。

余りの密度と勢いに腕で顔を庇う。

明らかに尋常ではなかった。

その量たるや、名のある神社に行っても現代では早々感じる事の出来ない程のものであった。

霊力が納まって顔を上げると、そこには美しい女性がいた。

纏っている衣服や小さな双角こそ式神であった頃のままだが、その顔は人間同様の目鼻がある美人であり、本人すらその事に驚愕している様だった。

「は、ははは…」

ペタペタと、顔を触り、手足を確認すると、不意に滝夜叉姫は笑い出した。

「あははははははははははははははははははははははははははははは!!」

うーん、早まったかもしれない。

嬉しさと開放感に大爆笑する滝夜叉姫だが、そこには溜まり溜まった鬱憤が感じられた。

感じる霊力もとてもではないが糞親父や自分でもうにか出来る範囲には無かった。

シャーネー逃げるか、と思ったらグリーンと滝夜叉姫がこちらを向き、ギラリと目を輝かせた。

「礼を言うぞ政樹よ！よくも我が名を取り戻してくれた！これで妾は自由だ！」  
もうすんごい嬉しい！

そんな感情を全身から放つ滝夜叉姫は一瞬でこちらに接近すると、あらん限りの力でこちらを抱き締めてきた。

式神の頃とは違った豊かな感触に顔が自然と赤くなるが、それよりも確認するべき事が沢山あった。

「して政樹よ。どうして妾の名が分かったのだ？普通、鬼の夜叉丸の方だと考え

るものだが。」

「いや、名を奪って、本来よりも格の低い名前を付けて弱体化させるのって、神話や伝承では割と普通でしょ？」

実際、神話や伝承で名前を変えて古い神格を怪物や悪神として取り込む事はよくある事だ。

ゾロアスター教や基督教、ギリシャ神話等がそれに当たるし、この世界の魔族とはそう言った存在が多い。

「それとて可能性の話であろう？」

「後、食べ物のがみが女の子だった。」

「くは！まさかそんな事で気づかれるとはの！」

呵々と優雅に笑う様は、確かに彼女が平家と言う皇族の血を継ぐ姫君である事や物語っていた。

「それで滝夜叉姫様は…」

「良い良い。滝夜叉と呼んで構わぬぞ。何せ其方は恩人だしな。」

「え、でも…。」

「ん？妾の決定に何か異議でもあるのか？」

「イエナンデモアリマセン。」

凄むと実力差もあって凄い怖いっすね。

「それで、滝夜叉様は……」

「んん？」

「……滝夜叉はどうして式神なんてやってたの？」

「それはのう……」

曰く、本来の滝夜叉姫もとい五月姫は既に死亡しているのだとか。

だが、生前も美しい女人でありながら尼として過ごし、往生したのだが、東北の虐げられていた人々が持つ父への忠誠や朝廷への怨念はその娘である五月姫が尼となっても向けられた。

何時しかそうした念は形を持ち、滝夜叉姫となって鬼達と虐げられた農民、更に朝廷に従わないまつろわぬ民をも率いて、朝廷とその民に災いを齎したのだとか。

つまり、この滝夜叉姫はGS原作において道真公が神霊となる時に分離した怨念と同質の存在なのだ。

で、当時の陰陽寮と日本仏教界の僧らが何とか封じてみせた。

多くの鬼達は坂上田村麻呂と妻である鈴鹿御前に討たれながら、彼女だけは封じられた。

しかしその後、立て続けの外敵によって脅かされた朝廷は弱体化、陰陽寮も当時の政治的混乱によって滝夜叉姫が封じられた呪具も行方不明となってしまうた。

それは当時陰陽寮に所属していた鬼道家の祖先の仕業で、その男は陰陽術を駆使し、滝夜叉姫の名を奪い、嚴重に弱体化した後己の式神とした。

それ以後、滝夜叉姫はずっと鬼道家の式神として仕えてきた。

しかし、その封印も時と共に徐々に綻んでいった。

そして、平安から1000年の時を経た平成の世に成って、一番大事で強固な名前による弱体化と連動した式神としての契約だけが残った。

蔵に残ってた資料には恐らくだがもう残ってはいまい（口伝レベルではあるかも知るだ）。

だが、悪い事だけではなかった。

確かに隷属させられた事には怒りを抱いたが、同時に彼女は長い歴史を見つめ続

けてきた。

それは朝廷から武士へ、武士から幕府へ、幕府から政府へと続くこの日本の呪術的側面からの貴重な光景であり、何より思念系の怨霊と言う厄介な存在であった彼女が達観を抱くには十分な経験だった。

達観、即ち盛者必衰の理だった。

あんなに権勢を誇った朝廷も、平家も源家も、大名や幕府、そして政府すら時の流れの中に滅んでいった。

今更当時の生き残りが一人もいないこの時代に叛旗を翻した所で、誰も自分にはついてこないだろう。

それが霊能の家と共に生きてきた滝夜叉姫の結論だった。

「じゃあ、今は何がしたいの？」

「そうさな：お主と共に甘味巡りなどどうだ？」

それは実に平和な願いだった。

「なら、鬼道の家を出よう。あそこにいたって、貧乏暮らしになるのが目に見えるし。」

「だの。明らかに没落まっしぐらじゃよ、あの男は。」

現状でも既に使用人への給与未払いが始めており、明らかに没落寸前だ。

あれ程傍若無人で愚かしいのは珍しいからのう、とは糞親父を子供の頃から見ていた滝夜叉姫の言。

鬼道家の始まりから存在した彼女からして、あの糞親父は本当に酷いらしい。

「じゃあ、将来的には霊能生かしてGSをやろう。それならお金も沢山稼げるし、滝夜叉の好きなケーキもたくさん食べられるよ。」

「それは良いな。」

自分も酒よか甘いものが好きなので、滝夜叉の提案は嬉しい。

しかし、その前にするべき事がある。

「一応、あの糞親父との縁を綺麗に切っておかないと。その上で何処か成人するまで保護してくれる人を見つけるべきだね。」

「ふむふむ…妾と共に売り込めば、そこそ良い家に潜り込めるかの？」

取り敢えず、完全に没落し切る前に抜け出す事が肝要だった。

そして、保護してくれる家に関してだが、最適な家が既に存在していた。

.....

半年後、自分は糞親父と共に六道家を訪れていた。

この半年、滝夜叉に霊能を鍛えてもらった。

家での修行と共に行うそれはとても厳しかったが、現代では失伝してしまった多くの知識を当時の一流の人物から直接教わるのだ。

今の自分の知識と技術は霊能分野に限れば凄まじい価値を持っていると断言できる。

とは言えまだまだ未熟なので、日々精進するのみだが。

で、ガサガサと六道家の洋風の屋敷の庭を散策する。

糞親父は館で六道当主との話し合いをしているが、付けていた折り鶴式神による盗聴ではマジで心決る形で自身の失敗を指摘されまくっていた。

うん…言葉の暴力って怖い…。

そんなだから恨まれるんだよ冥那さん…。

(政樹、いたぞ。)

(分かった。)

漸く見つけた。

庭にいる自分と同じ位の女の子、六道家の一人娘にして跡取りの六道冥子だ。

その性格は天然故に人の最も痛い所を意識せずに突き付けて抉ると言う、友達全くない子の典型みたいな子だ。

「あら〜？ 貴方はだれ〜？」

「あ、僕は鬼道政樹。父さんと一緒に来たんだ。」

「あ〜お母様の昔のお友達の子ね〜？」

「じゃあ君が冥子ちゃんか。」

本当にのんびりした子だ。

此処まで頭緩くて大丈夫か？と、ちょっと本気で六道家が心配になってきた。

将来GSになっても物件ごと更地にしたり破壊するだろうから、収支がとんでもない事になってそうだ。

「じゃ〜マー君って呼ぶわね〜。」

「良いよ良いよ。渾名の方が気安いしね。」

「ね、マー君のお父様って、昔お母様にフラれて、この前お父様の会社に事業で負けて失敗して、今日はプライド捨てて借金しに来たって本当……？」

「全部本当だね、当然の事ながら。」

初対面でこんな事言われたら、そりゃ（10年以上恨んで）そう（式神奪おうとする）よ。

原作の鬼道政樹君、君は何も悪くない……。

悪いのは何時までも引き摺る君の親父だよ……。

「冥子ちゃん、初めて会う人に嫌な話題を振っちゃ駄目だよ。自分の事を馬鹿にされてると思うし、その人に嫌われちゃうからね。」

「そうなの……。マー君も私の事が嫌いになった……？」

「いや、僕は怒らないけどさ。次からは気を付けようね。」

「は……い。」

天然の相手をする時は根気強く付き合い怒鳴らない。

必ず理由を言って、自分の気持ちを正直に伝え、ゆっくりと時間をかけて矯正す

る。

決して逸ってはいけないのだ。

これは人の悩み相談なんかを請け負う尼僧としての知識もある滝夜叉姫からのアドバイスだった。

「マー君〜どうせだから遊びましょ〜。」

「いいよ。何する？」

「ん〜じゃ〜皆で鬼ごっこしましょ〜。」

「皆でかあ…。」

どうやら初手から危険度特大の御遊びになってしまったらしい。

冥子ちゃんや、君はもう少し力加減とかを覚えてほしいよ…。

「皆〜一緒に遊びましょ〜。」

途端、冥子の影から12体もの完全に別種の式神が出現した。

同種の式神を複数使役するのは探せばある程度の技能だが、全く別種の高位の式神を12体も使役するとなると天性の霊的な素養、キャパシティーが必要となってくる。

いや、これはもしかしたら12神将と言う形で一つ概念としてしているのか？

それで術者への負担を減らしている？

まあパツと見で式神の制御そのものが術者のセンスや意思に依存するらしく、制御が不安定な様だが。

問題なのは、そんな強力な式神12体が冥子と言う術者本人のテンションに引き摺られて半ば暴走状態な事だ。

「夜叉丸！」

(話には聞いておったが、滅茶苦茶過ぎるわ！)

名前を呼ぶ前から夜叉丸こと滝夜叉が飛び出し、自分を抱えて逃げ回る。

真名を知って解放してからこっち、彼女はとても自分に協力的だが、正体がばれると危険なので、こうして人の目がある時は以前の式神としての名前で呼んでいる。十二神将に集られたらそれこそ重傷では済まないもので、筋力と耐久、泳ぎは兎も角としても素の敏捷性は高い滝夜叉に抱えられて庭中を逃げ回る。

「すごく〜い！ 貴方も式神使いなのね〜い！」

正確には妖怪？ 怨霊？ との直接契約者なのだが、それは言える訳が無いので黙っ

て逃げる。

すると、テンションが更に上がったのか、十二神将達の攻勢が激しくなった。

丑のバサラの吸い込みでこちらの動きを阻害し、酉のシンダラがこちらの動きを監視し、寅のメキラが短距離転移で、卯のアンチラが小柄故の素早さで牽制し、残りが数任せで周囲の物体を破壊しながら追いかけてくる。

正直に言って質が悪すぎる。

(知っててやっているのなら、邪悪ってレベルではないのう。)

(全部天然だとしても質悪すぎ。)

そんな質の悪さが六道家の発展に繋がっているのかもしれない…。

途中、使用人の人達の悲鳴が聞こえたので、この騒ぎも直に収まるとは思うが、それまではこうして逃げ続けるつもりだ。

(政樹、このままでは追いつかれるぞ?)

(デコイを打つ。牽制して。)

(よし来た!)

同時、夜叉丸の左腕から雷の術が放たれ、冥子達の目の前の地面に着弾、派手に

火花を撒き散らす。

これに冥子に乗せていた午のインドラが踏鞴を踏んで停止してしまい、隙を晒した。

「急急如律令！式神よ、我が似姿を取れ！」

腰のポーチから自作のお札を取り出し、術を発動させ、札を投げる。

意外と難しいお札投げを成功させた直後、それぞれの札が自分達二人の姿となつて冥子達がいる方向を除いた全方向へと逃げ出していく。

一応人氣が無い方向を選んでいるが、自分が三日三晩寝たきりの重傷を負うよりはマシなので、六道家の人は是非とも我慢してほしい。

恨むなら、ちゃんと教育されていない娘さんを恨んで頂きたい。

「よし、三十六計！」

（逃げるに如かず！）

こうして、何とか僕達は冥子とその愉快な式神軍団から逃げ延びたのだった。

背後で六道の屋敷が盛大に吹っ飛んでいたのを見ない振りをしながら…。

.....

さて、その後の事を話そう。

鬼道家への支援の話だが：なんと六道が融資してくれる事になった。

とは言え、経営に関しては六道からの人材を相当数受け入れ、財政健全化していく形なので、殆ど先進国によるODA漬けと変わるまい。

将来的には経済面だけでなく、家としても吸収されるのだろう。

家は残らないが、名前だけは残ると思われる。

まあ借金塗れの生活から脱却できるんだから、是非もないよネ！

(そう上手い話でもないと思うがの：。)

げんなりとした滝夜叉の言葉に、内心で頷く。

自分、なんと六道の家に預けられる事になりました。

冥子ちゃんのお友達枠として。

ええ：と思うが、他の分家の子や同年代の子を持つ上流階級のご家庭には既に冥子ちゃんの暴走ぶりは有名らしく、友達らしい友達はいないのだとか。

まあ誰だって命の危機と日常を過ごしたくはあるまい。

しかし、そこに命の危機を独力で切り抜けた、冥子と同じ式神使いの少年が現れた。

家の方も没落してはいるが家格自体は大分高いものがあるため、冥子の友人としては申し分ない。

序でに没落した家の方も吸収する形だが支援してしまえば、少年が逃げ出す事も無いだろう…と言うのはちと穿ち過ぎかもしれないが、まあ六道から鬼道への取引は確実にあったと思われる。

(当初の予定とは違うが…まあ衣食住に困らぬのなら何でも良い。)

(だね。僕も滝夜叉とスイーツ巡り出来れば取り敢えず問題ないし。)

例え六道の子飼であったとしても、ちゃんと給料が払われる限りは従うつもりだ。

まあ問題と言えば…

「マ〜〜く〜〜ん！遊びましょ〜〜！」

「はいはい。冥子ちゃんは何したいの？」

「え〜と、お飯事〜〜！私が姑で〜マー君がお嫁さんで〜〜。」

(小娘：政樹は私のだぞ!!)

(落ち着いてよ。十歳児に何をむきになってるのさ。)

襲来してくる冥子と、それにイラつく滝夜叉を宥める事だった。

更に式神を交えた遊びが始まると、即座に命の危機となる。

これを取り切るためには更なる修行が欠かせず、しかし冥子の襲来によって邪魔され、そして冥子のせいで命の危機に陥ると言う悪循環に悩まされるのは直ぐの事だった。

.....

「ふう〜高い買い物だったわ〜。」

庭でわいわい騒いでいる子供達を二階から見つめながら、六道冥那は思考していた。

眼下の光景は普通ならただ微笑ましいものだったが、彼女には一人の少年が二人の異性から言い寄られ、対応に苦慮している姿が見えていた。

(鬼道君の子は〜随分と優秀みたいね〜。)

式神使いの大家にして歴戦の霊能者である冥那だからこそ分かる。

あの政樹と言う少年と夜叉丸の間にある契約は、単なる式神と術者のそれではない。  
い。

明確な意思のある神魔の類と人間の術者の、直接的な契約だと看破していた。

しかも、先日この庭で使用した術も問題だった。

(あの術式、明らかに陰陽寮の方でも失伝してた術よね〜)。あの夜叉丸から習ったのかしら〜。)

使用された幻惑の術は既に失伝し、僅かな記録の残る平安時代のものと酷似しており、現在は外部に漏れない様に極秘に調査を重ねている段階だ。

先ず間違いない、これ以外の多くの術も持っている事が予想される現状、あの少年とは今後とも良い付き合いがしたい。

場合によっては陰陽寮とも話し合う必要があるが、今はあの少年を囲い込むか、確実なパイプを作りたかった。

(それに〜冥子のお友達だし〜余り酷い事はしたくないわ〜。)

無論、こちらに味方してくれるのなら相応の利益は与えるし、将来的に独立してもそれまでにした融資がものを言う事になるので、既にどちらに転んでも鬼道政樹が六道と縁を切る事は出来なかった。

また、政樹の父親である鬼道家当主は政樹の術の事を全く把握しておらず、融資の条件で政樹をこちらに寄越すのも人質程度の認識しかしていなかった。

昔と全く変わらない呆れる程の無能だが、今はその方が都合が良かった。

(問題は、鬼道を捨てて国外に行く事だけ……。)  
庭を見る。

今はまだ警戒が勝っている様だが、その内雪解けすれば、あの少年も年相応の笑顔を見せてくれるだろう。

(冥子次第だけ、将来的にはうちに入れるのもありかしら……?)

無論、本人同士の気持ちが大変だが、あの式神と少年は既にそれだけの利益が見込める。

家の長としては、鬼道への多少の援助など些細な位に、あの少年は霊能業界全体にとって利益となる可能性があった。

(まあ、今は子供同士で、のんびりしててほしいわね。)

家を大きくするための謀略家としてではなく、親として当たり前前の事を冥那は思う。

どうか、二人の子供達に幸せになってほしい、と。

「わ、わい！皆出て来て、！」

ドカン!!

ワーギャーワーギャー!

「……………」。

「奥様！お嬢様がまた十二神将全部を出して政樹様を追い回しています！」

「直ぐに行きますね。」

いつもの事に頭が痛くなるのを堪えながら、冥那は椅子から立ち上がり、またやらかしている愛娘を叱りに出た。

続かない

---

なお、将来的に冥子と滝夜叉、更に六道女学院で新設される男子部に入学してボーイミーツする予定です。



## GS 美神短編 政樹が逝く 2

六道の運営する六道霊能女学院だが、下は中等部、上は高等部まであり、更になん年になって男子部まで追加された。

無論、校舎は別なのだが、それでも近場だし、よく合同授業が行われる。

それは勿論ながら、霊能関係の授業でも一緒だ。

なお、クラスがABC Dとなっており、Aから順番に歴史と格と実力のある家の才能ある子達で、そこから徐々に質が下がり、Cは一般出だが霊能を発現してしまった者達、Dに至っては霊能が殆どないが霊能関係の家に生まれた者達が集まっている。

そのため、霊能の低い者は早々に見切りをつけて他の分野へと進むか、霊具作成等へと移っていく事が推奨されている。

無論、そんな事も解らずに歴史と格だけをアイデンティティに威張り散らす者もいるが。

なんでそんな詳しいかって？

それはね、僕がその男子部に所属してるからなんだよ。

「鬼道君はくく将来どうするのくく？」

「家の事は父と六道夫人に任せて、GSやるつもりです。」

だって、名家の仕来りとか面倒だし、ずっと冥子の面倒見るとか難易度測定不能だし…。

（政樹、私も支えるからな。）

影から相棒にして唯一の家族が励ましの声を送ってくる。

癒しは本当に滝ちゃんだけだよ…。

どうして僕の周りは一癖も二癖もある連中ばかりなんだ…（白目）。

「もくく無視しないでくく。」

「はいはい。」

今も合同授業でポッチしてる冥子の面倒見ないといけないし。

無論、これはあくまで自発的（○）な行動です（棒）。

『冥子ちゃんをくくお願いねくく。』

と自分の分の支出を別にまとめた帳簿を態々片手に持ちながら宣う夫人に、未だ

収入0の自分ではどうにもならない。

高校になればGS免許も取れるので、それで金を稼いで、過去の生活費全てを返済したら、何処か東北辺りの田舎でのんびり過ごしたいなあ…（遠い目）。

何としても穏やかな日常が欲しい。

「おい鬼道！話を聞け！」

なお、僕は現在Aクラスにいる。

本来ならBクラスなのだが、冥子の面倒を見るために此処にいる。

「ん、ああ、何だって？」

「なら改めて言ってやる！お前はこのクラスに相応しくない！とっと出ていけ！」

「それ、理事長に言ってくれない？」

ここの経営握ってるの冥那夫人なんだから、文句はあの人に言ってくれ。

僕はあくまであの人に言われて入ったんだから。

「…言える訳ないだろうが！」

「分かってるなら言うなよ。」

日本の霊能界における名家中の名家が六道であり、そのTOPが現当主である六

道冥那。

そして霊能以外の事業では夫が活躍し、家を盛り立てている。

「分かってるんだったらその辺も飲み込んでくれ。僕だって好きでいる訳じゃない。」

「…ツチ！」

そう言ってどっかの家の長男君が足音荒く去って行く。

お互い、嫌な家に生まれちゃったもんだね、うん。

それからの中学生としての僕の日々は冥子の起こす式神の暴走を抑える事と  
 だった。

他の家の跡継ぎとの仲立ち？

(ハッ・ア・ア) (E) (A) (A)

家としての格がガチ貴族な連中もいて、それは大抵こっちより高い。

所詮は野良陰陽師の生まれの鬼道家ではどうにもならないものがある。

出来るのは尻拭いだけだし、それ以上をするつもりは無い。

授業と修行の傍ら、暴走した式神を鎮圧する毎日だった。

また、折角の土日や休日もお嬢様の我が儘で潰される事多々で、折角の修行の時間や滝ちゃんとのスイーツ巡りも潰されるせいで、滝ちゃんのご機嫌が悪い事悪い事。

(滝ちゃん、ごめんね。)

(…政樹が悪い訳ではない。だが、あの小娘は好かぬ。)

……………

あれから5年、現在15歳、数え年で16歳となったので、遂に自分こと鬼道政樹は元服を迎えた。

これにより、霊能面からは一人前と看做される。

それは同時に、正式に鬼道家の家督を継ぐ事が出来る事を意味する。

「いやイランですよ。」

「そりよね〜。」

堅苦しい式が終わった後、六道冥那婦人とお茶を飲みつつ、今後の事を話し合っ

た。

「貴方は別に自由や富が欲しい訳でもなくて、普通には生きられるだけの、お金と立場があれば、満足なのよね？」

「です。」

それ以上の事は勝手にやってくれ。

あの糞親父も死ぬまで家督を手放そうとはしないだろうし、そもそもまだ高校生  
の自分では家の管理は無理だ。

事業でも、霊能関連でも、自己鍛錬や霊具の作成なら兎も角、人を率いる才能と  
言うか、人を自分の意に沿わせる才能と言うのが自分には存在しない。

何せ、そういった事の容量は全て滝ちゃんこと恋人の滝夜叉姫に向けられてるか  
らな！

考え方が古風で奥ゆかしくて清楚系で可愛いんだあの子。

割とオレ様系に見えながら、目下の者への配慮も欠かさないし、思いやりのある  
良い子で、そんな彼女と一緒にいたいと思う事は罪か？いやそんな訳が無い。

それはさて置き、人の動かし方を指導してくれる人間もいないし、何より覚えて

もらっては困る人間もいる。

特に鬼道家の人間は上も下も腐っていて、多くは既に六道から派遣された人間達にパージされるか、普通に汚職が判明して逮捕されている事もあり、その鬼道家の跡取り息子が管理職に就く事は誰も良い顔はしないだろう。

無論、こちらを単なるイエスマンとしている六道は除くが。

あの糞親父にいたっては、一応名目上の当主なのでそこまではされていないが、常に自身の能力をギリギリ超えない程度の仕事を過剰に与えられて遊ぶ暇も何もなく、文字通り忙殺されていた。

まあそれは事業の刷新に伴う一時的な事務量の増加なので仕方ないのだが、流石にげっそりと夔れ果てた姿は哀れみを覚えた。

母親？海外の愛人宅に住んでるらしく、ここ数年顔も見えない。

会話に至っては7年はしてないかな？

「僕を六道家の養子って事にしてもらって、見返りに成人するまではそっちに管理してもらおうのはどうでしょう？」

「うちとしても、将来的にも、優秀そうな子に、頑張ってもらいたいのよ」

」。

また六道で独占するとか、業界内から非難轟々で敵が更に増えるから、六道の意のままに出来る自分にまかせてリスク分散したい気持ちは分かる。

今更とは言え、その辺りを意識するかしないかで大分差は出る。

だが、こちらはあんな汚物の集積所みたいな家とはとっとと縁を切りたいのだ。

「：僕が継いだ所で維持できない不良債権とか、本当にいらぬんですけど。」

「あらあゝそれじゃ夜叉丸ちゃんはどうするのゝゝ？」

確かに夜叉丸は対外的には鬼道家付きの式神であり、鬼道家を継ぐ夜叉丸を継ぐ事でもある。

しかし、既に夜叉丸もとい滝夜叉姫とは個別に契約をしている状態なので、それは無意味だ。

だが、やはりと言うべきか、既に夜叉丸と自分の関係性どころか、性別すら知っていないらしい。

流石に正体に関しては知らないだろうが、推測位は立てているだろう。

いや、これは女の勘かな？

どちらにしろ厄介な事には変わりない。

「僕にとつては溝にでも捨てたい産業廃棄物を、貴方は有効活用できる。それ以上は求め過ぎでは？」

「でもでも〜冥子のお友達を〜路頭に迷わせるなんて〜。」

そこか、確かにそれは世間体としても不味い。

「ご心配なく。近々GS免許試験に受かるつもりです。」

「そう言えぱ〜もうそんな時期だったわね〜。」

韜晦する六道冥那夫人に、自分は冷めた視線を向ける。

確かに育ててもらった恩はある。

とは言え、それは自家の利益を最大限考慮した果ての、籍だけを鬼道に残した養子状態の自分を利用しようとしたまでの事。

しかし、単なる置物としてなら兎も角、積極的に後ろ暗い事に関わらせようとするのは止めて頂きたい。

GS免許さえ取れば、自分達の食い扶持を自分達だけで稼ぐ事が出来る。

まあ、それすら出来ない様に圧力をかけると言うのなら、それこそ国外に出るま

でなのだが…。

一応、英語位はそこそこ出来るので、オカルトGメンに所属する事も可能だろう。

「じゃあ〜冥子ちゃんも出るから〜お願いね〜。」

「その辺りは本人に言ってください。」

八百長とかは絶対しませんからね？

後、もしもの時のために修理費用意してた方が良いかと。

……………

で、GS試験当日

「冥子のお友達らしいけど…容赦する理由にはならないわね！」

（何で美神さんの相手やねん。）

（政樹、落ち着いて蹴散らすのだぞ！）

順調に勝ち進んだ準決勝にして、神通棍を構えたJK美神令子を相手に、僕は何

でこうなっちゃったかなーと遠くを見ていた。



## GS 美神短編 政樹が逝く3 微修正

今回、ヤンデレ要素有り

---

(政樹、経過は順調だな。)

(うん。今の所はね。)

試験会場の控室の一つでは、政樹を座禅を組み、霊力を高めつつ、影の中の夜叉丸もとい滝夜叉姫と話していた。

(ここまでは何とか自力で勝てた。)

(お主な：私の助けはいらんのか?)

(ううん、そうじゃないよ。)

だが、常に滝夜叉姫の助けが借りられるとは思っていない。

寧ろ、原作での鬼道と冥子の決闘の様に何らかの方法で分断される可能性は常にある。

例え滝夜叉姫が極めて強力な怨霊であろうと、ネクロマンサーの笛の様な特攻手段は存在する。

(それに、好きな女性の助けを借り続けるなんて、男として恥ずべき事だろ?)  
(む、むう…確かに日本男児としては当然の事であるが…)

照れを滲ませた声音で、滝夜叉姫が口籠る。

中等部に入った頃、僕は滝ちゃんに自分の気持ちを正直に告げた。

それが今の関係を崩しかねない事であり、下手をすれば二度と彼女に会えなくなる事だと分かっていても、自分に嘘はつけなかった。

「滝夜叉姫…ううん、五月姫。僕は貴方を愛してます。結婚を前提としてお付き合いしてください。」

ピクニック先の山の山頂の夕暮れ時、或は逢魔が時とも言うべき時間帯で、僕は滝ちゃんに告白した。

僕にはお金がなく、冥子を上手く稽古事に行かせ、六道の目が無い状況になって、僕は漸く夜叉丸ではなく、素の滝夜叉姫と一緒にいる事が出来る。

それだけ名前を握ると言う事は重要なのだ。

無論、自分が未熟であっても、滝ちゃんの霊格を思えば、そこらの術者では名を知っても縛れずに逆に呪い殺されるのがオチなのだが。

「政樹よ、それがどういう意味か分かって言っておるのじゃな？」

「うん、全部分かってるよ。」

普段とは違う、本当に鋭い目付きに怯む事なく頷く。

彼女と結婚し、婚姻関係になると言う事は、自分が人間ではなく、神魔へと近づく事に他ならない。

肉体的に死亡すれば、場合にもよるが神魔へと転生する事になるだろう。

より正確に言えば、人間ではなくなり、人間とはまた異なる柵に囚われる事を意味する。

今の自分は鬼道と六道に繋がれている訳だが、それが神魔となればもう逃げ出すことは出来なくなる。

そう、あのアシクタロスの様に。

それは人間にとっては永劫に等しい時間であり、凡百の精神では耐えられずに擦り切れて人形の様になってしまおうだろう。

まあ、それで滝ちゃんと一緒になれるのなら、それもまた良しだ。

「私は政樹にそんな風になってほしくはない。」

「でも、僕は滝ちゃんと一緒にいたいんだ。ずっと。」

今世どころか、前世においても、家族を除いた誰かとずっと一緒にいたいと言う感情を、僕は持つ事が無かった。

一人の方が楽だと言う事もあったが、基本的に人嫌いの自分は、だからこそ人ではない者に惹かれるのだろう。

「…ならば、政樹よ。お前の本当の名を差し出せ。」

それは式神使いにとって、否、霊能者にとって、人間にとって最後の命綱だ。

大抵の古い家の人間ならば、戸籍上の本名以外の名前である諱、又は忌み名といわれる真名を持っている。

これを知られると言う事は、魂の一端を握られるに等しい。

悪魔祓いにおいて悪魔の名を知る事で撃退する様に、滝夜叉姫が鬼道の祖先に使役された様に、例え格上の存在であっても格下の存在に良い様にされる事を意味する。

況して相手が丑の刻参りの神と直接契約する程の優れた呪術師である滝夜叉姫であるならば、尚更の事だった。

主従関係は完全に逆転し、自分は肉体どころか魂すら彼女に隷属する事になる。「真名じゃ意味がないから、僕の前世の名前で良い？」

「うむ。」

だが、もう止まらない。

その程度で良いのなら、僕は既に差し出すつもりだった。

滝ちゃんの一生、と言うには短い時間かもしれないが、それを貰うのなら、こちらにも代価は必要だった。

「僕の本当の名前は■■■■って言うんだよ。」

瞬間、僕と滝ちゃんの間にある契約の繋がりが、一気に太くなった。

「ふ、ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ……」

同時に、今までは念話や霊力・呪力のやり取り程度だった繋がりから、感情が土砂の様に流れてきた。

それは歓喜であり、驚愕であり、狂喜であり、狂気であり、悦楽であり、独占欲





常人なら怖気が奔り、恐怖し、命乞いをしそうな感情の波に対して、しかし僕の心は安堵していた。

良かった、と。

この気持ちは自分の空回りではなかったんだ、と。

この世界で出会った、否、前世の家族を除けば抱いた事の無い、ずっと一緒にいたいと願ったこの気持ちは、確かに届いたのだと。

「政樹様、不束者ですが、どうか幾久しくお傍において下さいませ。」

「こちらこそ。未熟者ですが、どうか末永く一緒にいてください。」

山頂の草原で、何故か互いに三つ指ついて頭を下げ合う姿は一種滑稽なものであったが、それでも二人の心は暖かだった。

そして、二人はそのまま夜の山の中で一夜を明かした。

そこで何があったのかは、二人は誰にも語らない。

その夜、何があったのかを知るのは、森の中を飛び交う季節外れの蛍のみ。

帰宅した時、冥子を始めたのかとした六道家の人達に随分と心配させてしまったが、以前よりも柔らかな空気を、洗練した霊力を纏う政樹に、皆一様に言葉を失ったと言

う。

で、話は冒頭に戻るのだが。

(我が背の君、あの様な小生意気な小娘に負ける訳がない。そうであろう?)

(分かっている。君に恥じない戦いにするつもりだよ。)

そう、最初から夜叉丸を試合で出すつもりは無かったのだ。

(まあ冥子の暴走が怖いから、その時だけは宜しくね。)

(心得た。)

後にこの時の事を政樹は思い返す。

あれ、フラグだったんだなあ、と。

.....

六道女学院女子高等部2年所属、美神令子は次の対戦相手を最大限警戒していた。

鬼道政樹。

鬼道家の天才にして、六道家が敵対していた鬼道家を吸収した後に態々自家に招き、実質的な養子にする程に目にかけていると云うのだから、余程彼が欲しかったのだらうと霊能業界では言われている。

現に、彼が六道家に所属してからは、六道はそれまで殆ど手を出していなかった陰陽寮系の遺失霊能技術の再現に挑み、六道と溝のあった陰陽寮との協力があったにしろ、これに成功している。

これによりGS業界で鎬を削っていた六道と陰陽寮との仲が急激に修復され、それまで失伝したとされていた日本古来の呪符が市場に出回り始め、ザンスの精霊石内蔵霊具に市場を圧迫されていた日本霊能業界における生産職が息を吹き返し始めた。

これにより所謂道具使いと言われるGSの出費が減り、即ちGS業そのもののバブルの高騰が抑えられ始めており、将来的には最もGSを必要としているであろう一般市民（突発的霊障）や財政の厳しい地方行政（地方にある怪異の封印の維持等）にも手の届く価格になるだろうと言われている。

この功績の火付け役になった事から、後に六道家の跡取りの冥子との婚姻が予定

されているのではないかと専らの噂であるが、令子の受けた印象は全く異なっていた。

（冥子に対しては、あくまで職務上の従者とししか認識してないわね。）

そう思ったのは鬼道の目だ。

あれは心底冥子の存在にうんざりしつつ、しかし仕方がないから相手をしているという口だろう。

また、他の人間に向ける視線もまた、何処か無機物めいたものがあり、相手を人間として認識しているかすら怪しかった。

実際、冥子が試験会場で式神全てを出しながら移動していたのを、周囲の人間が非難や畏怖、嫉妬の視線を向けていた事に気づきながら、注意すらしなかった。

鬼道と仲良しだと思っっている冥子なら、彼が注意すればすぐに従うだろうにも関わらずにだ。

つまり、仕事上のお付き合いは兎も角、プライベートはNGと言う事だろう。

そんな男が冥子と結婚し、一生を仕事とする訳が無い。

（やり口もGSってよりも、ヒットマン染みた奴ね。）

實際、この準決勝まで勝ち進んだ鬼道の戦い方は余りにもGSらしくなかった。

一戦目は、相手に何かをさせる暇を与えず、靈力を足裏と背中で破裂させつつ踏み込み、ブースターの様にして高速で接近し、その勢いを靈力を込めた右拳を通して相手に叩き込んだ。

その一撃で、靈能者が無意識に体に纏う靈力による保護は一瞬で消し飛び、まるでサッカーボールの様に一瞬して場外にまで吹っ飛ばされ、会場の壁に叩き付けられた。

二戦目は、一戦目を見て警戒して防御を固める相手選手に対し、折り鶴の式神を試合開始直前に真上に配置、その後即座に急降下、相手の後頭部付近で爆破し、意識が揺らいだ所を一戦目と同じやり方で倒した。

三戦目は、令子と同じ汎用性の高い道具使いが相手であり、先程見せた折り鶴にも接近しての一撃にも警戒されたものの、今度は大量に出した折り鶴の式神の自爆特攻による飽和攻撃によって撃破された。

つまり、四戦目の準決勝戦になってもなお、式神使いである彼が持つと言う夜叉丸が表に出てくる事は無かったのだ。

これには観客席から相当なブーイングが出たものの、一切ルール違反をしていない事もあり、有効とされた。

まあ、ブーイングしている連中は古い家出身の、能力よりも家柄優先な連中なので、シカトで当然だとは思うが。

同じ六道なので他の選手よりはデータはあるが、その詳細なスペックは本人しか知らず、更に当主である父親よりも優秀な術者である事は間違いないので、父親の頃のデータは役に立たない可能性が高い。

(あーもうどうしろってのよ！)

なお、六道女学院側からの支援は無い。

事前に集められた情報も、自分で集めた学院内の目撃情報に加え、多くは師匠筋に当たる唐巢神父に頼んでのものだ。

六道にとっては学院所属の新人が令子含む三人も準決勝に進出しているので、既に誰が勝っても美味しい状況が出来上がっているからだ。

無論、実力で劣っている等、令子の中には毛頭ない。

しかし、明確に勝利するためのビジョンが湧かないのだ。

それだけあの鬼道と言う男は不気味なのだ。

(まあ悩んでも仕方ないし…出たところ勝負ね。)

そう決めれば話は早い。

令子は控室で座禅を組み、精神を落ち着けると、改めて鬼道との戦闘をイメージし始めた。

精神力が重要な要素となる霊能において、こうした精神統一の作法は常識、基礎の基礎だ。

精神を落ち着け、無駄な力みを無くし、効率的に体力・霊力を使用するためにも、無駄な精神の昂りは抑えるなり御するなりする必要がある。

しかし、昨今のGSは霊具と霊能を用いた派手な除霊が注目されがちで、若手には不人気な技術でもある。

だが、将来はGSで食っていく事を真剣に考えている令子にとって、この手の技術は重要なものだった。

(絶ツツツ対勝ってやるツ!!)

まあ、修めた技術が常に本来の趣旨のまま使用されるとは限らない訳で。

勝利への執念に取り憑かれた令子にとっては、試合のための効率的なイメージトレーニングでしかなかった。

.....

同時に行われた準決勝戦は、どちらも非常にハイレベルなものだった。

「皆々頑張って〜〜！」

「この…舐めないでほしい訳！」

式神使いの大家の跡取り娘にして式神…十二神将の契約者、六道冥子。

ここ数百年では最高の呪術師としての才能を持つと言われる、小笠原エミ。

この二者の戦いは終始冥子が優勢だったものの、エミも負けずに十二神将を捌きつつ呪術で応戦する等、不利な状況であっても抗戦し続けた。

そしてもう一つの試合は、正に激戦と言って良いものだった。

「厄介だな…！」

「この美神令子に手抜きとか…命が惜しくないのね！」

六道が鬼道家を吸収する原因となった天才、鬼道政樹。

母親同様に天才と言われる才女、美神令子。

本来なら式神の夜叉丸を使役して戦うと予想されていた政樹だが、彼は徹頭徹尾己の力だけで戦い続けた。

それを侮辱と受け取った令子は神通棍を用い、我流に近い剣術で以て激しく攻め立てる。

しかし、折り紙を簡易な式神として、盾にも、爆弾にも、剣にも、使い魔にも、地雷にも、目潰しにも応用して変幻自在の戦法を取る政樹に、令子は始終押される形となった。

試合では同じ道具使いの範囲で戦っていたものの、折り紙一つで多様な戦い方が出来る鬼道に対し、持ち込み武器の制限（基本一つのみ）がある状態では持ち味が生かせない令子が後一步で敗れかけた。

だが、ここで予想外の事態が起きる。

なんと、エミの呪術が不運にも顔面に直撃してしまった冥子が痛みと驚きにより式神の制御を手放してしまい、十二神将達がいつもの様に暴走を開始したのだ。

始まった大破壊に巻き込まれる形でエミはリタイアしたものの、そんな事に気がく事もなく、冥子は暴走を続けていき、遂には観客や審判、建物そのものすら巻き込んで式神達が暴れ回る。

「夜叉丸、鎮圧するぞ！」

これには試合を一時中断し、政樹も鎮圧を開始した。

既に勝手知ったるなんとやら、政樹と夜叉丸は手慣れた様に一体つつ式神と冥子の繋がりを断ち、己のものとした状態で沈静化させ、終わり次第繋がりを断ち、冥子の元へと戻して行く。

12体全てが終わる頃には会場は大規模修理が必要な程に破壊されていたが、幸いにも死者は出なかった。

しかし、この一件で冥子のGS試験は失格とされ、要再修業を言い渡された。

エミは合格となったものの騒ぎの原因の一つでもあったので主席合格とはならず、政樹と令子は二人同時優勝となったが、政樹の方は冥子の式神鎮圧に貢献したため、GS協会から主席合格の認定及び感謝状を送られ、六道家は会場の修理費と怪我人の治療費等を支払う事となった。

後に、この騒動が原因で六道家の当主夫妻を除いた面々から一方的に恨まれる事となり、政樹の六道離れが加速する事となる。

(おめでとう、政樹。)

(ごめんね。啖呵切ったのに、結局頼る事になっちゃって。)

(構わぬ。アレはあの小娘が悪い。)

(お礼に近くの喫茶店に行こう。そのシュークリームが美味しいんだってさ。)

(よし、案内せよ!)

(ではエスコートしますね、お姫様。)

他の3人が消化不良気味なのに対し、一組の恋人は悠々と試験会場を後にした。

次回、神田明神様にご挨拶

滝夜叉姫がヤンデレな訳ないって？

だって彼女、あの貴船神社とガッツリ縁がある女性だし、当然かなって。

## 装甲悪鬼短編 無銘が逝く 微修正

ふと思いついた村正転生

改めて思うがニトロ十は本当に業が深いな！

別に、正義なんでもものに期待している訳じゃない。

ただ、原作における「自分」が余計な真似さえしなければ、あの惨劇は起きなかった事を知るが故に、私は敢えて何もする事なく、自分を産み育ててくれた母親を見殺しにした。

では、力を得てしまった自分は、劔胄となってまで残った自分は何をするのか？  
それは無論、一技術者として研鑽に他ならない。

この世界の技術体系は歪だ。

それは劔胄、と言うよりも金神の存在によるものなのだろうが、それにしても劔胄やそれに関連する技術には不思議が多い。

所詮はエロゲーの世界、と言ってしまうのは簡単だが、それにしたって此処は二トロ+ワールドの一つ。

絶望と奥の深さ具合ではFateとどっこいどっこいである。

故にこそ、対策の構築と自己鍛錬に後ろ指さされる道理はない。

……まあ、今となっては少々処ではなくやり過ぎたとは思うが。

……………

湊斗景明には一つ悩みがあった。

それは鉱毒病を患ってしまった妹にして娘である湊斗光の事でもない。

いや、光関連の事ではあるのだが。

「のーのー無銘よ。お前、蜘蛛の形をしているのだから、糸位出せんのか？」

『出せるけど、無駄に熱量を消費するわよ？用も無いのに出したら置き場所にも

困るし…。』

「では、それを使って衣服を縫おう！頑丈そうだし、景明に贈ろう！」

『そうね…今までは精々軟質装甲か緊急修理位にしか使ってなかったし、下手な金属製の鎧よりも頑丈になるわよ。』

「よし！では先ずパンツから…」

「止める。」

それだけは止めてくれ。

と言うか、劔胄の甲鉄に近い防御力を持ったパンツとか何処に需要があるのかと。確かに急所は守られるだろうが、それ絶対蒸れるし擦れるから。

『仕方ないわね。じゃあコートなんてどうかしら？ 錆びず、頑丈で、全身を覆えるし、いざって時にパツと着れるし、裏地に断熱材でも仕込めば、防寒着としても完璧よ。』

「まあ、それなら。」

この無銘の劔胄にしては穏当な提案に、景明も頷いた。

以前、迂闊にも確認せずに許可を出した時など、何故か我が家の炊事場が最新式のシステムキッチン（熱量で稼働、現在も使用中）になった時などは激怒して光共々正座で説教したものが、今回は割と穏当な結果になりそうだった。

『単なるコートだと飾り気も無いし：御堂の母親に服飾を聞いてみようかしら。』

訂正、デザインセンスが突っ張り方向の統に話を持っていこうとしている時点で、問題が発生する事が確定した。

やはり、付きっ切りで監視しなければならぬらしい。

最終的に黒のトレンチコートに、セットで同色の山高帽が出来上がった。

しかし、結局は景明の人相と合わさり、どう見てもヒットマンかマフィアのボス（しかも完全防備）にしか見えない風体となってしまう、結局筆筒の肥やしになる事が決定した。

.....

祖父と母亡き後、三世村正と言われる筈の少女は朝廷に村正の名を残さない事と同時に、毒としての妖甲の機能を残したまま、劔冑となる事を提案した。

無論、劔冑は朝廷の管理下に置く事を前提として。

これは後の元寇の様な朝廷では対処が難しい、或は不可能な敵対勢力の発生や出現に備えたもので、所謂「毒を持って毒を制す」と言うものだった。

勿論、かなり洩られた。

しかし、これには代価として本来門外不出の村正一門の人化の術、そして転生チートで貰った技術チートによる数打作成技術を伝える事で許可が下りた。

限定的な不老不死の方法と、今まで量産が不可能であった強力無比な兵器である劔冑の量産技術。

南北朝の動乱、初代と二世村正の戦闘により、人口の一角を亡くし、疲弊していた朝廷は国体維持のために復興を優先させつつも、来たるべき時に備えた軍備増強を選択し、史実なら村正三世を名乗った蝦夷の言葉に乗った。

無論、産業革命もまだな南北朝時代において、人化の術は兎も角、クローン作製及び記憶転写技術は極めて難航した。

だが、ガワとなる数打の作成ノウハウによって更に高性能な劔冑の設計に成功した村正三世もとい無銘が劔冑となる事で解決した。

本来なら磁力制御であった陰義だが、この世界ではなんと電磁制御、即ち電子と

磁力の二つを制御するものであり、応用の幅が一気に広まったのだ。

治療系の劔胄は既に発見されていたので、それによって採取した殺菌で密閉した状培養槽の中の受精卵を急速成長させた上で、無銘が電子制御によって無学習状態の脳に直接記憶技を転写（技術的・戦術的なもののみ）した事で、世界初となる数打の材料となるクローンではなく人造人間の作製に成功した。

史実における数打、或はレッドクロスと言われる量産可能な劔胄は記憶転写したクローンを心鉄に作られ、制御機構も機械式計算機ⅡCPUなのだが、後に大和式と言われる形式は人造人間を心鉄とし、制御機構は甲鉄化した生体式計算機Ⅱ人造人間の脳を使用している。

これにより、劔胄作成時に機械式計算機分の容量を必要とせず、そのまま他に使用できるため、同格の技術で作成した場合、大和式の方が力量（性能）で勝る事となる。

この結果に満足した無銘は徐々に一線を退いていき、数打量産が完全に軌道に乗った事を確認すると、当初の約定通りに朝廷監視下の元、普通の劔胄として永い眠りに就いた。

技術革新の旗手が抜け、大和の技術革新もややペースダウンしたものの、減速する事は無く、寧ろ比較的良心的なお目付け役を失った事で暴走を開始した。

各地に遠征こそしなかったものの、開拓事業が大々的に行われ、近隣の東アジアの国々との交易もそれまで不安定だった船舶の技術革新により安定化し、より盛んになっていった。

更に、世界初の量産式劔胄の開発成功を皮切りに、大和の技術革新は次々と進んでいき、それらを軍事以外の分野にも積極的に流用する事で、農業・工業・商業と言ったあらゆる分野が次々と発展していった。

そして後世の黒船来航時、既に大英帝国を筆頭とした欧州勢に対し、劔胄を始めとした軍事面では技術力・戦力共に完全に優越しており、軍艦で首都に突入しようとした大英帝国使節団も相当に肝を冷やす羽目になった。

だが、大英帝国からの欧州の情報（万年戦争状態）を警戒し、旧体制として負荷がかかっていた幕府制度を自主的に解体、大和皇国と改号し、国家制度を一新した。

更には二度の世界大戦も大英帝国の要請により連合国側で参戦、欧州の地に大島獅子吼中佐（後に大佐に昇進）率いる精鋭部隊を派遣して統合独逸連邦率いる枢軸

国と激しく交戦した。

数打こそ鹵獲の危険から最新鋭騎ではなく、信頼性最優先の二線級のものだったが、それでも当時の欧州式数打よりも高性能であり、精鋭部隊だけあって大いに活躍し、無事に戦勝国の仲間入りを果たした。

しかし、その活躍ぶりから黄禍論が欧州の地にして流行、露西亞帝国の南下政策との衝突（安全保障上及び近隣のアジア諸国の要請した保障占領のため）もあり、現在の世界は実質的に大英帝国（実質欧州全体）と露西亞帝国、そして大和皇国の三竦み状態となっていた。

なお、これに対して事態の原因となった鉄蜘蛛の無銘の劔冑は以下の通りである。  
『なあとコレ。』

人間だったら、きっと白目だっただろう。

とは言え、彼女が目論んでいた原作展開は完全に破壊されたと言っている。

ただ、その分鍛造弾が純粋な戦略兵器として大和皇国に降ってくる可能性が出来ていたが、その辺りを考えるのはお偉いさんの仕事なので、彼女には関係ないと考えていた。

この時点までは。

病気の御堂、つまり湊斗光を嘗ての人造人間作製のノウハウを生かして治療し、序でに周辺住民も治療して一週間後に政府側の人間から接触され、来月には技術アドバイザーとして劔冑なのに強制参加させられる羽目になる事を、彼女はまだ知らない。

.....

### 劔冑解説

無銘／本来なら勢洲右衛門尉村正三世

生産国・大和／伊勢國

種別・真打／可変

時代・南北朝末期

兵装・野太刀、太刀、脇差、弩、鋼糸（両手首・頭部）、蜘蛛足

仕様・汎用／白兵戦

合当理・熱量変換型三発火箭推進

仕手・湊斗光

陰義・電磁制御

待機状態・蜘蛛

誓約の口上、義あれば剣を抜き、義なくば剣を置く。殺す・戦う理由が無いのに無暗に暴力を振るってはならないの意。そのため、仕手が虐殺等を正当な理由なく行えば仕手は自害させられるか、出来なければ高圧電流を流されて死亡する。

力量：改修する度に变化する。

甲鉄練度… 4

騎航推力… 4

騎航速度… 3

旋回性能… 3

上昇性能… 2

加速性能… 3

身体強化… 3

本来ならば深紅の妖甲として恐れられた真打。

しかし、転生者によっておもっくそ歴史を歪められた結果、明後日の方向に進んだ大和皇国の技術を一部吸収しつつ魔改造されて誕生したどう考えてもオーバーツ的な劔胄。

なお、中の人の人格は多分にMAD成分を多く含んでいるため、光と帯刀の儀を交わし、大和皇国へと引っ張られてからは自ら小改修を繰り返しており、力量が常に細かく変動しているため、仕手である光の好み（近接高機動白兵戦）と本人の好み（中遠距離高機動射撃戦）とで日々口論している。

最終的に改修セットを常備し、その場で光好みのカスタムになる事で一応の決着を見た。

大まかのデザインこそ史実三世村正のそれだが、細部はかなり異なっている。全体的によりほっそりとしつつ、頭部の角は真上に伸び、アンテナとして機能していたが、後の改修でデザインこそそのままだがより高性能かつ多機能型のブレードアンテナへと換装された。

頭部側面から垂れる糸は両手首から射出可能な鋼糸と同質のものであり、緊急時

にはこれを操作して近接迎撃やアンカーとして使用できる。

背部の合体理はやや小型化したものの、両大腿部側面に小型の補助合体理があり、騎航時には加速性と旋回性能の強化だけでなく、被弾時の安定性にも寄与しているが、これの設置に伴い、母衣の位置は膝側面から足首側面となっている。

また、背部の主合体理に接続された蜘蛛足はサブアーム兼スタビライザーとして機能し、それぞれを独立して可動できるが、煩雑な操作が必要なため、劔胄側から行う。

関節を阻害する様な部位には鋼糸を用いた鎖帷子が採用され、可動範囲が向上、同時に近接戦闘時の自由度が上昇している。

肩の垂直装甲（大袖）や母衣と言った肉体の無い部位は全てユニット化されており、損傷次第で即座にパージ、帰還後に直ぐ交換できる。

陰義発動時、技術系頭脳チートの影響もあり、常に最小の熱量で最大の効果を発揮しつつ、素早い発動を可能としているため、従来の真打よりも陰義発動時でも感知され辛い。

また、陰義の制御機構でもある各部位の金具も装甲内部に内蔵する事で、陰義使

用時の被発見性を低下させている。

武装面では史実の大太刀・太刀・脇差の他に、弩（モンハンの長銃身付きライトボウガンに似る）が左背面に追加され、文字通りの電磁加速砲として使用可能である。

弾種は後部に四枚の安定翼の付いた総甲鉄製の矢を主に使用し、最大出力での発射で命中した場合、現状の主力竜騎兵（大和皇国基準）では追加装甲を二重に装備しても貫通されるため、実質真打の陰義でなければ防げないが、劔冑の接近戦の必要性を大幅に下げた上で熱量の消費も割と少ない（刀剣の加速よりも必要となる熱量が少ないため）おかげで、出力を下げれば連射も可能なので、余程カツ飛んだ実力者でなければ射程範囲内に入った時点で詰む。

また、弾種も様々あり、弾頭の圧縮率を上げた貫通弾に、低出力時しか使用できない散弾があり、更に精度は下がるがサブアームだけでも使用可能なので、両手が空いたまま戦闘可能だし、背面にマウントしたまま発射可能なので、様々な場面で活用できる。

なお、この電磁加速砲のデータを元に大和皇国では急速に数打仕様の電磁加速砲

の開発が進んでいたりする。

陰義においては原作同様の磁力制御に加え、電子制御も可能なため、大気中の電子の動きから周囲の変化をほぼ予知レベルで察知、極めて高精度の戦闘補助を可能とし、金打声ではなく、純粋なレーザーによる広範囲の索敵も可能であり、現在発見されている劔胃の中では最大の索敵範囲を誇り、電磁加速砲と合わせ、領域支配すら可能とも言われる。

他にも、周辺の電子の動きをかき乱す事で、機械式計算機を採用した物は機能不全にする事が出来る等、広範囲のEMPを展開する事が出来る。

また、ある程度は機械式計算機へのクラッキングも可能であり、情報奪取に加え、遠隔操作や命令の書き換え等、ただの機械から欧州式数打にまで行える等、極めて応用範囲が広い。

反面、制御には専門知識が必須であり、現在の仕手である光ではどう足掻いても使いこなせないのが、陰義の操作は専ら劔胃側が行っている。

更に、村正系列の持つ精神汚染・精神攪乱もあるものの、これらは勅令により禁止されている。

人化の術は技術顧問に召集されてからは割と頻繁に使っており、関係者を無意識に誘惑してたりもする。

人化時は史実と同じ姿だが、家事は人並みに出来るし、人当たりも良い人格者。仕手である光にはややお姉さんぶる傾向があるが、景明他湊斗家一同とは良好な仲であり、殆ど家族の一員となっている。

なお、もしもの時のためとして、食事や性交によってある程度熱量を補給可能となっている。

総じて、極めて高性能だが、同時に発展性も大きく残された劔冑と言える。

この点に関しては、宮本武蔵の五輪の書の「真の兵法とは戦闘経験の蓄積の果てに出来る」に対して、「優れた兵器とはあらゆる環境に対応可能で、誰でも使用可能で、それらを満たしつつ量産可能でなければならぬ」と言う信念による。

数打を量産し、各種状況へ対応した派生騎を作り、訓練した者なら誰でも騎乗できるようにしたのは、このためだ。

同時に、そういった数打では対処不可能な災厄に対応可能な劔冑を彼女は求めた。それが常にアップデート可能でありながら、応用性の高い陰義を持つ、極めて高

性能な劔冑だった。

これにより、騎体性能の陳腐化を避けつつ、来たるべき災厄（原作展開への揺り戻しや金神の欠片を利用した劔冑や鍛造弾等）への対策とした。

最悪の場合、史実における銀星号の様な自己の複製すら視野に入れる等、自己進化・自己再生・自己複製を最大限生かした最終兵器案すらあったのだから、彼女がどれだけこの世界の負の方向性を恐れていたかが理解できる。

結果として、そうした最終安全機構を使用する様な状況は大和皇国のお蔭で来そうになくなったため、彼女は現在お座敷劔冑生活を満喫している。

なお、時折景明とTooloverして光にボコられたりする。

## ワンパンマン転生 魔法使いが逝く 修正

原作が大事な方に注意

サイタマさんの苦戦シーンがあります

---

「はいはいテンプレテンプレ。好きなチート持って適当な転生してくださいねー。」  
そんな白昼夢を見たので、つつい注文してしまった結果、私は後悔しまくっています。

魔法使いになりたい。

それが私の夢であり、チートだ。

チチンパイパイでもピーリカピリラでもいあいあくとうるふふたぐんでも構わない。

私は魔法使いとなって魔法を使い、その道を究めてみたかった。

元より人よりも凝り性な私は、いつもゲームでは廃人とか攻略厨とか言われる程

度にはやり込んでいたので、それをリアルに持ち出したいなんて考えてしまったのだ。

無論、後悔する羽目になったのだが。

あの白昼夢の時に聞いた『適当な転生』と言う言葉。

それは嘘でもなんでもなく、貰ったチートに応じた適当な世界へと転生するとう事。

例えば、Fateで有名な直死の魔眼や無限の剣製なら、それらが最大限発揮される型月世界へと転生させられる。

逆に、黄金律とかの武力とか以外のチートなら、経済系の漫画やドラマ等の登場人物が多数登場する様な世界で、幸運にも得た自分の財産を守り通さなければならぬと言った具合だ。

要はチートで他人よりも有利な分、転生する世界の物騒さ加減で帳尻を合わせられるのだ。

つまり、本当に平穩に生きてければ、何のチートも選ばない方が良かったのだ。気づいた時には後の祭りだったのは言うまでもない

.....

私が生まれたのは確かに地球なのだが：少々、否、かなり変わった世界だった。怪人や魔物、サイボーグやロボットと言った常識的に在り得ない筈の存在が世界中に跋扈し、世界中の人々を脅かしていた。

とは言え、私が生まれた場所は平和な隠れ里であり、そんな外界の騒動とは無縁だったのだが。

私が生まれた場所、そこは魔法使い達の隠れ里だった。

元は欧州の魔女狩りから逃れてきた人達が当時の欧州世界にとっての正真正銘の地の果てである日本へと辿り着き、その人々と協力し合う形で生活を開始したのが始まりだ。

しかし、文明開化と共に、魔法なんて非科学的な代物は徐々に淘汰されていき、居場所がなくなった果てに、外界との繋がりを断つ事になった。

今では最低限の情報収集と生活物資の買い付け位が外界との繋がりがかった。

とは言え、お家芸である魔法以外は里の外の学校で学び、近隣で就職する辺り、割と普通な面もある。

近隣の小学校を順調に優秀な成績で卒業した後、私はかねてより計画していた事を実行に移した。

本来なら公立の中学へと進学する所を、奨学金制度を利用して、都内の中学校へと進学したのだ。

何故そんな事をしたのだった？

魔法を合法的に大勢の前で使う機会を得たかったと言うのも勿論ある。

でも、本当の理由は別だ。

だって、里ってテレビとラジオは兎も角、インターネットが出来ないんだもん。

当時、西暦2011年、インターネットと共に育った世代にネット環境が無い家は耐えられなかったのだ。

.....

都内の私立中学とは言っても、そこまで高偏差値ではない。

精々が大学までは行きたいが将来の展望は特にない、或は本命に落ちた際のセーフティ代わりに利用される様なレベルの学校だ。

しかし、インターネットがあり、興味ある分野を積極的に学べる環境と言うのは、前世でも思ったが、実に有意義に感じられる。

失って初めて本当に大切な日々だったのだと実感できる。

だがまあ、魔法使いなんてものになったせいで、そんな平穩に浸れる訳もなく。ある日、唐突に校内で怪人が発生した。

「クークククク！オレは試験怪人ペンシル！試験に落ちた怒りとストレスで怪人となった！さあ分かり難い試験ばかり考える教師共を血祭りに上げてやる！」  
多分鉛筆が大切な友人だったのであろう文房具の集合体みたいな怪人が現れ、生徒達が逃げ惑う。

あの説明調のセリフは兎も角、解析魔法によればあれでも罨程度には高い身体能力を持っているらしく、一般人にはかなり危険だ。

『○○中学校内にて、怪人が発生しました！災害レベルは虎！付近の市民は速や

かに避難してください！付近のヒーローは速やかに駆け付けて下さい！』

こうした放送に違和感を持つのも何度目か。

この世界特有のシステム、多くの災害への迅速な対応のためについ半年程前に設立されたヒーロー協会。

国家・都市間の利害を超えて活躍する彼らは、多少の問題を孕みつつも、凡そ順調に多くの災害から人々を守っている。

つまり、この世界はしょっちゅう危険な事態が発生するワンパンマンの世界と言う事になる。

成程、魔法なんて単なる技術の一つに過ぎない訳だ。

「ひ、ひい……！」

「クークック！お前は以前、自分がテストで高得点取った事を自慢し、オレを馬鹿にしたなあ！見せしめにしてやろう！」

内心では怪人の言葉に激しく同意しつつも、流石に目の前で起きる惨劇を見過ごす理由も無かった。

「戦闘用分体を作成、性能は高めに設定。」

この場にいるのは逃げ遅れた生徒と自分、そして怪人一人。

なので、魔法を使っても問題はないと判断した。

作成した分体は一つ、十代半ばに届くかどうかといった愛らしい少女の容姿に綺麗な赤毛のロングストレート。

スタイルこそ年齢が年齢のためスツトンだが、フリルや装飾が多く付いたカラフルなとんがり帽子と衣装、手に持った三叉の槍を持った姿は、確かに魔法少女だ。この国の人々なら納得するだろう。

「こらそこ！ 堅気に手エ出してんじゃないわよ！」

「なにい…？ 何者だ、お前は！」

「私は魔法少女ハロウィン☆エリザ！ 趣味で魔法少女をやってる者よ！」

此処に痛々しくも可愛らしい魔法少女が爆誕したのだった。

うん、自分でやっというてこれは痛い。

ほら、分体も羞恥で涙目だし。

良かった、最初は分体で試す事にして。

その後、怪人は数撃で撃破に成功し、被害者？の生徒も回復魔法で事なきを得たが、分体の心には致命的な傷が発生しました。

その後も事件を感知すれば分体ことエリザを空間転移で派遣する事が続き、何時の間にか魔法少女ハロウィン☆エリザは市民権を確保する位に活躍し、ヒーロー協会へと所属し、順調に出世していくのでした。

なお、その間私は視覚同調で観戦しつつも普通に学生してました。

うむむ、高校卒業と同時に本格的にヒーロー稼業に専念すべきか、収入も凄いし。

.....

世間に痛々しくも登場したハロウィン☆エリザは、その容姿と強さもあって、瞬く間にお茶の間の人気者になった。

とは言え、特に取材とかを受けた訳ではない。

魔法少女というものが大好きな、大きなお友達たちの活躍によるものだ。

彼らはアイドルに粘着するドルオタの様に、否、そのものとなってあちこちに偏

執的な監視網を設置し、とある地域で怪人が登場すると殆ど間を置かずに見れる場所を特定し、これを利用して魔法少女ウォッチングを開始したので。

まあヒーロー相手でも多かれ少なかれ同じ様な連中がいるので、そう珍しくもないのだが。

問題なのは、その中に狂信的と言っても良い魔法少女厨が多数存在した事であり、更にその中に自らも魔法少女に成りたいと言う年頃の娘さん達がいた事だろう。

そうした少女たちは皆一様にニチアサや絶望物語その1とその2の魔法少女に深く感銘を受けており、どうにかエリザに接触し、弟子入りなりマスコットキャラとの契約なりをさせてもらい、自らも魔法少女になろうと画策していた。

そんな彼女に対して逸早く接触に成功したのがヒーロー協会だった。

なにせそのシステム上、強いヒーローは幾らいても足りない協会にとって、彼女の様なメディア受けしつつ実力もある存在は貴重だった。

実力も既にSランクと言って良いし、何より人格面でも問題ないのが良い。

また、保有する魔法能力も攻撃・防御と言った基本的なものから、空間転移に広域探査、回復に強化と言った幅広い用途があり、尚且つ素の本人もAランク程度

ならあしろう程度には実力があるのだ。

他のヒーローと組ませても良いし、単独で動かしても大丈夫で、尚且つ一般人への被害を気にしてくれるのだ。

問題児だらけのヒーローを相手にする協会の事務方としては、（無能な上層部を除いて）全員が所属を歓迎していた。

そして、収入源にもなるし、情報支援を受けられると判断したエリザは本体の許可の下、最初はAランクでヒーロー協会へと所属する事となった。

結果、ものの一カ月程でSランクへと昇格し、童帝の次に年少のSランクとして活躍していく事となり、またもや狂信的なファンが増える事となった。

.....

そんな世間の動きは露知らず、エリザベートの中の人は中学卒業後、Z市の高校へと進学し、現在は学業と併せて各種資格取得のための勉強をしていた。

彼女の外見は黒髪おさげを背に垂らし、前髪を少し長めに伸ばし、更に眼鏡をか

けた知性を感じさせる美少女だった。

しかし、本人が勉強好きだった事もあり、恋愛には興味を示さずに灰色の学生生活であったが、それでも本人は満足していた。

在学中は外で分体のエリザがヒーローとして活躍し、本体である少女は学生としての生活を送る。

で、エリザが得た戦闘経験はそのまま記憶共有により本体である少女もまた、同様の経験値を持っている。

そのため、以前よりも魔法の練度も上昇し、肉体の成長も相まって更に強くなっている。

しかし、現状は彼女にとって不満だった。

何せ今現在の彼女にとって災害ランク竜の大型兵器や怪獣、巨人の類ですら安全距離から魔法で一撃死させられるのだ。

魔法を使う事で得られる達成感も何もあったものではない。

一応、遠距離魔法無しの身体強化魔法のみで鬼級を何体か相手取った事もあったが、数回で肉弾戦でのやり方も覚え、達成感を得られなくなった。

金銭においても、既に十分な額を稼ぎ、その上でそれらを運用・増加させるための分体を態々作り、金策に奔走させているため、お金は増える一方だった。

幸い、税金に関してにはヒーロー協会を通して満額収めているため、特に捕まる様な事はしていないが、そういった方面でも既に手を出しているため、今更他の何かをする気も起きず、ただ日々を過ごしていた。

今現在、彼女達はヒーローとしての生き方にも余り意義を見いだせずにいる。

それはつまり、目の前のこの禿頭の男と同じと言う事になる。

一目見てその存在を思い出した少女は、ふと今の自分ならこの男に敵うのではないだろうか、と想着てしまった。

思いがあってしまった結果、彼女はサイタマにちょっとした掛けると言う血迷った事をしようと考えてしまった。

無論、後から冷静になって考えなおせば、それはこの世界の法則そのものに喧嘩を売る事であり、どう考えても自殺行動であったのだが、その当時の彼女はそれから頭に無かったのだ。

勿論の事、話の相手であるサイタマ氏には事が終わり次第に土下座を敢行し、謝

罪を行った。

後、壊してしまったサイタマの家財とかの弁償も。

斯くして、この世界最強の一撃男と転生チート魔法使い（女）との戦いはそんなグダグダな経緯で始まった。

……………

初めてサイタマがそれを認識したのは、彼が間もなく自宅のアパートへと着くと言う時だった。

恰好はお馴染みの白いマントに黄色いスーツ、そして赤いグローブとブーツと言う何時もの恰好。

丁度己の強さに飽き飽きし、ヒーローとしての自身の在り方に疑問を覚えていた頃の事だった。

不意に、本当に久々に、稲妻の様な悪寒が奔った。

それは自分の頭にまだ髪があり、今となってはデコピン一つで倒せる怪人にも四

苦八苦していた頃には良く感じていたもの。

即ち、生命の危機に対する直感である。

「ッ」

上体を反らす事で頭を下げると同時、鼻先を何かが掠めていく。

直後、自身の背後にあった電柱が綺麗に切断された。

「誰だ、お前。」

目の前に立っている、如何にも怪しい黒いフードの人物に、サイタマは問い掛ける。

これが怪人や悪人の類なら、名乗り返してくるものだが、どうやら目の前の相手は違うらしい。

「……………」

無言のまま、指先をついと動かす。

それをサイタマは跳躍する事で回避する。

先程と同じ、鍛え過ぎた自分の身ですら危うい斬撃が宙を奔り、また街の一部を破壊する。

こと此処に至って、サイタマも腹を括った。

元より戦場に身を置く者である、その決断は早かった。

「多少手加減はしてやる。」

相手が何者か分からない以上、殺して良い相手かも不明だからこそ、サイタマは手加減を選択した。

そして、彼にとってはジャブの一撃、しかし他者にとっては一撃で五体を碎き尽くす拳が放たれた。

「ッ」

だが、多くの敵を無感動に刈り取っていった一撃を、フードの人影は危なげなく回避した。

それを見て、サイタマは自身の中で何か熱いものが滾り始めたのを感じた。

お返しとばかりに謎のフードはその周囲に幾つもの魔法陣を展開、光の弾丸を雨霰と放ってきた。

それは人気の少ない乙市のゴーストタウンであるからこそ人的被害は出ていないが、一般人では肉片になるしかない程の威力を持った砲弾の制圧射撃だ。

だが、その程度の攻撃など、サイタマにとっては単なる目晦まし以下にしかならない。

勿論、サイタマの実力を知っている相手にとって、それは単なる目晦ましなのだが。

「フッ！」

ズドン、と腹を大きな衝撃が通り抜けていく。

空中だったために踏ん張りの効かなかったサイタマはそのまま吹き飛ばされ、数km先の廃ビルへと頭から突っ込んでいく。

だが、互いにダメージは無い。

当たり前だ、この程度は互いに序の口に過ぎない。

「ん？」

ガラリ、と瓦礫から何のダメージも感じさせないままにサイタマが身を起こす。

同時、何やら少し動きにくい。

見れば、自分の全身に光の環の様なもの絡みつき、自分を拘束している。

「なんだこんなもん。」

無論、サイタマにとってはそれ単体では意味は無い。

しかし、それに注目したが故に、サイタマは瞬時に空間転移してきたフードの人物に気付くのが遅れた。

「空間切断術式、並列、八重展開。」

先程出会い頭に向けられたサイタマの耐久力を突破可能な魔法が8、それぞれ異なる軌道で放たれる。

空間から僅か0。01m程度の空間を引き抜く事で斬撃とするその魔法は、単純な防御や耐久力では防げない。

幸い、ほんの僅かしか干渉しないため、空間に断続的な負荷をかける事はないが、その分発動の速さと術式の容量がその威力と貫通力の割りに極めて軽いため、こうして連射や一斉射撃に用いる事もある。

回避するしかないその八撃に、サイタマが取った手段は簡単なものだった。

パターンを読むとか、上手く隙間を潜り抜けるとか、安全地帯に陣取るとかそんなものではない。

「必殺マジシリーズ…」

ただ圧倒的な身体能力に基づいた、超高速の回避である。

「マジジャンプ。」

サイタマは全力でその場から真上よりやや後ろへと跳躍した。

そんな単なるジャンプは、しかしサイタマが本気でやれば、踏台となった地面は一瞬で陥没、崩落し、超音速域の挙動により周辺に衝撃波をばら撒きつつ、その身を一気に安全圏へと離脱させてみせた。

それをフードの人物は一瞬唾然として眺めたが、不意に口元を愉し気に歪ませると、自身もまた空間跳躍で以てサイタマを追跡した。

（さて、どーすっかなー。）

こっちはこっちで何だか楽しくなってきたサイタマは、あのフードの人物が次はどうしてくるかを考えていた。

（あれ、確か魔法って奴だよな？本物は初めて見たけどスゲーなやつぱ。）

何せモーションが一切読めないし、自身にダメージがありそうな攻撃をバカスカ撃ってくるのだ。

あのフードの人物が手練れである事を勘案しても、強力であると断言できる。

「よっと。」

軽い言葉と共に、サイタマが郊外の山へと着地する。

無論、音速を軽々と超えていた物体が着弾したせいで山肌は大きく抉られたのだが、そんな事を今のサイタマは気にも留めない。

何故なら、目の前に自分を楽しませてくれるかもしれない敵が現れたのだから。

「フッ！」

「おっと。」

とは言え、流石にタダで食らってやる訳にはいかない。

先程と同様の出会い頭の接近戦での一撃を今度は回避する。

その類稀な身体能力は、勿論動体視力にも当てはまる。

サイタマは超高速で展開される格闘技の殆どを防ぎ、或は回避していく。

普段なら棒立ちかある程度距離を保ち続けるのだが、先程の斬撃を飛ばす魔法を警戒して、サイタマは決して当たらない様にしていく。

「甘い。」

その動きから正確にサイタマの狙いを理解したフードの人物は、滑る様に宙を奔

りつつ次なる魔法を放つ。

それを見たサイタマは、直感の告げるままに横っ飛びに回避する。

直後、サイタマが先程までいた空間が球体状に歪み、その球体の中にあつたものが粉微塵になった。

空間の一部を引き抜くのではなく、破碎する。

これならサイタマの耐久力なら辛うじて対応可能かもしれないが、それでもダメージは免れないだろう一撃だ。

「あつぶねーな……?」

その光景に冷や汗を流したサイタマだが、不意に頭から感じる痒みに手を当てた。ヌルリとした感触に、手を前に持っていくと、そこにはグローブとはまた違った赤が付着していた。

……………

(これも避けるか。)



ハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！！」

ブワツと、その余りに大きな音量に周辺の瓦礫が巻き上げられ、吹き飛んでいく。その姿を見て、その脅威を感じて、その武力を理解して。

「く」

フードの人物は、口元が歪むのが抑え切れなかった。

「偽装解除。」

此処から先に偽装なんて無粋だと、柄にもなく判断した彼女は、その本当の姿を晒した。

眼鏡を外し、黒の三つ編みを解いてストレートにし右手には先端に槍の穂先のような深紅の結晶体のある杖を持ち、その腰元のブックホルダーには怪しげな魔道書が収められている。

惜しげもなくその美貌を晒し、妖艶でありながらも知性を感じさせ、その上で圧倒的な力強さも内包する彼女は、正しく御伽噺における魔法使い、魔女の姿だった。

不意に遠視ごしに目が合った。

「普通のパンチ。」

直後、大気を強引に引き裂きながら、高笑いを止めたサイタマが接近してくる。その拳の一撃を、拘束具でもあり、魔力養成ギプスでもあったローブを纏った時では出せなかった対物理特化の防御魔法、その200重並列展開で防ぎ切る。

ただの一撃でその過半を砕かれた事に驚きつつも、それ以上に笑いが止まらない。見れば、目の前のサイタマもそうだった。

楽しくて楽しくて仕方ない。

そんな悪童染みだ笑みを、顔全体で浮かべていた。

「連続普通のパンチ。」

次いで放たれた致命のジャブの嵐を、魔女は更に防御魔法を1000以上展開する事で防ぎ切る。

ああ、やはり自分の目には狂いは無かった。

魔女はこの男に挑んで良かったと、今初めてそう思った。

「身体は温まったかしら？」

「ああ、もう十分だ。」

互いに笑みを浮かべて告げる。

目の前の同類に、眼前の宿敵に対して、二人は漸く確信した。

ああ、こいつなら自分と戦えるのだと。

何の意義も感じられない弱い者いじめではない、本当の戦いが出来るのだと。

「第一種戦略級攻撃魔法、三重装填。」

「必殺マジシリーズ……」

弾かれた様に互いに距離を取った両者は、互いに出来る最大の攻撃手段を躊躇なく選択する。

魔女は国家単位ではなく、大陸すら破壊可能な戦略級魔法を放つべく、その正面に10m超の魔法陣を展開し、生成した時点であらゆる物質を消滅させる物質を弾頭へと加工していく。

サイタマは普段は決して使用しない全力の拳撃を放つべく、右腕を引いた。

「反物質生成完了……アンチマテリアルカノン、発射あッ!!」

「マジパンチ。」

その後の展開を詳しく描写する事は出来ない。

何故なら、この二人の戦いは人知れず始まり、人知れず終わったからだ。

残ったのは僅かな瓦礫の山と荒地のみ。

この日、乙市のゴーストタウンは完全に更地となり、地図が書き換えられる事が決定した。

これに対し、乙市議会はヒーロー協会に対して事態の調査を要請したものの、残っていたのは辛うじて何者かが戦闘したと思われる痕跡だけであり、事態の究明に繋がる事は無かった。

.....

一カ月後

「サイタマさん、ご飯できましたよー。」

「おう、今行くー。」

乙市内で辛うじて被害を免れた地に、二人は引っ越していた。

元々家財には余り執着しない性の二人は、今では同居して生活している。

何故こんな事になったのか、それはまた、別の機会に語る事にしよう。

「お、今日は鮭か。いいねえ。」

「偶々近くのスーパで安かったんです。さ、冷めないうちに食べちゃいましょう。」

嘗て鬱屈のままに殺し合った二人。

しかし、今の二人はどう見てもバカップルにしか見えないのを、周囲の人間達だけが分かっていた。

だが、そんな事はどうでも良いとばかりに、二人は今現在の幸せを噛み締めていた。

何か以前の東方転生と同じく迷走した感が強い（汗  
取り敢えず、日常編でもう一話やる予定です。

ヒーロー協会関係で微修正しました。

若い組織とは思ってたけど、予想以上に若かった件



## ワンパンマン転生 魔法少女が逝く 2

私の名前は魔法少女ハロウィン☆エリザ！

皆に夢と希望を魅せるヒーロー協会のアイドルよ！

まあ本体が人嫌いの気があるから、あんまり誰にでも甘い顔してるって訳じゃないけどね…。

と言うか、根本的に根暗な本体の影響をガッツリ受けている身としては、魔法少女として明るく振る舞うのは正直きついわ、マジで。

一応、モデルとなった英霊の人格や技能面のみを召喚して憑依させてる訳だけど、この肉体に関してはマジで本来のものよりもチートスペックなのよね。

英霊、っていうかサーヴァントにおけるステータスが幸運を除いて殆どA、しかも本体の影響もあって魔法に関してはメディアとかのガチ優秀な魔術師にも負けないくらいだし。

まあこの世界じゃスペックだけなら探せばいる程度なんだけどもね！

それは兎も角として、本体がサイタマさんと戦ってから一週間が過ぎた。

その間、私達分体は殆ど動けなかった。

と言うのも、本体が生命維持に支障が出る位に魔力が枯渇したものだから、逆に私達の方から供給していたからだ。

その間、私と金策担当の分体は魔法の使用を控え、ずっと待機していた。

それは魔力の消費を抑え、少しでも多く供給するためのものだが、それ以前に本体のやらかしを咎めるためでもあった。

少なくとも、本体が死ねば分体である私達は問答無用で死ぬのだから、怒るのは正当な権利だ。

んで、本体が目を覚ましたのを感じた同時、すっ飛んでいった。

「それでさー」

「そうなんですか？」

「」

私は何を目撃したと思う？

病室のベッドの上で包帯であちこちを固定した本体（悔しいが、本当にスタイルの良い美少女で羨ましい）が、この世界で紛れもない最強の男と親しげに話してい

る場面。

この世全てを蔑んでいた様な目をしていた本体が恋する乙女の様な、否、真実恋する乙女となって禿頭の男と病室で会話してる所よ！

(おうちよつと本体、話聞かせなさいよ。)

(ん？ ああエリザじゃない。ごめんなさいね、今手が離せなくて。)

知ってるよ！

っていか病室の外で待機してるよ！

ほら、今お前の事監視してるもう一人の分体も呆れてるよ。

(ニハハハハ、まさか本体がこんな事になるとは…このウィル子の目をry)

(節穴ネタは置いといて…で、何があつたのよ?)

(じゃあ記憶共有するから、二人とも見ててね。)

そして、本体からのフィードバックを受け……………ウエエエエエエエエエエエエ

エエ!?

(あんた、何ワンパンマンに喧嘩売ってんのよ!?! しかも乙市壊滅してるし!)

(いやー薄々予想してましたけど、これは酷いですねー。)

いや、本当に酷い。

ストレスがつつり溜まつてるからって、何でサイタマさんにそれをぶつけて解消するって斜め上の答えに至る訳!?

それじゃあの傍迷惑な宇宙人の親玉と一緒にじゃない!

(いやあ)

(いやあじゃない!)

そして何でサイタマさんとそんな親しそうなのよ!

こっちが毎日仕事で死ぬ思いしてなのに、ストレス溜める位ならあんたもこっち来て手伝いなさいよマジで!

(でも、収穫はあったよ?)

(だろうね!)

何せサイタマさんと凄く親しくなってるしね!

正直、原作ファンとしてはそこ代われと言いたくもある!

(で、何処まで行ったんですか?)

ウィル子がニヤニヤと擬音が聞こえそうな声で念話してくる。

しかし私も少女、他人の恋バナは是非とも聞いてみたい。

(えと、その、そういうのはまだ早いかなくて…)

(子供か!?)

って、そういや前世含めてこいつ恋愛経験無いんだった!

経験値的に見れば完全に子供だった!

(まあ取り敢えず理由は解りましたから、本体はゆっくり養生するとよいのです

よー。)

(そうね、それじゃあ二人は通常業務に戻ってもらうわ。ただ、私が本調子に成り次第、分体をもう二人作るから、それは覚悟しててね。)

驚いた。

現状、分体の作成はこれ以上するつもりはない予定だったのだが、どんな心境の変化があったのだろうか?

いや、恋心を覚えるとか、本体にとっては驚天動地なのだろうけど。

(分かったわ。こっちは取り敢えず通常業務に戻るから、そっちは安静にしてなさい。)

(了解なのですよ。でもでも、何時かは私達も紹介してほしいのですよ。)  
(分かっている。退院して時間が出来てからね。)

そう告げて、その場は解散した。

「ん？あの二人、知り合いだったのか？」

「あ、気付いちゃいました？すみません、仕事の関係で…。」

「良くなって良くなって。お前が何か大変そうなのは分かってるし。」

「サイタマさん…。」

気づかれてた事に驚けば良いのか、早速イチャイチャが始まっている事に驚けば良いのか、本当にこの二人と来たら…。

なお、本体は退院までの一週間、見舞いに来てくれるサイタマさんとイチャイチャし続けた事を此処に明記しておく。

……………

乙市壊滅から二か月後、引き続き調査に当たっていたSランクヒーローの一人である魔法少女ハロウィン☆エリザから一つの報告書が提出された。

内容は簡単なもので、「名も知れぬ科学者が乙市のゴーストタウンで反物質に関する研究を行っていた」と言う内容だった。

当初、これに対してヒーロー協会上層部は信憑性が薄いとして調査の続行か打ち切りかを考えたが、続く報告に度肝を抜かれる事となる。

「私の師匠が簡単に魔法少女になれるアイテムを作れる人材を連れてきたんだけど……配って良い？」

人材の確保に四苦八苦していたヒーロー協会上層部は、心臓が止まる程の驚きに包まれた。

一部の職員は本当に止まりかけたが、それでも気合で復活して渡された資料に目を通す辺りは流石と言える。

内容はハロウィン☆エリザの師匠が育てた魔法の道具、礼装の作成に特化した人材が作成した専用礼装についてだった。

この礼装は簡易ながらもAIの様な人工知能としての機能を持ち、同時に持ち主

の魔法の才能を引き出し、持ち主に最適な魔法を行使する補助を行う。

その結果、持ち主はその補助礼装の恩恵により、適正さえあれば、簡単に魔法を使う事が出来ると言うものだった。

この補助礼装の存在に、上層部も流石に頭を抱えた。

ヒーロー協会としては是が非でも人材は確保したい。

そのため、本音で言えば手っ取り早く人材を確保できる手段は諸手を上げて受け入れたい。

同時に、適正さえあれば「誰でも」と言うのが癖者だ。

文字通りの意味なら、犯罪者や悪党、怪人にも補助礼装は反応してしまうと言う事だ。

また、適正が高いからと言って、年少者や傷病者、高齢者に殆ど荒事と言うヒーローの仕事を任せるには不安が大きいと言う声もあった。

そのため、ヒーロー協会はこの補助礼装の作成者と師匠を協会所属のヒーローへの勧誘と同時に、補助礼装を渡す相手はヒーロー協会へと試験を受けにやってきた満16歳以上60歳以下の女性への適性検査を実施し、本人の希望があった場合のみ

補助礼装を貸与する事を条件に決定した。

これに対し、ハロウィン☆エリザは条件付きで承諾した。

それは師匠と礼装作成者、更にもう二人をSランク待遇でヒーロー協会を迎える事だった。

師匠と礼装作成者ならまだ分かるが、もう二人の実力に関して疑問を掲げる上層部に対し、エリザは「師匠と同等の実力者。単体戦闘能力のみ抜き出せば、確実に師匠よりも上。後、師匠の良い人。おまけに私の妹弟子。」と言う発言に、大体の事情を察した上層部は色々ツツコミたいのを飲み込んで、その条件を全て了承した。

結果、翌月のヒーロー協会主催のヒーロー採用試験はハロウィン☆エリザの人気にあやかり、満16歳の少女達の記念受験者が大量に溢れ、各支部の職員が連日デスマーチを熱唱する羽目になった。

.....

「ヴィータさん！また追加発注です！」

「またか!? ええい何時まで経っても終わらねーじゃねーか！」

師匠と言われる女魔法使いの派遣した三人目の分体、礼装作成に特化した三体目の分体であるヴィータは汗だくになって工具を振るいながら職員へと叫び返した。

（作られてからこっち、休む暇がない！）

給料が高いのも、仕事がたくさんあるのも良い。

しかし、多すぎるのは良くない。

魔法少女希望者の書類選考で地獄を見ている事務方と共に絶賛デスマーチ中のヴィータは顔を引き攣らせた。

それが役目であり、やりがいのある仕事だとしても、ブラック労働環境は今すぐ止めてほしかった。

（とは言え、こちらの想定以上の量だな。これなら本体も満足するだろ。）

現在作成している補助礼装、外見は掌サイズのガラス玉だが、通常の才能開花や防具形成、形態変化を始めた機能がある。

特に重要なのが何重にも設けられた安全機構だ。

一つ、分体及び本体に対しての敵対行動の禁止。

二つ、分体及び本体の任意で機能を停止可能。

三つ、心身に重度の支障がある場合、機能の停止、或は緊急帰還機能の強制発動。代表的なものとしてはこれらであり、他にも所有者の体調管理に魔法行使時の演算補助等が挙げられる。

そして、本体と分体達しか知らない機能として、魔力及び魔法の徴収が存在する。前者は使用した魔法の0。1%を常に礼装を通じて集められ、一度ウィータを通して「毒見」した後に本体へと供給されていく。

これにより、本体は更なる魔力源を得た訳だが…

(あんまり意味がないんだよなあ…)

これは本体が利益を得るためのものではない。

寧ろ、緊急時には本体の方から逆に魔力を送り込むための機能なのだ。

元々、第二魔法とか言う並行世界から魔力を持ってくる事も、第二種永久機関ばりに自身の放った魔力をまた集める事も可能な本体に、この程度の些細な魔力供給源は必要性が薄いのだ。

だが、後者は違う。

前世で見た各作品の魔法や超能力、或はそれらを組み合わせたものを魔法で再現して使用する本体だが、その想像力には限界がある。

となれば、若く柔軟な発想を持つ者達からアイデアを拝借した方が遥かに多様な魔法を生み出す事が出来ると考えたのだ。

これには補助礼装、暫定呼称「デバイス」が使用者の才能と適正から、最適な固有の魔法を生み出すと言う性質もあり、大いに役立っている。

実際、既に100人近い魔法少女が誕生しているが、彼女達の持つデバイスに登録された固有魔法は次々と本体のライブラリに登録されている。

魔力と魔法、唯でさえチート級に強いのに今なお上を目指し続ける。

その研鑽には敬意を表するが、動機が不純…否、或る意味純粹過ぎるのがヴィータには困りものだった。

（『サイタマさんに失望されたくないから…』とか言われてもさあ…。）

すっかり恋する乙女となった本体の言動に、ヴィータは口の中が甘くなる錯覚を味わってしまう。

自己鍛錬だけでなく、こうした点でサイタマとの実力差を埋めようとするのは感心なのだが、理由が余りにもアレ過ぎる。

「よし、第27発注分はこれで完了だ。次の材料を持ってきな！」

それは兎も角、自分は自分の役目をすべきだと槌を振るった。

「ヴィータさん、また追加発注です！」

「…ちょっと待て…少し休憩する…。」

でもこれは無いんじゃないかね？とヴィータは思った。

……………

「はいそこ！魔法使用時はちゃんと周囲の安全確認！射線上に民間人がいるわよ！」

ヒーロー協会の支部の一つ、その訓練用設備でハロウィン☆エリザは成り立ての魔法少女達へと訓練を課していた。

「は、はいいい！」

「よし、そのまま射線がぶれない様に、しっかりと標的を意識しなさい！細かい照準は礼装がしてくれるから！」

体力面は時間をかけて鍛えていくしかないが、戦闘における心構え等は直ぐにでも鍛えるしかない。

戦闘時、体力も魔力も武器も技術もあっても、精神面が伴っていなければ、そいつは戦場で役に立つ事は無い。

某白い魔王の様なメンタルを持つとは言わないが、もしもの時に民間人を守れる程度には精神面が成長してほしい。

そう考えたエリザは持ち前の汎用性を生かして、特化型の多い魔法少女の教導役に就いていた。

とは言え、彼女自身には教導の才能なんて無いので、専ら本体が幼少期に培った魔法使いとしての基礎訓練のみなのだが。

だが、それでも魔法少女の卵達にとっては自分は憧れの相手であり、訓練内容もまた初めてのものであり、戸惑う姿が多く見られる。

(ま、それも今の内だけよね。)

未だ精神が熟していない16歳と言う多感な時期に魔法と言う自分の思うままに出来る超常の力を手にする事。

それがどれほどの中毒性を彼女達に与えるのか、それを考えると少々頭が痛くなる。

(中毒になるのは仕方ない。でも、それに溺れてもらうのは困るのよ。)

調子に乗って犯罪行為に走る様なら、その時点で補助礼装から警告が本体と分体に届き、別命あるまで強制停止される。

それにより、各種魔法の使用も不可能になるので、簡単にお縄に出来る。

なお、犯罪行為の規定に関してはこの国の法律と地域の行政がほぼそのままである。

「よし、次は模擬戦行くわよ！ターゲットの召喚獣を出すから、皆頑張って捕まえて！」

「「「「はい！」」」」

.....

その日、ヒーロー協会職員一同は新たにSランクに入る三人を見た時、一様に言葉を失った。

否、三人ではなく、エリザを加えたその一行に、その一行の中心にいる黒い魔女の姿に言葉を失う程に見惚れていたのだ。

黒い装束に身を包み、その右手に水晶の様な穂先を持った杖を携え、腰には重厚な革の装丁の魔道書の嵌まったブックホルダーを提げている。

外見年齢は20代前半、しかしあのエリザの師匠と言うからにはその外見すら当てにならない。

黒い艶やかな長髪に同色の瞳、白磁の肌に女性らしい凹凸と柔らかさに富んだ肢体。

口元に施された真紅のルージュは薄目の唇を華麗に彩り、強固な意思を感じさせる瞳は見る者すべてを魅了する妖艶さを放っていた。

無論、本人に周囲を誘惑するつもりは一切ない。

ただ（サイタマさんに私の頑張ってる所を見てもらいたい！）と言う乙女思考

の下、色々と気合を入れて化粧しただけだった。

まあその時使ったものに魅了効果を持つものが多数含まれていたため、職員らが目を奪われるのも致し方なかった。

「失礼、アポイントを取っていた者ですが……」

「は、はい！ たたた只今ご案内致しますです！」

直々に声を掛けられた職員は慌てふためき、時々躓きながら何とか案内していった。

それを咎める者はいない。

何せ、自分が声を掛けられても魂消て何の反応も返せないだろうからだ。

……………

「サイタマさーん、ご飯できましたよー。」

「おーう、今行くー。」

乙市の外れにある高級賃貸住宅の一室にて、同居人の作った夕飯の香りを感じ

ながらサイタマは思う。

どうしてこうなった、と。

『すみません、私の我が儘に付き合わせてしまってます。』

『いや、良いよ。オレだって楽しかったし。』

あの戦いの後、満身創痍のまま疲労困憊で気絶した女魔法使いを病院へと連れていき、自分もそのまま入院した。

しかし、自分はものの三日で全回復したが、一緒に入院した女、否、寝顔を見るに少女の方は一月も昏々と眠り続けた果てに漸く目を覚ました。

彼女は一方的に戦いを仕掛けた事、そして家財の一切合切及び街を破壊してしまつた事を詫びた。

そんな彼女にサイタマは問うた、どうしてあんな事をしたのかと。

『私は：自分が一番強いんだなって思っていました。だから、この世界にはもう私と楽しく戦ってくれる人はいないんだって。これからは戦っても何も得られないだつて、そう思っていました。』

『そんな時に、貴方の事を見つけたんです。』

『初めて見た時はびっくりしました。私よりも強いんじゃないかって人に、初めて会いましたから。』

『この人なら私と楽しく戦ってくれるんじゃないかって、そう思ったんです。』

『そこからはもう止まれませんでした。貴方と戦う事ばかり頭に浮かんで消えなくて……もう我慢できませんでした。』

その感情には、自分も身に覚えがあった。

自分は強くなった。

弛まぬ鍛錬の果て、自分は強く成り過ぎた。

それこそ誰も敵わず、虚しさを覚える程に。

嘗て目指した理想すら、霞んでしまう程に。

サイタマはすとんと納得した。

彼女の抱く悩みは、自分も抱えるものだった。

成程、あの戦いがあんなにも楽しかったのは、互いに互いの虚しさを解消できた故だったのだ。

『そっか。』

一度納得したと頷き、

『でも、悪い事は悪い事だ。これからは償いをしろよ。』

『はい！』

しかし、ヒーローとしての言葉を口にした。

それが大人として、自分で課したヒーローとしての在り方だったから。

そして、彼女もまた肯定した通りに行動した。

実際、退院後の彼女の動きは迅速であり、部下？の少女二人に命じてZ市の復興費用を捻出したり、焼け出された被害者へと迅速に支援物資を送り届けたり等、如才なく償いを行っていた。

『あ、そう言えば名前。』

『名前：ああ！そう言えば名乗ってませんでしたね！』

『オレばっか知られてちゃ不公平だろ。』

『そうですね。私の名前は倉土灯です。よろしくお願いしますね、サイタマさん！』

『おう、よろしく。』

そして、あれよあれよと言う間に、彼女は自分がフロアごと借りている高級マンションの一室にサイタマを住まわせてしまった。

巧みな話術に乗せられてしまったサイタマであったが、相手が卒業間近の高校生と言う事もあり、何とか一線を保ったまま生活をしていた。

まあ衣食住を世話になっている時点で、かなり浸食されているのだが…。

(リアル女子高生に手え出すとか洒落にならねえぞ…。)

サイタマの悩みはこれに尽きた。

マンション内では学校に行く時と同様の三つ編みに眼鏡だが、学校の制服ではなくラフな私服の上に可愛らしいエプロンを纏い、すれ違うと何かよく分からない良い香りをさせている美少女。

どう考えても二十代半ばの成人男性と一緒に暮らすべき存在ではない。

況してや相手はこちらに純粋ながらも熱烈な好意を向けている、限りなくOKに近い存在だ。

正直、何時理性が敗北するか気が気じゃない。

「はい、今日は肉じゃがと揚げ出し豆腐ですよ。」

満開の笑顔で自分を迎えてくれる彼女を見ると、どうしても今の生活を壊したくない、そう思ってしまった。

自分並に強く、美しく、気立ての良い家庭的な女性。

この世界の何所を探してもいないであろう女性に、恋愛事に耐性のないサイタマは早々に絆されていった。

---

サイタマがちよろい？

いや、自分の悩みを理解してくれる気立ての良い家庭的な女性がこっちを好意全開で見てるんだよ？

こんな据え膳どころかフルコース、どんな草食系だってぐらぐらきますがな。

## ワンパンマン転生 魔法少女が逝く 3

本日は二回投稿してます

魔法少女の募集を開始して一月、ヒーロー協会に所属する魔法少女の数は100を超えた。

それはデバイスと言う補助礼装の利便性の高さ故であり、この世界の人類の元々の才能の高さ故であり、既に魔法少女として公の場で活躍していた者達がいるが故だった。

魔法少女の草分けにして、公的には初めて存在を確認された魔法少女であるハロウィン☆エリザと、同格のドヴェルク・ヴィータとWill・CO21、そして彼女達の師匠。

ハロウィン☆エリザは人格・能力共に分かり易い魔法少女であり、善良な少女だ。ドヴェルク・ヴィータはやや取っ付きづらい印象だが、やはり善良であり、今日

も槌を振るってデバイス作成に精を出している。

問題なのは残りの二人だった。

Will・CO21、彼女は電子戦に特化しており、自らの身体を電子へと変化、ネットの海に潜り、世界中の情報を収集している。

だが、彼女は極めて厄介な事に悪戯好きであり、特に理由もなくサイバー犯罪を起こしたりもする。

無論、悪戯で済まされる範囲で済んでいるのだが、被害が無い訳でもない。

とは言え、そこまで深刻ではないので、大して問題視されてはいない（単に他に問題児が多数いると言う声もあるが）。

問題なのは、彼女達三人の師匠にして、その経歴の一切が謎に包まれている女性だ。

次元の魔女、とも言われる彼女は、他の三人が少女であるのに対し、成熟した若い女性の姿をしている。

しかし、そのカリスマ、美貌、貫禄たるや、ヒーロー達の中でも群を抜いて…否、はつきり言って人を支配する力と言う面では、アマイマスク以上のものを持っている

ると言っても過言ではない。

本人が世界に対してそこまで強く関心を持っていない。たった一人の男性ヒーローにご執心な事はヒーロー協会関係者なら誰しも知っているため、問題らしい問題は出ていないが、既に彼女は100を超える魔法少女達のTOPに立つ者であり、相応の責任と言うものがある。

それはフブキ組やタンクトップマスターの舎弟達のような、質の悪い存在となる可能性だった。

軽犯罪程度ならまだ良いが、他のヒーローを潰し、人員を無駄に減らされる様な事態は避けたい。

なまじ、訓練を終え、魔法の習熟さえ終われば、即座にC〜B程度の實力を發揮できる魔法少女を多数抱え、今後も増加する見込みの高位がために、他のヒーロー達との諍いや内部での主導権争いの発生する可能性は高く、ヒーローの健全な活動を期待しているヒーロー協会にとって、魔法少女組の動向は気がかりだった。

そこで、ヒーロー協会はその懸念を初期メンバーにおいて最も人当たりの良いハロウィン☆エリザにそれとなく聞いてみた。

それに対し、人の上に立つ者としての教育も受けているエリザはあっさりと答えた。

「それはもう対策済みよ。基本的なルールは実際の法律に基づき、魔法をむやみやたらに使用しない。これが魔法少女の絶対条件。態々デバイスに簡易的な式神としての機能を持たせたのは、そういったおバカさん達対策よ。少なくとも、言い訳のしようのない犯罪を犯した時点で、デバイスは機能を停止、魔法少女の資格は剥奪されるわ。」

それは今現在も増加する魔法少女達にとって、どれ程の衝撃となるか、見当もつかない事実だった。

だが、必要な措置でもあった。

未だ夢見る年頃の少女達が、ある日突然不思議な力に手にするのだ。

しかも、彼女達の持つ魔法は殆どがオンリーワンの固有なものであり、中には空間移動やヒーリングなど、戦闘には向かないが、それでもとてつもなく便利なものもある。

例え訓練をしたとしても、そう言った力に溺れないと誰が断言できるだろうか？

否、確実に誰か溺れる者が出ると、そちらの方が断言できる。

「でも、デバイスを停止しても、一度習得した魔法は消える訳じゃない。単に演算を始めとした補助をデバイスがやっているから使えなくなるだけ。そういった事を含めて、本当の意味で魔法使いとなった連中はデバイス無しでも魔法を使えるようになる。勿論、そう簡単に使える訳じゃないし、より厳しい訓練が必要よ。」

その情報に、ヒーロー協会は慌てた。

唯でさえ強力な者が多い魔法少女に、まだ上がある？

しかも、そいつらはデバイスの停止と言う鬼札が効かない？

それはもう魔法少女と言うよりもタツマキの様な超能力者に近い。

流石にSランク程ではないだろうが、それだけの人員を監視・運用する手間を考えると頭が痛くなった。

「あ、ちゃんともしもの時用の抑止力もいるわよ？」

へ？と間拔けな声を上げる職員に、エリザはちゃんと丁寧の説明した。

曰く、師匠の直弟子は自分を含めて5人いるのだと。

自分と言う汎用特化、ヴィータと言う作成特化、ウィル子と言う電子戦（と言う

か情報戦）特化に対して、最後の二人は完全な戦闘特化なのだ。

また、二人は師匠がやらかした時に止めるための役割も持っており、基本的に正規のヒーローとしては活動する事は無いのだとも。

「あの二人に関しては本気で私も解らないわ。ウィル子なら何か知ってるでしょうけど、絶対に言わないだろうし……まあ気にしても仕方ないわよ。」

言うべき事を言って、エリザは教導へと戻っていった。

その細い背中と揺れるしなやかな尾を見送った協会職員はこう思った。

どれだけ引き出しがあるんだよ、と。

……………

「黒、白、行きましょう？」

「……………」

ある日、復興の進んだ乙市の商店街に、品の良い若妻と二人の子供が並んで買い物を楽しんでいた。

若妻は眼鏡に三つ編み、野暮ったい服装が残念だが明らかに容姿が整っており、二人の子供はそれぞれ母親と言うにはやや若すぎる位の女性と手を繋ぎながら、穏やかに商店街を歩いていく。

「おーい、終わったぞー。」

「あ、サイタマさん。」

そこに、禿げ頭の男が合流すると、母親は本当に綺麗な笑顔で歓迎した。

その手にはスーパールの買い物袋があり、彼が会計をしていた事が伺える。

「すみません、私が並ぶつもりでしたのに……。」

「いいって。二人を連れてちゃ他の人の邪魔になるしな。」

大好きな父親が合流したため、子供二人は白と黒がそれぞれ母と父の隣へと並ぶ。

決して二人の間には立たない。

何せ、そこは二人が手を繋ぐための空間であり、子供である自分達でも入るべきではない場所だからだ。

「……サイタマさん、肩車ー。」

「……お姉ちゃん、手つなごー。」

「おう、いいぞー。」

「はいはい。」

夕暮れの商店街を四人がのんびりと歩いていく。

それは何処にでもある、なんてことの無い、しかし尊い幸せの形だった。

「ギギギギギギ……。」

「なんであんなハゲが……。」

「モゲロモゲロモゲロモゲロモゲロ……。」

だが、夫婦間の容姿が余りにもかけ離れているため、周囲から殺意の波動を向けられていた。

「白子、黒子、お仕事はどう？」

「…無かった。」

「…暇。」

「そう、なら今日はもうゆっくりしまししょうね。」

「はい。」

二人の子供の名は、栗光白子と黒子。

やたら無表情な白髪と青い目、黒髪と赤い目を持った二人の幼女は四体目と五体目の分体であり、本体にすら届き得る可能性を持ったイレギュラー、ドミナント、運命の破壊者である事を、今はまだ誰も知らない。

序でにサイタマ含むこの四人が夫婦ではなく、単なる同棲相手である事も、誰も知らない。



## FGO×デモベ 第4話

本日二度目の投稿です

何とかマッシュが宝具の疑似展開に成功した後、泣きじゃくるオルガマリーを抱えながら、一同は大聖杯の眠る山、円蔵山へと到着した。

そして、大聖杯とセイバーのいる洞窟へと向かおうとしたのだが、山頂の寺へと続く石段を登ると、一人のサーヴァントが待ち構えていた。

サーヴァント・アーチャー。

セイバーに敗れ、彼女に付き従う正体不明ながらも強力な弓兵のサーヴァントだ。

「よう、相変わらずあのセイバーを守ってんのかい?」

「口が減らん輩だな、貴様も。槍が無い身で勝てるんでも?」

既知なのか、二人は軽口を叩く。

しかし、その目は油断なく互いの隙を見出そうとしており、この会話すら戦闘の

ための駆け引きだった。

まあ、旧知の間柄だからというのものもあるのだが。

「とは言え、流石に私も多勢に無勢ではな。」

瞬間、オルガマリーの後頭部目掛け、石段の入り口付近から黒塗りの短剣が飛来した。

「所長！」

それに気づいたマシユは空かさず盾で短剣を弾いた。

だが、急な一投に態勢を崩した彼女の主へと、空かさず大量の鎖が触手の様に伸びていった。

「■■■■！」

それをバーサーカーが右腕をガトリング砲へと変形、迎撃する。

飛来する無数の銃弾に、鎖はその全てが撃ち抜かれ、砕け、力無くエーテルへと消えていく。

「テメェ……！」

「おいおい。まさか自分達だけだと思ったのか？」

物量差が覆し難いのなら、増援を呼べばよい。

不意打ちで一人も落ちなかったのは残念だが、サーヴァントの数の上では互角な  
ら問題はない。

「ではクー・フリーン、決着を付けようか。」

「嬢ちゃん！お前はマスター達の護衛に徹しろ！」

瞬間、アーチャーが大量の剣を虚空へと投影、そのまま射出する。

それは目の前のクー・フリーンにも放たれるが、矢避けの加護を持つ彼は当然回  
避する。

だが、その一部は後方のマスター達へと襲い掛かる。

「っ、前後を挟まれてる！このままじゃ不利よ！」

事態の解決を急いだ余り、敵戦力の集結を許し、挟撃されてしまった。

完全に指揮官であるオルガマリーの失態だったが…

「がはあ!？」

鮮血と共に、虚空から断末魔の叫びが漏れ出た。

見れば、そこには伸長したバーサーカーの尾の先端に生えた無数の棘により、串

刺しにされた白骨の仮面を被った黒装束の男、山の翁の一人であるハサンの姿があった。

「ば、かな…。」

シャイターンに呪われた右腕による霊核への直接攻撃をこそ宝具とする呪腕のハサンは、しかし最後には何も成せぬままにその腹を貫かれて消えていった。

「……………」

自らの尾を地面へと刺し、掘り進ませ、不意打ちで暗殺者を仕留めてみせたバーサーカーはアサシンを屠った事にも関心を示さず、ただ淡々と自分の成すべき事を行っていく。

具体的には両腕をガトリング砲へと変化させ、自分達の登って来た参道全体を満たす様に弾幕を形成した。

「くっ！」

その弾雨を前にして、霊体化していたランサー・メドゥーサが慌てて実体化する。「やってくれますね！」

発射され続ける弾丸、それらは全て対霊弾頭であり、実体を持たない存在、既に

死してこの世にいない存在には格別に効く。

先程まではストッピングパワーを優先した通常弾であったのだが、耐久力はそこまで高くないメドゥーサ相手なら、こちらの方がよく通る。

とは言え、最速の槍兵で現界したメドゥーサは、その悉くを回避していく。

被弾を前提とすれば接近も可能だが、相手は正体不明の狂戦士と未熟なれど盾兵の二人、迂闊な接近は避けたかった。

その辺り、狂化で理性の落ちていたアサシンに比べ、自己保存と言う点では彼女はマシだった。

まあそれは女神としての気位の高さに由来するものなのだが。

(それに、私はあくまで時間を稼げばよいですしね。)

そう、自分は本命が此処に到達するまでの足止めに過ぎない。

終わればすたこらさっさと撤退せねば、巻き添えを食いかねない。

(遠方から接近する反応を確認。これは…)

(バーサーカー、それもヘラクレスか。)

(シャドウサーヴァントだから宝具は無くても、対界宝具並の身体能力は劣化して

でも脅威だし、ここで仕留めるべきじゃね？)

(だな。仕方ないが、火力で一掃する。)

(アイ・サー。)

ガコン、とバーサーカーの肩部コンテナの上面が開き、VLSからミサイルが次々と発射され、ランサーへと降り注いでいく。

無論、高い敏捷性によって回避されるのだが、狙い通りにばらけたミサイルは広範囲に爆風を発し、僅かながらランサーの機動を制限する。

それで十分だった。

「■■■■。」

「ガッ!？」

バーサーカーの右腕、三本のレールから成る開放型のバレルへと変化したそれから弾丸が発射される。

紫電を撒き散らしながら音速の12倍で飛翔する弾丸は発射音を置き去りにして、動きが僅かに鈍っていたランサーの左足を消飛ばした。

「こんな、所で…。」

足が死に、盾も無い槍兵の死に体を見逃す程、バーサーカーは耄碌していない。続く左腕のガトリング砲により、あっさりとランサーは挽肉へと加工された。

「■■■■■■■■■■——ッ!!」

ビルを突き破り、僅かに残っていた肉片を踏み散らして、冬木のバーサーカー、ギリシャ最大の英雄たるヘラクレスが参道へと到着した。

「敵アーチャー、撃破しました!」

「バーサーカー、時間を稼いで!」

その危険性を見抜き、状況が動くや否や、オルガマリーはあっさりと自身のサーヴァントを捨て駒にした。

強力だが足手纏いである自分達を気にしてバーサーカーに防戦させるよりも、此処は一時分散し、キャストとは言えクー・フリーンとマッシュの二人で騎士王に挑む事を選択した。

「よし、行くぞ嬢ちゃん達! 此処はデカ物同士に任せな!」

「は、はい! 行きましょう、マスター!」

「バーサーカー、頑張つて!」

そして、カルデアの一行はそのまま参道を逸れ、この冬木市の大聖杯へと続く洞窟へと向かっていった。

.....



轟、と果ての無い斬撃と打撃の応酬に、既に参道は見る影もない程に碎け散り、吹き飛んでいた。

冬木のバーサーカー、ギリシャ最大の英雄、ヘラクレス。

カルデアのバーサーカー、青銅魔人、**■**タク**■**ン。

ヘラクレスはその斧剣と五体で、青銅魔人はプラズマブレードへと変形した両腕に尾で。

互いに一步も譲らずに、高いステータスのままに攻撃を繰り出し、繰り出された攻撃を弾き返す。

自然、発生した衝撃波は周囲へと飛び散り、余波だけで周辺の森の木々がなぎ倒され、地面が耕されていく。

(どうする？とっとと終わらす？)

(いや、あくまでチクタクマンとしての機能のみで戦おう。覗きが気になる。)

(あいあい。)

遙か遠く、時間と空間を飛び越えて、こちらを監視する者がいる事を、二人は察知していた。

無論、生半可な霊視では自分達の本質を掴むなんて事は不可能だ。

況してや千里眼の類にしてはやや精度が低い事もあり、偽装する事は難しくはない。

(態々覗き屋に見せてやる必要も無い。)

(んじゃーこのままグダグダ？)

(いや、とっととケリをつける。K粒子の使用を求む。)

(マジで？)

(どうせなかった事になるんだ。はっちゃけても構うまい。)





「中々だが、無意味だ。」

ガコン、と夜色の刃金は球体を開放型バレルで連結した様な武器が左背面から展開される。

そこに翠色に輝く粒子が集い、一点へと収束し、同時に機体本体からも粒子を吸収していく。

狂戦士は悟った。

あれは不味い、あれは撃たせてはならない。

「■■■■■■■■!!」

狂戦士は跳躍し、刃金に近い位置まで飛び上がる。

しかし、高度を上げる事で、刃金はあるとその剛腕から逃げ切ってしまう。

「■■■■……!」

苦し紛れに投擲された柄も、しかしあっさりと翠色の粒子によって構成された障壁によって弾かれてしまう。

「チャージ完了、ファイア。」

先程の一斉射撃とはまた違う、翠色の猛毒の光が膨大な熱量と共に放たれた。

だが、それを防ぐ術も避ける術も地へと落ちていく最中の狂戦士には無かった。そのまま、あっさりと貫かれ、爆散した。

(コジマ粒子の回収と非活性化開始。)

(モードを通常へ移行。合流するぞ。)

嘗て世界を破滅させた力をしまい込み、己の力の過半を封じて、灰色の王はその場を去った。

---

色々と小ネタのある回でしたw

今回変形したのはACC4、ACFA出典の03・AALIAHです。

武装はライフルにレーザーライフル、肩ロケットに背面のグレネードキャノンとコジマキャノンです。



## FGO×デモベ 5話

「おや、まだ気づいていなかったのかい？」

「君は肉体を無くした事で、初めてレイシフトとマスターとしての適性を得たんだよ。」

「私からの最後の手向けだ。せめて君の大切なカルデアスに直に触れさせてあげよう。」

冬木の大聖杯、墜ちた騎士王を倒したカルデア一行の前に現れたのは、彼らも知っている顔だった。

正体を現したカルデアの副所長にして技術部門のTOPであるレフ・ライノール・フラウロス。

彼の手にした立方体、この冬木へと落とされた聖杯によって、オルガマリーは空間を繋げた先のカルデア、そこにあるカルデアスへと接触させようと動かされ、オルガマリーの身体は浮かび上がり、近づいていく。

「止めてレフ！カルデアスなのよ!?それに触れたら…」





らだ。

その腕に所長を抱えたまま、バーサーカーは安全圏へと着地した。

「あううあああああああああ……！」

隠す事もなく、嗚咽を上げて泣くオルガマリィ。

それも仕方ない。

例え魔術師と言えど、彼女は今しがた予想だにしない方法で死にかけていたのだから。

「ふん、興奮めd」

嫌悪に顔を歪めたレフが、そのセリフを吐き切る事は無かった。

何故なら、次の瞬間に彼の全身が風穴だらけにされたからだ。

「■■■■……」

怒りの感じられる唸り声と共に、バーサーカーの右腕から弾丸が間断なく発射される。

発射されるのは先程までのガトリング砲ではなく、大口径の散弾砲だ。

残ったのは単なる挽肉であり、それがレフだった証拠は辛うじて原型を留めてい

る彼の被っていた帽子だけだった。

その惨状に、今日一日戦いづくめだったマッシュと立香の顔も青ざめている。

『つて、不味い！特異点の崩壊が始まる！皆、意識をしっかりと持っていてくれ！』  
衝撃の展開と惨劇から、辛うじて復帰したロマンが警告する。

だが、それはあくまで立香とマッシュに向けたもの。

肉体を無くしたオルガマリーは、カルデアに帰還した所で死は免れない。

崩れていく洞窟の中、徐々に加速していく崩壊の中にあっても、バーサーカーは動揺しない。

ただ、腕の中で震える女性の声を待っていた。

「たすけて…」

涙を流し、恐怖に震え、それでも生存を諦められないオルガマリーは、先程命を助けてくれた己の従者へと縋った。

「たすけて、わたしまだしにたくないの…！」

それはただの幼い子供の声だった。

「……………それは、」

降り注ぐ瓦礫の中、無言を貫いていた刃金の戦士が口を開いた。

「それは、これから先もっと恐ろしい事、悲しい事があると分かっているのか。」

「それは…」

狂戦士である筈の者の腕の中で、オルガマリーは問われていた。

「それは、多くの困難から逃げられない事になると、分かっているのか。」

世界が崩壊していく中、それでも二人の間は静かだった。

ただ静かに、狂戦士は己が一時の主へと問い掛ける。

そこから先は地獄だぞ、と。

「…分かってる。」

涙に濡れた顔をごしごしと行儀悪く袖で拭き、オルガマリーは狂戦士を見据えた。

その目からはもう先程までの恐怖は薄れ、使命感に燃えた一人の人間が居た。

彼女達が大好きな、恐怖を抱きつつも、しかし困難に挑もうとする人間が居た。

「でも、私はカルデアの所長なのよ。部下達が逃げず、素人だって頑張ったのに、

TOPでプロの私が逃げ出す訳にはいかないわ。」

それは何処まで意地っ張りで、虚勢だらけの言葉だった。

「そうか。なら、私は君の願いを叶えよう。」

周囲は何時の間に静かになっていた。

それはそうだろう。

そこには既に何も無い。

光も空気も何もかも。

そこは既に虚無、真正銘何も無い空間なのだから。

完全に崩落し、特異点ですらない虚無に、二人は浮かんでいた。

「だが、覚えておいてほしい。君はこの先の恐怖と脅威と困難に相対し続ける事になる。」

そして、バーサーカーの身体が解けていく。

オルガマリーはその先に銀糸の様な輝きを見た気がした。

「それでなお、諦めを踏破するのなら……」

一流である筈のオルガマリーですら理解できない程に複雑かつ精緻で高度な魔術現象が起きている。

それしか分からない彼女は、しかし魔術師としてでなく、一人の人間として、そ

の言葉を聞いていた。

「私もまた、君に力を貸そう。」

そこにいた者は

そこに存在した者は

そこに顕現していた者は

「この■の王の力。既に舞台を降りた身だが、今を生きる者が望むなら、求めるままに力を貸そう。」

そこで、オルガマリーの意識は途絶えた。

.....

「フォウ？」

目が覚めた時、オルガマリーの視界を埋めていたのは、カルデア在任の謎の珍生物のドアップだった。

「フォウ？」

「……………」

「フオーウ？」

「フオーウ？」

「フオーウフオーウ！」

未だ頭が覚醒しないオルガマリーは、つい聞こえた音を繰り返してしまおう。すると、横でカタリと物音がした。

「ブークスキス…！」

「ダ・ヴィンチちゃん、笑っちゃ駄目だよ…。」

そこにはハンディカメラを構えた万能の天才（モナリザ）と素人にして暫定マスターの立香の姿があった。

「あー…」

「「あー？」」

「取り敢えず、正座。」

その後、二人は10分程医務室の床に正座したまま説教されました。

.....

「で、何があったの？」

仁王立ちしたままのオルガマリーは呼び出したロマンとマッシュも加えて、医務室で検査を受けつつ情報収集を開始した。

「その後、立香君とマッシュと一緒に、所長はレイアウトして帰還しました。」

「肉体は？私、死んでた筈だけど……。」

「それに関してはこっちを見てくれ。」

そう言ってダヴィンチが持ってきた資料に目を通す。

同時、すぐさま眉根を寄せる。

「これ、人形？」

一部の人形使いと言われる魔術師が使うもの。

その中でもかなり精密に見えるものだった。

「ああ。だがこれには一切の魔術は使われていない。いや、君の魔術回路を再現するため一部の構造は変化しているが、これは完全に科学技術による高性能な肉体

だ。義体と言うべきだね。」

「つまり、これが今の私な訳ね…。」

告げられた言葉に頭が痛くなってきた。

医者も認める程精密な人体模型を初めて見せられたらこんな気分になるのだろうか？

つまり、このレントゲンで撮影された人型機械こそが今の自分の肉体であると言  
う事だった。

「で、バーサーカーは？」

「ああ、彼なら…。」

「■■■■■■」。

霊体から実体化したのか、バーサーカーが姿を現した。

しかし、その姿は妙に威圧感が少ない。

「なんか、消耗してない？」

「ええまあ…。何せ所長が意識不明の一週間、彼は施設の復旧と改良に尽力してく  
れてましたから。」

「バーサーカーなのにアーチャーもびっくりの単独行動ぶりだよ。お蔭で職員への負担はかなり減ったけどね。」

成程、よく見れば医務室の医療機器も購入した覚えのないものに置き換わっているし、先程まで自分が横になっていたベッドにも様々な精密機器が繋がられており、逐次データを集め、容態を見ていた事が分かる。

だが、言いたい事は山ほどあった。

「そうね、取り敢えず先に言っておくわ。ありがとう、バーサーカー。」  
にっこりと、自分でも思わず褒めたくなる程の会心の笑みを浮かべる。

それを見て、マッシュと立香とロマンが怯えた様に数歩後退する。

実に失礼な反応だが、ニヤニヤしてるダ・ヴィンチよりはマシだろう。

「でもね……」

顔を俯け、次への力を溜める。

このバーサーカー、会った時から自由過ぎた。

そもそも、令呪が無いとは言え、マスターに強烈なデコピンかまして正気に戻すとかサーヴァントの風上にも置けないし、マスターの危機を放置するとか本当なら

チェンジものである。

しかし同時に命を助けてもらった上、こうして新しい体まで作ってくれた。

「マスターの指示なく勝手に動きまわってるんじゃないわよ、バカ——ッ!!

┌

言うべき事は言うべきだと、オルガマリーは声を張り上げて怒鳴りつけた。

こうして、本来の道筋とは大いに異なる形で、この世界線の冠位指定は始まりを告げた。

以前も言いましたが、ヒロインは所長を予定しております。

が、プロット見直したらどう見てもヒロインじゃなくヒーローになるぞコイツ。  
アレエー？

## IS 転生 三組代表が逝く

くそ、予定の半分もいけんとは！

次回以降はIS学園での生活になります。

---

「テンプレテンプレ、転生特典何がほしーの？」

そこで迷わずオタクな自分は「ライダー」になりたい、とか言っちゃったのが駄目だった。

次の瞬間には、やべ退かれたかな？と思ったのだが、既に後の祭り。

「おkおk。んじゃライダーにしてあげるー。転生先はランダムだけど、それに合わせたげるから。」

その内容を詳しく聞く事も出来ず、気付けば私は転生していた。

この後に自分が直面する事態も知らずに。

.....

転生した私が生まれたのはよく見知った現代の日本、その極平凡な家庭だった。若干残念ではあるが、それでも衣食住の安全が確立している状況は喜ばしい。

私は子供の演技をしながら、この二度目の生を平和に生きていた。

しかし、それは唐突に崩される事となる。

何の前触れもなくハッキングされた世界中の軍事基地から核ミサイルが日本へと発射されたのだ。

その事態に対し、自衛隊はその総力で以て抗ったものの、余りの物量に日本消滅かと本気で危惧された。

しかし、それはたった一機の兵器によって覆された。

その名もインフィニット・ストラトス。

元は宇宙開発用の多目的パワーダストだ。

それによって日本本土へと着弾する筈だったミサイルは全て撃墜された。

だが、それはあくまで本土だけだ。

本土に到達できずに墜落したミサイルにより、諸島や航空機、艦船に多大な被害が発生し、万単位の死傷者が発生した。

その中には、私の父の名もあった。

.....

日本はこの事態に対し、世界各国政府を非難すると同時に、その辺りを軸に交渉し、復興費用を各国からの基金と言う形でゲットすると言う外交的勝利を得た。

が、余りにもデカイ被害に頭を抱えつつ、センサーショナルなデビューを果たしたISについての対応も考えねばならなかった。

と言うか、速攻で開発者を確保する事に成功したものの、知れば知る程に量産には不向きなものだと判明し、頭を抱えた。

ISの中核であるISコア。

量子CPUであり、大出力の発電装置であり、慣性制御装置であり、量子変換による物質保管能力を持った、正にSFの産物だったのだ。

当然、政府が抱える御用学者では解析し切れず、国内のあらゆる科学者がその頭脳を結集してもなお完全な解析は出来ていない。

況や、それを量産するとなると現時点では不可能だ。

劣化品の生産すら目途が付かない現状に、日本国政府は頭を抱えた。

在日米軍は頑張ってくれたが、その米国からすらミサイルが飛んできた現状、日本は世界を相手に自衛できるだけの戦力を欲していた。

しかし、単騎でそれを叶える戦力の量産は不可能だ。

となれば、開発者には頑張ってコアを量産してもらわなければならない。

幸いと言うべき、ガワの方は何とか出来そうな目途が立ったので、暫くの間はパイロットの少女に国防に参加してもらいつつ、開発者の基地外少女にはコア部分のみだが量産してもらおう運びとなった。

無論、報酬は個人に払うものとしては法外な額を出した。

まあ既存の兵器を量産し、武器弾薬まで自前で揃えるよりは遥かに低コストなのだ。  
だが。

ついでに次も同じ事態が起こった時のために、と自衛隊を国防軍にする事も出来

たので、防衛組からは装備の大規模更新もあって万歳三唱された。

しかし、これにISの存在に危機感を抱いた各国が「うちらにもISコアを寄越せ」と強請り始めたのだ。

此処から本気モードの終わってしまった日本のグダグダが始まり、後に国立IS学園設立の運びとなる。

.....

さて、そんな国際政治は（現時点では）関係の無く、この世界が漸くIS世界だと気づいた私の下に、父の訃報が届いた。

出張先からの帰りの便の旅客機がミサイルで撃墜されたのだ。

無論、国からは多額の見舞金が贈られたが、父を熱愛していた母はそれで夢の国の住人となり、ベッドへと移住した。

そして私は小学校低学年にして一人暮らしを送る破目になった。

私みたいな転生者でもない限り、絶対精神を病むぞコレ。

何とか近所の人や先生方の助けにより一人暮らしをしていた私だが、それもある時を境に終わる。

ある日、日本全国で緊急の健康診断が年代を問わず行われたのだ。

十中八九、ISコアの適正検査だ。

実際、各検査場では妙な球体に触れさせられたとネットでも話題になっていた。んで、私の適正值だが……なんとAランクだった。

実質織斑千冬以外では専用コアを使わない限り生じる事のないSランクを除けば、最高の値だった。

そう言えば、言い忘れたが、私のチートは騎乗スキルの最上位と言うべきか、乗り物と認識さえすれば、何でも運転できると言う所だ。

それこそ、下は竹馬、上は最新鋭戦闘機まで。

そこにはISすら例外ではない。

そして、政府としては現状数少ない高い適正持ちなのに、幼女が独り暮らしとか狂気の沙汰であるし、下手しなくとも誘拐の危険が高いと考えられた。

なので、ある日役人が現れ、住み慣れた我が家から強制的に孤児院へとお引越

となり、同時に小学校も転校となった。

それだけならまだ良かったのだが、住み慣れた我が家は売り払われ、母の入院費にされた。

ふざけんな！と思った私は悪くない。

そして、孤児院から国立の学校に通い、小学校としては相当高度な教育（IS 関連）を受けつつ、孤児院に帰ったら帰ったで IS 関連の講義を家庭教師（強制）から受けさせられる。

噂の要人保護プログラムよりはマシかもしれないが、前世一般人で平和に暮らしてた 20 代後半としては殺意しか湧かない。

あの家、両親の思い出の品がたくさんあった上に、苦勞してネット環境揃えてたんだぞ！

しかも近所の人達と料理の交換し合いも楽しみにしてたのに！

何時か絶対に訴えてヤラああああああああ！！

そんな殺意を抱えつつ、私は只管 IS 関連の知識を詰め込み続けた。

あ、そうそう。

二回程オリンピックみたいなIS競技が行われ、一回目が日本優勝、二度目が不戦勝でアメリカが優勝でした。

そして、中等部に進学した頃、とある人物に出会った。

眼鏡をかけた、水色の髪の毛、オタク特有の気配を纏った美少女。

そう、あの更識簪だ。

それとなく、映画やアニメ、漫画の話題等を振りつつ様子を窺うと、よい食いついてくる。

あれだ、少数民族の悲哀と言うか、オタク趣味を持った人間でオープン気質ではない者は常に同胞を探しているもので、簪もその例に漏れなかった。

なんで知ってるかって？言わせんなよ恥ずかしい。

と言う訳で、私は簪と速攻で仲良くなった。

その伝手でダボダボ袖ののほほんさん、もとい布仏本音さんとも仲良くなれた。ゲーム・アニメ・漫画好きな同士（私は特に型月系、簪さんは戦隊・メタルヒーロー等の特撮系）であり、趣味を共有できる相手として、互いに直ぐに仲良くなった。

とは言え、最新アニメとかどうしても住んでるのが孤児院なので見れないのだが、その辺りは簪が密かに持ってきた小型端末を借りて見る事が出来た。

人格・容姿・趣味、どれをとっても得難い友人を得る事が出来たのが、この学校に来て最大の成果だった。

なお、時々笑みはそのままに鋭い目でこちらをじっと観察しているのほほんさんはちょっと怖かった事を明記しておく。

後、在学中にIS学園が正式に設立、稼働を開始したので、私も簪ものほほんさんも進学先はそちらになりました（強制）。

……………

「で、なーんでバトルロワイヤル形式の模擬戦かなあ…。」

倉土灯は死んだ目をしながらISを纏い、宙に浮かんでいた。

ここは日本国国家代表候補生選抜試験の実技会場であり、そこに灯は最近量産の始まったIS打鉄を纏って参加していた。

他の候補生達（簪含む）は強化ガラス越しにこちらを見ており、会場の反対側には同じ年ごろの少女がISを纏って宙に浮かんでいる。

あちらが対戦相手であり、二機のISを用いた総当たり戦が今回の内容だ。

確かに効率なのだが、絶対に日本国政府のためには働きたくない私としては、代表候補なんて糞喰らえだった。

だが、下手な事をすれば母親の身が危ないかもしれないし、未だガキの身では食い扶持を稼げない。

なので、学んだ知識を生かしつつ、国家代表以外の就職先、例えば企業のテストパイロット辺りが狙い目だと思っている。

とは言え、目の前の課題に手抜きして取り組んでは相手にも失礼だし、経歴に汚点として残りかねない。

なので、全力を出す事にした。

.....

(ふふふ、あんな気の抜けた相手なら楽勝ね。)

私は勝利を確信していた。

私の家は元々防衛関連に関係があり、父も祖父も自衛隊(祖父は警察予備隊、父は今は国防軍だが)出身で、私も将来的に国防軍所属のISライダーを目指している。

そのためにも、この国家代表候補生選抜試験で良い成績を残す必要がある。

幸い、相手は本当に一般人であり、こちらの様に軍事的な手解きを受けている訳ではない。

無論、初めてのIS装着と言う事で戸惑いがあるが、それは相手も同じ条件だ。

。 なら、私が負ける道理はない！

だが…

『これより模擬戦を開始します。3、2、1…』

「逝く。」

「え？」

そんな自信、否、驕りは一瞬で砕かれた。

イグニツション・ブースト（瞬時加速）。

熟練者にとっては必須の移動技術、自分でも未だ使えない技を、目の前の相手は使ってみせた。

その動きをISのハイパーセンサーによって辛うじて捉えながら、しかし、私は驚きの余り動きを止めてしまった。

ほぼ同時、衝撃が自分を襲う。

武器を出す間もなく、ISのエネルギーシールドが干渉し合う程の距離での打撃に、私は漸く正気に戻り、次いで怒りを抱く。

素人相手に、この私がしてやられた！

その怒りと共に、こちらも殴り返すべくISの拳を振るう。

しかし、相手は初体験とは思えない動きでヒラリとこちらの拳は宙返りする事で回避、次いでバスのロット（拡張領域）から量子変換で呼び出されたアサルトライフルを手に距離を保って射撃してくる。

空かさずこちらもその場から回避し、アサルトライフルを呼び出し、応射する。

だが、そこは第二世代 IS の中で最も信頼性と耐久性、精密動作に優れる打鉄である。

互いに非固定浮遊部位である大型の物理シールドを構えつつの射撃となれば、必然的に地味な削り合いとなる。

相手は三点バーストで、こちらはセミオートで互いを狙い、円状の回避機動を取りながら撃ち合う。

それはさながらサークル・ロンド（円状制御飛翔）にも似た硬直状態だったが、それは30秒もしない内に均衡が崩れる。

（、上に！）

一瞬だけフルオートで射撃してこちらを牽制した後、相手は即座に上昇して頭上を取ってしまう。

こうなると、重力の関係上こちらの方が受けるダメージが大きくなってしまう。

「こ、の…！」

もう素人相手と言う慢心は無かった。

ただ、負けられないと言う闘争心ばかりが身を動かしている。

こちらも後を追う様に上昇を試みる。

しかし、相手はそのままこちらへと頭を向けると、正面から突っ込んできた。

その手には何処か日本刀にも似た片刃のブレードが握られ、肩に置く様に構えられており、一発で狙いが分かる。

(ならこっちもブレード！)

だが、こちらがブレードを展開する前に、相手はこちらにブレードを振り下ろしてきた。

(重い！)

咄嗟に二枚の物理シールドで防いだが、刃が深くめり込み、こちらが一方的に押し負けてしまう。

同じ機体、同じ出力の筈なのに、どうしてこうまで差があるのか？

それに疑問を感じつつ、しかしこのまま負けてはやれないと物理シールドを強制排除、これで相手はブレードを使えない。

「はあああああああ！」

次いで、右手に呼び出したブレードで切り掛かる。

だが、相手は予想以上の手練れだった。

切り掛かるこちらの右手へと瞬時に呼び出したハンドガンで至近距離から発砲、腕部ではなく、指を正確に狙い撃ちした射撃に因り、ブレードがすっば抜けてしまった。

「な」

「じゃあね。」

そのまま腕を掴まれ、逃げられなくされた後、眼前の至近距離へと向けられた銃口から、連続してマズルフラッシュが放たれた。

「こ、のおおおおおおおおお！」

だが、このままでは負けられない。

私はもう意地だけで拳を振り回し、相手へと殴り掛かる。

最早勝利は不可能だが、それでもこれ以上の無様は晒せなかった。

「残念。」

しかし、だ。

何処の業界であっても、天才と言うのはいるらしい。

まあ、このISすらそうした天才の生み出した発明なのだから、当然と言えば当然だが。

物理シールド、特に打鉄のそれは僅かながら自己修復機能を持った第二世代ISの装備において最硬の盾だ。

なので、そんなもので拳を反らされた後、カウンターでドタマに叩き込まれようものなら、減少していたシールドエネルギーは当然の様に底を突いた。

『そこまで！ 勝者、倉土灯！』

こうして、私の初めてのISの実機操縦は散々な目に遭う事で終わってしまった。

なお、今回の代表候補生合格者は私とあの倉土の他、簪と言う子の三人だけだった事を明記しておく。





## IS 転生 三組代表が逝く 2

さて、卒業試験も終わり、次は入学試験だ。

とは言っても、進路に関してはIS学園のみ（強制）なのだが。

…この件、どれだけの人が関与してるのやら。

まかり間違つて代表になった後、全部公表してやったら防衛相幹部の首切りとか内閣総選挙とかにならないかなーと密かに期待してたりする。

それはさておき、入学試験である。

筆記は終え、内申点も一応代表候補生と言うことで言う事は無し、後は実技試験のみ。

そしてにこやかに出てきた侍ウーマンに、私と簪と本音は顔を引き攣らせた。

え、なんでアンタが出てくるの？ここは山田先生でしょ？

「私が今回代表候補生の実技試験を受け持つ織斑千冬だ。各員、全力を尽くす様に。」

付き添いの本音は兎も角、日本の代表候補生三人（先日私と簪以外に合格した一

人」とイギリスからの留学生であるオルコットも揃って顔を青ざめさせた。

「安心しろ。手加減はしてやるから。」

にっこり、と微笑む生きた伝説を前に、私達の顔は引き攣るばかりである。

そりゃそうだ。

誰が好き好んでルーデルや船坂、ヘイへと同類の人類の規格外を相手にしたいと思うだろうか？

結果は当然ながら、全員負けた。

イギリスのファンネルは全部切り払われた後にズンバラリン。

簪も打鉄で善戦したが、最後は盾ごとズンバラリン。

私は撃墜こそされなかったけど、エネルギーを消耗し過ぎて判定負け。

うん、無理だなこれは！

相手が錆びついてて専用機じゃないってのにこれじゃ、こっちが専用機でメタ戦術と装備してやっとなって所か。

なお、今回の私と簪の機体は相変わらずの打鉄です。

簪の方は倉持技研から打鉄式式が受領される筈だったが、何処かの馬鹿がIS適

正持ちだと言う事が判明したため、倉持の研究リソースがそちらに割り振られた影響で開発がポシヤった。

本人はもう打鉄である事すら止めて、コアから自分好みのISを作るんだと寧ろやる気を出している事が救いだが、一応暗部の家を実質敵にして倉持は大丈夫なのだろうか？

国産の次期主力機の開発で大コケとか企業としても洒落にならない失敗なので、このまま衰退する可能性はかなり高いのだが。

そうなると打鉄の補修パーツとかの生産の目途すら……まあいっか！私が気にする事でも無し、企業は他にもあるしね！

とまあ、何とか入学できたが、クラス分けは全員が見事に分かれてしまった。

簪は4組、私は3組、本音は1組。

序でにオルコットは1組だそうだ。

そんな訳で、私達のIS学園生活はスタートした。

座学・実技問わず基礎教養を除けばIS一色なので、幼少時からそればかり学習させられてきた身としては楽に感じる。

無論、苦勞して合格してきた一般受験組もクラスには勿論いるので余計な事は言わないが。

後、クラス代表選出もあっさりと言った。

他薦された私の他、三人程自薦した生徒がおり、総当たり戦となったのだが……  
お前から、そんな腕で何がしたかったの？と言うレベルであつた事を此処に明記しておく。

結果は当然私の勝ちだったが、これでは弱い者虐めでしかない。

まあ企業関係者でもIS搭乗経験が少ないんだから、しようがないと言えばそうなのだが。

だからと言って、突撃して一瞬でカウンター決められてリタイアは無いだろう。それは兎も角、簪と本音とは相変わらずの付き合いが続いている。

基本、整備室の一角で缶詰状態の簪の下に私と本音が差し入れをしてあげるのだが：お前、偶には休めよと言いたい。

人間としてのボーダーは堅守してるが、女子としてのボーダーは余裕でアウトしてるぞ。

いや、ファッション方面全滅状態の私が言う事じゃないが。

化粧品とか最低限肌・髪荒れしない程度で良いと思うし、衣服も同様。

水着？流石に前の学校の指定の奴しかないなので、新調しなければならんが、それとて態々お高いのを買う気はない。

で、一応代表候補生で時折雑誌に乗ったり、結構な収入がある筈なのに、なんでそんな金遣いが渋いのかと言うと、貯金してるからだ。

また何時何か変事が起こるか分からないので、現金ではなく純金に換金して貯蓄している。

まあ、簪に借りっぱなしの映像機器とかDVD乃至ゲーム類なんかは代表候補生になってから揃えたが。

後、食生活も孤児院暮らしの時よりも各段に良くなった事を明記しておく。

.....

久々に天才、と言う人種を見た。

世界中から優秀な人材の集まるこのIS学園において、地元で天才扱いされていた者は多いが、大抵は此処に来て心を折られていく。

それは私、織斑千冬であったり、ISと言う最先端技術に触れたが故にであったりと枚挙に暇がない。

斯く言う私自身、本当の天才と言う者に会ったのはモンドグロッソ等の国際大会を含めてほんの数回程度だ。

まあ、基準が我が腐れ縁の大馬鹿なので仕方ないのだが。

今年の生徒は例年になく粒揃いなのだが、それでもなお群を抜いていると言って良いのが倉土灯だ。

無気力な瞳、適当に切り揃えられた髪、大抵猫背で歩く姿はお世辞にも綺麗とは言えないが、彼女の真価は日常生活には無い。

ただでさえ忙しい入試や入学試験が愚弟のせいで例年の倍以上の手間がかかった。

正規の試験が終わった後でも各国・企業・団体からの編入希望が大量に届き、更に愚弟の保護やら教育やらのせいで人手が足りなくなり、私まで実技試験の方に駆

り出される事となった。

とは言え、代表候補生のみなので楽なものだと思っていたのだが：予想外の存在に出会った。

それが倉土灯だ。

奴は三人の候補生の中で一番最後に乗ったのだが、乗った途端雰囲気が変わった。それ位なら割といるし、試合前のマインドセット等スポーツでも常識の範囲だ。だが、こいつの場合はレベルが違う。

今までの無気力さが嘘の様に、静かな闘志に満ち溢れ、如何に追い詰めようとも必ず勝機を窺い続ける不屈さを示してみせた。

その上、代表候補生の選抜試験以来乗っていないと言うのに、学園の貸与した打鉄を自在に操ってみせた。

私の乗る打鉄と条件は同等ながら、奴には私を相手にする動揺も恐怖も無かった。鋼の精神、そして勝機を探り続ける戦術眼に確かな技能。

間違いない、こいつは鉄火場を経験している。

そこののひよっこ共と一緒に出来ない。

なので、錆びついた身ではあるが、途中からはそれなりに本気で斬りかかった。だが、それすらも倉土は回避してみせた。

消耗したライフルを捨て、ブレードを三枚目の盾とし、只管にこちらの斬撃を回避し続ける。

とは言え、回避に徹する事しか出来なかったが、経験の浅い身で良くぞそこまで動けるものだと感心した。

しかも、戦いが長引くにつれ、動きからぎこちなさが消え、スラスタの出力もリアルタイムで調節しているのか、徐々に無駄な消費が少なくなっていく。

良い、実に良い。

こいつは実に鍛え甲斐がある。

最後は楽しくなってしまうてつい全力で斬りかかってしまったが、それでも倉土は耐え凌いでみせた。

特に最後の一刀をボロボロのシールド二枚を使い、切り裂かれる途中で捻る事でこちらの刀身を折ってみせたのは見事としか言いようがない。

だが、弾薬も武装も尽き、エネルギーを9割近く消耗した状態ではもうどうし

ようもなく、そのまま大破判定を受けた。

入学時でこれなのだ、実に面白い。

久々に鍛え甲斐のある生徒に出会った。

と言う訳で教員諸君、彼女は私の一組に編入する。

異論は：ある、だと？

よく言った。

ではいつも通り公平に行こう、ジャンケンでな。

今年も教員間の呑み会では奢ってもらうぞ：！（生徒を出汁にした賭博はいけ

ません。）

そして、私は最後まで残ったものの、最後の最後で負けてしまい、倉土を3組に持っていかれてしまった。

おのれラトロワ：！

既婚で子持ちのリア充の分際で、もう少し弁えろ：！

実に残念だが、合同授業の時にでも扱いてやるとしよう。

くっくくくく、今から楽しみだなあ？

そう言えば、奴の瞳が一瞬だけ鱗の様な…いや、虫の複眼の様に見えたのは気のせいだったのだろうか？

---

漸くIS学園入学。

しかし、主人公sとの絡みは次回以降。

一応、後3話でIS転生は終わりの予定です。

## IS 転生 三組代表が逝く 3

突然だが、今日はクラス代表対抗戦である。

文字通り、クラス代表となった生徒で行う総当たり戦だ。

これで各クラス代表の顔売り、及びクラス間の実力差なんかを図るのが……ぶっちゃけ、一年だと誰もが入学したばかりなので、そこまで差がないので意味がない。専用機持ちとそれ以外の訓練時間の差が顕著になるのは二年からなので、入学したばかりのこの時期の一年は全員がひよこに過ぎない。

無論、時折例外はいるのだが。

『それでは今年度第一回目の公式戦、クラス代表対抗戦、一年の部を始めます！第一試合の選手はピットから離陸してください！』

「頑張ってるね、灯。」

「うん、簪もね。」

「いってらっしゃい。」

数少ない友人に見送られながら、私はいつもの打鉄で出撃する。

そう、なんの因果か、私が出る試合は一試合目なのだ。

転入早々二組のクラス代表を挽ぎ取った貧乳チャイナ娘ではなく、三組代表の私なのだ。

あれー？と思うが、これはあれか、転生神が私にはっちゃけると言う神の御意思なのか？

確か、無人機が乱入してきて、両腕のビーム砲を撃ちまくるんだったか。

んで、チャイナの砲撃をエネルギーに転換した瞬時加速の亜種を使ってワンサマーが倒す、はず。

何分濃い人生送ってたから、ラノベの内容が抜けて久しい。

取り敢えず、テロリストや不明機は皆殺しでも問題ないよね、自衛の範囲なら。

あ、でもワンサマーはどうしよう？

簪関連で多少の恨みはあるけど、全殺しする程じゃないし、一応代表候補としては彼に見せ場を作るべきだし、それに容赦なく殴って良いのは当人の簪だけだし、そもそも打鉄式式の事は倉持が元凶だし…。

まあテキトーに舐めプしてりゃ良いか。

.....

オレ、織斑一夏がそいつを見た時、随分生気の無い奴だな、と思った。

死んだ魚の様な目、と言うべきそいつは、こちらに視線を向けていても、緊張も、戦意も、誠実さすら無かった。

ただ、倦怠感のみがあった。

そして、試合開始が宣言されたのと同様、そいつは在ろう事か「欠伸」をしやがった。

試合中、全力で挑むべき場所で欠伸。

それはつまり、こちらが徹頭徹尾舐められている事に他ならない。

(野郎……！)

落ち着き・思慮が足りないとはよく言われるけど、これは男なら仕方ないだろ？  
相手はこっちを敵としてすら見ていないんだから。

なもんで、完全にオレは熱くなっていた。

絶対に吠え面かかせてやる、一泡吹かせてやるって感じで。

だから、スタートと同時に、瞬時加速で突貫したんだ。

まあ白式じゃ元々そうするしかないんだけどさ。

近接特化のブレオン機体、それが白式だ。

千冬姉の暮桜の直系の後継機であり、同じ武装である雪片式型のみを装備している。

直撃すれば、現行のISじゃ一撃二撃で落とせる威力のソレを、唐竹割りに振るう。

しかし、あいつは半身になるだけであっさりと回避し、続く切り返しの二撃目も後退するだけで再度回避する。

はつきり言おう、掠りもしていない。

ISのエネルギーシールドすら展開せず、ただ一寸先を見切り、僅かな挙動だけで回避する。

それはこちらが一刀放つ度、徐々に短くなり、20回目になる頃には文字通り紙一重で回避されていた。

観客も、解説も、司会も、この異様な試合に気圧されて無言だ。

オレ？オレはもう何て言うか…恐怖しかなかった。

最初の負けん気なんか何処かに吹っ飛んできた。

もういつそ終わらせてほしかったが、相手は一切攻撃をしてこない。

どころか、武装すら出していない。

なのに、こちらは元々の燃費の悪さもあって既にシールドエネルギーは6割を切る程だ。

千冬姉でもここまで意地の悪い真似なんてしない。

そう思うと、オレって随分甘やかされてたんだなって、今更ながら自覚した。

そんな時だった、急に警報が鳴り出したのが。

………

警報の直後、アリーナを覆うバリアの天辺を大出力のビームが貫き、そこから奇妙なISが侵入し、試合会場へと着地した。

茶褐色の全身装甲、一部のISを除けば旧式として採用されない構造の機体。

両腕に大口徑のビーム砲を装備したそのISは、こちらを視認し、その右腕のビーム砲を：

向ける前に斬り飛ばされた。

仮にも試合では手加減したが、侵入者でテロリスト、おまけに無人機にかける情けは無い。

そう言わんばかりに、倉土灯は圧倒的だった。

完全に掌握したISコア、その持つP I Cを完全にマニュアルで操縦し、競技用リミッターをカットした上で、打鉄では本来出来ない筈の、機体への負荷を一切顧みない高効率の多重瞬時加速。

その速さを完全に乘せた斬撃は無人機の反応速度を遥かに超え、その右腕を何も出来ぬままに斬り飛ばした。

その一撃で一夏向けの手加減モードが解除されたのか、カメラアイが赤く光り、戦闘機動を開始しようとするが、既にこちらの間合いだ。

量子変換、その機能は本来バスのロット（拡張領域）への装備の収納と保管、任

意の取り出しによる IS の機能の拡張だ。

これには登録した物品しか格納できず、今現在において生物の格納には成功していない。

では、無理矢理触れた相手の一部を強引に自身の拡張領域へと引き込めばどうなるのか？

傍目には、単なるテレフォンパンチに見えた事だろう。

だが、その拳は不明 IS の胸部をまるっと刳り貫いた。

IS コアを格納する部位ごと抉り取られては流石に無理だったのか、それで不明 IS は機能を停止した。

同時、ブザーが鳴る。

試合結果を告げる掲示板は、倉土灯の敗北を告げていた。

余りに無茶な機動、本来想定していない機能の活用により、第二世代中最高の信頼性と耐久力を持つ打鉄が、全身から火花を散らし、ただの一戦で大破、ダメージレベル D に到達していたのだ。

その結果、相手の自爆と言う形で、織斑一夏は勝利した。

『き、緊急事態です！職員は直ちに対処してください！』  
遅れて、山田教諭の声が沈黙の満ちたアリーナへと響いた。

.....

「やり過ぎだ馬鹿者。」

一夏への対応もそこそこに、千冬は目の前の天才的問題児と向き合っていた。

現在いるのは学園の地下、機密区画だ。

そこで何故あの様な行動をしたのか、どうやってしたのかを休憩と軽食を挟みながら尋問の体で倉土灯は質問されていた。

それに彼女は実に正直に答えた。

「PICは最初の内はオート任せだったけど、物足りなくなってマニュアルで操作した。」

「量子変換機能を収納だけに使うのは勿体ないと思った。今では反省している。」  
「乗るなら今後も打鉄かそれ以上の耐久性の高い機種。ラファール？ オプション

豊富なのは良いけど、華奢ですぐ壊れるのでNG。」

「あ、侵入した無人ISのコア、打鉄の拡張領域の中にありますから、回収してくださいね？」

と言う、尋問していた教員の方が頭が痛くなってくる発言のオンパレードに、学園側は頭を抱えた。

マニユアル制御はまだ良い。

機体が全損なのは問題だが、それは新しい機体を購入するか、専用機を与えれば良い。

問題なのは、全てのISが持つ共有機能を使って、全く新しい戦い方を生み出し、しかもそれがISの絶対防御を貫通しかねない事、そしてIS委員会に未登録のシリアルナンバーの存在しないISコア手元にある事が問題だった。

これでは競技用リミッターの意味もなく、操縦者側の胸三寸で死人が出かねない。

まあ、実際はPICどころかISコアそのものを完全に掌握した状態で操作する必要があるので、そこまで心配する事は無いのだが…。

更に、あの大天災しか作れないISコアが各国で把握されていない所で新規に作

られたと言う事実にはもう頭を抱えるしかない。

これ以上の事を聞かされては発狂しかねないと言う事で、尋問はこの事態への陣頭指揮を取っていた織斑千冬へと急遽バトンタッチされた。

そして、倉土灯は冒頭のその言葉にげんなりした様子で口を開いた。

「現状、弟さんの鼻を折る必要があると思ひまして。」

「必要は認めよう。」

「序でに、今朝から何か良くない視線を感じてました。」

「ふむ？」

「こういう時は、父が亡くなった時と同じで、大抵何かあるので朝から警戒していました。」

「…更識妹と布仏妹が「妙にピリピリしていた」と言っていたのはそれでか。」

額を抑えて千冬は呻く。

この生徒、倉土灯は結構な異常さを持っているが、それでもあの事件における被害者だ。

それも父親を亡くし、母親の心を壊され、更にその後には拉致監禁同然の真似をさ

れ、憎い筈の IS の操縦者として教育され、今日の前に父の、家族の仇と共にいる。無論、あの事件に関しては千冬だって全貌を把握している訳ではない。

ただ、学会に馬鹿にされ、怒り心頭だった親友がやらかした惨事に、その被害者に思う事はある。

「弟さんの心は折れましたか？」

「ぼっきりとな。今は篠ノ之が何とか慰めているが……」

正直、あいつが女の胸の中で泣くとは思わなかった。

同室で幼馴染の誼なのか、一夏は不器用でコミュ障ながらも慰めようとしてくれる筈に愚痴を吐き、思いの丈を吐き出し、その胸に縋りつきながら泣いた。

そして、そのまま眠ってしまった。

それを筈は姉に翻弄される自分を思い出し、筈もまた同情と愛情、庇護欲と母性、似た境遇による仲間意識が複雑に入り混じった感情を抱きながら、一夏を抱き締め続けた。

『オレは……手加減されて……あいつ一人で侵入者も倒して……相手どころか眼中にも無かった……！』

それが悔しい、なんで自分はこんなに弱いのか、こんな所にもいたくない、家に帰りたい、友人に会って馬鹿をやりたい、穏やかに暮らしたい。

そんな当たり前の事を望む叫びを箒は全て黙って聞き、抱き締め続けた。

それを廊下から聞いていた千冬もまた心折れそうだったが、それでも持ち前の精神力もあって、何とか耐え凌いでここまで来た。

「これでそのまままで終わる質ですか？」

「いいや、それはない。」

負けん気だけは一人前だからな、と告げるのは唯一の身内故か。

千冬はその点だけはあいつを手放しに誉めても良いと思っていた。

「それで、私の今後の扱いは？」

「先ず間違いない専用機は貸与される。」

何せ打鉄の限界性能の更に先を引き出したのだ。

機体が自壊した事こそ問題だが、開発元の倉持などは良いデータが取れたとホクホク顔で「是非彼女の専用機を我が社で！」とか抜かしてきた。

無論、本人に言うまでもなく断ったが。

千冬とも縁深い企業だが、如何せんやかした事がデカすぎるので残当だった。更に言えば日本政府も「是非正式に国家代表に！」とか言い出してきたので、未成年である事を理由に断った。

なお、未成年で日本人なのに現ロシア国家代表な生徒会長はロシア政府から灯の情報を取ってくる様に言われて頭を悩ませていたりする。

「どこの企業で？」

「幾つか候補はあるが、それはお前が決める。」

バサリ、と千冬が渡した部外秘と判の押された冊子には幾つかの企業の概要と貸与予定のISのスペックと概要が載っていた。

「キサラギ、桐山重工、有澤重工、明日香・インダストリー、篠原重工、豪和インスツルメンツ：。」

よし、最後のは無しだな！と灯は思う。

だって人体実験に供される光景しか思い浮かば無いし。

似た様な意味でキサラギもそうだが、有澤は重装甲過ぎて機動性が皆無になりそうだ。

だって、全身装甲はまだしも何故かタンク形態への変形機構が付いてるし（汗）航空兵器に該当するIS、しかもPIC持ってて空力特性が余り意味のないとは言え、タンクで（滝汗）

明日香・インダストリーは…ナデシコの漫画版で大活躍してた方か。

とは言っても、あそこってネルガル吸収するまでは機動兵器部門は未知数だし、載ってるISも打鉄の改良型だしなあ…。

篠原重工は新型だけど、第三代兵装も無いし、パツとしないから却下で。

となると以前は国産戦闘機の開発競争に参加してて、現在も補修パーツ作ってる桐山かなあ？

でも、漫画版とアニメ版で差異があり過ぎる何れ社長になる英二君の問題があるし…うん、何処も問題あり過ぎだな！（白目）

「取り敢えず、担当の方から説明を受けたいと思います。」

「そうした方が良いだろうな。」

色々問題は山積みだが、それだけは決めた灯だった。

ふう：やっと時間取れたぜ。

次は対魔忍だな！



## IS 転生 三組代表が逝く 4

さて、専用機を担当する企業だが…

「一度皆さんの推す機体に試乗させてからにしてください。」

灯のその一言で、取り敢えず各社の中で直ぐに試作機なり現在ある程度形になっている機体を IS 学園に持っていく事になった。

無論、難色を示した企業もいたのだが…

「では今回はご縁が無かったと言う事で。」

即行で切られてしまい、以後一切話を受け付けなくなりそうだったので、各企業は慌てて態度を翻した。

何せ相手はかつて織斑千冬がそうであった様に、現在の日本国代表候補生筆頭なのだ。

もし代表に就任せずとも、優秀な IS ライダーの卵と関係を持っていて悪い事は無い。

その様な思惑もあって、結局は全ての企業がこのコンペに参加したのだが……そ

の結果は散々なものだった。

「死屍累々だな。」

急遽開かれた国内 IS 産業参加企業による合同コンペは、なんと全滅と言う結果だった。

「皆脆過ぎです。」

「馬鹿者。お前がやり過ぎなんだ。」

徐々に己の力の何たるかを把握しつつある灯にとって、現在の IS は脆過ぎた。

まあ常人向けの機械に、いきなり人類外の身体能力持ちをぶっこめば、そりゃ内側からぶっ壊れるってもんである。

「我が有澤の霧積であつてもこれではな…。」

現状、辛うじて原型を保っているのは有澤重工製の霧積のみだった。

全身装甲による運動性の低下に対し、高い信頼性と堅牢性を持ち、高出力のロケットブースターで強引に動かす機体なのだが、それでも機体全体にガタが出る程であり、たった数十分の搭乗でオーバーホールを余儀なくされていた。

「有澤さんは良いですよ。うちの迅雷なんて開始一分でお釈迦ですよ？」

がっくりと肩を落としているのは桐山重工の社長の息子である英二だ。

桐山重工が持ってきた迅雷は航空機開発メーカーの一角である事を生かし、脚部と腕部、それに非固定浮遊部位に安定翼兼推進翼としての機能を内蔵させた高機動仕様なのだが、如何せん華奢であったために即行で大破した。

他にも同じ様に大破判定を受けた試作ISがゴロゴロ転がっており、豪和インスツルメンツ製の人工筋肉搭載モデル等は装甲も薄く、ご自慢の人工筋肉すら破断して、バラバラになっていたりもする。

「反応速度はうちのを専用機化して漸くってレベルとか…完全に規格外ですねえ…。」  
そう言うのはヤガミ重工の担当者だ。

持ってきた新型の高機動型ISは専用のスーツと併せる事で真価を發揮し、極めて鋭敏な筋反応センサーと専用OSによる高い反応速度と運動性を併せ持つのだが、機体の強度は並程度であり、連続戦闘時の関節部の摩擦対策が不十分であった事からやはり大破してしまった。

「あー、取り敢えずヤガミさんと桐山さんと有澤さん。分野は違えど凄い所があったので、第一次コンペは合格で。他の人はすみませんが、不合格と言う事で。」

灯のその言葉に合格した三社以外はずーん……と暗い雰囲気は漂う。

何せ自分達の御自慢の最新鋭試作ISがお釈迦になった上、現状日本代表候補生の筆頭格の専用機コンペに落ちたのだ。

そりゃー国内企業としてのプライドはズタズタだろう。

「質問よろしいかな？」

「はいどうぞ。」

そんな中、めげずに挙手したのは白衣を纏ったキサラギの社員だった。

大出力ブースターを内蔵した高機動機体を持つてくるものの、やはり強度不足でぶっ壊れて落ち込んでいたのだが、何とか精神を立て直したらしい。

「今後も試作機の作成時にこの様な機会を作ってもらっても良いでしょうか？」

「んー……。」

ちらりと灯が織斑教諭に視線を向けると、眉根を寄せたブリュンヒルデの姿が見えた。

「先生、ここは許可すべきかと。」

「理由を述べろ。」

「他の生徒にも今後開発・量産される予定のISに触れる機会を与えるべきかと。」

「むう…。」

実際、現在のコンペにも多数の生徒が見学に来ており、整備課の中には携帯端末に何やら打ち込んでいる者もいれば、自身の推す機種について熱心に話し合う者もいる。

撮影こそ禁止されているものの、気合の入った者なら擦り抜けてくるだろうし、各社もその上でコンペに合意していたので、その点は問題ない。

まあ全機壊されるとは思ってたが。

「あー、取り敢えず暫くの間は打鉄乗りますんで、急いでどうにかしてください。」  
「了承した。我々が責任を持って君の専用機を完成させよう。」

こうして、IS学園における第一回日本代表候補生筆頭の専用機コンペは企業側の大敗に終わったのだった。

………

『どう思う?』

『現状の我が社の技術では短期間の実用化は無理ですね。』

『うちもです。まさかあれ程とは…。』

『流石はブリュンヒルデの再来と言われるだけはありませんな。』

『ならば…。』

『ええ、あの話、お受けします。』

『我々4社による合同のIS開発ですか。また面白い事になりそうですな。』

『とは言え、余り我を張ってはいられん。テロによる襲撃もあったばかりだ。最低限、先行試作型を早急に作成する必要があるだろう。』

『多少不格好でも、彼女の動きに壊れずに済む機体。その運用データを取ってから、彼女の動きに追従できる機体を。』

『その果てに、彼女に応えられるだけの機体を。』

『胸が躍るな。この様な難題は実に久しい。』

『技術屋としての腕がなりますな。』

『では有澤さんは装甲とフレーム部分を。ヤガミさんはOSと駆動系を。うちは推

進系を。キサラギさんは…』

『それなら武装とFCS関連を担当しましょう。丁度面白いのが研究中です。』

『では…』

『ええ、4社でのIS共同開発計画、スタートです。』

……………

「倉土、専用機が完成するまでは打鉄の改修機になるが良いな？」

「それしか乗れないので、それでお願いします。」

結局失敗したコンペの後、私は織斑先生から連絡を受けた。

打鉄の改修機、とは言っても学園の整備課の教師と生徒、更に友人である簪らによる改修であり、そこまで大仰なものではない。

量産型ISの専用化リミッターを解除して専用機化した上で、各関節部を最新の部材に変更する事で強度を30%UPし、OSを高機動戦向けにカスタマイズして反応速度を向上させている。

とは言え、あくまで付け焼刃の改修に過ぎない。

なので、全力の戦闘機動ではなく、それ以外の方面を暫くは鍛えていく事になるだろう。

『……………』

与えられた専用機の収納状態、Gショックに似た腕時計のそれを見る。

先程から何かを訴えている様な気がするが、その内容を聞き取る事は出来ない。

やはり、コアとの対話も必要か、と考えるが、方法が分からないのでは…。

「話を聞け。」

「っと。」

風を斬って振るわれる出席簿を頭を傾けて回避する。

当たればかなり痛そうなものに当たってやる義理は無い。

「暫くは壊さん様に気を付ける。それとこの書類に目を通し、全て記入しろ。」

「うわお」

渡された分厚い書類に口元が引きつる。

これ、厚さだけでも30cm近くありません？

「規則は規則だ。それ全てに目を通して記入しておけ。」

「了解です。」

「ISはどう言い繕った所で力だ。なら、厳正に管理せねばならん。」

そう告げる織斑千冬の目には、複雑な感情があった。

何せ目の前の少女こそが管理されぬ暴力によって全てを失い、また今もその暴力に縛られているのだから。

未だ彼女をそうした勢力の調査は終わっていない。

しかし、何れ尻尾を掴んでみせる。

少なくとも、目の前の彼女が学園で保護できる内にケリをつける必要がある。

それが、せめてもの償いだと千冬は思った。

「先生？」

「っと、すまん。では来週中にラトロワか私に提出する様に。」

「分かりました。では失礼します。」

去って行く少女の背を、千冬はその場で見送る。

その背が何故か年相応よりもか細く見えるのは、きっと単なる感傷だと知りなが

ら。

.....

「.....」。

自室で座禅を組み、目を瞑り、精神を集中する。

同居人は今現在部活で出払っており、一人静かに寮の一室瞑想を続ける。

外界からの情報を遮断し、己の内側へと神経を集中する。

自分は未だ弱く、装備でそれを補う事も今は無理だ。

ならば、もう一つの自分の力を鍛えるべきだ。

「ライダーになりたい」。

それが自分のチートであり、範囲の広すぎるそれはランダムで転生する世界ごとに最適化されると言う。

この世界におけるライダーとは、即ちISライダーとなる。

では、どうやって最適だと判断しているのだ？

それは恐らく、自分の認識を用いてだ。

このIS世界における最も必要とされるのはISライダーだと、私が判断したからだ。

そして、最高のISライダーとは誰かと言われると、それは織斑千冬に他ならない。

つまり、今の自分は彼女並の適正と操縦技能を持っている事となる。

無論、経験や彼女の持つ剣士としての技量は持っていないので、このまま戦った所で当然負けるのだが。

しかし、自身をISライダーとして最適化しておきながら、自転車やスクーター、果てはセグウェイに乗っても他人よりも遥かに上手く扱えた。

これは偏にFateにおけるライダーのクラススキルのお蔭であり、本来ならこの世界にないものだ。

ならば、きっと出来るのだろう。

あの仮面のヒーロー達の力を借りる事が。

底へ、底へ、底へ。

自身の中、前世の記憶でもなく、今世の記憶でもなく、その二つの間。

あの名も知らぬ超越存在と出会った時の事、その直後の何も感じられない虚無。自身の存在すら曖昧な、自身の認識できない所で何かを加えられた時の事を。

「……………ッ。」

そして、目を開ける。

その右手を前に伸ばし、意識を切り替える。

同時、その右手が特撮の怪人の様に人間以外のものへと変質し、ものの数秒で昆虫や甲殻類の様な外骨格を備えたものへと変身した。

「これが、仮面ライダー…………。」

その日、私は戦慄と興奮を抑えられず、殆ど眠れなかった。

そりゃ（子供の頃憧れたヒーローになれたんだから）そう（興奮して眠れなくもなる）よ。



## IS 転生 三組代表が逝く 5

さて、クラス代表Ⅱクラス委員としての細々とした業務と専用機保持のための大量の書類への記入を終えれば、部活に入っていない私は必然的に暇になる。

なので、大抵は簪が入り浸っている整備科の一室へと向かい、手伝いをする。

無論、整備科ではないので本格的な設計開発の手伝いなど出来ないのだが：

「簪いるー？って、また散らかして。」

「ごめんね、今良い所だから…。」

基本的に一極集中型の簪は、一つの事に集中すると周囲の事に疎かになる。

なので、必然的に灯や本音がそのサポートをする事になる。

「本音は今日は生徒会があるから来れないから。夕飯は何か私が適当に持ってくるね。」

「うん、お願い。」

「リクエストがあれば早めにね。」

「うん。」

一切こちらを振り向かず、漸く機体本体が出来上がりそうなISに向き合う彼女は、元男の自分が言うのも何だが、女としてはちよつと落第状態だった。

着ているジャージが汚れているのは仕方ないとして、何度も徹夜しているためか、その髪も目元もくすみ、肌もケアしていないのでガサガサだ。

無論、若いからちゃんと休養を取れば数日で回復する程度のものだが、それでもこれは色々と酷い。

「簪、朝ご飯は食べた？」

「…うん。」

「お昼は何食べた？」

「…おにぎりセット。」

おにぎりセットとは食堂の軽食の一種で、おにぎり二個（日替わり）とお新香（日替わり）、そして味噌汁（日替わり）のセットであり、主に昼休みに練習を行ったりする生徒達向けのメニューだ。

まあどうやっても栄養バランスは偏るのだが。

「今からサンドイッチ持ってくるけど食べる？」

「食べる。」

「分かった。ちょっと待っててね。」

ひよいひよいとゴミを拾いつつ、灯は一旦食堂に向かうのだった。

(いい加減、休ませないと駄目だなありゃ。)

明らかにランナーズハイになっている。

こうなると、一端何か別の方に目を向けないと倒れるまで走り続けるだろう。

が、一先ずは食事が優先である。

「簪ーサンドイッチ持ってきたよー。」

なお、どう見ても足りてないビタミンを補うために、サラダチキンとBLTサンドの二種だ。

新鮮なお野菜たっぷりなので、これで多少はマシになるだろう。

「…ありがとう。置いていて。」

が、駄目。

簪の意識は完全に目の前の機体へと向いている。

だが生憎とこちらには秘策がある。

実はサンドイッチの他にもう一つ、自分向けのものを確保してあったのだ。

それはウィンナーソーセージたっぷりのポトフ。

コンソメスープで柔らかく煮込まれた野菜と汁気たっぷりながらも皮の食感が失われていないウィンナーの絶妙なコラボ。

それを簪の背後から手で仰ぎ、寝不足&不摂生で疲れが感じにくくなっている簪の鼻孔へと香りが届く。

途端、簪の細いウェストからぐぐとと言う小さな音が響いた。

「…それは卑怯。」

「こうでもしないと食べないでしょ。ほら、早く食べる。」

「ん。」

そしてモソモソとポトフとサンドイッチを咀嚼し始める。

その勢いは普段のゆっくりとした食事風景とは全く異なり、やはり空腹だった事が窺える。

「で、何処まで進んだの？」

「ん…機体本体はほぼ完了。武装回りはまだ。」

となると、一応今度やる予定のタッグトーナメントには参加できる訳か。

これでもクラス代表、そういうった話は自然と入ってくる。

「簪、タッグトーナメントに出ない？」

「ええ…。」

「えーじゃなくて。このまま進んでも、どうせ何時かは機動試験が必要なんだし、公式試合もまだ量産機でしか出てないんでしょ？ここらで一度乗って、問題の洗い出しとかして、それから武装に行っても遅くはないでしょ？」

実際、このまま自分や本音の目の届かない場所で開発が進んだら、絶対に事故が起こる。

体調を疎かにして既にこの様な状態になっている様では、この先絶対にケアレスミスが起こる。

ならば、一度休養を取らせるべきだ。

「ねえ簪。武装も決まってるじゃないんだったら、外装もそうよね。」

「？ そうだけど…。」

よし、突破口は見えた。

「じゃあ、こんな外装はどう？」

「？ ……これはッ!？」

ガタン、と先程まで静かだった簪が椅子から勢いよく立ち上がる。

まあ仕方あるまい。

オタだったら誰だって興奮する、自分だって興奮する。

「武装は量産機を使うから、必然的にこっちを使うし、どうせ武装が決まったら外装はそれに合わせて弄るのだし…なら、少しくらいはっちゃけても大丈夫じゃない？」

「う、そ、それは…。」

ふむ、まだ羞恥心が残ってるか。

ならば倍プッシュだ。

「私が企業に専用機を依頼したのは知ってるわよね？」

「…まさか。」

簪の目が期待に輝いている。

そうだよね、君なら期待するよね。

「まあ最初の試作機はここまで趣味的じゃないけど、最終的には外装は私の趣味をぶっこむつもり。」

何のための全身装甲だって？

そんなもん、趣味に費やすために決まってるだろうがツツツツ……！

ISの全身装甲が余り有効じゃないなんて知ってたんだよ！

これでも入試の成績は4位だったから当然だ！

だが付ける！

そして自分好みのデザインにするのだ！

「さあさあ簪、どうする？このはっちゃけ、期間限定だよ？今位しか出来ないよ？やりたくない？」

「う……う……！」

簪が葛藤する。

常識と自制、欲望と解放の狭間で揺れ動いている。

よろしい、ならば止めの一撃だ。

「簪と趣味的な外装でタッグマッチ、出たかったなあ……。」

「う！」

わざとらしい落ち込んだ演技と溜息、そして発言に簪が呻く。

くくく、貴様がタッグマッチの相手をまだ決めていないのは把握済みよ！

「出たかったなあ…。」

「ううう…。」

「仕方ない。本音に頼むか。あの子ならノリも良いし、付き合ってくれるよね。」

「や、やる…。」

「ん〜聞こえんなあ〜？」

「私がタッグマッチ、灯と一緒に出る！この外装で！」

普段は大人しく声を荒げない簪が、顔を羞恥で真っ赤にしつつ叫んだ。

「その言葉が聞きたかった。じゃあ申請出しとくね。」

「あ…。」

「ところで簪、使用する機体名はどうする？」

「…この外装のままじゃ駄目かな？」

「まあフレームから新規だしねえ…良いんじゃない？」

こうして、私は首尾よくタッグマッチの相手の確保及び趣味へと走る事に成功した。

「ところで、灯の最初の試作機ってどんなの？」

「仮のスペック表ならこれ。」

「……………うわぁ…。」

「どう思う。」

「これ作った人達、話合いそう。」

「うん、簪なら言おうと思ったよ。」

……………

さて、タッグマッチ・トーナメントである。

本来、学年ごとのトーナメント形式なのだが、今回は前回妨害があった事を踏ま

え、二人一組にする事で事務負担の軽減と問題時に対処可能なISの稼働数を増やすために急遽タッグマッチ形式で開催される。

そして記念すべきその第一回戦が：

「まあ一回戦かあ……。」

「だ、大丈夫だから、ね？」

「頑張ってるあかりくん。」

タッグ相手である簪と応援担当の本音に励まされながら、私は企業から渡された試作品一号を纏っていた。

自分の機体と簪の機体を見て、多少テンションが回復したが、それでもいやいやな気分になる。

何せ前回が前回である。

第一回戦から突然のテロリストもとい無人機の乱入、しかも衛星軌道上から強襲である。

更にこっちは結果的に試合に負けている。

面白い筈もない。

「ま、この子達のデビュー戦だし、頑張りますか。」

相手はあの暴力侍娘こと篠ノ之箒とコミュ障厨二合法ロリことラウラ・ボーデヴィッツヒだ。

撲殺系掃除道具は打鉄なので兎も角として、厨二ロリの方は安定性の高い防衛よりの第三世代機だ。

特に初見殺しと言っても良いAICは脅威の一言だが……そんなもん既にばれているのでどうとでもできる。

厨二ロリは自分が担当するとして、箒には掃除道具を担当してもらおうとしよう。

「私が厨二をやるから、箒は掃除道具をお願い。」

「…それ、本人達に聞かれないようにね？」

「モッピもラウラウも怒りそーだねー。」

おっといかん、口に出たか。

それはさて置き、そろそろ出撃だな。

「じゃあ箒、私が先にピットに出るから、そっちは最後にね。」

「うん、お先にどうぞ。」

設置されたカタパルトに乗り、加速のためのGと共にピットから射出される。

Gの圧力と風を斬る感覚を心地よく思いながら、アリーナ内へと打ち出されれば、視界は満員の観客と整備されたアリーナ内のグラウンド、そしてエネルギーシールドに閉ざされた空が見える。

視線を相手側のピットに向ければ、既に二体とも出撃を完了しており、装備を構えて滞空している。

『おい、もう一人はどうした？逃げたのか？』

軍人崩れが何か言っているが、意に介さない。

何せ、これから始まる事に比べれば、そんな挑発にすらならないヤジ等、一々意に介していられないからだ。

『更識簪、MS-06S、出ます！』

突如、全方位通信に短い言葉が乗る。

その内容に多くの人間が疑問符を乗せるが、自分が先程出てきたピットから出てきた機体を見て、誰もがあ然とした。

何せ、その機体の外見は余りにも有名だったからだ。



分かる…その気持ち、実に分かるぞ！

だって私だって叫んでるし！

ISのカメラ機能全開で録画と静止画どっちもガツガツ撮ってるしな！

あ、向こうさんはこの事態に大いに戸惑ってる。

まあ分からないとついていけないよねえ。

『掴みは上々！後は予定通りに！』

『うん、この外装の提案ありがとうね、灯。』

『いいさ。私も見たかったし。』

私は私で将来的にはっちゃける予定だしね。

『それでは第一試合、開始してください!!』

歓声が止まぬ中、進行役の山田先生の放送で、向こうも戦闘態勢に入った。

よし、簪の雄姿も見たいし、さっさとブチころがすか。

大分駆け足十原作ワンサマー勢が全然出ない（汗）  
次回以降はそっち方面の描写入れる事にします



## IS 転生 三組代表が逝く 6

少し短いが許してほしい。

明日も早いのだ…

---

さて、片方がシャアザクと言う余りのインパクトで霞みがちだが、灯の搭乘する試作型ISもまたかなりネタ枠と言って良い。

装甲面積こそ一般的なISに比べて多いものの全身装甲ではない。

そのため、一見しては普通のISの様に見える。

しかし、知っている者は知っている。

生物的な丸みを一切持たず、直線で構成された無骨な兵器然とした灰褐色の装甲に、濃いブラウンの額当て。

その全身に設置された多数のハードポイントによる、バススロット（拡張領域）を使わない別種の多用途性。

そして何故か踵へと設置されている折り畳み可能な無限軌道。

ぶっちゃけ、フレームアームズガールの轟雷だった。

装甲とフレーム作ったのが有澤だから、こんな風に出ない？と注文つけた灯も灯だが、実現する変態企業群もアレだと思う。

シャアザク程の知名度は無いものの、それでも知っている連中はいるらしく、アリーナの一部では爆笑と感動と興奮の嵐が起きている。

なお、版權に関してはブキヤとバン〇ムに宣伝行為として許可を貰っている。

後日、インタビューやイベントに参加せねばならないが、それは必要経費と割り切れるし、イベントには寧ろ参加したので良し。

『渋い：渋いよ灯：！』

簪が感動した様に通信してくる。

気持ち分かる。

しかし、ここから先は気を引き締めよう。

『簪、分かってるね？』

『うん。シャア専用なんだから、無様な真似は許されないよね。』

『じゃあ掃除用具は任せたよ。』

『せめて名前で呼んであげようよ…。』

だが断る。

あんな人格破綻者共、絶対にお近づきになりたくない。

『じゃ、背中では任せたよ相棒。』

『うん、任せて！』

こうして、IS 史上最強のネタ枠と後に言われるコンビの初の公式戦が開始された。

……………

(さっさと片づけなければな。)

ラウラにとって、この試合は織斑一夏を敗北させるための過程に過ぎなかった。多少観客が煩いのが気になるが、そんな事は興味の範囲には無い。

彼女にとっての世界は基本的に織斑千冬と自分と、後は精々部隊の部下や副官の

クラリッサ程度で完結している。

他は眼中にも無い。

なので、自分の方に向かってくる見慣れない灰褐色のISを見て、更にその相手が武装を一切出さずに接近してくるのを見ても、何の警戒もしていなかった。

当然だろう。

彼女の乗るISは第三世代の中でも屈指の完成度を誇り、更に彼女自身の實力も同年代の中では頭一つ飛び抜けている。

彼女が特に警戒せず、徐にレールガンを発射したのも特に間違った選択でもない。ただ、後の展開を知っていたならば……彼女は、此処で全力で応戦すべきだった。

(な……!)

放たれた三発のレールガン。

牽制、追い込み、本命の三射は狙い違わず発射され、しかし目標へと至る途中で爆散した。

相手をよく見れば、何時の間にかその右手にアサルトライフルが構えられ、銃口

から僅かな硝煙が燻っている。

つまり、相手は一瞬で武装を展開した後、早撃ちの要領で音速を遙かに超えるレールガンの砲弾を迎撃してみせたと言う事だ。

馬鹿な、と思う。

自分でも通常では出来ず、ヴォーダン・オージエを使って漸く出来るかどうか五分と言う程の神業だった。

だが、そんな世界大会でも滅多に見ない様な神業を披露した相手は、何の緊張も見せぬまま、ライフルの銃口をこちらに向け……！

「ツチイ！」

咄嗟にその場から後退して離脱するが、エネルギーシールドが突破され、僅かながら機体が損傷する。

幸いにもシールドで大半の威力が削がれた様だが、対IS用徹甲弾と思われるそれは早々当たりたくはない。

「舐めるな！」

ならばと第三世代兵装、A I C（慣性停止結界）を発動する。

光学兵器や多数を相手にしては効果が薄い、こうした一対一の状態ならば反則ともいえる程に効果的だ。

だが、ラウラはまだ知らなかった。

世の中には彼女の尊敬する千冬のように、そんな常識など知った事かと我が道を行くバグキャラが存在する事を。

「落ちろ！」

A I Cの発動直後、敵の動きが止まり、空かさずレールガンを連射する。

発射するのは高速徹甲弾、例えある程度動いて迎撃できたとしても、アサルトライフルよりも遥かに大口径のレールガンの砲弾、それも高速徹甲弾なら先程の二の舞にはならないと踏んでの選択だ。

この行動にラウラは敵の必殺を確信していた。

「えーと、こうか。」

至極あっさりと、敵はその場から動き、レールガンの砲撃を見てから回避した。

「は？」

余りに常識外の行動に、思考が一瞬の空白を産む。

しかし、これは仕方ないだろう。

なにせA I Cは完全に発動し、相手は確かに捕えられていた。

なのにあっさりと自由になり、混乱しながらも牽制として発射されるレールガン  
を適宜回避と迎撃を繰り返している。

『いや、そんなに驚かなくても。』

相手からの全方位通信に、つい耳を傾けてしまう。

それだけ今のラウラは動揺していた。

『A I Cって言っても、所詮はP I Cの応用でしょ？ならさ…』

迫り来るレールガンの砲弾を、しかし相手は迎撃せず…

『完全にマニュアルで動かせれば、P I Cでもその真似事程度は出来ると思わない  
？』

その場でピタリと静止した。

同時、アリーナにいたISに詳しい者達は戦慄を覚えていた。

A I C、高い技術力を持つドイツが散々に苦勞して漸く実用化した第三世代兵装。

それは勿論P I Cの応用だが、その制御と使用には呆れる程の技術的蓄積と機体

側からの補助、そして優れた操縦者による思考制御があつてこそ初めて実戦で使用できる。

それを、目の前のコイツは単なるマニュアル操作だと言いつつ切った。

それはつまり相手選手、即ち倉土灯が乗る限り、どんな機体であろうと最低限ISとしての機能を持っていれば、AICの使用も、拡張領域を利用した防御無視攻撃も可能だと言う事に他ならない。

ラウラとて、箝口令が敷かれた事件の詳細までは知らない。

しかし、その事件の最中に使用されたISの技は以後禁止手とされ、競技中には絶対使用禁止とされた事は聞いていた。

ラウラは漸く確信した。

IS学園を襲撃したテロリストのISを、禁止手とされた拡張領域の攻撃的使用によつて一方的に撃破したと言う事件の当事者。

それが目の前のコイツだと言う事に。

『ま、いいけどね。そろそろ簪の方をゆっくり見たいし…』

目の前？

気づけば、相手は既にISにとって一挙手一投足の間合いへと入っていた。

何と、撃ち過ぎてレールガンが弾切れになっていた。

普段なら絶対にしないミス。

しかし、度重なる驚きに、心が隙だらけになっていた。

自身への罵倒を後回しにし、ラウラは必死に起死回生の一手を探る。

レールガン：間に合わない。そもそも効かないし、弾切れだ。

A I C：同上。

ワイヤーブレード：間に合わない。

となれば、後は接近戦用のプラズマブレードしかない。

起動させ、両手を構える。

しかし、しかしだ。

「終わらせる。」

目の前の、こちらを物を見る様な視線を向けてくる化け物に、敵う気がしなかった。

事実、プラズマブレードを構えた時点で、身体が動かない。

これは知っている。

A I C、自身が扱う慣性停止結界によるものだ。

「意外と便利ね。けどつまんない。」

そしてバツサリと、ラウラの乗るシュバルツェア・レーゲンは灯が取り出した実  
体ブレードによって逆袈裟に切り裂かれた。

## IS 転生 三組代表が逝く7

さて、ラウラをぼこぼこにした後、私は止めも刺さずに簪ウオッチングに精を出していた。

何せリアルシャアザクである。

自分も大概だが、彼女の乗る IS もまたロマンに溢れている。

それを勘違いした厨二女の相手をして見過ごす等あつてはならない。

一応、原作通りに発動させてドイツ軍の弱みを御開帳させるためにも敢えて止めはさしていないが…何故か斬りかかってこない。

はて、機体の調子を見るためにもお喋りとかしてそこそこ手加減してやったのだが…もしかして心が折れたのか？

だとしたら軟弱過ぎるぞドイツ軍人。

と言うか、軍事教練って心を折って上官の命令に絶対服従の殺戮マシンを作るのが目的だろうに（偏見）、何をこの程度の苦境で折れているのか。

まあ良いか。

このまま折れるのなら、所詮はその程度で、こっちの視界に入らない分には別に気にしないし。

それよりもリアルシャアザクを見るのが大事だ。

さつきから動画と静止画で既に7G分は撮っているが、こういうのはやはり生で見るのが一番だしね。

……………

「く、そ……！」

打鉄を纏う筈は何とか対戦相手の赤い機体へと接近しようと積極的に前に出ようとする。

しかし、未だイグニッションブーストすら使えない彼女では、専用機持ちに勝てる訳もない。

一方的に一定の距離を保ったままマシンガンによる射撃を加えられ、ジリジリとシールドエネルギーが減っていく。

それを見て焦りばかり募り、結果として無理に前に出て、また余計な損害を出す事を繰り返している。

この辺り、本人の精神の不安定さ故だろう。

得意な接近戦に拘らず、取り敢えず射撃しつつ打鉄の物理装甲で防御を固めれば、ここまで無様な状態にはならなかっただろう。

だが、箒にはそこまでの柔軟さと余裕が、そして接近戦のみで打ち勝つ技量と経験、そしてセンスが無かった。

これが一夏なら姉譲りのセンスで割とどうにかなったのかもだが、生憎と箒にはそんなものはなく、何よりメンタル面で問題が多すぎた。

だからこそ、この結果は当然のものだった。

『そこ！』

また無理に前に出ようとした瞬間、相手がラピッドスイッチ（高速切り替え）によって装備したバズーカから砲弾が放たれ、直撃こそ免れたものの爆風によって煽られ、出鼻を挫かれる。

「こ、のお……！」

遂に箒は主義主張を降ろして、ライフルを呼び出し、射撃する。

しかし、本人の技量が低い事もあり、当然の様に回避される。

いや、きつと一年では射撃において最も技量の高いセシリアであっても回避され  
ただろう。

『当たらなければどうと言う事は無い！』

何せ、相手はあのシャアザクなのだから。

箒とて日本人、真面目に視聴した事こそ無いものの、ガンダム位知っているし、  
その有名なライバル機も然りだ。

最高速こそ打鉄の1・3倍の箒の敵がその技量によって、まるで3倍にも感じ  
られる。

傍から見れば、完全に勝負は見えていた。

.....

ラウラは呆然としていた。

機体ダメージは既にC判定であり、辛うじてまだ動けるが、それとて敵が敢えて見過ごしているからこそだ。

今自分が損傷した機体で何をした所で、あの化け物には届かないと確信を持って言えた。

あの最後の一闪、あれは臨時教官であった千冬が未だISライダーとして現役だった頃のそれに近いものだった。

無論、それそのものではないし、千冬のそれはもっと鋭く、美しい。

だが、同じ領域であると思わせるものがあつた。

それ故に、ラウラは挑もうとは思えなかった。

【力が欲しいか？】

だが、不意に聞こえた声で意識が彼岸から戻ってくる。

それは典型的な悪魔の誘いだつた。

【力が欲しいか？】

視線を数m先で仲間への応援に声を上げている敵を見る。

きつと何不自由なく生きてきて、なのに親兄弟もなく、千冬だけが味方だった自

分を踏み躪った灯を。

そう思うと、何処からか動く気力が湧いてきた。

（貴様は…そこまで多くのものを持っておきながら…そのためだけに生まれた私よりも強くありながら…！）

それは良いものではないと直感的に分かる。

しかし、その感情に抗うには、彼女は余りに幼く、抛り所が無さ過ぎた。

【力が欲しいか？】

（寄越せ！奴を打倒し、私の存在を証明できるだけの力を寄越せ！）

【欲しければくれてやる！】

そして、ラウラの意識は黒に吞まれて消えた。

同時、中破状態だったシュバルツェア・レーゲンの姿がブクブクと消え、片手に剣を持った歪な女性を模した姿へと変貌した。

【コード認証確認。VTシステム・アクティブ。戦闘モードへ移行。】

こうして、紛い物の戦乙女は立ち上がった。

.....

(お、漸くか。)

敵に背を向けながら、灯は背後でラウラがVTシステムに吞まれたのを視認していた。

元より、ISのセンサーやレーダーは全方位に対して作用している。

例えば操縦者が眼球を失った所で、機体から送られるデータを処理できれば戦闘続行は可能なのだ。

だが、それでもISの戦闘において不意打ちや死角と言うものが発生するのは、人間の方がISからの情報を消化し切れしていないからだ。

しかし、それはあくまで常人の話だ。

常人よりも遥かに高い改造人間とサーヴァントとしてのスペックを發揮できる灯にとって、そんなものは最初から克服できている。

だからこそ、背後で立ち上がり、こちらに向けて踏み出したVTシステム、織斑千冬の紛い物にも当然ながら気づいていた。

(とは言え、余り早く片付けちゃ駄目だしね。)

瞬殺すれば、それだけドイツ側への弱みが無くなってしまふ。

それは代表候補生としても、原作展開でも駄目だ。

あれが無ければ天災が本腰入れてドイツのマッドサイエンティスト共を殲滅しなくなってしまうし、その後厄ネタの一人となったラウラを学園で保護できなくなる。

自分が悪くはないものの、織斑先生からの悪感情はなるべく買いたくは無。

「まあ、食らってやる義理は無いんだけどさ。」

そう言って、背後から袈裟切りをしてきたVTシステム、その剣を持った両手を背後へと逆サマーソルトの形で蹴りつける。

その動きは織斑千冬を模しているだけあって確かに早い、それだけで特に脅威は感じられなかった。

その際、踵部の無限軌道を展開し、リーチを伸ばす事で相手の剣が届くよりも早く蹴りを当てる事で、こちらへのダメージは殆ど無い。

【◆!】

合成音声が漏れ出て、空かさず二の太刀を振り被ってくるが、そこまで付き合う義理は無い。

二撃目が来る前に、灯はさっさとその場を離脱し、接近戦の間合いの外、アリーナの反対側の壁の近くまで瞬時加速を使ってまで後退した。

「やっぱり、ノンアクティブか。」

その辺りは原作通りらしく、距離を取ったらVTシステムは動かなくなった。

つまり、態々近接を挑まざとも良いし、狙撃やただの砲撃なら迎撃の可能性もあるが、それではどうしようもない攻撃をすれば楽に仕留められる事を意味する。

もしこれがアクティブだったら、その時はこちらも本気を出すつもりはあった。しかし、既に先程の無茶な逆サマーソルトで関節部へ結構な負荷がかかっている。本気を出していれば、この機体も直ぐにお釈迦になっていただろう。

『簪ー今大丈夫？』

『どうしたの？こっちは余裕だけど。』

余裕と来たか。

原作よりも遥かにメンタルが安定しているため、友人としては実に頼もしい。

『なんかこっちで問題発生。最大火力で鎮圧するから、タイミング見て私の背後に退避して。』

『最大火力って…あれ使うの？』

『うん。お披露目するには良いかなって。』

無論ロマン兵器なのだが、秘密兵器っぽくってついつい装備してきたのだ。

お蔭で拡張領域が第二世代相当の筈の轟雷でもマシンガンと予備マガジンとブレード一本でカツカツだがな！

『分かった。そっちが準備終わったら行くね。』

『うん、頼んだよー。』

そして、通信を終えた灯は拡張領域からあるものを取り出した。

それは余りにも巨大かつ複雑な機械で、灯の纏う轟雷本体よりもデカかった。

「よい、せつと。」

それを背面に装着し、FCSが武装を認識し、機体の人工音声が状態を告げる。

【試作兵装が接続されました。システムに負荷が掛かっています。使用の際は可能な限り安全対策を取ってください。】

折り畳まれていた機械が、徐々にその本来の姿へと戻っていく。

轟雷本体もまた、脚部の無限軌道が展開して地面に接地し、足裏にある不整地用クローが展開し、機体を固定する。

真横を向いていた三重に折り畳まれた砲身が正面を向いてから真っ直ぐ伸びていき、その砲弾に見合う発射機構が砲身と接続され、次に5発の砲弾を格納した弾倉を繋げ、最後に各部にロックが掛かり、完全に固定されると、5秒程かかった変形は漸く終わった。

【老神、展開完了。】

「初弾装填。」

【了解。】

ガコン、と重々しい音と共に弾倉から艦載兵器サイズの砲弾が装填される。狙うのはこちらを視認しつつも何の動きも取らない欠陥品だ。

精々1km程度の距離、ISのセンサーがある上に標的は静止状態、外す理由はない。

『こっちは準備完了。』

『了解！行くよ！』

通信とほぼ同時、簪のシャアザクが掃除用具の腹部を加速を乗せたまま強かに蹴りつける。

元々消耗していたのか、掃除用具は身体をくの字にして大地へと叩き付けられ、そのまま浮かんでこない。

そして数秒とせぬ内に、灯の背後に簪のシャアザクが着地した。

「凄い…これがOIGAMI…！」

有澤製IS用重グレネードカノン、その試作モデルたるOIGAMI。

ISの武装としては余りに無骨で巨大なソレは命中率とコスト、整備性・生産性の悪さ故に完成前からお蔵入りが決定し、今日まで倉庫の隅で埃を被っていたロマン・オブ・ロマン。

それをもしかしてあるかなあと本社施設を探検し、期待通り見つけた灯が無理を言っただけで持ってきたのがこれだった。

「変形シーンの撮影は？」

「ばっちり！後で見ようね！」

「宜しい。ならば後は実射だ。」

既にロックオンは済ませている。

だが、一応こちらが官軍だと示すために、教員たちがこちらへ踏み込もうとする中、灯は敢えて一手間かけた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒに告げる。そのISは違法だ。直ちに武装解除して投降せよ。」

『……………』

だが、当然ながら意識の無いラウラがそれに返答する事は無い。

別に構わない。

それならそれで、彼女が凄惨な体験をするだけなのだから。

「勧告はした。ではな。」

そして、灯は躊躇いなく、150mm専用砲弾をラウラを取り込んだVTシステム目掛け、轟音と共に発射した。

やりきったぜ…  
(汗拭いながら

---

## IS 転生 三組代表が逝く 8

「やり過ぎだ馬鹿者共。」

スパパーン！と快音が響いた。

「ごめんなさい。」

普段は回避する灯も、簀同様に甘んじて出席簿の一撃を受ける。

衝撃が徹っているのか、やたら痛い。

しかし、その程度で済めば御の字と言う程度に今回の騒ぎは被害と影響が酷かった。

先ず第一にラウラの乗る IS に搭載されていた VT システム。

これはドイツ本国への照会及び国際 IS 委員会からの強制査察が即座に行われる事となったが：ラウラを作成したデザイナーズベイビーの研究施設ごと、関係者は文字通り消滅させられていた。

他、ドイツ政府及び軍の一部高官が謎の死を遂げた事で、事件は迷宮入りとなった。

なお、千冬の携帯には「アホな連中は掃除しといたから誉めてー♪」なるメールが入っていたりと、各国は頭を抱えつつ、ポロポロになったドイツを更に責めて落し所を探っている。

次にラウラ自身の処遇だ。

デザインナースベイビーであり、軍所有の兵器扱い（表向きは士官学校向けの教育を受けている事になっている）である彼女は、今回の一連の事件によって原隊であるシュヴァルツェ・ハーゼと共にドイツ国内に居場所がなくなってしまった。

一応副隊長のクラリッサは正規の軍人であるが、彼女一人でIS部隊全員の面倒を見る事が出来る訳もなく。

既に今年の転校枠も一杯なので、部隊の適齢者は来年度受験してIS学園に来る事となっている。

それ以外の者は正規の方法で士官学校入りなり就職口を探す事となるが、デザインナースベイビーであり、軍事方面に偏れど十分な教育を受けている事もあり、まあ大丈夫だろうと見られている。

なお、ちゃんと給与は適正額＋賠償額が払われる予定だ。

そして、我らがバグキャラこと灯の処遇である。

試合であり、違法ISの強制停止措置のためとは言え、過剰な攻撃を加えた事は当然ながら問題視された。

しかも、その攻撃は最新技術で構成された150mm砲による直接砲撃である。例え相手が違法なシステムを搭載したISであっても、過剰火力過ぎた。

また、アリーナに与えた被害も洒落にならなかった。

何せ試合会場の3割がクレーターと化したのだ。

幸いにも死人も怪我人も出なかったが、アリーナのエネルギーシールドが飽和しかけ、危うく観客に被害が出る可能性もあった。

幸い、緊急時用の安全機構（エネルギーシールドを上面のみ解除して上空へ逃がすシステム）が働いたため、飽和する事は無かったのだが。

また、直接砲撃こそ命中小なかつたものの、爆風によって篠ノ之箒の打鉄はD判定を受けて大破よりの中破、一方簪は対ショック姿勢及びシールドエネルギーに余裕のあったためC判定で済んだ。

しかし、砲撃が直撃したシュバルツェア・レーゲンはVTシステム発動中だった

とは言え大破、ラウラもシステムの起動と強制停止による反動で気絶して検査入院する事になった。

そして、やらかした本人の轟雷もPICを全て砲撃の反動の中和に割っていたため、機体及び搭乗者保護が疎かになっていた事もあり、爆風でシールドエネルギーが切れたと同時に溜まっていた駆動系や関節ダメージも合わさり、D判定どころか完全に大破、本人も首がむち打ち状態になって、数日間は安静&謹慎を言い渡された。

こんな状態になっては再試合など出来る筈もなく、後日改めて開催される運びとなった。

本来、ここまでやらかしたら両者とも相応の処分（代表候補生資格及び専用機の取り上げ）になる可能性も高いのだが、本人らの技量が同年代の中でも特に高く、中でも倉土灯の純粹な量産型ISによる第三世代兵装の再現は世界的にも高く評価されており、おいそれと処分する事は出来なかった。

まあ資格とコアを取り上げられた所で変態企業群が確実にコアを貸し出して抱え込もうとすると思われるので、余り意味がないとも言いが。

とは言え、お咎め無しは流石に無理なので、ガチおこ状態の織斑教諭によるお説教&反省文の提出、更にクレーターとなったアリーナの整地をさせられる事と相成ったのだった。

.....

「ねえ灯。」

「んー？」

アリーナに出来たクレーター、その埋め立てのためにロードローラーを人力で動かす灯に、アリーナのエネルギーシールドの状態を確認していた簪が声をかけた。

「灯が織斑君達が嫌いなの、私のせい？」

それは簪にとって負い目だった。

自分の専用機の開発が打ち切られたのは、織斑一夏の専用機を倉持技研が用立てようとしたからだ。

その分の開発リソースを次期国産第三世代ISである打鉄式型のチームから持つ

てきたため、打鉄式型の開発は事実上停止、簪の下にはコアだけが残った。

その事を理由に、簪は織斑一夏に対して悪感情を持っているが、それが親友に伝播しているのではないかと危惧していた。

「違うよ。」

だが、灯はそれは違うと断言した。

何せ彼女にとって、織斑一夏とその周辺はキャラクターとしてならば兎も角、こうしてリアルで見ると実に自分勝手に人格破綻な連中だからだ。

ISと言う事実上の兵器を纏いながら、それを法律で規制されているにも関わらず、平然と日常的に異性に対して暴力を目的として振るう。

お近づきには絶対になりたくない。

それがIS学園にやってきてから彼・彼女らを観察して至った灯の結論だった。

なまじ簪が良い子であったため、どうしても彼・彼女の事が何段も劣って見えると言う事もあったのだが……それにしただって酷いとしか言い様が無かった。

「まーそー見えちゃうのは仕方ないけど、これは私の感情由来だから、簪が気にする必要は無いかなあ。」

「そっか。」

「うん。でもまあ、そうじゃなくても簪が何かされたら怒るよ。友達だからね。」  
そういって少年の様にニツと笑う様は、まるで悪童のそれだ。

以前はもっと鋭く、笑うと言う事も余りしなかった親友の笑顔に、簪は釣られた様にクスクスと笑った。

嘗て出会った頃、灯は寄らば斬るとでも言うべきか、本当に殺気立っていた。

それが父を失い、母と故郷から勝手に離されたが故である事はもう知っているが、その頃に比べると本当によく笑うようになった。

序でにノリも良くなったと思う。

「じゃあ、さっさと終わらよっか。」

「ごめんね、手伝わせて…。」

「いいよ、友達だもん。」

夕暮れの放課後、二人は仲良く片付けを続けた。

「かんちゃんはお嬢様なのにく……」

一方その頃、簪と同室の本音は嫉妬でギリギリ言っていた。

……

『まさか、即日でお釈迦とはな……。』

『オタクのせいでしょ、アレは。』

『ぬう……まさか本当に使うとは。』

『とは言え、データはこれ以上無い程揃いました。おまけにドイツのAICとその再現データまで。』

『これ使えば、次期主力機も作れそうですね。』

『専守防衛の日本らしい機体になりそうだな。』

『で、次の機体は？』

『あ、うちが前言ってた第三世代兵装を装備したのが出てます。』

『やけに早いな？』

『機体本体のフレームは予備パーツから、装甲は今回は桐山君にお願いしました。』  
『機動と火力の両立した、全く新しいISです。これはもう第四世代と言っても良い。』

『では急ぎ送るとして…もう一人、彼女の友人への勧誘は？』

『データの共有と資材の融通は確保できました。』

『彼女も極めて優秀な人材だ。代表候補生で終わらせるのは勿体ない。』

『うむ。とは言え、何処か一社が独占するには余りにも惜しい。』

『では…？』

『共同開発計画を一步進め、多企業による合同連合を設立し、そこに所属してもらう形にする。』

『で、こっちに引き抜く準備は？』

『二人とも凡そ仕込みは完了だ。来月には爆発するだろう。』

『順調、と言った所ですか。』

『…所で、バン〇イとコ〇ブキ屋からなのだが…。』

『あの二社が何か？』

『全面的に協力するから、是非とも色々やってくれと。』

『序でに詳細な資料も送られてきました…。』

『流石過ぎるな。』

………

タッグトーナメントは簪が普通の打鉄、私が以前練習用に使っていた打鉄改（IS学園仕様）により順当に一年の部で優勝した。

それに関しては思う所は無い。

ただ、現状の一年の練度ではこの辺が妥当だ、と思う位だ。

なお、厨二病少佐は部下共々軍務を解かれ、普通の代表候補生になったのだとか。来年度以降は適齢の部隊員達も受験するらしいが、特に関心は無い。

後、目覚めた後に私のいる教室を訪ねてきたが…絡まれると面倒なので霊体化して消えていた。

はっはっは、サーヴァント・ライダーとしての機能も使えるようになったんだよ。

まあ一番習熟が進んでるのはやっぱり仮面ライダー系だが。

だって結城丈二さん始め一号二号の頭脳とか、めっちゃ役に立つんだもん。

なので、その気になれば自分でIS組めちゃいそうだけど、それはしない。

そっちは企業の人に任せてあるし、あの人達を作るISは面白いからね。

で、タッグマッチトーナメントから一週間程で次のISが届いた。

はえーよホセ、と言いたい所だが、受領したISの外見にもびっくらこいた。

全体が丸みを帯びた形状。

通常の人型とは乖離した、四肢と追加装甲の様な非固定浮遊部位へと内蔵されたプラズマ砲。

両肩辺りにある非固定浮遊部位は特徴的な甲殻類の様な印象を持った、丸みのある形状。

うん、レイダオの改良機ですな、本当にありがとうございます。

またフレームアームズかよ、しかも今回はガールじゃなくてガチな方なのかよっ。

今回は汎用性を捨てて、第三代兵装の試験機であるらしい。

以前の轟雷のフレームを更に改良したものを使用しているので、前回の様な大口

径グレネードにでも当たらない限りは壊れないそうさ。

まあ昭和ライダースペースとか發揮したら一瞬で破裂するんだろうけどね！

なお、名前もそのままのこのレイダオだが、本来は胸部にある追加装甲が二つになった上で非固定浮遊部位となり、脚部も細いものではなくジイダオのややずんぐりしたそれだ。

そして、非固定浮遊部位と腕部、序での脚部（脛）に搭載された6門のプラズマ砲が主兵装となっている。

これ、実はプラズマ砲兼プラズマブレード兼プラズマ推進器を任意に切り替える事が出来るのだとか。

そのため、素の状態で高機動型ISに匹敵する機動性を持っており、その辺りは正に脱帽と言っても良い。

反面、武装への被弾時には爆発して一気に被害が出るとか、一機当たりのコスト・整備性が轟雷よりも高い等の問題もあるそうさ。

まあ当たらなければどうとでもなるので、一端これで良しとしよう。

そしたら、  
何故か簪から模擬戦を申し込まれたでござる。



## IS 転生 三組代表が逝く9

『いきなりでごめんね。』

アリーナ内で、二体のISが模擬戦の開始を今か今かと待っていた。

それは多数いる観客たちも同じで、一年だけでなく、他学年や教員達も時間がある者は多くが観客席にいた。

今回はタッグマッチで組んでいた機体同士であり、更に公式戦ではないので堂々と食堂の食券を用いた賭博が行われていたりもする。

一体はレイダオ。

試作型とは言え第三世代兵装である多目的プラズマ砲6門を備えた機体であり、一見重装甲でありながら軽量であり、プラズマ砲を高機動モードにして使用した場合、現状公式で記録されているISでは最大の推力を誇る重機動タイプだ。

それに対峙するのは第二世代に入る、シャア専用ザクⅡS型だ。

先日、学生お手製の機体でありながら活躍した事で一躍注目を浴びた本機だが、今回はフレーム素材を有澤重工製のより堅牢なものに交換し、更に胸部に近接防御

用のバルカン、左腕部にバルカン内蔵式の追加装甲を増設し、スラスタ―数を増加させたオリジン仕様だった。

『いいよ。いきなりだったけど、簪ならいつでも歓迎だし。』

『そっか…。』

どこか微笑ましいやり取りでありながら、既に両者の動きは互いの隙を探り合っている。

『じゃあカウントするよ。さーん…。』

管制室から本音のカウントがアリーナ内に放送された。

途端、ジャキリと簪が武装のセーフティを外し、灯はプラズマ砲のチャージを始める。

『に〜』

既にここは互いにとって一挙手一投足の間合いであり、何時何があってもおかしくはない。

『い〜ち』

ふと、灯と簪の視線が全身装甲を纏いながらも、目が合った気がした。

それで相手の感情が読めたのか、灯は楽しむ事を止めた。

簪の本気が伝わったからだ。

『ぜろ〜！』

だから、初手で終わらせるつもりで、6門のプラズマ砲を全て推進器として、一瞬で音速の数倍へと到達した。

その手を、灯のやり方を知るが故に、簪は見抜いていた。

『ッ!!』

突撃してくるレイダオを見越して、シャアザクは上昇する事でその突撃を回避する。

それに灯は驚きを、簪は呻きを漏らす。

何せ、今の挙動はそれだけ特別だったのだから。

『ふっ!』

両肩に浮かんでいた非固定浮遊部位、多目的プラズマ砲を内蔵した追加装甲の砲門を直上にいるシャアザクへと発射する。

牽制目的で放たれたそれは通常のそれではなく、拡散し、広範囲・短射程に熱量

をばら撒くものであり、上手く距離を空けない限りは大なり小なり被弾する。

だが、それをシャアザクは先日のタッグマッチでも見せなかつた高機動性で以て掠りも許さず回避してみせた。

それを見て、灯は先程の違和感と併せて、核心へと至った。

『簪、貴方…！』

灯の声から焦りが漏れる。

何せ、簪がしているのはそれだけ危険な事だからだ。

『うん、フルマニユアル、こんなに難しいんだね。』

何処かぎこちない声に、ああやはりと灯は思う。

確かに、P I Cのマニユアル操縦は熟練者なら大なり小なりやっている事だ。

しかし、フルマニユアルとなると話は違う。

ISと言う高機動を宿命づけられた兵器で機動戦を行いながら、下手なCPUよりも高度な演算を行う事で始めて可能となるのだ。

勿論ながら、搭乗者への負担は極めて大きい。

灯がそれが出来るのは、頭脳も肉体も人間の範疇に無いが故だ。

しかも、今の挙動を見る限り、灯と同じくP I Cの搭乗者保護機能の割合をかなり減らすか無くしてまで機動性へと割り振っている。

確かに使えれば強いだろう、確かにそうしなければ勝てないだろう。

だが、それは諸刃の剣に他ならない。

機体が大丈夫でも、中身の人間が持たないのだ。

確かに簪は戦場でリアルタイムで大量のミサイルを個別の標的にマニュアルで誘導させる様な情報処理能力を持っているが、肉体強度は鍛えた人間限度でしかない。

最悪、ガルドさんの「伝説の5秒」後みたいな事になる。

『直ぐにP I Cを通常状態に戻して！死にたいの!?!』

それを思えばこそ、灯は簪に制止の言葉をかける。

だが、返答はマシンガンによる銃撃だった。

『駄目、だよ…!』

Gに歯を食いしぼりながら、それでも簪は戦闘機動を止めない。

それに釣られて、灯もまた戦闘機動を止める訳にもいかない。

何とか観客席にいた教員達が管制室に入り、通信で戦闘停止を呼びかけるも、簪は止まらない。

焦りだけが募っていった。

………

「貴方が更識さん？ふーん……」

初めて会ったのは、中学の入学式の事だった。

教室に入っただけで、本音と合流できていない時に、偶々隣の席だったのが灯だった。

第一印象は悪いもので、怖い人と言うのが本音だった。

しかし、彼女はとっつき辛い様に見えて、その実とても世話焼きだった。

本音以外にはまともに話す事も出来なかった私が、家族や使用人以外に初めて話せる人だった。

お父様もお母様も仕事で殆ど家にいないし、お姉ちゃんとは疎遠になってしまっ

た。

そんな時に出会ったのが灯だった。

一応、家の習慣として背後関係を調べたが：正直、知りたくなかった。

父は殺され、母は心を病み、故郷から引き離されてこの学校に入れられた。

それもこれも、IS適正が高く、孤児同然だったからと言う理由だけで。

だが、彼女は折れなかった。

寄らば斬ると言う雰囲気も、自分と出会ってからはゆっくりと薄れ、年相応の笑顔を見せるようになっていった。

そんな人が、自分の親友だ。

本音の様な家の関係があったが故のそれではなく、純粹に対等な人間関係。

それが簪にはとても尊かった。

だが、徐々に簪はある疑問を感じていた。

それは、自分は本当に灯の友人に相応しいのか、と言う問いだった。

灯の成績は政府や財界の要人の子息や関係者が多くいる中学校の中でも、全科目で常にトップ集団に食い込んでいた上、孤児院の年下の子供達からもよく懐かれ、

世話を焼いていた。

振り返って、自分は学業を除けば常に趣味に全力投球であり、時折寝食を忘れて本音に救助される程度には不健康な生活ぶりだった。

これでは、本音とはまた別の形で自分の心を救ってくれた灯と共にいる事はとてもではないが相応しいとは思えない。

とは言え、そんな面倒で傲慢な考え、常識的な簪は捨て置いた。

だが、日本代表候補選定試験において、その疑問は遂に破裂した。

このままでは、自分は灯と共にいられない。

それは灯の適正が自分より高く、尚且つ今日初陣を迎えながらも日本代表候補生筆頭となってみせた彼女の圧倒的な実力を見せつけられたからだ。

それこそ、天才と言われた自分の姉の様だった。

だからこそ、簪は思った。

もう置いていかれたくない。

両親は遠く、姉とは疎遠で、従者はいるが、友人らしい友人は一人だけで、その友人もまたこのままでは近い内に自分の元からいなくなってしまうだろう。

それを簪は許容できなかった。

だからこそ、無理をしてでも親友の隣にしようとした。

対等の実力であろうとしたのだ。

そのために、簪は迅速に行動した。

実家を出てから殆どしてなかった訓練に加え、コアだけとなった愛機の開発、そして灯が得意とするP I Cの完全なマニュアル制御による高機動戦闘。

流石に量子格納による防御無視攻撃は短期間ではどうにもならなかった。その後回しにしたが、P I Cのマニュアル操作に関しては元々の処理能力の高さもあり、あの程度OSを自分向けに改良する事で難易度を下げ、どうにか習得できた。

そして、自分は今その親友と対峙している。

自分は貴方の隣にいるのに相応しいのだと。

決して足手纏いではないのだと示すために。

簪は、今までの人生で嘗てない程の努力と覚悟の上でこの場に来た。

それは、憎悪を熾火の様に燦らせつつも、チートを生かして結果的には自分の好きな事ばかりしている灯には無いものだった。

.....

(とつとと終わらせるしかない！)

簪が覚悟を決めてこの模擬戦に、否、戦いに挑んできたのはこれで分かった。だが、友人として彼女を止めるべきだとも思う。

それは正面から戦い、決着を付けたい、勝ちたいと言う思いと同等なもの。ならば、答えは決まっている。

(正面から最速で撃破する！)

幸いにも、一見重量級に見えるこのレイダオは実際は高機動砲戦型だ。

簪の乗るシャアザクはやや近接よりの汎用機だが、どう足掻いた所で競技用の第二世代だ。

スベックはこちらが有利と言える。

しかし、小回りの点では大型機であるこちらよりは上だし、何より燃費においては第二世代だけあって向こうの方が上だ。

かと言って、乾坤一擲の突撃をしようものなら先程の焼き直しになるだけだ。

(撃ち合いはプラズマ砲のこちらが有利。でも継戦時間は向こうが上か…。)

つくづく第二世代ISの完成度と言うものは厄介だ。

下手に武装の方に思考制御を割いていないだけ反応速度が良いし、燃費も良ければ、各部の信頼性も高い。

乗り手次第で幾らでも化ける辺り、下手な武装を追加した上でそれを主軸に開発されている第三世代ISよりも遥かに安定性がある。

(とは言え、向こうも長引けない筈。)

実戦でのP I Cのマニユアル操作、それも8割からフルとなると、搭乗者への負担は大きすぎる。

それこそ簪の様な高い処理能力を元々持っているか、灯の様に人間をやめているかしないとまともに扱えるものではない。

必然、簪もまた短期決戦を挑まざるを得ない。

(そら来た。)

そして、直上からシャアザク(オリジン仕様)がトマホーク(ヒート無し・元は

打鉄のブレードの端材）を振り被って急降下してきた。

それを右腕部のプラズマ砲をブレードモードに設定、1m程の刀身とし、迎え撃つ様に振るおうとして…

「ッ！」

『惜しい！』

プラズマブレードを突き抜けてきたトマホークに、胸部装甲を浅く斬られた。

寸での所で身を反らしていなければ、そのまま胸部装甲を完全に破壊されていた。（普通の物理ブレードなら溶断できる筈。）

即座に距離を取り、出力を落としたプラズマ砲で牽制射撃を行い、先程の出来事を考える。

ヒートソードでもないし、ビームサーベルでもないので元々鏢迫り合いなんて出来ない。

だが、ただの物理ブレードならこちらが勝つ筈だし、あの斧には熱源も特にないと言う事は特殊な機能は無いと言う事。

となれば話は簡単、電源を必要としない様な工夫を施してあるのだ。

「対熱コーティング！」

『当たり前。』

機体を掠る形で命中しそうになるプラズマ砲の射撃を、簪は先程の斧を盾にする形で無傷で遣り過ごす。

成程、こちらの機体の情報は簪とも共有していたし、彼女であれば一週間もあれば仕込める。

「いいね、本当。すごくいい。」

ニイト、女子としては止めた方が良い笑みが浮かんでしまう。

ISに乗って、こういった高揚感を覚える事は今までなかった。

実力の近い相手と不利な状況ながらも全力で戦い、勝利を得ようとする。

奪われ続けた今生では、試合では余裕で勝ち続けていたが故に、このような闘争本能を身近に感じるのは本当に珍しい。

闘争心、或は勝利の希求。

目の前の敵を蹂躪し、撃破し、己の方が強いのだと周囲に証明する行動。

当たり前の様に行っていたそれが、この時ばかりは難易度が高くなっている。



FGO イベントと執筆の時間が取れない…  
くそ、これだから繁忙期は…！



## IS 転生 三組代表が逝く 10

戦いは膠着状態にあった。

互いに競技用リミッターをつけた状態でありながら、高機動用の超高感度仕様でなければ捉える事も出来ない程の速度で、二体の IS が戦闘をしていた。

片や重機動型の第三世代レイダオ。

片や汎用白兵型の第二世代シャアザク。

どちらも完全に高機動とは言えない。

なのに、どうしてそこまでの機動性を発揮できるのか？

例えば、競技用リミッターの無い軍用 IS の P I C の出力を 100 とし、通常はそれを機体の機動性と搭乗者保護に 50 ずつ割り振っている。

競技用の場合はリミッターによって発揮できる出力は 50 で、機動性と搭乗者保護に 25 ずつ割り振っている。

しかし、マニュアル操作をしている二人は搭乗者保護の分を 0 にし、機動性に 50 全てを割り振っているのだ。

確かに強力だし、競技用ISでも軍用のそれに迫る事は出来るだろう。

しかし、しかしだ。

航空機でやれば機体が空中分解する様な機動を平然と行う中で発生するG、それを一切軽減する事なく受けるとなれば、普通に命の危機である。

瞬間的なものならISスーツの機能によってはまあ何とかなるかもしれないが、継続的に受け続けければ骨折や毛細血管の破裂に臓器不全、果ては内臓破裂からのショック死や出血死に至る可能性も捨てきれない。

そんなリスクを灯が侵すのは、それがリスクにならない程の頑強さを持っているからだ。

しかし、簪は違う。

年頃の少女としてはよく鍛えられているが、言ってしまうえばそれだけだ。既に戦闘開始から3分が経過している。

未だ両者ともミスらしいミスはしていない。

しかし、ここから先は明らかに灯／レイダオが有利となる。

基礎となる身体能力が違い過ぎるが故に。

だが、灯はあくまで早期の決着を望んで果敢に攻め立てる。

機体の燃費が良くない事もあるが、何よりも親友が傷つくの恐れるが故に。

何より、ここまでの覚悟を魅せてくれた親友に報いるためにも、つまらない幕引きなぞさせたくなかったのだ。

だからこそ、灯は全力で簪を撃破しようとレイダオを駆る。

だが、単純なIS乗りとしての技量に関しては、二人は互角と言える。

何せ肉体・頭脳の違いこそあれど、自分自身のスペックの高さで勝っている様な二人である。

搭乗時間にもそう差は無いのだから、必然的に互いの隙やミスが出るタイミングを伺い続ける。

故に決着はつかず、双方がアリーナを所狭しと飛翔しながら弾薬とエネルギーを消耗し続けていく。

時間と共に機体面では灯が、肉体面では簪が不利となっていく。

それでもなお、二人は一切気を緩める事無く、機が訪れるのを待っていた。

.....

試合を見守っている教師陣は難しい顔をしている。

正直に言えば、今すぐにも割って入りたい所だが、この試合の行方は二人のメンタルに大いに影響を与えるとして、迂闊な手出しは控えていた。

無論、どちらかが生命の危機に瀕した場合は即座に救助する用意はしていたが。

「山田先生、更識のバイタルは？」

「危険な数値です。辛うじてイエローをキープしてますが……」

「レッドになった時点でIS装備の教員は突入を。倉土が仕掛けてくるようなら墜とせ。」

『織斑先生、それはやり過ぎでは？』

そう言って通信を繋げてきたのは灯の担任であるラトロワだ。

夫と一人息子を持つ既婚者で、教員達の中では数少ないリア充の一人だが、元はロシア国家代表を務めた事もある才媛だ。

「頭が闘争本能で一色のアホにお灸を据える良い機会だ。それに油断すれば喰われ

るぞ？」

『ゾツとしないな。まあ仕事はこなすでしょう。』

千冬にクールに返す様は正に歴戦と言った風格だが、これで家に帰れば夫と息子にダダ甘いのだから人間って分からないものである。

『で、どちらが勝つ方に賭けるんだ？ 私は当然倉土だが。』

「あ、私も倉土さんで。」

「お前達……。」

こんな時にも茶目っ気を忘れない同僚達に、千冬は呆れた様に嘆息した。

………

息もつかせぬ高機動戦闘の最中、その隙を簪はものにした。

撃ち過ぎたプラズマ砲の冷却のためのインターバル。

それ自体は幾度かあったが、他のプラズマ砲を使用するか距離を取る、或は不利と悟ってもなお接近戦を仕掛ける事で消していた。

しかし、此処に来て極限の状態における射撃兵装管理の失敗による数秒間の射撃不能時間を、簪は正確に読み取っていた。

(ここ……！)

灯の駆るレイダオの背後、そこに簪の駆るシャアザクが滑り込む。

攻撃し辛い位置にいられるのを厭ってか、レイダオは6門の多用途プラズマ砲を全て推進モードへと設定、六重瞬時加速による圧倒的な速度で以てその場を離脱しようとする。

しかし、ここで灯は更なるミスを犯してしまった。

人体の構造上、背後はどうしても死角となる。

だが、通常は全方位を知覚するハイパーセンサーにより問題らしい問題は出ない、と思われている。

しかし、人間の脳ではその情報を100%生かす事は出来ないし、上手く利用したとしてもどうしても肉眼とハイパーセンサーの使用には切り替えのための僅かな隙が存在する。

しかも、それが常に存在する場所がある。

肉眼の視界限界とハイパーセンサーの感知範囲の境界線上。

そここそが、ISにとって最も知覚し辛い場所なのだ。

推進モードの推力を遺憾なく発揮できる態勢を取った故に、灯はその境界線上に簪を入れてしまった。

これでは極端に攻撃し辛くなる。

それでいて、簪はなおも攻め手を緩めなかった。

「強制排除！」

簪の声に応え、シャアザクは破損した装甲を全てパージ、機体を軽量化させる。逆L字型シールドも、スパイクシールドも、胸部装甲も、モノアイが特徴的な頭部すらも。

残ったのはフレームとバックパック、そして手足のみ。

この大幅な軽量化及び省エネ化により、運動性・加速性・燃費が向上し、何とかレイダオに追いつかれる状態になる。

（後、一步……！）

音速を突破して離脱しようとするレイダオに、シャアザクは辛うじて追隨する。

直線の加速、それなら圧倒的にレイダオが勝る。

しかし、此処はアリーナ、限られた空間だ。

レイダオの加速力が如何に高くとも、それを活かせる直線コースには限界がある。これが屋外であったら確実にレイダオに有利だが、限定された閉鎖空間では小回りの利くシャアザクの方が有利だった。

だが、此処まで来るのに払った代償は大きかった。

ギギギギギギ……と、限界を迎えつつある機体各部から徐々に悲鳴が上がっている。既に各関節はイエローゾーンで、装甲もギリギリでの回避が多かったため、パージしていなくとも、溶解しかかっている部位も多いし、シールドエネルギーも既に1割を切っている。

そして、簪自身の体力も限界だ。

これが最初にして最後のチャンスだと、簪は悟っていた。

だが、灯としてこのまま詰ませるつもりは無い。

6門の内2門を迎撃に向け、連射・単射・拡散・照射と手を変え品を変え、簪の追撃を振り切ろうと躍起になって攻撃を繰り返す。

しかし、思い出してほしい。

元々燃費の良いとは言えない新型の第三代機が度重なる高機動戦闘の後、6門の多用途プラズマ砲を全て加速乃至攻撃へと使用し続けられ、一体どうなるのだろうか？

その答えを示す様に、レイダオが加速を停止、急激に減速していく。

(来た！)

それを見た簪は、迷わずに前に出た。

残っている武装は耐熱コーティングを施した斧、そして高速徹甲弾を装填したライフルのみ。

既に敵は死に体で、こちらは燃費の差もあってまだ動ける。

後はこのまま確実に詰むだけだと。

そう思わせる事が灯の策なのだと、簪は理解していた。

そして、簪が十分に接近し、ライフルを構えた瞬間、エネルギー切れだと思われていたプラズマ砲6門が起動、その砲口から最大出力の砲撃を放った。

それを簪は危うい所で回避するも、しかし余りの熱量にライフルの弾薬に引火、

寸での所で手放したものの爆発、武装は斧一本となってしまふ。

「ううん、十分だよ。」

徐々に減速し、下降していく灯に対し、簪は上昇の後に反転して急降下し、重力を味方にして加速を付ける。

それを見て狙いを悟ったのか、灯はプラズマ砲を連射し、何とか止めようとする。しかし、エネルギー不足で出力の低下したプラズマ砲では、今の簪にとっては脅威足り得ない。

何せ、今からする事を思えば、恐怖で足を竦める訳にはいかないからだ。

身体を丸め、くると回転、最適なタイミングで身体を伸ばし、伝統的な跳び蹴りの態勢を取って、雲を引きながらレイダオへと迫る。

それは簪が、灯が、日本の特撮好きなら誰もが知る仮面のヒーロー達の技。

上空高く飛び上がり、落下の勢いを最大限に込める跳び蹴り。

その足裏には今回最も活躍したのであろう斧を張り付けており、最早レイダオに、灯にその雄姿を止める術は無い。

故に、灯は心底愉快そうに笑いながら、両腕を広げて親友を歓迎した。

「やっぱり必殺技は…」

『キックに限る。』

そして、今年の IS 学園一年生における最高の名勝負と言われた模擬戦の決着は、  
簪の勝利で幕を閉じた。

ねむい  
ねる

---



## IS 転生 三組代表が逝く 11

非難轟々だが、二次創作ってそんなもんだしね。

模擬戦後、簪は入院した。

肋骨3本に罅が入り、内臓にも負荷がかかっており、更に体力・気力を消耗し過ぎて、ISを脱いだ途端に気絶したからだ。

適切な措置の後、準備されていた医療ポッドに入れられた簪の意識が戻るのは翌日の昼過ぎの事だった。

その間、灯は教師陣に拘束された後、ISを一時取り上げられた後に事情聴取を受け、自室での謹慎処分を受けた。

無論、本当に悪いのは無茶をした簪なのだが、ここで灯の側に何のお咎めも無しだと、何らかの禍根が残る可能性があったためだ。

まあP I Cのフルマニユアルが危険行為である事もあり、この事件を機に漸く学園側が重い腰を上げたと言うのもあるのだが…。

P I Cのフルマニユアルに関しては、今後は機動への割り振りを最大8割までとし、残り2割の出力は搭乗者保護に割り振る事が義務付けられた。

危ない事をしたのだから罰せられる。

この基本的な事を周知させるための生贄とも言えた。

「あー………だるーい………」

だが、本人は自室でダラダラとくつろぎ腐りながら映画鑑賞（簪お勧めの特撮もの）をしていた。

その姿、正にニートである。

これこそ墮落の頂点と言わんばかりに寝そべりながらポテチとストローを刺した炭酸ジュースと氷の入ったカップが目の前に置かれており、その姿は女子高生と言うよりも墮落し切ったおっさんのそれである。

「あなた、もう少しシャキっとしなさいよ。一応謹慎中でしょ？」

咎めるのはこれから授業に行く同室の生徒だ。

以前、代表候補選抜戦でぼこぼこにした第三位の女子であり、簪と灯に次いで三位を取った辺り優秀なのだが、現役時代の山田先生よろしく、上二人が異常過ぎてさっぱり注目されていない悲しい生徒だった。

「織斑先生からも「すまんが涙を飲んでくれ」って言われてるからさー。」

もし今後、似た様な事態が起きた時、当事者を一切罰さないとすれば、それこそ大きな問題に発展しかねない。

そのため、芽の内に「罰則を与えた」と言う前例を作る事で、それを防止しようと言う事だった。

これには灯は納得していたし、何よりあの模擬戦では自分を見つめ直すには良い機会だったので、これ幸いと承諾したのだ。

「ま、良いけどね。行ってきまーす。」

「いってらー。」

そして、同室の生徒が出ていった後、灯はだらけきった顔を引き締め、自身の意識を内側へと埋没させていく。

内容は「先日の模擬戦の問題点」について。

既に数度行ったものだが、それでも自己を見つめ直す意味では何度でも必要な行動だ。

敗因1、機体性能について。

自身の乗ったレイダオは未だ慣熟しておらず、最低限の調整のみ行った状態であった。

また、機体性能についても第二世代最後発であるラファール・リヴァイブに匹敵するシャアザクに対し、性能は兎も角として燃費面で問題のある多用途プラズマ砲を採用したレイダオとは長期戦において不利だった。

また、シャアザクはレイダオ対策に耐熱処理を施したシールドとホークを装備する等のメタを張られていた。

敗因2、自身のライダー能力について。

基本的にサーヴァントか仮面ライダーの力を引き出すのに使っているのだが…実は本格的な変身が未だ出来ていない。

と言うのも、灯には「正義を愛する心」や「理不尽に対する怒り」と言った感情が人並み以下しかないからだ。

どっちかってーとシラカワ博士ばりに「自由を愛する心」を持っているので、手前勝手な理由で自分に喧嘩売ってきたり、WinWinではなくただ利用しようとする輩への憎悪しか特筆すべき感情が無いのだ。

そのため、仮面ライダーと言うある種の憧れを抱く存在とはかけ離れているのだ。一番適正があるのがショッカーライダーな辺り、他のライダーへの適正はあ（察し）レベルである。

そもそも、変身するにはISが邪魔であり、眼球等の一部を変質させるのなら兎も角、戦闘機動中でのライダーへの変身はこの能力がばれる点でも出来ない。

では、サーヴァント・ライダーへの変身だが…これをやると容姿や人格も変身先のソレに変化するため、下手な英霊には変身出来ないと言う欠点がある。

以前、ライダー・メドゥーサへと変身した際、何故か普段はそこまで好きではないロリシヨタ系の同人誌を食い漁る様に見てしまい、半日程経った時点で漸く飢えが満たされ、変身を解除できたと言う事があったのだ。

結論…能力は迂闊に使用できない。

まあ今現在やっている様に、英霊個人のそれではなく、ライダーのクラススキル

なら無条件で発動可能なので、今後も修練はしつつも必要が無ければ使わない方針で行くべきだろう。

そして敗因3、簪の美しさについて。

あの時、あの瞬間、プラズマ砲の弾幕を掻い潜り、こちらへと突撃してきた簪の姿は、余りにも美しかった。

自分の様なチートではなく、ただ友人に勝ちたいと努力して獲得した技量と意志力、そして覚悟。

それを以て己に相対し、遂には凌駕してみせた彼女は、その容姿と精神性のどちらにおいても、余りにも美しかった。

そんな彼女に見惚れてしまい、隙を晒してしまった自身の未熟を呪いこそすれ、簪へと怒りを抱く事は灯には出来なかった。

結論・負けて当然。

うん、まあ分かってた事だった。

何度も考えて、その度に同じ結論に至っているのだから、こればかりはもうどうしようもない。

さて、考えも纏まった所で、さっきから殺気を向けてくる（誤字でもギャグでもない）無礼なお客さんの相手でもするかね？

幸い、理不尽な怒りをぶつけてくると言う点で条件は満たされているので、例えIS使ってきてても、問題なく相手は出来る。

まあ最悪の場合は目撃者は消さなければならぬけど……ま、偶にはいっか。

こうして、灯は無意識に溜まっていたストレスを吐き出す相手に、シスコン生徒会長を選んだのだった。

……………

更識楯無は今、授業もボイコットしてある部屋の前に来ていた。

相手は愛しい愛しい簪ちゃんを双方合意の模擬戦とは言え負傷させた相手。

だが、相手の糞ビッチに何ら違法性が無い事も確認している。

しかし、それはそれとして、姉として妹を傷つけた相手には然るべきケジメをつけさせねばならない。

例え、簪ちゃんが嫌がったとしても、だ。

家としても、此処で何もしないと云う選択肢は……まあ無い訳ではないが、最低限釘を刺しておく必要はある。

そして、私は今も標的が寛いでいる部屋へと侵入する。

幸い、鍵は生徒会長権限で持ってきている（学園長に小言は言われたが）。

本来なら、標的が外出中に部屋で待ち伏せていたのだが、標的が謹慎中と言う事もあり、一切部屋から出る事が無いので、こちらから行かざるを得ないのだ。

そして、私は鍵を差し込もうとして……

「そこで止まれ。」

完全に不意を突かれる形で、背後を取られていた。

「……倉土灯さんかしら？」

全身からぶわりと湧き出そうになる汗を必死に驚きと恐怖を抑制する事で防ぐ。

気配は完全には感じなかった。

だが、暗部の当主なんてものをやっている自分をして、彼女は完全に不意を突いてきた。

明らかな異常だった。

「生徒会長、でしたっけ？一応謹慎中なので、訪問はまた後程でお願いします。」  
「私もそうしなかったのだけど…一応私はあの子の姉なの。だから今日は私的な理由で来たわ。」

意外と常識的な言葉に安心どころか警戒しつつ、相手の罪悪感を叩る形で有利に話を進めようとする。

既に楯無は当初予定していたOHANASHIプランは完全に瓦解し、自身の身の安全の確保を最優先にした行動していた。

それ程に、自分の背後に立つ者は脅威に過ぎる。

先程確認した時には、確かに室内にいた。

なのに、今は暗部として高度な訓練と経験を積んだ自分の背後をもの数秒で取ってみせるだけの身体能力と技術を披露してみせた。

背後関係は全て把握していたとは言え、ISだけでなく、素でもこれ程の能力を持つっている事は、全くの想定外だった。

恐らく、織斑先生等と同類なのだ。

単体で世界を相手に戦える規格外、或はそれに成り得る素養を秘めた者。

少なくとも、ISありきとは言えど、敵に回すには余りにも損な人物だった。

「んー、単なる肉体言語だったら、相応に歓迎したんだけど……」

やはりデッドライン上にいたらしい。

楯無は先程から冷えていた肝が更に冷えて零下になりつつあった。

「簪は家族とは疎遠だって言うし、私が迂闊に交流するのも悪いと思いますよ？」

「そ、それは……」

スツとは背後から気配が離れて安心するのも束の間、言葉の槍に胸を貫かれ、楯無は胸を抑えた。

「それに、例え私的な理由だとしても、一応謹慎中ですので。生徒会長なんですから、その辺りのルールはきちんと守ってください。」

「ううう……どうしてもダメ？」

「後日、日を改めてなら考えますが。」

よし、言質は取った。

一応ゆっくりと振り向くと、そこには確かに先程まで部屋にいた妹の友人の姿が

あつた。

やはり、眼を離れた僅かな間にこちらの背後を取ったのだ。

「では後日、また改めてお話ししましょう。」

お馴染みの扇に「また来週！」と表示させ、口元を隠す。

自分と最愛の妹の命を握られていると言う恐怖を微塵も出さず、生徒会長更識楯無として傲岸不遜にして唯我独尊な振る舞いを維持してみせる。

そうでなければ、今すぐにも全身から脂汗が出て、膝から力が抜けそうだから。

「良いですけど……部屋に勝手に入ってきたりしたら怒りますからね？」

呆れを込めたその言葉は、しかし実際は警告だ。

次にアホな真似をすればタダでは済まさないよ、言外にそう言っている。

だが、既に楯無にはそのつもりはない。

彼我の戦力差、そして相手の立場を思えば、互いに迂闊な真似は出来ない。

「ええ、ええ、次からは普通にノックするから、その時は歓迎してね？」

「お茶位なら出しますよ。茶菓子は期待しないでください。」

こうして、楯無（シスコン姉）と灯（妹のガチ親友）の初邂逅は表向き平穏なが

らも、その実極めて物騒な形で終わった。

(チッ、暴れそこねた。ネトゲでもやろっと。)

(久々に死ぬかと思った…！)

---

灯「霊体化からの実体化でステルス余裕です。」  
なお、まだ変身を残している模様。

何時か仮面ライダーへの変身を描写したいけど…明らかにヤツテも良い相手じゃ

ないといかん（汗

それでいて誰にも見られない状態となると……うーむ（汗



## IS 転生 三組代表が逝く 12 微修正

ふう…さて寝るか（徹夜明け）

さて、謹慎も解け、レイダオが毎度の如く大破して修理に出された後、灯は放課後に入院中（と言っても学園内の医療施設。下手な病院よりも遙かに設備が整っている）の簪の元に訪れ、頼まれた特撮やアニメのDVD、漫画や小説等を差し入れる日々を送っている。

ISの方は開発チームが過労でダウンしている事もあり、打鉄の修理と細かいアップデートと調整位なもので、他には然したる変化はない（但し、それでもIS学園1年生の中ではぶっちぎりで最強なのだが）。

だが、そんな彼女にも遂に大きな変化が、人生の転機が訪れた。

「本当ですか!?!」

企業連との定期連絡会にて、灯は待望の知らせを聞いていた。

『無論だ。約束通り、君の母君の身柄は保護した。』

『病状に関しては安定しているし、面会も一応は可能だけど…。』

「大丈夫です。もう覚悟済みですので、様子だけでも。」

『分かった。とは言え、馬鹿共が君に何かしでかす可能性は大いにある。既に新しいISは完成し、後は実機試験を待ただけだ。』

『コアは君の持つ打鉄改のを使うから、今週末にでも有澤の試験場に来てほしい。迎えは人を出すから。』

「ありがとうございます。では、今週末にまたお会いしましょう。」

そう言って、通信が切れる。

だが、灯の心の中では、沸々と喜びが湧き出ていた。

漸く残された最後の家族と会える。

自分を縛る人質にされていた母が解放される。

それを思うと、どうしても喜びが出てしまう。

とは言え、9年以上離れ離れだったのだ。

精神が崩壊していた事もあり、最早母は自分を認識する事は出来ないだろう。

それでも自分を慈しみながら産み育ててくれた人は大切であり、嘗て受けた愛情を忘れない程度には、灯はまだ人間だった。

(まあ、その前にケジメは必要だよね。)

だが、忘れてはいけない。

9年前から愛情と共に育てられていれば芽生えなかったであろう彼女の中の感情。

即ち、怒りは10年前から一切弱まる事無く、轟々と燃え盛っていると言う事を。この時はまだ、彼女以外の誰もがそれを知らなかった。

.....

週末、灯はとある町に訪れていた。

白いワンピースにサンダル、そして青いリボンを巻いた帽子に肩からバックを提げると言う彼女らしからぬ女性らしい装いで、灯はここまで来た。

IS学園のモノレールから電車を乗り継ぎ、鈍行電車に5時間程揺られて着いた

のは、嘗て彼女が家族と共に暮らしていた小さな町だ。

住所は分かっているけれども、監視と母親の安全のために決して近づく事の出来なかつた第二の故郷。

10年前までは母と父と自分、家族三人で平和に暮らしていた場所。

そこに彼女は漸く訪れる事が出来た。

先ず最初に行ったのは地元のスーパーで、そこで花と線香、マッチを購入し、檀家になっているお寺へと向かう。

目的は墓参りだった。

「……………」

夏ももうすぐのこの時期、綺麗に晴れ渡った今日、灯は花と線香を供えると、墓前で静かに祈り始めた。

倉土の家系の墓、そこには当然灯の父親の遺骨も収められている。

朴訥な、何処にでもいる優しい父親だった。

娘を愛し、妻を愛し、家族を愛し、良き夫、良き父であろうと頑張っていた人だった。

断じて、断じて、あんな死に方をして良い人ではなかった。

「……………」

ギチリと、奥歯を噛み締める。

その気になれば今すぐにでも人間を止める事も出来る身だが、そんな灯にも父を敬う気持ちは、家族への愛は確かにある。

故にこそ、それを理不尽に奪われた怒り、憎悪、復讐心は根深い。

例え10年経ったと言えども、それを癒す時間を与えられなかった彼女にとって、枷の外れた今、心の中では黒い炎が燃え盛っている。

それこそが彼女の原点。

倉土灯が正義の戦士になれず、反英雄達へと変身できる理由。

「さようなら、お父さん。」

5分程祈り続けた後、灯はあっさりと墓前から去った。

今日来たのは、一步踏み出す前のけじめのためだった。

これから先、自分はきつと綺麗ではなくなる。

そう分かっているからこそ、灯は今日この時に9年ぶりの墓参りをしたのだ。

.....

灯は一日中、町を散策し続けた。

見覚えのあるもの、見覚えのないもの。

見覚えのある人々、見覚えのない人々。

そう言った些細な変化が、本当に9年もの歳月が流れたのだと物言わずに灯に示していた。

嘗て通っていた保育園や小学校、よく訪れていた近所のスーパーや公園、友人や知人の家。

そして、お世話になった近所の人の家々に、嘗て自宅のあった場所。

既に更地になった嘗ての帰る家を見ると、何とも言えない郷愁を感じてしまう。

ああ、最近は楽しい事が多かったが……やはり転生して若返ると、年相応に涙腺が緩くなるらしい。

ぼろぼろと涙を零しながら、灯はそれを拭う事もなく、流すままにしていた。

「さようなら……。」

もう小娘らしく泣くのはこれで最後だと決意しながら。

最早戻らないであろう第二の故郷に、灯は別れを告げた。

……

灯は密かに付けられていた学園側の監視を振り切ると、人気の無い山奥へと進んでいた。

辺りに人影はない。

しかし、確かにいるのだと灯は気付いていた。

そして、昇り始めてから20分程で山の頂上へと辿り着いた。

そこからは、夕暮れで赤く染まった町が一望できた。

自分が生まれ、育ち、幼少期を家族と共に幸せに過ごせた場所。

父が死に、母が施設に入居した後も自分を支えてくれた暖かい場所。

それを今日一日かけて改めて目と記憶に焼き付けた。

きっと、二度目の死を迎えたとしても、今日見てきた光景を、自分はきっと忘れないだろう。

そして、この後起きるであろう惨劇も。

「倉土灯だな？」

不意に、周囲の空間から三機ものISが滲み出す様に姿を現した。

IS打鉄、その日本国防軍仕様だ。

だが、どの機体も部隊章等の所属を示すものはなく、現れた位置も灯を中心に三方向へと分散しており、例え誰か一人が襲われようとも即座に鎮圧、否、射殺できる様な構えだった。

（おお、マジの非正規部隊仕様とは。割と警戒されてるな。）

これで通常の国防軍仕様だったら、精々が競技用リミッター無し独自の独自カスタム仕様機なのだが、外見は同じでも非正規部隊仕様となればどれ程の性能になっているか予想も付かない。

「一緒に来てもらおう。」

「イヤだと言ったら？」

隊長格と思われる人物の言葉にそう返した途端、灯の身体に40cm程の四脚の機械が3機も組み付き、その身体を拘束する。

更に展開しようとしていた打鉄改の実体化がキャンセルされ、ISコアが隊長格の手に奪取された。

四脚の機械、その正体は原作にて亡国機業が使用したリムーバー（剥離剤）だ。決まれば初見に限るものの、確実にISを無効化できると言う、使い処を間違えねば極めて強力な兵器だ。

「無用な抵抗はするな。貴様は既に生身だ。」

無論、リムーバー（剥離剤）は一定時間でその効力を無くすのは原作通りだ。

しかし、それを知らない者からすればISと言う自身の絶対的な力の象徴を奪われ、更に三対一であり、相手はプロの軍人かそれに相当する者達となれば、普通は交戦意欲を失う。

そう、普通ならば。

「ふ、ふふふふ……。」

だが、此処にいるのは普通ではなくなっていました。

異常を隠し、普通に埋没しようとしながら、異常に引き摺りこまれた者だ。

そして今日、彼女は普通に戻る事を諦めてきた所だった。

「隊長？」

「構わん。気絶させて連行する。」

その様子に気でも狂ったと判断した隊長機は部下にそう指示を出す。

だが、彼女達は間違えていた。

彼女達は全速で逃げるべきだったのだ。

目の前で今、生まれようとする怪物から、羽化しようとする化生から、産声を上げる反英雄から。

だが、ISと言う力と今まで多くの非正規作戦に従事し、成功させてきた経験が、彼女達から撤退の二文字を奪い去ってしまった。

「変身。」

その言葉と共に、地獄が始まった。

.....

IS 非正規部隊の隊長は、それを見ていた。

捕獲対象である少女の情報は知っており、その戦歴から自分だけで対等な状況下でなら先ず確実に苦戦すると思える程度には手練れだった。

しかし、こちらは軍人で、向こうは十代の少女である。

事前に勝つための手段を模索し、実行に移せば、それだけで済む。

捕まえた少女がその後、どうなるのか等は知らない。

知った所で意味は無いし、興味もない。

ただ、碌な事にはならないのだろうと、経験則から考えてはいた。

だが、そこから先は考えない。

ただ与えられた任務を遂行するだけの歯車。

そう隊長は自己を定義していた。

だがこの日、彼女はそんな自分の在り方に初めて揺らぎ……そして、後悔も懺悔も覚える暇すら与えられなかった。

「」。

捕獲対象がリムーバーによって拘束された状態で何かを告げる。

それをISのセンサーで観測していた隊長はその言葉の内容を明確に理解する。即ち、変身と。

だが、IS コアはこちらの手の中にあり、捕獲対象はそれ以外の武装は無い。なのに、軍人として培った勘が撤退を叫ぶ。

しかし、それすらも目の前の非常識な光景によって目を奪われてしまい、彼女達は最後の生きて逃げる機会を無くしてしまった。

少女の腹部から機械的なベルトが浮かび上がり、その中央に嵌められた鮮緑の結晶体が光を放つ。

直後、少女の全身が昆虫の外骨格とも機械とも取れる白い装甲に覆われる。

頭部はまるでバッタの様なデザインをしており、あたかも彼女達も知っている特撮ヒーローの様な姿だった。

だが、単なる着ぐるみやアクタースーツだとは隊長は思わなかった。

故に、迷いなく自身もその手にライフルを呼び出しながら二人の部下に告げる。

「撃て！」



ぼ満タンだった。

なのに、今では稼働状態すら維持できない程にエネルギーを消耗し、リミットダウン（具現維持限界）を迎えていた。

見れば、目の前に立つ白い装甲服の少女の手には、鮮血の様な赤い刀身の剣が握られており、あれで自分含む3名を一刀の下に斬り伏せたのだ。

（ISの絶対防御を発生させつつ、一撃で消耗させる程の威力だと言うのか…！）  
激痛に苛まれながらも、しかし辛うじてISの搭乗者保護機能によって失血死を免れながら、隊長は生き残るための算段を整える。

（殺さなかったと言う事は、最低限利用価値を認めていると言う事。なら、何とか生き延びて…！）

しかし、隊長のそんな必死な思いは叶わなかった。

目の前に立っていた白い死神が、彼女の髪の毛を掴み上げ、その顔を無理矢理に自分の顔の高さへと持っていたのだ。

「ぎ、ぎゃああアアああアッ!!」

無論、両足を失った彼女にそんな事をすれば、失った両足を除いた全体重が毛根

にかかる。

ブチブチと頭皮の一部が髪の毛が鮮血と共に抜ける。

しかし、今や世紀王でもある灯にとって、目の前の虫けらがどう鳴こうが喚こうが、知った事ではない。

だが、その知識、情報には価値があると分かっていた。

「キングストーンフラッシュ。」

その時不思議な事が起こったと度々ネタにされる技。

しかし、敵対すればこれ以上なく厄介なキングストーンを用いた、オカルト的な側面から言えば万能の願望器と言えるソレの発動は、難なく成功した。

「ふむ：成程、こういう事か。」

目の前に掴み上げた女の脳から必要な情報を入力すると、仮面ライダーホワイトはあっさりと女の頭蓋を握り潰した。

自らの起こした惨劇に一切の関心を抱かず、仮面ライダーホワイトはその場を後にする。

怪しまれずに学園に戻るまで後一日。

それまでに自分を縛りつけて利用しようとしてきた者達を絶滅させる。

その意思を胸に、創世王候補は、世紀王は、悪の仮面ライダーはその右手に血に濡れたサタンサーベルを握りながら、その場を後にする。

翌日、多数の国防軍並びと野党幹部並びと企業重役等が惨殺される事件が発生し、日本政府は総力を挙げて犯人グループ（個人とは到底考えられない規模だったため）を捜査したものの、証拠らしい証拠はなく、事件は敢え無く迷宮入りする事となる。

---

仮面ライダーホワイト（初期型シャドームーン）

仮面ライダーブラックと共にゴルゴムによって改造された元人間であり、外見もブラックとの色違い。

ブラックとは創世王の座を賭けて争うライバルになる筈だった。

しかし、改造時に深刻なダメージを受けたため、原作では長い間目覚める事なく、よく知られるメタリックなシャドームーンへと強化改造される事で復活する。

スペックはブラックと同様であり、腰のベルトには月のキングストーンが嵌められている。

また、創世王候補として、ゴルゴムにとっての聖剣にして王権の証であるサタンサーベルを召喚、使用できる。

パンチ力…3トン

キック力…9トン

ジャンプ力…ひと跳び30メートル

潜水時間…10分

Q。つまり？

A。まだ変身が残っていると言う事だ。(CV 堀内孝人)

## IS 転生 三組代表が逝く 13

お盆なんて消えてしまえ！（繁忙期続行中

行方を暗ませ、消息を絶った翌日の日曜、その深夜にひょっこりと、何食わぬ顔で倉土灯は IS 学園に帰って来た。

寮監である千冬は、特に気配も殺していない灯を即座に補足したが……一目見た瞬間、本当に本人かと疑った。

「おい、倉土。」

「あ、織斑先生こんばんわ。」

悪びれる事なく挨拶してくる姿は普段のそれだ。

しかし、根っこの部分で何かが変わっていると確信する。

元より知性よりも動物的直感にこそ重きを置く千冬にとって、その差異は余りにも顕著だった。

余りにも濃厚な、それこそ戦場跡地か紛争地帯でも早々お目にかかれなげな、夥しい程の死臭。

それが、己の生徒であった少女から漂っていた。

「何人やった？」

「数えてません。」

その返答を聞くや否や、千冬は灯の首元に懐に忍ばせていたナイフを突き付ける。

それを、灯はただ平然と眺めていた。

何せ、今の灯にはその程度の刃物は通らないからだ。

「どうします？ 殺しますか？」

「チッ……」

舌打ち一つして、千冬はナイフを懐に戻した。

出し入れの速度は灯をして見え辛いものだった。

「証拠も何もない現状、貴様を罰する事は出来ん。」

「ですか。じゃ、帰りまーす。」

そう言って背を向けて寮の自室へと向かう灯。

しかし、その肩を千冬は逃がさずに掴み止めた。

「だが、門限を超えた馬鹿を罰するのは私の寮監としての務めだ、なあ？」

そう言って威圧感たっぷりに告げる千冬は、地獄の閻魔の様だったと後に灯は証言している。

その後、灯は千冬の寮監室で一週間を過ごす事となり、余りの汚部屋ぶりに顔を真っ青にし、自主的に掃除洗濯炊事を行い、訪れた一夏を驚愕させたと言う。

.....

政府及び国防軍の幹部多数が殺害された一連の事件において、日本国政府は頭を抱えていた。

何せ、非正規戦に使える実働戦力の過半が消滅したのだ。

それも、たった一日で、だ。

被害を免れた幹部達の毛根と胃壁がマッハで消費される中、それでも彼・彼女らは御国のために頑張った。

具体的には被害者の共通点から凡そ犯人の動機を割り出す事に成功したのだ。そもその切っ掛けは、この事件と同時に余り関係がないと思われる人物が不審死していた事だ。

具体的には過激な女尊男卑団体の中でも国外、取り分け特亜と繋がりを持っている団体に企業の重役、それに今現在は孤児院に務めている筈のIS学園卒業生の存在だ。

前者は恨みを持つ者がいる事はまあ分かる。

しかし、捜査担当者は後者の方に疑問を持った。

そして、件のIS学園卒業生が勤めていた孤児院を捜査していく中で、驚くべき事実が浮上してきたのだ。

それは言ってしまうえば青田買いだった。

対象は身寄りのない子供、その中でも特にIS適正に優れている児童。

ISの登場した核ミサイルハッキング事件、通称白騎士事件の一年後とは言え、行政府も民間も大きな混乱から未だ脱却し切れていない頃から、この事件は始まった。

ISと言う女性のみ、その中でも特に高い適正を持つ者に個人としては大き過ぎる力を与える兵器。

それに搭乗し、自在に操るには天性の才能か、長い訓練を必要とする。

それこそ織斑千冬クラスの才能と適正が無い限り、どの国もノウハウを持たない当時、搭乗者に関してでは完全に手探りだった。

幸い、日本は開発者と初の搭乗者を確保する事に成功していたので、他国よりも遙かにスタートラインに差があったが、日進月歩の最新技術の開発競争において、そんなものは安心して切れる要素ではなかった。

そのため、当時の発足したばかりの国防軍幹部と政治家が計画し、更に過激なIS先進派や女尊男卑主義者を扇動して人手を確保し、更に密かに接触した特亜に対しても高いIS適正者を「輸出」するためと言う名目で資金を確保して、計画はスタートした。

しかも、その輸出先には近年活動が活発化していると言う国際的テロ組織「亡国機業」すらリストアップされていたのだ。

この時点でもう真っ黒過ぎる上に放射線まで放っているが、無論、彼・彼女らが

ここまでやったのは切実な理由があった。

当時、世界中から核ミサイルを撃ち込まれた日本の国防軍幹部や政治家の多くは、他国に対して激しい不信感、警戒心を持っていた。

まあ、国家丸ごと皆殺しにされかけたのだから、当然と言えば当然だろう。

そして、自衛のために激しいIS開発競争が始まったのだが、彼・彼女らはそれだけで満足しなかった。

また同じ事件が起きた時、織斑千冬が、篠ノ之束が、白騎士が間に合うとは限らない。

そのためにIS開発競争を支援もしたが、それは他国も同じ事をしており、もし国土防衛戦が発生した場合、安心できる保証は無い。

もしかしたら、今度こそ核ミサイルが国土に着弾するかもしれない。

故にこそ、彼・彼女らはそんな強迫観念に突き動かされ、遂には禁じ手に手を出す。

それが高いIS適正を持つ身寄りのない子供達を集め、高度な教育を施し、織斑千冬に負けぬ程のIS搭乗者へと育てる計画だった。

無論、本当に身寄りがなく、結果的とは言え保護した子供達がいた事も確かだが、それと同じ程度には住み慣れた故郷や保護者の元から離された者達も少なくない。特に、最近若手最強の声も名高い倉土灯は、その典型だった。

父を核ミサイルで殺され、母がその衝撃で廃人となり、住み慣れていた故郷と壊れた母から引き離された。

成程、恨む理由は十二分であり、彼女の腕前なら200人以上の人間を殺傷する事は出来る。

しかも、国防軍の非正規部隊所属のIS三機が丁度彼女の故郷にて、搭乗者を含め完全に破壊されている事が確認されている。

現役の国防軍所属ライダーとなれば、嘗てのWACよりも更に厳しい適正を潜り抜けた猛者達だ。

それを屠れる程の腕前なら、その程度は簡単だろう。

しかし、それは不可能だと国防軍の技術部から声が出た。

単純に言えば、日本全国津々浦々にいる被害者全員を一夜の内に殺害するには、例えISであっても、特に競技用リミッターを噛ませてある機体では移動だけでエ

エネルギーが枯渇すると言うのだ。

例え織斑千冬よろしく全ての戦闘を实体ブレードによる近接戦闘で済ませても、それは不可能だ。

況してや、被害者の多くの死因が高エネルギーとも实体とも付かない近接兵器による斬殺となれば、犯人と断定できる要素は動機以外には無くなる。

捜査の進捗はこの時点で一度止まった。

だが、政府の歩みは寧ろ進んでいた。

そして、この事件の関係者の背後の洗い出しが密かに行われ、後に国防軍設立時に立法された国家安全保障法（スパイ防止法）の下、徹底的な狩り出しを開始、国内に巣食う犯罪者や他国の非正規部門にテロリストの撲滅へと注力していく事となる。

しかし、国防軍および日本国政府首脳陣の中で、倉土灯の名はこの事件における最重要人物としてデカデカと記される事となってしまった。

ちと短いが区切り良いのでこれだけ  
来週は投下とか無理だす…（白目

---



## SRWOG転生 テンザンが逝く1

最近流行ってるようなので、自分もチャレンジ。

最近は鬱系が多かったので、ライト感覚で行ってみます。

※TS要素ありの予定

---

気付けば転生していた。

幸いにもそこそこ裕福な家庭だったらしく、両親が殆ど家にいない事を除けば、悠々自適な生活だ。

両親は二人とも、それぞれに仕事があり、尚且つ愛人が別にいるらしいが…まあ仕方ないと諦めよう。

オレの両親は嘗てのオレの両親であり、こちらの二人は愛情の無さもあってとてもではないが両親とは思えないので丁度良い。

さて、オレが転生したこの世界だが……新西暦、地球連邦政府、コロニー統合府、



このまま原作開始を迎えたら絶対に死ぬ。

となれば、どうにかして死にたくないと思うのが人間と言うものだ。

幸いにも、ネームドだけあって、テンザンとしての自分の素のスペックはブース  
テッドチルドレン？とかで高い筈。

なら、死ぬ気で鍛えて生き残るために戦うのみだ。

先ずは身体を良く動かし、何か武道でもやるべきだろうな。

あ、バーニングPTが稼働し始めた時に備えて各種ゲームもやっておかないと。

ロボットに、人型機動兵器に乗りたくない思いは本当だし、スパロボも全シリーズと  
は言わないけどやってる身だし、そこは気合入れないとね、うん。

.....

さて、色々と身体を鍛え、ゲームもやり込みまくっていた頃、ようようやっ  
とバーニングPTの稼働が開始された。

それも世界規模で、ネットワーク対戦ありありで、更に最大50VS50での大

規模対戦すら可能な状態で。

いやさ、試作品のβ版もプレイして、色々意見書出したけど、気合入れすぎじゃないですかねDC？

もつと言えばビアン博士。

あんた絶対仕事のためってよりも趣味的な理由でノリノリで作ってただろ！と声を大にして言いたい。

そんな事はさて置き、ゲームに関しては廃人かその一步手前程度までやり込む事を第一としている今生、オレは早速バーニングPTも熱心にやり込んだ。

とは言え、このゲーム、ゲーセンの大型筐体でプレイするため、プレイ時間Ⅱやり込みのための時間そのものが確保し難い。

なので、販売元（恐らくDCのペーパーカンパニー）に問い合わせ、何とか個人用に売ってもらえないか打診した。

無論、相応のお値段（三桁万円＋結構な電気代）がかかるが、背に腹は代えられない。

ここで経験値を少しでも詰んでおかねば、後で死ぬ事になるからだ。

で、正直無理かなーとと思ってたのだが、案外すんなりと話が通り、一週間程で筐体が家に届いた。

それも家庭用と言う事でコインの投入口とか色々と機能をオミットしたりした奴が。

ただ、条件として定期的にプレイヤーデータの提出が義務付けられた。

これには社員の間人が来るらしいが…うん、まあ良いか！

どうせ逃げられないしね仕方ないネ！

……………

家庭用バーニングPTは自分の買った奴を叩き台に結構な数が売れてるらしい。

まあ簡易版とは言え、元々は軍用シミュレーターなのだ。

新西暦とは言え、生半可なゲームよりも遥かにやり込み甲斐があるだろうし、予想通りと言える。

だが今は既に184年、水面下では色々と動いている事を思うと、胃がキリキリ

してくる。

とは言え、今現在のオレには大学とジムに通いながらバーニングPTをする位しか手の打ちようがない。

幸いにも、ネットワーク対戦含めてスコアは順調に伸び、現在は20位にランクインしている。

何れは世界ランキング第一位も夢ではないだろう。

そんな日々を過ごしていると、唐突にオレは予期しない出会いに遭遇した。

自宅への帰り道で、行き倒れに遭遇したのだ。

面倒にならない長さで切ったボサボサの髪をした、中学生程度の少年が、ヤ○チャポーズで。

「おい、おい、意識はあるか？」

少し強めに肩を叩きつつ、声をかける。

何かの持病の可能性もあるため、迂闊な振動は与えられないし、直ぐにでも救急車や警察に連絡する必要があるかもしれない。

本来なら、こんな予定にない事なんて放っておけばよいものを、つついっ助けて

しまうのは前世での教育のお蔭だろうか？

「あ……………」

「んん？」

身体を横向きから仰向けにすると、少年が呻き声を漏らすのが、オレはその少年の顔にデジャビュを感じて思わず動きが止まる。

すると、少年は口からぼそりと何事かを呟いた。

「お腹…減った…」

同時、ぐうぐうとなった腹の音が、人気の少ない高級住宅街に響いた。

……………

「ガツガツガツガツ!!」

一心不乱に家政婦の作った料理を貪る様は、高校生らしい食欲に溢れていた。先程までの元気の無さは消えているため、こちらとしては随分とホッとした。何でも、彼はバーニングPTがやりたいがためにこの街まで来たのだと言う。

自分の街には無いため、態々バーニングPTがあるこの街のゲーセンへと通っていたのだとか。

しかし、金の無い学生がそんな事をすればあつと言う間に金欠になるのは当然だった。

移動費を電車から自転車に代え、食費を切り詰めても、それでもなおバーニングPTのプレイ料金は高いものがある。

テンザンである自分の様に収入があるか（スポーツ大会等の賞金やゲームの賭け試合等）、又は悠々自適の高等遊民でもない限り、バーニングPTは高すぎる。

既存のハードを用いた家庭版とかでもない限り、あのデカイ筐体でのプレイはそれはもうお金がかかるのだ。

だが、この少年の持つ情熱はとても共感できる。

こちららスパロボ歴の長いロボオタである。

無論、それ以外にも好きだが、ロボ物が特に好きなのは変わりない。

彼と同じ状況になったら、多少生活が苦しくなろうが、同じような事をするのが目に見えている。

「なあ坊主、どうせだからうちの筐体使うか？」

「へ？」

「実はオレ、家庭用を持ってるんだわ。何時もは無理だが、ある程度は融通してやれるぞ。」

「ほ、本当ですか！」

「つつても、あくまでリアル優先だ。学生なんだろう？勉強もしっかりやるのが条件だ。」

と言う訳で、ロボ好きの先輩として、後輩にええ格好しいをするのだった。

「あ、ありがとうございます！ご飯だけじゃなくバーニングPTまで！本当に何て言って良いか！」

「いいさいいさ。ただ、条件はきっちり守れよ？」

「はい！あ、そう言えば名前言ってませんでしたっけ？」

「だな。オレはテンザン・ナカジマ。バーニングPTでも結構な腕自慢だぜ？」

「あはは、僕はリョウト・ヒカワです。バーニングPTは先月から始めたら嵌まっちゃって…でも周りじゃあんまりやってなくて。話せる人と出会えて嬉しいです！」

「おう。んじゃ飯食ったら筐体に案内するからな！」

「はい！よろしくお願いします！」

この時のオレの驚きは、もう言葉に出来なかった。

幸いにも、一周回って落ち着いたから何とか返事も出来たし、怪しまれる事も無かったが。

（おいおいどうなってんだこりゃ…。）

リョウト・ヒカワと言えばご存じスーパーロボット大戦aのリアル系主人公だ。シリーズでも最高峰の念動力者であり、四人の男性主人公の中でも最も格闘・射撃が高いと言う素晴らしいスペックを持っており、ファンからの人気も高い。

OGではビアン総帥に直々にスカウトされるが、所属したDCのAM部隊では当時は弱かった事もあり、捨て駒にされた所を鋼龍戦隊に拾われる事となる。

まあ原作でもテンザンはリョウトとゲームを通して面識はあったため、そこまでおかしな事ではないだろう。

だが、余り仲良くなりすぎるのも問題が出る可能性がある。

何せ彼は後々DCから地球連邦軍へと移籍し、マオ社へと出向する事になり、テストパイロット兼技術者として多くの功績を果たしている。

特にヒュッケバイン（エクスバイン）とオプシヨンのAMシリーズ開発で重要な役割を果たしている。

しかも、パイロットとしても念動力者の力を活かして大活躍するのだ。

下手に仲良くしてDC側に残られても問題がある。

しかし、彼の技術が自分の側で生かされるとなれば、それは自分の生存率向上に大きな助けとなる。

無論、DCにいた頃のリョウトはパイロットとしても技術者としても覚醒していないので、色々と助けは必要だろうが。

喜々としてバーニングPTの筐体に乗る込む彼を見ると、今から色々仕込んでおけば行けるんじゃないかね？とも思うのだった。

.....

原作まで後一年と言う頃、オレことテンザンとリョウトの仲は良好だった。

この歳になっても原作と違ってさっぱり背丈の伸びないリョウトを弟分の様に可愛がりながら、週に二度は訪れるリョウトを歓迎し、共にバーニングPTをやり込む日々を送っていた。

途中、リョウトの4人の姉達や道場主であると言う父親が訪れた時もあった。

どうにもリョウトは家族とは距離があると考えているらしいが、家族からすれば可愛がり方が少々ずれているだけで、きちんと愛情あつての事らしい。

まあ嫌がるリョウトに似合うからと女の子の恰好をさせたり、機械弄りやゲームが大好きな子に跡継ぎとは言え空手を無理に仕込めばそりゃ嫌われると思う。

しかも、中学生になったばかりの年頃の子となれば思春期も重なり、家族と距離を置きたいと考える事もある。

要は互いに適度な距離感を持つ事が出来なかった訳だ。

それがオレの家と言う避難場所を得た事で、リョウトは家族と適切な距離感を持つ事が出来た訳だ。

また、オレに依存されても将来困る事になりそうなので、きちんと学校や家庭に

も力を入れ、オレの家に来るのはストレス発散のためにする様に、と約束していたのだ。

そのお蔭か、リョウトは特に出禁になる様な事もなく、あの行き倒れな出会いからずっとオレの家に来てはゲーム三昧&寛ぎタイムを貪っている。

ご家族からはくれぐれもよろしく頼むと言われているが、時折勉強も見ていたりもするので、今はそれで勘弁願いたい。

その内、嫌でも高給取りになるだろうからさ。

……ああホント、自分の都合でこいつを巻き込む算段を立ててる自分に腹が立つ。

………

その青年が注目を集め始めたのは、或る意味で当然だった。

成績優秀、スポーツ万能、文武両道。

原作であった様な小太り、傲慢さと享楽主義な所が抜け、己の身体を鍛えた彼は力士体形とも言える姿となり、見る者に威圧感を与えるも、本人の真面目さと誠実

さがそれを補う。

それだけ見れば探せばまあいるかもしれない程度の人間なのだが：おかしいのはそこから先だった。

青年、テンザン・ナカジマは何故か人を理解する事に長けていた。

そうした才能がその少年にはあった。

しかも、どういう理由なのか、独特の脳波まで発しており、念動力者とはまた別種の異能の可能性が高かった。

更に素のパイロットとしての技能もまた民間人どころか軍人でも類を見ない程だった。

そんな稀有な才能をDCが見逃す筈もなく、彼は自身の知識と予想通り、DCへパイロットとしてスカウトされる事となる。

ビアン・ゾルダーク総統直々に。

更に言えば、それは何時も一緒にいた少女も含めての事だった。

誤字修正しました。

---



SRWOG転生 テンザンが逝く2 改訂・加筆

うーむ、文字数が順調に増えてる(汗)

ビアン総帥直々のスカウトにより、原作のバーニングPTの大会よりも早くDCに所属する事となったテンザンだが……初っ端から躓いていた。

「帰れ。」

「イヤです。」

このブンむくれてる弟分の説得に。

「お前なー、オレと違って家族仲も良いんだから、こんな危ない職業に就かなくてもだな……。」

「イヤです。」

きっぱりと言い切るリョウトに、オレは頭を抱えなくなった。

こうなったコイツは梃でも動かない。

普段はオレの後ろをちょこちょここと子犬の様に付いてきて、その手の趣味の者なら悶え転げそうな可愛さを放っているのだが、一転してこうなるともう頑固になる。こうなればこいつの実家の姉さん方でも途方にくれるのだから相当だ。

「…オレに付いて来たいって理由なら止めとけ。死ぬぞ。」

普段よりも数段低い音を意識して出すと、少しだけリョウトが怯んだ。

本当なら、此処でこいつを扱き使って連邦側に適当な所で回収させるか、或は丁寧に指導なりして部下として扱うべきなのだが、どうにも情が移ってしまったらしく、こいつには堅気の道を全うに生きてもらいたいと思ってしまう。

「イヤです。それを言ったら、テンザンさんだって同じです。」

「オレは良いんだよ。お前と違って成人してるし、ロボ乗るためなら魂も売るさ。」  
これは本音だ。

少なくとも、オレは見も知らぬ誰かのために戦う事は出来ない。

精々が身内の安全と些細な個人的欲によるもので、それ以上でも以下でもない。そんな奴が辿る末路は一つだけだ。

やり込んだゲームのセリフで言うならば「好きな様に生き、理不尽に死ぬ。」と

言う事だ。

「良いか、リョウト。お前はまだ18歳、親御さんの庇護下で学生やってる年頃だ。此処に来るなどは言わん。だが最低限でも卒業と成人してからしろ。」

「ごめんなさいテンザンさん……。」

シユンとするリョウトに漸く納得してくれたか、とホッとする。

しかし、現実是非情と言うか非常識だった。

「実は学校に関しては飛び級して卒業しちゃいました☆」

てへぺろのポーズをしながら取り出された卒業証書の写しに、オレは愕然とした。

「後、家族には許可貰ってます。好きな様にしなさいって。」

「……………マジかよ……。」

こうして、オレの説得は失敗に終わった。

……………

さて、初っ端から躓いたが、DC所属二日目からオレ達二人はシミュレーターを

ほぼ一日中やり込んだ。

流石は軍用品だけあり、購入したバーニングPTの家庭用筐体よりも遥かに高性能かつ多機能だ。

また、回線を使って同期すれば最大百単位での大規模会戦も可能なのだとか。登録されている機体も既に旧式化の兆しがあるゲシュペンストやその亜種ではなく、最新鋭機であるリオン系列機だ。

とは言え、未だバレリオンやガーリオンはなく、装備強化型のタイプFに機動性強化型のタイプV、索敵・管制型のレドーム装備や精々コスモリオンやシーリオン、ランドリオンと言った共通のフレームの機体のみだ。

ただ、ミサイルランチャーやレールガン、大型レールガンにミサイルポッド、強襲用ブースターと言った各種オプション等は幾らでもカスタマイズできる。

なので、つついといゲームの性としてやり込んだじゃった☆

途中でリョウトはぼてたので、半分程一人でやりながらひたすらにシミュレーターを楽しんだ。

無論、事前にマニュアルを読み込んだ上でだ。

それで分かった事は……オレはゲシュペンスト系よりもAM系の方が向いていると言う事だ。

原因はテスラ・ドライブの存在だ。

重力制御と慣性質量を個別に変動させることが出来る装置であり、現在地球で最先端の推進装置だ。

こいつのお蔭で今まで鈍いと思ってたのがかなり素直に動いてくれる。

とは言え、未だに自分の反応速度に完全に付いて来れてはいないので、その辺りは上に要望を上げておくべきだろう。

さて、このシミュレーターだが、ゲーム機に流用されるだけあって、ある機能が  
ある。

それは…

「乱入機、か!!」

直感に任せ、搭乗していたリオン（タイプV＋強襲用ブースター付）の軌道を強引に曲げると、そのまま進んでいたであろう空間をレールガンの射線が貫いていく。

こうした乱入が、既に今日だけでも20回は起こっている。

だが、オレはその全てを歓迎し、正面から打倒してきた。

テンザン風に言われれば、「どいつもこいつもやり込みが足りない」。

新兵器故仕方ないのだろうが、今後のDC処か地球圏全体の主力機たるAMへの理解が足りないのはダメだろう。

と言う訳で、シミュレーターに限るが、とことんブチのめさせてもらおう。

これを機に民間人上がりに負ける自分の実力を反省して、もっとAMへの理解を深めて腕を上げてもらいたい。

なので、容赦なく撃墜させてもらおう。

乱入してきたのは7機、一度に来た有人機としての数は今日で一番多いが、特に脅威には感じない。

右腕部に装備したランドリオンの大型レールガンを使い、相手の未来位置へと偏差射撃、一撃でコクピットを貫通して撃破。

味方機が早速墜とされて動揺して動きが単純になった機体に左腕部のレールガンで射撃、撃破。

こちらへと集中するレールガンとマシンキャノンの射撃を跳ねる鞠の様な機動でランダム回避しながら更に射撃。

それだけで更にもう一機撃破され、慌てて散開する敵機。

残った数は既に 4 機。

だが、その中で一機、レドーム搭載の指揮官機だけは動きが良い。

なので、迷わずブースターを点火、指揮官機を狙う。

『ッ!?』

慌てて指揮官機が肩部のマシンキャノンで弾幕を張り、遅れて他の敵機もそれに倣うが……遅い。

最初から半数が墜とされる事を織り込んで、全機でマシンキャノンとミサイルをばら撒きながら突撃してくれば、一発程度は被弾しただろうに。

やはり、こいつらもやり込みが足りない。

両腕に装備したミサイルランチャーからミサイルを発射しようとするが、ミサイルの弾速では加速状態のこちらに当たる事は無いし、そもそもロックする暇も与えない。

結果、その前にこちらの左腕のレールガンの銃口が指揮官機の腹部を貫いて撃破。

そして、動揺した上に統率の乱れた残りもものの数秒で撃破する。

……多分、リックドム相手に一方的に敵を撃破したアムロもこんな気分だったんだらうなーとか思ってしまう。

「まあこんなもんか。」

良い頃合いなので、今日は此処までで終わりにした。

……………

「ねーテンゼンさん。随分スコアを伸ばしてましたけど、何かコツとかありましたか？」

DC 本部内の士官向け食堂で、とある少女の声が響いた。

その内容に、陰鬱とした雰囲気を感じていた士官達、取り分けAMパイロットの面々は耳を敏てた。

今日一日で、彼らの殆どは民間人出のパイロットなんぞに負けるか！と挑み、そ

して無様に敗れ去った。

最初はただのリオンや時折その派生機だったが、徐々に好みの装備が決まったのか、最後は親衛隊を中心に配備されている高機動型のタイプVに強襲用ブースター、ランドリオン用の大型レールガン装備へと固定されてからは一発の被弾すら無く、最後には丁度来ていたテンペスト・ホーカー中佐が泣き付かれて仕方なく参戦した所、ものの見事に撃破されてしまった。

今ではゲンドウポーズを取りながら食堂の片隅で落ち込んでいるが、部下達とのデブリーフィングには参加している様なので、その内持ち直すだろう。

さて、そんな異常な戦績を初日から叩き出す奴が語るコツとは一体？

気に入る気に食わないは兎も角、誰もが興味はあった。

そんな異様な空気に気付きつつも、テンザンは食券と交換してきた野菜炒め定食（大盛）を食べながら、リョウトに語る事にした。

なお、リョウトはリョウトでその年齢を考えれば異常な程の腕前である事を追記しておく。

「んー……元は戦闘機乗りが多いってのもあって、テスラ・ドライブへの理解が薄

い、かねえ。」

「どういうことですか？」

確かに新兵器と言う事もあり、その辺りの理解が薄い者も多い。

しかし、その辺りしつかりと教練を受けている者がこの二人を除いた全員である状況では少し疑問符が付く。

「戦闘機だとしても直線的な機動になるだろうか？ 航空力学的に。」

「ですね。」

「それだとダメなんだよ。AM 同士ならテスラ・ドライブ積んでて機動がかなり自由で、それで互いに一撃で墜とせる火力がある。なら、後はどう先に当てるか、だ。」  
通常リオンに搭載されている武装はどれも一撃でリオンを墜とせるだけの火力がある。

一番低いマシンキャノンと言えど、当たり所が悪ければそうなのだ。

ミサイルは言うに及ばず、レールガンに至っては一番装甲の厚い胴体部だろうと貫通する。

「すると、ひたすら動き回って、敵に射撃して当てるのが一番大事な訳だ。」

「ああ、だからあんなボールみたいなの機動なんですね。」

あの機動、前世の記憶を参考にしたもので、要は機動戦艦ナデシコの傀儡舞のそれに近い。

無論、元が戦闘機由来のリオンなので直線加速は兎も角、機体のサイズ差もあってあそこまでの運動性は発揮できないが。

ガールリオン辺りならガンダム的な機動、AMBACを用いてもっと細かく動かせるのだが、現状のリオンでは無理だ。

リオンの、と言うかAMの操縦系統は「学習オートマトン利用によるEOTと従来型機位制御との統合」システムであり、要は従来の戦闘機の発展系+ガンダムみtainな学習型CPUとの複合型だ。

で、これはTC—OSを搭載した完全人型のPTとは違い、登録されたモーションは既存戦闘機のドッグファイトのそれに近い。

そのため、人型・準人型のロボット同士でのモーションの登録が少ないのだ。

そのせいで白兵戦距離になると、余りオートマトンからの支援が受けられないし、登録されているモーションも少ない。

なので、手練れや才能のあるパイロットの乗ったPT相手ではその時点でもかなり不利になる。

並のパイロット同士なら、空を飛べる分AMの方が遥かに有利で、余り問題視されてはいないのだが。

しかし、一旦白兵戦の距離へと入れば、連邦所属のPTであるゲシュペンスト系統の得意とする間合いで戦う事と||であり、更に言えばゲシュペンスト乗りは極少数ながら優秀なパイロットが多い。

即ち、近づかれればその時点でリオンの特性を活かせずに撃破される可能性が高いのだ。

「AM同士の戦闘ならそれが顕著だ。だから、直線機動なんて取ってる奴は恰好的になる。予測位置に弾を置けば良いんだし、滞空できるからって止まってる奴なら尚更な。折角テスラドライブなんて積んでるんだ。宇宙並に自在に動いて、贅沢言えば亜音速を維持して照準を絞らせずに射撃してりゃその内当たる。」

「その割に命中率が8割超えですけど…。」

「その点はオレの腕前だな。」

「ア、ハイ。」

やっぱコイツ常人じゃねえと周囲から畏敬の念を覚えられつつ、テンザンは更に突っ込んだ話をする。

「つつても、これはあくまでリオン同士の戦闘だからな。今後は新型も出るだろうし、それによっては多少変わってくるだろう。」

とは言え、これは運用データの蓄積が成されれば、その内ある程度はマシになる。だが、ガリーオンと違って、元々リオンは射撃戦重視なので当然と言えば当然なのだが。

その辺りがある程度改善したタイプVでも、蹴りなんざしようなものなら脚部が挽げるので、ガリーオンの配備を気長に待つべきだろう、というのがテンザンの意見だった。

「んー、それで集団戦するにはどうしたら良いんですか？」

「接敵したら散開しつつ連携しながら射撃だな。最低でもツーマンセルは崩さずにな。」

音速域に近い戦闘速度を保ちつつ、的にならない様に散りながらも連携を行う。

言うのは簡単だが、全く未知の領域の戦闘に、流石に困惑した空気が流れる。

「そこまでする必要ってあるんですか？」

「何れ連邦だってこっちの機体の鹵獲なり残骸なりからテスラ・ドライブに行きつく。或はテスラ研辺りを接收するかもな。そうすりゃこっちのアドバンテージは一気に減る。」

その言葉に、分かっているも嫌な空気が流れる。

誰だって、聞かなければならないとは言え、景気の悪い話は聞きたくないものだ。「そんな時になってから慌ててちゃ遅すぎる。世界を相手に喧嘩を売って、その果てにこの星を守るんなら、その程度の事は当然出来なくちゃいけねえ。」

そう言うテンザンの目には物騒な光が宿っている。

どうやら彼は彼なりにこの世界への愛着があるらしい。

「テンザンさんは真面目ですなえ。」

「そりゃな。折角ロボに乗せてもらってたんだ。その分程度は働くさ。」

ムシャムシャと野菜炒めを食べるテンザンを、リョウトは優しい気な目で眺めていた。

.....

「行くぞ。奴の機動データも参考にしながら、対テスラ・ドライブ搭載機戦術を構築する。」

テンペスト中佐が部下達を引き連れて食堂を後にする。

新戦術・新概念の発見と構築、その対処法の考案は嘗て教導隊に所属していた彼にとっては十八番でもある。

それを彼よりも二回りは年下の青年に指摘されたのだ。

公人としても、私人としても、それに対応せざるを得ない。

(成程、総帥の気まぐれかと思えば：目が眩んでいたのは私だったか。) 妻子を殺されてからは、復讐だけが全てだった。

それ以外はどうでも良かった。

一人でも多く、少しでも長く、妻子を奪った地球連合に復讐し続ける。

それで思考の幅が狭まっていなかったかと言えば嘘になる。

しかし、確かに育っている若い世代からの意見を汲まぬ程、テンペストは毫碌していなかった。

(テスラ・ドライブ搭載機故の新戦術・新概念。今後地球全土に普及するだろうテスラ・ドライブの事を考えれば、必ず必要になる。)

復讐のためにも、DCの掲げる地球守護の大義のためにも、それは確かに必要となる力だった。

それを悟って早々に、テンペストは部下達を連れ、すべき事をしにまたシミュレーター室へと足を向けた。

こうして、テンペスト・ホーカーは史実よりも少しだけ前向きになったのだった。

---

正直、テンペスト中佐はもう少しスポット当たっても良いと思う。

後、航空機由来だからって、あんな直線機動してたら、宇宙世紀だとバカスカ墜

とされると思う。  
>リオン



## IS 転生 三組代表が逝く 14

臨海学校前的一幕

なお、本作は臨海学校編＋夏休み編で完結の予定です。

間もなく夏休みを控えた状態で、来週には校外学習の一環として臨海学校がある。

とは言え、余り関係ないと言う連中もいたが。

「海かー……行かないといけないんだよねえ……。」

「だねー。仮にも企業所属だし。」

簪と本音の部屋でだらだらと特撮ものを見ながら寛ぐ灯と簪、この二人である。日本企業連合に所属する二人は、その性質上どうしても試作装備等の試験を行う必要がある。

まあ二人とも新型をまた受領する予定になっているので、原作と違ってどうしても行く必要があるのだが。

「私の高機動型ザクⅡ、楽しみ…。」

うっとり微笑む簪の脳裏には、先日マニュアルを受け取った企業連製の専用機の姿が、最近有名になったリユースPデバイス装備高機動型ザクⅡの姿があった。とは言え、轟雷のフレームにザクの皮を被せて、バックパックにラファール・リヴァイブの拡張コネクタの様な機能を持つサブアーム付きバックパックに交換し、更にフルマニュアル操作向けに各部を調整した仕様だ。

言ってしまうえば灯の運用データをフィードバックした結果からでっち上げた代物だが、日本でも有数の企業達の技術部が作成するだけあって、そのスペックは天才レベルとは言え個人の間に合わせてしかないシャアザクよりもあらゆる面で優れている。(天災兎は除く)

無論、実機に乗り込んでの調整は必要であり、簪にとってはそのための臨海学校でもあった。

「水着ねえ…何が楽しいんだろ？」

素で疑問符を浮かべているのは灯だ。

まあこいつの場合、そういった行楽とは無縁な10年を過ごしていたから仕方な

いのだが。

「あー…そう言えば水着買わないと…。」

「面倒だから去年ので良いや…。」

「はい?」

そして、灯の言葉にさしもの簪も凍り付いた。

今この親友は何と言ったのか?

「灯、本気?」

「サイズは特に変わってないし、良いかなって…。」

ぐだぐだだと墮落の限りを尽くす姿からは嘘は感じられない。

つまり本当なのだ。

灯の女子としては致命的過ぎる言葉は。

「…本音。」

「此処に。」

簪と言う主の呼び声に、本音が音も無くスルリと現れる。

いつもとは全く違う雰囲気。灯だけは目をパチクリとしているが、簪と本音はそ

れ処ではない。

「聞いたね？」

「はい。」

「言いたい事は分かるね？」

「はい。」

「じゃあ行動あるのみ。」

「畏まりました。」

そしてまた音も無く本音が消え、彼女の生体反応が生身の人間としてはかなり高速で離れていくのを感じながら、灯は簪の方を向き……後悔した。

「灯、水着、買う。」

頼みでも命令でもなく、ただ確定事項として告げる簪。

その姿を見て灯は思う。

あ、これあかん奴や。

「女の子としてサイズ変わってないからって水着買わず、剩え去年ので済ますとかあり得ないから。」

だから買おう、ついでに自分のも。

言外でそう付け足しながら、簪は爛々と今まで見た事が無い程の意思を込めながら灯の肩を掴みながら告げた。

「ア、ハイ。」

その眼差しに、灯は抗う術を持たなかった。

.....

「かえりたい……。」

数時間後、灯はぐったりとした様子で近場の大型ショッピングモール内の水着売り場にいた。

「うーん、やっぱり暖色系は合わないねえ。」

「えー、このピンクのフリルとか良くないかなー？」

「流石に勘弁して……。」

もうかれこれ一時間以上此処で灯は簪と本音の着せ替え人形と化していた。

何せこの灯、今までファッションを習った事が殆ど無いのだ。

精々が国家代表候補の用事の時に正装十ナチュラルメイク程度で、それ以外は本学校の制服やジャージ、僅かな私服のみだ。

その私服にしても流行とかガン無視であり、本人の美的センス（質実剛健・実用美）のみで選ばれている。

Q つまり？

A 今の女子から見ればNGだらけ。

と言う訳で、灯は簪と本音によるコーディネートを受けていたのだった。

時折簪が自分用のものも買っている辺り、彼女は彼女なりに楽しんでいるのだろうが、元男の感性を持つ灯にしては簪や本音の着飾る姿を見るならまだしも、自分がされる側となればこんな時間は苦痛でしかない。

しかし、親友である二人の意思をきっぱり断る訳にもいかず、こうして人形に徹しているのだった。

幸い、収入に関しては灯も簪も既に企業連所属と国家代表候補と言う事で結構な額を貰っているので問題は無い。

「ねーねーかんちゃん。これなんてどー？」

「わ、凄い。これなら灯も…」

「待って。待って（迫真）。」

ねえ君達。

そんなフリッフリのフリルとパレオ付きの白ビキニ見て何をするつもりなの？

（震え）

……………

「ふー……女性の買い物ってホントに長いなあ……。」

来週に控えた臨海学校の準備のため、友人（オール女子）らと共にショッピングモールへと買い出しに出掛けた一夏だったが、早々に皆の水着攻勢と余りの時間の長さに辟易していた。

これが千冬なら決めたものをパツと買うから食料品の買い出しなんか回れるのだが、生憎と箒や鈴、シャルロットやセシリア、序でにラウラも足した女子達には

そんな事は期待できず、既に水着選びが始まって一時間は経過していた。

なお、ラウラは着せ替え人形化しており、一夏同様に死んだ目でシャルロットに弄られている。

(もう昼だし、そろそろ何か食いたいなあ。)

手洗いと言う理由をつけて、一度脱出に成功した一夏だが、此処で抜け出せば後で厄介な事になるのは目に見えている。

此処で何かハプニングが起きればそれを理由に切り替えたりも出来るのだが…。

「ええい付き合ってられるか！私に帰るぞー！」

「あ、ちょっとラウラ！」

すると、我慢の限界だったのか、ラウラが死亡フラグ的な叫びと共に水着売り場から飛び出してきた。

その姿は黒いフリフリのたくさんついたビキニであり、可愛いらしさを強調しつつラウラの人より白い肌によく映えていた。

流石はシャルロットの見立てだなあと一夏は思いつつ、ラウラに言うべき事を言った。

「会計はしとけよー。」

「ぬ、確かにそうだな。カウンターは……。」

そこで突然、ピタリとラウラの動きが止まる。

視線の先にある服飾売り場のカウンター、そこにいる人物の姿が目にと留まったからだ。

「あいつ……。」

一夏も何度も目にし、試合や練習では毎度苦渋を飲まされる相手。

そう、IS 学園一年三組代表にして日本国家代表筆頭候補である倉土灯だ。

今の彼女はやたら草臥れているが、楽しそうな友人二人と共に会計をしており、先程までラウラと似た様な境遇であった事が伺える。

「今度こそ……!」

そこに目の色を変えたラウラが素早い動きで近づいていく。

ラウラは以前、機体に仕込まれていたとは言え、自分のやかかしを止めてもらった恩義から、灯に感謝を伝えようとしていた。

しかし、どうにも避けられているらしく、今の今までそれを伝える機会に恵まれ

なかったのだ。

そのため、この目の前に転がって来たチャンスを逃せないとはかりに行動したのだ。

可愛い水着姿のまま。

「……ま、いいか。」

疲れ果てた一夏は鈍った頭でそう判断した。

………

「倉土灯！」

「んん？」

名前を呼ばれ、灯が振り返る。

別に接近する誰かに気づいていなかった訳ではない。

ただ、殺気も何も感じなかったし、不意打ちされようとうとうにでも出来るし、最悪キングストーンで蘇ると言う認識がある故だった。

「私だ、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「ああ、先日の。何か用？」

小首を傾げながら、灯はラウラに問い掛ける。

彼女の原作知識からすれば、ここでラウラなら突っかかってくるだろうと思つて、既にISの兵装のみの呼び出しは何時でもできる様に準備しながらだ。

「先日は私の暴走を止めてくれて礼を言う。ありがとう。」

ぺこり、とラウラは以前のつんけんとした様を感じさせない程に素直に頭を下げた。

おや、と灯は目を丸くした。

彼女の知識では考えられない程に丸くなっていた事に驚くと共に、その切っ掛けになったであろう人物をピックアップする。

「…どうして礼を言うの？あれは貴方個人が原因じゃないでしょう？」

「だが、実際に起こしたのは私だ。故にこれは当然の事だ。」

ふむ、と灯は考える。

別にこいつがどうなろうか構わないが、それでもちゃんと謝罪してきた事は評価

しなければならぬ。

「分かった。謝罪は受ける。以後はくれぐれも気を付けてね。」

「ありがとう。それと今後の事なのだが……」

そこまで言つて、急にラウラはもじもじとらしくなく恥じらい始める。

今日は驚く事が多いな、と思いつつ、灯は辛抱強くその先を待つ。

「お姉様、とお呼びしても……」

「却下。」

流石にそれは勘弁願いたい。

「所でラウラ、水着のまま帰るの？」

「あ……会計してくる！」

特に山も落ちもなく終わり





## SRWOG転生 テンザンが逝く3

今回、軽くR描写あり。

さて、DC本部への顔出しも終わり、自宅のバーニングPTも軍用シミュレーターに改装し、家政婦のお菊さん（58歳）も抱き込んで機密もばっちりにした状態で、テンザンは日常生活に戻った（無論監視付きだが）。

予定としては、来月行われるバーニングPTの大会に出た後は直ぐに本部に直行なのだが。

では何故態々戻って来たのかと言うと、テンザン個人の用事があったからだ。

それも極めて個人的なものだ。

それは、リョウトのご家族への説明である。

流石に今年で漸く18歳になる少年が長期で家を留守にするには何の説明も無しでは不義理に過ぎる。

となれば、テンザンは直にヒカワ家に顔を出してあの怖い親父さんと心決るのが得意な四姉妹を相手にする事になる。

可愛い末っ子で長男で跡継ぎをつい目を離してたらテロリストに就職させちゃいました☆とか殺されても文句は言えない。

「あ、もう連絡しましたから大丈夫ですよ。」

「はえーよ」（震え声）

色々と覚悟決めてたら、何かリョウトが勝手に終わらせてました。

「父さんからは自由にしろって言質取ってますし、姉さん達もまあ…。」

「マジかー…。」

親父さんは兎も角、あの四姉妹が認めたのを意外に思いつつも横にやり、シミュレーターは兎も角として軍事教練で疲れた身体を癒す事にして、テンザンはその辺りのやり取りを聞かずにその話題を終了してしまった。

してしまったのだ。

「…これを機にテンザンさんをちゃんと捕まえるって言ったら、喜んで許可してくれましたよ♪」

誰も聞いていない場所で、少女はうつとりと微笑みながら呟いた。

………

そんなこんなで、あつと言う間に一ヶ月が経過した。

テンザンはバーニングPTでは相変わらずのランキング1位を更新しつつ、DC側とはシミュレーター越しに情報のやり取りをし、挑んでくる兵達を返り討ちにする日々。

多少時差があつて辛い、オタク趣味なだけあつて夜型人間なので、その辺は余り苦にならない。

最近是对エース戦術が出来上がってきたのか、被弾する事が多くなつており、テンザンとしてはスリル満点でも楽しい。

傍らで見えていたリョウトはその戦闘映像を引き攣った顔で見えていたが、彼女自身

も対エース戦術を身に着け始めているDC兵（全員エリート相当に強化）一個中隊（12機）を相手に互角に渡り合っているので大概化け物なのだが。

「あ、テンペスト中佐の部隊も来てる。」

「おし、本気出す。」

「あ（察し）」

兵装もミサイルを減らし、対高機動戦闘を意識してか、頭部も通常の指揮官アンテナ増設仕様にしてあるリオンで、テンペストとその部下達がシミュレーションに乱入してきた。

その数は一個中隊であり、ただのDC兵ならリョウトでも頑張れば倒せる程度の数だ。

しかし、此処にいるのはDC兵の中でも親衛隊であるラストバタリオンの一員であり、更に言えば指揮官であるテンペスト・ホーカー中佐によるテスラ・ドライブを始めとした先進戦闘技術の対策・研究部隊としての色を濃くした連中だ。

その技量と経験、何よりDC及び指揮官への忠誠心故に戦力比は同装備の一個大隊に匹敵する。

そんな連中が相手では今のリョウトでは些か以上に厳しいものがある。

だが、それをテンザンは笑って歓迎した。

「いッツツくぜエエエエエエエエエエッ!!」

レーダー識別圏内に反応を確認したと同時に、お馴染みの強襲用ブースターを最大まで噴かせて一気に加速する。

以前なら遠距離からの狙撃で何機か墜とせていたのだが、今の彼ら相手では弾薬の無駄にしかない。

それを分かっているからこそ、テンザンは敵の只中に飛び込む事で乱戦へ持ち込もうとした。

だが、既にそれで幾度も痛い目を見ている彼らはそれをさせじと小隊単位で散開、肩部マシンキャノンによる濃密な対空砲火で迎え撃つ。

以前はここで分隊単位のツーマンセルに分かれたのだが、あつと言う間に瞬殺され、時間稼ぎすら許されなかった事から、敢えてやや行動が縛られる小隊単位を選んでいる。

それをテンザンは攻撃的な笑みを浮かべつつ、慣れた様に切り込んでいき、最寄

りの小隊一つへと踊りかかっていく。

接敵と同時に、一機が左腕のレールガンに貫かれて爆散。

接敵から1秒後、一機の影から接近戦（と言う名の特攻）をしかけた一機の頭部（＝コクピットの直上）を右の大型レールガンで射抜いて撃破。

接敵から4秒後、逃げ切れないと悟った残りの二機が全兵装を形振り構わず発射し、一発でも被弾させようと弾幕を張るが、大型レールガンの発射時の反動すら利用した独特の機動で回避しながら立て続けに撃破する。

立て続けの撃破にパイロット達の練度を疑うが、これでもまだ最初期に比べれば遥かに伸びているのだ。

最初はレーダー識別圏外からの狙撃で部隊の半数が沈められ、次に先が読めると言わんばかりの偏差射撃によって一秒で数機が撃破されていたのだ。

寧ろ、この異常なテンザンを相手によく心折れずにここまで食らいついてくるものだと感心すらされている。

現にDCの一般パイロット達の中では既に心折られている者も多い。

そんな彼らはテンザンと言う大き過ぎる壁に挑み続けるラストバタリオンの面々

を心底尊敬し、組織内の結束を高めているのだから皮肉なものである。

『各機、フォーメーションC1!』

指揮官機であるホーカーの声に反応し、各機が一斉に後頭部に増設されたコンテナからミサイルを発射する。

これもまた唯のミサイルではない。

テスラ・ドライブ搭載機同士の戦闘を意識して作成された空対空ミサイルであり、威力こそやや低下しているものの、今まで採用されていたミサイルとは一線を画す機動性と誘導性を持っている。

一機当たり6発、合計48発もの高機動型ミサイルが発射され、ド派手な黄色に塗られたテンザン機目掛けて殺到していく。

「ハッハッハーツ!」

それをテンザンは最高だと言わんばかりに正面から突っ込む。

両肩のマシンキャノンで迎撃し、三割近いミサイルを迎撃しながら、残りのミサイルをまるで曲芸飛行の様なターンと加速、停止、急降下で撒き、或はミサイル同士を衝突させ、窮地を難なく潜り抜けていく。

『次、C2!』

だが、ミサイルばかりにかまけてはいられない。

テンザンの予測進路目掛け、大量の砲弾が発射され……それら全てが着弾前に炸裂、無数の散弾となって降り注いだ。

対空散弾と言う、大昔の戦争で使用された戦艦の対空用砲弾だ。

これをミサイルに気を取られてやや機動が単調となったテンザン目掛け、残った三個小队全機で発射したのだ。

だが、テンザンとてそれで黙ってやられる程度なら、此処まで来ればしない。

「まだまだあ!」

遊びは終わりと言わんばかりに、左腕部のレールガンとマシンキャノンで一気に残ったミサイルを全機撃墜、散弾砲弾が炸裂するのとはほぼ同時、予測進路周辺からブーストを最大に吹かしつつ、置き土産とばかりに右腕部の大型レールガンで狙撃し、一機を撃墜しながら安全圏へと離脱してみせた。

「今のはヤバかったぜ!」

『よく言う!』

もし最初に一小隊撃墜していなかったら、散弾ミサイルの包囲網から逃れる事はできなかっただろう。

もしもの可能性に背筋を冷たいものが走るが、一戦ごとに手強くなっていくホーカー中佐とその部隊に、テンザンは惜しみなく称賛しながら、何時もの様に勝ちにいった。

.....

「あー……流石に疲れた……。」

「ふふ、お疲れ様です。」

ホーカー中佐らとの濃密なシミュレーターを終え、バーニングPTの大会を二日後に控えた事もあり、テンザンは今日明日は早めに切り上げる事にした。

なお、家政婦のお菊さんは夕飯を作り終えた後、既に帰宅し、テンザン邸には既に二人だけである。

「はい、アイスティーですよー。ミルク入りですけど。」

「応、ありがとな。」

氣を利かせてくれたリョウトに礼を言いつつ、テンザンは何の疑いもなく底にやや沈殿物のあるアイスマルクティーをがぶがぶと飲む。

シミュレーター後に入浴し、ずっと水分を取っていなかった事もあって、実に美味そうに飲んでいく。

それが自分の人生の墓場逝きを決める行動になるとは、一切知らず。

「ふー……」

「良い飲みっぷりですなー。」

「応。やっぱ疲れてたみたいだわ。今夜は早めに寝るよ。」

「はい、お休みなさい。」

そう言って、そそくさとテンザンは自室へと引っ込む。

そんなテンザンを、リョウトは注意深く観察していた。

そう、例えば立ち上がる時、テンザンが妙に引け腰だったり、ズボンの前が突っ張っていたりした事を。

(もう少ししたら頃合いかな?)

コップを片付け、この後の見繕いの算段を考えながら、リョウトは誰にも見せない様なニンマリとした、それでいて艶っぽく上気した笑みを浮かべた。

.....

何故かやたらムラムラしたので自室で自家発電して就寝した後、テンザンは夢を見た。

小柄な少女を抱いている夢だ。

何故か相手の顔形がよく分からない。

が、夢なんだし、そんなもんだろうと納得しておく。

ただ、自分が感じる感覚に関しては結構リアルな夢だなど思いつつ、夢なんだし色々やってみるかとか好奇心と興味の赴くまま、その少女の身体を思うが儘に貪り続けた。

その少女も最初がぎこちない動きだったが、徐々に積極的になっていき、今では結構な体格差があるにも関わらずこちらに合わせてくる。

寧ろ、こちらに合わせる形で、自分自身の気持ちの良い動作や体勢を探っている様にも見えた。

でまあ、よい夢だったものの、夢とは覚めるのが道理な訳で。

気づけば、自室のベッドの上で、テンザンは目を覚ました。

「あ……？」

何か身体がヤケに怠いし重い。

それに運動した後の様に汗を始めとした色々と濃い匂いが漂っている。

はつきり言う口臭い。生臭い。

そして、右腕が何故か動かないし、やたらと温い。

「……？」

まだ寝ぼけたままの思考で振り向くと、そこにいたのは夢の中で見た少女だった。だが、夢の中とは違い、その少女は現実の存在だった。

そして、とてもとても見覚えのある顔をしていた。

具体的に言うと、自分の弟分として可愛がっていたリョウトだった。

だが、その身体は少女のものだった。

その事実が頭の中で結びつかず、テンザンは暫く硬直していた。

---

TS リョウト≡秋山殿（一見着やせだが出るところは出てる）

なお、起きた時点で既に10時を回っており、第一発見者の菊代さんには知られていない模様。



## 転生モーさんが逝く 1 前書き追加

某スレ主さんの許可の下、「親バカモルガンとTS転生モーさん（タンク型）」のネタを拝借させて頂きました。

何かモーさんことモードレッドに転生した。

しかも、原典の奴じゃなくFateの滅亡直前のブリテンに。

飯マズで蛮族山盛りで内乱ばっかな円卓と騎士王様が治める国に。

逃げなきゃ、と思ったとしてもしょうがないと思う。

でも出来なかった。

何故かって、こつちを満面の笑みで愛おしそうに世話焼いてくれるお母さんことモルガンを残してはいけないとうっかり思っちゃったからだ。

前世では家族に恵まれず、孤独な人生を歩んでた自分だが、二回目なんだから自分を愛してくれる母親に孝行くらいしたかったんだ。

とは言え、自分に出来る事は少ない。

何せこの国は千里眼持ちたるマーリンが滅びを「確定」させてしまった国だ。故に、滅び以外の未来は無い。

だからこそ、あの騎士王が何とか穏やかな滅びに軟着陸させようとして、しかし失敗してしまった魔境なのだ。

まあ世界そのものがこの国の滅びを求めているのだからしょうがないと言えるのだが。

さて、話を本題に戻すとしよう。

要は親孝行がしたい、と言う話だ。

父親、と言うか種元はマーリンの魔術で「生やした」騎士王なのだろうが、母親は間違はなくモルガンこと母さんだ。

その点は先ず間違いない。

何せ自分の二回目の記憶は寝室で産婆さんに取り上げられた所から始まっているからだ。

その時の母の言葉を、「無事に生まれて来てくれてありがとう」と、心から誕生

を祝福してくれた事を、自分は決して忘れる事は無いだろう。

その一事だけで、自分は母に生涯尽くす事が出来る。

で、父親こと騎士王は自分の存在なんて予言もあって目障りだろうし、特に自分から触れる事はしない。

が、このままだとブリテン諸共破滅ルート、と言うか痴情の纏れによって他の兄弟達によって殺されるのが確定してる母だけは何とかしたい。

となると、必要なのは安全かつ確実にブリテンの外へと行ける手段、そしてブリテンの外での拠点の確保の二つだろう。

これさえ出来れば、母を連れてブリテンから脱出し、そこで暮らす事も出来る。問題なのは、余り時間が無いと言う事だろう。

母ははぐらかしていたが、自分の成長はやけに早い。

生後一年程で、既に幼児の姿になっている事からも、通常の三倍は早いだろう。即ち、普通の人間ではなく、ホムンクルスだろうと言う事だ。

恐らく、母の子宮をフラスコとして、母の地母神としての血と騎士王の龍種の因子を併せ持った、対騎士王打倒のための兵器。

それが自分が当初作られた理由だと思われる。

しかし、今の母にはそんな様子は微塵も見られない。

「はい、モード。あーん。」

「あーん。」

今だって、もう一人で食べられると分かっているのに、態々自らの手でミルクで伸ばした芋を食べさせているのだから。

「あむ。」

「そうそう、ゆっくりよく噛んでね？」

「おいしいです、ははうえ。」

「ふふ、良かった。」

この母の笑顔を、自分が守らねば（使命感）。

そんな使命感に突き動かされるまま、自分は食後のお昼寝の後、夕食まで母と共に魔術の勉強をする。

既に読み書き（英語の発音や文法が面倒だったが）と計算は出来るため、今ではペーペーながらも簡単な魔術も使える。

今はそんなものだが、何とかしてこの優しい母を逃さねば。

将来的には自分も逃亡予定だが、態々滅亡するブリテンに置いていくつもりは無い。

この時、私はそれがせめてもの親孝行だと信じて止まなかった。

そして、生まれてから5年後。

肉体年齢がようやくと15歳になった頃、遂にキャメロットへの登城が決まった。

武術と魔術の修行が終わってパーティーを開いた後、パットと決まったのは流石は妖妃モルガンの手腕と言う事だろうか。

まあ騎士王の種違いの姉なので、権力があるのは当然と言えば当然なのだが。

「頑張ってるね、モードレッド。辛くなったら何時でも帰ってきてよいかからね!」

「母上、行って参ります。必ずや母上のご期待に沿えてみせます。」

「もう、そんな事より無事に帰ってきてね? モードレッドの武勇伝、期待してるから。」

そうして、私は母の居城を後にし、キャメロットへと向かったのだった。

「あ、そうそう！念のために鎧と兜の方は超頑丈にして再生するようにして、寿命対策に持ち主を常に健康にするようにしたから！」

「凄いですね!?まるで王の鞆の様だ！」

「でも、その代り凄く重くて動きが鈍くなるの。」

「それ、まともに戦えるんですか……？」 震え声

後日、生体ゴーレム式の馬を与えられ、騎乗すれば何とか戦場に間に合う様になりました。

……………

さて、出だしから躓いたモードレッドだが、キャメロットに着いてからも問題が出た。

騎士王との謁見を始めてすぐに、騎士達が騒ぎ出したのだ。

曰く、「王の前で兜を外さないとは無礼だ！」との事。

だが、それはこの王似の顔を隠す以外にも、理由があったりするのだ（白目）。

「申し訳ありません。この兜、脱げないんです。」

「は？そんな訳は無かろう！」

「馬鹿にしているのか!？」

誰にも信じてもらえず、そんな罵声を浴びせられる。

だが、無理なもんは無理なのだ（白目）。

マイマザー曰く、「うちの子の顔見てトチ狂う奴がいるかもしれないし…そうだが、兜で顔を隠してしまいましょー!」。

結果、不貞隠しの兜は母本人しか外せなくなった。

代わりに耐久力が大幅UPしたが、それ以上に普段生活し辛くてたまらないのです（白目）。

「ふーむ、どうやら本当っぽいけど…ガウエイン、ちょっと試してくれないかい？」  
「マーリン、突然何を言い出すのですか。」

唐突に、王の傍に控えていたマーリンがそんな事を言い出し、王に諫められる。だが、このド外道半夢魔がそんな事で止まる訳がない。

「そうしないと誰も納得できないだろう？それに、日中のガウエインなら大抵の

呪いの道具なんて意に介さないからね。」

日中、正確には午前9時から正午までの3時間と午後3時から日没までの3時間、その力が三倍となるガウエインなら、余程頑丈かつ強固な呪いの道具でない限り、問題なく外せるだろう。

ただ、勢い余って中身を【自主規制】とか【スイカ割り】、【見せられないよ!】な事にしてしまう可能性もあるにはあるが。

「いだ!? いだだだだだだだだだだ!!」

「我慢して下さい! これも貴方のためなのです!」

「腕げる! 腕げちゃううううううう!!」

そして始まった兜割り、もとい外し。

だが、どれ程頑丈なのか、三倍となっているガウエインの膂力をして兜は外れもしなければ壊れもしない。

ガウエインもあの手この手で頭から兜を引っこ抜こうとしたり、縁に手を入れて引き裂こうとしたりするのだが……結局、一時間近く粘っても無理だった。

最終的にはガラティーンでカチ割ろうとしたので、慌てて他の円卓の騎士が止め

る事となり、以後、モードレッドの兜はしょうがないとしてスルーされる事となった。

そんなこんな事を挟みつつ、何とか叙勲式は進み、モードレッドはキャメロットの騎士（円卓ではない）の一人として、騎士王の臣下となったのだった。

「王よ。我が忠義、このブリテンと王へ捧げます。」

「我が騎士モードレッドよ。その忠誠を受けます。証として、この剣を贈りましょう。」

夕日の差し込む謁見の間にて、多くの騎士達が見守る中、新参の騎士へと王が叙勲すると言う厳かな絵画の題材にもなりそうな光景がそこにあった。

が、内心は大いにかげ離れていた。

（何とか早く出て行って、母さんとフランスやローマ辺りに脱出しないと…。）

（あのモルガンの子…マーリンは予言の子の可能性もあると言っていたが…この眼で見極めるまでは迂闊に排除できないか…。）

こうして、モードレッドはキャメロットの騎士としての一步を踏み出したのだった。

「頂きます……。」

(何だこのマツシユ&マツシユの山は…塩すら満足にないなんて……。)

なお、目下最大の問題は食事の不味さだったりする。

## 転生モーさんが逝く 2

キャメロットの騎士のお仕事は割と単純である。

1、領内の治安維持。

2、戦時での出撃。

3、災害時の救助活動

お仕事にすればこれである。

が、功績や地位に見合った他の役職の兼務や与えられた領地の運営等もあるため、一概に楽とは言えない。

また、モーさんの場合はまだ入ったばかりと言う事もあり、治安維持のための警邏で顔見せも兼ねてあちこちに盥回しにされる事となる。

まあ何時の世も新入りは何がしかの洗礼を受けると言うのは変わらないと言う事だろう。

とは言え、戦時下である。

他の地域から流れてきた（とはとても思えない）蛮族達への対応で、そんな穏や

かな任務の日々は即座に打ち切られた。

来る日も来る日も蛮族蛮族蛮族また蛮族。

突如始まった蛮族の大侵攻。

終わりのない攻勢は一月近く続き、その結果として兵士達は戦力にならぬ程に疲労困憊となり、騎士達も円卓とそれに類する一部の手練れ以外は軒並みダウンしていた。

「あー怠いー。」

が、モーさんは割と元気だった。

何せこのモーさん、素の耐久力が日中三倍のガウエインと互角な上、鎧による再生能力を持っている。

そのため、このような状況での継戦能力においては、鞘と聖剣を持つ騎士王の次に秀でているのだ。

だがしかし、素早さに関しては普段のガウエインの半分以下しかない。

その上、現在は機動性を補佐するための馬型使い魔が想定以上の酷使によって遂に破損し、実家にメンテナンスに出しているため、疲労困憊で後方に下がった騎士

達と物資集積所の防衛に当たるしかないのだが。

「しゃーない。馬以外の礼装でも作ってみよ。」

以前から思っていたのだ、馬だと扱いづらい、と。

こちらは自動車全盛の時代を生きた転生者。

馬の扱いなんてさっぱりなのだ。

無論、我が母モルガンの指導の下、そこらの騎士以上に修める事は出来たが、キャメロットの中でもそう上手いと言う訳ではない。

なので、こちらで自分向けの移動用礼装を作るべきだろう。

勿論、母上の作ってくれた馬型使い魔に文句はないが、やはり手段は多いに越した事は無い。

しかも、今回は材料もある。

蛮族達の血肉と武器の数々だ。

あの蛮族達はブリテンに飛来するだけあって、神秘の多い土地でしか生きられないらしい。

そのため、世界の後押しもあって、神秘の最後に残る地であるブリテンへと襲来

してくるのだ。

そんな性質もあって、蛮族達の血肉は下位の幻想種並には素材として優秀だったりする。

「これをこーして……あ、車輪どうしよ。ゴムなんてないし、うーん……」

ゴムの様な性質を持った素材でないと、衝撃を吸収し切れない。

無論、バネの様なパーツは作れたので、サスペンションとかは問題ないのだが。

「あ、そうだ。タイヤじゃなくてホバーなら良いんだ。」

そこで発想の転換である。

タイヤが作れない？

じゃあタイヤの要らない乗り物にすれば良いじゃないかH A H A H A !

「よし、構想は完全に出来た。後は作るのみ！」

なお、周囲の兵士や騎士達は気味悪がって遠巻きにしていたりする。

「おや、面白そうな事をしているね？」

そこに、ブリテンの屑オブ屑、昆虫系半夢魔が興味津々な様子で現れた。

.....

「ガウエイン！間もなく日没だ！突出するな！」

「いえ、出来ません！」

騎士王の指示に、しかしガウエインは下がらない。

否、下がれない。

「ここで私が下がれば不利です！どうかこのままです！」

毎度ながら呆れる程の物量を持つ蛮族に対し、騎士王率いるブリテン勢は聖剣等の対軍・対城宝具の真名解放の後の騎兵突撃により、現状はどうか数の利が活かし切れない乱戦へと纏れ込ませる事に成功している。

しかし、既に一カ月近い戦いにより騎士も兵士も疲弊し、今では円卓の中からも戦闘不能で後方に下げる者まで出ている。

辛うじて円卓でも屈指の戦闘能力を持つガウエインやランスロット、ペレノア王等の活躍により、致命的な士気崩壊こそ起きていないが、このままではもたない。特にガウエインの担当する戦域は圧されており、彼が引けばそこを起点に他の戦

域も崩壊するだろう。

(後一手、後一手あれば…！)

そう思う騎士王だが、それは出来ない。

彼女の方も宝具の真名解放が出来ない程に圧されており、不死身を生かして薙ぎ払おうにも近くや射線上の味方を巻き込んでしまう。

「ヒヤッハー!!」

そこに、この戦場のダークホースが現れた。

「な、モードレッド卿!？」

奇妙な乗り物、足も車輪もなく、浮遊して移動する絡繰り仕掛けに騎乗して、特徴的な兜を被った騎士が不意を打つ形で蛮族の集団を絡繰りの先頭についた衝角で弾き飛ばしていく。

「ハッハー！蛮族風情がブリテンを荒らしてんじやねえええ!!」

更に、魔力放出（雷）を生かして近づく蛮族の戦士達を寄せ付けない。

また、弓矢や弩、投石器による遠距離攻撃も、頑丈過ぎる鎧によって空しく弾かれていく。

何とか物量によって圧していた蛮族達もこれには動揺し、急ぎモードレッドを排除しようとする……が、その殆どは先程の二の舞とばかりに轢かれていく。

そこにこれ以上はさせじと蛮族達の中でも特に大柄な戦士がモードレッドの進路上に躍り出る。

全身を重厚な筋肉に覆われた戦士は、明らかに他の蛮族とは異なる。

「…面白いッ！」

良い度胸だと言う様に、モードレッドはホバーバイク型礼装に更に魔力を注ぎ込み、限界まで加速を命じた。

「ガアアアアッ!!」

ゴガッシャーンッ!!

盛大な衝突音と叫び声と共に、蛮族とホバーバイクに乗ったモードレッドが衝突する。

だが、先程の様な結果とはならなかった。

ホバーバイクの衝角を両手で受け止め、地面に二本の削られた跡を刻みながら、それでも大柄な蛮族はホバーバイクの突撃に耐えているのだ。

「ツ・カ・マ・エ……！」

「私が、お前をな。」

だが、両手が塞がり、動きの止まった蛮族に容赦する様な騎士はブリテンにいない。

バリリと、肩に背負った剣が赤雷を纏う。

よく見れば、その剣は片側が開いた奇妙な鞘に納められており、鞘自体にも赤雷が奔っている。

「磁装・蒐窮。」  
エンチャント・エンディング

ブリテンでは誰も見た事のない、剣を鞘に納めた状態からの剣技。

「蒐窮開關。」  
終わりを始める

それに魔力放出と魔術によって再現された電磁誘導。

「終焉執行。」  
死を行う

鞘を銃身に、剣身を弾丸に見立て、再現された電磁誘導によって剣身を加速させ、

高速で抜刀する。

「虚無発現。」  
空を現わす

電磁誘導により超音速域に到達する剣身を剣撃と完全に同期させる事で、初めて実現する対人魔剣の一つ。

その名も：

「電磁抜刀——禍。」

災いの名を持つ超音速の赤雷を纏う斬撃は、一刀の下に蛮族の戦士を両断した。だが、ここでモードレッドの動きは完全に停止、更に周囲へと放出していた赤雷も止まっていた。

「コロセ！コロセエエー！」

「ギギギギ！」

そこに殺到するのは一山幾らしもない蛮族達。

足の止まった騎兵等、雑兵に狩られる的ではない。だが、そんなものはモードレッドとて承知している。

「緊急脱出！」

その言葉と共に、蛮族の刃が届く寸前、モードレッドはホバーバイクから、直上へと空高く「座席」ごと射出された。



「すまん。効かんわ。」

カキーンと、安っぽい音と共に、蛮族達の持つあらゆる武器は弾かれた。

モードレッドの鎧兜を合わせた耐久力、ランクにすれば実にA十。

また、そんな頑丈過ぎる鎧兜を駆動させる筋力もまた、ランクにして同じくA十。世界で最も有名な怪物の一つたるミノタウロスもといアステリオスとも正面から殴り合えるステータスである。

如何に蛮族達と言えど、正面からそれを突破するには余りに酷だった。

「でりゃあああああ!!」

お返しとばかり今度はバツコーン!と冗談の様に一撃で蛮族達が吹き飛ばされ、その陣形が大きく乱された上に、先程までの勢いが急速に萎んでいく。

その分、敏捷性に関しては「あ(察し)」レベルなのだが、敵の密集地帯ならば何の問題も無い。

「さあ来い!」

そして、味方の只中にいる特記戦力を前にして、如何に蛮族と言えど動揺は免れない。

モードレッドに引き寄せられた分、他の戦域の密度は下がり、徐々に戦況が逆転していく。

これが本来のモードレッドならもっと機動性を生かして遊撃するのだろうか、生憎とこの転生モーさんにそんな常識的なスペックは無い。

兎に角硬くて強いんだから、取り敢えず殴れるだけ殴ろう。

なーに多少の負傷や疲れは鎧が癒してくれるさH A H A H A H A H A H A !

と言う感じで互いに揉みくちゃになりながら乱戦に次ぐ乱戦を繰り返したのだ。

だが、これが結果的に囿の役割と果たし、各戦域は盛り返し、最終的に魔力放出でモードレッドが離脱したと同時に再度対軍・対城宝具の一斉解放による掃討によって、今回の大規模侵攻は終息した。

この時の戦果により、モードレッドは目出度く円卓の騎士に叙される事となる。

「さてモードレッド卿、何故持ち場を離れたのですか？」プチオコ

「えっと、その…マーリン卿が『此処は僕が担当するから、君は王達の応援に向かうと良い』って…。」

「……アグラヴェイン、あいつは何処に？」頭痛を堪えつつ

「つい先程『じゃ、仕事終わったから、僕は花街に行ってくるね☆』と言って消えました。」

「……………」怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒

(こ、怖い。王様が本気で怒ってる…！)

が、それはそれとして、論功行賞の場では、モードレッドの独断専行(と言う名のマーリンのやらかし)はしっかりと釘を刺される事となった。



## 艦これ短編 赤城が作る2

筆が乗り過ぎてえらい長くなった(汗

皆さんお久しぶりです。

開設したばかりの当鎮守府(規模的には警備府)にて料理当番を務めている艦娘の赤城と申します。

最近は駆逐艦以外の艦種も揃いつつあり、私も漸く空母として任務に出る事が出ています。

しかし、前世が人間だった記憶と艦だった頃の記憶を持つ私は、実は艦載機の運用が他の空母・軽空母の運用に比べて下手です。

辛うじて及第点とは私に稽古をつけてくださった龍驤さんの言です。

ただ、純粋な弓での砲撃戦では満点だそうです(41cm単装砲相当)。

この火力を生かして、高火力の戦艦や重巡が揃う前までは結構な数の敵艦を沈め

たものです。

確かに生前は弓道部に所属していましたが、そこまで優秀ではなかったのですが……まあ、それは今は置いておきましょう。

「では赤城さん、暫くは私と共に訓練をしましょうね。」

「はい、よろしく願います。」

そんな訳で、私は絶賛日本航空母艦の母たる初代航空母艦である鳳翔閣下直々に訓練をして頂ける事になりました（白目）。

「取り敢えず、艦載機の発着艦を1000回行ってください。一度でも失敗すればカウント0からやり直してくださいね。」

「はい、了解しました！」

鎮守府沖の海上で、矢筒から艦載機へと変化する矢を抜き、射法八節に則って弓矢を引き、構え、放ち、残心する。

そしてすぐさま次に移るが、決して一射一射を疎かにしない。

自分が放つ矢の一つ一つには艦載機妖精さん達が、嘗ての英霊達が宿り、力を貸してくれているのだ。

彼らに顔見せできない様な射をする訳にはいかない。

それだけを胸に、私は必死になって射を続けました。

「はい、そこまでです。」

訓練を続け、時間の感覚がとっくの昔に消えた頃。

既に時間は日没寸前でした。

幸い、鎮守府近海での訓練なのですが、今から急いでも日没は過ぎてしまおうでしょう。

となると、残念ながら食堂の利用時間は過ぎてしまう。

「今日一日で、かなり無駄が削れましたが、まだ粗さがあります。暫くはこの形式で訓練しましょう！」

「はい！ありがとうございます！」

………

私達二隻が鎮守府に帰投し、補給を済ませた頃にはすっかり日も暮れて20時、食

堂の利用時間もとくに終わっていました。

今日は他の艦が食堂担当だったから問題ないが、これでは暫く私が担当する事は出来ないでしょう。

「すっかり遅くなってしまいましたね。」

「すみません、付き合わせてしまって…。お詫びに何か簡単なものでも作りますね。」

「あら、それでは一緒に作りましょうか。」

と言う事で、鳳翔さんと一緒に台所に立つ事になりました。

とは言え、時間的にそう凝ったものは作れない。

精々、残り物を組み合わせた簡単なものしか無理でしょう。

さて、冷蔵庫を覗いてみると、そこには今夜のメニューであったスパゲッティミートソースの残りがありました。

麺は皆食べ尽くしたのか残っていませんが、これだけでもパンやご飯と合わせれば十分です。

また、昨夜揚げ物の付け合わせに出された千切りキャベツも少量ですがあります。

それと、買い出しで処分品が大量にあったために買った食パンも。

そう言えば、先週雪風が近所の商店街に買い出しに行った際、福引でホットサンドメーカーを当ててましたね。

丁度良いので、今夜は有り合わせのホットサンドにしましょう。

「出来ました。」

「はい、こちらも出来ました。」

見れば、鳳翔さんが作ったのは冷蔵庫に残った大根や人参の尻尾、ハムの残り等を細かく刻んでコンソメで煮込んだスープでした。

うむむ、主婦の技が光る様な一品です。

冷凍してあった家庭菜園のパセリを散らしてあるのもポイント高いです。

「流石ですね。」

「ふふ、そう言う赤城さんもホットサンドなんてお洒落ですね。」

「いいえ、単に食いしん坊なだけですよ。」

ミートソースと千切りキャベツを二枚のパンで挟み、ホットサンドメーカーで挟んで焼く。

程好い焼き目が付いたと確認した所で外し、お好みの形で切る。

この時、パンの耳を切り落としたりする人もいるが、私としては香ばしさと歯応えを楽しむためにもそのままをお勧めします。

しかも、今はスープだったので尚更です。

「結構量が作れましたので、遠慮なく食べてくださいね。」

「ですね。では……」

「「頂きます。」」

こうして、私達の遅い夕食の時間は穏やかに……

「あー！二人だけ美味しそうなもの食べてるー！」

「何ー!? あたしらも混ぜろー！」

過ぎていかなかった。

ツマミを求めて食堂にやってきた足柄と隼鷹と言うこの鎮守府の二大飲兵衛に発見されてしまい、私達の穏やかな夕食は一転、飲兵衛二人の宴会に巻き込まれる事になってしまったのでした。

.....

さて、あの鳳翔さんの訓練開始から一カ月。

本日は珍しく食堂担当です。

そして、今日は金曜日です。

即ち……カレーの日です!!

海軍カレーと言われる多くの名作のカレー達が存在しますが……生憎と本鎮守府の台所事情的に、カレー粉及び各種スパイスから作ると大赤字になるので、市販の安売りしていたカレールーを使用したいと思います。

とは言え、手間を惜しむつもりはありません。

先ず、業務用スーパーで購入した豚のすね肉 20 kg をぶつ切りにし、塩胡椒と牛乳で揉んで寝かせておきます。

その後、定番とも言える人参、玉葱、ジャガイモを小口大の二倍以上のサイズで切り、ジャガイモは水に浸しておきます。

更にここで季節の野菜なんかも加えたら、季節感も出て来てとても良いのでしようが、今回は久々のカレーと言う事で、敢えてオーソドックスにしたいと思います。この時、玉葱のみは三分の一程別にし、一個当たり16等分を目安に切り、別に取っておきます。

そして、小さく切った玉葱以外の材料を圧力鍋に入れ、水がヒタヒタよりもやや少ない位（7割程度）まで入れ、此処にコンソメ一個とケチャップ大匙1、月桂樹の葉（ベイリーフ）3枚を加えて煮込みます。

この時、辛さを出したいなら、通常の洋風の香辛料ではなく、敢えて七味を入れてみると良いでしょう。

通常の香辛料だと、煮込むと辛さや香りが散る事もありますが、圧力鍋で七味や一味等を煮込むと辛さがより引き出されます。

また、ものが和風のものなので、ご飯にもよく合います。

香りを出したかったら七味、辛みを出したかったら一味がお勧めです。

今回は余り辛くてもいけないので、七味を少量のみ入れます。

煮込む時間は凡そ一時間半、それで豚すね肉を含めた全ての食材がトロトロにな

ります。

圧力鍋は余程使い方を間違えない限り、焦がす事も無いので、煮込み料理にはお勧めです。

但し、注意書きをよく読む必要があります。

加熱して圧力を逃さない状態で無理矢理開けると、圧力が一気に解放されて爆発して大火傷を負う危険性が高いからです。

おっと、話が逸れてしまいましたが、煮込んでいる間に付け合わせのサラダや福神漬け等を用意しておく、時間の無駄になりませんよ。

さて、トロトロになった鍋の中では玉葱はほぼ水分となり、具がヒタヒタになる程に水分が増えていきます。

此処に残った玉葱を加える事で、溶け切った玉葱と形の残った玉葱両方を味わう事が出来る訳です。

ある程度追加した玉葱に火が通った事を確認したら、ルーを投入します。

家庭用の鍋なら一箱か一箱半あれば大丈夫です。

業務用のものだと一箱当たりの量が多いので、量等もよく読んでから使いましょ

う。

最近ではたぐさんのカレールーがありますので、好みのものを複数掛け合わせるのもあります。

個人的なお勧めはゴール○ンカレーとバーモン○カレーですが、この二つは高いので、それら一箱に無印良品のルーを半箱加えるのが大抵の私のレシピですね。

さて、弱火でしっかりルーを溶かしつつ、火が通ったのを確認したら必ず味見です。

これは作る側の特権にして最終確認ですので、決して欠かす事の出来ない工程です（断言）。

「うーん…少し辛いかもしれませんね。」

いえ、私には丁度良い位なのですが、当鎮守府は駆逐艦の子達が大半なので、極端に辛いものや苦いものはダメなのです。

なので、こういう場合はミルクチョコやココア、ジャムに蜂蜜、すりおろし林檎等を加えて甘味とまろやかさを出すのですが、私はちょっと変わったものを使います。

「じゃーん、練乳です。」

意外に思うかもしれませんが、チョコよりも液状の分混ざりやすいし、甘味とまろやかさも上で使い易かったるのでお勧めです。

カレー八皿分に大匙位が適量らしいのですが…子供舌の多い我が鎮守府です。

駆逐艦以外の人達のために半分程を別の鍋に取り分けてから、残った分に容赦なく練乳を投下していきます。

大匙とかそんなめんど…げふんげふん！駆逐艦の子達のためにも、チューブを握り、割とドバドバと入れます。

そしてお玉で混ぜて味見をして…よし、辛みは消えました。

「さあ、赤城特製甘口&中辛カレーの完成です！」

なお、お米は玄米と七分搗き白米を五対五で、水を8割程度で炊いたものがお勧めです。

………

提督が事務仕事を終えて食堂に顔を出したのは、午後7時前の事だった。

この時間帯、食堂は最も混むため、大抵はもう少し後に来るように心がけているのだが……どうしても今日は早く来たい理由があった。

そう、今日は金曜日。

即ち、海軍（正確には日本国防軍海上防衛隊対深海棲艦対策本部付実働部隊）所属である当鎮守府でも、今日はカレーの日なのだ。

昼間は仕事が山積みでおにぎりで済ませたが、食堂から漂うカレーの匂いは常に提督の胃袋と脳髓を刺激して止まなかった。

そう、提督は大のカレー好きだった。

酒も煙草も博打も女もやらない提督だが、カレーだけは絶対に止められないのが彼だった。

（これ、絶対美味しい香りだ……！）

食堂に一步近づく度に強くなる芳醇な香りに、そう言えば今日は赤城が担当だったと思ひ出す。

余所の鎮守府と違い、腹ペコ勢ではなく、飯ウマ勢なうちの赤城には何時だって

感謝している。

彼女のカレーもそう言えばここ一カ月は食べていなかった事も思い出し、更に腹が減っていく。

そして、食堂に近づくと、不意に違和感に気付いた。

食堂が随分と静かなのだ。

はて、比叡や磯風が飯テロでも起こしたか、にしては異臭はしないなど疑問符を上げながら、食堂に入り……先程の疑問が解消した。

皆、一心不乱に食べていたのだ。

大皿に盛りつけられたカレーを。

駆逐艦も、軽巡も、軽空母も、重巡も、重雷装巡も、戦艦も、潜水艦も。

たった二人の例外を除いて、皆が一心不乱にカレーを食べて……否、貪っていた。「お冷です。」

フラフラと空席に付くと、空かさずお冷が出た。

出したのは割烹着を纏った鳳翔。

相変わらず、女将とかお母さんとかつい呼びたくなる雰囲気漂っている。

「辛口と甘口、並と大、付け合わせにサラダがあります。」

「両方、並で。」

メニューは一つ、カレーしかない。

そして、甘口と辛口、どっちも食べる。

片方を食い逃すなんて出来ない。

「はい、では少々お待ちください。」

下がった鳳翔さんを待つ間、周囲を観察すると、色々な食べ方をしているのが分かる。

駆逐艦達の多くが甘口と思われるカレーを美味しそうにパクついているのに対し、一部は辛い辛い言いつつもそれを楽しみながら間にサラダや麦茶、水や牛乳なんかを多めに取りながら食べている。

重巡や軽巡なんかは様々で、辛さもまちまちだ。

那珂ちゃんはサラダと交互に食べているが、神通はお手本の様に行儀よく、川内は生卵を落して黄身と白身を別々にカレーとご飯と絡めて食べてたりする。

重巡や軽空母の一部は辛口のカレーと辛口の焼酎なんかで一杯やっている。

戦艦勢は：パーティー用の大皿に好みのカレーとご飯、更に福神漬けを盛ってガツガツ食っている。

「お待たせしました。甘口と辛口の並です。」

「おお：！」

出された二皿の並盛のカレー。

片方は焦げ茶に近く、もう片方はやや白みがかっている。

これは確かに以前にも食べた事のある赤城のカレーだった。

その時は甘口のみだったが、やはり辛口のもあったのだ。

(いざ：。)

最初は敢えて白みがかった甘口の方だ。

ぱくりとご飯と共に口にすると、濃厚な豚と野菜の旨味、スパイスの香り、乳製品特有のまるやかさと優しい甘さが口いっぱいに広がる。

噛むと煮崩れ寸前の野菜が口の中で簡単に崩れ、やや固めのご飯とよく絡む。

よく噛んで飲み込み、更にもう一口食べると、今度はゴロっとした豚肉に遭遇する。

(柔らかい…！)

しかし、その肉塊は先程の野菜以上に柔らかく、舌に乗せただけでホロホロと崩れていき、ルーと共にご飯と絡み合い、脂の甘味を感じさせる。

付け合わせのサラダ（レタスに胡瓜、トマトだけのシンプルなもの）を食べて舌を一旦リセットする。

ドレッシングは好みだが、カレーと言うこれ以上ない程のドレッシングがあるので、敢えて何もかけないのもありだ。

そして、今度は辛口のカレーを食べてみる。

(お、意外と辛くない…?)

具材自体は甘口の方と大差ない。

精々が中辛位かと思っていたら…

(ん！後味が辛いな！)

タバスコや辛子、ワサビ等の様に口に入れた瞬間に来る辛みと違って、後味が辛い。

だが、何処か馴染みのある辛さであり、駆逐艦達と違って大人の味覚を持つ提督



「はい、さっきと一緒に良いですか？」

「お願いします！」

こうしてまた一人、無言でカレーを食す者が食堂に増えたのだった。

### 翌朝

「炊き立てのご飯で溶かしながら食べる二日目の冷えたカレー……これに勝る贅沢はそうそうありませんね。」

「赤城さん！オレにもそのカレー下さい！」

「ごめんなさい、これ最後の一杯なんですよ。」

後日、提督以下有志の嘆願により、二日目のカレーが別口で用意される事となった。

ああカレーが食べたい…美味しいカレーが…

↓よろしい、ならば己で作ろう。

↓現在の作者（毎週必ずカレー作成）

皆も手作りカレーを作ってみよう！

なお、作り過ぎて家族に怒られても、当方は一切の責任を負いかねます。



## 転生モーさんが逝く 3

ふう…やはりストレスをぶつけるにはSS書くのに限る

先の大侵攻の論功行賞の結果、モードレッド卿は円卓の騎士に加えられた上、領土を与えられた。

モードレッド個人としては円卓に加えられた事もあり、母に胸を張って報告できると思っていたのだが…与えられた領地が予想以上に問題だった。

何とその領土、以前の蛮族の侵攻によりペンペン草も生えない状態にまで荒廃していたのだ。

無論、領民も全滅か逃散して0である。

そして、本来なら与えられる部下も多くの者が拒否したため、騎士（知識を持った軍人・貴族階級）は0と言う目も当てられない状態だった。

辛うじてモードレッド個人に助けられたり、他に行き場のない兵士達なんかが一

緒に来る事になったが、早くも領地経営には暗雲がかかっていた。

「よろしい。ならば私に任せなさい。」

その情報を聞くや否や、半ば以上キレたモルガンが本気を出した。

具体的には、彼女に仕える従者や家来たちの中から魔術も使える人材を選出し、モルガンの与えた礼装や魔術により、限定的なものだが領地の緑化に成功し、大麦やライ麦、蕎麦と言った荒廃に強い救荒作物の栽培に成功したのだ。

流石はブリテン古来よりの地母神の系譜にして優れた魔術師である。

そして、ある程度生育環境を整えたのならば、後はマンパワーである。

幸いにも、元は単なる農民だった兵士達なので農作業には慣れている。

また、土が肥えて常識的に生育する作物があるのなら、実らない道理はない。

こうして、長期的に見て、何とか領地だけでも喰っていける土壌は出来たのだ。た。

とは言え、短期的にはやはり慢性的な食料不足のブリテンで、更に酷い場所だけあって、木の根すらない。

「よし、何か見つけてくるか。」

こういうや否や、モードレッドは三日ほど姿を消し、周囲を大変に慌てさせた。そして、戻って早々に母モルガンの下に赴き、彼女を仰天させる事となる。

「貴方：これで何処で見つけてきたの!？」

「いや、世界の裏側って少し捲れば行けるって聞いたから…。」

どんな確率か、或は神代最後の地である影響か、モードレッドは食料探しに世界の裏側、幻想種の住まう神代へと行っていたらしい。

その時に見聞きしたものはモルガンのみが知り、口外を禁止されたため、誰も知る事は無いが、それ以後モードレッドは三日に一度程度の割合で姿を消し、狩ってきた巨大な鹿や見た事の無い馬とも象とも付かない獣等の肉を兵達やモルガンが派遣してきた従者達と共に分け合い、作物が収穫されるまでの間の飢えを満たす事に成功した。

さて、何とか軌道に乗った領地経営の他にも、地方領主となったモードレッドの仕事はある。

だが、書類関係に関してはそもそも本人が苦手だし、余所と交易できる様な生産物もまだ無いし、観光地とかも無いので、内政関係の仕事はほぼ無い。

故に、仕事は食料関係の他には領地防衛及びキャメロット関係しかない。

とは言え、今は小規模な蛮族の襲撃が時折ある程度の小康状態なので、キャメロットへの直々の呼び出しは少ない。

まあモードレッド本人も用も無いのにキャメロットに長居する質でもなければ、態々自分を嫌っている他の騎士達の所にいるつもりも無いので、呼ばれない限りは外様らしく領地にいるのだが。

それは兎も角として、モードレッドの主な仕事は領地防衛&治安維持である。

しかし、蛮族一人は通常の兵士五人分の戦力を持ち、小規模でも100を余裕で超えている上、村々を襲う場合は根こそぎ殺して奪うので、見つけたら絶対に殺す必要がある。

お前らもう少しローマに集りにいった騎馬民族を見習えと言いたいが、それはさて置き。

問題なのは兵達の機動性である。

度々騎士王が軍を動員する度に食料を徴発して干上がらせたり、襲われている村を見捨てたりとしているが、そんな事が必要な程にブリテンは貧しいし、軍を動か

すには時間と費用がかかるのだ。

この問題はモードレッドにも当然押し掛かるのだが：

「よし。なら兵達を早く動けるようにしよう。」

お綺麗な騎士王とは違うのだよ！（モルガン並感）

と言う訳で、以前自分がでつち上げた魔術式ホバーバイク礼装を再設計、母の最終チェックを経た後に、遂にその量産化に着手した。

何せ材料は戦場跡を探せば幾らでも転がっているし、次から次へと新しいのがやってくるのだ。

材料の供給と言う点では、これ以上無い程に恵まれていた。

そして、一台完成する毎に兵士達に運転方法を教えていく。

最初はおっかなびっくりだったものの、取り敢えず寝起きしている領主の館兼宿舎（放棄された砦の改装品。防衛拠点としては及第点）から畑へと移動するのに随分楽かつ荷物も積めると分かると、使い出す者が増えていき、次々と運転方法を覚える者が出始めた。

兵達全員に行き渡る頃には既に皆運転を覚えており、農作業から戦場への出撃、

そして戦闘においても積極的に使用されるようになっていた。

何せタイヤ式と違って地面の凹凸に影響されず、常にスムーズな乗り心地が約束され、かつ馬力も大気に漂う神秘Ⅱ真エーテル及び乗り手の魔力を使用しているため、馬と違って飼葉要らずで一度乗り方を覚えれば簡単だ。

更に言えば、タイヤの様な摩耗しやすいパーツも使っていないため、整備は基本的に普通の乗用車並みにメンテフリーだったりする。

流石蛮族（の鎧兜）製、ものが違うぜ！

そんなこんなで、割とモードレッドの領地経営は上手くいていたのだった。

「ふむ、やはり早いな。此処は一つ、手を打ってみるか。」

だが、好事魔多し。

その様子を、花の魔術師は千里眼で仔細に渡り視ていた。

ブリテンの繁栄、キャメロットに集った栄光の騎士王と騎士達。

人類史と言う名のキャンバスに描かれた美しい模様をより長く見るためにも、マールンとしてはそれを終わらせる定めにあるモードレッドとモルガン、そしてランスロットは邪魔者でしかない。

無論、彼女らにも人理における役割と言うものがあるので簡単に排除したりはしないが、代わりの役目を持つモノが見つかれば、あっさりとそれは覆るし、余りにオイタが過ぎれば相応の対処をする事となる。

そして、今回モードレッド達が行った事は、彼に多少の行動をさせるには十分だった。

決して排除する訳ではない。

国外、故国であるフランスに領地を持つフランスロットを除き、普通の領地よりも榮えているから、相応に増税しようと王に進言するだけだ。

だが、軽くない負担を経営の始まったばかりの領地に早々に課すと言う事は、含むものがあると思われるもおかしくはない。

別にそれで良い。

その程度の事で早々に馬脚を現わす程度なら、その時が来るまで上手く遣り過ごせるだろうと言う考えもあった。

しかし、千里眼保持者であっても、時にはポカを冒す。

具体的に言うと、マーリンは進言をした後、モードレッドらの様子を見る事を

怠った。

例え最高峰の千里眼保持者と言えど、否、だからこそ能力のオンオフが効く。

故に、見る事を怠った場合のリスクは大きい。

千里眼による確定を止めた、人類史上の不確定な領域。

無論、他の千里眼保持者が視てしまえば確定するのだが、幸か不幸、この時のみ、他の千里眼保持者達も偶然視線を他に向けていたのだ。

そのため、事の次第を知ったマーリンは久々に本気で驚く事となる。

モードレッドの領地にいる兵士達、彼らがブリテンを襲う蛮族を超えた蛮族、即ちスーパー蛮族に成長した事を。

.....

時は少し巻き戻って未だ領地が食料難の頃、モードレッドは書物を紐解いたりしながら、何とか食料を工面できないか悩んでいた。

が、お綺麗な騎士王様が鞘が無ければ確実にストレスで心を病んだり禿げたりし

そんな程悩んでも解決できない問題を、転生者とは言えモードレッドが一朝一夕で解決できる訳が無い。

「となると、やっぱ他から持ってくるしかないよなあ。」

現状、ブリテンの民が辛うじて餓死していないのはランスロット卿の領地から食料を輸入しているからだ。

ローマ？内乱&内紛&内輸もめの果てに分裂して、それでもなお揉めてて使えないので、元植民地である筈のブリテンから逆侵攻受ける程度には弱体化しているので食料の輸入先としては敵国でもあるので無理だったりする。

まあそれでも流石はローマと言うべきか、この時代にしては驚く程の秩序を保っているのだが。

だが、それも所詮は小康状態と言うだけで、それはブリテンも同様だ。遠からず、破滅の時は来るだろう。

「そーいえば、ブリテンが滅ぶのはここが神代最後の地だからだっけ。」

世界から神秘が急速に失われ、単なる物理法則の方が幅を利かせるようになる。今はその過渡期、その終わりの頃に当たる。

これは星そのものの新陳代謝の様なもの、ブリテン島は最後に残った日焼けの皮みたいなのだ。

それを無理矢理聖槍ロンゴミアドで縫い止めている様なもので、多少時を稼いだ所で滅びる定めは覆す事は出来ない。

それこそ世界を滅ぼすつもりでやらなければ、ブリテンは滅び去るだろう。

「ま、そんな真似しないけどな。」

正直、興味が無い。

万物は何れ滅びる。

故にこそ生死を尊ぶ事が出来るし、永遠に生きた所で待つのは魂の腐敗であり、そうなる前にスパッと終わらせたい。

転生者故にモードレッドの死生観はさっぱりとしたものだった。

「あれ？そう言えば、聖槍で隔てた向こう側って、幻想種とかが沢山いるんだよな？」

具体的に言うと、神秘の満ちる幻想側の世界は要はウルクの様なものだと考えれば良い。

神々やそれに勝る魔獣等が跳梁跋扈し、人々を頻繁に脅かし、安心して暮らす事もままならない。

そこまでのものではないにしろ、それでも人類よりも遥かに強大な幻想種が多数、普通の動物の様に生息しているのだ。

具体的には、真正の竜種と言われる（には成り立ちから疑問符が付く）ファヴニール級の竜種がちよつと人里離れた森で探せば見つかる程度と言えど程狂ってるか分かるだろうか？

近い世界があるとすれば、それこそモン○ンみたいな世界しかない。

で、この幻想側の世界だが、通常の物理法則世界からテクスチャ（表面の模様等）を一枚剥がせばすぐそこに存在すると言う。

即ち、間違いなくブリテンよりも肥沃な自然環境が割とすぐ傍にあると言う事になる。

「よし、行ってみよう。」

運が良ければ、何がしかの食糧が見つかるだろう。

危険性とかもつとよく考えろと言いたいが、決意してからの行動は早かった。

フル装備に身を固め、母の寄越してくれた従者たちに一声かけてから、人目の付かない場所で煩雑かつ制御の難しい空間干渉系の魔術で色々と試行錯誤していく。はつきり言って徒労となる可能性の方が大きいのが、何もしないよりはマシだろう。そんな考えで色々弄り回していた時の事だった。

「あ、やべ、ミスった。」  
ついうっかり。

本当に初歩的かつ些細なミス。

だが、この時代のブリテン島と言う神秘的に不安定な環境で空間干渉系魔術の失敗は、極めて危険だった。

「う、わ!？」

パタンと、まるで空間が隠し扉の様にひっくり返り、モードレッドを向こう側へと引きずり込んだのだ。

これがモードレッドが三日もの間、誰にも気づかれずに行方を眩ませる事の出来た真相だった。

こうして、偶発的に幻想世界へと渡る術を見つけたモードレッドは三日に一度程

度の割合で、食糧確保のために渡航もとい渡界するようになるのだった。

「うわぁ、でっかいドラゴンなりい…。」

「G r r r r ……！」

初遭遇した現地生物は大型の竜種だった模様。

「ドラゴンの肉、獲ったぞー！」

そして、初狩りした現地生物もその竜種でした。

なお、竜種の血を浴びた上にその肉を喰らったためか、原典よりもやや低かった魔力がスキル…竜の心臓により劇的に上昇する結果となった。



## 転生モーさんが逝く 4

何とか栽培に成功した穀物類の全てを増税によってキャメロットへと納める事となったモードレッド以下兵士達だが：当然と言えば当然だが激怒した。

兵士達の中には、元々騎士王の政策でそれしか手が無いとは言え、故郷である村や町を切り捨てられた者、或は徴発による飢饉で全滅した者が多くいた事もあり、この行動に本気で怒りを燃やしていた。

それと同じ位モルガンもまた妖艶な笑みを浮かべてマジギレしており、キャメロットを騒乱に陥らせる様な騒ぎの種を早速ばら撒いていた。

そして、我らがモーさんと言うと：

「まー、当然だよな。」

騎士王達からすれば、モルガンと仲の深すぎるモードレッドとその麾下の兵士達（殆どは身寄りの無い者か騎士王に恨みを持つ者）が一致団結し、ブリテンに勢力を築くとか面倒くさ過ぎる展開はごめんなのだ。

何とかヴォーティガーンを討ってブリテン島を統一し、喧嘩を売ってくるローマ

を殴り、襲い来る蛮族に手を焼きながら対処しているのが今のブリテンだ。

更に慢性的な飢饉、滅亡の確定された未来、終わりの見えない戦乱と、亡国フラグが林立している状況で、それがもう一つ増える様な事はあってはならない。

そんな事せずに普通にコミュして厚遇でもすれば芽は潰えるのだが、そんな余裕は騎士王とその義兄、後マスター・アグラヴェインには無く、唯一それを出来る余裕と視点を持つ半夢魔はやる気が無い。

そもそも食料が慢性的に不足しているので、ある所から持っていくのは当然と言えは当然なのだが。

と言う訳で、モードレッド個人としてはそこまで恨みは無いものの、それでも立场上良い顔が出来ないのだった。

「ま、食糧はまた取ってくれば良いし、うじうじしないで頑張ろう！」

「「「「うーすっ!!」」」」

穀物が無ければ肉を食べれば良いじゃない。

そんな感じで、今まで三日置きだった世界の裏側での狩猟を、モードレッドは二日に一回に増やした。

また、一度当たりに獲ってくる獲物の量も多くなり、少々だが他の素材（Not 食料）等も入手し、モルガンを始めとした魔術師らを狂喜させた。

「もーこの子だったら！これ以上私の好感度を稼いでどうするつもりなのかしら！」  
流石うちの子は違いわね！と大喜びしているが、他の子供達は眼中にない辺り、この人も大概である。

さて、モードレッド自身はと言うと……何か妙な事になっていた。

ファヴニールを討伐したジークフリートは悪竜の血を浴びた事により身体が鋼鉄よりも硬くなり、更に鳥や獣の言語を理解できるようになったと言う。

では、元々龍種の因子を持ったホムンクルスたるモードレッドが竜種を殺し、その血を浴び、血肉を喰らった場合、どうなるのだろうか？

結果として、モードレッドは大幅に強化された。

鎧と合わせての防御力はジークフリート同様になり、生身であっても今までの鎧と同等。そして、あらゆる鳥獣の言葉を理解できるようになった。

そして、今までは機能していなかった竜の心臓が稼働を開始、騎士王よりも劣っていた魔力面の不備が此処に来て同格になったのだ。

だが、それはあくまで最初の一頭の結果に過ぎない。

モードレッドは二日置きに世界の裏側でのリアルモンハンの狩猟を行う際、必ずドラゴンを狩り、その血肉をその場で焼いて喰らい、その血肉の匂いで集まった他の幻想種を狩って持ち帰っていた。

即ち、ほぼ毎回一頭の竜種、それも最も栄養価と魔力が籠った内臓を好んで食べていた。

と言うのも、臓物は狩人だけが食べられる栄養豊かつ傷みやすい部位である事を知っていたので、母や部下達の分を多くするためにも、内臓のみを多く食べていたのだが。

毎回粗塩と香草を振り掛け、ウエルダンになるまで焚火で焼く頃には、程よく他の獲物がやってくるので、時間の有効活用でもあったりする。

で、そんなしょっちゅう竜種の肉を喰うとか魔術師なら卒倒する様な事をしていたモードレッドだが……

何故か肉体が急成長していた。

年の頃、十代半ばか、下手すると前半に見られていた身体（それでも実年齢より

も上)が、なんと十代後半程度にまで成長していったのだ。

なお、バストサイズもアップしたが、母モルガンの様な豊満なそれではなく、並サイズの美乳だった。

ホムンクルス故に早熟⇨短命であるとは言え、流石にこの成長スピードはおかしいと思ったモードレッドは、急遽モルガンの邸宅に戻り、診察してもらった。

結果、体内で竜の因子が急激に活性化したため、肉体が全盛期目掛けて急成長したとの事だった。

これは、モードレッドが竜種を食べ過ぎたことによる因子の活性化、そして肉体の神代への適応によるものだった。

ブリテン人は消えゆく神代最後の地に住まうだけあって、真エーテルに対して高い耐性を持つが、それは真正正銘の神代の人間のものに比べれば低い位だ。

故に、普通のブリテンの民が世界の裏側にいった場合、そのまま適応できずに衰弱するだろう。

現代人？普通の魚が深海で生きられるとでも？

しかし、竜の因子を持つ騎士王やモードレッドは例外としてそのまま生活できる。

だが、それはあくまで生活できると言う範囲で、決して竜種の肉を常食するなんて非常識な真似をしてもOKと言う訳ではない。

そんな無茶振りにモードレッドの肉体、正確には大量に蓄えられた竜の因子は庇えてみせたのだ。

この成長により単純なスペックの向上のみならず、神秘的な面においても貯蓄量が大幅に上がり、より竜種に近づいたと言える。

「わあ、母上に似てきましたね！」

「ええええ、本当に私に似て可愛らしいわ！これならどんな男でも振り向くわよ！あ、でもキャメロットにはロクデナシばかりだからダメね。」

「そうだ、母上。鎧や服を新調しないと。もうサイズが合わなくて…。」

「服の方は仕立て屋に任せるとして…鎧の方はもう一から作っちゃいませうか？」

モードレッドの鎧、持ち主の傷を癒す超頑丈かつ重量も凄まじいこの一品は元々前の体格のモードレッドに合わせたもの。

現在の手足がスラリと延びた活発さを感じさせる美少女となったモードレッドに

はどうやってもサイズが合わなかった。

「母上、この図面見てくれますか？」

「あら、これは……へえ……新造するんじゃないかって作り直すのね？」

「今の鎧は竜の血を何度も浴びて頑丈になってますから、放置するのも勿体ないじゃないですか。だから打ち延ばして主装甲部分に使って、他の部位はもっと軽めの鱗状装甲にしようと思うんです。」

「ちなみに素材は？」

「竜の鱗！他諸々です！」

（世の魔術師が見たら発狂するわね……）

モードレッドの鎧、それは持ち主同様幾度も龍種の血を浴び、対竜特防とも言える特性を獲得していた。

また、モルガンが施していた癒しの力も強化され、韃程の出鱈目ぶりではないとは言え、鎧の一部を持っているだけで傷が癒え、更に鎧そのものにも弱いながらも自己修復機能を獲得していた。

「あ、剣は新調しましょう。ほぼ毎日使い捨ててますし。」

最初に使っていた騎士王から叙勲式で授けられた騎士剣は、基本的に使わずに執務室で飾られている。

今現在使っているのは蛮族の使用するそれをある程度鍛え直したただけのもので、モードレッドの臂力で龍種を始めとした幻想種の肉へと振られると、一時間もせぬ内に折れてしまうのだ。

そのため、聖剣クラスとは言わないが、頑丈な武器が欲しかった。

「そちらの方は私が考えておくから、今は鎧に専念しましょうか。」

「はい、母上にお任せします！」

そして、鎧の再設計へと入った。

正確な採寸と図面を作成した後、今までの鎧を打ち直して各パーツへと成形、更に合間に入れる鱗状装甲や内当て等の作成に入っていく。

「…やっぱり角は嫌？」

「頭重いからやです。」

「そう…。」

「だから軽くて頑丈なのにしみましょう。」

「！」

「うーん：私の身体が丈夫過ぎて、鎧の意味があんまり無い…。」

「モードレッド、逆に考えるのよ。防具以外の用途を加えれば良いって。」

「！」

「これ、劣化品でも良いからある程度量産できませんかね？」

「部下達に配るの？」

「ええ、行く行くは世界の裏側に皆で行けるようになったら良いなと思うんですよ。向こうに逃げ込めば誰も追って来れないし。」

「！」

こうしてMAD過ぎる母子の魔改造により、唯でさえオーバースペック気味だった鎧は新たなものごっつい宝具として生まれ変わった。

「完成です！これは後の時代にまで語り継がれる事間違いないです！」

「ええええ！これならあのカメラロットのロクデナシ共も驚くでしょうね！」

「ふふふふふ！領地に戻ったらこれで早速蛮族退治&神代ハンティングです！」

「貴方が嬉しそうで良かったわ…でも…。」

「はい？」

「先ずは寝ましょう…。」

「はい…。」

さて、MADな母子の手によって生まれ変わった鎧、その名も「竜達「アーチャー・オブ・ダイナソー」の骸鎧」は…：はつきり言っておかしかった。

サイズこそ変わっているが、全身を以前と同じく白銀の地金を持つ装甲で覆い、そこに主の再生や自己修復の付与魔術をかけられているのは同じだ。

オリックスの様な振じれた細い角が額の辺りから正面に向けて生えているのが正面から見た際の一番の違いだろう。

背面から見ると、そこには妙な箱型のユニットが付いており、それから横に伸びる様にマントの様な板状の装甲が延びている。

また、一見分かり難いが、スカート状のサイドアーマーの内側には背面のユニットを小型化したものが内蔵されている。

この時点で分かる人もいるだろうが、敢えて説明すると…：この鎧、鎧？は飛べるのだ。

元はホバーバイク（材料・蛮族）の機能を持たせようとしたのだが、「それよりも飛びましょう。そっちの方が早いから。」と言うモードレットの我が儘により、ホバー機能を発展させた魔力式ジェット噴射機構（大気中・使用者の魔力・真エーテルを吸収した後に術式を通して推進力へと変換）の実用化、そして安定翼及び予備の小型エンジンの搭載により、今まで魔力放出で無理矢理カッ飛んでいたのに対し、遥かに効率的な高機動化に成功したのだった。

また、出力の調整により、地表付近をホバー飛行する事も出来る。

無論、再生や自己修復等の鎧そのものの今までの機能も損なっていない。

だが、最大の問題が一つある。

「母上…。」

「何？」

「兜、私の意思で外したりは…。」

「ダメよ。悪い虫が付くわ。」

この後、無茶苦茶説得して、何とか許可を挽ぎ取ったモードレッドだった。

.....

さて、モードレッドがモルガンの下で装備の更新を行っていた頃、領地では兵士達がホバーバイクと共に額に汗しながら土を耕し、蛮族を狩っていた。

彼らにとっては最早ルーチンワークの日常だが、それでも飢える事の無い日々を約束されている点に関しては、ブリテンの他の地域よりは遥かにマシだし、治安も（犯罪者がいないと言う意味で）良かった。

そんな彼らだが、モードレッド程ではないにせよ、多くの幻想種の肉を喰っているため、その身体は徐々にだが神代の環境に対する耐性を身に付けつつあった。

もしこのままいけば、何の備えもない状態であっても、世界の裏側へと潜り、モードレッドと共に幻想種ハンティングをこなせるようになるかもしれないが、それはまだ先の事だ。

「兄貴、また蛮族共が現れやした！」

「何い!?! てめえら、急いで支度しな! 三分で出るぞ!」

「[[[[[へい兄貴、ー!]]]]」

だが、彼らが日々の農作業と蛮族退治、そして栄養（神秘）豊富な食事により、急速に汗の匂いでむせ返る程の体育会系マツチョメン集団になっている事を知る者は、直接の上司であるモードレッドとモルガンの派遣した従者達を除いていない。

モーさんの口調

対モルガン：基本敬語だが、偶に子供っぽくなる。

対部下達：腕白坊主。

対キヤメロット：敬語のみ。余計な会話はしない。



## 転生モーさんが逝く 5

さて、何とか畑を維持して育てた作物をキャメロットに総取りされながらも、蜜族を見つけ次第皆殺しにして素材に変換し、領地経営のための書類仕事をしつつ、二日おきに世界の裏側に潜ってモンハンする生活が続く中、唐突にモードレットはキャメロットへの呼び出しを受けた。

はて、指定された税はきっちり納めている筈だが…。

そう思いつつ、急ぎと書状にあったため、鎧の機能を生かして飛行したモードレットは最速でキャメロットへと向かった。

だが……

「ん？よっと！」

キャメロットの方角から、唐突にカマイタチの様な実体の無い刃が音速で飛来してきたのだ。

それもかなりの精度で連射する形で。

モードレットはそれを手からガンドを放って迎撃し、その余波と反動で多少揺れ

たものの、飛行に支障の無い範囲で収めた。

やがてキャメロット上空に到達すると中庭に着陸しようと急減速、そのまま真下へと重力降下し、魔力放出で降下速度を殺しながら着陸した。

だが、着陸した当の中庭はというと、多くの騎士達によって殺気立っていた。

「皆、どうかしたのですか？」

「いや、これは卿が原因だろう。」

殺気立った騎士達に割り込む様に現れたのは円卓の双壁たる湖の騎士、NTRで有名なランスロット卿だった。

「突然城目掛けて正体不明の存在が飛んできたら、誰だって迎撃します。だから私は悪くない。」

ポロロンと無駄無しの弓ことフェイルノートを弾きながら現れたのは、先程見事な地对空狙撃を披露してみた円卓のNTR騎士その2ことトリスタン卿だ。

「ああ！先程の見事な狙撃はトリスタン卿でしたか！こちらこそ驚かせてしまい申し訳ありません。急に王よりキャメロットへ帰参せよと書状を受け取り、こうして急いできたのです。他の方々も申し訳ありません。ですが、今はどうか王への謁

見を優先させて頂きたく存じます。」

「そのために私が来たのです。さあモードレッド卿、王がお待ちです。」

こうして、モードレッドの飛行鎧の初のお披露目は徒らに多くの騎士達を刺激する形で終わった。

.....

急遽召集されたモードレッドだが、その会合はあっという間に終わってしまった。

と言うのも、モードレッドがやらかした？からだ。

「大規模な蛮族の軍勢が迫っています。○○のルートから……」

「あ、すいませんベディヴィエール卿。それさっき蹴散らしてきました。」

王の執事役を務める円卓一の良心たる女顔の隻腕の騎士の説明を、しかし最年少のNew兜の騎士がとんでもない言葉でぶった切ってきやがった。

「モードレッド卿、それはどういう意味か？」

「ここに来る途中、蛮族の群れと遭遇したため、見逃す訳にもいかず、これを撃滅

しました。」

報告が遅れてしまい、申し訳ありませんと頭を下げるモードレッドに、謝罪とか良いからとアグラヴェインが報告をせっつくと、トンでもない内容が飛び出てきた。曰く、一々切り結ぶのも面倒な数だったため、雲の高さから自身を矢弾として加速し、ぶつかっていったのだ、と。

如何に異常な生命力と物量、そして敵を殺すためなら喜んで死ぬと言う死生観を持った蛮族と言えど、隕石に等しいモードレッドの突撃に対抗する術は無かった。しかも、一度だけなら少数が減るだけだが、それが幾度も自力で再上昇し、また落ちてくるとなればもうどうしようもない。

着弾点で待ち構えようにも、それ即ち隕石の衝突を直に食らう事であり、辛うじて被害範囲の外から攻撃しようにも、余程の素早さかつ臂力を併せ持たねば、下手な竜種よりも遥かに頑丈な今のモードレッドに有効打を与える事は出来ない。

しかも、鎧も肉体も時間経過と共に回復する鬼畜仕様だ。

蛮族達にも聖剣の様な対軍・対城宝具があればワンチャンあったかもしれないが、そんな都合の良いものがある筈も無い。

そう言う訳で、ブリテンに襲来する筈の蛮族の大規模攻勢は頓挫したのだった。「……………事情は分かりました。モードレッド卿、貴方には後日然るべき恩賞を与えるので、今日の所は部屋の居室に下がっていてください。」

「は！それでは下がらせて頂きます！」

部屋の空気を読まず、否、読んだからこそモードレッドは直ぐに円卓の間から立ち去った。

その後、騎士王は呆然とした円卓の騎士の面々を前にして、困惑を表に出した顔で問うた。

「…それでは、今後どうするべきか意見を募りましょう。」

如何に騎士王でも、今まで自分達が散々梃子摺ってきた相手があっさりとした一人に壊滅させられると、吉報であるにも関わらず、困惑を隠す事は出来なかった。

……………

丸々一晚程の会議の結果、モードレッドは幾つかの尋問を挟んだ後、騎士だけで

なく貴族としての号を正式に送られ、また今後一年の減税及び所領の拡大（無人の荒野のみ）、そして領民（壊滅した村の生き残りや身寄りを無くした老人や子供、戦傷者等）を預かる事となった。

もしモードレッド麾下の者達が一人でもここにいれば罵声を浴びせていた事だろうが、それ以上におかしいのは最大の戦功者に対して尋問を行った事である。

そう、捕虜等に行う尋問だ。

無論、武装解除等はせず、貴賓室でそういった事の得意なアグラヴェインがモードレッドに問い、モードレッドも特に隠し立てなく答えたために特に問題が起きる事も無かった。

しかし、これから内政に注力していくに辺り、モードレッドが最大の武功を上げた事は大きな問題に発展する可能性があった。

と言うのも、モードレッドはモルガンに近すぎる。

モードレッドの影響力の拡大はモルガンの影響力拡大であり、今まで虎視眈々と王位篡奪（モルガンからすれば奪還だが）を目論んで来た相手の勢力が増す等、騎士王とその忠義の者達にとっては問題にしなければならない。

本人達に既にそんな気が無いとしても、騎士王側としては警戒しなければならぬ事案だった。

そのため、このような褒賞とはとてもではないが言えない様な中身の無い所かマイナスなものとなったのだった。

正直、ここまでしたら刺されても文句は言えないと思う。

だがしかし、このモードレッドは正史のそれではなく、ニューアーマードモーさんである。

「は！了解しました！今後も忠勤に励みます！」

そんな理不尽な事を言い渡されても、それだけ言ってあっさり引き下がったため、寧ろそんな対応をした騎士王に疑念の視線を向ける騎士達も多くいた。

今後を見据えてのものとは言え、騎士王は論功行賞を怠った。

それ即ち、他の騎士達にも「自分達にもまともな報酬が与えられないのではないか？」と言う疑念を植え付ける事となった。

この疑念は後に、ランスロットと王妃の不倫の際に盛大に爆発する事となる。

.....

さて、さくつと褒賞（と言う名の嫌がらせ）を受けたモードレッドは事の次第を全て気の許せる者達に話した。

結果は、静かなものだった。

兵士や従者達の中から既に騎士王とブリテンへの忠義は失われており、褒賞等何所吹く風で、既にキャメロットに対して何の期待も抱いていなかった。

そして、モルガンはもっと酷かった。

完全な能面、無表情で、静かにモードレッドに事実確認をした後、漏れ出る怒気にビビりあがったモードレッドを下がらせた。

で、下がらせたと同時に、モードレッドが生まれてから今まで控えていたブリテン滅亡計画を本格的に再始動する事を決意した。

そんなブリテン滅亡フラグがピンピンに乱立し始める中、モードレッドは領主としての仕事、即ち領民を食わせるために仕事を始めた。

新しい領民達が来るにはまだ時間があり、幸いにも減税によって多少の余裕が出

来たので、モードレッドはこれを機に肉体が神代の真エーテルに慣れてきた兵士達を連れて世界の裏側へと狩りに出かける事を決意した。

それでもしないと領民らを食わせる事は出来ないかと判断したのだ。

蛮族もほぼ駆逐されたので、最低限の治安維持・領地防衛の出来る面々を残して総出で狩りに出、農作業は新しく来る民達に任せる予定だ。

なお、事務仕事の出来る人員は増えていないので、従者らは暫くデスマーチになる予定だ。

さて、世界の裏側に潜るに辺り、兵士達の装備の更新を行う事となった。

現状の装備のままでは行っても死ぬだけだからだ。

先ず、外道ホバーバイクは今までの蛮族製ではなく、装甲を下位の竜種（ワイバーンやレッサードラゴン）の素材を用いたものに交換、外部の神秘を吸収する機能も神代に合わせて調整した。

また、一人を操縦手、一人を射手として二人乗りにしたニケツ仕様も作成し、用途を広めた。

兵達の鎧も下位の竜種の鱗を用いたスケイルアーマーに更新し、兜はフルフェイ

スのガスマスク型になった。

これには勿論訳があり、竜の因子を持つモードレッド程には彼らは真エーテルへの適応性を持っていない。

そのため、それを少しでも補うために呼吸する際に吸ってしまう真エーテルを少しでも減らすための礼装がこのガスマスク型兜なのだ。

また、ちょっとした趣味として全体的なカラーリングは森林迷彩だが、隊長のみ右肩が赤く塗られ、兜に通信機能が追加されている。

武器の方も竜の牙や幻想種の角等を用いた投槍や弓矢、大型の弩等を用意し、攻撃力を大きく上昇させている。

そして、モードレッドも取り敢えずの間に合わせとして、巨龍の角から削り出した大剣を担ぎ、準備は整った。

「よし、全員揃ったな。これから我々は世界の裏側、神秘の息づく幻想世界へと足を運ぶ！」

今日、これからモードレッド率いる兵士達は遂に世界の裏側へと突入する。

「向こうではどんな不調が起きるか分からん！何かあれば即座に報告せよ！良い

か、獲物を担いで凱旋するまでが遠征だ！それまではくたばるんじゃないぞ！」

「「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」」」」

「よし、しゅっぱーっ！」

「「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」」」」

こうして、彼らは遂に本格的に幻想薄れ行くブリテンの民から、神秘渦巻く神代の住民へと成ったのだった。

なお、モーさん所の兵士一人につき蛮族10人分に匹敵する模様。

## 転生モーさんが逝く 6 後書修正

「ふう……。」

領地からキャメロットへの道中、飛行中に積乱雲に遭遇して落雷を受け、鎧が不調を来したためにモードレッドは急いで緊急着陸を行った。

とは言え、雲の上から地表に突撃して無事なモードレッドなので、命に別状はない。

ただ、鎧の方が装甲は兎も角、術式の方に若干影響が出たので、少し調整しないと飛行が安定しないが。

そして、一仕事終えた後、近くにあった湖で汗を流す事にした。

急げば半日で到着するが、時間はもう夜であり、飛ぶのは夜が明けてからのほうが良いと判断し、また術式の調整で集中して作業したら結構汗をかいてしまったので流したかったのだ。

「あ〜〜お湯に入りた〜い。」

前世の様に気軽に熱い湯に入る事は出来ない。

頑張ればできるが、そこまでの手間をかける位だったら、桶に湯を用意して、浸した布で身体を拭いた方が良い。

なので、こうして身体を水に浸からせるのは本当に久しぶりだった。

そんな気を抜いてリラックスしていた時だった。

不意に、がさりと繁みから音がした。

「!」

咄嗟に近くにあった短剣を手に取り、繁みの中の何者かへと飛び掛かる。

暗殺者か賊かの判断はつかないが、兜の下の顔を見られたからには記憶消去、最悪は口封じもあり得る。

だが、繁みの中にいた相手は何の抵抗もせず、モードレッドにされるがままに押し倒され、馬乗りの体勢になった。

「何か言い残す事はあるか？」

視線に乗せた暗示の魔術が効かない事から、かなり高い対魔力の持ち主だと分かる。

加えて、筋肉の付き方や豊富な魔力からも相当の実力者である事が伺える。

この場で逃せば、どんな災いになるか分からない。

酷だが、この場で消す事を決意しながら、最後の問いを投げかける。

せめて少しでも未練を残さずに逝けるようにとの、彼女なりの配慮だった。

「美しい……。」

「え……。」

「貴方は、本当に美しいのだな。」

それが円卓最後にして最高の騎士との出会いであると、この時はまだ知る由も無かった。

……

蛮族の大規模攻勢は、あの一戦（と言う名の虐殺）から無くなり、ブリテンには漸く平和が訪れた。

そして、そこからは楽しい楽しい○内政タイムである。

すると、今まで戦時だからとスルーされてきた処々の問題が浮き彫りとなり、更

に問題ばかり起こす騎士と言う職業軍人兼貴族もまた内政を担当する文官達と衝突し、即ちランスロットやトリスタン等の円卓問題外組と内政を担うケイやアグラヴェイン等とそれを慕う者達との対立が深まっていった。

そんな中、最後の円卓の騎士となる少年がキャメロットへとやって来た。

その名をギアラハット。

この世で最も清らかな騎士、そして最高の騎士の称号を持つ数少ない者の一人であり、ランスロット卿の実の息子でもあった。

(荒れてるなあ。)

兜の中で誰も分からない事を良い事に、モードレッドは溜息を吐いた。

自分がこのキャメロットへと連れてきた少年が今、この常よりもギスギスした空気に関係しているかと言うと少々複雑な気分になる。

あの夜、自分の事を綺麗と言った少年を結局殺す事が出来なかった。

初めて自分に向けられた言葉に面食らい、ついつい殺気が散ってしまったのだ。

その後は素っ裸である事を思い出し、急いで衣服と鎧を纏い、この場で見聞きした事は他言無用として別れたのだった。

今思えば、あそこでギャラハットを殺していれば、歴史は不可逆の変化を迎えていただろうが：そんな事をすればどんな揺り戻しが来るかも分からない。

元よりこんな国と心中するつもりは無いので、適当な所で離脱する予定なのだ。この国には是非自分以外の要因によって勝手に滅びて頂きたい。

何より、今の自分は嘗て母と己一人を心配すれば良かった頃と違い、多くの命を背負っている。

それは一国の重みとそう大した差は無い。

少なくとも、己の命を賭けるに値するとは思っている。

だから、そんな継る様な目をするんじゃない！

お前の面倒まで見てられないんだよこの覗き魔！

え、王の命令？ マーリンも賛成した？

そんなー。

と言う訳で、ギャラハッドは王からの課題を熟しつつ、モードレッド預かりとなったのだった。

.....

そして、ものの数カ月で全ての課題をクリアし、騎士王より「最高の騎士」の称号と最後の円卓の席を与えられ、ギャラハッドは晴れて父親であるランスロットと並んだ。

しかし、両者の仲は遅々として縮まらなかった。

まあ当然だろう。

認知した場合、あの明らかに精神が向こう側に逝っちゃってる姫ことカーボネックのエレインと結婚する羽目になる。

それは王妃と不倫関係にあるランスロットとしては絶対に避けたい事態だろう。更に言えば、今現在ランスロットはキャメロットにいない。

王妃に盛大な罵詈雑言を受けて発狂、今現在全裸で森にて野生動物みたいに過ごしており、従兄弟のポールス卿が捕獲に苦労しているらしい。

その事にギャラハッドはかなり落ち込んだものの、「やる事無いな？無いか。よし、領地に戻って内政するぞ。手伝え。」とモードレッドに首根っこを猫の子の様

に掴まれ、領地へと連行されていった。

「あの、モードレッド卿？もしかしてこのまま飛ぶんじゃない？」

「勿論だ。大丈夫、お前なら行ける行ける頑張れ頑張れやればできるやればできる自分を信じて私が信じてお前を信じて。 (ワンブレス)」

「それ絶対ダメな奴じゃないですか!? やっぱり普通に地上から行きましょうよ！僕だけ後から行きますから、飛ぶのはモードレッド卿だけにして」

「口開くな、舌噛むぞー。」

この様に、世間知らずのお坊ちやまは順調に世間の荒波に揉まれていきました。何とか魔術で空気抵抗を減らし、刻一刻と奪われる体温をモードレッドに抱き着いてその熱を貰う形でどうか5時間近くの飛行を終えたギャラハッドだが、彼の苦難はこの程度では終わらない。

「領主！食糧の配給が一部で滞ってます！早急に食料の確保を！」

「よし、レッドシオルダー隊はハンティングに行くぞ！総員準備しろ！10分以内だ！」

「「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」「」」」」

「あの、僕は…」

「ああ？お前も参加に決まってるんだろ。ほら携帯食料と毒消しと解体用セット一式だ。これ持って付いてこい。」

「あの、こんな大人数で何処に…」

「ハンティングだ。」

「ア、ハイ。」

そして、ギヤラハッドもまた世界の裏側にて洗礼○を受ける事となった。

「何でこんな大量に幻想種がいるんですかー!？」

「お、今日は大量だな。各員、連携を崩すなよ！飲み込まれるぞ！」

「ああもう！後で説明してくださいね！」

だが、流石は若年とは言え円卓の騎士。

ギヤラハッドは敢えて幻想種の群れの中へと飛び込み、ヘイトを稼ぐ事に成功、手に持つ盾で攻撃を凌ぎ続け、他の面々が状況を逆転させるまでの時間を稼ぎ切っ  
てみせた。

この行いが評価され、初の狩りでありながらもその日のMVPとして選ばれ、モー

ドレッドから景品が贈られる事となった。

「さあMVPにや一番栄養あつて足の早い部位を喰う権利がある。」

「いやあの、これ竜の心臓だよね？食べて大丈夫なの？」

「つべこべ言わず食えやオラあ！」

「もがゴッ!？」

「どうだ？」

「…驚いた。普通に切つて焼いたものより、丸焼きにした方が肉汁や風味（＝旨味）が逃げてなくて美味しい。それに独特の食感も楽しい。」

「それに加えて厳選した香草と岩塩使つてるからな。今のブリテンじゃ絶対食えない贅沢品だぜ。」

「そっか、こういうの食べてたからあんな綺麗に育つて…」

「死ね。」

「ごめんなぐはあ!？」

そして、皆で獲物を担いで戻つてからは領民達と共に無礼講な焼き肉パーティーとなる。

男も女も、老人も子供も、怪我人も病人も、この時ばかりは皆笑顔で二日に一度の贅沢を楽しむ。

なお、病人や胃腸の弱い者には果物やスープ、煮物等が振る舞われる。

そのどれもが幻想世界から材料を確保したもので、今のブリテンの民では絶対に出来ない贅沢な食事だった。

「モードレッド、君はいつもこんなのかい？」

「まあな。」

少し喧騒から離れた場所で、円卓の騎士二人は黄金の林檎で作った果実酒を嗜みながら寛いでいた。

「何故ここまで？アサー王とて、ここまで民のために心を砕きはしない。貴方が彼らを死なせたとしても、それは仕方のない事とも取れると思うが……。」

「じゃあギヤラハッド。お前はこの光景が間違いだって言えるか？」

大きな焚火を囲んで、領民や兵士達、従者達が皆料理や酒を片手に笑顔で騒いでいる。

中には酔っ払って喧嘩までしているが、それとて殺し合いの雰囲気ではないし、

皆がヤジを飛ばしながら観戦している。

静かに酒を楽しんでいる者も、自分達のようにこの光景を見ては嬉しそうに目を細めている。

「いいや、例え間違いがあつたとしても、彼らの笑顔は、幸福は本物だ。」

「だろう。何時かは終わるかも知れんが、それでも今この瞬間の幸せは本物だ。」  
「だったら、それで良いんだよ。」

難しい理屈なんていらなんだ。

そう呟いて、モードレッドは果実酒をストローで啜る。

「って、モードレッド。君、さっきから結構飲んでるけど大丈夫？」

「だいじょーぶだいじょーぶへーきへーき。」

「うん、もうそこまでにしようか？ほら、お水上げるからそのお酒こっちに寄越して。」

「ぐびー」

「一気!? 倒れちゃうよ!？」

「おえー。」

「そして流れる様に吐瀉!? あわわわ誰かー誰かー!？」  
直後、何とか兜を外して顔と口を洗って寝台に叩き込んだ模様。

こうして、ギアラハッドは騒がしくも暖かなモードレッドの領地へと溶け込んでいった。

それは幼少期の恵まれない生活とは全く違う、人の温もりに満ちた暮らしで。そんな中に自分がある事が出来るのは、泣きそうな位に嬉しかった。

だが、幸福は何時までも続かない。

この生活が半年を迎えた頃、遂に終わりの始まりが告げられた。

ギアラハッドへと、王命が下ったのだ。

曰く、「聖杯を探索し、キャメロットへと持ち帰れ。」

ギアラハッドはただ一人、これが自分の運命だと諦めながら、最早戻れぬ旅路に

出たのだった。

---

ギャラハッドⅡ天然・ラッキースケベ・エロ&恋愛耐性無し・箱入りお坊ちやま  
モードレッドⅡTS Choroin・ガキ大将・MAD・エロ&恋愛耐性無し  
現時点では互いに自覚してる相手への感情は「気の置けない友人」です。  
だがしかし、失いそうになって初めて本当の思いを自覚するのって……良いと思  
わない？



## 転生モーさんが逝く7

聖杯が発見された、と言う噂が広がった時、キャメロットの騎士達は誰もが自らがそれを獲得する栄誉を得ようと遮二無二出発した。

結果、一部の内政組を除いた殆ど全ての騎士達が聖杯探索に赴き、キャメロットの軍備がガタガタになると言う事態に陥った。

これに対し、騎士王は急遽、実力があり、尚且つ後からでも騎士達に追いつける速さを持つモードレッドを招集、騎士達にキャメロットへと戻る様に伝えさせた。

同時に、最年少でありながら最高の騎士の称号を持ったギャラハッドに聖杯探索の任務を正式に伝えた。

聖杯探索の目的、それは聖槍によって癒えない傷を負ったペレス王の治療及びブリテン救済のための手段だった。

命令を受託した二人はキャメロットの騎士達を探しながら、聖杯探索へと赴いたのだった。

とは言え、既に二人ともキャメロットには含むものがある事もあり、出会った騎

士達は強制送還するのではなく、あくまで騎士王の言葉を伝えるに留めた（面倒臭かったとも言う）。

「トリスタン卿、騎士が誰もいなくなって王が困っています。急ぎ帰還を。」

「私は悲しい。騎士たる者、榮譽を求めて何が悪いのか…：それにあなたも王へ含む事はあるでしょうに。」

「その点は否定しませんが…：まあ確かに伝えたので、もし他の騎士達に会ったら、王が帰ってくる様に言っているとお伝えください。」

「分かりました。モードレッド卿も、ギャラハッド卿も、道中お気をつけて。」

こんな感じで、大半の騎士は伝言を伝えると帰ったものの、ごく一部の騎士はそのまま独自に聖杯探索を続行した。

しかし、彼らの誰一人として資格はなく、故に聖杯へと辿り着く者はいなかった。何故なら既にただ一人、聖杯を獲得する資格を持った者がいたから。

……………

モードレッドとギャラハッドの二人に加え、パーシヴァルとボールズを加えた一行はもう間もなく聖杯を獲得すると言う所まで来ていた。

と言うのも、道中にギャラハッドが入手した盾が原因だった。

この盾は白地に赤い十字が描かれており、資格無き者が持つと白騎士を召喚し、殺すか一生ものの傷を負わせられると言う呪いの盾だった。

旅の途中にギャラハッドがこの盾に出会い、丁度今までの盾が草臥れていた事もあって手に取った。

すると、現れた白騎士がギャラハッドに「その盾は貴方のものだ、この世で最も清らかな騎士よ。その盾の導くままに進みなさい。」と告げて消えた。

それ以来、盾の赤十字の中心から方角を指し示す様に光が放たれ、ギャラハッドとモードレッドはその方向に進んだ。

導かれるまま、二人は乙女を塔へと拉致監禁する7人の騎士を殺害して乙女達を解放し、パーシヴァルやボールズと合流、塔から解放されたパーシヴァルの妹であるディンドランも交えて旅を続けた。

その際、ディンドランは魔法の船や生命の木の苗を譲り渡し、そして自らが天使

より告げられた託宣を4人に告げた後、自らの髪を材料に態々傷んでいたギャラハッドの剣の帯を作って贈った。

更に進むと、癩病にかかった夫人のいる城に到着、城の住人より治療のために処女の生き血を要求されるも「それよりも先に私に治療させろ！」と怒るモードレッドにより夫人の治療開始、更に他にも感染者がいなか調べられ、疑いのある全員に激マズの治療薬が投与され、余りの不味さに悶絶する者が多数出たが無事解決した。

そして、実は自分の生き血を提供しようとしていたディンドランにモードレッドが怒った。

「追い先短いパーさんのために、お前みたいな子が命を散らす必要は無い！パーシヴァルだって泣くだろうが！自己犠牲が常に正しいなんて事は無い。特に病氣なんて、適切な知識と技術があればどうにだって出来るんだ。」

これにディンドランは謝罪し、一行は更に進んだ。

そして、遂に盾が示す最後の場所、ギャラハッドの故郷であるカーボネック城へと到着したのだった。

だが、此処で事態は急変した。

一行が漁夫王ことペラム王（ギャラハッドの曾祖父）の招きで城の広場へと入った時、不意に部屋全体に、否、城そのものに仕込まれた魔術が起動したのだ。

「ぐ、アアアアアアアアアアッ!!」

同時、その中心にいたギャラハッドが苦痛の叫びを上げ始める。

「ッ！どういふつもりかペラム王！一体我が友に何をした！」

「何、君達の目的を叶えようと思うたまでの事。」

癒えぬ傷を負い、心まで病んだペラム王は骸骨の様に落ち窪んだ眼窩からぎよろりと目を動かし、自身の曾孫が苦しむ様を見ていた。

「我が祖が獲得した聖杯。しかし、祖は悪用を恐れてそれをこの土地に封じた。ただ一人の例外、神の子本人を除いてそれを得られぬ様に……」

朗々と妄執に塗れた老人が、種明かしの様に経緯を語り始めた。

「だから、我ら一族は聖杯を手にするため、神の子に並ぶ聖なる者を生み出そうとしたのだ。何代も、何代も掛けて。そして完成した母胎に相応しき騎士の種を注いで完成したのが『この世で最も清らかな騎士』だ。」

術式から発せられる魔力が増大し続けている。

超弩級の魔力塊が顕現しようとしているのだ。

ギアラハッドを器にして！

「だが、聖杯とは神の子の死した時の血を受けたが故に聖杯となった。それに贖作故に血を受けただけでは足りぬ。『この世で最も清らかな騎士』を贄にしてこそ聖杯は降臨するのだ。」

ガギン！

そこまで聞けば十分だと言う様に、モードレッドは漁夫王へと剣を振るったが、それは寸前にポールス卿によって防がれた。

「成程、貴様はそちら側か。」

「…ブリテンには聖杯が必要だ。」

つまり、キャメロットの連中は、少なくとも首脳部は全て知っていてこの旅に向かわせたのか、とモードレッドは判断した。

実際はそんな事はなかったのだが、この時ばかりは割と視野が広く温厚なモードレッドをして、焦りと怒りで早合点してしまった。

「ハアッ！」

「ぬ！」

「パーシヴァル卿！」

「急いでギアラハッドを助けろ！時間は私が稼ぐ！」

そして、背後で剣戟が響く中、モードレッドは何とか魔力の奔流を掻き分けながら、ギアラハッドのいる術式の中心地点へと辿り着いた。

「ギアラハッド！待っている、直ぐに助ける！」

だが、既にギアラハッドの変質は致命的な時点まで進んでいる事は、魔術に詳しいモードレッドには一目で分かってしまった。

父親に似た薄紫の髪の毛は色素が抜けて白く、肌も血の気が消えて病人の様に白く、その瞳もまた色素を失って血の様な赤となっていた。

そして、手足の末端から徐々にエーテルとなって解けて…否、無機物へとゆっくり変質していた。

「いや、もう無理だろう…。」

「諦めるな！お前がこんな所で死ぬ筈がない！」

(糞、変質が止まらない！どんだけ強固な術式を組んでやがる！)

「一つだけ、一つだけ伝え忘れてたんだ……。」

「言うな馬鹿！それは死亡フラグだ！」

ゆっくりと、ゆっくりと、唯の器物へと変化していく中、既に苦痛を感じる機能すら無くなったギャラハッドは、しかし消える寸前の灯の最後の煌めきとばかりに、本当に伝えたかった事を口にした。

「僕は、君と、ずっと一緒にいたかった……恋人に、夫婦になりたかったんだ……。」  
その言葉を聞いた時、モードレッドは兜の下で唇を噛み切る程に歯を食いしばった。

「馬鹿野郎！そんなのは、二人っきりの時に言え！」

肉体の変質はもう手遅れだ。

これは間違いない、最初からそうなる様に作られていたのだ。

嘗ての自分と同じ様に。

こいつは、本当の意味で自分と同じ者だったのだと。

こいつに感じていた言い様のない近しい感覚はこれが原因だったのだと。

此処に来て、モードレッドは漸く気づいた。

（なら、魂だけは持って帰る！）

聖杯が顕現しようとしている。

それは一つの神話の集大成にして、莫大な星の魔力の受け皿であり制御機構だ。そんなものから発せられる魔力の奔流に、人では抗う術は無い。

だが、此処にいるのは円卓の騎士が一人、既に父である騎士王を超える性能を獲得し、数多くの竜種を始めとした幻想種を屠り、食らってきた人型の竜種。

この程度の魔力、この程度の圧力、この程度の脅威で、

（お前を、諦められるかあああああああ！）

頑丈な筈の鎧が砕け、再生が追い付かない。

最も頑丈な兜すら割れ、全身から出血する。

過剰過ぎる魔力に当てられ、体内に過剰なまでに蓄積された竜の因子が暴走を開始し、身体が竜化していく。

だが、止まらない。

術式へと介入し、ギャラハッドの魂を儀式の材料ではなく不純物として認識さ

せ、その部分のみを奪い去る。

元より聖杯が顕現すれば消え去る定め。

認識の改竄を行い、本来なら干渉できない第二要素たる魂を聖杯の顕現によって溢れる魔力を逆手に取って干渉に成功する。

そして、聖杯が完全に顕現する直前、

「獲ったああああああああ!!」

城中が光に包まれる中、確かにモードレッドの声が響いた。

---

アインツベルン家は皆ホームンクルス

↓大本の製作者は誰？

↓聖杯関連で、聖杯がめっちゃ欲しいだろう連中の可能性

↓そう言えばギヤラハッドの実家連中が色々やらかしてゐるし怪しいな

↓せや、こいつら悪役にしてネタに使おう！

と言う訳でカーボネック勢は悪役になってもらいました。

ギヤラハッドは元々聖杯獲得のための生贄たるホムンクルスorデザインベビーって事で。

こうするとマッシュと益々共通点が出るし、後世のアインツベルン家がカーボネックから分派した連中だとすれば色々辻褃が合うと考えた結果です。



## 転生モーさんが逝く 8

聖杯の降臨と共に瓦礫となったカーボネック城の跡地で、二人の人影があった。一人は円卓の騎士が一人、パーシヴァル。

もう一人はほぼ全ての装備を喪失した円卓の騎士だった者、モードレッド。

二人は自分達以外が死に絶えた場所で、今後の事を話し合った。

「良かったのか、ポールス卿を逃がして。」

「奴には奴の役割があるし、聖杯は取り上げた。ここで殺しても良い事は無い。」

「卿がそう言うのなら信じるが…失敗だったのか？」

「いや、ギリギリ成功、かな。」

そう言って、鎧を失った素の手で、己の下腹をなぞる。

その手つきには慈しみが感じられ、まるで母親が己が胎の中の子を労わる姿にも似ていた。

「あの瞬間、何とか私の中にギャラハッドの魂を封じ込めた。」

「おお、それでは何とか蘇生も…。」

「いや、無理だ。」

悲しさや悔しさを込めて、モードレッドは首を横に振った。

「私が取り返せたのはあくまで魂だけ。肉体も精神も無い状態じゃ、その人格と記憶を復活させる事は出来ない。」

「それでは……。」

「あいつは、死んだ。オレの最高の親友は、此処で殺された。」

ポトリと、不意にモードレッドの顔から何かが零れた。

「モードレッド卿……。」

「オレは今日まで、何時か王はオレに叛意が無いと分かってくれれば、何時かは他の円卓の騎士達と同じ様に遇してくれると、本当に信じていたんだ……。」

パーシヴァルは心底の驚愕を感じながら、しかし、何も声をかけてやる事が出来なかった。

いや、何と言えば良いのか分からなかった。

王とよく似た容姿の、しかし王よりも成長した女騎士。

鎧を砕かれ、半裸に近い姿になっても、彼女から艶やかさを感じる事は無い。

何故なら、今彼女は大事な人を喪失した事実には悲嘆し、止め処なく涙を流していたからだ。

「だが、もう信じはしない。あの王はオレを信じる気等端から無かったのだ。国を生かす事だけが大事で、臣下や民がどの様な思いを抱えてようと構いはしない。奴の言うお綺麗な奴らだけが生き、それ以外の生き死には利用する事しか考えていない。」

それは違うと、パーシヴァルは言えなかった。

何せ彼の知る騎士王とは、基本的に必要と判断すればどれ程冷徹な判断でも下せる王で、それでいて自分は決して怒りも何も表に出さないからだ。

そして、下手に外敵が消えた昨今、王の眼は内側に向いている事も知っていたために。

「オレはキャメロットには二度と戻らない。もう二度と、オレは奴の騎士となる事は無い。」

「そうか…だが、私はまだキャメロットの騎士だ。」

ギロリ、とモードレッドの眼光がパーシヴァルを射抜く。

その瞳孔は爬虫類の様に縦に裂け、人間のそれとはとても思えない。

異形への変化は全身にも広がっていた。

四肢には鱗と爪が生え揃い、鋭利な刃を形作っている。

尻からはしなやかな尾が生え、警戒する様に左右にゆっくりと振られている。

そして、背中からは鎧の残骸を貫く様に竜の翼が生え、第二の腕の様に構えられている。

「待て待て。争う訳じゃない。どの道誰かが事の次第を報告する必要がある。」

「…その後はどうするつもりだ？」

「私として此度の事には思う所がある。私の思い焦がれた円卓は既に無いと分かった。報告を終えた後、機を見てキャメロットを去るよ。」

「そうか…。」

パーシヴァルは生粋の貴族であり、父は円卓にも属したペレノア王で、母も大貴族の出だが、既にどちらにも亡くなっている。

そして妹は聖女と言っても良い清らかさと強さを持ったディンドラン。

だが、彼の家族は最早誰もいない。

父は親殺しの仇としてガウエインに殺された。

母は病気で、妹は先程の崩壊で。

如何に礼儀正しく温厚温和なパーシヴァルとて、いい加減に我慢の限界だった。聖杯等に掛ける漁夫王や騎士王の妄執によって、二人は大事な人を失ったのだ。

「それはそうとモードレッド卿。」

「卿はよせ。オレはもう円卓を抜けた身だ。」

「そうか、では只のモードレッドよ。お願いだからそろそろ服を着てくれ。」

爆心地の中心にいたモードレッドは先も言ったが半裸だ。

竜へと変化しかけた部分を除けば、騎士王とモルガンに似た妙齡の美女（処女・美乳・男勝り）の裸など、円卓の女好き連中（ランスロット・トリスタン・マーリン等）がいたら一も二も無く飛び掛かってくださいと言っている様なものだった。その後、瓦礫の中から布やら食料やらを漁ってから、それぞれモルガンの居城とキャメロットに行くために別れ、そして二度と会う事は無かった。

.....

事の次第を全て聞いた時、モルガンは無表情だった。

全ての激情を飲み込んで、その上で彼女は己の最愛の娘に問うた。

「モードレッド、貴方はどうしたいの？」

「殺す。惨たらしく殺す。確実に。」

そして、その娘たるモードレッドも、一度泣いてすっきりしたから、感情に任せ  
て暴れ回る様な事は無かった。

母親と同じ様に全ての感情を飲み込んで、その上で己が目的をはっきりさせ、そ  
れを実現するためのプランを冷徹に練っていた。

「そう、ならもう容赦はしなくてよいわ。私がお膳立てしてあげるから、貴方はお  
腹の子の事に集中しなさい。」

「へ？」

お膳立ては分かる。

こと謀略と言う点に関してはモルガンはブリテン島一と言って良い。

だが、お腹の子に関しては何かおかしい。

「人形を作れて事ですか？」

「モードレッド……いえ、気付いてて現実逃避してるのかしら？」

はて、うちの娘はこんな鈍かったか？とモルガンは思ったが、そう言えば自分と違って恋愛経験とか一切無い、本当に初心な箱入り娘だったわね、と思い直した。

あの親とは似ても似つかない程に誠実かつ温厚篤実なギャラハッドならばうちの子の花婿にギリッギリ合格だったし、余りにもじれたい程ゆっくりと思いを育てていたから余計な茶々も入れなかったが、これはもう少しそっち方面の教育もしておくべきだったか、と今更ながらモルガンは後悔した。

「貴方が浴びたのは大本から零れたものとは言え、真正の聖杯の中身よ？貴方が身体の中に退避させたギャラハッドの魂は、その際に半ば受肉したわ。」

「それって……。」

「そう、処女懐胎よ。」

基督教の最も有名なエピソードの一つ、聖母の処女懐胎及び受胎告知。

聖母マリアが聖霊によって神の子をその胎内に宿した時、三大天使ガブリエルが現れ、それを告げる絵画は世界中に幾つもある。

この時代では後世の話だが、あのレオナルド・ダ・ヴィンチも受胎告知を題材にした絵画を描いている。

「元々貴方は私と言う地母神の系譜に連なる訳だから、こうした生命を生み出す神秘とも相性が良いのでしょうけど……それに加えて、魂は神の子の劣化コピーであるギャラハッドのもの。状況としては十分ね。」

「マジかよ。」

つい礼儀作法も忘れてモードレッドの口から驚愕が零れた。

何せ漸く淡い恋心（小学生並）が芽生えたと思っただら、いきなり母親になりました☆である。

そりゃー驚きもするだろう。

まあ確かに状況としてはこれ以上は無い程に揃っている。

加えて言えば、基督教は既存の神話や伝承の良い所取りな合成神話である。

唯一神たる聖四文字も、元はしがない山の神とも言われるが、そこから多くの要素が融合して現在の基督教の唯一神となった。

となると、この時代に存在する既存の各神話・伝承・伝説の内側にある地母神の

系譜たるモードレッドが、魔法使いの釜を元祖とする聖杯の魔力を浴び、その体内に匿ったギャラハッドの魂を赤子として受胎してしまう、と言うのも割とあり得る話だろう。

無論、そんな要素を持った者達が一同に会した上、高濃度の魔力を浴びたり、清らかな魂を体内に入れたりする状況等、人類史を見渡しても殆ど在り得ない訳だが。「と言う訳で、貴方はこれから暫く狩りも鍛錬も禁止。ギリギリ魔術の研究と執務はして良いから、子供が生まれるまで大人しくしてなさいな。」

「うう、分かりました…。」

どーすんだこれ…とモードレッドは頭を抱える事となった。

その後、兜も鎧も剣も全損したので作り直し、生まれてくる子の名前や産着なんかも用意する必要があるので、悩む暇は無くなったとか。

その頃の蛮族兵士さん達

「何、大将が妊娠!？」

「やる事やってたのか…。」

「バツカおめえギヤラハツドの坊主と一緒に旅してたんだから、そらそういう事もしてたんだろうよ。」

「だが、あの坊主は殺されちゃったらしいな…。」

「やっぱりキヤメロットの連中か…。」

「聖杯を取るための生贄だとさ…。」

「おい、滅多な事は言うんじゃない。」

「だがよう、あのあんちゃん、大将の隣で笑ってたじゃねえか。お綺麗な事しか出来なかったのが、大将と一緒にになって怒って笑って生きてたじゃねえか。オレらの半分も生きてねえのによ…。」

「泣くな、泣くなよ…。」

「…泣く暇があれば、狩りに出るぞ。オレ達の仕事はそんだけだ。」

「隊長…しかし…。」



現在のモーさん領の状況

・領民：大体一万人程。噂を聞いて他所から逃げてきた人、口減らしで追い出されて運良く辿り着いた人、貴族の横暴で追い出された人等が追加され、増加傾向にあり。

なお、噂を聞いて現れた夜盗の類は侵入早々に狩り殺された模様。

・政治：モーさん筆頭にしつつ、モルガンとその従者達、後兵士達の隊長格ななかで運営されてる。

慢性的に人手が足りないのです、簡単な計算や文字の勉強等を領民に施し、少しでも人手を増やそうと涙ぐましい努力をしているが、大抵の子供達は兵士達に憧れてそちらに流れている。

・軍事：初期の兵士達の多くは小隊長以上となり、日々夜盗や草の討伐等の治安維持、幻想種狩りや貴重素材の採取等の食糧確保をしている。

領内の人々の尊敬を集める職場だが、最近ではモーさん（大将）とギャラハッド（若旦那）が離脱して、ちょっと人手が足りない。

・兵士：新兵ですらフォーマンセルで、幻想種由来の素材を用いた武器を一般採用している。どっからどう見てもモンハンです本当にry

領民のため、家族のため、モーさんのため、今日も彼らは外道式ホバーバイクVer2.0に跨り、世界の裏側を疾走する。

例え失敗しても、死んでなければ治してくれるモルガン様やモーさんがいるし、例え家族を残して殉職しても必ず面倒見てもらえるので、彼らの忠誠心は常にMAX（＝死ぬ瞬間まで首になっても喰らいつく）。

隊長達は皆肩当てをモーさんの象徴である赤で染め、レッドショルダーと言われて尊敬を集める。

更に偉くなると不必要な角や棘なんかが増えるぞ。

超大型種を狩る時は100を超える兵士とそれを補佐する倍以上の補給部隊が必要となるが、最近では上位の竜種の吐息を再現した射撃武器での飽和攻撃で割と簡単に仕留めている。

極稀に神霊としての要素も持った龍種等にも遭遇するが、モーさんが以前やったのを参考にお祈り&お供えで戦闘は基本回避している。

なので時々、本当に時々だが助けてくれたりもするぞ！

自分で書いててなんだが：何だこの蛮族（困惑）

## 転生モーさんが逝く9

これまで散々描写していたモードレッドの領地、そこは騎士王の領地の中で最も蛮族の侵攻に晒され、不毛となった筈の土地にある。

ここはブリテン島の中でもイングランドに最も近い地域の一つであり、それなりに広くはあるが、前述の理由で草木一本すら珍しい程の荒廃ぶりである。

しかし、ここ数年程でそれは大きく様変わりした。

契機はその土地がモードレッドの所領となってからだった。

彼女はこの土地を見て直ぐに「あ、これ手に負えない奴や」と悟った。

故に、己の魔術の師匠であり、最愛の母親であるモルガンに丸投げしたのである。

そして、自分は厄介払いされた兵士達の装備や食料、住居の確保に奔走した。

これが功を奏して、現在のモードレッド領は肥沃とはいかないまでもブリテン島の中でまともな農作物が収穫可能な唯一の土地となったのだ。

他の地域は精々ジャガイモ、時々他の野菜と塩、酢位が食料で、それ以外はランロットのフランスの領地からの輸入に頼り切っていたのだ。

これが後にランスロットと王妃の不貞の際に多くの騎士達が彼に味方する理由の一つとなったのだが、それはさて置き。

モードレッド領の城であり、行政の中心である元砦の周辺には対蛮族用の城壁が設置され、更にその外に街が広がり、更にそれを囲う形で第二城壁が存在し、その外側にライ麦や大麦、蕎麦やぶどう畑等の農地が広がっている。

家畜は生ごみや糞尿処理のための豚と鶏位だが、それとて他の国内の領地では騎士王の御膝元であるコーンウォールでしか見られない程なのだから、どれだけ豊かだったかが伺える。

だが、家畜を除いた作物の7割は国に税として徴収され、街の人々の口に入る事は無い。

普通はここで不平不満が溜まり、下手を打てば反乱が起こる恐れもある。

それが分かっている人々もいるが、しかし彼らは多少の鬱憤は溜めるものの、そうカッカする事は無い。

何せ彼らの主な食料源は他にあるのだから。

「レッドシヨルダーズが帰って来たぞー！」

第二城壁の上にある物見台から、見張りの兵士の声が響き、鐘が鳴らされる。

同時に、農作業を終えていた人々は直ぐに住居に戻り、大急ぎで支度を始めた。子供達は皆駆け足で狩猟部隊の通るだろう大通りへと走っていく。

皆、その顔には一様に笑顔や興奮と言ったプラスの感情が出ていた。

「帰って来たぞー！今日は大物の竜だー！」

「ヒャア！果物もあるぞー！」

「ハッハー！今日は焼き肉パーティーだぜエツ!!」

巨大な荷車を10台ものホバーバイクで牽引してまで運搬してきたのは、全長50mを優に超える巨大な竜だった。

ワイバーンと同様に翼と融合した前肢を持つその巨体は、今や無残にもその鱗や角、爪や牙は全て碎かれるか、削ぎ落され、嘗ての雄姿は見る影もない。

そうした鱗や角、爪や牙等の破片が後方の荷車に積められ、王城の物資搬入口より魔術師達の工房へと搬入される事となる。

「すごい！おっきー！」

「さっすがれっどしよるだーだー！」

巨大な竜とそれを狩った街のヒーロー達を前にして、子供達は大きいにはしゃいだ。「おう、ちびっこ共。果物があるけど食うか？」

「「食べるー!!」」

子供達にとって街の人々を守り、食糧を狩り、そして自分達に甘い果物をくれる人達。

子供達が懐くのも当然の事だった。

「よし、広場で解体するぞ！」

「手隙の奴は道具を持って集合だ！」

「城の魔術師も呼んでくれ！心臓と血液が不足気味らしいからな！」

騒々しくも、決してマイナスの方向ではない。

斜陽を迎えている筈のブリテンにおいて、ここだけは豊かさや平和が同居していた。

「よし、とうちゃーく！」

「解体急げー！鮮度を落すなよー！」

そして、荷車が街の広場に到着・停止すると、手に手に道具を持った人々が既に

集合しており、まるで角砂糖に群がる蟻の様に竜へと群がり、手際よく鱗の削がれた竜の遺骸を解体し始めた。

そうして解体された肉は街の人々の、兵士達の食糧として行き渡っていく。

また、この解体に参加できる程の体力や道具、技量が無い人々や他の仕事で参加できなかった人々には、保存食として加工された通常の幻想種の干し肉等（香草と岩塩で味付け済み）が与えられる他、この場で残った部位を焼き、兵士達と共に振る舞われる。

そのため、街の人々は決して全ての肉を取る事は無い。

寧ろ、解体してそのまま焼き肉パーティーを始める始末だ。

見れば、既に酒（ビール、エール、葡萄酒等）を飲み始めている者までいる。

「領主様のお成りだぞー！」

その言葉と同時に、ざわりと広場の雰囲気が変わる。

皆が慌てて口元を拭ったり、酒瓶を隠したりする中、遂にモードレッドが姿を現した。

しかし、もしこの場にキャメロットの面々がいたとしても、彼女をモードレッド

とは思えないだろう。

普段は重厚な鎧兜によって姿を隠している事もあるが、今の彼女はそれだけ可憐だった故に。

普段は後頭部で適当に結っている金髪はこの時は優雅にストレートに流し、薄らと化粧も施している。

母親と騎士王によく似た美貌は妊娠してから更に磨きがかかり、活発な美少女ではなく美女としての大人の花香を身に纏っている。

白地に所々赤い紅葉の刺繍が入ったそのドレスを纏い、静々と歩く姿は誰もが思い描く貴婦人のそれであり、誰もがほう…とその美しさに溜息を吐いた。

「お、肉だけでなく酒まであるじゃん。オレにもくれ！」

しかし、それもモードレッドが口を開くまでである。

いつもと同じく領主様（中身ガキ大将）はドレスのまま焼き肉パーティー会場となった広場にズカズカとハイヒールのまま歩み寄り、手近な屋外コンロで焼かれていた骨付き肉を手袋をつけたまま、大口を開けてガジリと齧り付く。

そのままモグモグと大胆に咀嚼する様は領民をして「全然変わんないなあ…」と

思わせるものだった。

「大将大将。」

「ん？ おお中隊長じゃん。今回のMVP、お前だつてな。後で蜂蜜酒（巨大蜜蜂より採取）届けるから、楽しみにしといてくれ。」

「あ、ありがとうございます。所ですね、後ろを向いた方が…。」

「んー？」

モグモグと肉を頬張りながら、モードレッドは後ろを向く。

そこには、極上の笑みを浮かべたまま、額に青筋をおっ立てるモルガンの姿があった。

「母上、これはですね、滋養を付けようと…。」

「モードレッド」

「ア、ハイ。」

言い訳を口にしようとするものの、名前を呼ばただけで一瞬で黙らされる。

先程まで肉と酒でガハハと笑っていた人々も、今は静かに距離を取って動向を見守っている。

だって怖いし。

「お腹の子のためにも、今は自室で大人しくしていなさいと、酒なんて以ての外だと言いましたよね？」

「ハイ。」

「だと言うのに、勝手に抜け出してお肉まで下品に食べて……。戦場なら兎も角、普段はもう少しおしとやかにと常々教えている筈ですよね？」

「ハイ。」

「なら、私が言いたい事も解りますね？」

「ハイ。」

「よろしい。これ以上私の手を煩わせない様に。」

「ハイ、モウシワケアリマセンデシタ。」

そして、モードレッドは恐怖で固まったまま、静々と元砦現領主の館へと戻っていった。

「さて……皆、少し邪魔をしてしまったわね。今後もあの子が子供を産むまでに何かやらかしそうになったら、遠慮なく私に告げる様に。……イイワネ？」

「「「「ハイ！」」」」

その場にいた全員が背筋を正して返答する。

此処で断ろうものならこの街から居場所が消えるため、皆必死である。

それだけ領主の母親であるモルガンは、領民達から恐れと尊敬を集めていた。

「お詫びに私の蔵から秘蔵のブランドーを出してあげるから、皆で楽しんで頂戴。」

「「「「あざっす！」」」」

この様に、モードレッド領は安定性と言う点では未だ若干問題があるものの、概ねよく回っている。

一回位書きたかった日常回

次回、ブリテン崩壊

君は騎士王の涙を見る。

## 転生モーさんが逝く 10

さあ終わりが始まった。

この時のブリテンを、キャメロットの全てを俯瞰している者がいるとしたら、「まるで櫛の齒が抜けていく様だった」と言う程に、あつと言う間に崩壊していった。先ずはトリスタンが王の冷徹な治世に耐えられず、「王は人の心が分からない」と告げて去って行った。

そこから先は本当にあつと言う間だった。

既にペリノア王はロット王を殺したとして息子のガウエインに殺された。

その息子のパーシヴァルは聖杯探索の全容を告げ、「この世で最も清らかな騎士を贄としてまで、私は聖杯を求めないし、その様な行いをする者を主君とする訳にはいかない」と告げ、円卓を去った。

何だかんだでそれなりに役立つマーリンは湖の貴婦人らの一人にして彼自身の恋

人にして弟子であるニミュエによって、妖精郷へと監禁された。

そして、余りの狼藉を見かねたアグラヴェインによって、遂にランスロットと王妃ギネヴィアの不貞が発覚してしまう。

そこから先はもう本当に、石が坂を転がり落ちる様だった。

不貞を暴かれ、激怒したランスロットによって、アグラヴェインは斬り殺された。ボールズとパロミデスは嘗て受けた恩義から、多くの騎士達と共にランスロットに付いた。

そして、何とかランスロットを説得しようとは非武装で向かったガレスとガハリスは錯乱状態だったランスロットによって他のガウエインの兄弟達と共に斬殺されてしまった。

騎士王一派にはガウエイン、ケイ、ベディヴィエールが。

ランスロット一派にはボールズとパロミデスが。

他にも多数の有名無名の騎士達がそれぞれの兵を率いて二派に別れ、両派の主の意向すら無視して熾烈な争いを開始した。

此処に、栄光あるキャメロットの円卓の騎士達は、完全に二つへ分断されてし

まった。

それを、妖妃モルガンは嘲笑と共に眺めていた。

.....

「流石ですね、母上。」

「ふふふふふ……まあ私が本気を出せばこんなものよ。」

本格的に己の拠点及び工房をモードレッド領に移したモルガンは、愛娘の尊敬の言葉を鼻高々にして受け取った。

「引越したの方も無事完了しました。後は私達が移動するだけです。」

「本当、聖槍様様ね。流石と言うべきかしら。」

妖艶に嗤う様は、正に傾国の美女のそれだ。

しかし、この国を割った姦計も、モルガンにとってはまだ下拵えの段階でしかない。

「あの目障りな半夢魔ももう監禁されてるし、邪魔者はいない。」

つまり、後は詰みに持っていくだけである。

「では、私も支度をしますね。」

「本当に良いの？ 態々あの小娘の前に出ていかなくても良いのよ？」

ヨタヨタと、臨月を迎えたお腹を抱えながら歩く娘に、モルガンは労わりを込めて提案する。

事実、既にブリテンは終わっている。

このまま何もしなくても衰退して老衰する様に死にゆくだろう。

それに止めを刺すのはモルガンの私情だ。

「それも有りです。ですが……」

ギリリと、モードレッドの歯が知らずに砕けかねない程に噛み締められる。

その脳裏に写るのは今までの理不尽な扱いか、騎士達の仮想敵を見る視線か……

それとも、大切な人を失ってしまった時の事か。

「決着は、自らの手で付けたいのです。」

モードレッドもまた、己が私情によって自らの手で止めを刺す事を誓っていた。

.....

「何だこれは……？」

騎士王一派がフランスまで撤退したランスロット一派を執拗なまでに追撃し、何とか騎士王とランスロットの間で停戦の合意が結ばれ、ブリテンへと帰還した。

しかし、彼らを待っていたのは、ワイバーンを始めとした多くの幻想種に蹂躪される祖国の姿だった。

何とか幻想種を蹴散らしながら、キャメロットを目指す騎士達。

だが、彼らはあくまで対人戦争を主として戦ってきた者達。

キャスパリーグやヴォーディガン程の理不尽な能力を持っていなくとも、空と大地を半ば以上覆う程の物量を持った怪物達の相手は専門外だった。

また、このブリテンの地が彼らにとって既に生育に適さない程に神秘が薄れている事に加え、ぺんぺん草ですら殆ど無い状態では、食べられるものは限られている。即ち、人間やその家畜である。

主にワイバーン等の飛翔可能な幻想種らによって、城壁や距離に縛られない襲撃

により、各地に配されていた治安維持用の部隊は瞬く間に全滅していった。

彼らが守っていた、その地の住民らと共に。

誰も彼もが、飢えた幻想種達の餌食となっていた。

「ワイバーンのブレスには水を被れ！避ける時は走るのではなく伏せろ！決して孤立するな！狙われるぞ！」

だが、彼らは往時の半分以下となつてなお、このブリテンを圧倒的物量を持った蛮族達から守り続けた騎士達である。

その数を徐々に減らし、消耗しながらも、何とか本拠地たるキャメロットへと辿り着く事に成功した。

しかし、そこにこそ本当の絶望は待っていた。

「来たか。」

元、円卓の騎士モードレッド。

度重なる参戦要請の全てを黙殺し、何れ討伐される予定が組まれていた護国の魔将。

頑強な鎧兜に身を包んだ銀と紅の騎士が、その肩に竜骨の大剣を担いでキャメ

ロットにて待っていた。

そして、キャメロットの上空には空に巨大な穴が開いており、その向こう側からは今のブリテンには何処にもない筈の密林が覗いていた。

「この騒ぎは貴様か、モードレッド卿！」

「如何にも。今こそ我が怨讐を晴らす時。その首を貰うぞ、アーサー王。」

そして、戦いは始まった。

数では圧倒的にモードレッドが不利だ。

しかし、幻想種との付き合い方を知るモードレッドは空の穴、世界の裏表の境界に開けられた穿孔から落ちてくる幻想種を上手く遣り過ごし、騎士王率いる騎士達に巧みに喉け、擦りつけていく。

無論、それを座視する円卓ではない。

「く、裏切りには死を以て償わせませす！ 『転輪する勝利の剣』ッ!!」

ランスロットとの戦闘で負った重傷を押ししてなおガウエインは死力を振り絞り、太陽の聖剣ガラティーンの対軍向けの真名解放により、多くの幻想種を薙ぎ払う。

だが、それが仇となった。

幻想種の巨体とそこから発せられる咆哮やブレス、そしてガラティーンの太陽の劫火により、一時的に閉ざされた視覚と聴覚の隙を突き、未だ聖者の数字を発動している筈のガウエインは、しかしモードレッドの大剣により袈裟斬りに切断された。

「なん、と…。」

「間抜け。」

それだけが、兄妹が最後に交わした会話だった。

「ガウエイン卿!？」

悲痛な叫びを上げる騎士王に隙を見出したのか、空中から一頭のワイバーンが狙いを定め、急降下する。

「ッ、動きを止めるな馬鹿!」

ワイバーンの奇襲はしかし、王の傍らにいたケイ卿が王を突き飛ばす事で防がれた。

しかし、その分ケイ卿の回避は間に合わなかった。

「ぐ、あゝあゝあゝあゝあゝあゝ…ッ!？」

嘴に啞えられて空中へと連れ去られたケイ卿は、そのまま空中で複数のワイバー

ン達に争う様にして啄まれ、辛うじて小さな肉片が地に落ちた以外は全てワイバーンの胃袋へと納まってしまった。

ブリテンの国政の多くを担ってきた騎士王の義兄の、余りにも無残な死だった。

「オノレエエエエエエエ！ 『約束された』！」

自身の甥に続き、義兄まで殺された騎士王は怒りと憎悪のままに己が居城たるキャメロットごと敵を消し飛ばすべく、聖剣の真名解放を行う。

だが、怒りのまま振るわれる聖剣は威力はあれど、余りにも鈍重だった。

その程度、領地を得てからずっと戦い続きたったモードレッドにとって、余りにも御しやすい相手だった。

「一旦退くか。」

バシユン！と、眼を焼く程の閃光に騎士達と幻想種問わず誰もが視界を奪われる。

それは騎士王とて同じであり、それ故に迂闊に味方を巻き込みかねないと宝具の真名解放を中断してしまう。

視界が戻った時、既にモードレッドの姿はなく、己が憎悪を周囲の幻想種へと叩

き付けるべく、騎士王は残った騎士達に指示を出した。

.....

戦闘後、キャメロットを改めた結果は：無残なものだった。

後詰の騎士達も、兵士も、使用人も、誰一人として生きてはいなかった。

誰もが全て、幻想種らに食われていたのだ。

その死に顔は（残っていないものもいたが）一様に恐怖が刻まれていた。

そして、食糧すら何も残っていなかった。

目立つものではないが、虫や草食獣の様な幻想種も多数存在しており、それらに食料を食い荒らされたのだ。

既に代わりとなる遠征時に持っていた食料も大きく減っており、これではどの道勝った所で冬を越す事は出来ないだろう。

「明朝、出発する。」

「な、アーサー王！無茶です！」

「無論、考えはある。」

騎士王曰く、モードレッドの領地は現在このブリテンで最も繁栄し、相応に食料の備蓄もある筈だ。

今まではその過半を税として徴収し、国内に行き渡らせてきた。

しかし、ランスロット一派との内紛が始まってからと言うもの、税として徴収されてきたそれらは完全に途絶えている事から、モードレッドの領地にはかなりの量の食糧が備蓄されている事が予想できる。

「我々と残された民が冬を越すには、最早余所から奪ってくるしかないのです。聞き分けてください、ベディヴィエール卿。」

「…畏まりました。」

長らく共にあった義兄と甥を一度に亡くし、そして己が国と民と騎士を滅茶苦茶にされ、憔悴しきった騎士王に、ベディヴィエールは恭しく従った。

最早それしか道はないと、彼もまた判断したからだ。

しかし、それは…

(これでは、私達こそが蛮族になった様なものですね。)

今までモードレッドに行ってきた数々の施策。

誰よりも無私のままに功績を上げた騎士に対し、負債を押し付け続けた不徳。

不毛の領地、忠誠心の低い兵士、高齢者に子供や重傷病者ばかりの民。

挙句に領地経営を補佐する人材を一人も送らずに、初年度から採れた作物全てを税として徴収すると言う無道。

寧ろ今まで良くぞ反乱を起こされなかったと、温厚かつ常識人なベディヴィエールですら思った事だ。

或はとっとと暴発させて反乱者として討伐するための策だったのか、今ではもう分からない。

だが、円卓の一人として思うのだ。

あの日、あの誠実なパーシヴァルが怒りに震えながら聖杯探索の顛末を語った時から、この顛末は予想できていた。

ギアラハッドを唯一の親友として遇するモードレッドが、こんな事態を招いた者達を許す筈がない、と。

聖杯の詳細を知らぬとは言え、把握して事前に対応しておくべき騎士王が結局は

無残に友を死なせた事を間違はなく憎悪すると。

ベディヴィエールは分かっているけど、政治を余り知らぬ故に、王とケイ、アグラヴェインに任せておけば大丈夫だと安心してしまっていた。

その結果がこの事態だった。

(今の王は鞘が無い。もしもの時は、王だけでも逃がさねば。)

それでもなお、その忠誠に些かの揺らぎもなく、ベディヴィエールは最後の時へと覚悟を決めた。

---

次でVS騎士王決着の予定。



## 転生モーさんが逝く 11

辛うじて一夜ばかりの休息を取った騎士王率いるキャメロットの軍勢は、モードレッド領へと向けて進軍を開始した。

だが、それは始まる前から問題しかなかった。

先ず第一に食料が僅かしか無い。

第二に、水すら乏しい。

これは元々遠征で消耗していた所に、本拠地であるキャメロットを襲撃され、更には井戸水には多数の人の死骸や得体の知れない生物（水生の小型幻想種）が入っており、とてもではないが飲めたものではなかったからだ。

水だけなら途中の川や湖で補給できるだろうが、しかし塩すら無い状態では聖剣を持つ騎士王は兎も角として、他の騎士や兵士達はまともに戦う事は出来ないだろう。

そして、道中もまた問題だらけだった。

先ず、道中にもまた多数の幻想種に遭遇し、時に民を襲っている場面にも遭遇し

たため、これを放置できずに遭遇する度に突発的戦闘で更に消耗した。

次に、水場にも多数の幻想種が待ち構えており、漸く水を補給できると近づいた兵や騎士達が引き込まれ、そのまま捕食されたため、迂闊に水場に近づく事も出来なくなった。

更に、例え夜中であろうと狼や野犬に似た幻想種による襲撃が多発し、夜番を設置してもなお幾人も犠牲者が出続けた。

この様な状況で、コンデイションを保つ等出来る筈もなく、騎士王も、ベデイヴィエールも、騎士達も、兵士達も、軍馬ですら消耗し、それでもモードレッド領での略奪と言う形での補給に僅かな期待を残して、黙々と歩き続けた。

途中、幾人もの脱落者が出たが、誰も彼らに肩を貸す事も、荷物を肩代わりする事も無かった。

全員が分かっていたのだ。

この状況で軍勢から逸れると言う事は、死とイコールである事を。

そして、通常の行軍よりも更に遅く、一月掛けて漸くモードレット領に到着した。

「こんな、事が……。」

だが、騎士王らを待っていたのは更なる絶望だった。

モードレッド領に着いた時、そこには何もなかった。

本当に何もなかったのだ。

砦を改装した領主館も、その周囲に広がる街も、それを囲う城壁も、その周囲に広がる広大な農地も…。

何もかもが何の痕跡も残さずに消えていた。

騎士も、兵士達も、絶望に膝を付いていく。

既に体力も気力も限界で、僅かに残っていた騎士王への忠誠すら揺らいでいく。

そんな時の事だった。

彼らの頭上に、突然キャメロットにも出現した穿孔が現れたのは。

「総員、迎撃！」

騎士王の命令に、しかしベデイヴィエール卿を始めとした一部の者以外、誰も動かない。

否、動こうにも余りにも動きが鈍過ぎる。

此処に至るまで過剰に蓄積された心身への疲労が、此処に来て心が折れた事で表

出したのだ。

最早誰も、あの穿孔から零れ落ちる様にして現れる幻想種に、抗う術を持てなかった。

………

昼前に到着した筈の遠征：否、騎士王率いる略奪軍は、日没前に全滅していた。穿孔から零れ出る幻想種の群れに多くの騎士と兵士達が踊り食いされる中、辛うじて騎士王の側に控えていたベディヴィエール卿率いる50程の近衛隊は騎士王を生かすべく、決死の覚悟で幻想種の群れを突破した。

図らずとも、他の友軍を囿にする形で。

だが、それにも限界はあった。

以前のキャメロットと同じく、空と陸を埋め尽くす程の幻想種の群れに、彼らは何処へ行って良いのかすら分からなかった。

迷走に迷走を続け、一人また一人と欠員が出ていく中、一昼夜駆け続けた果てに

彼らが最後に辿り着いたのは小さな丘だった。

そう、どの様な偶然か、それとも世界の修正力か。

その場所こそ、あのカムランの丘だった。

「良くぞ此処まで逃げてきたものだな。」

周囲を幻想種に囲まれ、最早何処にも逃げ場がないという状態で、幻想種達が怯えて道を譲る様にして、モードレッドが現れた。

彼女は静かな口調の裏に激情を隠しながら、騎士王らを嘲笑った。

「傑作だな。あの騎士王がこの様とは。」

「貴様あ!!」

近衛の一人が激情のまま斬りかかるが、間合いに入った瞬間、手に持つ剣と鎧ごとモードレッドの大剣に両断された。

「騎士の質も落ちたな。」

「何故だ、モードレッド卿…。」

絶望に侵されながら、それでも嘗ての己の騎士相手に騎士王は語り掛ける。

だが、彼女に対話を求めるのは余りにも遅すぎた。

「何故と問うか、アーサー王。その時点で話にならん。」

そして、僅か10名程にまで減った近衛隊とベディヴィエール卿を前に、モードレッド卿はその竜骨の大剣と共に踏み込んだ。

戦いは一方的なものだった。

消耗し尽くした近衛10名と隻腕のベディヴィエール卿だけでは、騎士王すら超えるスペックとギアラハッドを除けば円卓最硬の名を欲しいままにする兜の騎士を止められる筈もなく。

早々に蹴散らされた彼らを後目に、モードレッドと騎士王の一騎打ちが始まった。

.....

ガゴン！と、一撃を受け止めるだけで地面が陥没し、全身が軋む程の重量がかかる。

それを聖剣を斜めにして何とか受け流し、反撃を入れる。

しかし、如何に聖剣と言えども、モードレッドの鎧を破壊した上での有効打を与

える事は容易ではない。

鎧の隙間を狙おうにも、そんな分かり易い太刀筋を入れられる程、モードレッドは弱くない。

そして、二人にはもう一つ、致命的な差があった。

騎士王は不老を約束する聖剣は持っていない、不老不死を約束する鞘は持っていない。なかった。

対して、モードレッドは傷を癒す鎧を纏っており、継戦能力に関しては事前の消耗の有無もあって、どちらが有利なのかは明らかだった。

例え常勝無敗の騎士王と言えど、竜殺しの大剣と竜殺しの専門家を相手にしては、余りにも分が悪かった。

「ッ、ぐ、何故だ、モードレッド卿……！」

「今更か、アーサー。」

剣戟を交わす中、それでもモードレッドは平静だった。

否、より正確に言えば、平静であろうとしている。

何せ目の前の敵はどうやった所で、もう死ぬ事が確定している。

今自分がしているのは、それをより無残で残酷で無慈悲なものにするための作業でしかない。

殺す気なら、もう終わらせている。

それだけの戦力差が、既に二人の間にはあった。

「確かに私が貴方にした事は、許される事ではないだろう！だが、それなら私を、円卓を、キャメロットを責めれば良い筈だ！何故貴方程の騎士が無辜の民にまで血を流させる！」

「何だ、そんな事か。」

血を吐く様な騎士王の叫びを、しかしモードレッドは拍子抜けとでも言わんばかりの言葉を返した。

事実、もっと憎悪や怨嗟を込めた叫びが来ると思っていたのだ。

「貴様を殺した後、残った連中が私の民に害を成す可能性がある。それを排除しただけだ。」

復讐される可能性を潰す。

ただそれだけのために殺し尽くしたのだと、モードレッドは告げた。

「そんな…そんな事で…。」

「別に不思議ではあるまい。貴様は私だけでなく、私の下にやってきた民にすら压制を敷いた。そこに彼らの善悪は関係ない。要は貴様にとって『都合が悪い』と言うだけの話だ。」

そう、これは騎士王にも言える話。

規模が違えど、これは騎士王が嘗て取った政策なのだ。

自分が干上がらせ、或は見殺しにした村の生き残りを保護するのではなく、自分に叛意を持っているかもしれないと考え、同じく叛意を持っている可能性があるモードレッドの下へと送り、枯れ死させるべく压制を加える。

正に暴君の思考だった。

騎士王は聖剣を折るまでもなく、既に清廉潔白とは無縁だったのだ。

「貴様は…貴様はッ!!」

手傷を負い、限界まで消耗していた騎士王は、それでも目の前の怨敵を前にして、最後に残った魔力を聖剣へと注ぎ込んでいく。

既に己の悪性を自覚した故か、その聖剣は嘗ての黄金の輝きからランスロットの

アロンダイトと同様に黒く染まり始めているが、その威力だけは寧ろ普段のソレよりも強化されつつあった。

恐らく、この状態で真名解放を行えば、騎士王自身もその命数を使い尽くす事だろう。

「成程。確かにそれなら私を殺すには足る。」

だが、この程度の事態は予想出来ていた。

だから二重に保険を掛けていた。

「もう遅い！ 『約束された』 …！」

そして、騎士王が充填した魔力を解放しようと振り下ろす寸前、

「だが、それではお前の騎士達も死ぬぞ？」

その言葉に、動きが止まった。

同時に、モードレッドの背後に倒れ伏していたベディヴィエールと近衛の騎士達が呻き声を漏らした。

「あ……！」

騎士王は慌てて解放寸前の聖剣を停止させようとする。

しかし、解放寸前まで行った聖剣を止めるのは片手間で出来る訳もなく、その意識はモードレッドから己が握る聖剣へと向けられてしまった。

それが敗因だった。

「あ」

ずぶりと、騎士王の甲冑を貫いて、竜殺しの骨剣がその身を貫いていた。

「あ」

骨剣が引き抜かれた直後、騎士王の胸から盛大に鮮血が噴き出し、モードレッドの全身を血で染め上げた。

ばたりと倒れた騎士王は、素人目でもあって致命傷と容易に分かる。

「う、ぐ、あ……。」

しかしそれでも、彼女は諦めていなかった。

血を吐き、涙を零し、鼻水を垂れ流し、王としての威厳等感じられない様になってもなお諦めなかった。

アルトリアは少しでもモードレッドから距離を取ろうと地面に鮮血を塗りたくりながら匍匐前進する様に這っていった。

「ダメ、だ……まだ死ねな……」

ゆっくりと、モードレッドは嘗ての主君を追う。

最早騎士王の瞳は何も見ておらず、このまま放っておいても死ぬだろう。

だが、最後の時間を与えるつもりはなかった。

「わたし、は……ぶりて……を……すく」

ざしゅりと、肉を切る音がカムランの丘に響いた。

「驚いたな、まだ動けたのか。」

背後から刺さり、自分の胸を貫いた太陽の聖剣の持ち主に、モードレッドはいっそ穏やかとも取れる声で背後の騎士へと声を掛けた。

「なあ、ベディヴィエール卿？」

「背後からの不意打ち、申し訳ない……」

今の今まで気を失い、最後の隙を見出して渾身の一突きで主君の敵を討ったのは、王宮の執事役にしてモードレッドも評価する隻腕の騎士だった。

「成程、ガウエインの形見か。」

以前の戦いでモードレッドが殺した種違いの兄、その愛剣。

そして、騎士王の聖剣と同格の聖剣を最適なタイミングと速さ、角度で突き出せば、十分モードレッドの鎧を貫ける。

「何か、言い残す事は？」

「そうだな…。」

一瞬の思案の後、モードレッドはゆっくりと口を開いた。

「オレはな、ベディヴィエル卿。聖杯探索まで、王に忠義を誓っていたんだ。」  
それをベディヴィエルは黙って聞く。

「だが、聖杯探索の末にオレ達を待っていたのは手酷い裏切りだった。」

聖杯探索の顛末は聞いていた。

ギアラハッドと言う神の子の模造品を作り、彼を生贄にアリマタヤのヨセフがカーボネック城に封じた聖杯を降臨させる。

それがカーボネックの一族の宿願であり、それに激怒したモードレッドによって聖杯はまたも隠されてしまった。

「オレは許さん。聖杯探索を命じた騎士王も、聖杯降臨を願うカーボネックの連中も。あんなものを求める騎士達も。あんなものに縋るこの国も、この国の民もだ。」

それは怒りだ。

親友、否、きつとそれ以上の愛情を持っていた相手を、自分と最も近い運命の下に生まれた者を失った怒り。

それが温厚なモードレッドをここまでの凶行へと駆り立てたのだ。

故に聖杯を求める全ての者に憎悪を抱いた。

何をしてでも聖杯を、叶わぬ救済を求めるとは、また嘗ての悲劇を繰り返す事に他ならないから。

「言葉にするべき事は以上だ。」

「では…さらばですモードレッド卿。」

「卿など付けるな。虫唾が走る。」

そして、ガラティーンが引き抜かれ、同時にモードレッドの胸から盛大に出血が

始まる。

だが、この程度では鎧の持つ治癒力によって何れ回復するだろう。

ならば、しっかりと止めを刺す。

ちゃきりと、構え直したガラティーンで、ベディヴィエールはモードレッドの首を刎ねた。

(さらばだ、ベディヴィエール卿。)

モードレッドが最後に見たものは、首を無くして膝を付く己の身体の姿だった。

こうして、騎士王率いるブリテンの最後の戦いは幕を閉じた。

次回、ブリテン編終了

漸く惨めな感じで泣かす事に成功したぜ！  
(外道)

## 転生モーさんが逝く 12 後書修正

これにてブリテン編終了！

一般にアーサー王物語とされる伝承群は、多くの付け足しや解釈を交えながらも、一貫して一つの方向性を持っている。

その前半はアーサー王によるブリテン統一を始めとした栄光と騎士の名誉の物語であり、後半はその不義の息子モードレッドを中心としたブリテン滅亡と騎士の没落までの物語である。

アーサー王の前半生は一部の事件を除けば紛う事無く清廉潔白な英雄であるが、その後半生はモードレッドに取って代わられたかのように零落していった。

これは円卓の騎士全体にも言える事だが、これを仕方ないとする声もある。

何せ多くの正統派の伝承を集めただけでも、実に40年近い在位期間になるのだ。これでは老いによって力が衰える事も、耄碌する事も仕方ない。

50 近いと言え、当時の寿命から言え、かなりの高齢なのだ。

そこに若く力ある騎士が来たとなれば、物語のスポットは必然的にそちらに向いてしまふだろう。

それを自身の権勢の衰えと取ったのか、或は政敵によるものと取ったのかは判別しないが、アーサー王がモードレッドを敵視していた事は確かだった。

実の息子を何故敵視したのかと言え、モードレッドの母親はモルガンと言うアーサー王の父親違いの姉であり、先も述べたが不義の關係にあった。

モードレッドの存在が公になり、功績を上げて脚光を浴びる度、自身の行った不義が表沙汰になる可能性が高くなる。

それは清廉潔白であるが故に多くの騎士達の支持を保っているアーサー王にとって致命的なスキヤンダルになりかねなかった。

だからこそ、アーサー王はモードレッドを蛮族の侵攻の激しい辺境の領地を与えて、そこに封じた。

更に最低限度の支援すらせず、重税や難民を押し付けもした。

まともな財の無いその場所なら、何れ自分の下に救援を乞うか、或は討ち死にす

るだろうと期待して。

しかし、モードレッドは蛮族の侵攻を悉く跳ね返し、時には単独で敵軍を壊滅させた。

食料にしても、国を荒らす巨大な獣や竜を狩り、その肉を食料とする事で時間を稼ぎ、母モルガンの魔法によって不毛の地を農業が可能な程度にまで豊かにし、部下となった兵士達や行き場のない難民達と協力して何とか暮らしを成り立たせた。これにアーサー王は激怒したものの、モルガンの圧力もあってそれ以上の妨害は出来なかった。

ここまで自分を厭うアーサー王の内心を察していながら、しかしモードレッドは聡明な王なら何時か自分を正しく評価してくれるだろうと信じていた。

しかし、それは裏切られる事となる。

モードレッドの後、最後の円卓の騎士として災いの13席にギャラハッドが就いたのだ。

彼はランスロット卿の實の息子だが、母親であるカーボネックのエレインが無理矢理ランスロットと作った子であった事から、その実力と人格に反してキャメロッ

トでは疎まれてしまった。

それを同じく嫌われ者であるモードレッドが見つけ、自身の領地へと案内した。モードレッドとギアラハットは年も立場も近く、互いに優れた騎士であったために直ぐに意気投合し、共に領民達のために巨大な獣を狩り、何時も共にあって楽しく過ごしていた。

しかし、幸せは長く続かなかった。

ある日ブリテンに、聖杯が現れたと言う噂が流れたのだ。

国を豊かにするため、騎士としての名誉のため、アーサー王は聖杯を欲し、この獲得をギアラハットに命じた。

また、モードレッドにも聖杯を求めてキャメロットからいなくなってしまった騎士達を連れ戻す様に命じた。

こうして、二人は聖杯を求める騎士達を追って、聖杯探索の旅へと出たのだった。

幾つもの困難と冒険を乗り越え、途中パーシヴァルとその妹、そしてポールスと合流して、最後に彼らがやってきたのはカーボネック城、即ちギアラハットの故郷だった。

そして、漁夫王の案内の下、城へと一同が入ると、一同の前に聖杯が現れた。

しかし、この中で聖杯を手にする資格を持つのはギアラハッドだけだが、彼は聖杯を手にすると同時にあらゆる苦悩と苦痛から解き放たれ、昇天してしまった。

これを見てモードレッドはアーサー王が最初からこうなる事を知っていたのだと考え、消えてしまった親友の仇として叛意を抱く。

しかも、資格ある者が消えた聖杯は莫大な光と音を発し、カーボネック城は一瞬で崩れ去ってしまった。

何とか三人の騎士は生き残ったが、それ以外の者が死んでしまった。

この大惨事にモードレッドは「聖杯を世に出すべきではない」として聖杯を何処かへと隠し、ポールスとパーシヴァルは事の次第をアーサー王に伝えるべくキャメロットへと帰還した。

この聖杯探索を機に、キャメロットの没落は加速していく。

妖妃モルガンの姦計と策略により、今まで積み重ねられた円卓の不和や因縁に火が付き、トリスタンやパーシヴァルを始めとした多くの騎士達が去って行った。

そして、遂にアーサー王の親友であるランスロットと王妃ギネヴィアの不倫が発

覚してしまった。

これを暴いたアグラヴェインはその場でランスロットに斬殺され、ランスロットを説得しようと非武装で近づいたガレスとガヘリスは錯乱したランスロットに斬り殺された。

この時、ランスロットはモルガンの呪いによって、正気を失っていたと言われる。そして、ランスロットを慕う者達は彼の側に付き、キャメロットの戦力は完全に二分されてしまった。

だが、アーサー王とランスロットは親友だった。

その絆は王妃よりも固く、二人は積極的に戦わず、最終的に和議を結んだ。

そして、ランスロットと従う騎士達はフランスへ、アーサー王とその騎士達はブリテンへと戻った。

しかし、アーサー達を待っていたのは虐殺された人々だった。

皆死に絶えたキャメロットで再会したのは、モードレッド率いる兵達と嘗ての難民達だった。

彼らは皆、国を守りつつも荒廃させるしかなかったアーサー王とその騎士達を憎

み、モードレッドは親友を聖杯獲得のための道具としたアーサー王を恨んでいたのだ。

そして、ブリテン最後の戦いが始まった。

戦は開始から半月近くまで続き、その中でランスロットとの戦で消耗していたガウェインやケイと言った残った円卓の騎士らも死亡していった。

それに対し、戦いはモードレッドの領地にまで至り、アーサー王は反撃とばかりに目につくもの全てを焼き払って報復した。

だが、両軍の戦力自体は拮抗しており、双方が損害を増やし続けるだけだった。最後には両軍は死力を振り絞ってカムランと言われる小さな丘で激突し、互いに殺し合った。

アーサー王はモードレッドと戦い、しかし敗れ、あわや止めと言う時に、ベディヴィエールがガウェインの形見であるガラティーンでモードレッドを後ろから刺して討ち取り、首を刎ねた。

敵も、味方も、既に騎士道など無かった。

最後に深手を負ったアーサー王はベディヴィエールと共に湖の貴婦人らへと聖剣

を返還し、傷を癒すために妖精郷へと去っていったと言う。

様々な解釈や説話があるものの、これが大まかなアーサー王物語の流れである。しかし、真実は小説よりも奇だったりするのだ。

.....

「ん……。」

ぱちりと目が覚めた。

次いで直ぐに寝台に横たわる自身の身体を確認し、次いで首の辺りをさする。

自身の細胞を培養して用意した肉人形とは言え、五感は繋がっていた。

首を断たれる感覚は、今も色濃く残っていた。

「御目覚めね、モードレッド。気分はどう？」

「まだ首が刎ねられた感覚が残ってます……。」

「まあしょうがないわね。」

首をさする娘に、寝台の傍らに座っていたモルガンは告げる。

「あの人形は製法自体は貴方の身体と同じものだもの。母胎がフラスコと言う違いはあるけど。」

「流石に身重の身で戦に出る訳にはいきません。」

「そうね。行くなんて言ったら葉で眠らせて、出産の日までそのままにしてたわ。」  
さらっと強硬策を告げる辺り、モルガンの本気を感じ取って怖いやら心配されて嬉しいやら、モードレッドは複雑な気分になった。

「もうすぐね…。」

慈愛の籠もった目で、モルガンはモードレッドの膨らんだお腹を撫でた。

「祖母が女神で、母親が半竜だと知ったら、この子はどう思うでしょうね？」

「どうもしないんじゃないかしら？ 大事に育てたら、そんな事なんて些細な問題よ。」

世界の裏側、幻想の世界へと完全に入植したモードレッド領の者達を待っていたのは、この世界への適応だった。

無論、異形になると言う訳ではない。

彼らの多くは人間であり、それ以外の種族の血は流れておらず、精々がギリシャ

神話の人々程度の神秘への適性を獲得しているだけに過ぎない。

しかし、ブリテン島の正しき地母神の系譜であるモルガンと、その娘にして竜の因子を併せ持ち、聖杯の魔力を浴びて聖母としての特性まで獲得したモードレッドは異なる。

短期間潜るなら兎も角、永住してはその影響は顕著になる。

結果として、モルガンは正しく女神となり、モードレッドは外見は翼や尾に有鱗の手足を持った竜人となった。

だが、モードレッドもしっかりと神性は獲得しており、異形の女神と言っても差し支えない。

当初は驚いたものの、これでは人間性を無くす可能性もある事から、二人は聖杯を用いて、自らの人間性の保持と言う願いを叶えた。

これにより、過度な変質を抑える事に成功した。

「ま、これにてブリテンは終わり。文化的・歴史的な系譜はあのマダオに付いていった連中やパーシヴァル辺りから残るでしょうから、抑止力としても問題は無いでしょう。」

「私達が表舞台から完全に消えれば、辻褃合わせも簡単でしょう。」

あのカムランの丘での最後の戦い。

あれに態々参加したのは、それが人理定礎に必要なものだったからだ。

それが態々鞘を用いてまで妖精郷に赴き、監禁されていたマーリンに拷問を加えて吐かせた内容だった。

なお、今現在のマーリンは自身の魔力を搾り取って稼働する拷問器具へと接続されており、半永久的な苦痛に苛まれていたりする。

まあ抑止力が少しでも働けばあっさり解除され、問題の起こった場所へと転送される仕組みなので、もしもの時でも問題は無いだろう。

「あー疲れたわー何か気が抜けたー。」

「ですねえ…。」

ふわわ、と少しはしたないが欠伸が出てくる。

何せ騎士となつてからこっち、ずっと駆け抜けてきたのだ。

少し位気が抜けても良いだろう。

「では、少しだけ午睡を…。」

「そうね…私もお邪魔するわ…。」

こうして、母娘の復讐劇は幕を閉じたのだった。

「あ、生まれそう。」

「ッ!?!?!?!?!?!」

この後滅茶苦茶お産した。

皆さん、お付き合い頂きありがとうございます。

この次はスペック表等を挟んでからFGO編の予定でしたが、そこまで行けるかは未定です。

何せメドゥーサが逝くとか同じ様な所で止まったままですからね（白目でもHF見てからネタが湧き出して止まらないのに時間が無くて困る。

今後の予定としては今の所（アンケートではないのに時間が無くて困る）

・メドゥーサが逝く続編（HF or FGO）

・モーさんの続編（FGO）

・TS 転生士郎ちゃんが逝くHFルート

の三本となっております。

## 転生モーさんが逝く スペック表

短いけど出来たので投下

---

モードレッド（転生モーさんが逝く仕様）

該当クラス：剣・槍・騎・狂・術・讐

○スペック

・円卓加入時

身長／体重…154cm・47kg

出典…アーサー王伝説

地域…イギリス

属性…混沌・中庸

性別…女性

・竜の因子覚醒後

身長／体重…170 cm・58 kg

・竜の因子暴走時（聖杯魔力浴びた時）

身長／体重…172 cm・69 kg

○ステータス

剣…筋力 A +	耐久 A +	敏捷 D	魔力 C	幸運 A	宝具 B
槍…筋力 A	耐久 A	敏捷 C	魔力 B	幸運 A	宝具 A +
騎…筋力 C	耐久 B	敏捷 A	魔力 C	幸運 A	宝具 C
術…筋力 D	耐久 C	敏捷 B	魔力 A	幸運 A	宝具 C
狂…筋力 A +	耐久 A +	敏捷 B	魔力 D	幸運 E	宝具 B
讐…筋力 A	耐久 A	敏捷 C	魔力 B	幸運 D	宝具???

○キャラ詳細

モードレッドは円卓の騎士の一人にして、アーサー王の実子である。

同時にアーサー王の伝説を、当時のブリテンを終わらせた叛逆の騎士でもある。セイバーの姿は円卓に入ったばかりの頃、常に呪われた兜を被り、母モルガン以

外の誰にも顔を見せなかった頃の姿。

ランサーなら、キヤメロットを襲撃し、そこにあったアーサー王の聖槍を奪った  
当時の姿。

ライダーなら、ギャラハッドに出会った当時、日々幻想種狩りをしていた頃の姿。  
キヤスターなら、領地にて静養（妊娠）していた当時、最も落ち着いた姿。

バーサーカーなら、聖杯探索の最後、ギャラハッドを失ったばかりの姿。

アヴェンジャーなら、復讐の最中、あらゆる手段でブリテンを、アーサー王を破  
滅させた頃の姿。

モードレッドはアーサー王の姉であり、宿敵である魔女モルガンの奸計によって  
生み出された人工生命——ホムンクルスの一種である。

アーサーを討ち、ブリテンの王権を取り戻すため、アーサー王を超える王になる  
ためにモードレッドは生誕した。

…のだが、当のモルガンが自分に従わない他の息子達に愛想を尽かす中、例外的  
にモルガンを母と純粋に慕い、子として甘えてくるモードレッドに絆され、そこら  
辺の妄執をぶん投げてしまい、結果的に駄々甘な母と娘の關係に落ち着いた。

モードレッドはホームクルスであるため、成長の速度は極めて早く、生まれて5年程で騎士としてアーサー王に仕えることとなった…のだが、本来はもっと早く仕える予定だったのだが、過保護を拗らせたモルガンが念入りに教育した事で遅くなったのだった。

結果として、モルガン譲りの魔術とアーサー王を超える性能も相まって、あっと言う間に頭角を現して円卓の騎士まで上り詰めた。

この時、モードレッドはアーサー王に対して特に含むものは無かった。

しかし、モードレッドの出自を知るアーサー王とマーリンはモードレッドを冷遇し、最前線の荒れ果てた領地を与えて遠ざけた。

だが、モルガンの知恵と自身の機転と実力でモードレッドは領地を経営し、任された国土を守り続けた。

何時かアーサー王が正しく自分を評価する日が来ると信じて。

だが、そんな日は訪れなかった。

親友であるギアラハッドが聖杯探索の末に死亡し、それがアーサー王の企みによるものだと判断したモードレッドは、モルガンと共にブリテンを崩壊させるべく暗

躍を開始した。

そして、ランスロットの不貞騒ぎでアーサー王が留守の際にキャメロットを攻略し、返す刃で何も知らず帰還してきたアーサー王へと戦いを挑んだ。

その結果、多くの人が知る様にブリテンは滅んだ。

モードレッドは苛烈で豪快な性格に反して、普段は当たり前の平穏を好み、それを乱す者を許さない。

何事もない平穏、それを守るため、維持するために誰かが支払っている努力を彼女は知っているが故に。

だからこそ、その努力を支払っている者に対して彼女は真摯に相対し、力を貸してくれるだろう。

但し、彼女は叛逆の騎士である。

アーサー王最大の敵であり、ブリテンを終わらせた者。

その胸に既に騎士としての誇りは無く、ブリテンに与するあらゆる者を憎悪する。それは死してなお、英霊となった今も変わらず、アーサー王とその縁者に揺るがぬ殺意を抱いている。

ただ一人の例外を除いて。

宝具 電磁抜刀術（禍・威・散）：単体・高確率でスタン付与

不貞隠しの呪い兜：ステータス・真名を隠蔽。

竜達の骸鎧：HP回復状態付与・防御力UP。飛行可能。

竜達の血鎧：Cランク以下の攻撃無効。

最果てにて聳え立つ槍：聖槍ロンゴミニアド。魔力解放ではなく、世界を支える程に頑丈で巨大な超質量鈍器。

佛血斬・死骸走破：外道ホバーバイク。機動性UP。自爆装置付き。

偽・隕石落し：敵全体に防御力無視攻撃。確率でスタン付与。

竜血の親衛隊：赤肩隊召喚。魔力供給ある限り、歴代の隊員達を召喚可能（最大億単位）。

嘆きの赤竜：竜の因子暴走十聖杯による完全覚醒。ブリテンの守護神龍たる赤竜へと変身。

スキル 魔力放出（雷） B、直感 A、竜の心臓 B、反逆者（円卓） A、動物会

話 D、戦闘続行 D、カリスマ B

次回は第四次参加のお話。

---



## 転生モーさんが逝く 世界の裏側

第四次と言ったな？

アレは嘘……と言うか、一度こっち側の描写しないと四次に入れん（汗

「今日よりオレ達はこの地に住まい、この地で死ぬ！此処が新たなオレ達の故郷であり墓場だ！」

「今日よりこの街は国となる！この国の名は『モリグナ』！女神と竜と人の力の三相一体で成る国だ！」

「新たな門出と共に、今この時よりこの地での生存活動を開始する！」

世界の裏側へと領民と街ごと引っ越したモーさん達だが、その直後から前途多難だった。

何せ後方の安全地帯ごと最前線へと引っ越してきたようなものだ。

表側に戻れば良かった今までは異なり、24時間常に緊張を強いられる。

大中小と様々な幻想種を相手に戦い抜き、自分達の生存圏を確保せねばならない。幸い、以前の狩猟もあって近隣の大幻想種を粗方狩り尽くすのは一月とからなかった。

次に現地特有の病気の対策や荒らされた城壁外の耕作地の復旧に取り掛かるのだが…これが一番時間がかかった。

病気の対策は女神として覚醒したモルガンの加護と魔術により割と順調に進んだのだが、病気そのものの種類も多く、更に蚊や蠅、蟻や鼠の様な小型幻想種を媒介とした伝染病等も存在し、モルガンはてんでこ舞いとなった。

また、2〜5m程度の中型の幻想種、それも狼やヴェロキラプトルの様な知能の高い種類の存在もあり、城壁外での作業は護衛ありきとは言え、常に命の危機があった。

だが、領民らは決して諦める事なく働き続けた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおあああああああああああああああああッ!!」

それは自ら率先して前に出て、巨大な幻想種を蹴散らす自分達を見捨てずにいてくれる王様と、それに付き従う兵士達の雄姿を知っているが故だった。

お綺麗なお題目を掲げながら、自分達を見捨てて斬り捨てた騎士王と騎士達よりも、自分達と同じ所に立ち、命を張って戦ってくれる王の姿に、領民達は少しでも報いようとしたのだ。

そして引越してから5年、何とか田畑の周囲を防護柵で囲い、街の6方向へと簡易的な拠点の設置に成功し、生活が安定し出した頃、更なる苦難が襲い掛かって来た。

「我が威光にひれ伏すが良い！さもなくば、我が槍の錆に『死ね。』ぶげらあ!？」  
この世界の裏側には、神代の終わりによって表側にいられなくなった存在が流れ込んでくる。

それは嘗ての神話世界を構築した神々であっても例外は無い。

そして、この裏側では人間と言う存在は極めて希少だ。

大抵は神秘に適応できないし、できても生き残る事が酷く難しい。

そんな所に2000人にも満たないものの、国丸ごと人間がやってきたらどうなるか？

信仰を失い、世界の裏側で鬱屈かつ退屈した日々を送る神々にとって、上手くや

れば嘗て得ていた信仰と力を取り戻す事が出来るかもしれない。

嘗ての栄光を再び！等と考える者が出てくるのも仕方ないだろう。

神霊と言う者は大抵は自然現象が人の形と精神を得た者だが、それは総じて理不尽の塊であり、それによって人間に行く被害等考えもしない。

そんな事だから一神教が流行り、自分達が見限られ、追い遣られたのだと知りながらも一切反省しない。

それが神霊と言う者なのだ。

特にギリシャとかケルトとか北欧とかギリシャとかがその典型に当たる。

そう言う訳で、幻想種の相手が落ち着いたと思ったら、今度はあの手この手で侵略しようとしてくる神霊の相手をする事になったのだった。

だが、そこは領民もとい国民の多くが元々は一神教だったのに、何時の間にかモルガン・モードレッド教なる新手の宗教が興ってたモーさんの国である。

国民達は頑として改宗を拒み、受け入れたらどうなるか分かったものではないとモーさんとモルガンも拒絶した。

だが、そうなれば腕づくでと考えるのが神々である。

追い詰めた所を善人面して救いの手を差し出せば直ぐにでも鞍替えするだろうと考えるが、そんな単純だから衰退するのだと彼らは考えもしない。

そんなダダ甘な考えに乗ってやる程、モーさんもモルガンも暇ではないし、甘くない。

そして、そんな二人と民の心を折らんとありとあらゆる権能や神造兵装による災いが始まった。

だがしかし、神々の起こすどんな天変地異や災害であっても、モーさん達は屈しなかった。

相応の消耗や被害こそあったが、その悉くを跳ね返し、武力に物を言わせてくる輩には聖槍と聖杯と鎧と兜、序でにモルガンが権能まで駆使して作成した竜骨の大剣等を用いて戦い、撃退か滅殺していった。

泡を喰ったのは神霊達である。

生半可な相手ではないと思っていたが、まさか神霊側に死者が出るとは思っていなかったのだ。

無論、武神や戦神、軍神等の力ある神々も挑んだのだが、その多くがけんもほろ

ろに撃退されてしまった。

例外として、取り敢えず話をしにいった地母神系の神々、特に某竈の女神等は表側での行いもあって、極普通に歓待されたり、楽しく観光したりしたのだが。

大抵の神々は欲を出してアホな事をしてボコボコにされた後に放り出されたりもした。

やがて10年も経つ頃には多くの神霊が警戒して手出ししない（時折馬鹿が現れるが）ようになった頃、ある女がやってきた。

その女は烏の濡れ羽色の様な黒髪と美貌、それと同色の薄い造りの衣装と赤い二振りの槍を持っていた。

物見からの報告でその女を見つけたモードレッドは、即座に全ての兵達に帰還及び籠城命令を出し、神霊の中でも強力な個体と戦うためのフル装備を身に着け、街の門の前でその女を待った。

「お主がこの国の王か？」

「如何にも。貴方も王とお見受けするが？」

「うむ。儂の名はスカサハ。影の国の女王をしている。」

スカサハ。

それはブリテンが未だ完全な神話の時代にあつた頃、所謂ケルト神話の時代に大英雄クー・フリーンを始めとした多くのケルトの戦士らの師匠を務めた女の名だ。アードガムの娘であり、七つの城壁を備える影の国の女王であり、予言の力を持った呪術師だが、それよりも寧ろ武芸に秀でてゐる。

女神であるとも言われ、ケルト神話版ヘラクレスとまで言われるクー・フリーンに一年と一日をかけて多くの絶技を伝授したと言われる。

要はもの凄く強いケルト系女戦士（魔術も行けるよ！）である。

「彼の光の御子の師に会う日が来るとはな。して、貴方程の御仁が何故我が国に来たのだ？」

虚言は許さぬと全身から魔力を滾らせながら、モードレッドはスカサハに詰問する。

それをスカサハは実に嬉しそうに笑みを浮かべながら告げた。

「何、こちら側へとやってくる者は久々だな。神霊共ではないが、私も興味があつたのだ。」

「あー、それならもう見たろ？帰ってくんねえかなあ？」

その獰猛な笑みにこの後の展開を予測しながら、モードレッドは僅かな希望を込めて提案。

だが、その僅かな希望はあっさりと裏切られる。

「数々の獣を屠り、神霊共を蹴散らしたその腕前、魅せてもらおうぞ！」

「だよなーケルトと言ったらそう来るよなー……。」

こうして、スカサハしか得しない「チキチキ★スカサハのケルト式観光！〜ポロリ（首や臓物）もあるよ〜」が始まっちゃったのである。

「あーもう糞！何でオレがお前の相手なんざしなくちゃならねーんだ嗚呼アアアアアッ!!」

「アハハハハハハ！良いぞ、素晴らしい！この様な興奮、彼奴以来だ！さあ私を殺して魅せよ！」

結局、七日七晩戦わされた。

「また来るぞ。」

「来んな！」

一カ月後、また来た模様。

---

ふう：やっぱりこうしたネタ書く方が楽しいな、うん



## 転生モーさんが逝く 第四次聖杯戦争編 前編 微修正

まさかの4000字突破

動画云々の所で時代考証間違ってたので修正

世界の裏側に領民と街ごと引っ越し、異形の女神として覚醒しながらも他の神霊や傍迷惑系影の国の女王と戦い始めて早1500年、随分と色んな事があった。

先ず、モーさんが産んだギャラハッドの魂を継いだ娘はすくすくと育ち、祖母にあたるモルガンの教導のお蔭でモルガンの手伝いをする巫女となり、ギャラハッドから継いだ魔力防御と魔術を用いて国を守る結果や城壁の建設時における術式の構築等に多大な貢献を果たした。

また、多くの人々に分け隔てなく接し、笑顔で奉仕する様は流石は女神様方の娘だと多くの人々から尊敬され、慕われた。

しかし、惜しまれる者から早逝するのが世の習いなのか。

モーさんが複数の軍神・戦神・武神に足止めされている間、隙を狙う様に国にやってきた神々へと迎撃戦が繰り広げられた。

とは言え、兵士達が勝てるのは非戦闘系の神霊であって、怪物や原初の神々と戦い勝利した主神の相手等は荷が重すぎる。

そこに大盾を持って彼女は参戦した。

天変地異に等しいあらゆる権能と神造兵装による攻撃を受け、反らし、弾き、防ぎ切る。

例え雨霞と降り注ぐ雷霆も、雲霞の様に押し寄せる蝗の大群も、巨大な津波すら、彼女は大盾と魔力防御、そして魔術で以て防衛し尽くした。

守りが完璧ならば、他の者は攻撃に専念できる。

全ての備蓄を使い切る勢いで、戦士団は神々へと量産型対軍宝具（ビームバズーカ相当）によって攻撃し、徐々にだがダメージを蓄積させていった。

戦いは三日程続き、神霊側が痺れを切らした。

そこが分け目だった。

自身の権能を攻撃に全て注ぎ込み、小賢しい防御ごと国を滅ぼそうとする一撃

に、しかし盾の乙女は怯まなかった。

内心の恐怖や怯え、不安を押し殺して、脅威を前に吠えてみせた。

神霊の必殺の一撃に因り、第二・第三城壁は砕け、このままでは第一城壁内の人々の避難する地下シェルターにまで被害が及ぶだろう。

だから、彼女は一步も退かず、その盾で以て第一城壁とその向こうへの被害の一切を防いだ。

残ったのは後先考えずに力を振り絞った神霊と何とか凌いだ戦士達。

戦士達は最後の切り札たる量産型対城宝具（バスターライフル相当）の集中砲火によって、見事主神級神霊を撃退する事に成功した。

歓声は、上がらなかった。

盾の乙女が己の全てを使い切り、国を守ったが故に。

帰って来たモードレッドは呆然として我が子の亡骸と対面した。

まさか二度も大切な者を失う羽目になるとは思ってもいなかったのだ。

涙ながらにその亡骸を抱き締め、号泣しながらよくやったと撫でて、そして葬儀の段取りをモルガンに任せて、十分な休息と準備をした。

今回の騒動では余りに多くの犠牲が出てしまった。

そして、防衛ではなく報復の必要まで生じてしまった。

そのために、モーさんは悲しむのを後回しにして、仕事に取り掛かったのだ。

この日は丁度、裏側に引っ越して20年目の事、盾の乙女の20歳の誕生日だった

そして一ヵ月後、国の復興が全て済んだ後、モーさんは報復に打って出た。

暫く自重していた影の国の女王も誘い、神霊狩りに出かけたのだ。

スカサハはスカサハで盾の乙女に指南していた事もあり、この事件に激怒していた。

この二人が揃えばあつけないもので、弱体化した神々は一年と経たぬ内に二人によって狩り殺された。

結果として、一つの神話体系の神霊の9割が殺される事となる。

とは言え、やり過ぎても恨みを買うので、表側にいた頃に神話上でも特にやさしかった者は見逃したり、そういった者達が助命嘆願した連中（某狩猟の女神とその恋人等）のみが生き残る事が出来た。

この虐殺により、多くの神霊達がモリグナへの認識を改め、余程の馬鹿か腕自慢

に挑んでくる連中を除けば攻めて来る事は無くなった。

だが、モーさんの顔に喜びは無い。

多少すっきりしたとは言え、失った者は余りにも大きかった。

「よし、ではやるか。」

「ゑ？」

だがしかし、ケルト系女戦士の極致たるこの御仁にそんなセンチメンタリズムが通じる筈も無く。

モーさんはもう何度目になるかも分からない影の国の女王の本気の殺し合いに巻き込まれるのだった。

.....

そんなこんな騒動を挟みつつ、気付けば1500年経過していた。

最近はすっかり生き仏扱いのモーさんであった。

モルガンは未だ魔術の研究と指導をしているが、政治方面においては第一線を退

いている。

戦士団にしても、月一で現れるスカサハとベテランの戦士達のお蔭で教導役に困る事は無く、神霊も竜種も脅威ではなくなって久しい。

現在はどっかのローマよろしく拡大しまくった国を地方行政権を拡大して事実上の自治都市化を推し進め、何かしらの問題が起きれば連携して解決すると言う状態だった。

勿論、未だ諦めの悪い神霊達や知恵持つ幻想種等もいるが、そういった連中が実際に行動を起こした時点でモーさんによって種族や神話体系ごと殲滅されかねないので、特に問題らしい問題は起こっていない。

そんなモーさんの最近の日課は、世界の表側を覗き見る事だった。

自分達とは違って弱いがそれでも精一杯生きている人々の生活を爆笑したり悲しんだり憤ったりしつつ見る中、書物やTV、アニメやゲームにネットにドはまりしていた。

曰く、「だって、本当に久々で面白かったんだもん！」

まあ中世よりも遥かに娯楽面が発達してるのだし、仕方ないよネ！

すっかり私室（客や使用人も入って来れない様なプライベートルーム）はサブカルグッズやプラモで埋め尽くされ、ドはまり具合を如実に現わしていた。

現在は金と手間と時間をかけまくったガンプラのジオラマ等の作成や超人的身体能力を生かしたゲームプレイ等を趣味にしている。

また、裏側へのそういったサブカル系娯楽文化の普及にも努めている。

これで数年以内に動画配信とかも出来るな！

そんな頃、珍しくモーさんでも感心する程の出来の大規模魔術の発動を感知した。

おや？とモーさんが注視すると、原因は日本の神戸もとい冬木市で行われる四

回目の聖杯戦争だった。

60年前に盛大に儀式に失敗したソレが、今またノーメンテ・ノーチェックで行われようとしていたのだ。

この科学技術が発展しまくった現代の大都市で英霊を交えた戦争をしようと言う現代の魔術師達のアホさ加減に呆れつつ、暫しその地を眺めていたら…

騎士王がのうのうと召喚に応じたのを確認した。

「あ“あ“？”

ついつい口から品の無い言葉が出てくるが、努めて平静を保ちつつ、状況を調べていく。

すると、どうやら円卓の欠片を触媒に召喚に応じたらしい。

しかも未だに死に損なっていると来た。

それでもなお召喚に応じる辺り、お目出度い頭だと思ってしまうのはやはり散々苦い目に遭わせられたからだろうか。

「チツ、まあ表側に下手に干渉する訳にゃいかねえか…。」

今直ぐにでも殺したいのを我慢して、モーさんは監視に徹する事にした。

もしまかり間違つてこちら側にまで干渉する様な願望を抱きでもした場合、直ぐにでも干渉できるように。

そして、共に行動する貴婦人との会話から、騎士王の願いが判明した。

「ブリテンの救済だあ？」

阿呆らしい、としか言いようが無かった。

何せブリテンの滅びは人理によって定められた事象だ。

それを覆す事は即ちブリテン以降の世界を滅ぼす所業に他ならない。

そんな事も分からないのだろうか？

否、現実能耐え切れずにプツツンしたと見るべきか。

「こりゃ最悪現地に跳ぶべきだな。」

とは言え、簡単な事ではない。

モードレッドは一応表側で一度死んだので、英霊の座は存在するのだが、本人がこうして世界の裏側に居る事から、例え召喚しようとしても応じるのは偽物しかない。

まあそんな偽物でも並の英霊よりは何かしらの突出した能力を持っているので、決して完全な外れではないのだが。

「ま、早々勝ち残れる訳もないだろ。」

何せ他の面子が強すぎる。

特にどう考えても、物量でのマスター殺しが出来るアサシンに、原初の大英雄たる英雄王の存在が大き過ぎだ。

ライダーは宝具こそ強力だが、本人の技量はそこまでではないし、何よりマスターが未熟過ぎてガス欠になるだろう。

ランサーはマスター共々強力だが…内紛一直線なのでダメだなアレは。騎士王は騎士王でマスターとは早々に不仲で嗤える。

この時点ではまだ、モーさんは参戦するつもり等無かった。

が、総勢6騎ものサーヴァントが一堂に会した直後、異変に気付いた。

雨生龍之介と言う連続殺人犯により、開催地の一般家庭が犠牲になったのだ。

しかも、生き残った一人息子を生贄に英霊召喚を試みていると来た。

「……………」

そして、縛られた子供が、たすけて、と声なき声で呟いたのが見えた。

それを見た瞬間、ブチブチとモーさんの堪忍袋の緒が切れた。

即座に魔術を行使し、召喚へと介入する。

先ず、召喚に応じようとした下種な英霊の魂をぶん殴って座へと送り返す。

次に、召喚によって集まったエーテルを材料に、精神を作成した仮初の肉体へと

移し、嘗て肉人形を操作した時の事を参考に己の肉体として操作する。

一応このエーテル体はサーヴァント・キャスターとしてのソレなので、現在の神

霊としての肉体に比べれば10分の1にも満たないスペックだが、取り敢えず子供

を助けられれば問題ないので無視する事にした。

こうして、モードレッドは再び世界の表側へと戻って来た。

.....

テキトーな詠唱と下手な魔法陣が発光し、輝きの中から現れたのは大型の爬虫類の頭骨で出来たマスクで顔を覆い、黒い革製のコートの下に白地に赤いルーン文字が刻まれたドレスを纏った存在だった。

人の形をしていた、しかしソレを人と言うには余りにも威圧感が凄まじい。ただそこに立っているだけで、ソレは周囲全ての生物を威圧して余りある。

殺気を放てば、或はそれだけで相手を致死足らしめるやもしれない。

「あ、っと、オレは」

龍之介が何とか口を開いたと同時に、人型の怪物はその右手に持つ骨製の杖を向けた。

それだけで、龍之介は何も言う事が出来ずに昏倒した。

「んー！んー！」

縛られ、布を噛ませられていた子供が恐怖の余り呻き声を上げる。

それを見た人外は杖を再度一振りし、縄と布を断ち切った。

「あ…」

「眠りなさい。」

そして、何事か言われる前に、子供の意識を刈り取った。

「さて、後始末をすべきだな。」

遺体のエンバールミングに子供と龍之介の記憶処理。

そして子供を監督役のいる教会に届ける等、やるべき事は多い。

こうして、キャスター・モードレッドの第四次聖杯戦争は始まった。

## 転生モーさんが逝く 第四次聖杯戦争中編

「夜分遅くに失礼。神父殿は居られるか？」

合計6騎ものサーヴァントが一堂に会した後、間もなく夜明けという頃に、言峰教会に珍客がやってきた。

「私が此処で神父をしている言峰です。キャスターのサーヴァント、とお見受けしますが？」

「如何にも。この子の保護を頼みたい。」

そう言って、竜種の骨のマスクをかぶったキャスターがその腕に抱えていた男児を示した。

「その子は？」

「私を召喚した者に両親を惨殺された。記憶は既に弄ったが、こちら側に関わってしまった以上、何がしかの縁が繋がった可能性もある。故に保護を頼む。」

「はい分かりました。そう言う事でしたら、我々が責任を持ってお預かり致します。」

言峰璃正は表向きの中立の役目から、同時に神父としてもこの子供に事情を知る誰かの保護が必要と判断した。

「所で、キャスター殿のマスターは……。」

「単なる連続殺人鬼だ。記憶処理の後、通報しておいた。」

聖杯からの知識及び再日本人化したモーさんなら、その程度は楽々できる。

今頃は家に警察が突入している頃だろう。

「私は少々の野暮用を終えた後は消える予定だ。聖杯に用も無いしな。」

ではな、とキャスターは軽い調子で夜明け近い冬木の街へと消えていった。

「ふむ…一応知らせておくべきか…。」

キャスターのサーヴァントは善性の存在で間違いない。

しかし、その存在が確認された以上、璃正としては先代からの付き合いである時臣と息子の綺礼に知らせるのであった。

……………

「が……きさ……。」

「蟲が喋るな。」

轟々と、間桐の修練場が燃えている。

しかし、上の階には一切の炎も、蟲の一匹も出る事は無い。

既にこの地はモードレッドの神殿と化し、例えば齡2000を超える間桐の怪物であろうとも、神代に匹敵する神秘の満ちる世界の裏側で1500年以上も戦士として魔術師として研鑽を積んだモーさんに勝てる道理は無かった。

地脈の制御を乗っ取られ、自身の工房のある土地を一瞬で神殿化され、瞬く間に無力化された後、一匹も逃さずに灰になっていく。

「さてと。」

「……………」

蟲に集られていた目の死んだ幼女が、こちらに目を向けている。

そこには何の意思もなく、このままではまともな意思疎通も出来ないだろう。

「先ずはこれ飲みな。虫下しだ。」

「……………」

言われるままに少女は渡された指先程の小瓶の中身を飲み干す。

さらりとした若草色の液体には苦みも甘味も無かった、後味だけは青臭かった。当然だ、これの原材料は世界の裏側にあるユーカリに似た木の葉。

だが、似ているのは見た目だけでその毒性たるや中型の幻想種でも一口食べれば意識不明の重体に陥る程だ。

この葉はそれを虫下し、対寄生虫用にしたものであり、その効果は開発されてからこつち、1000年以上改良を重ねて愛用され続けるモリグナのベストセラーな生活必需品として商標登録されている。

「う！」

「無理せず吐き出せ。」

そして、幼女の背中を摩りつつ、その体内の全ての蟲が出ていくまでモーさんは付き添った。

出てきた蟲は一匹残らず燃やしていき、やがて男性器の様な卑猥かつ一番大きな蟲が出た所で虫下しは終了した。

『オノ…レ…サー……トフ…イ…ガ…。』

「死ね。」

こうして、間桐の怪物はあっさりと滅んだ。

「うし、これでお前は大丈夫だ。取り敢えず身体洗って飯食うぞ。」

「う……。」

幼女が微かに頷いたのを確認したモーさんは、幼女を優しく抱えて灰しか残っていない地下空間を後にした。

……………

間桐家と言えはワカメ親子であるが……この当時、慎二は既に余所に避難しており、間桐家長男である鶴野はと言うと……

「聖杯戦争終わるまで余所行つてろ。」

「はははははははいイイイイ！」

そう言う事になった。

なので、現在間桐家には虫おじさんことカリヤーンもいないので、幼女こと桜と

キャスターのモーさん（母性増し増し）しかない。

で、今後の行動なのだが：

（やっべ、後先考えてなかった。）

モーさん、完全に勢いで行動していた。

と言うのも、彼女は基本的に子供の味方である。

子供を虐待して悦に浸ってる化け物がいたら、それは勿論一切の例外無く滅殺対象である。

そして、自身を監視する蟲の視線に気づき、霊体化及び気配遮断により撒いた後、その蟲の魔術的ラインを辿って間桐邸へとやって来たのだ。

そして、1500年ぶりに思い出した原作知識通りか確認した後、自身の宝具と魔術によって間桐邸を自身の工房と化し、地脈の契約すら上書きして殲滅戦：否、駆除活動を行ったのだ。

これで冬木市民大量死のHFルートは完全に閉ざされたと言えよう。

「ま、後から考えるか。」

一先ずは風呂と食事、そしてこの子のためになる事をすべきだろう。

.....

雁夜が間桐邸に一時帰還したのは、別に好き好んでのものではない。

体内の蟲の活動が徐々に弱まっており、バーサーカーを運用するだけの魔力が足りないからだ。

無論、先日の様に活発化すれば雁夜の寿命を益々削るだけだが、それとて必要ならば耐えられる。

しかし、このまま蟲の活動が停止すれば、バーサーカーを維持する事が出来なくなる。

故にこそ、雁夜は一時帰還を決断したのだ。

(クソ…臓硯め、適当な仕事をしやがって…)

そして、何とか帰還した雁夜が目にしたものとは…

「お姉さん、これで良い？」

「お、そーそー上手いね。やっぱり薬味や色合って大事だからね。」



全身に魔力を走らせ、ステータスを一瞬のみ急上昇し、キャスターとは思えない程のステータスとなる。

だが、それだけならかつて日中三倍の状態のガウェインを退けたこの黒騎士、ランスロットには脅威足り得ない。

しかし、ここにいるのは当時のモーさんではない。

1500年もの長きに渡り、影の国の女王や神霊を相手に（不本意だが）研鑽を積み上げたスーパーモーさんの経験を持っているのだ。

何より、この目の前のド馬鹿に負けてやって良いと思う程、モーさんの心は広くない。

「沈んどけ。」

「」

襲うために飛び掛かったのがまずかった。

魔力放出や魔術のスキルを持たないNTR騎士では、空中での回避のしようがない。  
い。

多少の身のこなしなら出来るが、良い鴨にしかならないのは原作にて証明済みだ。

なので、この結果は必然だった。

「うわあ…。」

キーンと、男なら誰でも竦み上がる様な音が、鋭い蹴り足の命中した箇所から聞こえた。

直後、黒騎士はドシヤリと股間を抑えながら地面に落ち、そのまま霊体化して消えていった。

「あんたがこの子の言ってたおじさんか？オレはキャスターだ。取り敢えず飯食おうぜ。お粥位食えるだろ？」

そう言ってキャスターは我が物顔で背後のキッチンを親指で示した。

……………

「さーて、どう動かかねえ…。」  
るるると夜の街を歩く。

彼女にとって、英雄王位しか脅威足り得ない状況では聖杯戦争だろうと幻想種渦

巻く樹海だろうとそう変わりない。

厄介な仕事の3分の1は終わった。

間桐家の蟲退治に雁夜と桜の治療。

虫退治は即日で終わらせたし、治療もつい数時間前に完了した。

とは言え、桜は兎も角、雁夜は寿命が後20年も無い程度なのだが…。

裏側に行けば、もう少し良い素材や医薬品もあるのだが、こればかりは仕方ない。

兎も角、これにより第五次聖杯戦争で大惨事が起こる確率は低くなった。

とは言え、当主を無くして衰退した間桐家に集ってくるハイエナの対策をしなければならないし、大聖杯に混入してしまったアンリマユの事もある。

気を抜く事は出来ない。

しかし、当面は聖杯戦争の推移に合わせて動くつもりだし、抑止力が頑張るべき案件なアンリマユに関しては余り干渉するつもりは無い。

自分が過度に干渉して、英霊エミヤが生まれない様な事態はアラヤとしては最も避けたいだろう。

となると、やり過ぎればこちらごと排除してきかねない。

大筋に余り関係の無い事でしか、自分は干渉するつもりは無い。

ブリテンを滅ぼす際にブリテン島を幻想種を解き放って無人状態にしたのも、態々偽の肉体を作って一度死んでみせたのも、世界にブリテンの歴史は正しく進行したと認識させるための偽装工作だ。

もしあそこで下手にブリテン存続とかやったら、それこそ人理案件になっていただろう。

滅んだと認識させる事で、裏側のこちらへと干渉する必要は無くなる。

と、そんな事をつらつらと考えていると、不意に後方上空から神秘の気配がした。

「おおう！こんな所に英霊とは…お主、キャスターか!？」

戦車（十マスターの少年）に乗った征服王が現れた。

「そう言うそちらはライダーか。何か用か？」

「うむ！我が名は征服王イスカンドル！此度はライダーのクラスにて現界した！キャスターよ、その仮面の下にある叡智、余の下で生かす気は無いか！」

「生憎と、冒険するよりぐだぐだやってる方が性に合ってるね。そのお誘いは断らせてもらう。」

「そうか……ダメかあ……。」

露骨にしよんぼりする征服王、そして背後でぎゃーすか喚いているウェイバー少年。

うむ、実に良いコンビである。

「お、そうだ。お主も付いて来んか？今からセイバーめの城で宴を開こうと思つてな！」

「ほう、酒位は出るのか？」

「無論！ほれ、此処にあるぞ。」

そう言つて戦車に積まれた樽を示す。

すん、と香りを嗅げば、この時代のこの地域にしてはかなり上質な葡萄酒の香りを感じる。

「王の宴に酒だけとは余りに寂しい。オレも参加するから、料理位は出してやるよ。」

決して現世の味覚に引かれた訳ではない。

だが、あの騎士王にもの申す事は山とあるし、奴が苦しむ様はマジ愉悦なので、

ここは参加すべきだろう。

「おお！では共に行くとしよう！」

「応！」

こうして、王達による聖杯問答に一人のイレギュラーが加わる事となった。

---

一応モーさんも王様（現在は象徴制、時折トラブルバスター）なので、参加資格あり☑

## 転生きよひーが逝く

思った以上に長くなってしまった(汗)

私は過去への転生者である。

名前は清姫、貴族の子女である。

で、転生した記憶があるとは言え、贅沢は出来ないが取り敢えず食うに困らない程度の家に生まれた私は、家の生業や貴族の子女としての立ち居振る舞いを学びながら生活していました。

私の家の家業は薬師、所謂医療関係です。

大陸由来の医療技術を編纂したものを参考にした資料を基に主に貴族相手に薬を処方するのが仕事で、私も前世から野草等には詳しくかった事もあり、それなりのものであると自負しています。

とは言え、本当の殿上人相手には致しません。

専ら小金持ちの豪農とか地方豪族相手のものでした。

それにしたって、私ではなく父や兄達が対応するので、私が表に出る事はありません。

この時代の貴族の子女とはそういう生き物なので。

別にその点は構いません。

前世でもインドア派なので、外で冒険するよりも本でも見ていた方が楽しいのです。

ですが、この時代は娯楽が極端に少なく、それを堪能できる程に裕福という訳でもないのが家です。

つまりは暇なのです。

暇なので、家に押し込められた女性陣は常に鬱屈として、娯楽や刺激に飢えています。

なので、芸能や草紙等に精を出すのです。

そんな人達が一か所に集まるから、大奥とかは人間版蟲毒の壺と化すのでしようが、それはさて置き。

斯く言う私は専ら彫刻と嫁入り修行で時間を潰しています。

嫁入り修行は貴族の娘として当然のもですが、やはり前世男だった身としては、女性になったからには己が理想とする嫁になりたいではないですか。

なので、私は物静かで包容力があり、何でも相談に乗ってくれそうな、そんな女性を目指して自分を磨いています。

とは言っても、会話する時に相手の話や言いたい事を全て聞き、否定する事は極力避けて、相手が最も欲しつつ、相手のためになる内容を話す様に心掛けています。

彫刻の方も本格的なものではなく、あくまで手慰みかつ掌サイズから大きくても30cm程度のものでした。

手先を荒らしては両親や侍女に怒られてしまうのだから仕方ないのです。

そんな私の専らお気に入り題材が龍です。

西洋の四足歩行も好きですが、それ以上に東洋の蛇みたいな龍が好きなのです。

西洋の災いや悪魔の象徴としてでなく、東洋の河川の化身であり神である龍こそが私の題材です。

最初は小さな厚めの板を削って作ったものだったのですが、徐々に本格化していき、30cm程の素人仕事とは言え、中々の出来になりました。

しかし、少々作り過ぎて、私の部屋が手狭になってしまいました。

これはいかんと両親らと相談した結果、神社や仏閣に特に出来の良くて大きなものを寄進する事となりました。

これで部屋に空きが出来、また作品の作成を続けるのでした。

今思えば、これがフラグだったのだなーと思うのです。

.....

ある日、本当に稀な事ですが、私と家族（十お付きの方々）で旅行に行く事になりました。

所謂伊勢参りです。

流星は皇室の御先祖たる天照大神を始めとした力ある神々を奉っているだけあって、凄まじい神々しさがありました。

一生に一度は是非行く事をお勧め致します。

マジで、本当に、日本人なら一度は行くべきです（力説）。

その帰り道、休憩のために富田川に寄りました。

今は夏、まだ日も高く、皆暑すぎると木陰で休む中、私はその……はしたなくも侍女に手伝ってもらって、水浴びをしたのです。

一応来る時も水垢離のために入ったのですが、その時は薄いながらも白い衣を纏っていたのですが……今は汗でぐっしょりと言う事もあって、替えの服を用意してもらって、裸になって水浴びをしたのです。

今思えば凄く恥ずかしいのですが……あの時は本当に暑さに辟易していました。服を脱いで近くの松の木の枝にかけて、川に入ります。

暴れ川とも言われる富田川ですが、一ノ瀬と言われる此処は川を渡るのに最も適した場所と言われ、浅くて流れも緩やかです。

なので、こんな風に水浴びが出来るのです。

「ああ、気持ちいい……」

冷えていく身体にうっとりとして眩く。

この時代では氷すら貴重品、況してや夏にこんな涼しい思いをするには水浴びし

かないのです。

「つと、そろそろ戻りますか……あら？」

不意に、川べりの浅瀬で、奇妙なものを見つけました。

褐色のまだら模様のそれは浅瀬でぐったりとしており、明らかに元気がありません。

体長2mは優に超える大きな鰻、オオウナギでした。

そう言えば、この川が生息地でしたね。

よく見れば、鰭や腹部が赤くなり、肛門とその周辺も赤く腫れています。

恐らくはエドワジエラ病、又はパラコロ病と言われる感染症でしょう。

前世ではヒラメや真鯛、鰻等に感染する病気で、時折人間にも感染すると言われます。

治すには抗菌剤か抗生物質の経口投与が必要ですが……この時代、そんなものはありません。

「仕方ありませんね。これも何かの縁ですし。」

が、苦しそうにパクパクと口を動かす鰻を見て、何やら罪悪感が湧いてきました。

仕方ありません、川で涼ませてもらったので、一つ善行を致しましょう。

この鰻を取り敢えず助ける事にした私は早速水から上がり、衣を纏い、荷物の中にあつた私の薬学セットを取り出し、その中にあつた幾つかのものを急ぎ調査します。

材料は干した梅干しとワサビ、他免疫力を強化する作用のある薬物野菜や野草等です。

これを小刀で細かく切り、粉と水と一緒に練って団子状にし、三つ程作ります。その薬草団子を急いで持っていく、ぐったりして口を開けている大鰻の口元へと持っていくきます。

が、嫌々と口にしようとしないので、一縷の望みを賭けて声をかけてみます。

「これは貴方の病氣と闘う力を強めるためのものです。これを食べて、もう一度病氣と闘って下さい。不味いですけど頑張ってください。」

そう言うところらの気持ちに通じたのか、大鰻はゆっくりとでしたが、薬草団子を啜え、飲み込みました。

口に入れた瞬間、オオウナギの表情が顰められた様な気もしましたが、気にせず

残りの分も口元に持っていき、食べてもらいました。

うむむ、こうして見ると意外とキモ可愛くて良いですね。

「後は貴方の体力次第です。どうか頑張ってくださいね。」

その頭を一撫でしてから、私は自分を探している侍女の下へと向かったのです。

この時の私が知る由もないのですが、背後ではオオウナギが去って行く私の背をじっと見ていたそうなのです。

今思えば、これが致命的なフラグだったのだと分かるのです。

.....

伊勢参りから3年後、私が14歳の頃、唐突に嫁入りの話が浮上しました。

「是非我が主の下に清姫様を嫁に頂きたい。」

我が家の下に、富田川の水神の使いを名乗る方々がやってきました。

その目的は私であり、何でも以前川で水浴びをした姿を見初めた上に、見事な龍

の細工や彫刻に一目惚れし、それ以来ずっと探していたのだそうです。

そう言えば、以前伊勢参りのために富田川に行った際、行きの時に作りかけの彫刻を落してしまったのでした。

成程、彫刻と近場の貴族の姫から身バレしたのですね。

「あの、お父様、お母様。少し使いの方とお話してもよろしいでしょうか？」

「清姫…良いのか？」

「先ずお話だけもお聞きしたいと思ひまして。」

うちの両親は割と子煩悩な所もあるので、多少の我が儘は聞いてくれます。

しかし、異類婚姻譚は大抵上手くいかないもの。

まあ主に人間側がやらかすか拒絶するのが原因なのですが、やはり娘にそんな相手と結婚してほしくはないのでしょうか。

「おお、清姫様。決心してくださったのです？」

「あの、その前に一つ、お聞きしたい事が御座います…。」

魚類顔（鯉と鮒）の使者達に若干SAN値を減らしながら、気になっていた事を聞いてみました。

「私が以前薬を上げた大鰻さんはその後、どうなりましたか？」

気になるのはその点です。

あの大鰻さん、折角頑張ったのですから是非とも元気になってほしいのですが……。

「誠、清姫様はお優しい……。心配せずとも、あの方は今元気に暮らしております。」

「そうですか、良かった。」

ほっと一安心である。

意外とキモ可愛い大鰻が元気に暮らしている事は、私にとって確かに朗報でした。「その、嫁入りの件ですが……父母と相談の上でお返事させて頂いてもよろしいでしょうか？何分急な話ですし……。」

「ええええ。構いませんとも。」

と言う訳で、相談タイムを挟みます。

とは言え、此処まで来たら、答えはもう決まっていますのですが。

「お父様、お母様。清はこのお話を受けようと思えます。」

「そんな！清、考え直しなさい！」

「縁談なんて、他にもありますから……。」

だが、事はそうした人間の常識では既に図れない所にあるのです。

富田川の主と言う事は、水神と言う事。

それも暴れ川と言われる富田川の。

と言う事は、断れば激しい水害が起こるのは自明の理。

先ず間違ひなく、近隣一帯の人々に多大な被害が出るでしょう。

逆に嫁入りすれば、早魃等が起きた際に何がしかの援助が出る可能性もあります。

この辺りを治める貴族の娘としては、これ以上無い程の良縁と言えましょう。

「分かった。この話、受ける事にしよう。」

「ありがとうございますお父様。……ごめんなさい。」

と言う訳で、水神への嫁入りが決まりました。

「使者殿、此度の話、お受けいたします。」

「おお、良かった！これで主に吉報をお届けできますな！」

「使者様、これをどうぞ。」

ですが、只では嫁入り致しません。

「む、清姫様、こちらは……？」

「水神様へのお手紙です。どうか届けてくださいいな。」

「畏まりました。確かにお届けしましょう。」

と言う訳で、使者は一旦帰って行きました。

「清、あの手紙には何と書いたのだ？」

「もし水神様がお優しい方なら、私も幸せな結婚生活を送れるだろうものですわ。」

そう言って、私は笑って誤魔化しました。

……………

そして一月後、私は富田川の水神様の下へと嫁ぐ日となりました。

多数の嫁入り道具や衣装箱と共に使者達の持つ輿に入れられて、ゆっくりと歩き出しました。

余りの豪勢な嫁入り道具に若干家の財政が心配になりましたが、結納金も随分な

額が入ったらしいので、大丈夫だと思っておきましょう。

家族と従者一同、泣きながらの見送りでしたが、私は心配していませんでした。何せ、私の手元にはあの時出した手紙の返事が届いていましたから。

「お父様、お母様、兄様方に従者の皆。今までありがとうございます。清はこれから、水神様のお嫁になります。」

涙ながらに私を見送る皆に、私は自分で意識して出来る限り綺麗な笑顔を向け、魚顔の水神の使いの方達と共に富田川へと入っていききました。

当初思っていたのとは違い、水中でもちゃんと息が出来ます。

てつきりここで肉の身体を捨てていくのか思っていたのですが…。

そして、着いた先は川の水深なんてとつくに無視するまで潜った所（恐らく異界の類）、そこにある立派なお屋敷でした。

「わあ……。」

寝殿造りの流行る前、大和朝廷時代の高床式住居を立派にした様な屋敷でした。門が開けられ、中に入ると、そこかしこを魚類や沢蟹、鰻といった水生生物が宙を泳いでおり、確かにここが水底なのだと思います。

そして幾つかの門を潜った後、私は最も大きな建物の中に通されました。

「おお、清姫：以前見た時よりも美しくなつて……。」

そこにいたのは筋骨逞しくも、何処か可愛らしい様な殿方でした。

そう、この方が私を見初めた水神様でした。

「改めまして、清姫でございます。どうか幾久しく……。」

「うむ。其方を迎えられて、私は果報者だ。」

白い婚姻衣装に身を包み、三つ指ついて頭を下げます。

これぞ花嫁の礼儀。

その姿を正に感無量と言つた具合で、水神様は嬉しそうに頷きました。

「所で水神様、やはり貴方様がああの際の……？」

「む、バレてしまつたか。部下達には内緒にせよと言つたのだがなあ。」

驚かせようと思つたのか、水神は実に残念そうにガツカリしていた。

そう、以前この富田川で助けた大鰻こそ、この水神様だったので。

「失礼、診させて頂きますね。」

「む？」

恐らく鰓に当たる顎の付け根を確認し、膿による悪臭等がしないかと嗅いでみる。

「大丈夫そうですね。念のため、後日塩水か葉湯で身体を洗ってみましょう。」

「すまぬな。いや、病気でなければ其方と出会う事も無かったのだが。」

少し照れた様には、何処か大型犬の様な愛らしさを感じるのは、私の欲目でしようか。

取り敢えず、大事な事を確認致しましょう。

「水神：いえ、旦那様。お手紙の内容は覚えていらっしやいますでしょうか。」

「うむ。新婚旅行と言う奴だな。承知している。」

私は以前の手紙で、結婚した際に直ぐに臥所を共にするのではなく、その前にお互いを知り合うために一緒に旅行に行かせてほしいと告げていたのだ。

「今まで陸地で暮らしていた其方の不安も分かる。それでは何処に行ってみたいのだ？」

「そうですね…近隣は多少知っているので、私が行った事の無い場所が良いですわ。

あ、勿論旦那様の行きたい場所等あれば、そちらも見たいです。」

「そうだな……では、率川神社はどうだ？」

「率川神社……ああ！媛蹈躰五十鈴姫命（ひめたたらいすずひめのみこと）様をお祀りしている！」

率川神社は現存する中で奈良最古の神社である。

祭神である媛蹈躰五十鈴姫命は初代天皇たる神武天皇の皇后であり、聡明であり、自身の夫を天皇に据える程の権力を持っていました。

安産、育児、生育安全、家庭円満の御利益があり、特に結婚相手や恋人を支えた一方に大人気だとか。

「あ、そう言えば言い忘れていました。」

今後の予定が決まり、ウキウキとしていた私は、ついうっかり言い忘れていた事を思い出しました。

「旦那様、どうして私の事をお見初めに？」

そう言ってもその事の発端を聞くと、途端に水神は顔を赤らめてそっぽを向いた。

「あ……うむ、そのだな。」

「その？」

顔を赤くして照れる様がとても可愛らしいです。

やはり、この方と一緒になれて良かったと思います。

「病で倒れていた時、お主が水浴びをする様に目を奪われた。その後、私に薬を飲ませてくれた時等、地上に降りてきた天女かと思ったのだ。それ以来、お前を忘れた事は無い。」

「それは……また……。」

自分の顔が真っ赤になっているのが分かります。

誰だって、自分の裸が誰かに覗かれていた事、況してやそれをこうして言われてしまうと、羞恥とか怒りとかで頭が茹ってしまいます。

「私は大きいとは言えまだ鰻の身。何れお前の好む龍にもなってみせる。だから……！」

顔を赤くして、慌てて捲し立てる旦那様の胸元に寄り添います。

花嫁衣裳が汚れるかもしれませんが、この際構いません。

その時はただ、この可愛い人と一緒になれた喜びを表に出したかったのです。

「そんなに慌てなくても、貴方様なら何時か成れます。だから、ゆっくりで良いの

です。」

「清……」

「今宵はいっぱいお喋りしましょう。あの時から3年。その前やその後、何をしていたのか、私に聞かせてくださいませ。」

こうして、私達の穏やかな初夜は過ぎていきました。

お喋りが楽しくて、何時の間にか夜明けになっていたので、最後は一緒に昇ってくる朝日を眺めながら床に付きました。

……………

え？初夜なのに何もしなかったのか？

その……最後に優しく口吸いだけ致しました。

最後の、子作りをするのは率川神社にお参りしてからの事です。

も、もう！マスターと言えど、これ以上はダメです！

ほら、マシユさんも遅いんですから、二人とも寝なさい！

全くもう……続きはまた次回です。

お休みなさい、お二人とも。

………

異類婚姻譚の一つとして、清姫伝説がある。

ある日、伊勢参りの帰りに富田川で水浴びをした清姫が浅瀬で苦しんでいた大鰻に葉を飲ませて助けた。

三年後、川の神であった大鰻の使者からは是非清姫を嫁に貰いたいと告げられた。清姫の両親は戸惑うも、聡い清姫は水神の怒りに触れる事を恐れ、嫁入りする事にした。

その後、二人は率川神社へと参り、安産祈願と家庭円満を祈ったと言う。

この時、二人が富田川から率川神社への往復の道中で困った人々を助けたと言う

逸話が各地に残っており、この功德を持って二人は龍へと昇格し、益々幸せに暮らしたと言う。

異類婚姻譚には珍しい円満な家庭を終生築いたとして、現在も伝承・神話研究の上で重要視されている。

また、この伝承が生まれたであろう時期から暴れ川と称された富田川の水流は穏やかになり、早魃時も渇水する事なく、現代も豊かな水系として重要な水・観光資源となっている。

---

短編なので一話完結です。

FGOで召喚された場合、キャスター☆3詐欺勢の一角として回復とNP供給を  
してくれます。

スペック表は後日の予定ですが、変化持ちなので玉藻に近いスキル構成とステータスになるかも。



## 転生きよひーが逝く スペック表

真名…清姫（転生きよひーが逝く）

身長／体重… 164 cm・58 kg

出典…清姫伝説

地域…日本 和歌山県

属性…秩序・中庸

性別…女性

ステータス

筋力E 耐久E

敏捷D

魔力B

幸運A

宝具EX

該当クラス…術

清姫伝説に登場する、富田川の主である水神に嫁入りした貴族の少女。

薬学を治め、病に苦しむ大鰻Ⅱ水神を始め、行く先々で多くの人々を助けた。

異類婚姻譚では珍しいハッピーエンドを迎えた良妻賢母。

彼女は戦闘を得手としない。

彼女が活躍するのは、何時も苦しむ誰かを助ける時だけ。

その薬学で多くの傷病者を癒し、またその知恵で困難に直面した者を助ける。

その隣には、常に大柄で朴訥な夫がいたと言う。

そんな彼女は家族水入らずの時は子供を甘やかし、夫に甘える。

常に尽くすだけでなく、適度に寄り掛かる事を彼女は知っている。

彼女の愛は決して無償ではないかもしれない。

しかし、求められるものは本当に穏やかで当たり前のものでしかない。

富田川は嘗て暴れ川と言われたが、彼女が嫁入りしてからというもの、氾濫も旱魃の記録もなく、絶えず穏やかという日本でも珍しい河川だ。

そのため、人々はこの川の恵みに感謝し、毎年清姫祭りを開催し、水神と彼女の結婚式を模した祭り囃子をするという。

宝具・雨竜転身家内安全 ランクEX 対国宝具

率川神社で子守明神こと媛蹈鞴五十鈴媛命（ひめたたらいすずひめのみこと）から加護を受け、夫と共に龍となった逸話を再現した宝具。

雨竜となって味方全体に慈雨（葉湯の雨）を降らせ、回復及び状態異常解除、魔

力供給を行う。

その範囲は紀伊国（今の和歌山県）全体に及び、大勢の人々が彼女と彼女の夫、そして媛蹈躰五十鈴媛命に感謝したという。

彼女を召喚する方法は簡単、ただ助けを乞えば良い。

それだけで彼女は快くマスターに協力するだろう。

但し、悪い事をすればその分だけしっかり怒られるので注意。

後、NTRなんてしようものなら、彼女の旦那が暴れ川の化身としての側面を大いに発揮する事になるので、絶対にしないように。

### スキル

- ・変化 A：防御力をUP（3T）＋防御力大UP（1T）
- ・薬学 B：味方単体のHP回復・状態異常解除。
- ・女神の加護（子守明神） B：味方全体のHP回復・NP上昇。対象が子供ならNP獲得付与。

・水神の寵愛 A：自身の防御力と攻撃力UP・ダメージカット状態を付与。

## 性能

キャスターの☆3詐欺勢の一角。

玉藻と孔明を合わせた様なスキルと宝具構成をしており、支援に特化している。

NP供給役の☆5キャスター勢がない場合、極めて重宝する。

そのスキルの割りに低いコストから、☆5キャスター勢が入れにくい時にも役立つだろう。

フランスの序盤から活躍してくれる優良鯖であり、スキルMAXや聖杯再臨も視野に入る。

カルデア内では食堂のおかん勢の一角であり、見た目ロリ臭いのに胸大きくてバブみを感じると評判である。

メンタル面がフランス王妃並なマジ良妻賢母。

NTR騎士やダビデ豚が声をかけるも、戦果は一向に上がっていない。

マスターの事はやんちゃな弟／妹程度に思っているため恋愛方面には決して発展しない。

幕間の物語では、自分（本体）と喧嘩して引き籠られてしまい泣いて謝っている水神を宥めずかして川の氾濫を防いでいる。

なお、その直後ぶんむくれ状態の自分の本体と喧嘩する事になる。

何だかんだ暴れてストレス発散が終わると、宝具効果がUPする。

マジでこんな男心を理解して甘えさせて立ててくれて、料理も薬学も出来て、おまけに甘えてきてくれる彼女とかほすい…（白目）



## 転生きよひーが逝く カルデア編

彼女にあったのは、ワイバーンと狂化した敵サーヴァントの跋扈するフランスでの事だった。

「私は清姫。不調の方は直ぐに声をかけてくださいね。多少の心得がありますので。」

そう言って微笑む和装の姫君に、思わず目を奪われたのを覚えている。

『清姫：日本の清姫伝説の主役だね。水神に嫁入りし、行く先々で多くの人々を助けたって言う。』

「そんな、私はただ少しだけ頑張っている方々の後押しをしただけですわ。」

そんな出会いを経て、彼女は私達のカルデアへとやってきた。

.....

人理修復が始まった当初、カルデアでは常に物資と人手が足りず、職員は食料と

睡眠時間を切り詰め、何とかレイシフトを始めとした重要なシステムを稼働させていた。

なので、最も最初に問題になったのは電力と食料問題だった。

電力の方は復旧できていない区画を閉鎖し、その分を回せば良かった。

しかし、生鮮食品を調理する専門のスタッフはレフの爆破テロによって殉職しており、他のスタッフは本来の業務の方に忙殺されている。

ではいっそ手隙のサーヴァントの方に……と言う事は出来なかった。

当時召喚に応じていたのは騎士王に光の御子、ギリシャの怪物に呪腕に偽侍、血斧王に黒髭、若き日の義経とその部下と、料理関係が出来そうな人材がいなかった。つまり、カルデアの食事情は決して良いものとはいかず（それでも過去の英霊達からすれば、上等なものが多かった）、料理の出来る英霊は是が非でも欲しかったのだ。

そんな時に来たのが清姫である。

薬学を修め、芸術にも理解のある良妻賢母な彼女はあつと言う間に食堂に常駐する様になり、日本食だけでなく洋食にも直ぐに対応し、職員らの胃袋を掌握した。

しかも、レイシフト等で職員らが連日徹夜で観測している時等、必ず差し入れを持ってきたりしてくれる。

また、現在のカルデアの大黒柱にして医療部門TOPのロマンが一人黙って三徹していた時等、強制的に寝かしつけ、ダヴィンチちゃんと共に観測を代わった時もある。

そんなんだから、カルデアお母ん勢とメシウマ勢が揃った現在でも、彼女に甘やかされたい人材は一定数存在している。

正直、ぐうわかる。

考えても見てほしい。

人理焼却と言う未曾有の大惨事を前に日々激務を熟し、疲れて果てている日常。そんな日々の中、朝に食堂に訪れると炊事の香りと包丁で食材を刻むトントンと言う音が響く。

食堂に入れば、割烹着を着た清姫が振り返り、にっこりと母親の様な母性と包容力溢れる笑顔で迎えてくれるのだ。

「おはようございます。もう出来てますよ。」

うっかり嫁に来て下さいと言いきうようになった。

なお、実際にそれを言った職員は「ごめんなさい。私には愛する夫と子供達がい  
ますので。」と断られた。

しつこく言い募った奴やセクハラを試みた不心得者は何故か室内で発生した土石  
流によって押し流されていった。

うん、こんな可愛いお嫁さんだもの。

旦那さんだって心配になるよね、分かる分かる。

.....

こんな可愛い可愛い清姫は、戦闘だって勿論熟す。

無論、その役目はサポートなのだが、回復と状態異常解除、魔力供給を可能とす  
るスキルと宝具を持ち、更にキャスターなのに打たれ強い。

「行きますよ！雨竜転身家内安全！」

そして発動される宝具もまた、彼女らしいものだ。

雨竜へと変化し、雲を引き連れて飛翔し、味方全体に慈雨を降らせ、魔力供給及び体力回復を行ってくれる。

見た目こそ竜なのに攻撃宝具ではないのかと最初は疑問に思ったけど……慣れた今は本当に彼女らしいとしか思わない。

フランスから一貫してずっとお世話になっているこの宝具、砂漠や荒野では水の確保に重宝致しました。

聞けば、旦那さんは暴れ川の化身なので、彼女と対になっているのだとか。

種火周回とかでも孔明もといエルメロイ二世と並び、うちでは大活躍中です。

そう言えば、そろそろ……

「あ、マスター！」

「おや、どうしたの清姫？」

「見て下さい！遂に絆礼装が出ました！」

「え、マジで!？」

そろそろかなーと思ってたら、本当に出た！

「で、効果は？」

「えーと……。」

ふむふむと礼装を示すカードを読んだ清姫は……そのまま懐にしまった。

「きよひー？」

「あははははは……冗談、冗談ですよー。」

そして差し出される礼装。

白無垢に身を包んだ清姫が水面に膝まで浸かった姿が描かれるソレの説明を読んで、愕然とした。

なんだこれは……たまげたなあ……。

「『清姫が装備した時のみ、味方全体にH P U P 十毎ターン回復（小）付与』だと……？」

「あの、マスター？私これで絆MAXですし、他の方を育成に……。」

「きよひー、今度からボス戦もよろしくね。」

「ア、ハイ。」

こうして、我がカルデアのお母ん勢筆頭こと清姫は益々活躍する事となったのでした☆

.....

「ほんとにもー清姫ちゃんが良妻賢母過ぎて、私の出番が減っちゃうじゃないですかー。」

「あ、あははははは……ごめんなさいね、玉藻さん。」

「別に謝らなくても良いんですー。単なる愚痴ですからー。」  
ブスーとした玉藻に、清姫は困った様に笑うしか出来ない。

何せ相手は金毛白面九尾狐であり、その実態は日本神話の太陽神天照大神の分霊なのだ。

つまり、旦那の所属する会社の超々上役、それも会社の創始者一族に連なる者。下手な事をすれば、夫の立場がどうなるか分かったものではない。

無論、今の彼女は権力を笠に着て悪さするとは思わないのだが、それとて必要とならば容赦なく行うのが玉藻という女性だ。

「まあまあ。玉藻さんだって月の方では大活躍&見事良い殿方と添い遂げられたの

ですから、そんな不機嫌にならずとも。」

「それは分かっているんですけどねー今の私とは記憶は共有してもまた別の分霊ですからー。」

「もう、我が儘ですわねえ。…でも、そうやって恋をしようという姿勢は羨ましいです。」

夫である富田川の水神は愛している。

きつと生まれ変わっても、別の形でまた出会って結婚したいなとも思う。

でも、恋思いだとか相手を見つけようと言う事を考える前に夫に求婚されたため、その辺りの経験が清姫には全く無いのだ。

「そうやって、未だ出会わぬ殿方を甘く思い焦がれる、と言うのは素敵だと思います。」

「まーた清姫ちゃんったらそんな可愛い事言っつてー。」

ほう…と頬に手を当てて告げる清姫に、玉藻は呆れる。

婚姻の前、子守明神の下へと参拝にし向かう道中、物凄く焦れったく仲良くなり、甘酸っぱく相手を好きになっていった良妻の姿に、玉藻は口の中が甘く感じられた

ものだ。

「それそれーそんな可愛い事を言っちゃう口はこの口ですかー？ 偶にはもう少し愚痴を言ったりしないとかダメですよー？」

「いひゃいでふいひゃいでふ。たみゃもさんやめちえくください。」

もにもにと搗きたての餅の様な清姫の頬を、玉藻はうりうりと両手で掴むと、横に引つ張るわ上下に動かすわ円を描くわとやりたい放題にした。

自分程ではないが、とてもきめ細やかで白く張りのある肌。「あ、これ旦那さんに（性的に）愛されて女性ホルモン出てる奴じゃんうらやまけしからん」と思い、更に頬を弄る手に熱が籠る。

絶妙に柔らかく、人肌よりも少し低い体温が触っていて心地よい。

まるで水とお湯ともつかぬ温度の水に浸かっている様な、何時までも浸かっていたい様な、そんな錯覚を覚える程に清姫の体温と肌は心地よかった。

「やめひえくくださいやめひえくください〜ふえええええん…。」

「良いではないか良いではないか〜。」

この後、きよひーの悲鳴を聞いてやってきたマスターが激怒するまで後5分。

うむむ、何かやっつけ仕事だな：

次はそろそろシンゴルゴーンかうしおととらの続きにするか

## FGO転生 オイフェが逝く

がくがくと半ば寝ながら書いたから、誤字脱字と内容が酷いかも（汗

オイフェ、と言う女性がいる。

彼女はケルト神話、アルスターサイクルにおいて登場する女性であり、女神であるとも言われるが、詳細は不明だ。

影の国の一角である「揺蕩う島」を治め、その実力は姉である影の国の女王スカサハと互角と言われる。

未来や過去、遠い場所を視る眼を有し、気に入った者に助言を行うと言う。

その最も有名な逸話はケルト神話最大最強の英雄たるクー・フリーンとの出会い、そして予言だ。

オイフェとの出会いと別れ、そして予言により、クー・フリーンは影の国への修行を始めとした数々の冒険を行う事となる。

.....

うっす、オラの名はオイフエ。

2010年代から神話時代にTS転生した者です。

気づいたらマイサンが消え、蛮族同然の暮らしを強制された元シティーボーイ

(失笑) さ☆

糞親父殿や指南役の爺から課された修行を耐え凌ぎながら、何とか今日まで生きてきました。

まあ親父達以上に何故かこつちを殺そうとしてくる愚姉とかいるんで、そっちは余り隔意を抱く事もなかったけどね。

こちとら前世からのインドア派なのに、あの愚姉と来たらやれ修行だやれ精進しろだやれもっと外に出ろだと煩い事この上ない。

インドアを表に出しても良い事なんて無いんだよいい加減にしろ！

なので、徹底的に自分を鍛え、あの愚姉を跳ね除けられる様になった。

が、そしたら今度はあの愚姉も自分を鍛えて強くなったりベンジしてきやがった。なので、今度は魔術を磨いて自分が親父殿から与えられた屋敷へと引きこもり、要塞化した。

結果、多大な犠牲を払ったものの、猪突猛進な愚姉の撃退に成功した。

そこからは来る日も来る日も愚姉と時折やってくる魔獣の類を迎撃すれば、好きな様に引き籠れるようになった。

え？引き籠ってどうするんだって？

こちとら千里眼持ち、娯楽なんてそれだけで事足りる。

前世で未完だった小説や漫画の内容なんかを好きに見る事も自由自在！

更に余所の不思議時空のアマゾネスの宅配便に依頼を出して、現代のゲーム等の品々を持ってきてもらい、電力ではなく魔術で稼働できる様に調整すれば、前世で求めて止まなかった引きこもり生活を満喫する事が出来る…！

こうして、私は自己鍛錬なんかをしつつ、自堕落な生活を送るのだった。

そんな日々がざっと20年近く続いた後、漸くあの蛮族 of 蛮族の愚姉がこの影の国の王として戴冠する時が来た。

漸く、本当に漸くこれで面倒な王位継承権なんてものを投げ出せる。

行きおゲフン！……死に損なう事が確定しているんだから、とつとと王になれば良いものを…。

なんでか知らんけど、あの馬鹿姉はしょっちゅうこっちに突っかかて来ては「王位を寄越せ！」とか「私を殺してみせよ！」、「いい加減に真面目にやらんか！」等と言って殺しにくるのだ。

なお、我が愚姉の容姿は対魔忍染みたピッチリスーツと赤い双槍に黒髪と赤い瞳の美女なので、この世界が型月時空である事が確定したとっておく。

仕方ないから鍛えた魔術を使って、何度か満足するまで死んでやるのだが、その度に激怒して私の趣味の領域である屋敷を壊して去って行くのだ。

はつきり言って大迷惑だ。

修行時代でも散々こっちに喧嘩吹っ掛けてきたメンヘラ気質アリアリな見た目と知識と武力だけは優れた奴だったが、年喰うごとにそれに磨きがかかるってどうよ？

で、先程使い魔があのお愚姉が「今こそ王位を決する時！いざ参る！」とか言っ

て鮭跳びの歩法使って超音速で接近中との報告が来た。

いい加減にしろ。

追尾式自走核地雷ケルト系メンヘラ女の相手なんてしたくないんだよ、こっちは。なので、さくつと転移して物理世界のケルトの方（現在のアイルランド）へと避難しました☆

これであの愚姉が屋敷とその周辺に配備した大量の警備とデストラップの山をクリアして、オレの私室に入ろうとも、残っているのは「王位継承オメデト！これから私生活を犠牲にして王様稼業頑張っただね（笑）オレは迷惑ならん程度に好き勝手するから（意識）」とメモ書きを残しておいたので、これで不戦勝って事で戴冠も問題ないだろう。

.....

「ふー、やっぱり普通の土地は良いなあー。」

散歩するだけで猪とか竜とか蛇とか神霊とかとエンカウントする影の国とは大違

いだ。

あっちは散歩すら命がけだからな！

「あ、そう言えばお金……まあ吟遊詩人っぽい事すれば良いか。」

一応ケルトの最高権力者でもあるドルイドの資格も持っているので、早々困りはしないだろう。

亜空間に荷物とかは突っ込んであるから、必要ならそっちから取れるし。

「さ、行こっか。この時代なら、飯マズなんて事も無いだろうし。」

こうしてオイフェは、女王になったが故に国に縛られ、強くなり過ぎたが故に死から逃げられたスカサハを後目に、のんびりと旅を始めるのだった。

……………

影の国領海内、揺蕩う島にて

「……………馬鹿な…………。」

薄手の特徴的な黒装束と赤い双槍を持った女が、呆然と瓦礫の上で呟いた。

島のあちこち、否、海上にすら多くの使い魔やゴーレム、魔獣等の残骸が散らばり、毒や魔術を応用した悪辣なトラップ群の全てが踏破されていた。

それを成した女は相応に全身に傷を負っていたが、その全てが肌を小さく切るか、僅かに肉を削ぐのみで、その五体に戦闘の支障となりそうな傷は無い。

そんな彼女は今、槍を取り落とし、僅かに破れ、焦げていたメモ書きを手にして、呆然自失としていた。

「……………何故だ…。」

それでもなお、彼女は、スカサハは負けていた。

否、正確に言えば「相手にされていなかった」。

彼女の妹であるオイフェにとって、人類史上でも屈指の実力者である筈のスカサハも、単なる傍迷惑な暴力女でしかない。

この神代ならば兎も角、現代人のメンタルを持って誕生したオイフェにとって、直ぐに暴力で何事も解決しようとするスカサハやこの時代の戦士達は軽蔑に値する者達であり、積極的に関わる気なんて微塵も起きなかった。

顔見知り以外で何かあろうものなら、スカサハと互角に戦える実力で以て乱暴者

を捻じ伏せるか、無抵抗でズタボロになりながら死んでもなお道理で以て説得をし続けるかの二択だ。

前者は二度と馬鹿な真似は出来ない様に両膝両肘を砕かれ、戦士として二度と戦えないようにする。

後者は後者でどちらに非があるのかを明確にし、王族に一方的に手を上げた事も利用して、国全体で村八分状態にされる等、非理性的な行動を行う者を徹頭徹尾嫌っていた。

だが、そんな事は当時若かったスカサハには分からなかった。

振るえば振るう程高まる自分の実力に酔って、取返しの付かない事をしてしまった。

自分と同じ位の實力を持つ妹に勝負を挑み、双方の實力を高めようと言う試み。スカサハは喜々として武器を振るい、オイフェはうんざりした顔でそれを受け、回数が重なる毎にその瞳を冷え冷えとしたものへと変えていった。

それをスカサハは気付きつつも、武をぶつけ合う楽しみを優先して、眼を反らし続けた。

その果てが、この結果だった。

『戴冠おめでとうございます。』

益々の御国の発展をお祈り申し上げます。

ですが、現状私が国にいては、私を担ぎ上げて利益を得ようとする輩に利するばかり。

なので、私は国を去り、別の土地へと向かいます。

これよりは我が身を妹と思わず、国のために終生尽力して頂く事を願っております。

オイフェより

』

そんな事務的な言葉と報告が欲しい訳ではなかった。

違う、そうじゃないんだ。

私はただ、子供の頃の様子にお前と戯れていたかったんだ。

難しい事を考えず、ただ一緒にいて、苦楽を共にしたかった。

この影の国で、最早私と戦えるのはお前だけで、お前と戦えるのも私しかいなかった。

だが、そんな子供心は親や周囲の大人達からは見えない。

生半可な知識があっても、相手への思いやりに欠けた少女時代のスカサハでは、妹の眼の奥に光る軽蔑の色に気付く事は出来なかった。

妹が争い事を極端に嫌い、それを自分に強制させるスカサハを心底嫌っているという事に。

その結果がこれだ。

自身を殺し得る数少ない人間の一人である自身の妹との絆を、スカサハは彼女自身の欲と行いによって無くしてしまったのだ。

「違う、違うんだ！私はまだ、お前と一緒にいたかっただけで……！」  
だが、全てはもう遅い。

オイフェは影の国を去り、最早この国にスカサハを殺せる者は一人もいない。惨めに毒を飲むか、この首を刎つ切るか、心臓を貫くか。

そんな名誉も何もない状況なら、もしかしたら死ねるかもしれない。

しかし、そんな惨めな死に方を、誇り高き影の国の女王となった彼女が選択できる筈もない。

「すまない…すまない…：…オイフェ…：…！」

たった一人となってしまうた未だ若き女王は、自身の過ちに気付いた所で死ぬ訳にはいかない。

彼女の他に王位を継げる者はなく、戦士としても魔術師としても、多くの弟子を取ってしまったが故に迂闊に動く事も出来ない。

スカサハは己自身の咎で愛する妹との再会の権利を剥奪されていた。

残ったのは、瓦礫の山の上で哀れに泣き出す女が一人。

だが、誰も声をかける事は無い。

この島にいた全ての生き物を殺し尽くし、今また勝手な理由で泣き叫ぶ女に、誰も味方はいなかった。



## 現在考えてる小ネタ集

### 1、ゴブリンスレイヤー世界にゴブリンで転生

タイトルが全てを物語る殺伐世界。

転生チート等と言う甘えたものはなく、時の神の悪戯によって主人公はただのゴブリンとなり、生き残るために足掻き続ける。

しかし、通常の小鬼と違い、彼は人間としての倫理観を持ち合わせていた。

それが彼が唯一人間であった頃の縁であり、それを捨てる事は自己否定だからだ。彼は群れからも人間からも一人逃げ隠れ、子狼を育てて相棒としながら、森の中で狩りをして生活した。

金属製の道具や武器は人間のゴミから回収、或は他の小鬼から奪う事で得ていた。人間を殺すのは躊躇うが、小鬼を始めとするモンスターの類を殺す事に躊躇いは無かったが故に、彼は何とか生活できていた。

この世界のものではないとは言え、文字と数字を高度に扱い、勿論道具の使用や簡単なながらも「自ら考え、作り出せる」力を持った小鬼と言う、この世界において

はある種凄まじい危険な存在が彼だった。

そんな彼の暮らす森に、あの男がやってきた。

そう、小鬼絶対殺すマンことゴブリンスレイヤーだ。

ゴブスレは森の中の巣を殲滅したが、まだ駆け出しの頃だった彼は深手を負ってしまう。

傷つき、気絶した彼を拾ったのが主人公だった。

薬草（ヨモギ）を煎じただけの簡単な薬を傷に塗り、水に蜂蜜と塩を溶かした水を飲ませ、身体を温める事で、何とか多少回復したゴブスレだが、彼を手当てしたのは不倶戴天の仇である小鬼（中身は人間）だった。

葛藤するゴブスレだが、主人公が異国の言葉（カオス陣営の共通語すら無理）しか話せない事を知り、知識や技術を広める恐れが無い事を知ると、取り敢えず殺す事は決意しつつ様子を見る事にする。

主人公もゴブスレの只ならぬ憎悪と殺意にビビりあがるも、怪我人だからと何とか治療を続けた。

一週間程、二人は警戒しつつも狼も交えて共に暮らし、遂にゴブスレも出発する

事になった。

しかし、このゴブスレ、やはり主人公を殺す事を諦めてはいなかった。

だが、高い知性と相応の技量を持つ相手に、如何にゴブスレも手負いではどうにもならない。

なので、取り敢えず家へと戻り、装備を整える事にした。

そして主人公の家（粗末なボロ小屋）から幼馴染の暮らす農場へと戻り、装備を整え、再度森の小屋へと行った。

しかし、ここでは多数の小鬼の死骸と虫の息の主人公がいた。

余所から渡って来た群れに目を付けられ、配下に加わる様に言われたものの、言葉が通じない故に話し合いは決裂し、殺し合いへと発展してしまったのだ。

狼も既に死んでおり、三本も剣を受け、血を流し過ぎた主人公は末期の時を待つだけだった。

ゴブスレはそれを見て、他の生き残りがいないか確認した後、主人公が息を引き取るまで、その手を握って静かに見つめていた。

で、気付けば主人公はまーた時の神の悪戯によって、今度は可愛い女の子（神官適正高し）になってたのだった☆

「お前な！引き際位見極めろって何時も言ってるだろ！」

「問題ない。予想通りだった。」

「アホか！安全マージンは過剰な位で良いの！油断した奴からぼっくり逝くんだよ！」

「大丈夫だ。お前もいる。」

「ッ！この、ド馬鹿！」

さあ今度の主人公は男としての尊厳か、女の子としての幸せのどちらを選ぶのか…。

神様達はダイス片手にwktkしながら君達を見守ってるよ！

2、Fateで行くSF

時は25××年！

人類が宇宙に進出し、他の銀河にまで入植した時代。

そんな時に外宇宙からやってきたインベーダー！

彼らは嘗てピクト人と呼ばれた戦闘民族であり、「オレより強い奴に会いに行く」をモットーに生きている傍迷惑な奴らだった！

攻撃され、次々と殺戮されていく人類！

宇宙艦隊も、各星系の防衛部隊も、多大な被害が広がっていく中、遂には地球すら奴らの矛先が向けられた！

そんな時、人類は手段を択ばず、外敵を排除する手段を模索した。

そして見出されたのが衰退し尽くして単なる学問と成り果てた魔術を管理する三つの協会、その中のアトラス院だった。

人類の滅びを回避するために更なる滅びに遭遇してはまた回避した先で…を繰り返し、遂には七大兵器なんてものまで作っちゃった基地外共の巣窟だ！

彼らは偶発的に入手した聖剣の鞘とカリバーンの欠片をホムンクルスに搭載、更に七大兵器及びその派生系を装備させた最終鬼畜殲滅兵器を開発、これを投入した。

外見は未だ成人していない清らかさすら感じる少女（アルトリア顔）だ。

しかし、彼女の全身を覆う紺色の装甲や物々しい武装、無機質な銀色の髪、病的に白い肌、歯車の様な瞳が、彼女が人ではないと物語っていた。

そして、鋼の救世主（メシア）は地球上の侵略者を掃討すると、平和を取り戻すために宇宙へと旅立った。

「という旅立ちだったんですけど、宇宙って広くて広くて。なもんで、途中で敵の親玉に話付けて、定期的に私が遊んであげるから侵略止めるって話になったんです。」

「君をここ（カルデア）に呼んどいて何だけど、それ大丈夫なの？」

「あー多分何とかなるんじゃないですかね？何か最近私の妹？姉妹機がロールアウトしたそうですから。まだ会ってないですけど。」

そして遅れてやってくる妹。

「お姉様、ああお姉様、お姉様（五七五）！貴方様の妹が遠き世界の壁すら超えて会いにやってきましたわ！」

「何故こんな性格に…。」

「良かったねセイヴァー！家族が増えたよ！」

なお、適正クラスは（一応）人類救ったのでセイヴァー（魔神柱・人類悪特攻）です☆

偶にやらかすと夢枕に覚者大先輩や大工大先輩が立ってお説教されるよ！

『告げるはフェニクスという我が音韻。七十二柱の魔神』の一柱／真実／再開因果。』

「成程、これが魔神柱。醜いといしか言いようがない。では行きますよ妹。共にこの悪を討ちます。」

「了解。ステータス、オールグリーン。これより全力戦闘機動を開始します。」

なお、宇宙で戦うだけあって、攻撃範囲は対軍とか対城とか対国な模様。

「条件完了。この一撃により、平和の到来を。『約束された平和の剣』!!」

彼女が勝利した後、平和が訪れる。

人類全体に平和を齎した、彼女だからこそその宝具である。

「まあ鞆も一応使えるので、ぶっっちゃけ痛いけど勝ちの見たヌルゲーって言うか。」

「台無しだよ!？」

---

続きません☆



## FGO転生 オイフェが逝く2 大幅加筆修正

色々矛盾点があったので、大幅に修正しました。

オイフェとて、最初からスカサハと疎遠だった訳ではない。

寧ろ最初の頃、まだ鍛錬が始まる前の幼い頃は極普通にそれなりに仲の良い姉妹だった。

黙々と本を読むオイフェにお転婆なスカサハ。

共にこの時代でも最上位の血統と地位に生まれた二人の幼い頃。

短くとも何の隔意も無かった平和な時代は確かにあったのだ。

拗れ始めたのは、彼女らの他に子供が生まれなかったが故だった。

通常、王位を継承するのは男系の長子であるのが相場なのだが、父王は男子に恵まれる事は無く、後継者がいなかった。

そのため、当時の影の国の王たる父はほぼ互角の才覚を持つ二人を競い合わせる

様に仕向け、より王に相応しくなった方を後継者とすべく鍛えた。

これに妹と大手を振って殺し合ふもとい鍛錬が出来ると喜んだスカサハは、心底面倒くさそうにする妹を無理矢理鍛錬に参加させ、危うく殺しかけた。

未だ加減を知らず、しかし才能とやる気は人の10倍はあるスカサハに対し、インドアのオイフェではまるで歯が立たなかったのだ。

そもそも、前世で平和な国の最も平和な時代で闘争心とか心の牙とかを折られた社畜な人生を送ってきた中の人からすれば、武術の鍛錬のために実の姉妹で殺し合いかマジナイワーとしか思えなかったので、モチベーションが底辺だった事もあったが。

それでも一方的に死ぬ一歩手前まで追い込まれたのだから、(ケルトの)一般的な戦士ならば当然の反応である、相手に服従するか報復を誓う。結果的には強くなる事を期待して、父王や師匠らも二人をギリギリまで止める事は無かった。

だが、それはオイフェにとって逆効果だった。

元々身体を動かす事にも、強くなる事にも、権力にも興味のない彼女は、持って生まれた千里眼と前世の記憶から、早々に後継者レースから離脱しようとした。

王の職務なんて面倒でしかなく、また多すぎる富も敵を呼ぶ。

争い事を厭い、静かな暮らしを望む彼女にとって、後継者に指名されるなんて死んでもご免だった。

だからこそ、早々に父にその事を伝え、スカサハとも距離を取り、用の無い時は己の部屋か城の書庫へと籠ろうとしていた。

その矢先にこの出来事である。

やはり蛮族文化（…文化？文化って何だっけ？殺し合いの作法じゃないよね？）には相容れないと悟ったオイフェは、絶対にこの国の連中と縁を切る事を誓い、そのための行動を開始した。

だが、当時の未熟なスカサハにとって、今までずっとべったりで半身とも言える妹と別行動なんて嫌だった。

だから、スカサハは嫌がる妹を無理矢理修行に参加させ、父や師がやる様に一方的に攻撃した。

この時、オイフェの心の内に久々に殺意と言う感情が灯った。

元々要領の良い彼女は直ぐに父と師から武術を学び、未だ未熟なスカサハに直ぐ

に追いつき、互角の戦いをしてみせた。

とは言え、流石に止めを刺す気は無かったらしく、必ず臍物が飛び散ったり、四肢が切り落とされたりする前に止めたが。

これにスカサハは喜んだ。

やはり自分のやり方は間違っていないのだと、彼女はここで間違った方向に判断してしまった。

この時、幼いスカサハは話し合いと言う最善の方法を選ばず、暴力と言う最悪の方法を選んでしまった事を知らなかった。

武で競い、魔術で競い、叡智で競い、戦果で競った。

だが、気付けばオイフェはスカサハの前で鍛錬以外で口を開かず、目も合わせなくなっていた。

これにはスカサハも焦り、何とかその気にさせようと、自分を意識してもらおうと挑発したり、発破をかけてもみた。

「貴様に王位は渡さん！」

「その程度か！それでは殺されてやれんな！」

「いい加減に真面目にやらんか！」

だが、その全てが益々オイフェの憎悪を煽る事にしかならなかつた。

どうすれば良いか、スカサハには分からなかつた。

次期王位継承者であり、王女でもある彼女の経験と知識に、仲違いした相手との仲直りの方法は無かつたからだ。

そうこうする内に、ドンドン溝は広がっていき、遂には鍛錬の時以外は顔を合わせる事も無くなつていった。

これに困つたのが父王だつた。

競い合うのは良いが、此処まで完全に仲違いするとは思つてもみなかつたのだ。既にオイフェの目には父も姉も、周囲の誰も彼もが敵としか映つていない。

侍女や庭師等の使用人、国に住まう民ですらそうなのだ。

此処まで来て、神代のケルトと言う環境が次女には水と油レベルで合わないのだと、漸く父は気付いたのだつた。

そこで、少しでも歩み寄ろうと思つた彼がオイフェに何か欲しいものが無いかと尋ねた時、オイフェが答えたのが「揺蕩う島」だつた。

不定形かつ不規則に海上を移動するその島は、常人では決して侵入できない。

だが、誰とも会わずに引き籠るには最適の場所とも言えた。

父はこの願いの裏にある考えも把握した上で承し、オイフェが揺蕩う島へ引越し準備する間、スカサハに王となるための最終試験と称して数々の難題を与え、距離を置かせた。

その隙にオイフェは引越しを完了し、スカサハが戻ってきた頃には既にオイフェが島に引き籠もって幾年もの年月が経っていた。

全ての課題を終え、更に成長したスカサハは王位に就くために解決すべく最後の課題として、妹の住む「揺蕩う島」へと向かったのだ。

そこには彼女が求めるもの等何もないとは知らずに。

残っていたのは殺意しか感じられない無数の呪物や罫に魔獣。

事務的な別れの挨拶以外何の言葉も無い、徹底的な拒絶しか、そこにはなかった。

.....

てくてくと、道なき道を歩き続ける。

もう影の国を出てからどれ程の月日が経っただろうか。

今日も今日とてあちこちをほつつき歩いている。

何でもある異空間でのんびりするのも良いのだが、最近はこうして散歩している事が多い。

実年齢を考えると、そろそろ徘徊老人とか言われてもおかしくはないのだが、誰にも迷惑をかけている訳ではないので良いだろう。

「あ、先生！おはようございます！」

「おはよう、フェルグス。今日も鍛錬は欠かしていないようだね。」

「はい！日々是精進です！」

最近の趣味として、あの駄姉と同じ様に人を弟子にしている。

とは言え、教えるのは大抵は教養（法律や道徳、歴史や医術に料理等）で、戦闘には余り寄与しないものだ。

迂闊に武術なんて、それもあの駄姉と同様のものを教えてみる。

間違はなくケルトの修羅度とそれによる被害が跳ね上がるぞ（元から修羅だとは

言つてはいけない。

なので、行き当たりばつたりとその人物に必要な知識を押し売りの様に教えている。

ま、単なる暇つぶしのつもりなのでこちらは気楽だが、時折それを気に入ってリピーターが出る事もある。

このフェルグスもそうした者の一人だ。

「やはり善き王となるのなら、日々の鍛錬と勉強は欠かせませんからね。」

「そうだね。君は天才的な名君には成れずとも、努力すれば良い王にはなれるだろう。だからこそ、歴史と法を学ぶべきだ。」

「はい！今日もよろしくお願いします！」

（あく素直なシヨタ王子様に癒されるんじゃ〜。）

内心でアホな事を考えつつ、オイフェは今日の授業の道具と教材を異空間から取り出して、将来の名君のために機嫌よく授業を始めるのだった。

なお、彼女の期待と善意は将来筋骨隆々の偉丈夫となったフェルグスに思いつき

り裏切られる事となる。

.....

オイフェ、というドルイドの女性の名は今やアルスターで知らぬ者はいない程の名教師であり、深い叡智と優れた魔術と武術、何より高潔な精神性で知られていた。飢えた者がいれば、その者に飢えを満たすためにその者に合った食料を得る方法を。

病人がいれば、その病を治す方法を教え、更に治療する時もあった。

争う者達がいれば、事情を聞き、双方が納得する方法を。

彼女は争いを嫌い、苦しみを嫌い、不条理を嫌った。

それを無くすために和を尊び、幸福を是とし、道理を守った。

勿論、そんな彼女をケルトらしくないと言う者もいた。

だが、ドルイド（女性はドルイダス）と言う者は元々政治家であり、宰相であり、裁判官であり、司祭でもある。

人とは異なる価値観と権力を持った特権階級である事から、然程重要視される事は無かった。

文句を言う人々以上に、彼女に感謝している者達の方が多かったと言う事もあるが。

また、彼女が注目を集めたのはその美貌もあった。

肩口までの新月の夜の様な黒髪は後頭部で短い馬の尾の様に結ばれていた。

葡萄酒の様な深みのある緋色の瞳は、常に穏やかに周囲を見守る。

女神であっても早々見かけない程の美貌は、相手が罪人や浮浪者であっても常に微笑みを浮かべている。

このケルトには他に類を見ない程に穏やかな精神性と能力、美貌を併せ持つ彼女を心底憎む者はいなかった。

そして、そんな美女となればものにしようと考えるのが世の男の常だ。

が、当然の様にアタックした者達は悉く振られた。

その手の積極性を持つ者達は大抵彼女の厭う争いを好み、不条理を成した事があるからだ。

ではそうでない者と言うと、誰も思いを告げに行かない。

そうした者達は皆「芽」が無い事がはっきりと理解できるからだ。

何せ相手はドルイドでも特に優れた者の一人。

財産も、名誉も、知恵も、武力すら並大抵の相手では太刀打ちできない程だ。

「自分は〜で、物凄く〜だ」とか、そんな分かり易いケルト的な口説き方ではどうやっても墜ちる相手ではなかった。

そんな彼女だが、決して結婚しないと言う訳ではなかった。

とあるドルイドが彼女に「貴女は結婚するつもりは無いのか？」と問うた時、彼女は苦虫を噛み潰した様な顔で答えた。

「私は以前、千里眼で未来を見た時、『我が子を抱いて微笑む自分自身』を見た事がある」と。

問うたドルイドはどういう事かと驚くと、オイフェは溜息を吐きながら答えた。

「千里眼等で未来を覗いた時、ほぼ必ず『その者の望まない未来』を見て、それを確定してしまう」と。

彼女の持つ未来を見通すと言う千里眼。

それによって垣間見た他の千里眼保持者達との共通点。

人類史における自身の役割、そして「確定された望まない未来」。

彼女は他に何を見たのか、決して言う事は無かった。

「私は結婚し、子を成すだろう。私はそれが絶対に嫌だ。」

それきり、彼女はこの話題に触れなかったそう。

「私が結婚し、子を成す相手。それは『二人の女王を射止めた英雄』だろう。」

オイフェ「男の人格持ってるのに男と結婚とかないわー………ないわー（震え声）」

---



## 小ネタ集2

やるかどうか未定のネタ集です。

### 1、Fateで転生鬼オリ主

転生したら鬼子として青い目を開けた状態で生まれたオリ主が鬼子として追われ続け、やがて本当の鬼になってしまう話。性別はどっちでも可。

預けられた寺からも追い出され、やがて山中にて修行している山伏に拾われ、師匠と仰ぎながら生活し、術を覚えた。

その後は人に化けながらあちこち旅しながら知識や技術を習得・書物等の珍しい物品を蒐集していく。

その過程で、覚えた術を使ってプチ精神と時の部屋（掌サイズの箱の中に作った異界。外の三倍の速さで時間が過ぎる）を作り、そこに行き場のない人間達を入れ、農耕や原始的な養殖に酪農等をさせて、食糧の安定供給を実現した。

ただ、一箱辺りの作る量は微々たるものなので、ドンドン増やしていった。

そんなこんなで諸国漫遊・日本全国津々浦々を旅した結果、余りの娯楽の無さに切れる。

未だ文化の発展し切っていない時代なので仕方ないよネ！

なので、前世の記憶と今世の知識や技術頼りに彫刻（フィギュアやプラモ）に美食（飽食文化）等を作っていく。

次第にそれを売る様になり、何か人気が出てしまい、止めるに止められなくなってしまう。

その内、政府側（朝廷でも戦国大名でも可）に怪しまれ、確保され、事情を問いつ質される。

戦闘能力は普通の人間相手ならいくらでも無双できるが、抹茶と末法キメたS A M U R A I 相手ではどうにもならないので、正直にゲロツた。

・平安時代で朝廷の場合

頼光「では中の人々を解放なさい。」

鬼主「人数多いけど大丈夫ですか？」

金時「おいおい、把握してねーのかよ。」

鬼主「ざっと50万人ですかね？赤子までは生憎と…」

四天王（アカン）

どう考えても朝廷がパンクするので、そのまま鬼主は食料調達のためにお寺か神社で封印と言う名の飼い殺しに合います。

神としての名を贈って祀るのもok。

・平安で大江山の場合

茨木「さあ出せ出せ出せ菓子を出せ！今宵も菓子で宴じゃ！」

鬼主「頭領頭領、菓子は良いですけど寝る前の歯磨きしましょうね。虫歯になりますよ。」

酒吞「あーこのお酒ホンマに良いわあ。酒精が強うて強うて暑くなってしまうけど。」

TOP二人を餌付けしつつ、増え過ぎた人を鬼達に供出するため、都の被害が大幅に減る。

多分一番平和だが、人食いとかマジナイワールなので、あっちこっちから戯れに

攫って喰う他の鬼達の間で肩身が狭い。

見つかつたら問答無用で頼光マママンに殺される。

・戦国時代の場合

ノツブ「ほうほう、使えるのお主。」

鬼主「へへーどうかお命だけは…。」

ノツブ「んじゃワシン国で食料生産しまくれな。」

鬼主「ははっ、畏まりました！」

ノツブ「打ち出の小槌も斯くやの人材とかワシ勝ったな！風呂行ってくるー。」

鬼主「それいじょうはいけない」

やっぱり食糧生産しつつ、ノツブの好きそうな甘味とか家臣の皆さん向けのお酒とか造って本能寺ファイアーまで仕える。

安土城燃える際にさらっと逃げ出し、日本の食糧難の度に活躍する様になる。

クラスは術、スキルは回復とNP付与と鬼らしく変化とか持ってる。

宝具はHP上昇と回復、おまけで全体のスキルや宝具の効果上昇とか持ってたなら面白そう。

典型的な支援系術。

2、SRWOGにアインストで転生

アルフィミーと同じく、人間の要素を複合したアインストとして誕生。

魂は並行世界からアインストの宇宙へと迷い込んだ者を使用したため、原作知識も一通り完備。

アルフィミーとはまた違った個体であり、あくまで人間要素は魂のみ。

ボディはアインストレジセイアのように、一般的な植物・骨・鎧型の複合型。

全高はペルゼイン・リヒカイトとの連携を意識して、20m半ば程。

当初は単なる劣化型レジセイアだったが、形態変化を獲得し、次第に様々な構造や機能を模倣していくニアプトむ。

遂には植物・骨、鎧型の三体への分離合体機能を獲得し、三機の異なる形態へと再合体する。

つまり、生体式ゲッコーロボ化。

中の人は基本的に世界平和とかに興味は無く、インターネットに接続してアニメやSS読むか、又はアインストの宇宙で寝るかしている以外は妹分として意識して指揮官のアルフィミイに従っている。

能力獲得したのも、デザインが邪悪な生体式ゲッターなのも皆趣味であり、それ以上の理由は無い。

インスペクター編の最終話では、最終的に離反したアルフィミイと共にアインスケと交戦、三機中二機まで撃墜されるも、最後はアルフィミイかキョウスケ庇って戦死…と思わせてどっかでのんびり生きてニート生活を営んでいる。

### 3、マッシュ姉番外編

皆さんご存じ拙作の番外編。

各亜種特異点に我らがサドウ（ピースト3でアンリマユのデミ鯖）が逝くお話。各特異点につき一話を予定。

新宿…ほぼ無敵。何せ大勢の悪党と人間がいるから。

アガルタ：変質させられたヘラクレスとかから狂気等を吸出して正気に戻したりと活躍。死にそうで死なない魔神柱にも宝具でずっとダメージ与えられるのでやっぱり活躍。

英霊剣豪：技量こそ低くて当てられないものの、業や呪詛を吸う上に人間沢山なのでやっぱり活躍。

セイラム：まだやってないから不明。

相手が悪党で人間ぶっ殺すの大好きー！（＝標的となる人間がたくさんいる）な程に有利になるので、バビロニアみたいな環境でない限りは活躍可能。

#### 4、レインコートのカロスオーバー

魔界からの本気の大規模攻勢に対し、魔界とのゲート破壊作戦を実行、その際に巻き込まれて他の世界に行ったレインコートのその後の話。

何処の世界でも良いが、最近嵌まってる東洋のヨハネスブルクで死神コナンな所とか良いかも。

或は能力元の本家であるHL、血界戦線でも可。

各国政府やテロ組織に秘密結社と、一度名前が売れば依頼を出してくれる相手には困らない。

問題なのは、どっちの世界にも異能に対処できる連中が一定数以上いること。

HLは言うに及ばず、コナン世界もルパン三世がファンタジー案件を多数解決したりしているので、例え狙われてもどうにかしちやいそう。

が、それはそれとして、やっぱりプライベートではオタライフを満喫する灯ちゃんでした。

え、組織壊滅とか吸血姫退治？依頼されたらね、依頼されたら。

## 血界戦線転生 デザインベビーが逝く

年内の更新はPCの故障もあってこれで最後かもです。

では皆さん、よいお年を〜ノシ

---

死んだ、はずだった。

先行きの暗い人生に絶望してか、日々のストレスと疲労か、それとも事故死か他殺か。

どれだったかは最早分からないしどうでも良いが、間違いなく碌でもないものだったと断言はできる。

そんな死から、気付けば自分は温くてヌルヌルする液体の中で浮かんでいた。

薄暗く窓もない部屋で、妙な液体で満たされた容器の中に、自分はいた。

「やはり一部の発達に問題が…」

「ですが対血界の眷属には…」

「血液操作を応用できないか？」

白衣を着た学者達がこちらには視線も向けずに熱心に会話し続けている。

成程、今現在の自分はどうかやらこの連中の実験体か何かの様だ。

しかも、今嫌な単語が聞こえた。

血界の眷属、確かにそう言っていた。

と成れば、ここはあの技名叫んでから技が命中する対吸血鬼組織が元ニューヨーク、否、紐育で頑張るお話の世界なのだろうか？

決めつけは良くないが、そうだった場合、死亡率が凄まじい事になるだろう。

まあ、それはあくまでHLだからであって、他の場所で暮らす分には問題無いんだらうけど。

「やはり実戦データが無い事には……」

「しかしテストするにもまだ未成熟すぎます。」

「だがこれ以上はスポンサーが……」

おっと、何だかお話の雲行きが怪しくなってきたぞーう。

さらっと確認した所、この身体はかなり幼い。

手足が短くて柔らかく、確認できる場所は全体的に華奢だ。

こんな身体で荒事なんてしようもんなら、一発で昇天できる事だろう。

だが、よくは分からないが追い詰められている感じのするこの連中と来たら、こんな幼い身体で更に実験をするつもりらしい。

端的に言って屑だが、現状ではどうしようもない。

何の訓練や入力も無しに行われるとは思わないが、もしもの時の事は覚悟しておこう。

だが、何れはこの連中に報復する。

人を人と思わない連中、しかも人体実験まで躊躇いなく実行していたであろう連中に、情け容赦は必要ないしな。

そして、嫌になる程の実験とその倍位の気絶と強制的な覚醒を繰り返す日々を送った。

苦痛に次ぐ苦痛に、記憶と意識、人格は磨耗していった。

日も差さないこの場所では、時間の経過を実感する事は出来ない。

ただ、学者達が就寝のためにいなくなる時間が来る毎にカウントしているだけだ。

それによれば、日に数度は実験のための投薬（各種副作用アリアリ）と刺激実験（電撃や熱に寒さ等）で気絶しているらしく、自身の精神が鑢で削る様に擦り減っていく事が実感できてしまう。

まあ前世でも程度は違えどこの手の苦痛には慣れてるので、まだまだ持ちはするのだが。

そんな腹の底に黒いものがドンドン溜まっていった頃だった、転機が訪れたのは。「糞、何がどうなっている!?!」

「警備の連中はどうした！敵は何処の…!」

「狼狽えるな！それよりも今は研究資料の避難が先だ！」

何かここ、襲撃されてるらしいです。

正義の味方的な人だったら良いなーとは思ってますが、はてどうだか…。

「何…?警備部隊が沈黙?相手は……」

あ、何かモニターに監視カメラの映像が出てるらしく、真っ赤に染まった通路らしき所を一人の女性?（見難いけど美人っぽい?）が歩いている。

って、あれ?

殺された死体とか血液が何か吸収されてるくさい。

さつきから真っ赤だった通路が綺麗になっていってるし。

「馬鹿な、血界の眷属に嗅ぎつけられたのか!？」

その映像見てた学者の一人が叫んだので、やっぱり確定らしい。

「全隔壁封鎖！後に施設を自爆させろ！」

「その程度でどうにかなる相手か!?!そもそも我々も巻き込まれるぞ！」

「ならどうしろと言うんだ！」

「いや……此処に取って置きがあるだろう。」

そう言って、リーダー格の学者がこちらを見た。

あーこれはあれですね、試作機なのに攻撃させられるパターンですわ。

斯くして、自分は全く嬉しくない形で、容器の外に出る羽目になった。

「え？」

リノリウムの白い床に立つと同時に、指先を噛んでつけた傷から出血する。

その血液は対吸血鬼、即ち血闘道へと最適化されるべく作られたもの。

極僅かな血液を操作し、ピアノ線以上の細さと頑強さを併せ持った超極細のワイ

ヤーを作り出し、薙ぎ払う。

瞬きも出来ぬ程の刹那で、子供以外の全ての学者達はその行いの報いを受ける事となった。

.....

「おや、今度の出し物は何かしら？」

吸血鬼、血界の眷属を殺す手段は無い。

或は、彼らの祖を生み出したであろう超越存在ならば、その方法を知っているかもしれない。

しかし、現状では人類のみならず、如何なる異界人達でも、彼らの殺害の方法は知らない。

人体のDNAに直接改造術式を刻み込まれた彼らは個体差こそあるものの、身内を除いたあらゆる他者と隔絶した能力と極めて高い術式運用能力を持つが故、傲慢で慢心で残虐だ。

あらゆる法と理を無視して、彼らは今日も血を啜る。

そして今日、自分達の対抗手段を研究していると言う噂を聞きつけ、その噂の次元にやってきた物好きな吸血鬼がいた。

「……………」

通路の奥、この施設の最奥部のドアが開くと、不意に自分がぶちまけていない筈の匂いがした。

夥しい血の匂い。

自分がまいた分は既に吸収しており、何処にもない。

つまり、この奥で人間同士が殺し合ったのだ。

「またつまらない真似を…。」

吸血鬼となってからは何時もこれが。

勝てないと悟った相手は、あっさりと降伏か命乞い、或はこうして自害する。

最後の最後まで必死に抵抗して、剩え自分達と戦える者は少ない。

(これじゃ研究資料も期待できないわね。)

術式を始め、各種知識にも精通しているのが血界の眷属の特徴だが…何の事は無

い、不死による永久ともいえる退屈を紛らわせるための手慰みの一つに過ぎない。この吸血鬼もまた、そうした目的の一環で此処にやってきた。

「ん？」

ゆらり、と通路の奥の部屋から何かが出てきた。

「子供？」

奇妙な子供だった。

全身に返り血を浴びた、真っ白な子供。

肌も髪も白く、目だけが血の色をしているアルビノの子供。

見た所、構造上は間違いなく人間のそれだ。

「……………」

ゆらゆらと、何処か覚束ない足取りで子供は自分の脇をすり抜ける様にして少しだけ右に逸れて通路をすれ違おうと歩いていく。

「少し待ってくれるかな？」

「？」

が、見過ごす訳にもいかないので、吸血鬼は声をかけた。

「後ろの連中は君がやったの？」

「……。」

こくこくと、幼子そのままに答える姿にふと違和感を抱く。

話さない、否、話せないのだ。

（しかし、同胞でもないこんな幼児が複数の人間をあかも殺せるかしら？）

そこで気付く。

この子供こそが、奴らの作った「兵器」なのだ。

（馬鹿な事を。我々を倒すために、新たな怪物に殺されては意味が無いでしょうに。）

例え勝った所で、今度はこの子供とその後継機による問題が出る事だろう。

否、この様子では見た通りの者として制御できていないと見るべきか。

どの道、新たな厄種を生み出しただけでしかない。

（とは言え、どうするべきか。）

ここで殺すのはまあ簡単だ。

しかし、それは何とも芸が無い。

「行く当てがないのなら、私と一緒に来る？」

同胞の中にはペットとして、或いは何がしかの思う所がある故に人間と共に過ごすという。

これもまた永い時を過ごすための一興と、女吸血鬼は戯れに子供を飼う事を決めた。

それがこの子供にとって、その中身の人物にとって、どれ程大きく深い意味があるのかと知らないままに。

「……………」

少し逡巡した後、子供はこくと頷いた。

おずおずと伸ばされた手を美貌の女吸血鬼は微笑みながら握った。

「さあ行きましょう。此処は居心地が悪いもの。」

子供は何も言わない、喋らない。

ただ、自分と同じ白い髪と紅い目の色をした吸血鬼の手をぎゅっと握った。

……………

「例の研究所が壊滅した？」

その報告を聞いた時、ステイーブンの胸に去来したのはやはりな、という思いだった。

あそこは牙狩りでも鼻摘み者の集まりだった部署、吸血鬼を殲滅するために彼らと同じく血闘術を伝える家のDNAを採取し、改造し、同格かそれ以上の兵器を開発するのが目的という狂気に満ちた場所だ。

ステイーブンの家もDNAの提供を請われたが、クラウドの家と同様にこれを断固として断った。

だが、幾つかの衰退した家ではこれに応じたとの噂もあり、流石のステイーブンもこれには眉をしかめた。

「で、原因は？ どうせ実験体の暴走とかだろうか？」

「いえ、それが血界の眷属によるものらしく…。」

「なに？」

普段は人間の行動にノータッチのノーライフキング共が態々自分達を殺すための

兵器を開発している場所に何故？

普通なら開発を頓挫させるため、と思う所だが相手は血界の眷属、未だ殺す方法の発見されていない相手だ。

そんなものを気にした所で何になるというのか？

(まさか、見つけたのか、奴等を殺す方法を？)

ステイブンの思考はそう的外れでもない。

確かにあの幼児は桁外れの才覚と適正を併せ持った怪物的な人間だが、それだけでは吸血鬼は殺せない。

しかし、既にこの街には、ライブラには吸血鬼を数百年封じる手段がある。

滅ぼす手段があったとしても、何ら不思議ではない。

「詳細は不明ですが、現在は研究所跡から出てきたと思われる二人組を搜索している所です。」

「搜索を続行。連絡は密に、決して気取られるなよ。」

「はっ。」

(悪い事にならないければよいが…。)

ステイブンの心配を他所に、二人組は搜索を振り切った後にその一ヵ月後にHL  
に出現、レオによって正体を見抜かれた事から、戦闘に突入する事となる。

その際、吸血鬼を母親と慕い、見事な連携と血闘術を操る子供に大苦戦する事となる。



FGO×デモベ 嘘予告 AD.×××× 変異特異点「異界  
浸食都市アーカム」

活動報告になった宣伝用の嘘予告です。

詳細は活動報告を参照してください。

そこは、本来なら有り得ない筈の特異点。

歴史上の7つの特異点と終局特異点、そして三つの亜種特異点を修正したカルデアが遭遇した新たな特異点。

否、それは特異点とカテゴリする事も疑問符が付く。

アメリカ合衆国マサチューセッツ州にあるセイラムが一夜にして霧の中に没したのだ。

その霧は事件発生から3時間経過した現在もなお拡大の一途を辿っており、合衆国軍はあらゆる手段で以て内部の観測及び侵入を試みたが、悪戯に消耗を重ねた

だけだった。

そこで次の手段として魔術的侵入を試みた結果、聖堂協会所属の魔術師や雇われた在野の魔術師らによって、霧の内部が確認された。

そして、彼らは一旦霧の中から抜け出した後、口を揃えて言った。

曰く、セイラムの面影はなく、巨大な大都市がある。

曰く、その都市の住人は人間と人間以外が複雑に入り混じっていた。

曰く、セイラムの住人は見当たらず、街には暴力と退廃と名状しがたい狂気が蔓延していた。

そして、報告してきた魔術師の多くは重装備で心身を保護していた者を除き、その肉体と精神が変質し、人間以外のものへと徐々に変化していったと言う。

この異常事態に対し、カルデアはアメリカ合衆国からの要請と国連及び魔術協会の認可の下、最後のレイシフトを行った。

無論、唯一の人間であるマスターには十全の対策を施した上で。

『ああ、漸く来たんだね。この世界の最新の英雄。勿論飛び入りも大歓迎さ。この

影法師の用意した劇場、存分に愉しんでおくれ。』

そこで彼らは見る事になるだろう。

この星を虎視眈々と狙っている、この宇宙の外側に住まうモノ達を。

狂気と冒涇と退廃と恐怖と脅威が形を成した存在を。

そして、出会う事になるだろう。

そんな絶望的な存在を相手にして尚、戦い続ける最弱にして最強の存在に。

無垢なる刃、魔を断つ狩人、何もかにも無くしてもなお立ち上がる灰色の王に。

「此処か？ 此処はアーカム。嘗て此処とは異なる世界にあった、在りし日の都市だよ。」

「異世界、という事でしょうか？」

「そう。君たちの世界とは全く成り立ちからして異なる世界だ。最も、既に滅んで久しい上に色々と混ざって入るがね。」



「やあやあ僕はペルデユラボー。君達がこの世界の住人だね、初めまして。お近づきの印に我が屋台自慢の蒸しパンは如何かな？」

「これは素晴らしい…！店主、もう20個お願いします。」

「アルトリアさん、その蒸しパンを買うお金は誰が出すと思ってるのかなー？」  
「安心してください、マスター。士郎が先程投影した品を質屋に出していました。」  
「どっちみち集るの!？」

「で、今回の乱痴気騒ぎの目的は何だ？」

「そりゃー勿論娯楽のためさ。この世界の方から僕達へとコンタクトがあったね。魔人柱、と言ったかな？彼がこの世界の要素で人類を救えないのなら、他の要素を加える事で救いを成そうとしたのさ。僕はそれに乗っかっただけ。」

「ふん、母屋を乗っ取って偉そうに…。」

「それが僕だからね。お陰でこの世界における橋頭保が出来た。後は僕らの存在を



は！そうでなくては面白くない！わが子よ、最新の英雄よ！共に謳おうではないか！終わり行く世界と始まりつつある世界への祝福を！！」

「憎悪の空より来りて」

「正しき怒りを胸に……」

「我らは魔を断つ剣を執る！」

「「汝、無垢なる刃、デモンベインツ！！」」

「さあこの無貌の混沌が言祝ごう、大いなる祝福を！新しい暦を始めようじゃないか！！」

AD・××××× 変異特異点「異界浸食都市アーカム」

人理定礎値——

魔を断つ剣 AD  
・2016

## 嘘予告 FGOの自鯖を特典にして転生した in 血界戦線

エイプリルフル企画です。続きません。

ある日、紐育と言われるアメリカ合衆国最大の都市は異界からの霧に飲まれた。以来、その地は異界からの住人と法則、文物が流入する混沌の都となった。

その地から漏れ出るモノは現代社会において余りに危険なものが多く、その周囲には常時様々な監視と関門が設置され、入る事は比較的容易でも、出るのはその億倍の難易度となった。

だと言うのに、彼の都市から僅かに漏れ出る技術や物品によって、国家間のパワーバランスは容易に崩れ、国が滅びる程の騒ぎもままある事だった。

そんな訳もあり、嘗て紐育と呼ばれた都市は現在はヘルサレムズロットと名を変え、世界中からあらゆる注目の集まる魔都と化していた。

そんな訳で、この街では現在過去未来において様々な思惑を持った者達が蠢くの

であった。

「ふわああああ……。」

そんな都市に、この話の主人公は暮らしていた。

所々跳ねた黒髪に住んだ水色の瞳の少年。

その名を藤丸立香。

嘗て型月系作品を、取り分けFGOをこよなく愛した転生者である。

同時に、神様転生やらかしてスマフォ型礼装で自鯖を召喚&維持できるだけの魔力持ちとか言う下手な聖杯よりも生きたチートである。

「先輩、おはようございます。本日は快晴ですよ。」

「あーマシユおはよー。」

「もう、先輩は相変わらずレムレムしてますね。」

この紐育に投げ出され、何故か身体がぐだ男になって驚いたのも今は昔。

今現在はマシユを筆頭に幾人かのサーヴァントと起居している。

一部、余りに奔放なサーヴァントに関しては野放し状態ではあるが。

英雄王も征服王もファラオも神祖も、皆人間程度が御せる方ではないのだから当

然だが。

彼らは持ち前のカリスマと実力により、あつと言う間にこの都市に馴染んで独自の勢力のトップに納まってしまった。

彼らの頭の中には死後位ゆっくりすると言う思考は無いんだろうなあ……と思いつつ、喧嘩や殺し合いは程々にね、と言って事実上放置しているぐだ男であった。

「あ、旦那様。今日の朝餉が出来てますよ。」

「うーん、今行くー。」

開いたドアから清姫の声が聞こえてくる。

同時に味噌汁の香りがするので、本日は和食らしい。

実に良い、素晴らしい。

やはり日本人としては、朝食にご飯と味噌汁は欠かせない。

幸い、今現在同居しているサーヴァント達の過半数は日系人である事から、和食の確率は高い。

時折、静謐のハサンの中東系、マタハリの洋食等に変わるのでバリエーション豊富で飽きる事は無い。

「おはよう、皆。」

「おはようございます、立香。」

「おはようございます、ますたあ！」

「おはようございます、マスター。」

「おはよ、ご飯できてるわよ。」

こうして、この家の日常が始ま……

「だから夜更かしなんてやめなさいって言ったでしょ！」

「だってだってクロぼっかり勝って悔しかったんだもん！」

「わわわ寝坊してしまいました！」

「ふわ……まだ眠いよ……。」

「起きるのだわ起きるのだわ！ご飯の時間に遅れちゃう！」

「梅干しも、納豆だって、残さず食べようね！」

「あわわわ……ちゃんと起きたから朝ご飯抜きは止めて……！」

訂正、小さな7人もの女の子達も加えて、漸く彼女彼女の今日と言う日が始まるのでした。

.....

「今日から皆、自由に暮らそう。」

ある日、見知らぬ都市で召喚されたサーヴァント達を前に、嘗てはただの少年で、今はもう立派な主である自分達の契約者がそう告げた。

それはどの様な意味があるのですか？

私を嫌いになったの？

何を考えてるの？

その言葉に誰かが疑問を呈すれば、彼は丁寧に答えた。

「カルデアの任務は終わった。人理再編も。そして、皆も座に帰って、僕も日常に帰る。その予定だった。でもカルデアとの通信も出来ず、何故かサーヴァントが全員いて、そして何より特異点とはまた違う、完全な異世界に僕達はいる。」

そこからの先の言葉は、少年自身が何処か躊躇いながらも口にした。

「僕達の戦いは、終わった。だけどカルデアに、元の世界に帰れる方法が皆目見当

もつかない。」

と言うより、本来なら世界間移動など、本来なら第二魔法の領分だ。

それはあの魔術王にすら出来るかどうか分からない規模の神秘だ。

唯一、それを出来るとしたら一人だけ、宝石の翁・万華鏡こと第二魔法の担い手であるキシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ位のものだろう。

「此処まで来れば、皆を縛る理由は無い。とは言え、この世界を混乱させる訳にはいかないから、多少の不思議なら不思議じゃないこの都市内と言う限られたものになるけど。」

だからこそ、少年は決意していた。

今までたくさんのものを貰った英霊達に、人類史の素晴らしい先達達に、僅かばかりの報酬を贈りたいと。

「だからこそ、皆に自由に暮らしてほしいんだ。その先で、生前やり残した事だったり、自分の趣味に没頭したり、取り敢えずのんびり暮らしたり。自分の好きな事をしてほしい。」

ぐるりとサーヴァント達を見る。

皆、見慣れた顔だ。

この2年間、共に頑張って駆け抜けた戦友達だ。

一部、若干どころか深刻な問題児達がいるが……うん、そういったのは監視or介護付きにすればギリ大丈夫かな！（白目）

「聖杯は今手元にはないけど、これが今の僕に出来る皆への報酬だ。」

2年間、ありがとうございました。

そう言って深々と頭を下げる少年に、サーヴァント達はそれぞれの反応を返した。

ある者は涙ぐみ、ある者はこちらこそと感謝し、ある者は少年の成長を微笑み……

「このヴァァァァァカめ！」

ある者は思いつき罵倒した。

「報酬だと？戦いは終わった？帰る方法がない？もう一度言ってやろう、ヴァカ

め！」

ある者……うん、もういいや、名前出そう。

アンデルセンは得意の毒舌を發揮して、自分の契約したマスターを完全に扱き下ろしつつ説教していた。

「貴様自身の諦めと自暴自棄をラッピングしてオレ達に押し付けるんじゃないヴァカ者め！無いのなら作れば良い！無いのなら探せば良い！そんな初歩的な事さえ忘れたかマスター！令呪の補充も出来んからとサーヴァントを律する努力を放棄してからに！第一、オレ達が本当の意味で自由になった場合どうなるか考えろ！」

「ええと……。」

「十中八九、この世界が減ぶぞ。」

きっぱりと、アンデルセンは断言した。

「征服王は性懲りも無く征服を開始し、ファラオは時代遅れの神殿建築、初代暴君など四方八方から問題を起こし、神祖は新興宗教なり新ローマなりを興すだろうよ！その結果、この都市の魍魎魍魎共及び外の人類とのトラブル待った無し！この都市限定だと？馬鹿々々しい！そんなもの、規制した所であつと言う間に飛び越えるだろうよ！」

すげえ説得力だった。

名指しで責められた幾人かは怒ってたが、それでも凄い説得力だった。

ついうっかり、その場のほぼ全員が頷く程度には。

「ちなみにオレは一人暮らしなんて無理だぞ！何せ生前も長い事本が売れずに飢えてたし最後は病気で死んだからな！後輩達といちゃつくのは良いが、オレの生活支援だけは頼んだぞ！」

「あ、それ吾輩もお願いします。創作活動中は色々疎かになってしまいますからな。」

さっきまで凄い勢いで説教してたのに、直ぐこれである。

しかもやっぱりと言うか何というか一人増えてるし。

「えーと……と言う訳で、今後の目標は『他人に迷惑をかけない範囲で自由に暮らしつつ』、『元の世界へ還る方法を探すor開発』、『手を出してきた連中にはきっちり思い知らせる』の三方針で行きたいと思えます。」

取り敢えず、そんな事になった。

ちなみにこの後、キレて暴れるサーヴァント達を鎮圧するのに小一時間かかりました。

.....

『やあ立香君、おはよう。定期報告の時間だよ。』

「おはようございますダヴィンチちゃん。」

朝食も終わり、金だけは黄金律持ち達からの支給で大量にある立香は基本定職に就かず、他のサーヴァント達の手伝いやお世話等をして過ごす。

予定の無い日はちびっ子サーヴァントやマッシュ、マグマダイバースと遊んだりもするが、時折こうしてキャスター組筆頭であるダヴィンチから進捗報告を受け取る事がある。

『やはりと言うべきか、進捗は芳しくない。まあ魔法の領分だからね。何らかの原因が無い限り、早々意識して出来るものでもないさ。』

「まあ出来たら魔術師発狂ものですね。」

第二魔法、その限定的再現。

幸い、お手本でもあるカレイドステッキもあり、当初は数年で済むだろうと思われたこの作業。

やっぱりと言うべきか、魔術に詳しい全サーヴァントが協力しても未だ解析すら

まともに出来ていなかった。

流石は寶石翁の作品と言うべきか、その翁をして「あ、これアカン奴や」と思わせたステッキと言うべきか。

帰還の用途は全くついていなかった。

「まあ仕方ないかあ……。」

『そうだね。我々も甘く見ていたと言うのが本音だ。流石は魔法使い、簡単には行かせてくれない様だ。』

「今後副業しつつ作業続行でお願いします。皆にはちゃんと休憩とらせてあげて下さいね？」

『それは私にデスマーチしろって遠回しな注文かな？』と、冗談冗談。吉報を待つてくれ。じゃー！』

それきり通話が切れる。

あの様子では、流石の万能の天才でも無理なのだろう。

「でも、僕は本当に帰りたいのかな……？」

元の世界、元の自分に。

藤丸立香ではなく■■■■■に。

一人だけの■■■■■に。

答えは簡単、否だった。

家族も友も恋人もない人生より、苦勞の連続だが自分を慕ってくれる者達が多くいるこの世界が、例え危険だと分かっても大事だった。

サーヴァント達に知られれば、きつと怒られるだろうけど。

それでも自分は彼らと別たれたくなかった。

「もう、一人は嫌なんだ……。」

……………

藤丸立香、と言うだけあって、FGOで出来た事は大体できる。

その中には、性別の変更と言うものがある。

「いやー女の子の身体って可愛いし甘い物美味しいし可愛いしで楽しいね！  
そんな事言って楽しんでた時期が確かにありました。」

でも、お人形さんの様に女性陣に延々着せ替えされたり、面白半分の下着までコーデされたり、終いには入浴に誘われたり寝室に連れ込まれたりされると、流石に図太い立香でも駄目でした。

恥ずかしすぎて死んじゃう。

マスターは思った、これ以上の女装（≡性転換）は控えようと。

しかし、そう思うのは遅かった様だ。

「あ、あのさ」

「何だ、マスター。」

「これは、その、どういう事なんでしょうかクーさん……。」

最後の方が尻すぼみになってしまったが、それは仕方ないと立香は思う。

だって今、自分はクーさんの部屋でベッドに押し倒されているのだから。

しかも恰好がクーさんのシャツ一枚で、更に言えばシャワーを浴びて髪を乾かした直後。

はつきり言えば襲って下さいと言っている様な状況だが、まさか本来は男である自分を襲う程にこの神話的プレイボーイが飢えているとは思っていなかったのだ。

フェルグス？あれはケルトでも相当だからカウントしない方向で。

(どうしてこうなってしまったんだ！)

内心でAA略！とか思いながら、立香は今日の出来事を思い出していた。

今日、立香は女の姿で珍しく一人でショッピングを楽しんでいた。

そこにアロハシャツのクー・フリーン(五次)に遭遇、一緒に買い物を楽しんでいた。

だが、唐突な夕立に降られ、仕方なく近場にあつたクー・フリーンの住むマンション(他のクーフリーン及びケルト勢が入居中)の一室に招待され、言われるがままに冷えた身体を温めるためにシャワーを浴び、渡された着替えを洗濯に出して本来の服が乾くまで待とうとソファアではなく目についたベッドに腰かけたのだつた。

(あ、これ襲われても仕方ないや。)

客観的に見ると、どう考えても隙だらけとか鴨が葱背負って自分で羽を筆つて身体を洗い、俎板の上に横たわった感じすらあった。

「現実逃避は良いか？」

「えーとえーと、オレ元々男だし……。」

「構わん構わん。叔父貴程じゃないが、オレも結構拘らん質だしな。」

「衝撃の事実ウ!?」

フェルグス、君は一体剣術の他に何を教えたんだよ!?

立香はこの都市の何処かできつとよろしくやってるだろう豪放磊落にして自由奔放な偉丈夫の姿を思い、内心で力の限り叫んだ。

「えーとえーと、ほら！兄貴って奥さん沢山いるし、師匠だって……。」

「それはそれ、これはこれ。ケルトの文化は知ってるんだろ？嫁さんは養える限り何人いたって良いんだよ。」

「じゃ、じゃあ！オレまだ童貞だから！童貞の前に処女失うのとか無いから！」

「んじゃこの後師匠かメイヴの所行くか。」

「それでいいのケルト!？」

立香は今日何度目になるか分からない叫びを上げる。

本当にそれで良いのかケルト（ドン引き）。

んで、結局処女失うのが先になるのですがそれは。

「男の部屋に上がって、しかも風呂入って薄着に着替えて、その上でベッドに座る？食ってくれて言ってる様なもんだろ。」

「そそそそそそそうなんだけどそのつもりは一切無かったのでごじやりましたてててて」

（何だかクーさんの顔が何時もより格好良いって言うか色っぽく見えるし頼りになる大人の魅力ってかやっぱり凄い鍛えられてて逞しくて見惚れちゃって綺麗であああ（ry）

立香は段々近づいてくるクーさんの顔に何故か頭がオーバーヒートしてきた。

そのため思考がバグりまくってまともな対策が思いつかない。

念話してケルト勢に、特にスカサハ師匠に通報すれば大抵はどうにかなると思うのだが……下手すると他のクーさんと師匠まで参戦して3〜7Pにまで増える可能性すらあると思うと下手な事が出来ない。

そして、勝つとなれば割と用意周到な所あるあるなクーさんが捕まえた獲物を逃がす道理もある筈がなく……

「安心しろ。初心者には優しくしてやる。」

「あっ……。」

そうして、遂に立香（少女）とクー・フリーリンの唇が重なった。

その後の事は、詳しくは語らない。

だが、翌日より半数以上のサーヴァントが参加する「チキチキ☆マスターとメイクラブ大会！〜ポロリもあるよ〜」が勃発、マスターが男女双方の恰好で多くのサーヴァント達に貪られる事となった。

正直に言おう…

書いてて凄く楽しかったWWW

やっぱりTSものって楽しいW

## 仮面ライダークウガ転生 怪人が逝く

何とか完成……（げっそり）

この拙作を先日大変お世話になったぐによりさんに捧げます。

体をほぼ真上から走る灼熱、ほぼ同時に訪れた唐突な炸裂音。

（これ、えーと、あれだ、狙撃！）

そこまで考えて、意識は完全にブラックアウトした。

後から思い出すと、即死間違いなしの一撃を受けてそんな事を考えられる猶予がある辺り、この後に起きた展開の前兆だったのだなあと理解できる。

でもまあその時はそこまで考えられず、こんな思考をする事しか出来なかった。（平成ライダー、それもクウガの世界かよ。）

散歩に来た公園の片隅、目立たないその場所で倒れた自分の傍に舞い降りた擬人化されたスズメバチの様な怪物、即ちメ・バチス・バの姿に、うっかり前世を思い

出した自分は内心でそう叫んだのだった。

.....

「バギング・ドググド・ゲギド。」

これで26。

メ・バヂス・バ（グロンギ語でメ集団のバⅡ虫系のバヂスの意）はそう呟き、次の獲物を物色するため、直ぐに飛び立つ。

ゲゲルの遂行のため、彼は一か所から順に螺旋状にリントを殺害して回っていった。

スズメバチの力を持った彼は、上空から一方的に右腕から高速で射出される針で以て狙撃し、順調にゲゲル（グロンギ語でゲームの意）を進めていた。

未だメ集団である彼は針の生成に時間がかかるために連射する事は出来ず、一定のインターバルを必要とするものの、ゲゲルを成功させてゴ集団に昇格すれば、その飛翔能力と針の射出、そして複眼から来る高い索敵能力を加味すれば（人格や品

性は兎も角)ゴ・ブウロ・グと同様に間違いなく強力なグロンギとなるだろう素質がある。

彼はその複眼で今し方狙撃したリントが確かに死んでいる事を確認すると、針のインターバルが過ぎたのか、あっさりとその場を飛び去った。

だが、バチスは少しだけ早過ぎた。

彼が飛び去ったとほぼ同時、死んだ筈の標的が、僅かに動いたのだ。

.....

「.....」

頭がぼうっとする。

先程頭頂部から真下へと駆け抜けた灼熱は、今は感じない。

代わりに感じるのは寝起きの様な思考の纏まりの無さ、そして何処から湧いてくるのか分からない全身に漲る活力だった。

今にも走り出しそうな体を、しかし酩酊にも似た状態を自覚しているが故に、何

とか立ち上がったまま、直ぐ傍の樹に掴まって体を支えたまま動かない。

少なくとも、この酩酊が消えるまではこのままこの場にしよう。

そう考えていると、不意に足音が聞こえてきた。

「お、おい！君、大丈夫…ひっ!?!」

警官だ、それも配属されたばかりの若い感じの。

恐らくは警邏中を通りかかったのだらう彼は、職務意識に忠実に様子のおかしな人物へと近づいて行ったのだらう。

それがナニであるかも気付かずに。

「こ、こちら〇〇公園内にて新種の未確認生物を発見！至急応援を、応援を！」  
何事か叫ばれている。

そう思った彼は何とか言葉を口にしようとするが、酩酊感が抜け切らずにまともに会話できず、何とかジェスチャーで通じないかと警官に向けて手を伸ばす。

しかし、その動作は未だ若く、荒事の経験の少ない警官には、攻撃のための予備動作にしか見えなかった。

まあ仕方がないだろう。

未確認生命体、グロンギの中にはノーモーションで口から糸を出す第一号ことズ・グムン・バの存在もあり、クウガ警察は基本的に「未確認を確認したら、周囲の民間人を救出・避難させつつ、躊躇わずに撃て」と厳命されている。

後に開発される神経断裂弾でもない拳銃では、基本的にグロンギに小火器での攻撃は最下級のズ集団にすら無力なのだが、この時ばかりはそれは効果があった。

警官は恐怖のまま拳銃を引き抜くと、初弾が空砲である事も忘れて弾倉内の弾丸全てを撃ち尽くした。

「!? ぐううっ!?!」

それは、未だ人間から成ったばかりの彼にとって、肉体面は兎も角精神面では間違ひなく衝撃的な出来事だった。

「うあああああ!?!」

彼は市民を守る筈の警察官により銃を向けられ、剩え発砲されたという驚愕と恐怖により、全力でその場から逃走せんと肉体を暴れさせた。

その行動に彼の新しい肉体に宿った本能、否、彼の中に元々眠っていた「記号」が応えた。

「ガァァァァァッ!!」

「記号」によって覚醒した肉体の背中から、まるで羽化するかの様に何かが生えてきた。

大型の猛禽類と似ているようでしかし完全に別物だが、間違いなく翼だった。

全幅3mはあろうかという、巨大な翼。

彼はそれを真上から一気に振り下ろすと同時に跳躍、一息にその場から飛翔し、逃走していった。

この時より、彼の逃亡生活が始まった。

.....

「な、今度は緑!?!」

処変わって都内某所の遊園地。

そこでは駆け付けた一条警部補と未確認生命体第四号にしてクウガこと五代は第

十四号ことメ・バヂス・バと戦闘に入った。

当初、その場に人間態の第三号ことズ・ゴオマ・グがいたのだが、こちらは一条警部補の射撃によって落とされたバヂスのグゼバ（ゲゲルのスコアカウント用の腕輪）を回収しつつ、クウガの登場と共に一目散に逃走してしまった。

そして始まった戦闘は、序盤はクウガが優勢に進めた。

と言うのも、この時のバヂスは針を発射した直後であり、インターバルの最中だった。

そこに想定していなかったクウガとの突発的な戦闘であり、しかも五代は第0号の遺族の娘さんの件で士気が高かった。

これによりバヂスは一方的に押されていたのだが、状況が逆転したのはインターバルが終了してからだだった。

バヂスはその右手の針を発射せずに長く伸ばし、そのまま武器として使用し始めた。

基本的に刺突のみの針の攻撃を何とかクウガは躲し続けるも、一度だけ左肩のアーマーを掠めてしまう。

その際、針から漏れ出た毒液が付着したアーマーが僅かに溶解したのだ。

幸いにも五代の肉体にまでは届かなかったが、それでも体内に直接注入されれば、どうなるか分かったものではない。

更に毒針に怯んだ隙にバチスは地面から飛び立ってしまう。

それをクウガは敏捷性と跳躍力に優れた青の戦士ことドラゴンフォームとなって追跡、近くにあった建物の屋上へと追い縋るが、飛翔するバチスにとっては足元を除く全方位から襲い掛かれる絶好の場所に、クウガは苦戦を余儀なくされる。

加え、唐突な緑の戦士への変身と過敏化した五感からの情報にまともな戦闘行動が取れなくなってしまった。

「クウガゾジャセスドザバ！」

クウガをやれるとはな！

建物から落とされ、脳髓をガンガンと揺する過剰な情報量に動けぬクウガに、バチスは止めを刺すべく屋上から針を構えた。

「？」

そんなバチスの頭上に、不意に影がかかった。

だが、目の前のある極上の獲物にバヂスの思考は狭まっていた。

「っらあああああああ！」

「ガァッ!？」

普段頭上から奇襲しているが故の、頭上への警戒の低さと慢心、そして油断。

それが故にバヂスはその奇襲を全く予期できなかった。

「お前があああああ!!」

「ッ、ザギン……!？」

灰の…!？」

衝撃と共に手すりへと叩き付けられたバヂスはダメージ以上に驚愕で口を開いた。

自分達グロンギと同じく、リントと敵対的な種族からの奇襲に、バヂスはその思考の殆どを驚愕というノイズで占められるも、即座に戦闘種族らしい回答へと行きついた。

即ち、敵ならば殺す。

「あああああああ！」

「ガアア！」

未だ発射していなかった毒針を振るい、鳥の姿を取った灰の種族との戦闘を開始する。

彼らグロンギにとって、自分達以外の種族は全て、否、自分以外は潜在的に全てが敵だ。

だから、これは彼らグロンギにとって自然な事だった。

ただ彼がその流儀を通すには、幾つかの問題があった。

- 一つ、目の前の灰の種族の戦士が所謂オリジナルと言われる強い個体であった事。
- 二つ、相手が転生者特有の知識持ちであり、彼の手札は殆ど知られているという事。

三つ、純粋に彼との相性がそう良くない事。

「ギ…!？」

困惑と共にバジスの蜂の顎から擦過音にも似た声が漏れる。

それは目の前の敵が自分の苦手な距離から決して出ないからだ。

針を、武器を使うには最適なりーチャ予備動作というものがある。

バヂスの使う針はリーチは短く、刺すために腕を引く予備動作がある。

相手はそれを把握しているかの様にこちらの右腕を抑えつつ、もう片腕と背にある翼と一体化した腕を用いて攻撃してくるのだ。

相手の方が手数もパワーもあり、これでは飛翔も出来ないので撤退も出来ない。こうなると、バヂスの特性を全て封じられてしまった事になる。

「グガアア!!」

それでもバヂスは怯む所か怒りのままに戦闘を続行、この面倒な灰の種族の戦士を殺さねばクウガを狩る邪魔をされた怒りは収まらないとばかりにダメージも気にせず暴れ狂う。

「ぐお!？」

その怒り狂う様に、遂に灰の戦士は拘束を振り解かれてしまう。

そのままバヂスは形勢を立て直すためか、建物から飛翔して撤退していく。

それを灰の戦士は追わず、ただ地上で変身の解けた五代とそこに駆け付ける一条警部補の姿をその強化された視力で見届けていた。

「クウガ……。」

そして、一条がこちらに視線を向けているのに気づくと、慌ててその場から飛び去ったのだった。

.....

「あーしんど……。」

幸い、未だ学生の身分である彼にとって多少の夜遊びは許される範疇であり、そもそも両親が仕事でちよくちよく家にいない彼にとっては、家に一人でいるのはいつもの状況だった。

変わっているのは、彼が不可逆の変化を遂げてしまっており、変身してしまった姿を警察に目撃され、その存在を知られてしまったという事だ。

「これからどうすっかな……。」

幸い、身バレはしていない。

しかし、何時までもそれが続くとは彼は思っていない。

他の仮面ライダーシリーズと異なり、クウガの警察は優秀にして職務意識溢れる

素晴らしい人たちだ。

それに追われる側になった身としては全く以て嫌な事実だが、それ故に何とかしなければならぬだろう。

しかし、自分が成ってしまった者は、そんな彼らをして手に余り、何より危険過ぎた。

「よりもよってオルフェノクかよ……。」

平成仮面ライダーシリーズ四作目である「555」に登場する怪人たちの総称であり、全員が死亡した人間から進化した全身灰色の種族だ。

その能力は個体差が大きいものの基本的に人間では勝てない程に強力であり、勝つには同じオルフェノクや仮面ライダー、或いは重火器の一斉射を直撃させねどもしなければならぬだろう。

個人が持つ資質であるオルフェノクの「記号」が死亡又は他のオルフェノクが心臓を破壊して起こる「使徒再生」で生まれる彼らは、低確率であるものの増え続ける。

反面、長くとも10年程度の寿命というハンデがあるものの、オルフェノクの王

がその問題を解決できる。

更に詳細不明だが、遙か未来か過去においては別の種族と地球の覇権を争っただとか何とか。

「幸い、外見は良いな、うん。」

部屋にある姿見の前で変身すると猛禽類、その中でもコンドルに近い外見的特徴を幾つか持っているためか、クレインオルフェノクにもある脚部の鱗状の模様等、僅かながら共通点がある。

「つーかこれ、オルフェノク版のジェットコンドルの様な…。」

スピリッツで漸く登場できた暗黒大將軍に似てるという事実には、若干凹む。

外見は大好きなのだが、登場できなかつた理由とか散り際とかがその…：…ね？

「やめやめ。取り敢えず今日は寝よう、うん。」

そして少年は夕飯も取らずに布団に包まった。

現実逃避のためのふて寝だったが、それでも混乱した精神は平静を取り戻すために夢の世界へと旅立つのであった。

.....

「うゝゝん。」

「どうした、五代？」

「あ、一条さん。何かね、気になるんですよね。」

「先日の、新しい未確認か？」

「そうですね、灰色のアイツ。鳥っぽい。なんかさーアイツが14号と戦ってくれたお陰で、俺今こうして無事な訳ですし。」

「それで？」

「実はアイツ良い奴なんじゃないかなって！」

「アホな事言ってるんで、少し休め。疲れてるんだよお前。」

「酷い!？」

「とは言え、調査は必要だな。」

所々グロンギ語が間違ってるかもしれないませんが、詳しい方いれば、誤字報告か感想で教えて頂けると助かります。

## IS 転生 魔改造セシリアが逝く

BT 兵器まんまファンネルやね↓原作だと暫く使いこなせないな

↓せや、セツシーにNT 技能生やそう！↓生やしてもそれだけじゃオレT u e e チートにならんな：

↓よしならば魔改造だ。↓せや、久々にスパロボネタも入れよう

↓結果、地雷系SSが出来上がる（いつもの事）

---

私はセシリア・オルコット。

一部ではチョココットとか囃ませとか英国面の被害者とか言われてるが、少なくともこの世界の私は違う。

名前で分かる通り、この世界はあるラノベに酷似した世界であり、実際にISと言われるマルチパワーードスーツの登場により変質した世界だ。

それが今から10年前であり、未だ私が幼い頃の話だ。

で、所謂白騎士事件を機に前世の記憶等と言うものを思い出した私は、速攻である事を行った。

それは両親の旅行の阻止だった。

原作のセシリアの幼少期にあった列車事故、それで死亡した両親の助命。

具体的には急激に記憶が戻ったがために起きた知恵熱（40度台の高熱が一週間近く続いた）及びその後のリハビリの最中、両親が近くからいなくなるのを極端に嫌がったのだ。

夫婦仲が冷えていたとは言え、それでも一人娘の事は可愛く、況してや先日まで死にかけていた娘が「いっちゃやだあ…」と縋り付いてぐずぐず泣きつく姿に親心を動かされない親はいない。

もし何の情動も動かされなかったら、そいつはもう人の親じゃないだろう。

結果だけ言えば、旅行は延期&予定していた列車が重大事故を起こした事もあり、半年後にすっかり健康になったセシリアと共に親子三人で旅行に行ったのだった。

その後はごく普通とは言えないものの、娘のピンチに団結した事で両親の不仲も

治り、今では家庭内に不穏な影は見えない。

それからの私は貴族&帝王学教育を受けつつ、前世でチャレンジした事も無かった多くの事に手を出した。

乗馬に狩猟、釣りに登山に水泳にスケート、それに射撃にフェンシング。

本当に色々な事に手を出し、スペックの高いこの体はそれを瞬く間に吸収し、あらゆるものを楽しむ事が出来た。

その奔放な愛娘の様子を、優しい両親は時に叱り、時に褒め、慈しみながら見守ってくれた。

後は妹か弟でも出来れば言う事は無いので、どこかで葉でも盛ろうかなーと企む私であった。

そこで話が終われば良かったんだけどなー。

翻ってわが第二の祖国であるイギリスだが、IS登場により国防のためにもIS業界に強制参加する羽目になったが、第一世代でISのハイパーセンサーやPIC等の基本的機能を修め、第二世代で浮遊装甲や量子格納機能や後付け武装等を修めた後、開発がドンづまりしていた。

何とか外交努力もあって、ISと言う劇薬を戦争で使用されるのを回避した各国だが、その圧倒的性能は各国を置いてけぼりにする代物であり、自分を守るためにも是が非でも追いつかなければならない。

その中で、ISの生みの親である篠ノ之束博士の作った最新の第三世代ISである暮桜は只でさえ開発の遅れてる各国のハードルをガン上げする鬼畜な存在だった。第三世代ISとは、イメージインターフェイス（IF）を用いた特殊兵装を搭載したISの事だ。

暮桜は対IS装備の極致とも言える雪片を装備し、一撃でISを切り捨てるという所謂ブレオン特化だ。

そしてどんなにメタを張っても、各国は暮桜に、その搭乗者たる織斑千冬に勝てなかった。

幸い、彼女は世界大会第二回目で棄権してから表舞台に出ていないが、何時また同じ事が起きるかも知れない。

それ故に、何とか各国は自国の安全保障のためにも、限られたISコアを用いて、第三世代に手を伸ばす必要があった。

そして、イギリスで生まれたのがBT兵器、所謂ビットである。

小型の攻撃衛星が搭乗者のイメージによって各々独立して活動してビームを発射し、更にビームの曲射・誘導が可能と、それだけ聞けば強そうであるが、いざ作ってみると問題だらけだった。

特にIFを用いての制御と機体制御の両立が困難であり、端的に言って欠陥機だった。

「曲射とかビットと両立するよりも、どっちか片方が効率良いし連射の方が簡単じゃね？」とか「イメージだったって何基もそう動かせないよ。況してや本体無防備になるし。」とか散々テストパイロットから駄目出しされる始末。

まあ英国のIS工廠が英国面全開で作ったんだから、そらそうなるよ。でも彼ら変態技術者は諦めなかった。

既存のテストパイロットが扱えないなら、適正の高いパイロット探して育成すりゃよいんじゃないかと。

で、英国政府も今までの予算を溝に捨てる訳にも行かず、まあそう手間でもないし、と一定範囲の年齢の女性全てを対象にしてISの適性検査を行った。

無論、基本は希望者のみだったが、中には保護者に命じられて嫌々ながら参加した者もいた。

私ことセシリアも、母親から後学のためにと嫌々ながら行ってみた口だった。結果、判定Aを出した上で、BT兵器の適性でも国内で最高値を出してしまった。

「是非！是非とも我が国のIS操縦者として登録をッ！」

そう言って土下座する担当者に両親が困った顔をしている傍ら、私は私でいっばいいっばいだった。

と言うのも、先程ISを纏ってから脳内で変なイメージが表示されているのだ。具体的に言うと、ステータスだった。

『パイロット名…セシリア・オルコット（14）』

射撃に格闘、回避に命中、防御に技能の後ろに数字が、陸海空宇宙にA～Cまでのアルファベットが並んでいる。

そして、注目すべきパイロット技能と精神コマンドの項目である。

精神コマンドである、もう一度言うが精神コマンドである。

これだけで分かる人にはもう分かるだろう。

(まさかの ス パ ロ ボ 仕様。)

未だ各種ステータス欄は高くても50台、低いと何とか二桁に入っている程度と低いものの、パイロット技能に何か変なのがある。

『ニュータイプ Lv1』

(まさかの ニュータイプ。)

なお、精神コマンドはレベル1の現時点で加速と直感が使えます。

いや、道理で転生してから何か勘が鋭くなったなーとか思ってたが、これが原因かい！

(ええ……)

周囲の喧騒を他所に困惑しながら更に読み進めていくと、PPの項目に気付いた。

『PP .. 1000ポイント (転生特典)』

(ええ……) 本日二度目

まさかの事態に困惑しかない。

(取り敢えずEセーブと……お、SP回復もある！ 後は……もしもの時のためにカウンターと。後は二つだけ……)

ここから先は悩み所である。

スパロボ仕様なら、取得可能な特殊技能は先天的なものを含めて合計6個しか取れない。

Eセーブは武器のエネルギー消費を20%減、SP回復はSP（精神ポイント）を毎ターン10（作品によっては最大SPの10%）回復するというスパロボにでも屈指の重要な技能だ。

カウンターは敵からの攻撃時に、確率でこちらが先に攻撃可能になるという技能だ。

（候補としちゃブロッキングに再攻撃、見切りに連携攻撃、集中力と気力限界突破もありだけど…）

幸い、精神コマンドの直感を常時発動してもSP回復があるし、ステータスも典型的なリアル系だし、何よりNTがあるので回避と命中は十分だ。

となると、純粹に攻撃力を上昇させるためにガンファイト辺りを取るべきか？ いや、此処は一度落ち着いてから決めるべきだ。

「セシリア、今日は一旦帰らせて頂きましょう。返事は後日にしますから。」

「はい、お母さま。」

こうして、私の第二の生は新たな局面を迎える事となった。

.....

結局、私はイギリスの代表候補生となる事を承諾した。

平穩無事に生きたかったんじゃないのか？

勿論その通りだ。でも、でもさ……

折角の特典を使いたかったんだもん！

んで、きゃっきゃうふふな学園生活を送りつつロボ娘として活躍したかったんだもん！

幸いにも、こんなアホの我儘を両親は許してくれた。

そこからは訓練訓練また訓練の日々だ。

合間に義務教育と僅かな休日を挟みつつ、十分な錬度に達したと判断されたのか、今度は試作型BT兵器を搭載した第二世代ISに搭乗してテストパイロットを務

める日々。

しかしこのBT、本当に使い辛い。

思考でBTを操りつつ、身体でIS本体を稼働させるのは本当に辛い。

幸いにもNT適性のお陰で操作自体はそこまで苦勞しないのだが、やはり機体の稼働との両立が厳しい。

更には言えば、未だBT兵器の本領たるビームの曲射・誘導は出来ていない。

AIや自律プログラムでも組み込もうとも考えられたが、そういったものにはISコアが拒否反応を示すらしく、上手くいっていないらしい。

現時点でも十分過ぎる成果と言われているが、このままではそう遠くない内にEU内で行われているイグニッションプランで弾かれるのが目に見えている。

なので、どうせだからとサブプランを提案した。

構想としては「技術的に可能かつ現在よりも操作が簡易なBT」だ。

まあスパロボやってる人なら誰でも思いつく程度の代物だが。

1、BTから遠隔誘導機能を無くして、純粋に曲射・誘導可能なビーム砲にする。

これは搭乗者の負担軽減のためのプランで、後のBT制式採用機であるブルーティ

アーズの高機動用パッケージである「ストライクガンナー」の欠陥を解消した形だ。

2、BTからビーム砲の機能を削除、装甲板で覆い、質量兵器兼追加装甲とする。所謂ストライクシールドである。

3、上記に加えて炸薬を積んでファンネルミサイルにするのもありだが、個人的にはシールドの方が装甲薄めのイギリス製ISに合っている気がして良い。

何よりブロッキングで発動可能な防御スキルが増えるのは喜ばしい。

現段階ではブルーティアーズそのもののロールアウトがまだなので、完全にペーパープランだが、搭乗者の意見として技術者達には伝えておいたので、まあ悪い事にはならないだろう。

.....

時は飛んで1年半後、IS学園入試実技試験当日

『次！受験番号〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、セシリア・オルコットさん！』

試験会場であるアリーナ内、そこに一機のISがピットから飛び立つ。

それは深い青、紺色に近いカラーリングで塗装された最新鋭の第三世代ISだった。

銘をブルーティアーズ、背面と側面に多数の非固定浮遊部位を浮かべた細身のISだった。

だが、その細さから全く頼りなさは感じられない。

引き連れた装甲板にも見えるソレらは一基一基がBTと言われる第三世代ISの誇るIFを使用した無線遠隔誘導兵器群であり、他の候補生達ではまともに使えず、更には束になってかかっても返り討ちにされたと言う。

寧ろ試験官としてラファール・リヴァイブを纏った山田麻耶は相手の搭乗者に言い知れぬプレッシャーを感じて気を引き締めた。

相手はイギリスの代表候補生筆頭であるセシリア・オルコット。手を抜き過ぎれば落とされる。

しかし本気でやっては試験にならない。

その余りにも難しい匙加減に、山田は内心でべそをかいた。

(こんな役目ばっか……恨みますからね先輩……)

そんな山田の内心を他所に、試験開始のブザーが鳴り響いた。

瞬間、山田は背筋を走る悪寒に従い、その場から急上昇する。

その爪先を掠めながら、セシリアが何時の間にか構えていたスターライト mk III  
カスタムから放たれたレーザーが山田の居た空間を貫いた。

(武装の展開が早いっ!?)

自身も高速の武装切り替えを得意とする山田でも見逃しかける程の武装展開及び  
早撃ち。

千冬さえいなければ日本代表であった彼女をして、セシリアは既に素晴らしい素  
養と技術を持っていた。

この時点で合格なのだが、生憎と制限時間までは頑張らねばならないのが教師で  
ある彼女の役目。

「行きます！」

掛け声一つ、ライフルの展開と同時に射撃を開始しながら、山田のラファール・  
リヴァイブが直線と曲線で成る複雑な回避機動を取る。

如何に弾速と精度に優れるイギリス製のレーザーライフルでも、ここまでやれば

早々当たりはしない。

だと言うのに：

（本当に入学試験なんですかねコレ！）

山田は冷や汗を流しながら、必死にレーザーの射線から身をどかす。

紙一重で機体には命中していないものの、先程からシールドが削られ続けている。

下手をすると制限時間内にこちらが墜とされかねない程の命中率だった。

（これは…こちらの回避先に予め撃って来ている？こんなレベルでの偏差射撃なんて…！）

要は相手の機動を予測して、予想位置へと攻撃を加えるのだが、競技用リミット付きとは言え戦闘機動中のISにピンポイントで当てるとはどれ程の技量か。

（なのに、こちらの射撃はほぼカス当たりですか。）

先程から山田も射撃を行い、命中弾を出してはいるが、その全てがブルーティーズの両脇に浮遊する装甲型BTによって阻まれており、IS本体には僅かな損害も見受けられない。

（仕方ありません。前に出ましょう。）

ここまで戦闘開始から僅か10秒、その短い間に山田は射撃での自分は機体性能差もあれど相手に劣ると判断した。

この的確な判断力こそが、彼女が代表候補筆頭であった証左でもあった。

「ハァッ！」

ブレードを左手に握り、右手のライフルで弾幕を張り、瞬時加速まで用いて宙を駆けて踏み込んでいく。

分かり易い牽制射撃からの近接戦闘への移行。

無論、セシリアにそれに付き合う義務はない。

しかし、彼女は敢えて前に進んだ。

背面のバックパックから噴射炎が吹き、先程までの小刻みな回避運動から一転、瞬時加速を用いた山田程ではないものの、それでも高速で接近する。

相手が退くと考えていた山田は加速を乗せたブレードを振り切る前に接近してきたセシリアに僅かに面食らう。

セシリアの両手には長大なレーザーライフルが突撃槍の様に握られており、それで殴り合うつもりの様だ。

(あの構えは……!!)

通常、瞬時加速中は進路方向を変更できない。

無理に行えば機体と搭乗者に過負荷がかかり、ダメージを負う事となるからだ。それでも無理をして身を捻る様に機体を僅かにロールさせたのは、相手のライフルの銃口下部に刃を見たからだ。

ぐるり、と身を回した山田の頬の数cm先を、レーザーライフルに備えられた銃剣が通り過ぎていく。

互いに交差した二機は直後に反転、熾烈な打撃戦へと移行する。

(銃剣術！イギリスは本場でしたね！)

流石は21世紀になっても銃剣突撃しちゃう国出身、お国柄が出ている。

距離を空ければ空かさず射撃、距離を詰めれば鋭い刺突。

更には言えば通常デリケートな筈のレーザーライフルの後部にストック(銃床)が追加されており、射撃の安定だけでなく、至近距離での格闘戦も視野に入れているのだろう。

(これはもう今期入学生じゃ一番ですかねっと！)

鼻先を掠める銃剣を身をのけ反らせる様に回避すると、山田は空かさずライフルを手放してレーザーライフルの銃身を掴み、動きを封じる。

「、」

「貰いました！」

ライフルを取り戻そうか手放すか。

その判断で一瞬だけ動きの止まったセシリアに、山田がブレードを振るう。

だが、結果だけを言えば、それは間違いだった。

セシリアは銃身を掴む山田のラファールの腕を掴んで拘束すると、両脇に滞空していた4枚の装甲型BT、所謂ストライクシールドを稼働させた。

「きゃ!？」

ゴガガン!!

主を守るため、忠実な盾達は不埒者を連続で打ち据える。

逃げようにも腕を掴まれ、更に背後から回ってきたストライクシールドが背中にひたりと当てられる。

「十分でしたか？」

「はい、もう十分です。」

ここからでも頑張ればそれなりに戦えるが、それでは本来の試験の意味は無い。手加減があったとは言え、高い実力を持つ山田をこうまで追い詰めたセシリアはあっさりとは合格が決まったのだった。

.....

(あー山田先生怖かったー。直感かけてなかったら堕ちてたかも)

先程の実技試験、実は冷や汗ものだった。

本国の教官達よりも間違いない腕が上の山田先生を相手にあそこまで優位に進められたのは、自身の持ち得る特典故だった。

完全に無しだった場合、NT適性も無いから彼女の思考も読めないし、直感も無いから攻撃もまともに当たらなかつただろう。

それ程までの腕前は確かにあった。

BTを使おうにも、試験序盤を除けばあの「名も無きスタークジェガン乗り」よ

ろしく高機動でのインファイトで実質封じられてしまったので、殆ど生かす事が出来なかった。

幸い、ストライクシールドだけは普通に装甲板として使用できたし、最後の最後に決め手になったが、あれは高機動を止めたが故に出来た事だ。

その辺り、最後に焦った山田先生の判断ミスと言う事になる。

もし原作のまま、近接対策の出来ていない文字通りの欠陥機だったら、あっという間に撃墜されていただろう。

「さって、ホテルに戻りますか。」

汗もかいたし、お腹も減った。

程好い疲労感を感じながら、私は学園を後にしたのだった。

ブルーティアーズ（完成度80%）

バリア（エネルギーシールド）・銃装備・剣装備・盾装備

本来欠陥機とされたBT兵器の改良型を搭載したイギリス製試作第三世代IS。

使いこなすにはIS適性のみならず、BT適性（ $\parallel$ 感応波）及び高い空間認識能力を必要とする欠陥機。

本機は試作機で得られたデータ及びメインテストパイロットだったセシリアの意見をフィードバックして開発されており、当初よりも操縦難易度は低くなっているが、それでも乗り手への要求が多すぎるとして欠陥機呼ばわりも残当な扱い難しい機体である。

主武装はイギリス製レーザーライフル「スターライトmkⅢカスタム」。

銃剣用の取り付け具及び銃床が追加されている。

近接武装は銃剣に使うための汎用ナイフ×2のみだが、普通に格闘戦もする。

背面にバックパックと一体型の4連装BTキャノン、機体両脇に非固定浮遊部位としてストライクシールド×4を備える。

BTキャノンはビームの曲射・誘導を専門とした兵装だが、今現在は必要性が薄

い事もあり、ごく普通のビーム砲としてしか使われていない。

ストライクシールドは非使用時はブースターシールドとして、使用時は高速打撃用BTとして使用できる。

当初は実体ブレードを採用する事も考えられたが、コスト面及び耐久性から断念した。

他にも、現在開発中のミサイルBTを追加搭載する予定。

射撃戦を主眼としており、遠く中距離から手数を生かした一方的な戦闘を得意とする。

将来的にはこの機体の運用データから劣化版BTを作成する予定。

セシリア・オルコット（偽）

このお話の主人公。ロボオタ、萌えより燃え派。

初めてやったスパロボは64のリアル系男主人公。

ステータスは典型的リアル系主人公。

ワンサマーと精神的BLになるかは不明。

NT適性があるために人の心のある程度読んだり、軽い未来予知、高い空間把握力等が可能だが、人死がある場所では断末魔や残留思念等が聞こえるので近づかない。

スパロボの精神コマンド及び特殊技能を持っている。

現在判明してるのは以下の通り。

なお、PPは一般生活ではなく訓練とかしてたら増えた模様。

精神コマンド…加速・直感…???.???.???.???.???.???.???.???.???.???

特殊技能…ニュータイプ1V3・Eセーブ・SP回復・カウンター1V5・ブロッ

キング…???.???.???

保有PP…50（ブロッキング取得・カウンター強化で大量に使用したため）

## IS 転生 魔改造セシリアが逝く その2

何か妙に難産なお話だった

「えーでは自己紹介から始めましょう。あいうえお順でお願いしますね。」

入学試験から一か月後、IS学園へ入学しての初日。

1年1組の教室で、セシリア・オルコットは一見真面目にしつつも、その内は考え事をしていた。

『世界で唯一のIS適性のある男子を保護せよ。』

そのためにセシリアは1組に、織斑一夏がいるクラスへと配属になった。

(正直、要人警護は専門外なのですが……)

セシリアの専門はISの操縦、取り分け高機動射撃戦だ。

が、護衛も出来なくはない。

しかし、護衛対象に自覚が微塵もない状態ではどうしようもない。

（となると、趣味ではないですが周囲の自覚がありそうな人を利用せざるを得ませんね。）

ちらり、とたかが自己紹介で大騒ぎしている唯一の男子ではなく、その彼をじつと見つめているポニーテールの少女へと視線を向ける。

（篠ノ之箒。あの天災の妹であり、唯一家族と見做されている人物。そして織斑一夏の幼馴染。）

肝心なのは彼女が要人保護プログラム、それも最初期の不備だらけのそれで両親とずっと離れ離れになって暮らしていたという事だ。

年齢一桁の少女が親と故郷から離され、日本中を転校し続ける。

今現在なら虐待で訴えても勝てるだろうと杜撰さだが、国相手の裁判は難しい上に年単位になる事が約束されているので、迂闊な手出しは出来ない。

そんな彼女にとって織斑一夏は初恋の相手であり、唯一無二の心の支えだった。

篠ノ之箒はそんな環境から情緒不安定であり、ストレスを吐き出すために剣道に注力している。

対人経験の余りの無さとそのストレス発散方法から、彼女は処理しきれないスト

レスに晒されると直ぐに竹刀を用いての暴力に走る。

(丸つきり子供ですわね。)

そんな杜撰な対応をする政府にも、自分の心一つ制御できない筈にも呆れる。

(いえ、これは傲慢ですし、そもそも日本政府側も思う所があったでしょうし、ね。)

ISの登場、そして白騎士事件。

それによって日本を中心に全世界へと与えられた惨禍は余りにも大きかった。

性差別の過激化、既存の軍需産業の崩壊、先進国社会での出生率の劇的な低下等、深刻なものだけでもこれだけある。

渦中の日本は本土こそ守られたものの、船舶や航空機、離島では多数の被害者が出たし、同盟国や友好国からすらもミサイルを撃ち込まれた日本は深刻な海外不信に陥り、一時はその国家体制すら危うくなった程だ。

そんな事態を招いた人物の身内を保護する？

もし私が不利益を被った側なら、腸が煮えくり返りそうになるだろう。

そうした感情面でのしこりと発足したばかりのプログラムの不備、それが合わさってこんな事態へとなってしまったのだらう。

それは今現在、日本と言う国の首を絞めかねない問題となっていた。

(だからこそ、織斑一夏を守る事が彼女にとって最重要だと認識させられれば、こちらとしては大いに助かります。)

要護衛対象が常に二人一緒であり、更には片方は近接に限ればそれなりに強い。そして何より排除すればマジでどうなるか分からないとくれば、下手な作業員は二の足を踏むだろう。

無論、気合入った奴らなら易々と無力化するだろうが。

まああの暴力癖はどうにかせんと死人が出るので、早急に何とかせねばならないだろう。

「次、オルコットさんお願いします。」

「はい、セシリア・オルコットです。イギリスから参りました。趣味はクレイ射撃に読書、散歩です。未熟な身ですが、どうか一年間よろしくお願い致しますわ。」

.....

初日の三時限目は、織斑先生の言葉から始まった。

「この時間では実践で使用する各種装備の説明をする。が、その前に決めなければいけないことがあった。」

如何にも出来る女、と言うビシツとした格好の織斑先生だが、その姿をセシリアはやや生暖かい目で見ていた。

（この見た目で女子力滅亡状態かつ酒好きで絡み酒なんだから、美人ってお得ですわねー。）

と違ってたら、一瞬だけギリリとした視線を向けられた。

やべえ、第六感がNTも斯くやレベルだと悟ったセシリアは、咄嗟に心を無にして正面に視線を固定した。

「チツ……再来週のクラス対抗戦に出る代表者を決める。文字通りクラスの代表になる訳だが、対抗戦以外にも生徒会の開く会議や委員会への出席等を行う。簡単に言うとクラス長だな。一度決まれば一年間変更はない。」

要は委員長、学級委員相当の者を選出しろと言う話だった。

確かに必要なだろうが、その手の雑務は面倒が付き物であり、積極的になりた

がる者は控えめが美德とされる日本では殆どいない。

しかし、企業や国への顔売りのためとして買って出る者の中にはいる。

「クラス対抗戦自体は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生み、お前達の成長を促す。IS操縦者として大成したいと言うならば、まずは実践の機会を逃さん事だ。」

ざわざわと声が騒めく。

互いに小声での相談やアイコンタクトが飛び交う。

こういう場面で迂闊な行動はしたくないのだろう。

「誰かやる人は……。」

「私はちょっと……。」

「私も自分の事で手一杯だし……。」

そう言って彷徨う視線が、一人の男子の姿を捉える。

「はい、織斑君が良いと思います！」

「あ、私も！」

「やっぱ男子がいるんだし、盛り立てていかないと！」

「ちょ、オレえ!？」

そして始まるいじめに等しい押し付け。

これでは堪忍袋の緒が短い原作セシリアがキれるのも仕方ない。

いや、発言は擁護できないが。

「はい、わたくし立候補致します。」

なので、とつと話を進めるべく、挙手と共に立候補を表明する。

「オルコットか。他にいないのか？ 自推他推問わんど。」

しかし、そこで声も挙手も途切れた。

自分じゃないなら良い、そんな副音が聞こえそうだ。

「よし、ならば来週にでも二人には模擬戦をしてもらおう。その結果を以て、クラス代表を決定する。」

「ちよっと待ってくれ！ オレは別に…」

「あ、あ？」

「あ、いえ、何でもないです…。」

咄嗟に辞退しようとした一夏だったが、織斑先生のやの付く自営業の人達も真っ

青なドスの利いた声に意見を翻した。

まあこれは仕方ないな、うん。

私だってそうする、誰だってそうする。

(前途多難、ですわねえ。)

内心で疲れた様にセシリアが嘆息した。

.....

「相席、よろしくて？」

昼休み、食堂で食事を取っていた一夏と箒の所に、同じ一組でありクラス代表を争う相手であるセシリアがやってきた。

その手には純和食の焼き鮭定食(豚汁付き)が載せられたトレーがあった。

「何だ、オルコット。席なら他にも空いているだろう。」

「お二人にお話があったから、ではいけませんか？」

ぶすつとした箒の言葉に、しかしセシリアは微笑みを壊さない。

糠に釘、暖簾に腕押し。

そんな笑みで箒の怒気を受け流すセシリアに、一夏は興味を惹かれた。

「分かった。座ってくれ、オルコットさん。」

「い、一夏？」

「箒もだ。話がある相手にその態度は無いだろ？」

「むむむ…。」

「では失礼しますね。」

一言断ってから、セシリアは箒の隣、一夏と対面する形で席に着いた。

「さて、お話と言うのは来週のクラス代表決定戦のことです。」

「おう、と言ってもこっちは素人だけだな。」

「そこなんです、問題は。」

からからと笑う一夏に、しかしセシリアは憂鬱そうに嘆息した。

「お二人に分かり易く言うくと剣道の有段者、それも全国大会へ出る事が確実視される程の選手が、竹刀を握ってひと月と経っていない初心者に大人げなく本気を出す。これは傍から見てどう思います？」

「いじめだな。」

「いじめにしか見えんな。」

「ですよねえ…。」

セシリアの話は簡単だった。

漸くISに乗れる事が分かった初心者と、年単位で訓練とテストパイロットとしての実績を積み上げてきたプロ。

これが一切の反則無しで正面から戦った場合、ルールを違反していないにも関わらずプロの方が批判される事間違いないのである。

「それは困るのです。私も立場がありますし、かと言って八百長等以ての外。ではどうすれば良いでしょうか？」

「むむむ…すまん、私には全然思い付かない。」

「あー大体分かった。箒と同じで、特訓だ。」

「Exactly。」

我が意を得たり、と言った風にセシリアは英語と共に頷いた。

「織斑さんは元々篠ノ之さんと幼馴染で共に剣道をしていたとか。となれば、体力

面ではお任せできますが、座学の方は篠ノ之さんはまあ兎も角として、織斑さんは強制入学もあって問題外。実践的なものに限れど、今からでもISの専門知識を詰め込んでおかねば、うっかり事故が起きてしまいかねません。」

日本の最高学府である東大の倍率が凡3倍で推移しているのに対し、IS学園は全世界から入学者が殺到するため倍率100倍とかがよくあったりする本当に狭き門なのだ。

その中から更に思想・学力面で精選し、実技試験で教員からその才覚を測られて入学するのがIS学園の生徒なのだと考えれば、納得の話である。

しかし、一つ問題がある。

「誰が教えてくれるのだ？」

実際の所、この学園で二人よりIS分野で成績の良い人間はごまんといる。それを教える教師もまた同様に。

しかし、真の意味で二人につきっきりで教えてくれるかと言うと、ちょっと分かんなかった。

織斑先生も何だかんだで仕事は多いし、何より学園の警備主任でもある。

「此処にいるでしょう、入試成績第一位が。」

それに手を胸に当てて、セシリアが返した。

「待て待て待て！ 気持ちは有り難いけど、オレとオルコットさんは試合の相手で……！」

「私はルールすら分からない初心者相手に勝って誇れる程の愚か者ではありません。織斑さんにはこれから一週間かけて多少なりとも仕込まねば、それこそまともに飛ぶ事すらできないでしょう。」

「それは、そうだけど……。」

実際、空を飛ぶ感覚とかどないせいと悩んでいた一夏にとって、この申し出は渡りに船だ。

(むむむ、これでは放課後一夏と二人つきりになる計画が……！)

余りにも杜撰で計画とすら言えない妄想をしていた筈が、この申し出に不服を感じていた。

彼女としては入学したばかりで誰も頼る事の出来ないアドバンテージを利用して、此処で一夏と不動の仲を築きたかったのだ。

「ああ、もし良ければ篠ノ之さんもご一緒に受けてくださいな。座学、そこまで得意ではないのでしょうか？」

「ぬぐ!?!」

事実だった。

あの姉の関係か…とIS分野に積極的に取り組んでこなかった事が、今正に裏目に出ていた。

「勿論、断って頂いても結構です。最終判断の権利はそちらにありますし、嫌だと思ったら何時でも言い出して頂いて構いません。これはあくまで私の矜持と善意からの申し出であり、お節介に過ぎません。断られたら断られたで、来週まで頑張ってくださいねと言うだけです。」

邪気もなく、実際断られてもまあ仕方ないよね程度の気持ちで、セシリアはそう締めくくった。

「すまん、いきなり過ぎて混乱してる。箒と話し合ってからで良いか？」

「勿論です。放課後にでも答えをお聞かせくださいな。」

こうして、食堂での一幕は静かに終わった。

.....

「オルコットさん、貴方からの申し出を受けます。オレを鍛えてください。」

ドアを開けて早々、折り目正しく腰を直角に曲げて頭を下げる一夏と箒を見て、セシリアはその可愛い垂れ目を驚きで丸くした。

「ちゃんとお二人でお決めになった結論ですのね？」

「ああ。私では剣は教えられても、ISの事となると実機に乗った事も殆ど無いのだ。何とか一夏に教えてやってほしい。」

真剣に二人で考えた末の箒の言葉に、セシリアは満足げに頷いた。

「ええ、お任せを。自身の未熟を理解し、研鑽しようとする者に手を貸さない程、このセシリア・オルコットは狭量ではありません。況してや今回は私の方から言い出した訳ですから。」

自分の弱さ、無知を自覚する事は大切だ。

成長や研鑽、学習はそこから始まるのだから。

未だ高校に入ったばかりの二人が自分達の未熟さを自覚して誰かにものを頼む事。

その重要さを、セシリアは過不足なく理解していた。

「では今からでも大丈夫ですか？」

「あ、筆記用具とかいる？」

「んー、今回は私の持ち込んだテキストと映像資料を使いますのでいりませんわ。何か御用があるのなら、直ぐにでも済ませて始めましょう。」

「分かった。じゃあ少しだけ待っていてくれ。」

この国で言う善は急げですわ、と告げるセシリアに二人は笑って頷いた。

.....

「IS、その高性能は多く知られています、特筆すべきは3点あります。」

セシリアが部屋にあるテレビで上映しているのは、イギリス製のISの初心者向け機動演習の映像だった。

時折注釈や解説が入るそれは、素人二人にとっては殆どの部分がこれ以上なく分かり易かった。

「1、その性能に比したサイズ。戦艦すら撃沈可能な火力を持つのに、そのサイズは如何なる既存兵器よりも小さく、命中させるにも一苦勞。況してやステルスやエネルギーシールドに高い機動性まで標準搭載。」

本来ならこれはIS学園に入学する以前、早い者なら初等教育で受ける筈の代物なのだが、強制入学組二人にとっては新鮮なものだった。

「2、UFOに例えられる圧倒的な機動性。PICによる全方位への推進・静止が可能であり、その速さは最新鋭戦闘機ですら比較になりません。」

だが、二人はそれぞれの理由でISに触れる事を禁じられ、或いは忌避していた。強制的に学習する事になったものの、そのレベルは二人のそれを遥かに超えていて、何が何だか分からなかった。

それが今、正しく二人に合わせた形で行われていた。

「3、核シェルターを超える搭乗者保護機能。エネルギーシールドや絶対防御がよく知られてますが、それだけではありません。核ミサイルの熱量すら防ぎ、深海

の圧力も放射線飛び交う宇宙空間も何のその。あらゆる環境下で何が何でも搭乗者を保護してくれます。」

この三つのどれが欠けても、ISはその絶対性を無くしてしまう。

火力やステルス等も大事だが、それらは既存兵器でも代替可能だ。

だが、この三つを併せ持つのは人類の歴史上ISしかない。

「軍事や局地における活動において、IS程優れた装備はありません。だからこそ、IS搭乗者は国家や企業の枠に所属し、決して軽々しくその力を振るってはいけないのです。」

セシリアの授業にはそつが無く、質問すれば何でも答えてくれるし、何も言っていないのに二人の機微を察して解説を加えていく様は二人をして「あれ？本職の千冬ねえ（さん）よりも上手くない？」と思わせるものがあった。

「切りが良いので一旦ここまでです。さ、もう良い時間ですし、食堂に行きましょう。終わったら予習復習をしてから休みましょう。」

そんな感じで、一夏と箒のIS学園初日は終了した。

.....

そんな感じで、放課後は箒との剣道の稽古、終わればセシリアから二人への授業。夕飯が終われば予習復習をして眠るという、実に健康的なものだった。

授業の内容も要点で言えば2つに大別できるので、完全初心者の一夏としても安心だった。

その要点とは即ち「ISで出来る事、してはいけない事」だった。

ISと言う場所を問わず活躍可能なパワードスーツでどんな機能があり、どんな事が出来るのか。

逆に、その強すぎる力を戒めるためにどんな法律があり、どんな罰則があるのか。その様な、IS乗りとして注意すべき事だけを注釈した授業だった。

各国の開発経緯だとか今後の業界の展望だとかは余り興味が無いし、そもそも入学試験を正面からクリアした入学者のみを対象とした授業なので、一夏と箒には敷居が高すぎた。

この辺り、強制入学組に対しての不手際であるとして、後日セシリアは山田先生

に相談する事にした。

(とは言え、それだけが問題ではない感じですよ。)

箒は先にも述べたが実姉の件でISそのものに隔意がある。

一夏は千冬にISに関わるなど厳命を受けていたし、うっかり適性があると判明した後からの自宅での外出禁止及び自宅に押し寄せてきた基地外共のせいで積み重なったストレスによってか「入学後に必須の参考書を自棄になって捨てる」と言う暴挙に出る始末。

どう考えても、IS学園に入学するには問題がある。

保護のためとは言え、学園側にはもう少し色々手を打ってもらいたいものだった。とは言え、これは個人のプライベートの話である。

迂闊に口を出すのは憚られるし、藪を突いて蛇を出したくはない。

突くとしたら、織斑先生を前衛にしつつ、自分には責任も被害も来ない状態で行うべきだろう。

(前途多難ですよわねー。)

内心をおくびにも出さず、セシリアは二人にがしがしと質問を投げかけていくの

だった。

次回、ようやくクラス代表決定戦

---

## IS 転生 魔改造セシリアが逝く その3

「こんな時間に用とはな、オルコット。」

「申し訳ありません。ですが、どうにも人目を忍ぶ内容でしたので。」

IS 学園の寮長室。

書類やら備品やらが転がっているこの場所（更に奥に千冬の生活スペースがある）で、セシリアは態々人目を忍んでやってきた。

既に時刻は消灯寸前、千冬の怒りに触れまいとする IS 学園の一般的な生徒達は皆この時間には部屋で就寝し始めている。

「話はあるの二人の事だな？」

「はい。どうにも問題があるので、一応報告だけはしておこうかと。」

セシリア曰く、強制入学組二人こと一夏と箒には問題があるとの事。

一つ目は学習意欲。

二人ともそれぞれの理由で IS に対して隔意がある上、一般的な学園生程に学習が進んでいない事。

一夏は千冬にISに関わるなど言われ、箒は姉の一件からISに対して苦手意識が強い。

また、入学が決定してからもこれと言って救済措置らしい措置が無かったため、知識面での不足が目立つ。

これはセシリアが初心者向けの教材を持っている事もあり、やや改善傾向にあるが、遅れを取り戻すには今暫く時間がかかるため、特別補習等を考えた方が良くと思われる。

二つ目はメンタル。

こちらは前者よりも余程重大だ。

箒は要人保護プログラム、それも穴だらけの開設当初のそれにより故郷と家族から引き離され、孤独な生活を強いられた。

また、常に不定期に引越しと転校を繰り返していた事と自身と関われば厄介事に引きずり込んでしまうとと言う認識から、対人経験が極端に不足しており、嘗ての幸福な頃の象徴である一夏に対して依存している。

引き離そうとすると情緒不安定になり、ストレス発散に用いていた剣道によって

感情を発露させてしまう等、早急なケアが必要だ。

一夏の場合も、表面化していないが問題がある。

現在の女子高と言う男子を異物扱いする環境での生活に多大なストレスを感じており、また自身が保護されなければならぬ立場である事への認識が薄いため、学園生活そのものに違和感を感じている。

また、根本的に家族や友人以外への認識が希薄な傾向があり、そのためか他人からの感情に極端に鈍い処がある。

これは筈程ではないが孤独である事が長かった事への自己防衛だと考えられる。これが英国本国からの調査書と二人と接して人となりを確かめたセシリアから見た二人の姿だった。

高校生になったばかりの日本人の少年少女としては、余りにも問題があった。「……………言わんとする所は分かった。早急に対処させてもらおう。」

頭痛を堪える様に眉間を揉む様は、普段の千冬からは想像できない程気弱に映った。

「言い訳になるが、発覚当初は一夏の保護で手一杯でな。あいつを解剖させると宣

うアホ共から守るのだけで精一杯だったんだ。本当なら教員の内の誰かを付けてやりたかったんだがなあ……。」

「篠ノ之さんに関しては何？」

「そっちは後日調査してから正式に日本政府に物申す。幾ら何でも小中学生を追い詰めて良い訳がないだろう。」

嘗て自分と友が世界を変えてしまった因果が、二人の弟と妹へと返ってきた。

自業自得と言えばそれまでだが、それでも出来る事はしてやりたかった。

「話によく理解した。必ずこちらでも対処しよう。」

「ええ。では今夜はこの辺で失礼させていただきますわ。」

これがIS学園入学から三日目、その夜の出来事だった。

……………

それからの日々は瞬く間に過ぎていった様に、筈と一夏には感じられた。

ISのPICやエネルギーシールド、量子変換等の機能解説に始まり、生身での

射撃訓練、そして何より一時間だけだが実機を用いた操縦訓練は非常にためになった。

「彼を知り、己を知れば百戦危うからず。昔の人は良い事を言ったものです。」

一夏も筈も、共に剣による近接戦闘を最も得意とする。

その天敵である射撃を鍛える事に筈は異議を唱えたが、だからこそ必要だとセシリアは告げた。

ただ剣を持って突っ込む等という野蛮で単純なだけのやり方では、勝てる訳がない。

最適な機動と最適な角度と最適な速度に最適なタイミングを以って接近し、迎撃する敵の攻撃に対処し、一刀の下にけりをつける。

初代ブリュンヒルデ織斑千冬の戦い方を、素人が真似できる訳がないのだ。

だからこそ、セシリアは相手側の思考や特性等を知ってもらいたかったのだ。

「格闘ゲームでも、ひとつのキャラだけじゃなく、複数のキャラを使って自分にあつた者を選んだり、癖を掴んで対策を練るものでしょう?」

「ああ、そりゃ分かり易いな。」

「ぬ、すまんが私はゲームをした事が無いんだ。」

「!？」

途中、箒の浮世離れっぷりがまた一つ判明してしまったが、それはさておき。

「今日は土曜日、午前中は篠ノ之さんの体力及び剣道の訓練としますが、少し軽め  
でお願いしますね。」

「? 何か理由があるのか？」

「午後4〜5時までですが、何とか練習機を借りられました。実機に乗れますわ  
よ。」

IS学園の練習機は常に予約でいっぱい、一ヶ月先なんてざらだ。

特に土日は上級生でみっちり埋まっているのだが、セシリアは先輩のイギリス代  
表候補生やその友人、更には実家で世話になっている企業所属の生徒にまで声をか  
け、頭を下げ、何とか条件付で一時間だけ捻出してみせたのだ。

「ごめん、オルコットさん。練習機なんてこの時期大変なのに…。」

「謝る事はありませんわ。これも先達としての勤めですし。それに…。」

「?」

「事後承諾になってしまうのですが、この練習機を使ってる間のデータは、学園のライブラリに開放されてしまいますの。男性のデータは前例も無いから物凄く貴重でして、それが条件でしたの。」

実際、もし一夏が自身のデータを競りにでもかけた場合、もの凄い額が出ることは間違いない。

下手するとそれで外交問題にも戦争にもなりかねないデータなのだ。

だが、それを開放する事で、相対的にデータの重要性を下げ、各国の男性IS操縦者研究を進ませる事で、一夏を勧誘・拉致・捕獲・強奪しようとする連中を掣肘する目論見があった。

勿論、無料ではなくデータの料金は一夏個人への収入として入る事となる。

「あの、オルコットさん？何かオレのデータに物凄い額が並んでるんですけど……。」  
「織斑さん、男性のIS操縦者にはそれだけの価値があるんですよ。具体的に言うると、同量の純金よりも高いんです。」

余りの額に一夏が昇天しかけるも、訓練は恙無く始まった。

訓練は駆け足で行われたが、その内容はどれも事前の勉強で学んだ事の反復であ

り、すんなりと一夏も受け入れた。

しかし、問題が起きなかった訳でもない。

「さ、最後は飛行訓練です。こればかりは感覚的なものが多いので、実践あるのみですわ。」

「つつても、空飛ぶ感覚なんてわかんないって！」

初心者にはどうしても出来ない事もある。

それは非常に感覚的な部分、飛行に関するもの。

こればかりは座学でどれ程学んだとしても、体感としての納得が無ければどうにもならない。

「簡単に考えれば良いのです。飛ぶのではなく、空を泳ぐと考えるくださいませ。」

「空を、泳ぐ……。」

だからこそ、納得と実感を己で見出してもらおうしかない。

セシリアに出来るのは、それを後押しするだけ。

そして、空を泳ぐ感覚に慣れてきたのか、次第に動きにぎこちなさが抜けていく。

（この習得速度は、流石は織斑先生の弟と言わねべきですわね。）

原作においても、才能だけは屈指のものとなされた一夏。

それが今正しく開花しようとしている事が、一ファンとしてセシリアは嬉しかった。

「さて、そろそろ時間ですから、アリーナ内の一番上まで行ってみてくださいいな。」

「分かった、行ってくる！」

そう返して飛んでいく打鉄を見送り、セシリアはアリーナの隅でこちらを見続けるだけだった箒の下へと向かう。

「どうしたのだ、セシリア。一夏は向こうだが…。」

「いえ、篠ノ之さんに用がありましたの。よろしければ、ですが。」

……………

「おお……。」

セシリアに言われて飛んだアリーナのシールド内の天辺。

赤く染まった海面、薄く流れる雲、半分だけになった太陽。

地上の構造物も全てが赤く染まり、地面に長い影を伸ばしている。

今正に水平線に沈む夕日が見えており、空と言う未経験の場所から望むその光景は、一夏に言い知れぬ感動を与えていた。

「綺麗でしょう、この眺め。」

「何と、凄いな、これは。」

そこに、箒を抱えたセシリアのブルーティアーズが並ぶ様にやってきた。

「IS 乗りの役得ですわ、こうした光景を自由に見られるのは。成層圏から見た地表の夜景とかも、素晴らしいものがありますわよ。」

「なんつーか、もう……。」

「言葉に出来ん……。」

そう言って、呆けた様に一夏と箒は時間ぎりぎりまで沈む夕日を眺めていた。それをセシリアは、微笑ましそうに見守っていた。

……

そして月曜日の放課後。

日曜日を完全に休日として疲労を回復した一夏は、万全の状態でアリーナに備え付けのピットで待機していた。

彼の専用ISは……まだ来なかった。

「遅い！」

吼える幼馴染二人に対し、一緒にいた千冬が呆れた様に嘆息した。

「吼えるな馬鹿共。幸い、練習機を持ってきてある。それに乗れ。」

前日になっても来ない専用機に不信感を抱いたセシリアが、またあちこちにおいて何とか借り受けた打鉄の姿があった。

これなら取り合えず勝負の形になるだろうと言う、彼女なりの配慮だった。

「いた！何とかギリギリ間に合いましたー！」

そこにフォークリフトに乗った山田先生が大急ぎでやってきた。

「これです！これが織斑君の専用機、白式です！」

こうして、一夏は漸く自分の翼を手に入れた。

お気遣いの淑女セッシーの巻

---

## IS 転生 魔改造セシリアが逝く その4

「あら、てっきり打鉄で来ると思ってたのですけど。」

「オレもそっちの方が良かったかもなあ…。」

アリーナ内で、二機のISが向かい合う。

だが、未だに戦う気配は無かった。

「取り合えず、フィッティングが終わるまで待ちます。その間、機体の挙動に慣れ  
ておきましょう。」

「すまん…。」

ここまで遅れた責任は納入元である倉持技研にある。

だが、それでも何も言わず待つてくれるセシリアの思いやりに、一夏は頭が下がる  
思いだった。

「終わりましたか。」

5分後、機体の慣らし及びフィッティングの完了した一夏の姿があった。

特徴的なウイングスラスターと純白の装甲。

そして何より目を惹くのは、たった一振りの刀。

ISに携わる者なら誰しもが知る一振りに酷似したソレに、セシリアは知っている。でもなお目を瞠った。

「機体の調子はどうですか？」

「うん、えっと、その、だな……。」

「言い難いでしょうが、早めに言った方が良いですよ。」

新品の機体に乗りながら、しかし一夏の顔は優れない。

だって、これは余りにも荷が重かった。

同時に、余りにも欠陥品だった。

「武装が、刀一本です。」

「……………他、には？」

「無いです。」

「バルカンも？盾も？フラッシュロケットも？ナイフも？」

「無いです。雪片式型だけです。」

素人の乗る機体なのに、ブレオン仕様。

しかも踏み込みの速さこそ最重要な近接機体で、機動性向上のための大きなウィングスラスターⅡ被弾面積の拡大。

姉弟で揃えたという事なのだろうが、余りにも搭乗者を無視した仕様に、セシリアは本国の英国面に染まった技術者達よりも馬鹿な倉持技研の技術者達を無言で呪った。

しかし、その名称から天災絡みの色々をも悟ったセシリアは、何も言わずにただ天を仰いだ。

「……………よし、そろそろ始めましょう！」

「お、そうだな。」

顔を下に戻した時には、いつもの笑顔を浮かべていたセシリアだったが、物凄く含むものがある事を短い付き合いながら一夏は悟った。

色々な事から目を逸らして、取り敢えず模擬戦を始める事にした二人だった。

……………

「処で先生、勝率はどう見ますか？」

「オルコットと織斑で9..1.....いや98..2位か。」

「どう足掻いても無理って事ですな。」

「相手が悪すぎるからな。オルコットは同世代の中では間違いなく最上位のIS乗りだ。」

.....

「取り敢えず、避け続けてくださいな。」

「っ」

セシリアの言葉に何か返す事もなく、一夏はその場から後退した。

一瞬前までいた空間を二枚の板状の飛来物が貫いていく。

セシリアの放ったストライクシールドだ。

何とか回避したものの、これは距離を詰める必要のある白式に関しては失策だった。

「近接型が距離を取ってどうするのです。」

「っあ！」

透かさずレーザーライフルが咄嗟の後退で姿勢の崩れた一夏へと発射、そのエネルギーシールドを削っていく。

「なろう！」

止まれば即負ける。

それを悟った故に、一夏はジグザグにランダム軌道を行った後、セシリアへと踏み込んでいく。

だが、それは単なる加速であり、瞬時加速ではない。

近接武装の、雪片の抜きと構えは様になっているものの、やはり搭乗経験が少なすぎた。

「ちゃんと踏み込めましたわね。」

それをセシリアは一切余裕を崩さず、上昇して回避する。

直後、視線すら向けずにだらりと下に向けたレーザーライフルで下方にいた一夏を攻撃する。

その不意打ちに近い一撃を、一夏はそのまま直進する事でウイングスラスターの表面を焦がすのみで回避する。

死角からの攻撃の回避、これが一夏なりにISのハイパーセンサーへの習熟を進めた結果だった。

「さあ、もう少し頑張ってみましようか。」

「よし、ぜってー太刀浴びせるからな。」

セシリアの余裕を感じさせる笑みに、一夏は男臭い笑みで以て答えた。

.....

「意外といけてます、よね？」

「無理だな。」

「篠ノ之さんには残念ですけど……セシリアさんはまだ殆どBT、第三世代兵装を使っていないですから……。」

「それにあいつの本領はBTじゃなく高機動射撃戦だ。BT全部落とされてからの方

が強い。」

「おおもう……。。」

……………

「行きなさいBT！」

セシリアの声と共に、機体の両脇から4枚のストライクシールドが飛び立つ。

それぞれが独自の軌道と共に一夏を上下左右から包囲する形を取り、まるで猛禽類の様に突撃していく。

「こ、のお！」

故に、一夏が選んだのは突撃だった。

スラスターを全開にし、何とかこつを掴んだ瞬時加速によって、本日で最高の加速を発揮してみせる。

これが原作のセシリアなら、ほぼ間違いなく一太刀は与えられていただろう。

「よく出来ました。」

だが、此処にいるのはNTとして覚醒した魔改造セシリア（スパロボ仕様）である。BTが外れる前に一夏の軌道を予測していたセシリアはレーザーライフルの銃口下部に量子変換していた銃剣を呼び出して装着、自身もまた正面から瞬時加速、真向から切りあう事を選択する。

機体特性を無視した動きに一瞬だけ一夏の刃に迷いが出たが、刹那の内に振り切り、予定よりも倍近く早く間合いに入ったセシリア目掛け雪片を振るう。

「せえあッ！」

「ですが、まだまだですわ。」

加速の乗った上段からの振り下ろしの一撃。

それをセシリアは銃剣をレイピアの様に雪片の脇へと添える様に突き出し、僅かに力を加える事でその刃筋をずらし、作り出した安全地帯へと滑り込む。

「ぐおっ!？」

往なされた雪片に体を持っていかれ姿勢の崩れた一夏。

立て直す前、すれ違い様にセシリアの膝が一夏の装甲されていない脇腹へと抉り抜く様に叩き込まれた。

「足癖悪すぎないか!？」

「ごめんあそばせ。」

パワードスーツであり、人体の延長として操作できるIS。

だからと言って、射撃型の機体で近接兵装も使わずに格闘戦を行う。

下手するとそれをやった機体の方が壊れかねない。

だと言うのに、セシリアはそれをやった。

それはつまりどの部位で、どの程度ならば壊れないかを理解している。

それだけ機体への信頼と理解が深いという事の証左でもあった。

「はあ!」

すれ違った勢いのままに一旦距離を空けて旋回、再度一夏が突進する。

「ストライクシールド!」

それを迎撃するため、再び4枚の攻防自在の盾が飛翔する。

「もう見てんだよ!」

自身を包囲する形で飛来する盾の群れに、一夏は敢えて突っ込み、最も近かった

一枚へと接近し…

「残念。」

「うお!？」

雪片を振るってストライクシールドを破壊する前に、セシリア本人からのレーザライフルが命中する。

「そろそろ良い時間ですし、本日はここまでにしませうか。」

「マジかぁー!？」

ストライクシールド。

今までは単純に一夏を包围・攻撃していたそれらが連携を始めたのだ。

一枚を破壊しようとするれば、他の何れかがそれを牽制・阻止する。

フェイントをかけて近づいてこさせても、直ぐに気づかれ軌道が変更される。

ストライクシールドはIS本体から離れてしまえばP I Cの範囲内から外れ、通常兵器と同様になる。

とは言え、思念操作式の無人攻撃兵器だけあり、その機動性は同サイズのミサイル等よりも遥かに高く、無茶も利く。

それらを捌きつつ、セシリアの相手をするだけの技量と経験に判断力は、一夏に

はまだ無かった。

「ちつくしょー！」

まるで猛禽に集られる様に、或いは鳥葬される死体の様に、一夏は今までは遊びに思える程のストライクシールドの連撃によってシールドエネルギーを削り切られて敗北した。

.....

「ではデブリーフィングを始めましょう。」

試合終了後、特に試合結果を誇る事もなく、セシリアは原作と同様のピッチリとした専用のISスーツを纏った状態で一夏達のピットへとやってきた。

「織斑さん、先ず何が悪かったか分かりますか？」

「えーと……距離を取ろうとした事かな？」

「正解です。」

「道理だな。近接型が距離を取っても鴨にしかならん。」

ブルーティアーズは近接も多少は出来るが本分は射撃であり、対する白式は完全な近接、それもブレオン仕様だ。

そんな機体が距離を取った所で相手に利するだけでしかない。

「まあカウンターで膝蹴りを入れたので、それで迂闊に近づきなくなっただけ。こちらが狙ってやった行動ですので仕方ないとも言えます。しかし、それにしただけで警戒し過ぎです。」

「うっす…。」

近接ならこっちが有利！とか思って接近したら逆襲に遭った一夏は項垂れた。

実際はそこまで得意でもないし、あのまま近接戦闘をしていれば、一太刀与える事は出来た可能性は高い。

「次は？」

「えーと……。」

「まあこれは仕方ないですが……僅かばかりとは言え慣れた機体と未調整の新型、選ぶならどっち？」

「慣れた機体です……。」

専用機、貴方だけのISと言う響きに負けた一夏だった。

「まあ機体の搬入に関しては倉持が全面的に悪いです。本来の国産第三世代ISを放っておいて、出てきたのがこんな欠陥機ではお話になりませんわ。」

「ん、そんなに悪い機体なのか、これは？」

セシリアの言葉に、箒が疑問を呈した。

一夏も同じ意見だが、山田と千冬の教師二人は（だよなー）と言わんばかりにげんなりとした表情だった。

「お二人共、近接機体に大事な事を三つ述べてください。」

「えっと、パワー。」

「装甲もだな。」

「後は……踏み込みの速さ。」

「その通りです。」

そしてセシリアはBTのセンサーを起動、模擬戦中に採取した白式のデータを表示した。

「機体の基本性能こそ素晴らしいものですが、間違いなく産廃です。」

セシリア曰く、近接だろうが射撃だろうが駄目過ぎる。

先ず、兵装が雪片一振りであり、武装を収納できる拡張領域がそれだけで埋まっている。

次に、近接型と言う踏み込みの速さこそが最重要となる機体で、機動性向上のためのウイングスラスターを搭載し被弾面積が多い。

これでは踏み込もうにも被弾の可能性を無駄に上げる事となる。

最後に、燃費が悪すぎる。

セシリアは自身の攻撃で平均的な第二世代ISならどの程度の余力が出るかをしっかりと計算しながら攻撃していた。

そのため、最後のストライクシールドによる攻撃も、第二世代相当なら対処できるだろうと考えていた。

しかし、実際は削り切る予想時間の半分程で一夏の負けが決まった。

つまり白式は、平均的な第二世代の半分の稼働時間しか持っていない事になるのだ。

「これはその、何ていうか……。」

「この機体を作った方は技術力では間違いなく天才でしょう。ですが、間違いなく頭の良いおバカです。」

好んでブレオンを選んだ千冬に対し、押し付けられた一夏にはたまったものではないだろう。

しかも、拡張領域が無いものだから、盾もバルカンも追加できないのである。

「しかも武装名からして暮桜の後継機なのでしょうが……織斑先生並の人材がそう転がっている訳がありません。ブリュンヒルデ病もいい加減にして頂きたいものですわ！」

ブリュンヒルデ病とは、第一回モントグロツソを首位独走で優勝し、今現在も世界最強の名を欲しいままにする千冬に何かあると必ずあやかろうとする者達を指す蔑称だ。

同じような事例に、ドイツの開発したVTシステム等が上げられる。

「取り敢えず、機体の細かい調整や追加装甲等を加えれば、多少はマシになると思います。それでも、根本的な解決にはなりません。お願いですから倉持以外のまともな企業に制作を依頼してください。」

こうして、一夏の初のISの試合は黒星と言う形で幕を閉じたのだった。

## IS 転生 魔改造セシリアが逝く その5

クラス代表決定後、一年一組の様子は殆ど変わらなかった。

大凡予想通りの結果だったという事もあったが、それ以上にセシリアが同年代の者達よりもスペックも経験も図抜けており、何より中の人の年季から来る大人の雰囲気、セシリアのクラス代表就任を納得させたからだだった。

変わった事と言えば、クラス委員の仕事をセシリアが積極的にこなしている事、一夏と筈が放課後に課外学習を受けるようになった事だろうか。

セシリアとしては未だ知識も経験も無い二人に、少しでも周囲に追いついてもらいたいがために、クラス委員等と言う割の合わない仕事をしてほしくなかった。

その事をセシリアの様子と面倒見の良さから察した二人は、本来なら面倒に思う課外学習も何のその、真面目に取り組んでいるそうなの。

そんなこんなで、特に負の方向のイベントが起きる事も無く、一年一組は束の間、の平和を満喫していた。

とは言え、それが何時までも続く訳もない。

「篠ノ之さん、お時間ありますか？」

「ん、オルコットか。特に予定は無いが、どうしたのだ？」

入学式から2週間程、セシリアはそろそろ皆慣れた頃だろうから、とアクションを起こす事にした。

「そろそろ本国から持ってきた茶葉を開けようかと思ひまして。でも一人では味気ないでしょう？ 偶には女子だけでと言うのも悪くないと思ひまして。」

「おお、秘密のお茶会と言う奴か。分かった、そちらの部屋で良いか？」

「ええ、では準備しておきますわ。」

こうして、セシリアはようやくと筈に近づいた当初の目的を果たす事が出来たのだった。

今現在？ 強制入学組二人が幸せな生活送れる様に手助けする事になってます。

「粗茶ですが…と日本では言うのでしたかしら？」

「うむ。合ってるが、オルコットのお勧めなら粗茶と言う事もあるまい。」

セシリアは特別に一人部屋だ。

英国の代表候補生筆頭であり、表向きの一夏の護衛としての立場から、機密情報

が守れる様にと言う配慮だ。

無論、学園側にはある程度筒抜けだろうが、聞かれて不味い謀略の類はする予定が無いので問題は無い。

「これはダージリンティー。有名な品種で、爽やかかつ緑茶に近い渋みがありますわ。」

「おお……。」

きつちりとゴールデンタイムを守って淹れられた紅茶は、余り詳しくない筈をして美味しく感じられた。

「うむ、さっぱりとして飲みやすい。このクッキーともよく合うな。」

「誰かに淹れたのは久しぶりですけれど、腕が落ちてなかった様ですわね。」

のほほん、と夕食前ののんびりとしたお茶会。

話す内容も他愛のない世間話であり、余りにも平和だ。

思えば、同年代とこうしてお茶を飲んでのんびりする等、筈は今まで経験した事があっただろうか？と自問する。

答えは当然ながらNoだ。

彼女は例のプログラムによりボッチだった。

当然、友達も0だ。

(思い返せば返す程に悲しくなるな……。)

それが今はこうして同じ学校に通う仲の良い友人とお茶会をしている。

これはもう勝ち組と言ってもよいのではないだろうか？ (慢心)

「さて、お茶も楽しんだ処で、そろそろ本題に入りましょう。」

そんな訳は無かった。

「改まって場を設けたという事は、一夏には話せない事か？」

「ええ。と言うより、織斑さん本人に知識はあっても自覚0なので相方である篠ノ之さんに、と言う事ですわ。」

ややげんなりとした表情で告げるセシリアに、箒は疑問を抱く。

一夏の周囲の親しい女性であり、その中でも自分が対応できて、セシリアに出来ない事となると……

「ああ、身辺警護か！」

「ご理解が早くて助かります。」

当人である一夏には理解しづらく、箒には理解できる事。

それは自分自身が保護されるべき要人であるという自覚に他ならない。

箒の場合、要人保護プログラムにて、その辺りを強制的に叩き込まれた。

しかし、一夏にはその辺りの自覚が殆ど無いと言ってよい。

それは偏に千冬の努力の結果であるが、現在の一夏が自身の重要性を自覚していないという状況からすれば、逆に邪魔となっていた。

「私がこのクラスに配置されたのも、日本と英国政府間の協議によるものです。その上で、当人である織斑さんに自覚してほしいのですけれど……。」

「無理だろう。アイツは未だにその辺の意識が出来ていない。」

中学卒業・高校入学したばかりの少年にそんな事を期待する事こそ本来は異常なのだが、そうも言っていられないのが現状だ。

周囲の大人がどんなに頑張ろうとも、当人が無遠慮に行動してしまえば、何時どんな不慮の事態が起きるか分からない。

「だからこそ、篠ノ之さんとうこうしてお話しているのです。SPの方々や私では、四六時中一緒にいるという訳にはいきませんから。」

「う、そんなに一緒にいるか？」

「それはもう。親鳥と雛鳥の様に。」

ころころと微笑むセシリアに、頬に朱が差す筈。

やはりと言うべきか、好きな男子の事だからかわれる事に耐性が無いのだろう。

「で、相手は何を想定しているのだ？」

「先ず第一に学内の女尊系と各国のハニートラップ。第二に学外の女尊系。第三に何処かの紐付きテロリストでしょうか。」

「多いな…。」

「最後に、強制入学組であるお二人に関して不満を抱く方達ですわ。」

「私もか？」

「ええ、こればかりは仕方ないかと。」

正直、どれもこれも面倒だが、一見何の悪意も無い様に見える最後が一番厄介だ。

これは一夏と筈の二人が学力とか二の次三の次で入学したため、その能力を疑問視したり、その分枠を削られて入学試験に落とされた人達の事で隔意を抱いている者達だ。

彼女らは特に思想や適性に問題がある訳ではないし、一夏と筈達の課外学習によって減少傾向にもある。

しかし、自分達が必死こいて勉強して入学したのに何でこいつらは試験ほぼ無しで入学してんだよ、と言う嫉妬の感情は早々消えるものではない。

そのため、一刻も早く護衛体制を確立したかったのだ。

「学内は基本織斑先生方の目がありますが、教員や生徒の中にも女尊系の方々がいない訳ではありません。何より、国際IS委員会からの推薦で入学してきた方々にはその傾向が強いです。」

基本的に、入学時の適性検査で過激な思想持ちは排除される。

しかし、委員会からの推薦だとその辺りは学力・実技テスト以外は免除されるため、どうしても入り込んでしまうのだ。

なおこの国際IS委員会、ISの登場初期こそ各国のIS関連の法規作成におけるゴタゴタや調整等を一手に引き受けて役に立っていたが、現在は空洞化している。

それでもIS学園へある程度の影響力を持つ事から、委員の所属国の紐付きと化している。

そのため、金さえ積みれば色々便宜を図ってもらえたとされ、今回の様な問題を発生させている。

「勿論、一組の方々はその辺かなり厳密に調査していますし、同じ日本人で纏めてありますので、早々問題は起きないと思いますけど……。」

「他学年や他クラスはそうでもないという事だな。」

端的に言って、凄まじく面倒臭かった。

「とは言え、今現在は特に問題はありません。ですが、実際に問題が起きない様に予防する事は必要です。」

「成程。女子同士なら幾らでもやりようはあるな。」

現在、女尊男卑などと言うアホな妄言をする輩が多くなっているが、それでもそんな過激な事を言うのは極少数派だ。

問題なのは、その声の大きい連中を利用して票集めをしている政治屋や御用弁護士、そしてマスゴミだとかの生臭い連中なのだ。

大半の女権団とか言われてる連中は、元々は女性の社会進出を訴える割とまともな団体だったのだ。

そこにIS登場の衝撃によって世論が混乱している際、女性優位を訴えて自分達の利益にしようとしたのがこの連中の始まりだった。

今ではまともな団体の方が少数派で、まともな人々からは鬻ぎを買いまくっている。

「とは言え、私はそういった大奥の運営みたいな事は出来んぞ？」

「ええ、そこは別の方で行います。篠ノ之さんには、何があっても織斑さんの味方であってほしいのです。」

「分かった。そういう事ならば喜んで。」

これで一組内では合法的に一夏と一緒にいる理由が出来たと箒は喜ぶが、彼女に任せられたのは謂わば最後の盾だ。

一夏に何かあればその身を盾にしても守り、一夏を支え、応援し、共に歩む事でその心を守る。

はつきり言って大役だが、箒は寧ろそんな役目こそが欲しかった。

「周辺の虫除けに関しては、私がクラス全体にそれとなく伝えて連携する予定です。」

一夏と筈の練習量・学習時間を確保するためだけでなく、これをやるためのクラス代表就任だった。

既に根回しは始めており、一組の中からは唯一の男子を守ろうという意気込みが生まれていた。

とは言え、本職の様な事は期待していない。

あくまでも一夏に好意的な注目が集まり、秘密裡に何かをしようと言う連中にやり辛いと感じさせる程度のものだ。

(まあその辺は本職の生徒会にお任せしよっと。)

セシリアに出来る事は限られている。

たといイギリスの代表候補生筆頭であり、専用機持ちであろうと、限界は存在する。

だからこそ、こういう時は素直に人を頼むのだ。

まあ、単にこういった裏方よりも正面突破してこようとする敵を迎撃する方が遙かに性に合っているというのもあるが。

「では、皆で織斑さんを守りましょう。」

「うむ。共に頑張ろう、オルコットさん。」

「処で、私は苗字ではなく名前で呼んでほしいのだが…。」

「私に一太刀与えられたら考えますわ。」

「難易度が高すぎやしないか？」

「ふふ、頑張って修練する事ですわね。」

（これ以上仲良くなって変なフラグ生えても困るし。）

………

「何とか産廃の汚名を返上しよう。」

一夏はそう決意し、クラス内で整備科への進級を目指している生徒を中心とした有志を集め、何とか白式の調整を行おうとしていた。

「機体の基本性能は公表されてる第三世代のより高いんだけど……。」

「調整ほぼしてないじゃん！ スラスタのエネルギーロス4割って何事!?」

「近接機体なのに被弾面積多い上に装甲も厚くないとかたまげたなあ……。」

「システム面も何か雪片関連のデータで殆ど埋まってるんですがそれは。」

「なにこれ なにこれ（白目）」

予想以上の駄目具合に騒然となっていた。

「織斑君、これ倉持にクレーム付けた方が良いつて。」

「正直、まともに動いてたのが奇跡レベル。」

「機体コンセプト自体は暮桜の正統後継機なのに、残念ってレベルじゃないわよ！」

「あれ、このOS、打鉄のとまるっきり同じなんだけど……。」

「よし、書式に纏めて先生達に提出しよう。欠陥品掴まされたってレベルじゃないし。」

ともあれ、現状はあるものでどうにかするしかない訳で。

一年一組による白式の現地改修作業が始まった。

「先ず、ソフト面を徹底的に洗いましょう。」

そして、一組総出でやるとなったら、当然セシリアが音頭を取る事になる。

「最終的な調整の方向性は織斑さんの要望に沿う形にするとして、先ずは何処が悪いか調べましょう。」

ソフト・ハード班に分かれて作業は進み、ものの二日で洗い出しは完了した。

結果、以下の問題が判明した。

1、OSが打鉄のまま未調整。

燃費が悪く、機体性能が高いのに量産型の打鉄の仕様のまま。

2、量子格納領域が無い。

雪片一振り及びその周辺システムと思われるブラックボックスに圧迫され、他の武装が格納できない。

3、機体の形状上、どうしても近接戦闘に不利。

これは既に散々言っているが、被弾面積広すぎる機体で近接仕様、更に高機動のためのウイングバインダーで射撃兵装無しとか最早罰ゲームである。

4、機体の細かい調整、特にスラスター回りが完全に未調整。

「ちよつと倉持まで行って参ります。」

「セツシーどうどう。」

「明らかに納期間に合わず力尽きた感。」

「そりゃ数か月程度じゃねえ……。」

一組一同が頭を痛める中、各問題を解決すべく奔走するのだった。

……

2週間、それが白式の現地改修にかかった総期間だった。

本来なら未だISの実機については触れていない彼女達ではもっと時間がかかるのだが、これに関しては本音が心強い援軍を連れてきてくれたのだ。

「私も囁ませて。こんなの許せない。」

4組代表、日本代表候補生の一人、更識簪その人である。

彼女は元は打鉄式式の専任パイロットだったが、倉持技研が白式の開発を始めるに当たり、式式の開発を一方的に無期限停止したのだ。

半官半民と言う倉持の構造上、政府からの要請は断れないのだが……元々国産次世代機を開発して安定していたのに、経営陣が一方的に仕事をもぎ取って来て現場に投げたのが運の尽きだった。

唯一の男性 IS 搭乗者のための専用機を！と意気込んでみた所で、そのリソースは有限だし、開発途中だった打鉄式式とは余りにも求められるものが違い過ぎて流用も不可能だった。

その上、暮桜の後継（Ⅱ再現）機と言う成功体験の踏襲を目指した白式は肝心の第三世代兵装であっさりと暗礁に乗り上げた。

ああでもないこうでもないと言いつつ踊り続ける会議に対し、いい加減にせいやとキレた篠ノ之博士の一声によって白式（フレームのみ）は白式（未完成）程度の出来で完成したのだった。

そんなこんななの狂騒劇を知っている簪は、特に一夏を恨む事もなく、代わりに倉持に極大の憎悪を抱きながら、今日まで必死こいて打鉄式式の開発を続けていたのだという。

そんな人物が開発に参加したのは、勿論理由があった。

本音から打鉄式式の代わりに開発された筈の白式の惨状を聞き、ガチ切れしたのだ。

曰く、「式式だけじゃなく、白式までこんな。ISを馬鹿にしてるとしか思えない。」

そんな激しい怒りと正義感と共に、既に整備科の三年生並の技術力を持った彼女の参戦はとて心強いものだった。

「でも、式式の方もちょっと手伝ってほしいかなって…。」

「お安いで用ですわ。」

斯くして、簪と言う圧倒的な援軍により、白式の初期設定は1日で完了したのだ。

そして翌日、改修は荒れる事となる。

「オレさ、白式自体は嫌いじゃないんだわ。千冬ねえとお揃いだし。」

「まあそうでしょうね。」

白式は倉持製とされているが、それはガワだけであり、実際は篠ノ之束製ISの最新型ISである。

それも先に作成された暮桜の後継機として。

ブリュンヒルデのファンであれば、目の色を変えて欲する機体である事は間違いないなかつた。

「倉持に関しては、正式に抗議を出すとして。問題はどの様な方向性で調整するのですかね。」

大別できるのは、短所を埋めるか、長所を伸ばすか。

スラストー回りの出力調整による効率改善は大前提として、それによって浮いたエネルギーをどう使うのが課題となった。

「やっぱ稼働時間の延長じゃない？」

「スラストーの出力向上は？踏み込めないという意味無いんだし。」

「ってーか、この半ばブラックボックス化してる領域どうするー？」

あーだこーだと話は纏まらず、取り敢えず一度動かして方向性を選んでもらおうという事で、一夏は白式を纏ってアリーナで慣らし運転をしたのだった。

「おお！凄い、全然違うー！」

白式の挙動は、随分と滑らかだった。

本人の慣れもあるとは言え、初日にあった固さや反応の遅延は消え、スラスタも三段階での出力選択をリアルタイムで出来るようにしたため、かなり使いやすくなったという。

打鉄のままだったOSも使用しない射撃関連機能を削除し、反応速度の向上を主眼に限界までカスタムした。

こうした一組十簪の努力により、本人の錬度不足と機体の調整不足による盛大なエネルギーロスほぼ解消していた。

それでもやはり打鉄やラファール・リヴァイブよりは大分悪かったが。

「ん、『零落白夜』？」

あーだこーだ言いながら白式を見つめていた一同だが、不意に一夏が不明な機能を発見した。

一度降りて精査した処、驚きの結果が判明した。

零落白夜とは暮桜の単一仕様能力（ワンオフアピリティー）であり、自機のエネルギーを消費する事でエネルギーの刃を形成する。

この刃はISのエネルギーシールドを始め、非実体系のエネルギーを問答無用で

切断するという極悪性能であり、初代ブリュンヒルデである織斑千冬は本人の近接戦闘技能と相まって雪片一振りとその単一仕様能力で以てモントグロッソを優勝したのだ。

「成程。白式とは倉持による暮桜の再現実験機と言う事ですか。」

その言葉に、一同が納得した様に頷いた。

暮桜は篠ノ之博士製であり、世界が未だ第一世代を実用化した時点で既に第三世代の領域にあった。

しかし、その技術力は本物であり、現行のどの第三世代機よりも高性能であり、知名度もまた抜群だ。

そして現在、第三世代機の開発に難航していた倉持は過去の栄光の象徴とも言える暮桜の模倣へと走ったのだ。

国から注文されていた打鉄式式の開発を放り捨ててまで。

結果的には時間と技術力の不足で完成する事は無かったが、たとえ完成した所で織斑千冬の乗らない暮桜もどき等、国防上役立たずなのは目に見えている。

この選択をした時点で倉持の経営陣の未来は暗かったが、そもそもちゃんと基礎

技術を積み重ねなかった時点でダメダメだった。

まあ打鉄の成功で油断しきった故の結果なので、自業自得なのだが。

「落ち目とは言え国内最大手の倉持がこれとか…。」

「日本国内の IS 開発は停滞しそうですわね…。」

そんな暗い話題は兎も角として、これにて一夏は白式の最終調整の方向を見出したらしかった。

「千冬ねえの真似は、オレには無理だ。だから、オレなりの方向で行く事にする。」

それは尊敬する姉の言うがままだった弟の、自立の第一歩でもあった。

姉と自分は違うのだと、隔絶した才能と経験を知ったが故に、一夏は己自身を正確に認識したのだった。

「では、本格的に弄りましょうか。」

「頼む。皆にも改めて頼む。オレに力を貸してくれ。」

「私からも頼む。」

そう言って直角で頭を下げる一夏と箒の二人に、一組＋１は快諾した。

.....

スラスター関連の調整は、省エネ一択となった。

現状の一夏の力量では、どう足掻いても零落白夜を扱い切れないと判断したからだ。

そのため、少しでも攻撃可能回数及び継続戦闘時間を増やそうと省エネとなった。次に手を付けたのが、機体形状だった。

余りにも邪魔な背面のウイングスラスターはウイング部分を切り詰め、基本が横向きだったそれを縦向きにして被弾面積を抑えた。

更に肩に付いてる装甲も腕部と干渉するのでパージする。

これによって機体本体分の格納領域が空いたので、一つだけ兵装を追加する事が可能となった。

しかし、ここで問題が一つ。

OSの方で、既に射撃兵装用の機能を全てオミットしてしまったのだ。

元に戻すか、現状のまま行くか。

これに関しては一夏自身が射撃兵装に慣れていない事もあり、取り敢えず現状のまま行く事となった。

そして、足せる兵装は何を選ぶのかと言う話になったのだが……

「よし、盾にしよう。」

「じゃあ打鉄の予備パーツを加工するね。」

一夏の技量では全ての攻撃を回避する事は出来ない。

であれば、盾で正面からの攻撃を受け止めつつ、そのまま踏み込んでいくというスタイルにしたのだ。

「盾の裏にマシンガンでも仕込めば……。」

「予備弾倉までは容量無いから仕方ないかなって。」

「よろしい。ならばフラッシュロケットですわ。」

「その手があったか！」

と言う訳で、フラッシュグレネード付きシールドが白式の左腕部に追加された。こうした2週間にも及ぶ努力の結果、白式現地改修仕様が誕生したのだった。

「よし、模擬戦しようぜオルコットさん！」

「ストライクシールド！」

「ぐわああああ……。」

とは言え、未だ黒星だらけなのだが。

---

Q、白式をガンオンで例えると…

A、射撃兵装もガード兵装もないバイアランwith新兵パイロット。

Q、現地改修後は？

A、→に盾とドム系の拡散メガ粒子砲追加したと思っねえ。



## 艦これ短編 赤城が作る3

近くの商店街にオープンした業務用スーパーで開店大安売りをしていたので、ついつい買い過ぎてしまった。

具体的には小麦（薄力粉・強力粉合わせ）30kg、玉ねぎ10kg、白菜とキャベツ各15玉に卵を70個。

そして止めに挽肉30kg。

「買い過ぎましたね。」

「ですなー。」

重量は兎も角、流石に持ちきれないとして急ぎ電話で警備府から軽トラックを鳳翔さんに運転してもらった。

ものの5分で積み込みを終え、運転してきてくれた鳳翔さんにお礼代わりにソフトクリームを奢り、今度は自分が運転する。

「で、この材料ですが。」

「あれしかないでしょう。」

「幸い、仕込みは昼の分まで。よって夜は……」

「ええ、夜は……」

「餃子パーティーですね！」

そういう事になった。

……………

鳳翔さんが餃子の皮を、私こと赤城が中身を作る事になりました。

レシピは既に決めてあるとは言え、量が量なのでお昼が終わってから非番の子  
(某駆逐と戦艦除く) に声をかけて手伝いを頼みます。

人数が集まった所で、早速調理開始です。

先ず餃子の皮ですが、こちらは薄力・強力粉100gずつに塩一撮みとお湯10  
0cc、打ち粉に片栗粉を使います。

粉と塩を混ぜ合わせた後、お湯を注いで箸で混ぜましょう。

この時大事な事は、絶対に分量以上のお湯を入れてはいけない事です。

入れてしまうと餃子の皮の食感が無くなってしまいますからね。

ある程度混ぜ違ってそばろ状になったら、次は混ぜたものをビニール袋（アルコール消毒済み）に入れて揉みます。

袋を上から掌でつぶす様にして揉み続け、平になった内側に向けて折り畳み、また潰します。

これを10分程繰り返します。

足し水はせず、徐々に水分が馴染んで生地が纏まっていくのを待ちましょう。

10分程混ぜて、そばろ状からごく普通の生地程度にまで表面がつるりと滑らかになったら、今度は袋から取り出し、丸めてラップに包み、30分程生地进行ませます。

それが終われば、生地を24個に均等に切り分けます。

と言われてもそんな正確に出来るか！と言われるので、簡単に説明します。

まずは生地を半分にし、それぞれを切り分けやすい円柱状にします。

更にその円柱状の生地を半分ずつにして、これで4つの生地になります。

これらの生地を更に半分にして8個の生地になり、最後にその生地を三等分に

すればこれで24等分となります。

多少差があっても、手作り餃子なので特に問題はありませぬ。

そして出来上がった24の生地は直ぐに伸ばさないものはラップをかけて水分の蒸発を防ぎます。

で、後はまな板等に片栗粉を撒いて、生地を麺棒で円状に伸ばします。

伸ばす時は麺棒を縦向き・横向きにして均一に伸びるようにしましょう。

最後に片栗粉を軽く塗って終了です。

お次は餃子の中身です。

ここからは私のオリジナルなので、分量は割と適当になります。

先ず、肉と野菜の比率ですが、これは4..6程度を目安にしてください。

普通逆じゃね？と言われそうですが、こうすると加熱時に野菜から大量の水分が肉汁と共に出て外はカリカリ皮はもちもち中身はジュシーな餃子に仕上がるのです。

よりヘルシーにしたいなら、挽肉減らして豆腐を入れるのもあります。

野菜の内訳はキャベツか白菜をメインにネギ（玉ねぎ可）を加えます。

ニラを入れる場合はニンニクは無しにしても大丈夫です。

で、肝心の調理ですが、今回使用するキャベツ・白菜・玉ねぎ（合計30kg）を全て微塵切りにします。

これは流石に量が多いので、今回はフードカッターを使用します。

さて、首尾よく微塵切りにした野菜15kgと挽肉10kgを混ぜます。

この時、塩胡椒・ニンニクを加え、全体が馴染んで粘り気が出るまで只管かき混ぜ続けます。

ある程度混ざったら、半分に分け、片方にだけニンニクを入れます。

この時、1kg辺りにチューブなら3cm、粉末なら大匙一杯程度を目安に入れます。

どうしてもニンニクの匂いが嫌って言う人も居ますからね、気遣い大事です。

しかし、艦娘じゃなかったら重労働で疲労困憊になる程の作業ですねこれは……。もういっそ業務用機械の購入を真剣に検討した方が良いでしょう、うん。

で、混ぜ終わったら、今度は作った餃子の皮で包みます。

普通のスプーンではなく、ティースプーン一杯程度の量を皮の中心に置き、皮

の外周の半分へと水を塗ります。

後は見慣れた餃子の形になる様にヒダを作りながら閉じます。

で、これ物凄く時間がかかるので……

「ごめんなさいね、皆さん。」

「後で何かお礼のデザートでも作りますね。」

「大丈夫！私達に任せて！」

「ふふん、レディにかかればこの位……あれ？」

「はわわ、暁ちゃん、そんなに載せちゃ包めないですよ。」

「報酬はウォッカで頼むよ。」

「ふっふっアイドルなら料理だって出来ないかね！」

「姉さん、次のパッドに取り替えますね。」

「ん〜夜戦じゃないけど頑張るよ〜。」

人海戦術です。

取り敢えず手数が必要なので、非番で時間あって飯テロ（悪い意味で）を除いた人員を召喚する事にしました。

第六駆逐隊の4人と川内型三姉妹です。

自分で食べる分なら、面白い形にする事も許可しています。

手慣れてない所もまだ見られますが、数が数ですので、その内慣れる事でしょう。で、肝心の焼き方ですが、油を加熱したフライパンに広げ、大体10個未満の餃子を並べて中火で焼きます。

そこに100cc程度のお湯をかけて蓋をして蒸します。

羽根つきにする際は、このお湯に片栗粉大匙半分程度を入れましょう。

好みで増量するとより大きく厚めの羽根ができます。

で、フライパンの中の水分が蒸発したら蓋を開け、少しだけごま油を回し入れ、餃子がフライパンから剥がれた所でひっくり返します。

そして反対側に焦げ目が付いたら完成。

これぞ赤城特性ヘルシー野菜餃子です。

さ、今の内にでっち上げ中華スープとお浸しでも作っておきましょうか。終われば機械の洗浄もしなくちゃいけませんね。

………

午後7時 提督執務室

「提督、明日の予定ですが…」

「む？」

すん、とそろそろ飯時かな、と思っていた執務中の提督は、不意に鼻に届いた香りに書類から顔を上げた。

「提督？」

「高雄、すまんがドア開けてもらって良いかな？」

「？ はあ、構いませんが。」

そう言って、高雄が今し方自分の閉めたドアをもう一度開ける。

そして廊下の先から漂ってきた香りに空きっ腹がうめき声をあげる。

「そういえば、今日は赤城さんが担当でしたね。」

「明日の予定、急ぎかい？」

「いえ、食後に確認すればよろしいかと。」

幸いにも、通常の仕事はもう終わっているし、急ぎのものも無い。

顔を見合わせた提督と秘書艦は取るものも取らず、食堂へと駆け足で向かった。

.....

普段から和気藹々と喧騒に包まれている食堂。

だが、今のそこには狂乱の宴があった。

(間違いない。このたんぱく質と生地 of 焼ける香り、そしてこの音……！)

「おかわり！」

「餃子おかわり！」

「生ビールと餃子おかわり！」

「こっちも餃子セット一つ！」

「はい餃子おかわり三つに生ビールとセット一つ！」

餃子。

それは日本人を誘惑して止まない中華料理の一つ。

食堂にいる調理担当を除いた全ての艦娘は全員、餃子を一心不乱に貪っていた。

「水餃子一つ！」

「こっちは蒸し餃子一つ！」

「はいただきます！」

水餃子に蒸し餃子、そういうのもあるのか！

提督と高雄はどれを頼もうか悩んだ。

「いらっしやいませ！ 本日は餃子パーティーとなっております！」

「メニューは？」

「焼き餃子と羽根つき、水餃子、蒸し餃子、ミックスの5つになっております！  
にんにく有り無し選べますよ！」

「ミックスで有り！ 後ビール！」

「はい、ミックス二つにビール二つ！ かしこまりました！」

そして欲望に忠実になった。

「はい、ミックス二つにビール二つ！」

ものの10分としない内にドン！と重量物独特の音と共に料理が配膳された。

お盆の上に載った白米の乗った茶碗にお浸しと中華スープの椀。

そして主役である蒸し餃子の入った蒸し籠、水餃子の入った小鉢、そして焼き餃子の並んだ皿が載っていた。

ごくり、と知らず喉が鳴る。

「頂きます！」

「頂きます。」

二人はほぼ同時に手を合わせ、真っ先に焼き餃子を口にした。

焼き餃子は綺麗な焼き色の付いた羽根つきと普通のもものが三つずつ並び、今も焼きたて特有のジュージュウと言う音を立てていた。

(最初は普通のをタレを付けずに…)

噛んだ瞬間、パリパリに焼かれた皮の表面の小気味よい食感が伝わる。

次いでもっちりとした弾力のある皮の中の食感に出会う。

(うお!?)

最後に、今まで食った餃子よりも遥かに多い熱々の肉汁に驚く。

野菜の甘味、肉の旨味が存分に溶け出たそれは、下味程度の塩味だけの筈なのに

とても美味しい。

そして咀嚼して気づく。

通常の餃子は挽肉の油とフライパンのサラダ油でこってりの筈なのに、何故か不思議とあっさりとして飽きが来ない。

(なんだこりゃ!?)

次に3個ある水餃子をそのまま食べてみる。

パリッとした食感こそないものの、まるで麺類かのようにするりと口に入り、噛めば焼き餃子以上の汁が溢れ出す。

焼くのに油を使っていないためか、焼き餃子よりも更にあっさりとしていた。

最後に3つある蒸し餃子だ。

水餃子と焼き餃子の中間程度を想像していたのだが、これもまた驚いた。

皮の弾力、それが凄かった。

まるで撞き立ての餅かと思ってしまった。

それでいて水餃子の様にあっさりであり、しかし食べ応えはこちらが上だ。

(よし、最後に羽根つき…)

そして、最後に焼き餃子の羽根つきへと至る。

先程の皮の表面だけでなく、羽根の部分もまたきっちりパリパリに焼き上げられており、その点においては普通の焼き餃子を上回る。

(結論…全部美味い。)

そしてちょっと脂っこくなった口の中をジョッキに入ったビールを呷って口直し。

ごく、ごく、ごくと盛大に飲めば、口の中はホップの程好い苦みと炭酸の刺激と共にすっきりする。

(あ、これ止まらないや。)

そして、提督は餃子とビールを消費する機械となった。

餃子餃子ビール餃子浸し餃子スープ餃子餃子ビール……。

お浸しはほうれん草ではなく、千切りキャベツを湯がいて鰹節と出汁つゆで味付けしてある。

スープは透き通った中華スープで、輪切りした青ネギと細かく刻んだ白髪ネギに春雨だ。

どちらとも塩分控えめだが、出汁の旨味がしっかりしているためにあっさりとしつつも美味い。

酒の飲めない者でも、この二つなら十分餃子の脂を消せるだろう。

「あ、タレ。」

そこで漸く気づいた、タレ付けてなかった。

そのためか白米も減っていない。

これはいかんとテールを見落とすと、普段よりも置いてある調味料が増えていた。普段は醤油と七味位なのだが、今は更にお酢とラー油、更にポン酢とおろしニンニクの入った壺まである。

(流石は赤城と鳳翔さん、抜け目ないな。)

備え付けの小皿を3枚取り、それぞれお酢＋醤油＋ラー油、お酢＋ラー油、ポン酢＋ラー油を注ぐ。

お好みのタレに浸し、先程とはまた別の味わいになった餃子をおかずにご飯を掻き込む。

「ミックスとビールお代わり！」

「はい、ミックスとビールお一つ！」

気づけば全部食べ尽した上で、お代わりを叫んでいた。

今夜もまた、食堂の熱気は長くなりそうだった。

翌朝

「うふふー、余った餃子のタネで作った和風ハンバーグも良いですねー。」

「！」

---

久々に書いた。

最近夜勤で忙しくてどうしても気力が…

ネタだけはたくさんあるんだけどなー



## IS 転生 魔改造セシリアが逝く その6

「えー皆さん、来週はクラスリーグマッチがありますので、今の内から備えておいてくださいねー。」

「「「はーい！」」」

今日もIS学園一年一組は元気だった。

山田先生への返事も元氣よく皆笑顔で返している。

まあ内容はIS学園独特なものだったが。

クラスリーグマッチはクラス代表同士が行う総当たり戦で学年ごとに行われ、現在の各クラスのIS学習の進捗を測るために開催される。

また、外部からの観戦者も多く、企業等が優秀な人材を見つけ、自社へと勧誘する場合もある。

そのため、例年は皆気合を入れ、相手側の情報収集や機体の調整や装備選択に走るのだが、今回の一組は参加するのがセシリアであり、他の組には専用機持ちが4組以外いない事もあり、その4組にしたって大人しそうな理系（と言うかオタク）

の簪なので、皆警戒心が皆無だった。

（簪さんは射撃よりですが全距離対応可能な腕前。打鉄式も武装は兎も角機体の方は出来上がっている筈ですし、油断は禁物かな？）

が、セシリアだけは油断なく勝ち筋を考えていた。

「その情報、古いよ。」

そんな一人除いて緩んだ一組の空気を吹き飛ばす様に、一人を除いて見慣れないツインテールの小柄な少女が一組の扉を開けていた。

「今日から二組に転校してきた鳳鈴音よ。今日は宣戦布告に来たわ！」

ババーン！とSEが鳴り響きそうな感じだったが、生憎とシリアはそこまでだった。

あっさりと一夏に化けの皮を剥がされた鈴音はそのまま口論するかと思いきや、やってきた千冬の出席簿を食らって敢え無く退散した。

（何がしたかったのかな？）

セシリアは原作にあるシーンだけど、よく分からんと頭を捻った。

.....

「即座にISを解除しなさい、鳳鈴音代表候補生。」

一夏に貧乳だと揶揄され、教室内で怒りのままにISを部分展開した鈴音の背後、そこには普段の穏やかさの一切を捨て、冷徹な眼差しで氷の如く警告を発するセシリアの姿があった。

その手にはいつも使っているスターライトmkⅢカスタムが構えられ、その照準が既に鈴音へと合わせられているのは言うまでもない。

下手に動けばそのまま発砲する事もまた同じ。

「っ、あんた……！」

「学内での無許可のIS装備は校則によって禁止されています。」

急ぎセンサーのみ部分展開をした白式が言うには、既にレーザーライフルの安全装置が解除されている事も告げていた。

「これ以上は私も中国政府及び学園側へ報告せねばなりません。」

その声音から感じられる威圧感に、その場にいた全員が言い知れぬ冷たさを感じ

ていた。

ある者は喉元に突き付けられたナイフを、ある者は背筋に差し込まれた氷を、またある者は冬の海に落ちてしまった時の感覚を、それぞれ感じていた。

これこそが殺気、或いはプレッシャーと言われるもの。

未だ本物の戦場へと出た事のない、正しく高校生になったばかりの子供達には余りにも強烈すぎた。

「く……………つ……………ふー、分かったわよ。」

諸々の感情を吐き出したのか、鈴音は素直にISを格納し、両手を頭の上に挙げた。

「で、私をどうするつもりかしら？」

「ISを展開したのはやり過ぎですが、今回は初犯であり、先程の会話内容から非は織斑さんにあります。ですので、私からはこれ以上何も致しません。」

自身も武装を格納し、粛々と判断を告げるセシリア。

しかし、その視線は未だ冷え冷えとしていた。

「で、織斑さん？」

「は、はい!!」

にっこり、と花咲く様な笑顔を浮かべるセシリアに、しかし一夏は背筋を正して答える。

だって千冬ねえのキレた時みたいでめっちゃ怖いんだもん by 一夏

事実、彼女の視線は絶対零度、或いは道端の犬の糞を見るが如く嫌悪感に満ち溢れていた。

「顔馴染同士で口論していたとは言え、女性の体型をけなすのは人として最低な行為です。」

「はい、申し訳ありませんでした!」

そのまま綺麗に腰を直角に曲げる一夏。

しかし、セシリアばかりではなく、周囲からの視線は未だ冬真っ盛り。それも当然、一夏は謝る相手を間違えているからだ。

「私に言っただうするのです?」

「はい! 鈴、本当にごめん!」

「あ、うん。」

余りの事態に鈴音は目をぱちくりさせる。

中学時代では考えられなかった事態に、流石の彼女も戸惑っていた。

「取り敢えず、この場ではここまで。言いたい事があれば、互いに人目の付かない所でやってくださいませ。」

「そうだな。まさか私の目に届く場所でこうまでやらかされてはな？」

セシリアの背後、そこから聞こえた声とプレッシャーに、その場の全員が凍り付いた。

「さて、取り敢えず事情を話せ織斑。お前達への罰はそれから考えてやろう。」

世界最強のマジグレ笑顔に、セシリア含むその場の全員が顔を青ざめさせた。

.....

「いやーびっくりしたー。オルコットさんだっけ？あの人、色々凄いわね。」

放課後、特別課外授業も終わった頃、偶にはと訓練を休みにして、鈴音と一夏は箒を見届け人として互いに謝罪を行い、遺恨無しとなった。

そして、一夏と箒の部屋でお茶をしながら話すのは、セシリアの事だった。

「うむ、我々もオルコットには随分世話になっている。正直頭が上がるん。」

「ってか、もう足向けて寝られない感じだよ、うん。」

「そこまでって、具体的には？」

二人の様子に鈴音は目を丸くしながら興味津々で尋ねる。

彼女としても、昼間の様子から色々と気になっていたのだ。

「ISの訓練に授業の遅れてる所全般。」

「後はISに関わる者としての心構えとかだな。」

今現在は特別課外授業は先生二人のどちらかによって行われているが、クラス代表決定まではセシリアのみによるものだった。

そして先生二人の本職による基礎固めのための授業を経て、改めてセシリアの授業内容がいかに初歩的かつ分かり易かったのかを実感した。

最近では一年生の授業内容なら十分についていける様になった二人は、成績面でもめきめき結果を出してくれて教師陣も満足だった。

「『ISであるかどうかは関係ありません。殺傷力を持った道具を扱うのなら、それ

相応の心構えと知識が絶対に必要です』。正直、目から鱗だった。」

「私もだ。姉さんが作ったものだからと、勝手に嫌厭していた。」

道具は道具であり、それ以上ではない。

ISと言うものを新聞やニュースでしか知らなかった二人にとって、嘗て道場で習った剣を持つ事の重さと通じるその言葉は、本当の意味で二人がISに向き合う切っ掛けでもあった。

「私も専用機を与えられるかもしれない。その時、今日の鳳の様にISを振り回し、結果誰かを傷つけないか心配だ。そうならないためにも、しっかり課題をこなしたい。」

セシリアによる常識の刷り込み兼カウンセリングにより、箒は漸く年齢に合った落ち着きや判断力を身に着けつつあった。

些か以上に持っている武力が過剰だが、それでも大きな前進だった。

「そっか、成長してんのね。」

その二人の様子を、鈴音は嬉しい様な寂しい様な、複雑な表情で見るのだった。

.....

5月中旬、クラス対抗リーグマッチの季節がやってきた。

その第一試合の組み合わせは1組VS2組。

それまでの間、一夏達は相変わらぬの訓練と課外授業を行い、セシリアも訓練とクラス委員の仕事をしていただけだった。

その中で鈴音とも交流し、互いに先日の騒ぎについても既に済んだ事として、友人関係を構築できていた。

だがまあ、それはそれとして勝負に手を抜く訳も無く。

『オルコットさん、ちょっと良いかな?』

『何でしょう?』

間もなく試合開始。

既にISを纏い、ピット内で待機していた所に、鈴音から通信が入った。

『このまままだと言いそびれちゃうから言うね。一夏達、鍛えてくれてありがとう。』

『いえいえ。初心者に手を差し伸べるのは先達として当然の事ですわ。』

相変わらずのんびり優雅で穏やかなセシリアの声に、鈴音も知らず笑みが零れる。『一夏の奴、再会した時にすんごい大人びた顔してたからさ。正直、そんな顔をさせたオルコットさんが羨ましかった。私じゃ絶対無理だって分かったから余計に。』

鈴音にとって、一夏はヒーローだった。

虐められていた自分を助け、友達となり、学校に馴染める切っ掛けを作ってくれた人。

当然の様に恋を抱き、しかし家庭の事情で両親は離婚、自身は母の母国へと移住する事となった。

また会いたい。しかし尋常な手段では許されない。

だから、鈴音は必死に努力を重ね、僅か1年で中国の代表候補生と成り上がった。

無論、専用機の貸与は政府側の思惑もあるのだろうが、それでも彼女の努力無くしてはあり得ない結果だった。

そして、そうまでして再会した初恋の相手は、嘗てよりも大人に、男の顔をする

様になっていた。

本当の大人からすればまだまだまだ青二才、若輩者なのだろうが、それでも鈴音にとっては驚天動地だった。

正直、見ててドキドキしまくってちゃんと話せているか分からなくなる時もあったが、それでも大凡の経緯を掴む事は出来た。

セシリア・オルコット。

英国の代表候補生筆頭にして、第三世代ISブルーティアーズを駆る生粋の貴族令嬢。

誇り高く、穏やかで、包容力と責任感を併せ持った、とても同年代とは思えない少女。

正直、彼女が一夏に惚れてたら負け確定と心折れていたかもしれない。

それは兎も角、鈴音はまだ友人の立場として、一夏を成長させてくれた人にお礼を言いたかったのだ。

『私もクラスメイトが不遇というのは良い気分ではありませんので、礼には及びませんわ。』

『そっか。でも言いたかったんだ。』

『ふふ、なら仕方ありませんね。』

くすくす、と互いに何がおかしいのか笑みが零れてしまう。

これから試合だと言うのに、二人の間には穏やかな空気があった。

『でも、手加減なんてしないんだから！』

『ええ、そこはまた別のお話ですから。』

『鳳鈴音、甲龍行くわよ！』

『セシリア・オルコット、ブルーティアーズ行きます！』

そして、二機のISが空へと躍り出た。

.....

「先手、貰うわよ！」

ピットに出た二機のIS、先に仕掛けたのは鈴音の駆る甲龍だ。

初手は第三世代兵装である「龍咆」。

空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出す衝撃砲を主兵装とする。

砲弾だけではなく砲身すら目に見えない上に、実弾兵器と違ってエネルギーさえあれば幾らでも撃てる。

その上、光学兵器の類にありがちな排熱も低く抑えられている辺り、エネルギーの伝達効率に優れている。

また、その特性上砲身の稼動限界角度が無く、搭乗者のイメージする位置に砲身を形成、発射する事が出来るという、機体本体の燃費の良さも合わせて、隙の無い良作と言えるISだ。

甲龍の背後に浮かぶ非固定浮遊部位、そこから放たれる不可視の砲弾に、セシリアは自身の前面へとストライクシールドを展開しつつ、その隙間からレーザーライフルを構え、自身の第六感の言うがままにレーザーを発射する。

ここで改めて言うが、龍咆の砲身は圧縮された空間だが、その砲弾は衝撃であり、衝撃を伝えるための媒介となるのは空気である。

つまりは、ドラえもんで有名な空気砲なのだ。

これが水中なら水がその代わりとなるが、その場合は減衰が凄まじく、至近距離でしか通じないだろう。

また、宇宙空間においては空気が無いので意味がない。

そういう意味ではISとして失敗しているのだが、それはさておき。

Q。砲弾として使用可能な程に圧縮した空気をレーザーで一気に過熱したら？

A。只でさえ圧縮して高熱化してるんだから、そりゃ爆発するでしょ。

何も無かった筈の空間にレーザーが命中した瞬間、鈴音が発射したのと同じ数だけ立て続けに爆発する。

初見殺しとも言える不可視の砲弾は、ニュータイプの勘と言うでしょうもないもので至極あっさりと攻略されてしまった。

「なんで、初見で龍咆が分かるのよ!？」

「Don't think, feel it!」

「ふざけんあああああ!!」

鈴音の叫びを余所に、セシリアは一定の距離を保ちながら立て続けにレーザーを発射する。

その射撃はいっそ魔的と言ってもよく、鈴音の必死の回避の甲斐もなく、必ず命中し、そのエネルギーを削っていく。

加えて、セシリアは全く被弾していない。

精々が至近距離で迎撃した龍咆の砲弾の爆風だが、それとてきっちりストライクシールドで防ぎ切っており、攻撃と機動分のエネルギーしか消耗していない。

如何なる妙技か、彼女は鈴の撃つ龍咆を完全に初見で見切り、たとえ迎撃せずともまるで何処に放たれるのか分かっているかの様に、一切の危なげなく回避している。

対して、甲龍はその燃費の良さと接近戦型特有の頑丈な装甲もあって何とか落ちていないが……

「隙あり。」

「きゃあ!?!」

開始1分で左の非固定浮遊部位、龍咆のユニットが撃墜され、更に装甲を一枚剥がしていく様にじわじわと剥がれていく。

有利な事もあるのだろうが、セシリアの顔には一切の動揺も苛立ちも、慢心も油

断も無い。

まるで淡々と決められた作業をこなしていく様な、一切の雑念の混ざらない真顔で鈴音を追い詰めていく。

その姿に観客どころか解説役すら実況を忘れて見入ってしまう。

努力の天才とも言える鈴音には悪いが、多くの者達がこう思ってしまった。格が違う。

セシリアの技量、と言うよりも特典込みの実力は既にモンドグロツソの様な国際大会でも十分通じるレベルになっている。

だというのに、未だ多くいる代表候補生達の中の一人では、その中でも屈指の才覚を持っているとは言え、相手をするのは余りにも荷が重かった。

(このままじゃジリ貧：だったら！)

開始から2分、彼我の戦力差を完全に悟った鈴音はそれでもなお勝利への道筋を諦めていなかった。

射撃で完敗ならば得意な接近戦で戦う。

残った龍咆を牽制のために連射しつつ、二振りの無骨な青龍刀「双天牙月」を連

結、そのまま回転させ、即席の盾としながら瞬時加速を敢行、強引に距離を詰める。

それをセシリアは最初から予期しているのか、大方の予想とは反対に、自身もまたレーザライフルに銃剣を付けると、応える様に瞬時加速で前に出た。

「ッ！」

判断は一瞬、双天牙月を分離させる暇も構えを取る暇も無い。

(だったらこのまま押し切る！)

盾として前面で回転させていた刃をそのままに突貫する。

衝突すれば、近接型である甲龍の方が当たり勝ちできる。

だが、見ていた全ての者達を含め、彼女の予想は外れた。

「ッ！」

不意に、セシリアの脳髓に電撃にも似た閃きが過ぎる。

無邪気な悪意と命の無い殺気、それが空から落ちてくる感覚。

レーザライフルの出力を最大値に設定した上で、正面から迫り来る回転刃の中心部、即ち青龍刀の連結部へと照射、ものの半秒で焼き切ってしまう。

すると、鈴音は身を守る盾を失い、回転時のベクトルのまま明後日の方向へと

すっ飛んでいく青龍刀を捕まえるために両腕が伸びきってしまった。

(あ、終わ)

だが、鈴音の予想は外れた。

セシリアはライフルではなく、その脚部でまるで正面から抑え込む様に鈴音の両肩に衝突、自機の脚部へメキメキと負荷をかけつつ、その推力を急激に減少させる。そして、何を思ったのか、鈴音を反対方向へと蹴り飛ばし、自身もその反動で一気に後退する。

直後、二機のいなくなった衝突地点を、アリーナのエネルギーシールドを直上からぶち破った極太のビームが貫いていった。

セッシー「キュピーン！」

2組「もう何が何だか」

セッシー、アホ共にブチ切れる&順調にNTとして成長中。



# Fate短編 ファフニールが逝く

リハビリ

人は誰もいない、全てが骸骨となって山を作るある洞窟。

そのの主たる暗灰色の邪悪なる竜は、遂にやってきた騎士の姿を見て、吠え猛る。

「  
ッ!!」

待ち侘びた、本当に待ち侘び続けた英雄の到来に、邪竜は歓喜の咆哮を上げた。

.....

彼女とその家族は、神によって呪われた。

平和な平成の世から転生したファフニールという娘は、父フレイズマルと弟の

オッテルとレギンと共に平和に暮らしていた。

母親こそ早くに亡くしてしまったものの、それでも家族は仲良く平凡に暮らしていた。

強いて言えば、彼ら彼女らが生きる時代は神秘が全盛を振るう神代であり、彼女らには北欧・ゲルマン神話における重要な役割が課せられている事だった。

一家の平和な暮らしが終わったのは、オッテルが覚えたての魔術でカワウソに変身して川遊びをしていた際、旅行中のロキ・オーディン・ヘーニルによって狩られてしまった時だった。

神々はその事を知らずにフレイズマルにその日の宿を求めた。

その夜、フレイズマルに指示されたファフニールとレギンは殺意を抑えながら神々を捕らえ、今後も暮らしていくためにも賠償金を要求する事にした。

それに対し、ロキはオーディンとヘーニルを人質として残した後にドワーフのアンドヴァリから大量の黄金と黄金を生み出す指輪を奪い、これを賠償に当てた。

その際に、アンドヴァリは指輪の持ち主に永遠の不幸を齎す呪いを込めたのだが……この呪い、ドワーフが防犯装置として設置していたものをロキが更に強化し

たものであり、持ち主だけでなくその周囲にまで呪いが伝播するようになっていた。そんな指輪が黄金と共に革に入れられてフレイズマルに渡されたのだが……フレイズマルはこれを家族に分け与える事を拒否し、独占しようとした。

そして黄金に心を乱されたレギンがフレイズマルを殺害してしまう。

ファフニールはこの事態の元凶が黄金の中にある呪いの指輪である事を見抜き、これを己が抱える事でこれ以上弟へと呪いが向かう事を防いだ。

だが、そのせいで集積された呪いにより、ファフニールの肉体は邪竜へと変貌していく。

そして、既に呪いによって精神を汚染されていたレギンは黄金の一部と共に姿を隠し、何時か姉が独占する黄金を自分のものになろうと虎視眈々と機会を伺う日々を送る。

その後、周囲の人間を巻き込まぬ様に、ファフニールは黄金と共にグニタヘイズへと移住し、レギンもそれを追うのだった。

.....

それから、長い月日が経った。

ファフニールという少女は、竜となってから暫くして日々を数える事を止めた。竜の身ではまともな人間らしい生活など、送れないと分かったからだ。

何も飲まず食わずでも、真性の竜種となった彼女には飢えも渴きもない。

竜の心臓により呼吸のみで生成される膨大な魔力。

それによって賦活された肉体と生命力により、彼女は生半可な傷を負った所で数日もあれば癒えてしまうし、寿命すら克服している。

だが、それは彼女にとって何の慰めにもならない。

暗い洞窟の中で、ただただ無為に時を過ごす。

その最中、徐々に人間性までもが失われていく。

だが、それは寧ろ彼女にとっては救いだった。

黄金の指輪の呪い、そしてレギンに唆され、彼女の封じる黄金を求めて多くの者達がやってきたからだ。

人語も話し辛くなってしまう彼女にとり、そうした者達は呪いを外に広げよう

とする愚か者達に過ぎない。

故に、彼女はそういった者達を全力で叩き潰し、殺し尽した。

その行いは多分に呪いに影響されたものだったが、呪いを外に出さないという点においては完璧だった。

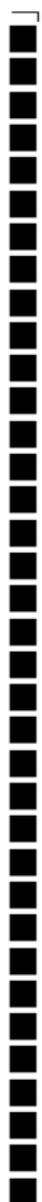
そんな日々がどれ程続いたか、彼女自身もとつくの昔に忘れ果てた頃。

漸く、待ちわびた者が来た。

灰色長髪に端整な顔立ち、そして碧色の瞳。

何よりも、身の丈に匹敵する程の大剣。

ネーデルランドの遍歴騎士、ジークフリート。



こうして、ニーベルングの指輪に語られる英雄譚の山場が始まった。

.....

戦闘が始まり、どれだけ時間が経過したのか、両者にも分からなかった。ただ。どちらもが既に今すぐに死んでもおかしくない程の重傷を負っていた。それでもなお、両者は止まる事はない。

ファフニールを動かすのは、竜種としての本能と呪い。

ジークフリートを動かすのは、義務感と不屈の意志力。

それが両者に膝を突かせる事を拒否していた。

「邪悪なる…竜は…ッ…失墜し…:…!」

そして、ジークフリートはその大剣バルムンクへと魔力を注ぎ、幾度目かの真名開放をせんと力ある言葉を紡ぐ。

「■■■■■■■■……!!」

ファフニールもまた、唸り声と共に竜の心臓から魔力を振り絞り、口部へと集中させる。

竜の吐息。

多くの竜種が持つ基本的な能力であり必殺技。

数え切れない程多くの人々を焼き、数多の英雄豪傑が手を焼かされた一撃。



それを誰よりも理解しているのはジークフリート本人だ。

歯を砕く程に食いしぱり、鮮血を吐き出しながらも魔力を振り絞り、それでもなお彼の心は折れていなかった。

「ッ……うああああああああああああああああああああッ……!!」

故にこそ、彼は前に出た。

聖剣を解放したまま、前へ向かって突撃したのだ。

「■■■■!？」

驚いたのはファフニールだ。

聖剣の輝きを剣身へと集中させ、ブレスを切り裂きながら特攻してくるジークフリートに心底驚いた。

だが、距離を取れば地力と火力の差で勝てる。

それが分かる故に彼女は咄嗟に後退を選んできました。

しかし、ここは今にも崩落しそうだとは言え洞窟であり、ファフニールは巨体を持っている。

結果、ファフニールはその巨体を洞窟の壁へと盛大にその体をぶつけてしまう。

それが決まりとなった。

「あああああああああああああああああああああああッ!!」

ブレスの荒波を切り開き、その勢いのままに刺突の形となってファフニールの竜の心臓へと聖剣が突き立った。

強固な鱗も、頑健な骨も、強靭な筋肉をも貫いて、聖剣の刃が遂にファフニールを、その体を構成する呪いを破壊した。

直後、破られた心臓から膨大な魔力を秘めた血液が噴出した。

そして、ジークフリートはそれを真っ向からほぼ全身へと浴びる事となった。

ジークフリートからすれば僅か10秒未満の出来事でも、永遠に感じられる攻防の後、漸くファフニールは轟音と共にその巨体を横たわらせた。

息を荒げ、途轍もない虚脱感に苛まれながら、それでもジークフリートは未だに立っていた。

『騎、士……よ……。』

そんな彼の耳に、何の前触れもなく声が届いた。

周囲を見渡して誰もいない事を確認し、そして目の前に顔を向けた時、彼は声の

主を悟った。

『今から言う事を、記憶せよ……。』

つい先ほど、己が倒した邪竜の目に、理性の輝きが宿っていたからだ。

これはジークフリートがファフニールの血液を被った事で得た力の一つ。

即ち、動物言語である。

『この財宝の中に、一つだけ呪われた指輪がある。それは持ち主に破滅を齎し、怪物へと変えてしまう。』

ごふり、とファフニールの口から大量の血が零れる。

力の源である心臓を破壊され、もう長くはない事は分かっていた。

しかし、最後に伝えなければならぬ。

その一念で以て何とか命を繋ぎ止める。

それは呪いによって破滅し、しかし被害の拡大を防ごうと戦い続けた邪竜の最後の意地だった。

『火山の火口へ指輪を捨てよ。さもなくばお前もまた私と同じようになるだろう……。』  
事実、ジークフリートの体はファフニールの呪われた体から出た血を山と浴び

て、既に竜が如き硬さを宿し、動物の言語を理解している。

このまま呪いが進行すれば、行き着く先は同じだろう。

『ではな、騎士よ。私を終わらせてくれた事、感謝、すr……』

それきり、邪竜は動かなくなった。

言うべきを伝えた彼女は、漸く終わる事が出来たのだ。

「こちらこそ感謝する、ファフニールよ。警告通り、指輪は捨てるでしょう。」

こうして、ニーベルゲルンの歌に伝えられる邪竜ファフニールの退治は終わりを告げた。

後の事は詳しくは語らない。

ただ、ジークフリートは己の寝込みを襲おうとしたレギンを返り討ちにした後、火を噴く山の頂に上り、指輪を捨てた。

だが、その後も身を顧みない献身を続け、力尽きる様に倒れたという。

その墓前には、彼に救われた大勢の人が集まったとも言われるが、真偽は定かではない。

分かっているのはただ一つ、彼も彼女も、同様に英霊の座へと召し上げられ、その死後も多くの戦いを経るだろうという事だけだった。

「サーヴァント・ライダー、召喚に応じ参上しました。真名をファフニール。殆どパーサーカーな身ですが、上手く使ってくださいね。所で、ジークフリート殿はおられますか？いればお礼を言いたいのですが…。」





## IS 転生 魔改造セシリアが逝く その7

「な、何なのよお!？」

鈴のその叫びが、その場の一同全員の意見を代表していた。

観客席と試合会場を隔てるアリーナのエネルギーシールド。

それが直上から大出力のビーム砲で以て一撃で貫通、地面に着弾し盛大な爆発と共にクレーターと噴煙を上げたのだ。

「あら。」

そんな中、セシリアは特に動揺する事もなく、己目掛けて発射されたビーム砲をヒラリと回避する。

見れば、クレーターの真ん中に一機のIS? が右手をセシリアに向けて立っていた。

頭部と胴体は兎も角として、肥大化した両肩と腕部に比し、その脚部はISには偉く小型でほっそりとしている。

まるで乗り手の体を考慮していない、否、する必要のない構造に、セシリアは

ずっとその垂れ気味な目を細める。

（殺気はするのに人の気配がしない。やはり無人機ですか。）

凡そ原作通りの展開にうむと内心で頷くと、再度ビーム砲を発射した不明ISに  
対し、セシリアは戦闘を開始した。

……………

アリーナ全体を管理する放送室では、突発的な事態にてんやわんやだった。

「どうしてもダメか？」

「はい。やはりこちらの操作を受け付けません。アリーナのシールドは最大出力のまま  
まで、通路も全隔壁が降りてます。外とも連絡がつかないですし、これじゃ避難  
のしようが…。」

不明ISが衛星軌道上から急降下してアリーナをビーム砲でぶち破って侵入した  
後、アリーナは外部からのクラッキングによってその機能を完全に奪われていた。  
今できるのは、精々が内部での通信位なものだった。

「ふむ……織斑に繋げる。こんな時こそ役に立ってもらおうとしよう。」

にやりとニヒルに笑いながら、千冬は使えるものを使う判断を下すのだった。

……………

「皆、今から隔壁をこじ開ける！そうしたら手順通り避難を開始してくれ！」

観客席、そこではパニックにこそ未だなっていないものの混乱したままの生徒達が鮎詰め状態だった。

このままではいつパニックになるか分かったものではない。

もしそうなってしまった場合、暴走した生徒達によって悲惨な事故が起きかねない。

だからこそ、千冬は打てる手を打った。

「一夏！この扉からやってくれ！ここの通路が一番隔壁の数が少ないし、すぐ外に出られる！」

「分かった！箒は下がってくれ！」

そして、ISを手足のみに纏った一夏が雪片式型を大上段に振り被り…

「せえあッ!!」

一刀の下に両断する。

「ありがとう織斑君！」

「まだだ、次の隔壁に行くぞ！」

「皆、落ち着いてついてきてくれ！」

左右に切り開かれた通路を通過して、生徒達が徐々に避難を開始する。

例えアリーナのシールドエネルギーを破って加勢に入った所で、一夏の腕前ではたかが知れている。

ならば、こうして周辺の安全確保にこそその力を使った方が遥かに効率が良い。セシリアに負け、それでいて勤勉に知識と実践を積み重ね続けた故に、一夏は千冬からの避難の支援という命令に快く是と答える事が出来た。

「一夏！皆の避難が終われば、訓練機の格納庫に行くぞ！」

「分かった！先生方を案内すれば良いんだな！」

「ああ！急いでくれ！」

一夏一人ではたかが知れている。

だが、プロである教職員らが練習機に乗る手助けはできる。

彼女らは全員が元代表候補生や国家代表、そうでなくても優れたISライダーである。

確実に現時点の一夏よりは役に立ってくれる事だろう。

(待っててくれ、オルコットさんに鈴！)

三枚目の隔壁を切りながら、一夏は今も戦っている二人のためにと避難を急ぐのだった。

.....

「飽きましたわ。」

「そんな問題なの!？」

不明ISとの戦闘を開始して早十分。

敵の攻撃の全てを回避してみせたセシリアは、退屈そうに呟いた。

「射撃を始め行動には一定のルーチンがあり、挑発すれば直ぐに照射か拡散ビーム。余りにも分かり易いですわ。これではデーモンズスピリットのHardを周回プレイしていた方がマシというものです。」

「あなたがマゾゲーマーなのは分かったけど……ルーチンがあるってマジ？」

ヘイトの殆どがセシリアに向けられており、時折放たれる牽制のための射撃にさえ気を付ければ比較的気楽な鈴音は、セシリアの聞き捨てならない言葉を聞き返した。

「生体反応もIS越しと言えどもなく、ルーチンで動くとなれば……無人機の可能性が高いですわね。」

「マジかー。」

IS業界としては異例中の異例であり、前例が無い。

しかし、目の前に現れたとなれば信じる他無い。

「予想よりも学園側の増援が遅い事ですし……手足破壊して鹵獲してしまいましたよ。うか。本国への良い手土産になりますわよ？」

「正気!？」

そんな事を宣ったセシリアに、鈴音が聞き返す。

「このままですと、やけになった相手が全力射撃を全方位に撃つ可能性もあります。とっとと片付けてしまいましょう。」

セシリアが危惧を抱いていたのはそこだ。

如何に最新のアリーナのエネルギーシールドと言えども無敵ではない。

それはつい今しがた証明されたし、何よりコントロールは相手側に握られている。それにどうやら相手側もそれを望んでいる節がある。

現に、不明ISの行動ルーチンが変化する。

というよりも、ルーチンに見せかけた遠隔操作に切り替わった様だと、セシリアは弱いながらも相手から伝わってくる人間特有の精神波からそう推測した。

「で、勿論山分けよね？」

「勿論。学園側が総取りする可能性もありますが…。」

「良いて良いて。戦闘情報だけでも本国で評価されるだろうしね。」

「ふふ、お話が早いことです。終わったら美味しい紅茶をご馳走しますわね。」

「なら、あたしも美味しい飲茶をご馳走するわね！」

直後、二人は左右に散開する様に離れると、その空白を貫く様に大出力のビームが空を焼く。

「では行きます。援護をお願いしますわ。」

「普通逆なんだけど…任せるわ！」

本来、ブルーティアーズは高機動射撃型で、甲龍は防衛よりの近接格闘型であり、前に出るのは鈴であるべきだ。

しかし、この少ない時間の中、鈴音はセシリアの実力が己を上回り、機体のエネルギー残量も上であることから前衛を任せる事にした。

(さて、どうしましょうか。)

とは言え、このまま攻めた所で先にブルーティアーズの方がエネルギー切れにならない程、彼我のエネルギーの保有量と変換効率には差があった。

後にゴレムIと判明するこの無人IS、大天災の作品だけあって各種性能は高レベルで纏まっていた。

故に、近接兵装以外の武装で徒に攻撃した所で有効にはなりにくいのはこれまでの時間稼ぎで分かっていた。

「であれば、するべきは一つですわね。」

ストライクシールドのスラストターが最大出力を吐き出し、同時に周辺に満ちるビーム砲の熱量と残留した粒子が背面のブースターへと吸収・圧縮された上で再度放出し、爆発的な加速で以て踏み込んでいく。

瞬時加速というISの基礎にして奥義とも言える加速技術。

未だ代表候補生にして学生である身とは思えない程に高レベルで纏まったセシリアのそれは、しかし瞬時加速である故に一つの欠点が存在する。

それは加速力の関係上、どうしても軌道が直線になるという事だ。

「Pi！」

勿論、それを見逃すゴーレムIではない。

透かさず迎撃へと移行し、チャージしていなかったために大出力とはいかないまでも、十分に一撃でブルーティアーズを撃墜できるだけの威力のビームを放つ。

「ふ……！」

並みの代表候補生ならまず反応できないだろうその一撃を、セシリアはストライクシールドの推進方向をずらして加速方向はそのままにバレルロール、ビームはギ

リギリを掠めて僅かに脚部装甲の表面を融解させるだけで済ませてしまった。

透かさず二撃目を撃とうとするも：

「私を忘れんな！」

エネルギーが枯渇寸前の甲龍による援護射撃。

初見殺しである龍咆の一撃は、ゴーレムの装甲を破壊する事こそなかったが、攻撃のシークエンスを一時中断させるには十分な威力があった。

二発三発と続く射撃は、しかし初撃を除いて回避される。

だが、その役割は十分に果たされた。

気づけば、もう接近戦するしかない間合いにまで、セシリアに踏み込まれてしまった。

ゴーレムIのAI、そして操作している人物はそう判断すると、先程射撃したために排熱の終わっていない右腕ではなく、左腕で殴り掛かる。

「残念。」

しかし、態勢の整っていない状態で放たれた拳がこのセシリアに有効な訳がない。顔を狙って突き出されたそれを首を傾けて回避すると、装甲の薄い関節部が露

出している手首へと、何時の間にか左手に持っていたナイフを突き立て、そのままえぐる。

「P i b i ! !」

左腕を振るって急上昇するゴーレムI。

腕の範囲から逃れ、ほぼ真下からそれを追撃するセシリア。

「Pi ! ?」

この時、ゴーレムは一つミスを犯していた。

いや、これはミスとは言えないものだった。

真下からの追撃の際、セシリアはゴーレムの真下のやや背中側にいた。

ここはどうしても下半身が邪魔になって死角の存在する場所だった。

とはいえ、ゴーレムの腕部は通常よりも長く、関節の可動範囲も人間よりも広いためにその死角は小さい。

しかし、確かに存在しており、そこに潜り込まれた故に、ゴーレムは咄嗟の射撃を中断し、別の最適な行動を模索してしまう。

そう、ここが無人機の限界だ。

常に最適な行動を取る、取ってしまおう。

それは人間という知恵持つ者を相手取る時、如何にスペックで優っていようととも敗北する原因となりうる。

その一瞬の隙を、セシリアは見逃さなかった。

「BAN！」

関節部、取り分け股間は関節の密集部分であり、他よりも関節部が露出している面積も大きい。

そこに背部ビーム砲4門とレーザーライフルの最大出力を叩き付ければどうなるだろうか？

重厚な装甲は、しかしその役目を全うする事が出来ずに内側から貫かれ、内部機構を溶解させて各部のビーム砲へと誘爆し、その熱量を一気に開放させ……

轟音と共に爆発した。

「ちよろいもんですわ。」

ようやく開いた隔壁の向こう、遅れて駆けつけてきた教師陣のIS部隊にセシリアはドヤ顔でそう言った。

.....

後日、今回の無人ISによる襲撃は緘口令が敷かれたものの、各企業・各国政府へと所属する生徒から密やかに知れ渡る事となってしまった。

学園側がそのことへの対処に頭を悩ませる中、しかし一組と二組の二人の代表候補性にしてクラス代表はのんびりとお茶会を開いていた。

「今回は分かりやすく饅頭（中華まん）にしたけど、どう？」

「素晴らしいですわ。特にこのジャスミン茶、花びらが開くのが目でも楽しいです。」

「ふふ、紅茶の国の人って言ってたから、ダーズリン・ホワイトにでもしようと思っただけど、気に入ってくれたなら嬉しいわ。」

「あら、英国ではコーヒーもよく嗜むのですよ？ 地域によっては紅茶よりも消費量が多いとか。」

「マジで!? 意外だわ……。」

「ですがまあ、紅茶について煩いのは本当ですよ。」

「言うだけあって、オルコットさんの紅茶とスコーンもすごい美味しいわ。私、あんまり紅茶とか飲んだ事なかったのに……。」

「日本暮らしの長い凰さんなら、ダーズリンが合うと思ってお気に入りを選びました。気に入っていただければ幸いですわ。」

こうして、二人の午後のお茶会は終始和やかに進んだのでした。

---

ふー久々だから色々忘れてる感

次は赤城かファフニールかな



## Fate短編 ファフニールが逝く その2 加筆修正

いかん、眠気の余り色々抜けた状態で投稿してしまった。

なので後半の宝具・スキル欄に加筆修正しました。

---

「さて、そろそろアイツを呼びましょうか。」

ジャンヌ・ダルク・オルタ。

青髭のジル・ド・レエが聖杯の力で作り出したジャンヌダルクの、本来は存在しない負の側面。

ジャンヌを知らない人々の「彼女ほど悲惨な目に遭ったのならば復讐を考えていない筈が無い」という思い込み⇨信仰を具現化する事で誕生した。

そして、嘗て第一特異点にてフランスで猛威を奮った竜の魔女。

そんな彼女が贖作英霊の事件を経てカルデアに召喚されてから一月、そんな事を唐突に言い出した。

「あいつって、ジルは二人ともいるし、白ジャンヌもいるよ？」

「あいつらじゃなくて、もう一人いるじゃない。私がフランスで使ってた手駒。」

「え？でも、第一特異点のサーヴァントの皆さんは、既にカルデアで召喚している状態ですが。」

今丁度現れたマシユの言う通り、第一特異点のサーヴァントは既に全員が召喚され済みであり、心当たりなんてマスターである少年にはいなかった。

しかし、ジャンヌ・ダルク・オルタ（通称・邪ンヌ）の言によれば、もう一人いるらしい。

「幸い、呼び符が何枚かあるんだし、呼んでみましょう。」

「では、私も一緒にしますね。」

触媒なら私もいますしね。

皮肉げな笑みを浮かべながらも、どこか楽しげな雰囲気邪ンヌといつも通りの健気なマシユと共に、藤丸はシステムフェイトのある召喚室へと足を運んだ。

.....

「呼び符は7枚か。まあ大丈夫でしょ。」

「大丈夫じゃなかったら？」

「それ、いつもの事でしょ？」

「先輩、爆死は程々にしましょうね…。」

召喚陣に呼び符をセットする邪ンヌとマシユからの一言に、藤丸はぐうの音も出なかった。

実際、召喚時の爆死等よくある事だったからだ。

「さ、準備は出来ました。呼びなさい。」

「所で、目当ての英霊の説明とかは…。」

「却下。この私からのサプライズだと思いなさいな。」

ニヤニヤと嗜虐的な笑みを浮かべる邪ンヌに、藤丸とマシユは諦めて召喚陣の起動を始める。

(これで誰も出なかったら、絶対邪ンヌにセクハラしてやる…。)

(ジャンヌ・オルタさんの言う残り一人、一体誰なんでしょう?)

(あいつを呼べれば、私のスキルとの連携もあって活躍の場が増える…！)  
それぞれの思惑と疑問を他所に、二人は召喚を始めた。

1 枚目、宝石剣

「外れね。」

「便利だし、丁度限凸できるだけあるから重ねておこっか。」

「では次に行きましょう。」

2 枚目、柳洞寺

「外れね。」

「manaプリ一枚目と。」

「では次に。」

3 枚目、アゾット剣

「また外れね…。」

「持ってるって愉悦られそうだからmanaプリへ。」

「パラケルススさんのものよりも低性能らしいですね。」

#### 4 枚目、偽臣の書

「ワカメね。」

「ワカメだね。」

「今日はワカメを食べるのは止めましょう。次です。」

#### 5 枚目、死の芸術

「外れだけど当たりね。」

「よっし、こいつも限凸！」

「絵柄はアレですが、効果は一級品ですからね…。」

残る呼び符は後一枚だけ。

もう後は無かった。

「さあ来い！邪ンヌとオレに縁のある英霊！」

「今なら私が作ってあげた契約書もあるわよ！とっとと来なさい！」

「いつもの爆死でも先輩は私が慰めます！」

3人の叫びと言うか気合いに反応してか、召喚陣が先程当たった死の芸術以上

にペカー！とエーテルの輝きを放ち、先程までと違ってその中央に人影が見えてくる。

「カモン！人理の守り手よ！」

そして、エーテルの輝きが収まった時、召喚陣には一人の少女の姿があった。

緑色に染められたワンピースに茶色のスリーブ（アームカバーの様なもの）、白い三角巾を掃除婦の様に頭に被った彼女。

一見単なる中世の村娘にしか見えない彼女だが、膝裏にまで伸びる人間離れした輝きを持つ金糸の長髪と縦長に広がる瞳孔と薄い金の瞳が彼女が単なる人間ではない事を如実に物語っていた。

そんな彼女はにっこりと笑うと、ペこりと頭を下げてサーヴァントとしての挨拶を告げた。

「サーヴァント・ライダー、召喚に応じ参上しました。真名をファフニール。殆どパーサーカーな身ですが、上手く使ってくださいね？……所で、ジークフリート殿はおられますか？いればお礼を言いたいのですが……」

「「「いやったー！！」」」

召喚室に三人の歓声が響き、それを間近で聞いたファフニールはきよとんと瞬きを  
をするのだった。

……………

所変わって食堂にて、4人はお茶をしながら話をすることにした。

「そうか、君は確かにファフニールなんだね。」

「ええ、表記揺れでファブニールとも呼ばれますが…。」

そう言って、ちらりと物言いたげに邪ンヌに視線を向けるファフニール。

それに邪ンヌはどこかふてくされた様にふん、と鼻を鳴らす。

「だって、ファブニールの方がかっこよいじゃない。」

「まさかの理由ですね…。」

呆れた様なマシユの言葉が全てを物語っていた。

邪ンヌえ…と藤丸も言葉には出さずとも呆れた視線を向ける。

「何よ！言いたい事があるなかはつきり言いなさいよ！」

「邪ンヌは可愛いなあ。」

「んな!? ななななな n (ry)」

顔を赤くして照れる邪ンヌに、藤丸は更に温かい視線を向けてほっこりする。

「む……。」

「ㄨ」

それを見ていたマシユは不満そうに顔をしかめると、そっと隣に座る藤丸の膝を軽く叩く。

私にも構って、という素直になれない初心な少女なりの精一杯のアピールだった。

「ふふ、皆さん仲がよろしいんですねー。」

その様子を、のんびりとお茶を楽しんでいたファフニールがにこにこ笑顔で感想を告げた。

「アンタ、何処見てそんな事が言えるのよ!？」

「うん、皆仲良しだよ。」

「はい！私と先輩はいつも仲良しです！」

「ぶふ！」

三者三様の言葉にファフニールはつついっつい噴き出してしまった。

(これなら、私も何とかやっていけそうですね。)

終始和やかで騒がしいお茶会で、ファフニールは本当に久々の安心という感情を抱いていた。

.....

「お前、は……。」

お茶会が終わり、施設全体の案内をしている最中、二人は出会った。

竜殺しの英雄、ニーベルゲルンの歌の主人公、ネーデルランドの遍歴騎士。

セイバー・ジークフリート。

「貴方は……。」

片や真性の竜種、悪竜現象の始まり、人々が恐れた邪竜。

ライダー・ファフニール。

顔を合わせた二人は、微動だにしない。

「すまない。」

先に動いたのは、ジークフリートだった。

普段から長身なのに猫背気味の彼は、腰を直角に折って深々と頭を下げていた。「俺は君の事情を知らず、ただの邪悪であると決めつけて退治した。そのせいで、君は人理にそういうものだとか刻まれてしまった。」

それは偉大な英雄が抱えていた、数少ない後悔の一つ。

彼が後年、遠回しな自害を選んだ理由の一つ。

死後千年経っても消えなかった、過去の過ち。

「頭を上げてください。」

その謝罪はしかし、その相手に止められた。

穏やかでのほほんと笑っていた少女は、今は真剣な顔で自分を殺した男を見つめていた。

「ジークフリート、その謝罪を受ける事は出来ません。」

「だが…！」

「何故なら、竜となった後の私は確かに大勢の人を殺してしまいました。それが指

輪の呪いを広めないためのものだとしても、それは呪いによって歪んでしまった私の成した罪。」

誰かが彼女を止めねば、討たねばならなかった。

それはシグルドでも、ジークフリートでも変わらない。

「罪は裁かれねばなりません。そして、たまたま私を裁いたのが貴方だったというだけです。」

悪竜は討たれるのが世の定め。

竜殺しの英雄として、ジークフリートは民草を守るために立ったに過ぎない。

『そうか。お前が相手となれば、俺が呼ばれるのも必然だったか。』

『往くぞ、ファフニール。嘗ての様に、俺がお前の嘆きを止めよう。』

そして、あの第一特異点では民草のため以外にも、宝具と聖杯によって狂わされて望まぬ暴虐を撒き散らすファフニールを止めるために立ち上がった。

「邪竜となり、罪を重ね続ける私を止めてくれました。剩え、最後には呪いの指輪を頼んだ通りに捨ててくれました。それだけでも望外なのに、今ではこうして罪を償う機会まで貰えたんです。」

これ以上は貰い過ぎて怒られちゃいそう。

そう言つて困つた様に微笑む少女は、だからと目の前の罪悪感と後悔で押し潰されそうな男へと、自分のできる最高の笑顔で告げた。

「ありがとう、ジークフリート。貴方は確かに私を救ってくれました。一度ならず二度までも、本当に感謝しています。」

「……………ッ！」

その言葉に、その笑顔に、生前からずっと求めてきた素朴で暖かな感謝に、ジークフリートは思わず涙腺が緩みかけた。

それを英雄としての渾身の気合いで辛うじて押し留め、精一杯の虚勢を張つて、己が退治した少女へと告げた。

「……では、俺は何度でも君を止めよう。君が道を誤るならば、君を止めるのは竜殺したる俺の役目だ。」

「ええ。その時はよろしくお願いしますね。」

竜殺しと邪竜。

本来なら不倶戴天の天敵である二人の再会は、とても優しく穏やかなものだった。

「ぐす……。」

「良い話だなあ……。」

(今更ながら良心が痛い……。)

なお、完全に置いてけぼりにされた三人は空気を読んで無言で背景に徹していた。

……

真名…ファフニール

出典…ニーベルンゲンの歌

地域…ドイツ

属性…混沌・中庸

性別…女性

身長／体重…153cm…53kg

「ニーベルングンの歌」に謳われる邪竜。

その正体は、神々の謀略によって悪竜の呪いに汚染された一人の少女だった。兄を殺された賠償として、ロキ神より渡されたラインの黄金という財宝の山。

その中にある呪われたアンドヴァリの指輪により、彼女とその家族は財宝を求めて殺し合う事となった。

父が弟のレギンに殺された後、長姉であるファフニールは呪いの大本の指輪を見抜き、呪いがそれ以上広がらない様に抱え込んだ。

すると、呪いを強く受けたファフニールは竜へと変化してしまった。

元々彼女達は変身の魔術を得意とする魔術師だったが、それが原因かはわからないものの、ファフニールは真性の竜種へと成り果てていた。

これ以上の被害拡大を食い止めるため、ファフニールは財宝を抱えてグニタヘイズへと移り住み、そこで待ち続けた。

竜となってしまった己を止める／殺してくれる英雄の到来を。

その間、彼女は財宝目当てに住処へと引き寄せられたあらゆる人間達を殺し尽くした。

呪いが外に出れば、自分と同じ様な被害者が出る。

それを食い止めるため、そして竜としての財宝を収集する本能に従い、彼女は住処にやってくる者全てを皆殺しにしていた。

そして、遂に待ちわびた者がやってきた後、彼女は漸く覚めない眠りにつく事が出来た。

宝具を使用しない限り、彼女は単なる村娘としての人格を備えている。

多少の魔術は使えるが、後は人間よりも多少頑丈な程度に過ぎない。

しかし、一度その宝具である指輪を使えば、彼女は理性を失い、伝承通りの邪竜へと変貌する。

宝具「呪われし黄金の指輪／リング・オブ・アンドヴァリ」

ランク…EX

種別…対人宝具

レンジ…5

最大補足…1人（自身・ジーク・ジークフリート・シグルド他、指輪を保有した

者)

ファフニールを竜たらしめる呪いの指輪。

これを手にしたが最後、一時的に財宝に恵まれるが、呪いによって次第に狂気に飲み込まれていき、最後には竜へと成り果てる。

これを発動させた場合、ファフニールは邪竜の姿となって活動を開始する。

こうなると、マスターからの命令も複雑なものを実行できなくなり、燃費が大きく悪化する。

しかし、その強力さに関しては確かなもので、竜の吐息の一撃で小さな町一つを灰塵に帰す事も出来る。

此度の召喚では、大規模攻撃時のみこの姿で竜の吐息による攻撃を行う。

効果・自身のクラスをバーサーカーに変更（見た目が画面一杯のドラゴンになる）＋自身のHPの最大値と攻撃力を上昇（OCでUP・5T）＋敵全体に強力な攻撃。この効果は重複可能である。

宝具「ラインの黄金」

ランク・A

種別…対軍宝具（自軍）

レンジ…10

最大補足…可変

北欧の神々により兄の命の賠償として贈られた黄金の財宝の山。

その量たるやライン川を埋め尽くし、三代に渡ってもなお使い切れない程の圧倒的な財力を与える。

しかし、指輪程ではないが、この黄金にも破滅の呪いが宿っており、ゆっくりと持ち主とその周囲を破滅させていき、持ち主が消えればまた別の持ち主を引き寄せてしまう。

永劫に続く財の形をした呪詛、それがこの黄金の本質である。

効果…ジークフリート（剣）・ジーク（術）・シグルド（剣）・ファフニール（騎）が装備した時のみ、味方全体にNP獲得状態を付与（毎ターン5P）+味方全体のNP獲得量をUP（20%UP）。

宝具「悪竜の血鎧／アーマー・オブ・ファフニール」

ランク…B

種別…対人宝具

レンジ…5

最大補足…可変

本来ならばジークフリートの宝具なのだが、彼女の場合は己の血を浴びた者全てに対して一時的に彼女と同等の耐久性を発揮させ、外部からの攻撃に対して高い耐性を獲得させる。

効果…絆礼装の一種。味方のジークフリート(剣)とジーク(術)とシグルド(剣)等とその亜種の英霊全てにダメージ50%カット状態を付与する。

スキル一覧

魔術…C

魔力放出…C

変化…A

動物言語…A

怪力…A

黄金律…B

狂化…A

竜種…A：攻撃力UP＋耐久力UP＋NP獲得量UP

ステータス一覧

ライダー時 筋力E 敏捷E 耐久D 幸運C 魔力C 宝具EX

バーサーカー時 筋力A 敏捷D 耐久A＋ 幸運D 魔力C 宝具EX



## 艦これ短編 赤城が作る 4

近年は東北にもうどんチェーン店が増えてくれて嬉しい。

「見てください鳳翔さん！商店街の福引で当たったんですよ！」

「赤城さん、またですか……。」

仕方ないんや（震え声）

だって警備府の食料調達、基本的にお近くの商店街に頼ってるもんだから……。

ここ、小規模だけど既に艦娘だけで50人近いし、憲兵さんとかもいるから、軽く100人はいるし、それだけの買い物をしてると福引券とかが大量に手に入っちゃって、使わないと勿体ないし……。

「にしても、見事な小麦粉の山ですね……。」

呆れた様に頬に手を当てて溜息をつく鳳翔さんの視線の先。

そこには彼女達の身長よりも高く積まれた業務用小麦粉の大袋（一つ25kg）が

30 近くあった。

「取りあえず軽トラックに積んで持ち帰るとして……。」

「地下室なら長期間保管しても味は落ちないでしょうけど……。」

米等もそうだが、冷暗所で保管すれば味が落ちる（＝栄養素が失われる）速さはかなり緩やかになる。

とは言え、貰ってしまったからには美味しい内に食べ切るべきだと二人は考えていた。

「……よし！」

「思いつきましたか？」

「はい！まあ一部は長期保存するとして……私達だけじゃ手が足りませんね。」

「丁度暁型の子達が非番ですし、あの子達にお願いしてみましようか。」

……

「今回はうどんにしましょう！」

使用する小麦粉は基本なんでもOKです。

肝心なのは材料をたくさん捏ねる事が大事ですから。

粉100gに対し、水を50〜60cc、それに塩を小さじ一杯のみ。

今回は粉1kgに対し、水を500cc、塩を大匙3杯でいきます。

材料をボールに入れて、完全に纏まるまで混ぜ合わせます。

一つの塊になったら、粉をまぶした板の上か綺麗なビニール袋に入れて、ひたすら揉みます。

板の上なら兎も角、袋でやるなら足でやった方が楽かもです。

とは言え、やる事は同じです。

潰して潰して潰して、平らになったら折り畳んでまた潰して潰して潰して……  
ずっとその繰り返しです。

製麺機のような業務用機械なら兎も角、これを人力でやるのは物凄く疲れます。

しかし私達は艦娘であり、集団生活をしています。

そして、艦娘というのは例え艤装無しの駆逐艦と云えど、訓練した成人男性を遥かに凌駕する体力の持ち主です。

「うんしょうんしょ。」

「はわわ、結構大変です。」

「ハラショー、単なるうどんでも力があるんだね。」

「い、一人前のレディなら、お料理だって出来るんだからね！」

大きくて厚手の、透明なビニール袋。

その中に入ったうどん生地を皆でふみふみと潰す。

ある程度平らになったら、それを折り重ねてまた一からふみふみ。

一袋あたり、これを15分繰り返し続けます。

……艦娘の私が言うのもなんですが、この光景を撮影してうどんと一緒に売り出したら、とんでもない値で売れそうですね……。

「よいせっと。」

斯く言う私も、先程から彼女達の隣で生地をふみふみしています。

体力こそ問題ないのですが、終わりが無いと思える程の量をふみふみしているの  
で、聊か精神的にきついものがあります。

今回は業務用小麦の大袋を3つ分もうどんにしようというのだから、量が多い

のも当然なのですが。

「皆さん、おやつを用意しておきますので、頑張ってくださいね。」

「「「「はい！」」」」

夕飯に向け、うどんに載せる具や麺つゆの準備をしている鳳翔さんから声がかかる。

今回はあの人に大分負担がいつているが、こちらも凄い量なので、手伝いにいく事が出来ない。

「かつお出汁たっぷり、の麺つゆ……ふふ、美味しくなあれ。」

が、一人で楽しそうにお鍋を掻き回す鳳翔さんがかぁいいので頑張って終わらせましょう！

なお、カツオ節から出汁を取る場合、沸騰したお湯の火を消した直後に投入し、カツオ節が全て沈んだのを確認してから取り出しましょう。

取り出したカツオ節はもし犬猫を飼育していたらあげると喜びますよ。

塩気も抜けて健康に害になる事ありませんし。

鳳翔さんには他にも蒲鉾のカットや温泉卵、天ぷらにサラダの準備等を頼んでい

ます。

正直、頼み過ぎかもしれませんが、鳳翔さんが嬉しそうに引き受けてくださったので、今回は甘えてしまいたいです。

さて、私ももう暫く頑張りますか！

……………

## 2 時間後

「ひい…ひい…。」

「なのです…なのです…。」

「はら…しよ…。」

「りっぱな…れでい…。」

「ぜえぜえ…流石にこの人数でこれは…。」

余りの量に業務が午前だけだった睦月型が途中参戦してくれた事で、辛うじて生地を作り終える事が出来ました。

「さて、こうして捏ねて捏ねた生地ですが、もうすっかり落ち着いてお餅みたいに

よーく伸びます。」

「わ、ホントだわ！」

さて、生地を伸ばして切る前に、大きな寸胴鍋三つでお湯を沸かします。

忙しい時に一気に沸かす事はできませんからね。

そろそろ夕食の時間帯、お湯の準備は欠かせません。

「汁と具材の準備は終わりましたよ。」

「ありがとうございます。じゃあ生地切っちゃいますね。」

乾燥した俎板に打ち粉として小麦粉をかけ、生地を載せ、更にその上からまた打ち粉をかけます。

それを麺棒で1cm程の薄さまで伸ばしていきます。

で、それを5mm程度の間隔で切っていきます。

生地が大きくて俎板に載らなくなった場合は折っても構いませんが、常に打ち粉を忘れないように。

じゃないとくっついて片付けが面倒ですから。

で、切り終わったら直ぐに麺を解してくっつかないようにしつつ、打ち粉を落と

します。

それが終わったなら、沸騰するお湯に麺を入れて、大体10分間茹でましょう。

固さの細かい調整はゆで時間で変えましょう。

さて、後は手伝ってくれた睦月型と暁型の子達のために出来立てのうどんをご馳走しましょうか。

「よっと。」

茹でたうどんをザルに上げ、冷水をかけながら解す事でぬめりを取る。

こうして冷水で絞める事で歯ごたえが増し、更にはぬめりで味がぼやける事を防ぐのだ。

そして、鳳翔さん特性の濃い麺つゆにお湯か氷水を足し、そこに麺を投入する。

「さあ、皆で頑張った手打ちうどんです！たんと召し上がれ！」

.....

「あっつ.....」。

夏の盛りこそ過ぎたものの、に未だ残暑厳しいこの時期。

夏の大規模作戦における総報告のために全国の鎮守府から提督が集合する。

大凡一日がけで行われる戦果報告とその昇進の授与に、辟易する提督は多いが、マスコミも入る定期行事でもあるので、迂闊に気を抜く事も出来ない。

こんな時に襲撃されたら一卷の終わりだよなあと思うものの、それでも彼は提督としての義務故にくそ暑い中を式典用の装飾ありありの正装で炎天下の中を棒立ちする事となった。

(早く風呂入りたい……。)

制汗スプレーや消臭剤を利かせても尚消し切れない汗臭さに嫌な気分になる。

マスゴミの機嫌なんて取らないで、書類の送付だけで済ませてほしいと彼は心底思うのだが、「民心の慰撫も軍人の務め」とこの手の行事は尽きる事がない。

とは言え、それももう終わった事。

日が沈んで涼しくなったこの時間、提督は漸く己の警備府へと帰ってきた。

「ただいまー……。」

「おかえりなさい、司令。」

「お、今日は不知火が第二秘書艦だっけか。」

「はい。」

当警備府では秘書官は初期艦である吹雪を第一秘書艦とし、必ず第二秘書艦を設けて事務仕事に当たる。

更にここに大本営との連絡役として大淀がおり、鎮守府の事務方となっている。第二秘書艦の設立に関しては、提督と吹雪、大淀がいない時でもしっかりと事務を回せるように全員に一度は経験させるべしという提督の意見によって設置されたものだが、艦娘達からは「合法的に提督のお傍にすることが出来る！」として大人気であったりする。

「こちらをどうぞ。」

「お、悪いな。」

渡された冷たいお絞りで顔や首を拭うと、先程まであった不快感が大きく減る心地良さにふう……と一息つく。

「先ずはご入浴すべきかと。」

「だな。流石に汗臭いしな。」

少しマシになったとはいえ、辛いことに変わりはない。

そうして不知火と互いに大本営と警備府での他愛のない出来事を報告し合いながら歩いていくと…

ズルズル……

「ん？」

不意に提督の耳に異音が響いた。

「提督？」

「何か聞こえないか？」

「いえ、不知火には何も。」

不知火が高角砲を構え、周辺を警戒し出す。

しかし、提督はそんな様子は一切見せず、迷いなくその足のある場所へと向ける。

「どちらに？」

「音の発生源に。」

「お供します。」

そして歩く二人だが、異音の正体は直ぐに分かった。

微かな何かを引きずる様な音。

それが漏れ出ているのは食堂だった。

「成程、この音でしたか。」

そこでは皆が皆ズルズルと音を立てながら、一心不乱に白い何かを啜っていた。その太さと茹でた小麦の特徴的な香りに、提督はそれが何かを悟った。

「うどんか。」

「そう言えば、今日は赤城さんの日でしたね。」

その言葉に、提督は黙って歩を進めた。

既に彼の頭の中には、というかこの警備府の者達には赤城Ⅱメシウマという構図が常識としてインプットされている。

ここで先に風呂に入って、空母や戦艦組に全てを食い尽くされるのは提督としては我慢ならなかった。

「風呂より先に食べる。」

「お供します。」

戦艦の眼光とも言われる不知火もまた、人知れず唾を飲みながら、空いている

テーブルへとつく。

「お帰りなさい司令官！こちらお冷になります！」

「ただいま睦月。メニューはあるかい？」

にこやかな駆逐艦娘の一人からお冷を受け取りながら、提督が問う。

「はい！温と冷、小と並に大があります。」

「へ、それだけ？」

赤城が作った割に、余りにもシンプルだった。

「ふふ、提督、あっちを見てください。」

「あっち……あ！」

今まで大勢の艦娘達の陰になって見えていなかったが、この食堂の中央にあるテーブルに沢山の具が置かれていた。

刻み葱にかまぼこ、椎茸の煮物や天かすやワカメ、油揚げといった一般的なものから、鶏ささみとエビ、茄子や南瓜、ゲソやかき揚げ等の天ぷらが揃っている。

更にサラダに使うレタスや玉葱にトマト、海藻ミックスにコーンやキュウリ、大根おろしに大根のつまや茹でたオクラ、シーチキンにサラダチキン、各種ドレッシ

ングが並んでいる。

また、その二つの集団の間には生卵と温泉卵、ゆで卵が配置されている。

「成程。うどんバイキングか。」

「はい！ 暁型と睦月型の子達皆で生地を踏んで作ったんですよ！」

にっこりと告げる睦月だが、それで食欲をそそられるのは変態だと提督は思ってしまった。

「つまりは手打ちうどんか…！ よし、最初は冷の小で頼む！」

「不知火も同じものをお願いします。」

「はい、かしこまりました！」

注文し、ワクワクそわそわと少年の様にうどんを待つ。

何せさつきから二人の嗅覚には小麦が茹でられる匂いの他、熱々の天ぷらを揚げる油の香りまで届いており、空きっ腹を抱える二人にはこの時間は食事の醍醐味ながらも余りにも酷だった。

「お待たせしました！ 冷の小盛二つになります！」

渡されたどんぶりは味噌汁椀より少しだけ大きい小どんぶりがそれぞれ二つ

二つのお椀には少し濃いめながらも水の浮かぶ麺つゆ、そして主役たるうどんの姿があった。

形式的にはざるうどんだが、これを基準に色々と具を足すのならこの方が効率的なのだろう。

「いただきます。」

不知火と共に感謝の言葉を告げ、うどんへと挑む。

（最初に一口。）

ちゆるん、と一本だけすする。

すると、単純な塩分ではない圧倒的な旨味に驚く。

（凄い濃厚なカツオ出汁！）

市販品ではあり得ない程の濃厚な旨味。

そのまま咀嚼すると、今度は物凄い歯ごたえのうどんとぶつかる。

（こりやすごい！突き立ての餅みたいだ！）

単純な固さではない。

その圧倒的な弾力に、提督は心奪われた様にじっくりと咀嚼し、飲み込む。

「美味い……」

一日中式典と報告会で炎天下の中には提督にとって、冷たいまま喉を流れ落ちていくうどんの感触は心地よい。

(よし、次だ。)

予定通り、提督は席を立つと、艦娘に混じって真ん中のテーブルへと向かう。

その中からサラダ、生野菜を全部うどんの上に乗せ、そこに青じそドレッシングをかけて戻る。

「うむ。」

テーブルに戻ると、満足気に頷き、箸を突き刺し、生野菜ごとうどんを一気にすすする。

しっかりとしたうどんの歯応えに加え、シャキシヤキとした生野菜の食感がアクセントとなって楽しい。

目で見ても彩鮮やかなサラダうどん(青じそドレッシングかけ)の持つ清涼感に、食べ終わる頃には提督の汗はすっかり引いていた。

「すいませーん！温かいうどんの並一っ！」

「はい！」

そして、程良く体が冷えた所に、温かいうどんを頼む。

前菜は終わり、次はメインである。

提督は3分も経たずに届いた熱々のうどんと温かい麵つゆをテーブルに置いたまま、意気揚々と天ぷらコーナーへと向かう。

(先ずは七味と刻み葱、おっと蒲鉾もだな。)

先程とは異なり、うどんの具としてはスタンダードなそれらが大皿から取り、次に目的である天ぷらへと向かう。

(よし、丁度揚げたてだな。)

ジュウジュウと未だに音を立てている天ぷらに内心でガッツポーズを取る。

そして柏天とえび天、茄子天に南瓜天にゲソ天、かき揚げを別の平皿へと取り分けてテーブルに戻る。

(やっぱ後乗せこそ至高。)

そう信仰する提督は、決して天ぷらを汁でべちよべちよにしたりはしない。

そういうのは天かすでやれば良いのだと思っている。

「ん……！」

テーブルに戻り、直ぐに我慢できんと汁に先端を付けたエビ天に噛みつく。すると、中心が半生状態だったエビ天から熱々の汁が飛び出す。

その熱さと美味さに驚きながらも、思わずビールが欲しくなってしまう。

だが、今日の主役は違うと空かさずうどんを一口啜って一緒に食べる。

熱々の天ぷらと茹で立ての麺、そして旨味満点の汁のコラボレーション。

専門店でも早々味わえないプロの味に、提督の脳裏を歓喜が埋め尽くす。

南瓜のほくほくとした甘さ、茄子のとろりとした柔らかさ、ゲソ天のうどんとは

また異なる歯応えと旨味、そしてかき揚げのサクサク感と玉ねぎと人参の甘味。

それをネギたっぷりのおどんと共に喰らい、時折箸休めとして蒲鉾をかじる。

(美味い……。)

ただ只管にそう思う。

ああ、苦労も多いけど提督やってて良かったと、彼はしみじみと思った。

「ん？ 不知火、それは……。」

「これですか？ 釜玉うどんです。」

茹で立てのアツアツのうどんに生卵を落としてかき混ぜ、そこに醤油や出汁醤油を垂らし、お好みでネギとゴマ、そして刻み海苔を塗している。

「すいませーん！温の並一つ！」

気づけばそう叫んでいた提督を責める者はいない。

こうして、小さな警備府の夕食会はまたも大盛況で終わるのだった。

翌日

「ふっふっふ！昨日よりもちょっと伸びてる？そんな時こそ焼うどん！鰹節と竹輪入りです！」

「「「「!?」」」」

個人的にはサラダうどん（ゴマドレッシング）か和風カレーでのカレーうどんが鉄板。

## 落第騎士 SS 桐原に TS 転生

うーん消化不良。

どうすべえ、と桐原家の静矢に転生した中の人は思った。

ここが落第騎士世界であり、伐刀者とかいう文民統制に喧嘩売ってる個人技インフレ上等チートオレ Trueeee! な世界であり、尚且つ自分が高校生になる頃には第三次大戦勃発の確率がめがっさ高いという糞ゲーな世界である事は年齢程度で何とか赤子の感覚器官でも分かった。

(いや、伐刀者なんてやってられないし。)

自分とて厨二病やオレ Trueeee! に対して誘惑が無い訳ではない。

しかし、それ以上に自分の命が大事だった。

だがしかし、桐原家はどうかやら代々優秀な伐刀者を輩出している家柄らしく、戦いたくないなんて言えば良くて捨てられ、悪くて洗脳されかねない。

聞いた事はないが、そんな伐刀絶技を持った連中がいてもおかしくはないだろう。名家ならばそんな連中との繋がりがあったても不自然ではない。

なので、死なない様に自分を特化させる事を決意した。

幸い、原作における桐原静矢の伐刀絶技は対象の五感に自分を感じなくさせる事でステルス化するという逃げ隠れには最適なものだ。

展開に時間がかかる上、対象以外からは見られてしまうし、足跡や残り香等は消えないし広範囲攻撃に弱いのだが、それは訓練と対策次第でどうにか出来る。

(何とか生き延びて元のオタク生活に戻らねば(使命感))

ヒキニートではないが、生涯オタクだった前世を持つ身としては、早い所元の快適な住環境を取り戻したかった。

だけど、こっちって自分の知ってる作品あるかなあ？

歴史が大分違うから、その辺はあんまり期待できんかも…。

でも、黄昏の魔弾なる人気漫画もあるし、それはそれで良いかも。

この時、自分は不覚にも気付かなかった。

自分が原作と異なり、何故か女の子になっている事を……。

何で気付かなかったって？

股まで手が届かなかったからだよ！

不肖桐原静矢もとい静（0歳）、未使用のままマイサンを無くす。

……

生まれてから16年後、予定通りに破軍学園へと入学できた。

それまでに家での魔力ランク測定やら、本格的な訓練の開始に伐刀絶技の開眼、そこから来る戦術・戦略の勉強、それに加えて通常の学校の勉学まであり、かなりハードだった。

幸いと言うべきか、噛ませ扱いの桐原静矢（TS済み）の元のスペックの高さからそこまで習得速度そのものは前世補正も加えて高いものがあつたので、そこまで苦勞する事は無かつた。

が、親が頭の固い人種であったためか、ゲームやラノベに漫画なんて必要無い！とか抜かすため、その点に関しては早々に見限っている。

将来的には家を継がずに仕事&別居は既に決めている。

やはり前世からのオタクとしては、あんなガチガチのエリート主義は合わないのだ。

既に弟もいるし、女の私なんてお呼びじゃないでしょう。

「理事長、私達に何の御用でしょうか？」

入学早々に一部の生徒と共に呼び出されてしまった。

まあ原作知識的に予想はできるけどネ！

で、結果は予想通りでした。

ここでの事は他言無用です、という厄ネタな言葉を皮切りに話されたのは、これまた厄ネタの塊の様な話だった。

曰く、自分達と同じ今年入学の生徒の一人にFランクの生徒がおり、その男子生徒を中途退学に追い込んでほしい。

魔力量が低く、伐刀絶技も身体強化（全伐刀者の基礎技能の一つ）位しか使えな

いので、大成する見込みも低い。

更によえば、その生徒が学園を卒業したとしてもとてもではないが実戦に耐え切れず殉職する可能性は高いとも。

そこで、自主退学に追い込み、平和な道を生きる様に誘導してほしい。

そのためなら手段は問わず、学園側からも支援する、という話だった。

(うーん。)

実際、黒鉄厳の言葉は公人としては確かに一理あった。

仮にもし一輝の様な魔力の極端に低い伐刀者がいたとして、彼程の剣或いは戦いの才能があるとはとてもではないが思えない。

そうなれば、戦場で無駄な死体が一つ増えるだけだ。

だからこそ、下手な希望等は持たせずに別の道で生きていくべきだ。

が、自分に変な知識のために知っているのだ。

黒鉄一輝が別の道に進んだ場合、高確率で日本の首都たる東京は第三次大戦で壊滅的な被害を被るのだと。

(あんな善良そうな男の子、いじめ倒すとかないわー。)

というかそもそも、一輝始め黒鉄家の子供達があんなにも頑なになったのは厳が相互理解を怠ったからこそ。

その尻拭いとしてこんな後味の悪そうな事をするのは絶対に嫌だった。

かと言って、ここで断つたらもっと酷い事をしかねない。

となれば、あくまで言い訳の効く形で事を進める必要がある。

「分かりました。方法はこちらに任せて頂いても？」

「構いません。人手や道具が必要ならばこちらで用意します。」

取り敢えず、そういう事となった。

はあ……ほんとマジどうしょ。

………

僕は、彼女の事を何があっても一生忘れる事は無いだろう。

彼女との出会いは、入学早々に実家に圧力をかけられた学園側の指示を受けた他の生徒達に追い回されて隠れていた時の事。

階段裏の物陰で座り込んでいた時、唐突に声をかけられたのだ。

「貴方が黒鉄一輝君ですね。」

疑問符ではなく断定してきたその女生徒の姿には、見覚えがあった。

桐原静。

入試主席で答辞を読んでいた女生徒であり、全部ではないが試験を見た時、随分巧く戦うのだと思った。

「何でも、創設以来始まって初のFランクだとか。」

「そういう君は、Bランクだそうだね。」

今年度の入学生の中ではただ一人のBランク。

彼女の扱う霊装は弓であり、そこから様々な種類の矢を放つ彼女の姿は、多くの人の印象に残った事だろう。

「唐突ですが、黒鉄君は伐刀者になりたいのですか？」

「なりたい。」

そのためにここに来た。

父に、黒鉄家に認めてもらうためにも、伐刀者として結果を残すために。

「とは言え、Fランクである貴方が伐刀者になるには通常よりも厳しい訓練が必要。そうですね？」

「うん、まあその通りだね。」

その間に、黒鉄は大凡の桐原の狙いを悟った。

恐らく自分を捻じ伏せて、Fランクは相応しくないとでも因縁を付けるつもりなのだろう。

「ふーむ……所で黒鉄君は我流ですか？」

「？ うん、そうだけど。」

はて、そんな質問をする必要があるのだろうか？

「宜しい。今後のお互いのためにもここは一つ、模擬戦をしましょう。」

「それは良いけど……。」

一輝としては疑いを捨て切れない。

それが今までの一輝を救ってきた実績があるからだ。

「勿論、どんな結果になった所で単なる模擬戦なのですから、双方に問題は発生しません。何なら文書にしても良いですよ？」

「いや、分かったよ。模擬戦をしよう。」

その言葉で、黒鉄は腹を括った。

元より気配を殺して隠れていた彼女から逃げられるとは思えない。

なら、此処で虎口に入るのも有りだと判断したのだ。

「宜しい。では先生方に話して空いてる試合会場を借りてきますね。」

にっこりと微笑むその姿に、一輝は僅かだが目を奪われた。

……………

(よし、大体狙い通り。)

プラン自体は簡単だ。

原作開始時期には悔りが過ぎていた学園全体の認識、それを変える。

少なくとも、黒鉄一輝の近接戦闘技能はこの時点で同年代からは既に群を抜いている。

近接戦闘に限定してこの学園で勝てるとしたら、自分か生徒会所属の東堂刀華く

らいだろう。

それが周知された場合、学園側がもし一輝を退学させた場合「あんな優秀な生徒を退学させたのか」と言う風評被害を受ける事になり、それは今後の伐刀者育成にも大きな影を落とす事になりかねない。

唯でさえ近年は対外的な結果の残せていない破軍学園にそれは致命傷となりかねない。

もし一輝を退学及び学内の声を無理矢理押し潰すにしても、それは結局今の学園首脳陣への対外的不信を招く事となるのでそれも迂闊にはできない。

そして、最低でも人の目を一輝に集中させる事で表立ってのいじめを抑制する事にも繋がる。

(これで一年間時間を稼げれば良いんだけど……。)

幸い、自分の伐刀絶技は姿を隠すのに適している。

学園の理事長が黒鉄家から指示を受けていた事、それに従った生徒がいた事、他諸々の黒鉄一輝個人に対する理不尽な扱いに関する情報収集は既に開始している。(後は、彼がボクと戦い、その実力を見せる事。出来れば勝利してくれると尚良い

かな?)

それで彼を単なる不出来なFランクと見る者はいなくなる。

「双方、準備は良いか！」

「はい。」

「いつでも。」

そして今、試合会場には結構な数の生徒が観客としてやってきていた。

その数は100を優に越している。

まあ入試主席とFランクという物珍しさから来ているのだろうが……よし、広報部の先輩方はこちらの狙い通りカメラを持ってきてるな。

(後は、分かり易く黒鉄君が強いと証明してみせるだけ、か。)

超高速での初撃決着では、学園側がうやむやにしてしまう可能性が高い。

そのためにも、ある程度接戦する必要がある。

高速の近接戦闘が得意な黒鉄一輝を相手にして、だ。

(不意打ち上等ギリラ大好きアンブッシュは何回でもおkで最後に立ってた奴が勝者だ！な私には辛いなあ。)

「ま、やってみせるさ。」

そう一人呟くと、静はその手に霊装を展開した。

.....

「では、試合開始！」

そして、審判の声と同時に、

「ッ!!」

双方が動いた。

一輝は陰鉄を手接近すべく疾走し、静は弓矢で弾幕を張りながら後退したのだ。

それを見て、一輝は舌を巻いた。

「やっぱり入試の以外にも手があったんだね！」

「当然！引き出しは多いに超した事はありません！」

通常、静の弓は典型的な和弓だ。

小柄な彼女の身長の1.5倍程もある大きな黒塗りの弓。

それが今は同色の短弓となり、威力は低いけど短い矢を秒間3発程度の速さで連射し、弾幕を張っている。

(これは結構厄介だな！)

入試試験では、敵役の教師の肩へと刺さった矢がそのまま爆散していた。

霊装即ち伐刀者の魔力で編まれた心の形。

ならば、霊装を自身の魔力へと戻し、操る事も可能だ。

その中には複数或いは無数の武器を持つ者もあり、それを使い捨てる事もある。しかし、彼女程積極的にそれを行う者は殆どいない。

如何に魔力で編まれていたからと言って、己の精神の具現を爆破したがる物好きなんていないし、そもそも人形師でもないのにそこまで遠距離から操作できる者が殆どいないからだ。

だが、静はそれを実現し、火力の足りない筈の弓矢は高速徹甲榴弾へと成長した。だからこそ、一輝は必死になって回避する。

無論、手加減されているのは分かっていたが、紙装甲の一輝が被弾した場合、大怪我では済まない可能性が高い。

故に、丁寧に全ての矢を捌ききらねばならない。

(K O E E E E E E ! 流石一輝 !! サンは格が違う!)

そんな事を考えながら、静は弾幕を張りながら試合会場中を逃げ回る。

順調に矢を撒き散らしながら、一輝に防戦一方な様に見せつける。

(チャンスは一度、やり直しは利かない!)

静はこのまま撒いた矢を起爆して会場中を爆発で満たすつもりだった。

それで煙幕を展開しつつ、視界を敢えて遮る事で相手の接近を許し、やられたふりをする予定だ。

「はああああ!!」

「んな!？」

しかし、それは一輝が予想以上の速さで距離を詰めてきた事によって挫かれる。魔力の放出は感じない、となると純粋な体術、所謂縮地の類か。

「速過ぎるよ!」

「見切っておいてよく言うね!」

このままズンバラリンでは恰好がつかないと、弓を消して代わりに鍬が異様に長

い矢を二本生成し、即席の双剣として一輝の斬撃を凌ぐ。

一合目を弾き、二合目を交差した矢で受け、三合目で右の矢を弾き飛ばされ、袈裟切りから変化した変則的な刺突を左で弾いて慌てて距離を取る。

が、当然の如く一輝は静に追隨してくる。

距離を取られればハリネズミにされると分かっているからだ。

「シッ！」

「…！」

右手に投擲用ナイフにも似たほぼ鎌だけの矢を三つ生成して牽制のために投擲。それらが一太刀で切り払われるのを見てどんだけーと思いつつ、静は奥の手の一つを使う。

「な!？」

距離を詰め切られる寸前、静の姿が風景に溶け込む様にして掻き消え、一輝は驚きで硬直する。

直上からの殺気に上を見上げる。

そこには、太陽を背にする形で和弓にも似た大弓にそれに見合う程に長大な矢を

番えた静の姿があった。

伐刀絶技「顔無し／フェイスレス」による透明化、直後の魔力放出による急上昇で上を取ったのだ。

その高度は実に30m、これでは碌に魔力の無い一輝では射程外だし追い付けない。

「殺ったああああああ!!」

が、此処で本当にぶっ殺しちゃったらヤバイ事この上ないので、同時にではなく矢を放つよりも僅かに早く地面に撒いてた小さな矢を起爆する。

(さあ、乗ってきなさい!)

.....

(詰み、いや、まだ!)

一方、一輝もまたここが決め時だと悟っていた。

元より魔力量から超短期決戦しかできない彼からすれば、決め時が来る事そのも

のは歓迎だ。

しかし、こうも自身が不利な状況だと困る。

(桐原さんは直上30m！一刀修羅を使って跳躍しても届かず、投擲した所で致命打になり得るか怪しい。)

「ッ！」

視界の端で、試合会場に撒かれた無数の小さな矢が爆発していく。

一個一個はそう強力ではないが、それでも手榴弾程度の威力はある。

即ち、人体を破壊するには十二分の威力があるという事。

それが試合会場の端から順に爆発して：

(順、に?)

そう、会場の端から自分のいる中心に向けて、だ。

その早さは後数秒もあれば自分を巻き込み、続く直上からの大矢の一撃で自身を木っ端微塵にする事だろう。

(一か八か！)

逡巡もなく、一輝は最後の賭けに出る。

そして、爆発が自身のいる会場の中心へと到達する刹那、

「ふう……！」

なけなしの魔力を全て振り絞り、桐原のいる直上へと跳躍する。

だが、彼の魔力だけでは届かない。

残り半分、15mで失速してしまうだろう。

その寸前、地表での爆発が一輝を後押しし、その体を持ち上げる。

だが、僅かに届かない。

「ここまでですか！」

静が失望する様に叫ぶ。

それに一輝は応える。

否、否、否！

「まだだ！」

まだ、己は戦える！

完全に失速し、落下へと変化する間、その刹那だけは人は完全に浮遊している。

その刹那に、もう一度一輝は跳んだ。

類稀な身体能力と肉体操作技術、そして刀へかかる荷重すら利用して、彼は到達した。

上空30m、桐原静のいる領域に。

「……ッッッ!!」

その零距离において尚、静は諦めなかった。

驚愕と、歓喜と、興奮に支配されながら、彼女もまた伐刀者としての責務を果たすべく、正面から一輝へと矢を向け直し、放つ。

だが、その一射は放たれたと同時に正面から両断され、

「御、美事……。」

そのまま、袈裟懸けに斬られた。

同時、今度こそ完全に失速した二人は、仲良く意識を失って落ちていった。

……

一年後

「とまあ、そんなこんながあつて、一輝君は舐められる事も無くなりました。」

「そうだったのですか……。」

あの事件から丁度一年後、入学してきた一輝の妹の球雫ちゃんへと当時のなれそめなんかを説明していた。

「本当に随分とお兄様がお世話をお掛けしてしまつたのですね。桐原先輩、本当にありがとうございます。」

「別に球雫ちゃんのせいじゃないってば。まああの後も大変でしたけど。」

春先の中庭、そこでのんびりする三人はのんびりと物騒な会話をしていた。

「あれ見て私が弱いなんて勘違いした馬鹿共を干切っては投げ干切っては投げ。こつちまで露骨に敵視してきたアホ共を闇討ちして黙らせて、それでも勘違いして突っかかってくる連中を相手に二人で乱取りしてボコボコにして。大変刺激的な毎日でしたとも。」

「いや、その……その節は大変ご迷惑をおかけしました。」

そして、改めてそんな事態の原因となつた一輝は静へと本当に申し訳なさそうに謝罪していた。

「別にいいですよ。悪いのは別にいる訳ですし、そもそもこの学校を退学した所で、別に構いやしませんし。」

「はあ!?!」

「いや、別に卒業するなら破軍である必要もないし、そもそも連盟である必要すら無いですし。」

そもそも、東京壊滅にしたってその時に国外にでも退避して人里離れた辺境にでもいれば良いし、そんな場所で勝手に伐刀絶技を使っても怒られない。

第三次大戦を無傷で過ごすには、そもそも伐刀者である必要は無いのだ。

「とまあ、そんな感じでいたのですが、今年からは理事長がまともな人に交代になったので、こうしてのんびりしている次第ですよ。」

思えば、たった一年で随分と絆されてしまったと思う。

このマキシマム善人である一輝とセット扱いされるようになってから、私の人生設計が狂いっぱなしだ。

まあ私が彼の善人ぶりを見て、何だかんだしよーがないにゃあ……と手を貸しているからなのだが。

それでも何時でもバックレる用意はしているし、本当の奥の手、即ち透明化ではなく透過である伐刀絶技「呼ばれざる者／＼ネーム」を使えばどんな場所でも誰からでも離脱できる。

原作の桐原静矢と違って、ノータイムで使用可能な私にとって、逃げ隠れに徹すれば誰にもどうにもできない。

「そ、そっか。いきなりだったからびっくりしたよ。」

「大袈裟ですねー。もう遠距離攻撃にも対応できるようになったんですから、私の手を借りる必要もないでしょうに。」

実際、自分が最大速度で連射しても、最大火力で有効射程ギリギリから狙撃しても、こいつは既に対応できるだけの力を付けた。

また、近接戦闘にしても余程の例外でない限りは5分と持たずに切り伏せるだけの腕も。

「そんな事無いよ。桐原さんがいなければ、僕の学園での生活はもっと酷かった。」  
「お、おう？」

ぎゅっと両手を包む様に握られて、真剣な瞳でこっちを見てくる一輝に困惑する。

あれ？こいつってこんな事するキャラだけ？割とむつつりな事は知ってるけど。例…「死んだ」

「分かった。分かったから離れて。」

「で、でも…。」

何だか最近こいつの目が怖いんだよなあ……私のことを見る目が他と違うっていうか。

「少なくとも私から辞める事は無いから落ち着いてください。OK？」

「う、うん。」

でも、こんな捨てられた子犬みたいな顔されると、どうにも見捨てられない。

ああ糞、早い所あの皇女様とフラグ立ててくれよ、こんな所で油売ってないで。

「流石お兄様。手口が素晴らしいです。」

「ん、何か言いました？」

「いえ、大変仲が宜しいのですね。」

にっこりと微笑む珠雫に、一輝もまたにっこりと笑う。

「うん、いっつもこんな感じだよ。」

「ふふ、お兄様が楽しそうで私も嬉しいです。桐原さん、どうかお兄様を宜しくお願ひしますね。」

「まあ目の届く範囲なら良いですよ。」

こうして、一見穏やかなお昼休みは過ぎていった。

「ねえお兄様。」

「何だい珠雫？」

「桐原さんは何時お義姉さまになってくださるのでしょうか？」

「んー卒業と同時位かな。それまでにしっかり捕まえるよ。」

「ふふ、楽しみにしています。」

「おや、反対すると思ってたよ。」

「まさか。お兄様の幸せが私の幸せ。それにあの方の率直な物言いは小気味よいです。」

「そっか…。」

「卒業したら、三人で何処か静かな場所で暮らすのも良いですね。退屈で刺激もなくて、でも穏やかで…」

「そうだね。そんな日が来れば良いね…。」

———これは天才を、竜を、運命を斬る英雄の物語ではない。———

「それを邪魔する者は……」

「ああ、皆斬ってしまおう。」

「ええ、それでこそ珠雫のお兄様です。」

——愛を求め、愛に狂った悪鬼の物語である。——

うん、盛大に筆が滑った。

Q どうしてこうなったん？

A 今までまともに妹以外からは愛情与えられてなかった一輝SANがいきな

り親切されまくって一緒に戦って鍛錬して生活して惹かれて行って、でも彼女には自分が必ずしも必要ではないと知ってしまったて、彼女と離れたくない離したくない執着と独占欲、そんな自分への嫌悪感、更に他の男子生徒が TS 桐原の事を男子高校生らしく可愛いだのエロいだのスケベしたいだの言ってるのを聞いてしまってブツツンした。現在外堀を埋め中。

Q 今後どうなるん？

A 自分に何時の間にかヤンデレメンヘラなまでに執着する一輝 SAN にビビりまくった TS 桐原が逃げ出して、それにガチギレした一輝 SAN が狂気に陥って追跡開始。その鬼気迫る姿に TS 桐原の SAN 値がゴリゴリ削れていく展開に。

Q オチは？

A 最終的に世界の理そのものである黒い鎖を斬った一輝 SAN により、自身の伐刀者としての才能そのものを斬られた TS 桐原さんが拉致監禁される END。第三次大戦勃発して世界中が荒廃するが、珠雫含む三人だけは平和に子供作って生活する。

Q 続くの？

A 続かない。前作程思ったより筆が進まない。

Q 次は？

A FGOのイベント次第だけど、仮面ライダーのクロス蹂躪もの。  
クロス先はゲートか落第騎士の予定。

ネタ GATE×????

転生者達が逝く

『20周年やからって仮面ライダー希望の転生者多杉イ!?しかも殆ど昭和やんけ!』

『せや、こいつら纏めて一つの世界に転生すりゃ手間が省けるやん!』

『転生する世界は……こいつらがいても問題ないところ用意したろ!』

『ほな良き来世ー!』

そんなふざけた事を最後の記憶に、彼らの意識は闇に飲まれた。

………

とある神が転生者達を送り込んだ世界。

そこはグルメ界ばりに過酷な自然環境だった。

一番弱いスライムであっても、核以外は打撃無効、強酸性の体液を持ち、あらゆる環境に適応して餌さえあれば無尽蔵に増える。

更に、モンハンに出てくる様なドラゴンがあちらこちらに生存し、終わりのない生存競争に明け暮れているのだ。

そこで彼らはその世界における人類として生を受けた。

が、その世界の人類は地球人類とは大きく異なる生態だった。

通常の人類では絶対に生き延びる事の出来ないこの地獄で、彼らは他の生物の細胞を取り込む事でその性質の一部を取り込み、人類以上の存在となって戦う。

その技術を確認する過程で多くの犠牲が出たものの、それでも生き残る術を得たのは大きい。

こうして人類は過酷な自然環境に対し、果敢にも抗い始めたのだった。

「まあ俺達が転生したんで、技術も戦術も生活基準もがつつり上がったんだけどな。」

「そっすか。」

そんな話をされても一番新入りの転生者である自分としてどう反応すれば良いのか分からないですライダーマン先輩。

「あ、言っておくが俺の他にもライダーマンっぽい奴はいるから区別しろよ。」

「分かってます。ショッカーライダーが如く体格も声も皆さん全然違いますし。」

ただし全員がIQ200の天才的頭脳を持っていらっしやるご様子。

俺がショッカーだったら勝てるか！と卓袱台ひっくり返すわ。

「まあ元がグロンギというか魔法というかグルメ細胞染みた方法で変身してる訳だから、割と個体差大きいですし、生物的な見た目なんで、変身時も割と区別つきますよね。」

「慣れると一発で分かるしな。」

なお、転生者じゃなくてもこの世界で生まれた純粋なライダーマン似の人類もいる模様。

そんな多数のライダー転生あるあるは置いといて。

「で、今回の要件は何なんですか？」

「先日現れた門があるだろ？」

「ああ、あの。」

門というのは、つい一週間程前に現れ、たった三日で消えていった不思議な石造りの門だった。

出現時に空間転移を起こしていた事から、異世界か何かと繋がっていると判明しており、観測された向う側の植生並び生物からこちらよりも気候の緩やかな地球型惑星だと推測されている。

「あの門がある程度解析した結果、こちら側でもある程度再現できそうだな。」

「流石っすね。」

「皆久々の実k…モルm…：…兎に角、研究対象に喜んでいてな。」

「で、本音は？」

「皆、インフラとか生活に根差した研究より興味や趣味に全力でなあ…。」

まあ大半がマッドサイエンティストのライダーマンSでは仕方ない。

「とは言っても、世界同士を繋げるにはその世界の座標が必要となる。そして現在、座標が判明しているのがこの世界と門の向こう側の世界しかない。」

「あー先遣隊になれ、と？」

「端的に言えばそうなる。」

厄ネタじゃないですかヤダー。

「そんな顔をするな。お前でなければならぬんだ。」

「俺、って言うか俺達基本は建築とか土木工事とか装備の作成とかばっかですよ？」

「だからこそだ。お前達クウガ系は兎角汎用性が高く、集まれば戦術級の野戦陣地構築もお手の物だ。それを活かしてほしい。」

「他に同行するのは？」

「アギト系を始めに、基本は平成組だな。」

「……昭和系の先輩達は？特にRXⅡサン。」

「あんな戦略兵器をおいそれと動かせないだろうが。」

「ですよね。」

公式チートが多数の昭和組でも筆頭格は基本、切り札扱いです。

「というか、RXは俺達の中でも30人もいないんだから、運用には慎重にならないとダメだろう。」

「20人超えのRXとかいうパワーワード。」

どう考えても頭おかしい（確信）

ゴルゴムもクライシス帝国も泣いてよいと思う。

「オーズやフォーゼも参加するが、彼らの強みは殆ど何もない所から色々作れるお前達とはまた違うしな。」

「確かに。」

彼らはあらゆる環境下で活躍するし、工兵染みた運用も出来るが、工兵に縛るには贅沢過ぎる。

対して、クウガ系はどのフォームだろうと工兵染みた能力もモーフイングパワー（原子操作能力）を程度はどうあれ保有している。

そして、転生者であるクウガ系ライダー達は最低でもこれを修行してそこの石や枝から武器を作成↓弓矢作成↓ペガサスボウガン作成を極普通にやってのける。

更に言えば、全員がライジングとはいかないまでも、タイタン・ペガサス・ドラゴンフォームにはなれるので、支援射撃・索敵・土木工事と何でもござれだったりする。

「そして、お前は数少ないライジングアルティメットだ。現地のクウガ系のトップとしては申し分ない。」

「他のライジングアルティメットは？」

「今度の古龍渡りのために絶賛前線基地の構築中だ。」

古龍渡りとは某怪物狩人の専門用語だが、この世界では古龍やそれに匹敵する規格外生物達の活動活発化並び大移動に対して付けられている。

「すまんが、昭和勢はそっちのために手を取られているから動けない。」

「向こう側の推定戦力は？」

「基本は人類だ。ローマ帝国兵と獣人、少数の魔法使いと再生能力持った不死身の超人が極少数確認されている。後はこっちよりも弱い野生動物だな。」

「待って何かおかしなのがあった。」

「とは言え、身体能力は昭和怪人に劣るぞ？多少の特殊能力はあるが、戦闘に使えるものは今の所確認できていない。」

「よし、オーズのタトバで。」

「敵対するならな。基本、攻撃されない限りは平和的接触に留める様に決まった。」

「あー拒否権は？」

「すまんが、今回はない。」

「ですすよねー。」

一応、ライダー達にも指揮系統はある。

昭和初代の一号二号転生者の中から総当たり戦でTOPを決定し、更にV3系やビルド系と言った同じ系統のライダー同士で代表を選出し、代表会議を行うという氏族会議みたいなもので話し合い、重要事項を決定する。

「何とかしますけどね……最終的な目標は？」

「向こう側での生存権の確保だ。向こうにとっては不毛の僻地でも、俺達にとってはそうじゃない。そんな土地で良いから確保して、時間をかけて浸透していってくれ。」

「やっぱ、女性不足は深刻ですか？」

「言わずとも分かるだろう。女性陣がどう頑張っても、人口減少は止まらん。」

ライダーと言えば子供達の、正確に言えば男子達の憧れの存在だった。

ライダーに憧れ、転生を希望した者達は須らく男子として生まれた。

その結果、この世界の人類は元の数が少なかった事もあって女性の割合が激減し、絶賛少子高齢化の真ただ中だった。

幸いにも、全種族多少の強さのばらつきはあれどライダーである彼らは普通の地

球人類よりも遥かに長寿であり、基本殺されない限り死なない。

しかし、この過酷な世界ではおちおち子作り&子育てもできない。

実際、彼らが死亡するのは他の強靱な生物との闘い以外は子供の頃の事故死が原因であり、人口増加は急務だった。

一時はクローン作製も考えられたが、倫理面と根本的解決策にはならない事から否定された。

そのため気候の安定し、尚且つモンスターが少ない新天地、そして交配可能な人類の存在する異世界は彼らにとって理想郷とも言えた。

「これ、侵略って言いません？」

「ローマ帝国相当の技術では、開拓技術も相応だろう。無人の土地など幾らでもある。そして、現地人との融和は必要不可欠だ。」

争いはこちら側としては望む所ではない。

しかし、古代ローマ程度の倫理観が相手であった場合、彼らに「教育」するため  
の血が流れる事は必然になってしまおうだろう。

「可能な限り、穏便な関係を構築したいと思います。」

「頼んだ。」

頭を深々と下げる先輩に、後輩のクウガ系転生者は思う。

先輩方も無用な流血は望んでいない。

しかし、世の中には相手の実力を知らず、偏見とそれまでの常識だけで殴り掛かってくる手合いが一定数存在するのだ。

「と言う訳で、君はクウガ系の一部を率いて工兵部隊として派遣が決まった。頼んだぞ、ユータ・ゴ・クウガ・バ千人長。」

「拝命しました、ユーキ・ン・マン・バ。」

こうして、特地異界にグロンギ系名称のトンでも種族がやってくる事になった。

.....

特地世界にやってきたライダー系人類（特地では通称…虫人）の入植団は人気のない荒野へと転送された後、砂漠並び山岳地帯に海岸等を目指しながら入植を開始した。

彼らはその地で急速に開発を進めていき、現地の危険な生物を駆除しつつ、接触した知的生命体とは平和的な交流に勤めた。

無論、天然の騎馬民族であるケンタウロス族やゴブリンにオーガ、オーク等を始めとした敵対的な種族に対しては相応の対応をしたが。

こうして虫人と呼ばれるようになった彼らは順調にその生息域を拡大する事に成功していたのだが……

「はあ？ 襲われた？」

問題が起きたという報告を聞いた入植団の長であるユータ・ゴ・クウガ・バはその詳細を聞いて驚いた。

「ええ。近くの街に行つて交易しようとしたら全身鎧の兵士に武器を向けられて……。そう報告するのはドライブ系の一人であり、交易に向かっていた商隊の隊長だった。

「どこの国だ？ 街の警備兵じゃないだろ。」

「はい。あいつらは『帝国』と名乗ってました。」

「確か以前報告にあった国だな。近場の街が所属する国も遂に併呑されたか……。」

人間至上主義を抱え、周辺国へ侵略と略奪を繰り返す『帝国』の存在は彼らからすれば特にこれといつてどうでもよい存在であった。

彼らは最低限の水や空気、土さえあれば何でも生み出せるし生きられる。

疫病の類だって、例え黒死病や炭素菌だろうが生き残れるし、飲み食いすべからぬトからのエネルギー供給で割りとうにかなるのだ。

近くのこの世界の人間が多く住む街とは見知らぬ異種族ではなく、知恵があり自分達に利益の多い商売をしてくれる交易相手と思わせるために、少しおまけする形で積極的に商売をしていた事もあり、悪感情は持たれていない。

また、彼らが入植しているのは人間が寄り付けない不毛の大地が過半であるため、お互いの生息域を犯す事もなく、今日まで偶にお付き合いのある隣人程度の関係を築いてこれたのだ。

それが崩された。

「相手の人数とかは分かるか？」

「詳しい数までは不明です。ただ、見える範囲では街中に数十人、街の外壁の外には最低でも500人はいました。」

「となると、こっちに侵攻してくる可能性が高いな。」

軍隊というものは兎に角金がかかる。

構築してもその錬度を高め、維持するには訓練と食事、武器の整備と補給が不可欠だ。

そんなものを不毛の大地に近い辺境の地に500人も派遣する？

断言するが、幾ら帝国が裕福でも、そんな事を何の利益もなく行う事は有り得ない。

「目的は何なんでしょう？彼らからすれば、俺達は辺境に暮らす蛮族で、この辺の土地にもメリットなんて……」

「いや、ある。俺達が開発した事で、多少は住み良くなったこの土地そのものが狙いだろう。」

開拓というものは兎に角金がかかる。

この世界の場合、人里離れた森や溪谷、山河には怪異や亜人が住んでおり、人が住めるまで開拓するには膨大な年月と人手、予算が必要となる。

20世紀地球の技術を以てしても、多少はマシになったとは言え多くの重機や人

手、時間が必要なのは変わらない。

しかし、ライダー達はほぼ全員が下手な重機よりも高い身体能力を持ち、クウガ系やオーズ系、W系を始め多数の特殊能力を持ったライダー達にとっては穴掘りや伐採、整地等の作業は苦も無く低コストで行う事が出来る。

また、彼らにとっては価値は低いが、ライダー達が交易で齎した良質な金属類の延べ棒やその加工品、そして怪異等から採取できる生物系の素材等、そしてライダー達が自分達で消費するものの余りとして出来た娯楽系の食料品（甘味・酒類）もこの世界の人間からすればかなりの品質であり、贅沢の出来ない辺境の地では高い需要があった。

帝国は開拓された土地の他、そうした品やそれを作る技術等を欲していたのだ。また、そうした技術を持って開拓を進める亜人の集団が人間だけでなく、他の亜人種とも友好的な関係を築き、その勢力を伸長している事にも危機感を持った事も大きい。

「取りあえず、即応するために一旦開拓作業は中止し、警戒レベルを上げよう。」  
「交易に関してはどうします？」

「件の連中が街からいなくなるまでは中止だ。一般市民を戦闘に巻き込みかねないしな。」

こうして、帝国は止めとけば良いのに、自分からグリフィンどころか古龍よりも恐ろしい何かの尾を踏みに行く事となる。

なお後日

「何、地球への門が開いただと!？」

「ヒヤッハー観光だー!!」

「ユータ千人長！本国からも接触を試みろとの命令が！」

「ああもう次から次へと…！」

うーん、書いてて消化不良。

やっぱ平成ライダーの殆どが未視聴だと上手く書けない。

自分が生放送で全話見たのはクウガとアギトだけだから、最近の多過ぎる変身やおもちゃっぽい煩いベルトとかが好きになれないのがなあ…

## このすば転生 ガチ女神が逝く

何番煎じかの真面目なアクア神への転生話

水の女神アクアとして転生してから、随分と長い時間が経過したように思う。

元は海の女神から分化した淡水の女神としての器を与えられ、そこに押し込められて、ずっと仕事漬けだった。

私の業務は地上の水を支配し、それを通じて世界の浄化と流転を担うというものだ。

とは言え、片っ端から綺麗にしては原罪を持つあらゆる生命の暮らせない場所となってしまうため、絶対に失敗は許されない。

しかし、神々の住まう神界から人の世界へと干渉するのは骨が折れる上に細かい調整が利かないという問題がある。

そこで私は各地の信者達に神殿を建築させ、それを通して権能を使用する事で細

かい調整及び異常の探知精度を向上させた。

神殿と御大層な名前だが、実際は私の前世の日本にある祠や小さな神社が大半で、極一部を除けば慎ましいものでしかない。

私を祀る宗教であるアクシズ教に関しても「困ってる人がいたら自分の困らない範囲で助ける・他宗排除の禁止・仕事も大事だが休みも大事・神の言葉の改変禁止・過剰な無駄遣い厳禁」と慎ましいものでしかない。

大仰な社殿も、教えも必要ない。

日々の糧に感謝し、仕事に打ち込み、適度な休みを満喫する。

そんな極当たり前のことをするだけの教えだ。

他宗排除や改変に無駄遣いの禁止は内部腐敗と宗教による戦争や弾圧の予防のためだが、その気になれば信者の体内の水分を操作して天罰を落とすので予防で十分だ。

さて、ここまでは良い。

私の信者達は真面目に日々を生きてるし、神官達も各地で治水への協力や浄化等で役立っていて、よくやっている。

問題なのは、他の神々や魔の者達の行いだ。

如何に私が浄化や流転を司るとは言え、尻拭いには限度があるのだ。

あいつらが煽ったり原因となった戦争のせいで衛生環境が悪化したり、人心が荒廃したり、土地や水が汚染されたり、アンデットが大量に湧き出したりと、問題がしょっちゅう噴出する。

無論、世界をかき回す事それ自体は停滞と腐敗を防ぐために重要だが、 unnecessaryなまでに起こす事等あってはならない。

況してや、それが神々共の失敗によるものなら猶更だ。

特に、私に内密で人と魔の対立構造を確立して適度な混乱を生み出して双方を発展させようという計画を実行して、盛大に失敗しやがった事に関しては絶対に許さん。

挙句、「魔王が予想以上に強くなっちゃったから倒して♡」だと？

死ね（真顔）

更にその対策に今度は適当な魂に特典付けて転生させまくっただと？

ふざけんな！

お前らが思いつきでやらかす度に尻拭いする身にもなってみろや！

そもそも向こうの冥府や死後の神々の許可は……え、人口増えすぎて仕事終わらなくて困ってる？

ミス頻発してるけどカバーできなくて、こっちの世界で早死にした分だけ生きてもらって補填？

異世界行きにする賠償としての特典？

どこもかしこも何でこう……（顔を手で押さえながら俯く）

しかも転生者の希望に應えるのも私の業務に追加されてるし……

休暇……休暇がほしい……休みたいよう……。

……

転生者への特典付与と送り出しが業務に追加されて暫く。

「あんの大馬鹿共おおおお！！！」

私はまた他の神々に切れていた。

「人格その他に問題ある奴まで転生者に選んだ挙句、何の安全措置もなく特典与えるとか何考えてんだあああああああああ！！！  
あああああああああああッ！?!?!?!」

頭を抱えて叫びを上げる。

どう考えても危険な人間に、どう考えても魔王退治よりも人間相手にこそ悪用できる様な特典を与えるとかを考えてるんだらうか（白目）。

実際、既に問題を発生させてる奴らがそこそこ存在してるし……どうして後先を考えないのあいつ等？

「仕方ない。後出しだが、問題の発生を確認し次第、他の転生者に追加特典を餌に賞金首として手配しよう。」

とは言え、特殊能力系は本人を始末すれば良いが、逆に特殊なアイテム系は持ち主だけを始末して終わりにならない。

是が非でもアイテムの回収乃至破壊も依頼内容として含むとしよう。

追加の特典も内容は厳選しないとイケないが、これは仕方あるまい。

そんな様々な仕事をこなしつつ、私は今日3人目になる転生者と会っていた。

「佐藤和真、お前はトラックから子供を庇って死んだ。しかし、お前が庇わなくても子供も運転手も無事だった。」

「うえ!?!」

その言葉に、和真は目を丸くした。

「本来ならその二人は掠り傷程度で済むだけだった。所がお前の行いによって大きくずれた。」

訥々と語る女神アクアにあんぐりと口を開けたまま話は続く。

「子供は兎も角運転手は業務運転上過失致死に問われ有罪。出所後も犯罪者として後ろ指差される人生を送るだろう。」

アクアが和真の魂を見ると、根は善良だが生来の怠け癖から少々墮落の度合いが激しい。

これは少し「働かねば生きられない」環境に送り込む必要があるな、と今後の予定を考える。

「しかし、お前の行い自体は善意からのもの。罪に問う事はないので安心しろ。」

「ちっとも安心できねーよ!? 罪悪感で辛いわ!!」

その叫びはその善良さ故のものだった。

当然だ、彼が死んだのは子供を助けようとしたものだからだ。

悪に堕ちた者が利益無しに子供を助ける訳もない。

「こっちから運転手の人に何かしてやれる事は無いのか!？」

「無い。お前は死んだのだ。あの運転手にも、お前の両親にも、お前ができる事はもう何もない。」

それが死ぬという事。

一つっきりのものを無くし、冥府へと旅立つのみ。

しかし、今回は例外だ。

「佐藤和真、お前はまだ決められた寿命を生き切っていない。故に、もう一度だけ選ぶと良い。」

この少年は運の良さか因果か、もう一度だけチャンスを手に入れた。

「故に、お前には二つの選択がある。このまま死後の世界に進むか、異世界に転生するかだ。」

「じゃあ転生で！」

至極あっさりとした答え。

最近流行らしいが、何処の世界も人手不足なのだろうか？

「良いのか？ 異世界に行けば、お前は魔王を退治せねばならない。魔王を始めとした人外が存在して人類を脅かし、人類もこちらより発展していない。その分、生きるには大きな努力と協力、機転が必要だ。」

うちの神殿や信徒と会えば、ある程度の住居と職は保障されるだろうが。

「では特典を選べ。問題があれば修正を加える。」

「えっと、何でも良いんですよね？」

「その質問にはNOだ。過剰な力は世界に無用な混乱を齎し、更に持ち主自身を破壊させる故、ある程度調整される。」

「そっすか……じゃあ運転手さんに何かしてあげてくれませんかね？」

「何？」

驚きの余り、つい聞き返してしまった。

そうか、確かにそれも有りだが……

「良いのか？ それを選べば、お前は何の特典も無しに転生する事になるぞ。」

「良いんです。 オレがやっちゃまった事なんですから、オレが責任取らないと。」

そう言ってニッと笑う少年の笑みには、一切の陰がない。

彼は善良な人間として、大きな決断を下したのだ。

「宜しい。あの運転手の人生には今後、幸福が舞い込む様に手配しよう。」

「ありがとうございます！」

「うむ。」

思わず満足気に頷くアクア。

こういった人間がいるから、彼女は人間を、命を見守る事が止められないのだ。

「さて佐藤和真、これからお前は転生してもらおう。だが、その前に一つしておかねばならない事がある。」

「へ？」

「お前の好きなゲームでもあるだろう？初期配布アイテムだ。」

配られるのは1万エリスと向こうの世界の旅人の一般的な衣服一式、そして汎用ナイフが一本だけ。

これさえあれば始まりの街で依頼をこなして装備を整える事も十分可能だ。

「次に、お前のカルマに応じてステータスポイントが割り振られる。これを使って好きに設定せよ。」

カルマとはその者の善悪、そして功績によって決定される。

時折、反英雄の様な「悪行によって結果的に善行を成す」という理由もあるが、現代にそんな人間はほとんどいない。

一般的な人間の生涯のカルマが約1000から—1000以内となる。

国家の指導者等の場合はもう2桁程差がついたりもする。

そして和真の場合は…

「カルマ値1万P……これって凄いですか？」

「無論だ。久々に見たぞ、5桁代は。」

まだ社会に出て小さな悪行を積み重ねる前に死に、その以前も出来るだけ周囲に迷惑をかけないように生活し、最後に命をかけ、来世をかけて善行を重ねたが故にこの数値だ。

まあ自分の目の前で善行を重ねたから多少のおまけはしているが…（大体1000位）。

尚、マイナスしかない場合は選択したステータスが弱体化する事になる。

なので、私は基本的にカルマが多い、又はそれ程マイナスに傾いていない者を主に転生させている。

「さ、振るがよい。それしか特典が無いのだから慎重にな。」

「あ、質問よいですか？」

そこで唐突に和真が挙手をした。

「宜しい。質問を許す。」

「この1万ポイント、ステータスじゃなくチートの代金にする事は出来ますか？」

「通常なら不許可なのだが……久々の5桁だ、許可する。」

善行の結果が過酷な異世界に何の加護も無しにダイブ！では女神の沽券に関わる。

これは決して臍屑ではない、とアクアは己に言い聞かせながら、和真に許可を出した。

「じゃあ女神様！ オレは貴方を希望します！」

「何？」

余りの事態に目が丸くなった。

しかし、アクアは直ぐに落ち着いて考え……それが中々美味しい提案である事に気付いた。

（いつも却下される辞表や休暇届に比べれば、ほぼ確実に異世界に休暇にいける上にこの少年の寿命が尽きるまで共にいければ、それはもう素晴らしい休暇になるのではないか？）

幸いと言うべきか、この少年は善良そうだな。

それでいてそこそこの反骨精神もある。

となれば、異世界に共に行っても中々楽しそうだし、自分に理不尽な無茶ぶりする事もないだろう。

加えて言えば、自分の定めた転生者に関するルールにも抵触しない。

「よし、法的な問題も無いな。確認するが、私を連れていく事でお前のカルマによるステータスポーナスは消える。また、私のステータス等は現地の混乱を避けるために10分の1とする。異論はあるか？」

「10分の1……それって向こうで問題ありますか？」



ええええええっ!？」

後に、女神エリスの絶叫を残しながら。

.....

### 女神アクア（ガチ）

淡水及び水による浄化と流転を担う女神。属性は秩序中庸。

多くの世界の淡水に関する権能を持ち、地上を浄化して生物が繁栄できる環境を保ち、社会的・概念的澱みが生まれないように流転させる事を生業とする。

そして、文明が過剰に発展して世界が汚染と澱みだらけになった場合、大洪水を起こして全てを浄化||リセットする役割も持つ女神達の中でも特に力のある一柱の一つ。

基本的に真面目かつ温厚で慈悲深く、話せば分かる女神だが、仕事には誇りと拘

りを持ち、外道には容赦ない。

だが、その生真面目さが原因で他のテキトー過ぎる仕事をする神々（ギリシャ風味）に対して常にイライラしており、ストレスを溜め込んでいる。

他の神々のやらかしで地上に汚染や澱みが発生するため、その対処に追われ続ける毎日に飽き飽きしている。

正直ガチギレして大洪水起こしても許されるんじゃないかね？ミスって洪水もありじゃね？と思ってる辺り、かなりギリギリだった。

そこに魔王やら転生者やらの仕事まで押し付けられたので、他の神々が信仰されてる国や地域の淡水の加護を引き上げようとも思ったが、ギリギリで踏み止まる。

その後、和真の存在を利用して異世界へと休暇に行った。

なお、通常業務の殆どは旗下の精霊や妖精、従属神達が行っている。

数少ない重要なお仕事も後輩の女神エリスが胃壁をすり減らし、忍耐を削ぎ落とし、ストレスを不法投棄されながら辛うじて対処している。

く、面白くなりそうな所まで行けなかった

---

このすば転生 ガチ女神が逝く その2 微修正

「佐藤和真、お前はトラックから子供を庇って死んだ。しかし、お前が庇わなくても子供も運転手も無事だった。」

「うえ!？」

一目惚れだった。

きっと死ぬ寸前になっても、年寄になってポケても、その人の事を忘れないだろう。

そう思う程に、その人は綺麗で、美しく、清冽だった。

そして考える、今までの人生で最も深く考える。

テストや試験なんて比べるべくもない、佐藤和真はその脳髓の限界まで思考を加  
速させた。

この美しい人と離れたくない、ずっと一緒にいたい。

そのために何をするのが最善か考えろ……！

「子供は兎も角運転手は業務運転上過失致死に問われ有罪。出所後も犯罪者として後ろ指指される人生を送るだろう。」

これはあれだ、所謂流行りの転生って奴だ。

なら、必ず特典がある筈……！

「しかし、お前の行い自体は善意からのもの。罪に問う事はないので安心しろ。」

「ちっとも安心できねーよ!? 罪悪感で辛いわ!!」

考えろ考えろ考えろ考えろ！

態度は普段のそれから変えず、決して怪しまれない様に！

特典だけじゃ駄目だ、ずっといるには相手からの感情や意思も大事だ。

なら、何とかして好感度を高めないと！

こういう仕事が出来てそれでいて不器用ながらもこつちを出来るだけ安心させようとする女性への対処法……って思いついてたらヒキニートになんざなっとらんわ

！

……って、思いついた！

「こっちから運転手の人に何かしてやれる事は無いのか!？」

「無い。お前は死んだのだ。あの運転手にも、お前の両親にも、お前ができる事はもう何も無い。」

ピンゴ！これだ！

だが、この方法は正直博打以外でも何でも無い。

確実に好感度は稼げるが、ずっと一緒にいれるかという心許ない。

だが、オレの第六感が告げている……ここは全プッシュだと……！

「佐藤和真、お前はまだ決められた寿命を生き切っていない。故に、もう一度だけ選ぶと良い。故に、お前には二つの選択がある。このまま死後の世界に進むか、異世界に転生するかだ。」

よし、まだだ、まだ……！

「じゃあ転生で！」

「良いのか？ 異世界に行けば、お前は魔王を退治せねばならない。魔王を始めとした人外が存在して人類を脅かし、人類もこちらより発展していない。その分、生きるには大きな努力と協力、機転が必要だ。」

よし、ここまでではよしだ。

次、次で決める……！

「では特典を選べ。問題があれば修正を加える。」

K I T A —— ！

特典に関する質問の後、オレは人生最大の賭け時へと到達した。

「そっすか……じゃあ運転手さんに何かしてあげてくれませんかね？」

女神様の目が丸くなる。

その成熟し、同時に芯のある強さを持つ女性の持つ柔らかさが強調された表情に、目と思考を奪われかけるが、何とかそれを耐え抜いて、好感度を上げる事に腐心する。

最悪、転生して直ぐに死ぬかもだが、それはそれ、もう一度この女神様に会えると思えば悪くない。

「良いのか？ それを選べば、お前は何の特典も無しに転生する事になるぞ。」

「良いんです。オレがやっちゃった事なんですから、オレが責任取らないと。」

「宜しい。あの運転手の人生には今後、幸福が舞い込む様に手配しよう。」

「ありがとうございます！」

「うむ。」

いいいいいいよっしやあああああああああああ！

ミッシュンコンプリートツ！！

女神様の満足気な頷き、そして本人無自覚だろうけど柔らかな笑み！

超サイコーって奴だぜヒヤッホー！！

が、これで万策尽きた。

まあこんな笑みを浮かべる女神なら、全員に手引きとか初期アイテム位はあるか

な…？

「さて佐藤和真、これからお前は転生してもらおう。だが、その前に一つしておかねばならない事がある。」

「へ？」

「お前の好きなゲームでもあるだろう？初期配布アイテムだ。」

神はここに居られた（ガチ）。

配られたのはお金（日本円にして1万円相当）と所謂「ぬのの服」と「剥ぎ取り

ナイフ」。

この分だと、初心者向けの街とかもありそうだな。

「次に、お前のカルマに応じてステータスポイントが割り振られる。これを使って好みに設定せよ。」

ッ！　ここだ、ここで決めれば好感度だけじゃなく逆転ワンチャン有り得る…！  
「カルマ値1万P……これって凄いですか？」

「無論だ。久々に見たぞ、5桁代は。さ、振るがよい。それしか特典が無いのだから慎重にな。」

「あ、質問よいですか？」

ここで最終確認しておく。

ダメならダメで仕方ないにしても、ポイント足りないとありませんように…！  
「宜しい。質問を許す。」

「この1万ポイント、ステータスじゃなくチートの代金にする事は出来ますか？」

「通常なら不許可なのだが……久々の5桁だ、許可する。」

勝ったな（確信）

「じゃあ女神様！ オレは貴方を希望します！」

「何？」

目を丸くして驚く姿も麗しいですね、って違う！

今はそっちじゃない。

冷静に、確実に勝負を決めるんだ！

（って、あれ？）

こっちが話し掛ける前に、女神様は目の前に現れた立体映像式の端末？のようなものので何事かを詳しく調べている。

その目つきも険しく、何事かを考えている様子だ。

（頼む…頼む！）

女神を前にしての神頼みという滑稽な状態。

しかし、和真はただ祈った。

それしか出来なかったのだが、その祈りは確かにどこかへと通じた。

「よし、法的な問題も無いな。確認するが、私を連れていく事でお前のカルマによるステータスポーナスは消える。また、私のステータス等は現地の混乱を避けるた

めに10分の1とする。異論はあるか？」

あっても消します（真顔）。

そんな事を内心で狂喜乱舞しながら考える和真は、平静を取り繕いながら、辛うじて思いついた質問をした。

「10分の1……それって向こうで問題ありますか？」

「あくまで一度に出力できる量に制限がかかるだけだ。HPやMPの総量は変化しないため、女神としての力は兎も角アークプリーストとしての技能に問題はない。」

「なら、宜しくお願ひします！」

「うむ。では早速転生の儀を始める。」

和真は思った。

女神様、ありがとうございます。

オレ、絶対に貴女を大切にして幸せにする事を誓います。

魔王？余力があったらね。

何よりもまず女神様が第一だからね！

「では行こう。新しい世界が、お前を待っている。」

「よし、じゃあ行ってきまーす！」

そんな事を考えながら、佐藤和真は異世界へ女神と共に転移していった。

.....

「ようこそ、始まりの街アクセルへ！ お前さんらも冒険者になりに来たのなら、冒険者ギルドで登録してくるんだな！」

転移早々、門番やっておじさんからそう言われた二人は道中で道を聞きながら、真っすぐ冒険者ギルドへ向かうのだった。

「にしてもアクアさま：おっと、アクアはその姿で良いのか？」

「ええ。あの本来の姿じゃ目立って仕方ないし、これ位で良いのよ。」  
カズマの質問に、アクアが女神としてでなく素の言葉で答える。

今のアクアは初対面での女神として威厳と品格ある成熟した女性の姿ではない。十代後半程度の少女の姿であり、その姿からは嘗て大いに感じられた女神としての威圧は無い。

能力を十分の一にまで下げているからだ、それでも凜とした美少女であり、カズマは将来性抜群の一目惚れした少女と一緒にいられる事で内心狂喜乱舞していた。

「まずは登録、然る後に装備を整え、初心者向けのクエストをこなしましょう。」

「最初はお約束的にお使い系クエストかな？」

「あればそれにしましょう。最悪、どこかで日雇いのバイト、という事も有り得るでしょうけど……。」

一応、一万エリスあれば数日はそこそこの宿に泊まって食事にも苦勞しないで済む。

しかし、装備代や今後の事も考えれば無駄遣いは一銭も出来ない。

「最悪、オレの服を質屋に……。」

「絶対ダメよ。それ、唯一の思い出の品じゃない。」

カズマの今の姿はこの世界のこの地方の一般的な旅人の服装であり、以前着ていたジャージは背負い袋の中に入っている。

珍しいから買ってくれる物好きはいるかもしれないが、それでも故郷から持って

きた唯一の思い出の品を貧乏が原因で手放させるのはアクアとしては絶対に看過できなかった。

「ちゃんと稼げば良いじゃない、ね？」

「うっす。頑張ります。」

今後の予定を話しながら歩くこと暫く、遂に冒険者ギルドに到着した。

「いらっしゃいませ！こちら冒険者ギルドになります。」

「二人分の登録をお願いします。」

冒険者ギルドとこの世界の文字で書かれた看板の建物に入ると、ここでは綺麗な受付嬢（0 エリススマイル）が受付をしていた。

「畏まりました。登録料は一人当たり1000エリス、合計2000エリスになります。」

「はい、一万エリスでお願いします。」

「はい……はい、こちらお釣りになります。では改めて説明させて頂きますね。」

登録料のやり取りを終えると、受付嬢はてきぱきと慣れた様子で説明を開始した。

「冒険者には各種の職業がありまして、そこからポイントやステータスに応じたも

のを選択して頂きます。そしてこちらが登録カード、モンスター等の討伐数が記録されます。レベルが上がるとスキルを覚えるためのポイントが与えられるので、頑張ってレベル上げをしてください。それではこちらの水晶に手を翳して下さい。こちらで初期のステータス並びにポイントが記録・表示されますので。」

「じゃあオレが先に。」

そう言ってカズマが先に水晶に触れると、ものの十数秒で計測が終わった。

すると、そこに表示された数字を見て、受付嬢は顔を曇らせた。

「これは……残念ですが、サトウカズマさんのステータス、つまりは筋力、体力、魔力はかなり低いですね。敏捷と知力、器用さはそれなりで、幸運は凄い高いですけど……ポイントに至っては0です。これでは職業は冒険者しか選ばせませんね。」

「冒険者ってどんな職業なんですか？」

「全てのステータスが低い代わりに、全ての職業のスキルをポイントさえあれば覚えられます。ただ、本職の方と比べるとステータスや補正の関係で効果が全般的に低くなってしまってますけど……。」

「(何という器用貧乏なRPG主人公)」

分かりました、冒険者でお願いします。」

「畏まりました。サトウカズマさんは冒険者で登録いたします。」

こうして、カズマの冒険者としての職業選択は終わった。

「それじゃ次は私ね。」

「貴女は……アクアさんですか。失礼ですがアクシズ教の方ですか？」

「ええ、生まれた時からです。」

「そうでしたか。この街にもお社がありますので、良かったら後でお参りすると良いですよ。っと、出ましたね。」

朗らかな会話の最中、遂にアクアのステータスが表示された。

「これは……!? 素晴らしいステータスとポイントですね。魔力と知力、器用さは凄く高いです。特に魔力はちょっと見た事無いですね。その分、体力と敏捷は低めですけど……幸運だけは本当に低いですね。あ、ポイントも物凄くありますよ。」

「幸運は放つといてください……。」

目が死んだ状態でアクアが言う。

彼女の脳裏にあるのはただ只管に激務だった頃。

他の神々の尻拭いと無茶ぶりに擦り減り、摩耗し、壊れかけていた自分の姿。

そんな女神の幸運が高い訳が無かった。

「失礼しました。これならアークウィザードやアークプリースト等の後衛系上級職にもなれます。えっと……これは初めて見ますが、固有職業でしょうか？ えっと、ハイプリエステス（女教皇）？」

「アークプリーストでお願いします。」

固い声でアクアは断言した。

何で休暇中も仕事しなくちゃいけないんです？（意識・絶対やだ）

しかも人間界の宗教に直接一個人で関わるとか死亡or面倒事のフラグでしかない。

アクシズ教ならばその辺りはかなりマシだが、それでも尋常じゃない仕事が舞い込む事は目に見えていた。

「固有職業の情報は貴重なので、選んで頂ければギルドから補助金も出るのですが……。」

「嫌です。」

「畏まりました。それでは登録カードの説明をさせて頂きます。」

そんな彼女の様子に、受付嬢も諦めたのかそれ以上は追及しなかった。

「名前と顔写真の下に書かれているのがレベルやスキルになります。で、隅の方に数字が書かれているのがポイントです。このポイントに指先を当てて、覚えたいスキルを想像しますと、ポイントを消費してスキルを習得できます。ただ、冒険者に限っては一度見たスキルしか覚えられませんので、ご注意ください。」

「分かりました。所で初心者向けの宿屋と武器屋ってありますか？」

「それでしたらこちらのタウンガイドをどうぞ。3Pに初心者向けのお店一覧が載っていますので…」

こうして、二人は有用な情報を土産に冒険者登録を終了したのだった。

「こちらL。本部に通達、AAがスタートに出現。繰り返す、AAがスタートに出現。」

『こちら本部、了解した。引き続き観察と報告をせよ。それと怪しまれない程度に支援を。近隣の他の人員にも通達するので必要あらば連携せよ。健闘を我が女神に祈る。』

「了解。我が女神に祈りを。」

F a t e 風ステータス

カズマ（人間・冒険者）

属性：混沌・中庸

筋力 E 耐久 E 敏捷 D 魔力 E 幸運 EX 知力 A 器用さ C

アクア（女神・大司教Ⅱアークプリースト）

属性：秩序・中庸

筋力 C 耐久 C 敏捷 C 魔力 EX 幸運 E 知力 B 器用さ B

## このすば転生 ガチ女神が逝く その3

この世界にはアクシズ教と言う宗教がある。

彼らは淡水の女神アクアを祀り、淡水由来の恵みに感謝を捧げ、一般的な他の神を奉じる神官や司祭達と同様に浄化や治癒を得意とする。

女神アクアが伝えたとされる教えの内容も「困ってる人がいたら自分の困らない範囲で助ける・他宗排除の禁止・仕事も大事だが休みも大事・神の言葉の改変禁止・過剰な無駄遣い厳禁」という慎ましいものでしかなく、その社も他のものに比べれば本当にささやかなものだ。

そんなアクシズ教だが、他の宗教関係者からは特別視されている。

というのも、女神アクアが司る権能が淡水、そして淡水による浄化と流転であるからだ。

水とは全ての生命が欠かさず必要とするものであり、その生命を継続させるために必要不可欠な要素の一つだ。

海が全生命の母なら、そこから派生した淡水は陸上に住まう全ての生命を生み出

し、育み、見届ける。

水の流転即ち河川は生命の進化と繁栄、文明の発達と密接に関係し、これを欠かせば何者も生きる事能わず。

また、海から発生した雲は雨となって降り、地下水となって潜り、河川として流れ、また海へと戻る事で地上のあらゆる穢れと澱みを洗い流す事で、通り過ぎた後には再び命を芽吹かせる。

つまり、この地上に生きる限り、全ての生命は女神アクアの権能の影響下にあるのだ。

そのため、彼女を祀る神官達は水は当然として、治癒と浄化の力がとても強い。農村部では雨乞いや豊穰、湧水の儀式を皮切りに、医療面においては浄化と治癒の合わせ技で如何なる傷も癒し、体内の水の流れに干渉する事で多くの病を癒してきた。

そして、最大の特徴が浄化による対アンデッド戦闘である。アンデッドは正常な生命の流れから外れた穢れであり澱み。

生者の持つ命の輝きに嫉妬し、這い寄って襲い来る彼らは、全ての生命にとって

天敵だ。

だが、その穢れと澱みはアクシズ教徒にとって最大の怨敵であり、経験値的な意味では鴨である。

彼らはその優れた浄化の力を活かして、対アンデッド戦闘では他の宗教の神官達よりも引っ張りだこなっている。

この様に極めて強力な権能を持ち、多くの信仰を集める女神アクアと彼女を祀るアクシズ教が別格扱いされるのは当然の帰結だった。

しかし、アクシズ教徒はそれを傘に着て利益を得ようという阿漕な真似はしなかった。

小さな、しかし丁寧に手入れされた社と共に、彼らは今日ものんびりと信仰を守り、程々に仕事をしながら生きている。

と言うのが、表向きのアクシズ教である。

なので、当然裏向きの事情もある。

女神アクア、彼女は神界一の働き者兼苦勞神として知られている。

勤勉で、真面目で、慈悲深く、公平である。

他の神々が遊び呆け、時に仕事を投げ出し、立場を考えぬ真似をする中、彼女と一部の真面目な神々は自分の仕事の他に他所の尻拭いや神々が起こした問題への対処に当たっていた。

そんな彼女は長年のブラック業務で学んでいた。

曰く、「基本、問題は起こってから対処するよりも、予防・対策した方が効率が良い」と。

とは言え、彼女は権能によって地上を見守る多くの「目」は持っていたが、しかし、干渉するための手が無かった。

下手な干渉をして、最悪の場合であるが大洪水を起こす訳にもいかない。

そのため、人間界における自身の手足となって働いてくれる者達が必要だった。

そこで自身を信仰する人間達の中から特に熱心な者達を選出し、何がしかの問題が発生及びその予兆が感知された場合、彼らを通じて人を集め、問題に対処させた。

普段貫っている喜捨は神官達の生活費を除けば、こういった非常時や災害時に使用される。

こういった事例が重なるに連れ、次第に選ばれた熱心な神官達はこうした非常時

の対応をより効率的に行うために、より指揮系統や役割分担がはっきりした組織として確立していった。

これがアクシズ教の裏の顔である「組織」、この世界で初の本格的な「諜報組織」の始まりだった。

神官・信徒達の中でも特に熱心〓宗教的結束で纏まった彼らは、各地の信徒達に隠れながら情報を収集し、問題の予兆と発生を確認すれば魔道具を使用して即座に本部へ伝達し、そこから最適な冒険者の手配や国への通報等へと分かれていく。

アクシズ教の教えは分かり易く、素朴だ。

だからこそ、彼らは世界中から多くの情報を収集・処理・対応できる。

それは最早国家・地域・人種を超えた、超法規的な組織だった。

そんな組織なら必ず腐敗する筈なのだが……所がそうでもなかった。

何せこの組織、偉くなれば偉くなる程にブラック業務が常態化していくのだ。

偉くなれば任せられる仕事が増え、責任が増え、仕事時間が増えていく。

今この瞬間も世界中で起きかけている多くの悲劇の芽を摘み、火消しに奔走するには、どうしても24時間年中無休にならざるを得ないのだ。

しかし、彼らはほぼ全員が優れた治癒の使い手であり、多少の疲労は自分でどうにか頑張ってしまおう。

それが更なる業務のブラック化を招くという悪循環。

そのため、組織は常に人員不足で困っている。

そんな環境で、もし本当に権力を傘に着て横暴に振る舞う者が出た場合……

『貴方は私の信徒に相応しくないわね。』

善行を積みまんとする修行者や日々を穏かに暮らす人々にこそ、女神アクアは加護を与える。

しかし、その道から外れた上、悪行を成す者には与えない。

彼女は勤勉で、真面目で、慈悲深く、公平な女神だ。

故にこそ、信徒の墮落を見逃さない。

アクシズ教徒として築き上げた全てを取り上げた後、機密保持の呪いを掛けられた後に、その罪人は放逐される。

そのまま大抵の者はのたれ死ぬ。

しかし、僅かながら改心して返り咲く者や引退して田舎で一神官に戻る者もいた  
りする。

どんな者達であっても、女神はその権能によってその最後まで見守り、改心の機会を常に与え続けている。

死出の旅路を見届けるまで、彼女は辛抱強く、罪人達を見守るのだ。

そんなこんなで、実は怖いアクシズ教であるが、そんな彼らにあるお告げが齎された。

それは親密なエリス教の神官達からであり、その内容が驚愕の一言だった。

曰く、「女神アクア様が休暇として下界へ降りた」と。

他の神を奉ずる信徒や神官ならいざ知らず、女神エリスは法と秩序、正義を司る善性の存在であり、何より修業時代は女神アクアの下で法と治世を学んだ後輩に当たると。

そんな関係もあって、アクシズ教徒の暗部、通称「組織」は全域に警戒態勢を敷いた。

そこへ、本当に女神が舞い降りてきたのだ。

アクシズ教徒の神官や信徒なら誰もが身に覚えのある神気に、膝をつき五体投地しそうになる。

抑え込まれておられる様だが、熱心なアクシズ教徒である執行部の者達は見ただけで理解できた。

母なる海とは違う、もっと穏やかで身近な、地を濡らす雨の様な、湧き出る清水の様な、流れる川の様な、静かな湖面の様な、その全てである様な大いなる存在感。

ああ、あの方こそ我らが信仰する女神に他ならない。

どんな目的で降臨してきたのかは最早問わない。

ただああして存在して下さるだけで、我らには至福である。

とは言え、彼の女神は休暇中であり、押し掛けるのは迷惑であり無粋だ。

しかし、何かあった時のためにと、彼らは監視と情報収集、もしもの時の支援体制を構築しながら、今暫くは接触する事もなく、見守る事にしたのだった。

なお、通常の信徒では女神アクアの隠蔽は見破れず、会っても単に好感度が高いだけで済む。

しかし、熱烈なアクシズ教徒であり組織の面々はそれを割とあっさり見破った上で好感度が天元突破している事を此処に明記しておく。

.....

アクセル滞在二日目

「さ、今日はクエストをするわよ。」

「応！ って言っても蛙退治だけだな。」

アクセルの街の外、そこには依頼を受けた新米冒険者が二人いた。

「事前説明通りなら、体長5m近いって話ですし、油断は禁物だからね。」

「分かってるよ。一応武器とポーションは用意したし、何時でも逃げられる様に閃光弾も買った。」

ジャイアントトードというこの地域一帯で繁殖・活動する下級モンスター。

その退治が今回二人が受けたクエストだ。

アクアはこの街に来た時のフード付ローブと長いスカートのあるドレスのままだが、カズマは旅人の格好に加え、今は初心者向けショートソード、ポーチにはもしもの時の回復ポーション（小）と閃光弾が三つ入っている。

「と、早速来たわね。」

すると、街を出て10分足らずで巨大な蛙が現れた。

ジャイアントトード、肉食よりの雑食な両生類型モンスターだ。

「じゃあ先に私が行くわね。『ウォーターカッター』！」

距離にしてまだ50m、その間合いでアクアが魔法を放つ。

本来ならウィザード等が放つ水の中位魔法だが、しかしアクアは10分の1の出力制限があるとは言え淡水の女神である。

人間としての職業の楔程度、容易く踏み越える。

「これで一匹。」

その威力も破格だった。

放たれた水の刃は中位魔法と言うには余りに高い威力と弾速であり、有効射程も

また通常よりも遥かに高い。

ただの一撃で、水の刃は巨大蛙の首を落とし、ずんと重量物が倒れる音と共にその身を仰向けに倒した。

『ウォーターカッター』三連！』

そして、騒ぎを聞きつけた他の蛙達が三匹やってくるも、透かさず放たれた三枚の水の刃によって同じ道を辿った。

「さ、次はカズマよ。何かあったら支援するから、一度とことんやって荒事に慣れてみて。」

「あ、はい。」

遅れて出てきた比較的小柄な巨大蛙を指差して告げるアクアに対し、今の魔法を使う凛々しいアクアの姿に見惚れていたカズマは辛うじてそう返事をした。

.....

「ぜえ……ぜえ……。」

10分後、何とか巨大蛙を退治したカズマは初めての命のやり取りに疲労困憊だった。

「モンスター退治って、予想以上に疲れる……。」

「そりゃそうよ。命のやり取り、食物連鎖の一つなんだし、楽な訳ないじゃない。」  
あっけらかんと告げるアクアに、確かにとカズマも声に出さないが内心で肯定する。

今回は自分の勝ちだったが、それはアクアが後ろで見守ってくれていたからだ。そうでなければ確実に蛙の胃袋に収まっていた事だろう。

「こりゃ……もっと色々練らないとダメだな。」

ショートソードを選択したのは間違いが無かった。

今のカズマの体力で扱えるのは現状これしかなかったから。

蛙との戦い方に関しては何度か切り付けたり、回避して分かったが、基本的に攻撃方法は舌による捕食と噛み付きだけで、あの巨体を活かした突進とかはしてこない。

移動速度自体は本気で走るカズマとそう変わらないが、小回りに関しては鈍重の

一言で、常に横か後ろをキープしておけばほぼ安全で一方的に攻撃できる。

とは言え、武器の威力もそうだが、何より基礎体力が全く足りていない。

「ん？ カズマ、あっちを見て。」

「へ、どうしたの？」

アクアは淡水を司り、また全ての地上の生命を見守っている。

その権能によって彼女は通常のあらゆる生命の居場所が分かる。

それ故に高い感知力を持ったアクアだからこそ早期に異変に気付けた。

彼女の指差す方向、そちらから誰かが必死に走ってきた。

「うげっ!？」

但し、10匹を超える蛙を連れて。

「えーと、モンスタートレインって言うんだっけ、あーいうの。」

「どこの誰だあんな馬鹿なことしてるのは!？」

今何とか必死に一匹倒したカズマからすれば、あのたくさんの蛙は死と同義だった。

「アクア、こっから魔法で撃てるか？」

「うーん、逃げてる子達で射線が確保できないわね。」

ここはただっ広い草原だ。

高所を確保できそうな岩や斜面等は何もないので、このまま魔法を撃てば蛙だけじゃなく逃げてくる者達まで巻き込んでしまうだろう。

「仕方ないわね。あんまり使いたくなかったんだけど……。」

「何かあるのか？」

「ええ、でも射程が短めだから、もう少し近づかないと。」

幸い、逃げてる者と蛙はもう一分としない内に射程内に入るだろう。

「って、何だありゃ？」

よく見れば、逃げていた者は二人だった。

何かやたら胸元を露出した少女の背中に、つばの広いトンガリ帽子とローブを纏った少女が背負われていた。

「そのまま真っ直ぐ走って！もう少しだから頑張って！」

「……………！」

泣きながら必死に走る少女はアクアの言葉に希望を抱いたのか、落ち始めていた

走るスピードが僅かに上昇する。

「くそ、オレも今度遠距離攻撃手段確保しておくべきだな。」

アクアの横でショートソードを構えながら思う。

未だ素人同然とは言え、この状況で役に立てない事をカズマは不甲斐なく思った。

「もう……ダメえ……！」

そして、少女は何かアクア達の目の前に着くも、限界だったのか、その場で背中の少女諸共倒れ込んだ。

「いいえ、十分よ。」

それを見たアクアは微笑む。

よくやった、もう大丈夫よ、と安心させるために。

無意識に放ってた神気と傾いていた太陽が後光の様に差している状態で。

「あ……。」

その微笑を見た少女の頬が赤く染まる。

この瞬間、何かとんでもないフラグが立った。

「カズマ、先に言っておくわ。ごめんなさい。」

「え、何か問題が」

アクアの言葉に、カズマが顔を引き攣らせる。

流星に初心者に蛙10匹超はきつい。

「いえ、蛙じゃないわ。ちよつと魔法の余波で後処理が大変になるだけよ。」

「へ？」

カズマが二の句を継ぐ前に、蛙が全て射程内である20m範囲に入った事を確認したアクアは、その初級魔法を発動させた。

『『ポイル／沸騰』！』

単なる清水を出す「ウォーター／水」の魔法とはまた別の最下級の水の魔法。

水を状態変化させるこの魔法は、多くのお湯を必要とする料理や医療面にも役立つ事から、アクシズ教の神官達なら全員習得している割とポピュラーな魔法だ。

それを生物の体内を循環する水分に使用すればどうなるだろうか？

パアン！と蛙の体が風船の様に膨らみ、破裂する。

それが十数回、立て続けに発生する。

一定量の水が完全に気化した場合、その体積は約1700倍にもなる。

蛙達は体内の水分が気化、体積が1700倍にまで増した元水分の水蒸気により、内側から爆散したのだ。

とは言え、それはあくまで内側の変化であり、その体表に関しては殆ど変化はない。

その結果、この場の四人の上に蛙達十数匹分の粘液と皮膚、肉片が降り注ぐ事となった。

「今度から、もう少し離れた状態で使おうか。」

「そうね……。」

蛙の粘液塗れになりながら、二人は反省する事となった。



## オーバーロード転生一発ネタ 42人目の爺が逝く

あくまでも一発ネタ。

理由？風呂敷大き過ぎて畳めないから。

第二の生を得た時代は、とても汚れていた。

比喻でもなんでもなく、ただただ汚れていた。

時代は21世紀の半ば、世界中で連鎖して爆発的に広がった環境汚染により、人類は衰退した。

国家はその力を失い、企業が専横を振るい、治安は崩壊した。

大気は常に専用のマスクを必要とする程に化学物質で満ち溢れ、海では殆どの海洋生物が死滅し、森は枯れ果て、太陽はスモッグの向こうへと隠れた。

それを見ていた私は、何とかせねばという使命感、否、義務感を得た。

私は嘗て生きた時代を、20世紀の暮らしを覚えてゐる。

その当時でも環境問題は叫ばれていたが、しかしコストの関係からどうしても本格的な動きは無かった。

と言うのも、冷戦時代から続く国同士との摩擦が消えず、ソ連崩壊による抑止力の不足による宗教・民族テロが多発し、遅れてきた拡張主義の某特亜の存在もあり、どうしても国際協調というのが難しくなっていた。

ならば、その当時を生きた身の一人として、責任を取らねばならないだろう。それが未来という今を生きる者達のために、私の様な年寄りがしてやれる事だった。

若者向け小説の特典か何かとして貰い受けたかと思われる程の知性を発揮し、生まれが富裕層である事も幸いして、私は苦心の末に環境改善ナノマシンの開発に成功した。

とは言え、これは企業の資金と設備、そして少ないが人員を借り受けて開発したもの。

格安で世界中にばらまく事は出来ない。

だが、日本国内に関しては試供品の名目や誤作動、他の企業スパイによる漏洩で色々とどうにかなるだろう。

そう言えば、家庭用の空気清浄器のフィルターが相当な値段がすると聞いた。それで貧困層の家庭はかなり経済的に逼迫しているとか。

とは言え、安価なものを出せば他の部署や他所の企業からいらぬ圧力をかけられるから……よし、値段はそのままに耐久性と除染機能を大幅に向上させよう。

となると、やる事はやはり山程あるな。

そうして、私は尽きる事無き使命感と共に研究に没頭していった。

それから実に、30年が過ぎ去った。

……

22世紀 2128年 ユグドラシル最終日 23…28

ナザリック地下大墳墓 第9階層ロイヤルスイート

「おや、私が最後だったか。」

リング・オブ・アインズウールゴウンというギルドメンバー専用のアイテムを用いて転移したそこには、私よりも年下の友人達全員の姿があった。

「あ、チクタクさん、お久しぶりです！」

「おお、ペロンチーノ君、こうしてここで会うのは久々だね。」

「いえいえ、オレの方こそご無沙汰してます！」

陽気な鳥人が話しかけてくるのを、仰々しい礼で再会を喜ぶ。

これが私なりのこのゲームでのルールなのだ、最後まできっちりやっていきたい。

今夜、そこには42人全員のギルドメンバー達が集まっていた。

私が富裕層としての、この時代最先端の環境再生技術者としてのコネと権力を総動員して集めたのだ。

中には囚役されて死を待つばかりの元テロリストのウルベルトもいたが……このご時世、悲しい事に割と金とコネで何とかなるものだ。

無理をしたが、それでもその価値はあったと思う。

「チクタクさん！来てくれましたか！」

「はは、モモンガ君も変わりない様だね。」

大喜びで駆け寄ってきたのは黒いローブと肩の巨大な赤い宝玉が目印の骸骨、ギルド長のモモンガ君だ。

一応うちの企業の営業担当の一人であり、少々遠いが私のリアルでの部下達の人になる。

彼には随分と無理をさせていたので、こうして最後位は祝い事をしてあげたかったのだ。

「本業の方も漸く区切りがついたからね。後はもう、私がいなくとも回るだろう。誰にも止められんよ。」

「うわーまたさらりと凄い事を…。」

私の一言に今後の苦勞と混乱を予想したのか、モモンガ君の声が引き攣る。

とは言え、彼は自分の仕事への遣り甲斐とこの世界への愛があれば生きていける人種なので、適度に扱き使う予定なので、今後ともヨロシク。

「チクタクさん、無茶し過ぎですよ。うちの部長とか顔青くしながら『休暇取れ！』って有無を言わさず取らされましたし。」

「はは、すまんね。だがまあ老い先短い年寄りの願い位は叶えてほしかったのだよ。」

そう、私は老いた。

二度目の生を受けてより既に70年超、この世界の富裕層の人間からして見ても随分と長く生き残った。

生き残って、縫り付いて、片足どころか腰まで棺桶に入りながら、私は環境改善のため、汚染された世界に暮らす人々のため、人類絶滅を阻止するためにあらゆる手を尽くした。

その結果、世界全体から見れば、日本が最後の聖地と言われるまで環境を改善してみせた。

大気中に、土壌に、海中に散布された自己増殖型の環境改善型ナノマシン群が汚染物質を吸収し、それを変化させて無害な、或いは生物に有益な物質へと変化させる。

最初期型は脆弱な効果を持つものしかなかったが、自己増殖機能の開発・実用化により、物量を生かす事が可能になったため、効果は上がり始めた。

そこで更に的確な運用をするための指揮官型ナノマシンによる除染作業の効率化、育ってきた弟子達による有害物質の有効活用等、多くの苦勞と努力と時間の果てに今の日本があると言ってよい。

とは言え、貧困層は未だ苦しい生活だし、屋外の生物は雑草や菌類、微生物等の生命力の高いものが殆どだし、未だ21世紀程には回復していない。

それでも、日本に限って言えば後100年以内に外出時のマスクを付ける必要が無くなり、環境循環型都市アークロージーの外でも暮らす事が可能になると推測されている。

まあ、本当に馬鹿が馬鹿な真似をしなければ、と付くので、奥の手は幾つか用意しておいたのだが。

そんな無茶が祟ったのか、私の体は30を過ぎてから病魔に侵されていた。

こんな汚染された世界ではよくある話なのだが、それでも私から使命感を奪い去るには足りない。

私は私である限り努力を続けるが、精神に肉体がついてこれず、止む無く休暇を挟まねばならなかった。

そんな時に私が暇潰しとして始めたのが、世界初のDMMORPG「ユグドラシル」だった。

その中で異形種という性能が高いが多くのデメリットがある種族を選んだのは、その中から選べる種族に興味を惹かれたからだ。

実際、異形種狩りに遭遇する等、随分と苦労したが、それでもこの友人達との出会いを考えれば程好いスパイスでしかなかった。

「先生、お久しぶりです！」

「おお、茶釜君か。どうだね、うちで受付嬢やらないかね？」

「あはは、生憎ですが声優だけじゃなく歌手の仕事が気に入ってますので。」

「それは残念。」

このやり取りも既に何回目か分からない。

それでも彼女の声は生涯独身で研究に命を捧げた自分には正に癒しだったのだ。

元々はゲームやアニメの声優だった彼女に歌手を勧めたのも私だ。

新作が出ればその都度買ったし、音楽データも全て購入済み。

お陰で作業中のBGMには困らなかった。

「教授、先に来てましたよ！」

「おお、ブル―プラネット君、こっちで会うのは久々だね。」

「ええ、先生のお誘いとなれば断られても来ますよ。」

彼は私のリアルでの部下の一人だ。

優秀であり、若手の中でも将来を期待されている一人だ。

何よりその情熱と使命感が若き日の私を思い出させてくれる。

うちの研究部門の鉄砲玉みたいな人物だ。

「チクタクさん、お久しぶりです！」

「爺さん、まだ生きてたか！」

「おお、今夜の立役者が来たぞ！」

「おじいちゃん！お久しぶりでーす！」

「はっはっは、皆さんも元気そうですね。」

この喧騒も実に懐かしい。

皆、リアルの生活で随分長くユグドラシルを離れていたから。

自分にはない若さを未だ持つ彼らの姿に、私はついつい微笑んでしまう。

とは言え、私のアバターでは笑顔のコマンドが出せないのだが。

「さあ皆、到着して早々だが私からのサブライズがあるんだ。モモンガ君、すまないが照明の明るさを下げてくれないかな？」

「分かりました。『下がれ』。」

「すまないね。」

さてと、程よい暗さになった所で両手を広げ、仰々しく皆に話しかける。

さあ、恐らくこれが私が生きている内にできる最後の大仕事だろう。

とは言え、クリエイター達に仕事は丸投げになるのだが。

「さあ、これを見てくれ。」

水晶型アイテムから映像が映し出される。

最初に協賛企業、そしてユグドラシル運営委員会のテロップに、どよめきが走る。

まさか、有り得ない、えマジで、と戸惑いに困惑、期待と歓喜が湧き上がる。

儼かなBGMの下、映像が次々と流れていく。

枯れ落ちたユグドラシル、その枝についていた最後の葉が闇の中へと落ち、そして光に吞まれる。

その葉が落ちたのは、全く別の世界だった。

豊かな自然、強大なモンスター、繁栄する亜人種、細々と生きる人間達。

その次に汚染された世界、強力な兵器、無数の機械、絶滅寸前の人類。

そして、繋がる二つの世界と三つの世界の住人達。

実質一つの世界でしか住めない彼らは、命を懸けて小さなパイを取り合うしかない。

生存を賭けて侵略するしかない機械文明側の人類と生き抜くために戦うしかないファンタジー世界の人類。

そこへ落ちてきたユグドラシルの種族達。

三つの世界に住まう者達が、生存を賭けて間も無く激突する。

『生き残りたければ、戦え』

戦場の映像に切り替わる。

戦うのは機械文明とファンタジー世界の住人達。

そこに横槍を入れる形で、ユグドラシルのプレイヤー達が漁夫の利を狙って攻撃し、戦場は正に混沌の坩堝と化す。

『この世界の行く末を決めるのは、君だ』

『戦争も、和平も自由。武力だけでなく経済もまた重要。』

『あらゆる手段を以て生き残れ。最後に立っていた者こそが勝者だ。』

最後に、巨大なワールドモンスターやそれに匹敵するドラゴンに移動要塞が大写しになる。

『ユグドラシルⅡ 三線大戦世界』 ○月配信予定』

「元々企画されていたものをあちこち駆け回って実現に成功した。どうかね、感想は？」

「素晴らしい！」

真っ先にその感想を言ったのはユグドラシル愛、否、ギルド愛が人の形をしているとかギルメンの間で言われるモモンガだ。

彼はスイートルームの豪華な椅子を立ちあがり、全力の拍手を行う。

「素晴らしいです！マジで本当に！これで明日への活力が出来た！」

「何あの巨大兵器！ってーかファンタジーVSテクノロジーってマジか！」

「ふっふっふ、今からプレイが楽しみだ。」

わいわいガヤガヤとギルメン達は大はしゃぎ。

うんうん、と満足気に頷き着席する。

「で、良かったのか爺さん。」

「何、私も君も恐らくプレイできんだろう。なら、彼らにやってもらいたいじゃないか。」

死刑執行日が決まってしまったウルベルトからの内緒話に、既に余命数か月の私が囁き返す。

そう、もう時間がない。

ならば、私は悔いを残さないためにも精一杯やらねばならない。

「ユグドラシルのデータは調整した後にIIに引き継がれる。セカンドキャラも一応各勢力で改めて作れるから、他勢力でのプレイも可能だ。」

「「「「「おおおおおおおおおおお！……！……！」」」」」

私の言葉に今度は全員がスタンディングオベーション。

うんうん、皆ノリノリだな。

「おっと、もうこんな時間か。」

思いの外映像が長かったため、ユグドラシル配信停止まで後5分を切っていた。

「あ、皆さん！最後は玉座の間で迎えませんか！」

ギルマスたるモモンガの声に、同意の声が多数上がる。

その数は過半数をとくに超えており、即座に話が纏まった。

「よし、皆第十階層に集合！記念スクショを取りましょう！」

2分後、私達は玉座の間に集合した。

「いかにぞ、後2分だ！」

「並んで並んで！」

「あれ、オレの位置って……」

「この愚弟！あんたはここでしょ！」

ワイワイガヤガヤ。

暫く離れていた事もあって、皆綺麗に整列とはいかない。

「後1分！」

「よし、皆撮るよ！……よしオッケー！」

漸く撮影が終わったのは、後30秒という処。

「後で全員に送ります！」

「む、後20秒か……。」

「ならば挨拶！モモンガさん！」

「えーとえーと……よし、『アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ』！」

「『アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ!!』」

全員が右手（又はそれに当たる部位）を掲げ、唱和する。

ああ実に楽しかった、実に愉快だった。

これなら、胸を張って逝ける、な……

が、何時まで経っても強制終了が始まらない。

「何だ？」

「もう過ぎた、よね？」

「運営のサプライズ……いや、手抜きか!？」

「糞運営！最後位綺麗に終わらせろよ！」

「いや、諸君これは……」

自分の変化にいち早く気付いた私が声をかける寸前、それ以上に衝撃的な事が起

こった。

「あの、御方々？ 一体どうなされたのですか？」

どうやら、未だ冥府に旅立つ訳にはいかない様だ。

---

### 主人公設定

現代のダヴィンチor日本のアインシュタインとか言われる程の多方面の天才。御年70歳。

特にナノマシン分野の異端者にして先駆者であり、環境浄化に関しては他の追随を許さない。

この人の存在のお陰で日本人は海外よりも遥かに暮しやすく治安も比較的まし。他、色々開発して利益もガンガン出すので、企業側としてもにっこり。

多少やらかしてもそれ以上の利益を生むので色々無茶も聞いてくれる WinWin 関係。

自分に何かあったら密かに大型ミサイルの弾頭にナノマシン散布装置載せて世界中にばら撒く用意をした。

弾道弾じゃなく迎撃ミサイルの改良型なんで、ジェット気流に乗せられるかはちょっと微妙だが、それでも広範囲に広がるので目的は達成できる。

ユグドラシルのキャラは「チクタク紳士」で異形種（ドリームマン）、属性は中立・カルマは200。

デバフ・バフを撒き散らす支援系のキャラで、ユグドラシル時代は拠点や装備、アイテムの作成に深く関わる。

外見は球体状頭部の頭部がメカっぽくなった球体紳士。

ギルメン中最高高齢者であり、リアルでの顔と本名を知られている。

ギルメンからは爺さん、チクタクさん、先生、教授と言われ慕われている。

時折とんでもないサプライズをやらかす愉快な人と本人知らずに言われてる。  
ぶくぶく茶釜が実は惚れてて、弟はそれを何とか押そうと思ったが立場違いすぎ  
て無理と二人とも諦めてた。

## このすば転生 ガチ女神が逝く その4 修正

今回はちょっと短めー。

「我が名はめぐみん！爆裂魔法を操るアークウィザード！」

「わ、我が名はゆんゆん！中級魔法を操るアークウィザード！」

片方は照れていたが、未だ粘液塗れのままでポーズを取って変な自己紹介をする二人に、カズマの目が死んでいく。

取り敢えず助けた二人は、頭のおかしい人達でした。

「えっと、アクア？ この二人って…」

「紅魔族よ。生まれつき高い魔力と魔法適正を持った種族で、基本全員が厨二病なの。」

「う わ あ。」

事前知識があったアクアがあっさりと答えるが、その目もやっぱりカズマ程では

ないが死んでいた。

種族全員ネタとしか思えんような奴らである。

まあ作った奴が作った奴なので仕方ないのであるが。

「取りあえず、今日はもう公衆浴場に行って、宿で食事を取って休みましょう。」  
空気を切り替える様にアクアが宣言する。

しかし、その出鼻を挫く様にぐきゅ〜と情けなくもひもじい音が二つ響いた。

「……………」

「ごめんなさい。ここ二日何も食べてなくて……………」

「出来れば…何か食べ物……………パンの耳でも野菜くずでも構いませんから……………」

アクアとカズマは目を合わせ、深々とため息をついた。

……………

そこからの対応は早かった。

アクアは浄化の魔法で二人を大雑把に清め（やり過ぎると体内の不純物諸々が消えて死ぬ）、カズマが適当に買ってきたパンを二人の口に突っ込んだ後、公衆浴場と併設された洗濯屋へと連れて行った。

そこで丹念にカエルの粘液と垢を落とした後、魔法であつと言う間に洗濯された服を着て冒険者ギルドに戻って報酬を受け取り、4人で食事となった。

「はむはむはむはむ……」

「がつがつがつがつっ！」

具沢山のサンドイッチを一心不乱に咀嚼するめぐみん、カエルの唐揚げやポークステーキ等の肉類に食欲に食らいつくゆんゆん。

その姿からは年頃の女の子としてのお淑やかさ等感じられない、正に鬼気迫るものがあつた。

幸い、初心者初の依頼としては破格の14匹の討伐だったため、飢えた紅魔族二人分の食事を追加しても多少の余裕があつた。

「そんな小柄でよく入るな。」

「紅魔族って魔力が高い分、そっちに栄養取られるんで燃費悪いのよ。」

その様子にかズマは目を丸くし、アクアが解説を入れる。

二人とも食事をしているのだが、目の前の二人の勢いに今一箸が進んでいない。

「ぷっはー！ごっつぁんでした！」

「ごちそうさまでした！」

「あ、はい。」

二人が止まったのは30分後、その周囲には大量の空皿が積み重なっていた。

食事のメニューはどれもポリウムと栄養価だけを考えられた体力仕事をする人向けだったのだが、一体何処にこれだけ入ったのか不思議でしようがない。

「本当に助かりました。なんてお礼を言ったら良いか……。」

「はい。お二人に出会えて本当に幸運でした。ありがとうございます。」

「いのよこれ位。アークプリースト的に、多少の喜捨は構わないわ。」

ぺこり、と頭を下げる二人。

その二人につこりと微笑みながら、アクアは鷹揚に受け取った

「で、落ち着いた所で説明してくれないか？紅魔族って魔法が得意なんだから、何でそんな飢えてたんだ？」

「う、それは……。」

「私が爆裂魔法しか使わないからです。」

口ごもるゆんゆんに対し、めぐみんはあっさりと伝えた。

「め、めぐみん……。」

「ゆんゆんも何を動揺してるのです。爆裂魔法とは我が人生、我が魂、我が生き様。誰にも恥じる事はありません。」

ふんす、と鼻息荒く語るめぐみんには一切の影が無い。

本当に心の底から爆裂魔法に誇りを持っているのだろう事が分かる。

「アクア、爆裂魔法って?」

「超広範囲に対して超高火力の爆発を叩き付ける対城・対軍向けの上級魔法。但し燃費は劣悪。」

「しかもめぐみんは爆裂魔法しか習得してなくて、しかも一日一発しか撃てないんです……。」

「一日一爆裂がモットーです。」

「いやそれ自慢じゃないからな?」

カズマの突っ込みに、しかしめぐみんは一切怯まない。

寧ろそっちのが恥ずかしいんじゃないの？と言わんばかりの太々しさだ。

「とは言え、十分な事前準備と支援こみなら、用途は色々あるわね。」

「だな。今日のカエルはもう使った後だったから逃げてたのか？」

「はい。一度使って一掃したんですけど、爆音を聞きつけて大量に寄って来てしまつて…。」

「あちゃーヘイト稼ぎすぎたか。」

カズマからすれば、ゲーム内と付くが十分分かる話だった。

相手に高火力マップ兵器持ちがいるのなら、集中砲火で落とすか被害を警戒して分散するのは、対処法としては常識ですらある。

「そもそも、その辺の事を考えずにどうして街の外に出てきたの？」

「それがその……。」

「それはゆんゆんが恥ずかしがりで奥手なせいで、どこのパーティーにも入れなかったせいです。」

「ちよーーーーー!?」

めぐみんの言葉に、ゆんゆんが慌てて口を塞ぎにかかるが、時既に遅し。

「わ、私だって頑張ったんだよ!？」

「でも結果はどうです? いつも後一步の所で尻込みしていじけて落ち込んで。そんなだから私以外に誰も友達がいらないんですよ。」

「ううううう……。」

ずーん、と落ち込むゆんゆん。

その様子を見たカズマは、元引きニートとして多大な同情を感じてしまった。

そうなのだ、好きでそうなった訳ではないのだ。

ただ、他の人にとってなんでもない事が、自分には苦痛で困難に感じてしまうだけ……。

「なあアクア……。」

「うーん、カズマもOKなら良いかしら。結局は運用次第だし。」

めぐみんは一発屋だが高火力広範囲、ゆんゆんは汎用性の高い中級魔法全般の使い手と、バランスを見れば悪くない。

後は支援と使い方次第でかなり化けるだろう。

「ねえ二人とも、良ければ私達と組まない？」

「勿論、嫌って言うなら強制はしないけどさ。」

「え？」

アクアとカズマの言葉に、食後のお茶を飲んでいた二人が驚きで固まった。

「よ、良いの？私達、その、変だし…。」

「私、もう何度もお断りされてるのですが…。」

流石に助けてもらった上にただでお風呂・洗濯・ご飯まで奢られ、更に願ってもない事を言われるとゆんゆんはもちろん、めぐみんも流石に気まづくになるらしい。

「私達も駆け出しなの。で、まだ張り紙出してないんだけど、パーティーメンバー募集中なの。」

「二人とも多少尖がってるけど専門分野なら優秀そうだし、他に予定があるなら取り下げるけど…。」

その言葉に、めぐみんとゆんゆんは互いの顔を見合う。

互いに不安、不信があるものの、それ以上に期待と興奮をその瞳に感じた。

「よろしくお願いします！」

だから、二人は笑顔で了承を告げた。

「おう！こっちこそよろしくな！」

「よろしくね二人とも。私達も歓迎するわ。」

こうして、また一つの冒険者パーティーが結成されたのだった。

「こうなると、後は前衛が欲しくなるなあ。」

「そうねえ。私もめぐみんもゆんゆんも後衛だし、めぐみんは爆裂魔法を撃ったら動けなくなつて誰か一人が運ばないといけないし…。」

深刻な前衛不足だった。

「オレは冒険者で盗賊みたいな支援系軽戦士で行く予定だし…。」

「誰かいないかしら、ガチ前衛の人。」

うーん、と一同で悩む。

カエル相手ならこのメンバーでも余裕とはいかないものの、しっかり安全マージンを取りながら狩れば大丈夫だろうが、それ以降に関しては不安しか感じない。

尤も、アンデットに関して地上最強クラスの人材もとい神材があるので安心なのだが。

「カエル相手でもあんな事があったしな…。」

「もう粘液塗れになるのはちよつとね…。」

「知ってます？ カエルの中ってあったかいんですよ？」

「ううううもう食べられるのはいやああ…。」

先程の出来事が未だ頭から離れないのか、一同の頭の中がカエル関連のトラウマに埋め尽くされる。

鮮烈な体験とグロ画像は脳裡にこびり付いて離れず、一様に暗い顔色になった。

「カエル相手に粘液塗れ、だと…？なんて羨まけしからん！是非私も仲間に入れてくれ!!」

「「「えっ？」」」

そして何故か変態クルセイダーが釣れた。

「……………今の所は順調、か。」

そしてその狂騒を、食堂の隅から見つめる女盗賊がいた。



## オーバーロード二次 廃課金で逝く

何だか最後やっつけに…

この荒れ果てた時代、富裕層では中の上程度の家に生まれた自分はきっと幸運なのだろう。

人工肺や専用マスクを着けずに生活できる環境循環型アークロジで生活し、黙っていてもお金が入ってくる生活をしている自分は、汚染された大地で家の大気清浄器のエアフィルターの代金を必死になって稼ぐ下層民に比べれば、本当に幸福だ。それでも自分にとってはこの生活は何時か破綻するだろうものにしか感じられない。

崩壊は、絶滅は直ぐそこだと誰もが薄々分かっているのに何もしないクソの様な時代だから。

とは言え、貧乏性で出不精で貯蓄ばかりしている自分にできる事なんて殆どない。

精々が環境改善系の技術開発をしている企業へと出資し、便宜を図る程度だ。

それでも、きつと奇跡でも起こらない限りはどうしようもないんだろう焼石に水を少量注ぐ程度でしかないが。

そんな未来への希望なんて抱けない時代で、自分の数少ない癒しがDMMORPG「ユグドラシル<Yggdrasil>」であった。

自分がプレイ可能なDMMORPG（国外は殆ど崩壊状態なのでゲーム自体絶滅状態）の中ではこれが一番だと言えるのがこのゲームだった。

700種を超える種族、2000を超える職業、そして10万を優に超える装備やアイテム類。

正に遊び尽せない程に奥深いファンタジー系ゲームの極み、運営が「未知を楽しむ」事をテーマに作っただけはある。

その分、運営側への負担は膨大なものとなり、プレイヤーからはその対応の後手後手さや杜撰さからよく「クソ運営」と罵倒されているが、舞台裏を多少知っている側の人間として、またサービス開始直後からいる最古参の身としてはちよっとばかり手心を加えてほしいものだと思うのだが。

斯く言う自分は複数のアカウントとPCを持った廃課金勢の一人だったりする。

この手の複数垢は基本不文律として或いは明文的に運営側から禁止されているのだが、金を落としてくれたり違反行為を一切していない場合は大抵お目溢しされる。

もし削除されても、正直に事情を話せば（後ろ暗い理由が無ければ）復旧してもらえたりもする。

そんな訳で、自分はそれぞれテーマ別或いはガチ編成の方向別（タンクや支援、遠近に魔法等）にキャラを制作し、臨機応変に使い分けていたのだ。

とは言え、そんなことをしていれば特定のギルドに所属できないので、自分の拠点となる場所の確保には苦労したが。

そんな自分がキャラ作成の他に楽しみにしていたのが多人数が参加する大規模作戦だ。

主にイベントのレイドボスやワールドエネミー、ギルド攻略戦なんかがそれだ。まあPS（プレイヤースキル）が低いので、専ら支援かタンクでの参加なのだが。それでも巨大で強力な敵相手に皆で一丸となって挑むのは言い知れぬ快感があっ

た。

そんな中、最も記憶に残っているのがあのユグドラシル最強にして最悪のDQNギルド「アインズ・ウール・ゴウン」の本拠たるナザリック地下大墳墓攻略作戦だ。

あの時、育成したものの物足りなくてデスペナによるレベル低下をさせようとしていたタンク系未満の高耐久高火力キャラがあったので、丁度良いとばかりに参加したのだ。

結果は1500人ものプレイヤーが参加したにも関わらず惨敗、噂の第十階層に行き着く事も出来ず、廃課金装備の力もあって辛うじて第八階層まで到達できたものの、ギルドメンバー全員とNPC達とフィールドを用いた確殺戦術？によって蹂躪されてしまった。

それ以来、私は結構な頻度で彼らとのPVP戦やナザリックへの侵入を試みる様になった。

とは言え、うっかりギルド解散されると悲しいので、事前にメールや伝言の魔法で伝えて予定を確認したりしてからののだが。

いやもう本当にあの頃、ユグドラシル最盛期は面白かった。

このゲームが日本で最も知名度が高いDMMORPGと言われるのも納得だった。

しかし、時の流れは残酷だった。

開始から10年、次々と配信開始された新たなゲームに人は流れ、過疎化が進み、遂には10年目にしてユグドラシルのサービス停止が決定されてしまった。

本当に残念だった。

自分のこの10年はこのゲームと共にあったと言うのに…。

『モモンガさん、もうすぐ終わってしまいますね…。』

『ええ、遂にと言うべきなのでしょうね。』

自分と同じくこのゲームを愛し、友人達と心底楽しんでいたアインズ・ウール・ゴウンのギルド長モモンガ氏。

彼もまたこのゲームの終わりを嘆く人だった。

『何だか寂しいですね。』

『ええ、私も最後はギルメンと過ごしたかったです…。』

自分にはいなかったが、AOGのメンバーは皆喧嘩もするがとても仲良しだった

らしい。

自分も有名所のメンバー（モモンガ氏含む）とは何度もPVPをしたので話した事もある。

皆、このご時世にとても良い人達だった。

本当に、お別れが寂しかった。

『ルービックさんはこの後はどうする予定ですか？』

『自分も最後は自分の拠点で過ごします。』

『私もナザリックで過ごす予定です。』

『惜しいなあ。結局最後まで攻略できませんでした。』

『ははは、後でスクショ送っておきますんで。』

『お、それはまた嬉しいプレゼントですね。』

最後だからと、二人で他愛もない事を語り合う。

モモンガさんとの最後のお喋りは、楽しくも切なかった。

『では、縁があればまた何時か何処かで。』

『ええ。その時までどうかお元気で。』

そして、自分は最後の瞬間、日付変更時間に自分個人の拠点の最奥にある宝物庫、自分の掻き集めたコレクションの山の中で最後の時を迎えた

筈だった。

「ここ何処やねん。」

気付けば深い森の中だった。

.....

そこからは大変だった。

たまたまその時のPCが支援系魔法詠唱者だったので、ありったけの隠蔽系の魔法を重ね掛けして情報収集及び検証に当たった。

種族がアンデッドだったから状態異常無効化があって良かったものの、他の通常生命体だったらどれだけ混乱していたか分からない。

身を隠した状態で付近の村に潜入し、彼らの会話や生活を見て大よその情報を掴む事が出来た。

ここはバハルス帝国内の田舎であり、特に特産品なんかもない農村だとの事だ。とは言え、恐らく異世界と思われる場所なので、相応の発見もあった。

レベルが、低いのだ。

モンスターも人間も、どんな生き物もレベルが低いのだ。

そのため、得られるスキルも相応に低い。

それでいてユグドラシルの魔法やスキルは通用するのだから、これはもうオレT u e e e e !でもすれば良いのかと思う程に格差がある。

いや、しないけどね。

(幸い、自分の拠点は維持費も凄く低い奴だから大丈夫だけど…。)

今はアイテムとして収納されているキャンピングカー染みた拠点。

これの最大の特徴は維持費の低さとアイテムボックスへの収納を可能とする携帯性だ。

しかも、その内部には多くのアイテムを收容し、更にアイテム・装備作成用の施

設がある。

街の施設を利用できない異形種で、更にソロであれば必須と言っても良い装備だ。まあ、ソロ自体ユグドラシルでは少数派だったので、運用されてた数は余り多くないのだが。

(とは言え、このままじゃジリ貧だしなあ。)

問題なのは、少量と言えどもこのキャンピングカーもユグドラシル金貨を消費するということだ。

幾ら廃課金勢と言えど、その財力は無限ではない。

よって、何がしかの手段で財貨を確保しなければならぬ。

幸いにも、価値あるものなら何でもユグドラシル貨幣にしてくれるエクステンジ・ボックスはあるので、後は如何に効率よく価値あるものを集めるのが重要だ。(となると、鍛冶と商人スキル持ちが必要になるなあ。)

売るアイテムは当面はストレージ内の低レベルので済むが、在庫が終われば作るしかない。

そして、エクステンジ・ボックスの変換効率を上げるにはどうしても商人系ス

キルが必須となる。

だが、生憎とそれを持っていないのだ、このPCは。

(なら発想の転換だ。持っているPCに変われば良い。)

20以上作ったPCデータの中には、商人系特化と鍛冶・制作系特化のものもある。

それらになれば今抱えてる問題の殆どは解決できる。

「なら、こいつを使う時が来たって事か。」

手にあるのは流れ星の指輪、それも三つである。

つまり、9回も願いを叶える事が出来るのだ。

「流れ星の指輪よ、わが願いを叶えよ。」

願うのは一つ、自分の努力と趣味の結晶のため……

「自分が作った全てのPCを使用可能にせよ！」

こうして、自分はこの世界で強くてニューゲームに引き続き、更なるチートを手に入れた。

……

そこからは早かった。

20を超えるPCへと随時入れ替え可能となった自分は早速行動を開始した。

隠蔽・移動に優れる暗殺者特化PCへと変身し、バハルス帝国の首都にあたる帝都アーウィンタール近郊へと移動する。

そこから商人系PCへと変身し、帝都の関所を通るための列へと並ぶ。

見た目女性の一人旅だからか、列の中で絡んでくる者もいたが、そういった連中は直ぐに兵士達に見つかってしょっぱかれる。

つい数年前に革命同然の改革、皇帝への中央集権化を成し遂げた帝国だけあり、兵への統制も治安も行き届いているのがよく分かる。

関所では女商人の一人旅と大分怪しまれたが、商人系スキルの一つである「交渉」による説得で乗り切る事が出来た。

そこからは簡単なもので、不動産屋へ行って金貨の山を積んで「上位の冒険者並びワーカー向けの装備を売るのに適した立地にある店舗」と言えば直ぐに解決した。何せ彼らからすれば御大尽である。

名も知れぬ商人で女相手だと高を括っていたのが一瞬で掌を返して物件を見繕った。

その結果、条件にあったのが大通りに程近い元貴族の屋敷だった。

その元貴族は貴族の中でも下級であり、皇帝の貴族らへの粛清に当たって寄り親ごと粛清され、今は無人の空き家だ。

また、元貴族街の端っこにあるために、比較的大通りに近く、冒険者やワーカーと言われる非合法冒険者とも言われる者達も比較的寄り付きやすい。

「じゃあここで。」

「はは、お買い上げありがとうございます！」

「それと計算や文字の読み書きの出来る従業員を斡旋、又は奴隷を売買してる所である？ 後、清潔なホテル。」

「それでしたら此処と此処と……ホテルならこちらになります。」

「ありがとうございます。じゃこれチップ。」

「ははあ！ またのお越しをお待ちしております！」

その日は清潔なホテルに泊まり、この世界で初めての豪華な食事に舌鼓を打った。

そして、翌日には奴隷を購入し、奴隷自身の身支度を済ませた後、一週間程の準備期間を持って、帝都に私のお店である「イツツビシ雑貨店」がオープンしたのだった。

なお、看板にはこっちの言語と日本語の二種類で「ようこそ三菱雑貨店」と書いてある。

で、店の売れ行きだが……冒険者向けではなく、寧ろ一般市民向けに色々売れた。主に鉦や万能ナイフ、包丁、他家財道具等だ。

逆に刀剣や杖等の冒険者向けの装備類の売れ行きは低い。

これらは皆鍛冶・制作特化PCで作ったものとストレージの肥やしになっていたゴミアイテム類なのだが、この世界からすればドワーフ製の中でも上位の品質であるらしく、結構な売れ行きだ。

が、肝心の冒険者向け商品は今の所ポジションしか売れていない。

全く未知の店である事もあるが、ポジションに関しては劣化しないユグドラシル式であるから下位から中位まで売れる。

ほぼ置物のつもりとして置いていた上位ポジションのみ、白衣を着た薬師らしき

人が大枚はたいて買って行ったが。

「何だかんだ商売も順調か。まあそれならいいか。」

とは言え、それ以上の事は考えない。

今の状況が続くだけで、既に自分は満足だから。

この世界は空気も水も食事も美味い。

合成食品と汚染された自然環境だけのあちらの世界とは正に天と地程の差があった。

故にこそ、高望みせず、店を切り盛りしていく必要があった。

「さ、今日も程々に頑張らしましょうか。」

なので、今日も彼女或いは彼はお店で笑顔を見せるのだった。

しかし、運命は残酷なものと相場が決まっている。

この後、帝国勤めの薬師が弟子入りに来たり、王城からスカウトが来たり、終いには帝国最強の魔法詠唱者であるフルーダーまでやってきて弟子入りを懇願した

りと、PC名の一つがルービックであるプレイヤーには安息が訪れなかった。

止めとして、この廃課金プレイヤーが帝都に店を構えた半年後、超巨大なギルド拠点ごとあるプレイヤーがこの世界にやってきた。

その名をモモンガ。

嘗てこの廃課金プレイヤーが幾度も戦い、時には共闘し、最後には共にユグドラシルの最後を迎えた友人とも言える人物である。

彼の登場による世界の変化に、嫌応なく巻き込まれる事になるのだった。

「ルービックさん、ルービックさんじゃないですか!?!」

「うえええモモンガさん!?! 貴方何やってるんですか!?! てーかNPC達が動いてるうー!?! スクシヨ、スクシヨしなきゃ!?!」

「うわあ相変わらず…じゃない! 貴方こそ何やってるんですか!?!」

こうして、(対外的には)最高位の変身魔法の使い手と最高位の魔法詠唱者にしてアンデッドはこの世界で再会するのだった。



## オーバーロード二次 メカオタが逝く

最近オバロに凝ってます。

Web版は当時最後まで見てたんだけど、書籍版とアニメ版は見る時間が足りない(汗)

---

未知を楽しむ。

それがユグドラシルというDMMORPGという分野における金字塔を打ち立てたゲームのメインテーマだ。

実際、700種を超える種族、2000を超える職業、そして10万を優に超える装備やアイテム類、更には追加される数多のクエスト類。

そしてプレイヤーの見栄と虚栄心によって白熱するPVP、GVG。

この暗い時代において、庶民の間で一大ムーブメントとなるのは道理だった。とは言え、このゲームは基本的にファンタジー要素がメインである。

Q つまり？

A SF要素が少ない。

Q じゃあどうすんの？

A 自分で作れば良いじゃない。

幸いにも、自動人形（ロボット）の種族もあり、再現するのは（低課金が前提だが）比較的簡単だった。

無論、外見は兎も角満足の行く性能まで兼ね備えるとなるとLv70～90台まで上げねばならなかったし、一人のアカウントには基本一体のPCのみとなっている。つまり、再現できるのはソロでは一体のみなのだ。

だから、ロボオタの自分は多くのロボ好きを募り、「自分の推しロボを追及するためのギルド」を設立した。

その名こそ「レコード・オブ・ステイール」である。

古今東西のSF好き、その中でも特にロボ好き達が集った「全員が種族・自動人形」で統一されたギルドである。

「てめー！空戦最強はマクロスだろうがJK！」

「ミサイルサーカス乙。」

「エウレカデイスってんのかクルオラー!？」

「アーマードコア4系列……」

「楽園追放を忘れないでください……」

「あの、クロスアンジュ……」

「忠犬乙。」

「ヒロインが理不尽過ぎる。」

「よし、表出ろ。」

が、各々が好きな作品がそれぞれ違うため、ついついヒートアップして頻繁にPVPに発展する騒がしいギルドでもあった。

………

とは言え、そんな過剰なまでの情熱もあり、廃課金勢も多かった事から、彼らは皆各々のキャラビルドを欲望のままに行い、ユグドラシルでも屈指のネタギルドと

言われた。

だがまあ、特化型ビルドが余りにも多かったため、PVPは兎も角、ギルドの参加人数も200人と人数だけ見れば大手であった事からGVGのみで言えば実に8割を誇った。

そんな中、彼らは同じロボ好きが参加しているあるギルドと交流試合としてGVGを行う事となった。

その名もアインズ・ウール・ゴウン。

悪名高い異形種のみで構成されたPKギルドである。

とは言え、彼らにはその辺のプレイに関しては何見はない。

彼ら自身そう言った偏見とは戦う側であったし、PKされたというプレイヤーも元々異形種狩りをしていた連中であるため、寧ろ「いいぞもっとやれw」と囃し立てる側だった。

そのため、彼らは全ギルドメンバー合意かつギルド武器を壊さない事、更に動画を撮って編集の上でネットにアップする事を条件として、異形種ギルド最大手と二番手ギルドのGVGが開始される事となった。

「で、戦術はどうするのギルド長？」

「正直、正面から戦うのはきついですよ？」

「核弾頭…。」

「おいバカその自爆兵器しまえ。」

この時期、アインズ・ウール・ゴウンは最盛期であり、レベルだけでなくPSも高いメンバー全員が揃っている事に加え、全ギルド中最多のワールドアイテムを保有し、1500人ものプレイヤーの超大規模侵攻を返り討ちで全滅させた事で向かう所敵無しの状態だった。

「正面から馬鹿正直に消耗戦をするからいけないんだ。」

1500人を41人で返り討ちとは聞こえは良いが、要は連携のなっていない烏合の衆をキルゾーンへ誘い込んで殲滅したのが実態だ。

であれば、連携を取った上で相手のキルゾーンをどうにかしてしまえば良いのである。

「内部は基本転移禁止でその階層の守護者を倒した場合のみ次の階層へ移動できる。そして鬼門は第8階層のキルゾーン。」

「各種耐性をしっかりしてないと各階層で詰む上に、第八階層では巨大ゴーレムと正体不明のスタンと。」

「正直、うちら単体で挑むにはきつくはないですか？」

そんな警戒とも弱音ともいえるギルドメンバーの言葉に、しかし、ギルド長は素晴らしい笑顔で答えた。

「大丈夫だ。私に良い考えがある！」

「コ○ポイ乙。」

こうして、ツイッターや動画での告知から一週間、遂に異形種ギルド同士の初のG V Gが始まった。

「キルゾーンだらけの地下要塞？特化型プレイヤー同士との連携？」

先手を取ったのは攻め手のレコード・オブ・ステイール。

「ジャブロー落とすならこれでFA。」

「ギレンの野望乙。」

再現した超大型の円筒形コロニーによる高高度からの特攻を敢行。

ナザリック地下大墳墓表層及び第五階層までが崩落。

「相手は生物系？よろしい、ならば核の炎だ。」

「皆！核弾頭ぶっばよー。」

「わーいたーのしー！」

「ソロモンよ…私は帰ってきた！」

「ソロモンじゃないし来た事ないけどな。」

第六階層、核の炎により焼却。

「相手は悪魔系で統一されている。無論、神聖属性には耐性ありでフィールドは炎。」

「よろしい、ならば消火作業だ。」

動かなくなったコロニー内に備蓄されていた大量の海水（水中系モンスター及びPC入り）を流し込む。

フィールドの上書きにも等しい荒業に、防衛側はほぼ全員が徐々に溺れ状態になって後退。

第七階層、コロニーからの海水流入により水没。

「そして本命の第八階層。」



「って手狭な通路で肉弾戦特化相手はきつ」

第九階層、構造上通路での戦闘が多く、基本遠距離系を得意とする攻撃側が不利となり、磨り潰される。

結果、GVGはアインズウールゴウン側の勝利となった。

この異形種ギルド二大トップの戦闘は一部編集された動画がネットでUPされ、大反響を呼んだ。

また、多くのギルドの結論として「この攻略方法はとてもではないが真似できない」とされた。

何せコロニー落としとその後の海水流入に必要となるアイテム及び資源の必要量が計算された結果、とてもではないが一ギルドどころか複数のギルドが提携してなお鉦山が三つや四つは枯れ果てるのではないかと推測される程に膨大な量という試算が出たからだ。

これにより、両ギルドの名声と認知度は不動のものとなった。

更に来月、勝ったとは言え雪辱に燃えるアインズ・ウール・ゴウンのメンバーがレコード・オブ・ステイールのギルドへの侵攻戦（無論ギルド武器は破壊しない約

束)を開始すると、彼らからしても度肝を抜かれた。

数少ない浮遊型拠点、そこまでは良い。

コロニーの時点で予想はしていた。

SF的な外観を持つ灰色の浮遊戦艦。

各所に搭載された砲台が迫り来るアインズウールゴウンのメンバーへと向けられるが、彼らはそれを巧みに回避して接近していく。

しかし、しかしだ。

彼らはレコード・オブ・ステイルなのだ。

ただの浮遊戦艦である筈がなかった。

「拠点まで変形巨大ロボかよ!？」

「しかも弾幕凄いいし!これどうやって乗り込むのさ!？」

「愚弟!今こそあんたが活路を開きなさい!！」

「合点承知!アイキャンフライ!！」

マクロス作れるなら作るだろJK、と言うのが彼らの言い分だった。

これから戦闘をしかけようとした浮遊戦艦が突然人型に変形し、弾幕張りながら

襲い掛かってくるとは露とも思ってたなかったアインズ・ウール・ゴウンのメンバーは驚愕しきりだ。

だが、空戦最強の誉れも高い変態バードマンを主軸に即座に戦闘を仕切り直した。

「来たぞ、奴だ！」

「ロボ愛を介さぬ変態が！」

「今日こそ奴を焼き鳥にしてくれる！」

「はん！ロリ萌えを理解しない奴らに落とせるかよ！」

「ペロロンチーノえ…。」

「茶釜さん…。」

「愚弟、後で絞める。」

そんなこんなで、今日も彼らはユグドラシルを満喫するのであった。

なお、結果はアインズウールゴウン側が浮遊戦艦を撃沈せしめるも、敢え無く敗退する事となった。

後日、編集して上げられた動画はやっぱり大人気で、「変態VS変態」、「なにあの鳥男変態機動」、「板野サーカス乙」、「空の世界チャンピオン決定戦」と掲示板

も大賑わいだった。

とは言え、そんな楽しい日々も今は昔、遠い過去の事となってしまった。

………

「終わりか…。」

最早自分以外は誰もいないギルド拠点の中、その司令部にてただ一人、自動人形系種族最上位の「デウス・エクス・マキナ／機械仕掛けの神」はぼつりと零した。

ユグドラシルはファンタジー要素の強いゲームだった。

それはつまり、他にSF要素の強いMMORPGが出れば、そちらに人が流れるのは分かっていた事だ。

そして、基本的に後から出たゲームの方が性能が高いのが世の常であり、そんなゲームが多数存在すれば、最初期の名作であっても廃れるのは必然だった。

「だが、確かに楽しかったんだ。」

機械の神は、2000人も友人達との日々を懐かしむ。

この4代目となるギルド拠点も、作るには大変苦労した。

初代の空中戦艦ホワイトベース、二代目の円筒形コロニー、三代目の可変機動戦艦マクロス、そしてこの四代目となる恒星間航行艦エクセリオン。

全長7kmにして多数の人型兵器（モンスター）と自動人形部隊を擁し、内部にギルドに必須とされる各種機能を搭載し、更に小なりとは言え都市を内包した完全循環機構を搭載したこの艦を落とすには、それこそプレイヤーが1000人が必要となるだろう。

しかし、そんな連中が仕掛けてきたら全ギルド拠点中最速を誇るこの艦なら逃げられるし、逆撃も可能だ。

とは言え、今はそんな相手もないのだが。

「コマンド：『司令部内の全NPC、敬礼』」

ギルドマスター権限での指示に、司令部内に詰めていた全てのNPCが立ち上がり、敬礼を返す。

それを満足そうに眺めて頷く。

「モモンガさんも、きつとこんな気持ちなんだろうな……。」

ぼつりと零すのは、何度も遊んだ有名ギルドのギルドマスターの名前だった。

あの人のポン骨ぶりにも随分助かった。

皆がいなくなり、それでも過去を忘れられずにいつまでもユグドラシルにインしていた頃、一人で資金稼ぎをしていたモモンガさんと再会し、それ以来ずっと二人で一緒に狩りをしていた。

自分は高機動射撃型の前衛で、モモンガさんは純粹な魔法詠唱者なので、相性自体は良好だった。

彼がペロロンチーノとの連携に慣れていた事も大きい。

互いにギルドを維持するために頑張つて狩りを続けていたが……それももう、する事はない。

サービス停止が宣言されて一か月、今日でユグドラシルは終わりであり、もう後3分も残っていた。

「この世界最後の日に、君達と共に在れた事を嬉しく思う。」

司令部の最も高い位置にあり全体を見下ろせる司令席から告げる。

10年も愛したゲームが消える事は悲しいが、不思議と涙は出なかった。

そして、無常にもカウントダウンは進む。

それをレコード・オブ・ステイールの残党は静かに眺めていた。

23 .. 23

23 .. 59

00 .. 00

ユグドラシルが終わるその瞬間、突然司令部の外部モニターがブラックアウトした。

「な!? 状況報告!」

つついっ癖でロール時のセリフが出てしまい、直ぐに正気に戻って自分でコンソールを操作して確認しようとして……

「外部環境が突如変化! 現在海洋上を航空中!」

「大気成分及び気温から1G下の地球型惑星と推測！」

「外部要因による強制的な空間転移だと思われまます！」

「：診断完了。艦及び内部乗員に被害無し！」

「全機能オンライン。司令、ご指示を。」

「ふあ？」

今まで敬礼したままだった司令部の自動人形達が一斉にその職分を果たさんと一斉に動き出し、素早く情報を挙げてくる。

NPCがまるで生きている様に動き、こちらに話しかけてくる。

その姿に内心で大いに混乱するものの、不思議と自分がすべき事をすつと理解できた。

「艦全体はこれより第二種警戒態勢へ移行！そして格納庫は無人偵察機の準備！周辺のあらゆる情報を収集し、異変あれば報告せよ！」

「「「「「了解！」「」「」「」」」」」

こうして、100年に一度の大騒ぎに怯え竦むこの世界に、新たなプレイヤーが

大戦力と共にやってきた。



## オーバーロード二次 マスクドライダーが逝く

短期集中連載予定

「俺さ、日朝の変身ヒーローになりたかったんだ。」

その夢を追うために、俺はユグドラシルを始めた。

何せ未知への探求こそがテーマとされる当時最新型のMMORPGだ。

絶対に何処かにあると思ったのだ、俺の求める仮面のヒーロー達の似姿が。

しかし、現実は残酷だった。

調べれど、調べれど、見つからない。

最初は人間種で装備を幾度も改造し、しかし微妙にしっくりこない（コレクションンとして取っておくが）。

次に亜人種（エルフやドワーフ等）を試し、ダメだった。

そして最後、僅かな躊躇いと悩みの果て、遂に異形種を選んだ。

昆虫人という種族。

文字通り人型に近い蟲の種族。

だが、異形種はPKの的に成り易く、そのため育成が難しい。

だがしかし、以前からの経験により、初プレイで異形種を選ぶよりも遙かに楽に育成は進んだ。

無論、幾度となく異形種狩りのPKに合ったが、手を変え品を変えもとい狩場を変え装備を変えレベルを上げ、ログイン時間を調整した結果、何とか己の思う仮面のヒーローの形へと近づいていく。

しかし、ちょっと足りない。

仮面の変身ヒーローなのだから、普段は人で戦いの時に変身するべきだろう。

そんな拘りのため、ユグドラシルではゴミアイテムとされる人化の指輪を正・副・予備含め三つも持っていた。

後々になってこれで大いに得をするのだが、それはさて置き。

重戦士ではなく軽戦士、それも外骨格+素手の戦闘に特化したモンクやグラップラーをメインにし、ロール目的でサブに雷撃系を中心とした魔法詠唱者を取得する

事でかなり理想に近づいていき、レベルも更に上がった。

その頃にはPKや異形種狩りのアホ共も返り討ち&闇討ちできる様になり、やがてソロでクランに入る事もせずにそれなりに名が売れた頃に彼らと出会った。

アインズ・ウール・ゴウン。

異形種の自警団からPKKを目的とした悪役ロール系ギルド。

彼らの長であるたち・みー氏よりスカウトを受け、ソロでの限界も感じていた事もあり、自分はあるさりと加入した。

それからは楽しい事ばかりだった。

スキルやレベル、ステータスや装備等を全て最初から皆で見直し、デスペナでレベルを下げてからの再構築。

理想に近かったキャラがより理想に近づいていく快感。

そしてロール重視というギルドの方針もあって本当に自分が物語の悪役になったかの様に色々な場面でロールするのは楽しかった。

当初は正義の味方の仮面のヒーローだったのに、ウルベルトとたち・みーさん、そしてタブラさんの影響を受けてダークヒーロー化してしまったのは想定外だった

が、それもまた楽しかった。

多くのイベントやワールドエネミーからの強襲と討伐戦、レア鉱山の奪取と防衛戦、ナザリック地下大墳墓攻略及びギルド拠点化、そして命知らずにも挑んでくる輩への迎撃戦。

どれもこれも、あつという間に過ぎ去り、そして終わったリアルでの生活よりも遥かに輝いていた。

しかし、どんな祭りにも終わりがあり、日はいつか沈み、夢は覚めるものと相場が決まっている。

もう、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーでナザリックに来る者は殆どいなくなってしまった。

声優のぶくぶく茶釜さんも、変態な弟のペロロンチーノも。

女教師であるやまいこさんとその妹の明美さんも。

警察官でギルド長のたっち・みーさんも、厨二病のウルベルトもタブラさんも。

自然大好きなブループラネットさんに至っては、病気で亡くなってしまった。

最早、栄光のナザリックは完全に斜陽の時を迎えていた。

そして今日、ユグドラシル自体もまた終わりの時を迎えようとしていた。

ナザリック地下大墳墓 第10階層 玉座の間

「結局、ヘロヘロさんだけでしたね。」

「そうですね。」

赤い三つの宝玉と金で縁取られたローブが特徴の死霊使い系魔法詠唱者のオーバーロード、モモンガ。

漆黒に血管の様な金色のラインが走った細身の外骨格、背に裏地が赤、表が黒に虫の顔に似た象形文字の様な金色の紋章が刺繍されたマントを羽織ったヴァーミンロード、空我。

第9階層の戦闘メイドと執事達を侍らせた状態で、二人の異形種プレイヤーがそこにいた。

「まあ、どんなお祭りも何時かは終わるもの。こうして二人だけとは言え懐かしむ事が出来たのを良しとしましょう。」

「そうですね…。」

意気消沈するモモンガ。

その姿にリアルでは天涯孤独同士で低学歴仲間であるウルベルトやペロンチーノら悪友組すら来なかった事に本気で残念に思っているのだろう。

「モモンガさん、最後にスクショ撮りませんか？」

「へ？」

「最後位うちらしい最後を飾りましょうよ。」

で、ゴニョゴニョと相談する。

「いいですねそれ！」

「ではモモンガさんは玉座に、オレはその前でー。」

「位置は…あ、もう少し手前で。」

「はい。」

そして、モモンガが玉座に腰掛け、空我が玉座の前で跪き、準備が終わる。

「申し開きもない。我らが王モモンガよ。結局、私は世界の終わりに抗えなかつ

た。」

「何を言うのだ友よ。我ら二人、こうしてここに残ったではないか。何より世界樹

ユグドラシルが枯れるは定められたもの。来るべき時が来ただけに過ぎぬ。」

そのモモンガのセリフに、嘗ての栄光が頭を過る。

困った時も、怒った時も、悲しんだ時も、喜んだ時も。

全て全て、大事な思い出だった。

「さあ、それよりも最後なのだ。何時までも跪くのではなく、皆で華々しく最後を飾ろうではないか。」

「解った。では、隣に立たせてもらおう。」

すっと空我が立ち上がり、玉座の右側に並び立つ。

「楽しかったですねえ……。」

「ええ、本当に……。」

じわじわと、もう戻らない時を懐かしみ、胸が痛くなる。

何だか涙腺まで熱くなってきた……年は取りたくないなあ。

「では我が友よ、最後はやはりアレで締めようか。」

「ああアレだな。随分久々だな。」

うん、とモモンガさんと頷き合い、声を揃えた。

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ！」

その言葉を最後に、全ては消える……

「あれ？」

筈だった。

これは死の支配者の蹂躞劇ではない。

「これは……えらい事になったな。」

悪を討つ悪、仮面の悪漢の物語である。

1473 オーバーロード二次 マスクライダーが逝く



## オーバーロード二次 TSモモンガが逝く

こっちと前話のどっちを集中連載すべきか悩む（汗  
という事で、活動報告にてアンケート取っておきます。

---

「今日で、もう最後かあ…。」

最早全てのギルメンが去った円卓の間。

そこでモモンガは、鈴木悟子は呟いた。

日本初のMMORPG「ユグドラシル」。

その廃課金勢の一人である彼女の所属したユグドラシル最大のDQNギルド「ア  
インズ・ウール・ゴウン」。

僅か41人の手勢で1500人ものプレイヤーを討ち取る程の防衛力を誇る拠点  
「ナザリック地下大墳墓」、最上級レアアイテムである世界級アイテムを一ギルドと

しては最大の11も保有し、正に最高無敵の自慢のギルドであり、そのギルメン達もまた彼女にとっては最高の友人達だった。

しかし、それはもう過去の事。

ここにはもう彼女一人しかない。

全てのギルドメンバーは、恐らくだが死亡した。

2198年現在、世界は荒廃し汚染され尽くし、資源は枯渇し、人心は荒み、点在する小さな「アーコロジー／循環型都市」に辛うじて人類が生存しているだけだった。

しかし、それを維持する事ももう出来ない。

この10年間で世界各地のアーコロジー内部やアーコロジー同士で戦争・紛争・各種テロが続発し、次々とその機能を停止し、人々は汚され尽くした大地へと投げ出され、次々と死に絶えていった。

予想されていた人類の絶滅が迫る中、この日本においてもそれは例外ではなかった。

何人ものギルメンを見送った。

リアルで周囲の脅威と戦う者、最後まで職務を全うせんとする者、唐突に音信不通になった者。

そして……死に場所にナザリックを選び、モモンガに看取られた者。

仕事の時間以外はほぼ常にログインしていたモモンガは、幾人ものギルメンの最期を看取った。

最初はブループラネット。

自然環境再生プロジェクトの研究に参加する熱心な自然愛好家の彼は、しかしそれ故に頻繁にアーコロジー外に出る事で体を汚染され、終末医療を拒否し、強い鎮痛剤を服用しながら、最後まで自身が手塩にかけたナザリック第六階層の森と空を見つめ、次第に鎮痛剤の効果すら効かなくなって発作を起こして死んだ。

次にへロへロ。

以前からブラック企業で体を酷使していたのだが、テロが頻発するようになる情報インフラの維持すら危うくなりだしたせいで更に酷使され、半年ぶりのモモンガとの会話の後、眠る様に息を引き取った。

そしてつい先程、ペロロンチーノが逝った。

姉の手伝いをしていた所、自爆テロに遭遇し、姉であるぶくぶく茶釜含む大勢のアニメ・ゲームの製作関係者が死亡・重軽傷を負い、自分ももうダメだからと何とか最後にログインしてきたのだ。

『モモンガさん……ありがと……おれもねえちゃんのところh』

それがペロロンチーノの最後の言葉だった。

「皆、急ぎ過ぎだよお……。」

知らず、涙が零れ落ちていた。

自分ももう直ぐ逝くとはいえ、こう何度も置いて逝かれるのは辛すぎる。

最初は幼い頃に両親に、次にギルメンの皆に。

モモンガは、鈴木悟子は常に見送る側だった。

だが、それは独りぼっちで寂しりがり屋の彼女には酷に過ぎた。

故に彼女は仕事も止め、最近巷に流れている安楽死用の毒薬と最低限度の栄養剤等を購入して、自宅へ引き籠り、もう間も無くサービスを停止するユグドラシルへとログインし続けた。

誰かギルメンが一人でも来てくれるかもしれないと、そう思ったからだ。

その間、ついついゲーマーの習性として捨て値で売り出されたレアアイテム等を購入してしまっただが、それはさておき。

彼女の期待に反して、その間には誰も来なかった。

メールも何も、誰も返信してくる事は無かった。

それはつまり、もうそういう事なのだろう。

「私も、もう少しでそっちに逝くからね……。」

段々重くなってくるリアル肉体を酷使して、何とかキャラを第十階層の玉座の間へと移動させる。

モモンガ、そのキャラは鈴木悟子の分身であり、何より愛着あるキャラだ。

誇りある悪を標榜するアインズ・ウール・ゴウンの首魁たる事を目標として作成されたキャラは、悍ましくも美しい。

通常は骨だけの外見が一般的な「オーバーロード／死の支配者」だが、モモンガは焦げ茶の長髪が特徴な、際立ってこそいないが優し気な女性の容姿をしている。

とは言っても、その顔面の左半分は半ば髪に隠れているがその下は骨と赤い光が灯る暗黒の眼孔があり、右半分の美女の顔もアンデットらしく青白い死人のそれだ。

胸元こそ黒いインナーに包まれ、バストも女性的で柔らかいのだが、その下には肋骨が露出し、丁度谷間の真下、肋骨がない辺りには彼女の切り札たるワールドアイテムである深紅の球体が輝いている。

その彼女が纏うのは漆黒に金の縁取りをされたローブ、巨大な生物の骨に赤い球体が埋め込まれた肩当、床に長く引き摺る紫紺のスカートを穿いていた。

美しさと悍ましき、そして手に持つ黄金のギルド武器による荘厳さが加えられた姿は、ユグドラシルのモチーフとなった北欧神話における冥界の女王ヘルそのものだと言わなければならない。

タブラさんを始め凝り性の面々が全力を尽くした結晶であるモモンガというキャラは、鈴木悟子にとっても誇りであった。

そんな彼女は玉座に到着し、震える身で何とか座ると、閉じようとする思考を何とか保ちながら、NPCの内動させる領域守護者や戦闘メイド達を玉座の間へと集めた。

「さいごまで……かっこつけないと……」

アインズ・ウール・ゴウンのギルド長にして最後のギルドメンバーとして、最後

までそのロールを貫く覚悟だった。

早く早くと終わりが迫る中、ゲーム終了3分前にして、漸く指定したNPC達が勢揃いした。

その事にほっとして胸を撫で下ろす。

「ふう…ふう…『整列せよ』。」

NPC達が綺麗に整列すると、その様子にモモンガは微笑んだ。

ああ、これで準備は整った。

「もう、置いて逝かれないね…。」

これだけのNPCに、ギルメンの皆の形見に見送られて逝くのなら、寂しくない。

「く…：…もうちょっとだけ…。」

本音で言えば、もっと皆で楽しく遊びたかった。

あの日々に時間が止まってしまえばと思った。

でも、それは出来ない。

あの時にいた誰も彼もが自分を置いて逝ってしまった。

それも、皆が原因ではない、どうしようもない流れに巻き込まれて。

「かなしいなあ……さびしいなあ……」

死にかけなのに、涙は未だ枯れる事はない。

そして、最後の瞬間が訪れようとしていた。

「あいんず……うる……ごうんに……」

死が迫る中、朦朧とした意識で悟子は最後の言葉を綴る。

それが彼女に出来る、友人達への最大の弔いだと信じながら。

「えいこう……あれ……」

その瞬間に、「リアル」の鈴木悟子は間違いなく死亡した。

だが、「モモンガ」が最後に見た光景は、玉座から崩れ落ちる自分へと血相を変

えて駆け寄るNPC達の姿だった。

……

「ん……」

ふっと、意識が唐突に戻ってきた。

はて、自室のベットはこんなふかふかかつ滑らかな感触だっただろうか？

「えっと……。」

辺りを見回すと、豪華な調度品の数々、そしてギルドメンバーに個別に与えられる紋章、左半分の髑髏と右半分の美女の顔が印章化されたそれに此処がナザリック地下大墳墓、その第九階層にある自分用のスイートルームである事を悟った。

はて？ ユグドラシルは終わった筈では？ と疑問符を乱舞させながらキョロキョロと周囲を見ていると、不意にがシャーン！ と派手に食器が割れる音が響き渡った。

「あ あ あー！」

そこにはナザリック第九階層付きの41人のメイドの一人がわなわなと震えながらこちらを見ていた。

名前は確か……

「エトワル、だっけ？」

「くあwse drft gyふじこlpーー!!?!?!?!」

エトワルと呼ばれた一般メイドは礼儀作法とか一切合切無視し、文字化できない

叫び声を上げながらドアも閉めずに廊下へと出て行った。

「誰か！誰か！モモンガ様か！モモンガ様がお目覚めになりましたー！ー！ー！ー！」  
随分リアルな末期の夢だなーとほのぼのしているモモンガの元にモモンガの治療＆検査のために組織された医療部隊と仕事ぶん投げてきた守護者達が殺到して仰天する3分前の出来事だった。

## オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その1

ねつ造設定過多につき、皆さん脳内保管よろしく願います。

質問感想随時受付中です。

目が覚めて5分としない内から、目まぐるしく事態は動き続けた。

挨拶もままならぬまま、先ず選抜されたアンデット向け治療部隊が自分を徹底的に検査し、意識もはっきりしているので質疑応答する事で一時間は経過した。

次にそれが終わったのを見計らった様に守護者達が入れ代わり立ち代わりやってきては涙ながらに回復を祝っていく。

漸く落ち着いた頃には丸一日経過していました：（げっそり）。

とは言え、やるべき事があるのに寝てられません。

一応肉が残ってるとは言えこの身は死の支配者／オーバーロードなので、肉体的な疲労も精神的状態異常にも無縁の筈です（やせ我慢）！

と言う事で、玉座の間に移動して移動可能な守護者及び名有りのシモベ達（戦闘その他に役立ちそうな者のみ）を呼び出して指示を出す事にします。

ってーかNPCが動き出すとか何それ怖い（今更感）。

どう考えても何か正体不明の異変が起こってます。

早急な調査が必要です。

最悪、このナザリックそのものが変異している可能性すらあるのですから。

.....

玉座の間、そこに集められた守護者及び名有りの役職持ち達は緊張した面持ちで玉座の前に跪いていた。

そこに座る彼らの主、41人の至高の御方々の最後の一人にして、最も慈悲深きお方。

アインズ・ウール・ゴウンがギルド長、慈悲深き安らかなる死の支配者モモンガ様。

「面を上げなさい。」

その言葉と共に全員が顔を上げ、その尊き御姿を目にする。

「皆、よく集まってくれました。」

昨日までの触れれば消えてしまいそうな儂さは鳴りを潜め、支配者たる荘厳な気配を纏っておられた。

その様子に、先日のお倒れになった場に居合わせたシモベ達はほっと胸を撫で下ろす。

不死身の筈のアンデットであるモモンガ様がお倒れになられた時、その場の全員が血相を変えた。

最速で玉座から倒れる御方を抱き止めたのは、その日初めて宝物殿より呼び出されたパンドラズ・アクターであり、彼の病状を伝える声に急遽医療班を組織して治療に当たったのがデミウルゴスだった。

なお、本来こういう時に真っ先に声を上げねばならない守護者統括のアルベドはわたわたしていた。

ついでにシャルティアとアウラとマーレもわたわたして使い物にならなかった。

が、当時の醜態はシモベ同士でも触れない事になった。

何せ、その時動揺していなかった者も、他の至高の御方々の鎮魂の儀の際には総じて動揺していたからだ。

誰もが泣いた。

特に自身の創造主がもう二度とこのナザリックに来なくなってしまったと悟ってしまった者は酷く嘆き悲しんだ。

亡くなった御方々の中には最後にここナザリックに戻ってくる方々もいた。

へろへろ様やペロロンチーノ様がそうだった。

皆、モモンガ様と最後に話し、息を引き取っていった。

何も出来ない自分達が齒がゆく、無力感に苛まれ、ただただ絶望ばかりが心を満たしていく。

ステータス上では何の問題も無いのに、それでも御方々は確かに弱り切り、死んでいった。

これが御方々の言うリアルでの出来事が関係しているのは明らかなのに、何もできない。

ただ、見て、祈る事しか出来なかった。

他の御方々までは分からないが、死の支配者たるモモンガ様に看取られたならきっと御方々の魂が安らぎを得られるだろうと信じ、祈った。

そして、先日は遂にモモンガ様まで！という事態になったのだ。

幸い、彼女は持ち直したが、あのまま本当に死んで、もとい滅んでしまったのなら、きっとシモベ達の誰もが狂乱し、悲嘆し、絶望と憤怒のままに行動していたかもしれない。

「皆には今日、大切な話をしなければなりません。」

その言葉に、知らず誰かがごくりと唾を飲む音が聞こえる。

その音は或いは自分自身が知らずに発した者かも知れないが、少なくともその場の誰もがそれが分からぬ程に緊張を強いられていた。

「私達が言うリアルに関する事です。」

そして、モモンガは訥々と、頑張って考えた色々脚色したリアルの設定を話し始めた。

曰く、ユグドラシルは、シモベ達が生まれた世界は滅んだ。

曰く、ユグドラシルが滅んだのは規定路線だったが、自分達至高の40人が死去したのは、リアルという世界も滅んだから。

曰く、リアルという世界は元々滅びかけており、それを先送りするためにユグドラシルの様な小さな世界を作り、そこに人々を生活させようという試みだった。曰く、でもその試みは成功せず、その中でも旧型だったユグドラシルは消滅する予定だった。

曰く、そしてリアルの方も予想よりも早く限界を迎え、そこに暮らしている至高の御方々もまた死亡してしまい、生き残ったのは自分ただ一人となってしまった。曰く、現状こそが有り得ない。自分も皆も消滅している筈だった。ならば今自分達がいる世界は今まで観測された事のない全くの異世界である可能性がある。

モモンガが語り終えた時、玉座の間には静寂が広がった。

シモベ達にとって、その言葉はとてつもなく衝撃的であり、自分達が至高の41人以外の者の掌の上にあったのだと、生殺与奪の全てを握られていたのだと告げられるに等しかった。

「質問を、よろしいでしょうか？」

「許します。」

手を挙げたのは、デミウルゴスだった。

「我々が生まれたユグドラシル、それを管理していた者達はウンエイという者達でしようか？」

「ええ、そうです。」

「では、至高の御方々があれ程運営を蛇蝎よりも嫌悪していたのは何故でしょうか？」

「それは彼らが自分達の都合のためにしょっちゅうユグドラシルの法則を変えたり、悪辣な商売をしていたからです。」

「お答え頂きありがとうございます。成程、強欲だったのですね、ウンエイとは。」  
その言葉に、デミウルゴスはその優れた頭脳で多くの事を推理し、納得した。  
要は、自分達も至高の御方々も、ウンエイの家畜だったのだ。

ユグドラシルという名の牧場で、奴らの掌の上で、利益を生み出すための体の良い労働力であり消費者として。

だが、その事を此処で言うつもりはない。

内心の煮え滾る憤怒をそれ以上の意思で以て覆い隠す。

言えば収拾がつかなくなるし、この後に待っている事態を思えば、悪戯に場を乱すのは悪手だと判断したからだ。

「皆にとつては、本当に驚きの連続だと思えます。でも、現在私達に起こってる異変に対処するためには、皆の協力無くしては成功しません。」

故にこそ、死の支配者は玉座から立ち上がり、頭を直角にまで下げた。

「ナ!？」

「モモンガ様!？」

「あ、頭をお上げください！」

「いいえ、こうする必要があります。」

頭を下げたまま、モモンガは続けた。

「私ではもう、貴方達にしてあげられる事は殆どありません。」

曰く、ウンエイによる干渉が消えた今、シモベ達は誰もが自由に生きていける。

曰く、このナザリックはギルド維持費を払わねば消えてしまうが、外に出られるようになったシモベは巻き込まれない可能性が高い。

「41人いたメンバーで最後まで残ったのも、私が少しだけ運が良かっただけ。」  
決して優れている訳ではなかった。

カリスマ性ならたち・みーやウルベルト、死獣天朱雀等の方があった。

プレイヤーとしての強さにおいては、ロマンビルドの自分よりも強い者達はギルメンの中に大勢いた。

自分はただ、皆が楽しく過ごせるように間に入って調整しただけだと、モモンガは自覚していた。

「強さもカリスマも、知識も意志力も、私より凄い人は沢山いました。」  
彼女は平凡だ。

凡庸で、中立で、何処にでもいるOLだ。

「でも、どうかお願いします。」

平和な世界なら誰にも見向きされずに一生を終えていくだけの女性だった。

「どうか、助けてください。」

だが、非凡な者達を纏められるだけのものが確かにあった。

「消したくないんです、このナザリックを。皆がいた証を、思い出を、アインズ・

ウール・ゴウンを。」

彼女は平凡だった。

凡庸で、中立で、何処にでもいるOLだった。

正直者で、自分のための嘘が吐けない。

そして、ある出会いを機に困ってる人がいたら自分も転ぶかもしれないのについてい手を差し伸べてしまうようになっただけの、何処にでもいる人間だった。

「だから、どうか、此処から去らずに、助けてください。」

だからこそ、その言葉は掛け値無しの本音だった。

だからこそ、その言葉は嘗てのギルメン達にも響いた。

置いて逝かれたシモベ達にとって、置いて逝かれた彼女の心からの言葉は、他の誰よりも強く響いた。

「発言をお許してください。」

「許可は必要ありません。今、私と貴方達の間には上下関係はありません。」

「では、どうか頭を上げて、私達を見てくださいませ。」

アルベドの言葉に、おずおずとモモンガは頭を上げた。

すると、そこには自分へと跪くシモベ達の姿があった。

「シモベ達よ。至高の御方へ、忠誠の儀を！」

「第一、第二、第三階層守護者シャルティア・ブラッドフォールン。御身の前に。」

「第五階層守護者コキュートス、御身ノ前ニ。」

「第六階層守護者アウラ・ベラ・フィオーラ、御身の前に。」

「お、同じく第六階層守護者マーレ・ベロ・フィオーレ…お、御身の前に…っ。」

「第七階層守護者デミウルゴス、御身の前に。」

「ナザリック付執事兼家令セバス・チャン、御身の前に。」

「宝物殿領域守護者パンドラズ・アクター、御身の前に！」

「守護者統括アルベド、御身の前に。」

跪き、右手を胸へと当てて。

よく見れば、彼らの目尻に光るものが流れていると気づけるだろう。

シモベ達は歓喜していたのだ。

長い間見送るだけだった自分達が、確かに御方に必要とされているのだと。

同様に、この最後まで残ってくださった御方は決して我らを見捨てないのだと。それを悟ったが故に、彼らの心中には歓喜で満たされた。

「第四階層守護者ガルガンチュア及び第八階層守護者ヴィクティムを除き、各階層守護者並び同格の者。皆、御身の前に平伏し奉る。」

彼らは主もシモベも全てが全て人外であり、異形の者であり、きっと人類は彼らを邪悪な存在だと決めつける事だろう。

「貴方達……。」

「我らシモベ一同、至高の御方への忠誠に曇り無し。どうかご命令を、モモンガ様。」

モモンガはアンデットだ。

故に呼吸も食事も必要なく、負のエネルギーで稼働するだけの、決して揺らがない心の持ち主だ。

だが、どうしてだろう。

今は何故が残った目元が熱くて、思い通りに話す事が出来ない。

「ありがとうっ……皆、ありがとう……！」

ここを去る事も出来た筈だ。

反逆して全てを自分のものにする事も出来た筈だ。

或いは、今まで支配していた者へと反逆する事すら出来た筈だ。

だが、彼らはそれをしない。

その忠義を捨てる事も出来た。

なのに、それをしない。

故にこそ、この光景は尊いのだ。

「貴方様のためならば、如何なるご命令も遂行致しますよう。」

「私達にお任せくださいなまし！」

「コノ身ハ一振りノ剣。御方ノタメノ剣ナレバ。」

「どの様な願いも、我ら一同が果たしてみせましょう。」

「私達だって頑張ります！任せてください！」

「は、はい！僕も頑張ります！」

「どうか、何なりとご命令を。」

「Nein Nein! 皆さーま、その前に先ずすべき事がございます!」

次々とシモベ達が声を上げる中、この中で最も喧しいパンドラズ・アクターがゆったりとモモンガの元へと近づき、軍服の胸ポケットから取り出したハンカチで自身の創造主の目元を優しく拭った。

「先ずは乙女の涙を拭う事こそが肝要ですとも! Ich denke mal me in Meister?」

「ふふ、そうね。ありがとうパンドラズ・アクター。」

ドイツ語できざったらしく言う自分の作ったシモベに、モモンガはこの場で初めて心からの笑みを浮かべた。

「よろしい。では我がシモベ達よ。これよりナザリック存続のため、貴方達に任務を与えます。速やかに取り掛かる様に!」

「「「「「は!かしこまりました!」」」」」」

こうして、ナザリック地下大墳墓は、アインズ・ウール・ゴウンの残党は、新たな世界での第一歩を踏み出したのだった。

「あ、先ずパンドラズは可哀想ですがドイツ語は暫く禁止です。分からない子達もいるのですから、私と二人の時だけにするように。」

「Oh……畏まりました、我が母よ。」

---

》曰く、リアルという世界は元々滅びかけており、それを先送りするためにユグドラシルの様な小さな世界を作り、そこに人々を生活させようという試みだった。この部分は名作映画マトリックスの生体電池扱いされてる人間を思い浮かべてほしいです。

ユグドラシル他電子虚構世界は全てそのための技術から派生したものだ と推測。そうでもなきやあんな終末世界でVRMMORPGとかいう最新技術の塊が公開される訳ない。

だが未完成OR目標レベルに達せず、市民の不満解消と実働データの蓄積のためにゲームとして売り出した、というのがねつ造設定になります。

≫シモベの記憶

勿論、皆他の御方が死んでったのを覚えていきますとも。

# オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その2 一部加筆修正

「では、これより各自に任務を任せます。」

ごくり、と玉座の間に緊張が走る。

この世界に来て初の本格的な御方からの任務に、知らず緊張しているのだ。

「セバス、シズとオーレオールを除いたプレアデス達を率いてナザリックを中心とした周囲1kmを探索。何も無くても1時間程で帰還しなさい。強敵との戦闘になっても必ず一人は離脱させる事。もし現地の知的生命体に遭遇した場合、攻撃されない限りは友好的に対応し、多少の金銭等を使用しても良いからナザリックに連れ帰りなさい。判断に困る案件なら伝言／メッセージで私に直接報告するように。」

「畏まりました。」

「シャルティアとコキュートスは防衛戦の準備を。戦力を集中させ、決して第三階層より下に侵入させないように。それと可能ならば侵入者は捕えるか、最低でも死

体を残すように。」

「任せるでありんす！」

「承リマシタ。」

「パンドラズ・アクターはシズと共にナザリック内の総点検を。異世界に来た事で変質している可能性があるから注意してください。」

「了解しました！」

「アルベド、デミウルゴス。貴方達はナザリック全体の警備・防衛計画の見直しを。最早我らの最盛期は遠く過ぎ去りました。無茶だとは思いますが……可能ならば嘗ての大侵攻に並ぶ襲撃があっても、財貨と戦う力の無いシモベ達逃げ切るだけの時間を稼げるようなものを。」

「畏まりました。」

「お任せを。必ずやご期待に添えてみせましょう。」

「アウラ、マーレ。二人には私のスキルと装備の点検に付き合ってもらいます。後で第六階層の闘技場に行きましょう。」

「はい！ご案内致します！」

「きよ、恐縮です……。」

「よし。皆、3時間したら作業の進捗報告を伝言／メッセージで私に知らせるように。では行動を開始しなさい。私は装備を取ってきます。」

そして、跪いたシモベ達を残して、モモンガは自室へと転移した。

その後、たっぷり一分程の間を置いてから、漸くシモベ達は動き出した。

「はふう……。」

最初に動き出したのはアウラだった。

満足気に息を吐くと、緊張で固まっていた体を解していく。

「んんん！流石はマイマスター！先程の少女の様な儂き御姿とは一転、こうまでのカリスマと強大さをお示しになるとは！やはりやはりやはり！貴女こそ我が最っ高の主人ンン!!」

「ソノ物言イハ些カ不敬ダ。ガ、納得モデキル。」

次に直接作られた事で耐性があるのかパンドラズアクターが、その次にコキユートスが動いた。

「確かに。モモンガ様は運が良かったから最後に残ったと仰せだったが……。」

「じ、実は一番凄かった、とか？」

運も実力の内とは言うが、それなら確かにモモンガの運は凄まじい。

が、それはハードラックと言うか不幸中の幸いという形でしか彼女に幸運を齎す事は今の所無いのだが。

「さて、アルベド。そろそろ我々に指示を出してくれたまえ。」

「そうね……ってシャルティア？ 貴女さっきからどうしたの？」

いい加減動こうという空気になった時、一番騒がしい筈の変態女真祖が静かすぎる事に気づいた。

「ええっと、その……。」

「怒らないから正直に言いなさい。」

如何にも私やかしましたという感じのシャルティアに、何でこんなのが同僚なのかしら……と内心アルベドは遠い目をした。

「さっきのモモンガ様の御威光に触れて、下着がちょおっと不味い事に……。」

「今すぐ自室に行って着替えて仕事始めなさい。モモンガ様を失望させたらどうなるか分かってんでしょねアンタ？ もし御方から任された仕事に不備が出ようも

のなら絶対に報告するから。」

あまりにもあんまりな内容に、アルベドは絶対零度の視線と声音でもって告げた。

「ひうう！す、直ぐに行くからモモンガ様には言わないでええ！」

そう言って、守護者序列一位（その分頭が残念）のシャルティアは涙目で胸パツトがあっちこっち行くのに構わず駆け出した。

「さ、皆もそれぞれの仕事に取り掛かって頂戴。事は一刻を争うわ。」

こうして、シモベ達は動き出した。

.....

その頃のモモンガ様

「あー緊張したー……しかも感極まって泣いちゃうとか恥ずかしい……う……う……あ、このベッド凄いいかふかだ……。」

自室のベッドで寛いでいた。

.....

そして15分後、少々の休憩をしてからギルド武器含む本気の装備を纏ったモモンガは第六階層の闘技場へと来ていた。

「ようこそ御出でくださいましたモモンガ様！」

「い、いらっしやいませ〜……。」

そこに対照的な双子のダークエルフが飼い主を見つけた犬の様にやってきた。

「じゃあ始めましょうか。あ、案山子を用意してもらえますか？最初は第一位階魔法から……。」

こうして、三人はほのぼのと、時にはしやぎながら魔法の確認を行った。

きつとぶくぶく茶釜辺りが見たら「何それ私も混ぜろー！」と突撃する事請け合いの穏やかな光景だった。

とは言え、単なる確認なので、最初の興奮さえ薄れれば後は割と淡々と進む。

モモンガの使用できる第四位階までの魔法を確認し終えると、不意に彼女の脳裏へとセバスからの声が響いた。

『モモンガ様、調査が大よそ終了したため、ご報告申し上げます。』

『セバスか、それでどうでしたか？』

『ナザリックの地表は現在、草原となっております。モンスターや知的生命体、人工物は一切確認できておりません。』

『…と言う事は、周囲から丸見え？』

『はい。現在ナーベラル・ガンマに飛行／フライを使用してもらい、高度を取って俯瞰してもらっていますが、肉眼で確認できる範囲では草原が広がるばかりだと。』  
『分かりました。貴方達は一度戻り、その事をアウラとマーレ以外の階層守護者に伝えなさい。アウラとマーレには私から話して、ナザリックを隠蔽してみましよう。』

『畏まりました。』

『ふう……アウラ、マーレ。ちょっと良いかな？』

『はい！』

「今、セバスから連絡があったのだけど、ナザリックの地表部には草原が広がっていると報告されました。マーレのドルイドとしてのスキルで隠蔽は可能かしら？」

「えっと、出来ますけど……その、土を被せるとか……。」

「はあ!?それだと御方の創造物を土で汚す事になるのよ!」

「ひうん!」

姉からの怒鳴り声に、マールが委縮する。

とは言え、シモベからすれば当然の言葉であるのだが。

「アウラ、今のマールの意見は貴重なのだから怒ってはいけませんよ。」

「ご、ごめんなさい……。」

「マール。周囲は草原という事だから、いっそ複数の丘を作ってナザリックを囲んで周囲から見えなくするのは可能ですか?」

「で、出来ます!」

「そう。なら、出来るだけ自然に、地震か何かで地面が隆起したように見せかけるのは出来る?」

「だ、大丈夫だと思います。」

「宜しい。なら、その上から不可視化や幻影の魔法を重ね掛けすれば急場は凌げるでしょう。マールは早速隠蔽作業に取り掛かって。アウラは配下のモンスター達を

率いて周辺を警戒。魔法の方は人手が足りないなら報告しなさい。追加の人員を送りますから。」

「はい！お任せください！」

こうして、ダークエルフの二人は早速次なる仕事へと向かうのだった。

……………

「さて、道具の確認もしておかないと……。」

アウラとマールを向かわせた後、疲れを感じない身である事を活かして、モモンガはそのまま自室で遠隔視の鏡でナザリック周辺を確認していた。

「微妙に使い方が変化してる……。」

今まではマップを表示、そこから指定した場所をズームしたり、俯瞰から見下ろしていた遠隔視の鏡。

嘗てはギルド間抗争の引き金になる事もあった微妙アイテムであるが、他の知生体を未発見の状態ならば、使い出があった。

「でも、これを使う位ならニグレドに任せの方が良さそう……。」

第五階層の氷結牢獄にいる最高位の情報系魔法詠唱者にして、タブラ・スマラグ  
ディナの創造した三姉妹の長女、即ちアルベドとルベドの姉に当たる。

生きたお化け屋敷の登場人物とも言える特徴を持つ彼女だが、情報系魔法におい  
ては自分すら上回る稀有なシモベだ。

（あの子にもちゃんとした役割があるのだから、やはり専門家に任せるのが良いよ  
ね？）

こうして本作品でも大人の事情で出番を削除される事もなく、ニグレドの登場が  
決定した。

そこまで考えた時、不意にノックが響いた。

「モモンガ様、失礼致します。」

「あら、セバス。戻りましたか。」

そこにはいつもの黒い燕尾服を纏ったナザリック付き執事兼家令のセバスの姿が  
あった。

「それで、何か追加の情報はありますか？」

「いえ、これと言って特には。」

「そう……防衛上は前の毒の沼地の方が良かったのだけど……。」

「そうですね……強いて言えば、景色が綺麗だった事を覚えております。」

「そうなの？」

「ええ、無論、ナザリック内部の方が美しいと思いますが、地平線というものを初めて目にしました。」

「ふふ、では安全確保さえ終われば、一度散歩に出るのも良いかもしれませんね。」

「その時はお供させて頂きます。」

セバスの話にころころと機嫌よく微笑むモモンガ。

それは彼女なりの子供達への愛情表現であった。

ギルメンの皆が残して逝ったシモベ達が目を輝かせて自身の体験を語るのが、幼げな子供が親にその日の武勇伝を語って聞かせようとしてくる様にそっくりだと感じただからだ。

「って、あ。」

「おや。」

機嫌よくセバスの話を聞いていたモモンガだが、その間ずっと遠隔視の鏡を起動していたままだった。

魔力消費が殆どないからこそ忘れていたのだが、そこに映された光景は彼女を不快にするには十分だった。

「セバス、これが何か分かる？」

「国家乃至組織に属する兵士による無辜の民への虐殺行為かと。」

それは虐殺だった。

西洋風の有り触れた田舎の農村、そこにやってきた馬に騎乗する全身鎧の騎士達による一方的な殺戮。

子供を庇い、切られる親。

命乞いをして、切られる男。

悲鳴を上げて、切られる女。

中心部の広場へと騎兵達によって追い立てられていく。

騎士達の足元には多くの屍が重ねられ、その中でもモモンガの目を引いたのは子供を抱き締めたまま、子供ごと殺された母親の姿だった。

「不愉快ね。」

それを見て、人間であった鈴木悟子なら吐いていたかも知れない光景に、モモンガははっきりと機嫌を悪くした。

「……………」

セバスもまた、その内にある善性に過剰に抵触する行為を見て怒りを抱いている。

「セバス、あの騎士達のレベル、どの程度に見えますか？」

「は、大凡3から5といった所でしようか。」

「合法的に恩を売れる相手があり、脅威にもならない程度の敵。敵方の隠し玉も考慮しても、そこまでとは思えない。」

主人の言葉を、忠臣は期待と共にじっと待った。

「恩は売れる時に売るべきね。セバス。」

「は。」

「ユリ・アルファと共にあの村の人々を救助しなさい。ルプスレギナも連れ、負傷者の救助も。但し蘇生は厳に禁止します。兵士達に関しては戦闘能力を奪った上で、殺さずに追い払いなさい。もし貴方達でも厳しいと判断したなら、即座に撤退

を。貴方達の生殺与奪は私にのみあると心得なさい。」

「は。」

「これは現地住民に恩を売るまたとない好機です。決して義憤のためではありません。ん。」

「は。」

「ですが、現地住民との円滑な情報入手のためです。貴方の思うままに振る舞う事を許可します。」

「ありがとうございます、いと慈悲深き御方。」

「私はあくまでナザリックの利益のために動いています。それ以上でも以下でもありません。では行きなさいセバス・チャン。」

「は、では失礼致します。」

そう言って、セバスは足早に部屋を後にした。

セバスを見送ってから、モモンガは直ぐに伝言／メッセージを使用した。

『デミウルゴス、聞こえていますか？』

『これはモモンガ様。私めに如何なる御用でしょうか？』

『そちらの進捗はどう？』

『現状のままでは幾ら防備を固めても時間稼ぎが精々、と言った所でしようか。予備の拠点や専用の設備を用意いたしませんと、流石に大侵攻を足止めしつつ非戦闘員と財産の避難は難しいかと。』

『後で本格的に話し合うべきですね。と、本題に入ります。先程、セバスとユリ、ルプスレギナで先程発見した人間種の村の救援に向かわせました。』

『おや、状況が動きましたか？』

『では、現在分かっている事を伝えます。』

モモンガの告げた内容、それは人間の村で起こった事とセバスを向かわせた事、そして自身が思いついた計画だった。

それを聞いたデミウルゴスは得心した様に声を弾ませながら返答する。

『委細承知いたしました。不肖デミウルゴス、モモンガ様の命により行動を開始します。』

『ええ、任せましたよデミウルゴス。このナザリックでも最高位の頭脳、楽しみにしています。』

『必ずや、御方のご期待に添えてみせましょう。』

『ふふ、楽しみにしています。』

そこで伝言／メッセージを切った。

「さあ、賽は投げられたわよモモンガ。」

茫洋とした視線を天井に向け、モモンガは呟いた。

---

次話から展開が早くなります。

## オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その3

襲撃を受けたカルネ村にて

「まさか幼子まで手にかけるとは…。」

ガキン、と怒りに満ちた呼気をコホォ…と漏らしながら、ユリ・アルファがメイド服には合わない緑の無骨なガントレットを打ち合わせる。

その周囲には既に幾人も騎士達がボコボコにされて倒れていた。

その誰もが顔面を元の形が分からない程に腫れ上がらせているが、しかし全員息がある辺りギリギリ理性が命令を順守しているのが分かる。

とは言え、何かきっかけがあれば完全にプツンしそうではあるが。

プレアデスで唯一と言って良い善性の存在であり、加えて彼女を創造したやまいこはリアルでは教師であり、非常に子供思いな女性だった。

設定されていない部分では創造主によく似るNPC達。

取り分けリアルのやまいこに設定面から心身共に似ているユリ・アルファはそれ

が顕著であり、子供の守護者としての面が色濃い。

やまいこの最後はテロに巻き込まれた子供達を庇つての死亡という位には子供好きであり、そんな彼女によく似たユリは略奪と虐殺を楽しんだこの騎士達に一切の容赦を持たなかった。

「我が主からの命令により、命を取る事こそ致しません。」

ギシリ、と拳が握り締められ、怯え竦む騎士達へと向けられる。

「だが、子供達が受けた恐怖と苦痛を僅かでも味わって後悔なさい。」

こうして、カルネ村の襲撃はメイド服を着た鬼子母神の化身によってあつと言う間に鎮圧され、追い出される事となった。

「……私の出番は殆どありませんでしたな。」

なお、この救援の発端となったセバスは、村人達が人質になる様な事態を防ぐのを除けば、後は殆どユリが命令違反をしないように気を付けるだけで終わってしまった。

.....

「あちやー、ユリ姉え完全にキレちゃってるっすねー。」

その頃、回復役として同行していたルプスレギナは負傷した村人達を治療していた。

「はい、動ける人は一か所に集まってっすー。《魔法効果範囲拡大化》かーらの《軽傷治癒》！」

一か所に集まった村人達の傷があっと言う間に癒えていく。

信仰形魔法詠唱者である彼女にとって、この程度は造作もない。

「あ、ありがとうございます！」

「良いつて事っすよー。」

「で、でも、私達じゃお礼も何も…。」

「いーんですって。あたしらのご主人様がお慈悲で助けなさいっておっしゃったんだから儲け物と感謝してくれりゃ良いんっすよ！ま、対価は後で些細なものを請

求なさるでしょ。」

「そ、それではどうかよろしくお願いします…。」

生き残った村人達はほっと胸を撫で下ろして些細な傷の者でも治療を受けた。

(ま、これもナザリックの将来のため。いやー私ってば働き者だなーっと。)

本当なら彼らを少しだけ治療して、じつくりと死に行く様を観察したいのだが、御方からのご命令では仕方ない。

目の前の少女が徐々に近づいてくる死の気配に、一体どんな風に変えてくれるのか非常に興味があったのだが、今は自分の趣味を優先してよい時ではない。

「さーて、後はデミウルゴス様のお仕事に期待っすねー。」

……………

「ひい…ひい…！」

「くそ、やっぱこんな任務なんて…！」

「馬鹿野郎！喋ってないで逃げるんだよ！」

20人程のバハルス帝国の鎧一式を纏った、スレイン法国の騎士達。

大義のため、国家間の思惑のために無辜の民を虐殺した彼らだが、最後に襲撃したカルネ村からは全員が何とか逃げ出していた。

「離脱してニグン殿に報告せねば……！あの執事とメイド達は化け物だ……！」

スレイン法国の特殊部隊、六色聖典でもなければとてもではないが対抗できない。実際はあの三人だけで漆黒聖典最強の番外席次が出張らない限りどうにもならないのだが、それはさて置き。

そんな彼らを背後から静かに追跡する存在があった。

「……………」

それは忍装束を着た黒い蜘蛛のような八本脚のモンスター。

不可視化の能力で知られる八枝刀の暗殺蟲／エイトエッジ・アサシンド。

Lv49とデスナイトよりも強力であり、取り分け八本の刃を用いた8連続攻撃および首狩りによる即死攻撃が可能である。

前述した様に高い不可視化の能力を持ち、シーフとしての技能も有する。

ナザリック内ではコキュートスの指揮下で15体存在する。

不可視化や気配遮断等のスキルを持っているシーフ系のシモベの中では強い方に分類される。

『デミウルゴス様、こちらは予定通りです。』

『ありがとうございます。ではこちらも手筈通りに進めます。そちらもくれぐれも注意してくれたまえ。』

密かに携帯していた伝言／メッセージのスクロールで現在の指揮官であるデミウルゴスと連絡を取る。

本来なら第五階層でコキュートスの指揮下にいるのだが、今現在コキュートスは一部のシモベ達と共に第一から第三階層に一時的に移動しており、その中に選ばれなかった彼らはこうしてモモンガの命令の下、デミウルゴスの指揮下に入って隠密作戦に従事していたのだ。

彼は必死に逃げようとしやにむに走る騎士達を追う。

その先にいるであろう別動隊の存在を確認するために。

「では、こちらを始めよう。」

一方同じ頃、デミウルゴスもまた動き出した。

配下の悪魔達に命じて、先程わざと逃がした3人以外の騎士達、それらを生け捕りにするために。

「折角現地住民が我々の前に大きな隙を見せてくれたんだ。突いてあげなきゃ彼らに失礼だろう?」

ナザリックきつての邪知狡猾なる最上位悪魔が、初めてこの世界の人間へと牙を剥いた。

「ああくれぐれも死なせないように。彼らには情報を吐いてもらってからも、暫くは引っ張りだこなんだからね。」

その顔は嗜虐の愉悦、そして御方の命令に従う歓喜に満ちていた。

その後、件の騎士達は拷問官ニューロニスト・ペインキルへと引き渡されて脳を啜られ情報を絞り取られ、その上で蘇生魔法で生き返った所を改めて情報を支配／ドミネートの魔法で操り記録を取り、一部は拷問の練習台となった。

その後もデミウルゴスにより数多の人体実験へと参加させられ、幾度も幾度も繰り返し蘇生や治癒、復活を繰り返した。

そして、完全に精神が擦り切れ、本当にもうどうしようもなくなって初めて恐怖公の眷属の餌と餓食狐蟲王の苗床となるのだった。

.....

「順調ですね。」

「これもモモンガ様の御蔭かと。」

カルネ村の様子、人々に感謝されるセバスとユリ、ルプスレギナの姿を見て、モモンガは満足気に頷いた。

「セバスにはこの周辺の地理情報を優先して得るように命じています。」

「そして都市部の様より多数の人口のある場所を発見し、より多くの情報を確保する。流石はモモンガ様です。」

モモンガの言葉に、デミウルゴスとの会議が一旦中止となったために傍に控えているアルベドが賛辞を捧げる。

「とは言え、まだまだ手探りの状態です。大胆になるのはまだ先だと思っていまし

た。」

「まさか人間同士でああも愚かに争っているとは……本当に救いようのない連中です。」

「念のため、情報系魔法への対策は入念に行いましたし、現在もニグレドに警戒してもらっています。」

「まだ足りないか？」

「幸いと言うべきか、この世界でも私達の魔法もアイテムも使用可能です。一部は変質していますが……少なくとも、今すぐ問題は出ないでしょう。問題なのは、この世界固有の技術やスキル、法則の類です。それが分からない内は目立つのは可能な限り控えるべきでしょう。」

モモンガの言葉、それは元々警戒心が強く、慎重過ぎるくらいのある彼女からすれば当然のものだった。

リアルでは幼い頃に両親を亡くし、親戚縁者もおらず（居たとしても引き取ってはくれないだろうが）、一人孤独に生きてきた。

しかもそれなりに整ってはいるが年齢よりも幼げな容姿に大き目の胸部装甲と小

さな背は彼女に多くの身の危険を齎した。

結果、彼女は生き残るために必要に駆られてそうするようになった。

その警戒し過ぎる様子はギルメン達に「石橋を叩いて渡る所か叩き過ぎて壊した上に新しい橋を作り終わってから飛行／フライで飛んで川を渡る」と言わしめ、同時に「警戒心の強い小動物系ギルドマスター」としてギルメン達をほっこりさせる事となった。

それはさておき。

『モモンガ様、村へと接近してくる一団があります。更にそれを追う様にもう一団が。』

そこにニグレドからの伝言／メッセージがモモンガに届く。

『そう、ステータス等は見れる？』

『最初の一団と二つ目の一団では装備がどちらも別々のもので統一されております。最初の方の指揮官と思われる戦士の男性はLv30程で、後方の指揮官と思われる魔法詠唱者の男性は20程でしょうか。後は全員3から10と言った所です。』

『随分とLvが低い様だけど……要は国家間ないし組織間での抗争が原因で、目的

は最初の一団の殲滅かしら？」

その内容で、モモンガは凡その事を把握できた。

しかし、態々LV30程度を暗殺するのにここまで手間暇をかけるものだろうか？

やはり未だ何か決定的な情報が不足しているという事だろうか？

こちらで確認できるレベル以外の、何か重要な要素が存在する可能性。

流石にそういった完全に未知のものへと未だ情報不足のナザリックで対応できるかは微妙な所だ。

『御苦労様。そのまま監視と情報対策を続けてください。何か変化があれば報告を。』

『勿体なきお言葉でございます。このニグレド、全力を尽くします。』

『期待していますよ。』

そこまで言っていて伝言を切る。

「恐らく、あの村の襲撃は囿でしょう。この国の正規軍らしきものを引き寄せるための。そして、最初の接近中の一団が狙い。」

「どうやら当たりの様です。二つ目の一団が村の外で布陣を広げ始めました。」  
遠隔視の鏡からの映像で、二人は二つの団体がそれぞれの様な行動を取っているかを上空から俯瞰する様に見つめていた。

「さて、セバスはどう対応してみせるのかしら？」

そして、興味津々とその視点をセバス（十村長）と最初の一団の方へと切り替えた。

.....

「大変申し訳ないが……セバス殿、どうか協力して頂けないだろうか？」

「申し訳ありません。無辜の民草を守るためなら自衛と言い訳も出来ませんが、これ以上は難しいかと。」

「そうか。いや、すまないな、他国人である貴方を巻き込む訳にもいかないな。」  
試しに言ってみたガゼフだが、予想通り断られてしまった。

国同士のいざこざ、それも既に戦闘が勃発している所に第三国が介入する。

それは当然ながら、戦争へと発展しかねない火種に成り得る。

「とは言え、降り掛かる火の粉への対処は自衛の範囲でしょう。どうかこの村の事はお任せを。」

「おお！感謝するー！」

「お礼は何れ我が主に。我が主の許可なくば、私もこうは動けませんでした。」

「そうだな。何れ機会があればその時はお礼を申し上げさせてもらおう。」

そこまで言ってガゼフは馬へと乗り、村の外へと出て行こうとする。

「どうか、ご武運を。」

「ああ、セバス殿の主殿にお礼申し上げるまでは頑張らせてもらおう！」

こうして、ガゼフとその部下達は死地へと分かっているながら出発した。

『よく耐えましたね、セバス。』

『いえ…。』

その一方、セバスはモモンガからの伝言／メッセージを受け取っていた。

『周囲の情勢が不透明の今、余り干渉したくありません。』

その点はセバスも分かっていた。

分かってはいるし、決して最後の一人たる御方の命令に背く事もないが、それでも彼の中のたっち・みーから受け継いだ正義を愛する心が軋みを上げるのだ。

お前は見ているだけなのか、と。

『現地住民からの情報収集をスムーズに行うために村を救いました。そして今現在、私達の前には非正規部隊という多くの情報を持つだろう者達が現れました。』

おや、とセバスは思う。

その言葉通りなら、この後…

『村の外の事に関しては、こちらで対応します。セバスは村人達からより多くの情報を収集し、今後のためにも彼らの慰撫に努めなさい。』

『畏まりました、最も慈悲深き御方様。』

その後、セバス達は外から轉移させられたガゼフとその部下達の治療に加えて、村人の慰撫のために二日程カルネ村へと滞在する事となった。

………

「御機嫌よう、皆さん。」

ガゼフ達が消え、陽光聖典の面々が戸惑う中、ソレらは現れた。

赤い鎧と奇妙な槍を持った少女、青い水晶の様な巨軀に鎧の様な外骨格と4本の刀剣と槍で武装した昆虫人。

「ひっ」

しかし、ニグン達が恐怖したのはその二体ではない。

その二体を左右に引き連れた黒い豪華なローブの者にこそ恐怖を抱いたのだ。

「貴方達、どうやら私の部下達が助けた村をまた焼き払うと言ったそうですね。」  
言った、確かに言った。

そしてガゼフに止めを刺そうという時に、この存在がやってきたのだ。

「二人とも、可能な限り手加減して生きてまますま制圧しなさい。」

「御意ノママニ。」

「お任せくださいませ！」

そうして、蹂躪が始まった。

この後、陽光聖典の面々は全員捕えられ、ナザリックで手ぐすね引いて待っていたニューロニストの元へと招待される事となる。

とは言え、モモンガは先の騎士達が最初の情報源だったから丁寧に情報を搾り取ったのとは異なり、レベルもあつて装備も整った陽光聖典の面々に対して何らかの処置がなされている可能性を考え、慎重かつ確実に全ての情報を搾り取る事をニューロニストに命じた。

最初の一人、最も新任の隊員は拷問によりあらゆる情報を絞られかけたが、彼ら全員にかかっていた口封じの魔法により最初の三つの質問に答えた時にその頭が爆ぜた。

それからは陽光聖典の隊員達は順番に脳を吸われ、蘇生された後に支配／ドミネートで洗い浚いの情報を書面に書き出し、後の使い道を考えられて偽死／フォックススリープによって仮死状態とされた。

また、その装備等は分析に回され、彼らの使う魔法・アイテム・装備の多くが何かしらユグドラシルと共通するものがある事が判明した。

「興味深いですね。これはつまり、この世界には我々以外に先にやってきた者達が

いるという事です。」

騎士達と陽光聖典から搾り取った一連の情報に対し、モモンガはそう結論した。

「どういたしますか？」

「六大神となら話し合いたいと思いますが、八欲王と言う異形種狩りの連中は論外です。」

「では…。」

「今後、必要な事は4つあります。この世界全てに対する情報収集。ナザリックの強化。魔法・アイテム類の再検証。そして外貨や資源の獲得です。」

アルベド、デミウルゴス、パンドラス・アクターというナザリック内の三賢者とも言うべき者達の前で、モモンガは告げた。

「情報収集はデミウルゴス。ナザリックの強化はアルベド。再検証はパンドラス・アクターにそれぞれ任せます。」

「「「畏まりました。」」」

恭しく跪く三人に、モモンガはうんうんと満足気に頷く。

「デミウルゴスは隠密活動を得意とするシモベを率いてこの世界の全てに関して

情報収集を。特にこの世界へとやってきたプレイヤー関係と使い捨ての下位のスクロールの材料、データクリスタルの代替品の三つを最優先に。また、確保した資材が生産可能なものであれば私に報告した後、生産に取り掛かりなさい。」

「お任せください。」

「アルベドはナザリックに残っているNPC達へ追加できるレベルの分配や新たなシモベの配置等を考えなさい。但し新しいシモベに関しては外で動く者達から要望があれば優先して叶えるように。」

「承りました。」

「パンドラズ・アクターは先程言った通りです。他のギルメンの姿を取れる貴方なら最適と判断しました。……ごめんなさいね、折角外に出してあげようと思ったんだけど、この仕事は貴方が最適ですから。」

「Oh My Goddess！どうかそんな悲しそうな顔を為さらないでください！私本来の役目に戻るだけの事。一体何の問題がありませんようや。どうか吉報をお待ち下さいませ。」

「…ありがとうございます。」

ふう、と必要のない呼気を吐き出し、モモンガは話を続ける。

「外貨と資源の獲得ですが……こちらはデミウルゴスが一段落したら商会を開いてもらいましょう。その上で、セバスとユリ、ルプスレギナの三人にはこのまま近場の都市であるエ・ランテルに行つて冒険者として登録してもらいましょう。」

「冒険者、でございますか？」

疑問符を出すアルベドに、モモンガは説明する。

「ほぼ間違いなく他のプレイヤーがいるのです。ならば、目立つ匁を用意しておくべきでしょう。それにあの三人が冒険者となり、善行を重ね、人々からの信頼を勝ち取れば、それだけ多くの情報と報酬を獲得できるでしょう。」

「成程、一石三鳥でございますか。」

「そしてデミウルゴス。貴方の作る予定の商会は王国及び周辺国の経済を掌握して下さい。」

今現在までの調査で分かった事の一つだが、文明レベルは中世相当であり、それにユグドラシル産の魔法とタレントと言われる特殊能力があるだけなのが一般的らしい。

実際、先程捕獲したニグンなる陽光聖典の隊長は「召喚したモンスターの能力を微増する」というタレント持ちだった。

無論、例外としてプレイヤー及びその支援を受けた存在が考えられるが、それはさて置き。

経済レベルも中世程度だとすると、貨幣の類は村で確認された金・銀・銅がメインであり、その管理は国家が行っていると思われる。

すると、これら三種の貴金属が一定以上の量が市場に出回るだけで市場が崩壊する恐れがある。

また、税の徴収に関しても基本麦で行われるらしく、相場よりも安価かつ大量の麦が出回れば、それだけでこの国の税収はガタガタになる。

加えて、ユグドラシル金貨とは異なり、この世界の貨幣には偽造防止の魔法が使われていない。

つまり、ナザリック級の生産能力を持った勢力がその気になれば幾らでも市場操作・崩壊させる事が可能なのだ。

そうなのはどんな国家だろうとまともな軍事活動を行えない。

「現地住民の中にも脅威となる者、利益となる者はいるでしょう。そうした者達を効率よく排除・勧誘するためにも人間社会の中で確固たる立場が必要です。冒険者としてのセバスらの後援者となり、その支援をすれば…。」

「相乗的に名声を上げる事も出来ると。成程、素晴らしいですね。」

「商品に関してはナザリック内で置き場所に困っている使い道の無いコモンアイテムを売りに出しましょう。私達からすればガラクタですが、この世界の一般的な人間からすれば、とても貴重なものとなるでしょう。」

「委細承知致しました。周辺国の情報収集がある程度纏まり次第、取り掛かせて頂きます。」

こうして、ナザリックによるこの世界の人類社会への進出は開始された。

「ああ、そう言えば忘れていましたね。」

部屋を去る前、モモンガは最後に付け足した。

「私の目的はあくまでナザリック地下大墳墓、そこで暮らす私とシモベ達の安寧こそが最優先です。それ以外は一切が些事。この世界の生物を一つ一つ統治するような面倒な事はするつもりはありません。」

その言葉に、密かに世界征服して御方に捧げるのも有りか、と考えていたデミウルゴスとアルベドは内心の考えを捨て、パンドラズ・アクターはその二人の僅かな動揺を敏感に感じ取った。

「さっきの商会が成功すれば、そんな事をせずとも利益は十分でしょう。見込みのある個人をこちらからスカウトするなら兎も角、傘下に入りたいと言われても困ります。精々が絶滅しない程度に代価と引き換えに多少の助力をするだけにしなさい。」

「『全て御方の望み通りに。』」

こうして、ナザリック地下大墳墓の方針は決定した。

こっから思いっきり加速。

基本、このTSモモンガさんは外に出ません。

外の危険性を分かっているので、全力の隠蔽とかかけてモモンガではなく人間の一人人として護衛付きで漸く外に行きます。

また、自分は既に死んでいる者であり、影響も大きいため、必要以上に生者に関わるべきじゃないとしています。

原作モモンガさんは未知を求めて楽しんでましたが、TSモモンガさんはギルメ  
ンという自分よりも大事な人達の死によってその辺の遊びが殆ど消えてるのが最大  
の差異ですね。

なお、生身の外見は童顔で巨という程ではないが立派な胸部装甲、茶のショートカット。

オーバーロードとしての姿も撫で方なので肩当がほぼ垂直に近く、肩幅も背丈も小さくなって、ローブを引き摺らない様に地面から僅かに浮いている設定です。

第一話で言ってる様に、オーバーロード時も完全な骸骨ではなく、胸部装甲と右顔面、そして長髪が残ってますので、嗅覚・味覚は生きてます（胃が無いので飲み食いしたら下に落ちますが）

## オーバーロード二次 TSモモンガが逝く その4

モモンガが方針を決めた後、先ず行った事は初日に玉座の間へと集めた7人へとリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを配る事だった。

当初、シモベ達はこれに大いに恐縮したものの、モモンガの「これから先、必ず必要になるから」、「死蔵させるのも哀れだから、貴方達に使ってほしい」という鶴の一声によりおずおずと受け取った。

とは言え、必要なのはナザリック内だけなので、外出する時はアルベドかモモンガ、両者がいない時は他の名有りのシモベへと預ける事となっている。

また、モモンガは15個の中で比較的重要度の低いワールドアイテムを外に出て作業する名有りのシモベ達全員へ持たせる事を決めた。

これには流石のシモベ達も大いに反対したものの、「プレイヤー又はその遺産が存在するのなら、確実にワールドアイテムも存在する。その対策のためには絶対に必要な措置です」と断固として譲らなかつた。

常でない御方の強い声と正しいと思える理屈に、シモベ達も内心で大変恐縮しな

がら頷いた。

それに対し、外出予定のシモベ一同は「何があろうと必ずやナザリックへ帰還し、御方にこの至上の宝物をお返しします」と誓った。

が、これはモモンガの「ナザリック内の至上の宝物とは貴方達の事です。必ずや元気な姿で私の元に帰ってくるように」という言葉により涙腺崩壊して暫く使い物にならなくなってしまったが。

これによりその士気を大いに高めたシモベ達は改めて御方への忠誠を誓うと共に、自身の全身全霊をもってモモンガ様のお役に立つ事を己に誓った。

その士気に相応しく、シモベ達の仕事は素早く、的確で、卒がなかった。

先ず、デミウルゴスがシャドウデーモンを中心とした多数の情報収集用の諜報部隊を組織し、近場の大都市であるエ・ランテルで大まかな地理情報を取得後、各地へと分散、その地から伝言のスクロールを活用して多くの情報を集め、精選し、確度を高めた状態でモモンガへと受け渡した。

同時並行でこの世界にあるユグドラシルにはない多くの資源、それこそ現地住民すら見向きもしない雑草の類すら一つ一つ丁寧に採取・調査・記録し、凶鑑を作る

勢いでそれらを積み上げていった。

第二にセバスとユリ、ルプスレギナは近場の都市であるエ・ランテルにて冒険者として登録、順当に仕事をこなしていった。

が、ここで問題が起きた。

この三人の内、特にセバスとユリはナザリック内でも極めて珍しい善性の存在なので、モモンガより「名声を高めるために、貴方達の良心の赴くままに行動しなさい」という破格の裁量を与えられている。

なお、ルプスレギナは「何か見つけたら必ずユリと小まめに相談しなさい。バカな事したら黒棺Ⅱ恐怖公とその眷属の住処に引っ越しさせます」という情け容赦ない言葉により、迂闊な行動は厳に慎むようになった。

で、前者二人はその良心のままに行動した結果…

エ・ランテル内の悪徳商人や腐敗貴族を秘密裏に始末しようとしていた。

これにはモモンガも驚いた。

そして、デミウルゴスからの報告により王国内の屋台骨ところか基礎すらヤバイ腐敗ぶりに目を剥いた。

だがまあ、不愉快な連中が消え、裏社会がすっかりすれば、そこにデミウルゴスの商會が滑り込む事も出来る。

そこでナザリック内で暇をしていたシャルティアを運送係に任命し、転移門／＼ゲートを利用して捕獲した悪人・罪人とその部下達をナザリックに連れ去り、人体実験コースへと送る。

この際、そいつらが持っていた資産及び各種資料（顧客・商品リスト等）は全部略奪し、将来の商會設立のための軍資金とする予定だ。

こうしてセバスとユリ、ルプスレギナの三人は昼は実力・人格・品格の三拍子揃った期待のルーキーとして仕事をし、夜にはエ・ランテルの悪党共にとっての死神として活躍するのだった。

第三にアウラとマールはナザリックの隠蔽工作終了後、トブの大森林内でナザリック二号店の建設に取り掛かった。

こちらは最悪の場合が起きてナザリックを放棄してしまった際の第二の拠点として使用する予定だ。

とは言え、食料やポーション類の多くはナザリック内で完全に自給できるが、こ

の世界で入手できる資材とナザリック内のアイテムや資材を用いても、ナザリックと同等の設備を備える事は不可能だ。

そのため、このナザリック二号店を叩き台に、将来的にはもっと発展した拠点を作成する予定だ。

また、こちらも暇をしていたシズ・デルタとエントマ・ヴァシリッサ・ゼータらを手伝いに出している。

シズはナザリック内の全ギミックを知っているため、本来なら外に出す事は無いのだが、先日のニグンらにかかっていた機密保持の魔法をパンドラス・アクターと最古図書館の司書らと共に解析、発展させた機密保持の魔法をかける事で解決とした。

その効果は本人が拒否する中、無理矢理情報を吸い出されかけていると判断した場合に発動、本人を中心に爆発が起きるといったものだ。

その威力は本人のその時のHPの10倍という破格のもので、将来的に最下位のシモベに自爆・特攻魔法として施し、捨て駒として使用する事を目的に研究する事が決定された程だ。

モモンガにより「このテープは自動的に消滅する魔法」と命名されかけたが、パンドラズ・アクターから長過ぎるからとダメ出しされ、結局「スパイのお友／スパイズフレンド」とされた。

微妙なブラックジョークに、後で本人が身悶えする事になるだろうが、それはさて置き。

こうして外に出たシズはその知識を活かしてナザリック二号店の建物の建築全般を担当し、エントマはその内部に使用する魔法トラップの敷設、アウラとマーレは第六階層の獣系モンスターとゴーレム達を率いてナザリック二号店予定地の伐採や整地、周辺へのトラップの敷設や警戒網の設置等、多くの仕事を堅実にこなしていくのだった。

.....

「どうしよう……。」

第9階層の中にある執務室、そこでモモンガは頭を抱えていた。

「ぜんぜんわかんない…。」

原因はデミウルゴスから上げられた大量の情報が記載された書類だった。

それは極めて多岐に渡り、この世界に存在するあらゆる現象や物品、動植物を纏めたものであり、読み解いて適切な判断を下すためにはどう考えてもモモンガ一人では知恵も手も時間も足りなかった。

「うう、一介のOLには荷が重いよう…。」

彼女は小卒であり、その後は企業の走狗としてOLとして生きてきた。

給料の過半をユグドラシルに突っ込み、リアルでは死んでないだけで生きる意欲の少ない、それでも任された仕事だけは精一杯やろうと頑張る可愛い童顔系OL（意外とある方）だった。

セクハラ回避方法や上司からのパワハラ、悪質な客からのクレーム対処に資料整理にお茶くみ等は出来ても、専門分野外に関してはさっぱりだった。

「だめ、諦めちゃだめだよ私。よし、ここは最古図書館の司書達に重要度と分野別に分けてもらって、そこから必要な指示を出してみよう。」

現状、事務仕事が出来る者が限られているため、そういった業務に慣れている司

書達にやらせるのは理に適っていた。

先日の機密保持魔法の解析と改良においても彼らは実によくやってくれた。

同じオーバーロードでデミウルゴス程の頭脳ではないとは言え、通常通り蔵書の管理だけをさせるには余りにも惜しい人材だった。

「でも、全員連れてくるのはダメだよねぇ。」

彼らの蔵書の主な貸し出し相手は同じシモベ達だ。

モモンガは今まで365日年中無休だったシモベ達に「七日に一日は休暇を与え、月一で給与を与える」と新たなルールを設定した。

これに対し、シモベ達は困惑したものの、続くモモンガの言葉で掌を返した。

「給与を貯めて、ギルメンの皆の思い出のプロマイドとか買ってみたいくない？その後はそれを眺めたり自慢したりしてもよし。何なら最古図書館でタブラさんやペロンチーノ、やまいこさんやブルーさんが仕入れてきた本を読むのも楽しいよ。」

プロマイドは以前入手したカメラ機能を持った水晶やアイテムから現像したもので、蔵書に関しては著作権切れしたものをギルメン達が何十万冊と仕入れているので飽きが来ない。

中にはアニメや映画の原作となった小説に漫画等もあり、文字が苦手なシモベでも大丈夫だ。

もう掌にモーターでも仕込んでるんじゃないかってシモベ達の掌は高速回転しまくった。

特に41枚の個別ブロマイド、複数人のギルメンが写った題名付きブロマイド等の売れ行きは凄まじかった。

何かこう、往年の遊戯王カードを買い漁る小学生を彷彿とさせる光景だった。

こうして古代図書館もナザリック常駐組の重要な娯楽施設として機能しており、司書達に他の業務を任せるという事はそれだけ本業を圧迫する事となるのだった。

「うぐぐ……やっぱりパンドラにもこっちを手伝ってもらった方が良いよね…。」

司書達の過半数とパンドラス・アクターを加え、漸くモモンガというナザリックの最高指導者は仕事をこなせるようになるのだった。

『モモンガ様、お忙しい所を申訳ありません。』

『あらセバス。何か問題が発生したの？』

そこに突然エ・ランテルにいる筈のセバスから伝言／メッセージが届いた。

『実はこちらで元漆黒聖典の第九席次とズーラーノーンなる秘密結社の幹部を捕らえました。』

その内容に、瞬時にモモンガの中のスイッチが鈴木悟子からモモンガへと切り替わった。

『捕獲したのは二人だけ？今その二人の状態は？』

『彼らの部下達に関してはエ・ランテルの墓地で大規模なアンデッド召喚を行おうとしていたので鎮圧しました。幹部二人は利用価値がある可能性が高いと判断しましたので制圧し、睡眠／スリープをかけた上で拘束しています。またこの世界基準では強力なアイテムを二つ保持していました。』

『よろしい。シャルティアを向かわせますので、その二人とアイテムは彼女に渡して貴方達は事態の沈静化と通常任務に移りなさい。』

『畏まりました。』

こうして、ナザリックに新たな情報源と人的資源が追加されたのだった。

.....

クレマンティーヌは心底恐怖していた。

家族に虐げられ、兄とは比較され続け、任される仕事も汚れ仕事ばかり。

自分の中の加虐性と殺人嗜好に折り合いを付けられず、ただただ鬱憤ばかりが募る日々だった。

そんな法国での暮らしに愛想が尽きて、適当に警備を担当していた闇の巫女姫から法国の秘宝の一つである「叡者の額冠」を強奪し、以前から繋がりがあったズーラーノーンを隠れ蓑に法国の目の届かぬアー克兰ド評議国までスケリトルドラゴンを用いて逃亡する予定だった。

「ご機嫌よう。よく眠れたかしら？」

そこは玉座だった。

豪華絢爛の限りを尽くした、法国の神殿や帝国の宮城でも足元にも及ばない様な、正に王者のための玉座の間だった。

「人間風情が、モモンガ様のお言葉を無視するなど……！」

「ヒッ」

殺気立つ黒いドレス姿の少女、その牙と肌の色から吸血鬼と思われる少女が低い声で怒りを露わにする。

それにクレマンティーヌは怯える事しか出来ない。

玉座に座るエルダーリッチと思われる女王に吸血鬼の少女、そして無言を貫く水晶か氷の様な蟲人の戦士。

それらを見た時、クレマンティーヌは自身の生存を諦めた。

自身もまた優れた戦士だからこそ直感的に理解できたのだ。

この場の異形達の誰もが自分とは隔絶した実力者、漆黒聖典隊長やともすれば番外席次にすら匹敵或いは凌駕すると悟ったのだ。

「貴方達の情報は既に搾り取らせてもらったわ。元漆黒聖典第九席次、疾風走破のクレマンティーヌ。そちらはズーラーノーンの十二高弟のカジットだったかしら？」

そこで初めてクレマンティーヌは横を見た。

玉座の前に転がっていた自分の隣、そこには一緒にいたカジットの姿があった。「貴方達の脳から搾り取った情報はとても有意義でした。それこそお礼を言いたく

なる位には。」

「貴方達の脳、とくくくても美味しかったわん。」

そして、背後からの声に後ろを振り向くとゾツとした。

直立する巨大な白いタコにも似た醜悪な生物がぐくねくねとしながら自分達の脳を食べた感想を言っているのだ。

きつと如何なる狂人でもこんなものと出くわしたら自分の様に身も心も凍り付くだろう。

「おお、お礼って言うなら助けてくれませんかねえ？」

声が震えているのは分かったが、それでも今何か言わねば殺される。

蘇生も何も期待できないが…否、こいつらにここで死んでも食われたり扱き使われるよりは死んだ方がマシだとクレマンティーヌは思った。

「良いわよ。但し、貴方には現地ガイドとして役に立ってもらいます。」

「いっくらでもお任せください！」

だが、思ったよりも好感触な答えに内心でガッツポーズを取った。

よし、これで一先ず命の保証はされたな、と安心したのだ。

「さて、カジット。貴方はどうしますか？」

「わ、ワシは……」

黒いローブに身を包んだ死体の様な男は、大いに迷った末に口を開いた。

「母に、会いたいです。」

「しかし、レベル1の普通の人間、それも何十年も前に死んだ人間相手にそれは難しい。」

「はい。それが出来る魔法を開発するために、先ずは高位のアンデッドになろうと致しました。」

カジットは悟っていた。

この方は己の願いを叶える力を持っていると。

「うーん、直ぐにできそうなのは……死者からの手紙／レターオブデッド！」  
モモンガの声に応じ、中空から手紙が降ってきた。

これはユグドラシル内のイベント用魔法であり、元はNPCの少年の亡くなった祖母の遺言を伝えるために使用された。

イベントさえ終わってしまえば無用の長物なのだが、モモンガが死の支配者ロー

ルのために敢えて残っていた魔法の一つだった。

「おおお おおお おおお …！」

手紙を受け取り、急ぎ開封したカジットの目の前に母親の姿が浮かび上がり、母親の声で手紙の内容が朗読されていく。

それは母が子を思う、当たり前前の言葉だった。

どうか自分の事は忘れて、平穏な幸せを掴んで、幸せになってほしいという在り来りの言葉。

だが、それでカジットには十分だった。

「ワシは、ワシは今まで何という事を……！」

知らぬ間に一度死に、死の宝珠からの洗脳が解かれたカジットは元の極普通の人間へと戻っていたのだ。

「まあ貴方には情状酌量の余地があります。このナザリックに尽くし、より多くの人に役立つ魔法を開発なさい。それが貴方に出来る善行です。」

「ははあ！このカジット、全力を尽くします！」

こうして、現地基準で優秀な死霊系魔法詠唱者をゲットしたのだった。

「ナーベラル・ガンマ。カジットを司書達の所へ。そこで彼らと共に研究してもらいましょう。」

「は、畏まりました。下等生物、私に付いてきなさい。」

「はは！」

こうしてカジットは退場したが、その背をクレマンティーヌは羨ましそうに見ていた。

「さてクレマンティーヌ。貴方には早速ですが訓練を受けてもらいます。コキユートス、ペストーニャ！」

「此処二。」

「はい、ここにいます…ワン。」

先程からいた蟲人の戦士に加え、犬の着ぐるみを被り、メイド服を着たUMAが現れたのに対し、クレマンティーヌは内心でまた化け物かよ！勘弁してー！と叫んでいた。

「両名は円形闘技場にてクレマンティーヌを鍛えなさい。幾ら死んでも構いません。復活を多用して何としてもLV40まで彼女を鍛えなさい。このままでは戦力

不足過ぎます。」

「「畏まりました。」」

その言葉にクレマンティーヌの顔が盛大に引き攣る。

どう考えてもこの後の自分は地獄が待っていると理解したからだ。

「あゝつかぬ事をお伺い致しますが、復活ってどんな魔法なんでしょうか？」  
猫なで声のクレマンティーヌに対し、ペストーニャが答えた。

「復活は蘇生系魔法の上位魔法で、デスペナルティが一切発生しません…ワン。」  
「わーお。」

つまり、このどう見ても格上の蟲人と戦い続け、殺され続けろという事だったが、逆に考えればリスク無しで短期間に強くなれるという事でもある。

「お手柔らかにお願いしまーす…。」

「安心シロ。最初ハ得物ヲ一本ダケニシテヤロウ。」

この後、クレマンティーヌはコキュートスと訓練を続け、三日間の内に217回

死亡と蘇生を繰り返し、そのレベルを大幅に上昇させた。

なお、本人はその時の出来事を黙して語らず、余程のトラウマになっている事だけが分かった。

---

なお、漆黒の剣一行は無事。

誘拐騒ぎ起こる前にセバス達が対処したから。

ポーシヨン屋の二人とはカルネ村への護衛で仲良くなっています。

オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その5

TS モモンガ様の休日

「ふわあ〜〜……。」

TS モモンガ様の朝は遅い。

時間にして大体8時頃に起き出す。

本来なら睡眠も食事も必要ないのだが、それではメイドの仕事を奪ってしまうし、自分も少し位こうした人間らしい事を満喫するのも精神の平穏を保つためにも必要だと思ったのだ。

色々言ったが、要は生前出来なかった贅沢な暮らしがしたいと言うだけの事だった。

「あー……。」

TS モモンガ様は朝に弱い。

生前の肉体を元に人化の指輪の効果で構築された肉体は、その欠点すらもある程度は再現する。

そのため、生前の彼女のやや低血圧な体質も受け継いでおり、どうにも意識が覚醒するのが遅いのだ。

そこに、唐突にノックの音が響いた。

「モモンガ様、失礼致します。」

ドアを静かに開け音を立てないように入ってきたのは41人の一般メイドの一人だ。

「おはようございますモモンガ様。最初にお着替えいたしますね。」

「うゝゝ……。」

TSモモンガ様の頭が僅かに上下したのを確認したメイドは、今まで着ていた青の地にデフォルメされた地球が印刷されたパジャマを脱がせ、紫色を基調としたロブへと着替えさせていく。

着替えの際にはTSモモンガ様には一切の負担なくパジャマを脱がし、ロブを着せていく姿は成程熟練した匠の業に通じるものがあった。

（うへ、うへへへへ！待ちに待ったモモンガ様当番！それも休日の無防備で仕事の多い日！カーもうたまりませんなあ！）

が、その内心は限りなく変態であった。

が、彼女らを作った創造主らも皆変態だった事を考えると当然の事なので細かくは突っ込まない。

「さ、鏡台前に移動いたしましょうね。」

「ん〜。」

大分起きてきたのか、TSモモンガ様はメイドに手を引かれるままに鏡台付きの椅子へと座り、されるがままその柔らかな茶の長髪を櫛で梳かされていく。

また、お湯でしめらせたホカホカのタオルで顔を丁寧に拭った上で、丁寧にスキンケア用の化粧水を塗っていく。

本来アンデッド、それも最上位の死の支配者たるTSモモンガ様にそんなことは必要ないし、人化の指輪を外せば意味は無くなるのだが、「アンデッドと言えど女性なので、身嗜みには気を付けるべきかと」というアルベドを始めとしたシモベ女性陣の言葉によって、こうしてほぼ毎朝一般メイド達のお世話になっている

のだった。

とは言え、毎日毎朝デコレーションされるのは嫌なので、本当に簡単な化粧しかないように厳命されている。

だが、それが余計に当番となった一般メイドのメイクの腕前やセンスを試す事となり、余計にやる気を刺激しているのをTSモモンガ様だけが知らないのであった。

「出来ました。」

「ん、ありがとう。」

その頃にはもうすっかりTSモモンガ様も起きています。

柔らかな茶の長髪はストレートに腰まで伸び、実年齢よりも常に下に見られてきた童顔は小動物染みていて見る者に保護欲を抱かせ、その穏やかで包容力を感じさせる笑みは母の様な祖母の様な安心感をシモベ達に与えていた。

若干名その笑みを前にするとはしたなく下着内の湿度が上昇する者もいるが、それはさておき。

そんなTSモモンガ様だが、小柄な体の割にしっかりと女性的な身体つきが紫色のローブの下から主張している。

かつては栄養不足と時間不足で割と自分磨きがおろそかで、ちよくちよくオフ会をしていた他のギルメンの女性三名からは色々お小言を貰っていたのだが、今やそんな事は絶対に無いだろう程にTSモモンガ様は死んでるのに健康的な可愛らしさを持っていた。

嗜好がロリなペロロンチーノ辺りが見れば、速攻でナンパをかましていただろう。が、その直後にぶくぶく茶釜に鎮圧されるまでがナザリックでのお約束なので、成功する事は無いだろうが。

「じゃ、食堂行こっか。」

「はい。」

そして、朝食のために食堂へと移動する。

廊下を歩けば、通りかかったメイドや使用人達が一斉に壁際についてお辞儀をしていく。

それをこそばゆく思いながら、TSモモンガ様は「お疲れさま」と言って、仕事を邪魔しないように少しだけ足早に通り過ぎていく。

その声と様子に、全てのメイドと使用人達が「至高の御方が我々を気遣ってくだ

さる……！」と内心で感動し、その思いに報いるべく今日もまたしっかりと仕事を  
するのだった。

「皆、おはよう。」

「「「「おはようございませう！」「」」」」

基本、メイドと使用人達は三交代のシフト制で24時間常に誰かが仕事をしてい  
る。

これは御方から緊急の要件が発生した場合のためだが、今の所それが活用された  
事はない。

既に朝食のラッシュの時間も終わり、これから休み時間か今日は休日というゆっ  
たりした者達のみが席に就いていた。

が、そんな彼女らは今は全員が椅子から飛び上がり、直立不動で御方へと挨拶  
していた。

「楽にできていいわよ。私もゆっくり食べてるから。」

「「「「は！ありがとうございます！」「」」」」

最近では休日ごとの恒例行事となりつつある朝の出来事を終え、モモンガはゆっ

くりと食堂の朝食バイキングへと足を向けるのだった。

「頂きます。」

元々TSモモンガ様はウルベルトと同様、食事というものに価値を見出していなかった。

それは彼女が母親が亡くなって幼くして働かねばならず、企業の走狗たる身では余り貯蓄も出来ず、ユグドラシルを始めてからは重課金の廃人勢の一員となってプレイしていたからだ。

つまり、食事にかける時間も金も無かったのである。

辛うじて必須栄養位はサプリ等で取っていたものの、それで全てどうにかなる訳もなく、彼女はほぼずっと栄養不足状態だった。

「ん〜美味し〜。」

しかし、今は違う。

リアルではもう富裕層すら味わえない程の美味なる食事をおなか一杯食べれるのだ。

とは言え、立場もあるし、良い年した女性という事もあって口いっぱい頬張る

という事はしない。

まるで小動物の様に、ちまちまと少量ずつゆっくりと味わってTSモモンガ様は食べていく。

その様子に同じメニューを食べようとシモベ達がまたバイキングに並び、TSモモンガ様の幸せそうなお声に料理長と副料理長以下調理スタッフが厨房で無言のままガッツポーズやコロンビアのポーズを取っているが、TSモモンガ様は目の前の料理に夢中で気付かない。

「何ていうかね……食べる時は誰にも邪魔されず自由で……なんというか救われてなきやあダメなのよ。独りで静かにゆっくりと……。」

初めて食堂を利用して食事しようとした時、常に複数のメイドと使用人が控え、副料理長がワインボトルを持ってスタンバっており、とてもではないが本当の意味でゆっくりとは出来なかった。

無論、それが支配者として必要なのは分かるのだが、休日位は好きにゆっくりさせてほしいと思っているTSモモンガ様は夕食時以外はそうやって控える事を禁止した。

やはり彼女も女性、美味しいからと色々取って食べている所を見られたくないのだった。

「ご馳走様でした。今日も美味しかったわ。」

「またのご利用をお待ちしております。」

食堂を出る際、態々見送りしてくれる副料理長に褒め言葉を告げて、TSモモンガ様はまたゆったりとした足取りで今度は第十階層へと移動していく。

目的は一つ、最近よく行く最古図書館だ。

「こんにちはカジット。調子はどう？」

「これはモモンガ様。おはようございます。先輩の司書殿らに教えていただき、日は遂に第四位階に到達いたしました。」

「あら、思ったより早かったわね。その調子で精進するように。」

「ははー！御方のお言葉、有り難く頂戴いたします。」

書籍の貸し出し等を行うためのカウンターには、先日司書見習いとして入ってきたカジットがいた。

高位アンデットへの転生を目論んでいたカジットは、今はすっかりこの最古図書

館の従業員と化していた。

利用者が来れば司書見習いとして、それ以外は司書達と時折デミウルゴスやパンドラズ・アクター、そしてTSモモンガ様を交えて魔法の開発、或いは修練を積んでいく。

これにより、元々努力していた下地もあってカジットは急速にその位階を上げていた。

もし帝国の逸脱者ことフルーダー・パラダインがこの光景を見たら、喜んで土下座して参加を請うていただろう。

「今日ほどの様な本に致しましょうか？」

「そうね……前に借りた経済学入門書と……ファンタジー系のラノベで司書長のおすすめをお願いできる？」

「畏まりました。少々お待ちくださいませ。」

言って、カジットは今月のおすすめの本とTSモモンガ様が前回借りた本を素早く検索する。

その様子はもうすっかり作業に慣れており、その動きには一切の迷いが無い。

「では少々お待ちくださいませ。直ぐに持ってまいりますので、こちらの椅子へお座りくださいませ。」

「うん、ありがとう。」

カジットの勧めてくれた一番派手でふかふかの椅子（勿論御方々専用）にTSモモンガ様は座って素直に礼を言う。

それに恭しく礼をしてから、カジットは足早に、しかし一切足音も埃もたてず、まるで暗殺者の様に素早く歩いていった。

「んー……。」

TSモモンガ様が最古図書館を見回す。

埃一つなく、また蔵書を傷めない様にしっかりと温度や湿度が管理されたこの場所は、TSモモンガ様のお気に入り場所だった。

それは嘗ての41人の友が残してくれたナザリック、その中でも彼らの趣味がNCと並んで如実に示されている場所でもあるからだ。

たっち・ミーや武人武御雷なら武術関係、ヘロヘロやホワイトブリムならメイド関係、ブループラネットなら自然関係、ペロロンチーノならエロゲ原作の全年齢版

とクソ運営を騙して仕入れた18禁の薄い本や小説各種、そしてタブラや死獣天朱雀、やまいこ等はかなり広範囲の分野の書籍をほいほい突っ込んだため、この蔵書はリアルな旧国立図書館（富裕層向けの紙媒体の娯楽施設及び資料保管施設）並みの蔵書を誇っている。

また、一部には映像作品や漫画等も結構な数存在するため、活字が苦手なものも結構な頻度で利用している。

「やっぱり、皆に感謝だよね。」

ぼつりと、TSモモンガ様の口から独白が零れる。

こうして一人だけでいると、どうしてか皆の事が思い出される。

自分を置いて逝ってしまった、41人の友達。

皆との時間は、独りぼっちだった彼女の人生の中で最も輝いた尊い時間として色褪せる事なく刻まれている。

それがたとえ末期の瞬間だとしても、彼女は正確に覚えていた。

「お待たせ致しました。こちらご注文の本でございます。」

そうやって物思いに耽っていると、カジットが目的の本を持って戻ってきた。

「どうぞ。こちらが先日借りていた経済学入門書および司書長おすすめの「小鳥遊さんちのメイドラキュラ」となります。」

「ありがとう。」

「またのご利用をお待ちしております。」

そして、受け取った本をアイテムボックスに入れると、TS モモンガは入り口まで見送ったカジットの言葉を背に最古図書館を後にした。

「……………」

寝起きとはまた違った、茫洋とした眼差しのまま、TS モモンガ様は第九階層のロイヤルスイート、その廊下へとやってきた。

そして、無言のまま廊下をゆっくりと歩いていく。

その視線は各ギルメンの私室へのドアに、プレートと共に貼られたギルメン達のブロマイドへと向けられていた。

「……………」

ゆっくりゆっくりと、まるで忘れてしまわない様に、過去を懐かしむ様に、ギルメン達の遺影の様なブロマイドを目に焼き付けていく。

ゲーム時代から、何時しか日課となってしまうたこの行動。

未だにTSモモンガ様の心から、友を失った悲嘆は消えていなかった。

否、きっとこの悲嘆は彼女の最も奥深い所へと刻まれてしまっていた。

故にこそ、彼女はずっとこの行動を繰り返すのだろう。

たとえ何百年と時が過ぎ去っても。

「……我ながら、未練がましいよね。」

そして、廊下の突き当りにまで来てから、彼女は漸く足を止め、自分の私室へと足を進めた。

「さ、今日も勉強しなくちゃ。」

支配ではなく、あくまで商売という形で人々から気持ちよくお金を出してもらおう。

現状はその方針でナザリックの維持・発展費用を稼ぐ予定であるため、TSモモンガ様自身がちゃんとした経済の知識を持たねばならない。

元営業職の経験があるとは言え、やはり系統化した知識は必要なのだ。

下手にデミウルゴスに全権を任せれば、利益は出るがえらい惨状が広がる可能性があるため、ちゃんと一定の所で止めるための知識は必要だった。

「夕食まで5時間……まあその間位は大丈夫かな、うん。」

が、何だかんだ言って、TSモモンガ様もまた元とは言え社畜だったのでした。

……………

一方その頃、スレイン法国では上層部が頭を抱えていた。

原因は先日、陽光聖典を監視していた土の巫女姫がいる土の神殿の大爆発による倒壊、更にその直後に起きたデスナイト亜種と上位種（槍騎士／ランサーと弓騎士／アーチャーに隊長／リーダー）含む大量の上位アンデット召喚（魂食いやエルダーリッチ等）により、法国首都に当たる神都では3000人近い被害が出たのだ。これが王国や帝国なら間違いなくそのまま滅亡していただろうが、六大神と言われるプレイヤーのものを始めとした多くの遺産を継承・回収してきた法国の誇る漆黒聖典らを出動、更に番外席次すら投入する事で辛うじて壊滅を免れた。

しかし、この事件により、法国上層部はある確信を持った。

王国、それもカルネ村近辺にプレイヤーが降臨した。

自分達の軍事力を正確に把握している彼らは、それを物量や種族格差ではなく、純粹な魔法技術で上回る存在をそれこそこの世界では各地に点在する竜王位しかない確信していた。

しかし、それらの存在は彼らはある程度把握しており、動き出せばそれなりの時間差はあるものの把握または予兆位は観測できる。

それが一切無かったという事は、それだけの軍事・魔法技術的に自分達よりも遙かに優位な存在が突如として現れた事になる。

そして、今年は百年ごとの特別な年だった。

これをもって、法国上層部はプレイヤーという新たな神の降臨を確信した。

同時に、どうやって穩便に接触し、その庇護下に入るかについては議論が進まなかった。

行方不明となった陽光聖典は戦略上必要な事とは言え、無辜の民草がいる村を殲滅・略奪・放火する作戦を実施中であり、その中で彼らを監視していた土の巫女姫のいる土の神殿の爆破及びアンデット大量召喚である。

明らかに自分達の心象は最悪だと、彼らは判断していた。

かと言って、どうするべきかと言うと、地道にカルネ村周辺を捜すしかないという事になった。

法国の誇る秘法によってプレイヤーを洗脳できないかという意見もあったが、そんな事をすれば従属神なり何なりに殺される可能性も高いし、それでプレイヤーの怒りを買う事だけは避けたかった。

それに加え、破滅の竜王の復活の予言もあり、迂闊に動く事はどう考えても出来なかった。

そのため、彼らは漆黒聖典をカルネ村周辺へと派遣し、火滅聖典をトブの大森林へと派遣した。

どちらも探索・情報収集こそを優先とし、絶対に情報を伝達する事を厳命して出撃させた。

なお、番外席次は外に出したらそれこそアーグランド評議国と開戦待ったなしなのでいつも通りお留守番となるのだった。

今回登場したTSモモンガ様作のデスナイト亜種・上位種

デスナイト・ランサー…盾と大槍を装備。通常種より攻撃力上昇するも敏捷性低下。

デスナイト・アーチャー…盾と弓矢を装備。通常種より射程が長いも、弓使用中は盾使えず、防御力も火力も低下するので失敗作。

デスナイト・リーダー…隊長、指揮官個体。全性能が強化され、レベルも5高い。周囲のアンデット（特にデスナイト系）の能力を強化する。

## オーバーロード二次 TSモモンガが逝く その6

アベリオン丘陵地下 デミウルゴス牧場にて

「ふむ、やはり経過は順調の様だね。」

飼育されている家畜達の様子を見て、デミウルゴスは満足げに頷いた。

本来なら聖王国両脚羊を飼育し、安定した第一〜三位階のスクロールの材料となる羊皮紙（という名の素材化した人皮）の生産を主産業としていたこの牧場だが、この世界では少し違った。

「確かに良さげですね。しかし、材料となる家畜は居なくなっても誰も困らないものを使いましょう。もし露見してもそれなら言い訳が効きますからね。」

「畏まりました。」

「ただし、セバスには見せちゃダメですよ。あの子が苦しむ事になってしまいます。それを守って利益を上げられるのなら、ここは貴方の遊び場にしても良いですから。」

「御方よりの格別なる慈悲。このデミウルゴス、必ずやご期待に添えてみせましよう。」

確かに魔法を使えないシモベ向けの下位のスクロールの量産は急務だ。

実際、だからこそモモンガはデミウルゴスに情報収集と並んで命じたのだから。とは言え、この牧場が露見すればナザリック外部の敵対勢力からのヘイトが上昇し、大義名分を与えてしまう事となる。

故に、牧場にいるのは犯罪者や悪徳貴族、夜盗等の人間性を無くした畜生共、即ち王国産両脚羊となっている。

この王国産の特殊な羊は聖王国産のそれよりも気性が荒く、飼育には適さないと思われたが、そうした個体の中で年老いて役に立たないとされた個体を彼らの目の前で解体して新鮮な内に従業員が悪魔達のおやつにすると途端に大人しくなるため、現在は当初の予定通り皮の安定生産に成功している。

その他、実益と趣味を両立する形で異種族間での交配実験や繁殖実験も行われており、成果は順調に上がっていた。

無論、その過程に発生する羊達の苦痛と絶望と恐怖といったあらゆる負の感情も

また、従業員である悪魔達を大いに満足させていた。

「ふふ、やはりモモンガ様こそ我が主。こうまで私にまで配慮してくださるとはね。」

とは言え、モモンガにも言い分はある。

このデミウルゴス、最上位悪魔だけあってその悪意と智謀においてはナザリック内でもTOP3の一角を誇り、情報収集・各種工作等のナザリックの外での活動の最高責任者でもある。

その仕事量に見合った報酬を上げられているかと言うと、ちょっと自信がない。それに悪魔として、人外としての本能である悪性や暴力性を発散できる場合は今後も必要だ。

そのため、この施設には時折休暇となったルプスレギナやエントマ、ソリュシヤンに時折だがシャルティアも訪れる。

さて、この牧場だが表層部はこの世界の人類が使用する普通のスクロールの材料たる普通の羊とユグドラシル産の羊系モンスター（装飾）が放牧されており、それに表向きの加工所と事務室、そして従業員の宿舎が存在する。

地下1階には異種交配・繁殖用の研究施設があり、奴隷のエルフや犯罪者の中でもステータスの高かったために繁殖役に選ばれた両脚羊、他異形種や亜人種が収容され、日々研究に協力してくれている。

地下2階には通常の両脚羊が飼育されている。

基本的にその手首と膝を枷で繋がれた彼らだが、寝床は地下にあっても清潔な毛布であり、排泄物は壁際にあるトイレで済ませられるし、空調も効いて臭いもそんなに籠らない。

一日に限られた時間だが運動も出来るし、食事も毎日三食出される。

しかし、食事もトイレも何もかも、全てが全て監視され、自分達が飼育される存在だという事を決して忘れさせない。

天井付近には24時間体制でダークアイと言われる低位の悪魔系モンスターが配備され、巨大な目玉に悪魔の翼と尾を持ったそれらは常に両脚羊達を監視し、諍いや反乱や脱獄の予兆が観測された場合、直ぐに看守の悪魔達がやってきて、そうした個体を間引いたり躡るを行うのだ。

地下3階では両脚羊達の皮を剥ぎ取る作業が行われている。

この時、大抵は睡眠や麻痺等でしつかりと麻酔をかけて行われるのだが、地下2階で問題を起こした個体はこうした麻酔処置無しで皮の剥ぎ取りが行われる。

その際の苦痛は想像を絶し、そのまま出血系ショックと激痛で死亡する個体も多い。

しかし、そういった個体は復活というデスペナ無しの蘇生魔法で大抵は甦ることとなる。

たとえ拒否しても、強制的に復活させる魔法やアイテムもあるため、抵抗は無意味だ。

が、それらがあっても精神が擦り切れて自発的な活動を止めてしまった個体は地下4階へと運ばれる。

そして、採取した皮は別室の加工所へと運ばれ、羊皮紙の素材へと加工される。この時、皮を採取した個体は直ぐに治療される事はない。

直ぐに魔法やポーションで治療すると、剥ぎ取った皮が灰となって消えてしまうからだ。

これは蘇生魔法のデスペナによる消滅に近い現象で、解決策は立っていない。

そのため、皮の採取後は暫くそのまま止血だけされ、皮の一次加工が終わる30分近く経って漸く治療され、地下2階へと戻される。

そして地下4階は最終処理場であり、上階で発生したゴミや排泄物、再利用できなくなった両脚羊が廃棄される。

時折、休暇中のシモベ達が訪れてはつまみ食いをしたりと、廃物処理に協力しているが、この主役は彼らではない。

ここにはダンジョンワームというダンジョン内に住まうスカベンジャー（ゴミ掃除屋）系のモンスターがおり、これらは大抵のものを食べ、消化し、栄養価の高い糞にしてくれる。

その糞は地上に運ばれ、通常の羊達を飼育するための牧草とカルネ村の畑のための肥料として使用される。

こうした優れた設計・プランはデミウルゴスの知恵と最古図書館に記された多くの書物、そしてモモンガによる「資源循環型拠点」の概念を取り入れて建設された。将来、ナザリックで安全に引きこもるためにも、資源の循環は必要不可欠だと考えたモモンガは、リアルでのアークロジューへと目をつけ、こうして試験とノウハウ

の蓄積も兼ねて牧場を建設させたのだった。

「とは言え、まだまだ羊の数が足りませんし、商会の資金もまだ不足しています。」  
デミウルゴスがそう零すが、しかし、それはちょっと誤りだ。

現状のナザリックの維持費は確かに一般的なギルド拠点よりも遥かに多いが、現状の魔法・物理問わないギミックを発動させている現状でも、軽く1000年は維持できるのだ。

それもモモンガのポケットマネーだけで。

他の至高の御方々の金貨も合わせれば、軽く万年は大丈夫だろう事が予想される。が、リアルでもそれ位の時間があれば人類が近代化を達成して地球を荒廃させる位できてしまうので、そうなる前に色々手綱を握っておきたいというモモンガの思惑もあったからこそ、経済的干渉のための手段を必要としているのだ。

「やはり『ゲヘナ』をする必要がありますか。ま、予定通りと言ってしまえばそれまでですね。」

牧場長用の執務室にて、にやりと嗤うデミウルゴス。

その手には『王国からの大規模な資金収集方法についての企画書』と銘打たれた

書類が握られていた。

.....

「ではセバス、どうして私が態々ここに来て貴方に問い質しているかわかりますか？」

セバスは背中に汗を滝の様に流しながら、魔王モードのモモンガから詰問を受けていた。

そして、セバスにはこの事にとっても心当たりがあった。

(やはり、先日助けたツアレの件でしょうか。)

先日路地裏で助けたツアレニーニャ。

冒険者となってから懇意にしているチーム「漆黒の剣」に所属する魔法詠唱者の少女の姉であり、数年前に貴族に拉致され、行方知らずになっていた人物だった。

話によれば貴族に拉致されて散々に凌辱された後、王国に長い間根を張る非合法組織である「八本指」へと売り渡され、その後は最底辺の娼婦として奴隷以下の商

品として慰め者にされ続けていたのだ。

そして、漆黒の剣が彼女の居場所を漸く調べ上げ、何とか彼女と他数人を助け出したのだが、それが限界だった。

彼らでは八本指の手の届かない場所までは逃げる事が出来ず、しかも彼らのメンツを大いに傷つけ、怒りを買った。

現在王都を出るあらゆるルートには八本指が手を回しており、もし顔を見られでもすればその日の内に六腕がやってきて皆殺しにされるだろう。

そんな彼らを、仕事で王都へと来ていたセバスは匿った。

余りにも軽率な行いに、王都に買った商館の警護と維持のためにつめていたソリュシャンとナーベラルも眉を顰めた。

勿論、チームとして行動していたユリとルプスレギナもだ。

そして、何とかできないかと頭を悩ませていたセバスに業を煮やしたのか、ソリュシャンから報告が上がり、遂にアインズが念のためにと他の守護者達を連れ、一切の事前通知なく王都の商館へとやってきてしまった。

「あの漆黒の剣とその身内の女性、そしてたまたま助けた女性三人。それは構いま

せん。たち・みーさんに定められた通りにせよと命じたのは私だからです。ですがセバス、貴方はただ一つだけ過ちを犯しました。それが何かわかりますか？」

絶望のオーラLv1を発し、声音も表情も普段よりも遥かに鋭く冷たいモモンガはセバスに問いかけた。

「報告を怠ったから、でしょうか？」

「その通りです。」

ツアレ達を匿った事、それ自体は罪ではない。

元々この商館には人間に擬態可能なシモベしか配置しない予定だったし、あるのも精々ナザリック基準でごみ同然のアイテムや装備品類、そして王国交金貨位なもので、見られても不味い資料等はここにはない。

もっと大事な事はそれ以外、セバス自身の行いにしかなかった。

「困っているのなら……いえ、何かあったのならちゃんと報告・連絡・相談しなさい。この程度で貴方の忠義を疑う事も、迷惑だと思うこともありません。」

自分の子供同然に思っている、大事な友人達からの預かり子。

特に大恩人であるたち・みーの子供であるセバスから相談されなかった事。

それがモモンガが最も悲しんだ事だった。

モモンガは既に絶望のオーラを出していないが、そのモモンガの悲しげな様子にこの場に勢揃いしていた他の守護者達が一様に殺気立った。

「申し訳ございません!!」

その御方のお慈悲を裏切った事を自覚したセバスは、土下座した。

とても綺麗な、惚れ惚れする程の土下座だった。

きつとたち・みーさんも奥さんを怒らせた時はこうだったんだろな…と思わせる様な理想的な土下座だった。

「今度から些細な事でも必ず報告・連絡・相談を欠かさぬ事。皆も良いですね？」  
モモンガの言葉に、各守護者達も是と返す。

「よろしい。ではセバスへの罰は後で伝えます。取り敢えず漆黒の剣と救出した女性達はカルネ村に送りましょう。あそこなら私の目も届きますし、バレアレ一家のポーション研究所もあるので、最低限とは言え防衛設備もありますからね。ユリ、ルプスレギナは彼らに直ぐに支度するように伝えて。それと何を見ても驚かないように厳命する事。シャルティア、貴女の転移門で全員をカルネ村に送り届けなさい

い。」

てきばきと指示を下すモモンガの姿に、先程の弱弱しい姿は感じられない。

しかし、先程の出来事を覚えている守護者達には、その姿は虚勢にしか感じられない。

だが、唯一にして至高の御方がそうするのであれば、彼らもまたそれに従うまでの事。

なお、以前の事件だが、クレマンティーンとカジットはバレアレ一家と漆黒の剣を全滅させる前に、同行していたセバスによって鎮圧されたため無事である。

その後はセバスの持っていた赤いポーションの存在からあれよあれよと問い詰められ、モモンガの許可の下、カルネ村にてポーション研究所を開設、既に紫のポーション開発に成功し、現在はMP回復ポーションの開発を行っている。

ついでに、森の賢王はセバスに敗れた後、治療されカルネ村防衛のための最大戦力として活躍している。

.....

その日、王国首都において大事件が発生した。

倉庫街で巨大な炎の柱が上がり、そこを中心に多数の下級悪魔が召喚され、王都を襲ったのだ。

だが、その被害は限定的だった。

悪魔達は自分達を攻撃する兵士を除けば、多くの人から恨みを買っている高利貸しの悪徳商人や貴族とその側近らを集中的に狙い、攫っていったのだ。

攫われた場所もその後どんな目に遭うのか定かではないが、これで大勢の人々は家の中に籠ってやり過ごす事を選択した。

これに対し、王国は王都にいる冒険者らと首都防衛隊、そして王直属の戦士団を動員し、炎の柱にあるであろう悪魔召喚の原因の調査及び事態の收拾を命じた。

しかし、これに対して貴族派が反対、兵士を自分達のいる王城の防衛、或いは領地への脱出のための護衛にするべきだと主張した。

これに対し、王は「好きにせよ」と言い捨て、戦士団と冒険者らで事に当たった。

この決定にこれ幸いと貴族派の大多数と一部の国王派は王都を離脱したものの、それらは全て悪魔に優先的に集られ、兵士も残らず攫われていった。

王城に残った貴族らはガタガタと情けなく震え、部下達に当たり散らすのが、それで王城へと集中する悪魔の攻撃が止む事は無かった。

一方、倉庫街へと向かった戦士団と冒険者らは悪魔の迎撃を受けるも突破、炎の柱の中心部で彼らが見たものは、難度200を超える上位悪魔の姿だった。

その名も奈落の支配者／アビサル・ロードである。

巨躯に蝙蝠を思わせる巨大な翼、どす黒い鱗で身を覆い、揺らめく炎の様な悪のオーラを纏い、鞭の様な長くしなる尻尾が生え、口からは鋭い乱杭歯が、手には見るからに切れ味に長けた爪を生やしている。

頭部には後ろに突き出した長く捻じれた2本の角、背中には同じ様な、しかし短い角が何本も生えている。

総評すれば、爬虫類と人間を強引に組み合わせた様な外見をした怪物だった。

「貴様、何故こんな真似をする！」

「無論、そう望まれたからよ。でなければ我の様なモノが出てくるか。」

戦士長ガゼフの言葉に、悪魔は嗤いながら答えてくれた。

曰く、貴族に捕らえられ、凌辱されて、飽きたから売られ、八本指とやらの下で虐げられ続けていた娘が逃げ出し、倉庫へと逃げ込んだ後、己を呼ぶアイテムを使用したのだ、と。

曰く、しかし契約には対価が必要であり、何も持たぬ娘は己自身を対価として悪魔に「この国を滅ぼしてほしい」と願った。

曰く、現在悪魔は王国を効率良く滅ぼすため、貴族や王族、金持ちを優先的に狙わせ、この国の統治機構そのものを壊滅させようとしているのだ、と。

それらを自信満々に、実に楽し気に語る悪魔に、しかし戦士団と冒険者達の顔はただただ沈痛だった。

要は、糞の中の糞こと貴族のアホ共の尻拭いという事だった。

これにはこの場にいたラキュースら蒼の薔薇も大いに呆れていた。

しかし、依頼は依頼であり、職務は職務である。

やる気の無くなった面々を周囲の下級・中級悪魔への対処に回し、実力的に最も優れているであろう蒼の薔薇と戦士長、そして「漆黒」のセバスが事に当たった。

そして始まった戦闘は苛烈を極めたが、何とか殆ど全員が生き残り、朝頃には上位悪魔は退散する事となった。

だが、王都は既に十分なまで壊滅的な打撃を受けていた。

多くの大商人と貴族が死亡し、王族も第一王子と民衆に慕われている「黄金」のラナー姫が死亡した。

結果、今まで何とかやれていなかった（＝浄化作用が働かず機能不全状態）行政が完全に人手不足となってしまった。

これでは税の徴収も碌にできない。

貴族の領地はまだ人手があるが、それを治めるべき貴族がいない。

このままでは秋の帝国への防衛戦すら何もできないまま亡国に至るしかないという状態にまで追い詰められていた。

なお同時刻、亜人もエルフも何でもござれの要塞化著しいカルネ村の近郊に急遽

建てられた屋敷にて、とあるお姫様が従者の少年に「わんわんプレイ」を一晩中強要し、朝まで致していた事は本件には何の関係も無いのであしからず。

カルネ村：第二ナザリックのための建築ノウハウの試験用として周囲と魔化した丸太の壁と石壁で囲み、外周に水堀と有刺鉄線が敷かれている。

制作にはマーレのウッドゴーレム及びエントマの呼び出す蟲達が主に労働力となった。

大体シズによる「ナザリックには不適合な設備・トラップ群の試験的運用」と言う名の悪乗りによる結果である。

現在は森に住まう種族らもある出来事から交易のための拠点として利用してお

り、アールグランド評議国にある田舎街の様な光景となっている。

オーバーロード二次 TSモモンガが逝く その7 一部修正

愉快的な森の仲間達と姫様の生活

---

時は王都悪魔召喚事件より一週間程前の話。

事の起こりはトブの大森林、その深部に住まう一体のドライアドから始まった。

「YABEEEEEEEE! 誰も! 来てくれないiiiiiiiiiii!!!」

ドライアドのピンスン、彼女は絶望から頭を抱えて絶叫していた。

その原因は一つ、この森の最奥部に封印されていた魔樹の竜王ザイトルクワエの存在だった。

人間よりも遥かに長寿な彼女からしても結構昔、空の亀裂から落ちてきた数多の絶望的な怪物達、その一つがザイトルクワエだった。

それは全長100m以上の超大型の樹木／トレント型モンスターであり、更に言えば凶暴で、周辺の生物の生命力を吸い取り、無尽蔵に成長していく性質を持って、更に種子を撒き散らして増殖すらしてしまうとてつもなく厄介な存在だった。

しかも、ユグドラシルでは当然とされているが、この世界産の生物では持っていない時間耐性という時間干涉系の魔法やスキルへの耐性を持っていたりもする。

放置すればそれこそ惑星上の全ての生物を駆逐しかねないため、当時の八欲王との戦争で数を減らす前の竜王達に目をつけられ、しかし余りの生命力に殺し切れずに消耗した所を当時の戦場となった場所、即ち現在のトブの大森林の中心部、その地下に封じられたのだった。

トブの大森林がああまで巨大な森林となったのは人間種には過酷な環境で開拓できなかった事も確かだが、それ以上にこのザイトルクワエから漏れ出した生命力が周辺の植物の育成を助けたからだ。

が、どうやら長きに渡る時間で封印が緩み、更にザイトルクワエ自体が封印への耐性を獲得しつつあり、更に周辺の生物から生命力を吸収し、加速度的に封印から解放されつつあった。

「ま、不味い！不味過ぎる!!このまんまじゃ死んじゃう！私死んじゃううううううう！！！」

そんな超絶ヤバイ存在の封印された場所の割とすぐ近所に生えてるピニスン。彼女は必死に無い知恵を絞って考えた。

どうすればあの7人を、いやあの7人ばりに強い奴を呼び寄せる事が出来るだろうか？

「そ、そうだ。他の木に頼んで、取りあえず森中の皆に声をかけよう。」

しかし、森の外に暮らす存在への伝手など、彼女は持っていなかった。

そこで無い知恵を絞って考えた。

そうだ、森にいる他の者達に頼もう、と。

しかし、友人である森の賢王は森を出ており、連絡が取れない。

ならばと森の住人で、知恵を持っており、森から出る事が出来る者達。

それに該当する者達へと、彼女は木々を通じて片っ端から（送信のみの一方通行だが）連絡を取ってみた。

彼女もまたこのトブの大森林に住まう数百年もののドライアド。

この世界の人間には到底出来ない、木々を増幅アンテナにした超広範囲の伝言メッセージの送信。

彼女自身は無自覚だが、これもまた立派な能力だった。

『森に住む皆！大変なんだ！森の中心に竜王達が封印していた世界を滅ぼす怪物がもうすぐ目覚めそうなんだ！誰か人間の街に行って前にあいつを退治した7人の人間を呼んできて！このままじゃ私食べられちゃう！！』

この様な内容の言葉が、森中の知的生命体の頭の中を数日に渡って不定期に流れていく。

但し、命がかかっているため、超大音量かつ女性の金切り声で。

これに対し、森の知的生命体らは早期に解決へと乗り出した。

が、その目的は余りにも五月蠅い騒音公害への対処としてだが。

で、その結果、森の住人達は早々にピニスの存在に気づき、「いい加減煩いから止めろ。後怪物について詳しく。」と脅し賺し、何とか事態の全容を知るに至ったのだ。

集まった種族は4つ、ひょうたん湖に住まう蜥蜴人、蛙人、そして森の東部に

住まうトロールとオーガ、西部に住まうナーガ達である。

出会った当初はピニスの周囲で鉢合わせ、一触即発となったのだが、そこに偶然にもザイトルクワエの触手状の枝の内的一本（6本ある巨大なそれから枝分かれした細いもの）が地中から現れ、その強さが各種族の長よりも上だったため、仕方なく協力して事に当たる事となった。

結果、トロールとオーガ達は攻撃力と耐久力があるが触手の動きについていけないので壁役となり、ナーガ達が魔法を使えるため、それでトロール達に回復や防御微向上等のバフをかけた。

特にナーガ達の長であるリユラリユスは他者からのヘイトを感知するタレントがあり、それを活かして盾役のトロールとオーガ達の誰に攻撃が行くかを察知して備えさえ、その被害を軽減させた。

そして、攻撃を担ったのが植物相手なら各段の威力が見込める蜥蜴人の四至宝たる凍牙の苦痛／フロスト・ペインの使い手であるザリユス他族長達、そして蛙人達だった。

蛙人達は当初逃げようと思ったものの、ここで逃げてもその内死ぬだろうと気づ

いたので、蜥蜴人同様に攻撃に参加した。

彼らはナーガ達程ではないが体内に毒を生成する器官を持っており、オーガやトロール程の巨体ではないが大きく、更に下位の動物系モンスターを使役する技術を持っている。

それを活かし、狼や鳥系モンスターを囮にして攻撃を逸らし、時に飛んでくる攻撃から蜥蜴人達を守った。

幸い、触手状の枝の根元は生えた地点から動かず、攻撃手段も鞭の様にしなつての打撃と数本生えた枝による刺突からの生命力吸収（この場の面々ではほぼ即死）だけだったため、トロールとオーガ、そして蛙人という頼りになる壁役の存在により、彼らは根本まで辿り着いた。

「行けえザリユース！」

「うおおおおおおおおおおお!!」

グの声援と共に、ザリユースが雄叫びを上げて凍牙の苦痛の特殊能力の一つ、氷結爆散／アイシーバーストを一日撃てる限界の三発全てを一度に開放した。

森の住人達全ての協力の下に放たれたその一撃が、その戦闘の最後となった。

「皆ありがとう！よくやってくれた！でもアレ、本体の6本の枝から更に伸びたちっちゃい枝だから、次はもっと頑張ってね！」

戦闘終了直後、そんな事を宣ったピニスは全員からボコボコにされた。

しかし、その甲斐あったか、森の住人達は事態の重さをはっきりと自覚した。

このままじゃ自分達は滅亡する、と。

正直、この世界の住人ではザイトルクワエが復活した場合、竜王とプレイヤーを除けば、対応できるのは法国の漆黒聖典の内でも傾城傾国のカイレと番外席次位しかないなので、当然と言えば当然なのだが。

「……手が無い事も無い。」

そんな中、ナーガの長であるリユラリユースが呟いた。

彼が言うには、この森に最近現れた「破滅の建物」の主ならば、世界を滅ぼす怪物にも勝てるかもしれない、と。

しかし、破滅の建物から現れる魔物達はどれも自分達よりも遥かに強く、賢く、数も多い。

自分達の保護を、或いは共闘を頼むのなら、従属する事になるだろう、と。

「オレは反対だ。会った事もねえ奴には従えねえ。」

「リユラリユース殿の言う事なら確かだろうが……うーむ。」

「けるける。ちょっと持ち帰って話してくるける。」

こうして一行は一時解散する事となったが、もしも怪物が起きてきた時はまたピニスンが森中に伝達する事を決め、この提案を一族内で話し合って決める事とした。しかし、この中でリユラリユースだけはもう既に行動を決めていた。

（このままでは我らも他の者達も全滅する。こうなれば我が一族だけでも……）

そして翌日、遂にその時が来てしまった。

月が中天にかかる頃、森の中央部が轟音と共に吹き飛び、今まで眠り続けていた魔樹の竜王ことザイトルクワエが復活した。

透かさずピニスンによる伝言が森中に広がるが、そんなもの無くとも全長100m級の巨体は森の何処から見ても分かっただろう。

彼らは皆一族の女子供老人等の戦えない者を逃がし、自分達は少しでも彼らが逃げる時間を稼ぐために戦いに向かった。

死ぬのは、分かっていた。

だが、その結果は戦いにすらならなかった。

ザイトルクワエがゆっくりと移動するだけで、彼らは簡単に蹴散らされた。

余りにも格が、スケールが違った。

魔樹が少々身動きするだけで致命傷を負い、戦闘不能になっていく森の住人達。

ダークエルフ達がその存在に怯え、逃げ出す程の圧倒的な存在。

もう、彼らに出来る事なんてない。

誰もが絶望に膝を折っていく。

「あら？諦めるには少し早いわよ。」

故にこそ、その穏やかな、しかし力ある声は彼らの胸に染み渡った。

「モモンガ様、どうやら件の怪物が復活したようです。」

「そうね。ここまで巨大なのは余り見た事が無い…終わったらサンプルを回収しましょう。」

黒い空間の歪みから現れたのは、リユラリユースを案内役とした死そのものの体

現者だった。

アンデット、不死者は彼らも見つた事があった。

しかし、彼女の様に美しさと力強さ、荘厳さを両立させた存在は、彼らは初めて見た。

「デミウルゴス、守護者達を指揮してあの巨大トレントを討伐なさい。素材を回収するので、炎や雷、毒系統の攻撃は禁止で。」

「畏まりました。」

その後も、続々と歪みから力ある存在達が出てくる。

その全員が単体で彼らを蹂躪するだけの力がありながら、しかし最初の死の体現者へと付き従っている。

「では、アルベドはタンク、主なアタッカーはコキュートスとシャルティアで。アウラとマールは妨害と支援を頼むよ。」

そして始まった戦いは、蹂躪という言葉が相応しかった。

巨大な枝の一振りを正面から受け止め、押し返す女騎士。

同じく枝の一振りを正面から切り飛ばし、次々と幹を切り付ける蟲人の戦士。

宙を飛び回り、奇妙な槍で突いた場所を枯らしていく小柄な女騎士。

足元では怪物が栄養源とする木々がダークエルフの双子によって戦場から遠ざけられ、バフ・デバフを絶え間なく掛けていく。

そして、それら全てを一切の遅滞なく伝言にて指揮する悪魔の紳士。

その戦いは、正しく神話の具現だった。

「なんと、いう……。」

彼らは理解した。

正確には、理解せざるを得なかった。

自分達の矮小さを、自分達の弱さを。

自分達はこの大地に住まうちっぽけな虫けらの一つであると。

そして……

「よく頑張りましたね。」

この美しき死の体現者こそ、女神なのだ。

女神のシモベ達が戦った戦士達の死体を集め、一か所へと並べた。

「兄者、ゼンベル……。」

ザリユースの言う様に、多くの仲間達が散った。

その姿にどうしようもない悲しみが湧き起こる。

戦士ならば何れ戦って死ぬのは当然の事。

しかし、己を認めてくれた兄と友の、仲間達の死は辛かった。

『『集団標的・蘇生』』。

だが、死の支配者は定められた死すら覆した。

「よく心折れながらも残した者達のために戦いました。勇敢なる者、善良なる者の死を私は望みません。」

魔法の光に包まれ、蘇生した者達が呻きながら起き上がり、戸惑い或いは喜び驚きながら、死の女神を仰ぎ見る。

「以後は私に仕え、最後の時を迎えるまで精一杯生きなさい。貴方達の命を、私は祝福しましょう。」

極々自然と、その場の全員が跪き、祈りを捧げた。

この方こそが我らが仰ぎ見るべきただ一柱の神だと悟った故に。

こうして、トブの大森林に住まう種族は全て、ナザリックへと従属した。

その様子を、プレイヤーの調査と接触を目的にトブの大森林へと来ていた漆黒聖典は目撃していた。

「ど、どうしましょう?」

「……一度本国へ帰還する。神官長らの判断を仰ぐべきだ。」

こうして、スレイン法国はスルシャーナの再来とも言うべき存在、その対応をどうするかで紛糾する事となる。

………

「夜分遅くに失礼。貴方が第三王女のラナー姫ですね?」

とある夜、自身の寝室にやってきた悪魔と出会った時、ラナーは死んだと思った。しかし、実際は違った。

その悪魔の話聞いた結果、私は彼らの案に乗った。

自身の求める未来を実現するためのピース、それが漸く揃ったのだと理解した。

「本当、デミウルゴス殿には：いえ、モモンガ様には助けられましたわ。」

うっとりとした笑みで、ラナーはそう呟く。

足元には欲して止まなかった自分だけの愛犬がいる。

その首輪には細めの鎖が繋がっており、その端は自分の手の中にある。

自分だけの、大切なワンちゃん。

昨夜から朝まではしたなく求めたというのに、自分を見つめるその無垢で愛らしい瞳にムラムラと欲望が立ち上るのが分かる。

「うふふ、後は帝国が王国を平定し、その一部を私が名目上受け持つだけ。ザナック兄上とレエブン候には少々大変な思いをしてもらいますが……ま、死なないのですから別に良いでしょう。」

話の通じる二人をボロ雑巾になるまで使い倒す算段を立てながら、欲望の赴くままにラナーは頭を上げてこちらを心配そうに見つめる愛犬の唇を食った。

次回、  
法国編

---



オーバーロード二次 TS モモンガが逝く その8

注意…独自設定あり

---

準備は終了した。

「では、そろそろ話を進めましょうか。」

そう言って、慈悲深き死の支配者は微笑んだ。

………

帝都アーウィンタール 皇城執務室

「なんだと?」

秘書官であるロワネの報告を聞いた皇帝は、その端正な顔を歪ませた。

「確かです。フェメール伯爵が国内のほぼ全てのワーカーに対してトブの大森林にあると言う未確認の遺跡への調査を依頼し、間も無く出発する模様です。」

その内容に、ジルクニフは幾つかの疑問を持つ。

「その遺跡、伯は何処から掴んだのだ?」

「不明です。」

「伯に報酬を払うだけの財産は?」

「つい先日、U A O 商会から多額の融資を受けた模様です。詳細な金額は調査中ですが…。」

「またあそこか…。」

大よそ一か月前から帝国・王国・法国・竜王国・聖王国という人類の生存領域を股にかけての商会が発足された。

その名もU A O 商会。

穀物から金属資源、各種香辛料にマジックアイテム等、そのどれもが高品質かつ

やや安価な事もあり、既に多くの顧客を獲得している。

王国を本拠としていた八本指とその系列店の多くが王都の悪魔召喚事件により潰れ、更に行政の多くも混乱状態にある王国において、実質的に庶民に格安で食料を販売する事から、多くの王国国民から特に好意的に見られている。

無論、それを快く思わない他の商会からは裏表問わない妨害を受けているものの、そうした商会は突発的なトラブル（不祥事や上役の事故・病死）によって逆に潰れたり、明らかに後ろ暗いものを感じさせた。

しかし、表向きは決して法律を破る事なく、税もしっかりと法律通りに納めている事から、今まで要監視対象に指定されながらも特に摘発等はされていなかった。

「遂に馬脚を現した、か？」

「唆したのは間違いないかと。」

どう考えても遺跡の情報は件の商会が出所だった。

「フェメール伯爵は以前から処分リストの一人だったから当然として…。」

「商会の方はどういたしましたでしょうか？」

「悩ましいな。」

U A O 商会は強力だ。

その財力だけでなく、軍事力においても。

アダマントタイト級冒険者に比肩或いは凌駕するという、帝国にある商会本店に配属された護衛達。

情報では六腕のメンバーに加え、あのブレイン・アングラウスもいるという。

加えて、マジックアイテムに関してもあのフルルードー・パラダインも唸る様な品を数多く置いている。

今現在、フルルードーはそれら購入したアイテムの解析に掛かり切りである事からも、その価値が分かる。

「迂闊に手出しすべきではない。」

「では？」

「目的が分からん以上、今は泳がせておけ。但し情報収集は密にな。」

「は。」

こうして、帝国はこの一件に関しての意見を纏めた。

この時の自身の事を見ていたら、未来のジルクニフはきつとこう言っていただろ

う。

おいバカ今すぐ止めろ、と。

………

帝国所属のワーカー達。

とある貴族が金に飽かせて雇った帝国所属のほぼ全てのワーカー達は、今現在トブの大森林へと、その比較的奥まった場所に存在する遺跡へとやってきた。

とは言え、その貴族すらとある商会によって操られていたのだが、それを知る者は極僅かしかない。

「ご老公、これは…。」

「うーむ、こりゃちとますいのう。」

そう呟くのは「竜狩り」のリーダー、齢80を超えて今なお現役のバルパトラ・オグリオン、通称「ご老公」だ。

高齢故に前歯が全て抜け、濁音を発音できなくなっているが、その経験から来る老獪さ、慎重さは多くのワーカー達から尊敬を集めている。

「この遺跡はまた生きておる。必ずけいけきされる。」

そう判断した理由は、この遺跡の綺麗さだ。

通常は古い建築物、それも森の中にあるのなら汚れたり、欠けたりと、経年劣化により大小様々な汚れや傷があるものだ。

しかし、この遺跡にはそれが一切無い。

苔や植物等が繁茂して目立たなくしているが、それはドルイド等の持つ魔法で十分に隠蔽可能だ。

だが、遺跡を構成する石材そのものまでは強度や防衛の関係上、入念に魔化されているらしく、そういった経年劣化が見られない。

(となると、何が目的じゃ?)

フェメール伯爵が商会からの要請でこの依頼を発注したのは把握している。

この遺跡に何かあるのだとは思うが、それなら他にやりようがある筈なのだ。

「ここは撤退一択じゃな。せんいんに荷物捨てても良いから走る用意をさせるん

しゃ。」

「は！」

老公はその経験から、此処が死地であると判断した。

他のワーカーチームは表層で発見された財宝やマジックアイテムに沸いているが、「童狩り」は彼らに気付かれぬようにしつつそそくさと距離を取る。

「う、うわああああああ!？」

そして、先行していたワーカーの叫びを聞いた途端、その場から全力で離脱した。

.....

ナザリック地下大墳墓 第十階層 玉座の間

「どうやら新しい迎撃ギミックは順調に機能しているようですね。」

「はい、これもモモンガ様のお陰でございます。」

「私は許可を出しただけです。これはアルベド、そしてデミウルゴスのお手柄です。」

後で何かご褒美でも考えましようね。」

「く、くふー！ 勿体ないお言葉です！」

第二ナザリックの三階層から、ナザリックの第一階層へと転送されたワーカー達。通常のPOPするアンデット達なら兎も角、ナザリックオールドガーダーどころかマジックアイテムで武装したアンデットにすら劣る彼らの戦闘能力では、この場を切り抜ける事は不可能だ。

実際、魔法・物理問わない各種ギミックに引っかけかり、或いは大量のアンデッドに囲まれ、次々とワーカー達は死亡していく。

「トブの大森林の住人達並みに動けるのなら、まだ使いようがあるのだけど……。」「今の所、オールドガーダーを超えられた者は一人もいませんねえ。」

「合格ラインを下げて、マジックアイテムで武装済みのスケルトンウォーリアー程度にしときましようか……。」「

はつきり言って、余りにも弱かった。

王国産の冒険者なら、もう少し善戦すると思うのだが、どうにも国家がはっきりモンスター退治している関係か、帝国のワーカーは個々の実力が劣る傾向にあるら

しい。

これでは利用方法が死体からのアンデット化位しかない。

「あ」

「おお、遂に合格者が出ましたか。」

それはフォーサイトと言われるワーカーチームだった。

神官の男性と魔法詠唱者の少女による神聖・火炎魔法の十字砲火によって、最下級のマジックアイテムで武装済みのスケルトンウォーリアー2体を倒してみせたのだ。

「アルベド、オールドガーダー一個小隊を指揮してフォーサイトを捕獲しなさい。」

「畏まりました。」

「他にも合格ラインに達成した者は適宜捕獲しなさい。その後の処遇は、第六階層でアウラのペット達と死なない程度に遊ばせてから、トブの大森林の住人らと同じ扱いで労役に就けなさい。」

「よろしいのですか？人間よりもゴーレムやアンデットの方が…。」

「良いのよ。償わせる事が大事なのだし、マッチポンプなんだから余り手酷く扱っ

ては可哀想でしょう？その上で利用価値があるなら本格的に傘下に加えてあげましょう。」

うっそりと笑みを浮かべるモモンガに、底知れぬ叡智を感じたアルベドはゾクゾクと感動と快楽に背筋を震わせる。

ああ、やはり至高の御方の長たるモモンガ様は素晴らしい…!!

モモンガとしては、この世界の人間のレベルキャップ自体は大体30程度と把握しているのだが、それは適当に拉致した八本指の使いようのない構成員らで行った実験によるものだった。

魔法詠唱者としては、法国との接触が視野に入った頃から解凍した陽光聖典らの隊員らで行った実験によって第4位階が限界である事が分かった。

このレベルキャップを超える方法は幾つかあり、一番簡単なのは異なる種族への変化・転生だ。

後天的に人間から簡単に行えるのは吸血鬼による眷属化、一度死んでから高位の魔法詠唱者による意思持つアンデットとして復活の二択だ。

他の異形種へ生きたままとなるとどうしても特殊なアイテムが必要不可欠であ

り、それらはナザリックでも少ないのでこちらは必要が無ければ行わない方針だ。で、三つめが一番面倒だったりする。

これは只管にレベリングを繰り返すだけだ。

無論、種族としての限界を突破するのだから、簡単な訳がない。

具体的には30まで到達すると、そこからレベルを上げるのに10倍の経験値が必要となる。

それも訓練ではない戦闘、格上との命がけの戦闘を、だ。

現在、純粋なこの世界産の人類でこの壁を突破しているのは、帝国の「逸脱者」フルーダー・パラダインただ一人だ。

彼の場合、前線で戦った頃が魔神戦争時代で格上の敵に事欠かなかった上に、本人が魔力による生命賦活で寿命を延ばしているため、この壁を突破する事に成功したのだろう。

なお、31Lvまで到達すると必要経験値は元に戻るため、その壁を超えさえすれば何とかなるのも確認済みだ。

そして、ナザリックにとってこの世界の人類に対して格上の敵を用意するのは簡

単であり、才能のありそうな現地住民達も確保済みだ。

「トブの森の住人達。六腕。そして帝国のワーカー。レベリングは時間がかかるでしょうけど、必ず必要になります。」

「次の百年のため、ですね。」

現在、この世界に活動中のプレイヤーは自分達以外はいない。

情報系魔法により把握できたのは、活動を停止中の海上都市のプレイヤー、そして法国にいるNPCだけだ。

既に各地に放ったシモベ達により、ユグドラシル産・現地産問わず余り表沙汰にならない貴重なアイテム類の場所の多くも把握している。

問題なのは、竜王達の巢にあるだろう財宝等だが、それは迂闊に手を出すと八欲王よろしく連合を組まれかねないので、現在は刺激するのを控えている。

しかし、次の百年後に敵対的なプレイヤーやワールドエネミー襲来の可能性を考えると、戦力強化は必要不可欠だった。

事実、ここナザリックは嘗て1500人ものプレイヤーとワールドエネミーの一体に襲撃を受けた経験がある。

そして、その最盛期は既に遠いとなれば、モモンガが対策を練るのは当然の事だった。

「私が特に警戒しているのは、ユグドラシル由来のモノではないのだけど、ね…。」  
ぼそり、と呟かれた言葉は、アルベドには聞こえなかった。

しかし、クリスタルモニターを見据えるモモンガの横顔は、常でない深刻な色だった。

……………

四日後、帝都アーウィンタール 皇城執務室

「それは真実なのだな？」

そこでジルクニフはワーカーの生き残りからの報告に頭を痛めていた。

「はい。全て本当の事です。報告したワーカーチームも、リーダーは高齢ですが実績ある者達です。」

「大量のアンデットと高度な魔法に守られた墳墓か……。」

未確認の遺跡、そこは彼らの予想以上に厄介なものだった。

「現状、手を出す事は出来んか……。」

「はい。帝国軍として正式に動くには、王国領に近過ぎます。」

「ええいクソ！あの役立たず共が！」

アンデット、それも魔法が付与された武器で武装したスケルトンが大量に存在する。

そんな場所を放っておけば、どうなるか？

アンデットの「群れるとより上位の個体を発生させる」性質から、そこを中心に第二のカツェ平野が発生しかねない。

だが、王国貴族共にそんな事を語ったとしても、持ち前の無能さから事態を楽観視して何もしない事は確かだった。

「一応、話を通してみますか？」

「任せる。が、望み薄だろうな。」

本来なら軍を動員すべきなのだが、その墳墓の位置はトブの大森林の比較的浅い

場所だが、それでも王国の領地に隣接しているのだ。

流石に冒険者扱いのワーカー、それも100人にも満たない人数なら兎も角、本格的に帝国軍を動員するには遠い上に先ず間違いないく王国軍も動員される事態になる。

「今現在はこちらからは何も出来ん、か。」

「一刻も早く王国を打倒するしかありませんね。」

ジルクニフとロワネは二人、深々とため息を吐いた。

「冒険者組合に話を通して、常設依頼に追加させるしかあるまい。」

「ではそのように。」

取り敢えずできる手を打つ事にして、二人はこの話を終わらせ：

『その必要は無い。』

ようとして、執務室に響いた声に血相を変えた。

「ッ！」

咄嗟にロワネが執務机の上にあつたベルを鳴らすも、誰も反応しない。

部屋の外には常に近衛兵が控えている筈なのに。

『無駄だ。今、この城の者達は全て眠っている。』

突然現れたソレは蒼いアンドェットの馬に跨つた、禍々しい全身鎧に身を包んだ騎士だった。

放たれる威圧感、彼らが知る魔法省地下に繋がれた死の騎士を遥かに上回っていた。

「何の御用かな、騎士殿？」

絶句し、しかしそれでも皇帝の盾にならんとするロワネを挟み、ジルクニフは恐怖と驚愕を必死に押し殺して問いかけた。

『我が主のおわす穏やかなるべき場所を荒らした者達の首魁に通告をしに参った。』  
そして、蒼の騎士は朗々と告げた。

『我が主の墳墓を荒らした罪、真許しがたい。墳墓へと赴き謝罪せよ。謝罪無き場合、我らは主の号令の下にこの地を蹂躪する。』

「成程。その件に関しては本当に申し訳なかった。後日正式に謝罪に赴かせて頂こ

う。」

ロワネはガタガタと恐怖に体を震わせながら、それでも皇帝の胆力に感心し、何とか主君の邪魔をしないように努めた。

『良かろう。七日待つ。』

「感謝する、青の騎士よ。」

言うだけ言って、蒼褪めた乗り手／ペイルライダーはスキルを発動し、幽体となって宙に消えるようにその場を去った。

「ふう〜〜〜〜……。」

どっかり、とジルクニフは背もたれへと体を預けた。

これだけ冷や汗をかいたのは何時ぶりだったか。

「おいロワネ。至急城の人間を起こし、各省のトップと四騎士を呼べ。緊急会議だ。」

「は、はい！」

脱力し、へたり込んでいたロワネが何とか這う這うの体で執務室を出ていった。

「さて、面倒な事になったな、本当に。」

降って湧いた想像の埒外の事態に、ジルクニフは本格的に頭痛を感じるのだった。

---

次回、「帝国、斜陽タイム」&「竜王国、ヒーロー参上」の予定。

## 幼女戦記 信仰者が逝く

働いて、働いて、働いて。

気付けば、何のために働いているのか分からなくなった。

会社のため、生活のため、という事は分かる。

それ以外の何かが確かにあった筈なのだ。

しかし、それももうワカラナイ。

働いて、働いて、働いて。

会社に言われるまま、上司に言われるまま、嫌われ役と分かっているにもかかわらず、首切り役として働き続けた。

もう自分が何をしているのかワカラなくなつて、恨み言や罵声、憎悪や殺意を込められた視線を向けられても何もカンジラレナイ。

そして、そんな日々が続いたある日、ホームから丁度新幹線がやってきた路線へと突き落とされた。

線路のレールから見上げると、そこにはつい先日自分がクビを宣告した元社員

が、呆然とした顔をしつつ両手を突き出したままの姿があった。

最後に感じたのは、とてつもなく大きな衝撃ともうこれで終われるという安堵だけだった。

………

気づいた時、私の目の前には光があった。

ただただ暖かく、大きくて、太陽に似て、しかし異なる光。

何時か何処かで見えた様な、正体不明の懐かしさを感じさせる穏やかさ。

『最近の人間は理非も信仰も知らぬと思ったが……。』

気づけば、私は手を合わせていた。

幼い頃、訳も分からず仏壇や神社でそうしていた様に。

こうする事が自然だと、何故か思い、行動したのだ。

『どうやら、貴様は違うようだ。』

光が収束し、いつの間にか人によく似た形を取っていた。

壮年故の深い知性と穏やかさに筋骨隆々とした肉体という相反する要素を持った何らかの高次の存在が、そこにいた。

『貴様はそこまでの信仰を持っていながら、どうして信仰を忘れていたのだ？』  
肉体が無くなった身なので、思念だけでも伝わるだろうかと考えつつ、自分の意見を目の前の尊い方のために纏めてみる。

恐らくですが、私の生きた社会がそういう性質だったからでしょう。

人を資源・歯車・部品として捉え、利益や効率という目に見えるもののみを重視し、報酬以上に使い潰す。

それを当然とし、人を肥やしとして成長していったのが私の暮らす社会でした。ですが、それは私の時代においてはそう珍しい事ではありませんでした。

私達人間は御身程の力も智慧もない。

更に命の危機はなくとも、したくもない仕事をせねば生きられず、将来への希望も抱けない時代。

故にこんな形でしか生きられず、摩耗し、正気を失い、自らを見失っていたのです。

余りの責務の多さに、心から余裕を、祈りを、信仰を削られていたのです。

『成程な。それでは貴様は涅槃へと至りたいのか？』

至りたいか、と問われれば至りたいです。

しかし、今御身にお伝えした通り、この身は余りに業が深く、信仰すら日々の忙しさにかまけて忘れていた身。

涅槃に至る程の徳を積みなかった、死ねば地獄行きは免れない罪人です。

『ふーむ。なれば、改めて徳を積むが良い。』

？ おっしゃりたい事が分かりかねますが…？

『話は逸れるが、人は何を以て信仰すると思うか？』

何を以て…先ず私が生まれた国の様に、暮らしに深く根差す事が大事だと思われまます。

我々は自らを無宗教などと思っておりますが、我々日本人はこの世のあらゆる神に祈ります。

それが基本的な礼節であり、生活に根差した文化だからです。

どんな神であっても認め、祈り、信仰する人々を尊重し、そして自らも生活の一

部として祈るのです。

その上で自分ではどうにもならぬ困難な出来事を前にした時、改めて神に祈りを捧げるのです。

祈らずともどうにかなる問題なら、人は祈らないでしょう。

『ふむ、生活への融合と適度な困難か。』

それと、目に見えぬからと御身は存在しない等と言う者達も一定数存在します。そういった懐疑的な輩に対して、御身の実在を証明するためにも奇跡や加護が必須だと思考いたします。

人の科学では説明できない、奇跡としか言いようのないもの。

更によればそれが何かを癒し、慈しみ、守るものであれば、貴方様の慈悲と寛大さは誰もが認めるものとなるでしょう。

『成程な。ではお主には一つ、それを証明してもらおうとしよう。』

？ とおっしゃいますと…

『お主には適度な困難のある世界で、科学では説明の出来ない奇跡を持って、そこで徳を積み直してもらおう。』

よろしいのでしょうか？ 私の様な罪深い者がその様な権利を得て。

もっと相応しい、穢れ無く信心深い者がいるのではないのでしょうか？

『そういった者は既に涅槃へと至っておるのだ。しかし、その手前で足踏みして輪廻を回り続けている者は多い。これはそういった者達への救済措置のテストであり、お主という魂への禊でもある。』

視界が徐々に白く、否、光に包まれていく。

この場所に来た時と同じく、暖かく、穏やかで、懐かしい光に吞まれていく。

『また会おう。擦り切れながらも信仰を捨てなかった魂よ。我らは常に人を見守っている。』

多大な感謝を御身に。

出来るなら、この禊を恙無く果たし、他の魂に救いがありますように。

こうして、私はブラック企業勤め20年の社会人（人事部）から、魔法の存在する世界で少女として生まれ変わった。

.....

帝国の市民の間では祖国防衛戦争と囃し立てられるこの戦争は、既に欧州列強の多くが参加する世界大戦の様相を呈していた。

しかし、それに気づいている者は極少数でしかない。

この世界では第一次世界大戦が発生しておらず、世界大戦の経験が無いからだ。そのため、列強同士の泥沼の総力戦の経験も当然だが無い。

未だ総力戦というものへの体制が整わないというのは即ち、終わりの見えない戦争という継続する大規模な消費活動へと満足に補給を行えないという事でもある。

「新しい患者には重軽傷別リボンを忘れないで！重篤の者から私の方に！」

「先生、次の人です！」

それは医者も、医薬品も、医療設備も足りないという事でもある。

24時間常に続く地獄のライン戦線。

現在、最も地獄に近い戦場で最も損耗率の高い歩兵並みに酷使されているのが、軍医達だった。

軍隊の構成員だが、基本的に非戦闘員である彼らは前線に出る事はない。

しかし、戦争が激化の一途を辿っている現在、彼らの出番は多過ぎて、あつという間に医療用テントは満員となった。

その上でも一度戦闘が再開すれば増え続けるのだ。

彼らの仕事は決して終わらない。

そのため、ライン戦線では治療が間に合わない者が続出し、これに対して軍上層部は最後方に限るが民間の医者を採用する事を決定した程だ。

「主よ、この方に慈悲を：治癒／ヒール！」

その中で頭角を現したのが、彼女だった。

元は孤児院出の、ただ国民に義務付けられている魔導士適正検査に引っかけただけの少女だ。

金髪に碧眼の、田舎の農村出身と言うには整った顔立ちの彼女は思ったよりも聡明で、直ぐに魔導士としての仕事を覚え、その上で特異な資質に開眼した。

それが今まで歴史上極少数の者しか確認されていない、治癒魔法だった。

人体に干渉する術式自体は既に開発されている。

しかし、それは魔導士が自らの肉体の分泌・神経系へと干渉するものが殆どだ。主に近接戦闘時の痛み止めや脳内麻薬の分泌が使用されるが、中には任務前に過剰な飲食・飲酒をしていた時に意図的な嘔吐を行うための術式すら存在する。

しかし、彼女は稀有な才能の持ち主だった。

治癒魔法、それを他者に施す事が出来る程の資質。

本人の高い魔力量、何でも学ぼうとする勤勉さと向上心、そして信仰に支えられた揺るがぬ精神。

彼女が軍で注目されるのは当然の事だった。

それこそ前線にいるのに前に出る事はなく、本人的には一人でも多くの命を救うため、軍部としては兵士達の士気高揚と民間への宣伝のため、彼女は今日も人命を救うために力を尽くす。

「治癒／ヒール、治癒／ヒール！」

「おお、あの傷口があつと言う間に……。」

「ありがたえありがたえ……。」

魔力光と共に、重傷だった兵士の傷が塞がっていく。

その様子を見ていた兵士達はまるで彼女が女神であるかの様に手を合わせ、感謝と信仰を捧げる。

「治っても流れた血が戻った訳ではありません！直ぐにベッドに寝かせて！次の人は!？」

「この方です。」

連れられてきたのは、腹から腸を垂らした歴戦の軍曹だった。

「オレはいい…助からんっ…：…他の、奴を…！」

「高位治癒／ハイヒール！」

しかし、彼女は頑なに人々を癒し続ける。

その暖かな光を浴びると、先程まで死人半歩手前だった軍曹の顔色は戻り、垂れていた腸は綺麗になってから腹の中へとするすると戻っていった。

「おいおいマジかよ…。」

「命は粗末にしないでください！さあ次の人！」

この世の地獄たるライン戦線。

そこには一人の聖女が信仰のままに人を癒す。

それが多くの兵達に知られるようになるのは、時間の問題だった。

『彼女は予想以上の成果を上げてくれていますな。』

『うむ。戦いではなく慈悲を感じさせる癒しの力か。』

『当初はそれだけでよいのかとも思ったが……。』

『こうしてみると、やはり子羊らの意を汲むのは良い手であった。』

『彼女自身の信仰もそうですが、彼女に感化された者達からの信仰も素晴らしい。』

『世が世なら祀り上げられ、我らの中に列席されていたやも知れませんな。』

『とは言え、乱発しては意味が薄れる。』

『左様。人選は慎重にせねばなりませんまい。』



## オバロ転生 クレマンティーヌが逝く

拷問を、薬物を、虐待を受けた。

言葉で、暴力で、存在そのものを否定された。

神のため、信仰のため、人類のため。

自分が僅かなりとも引いているという神の血を覚醒するために。

心を、体を徹底的に追い詰め、壊されかけた。

そして、遂には拘束され、大勢の男達に汚されかけた。

その時、私は「オレ」を思い出した。

「がああああああああああああああああ！！！！」

拘束を引き千切り、裸のまま男だったオレを獣欲のままに犯そうとするボケ共を  
薙ぎ倒していく。

大の男を十代半ばの少女が素手で引き千切るといふ異常も、その時ばかりは完全に怒りで我を失っていた自分には分からぬ。

怒りのままに暴れ狂い、何処からか聞きつけた衛兵や兵士達を辛うじて殺さずに振り払い、遂には六色聖典という特殊部隊に所属している兄を顔が變形するまで殴り倒し、お供のモンスターすら殴り殺してから、漸くクレマンティーヌは落ち着いた。

落ち着いて、「あ、これもうこの国にはいられんな」と悟った。

廢墟となった元我が家である屋敷の使用人の部屋があった辺りを掘り返し、次いで遺伝子提供者らの寢室の辺りを掘り返し、目立たない服と当座の資金を確保した後、オレはさっさと故郷であった国からお暇した。

それが今現在の3年前にあたる。

「つてのが、まあ大体のオレの経緯だよ。」

「狂ってんのーお主。」

「自覚はある。」

そんな狂人（外身女・中身男）と話しているのは、一応雇い主である所の竜王国

女王であるドラウディロン・オーリウクルス（幼女形態）だ。

「とりま、請け負ったピーストマン3000匹、ちゃんと討伐したかな。」

「うむうむ、大儀であった。これで暫くは連中も大人しいじゃろ。」

「だといーけどな。」

ピーストマンの思考は人間＝餌である。

人間でも表向きは最上位とされる王国戦士長が大体難度100、対して大人のピーストマンは個体差があるも、弱くても50はあるのだ。

そんな連中が大挙して押し寄せてきて、真っ先に標的になるのは難度1とか0の非戦闘員たる民草だ。

そんな人間に負ける様な軟弱な奴は死んで当然という見事なまでの蛮族思想をしている上、国のTOPが代替わりしたらしく、近年ではしょっちゅう越境して竜王国の民を踊り食いしていたのだ。

その被害は既に万を越しており、兵士や冒険者達が女王の応援もあって何とか頑張っているが、このままでは竜王国の滅亡も時間の問題だった。

このクレマンティーヌがやってくるまでは。

「よう、邪魔するよ。」

何処からともなくやってきた彼女は、童王国へ侵攻した一万近いビーストマンへと軽く声をかけた。

そして、獲物と思って飛び掛かってきた全てのビーストマンを皆殺しにした。

それも、当時は装備らしい装備もない、布の服と素手のままで。

殆ど全てを正面から殺し、逃げ出そうとした者も追い掛けて殺した。

無論、武技を使用しているのは確認されているのだが、それにしたって異常に過ぎる。

とは言え、それは2年も前の話だ。

現在の装備はソフトレザアーマーを鎧下にし、その上にアダマタイト製の鎧で要所を守っている。

が、そのアダマタイトの鎧は胸を除いては膝に肘、拳に肩に額と爪先に踵という、打撃に使用するのが主眼となっており、可動域と軽さは良好なものの防御力自体は同じ材料のフルプレートよりも低い。

だが、彼女の筋力、取り分け瞬発力に関してはビーストマンらを優に上回る。

事実、大猿のビーストマンの拘束を無理矢理振り解いて撲殺し、逃走する豹のビーストマンを後から追いかけて蹴り殺している。

主武装はアダマンタイトの片手剣と小盾だ。

付与された魔法は耐久力上昇と、頑張って探せば見つけられる程度なのだが、元がアダマンタイト製となれば、その頑強さはたとえビーストマンを3000匹切り捨てた所で鈍らない。

そのお値段も結構なものなのだが、ここは投資すべきと判断した竜王国の宰相が初のビーストマン退治の後にアダマンタイトの冒険者資格と費用を報酬として出したのだ。

そして、その費用はその年の内に全て回収されていた。

「ま、やばくなったらまた呼んでくれよ。」

「うむ。出来れば常駐してくれると助かるんじゃないがのー。」

「だってここ飯不味いし。」

「うぐ!!」

クレマンティーヌの正直な一言に、黒鱗の竜女王は胸を抑えてよろめいた。

生産人口が減少し続けるこの国では、高級な食事なんて滅多に取れない。それがたとえ王族であっても、だ。

「うーうー！ピーストマン共さえいなければああああ…！」

「まーまー恩は返すから、心配すんなって。」

法国から何とか食いつなぎながら、クレマンティーヌはこの国へとやってきた。法整備のしっかりしてる帝国、貴族が腐敗している王国には少々問題があると判断したからだ。

しかし、竜王国の場合は切羽詰まっているため、自分の様な者でも受け入れられると踏んだのだ。

結果、今の彼女は人類で唯一の単騎で活動しているアダマナイト級冒険者として活躍している。

「うぎぎ…！あ、式典やるからちゃんと明日出るのだぞ！」

「あいあい分かってるって。」

こうして、竜王国では束の間の平和が到来していた。

.....

「で、法国の六色聖典が何の用だよ？」

竜王国首都、冒険者組合の貴賓室。

そこでクレマンティーヌは来客と言われて呼び出された。

「単刀直入に言わせていただきます。クレマンティーヌ殿、法国に戻って来て頂きたい。」

竜王国の要請で、法国からやってきた陽光聖典の隊長ニグン。

それは法国からの出戻りの誘いだっただ。

曰く、貴殿の実力は人類を守るために振るわれるべきもの。

曰く、クインティア家は他の罪状も明らかにした事で取り潰しが確定している。

曰く、貴殿なら直ぐに漆黑聖典に所属できる。

曰く、貴方の兄君も心配している。

「あのさあ、ニグン殿。」

そこまで言って、今まで困惑気味だったクレマンティーヌは漸く相槌以外の口を

開いた。

「オレはオレを産んだあのイカレ共も嫌いだが、あの選民思想の鼻持ちならないクソ野郎も同じく嫌いなんだよ。」

「申し訳ない。失言でした。」

その言葉に、ニグンもまた素直に謝罪する。

何せあのクインティアである。

狂信者にして一人師団とまで言われる漆黒聖典の一人。

そんな男だとニグンもまた知っているからだ。

「それに、今の法国じゃオレの信仰が満たされない。こればかりは譲れねえよ。」

「信仰、ですか？」

おや、とニグンは思う。

目の前の未だ少女と言つてよいアダマンタイト冒険者からは狂信者特有の向こう側に逝っちゃった気配がない。

ニグンら陽光聖典も大概だが、それでも彼らは常人の範疇だ。

そんな彼からすれば、目の前の少女もまた能力は兎も角そんな連中と一緒にには見

えない。

「オレはスルシャーナ様の信徒だ。同じ六大神を信仰してる筈が、今の法国じゃ堂々と歩けやしない。」

「それは、また…。」

ニグンはその言葉に抱いたのは、納得の感情だった。

六大神最後にして最強の一柱であったスルシャーナ。

死の神であり、命ある者に永遠の安らぎ、そして久遠の絶望を与える異世界からの来訪神。

「それに、オレは人間以外の異種族でも話し合いが出来るならそれで良いって主義だ。だから、人類主体の国家の中ではここが一番居心地が良いんだ。帝国も良いんだが…あっちは冒険者の仕事無いしなあ。」

「それは、仕方ないですな…。」

ニグンは内心で頭を抱えていた。

竜王国へのテコ入れついでに頼まれたこの任務。

いきなり劇薬とも言えるクアイエツセを投入するのは憚られたし、いきなり漆黒

聖典を動かしては殺し合いになりかねない。

となると、適度な実力もあって、特に実力行使の相手と看做されない位の實力者として挙げられたのがニグンら陽光聖典だった。

「本国でもスルシャーナ様の信徒は大勢います。そして、現在の人間至上主義に反対している者もまた同じく。」

「そんな中、オレが帰ってみろよ。火種になりかねん。」

ニグンはこの副任務が失敗になる事を悟った。

実際、彼女が言った通り、熱心なスルシャーナ信徒で漆黒聖典上位級の實力者が法国に戻った所で上層部と反りは合わないのが明白だし、今言った通りの可能性も出て来てしまう。

また、如何に漆黒聖典でも上位の實力を持っているであろう彼女でも、全てを叩き潰して法国の在り方を左右する事は出来ないし、人類の守護者が悪戯に消耗する事は本人も望んでいない。

かと言って、人類が絶滅する様な事態もまた同様だ。

故にこそその冒険者としてのピーストマン狩りなのだ。

実際は、スルシャーナの件は嘘八百なのだが。

単純に彼女の性格と元日本人としての感性、そして転生したという経験上、法国の中で最も合っているのがスルシャーナであったというだけなのだ。

他はファンタジー世界らしく、微妙に十字教染みた匂いがあるので合わない判断したのもあるのだが。

「分かりました。この件については非常に残念ですが、そういう事情であれば仕方ありません。」

「ご苦労さん。んじゃ縁があればまたなく。」  
こうして、突然の邂逅は幕を閉じた。

.....

「あーあ……。」

宿屋でごろりと寝転がりながら、クレマンティーヌは思う。

「これってまるでゲームだよなあ……。」

そう言って、上に伸ばしていた右手の手首から先が突如消える。

アイテムボックスと言われるプレイヤーやNPCのみが使えるとされる異能の一つ。

ユグドラシルの存在を知らない彼女からすれば、それは正にゲームの様な有り得ない現実だった。

「よっと。」

取り出したのは、短くも鋭い刺突特化のスティレットだ。

彼女は戦闘中だろうが、こうしてアイテムボックスから武装を取り出し、素早く交換したり、隠し武器や射出して遠距離攻撃に使用したりしている。

そのため、暇な時はこうして収納しているアイテムの順番なんかを弄ったり、その効果なんかを確認する事により、何時でも効率よくアイテムを取り出し・使用できるとしている。

「ステータス。」

呟くと同時、空中に彼女だけが見えるステータス・装備一覧が表示される。

それによれば、今の彼女のレベルは相当に高い。

総合レベルを80として、種族レベルが神人LV10であり、職業レベルは戦士LV10、ソードマスターLV5、シールドマスターLV5、ソードダンサーLV3、ウエポンマスターLV8、軽業師LV5、クレリックLV7、更に希少な聖騎士（ジーニアス）LV3、ビーストハンターLV3、シールドロードLV2等の上位職業も持っている。

この詳細を知れば、法国は是が非でも彼女を管理下に置こうとするだろう。

何せこれ程の能力は、漆黒聖典でも第一席次か番外席次位しかないのだから。

「はあ：やっぱこれからどうするかなあ：。」

これから先、どの様に育成を進めるべきか？

彼女の今現在の悩みはそこに尽きる。

正直、ソロ専門の彼女からすれば、このまま器用貧乏ルートを行けば良いのだが、今後誰かと組む事があれば、やはりある程度専門分野を決めておかねばならない。現状の彼女はどう見てもどっちつかずの器用貧乏であり、軽業師なのに盾使いを取得している事からもそれは伺える。

正直、主な標的であるビーストマン相手であれば現状で問題ない。

一人で突撃して、蹴散らして、消耗したら回復する。

後はその繰り返しである。

ビーストマンの多くは陸生で、飛行する種族は基本的に来ない。

遠距離攻撃する個体はいるが、その数は圧倒的に少ない。

大抵は群れの長に付き従う位しか出来ない、人型の獣なのだ。

それでもその身体能力は並みの兵士を容易に凌駕する、人類としてははた迷惑な生物なのだが。

「ま、なるようになるしかないか。」

そう言って、彼女は本格的に寝入った。

彼女は知らない。

この半年後、死の支配者が眷属と拠点と共にこの世界にやってくる事を。

彼女は知らない。

その死の支配者がプレイヤーを、それに連なる者を探している事を。

彼女は知らない。

何の因果か、その死の支配者と友誼を結び、彼の眷属達から思いつき嫉妬され  
て死にそうなる目に度々遭う様になる事を。

彼女はまだ、何も知らない。

死の支配者が、何だかんだ愉快なポン骨である事を。

今はまだ、知らないのだった。

やっつけ仕事が半端ない

はあ鬱だ……やっぱお葉もらった方が良いのかな



## オバロ転生 ドラゴンが逝く

2128年、遂に日本初のDMMORPG「ユグドラシル」。

多くのユーザーを生み、反響を生み、後の多くのゲームへ波紋を与えたソレが、遂に終わる時がやってきた。

「あー、遂に終わりかー。」

それを廃課金勢にして廃人勢の一角たる桜井了子、PC名「桜花」もまた、その最後の時を迎えていた。

「終わりたくないなー。」

しよんぼりとした声で了子が呟く。

色々なゲームをやったが、それでも青春時代の多くを過ごしたこのゲームが終わってしまう事に、了子はどうしようもない寂寥感を抱いていた。

「でも、仕方ないよね。」

そう言って何とか自分を納得させる。

それでもしないと絶望で叫び出しそうになるからだ。

ああ、自分は何を希望にこれからの苦界を生きていけば良いのだろう。

「折角ワールドアイテムも手に入ったのに……」

アイテム欄を見れば、そこにはプレイヤーの誰もが驚くものがあった。

20と言われるワールドアイテムの中でもぶっ壊れと言われる一つ、運営に願う事でゲームシステムそのもの変更を行う「永劫の蛇の指輪／ウロボロス」。

それが今、彼女の保有している代物だった。

「あ、後3分。」

今、彼女は始まりの街を見下ろせる山の上にいる。

そこかしこで超位魔法や第10位階魔法、そして花火型消費アイテムが打ち上げられ、このゲームの最後を皆が嘆き、悲しんでいた。

「さようなら、ユグドラシル。」

つい涙腺が緩む。

10年以上をこのゲームと一緒に過ごしてきた。

それが終わるのは彼女の青春そのものが終わるようで、ただただ悲しい。

「あ、そういえば使わなかったっけ。」

アイテムボックスを弄ると、そこには三つの願い事を運営にお願いして叶えられる「流れ星の指輪／シューティングスター」という

「えーと、えーと……」

エリクサー病Ⅱもつたない精神によって結局使わずに来てしまった彼女。

それはウロボロスも同じなのだが、そっちはたまたま退会してしまった友人から貰ったものなので、コレクションとしての意味合いが強い。

しかし、こっちは自分の給料をかけてやっところさ入手したものだ。

今まで使わなかったとは言え、最後位はパーツと使いたい。

「素敵な旦那様と結婚できますように……と。」

パキン、と軽い音を立てて、指輪に嵌った三つの宝石の内の一つが割れた。

「……………うわ、我ながら恥ずかし！」

が、今更ながら羞恥と自己嫌悪と後悔で胸がじくじくと痛みだした。

「ま、最後だし、こんなアホな終わりも私らしい、か。」

そんな時、遂に最後の時が訪れた。

サービス停止まで、後1分を切ったのだ。

「さようなら、ユグドラシル。」

そして、全てが光に包まれた。

.....

「アイエエエエエエ!?」

気付けば、空中に投げ出されていた。

高速で落下しており、ぐんぐんと地面が迫ってくるのが眼下に見えている。

「あばばばばばばばb b b b…!!」

ジタバタと手を動かすが、しかしそんな事で揚力が発生する訳もない。

しかし、彼女は分かっているが、今の彼女の肉体なら、多少の揚力は発生できる。

手でも足でもない、尾と翼もまた無茶苦茶に動かされたため、僅かながら落下速度が下がり、尚且つ当初の落下地点からずれていく。

「何何何何何なんなのさー!？」

混乱のまま叫ぶ。

しかし、地面は、否、移動したせいで迫ってくる岸壁は待ってくれない。

「きゃあああああああああああッ!?」

そして、勢いよく岸壁へと頭から突き刺さった。

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!!!!!!!!

.....

「っ、敵襲か！」

ガバリ、と定位置の玉座からガバリとこの地の主たるツアーが起き上がった。

アーグランド評議国の永久評議員にして白金の竜王ツァインドルクスⅡヴァイシオン。

先代竜帝の息子たる彼は、嘗て父と仲間達が敵対し、殺しあった八欲王の残した武器を管理し、更にその優れた知覚能力を活かして広範囲を監視している。

最近では主にスレイン法国を監視しているとは言え、自分のお膝元を留守にしない。

故に、それをすり抜けられる者は限られている。

「100年の揺り返し、プレイヤーからの攻撃か。」

それを理解し、世界への影響を抑えるために掛けていた己の体への「縛り」を解き放っていく。

自分の父とその仲間達が敗れた者達と同格の相手に油断も慢心も即座に死に繋がると判断しての事だ。

その威容、その力を知れば、如何なスレイン法国の漆黒聖典とは言え、命を落とす覚悟をしておかなくても、全滅は免れない程だ。

ツアアは間違いなくこの世界最強の存在にして、この世界の守護者だった。

「いっだいいだいいだいい〜!」

「」

だからこそ、進んだ通路の先、落下してきた大質量によって崩落したそこで頭を抑えて泣く薄紅色の鱗のメスドラゴンの姿に、目を丸くしたのだった。



転がっているアイテム類はユグドラシルで見られるものだが、先程落ちてくるま  
でに見た砂漠の地形や動植物は見た事がないものだった。

「ここ、何処なんでしょうか？ユグドラシルでは見覚えのないエリアなんですけ  
ど…。それにツアーさんもプレイヤーなんですか？それとも運営の方でしょうか  
？」

「あー、うん、じゃあ説明するか落ち着いて聞いてくれるかい？」

「は、はい。」

桜花の言葉に、諸々の事態を大体把握したツアーは、桜花に残酷な真実とこの世  
界の事を話し始めた。

「桜花、この世界は君の知るゆぐどらしるではない。僕はプレイヤーでもうんえい  
でもない。完全な異世界で、僕はこの地に住まう竜王の一人なんだ。」

「はえ？」

そして、ツアーは語った。

この世界の成り立ち。

即ち、異世界と100年周期で繋がる性質。

600年前より訪れるユグドラシルからのプレイヤー達。

彼らによる世界への大きな影響についてを。

そして、それらは一方通行であり、こちら側から戻る手段は無いという事を。

無論、権力者の常套手段として、その中に自分に不利になる様な情報は混ぜていないが。

「……………」。

大凡一時間程の説明を聞いた後、桜花は頭を抱えて蹲ってしまった。

(無理もない。荒廃してるとは言え、もう故郷に帰れないんだから。)

自分も故郷であるアーグランド評議国を離れ、ここでこうして危険な八欲王の遺産を管理しているのだ。

何とかこの都市を移動できないかとも考えたが、下手に人の目の届く所では良からぬ考えを抱く者も出る。

つまり、ツアーは現状ここにいないなければならない。

自身の境遇と経験から、ツアーは竜としては余りにも若い桜花へと同情した。

「ふううううう………」。

そんな中、桜花は意識して深く息を吐いた。

そうやって何とか精神を落ち着けようとして、それから何とか言葉を発する事が出来た。

「取りあえず、私は向こうには家族もいません。友人と呼べる程に付き合ひの濃い人もです。強いて言えば向こうに残してきた買って読んでない本とかが気になりませんが、それだけです。」

その名の通り、美しい桜色の鱗、銀色の角と濃い茶の瞳の愛くるしいメスの竜は、故郷への慕情とこの理不尽への怒りが縋い交ぜになった心を押し殺す様に、重々しい声で現状を告げた。

「だから、あまり向こうへの執着は無いんです。」

「そうかい…。」

無理して感情を押し殺す事はない、と言いたいツアードが、それは出来ない。

こうなってしまうからには、彼女にはこの世界に適応し、騒ぎを起こさないように暮らして欲しい。

そ■て、願わく■僕■の■いに…

「ん？なんだ、これ？」

不意に思考にノイズが走った。

余りにも自然に入り込んできたソレに、ツアーは気づくのが遅れてしまった。

「あ、あ、あああ？」

「っ、桜花!？」

不意に、この場にいるもう一体のドラゴンへと声をかける。

しかし、その姿を見て、ツアーは彼女にも何らかの異変が起きていると悟った。

彼女は動揺したままウロウロと落ち着きが無くなり、尾を立てている。

その姿を見て、何故かツアー自身もまた落ち着きが消え、焦燥感に似た何かが胸に満ちていく。

「なん、だ、これ？」

長い事生きているが、こんな事になったのは初めてだった。

亡くなった父やその友人達なら何か分かるかもしれないが、彼らは全て八欲

王との戦争で死亡済みだ。

そして、そもそもこの場には彼女と自分しかない。

自分達でどうにかするしかない。

「桜花、落ち着いて、気をしっか、!？」

振り向いた桜花の姿を見た時、ツアーの頑丈な心臓がドキリと大きく跳ねた。美しい、可愛い。

女性を評する経験なんて無いツアーをして、彼女は美人としか言えなかった。艶やかな薄紅の鱗、細くとも長くしなやかな尾、先端がきゅっとしまった手足、そこだけ色が白に近いお腹、そして自分の鱗と近い色の角。

同種か近似種なのに自分とは違う、細くて嫺やかな体。

穏やかさを感じさせ、濃い茶の瞳は、今は動揺と状態異常によって潤み、初見にはなかった色気を感じさせた。

ごくり、と今まで誰とも番となった事のないツアーは喉を鳴らしてしまった。そして、無意識に尾が震え出し、ゆっくりと桜花へと近づいていく。

一歩ずつゆっくりと、万が一にでもメスを怯えさせて、逃げられないように。「つあいさん、おかしいの、なんか、からだが…。」

「大丈夫。大丈夫だから…」

一体何が大丈夫なのか、ツアー自身にも分からない。

ただ分かるのは、本能がこの状態の解除方法を知っているという事だけ。知らず荒くなっている呼吸に気づかないまま、ゆっくりと近づいていく。

「少し、大人しくしててね。」

自分よりも小柄な桜花の背に押し掛かる形で、ツアーは彼女の後頭部、正確には頭の付け根、人間でいう項に該当する場所を牙を立てぬように優しく噛んだ。

びくん！と桜花の体が跳ねたが、押し掛かっていたツアーの重さにより、跳ね除けられる事はない。

「い、いまのお…。」

「いや？」

「すごい、びくって、おどろいて、でもいやじゃなくて…。」

「そっか。」

へたり、と桜花の前足から力が抜け、上体が崩れてしまう。

そして、彼らは竜であり、そうすれば当然ながら衣服や鎧も着ていない部分は丸見えとなってしまう。

「じゃあ、問題ないよね？」

「え、あ？」

そして、ツアーは桜花の尾の付け根へと前足を沿えると、今まで経験した事が無い程に昂った己の分身を、知らず蜜を溜め込んでいる彼女の最も無防備な場所へと宛がった。

「行くよ桜花。大丈夫、責任は取るから。」

「あ、ああああ!？」

これ以上はR18規制に引っ掛かるので書かない。

書かないが、砂漠周辺の都市からは、何時しか白や銀、赤に桃色の子竜達が空を舞う様が見られるようになったとか。

これは死の支配者がその墳墓と僕達と降臨する100年前の事。

この世界の最強の一角、白金の竜王がプレイヤーの嫁を取るお話である。

「このおバカこのおバカこのおバカ！」

「いた、ぶへ、ごめんなさひ！」

「信じられない信じられない！なんで初対面の人にあんな事になるのよ!?我ながらもう訳分かんない〜!!!!」

「いやあ、あの時の君は本当に可愛かったねえ。」

「~~~~~!!記憶を失ええええええ!!」

「うわ、あぶな!?ちょ、それはシャレにならないよ！」

「うっさいうっさいバカバカバカーー！」

ともあれ、前途多難な夫婦生活はこれより始まるのでした。

Q ツアー回りのお話って少なくてね？

A だったら書けば良いじゃない。

Q 竜のプレイヤーっているの？

A あの運営と設定なら、いても不思議じゃないと思う。

Q これ、R指定…

A 少しだけだから大丈夫、だと思う。もしもの時は管理人さんから何か来るでしょ。

Q これ、主人公の好みってなに？

A 自分を大事にしてくれる優しくて頼りになる旦那様（ちょっと子供っぽい所有り）が理想です。

## 女神転生 短編 「うちの蠅王様」

リハビリとして最近嵌ってるメガテン系で一つ

「ベルじいさーん、どこー？」

とことごと、とあるサマナーが自宅の廊下で声を上げる。

「その様に叫ばずとも聞こえておる。」

すると、サマナーのすぐ横にある戸から威厳溢れる老人の声が聞こえてきた。

「あ、いたいた。注文のブルーチーズ買ってきたよー。」

「すまんのおサマナーよ。」

戸を開けたサマナーの視線、その先には身の丈3mを超える巨大な蠅の姿があった。

手には杖、首には髑髏を連ねた首飾り、口吻は槍の穂先が如く鋭く長く、四枚の

透明な虫の羽には不吉な髑髏が描かれ、その全身の甲殻は蠅と言うには余りに鋭く突起があり、全身から禍々しさと威圧感を発している。

そんな蠅とは思えない威容であるのに、確かにこの存在は蠅だと認識される。だが、それは当然のことだった。

「それと、いい加減ワシをベルじいさん等と言うのは止めい。」

「えー、可愛くて良いと思うんだけど。」

「お主くらいよな、その様な物言いをするのは…。」

彼の名はベルゼブブ。

地獄の最高君主にして蠅騎士団の創設者、悪霊と悪魔達の王。

聖書においてはヘブライ語で蠅の王、或いは糞山の王を意味する名。

サタンの側近にして地獄の副王であり、その実力においてはサタンすら上回るとされる魔王達の中においても最上級に位置する。

神託をもたらず悪魔であり、作物を荒らすハエの害から人間を救う力も持っていない。

また、怒らせると炎を吐き、狼のように吼えたとされる。

その起源は気高き主、或いは高き館の主を意味するバアル・ゼブル、つまり嵐と雨の豊穰神バアルの尊称から来る。

が、彼を祀る儀式が性行為を含めた淫らなものであった事から、ヘブライ人達によつて旧約聖書では邪教神とされ、新約聖書では悪霊の王として遂に悪魔にまでされてしまった。

その後は墮天以前からのルシファアの側近であり、最高位の元熾天使だったとも言われる。

なお、しょっちゅう失踪する上に地位も変動しちゃう変態上司の副官として地獄の事務仕事の3割を担当している苦勞人（悪魔に人というのも変だが）である。  
ちなみに、親友にマツカの鑄造も担当する財務のTOPにして宰相のルキフグスがいる。

.....

「はい、いただきます。」

「うむ、ただこう。」

そして穏やかな空気のまま、サマナーと地獄の副王の夕食が始まった。

普段は他の仲魔もいるのだが、このサマナーと最初に契約したベルゼブブは仲魔達の中でその格もあって一目置かれており、こうして時々二人だけで食事する事がある。

「うむ、今回も良きチーズだ。」

3mを超える身の丈を持つ蠅の王だが、その育ちの良さからテーブルマナーに関しては最上級と言ってもよく、細長いフォークでサイコロ状にカットされたブルーチーズ（近場の大型複合商業施設での最高級品）を食べる様は正に高貴なる者と言つて過言ではない（その口吻でどうやって食べてるかは置いておくが）。

その左手にはワイングラスがあり、注がれたワインをグラスの中で遊ばせて上品に香りを楽しんでからその口吻で飲んでる。

かつて神だった頃の名残か、ビールの類も大好きなベルゼブブだが、今日はワインの気分だったのでこうなった。

また、彼の前にはよく熟成された生ハムや新鮮なサラダ類が並べられ、見た目もまたよく気を配ってある料理だった。

「それだけで食べるのは僕にはきついけどね。」

サマナーの食事もほぼ同じ内容だがワイン等の酒類は無し、チーズも純正のブルーチーズは塩辛過ぎるといふ事でブルーチーズ含有の安いプロセスチーズとモツツアレラチーズ、更にカッターチーズと数種のジャムが置かれ、それにベルゼブの分同様にサラダと熟成生ハムがある。

それらを買ったばかりの食パンに挟んで、時折サラダ用ドレッシングなどをかけて食べていた。

「サマナーとこうして食卓を囲うのも、もう何度目になったかのう。」

ふと、懐かしむ様にベルゼブが呟いた。

今は生活も安定し、ベルゼブの好きな臭いの強い食べ物とお酒もこうして好きなだけ食べられる。

でも、二人が出会った頃はそうではなかった。

生き残るために精一杯で、弱かった二人は二人三脚でここまで走り抜けたのだ。

「もう数えてないけどさ…。」

サマナーが思い出すのはもう3年は前のことだ。

前世の記憶を思い出し、襲ってくる悪魔からここが女神転生系列の世界だと知り、辛くも遭遇したガキを返り討ちにし、たまたま起動してしまった悪魔召喚プログラムから超絶劣化した分霊であるベルゼブブを呼び出してしまった。

その日から二人は二人三脚でここまで駆け抜けてきた。

近場の異界を巡り続け、ガイア教とメシア教のパワーゲームに巻き込まれつつ、何とか地方に拠点を確保し、どうにかこうにか仲魔を増やし、レベルを上げ、悪魔合体と召喚を繰り返して戦力を拡充し続けた。

結果、あの葛葉に目を付けられ、拠点に査察を受ける等肝の冷える事態もあったが、それをきっかけに日本最強の霊的守護戦力たるライドウとの繋がりを得られたのだから人生分らないものである。

「これからも、こうしてのんびりしたいなあ。」

激動すぎる10代後半を過ごしたサマナーの、何一つ嘘偽りのない言葉だった。

「とは言え、次の依頼も来ておる。」

「分かってるよ。明日9時に出発ね。」

今では葛葉の下部組織であるヤタガラスから直接依頼を寄越される身だった。

ガイアやメシアからも時折届くが、基本的に時間が有り、尚且つ厄ネタでなければそれらも受ける。

そんな極々普通のNNサマナーが彼女だった。

「所でいい加減、酒に慣れておくつもりはないのか？」

「甘酒と缶チューハイ以外はノーセンキューで。」

そうして笑い合いながら、今夜の夕食も穏やかに過ぎていった。

.....

ベルゼブブにとって、自身のサマナーは実に愉快と思える人間だった。

最初出会った時は、奇妙な娘だと思った。

まるで野生の、それも手負いの獣の様だと。

本来なら人の身では測れない程の英知と力を持つ地獄の副王ベルゼブブ。

その超劣化分霊である彼からしても、その後長い付き合いになるサマナーとの出会いは経験が無かった。

二三の言葉を交わした後に恙なく契約した後、彼女は己の身の上を語った。

今にして思えば、そうする事で自身に現状を言い聞かせ、納得させようとしていたのだとも思う。

曰く、己は転生者であり、前世の成人男性としての記憶があると。

曰く、その中にはこの世界の様に人の世に隠れてアクマ達が跋扈し、それを利用して争う者達が描かれた物語があるのだと。

曰く、この状況もその物語の知識を利用して生き延びた結果だと。

事実、サマナーである娘がこれまで生き残れたのは彼女が転生者故の優れた才能を活かして己を鍛え上げ、その知識を活かしてアクマ相手に立ち回ったからに他ならない。

そうした話を総合した結果、休暇がてら現世に降りてきていたベルゼブブにとって、このサマナーと付き合うのは中々面白そうだと判断した。

それからの日々は、正に激動の連続だった。

近場の異界を梯子してレベル上げに勤しんでいたら、それらが目を惹きガイア系の弱小組織に強引な勧誘を受けてしまい、断ったら敵対してしまう羽目になり、高校の進学先を祖父母の家がある田舎に合わせ、地方へと逃げ出す事となった。

そこではガイアもメシアもいなかった事から定住を決定、小さな異界を消さない程度に攻略し続け、時折地元的神社等（非ガイア系）から依頼を受け、徐々に徐々に戦力を増強しつつ足場を固めていった。

そこで山奥の廃鉱山に出来た異界をこれ幸いとボスごと配下に加え、その異界を拠点として整備していった。

幸いと言うべきか、異界のボスは日本でも屈指の有名なアクマにして鍛冶に縁深いヤマタノオロチだった。

このヤマタノオロチ、元は鍛冶による伐採によって周辺の木々が無くなったが故に氾濫の頻発した斐伊川の化身であり、それ以前は農業に関わりの深い水神であり、生贄とされたクシナダヒメの姉達は水神に仕える巫女或いは伐採した鍛冶師達の娘であり水害に対する人柱だと言われる。

そうした縁もあって、ヤマタノオロチは多少の鍛冶の心得と農業の心得があった。故に地下水脈にぶち当たった廢鉱山は彼の蛇神にとってはそこそこ縁があり、それを調伏して仲魔としたサマナーはそれを生かして異界化した山で農業と採掘と鍛冶を行う事にした。

加え、他の仲魔に龍王ユルングという天候を操る虹の蛇神もいた事で農業生産に關しては加速した。

なお、人手ならぬアクマ手は異界内のアクマ達である。

おまけに同地域の農業生産効率が意図せず飛躍的に向上したらしいが、些細な事だ。

更に仲魔にした女神スカアハの知るルーン魔術によって異界を隠蔽し、防衛戦力として日本では馴染みの四聖獣や四天王を配置して万全を期した。

最終的には女神アリアンロッド（月の女神）と靈鳥ヤタガラス（太陽神の遣い）を配置する事で異界内の昼夜を弄る事で促成栽培すらやってのけた。

こうして非常にマグネタイトの豊富な環境で育成した作物は、それ相応の効果を得る。

一般的なものでは通常よりも生体マグネタイトの回復を早めたり、魔石の様に軽い怪我を回復するなどだ。

それを表向きは田舎の産地直送の作物として、裏向きにはDDSNETで生体マグネタイトの補給を促す食物として売り出したのだ。

これが売れた、滅茶苦茶売れた。

梱包が間に合わず、田舎の暇してるじーさんばーさん達に梱包のバイトをお願いする程度には売れた。

ついでに異界内で採取した木材（急成長するので定期的に伐採）も販売したら寺社系に売れまくった。

そこまで行って、サマナーは恐怖した。

「あれ、これ税とか確定申告とかどうしよ？」

無視すれば良いじゃんとはベルゼブブは言えなかった。

だってそんな事したら親友のルキフグスに何を言われるか分かったもんじゃなかったから。

金の怖さとキレた友人の怖さは骨身に染みんでいた。

最終的に近所の寺の伝手を借りてヤタガラスと連絡を取り、その商業規模から遂には葛葉が動く大事になってしまった。

「もしやばくなったらケツまくって逃げよう。」

「異議無しじゃ。」

こんな時のために逃げ支度は事前にある程度済んでいたもので、事はスムーズに進んだ。

が、結果的にはその心配は杞憂に終わった。

やってきたのが当代の葛葉ライドウだったからだ。

商売の規模がデカ過ぎると危惧した葛葉が本気出した結果だった。

内心サマナーと二人で恐怖に震えながら、何とか査察を乗り切ると、ライドウは葛葉・ヤタガラス・全国の寺社への格安販売及び専門の監視役と事務員の駐留を条件に今までの脱税を見逃す事となった。

サマナーはこれに飛びつき、ほっと胸を撫で下ろした。

もしこの世界で各勢力の戦争が拡大化して、東京が受胎したり核ミサイルが発射されたり悪魔召喚プログラムの蔓延で文明崩壊した所でこんな田舎にまで影響は出

ないだろうし、この異界がある限りは食うに困る事は無いのだから当然だろう。

それ以来、時折依頼か悪魔合体のために最寄りの大都市に行くのを除けば、後は生産一直線の日々だった。

つい先日はイシュタル？を召喚して度肝を抜かれたが、それも含めてベルゼブはサマナーを気に入っている。

そんな激動の数年を送る原因になったサマナーを、ベルゼブはびっくり箱と言うか何やらかすか分からない幼子でも見る思いでいつも眺めるのだった。

(尤も、破滅すればその魂を貰い受けるつもりではあるがな。)

そして、何れその魂は永劫自らの掌の上で弄ぶのだと、絶対に逃がさんと地獄の副王は囁うのだった。

どんなに長い付き合いと言えど悪魔は悪魔。

その好意の表し方は、悪魔なりの方法になるのだ。

「やあベルゼブ。また悪そうな笑みを浮かべているね。」

「閣下、態々女神に偽装してまで下界に来ないで頂きたい。」

「いやあ君が休暇した事もそうだけど、お気に入りが出来たって事でつい、ね？」

最近の悩みは女神に寄生した上司の処遇だろうか。

イシュタルは金星、即ち明星を司る古い女神だ。

元は明けの明星たる男神、宵の明星たる女神が習合した存在だが、その性質を利用してルシファーが潜り込んできたのだ。

曰く、「丁度良い所において更に金髪美女だったからつい☆」との事だった。

マジふざけんなとベルゼブブは思った。

普段は普通にイシュタルなのだが、時折こうしてルシファーとして振る舞うのだからマスターや他の仲魔達に見つかつたらと心臓に悪い。

特に根本的に大物になれないマスターは卒倒しかねない。

「いやあ彼女、とても良いね。金髪だったら連れ帰るのも考慮したんだけだ」「駄目ですぞ。」

ピシヤリと戯言を封じるベルゼブブ。

長い付き合いと言えど、自分の獲物を譲るつもりは彼には無かった。

「ふふ、分かっていると。からかっただけさ。」

「でしような…。」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる上司に、ベルゼブブはただため息をつくし  
かなかった。



## 女神転生安価風 SS 「うちの蠅王様」プロローグ

ダイスに関しては画像貼り付けが余りにも面倒だったので無しで。  
試験的な内容なので、突然消えるかもです。

「貴方は転生しました。新しい世界で生きていくに辺り、特典としてキャラメイキングを行います。」

・問1、貴方の種族は何ですか？ 3D10で一番大きい値で決定。

人間 …… 10

アクマ …… 1

その他 …… 4

結果、人間となります。

・問2、貴方の性別は？ 1D10で偶数なrank:: apk<sup>Ⓜ</sup>

結kah2+43r3/4.a

介入されました。強制的に女性となります。

・問3、貴方の属性は？ 2D10で決定。

L i g h t :: 一個目で1〜3

N e u t r a l :: 一個目で4〜7

C h a o s :: 一個目で8〜10

L a w :: 二個目で1〜3

N e u t r a l :: 二個目で4〜7

D a r k :: 二個目で8〜10

結kal<sup>+</sup>nmk<sup>+</sup>

介入されました。N..Nとなります。

・問4、貴方の家族は何人？ 1D6で決定。

結果、2。

家族は二人となります。

・問5、貴方の家族との関係は？ 1D10で決定。

両親：1～3

兄弟姉妹：4～6

祖父母：7～9

その他：10

結果、3。

家族は両親となります。

・問6、貴方と家族との仲は？ 2D10で一個目は父、二個目は母で決定。

小さければ険悪、大きければ良好。

結果、3..1。

父親からは嫌悪、母親からは憎悪となります。

・問7、余りにも家族ダイスが振るわないので追加の設定ダイスを振ります。1  
D10で決定。

実は血縁じゃなくて養子：1～3

実は浮気相手との子：4～6

実は互いに浮気相手有り：7～9

実は：10

結果、5。

問6の結果から、父親の浮気相手との子となります。

・問8、貴方の家計は？ 2D10で、一個目は貴方個人、二個目は家の資産。  
大きければ大富豪、小さければ借金有り。

結果、2..2。

どちらもそれなりの借金有りとなります。

・問9、家族はメシア・ガイア教等の裏の勢力と関係があるか？2D10で一個目は父、二個目は義母で、大きければ関わり有り、低ければ無し。

結果、2..1。

父親の仕事先の業務先の親会社の提携先位の関わりとなります。

・問10、貴方の素質は？ 7D10でそれぞれ筋力・敏捷・器用さ・魅力（精神・容姿）・魔力（生体マグネタイト）・知識（原作知識含む）・才能（成長上限＋成長速度）を決定。大きければ常人基準で一流、低ければ子供レベル。

結果、1..8..4..6..4..4..4..10。

筋力1、敏捷8、器用さ4、魅力6、魔力4、知識4、才能10

もやしっこで容姿はクラスで三番目程度だが、足の速さはかなりのもので潜在能力は超一流に届き得る。

・問11、貴方の年齢は？ 記憶が戻ったのは何時？ 2D20で決定。但し二

個目が一個目より大きかったら振り直し。

結果、4回目で15..4。

現在15歳だが、4歳の頃には前世の記憶が戻った。

・問12、貴方の引き取られるまでの境遇は？ 1D10で高ければ幸福、低ければ悲惨。

結果、6。

普通の生活だったようです。

・問13、あなたの現在までの学校での人間関係の良好さ及び親友の有無は？

2D10で一個目が高ければ良好で低ければボッチ、二個目が偶数で親友有りで奇数で無しで決定。

結果、5..5。

可もなく不可もなしなモブで、親友は無し。

・問14、裏社会と関わる原因は何か？ 3D10でそれぞれ悪魔召喚プログラム、野良悪魔、裏組織による誘拐で一番高い数値のものに決定。

結果、10..6..8。

誤って悪魔召喚プログラムを使用してしまう。

以上で基礎ダイスは終了。

今後は適宜振っていきます。

それでは本編へどうぞ。

.....

自分は転生者だ。

厨二病乙と言われそうだが、事実だ。

最初、記憶が戻った時は4歳で、母子家庭ながらもそれなりに幸せに暮らしていた。

だが、母の死（おそらく交通事故による過失致死）と共に借金が発生、血縁上の父親に引き取られるも、彼には別に妻がいた。

更にそちらはそちらで借金があり、生活は苦しかった。

また、自分は父親と母の浮気関係の末に出来た不義の子であるため、父とその妻との関係は最悪だった。

辛うじて栄養失調にならない程度の食事こそ出されるものの、それ以外では基本的に不干渉だった。

家では一部屋を与えられているが、それは出来るだけ顔を合わせないためのものに過ぎない。

母亡き後、引越してきた後の小・中学校では特徴のないモブ勢の一人（名前・ルート無しが惜しいレベル）だが、家庭環境に関しては先生方からそれとなく心配される程度には目をかけられていた。

不幸中の幸いと言うべきか、それとも転生者としての特典なのか、筋力こそ同年代の平均よりも相当低いものの、才能に関しては本物であり、我ながら何かを専門に鍛えれば一角の専門家になれる程だと思う。

が、それが余計に父親と妻の痛に障って悪感情を呼び起こす悪循環。

正直、何時食事に毒でも仕込まれるなりされそうで怖い。

早い所独立したいのは山々だが、そうもいかない。

日本の義務教育は小中だが、近年は高校まで学歴があるのが当然とされている。そのため、給食の無い高校へ、贅沢を言えば大学まで行くには当然ながら奨学金の第一種に受かるしかない。

大変な学業に加え、バイトを相当しなければ食費もままならない。

今現在は近所の新聞屋さんのご厚意で朝の新聞配達と新聞のチラシの折り込みのバイトをさせてもらっているが、そんなものでは焼け石に水でしかない。

それでもどうにかこうにか中学卒業間近まで漕ぎ着ける事は出来た。

(何とか割の良いバイトとか無いかねえ…。)

幸いと言うべきか、借金の額は【三桁】万円であり、普通のバイトでも年単位で頑張れば返せる額ではある。

(と言うか、相続拒否すりゃうちの分は消えてたかもしれないなあ…。)  
が、ダメ！

小銭を惜しんだクソ親父殿がうっかり相続しやがって、怖いおじさん方に目を付けられてしまったのだ。

おかげで我が家は不定期に事務所○から電話がかかってくる。

(このままじゃ人身売買かねえ……)

急いで身を隠すか独立するべきと言っても、こっちは未だ中学三年生であり、卒業を控えた身でしかない。

有り金も何とか稼いだ3万円しかない。

幸いというべきか、推薦入試&奨学金第一種は合格済み。

(内臓切り売りは嫌だぞ流石に。出来れば金持ちのボンボンの情婦とか泡に沈むとかにしてくれ……)

が、このままでは卒業に前後してタイムリミットが来るのは确实。

何とかしようにも良い考えは浮かばない。

「はあ……」。

溜息をつきながら、学校のコンピューター室にあるPCの操作を続ける。

自分以外はいないPC部ならぬ愛好会の活動なのだ。

今時PCの扱い位出来ないとなりの仕事も出来ない。そう先生を説得して特別に愛好会まで設立させてもらって、午後はここか図書室や図書館に籠って勉強の日々だ。

それ以外は日々これバイトである。

加えて、今時の求人はこうしてネットで見た方が早いし多いし、場合によっては履歴書も殆ど必要ない。

まあ内容はお察しレベルだけどね！

「って、ん？」

不意にアングラの、違法スレスレのブラックバイト（金だけが多いが危険多し）を眺めていると、不意に変なページに跳んだ。

その名も：

「悪魔召喚プログラム…？」

口に出して、ふと久しく忘れていた前世の記憶が刺激された。

悪魔召喚プログラム…：確か、前世で見たゲームの…ATLUSだったか？

素早く思い出した単語で検索をかける…：が、そのどれもがヒットしない。

加えて、妙な掲示板を見つけたので見てみると、そこには悪魔召喚プログラムに

関しての噂や憶測、実際に開いてみた場合（生き残った者限定）の話まで出てきた。

「おいおいマジかい。」

漸く分かった。

このクソツタレな世界は、自分が思った以上にクソツタレだったという事だ。

この世界、シリーズのどれかは分からないけど、メガテン系世界だ。

「っ!？」

不意に、今まで放置していた悪魔召喚プログラムが起動していた。

自分は何も触っていない。

なのに勝手に起動していた。

背筋にぞっとするものを感じながら、咄嗟にPCから延びる電源ソケットを引き

抜く。

これが通常のウイルスなら止まる筈。

だが、止まらない。

据え置きバッテリーを内蔵していないPC、完全に電源を断った筈のその画面には処理を続行する悪魔召喚プログラムが映っていた。

（逃げる…悪手じゃないけど無謀。私の生体マグネタイトを燃料にしてるだろうか  
ら居場所も分かるし吸い殺される。戦う…何の武装もなしにアクマに勝てる程の策  
はない。そして、もし放置したら学校の誰かが襲われるかもしれない！）

こんなクソツタレな世界に未練はないが、死んでも魂を囚われかねないこの世界  
では迂闊に死ねない。

加えて、親しい友人はいなかったとは言え、世話になった先生方に迷惑をかける  
ような事はしたくない。

（武器になりそうなもの…：工具が棚にあったっけ。）

PCの清掃のためにカバーを開ける時用の大振りのマイナスドライバーを右手に  
持ち、更に小さなマイナスドライバーを一本ポケットに忍ばせる。

（ああもう！我ながら無謀な事してるなあ！）

そして、遂に召喚プログラムがその工程を完了した。

af 主人公は何を召喚したのか。1D10で決t a h::f d a j a @ k f [ a m p ] k a、

介入されました。

結果、

「我が名は魔王ベルゼブブ。我が力、使わぬ手はあるまい？」

魔王ベルゼブブ（超劣化分霊）が召喚された！ きき !

「……………魔王？」

「うむ。」

「……………地獄の副王にして時にはルシファーよりも上とされる？」

「如何にも。」

「掌 サ イ ズ で？」

「まあ、の…。」

そつと掌に余りにもちっぽけになってしまった魔王様を載せる。

その力は素人の自分から見ても余りにも弱弱しく、文字通り吹けば飛ぶのではないだろうか？

超劣化分霊の肩書きに他意は無く、この魔王様はただ只管に弱弱しかった。

「取りあえず、お互いここで死にたくは無いんだし、契約してみませんか？」

「仕方あるまい。」

お互いにげっそりとやる気やら根気やらを削られた状態で、それでも何とか私達は初めての契約を交わしました、まる

「で、どうしてそんな状態だったんです？」

「偶には息抜きに地上に出ようと思っただけ。そしたら本体が分霊作ってる所にルシファー様がやってきてなあ…。」

「あ（察し）」

「まあ将来性抜群のサマナーと契約できたし、良しとしておこう。」

「ん。じゃあ今後ともヨロシク。」

「うむ。所でサマナーよ、どうやってワシをCOMPに入れる？このぴーしーとやら、お主の持ち物ではあるまい。」

「……………数日待って。何とかするから。」

## ストパン転生ネタ 101人ウィッチ

リハビリー

なんか若干消化不良というか書き方忘れてる…

時は1940年、瘴気が薄く混じったカールスラントの空。

そこでは異常な光景が広がっていた。

「B-2、これより対空射撃開始。」

「A-9、航空型の先行部隊と接敵、戦闘開始。」

「D-8、地上型の活動を観測、射程距離まで後…」

首都ベルリンを守る防衛線の最前線、そこには全く同じ容姿を持った1000人のウィッチ達が揃い、ネウロイの波状攻撃を迎撃していた。

全員が黒髪黒目で、その顔に幼さを残したままの彼女達。

その行動にはどれも迷いは無く、歴戦のエース達でも舌を巻く程に銃火器及びス

トライカーの扱いが優れていた。

特にウィッチの消耗から余っていたストライカーユニット、その中でも陸専用ユニットに関しては対地砲撃・対空射撃両面において凄まじい戦果を叩き出していた。しかし、彼女達の真価はそこではない。

「C—4、いきま—す！」

「F—2被弾！いきま—ず」

被弾し、戦闘継続が不可能になった彼女達は、躊躇わずに爆弾や弾薬と共に敵に特攻し、一切の迷いなく自爆していった。

しかし、奇妙なことに死体は残らない。

血の一滴、肉の一片、骨の一欠けらすら。

それはそうだろう。

彼女達は皆、たった一人のウィッチの作り出した分身体。

魔力で構成された使い捨ての人形なのだから。

「航空型の第三波確認！」

「地上型第四波の殲滅完了！」

100人、否、100体もの使い捨て可能な、実戦経験豊富なウィッチ。

彼女達は完全に武器弾薬が尽き果てても、その体そのものを武器に最後の一人を残して戦い続け、遂にはベルリンからの市民脱出までの時間稼ぎを成し遂げた。

その後の1941年、カールスラント皇帝より彼女達（正確には一人）には黄金柏葉剣ダイヤモンド付騎士鉄十字勲章が贈られる事となった。

.....

「ストパンなんて予想できるかアホー!!」

しかし、本人は割とそんな事どうでも良かった。

この世界に転生して直後に家族を亡くし、残った家族が祖母一人であった彼女。だがしかし、そんな祖母も病気で亡くなり、どん底に落ちていた彼女は祖母の生前の友人やご近所さん達のおすすめで長期の旅行に出かける事にした。それも海外に。

「英語と一応ドイツ語も出来るけど……ブリタニアとリベリオンはご飯美味しくな

さそうだし、カールスラント行ってみよっと。」

彼女はストライクウィッチーズという作品をそこまで詳しく知らなかった。

精々が主要な登場人物の一部だけであり、ウィッチとしての適性があっても軍に入るつもりが無かった彼女はストライカーユニットの事も知らなかった。

故にこそ、その不幸は起こってしまった。

「ダキア大公国、ネウロイ上陸。」

新聞の一面にデカデカとこの記事が載った時、彼女はダキア大公国の隣のオストマルク、そこよりのカールスラント領内にいた。

そこからは血相変えての脱出劇である。

一応世話になった古いホテル（民宿？）のお婆さんには「ダキアとオストマルクが危ない、軍備が不足してすぐにネウロイにやられるから逃げる」とだけ告げて、速攻で荷物を纏めてリベリオン又は扶桑行きの船を探す…が、ダメ！

既にとこの港も国外行きの船は一杯らしく、予約待ちとの事なので近場のカールスラント国内への移動ルートしか残っていなかったのだ。

慌ててそちらへの馬車便に乗ったのだが、こういう時に慌てて乗ると碌なことに

ならないと相場が決まっている。

結果、圧倒的物量と瘴気を活かしたネウロイの軍勢によりオストマルクは早々に国外脱出&泥沼の撤退戦を開始、それによりカールスラント方面にすら航空型ネウロイの侵入を許す事となり、見事にネウロイの侵攻ルート上に出てしまったのだ。

「死・ん・で…」

カールスラント軍は脆弱なダキア軍や機械化の進んでないオストマルク軍と違い、物凄い奮闘を見せた。

しかし、避難もままならない都市部で民間人を守りながら、ネウロイの圧倒的物量を相手にするのは余りにも力不足だった。

前線はあっさりと崩壊し、制空権を辛うじて支えていた少数の航空ウィッチ達もまた壊滅し、組織的な行動を封じられ、陸軍も司令部を攻撃されて指揮系統を喪失、事実上壊滅した。

「たまるかああああああああああ!!」

故に、彼女は吠えた。

撃墜された航空ウィッチの死体から未だ開発されたばかりのストライカーユニット

トを剥ぎ取り、半分以上射耗したライフルを片手に、彼女は空へと飛び出した。

そして、当然の様に死にかかった。

当然と言えば当然だ。

正規の訓練を受けたウィッチ部隊が壊滅する様な戦場で、尚且つ既に友軍が壊乱して掃討戦を超えて殲滅戦に移行している戦場で、多少スペックが高くともまともな訓練を受けていないウィッチの卵が生き残れる道理は無い。

寧ろ離陸直後の無防備な瞬間に撃墜されなかつただけ幸運だったとすら言える。当たらない射撃での牽制を早々に諦め、死にももの狂いで回避に徹し、僅かながら知識があるからこそ展開できたシールドを使って何とか戦域から離脱しようとした所で、その幸運は尽きた。

三度目の被弾で、完全に体勢が崩れた。

「っ！」

だが、それでも彼女は諦めなかった。

生存本能に導かれ、動物的直観と激情のまま、その才能を開花させた。

が、本人は後に記者に対してこの時の事をこう語った。

「この時、こうしないと生き延びられなかったからそうしたが、この時固有魔法に覚醒しちゃったせいで扱き使われるようになったんだよなあ…。」

彼女の目の前、今にもネウロイのレーザーが迫る所に、自身と全く同じ姿、同じ服装、同じ装備の者が現れた。

まるでドツペルゲンガーの様なソレは、彼女を突き飛ばして射線上から追い出すと、身代わりとなってレーザーの中に消えていった。

混乱し、錯乱し、唐突に気づく。

そうか、これが私の固有魔法か。

「出る……」

仕留めそこなったのを確認した航空ネウロイ達が徐々に集結してくる。

だが、そんなものに見向きもしない。

今彼女が向き合うべきは、己の内にこそあるからだ。

「私iiiiiiiiiiiiiiii!!」

そして、人々が死に絶えつつある街の空に、20人ものウィッチが出現した。

.....

それから彼女は頑張った。

魔力さえあれば幾らでも出せる武器弾薬と身代わりに使い捨て可能な自分の分身をフルに活用し、局所的な航空優勢を作り出し、その隙をついて後方でまだ頑張っていたカールスラント軍へと合流したのだ。

その途中、少数の航空型ネウロイを撃墜して地上軍及び市民の脱出を手助けしたのは善意からではない。

軍機の塊であるカールスラント軍製ストライカーユニット及び武器弾薬の無断使用なんて事をしでかした自身の身の安全を確保するためだった。

また、機械化が他の欧州軍よりも進んでいたカールスラント軍ならば無線機をちゃんと持っているかと判断し、事実彼ら陸軍の救助後の接触によって正確な後方地帯の位置を掴む事が出来た。

だが、それは彼女が接触した人間が多くなる事を意味する。

敗走し、疲弊した兵士達。

家族を殺され、故郷を追われ、着の身着のまま歩く人々。

彼らはずい先日まで、平和に暮らしていた。

その中には、つい先日まで自分もいた。

その中には、きつと自分が世話になった人達もいた。

そう思ってしまったてからは、彼女は見捨てる事なんて出来なくなってしまった。

「私が護衛につきます。ネウロイが来たら、全速力で移動してください。」

気づけば、そんな事を口走っていた。

彼女は普通の人間だ。

ちよつと異常なウィッチで転生者だが、中身はただのオタボッチだ。

平成日本では珍しくもない、災害時でも妙に律儀に協力する日本人の性を受け継ぐ、困っている人を見捨てる事に凄まじい罪悪感を覚える極普通の平平凡凡人間だ。

そんな極普通の感性を持つ彼女に、カールスラントの人々を見捨てる事は選べな

かった。

最後方たるベルリンに至るまで、5度の戦闘があった。

最後の一度を除いて、ウィッチ戦力は彼女だけだった。

故に、彼女にかかる負担は凄まじいものだった。

たとえ分身しても魔力消費は相当なものだし、何より本人が意識を失えば分身もその装備一式も消える。

ネウロイがやってきて、撃退するまで彼女は決して休めない。

避難民を守るため、兵士達を守るため、彼女は自分達を使い捨てる事を覚えた。

特にシールドを用いた近接戦闘と内在魔力を用いた自爆は弾薬に乏しいがためによく活用した。

ストライカーユニットは道中回収した残骸を用いて二個一、三個一して性能が低下する事を覚悟しながら何とか騙し騙し使い続けた。

そこまでやっても、取りこぼしは多かった。

一手間違えば、何人も死ぬ。

泣いた事、責められた事は一度や二度じゃないが、それを庇ってもらった事も同

じ位あった。

軍人として、ウィッチとして正規の訓練を受けた事の無い彼女にとって、その撤退戦は余りにも過酷だった。

一日に何kmも非戦闘員と共に歩き続ける。

遅々として進まない避難民の列に業を煮やすものの、年嵩の兵士達や大人達に窘められるまま、魔力の消費を控えるために優先的に睡眠と食事を貰う。

でも、それらは彼らが自分の分を削って捻出しているのを知っていた。

そして、そのお礼を言う前に彼らがネウロイとの戦闘で散っていくのを何度も体験した。

皆が皆、誰も彼もがポロポロになって、漸くベルリンまで後数日という所で、これまで以上のネウロイの襲撃を受けた。

武器弾薬の殆どを消耗し、食料も水も医薬品もほぼ底を付いた状態。

そして、彼女のストライカーユニットもまた連日の無茶のつけがやってきたのか、遂にガタが出ていた。

「皆さん、走ってください。時間を稼ぎます。」

昨日の四度目の戦闘から未だに回復し切っていない状態で、それでも残った比較的動ける戦力として、彼女は逃げなかった。

情も恩も義理もあり、何より後少しだけなのだ。

始まった空中戦は、それはもう酷いものだった。

もしまともなウィッチや空軍関係者がいれば、自身の正気を疑った事だろう。

何せ、戦闘開始早々に同じ顔同じ姿同じ装備のウィッチが次々とネウロイに向けて特攻したのだから。

シールドで身を守り、そのまま一切の減速無しに突撃し、道連れにしていく。

無論、そんな状態で衝突するのだからそのまま分身は死亡、形状を維持できずにネウロイの様に光となって消滅していく。

次々と空に光が生まれる中、戦闘開始から30分程で遂に本当の限界が訪れた。右のストライカーが突然停止したのだ。

幸い、その故障は今出している分身には波及しない。

しかし、今後出す分身には反映されてしまう。

極めて便利な固有魔法「分身」。

使い手のコピーを魔力ある限り無尽蔵に増やしていく強力な魔法だが、その最大の欠点は本体の不調が分身にまでダイレクトに反映されてしまう事だった。

「あ、やば」

初陣の時の様に、片肺で何とか空中を漂っていた所を狙われる。

分身を出す程の魔力もなく、そもそも魔力不足でまともな盾にならない。

詰んだ、と悟った時、しかしこちらを必殺の間合いに入れた筈のネウロイは、横腹から受けた射撃によって消滅した。

最後方、未だカールスラント正規軍が頑張っているベルリン所属のウィッチ達が救援に来てくれたのだ。

.....

「申し訳ないが、君にはカールスラント軍司令部への出頭命令が出ている。どうか我々と共に御同行願う。」

「」

そして、何とか後方である首都ベルリンに着いた後、緊張の糸が切れて着陸と共に気絶して病院行きとなった。

そんな本来なら長期入院しとくべき私が目を覚ますと、直ぐにやってきた軍人にそんな事を告げられた。

それでもって丁重に、且つ絶対に逃げ出せない様に周囲を囲われながら向かった先は、ここベルリンの司令部だった。

「申し訳ないが、今の我々では民間人でありながらも懸命に我が国の国民と兵士を守ってくれた君にまともな恩賞を与える事すら出来ない。」

「良いですから実家に帰してください。」

「その上、恥を承知で頼む。どうか残った我が軍のウィッチ達と共に、国民の脱出までこのベルリンの防衛をしてくれないだろうか？」

「良いですから実家に帰してください。」

「無念だが、現在の我々には怪異共を押し返す力が無い。ともすれば押し込まれて全滅すら有り得る状況だ。その中で君の見せた固有魔法は極めて魅力的だ。後払い

になるが、報酬は言い値を出そう。」

「良いですから実家に帰してください。」

「なお、これが受け入れられなかった場合、君を犯罪者として拘束した後に減刑を対価に強制的に参る。後払いかつある時払いで良いのでちゃんと書類にして払ってくださいね。んで扶桑行きの船手配して下さい。」

「了解した。とは言え、直接扶桑を目指すのは無理だ。一度リベリオン行きの船に乗ってもらって、そこからになる。他に質問は？」

「正規のウィッチ呼んで短期に過ぎますが訓練つけさせて下さい。後高性能な武器とストライカーユニットを。」

「直ぐに手配しよう。」

大体こんな会話の後、彼女は二度目の地獄ことベルリン撤退戦へと参加する事になる。

そして、半年にも及ぶベルリン防衛戦において、彼女は欧州の地にて歴史にその名をデカデカと刻む事となるのだった。

なお、彼女の存在は危うく扶桑国との外交問題になりかけたが、カールスラント側が誠意をもって謝罪&賠償を行った上に、国家として正式に約束したため、辛うじて表沙汰にならなかったそう。

### 固有魔法「分身」

??? の固有魔法。自身の分身を生み出す。

分身を生み出す際に身に着けていたもの（衣服他装備類）もコピー可能であり、理論上魔力が続く限り無尽蔵のウィッチを生み出す事が出来る。

生み出した分身は一定以上の欠損ダメージを受けると消滅する。

分身と本体は記憶を共有しており、分身の経験を自身に蓄積して極めて効率的な学習を行う事が出来る。

また、本体と分身だけでなく、分身同士においてもナイトウィッチ特有の無線通信コミュニケーションに酷似した独自の通信手段を有する。

この通信手段と元々同一人物という特性、更に幾らでも補充できるという長所から、本体が意識を無くす又は魔力欠乏にならない限り無尽蔵に手練れのウィッチ戦力を展開できる極めて強力な固有魔法である。

だが、強力な反面、欠点もある。

本体が意識を無くした（失神・睡眠・死亡の何れか）場合、分身が強制解除される事。

分身はあくまで本人のコピーであり、身体機能だけでなく装備や魔力の消耗等も本体の状態が反映される事

現状、100人以上の分身は不可能である事。

この三つだが、その欠点を補って余りある有用性なので、本体に護衛を付けた状態で運用される事となるのだった。



ストパン転生ネタ 101人ウィッチ その2

なんかネタが続いた。

やー主人公が不幸な話だと筆がのるといふこの悪癖、治らんな我ながらW

---

「くーん、きゅーん……」

犬が鳴いている。

いや、心配げなその顔を見れば、きっと泣いているのだろう。

「げほ！」

知らず止まっていた呼吸を再開する。

「どうやら」また「死にかけていたらしい。

最近では慣れたのでここまで酷くはならないのだが、それでもやはり臨死体験というのは生き物にとってはとても衝撃的なものなのだろう。

日々三桁近く、或いはそれ以上の早さで死んでいく分身達の経験と記憶を追体験

する。

それはつまり、分身達の体験した痛み・恐怖・絶望の全てを追体験しなければならぬ事を意味する。

一度体験した上で、日常的に百回は追体験している筈なのに、それでもやはり生き物にとって死とは恐ろしいらしく、その記憶は日々彼女の精神をやすり掛けする様に疲弊させていった。

そんな状態ならば、追体験を止めればよいのではないか？

確かにそれも可能だが、戦闘状況の詳細な把握及び経験として活かすためにはそれらの情報が必要不可欠だったのだ。

まるで薬と共に猛毒を飲み下すが如き所業に、心身両面が疲弊していくのを自覚する。

「水、水…。」

いつの間にか寝かされていた入院患者用ベッドから起き上がり、枕元の水差しから水を飲む。

ごくごくくと、知らず大量にかいていた寝汗のせい、酷く水が美味しく感じられ

る。

それでいて食欲は全然わかないのだから不思議だ。

軍医にまた栄養剤か点滴を貰わないといけない。

「くうーん……」

「大丈夫。まだやれるから……」

鼻先を押し付けてくる使い魔、ダルメシアンの子犬のブチが悲しげにこちらを見つめてくる。

その鼻先を以前より細くなったように見える手で撫でる。

そう言えば、この子の飼い主だった宿屋のお婆さんと親犬も、きっともう死んでいるのだろうか。

「約束したんだ。この場所を守るって。もう少しだから、もうちょっとだけ頑張る？」

その言葉はブチだけでなく、自分に言い聞かせる様だった。

ベルリン防衛戦線に参加するようになって、3カ月後の事だった

.....

「避難状況の進捗は？」

カールスラント軍首都司令部付き作戦会議室

現在では首都ベルリン及び未だネウロイの侵攻の及んでいない西部方面軍の最前線司令部として活動している此処は、現在首都の全国民を避難させるという無理難題を何とか完遂しようと踏ん張っていた。

「現在、首都近郊以外では制空権の確保が怪しいため、陸海の武器弾薬兵員を運ぶものを除いた全ての国内便を戦時徴収して進めてはおりますが、それでも未だ6割といった所です。」

「武器弾薬、とりわけ対ネウロイに必要な重火砲とその弾薬の補給が遅れています。幸い、歩兵用小銃や機関銃に関しては充足してはいますが……。」

「中将、やはり空路も活用すべきでは？」

「ダメだ。」

この場に詰める参謀達はいずれもエリート揃い。

しかし、この窮地を脱するには彼らをして極めて困難だった。

「“彼女”の今現在の疲弊ぶりは皆知っているだろう？首都の制空権維持だけでこのなのだ。避難便の護衛まで担当すれば、避難完了を待たずに壊れるぞ。」

断固とした中将の言葉に、参謀達も沈黙する。

彼女を徴兵したのは中将自身であり、その固有魔法から来る圧倒的戦果で周囲の懸念や反対を押し切ってはいるが、それでも不安は尽きない。

既に中将自身は不名誉除隊どころか銃殺刑を覚悟している節があるが、この状況で扶桑国との開戦理由になりかねない不祥事は余りにも危険だった。

「これ以上“彼女”への負担を増すのは禁止だ。」

「それは……まあ……。」

「仮に“彼女”がここで脱落すれば、待っているのは首都陥落及び未だ5万はいる市民と将兵の命だ。それだけは避けねばならない。」

昼間の内は“彼女”の100人ウィッチ隊の圧倒的物量によってどうにかなる。

しかし、消耗した彼女が戦闘後に気絶するように眠りにつくと、全ての分身は消え、彼女が目覚めるまで再展開は出来ない。

その穴をカールスラント正規軍の空戦ウィッチ達が死に物狂いで塞ぐ。

こうして首都近郊の制空権は確保されていた。

また、地上においても重砲の不足した場所には余っていた陸専用ストライカーユニットを装備した“彼女”達が展開し、使い捨ての盾となる事で辛うじて防衛線を維持していた。

正にワンマンアーミー、一人ウィッチ航空団とも言うべき大活躍だった。

戦闘すればする程、彼女の精神が分身たちの死の記憶で蝕まれるという欠点に目を瞑れば、だが。

「加えて、“彼女”達の挺身攻撃を見て、多数の人間が軍民間問わず精神的ショックを受け、一部では軍への批判が激化しているとの報告が……」

「やはりか……」

当然の結果だった。

ただ旅行に来ていた、異国の幼さの残る少女。

それを強力な固有魔法を持つウィッチだからという理由で、（見返りを約束しているとは言え）強制的に徴兵して最前線へと投入する。

良心的な人間であれば、眉を顰めるどころか司令部に怒鳴り込んでもおかしくない所業である。

現に既に“彼女”達に助けられた者達が軍民間わずに司令部へと連日に渡って抗議文を送っている。

その内容も極々真つ当な内容で、暴動染みた事は一切行っていないのだが、その数は現在も増え続けている。

また、“彼女”達の存在に大いに助けられている現場の将兵らからも嘆願書まで届いている始末。

加えて、未だ他国には漏れてはいないが、それでも避難した国民からどんな情報が漏れるかも分からない。

最悪なのはマスゴミに漏れて扶桑の世論が政府でも止められない程に過熱し、開戦に至ってしまう事だ。

「：陛下は、このことは：。」

「避難直前に、既に私自身の口から話したよ。」

事の次第を事後報告で聞いた皇帝陛下は中将を厳しく叱責した。

その上で全ての責任は自身にあると言い切り、「扶桑には余の方から謝罪しよう。その少女にもな。」という帝政国家の元首としては有り得ない事を述べたという。

そんな事を教えられた参謀達は愕然とした。

「それは、また……。」

「これだけの事をしたのだ。何としてももたせねばならん。」

だが結局、彼らの努力空しく、どんなに避難を急がせても、たくさんの“少女”と兵士達を生贄に現状を維持する事には変わらぬ。

そんなここ数か月のいつもの結論に落ち着くのだった。

……………

「……………。」

少女はまた眠っていた。

第二次ネウロイ戦争開始前と比べ、随分とやつれた顔をしているが、生まれて半年程度の子犬を抱きながら眠る様は年齢よりも幼く、そして悲壮感を際立たせてい

た。

「異常なし、と……。」

その一人と一匹に監視兼護衛役を務めるミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ少佐は毛布を掛けなおしながら、静かに見つめていた。

「少佐。」

「し、静かに。今ぐっすり寝てる所だから。」

周囲の警護に当たっていた兵士の声を、そっと押し留める。

ついさっきまで度重なる死の追体験に空っぽの胃から胃液を吐き、消えない幻痛に声もなく悶え苦しんでいた少女は今、半ば気絶するように眠りに落ちた。

本当ならとつくに後送扱いなのに、彼女一人抜けただけでベルリンの防空網には大穴が空く。

そうなればもう守り切る事は出来ない。

若くして少佐にまで上り詰めた優秀なウィッチのミーナだからこそ、それは痛い程理解できた。

「報告はあちらで。」

「は。」

“彼女”専用のテントから、二人は出ていく。

ミーナがちらりと最後に振り返ると、いつの間にか起きていた子犬だけがこちらに敵意の籠った目を向けていた。

「当然、か。」

「は？」

「いいえ、何でもないわ。」

内心の多くを飲み込んで、ミーナは果たすべき職務の続きへと向かった。

.....

「なあ……。」

「何だよ……。」

「あの子達、今日は何人目だ？」

「知らねーよ。数える暇なんて無かったし。」

「さつきウィッチの子達が言ってたんだけどさ、今日は207人だってさ。」

「増えたな…。」

「ああ。先月までは何とか100人行ってなかったんだけどな。」

「……………」

「“彼女”の寝てるテントの近く行くとき、叫び声が聞こえるんだよ。」

「叫び？」

「そう。それで野戦病院で聞く様な内容なんだよ。痛い痛い、熱い熱い、もう止めてーって。」

「おい。」

「それで軍医とウィッチの声も聞こえてさ、どったんばったんしながら鎮静剤急いで！って声も聞こえてから、静かになった。」

「それ以上は軍機だぞ。」

「分かってるよ。分かってるけどさ……………！」

「もう数便で避難は終わる。」

「その前に、あの子は死んじまうぞ。」

「……………」

「情けねーよな。国を守るんだって息巻いて軍人になったのにさ、実際はコレだけ？」

「言うな。」

「くそ、死にたくなってくる…。」

「それで自分で死んだら地獄に落ちても殺しに行くからな。」

「わあってるよ。」

「もう少しだ。もう少しだけ、俺達で踏ん張るぞ。それで“彼女”は御役御免だ。」

“彼女”がベルリン防衛線についてから半年頃

ネウロイの第12次大規模攻撃の前日のある兵士達の会話。

この第12次大規模攻撃の撃退の直前に最後の避難便が到着し、それと共に“彼女”と使い魔はベルリンを離脱。その直後ベルリンは陥落したものの1940年

9月まで持ち堪えた結果、全ての首都在住の市民及び非戦闘員の脱出に成功した。

そして、カールスラント皇帝は件の“少女”と共にリベリオン行きの船に乗り、

リベリオンに亡命政権を設立、その直後に駐リベリオン扶桑大使館に赴き、全ての事情を説明した上で真剣に謝罪と賠償を約束した。

---

次回はカールスラント皇帝の土下座外交&勲章授与の予定



## ストパン転生ネタ 101人ウィッチ その3

1941年2月、外交官らと共にカールスラント皇帝が扶桑へと来訪した。

欧州の権力者、取り分け王族が遠き極東の地に來た事は初であり、国民はこれを扶桑国が名実共に列強の仲間入りをしたと喜んだ。

「カ國皇帝來扶！对怪異での協力要請？」

「カ國皇帝、陛下と会見！」

「カ國首都陥落！リ國にて亡命政権設立！」

扶桑国内の新聞各社がそうセンセーショナルに書き立てる中、カールスラント皇帝は皇居へと入城した。

その後、皇帝が出てきたのは翌日未明であり、その間何が話し合われたのか知るものは誰もいない。

しかし60年後、当時の侍従長の日記が発見されると、にわかには再調査が始まる事となった。

曰く、「当時、カールスラント皇帝は陛下に何かを懺悔していた様だ。その内容

は人払いされて分からなかったが、声の様子から皇帝は落涙していたように聞こえた」と。

だが関係者の口は堅く、第二次ネウロイ戦争終結より50年以上経過する現在もわかっていない。

また、皇帝と陛下の会見より二日後にあった発表により、そちらの方の記録ばかり目立っており、日記への注目は直ぐに下火になったという。

「カ國皇帝の要請を受託！ 欧州派兵を決定！」

「対怪異戦争、欧州劣勢！ 派兵間に合うか？」

「求む扶桑魔女！ 海軍にて魔女募集！」

派兵の決定と共に、扶桑国は海軍を中心に大規模な対怪異戦力の増強を決定、同時に大規模なウィッチの増員を開始した。

加えて、ある情報がカールスラントより発表されると、民間からウィッチの応募が増加し始めた。

「カ國にて扶桑魔女が義勇兵として活躍！ 怪異多数撃破！」

「扶桑魔女、ベルリン防衛線に参加！ 避難までの防衛成功に寄与！」

「扶桑魔女、カ國皇帝より黄金柏葉・劍・ダイヤモンド付騎士鉄十字章を授与！」  
扶桑国出身の魔女が「義勇兵」としてカールスラントにて対ネウロイ戦に参加し、  
多大な戦果を上げ、カールスラント皇帝より直接極めて貴重な勲章を授与されたとい  
う情報が発表されたのだ。

……………

無論、事實は異なる。

カールスラント皇帝と外交官らは秘密裡にだが、事の次第を正直に、包み隠さず  
伝えた。

これに対し、扶桑国政府は当然ながら激怒した。

極々当然である。

緊急事態とは言え、自国民を無理矢理徴兵された挙句、高い能力があったとは言  
え心を病む程に酷使された。

この事実に対し、カールスラント側は一貫して謝罪に徹した。

事前にある程度話を通していたとは言え扶桑側の怒りは大きく、予定されていた艦隊の派遣も一時中止されてしまう程だった。

その後、本件に対する具体的な賠償及び外交的配慮の話へと移った。

当然ながら、事実をそのまま公表すれば、それこそ誰も得しない両国の開戦へと繋がってしまう。

そこで両国は件の“魔女”に関しては現地にて義憤に駆られた義勇兵として扱う事に決め、更にその献身的かつ英雄的な活躍を称えてカールスラント側でもつい最近新たに作った（現在一人しか受賞が内定していない）黄金柏葉・剣・ダイヤモンド付騎士鉄十字章を授与する事を決定した。

また、それに追加する形で一生を普通に生活するには困らない程度の恩賞を追加する形で“彼女”に関しては決着となった。

その次、扶桑国そのものへの賠償としてカールスラントが現在保有しているアジアにおける海外植民地（主にミクロネシアにある諸島等）の割譲で纏まった。

が、これでは不自然である上に、公表できる理由も無しに受け取れない。

そこで海外派兵の前例作り及びノウハウ構築、そしてカールスラントを除けば未

だ低い扱いを受けている扶桑国の外交的立場向上のため、中止されていた欧州への艦隊派兵を決定した。

これには主に扶桑海事変に参加した将兵及びウィッチを中心として、陸軍にも機械化の進んだ有力な部隊（陸戦ウィッチ含む）を中心に編成される事が決まった。しかし、規模が規模であるため、中止されていた艦隊の編成及び派遣には時間がかかる。

そのため、現在欧州及びリベリオンを中心に進んでいる各国から派遣されたウィッチを中心とした統合戦闘航空団の組織化に合わせ、扶桑海軍所属ウィッチを先行して派遣する事が決定した。

なお、その中には“彼女”の名前は無かった。

少なくとも、現段階においては。

………

都内の扶桑軍病院

その中庭にて、一人の少女がベンチに座りながら虚ろな目で空を見上げていた。その傍らにはすっかり大きくなったダルメシアンのブチがいた。

「……………」。

一切の表情もなく、ただただ茫然と空を見上げる少女は、優れたウィッチだった。空でも、陸でも、彼女は懸命に戦い続け、大勢の人々を怪異から守り抜いた。しかしただ一つ、自分自身の心までは守る事は出来なかった。

コラテラルダメージ、必要な犠牲と言ってしまうえばそれだけだ。

しかし、未だ年端のいかない少女を犠牲にする事は、本当ならどの国の軍でも思う所があった。

そんな事を言っていられない程には、今の欧州は地獄となっていた。

「くうーん……………」

心配する様に鼻を鳴らすブチ。

その頭をそっと慈しむ様に撫でる少女。

帰国早々にこの病院に来て既に半年近く。

既にカールスラント皇帝と外交団は大使を残して亡命政権のあるリベリオンへと

戻っている。

そして、欧州各国は今も襲い来るネウロイを相手に終わりの見えない戦争を続けている。

あの黒い怪異のクソ共が、未だカールスラントに陣取っている。

「……………」。

ギシリ、とブチを撫でていない方の拳を握り締める。

既に体の方は完全に回復した。

当初は静養と重湯、時々栄養剤の日々だったが、今現在は揚げ物以外は何とかいける。

カレーは……まあ一杯だけなら…（目逸らし

「行こうか、ブチ。」

「うおん！」

ハタハタと尻尾を振る使い魔に声をかけ、ベンチから立ち上がる。

もう十分に休んだ。

休暇は終わりだ。

「もう一度、欧州へ。」

世話になった宿屋のお婆さん。

ブチの母犬。

旅先で語らった気の良い人達。

自分を庇って戦って死んだ兵士。

自分の目の前で殺された兵士。

ありがとうと言って死んだ避難民。

ごめんなさいと泣く他のウィッチ。

すまないと涙ながらに謝った皇帝陛下。

「お父さん、お母さん、お婆ちゃん、ごめんなさい。」

皆が皆、私にとってはかけがえのない人達だった。

「私、行くよ。」

こうして、私はまた戦場へと旅立った。

後日、扶桑国内の新聞は一つの記事で持ち切りになった。

「カ國皇帝より勲章授与されし魔女」杉原千歳  
「欧州派遣艦隊へと参加す」

これは世界で最も有名なウィッチのお話

「黒鴉」「二人ウィッチ大隊」「ネウロイの天敵」と評された扶桑出身のウィッチ  
杉原千歳の物語である。

101人ウィッチ 完

はいこれで終わり！終了！閉廷！

理由？ストパン本編未視聴だからです！

幼女戦記×101人ウィッチネタ 101人魔導士 加筆修正

「終わった、か……。」

自分を除けば死体や廃材と化した戦闘機に瓦礫ばかり転がる戦場には、ただ血と臓物、硝煙と粉塵の臭いだけが漂っていた。

手からガランと弾切れしたMG42が零れ落ちる。

既に魔力も体力も、血液すらも無い。

ただただ、途方もない疲労感だけが体を包んでいた。

「長かったなあ……。」

戦った。戦い続けた。

恨みや憎しみ、生存本能や戦友達への友情。

もう止めるとも、十分だとも言われた。

それでも止まる訳にはいかなかった。

色んなものを託されて抱え込んで、遂にここまでやってきた。

此処は黒海を望むオデッサ駐屯基地。

地球上に残った最後のネウロイの巢攻略のための最前線基地。

世界中から集結した多数のウィッチと最新兵器が数多集まったこの場所で、ここ半年の間数えきれない程の戦闘が繰り広げられた。

そして今日、つい昨夜上がりを迎えてしまった自分が突入する味方の退路と基地を守るために残り、他のほぼ全てのウィッチが欧州最後にして最大のネウロイの巢へと突入した。

今日までに戦友たる宮藤の努力の結果、ネウロイ内の穏健派の説得に成功し、彼らは世界の裏側とでも言うべき本来存在した場所へと帰って行った。

そして、残った最過激派ともいべきネウロイ達は、人類との戦争へと邁進した。そこからはもう、説得など不可能な異形達との生存競争だった。

敵も味方も殺し殺され、上がりと戦死者が重なって精鋭揃いの第502・503統合戦闘航空団は解散・再編成する運びとなり、その実働のトップとして私が、補佐に宮藤が就く形となった。

多分にプロパガンタの強い部隊となってしまうが、それでも他を凌駕する圧倒的魔力量から自分と宮藤は最後まで最前線から離れる事はなかった。

そして10年、多大な犠牲の上に遂に私達は黒海に巣くう最後のネウロイの巢の破壊に成功した。

だが、自分もまた先達のようにヴァルハラに向かう羽目になるとは思わなかった。

「千歳！千歳！ねえ起きてよ千歳！」

「ん……芳佳、か……」

何時の間にか倒れていたらしい。

ああ、そうか、最後は分身も作れなくなって、生身で戦場に出たんだっけか……

「無事だったか……」

「私よりも千歳だよ！眠っちゃダメ！直ぐに治療するから……！」

泣きながら必死に私の傷を止血し、回復魔法を行使する宮藤。

だが、血を流し過ぎたのか、一向に回復しない。

いや、もう彼女も限界だったのだろう。

単純に魔力が足りないのだ。

「ブチ……。」

「きゅーん……。」

既に老犬と言つて良いブチを体から分離させる。

ダメージは自分の方に移したから、この子は無事に寿命まで生きられるだろう。私の我儘に付き合わせてしまったせいで老い先短い生になるだろうが、それでも最後位ゆっくり生きてほしい。

「ダメ！ 分離しちゃ間に合わない！」

「もう良い。良いんだよ芳佳……。」

見上げれば、珍しく空は青く澄み渡っていた。

あの日、また戦う事を誓った日の様に。

「私の戦争は終わった……もう、ネウロイはいない……。」

「黙って！ 何とか、何とかしないと……！」

視界が徐々にぼやけていく。

それでも耳から聞こえる芳佳の声から泣いているのが分かった。

「お前ももう、軍人は止めろ……料理人か医者になれ。戦う必要は、もうな

い……。」

「くきゅーん……。」

ブチが諦めた様に私の頭の横に座り、鼻先をすびすびと鳴らす。

ああ、もう自分でも分かる。

何度も見送った側の自分が、今度は見送られる側になったのだと。

「ありがと、よしか、ぶち……ここまでいっしょにいてくれて……。」

もうほとんどみえないや

そっか、ほんとうにしぬのってこんなにかくだっけ

ひさしぶりだなあ でもおばあちゃんやみんなにあえるかなあ

「そんな事言わないでよ！ここまで一緒に来たじゃない……！だから、一緒に扶桑に帰ろうよ！」

「ふふ……そうだね、またよしかのかれーたべたいね……。」

ああ、そういえば

「て……にぎって……さむいしねむくなってきちゃった……」

「うん、うん……！」

て あったかい

あ ぶちがかおなめてる

ふふ、あいかわらずあまえんぼうさんだね

ああ

「あつた、かい……………」

こうして、近現代史上最も著名なウィッチは、その人生に幕を閉じた。

その死は欧州と扶桑のみならずリベリオンからもかつての戦友達や弔問客が訪れ、戦没者の合同慰霊祭は異例の規模となった。

また、この際カールスラント皇帝や扶桑国皇族からは個別にお悔やみの言葉を贈られる等、その扱いは別格と言って良かった。

その遺体は最期を看取った戦友である宮藤芳佳他欧州派遣軍と共に帰国、彼女の故郷に埋葬されたという。

なお、後世において「アンサイクロペディアに嘘を書かせなかった人」「リアル超人勢」「もうこいつだけで良いんじゃないか？ 10選」「史上最も多くのネウロイを撃破した個人」と称される事となる。

.....

「む」

す、と目が覚めた。

随分と懐かしい夢を見ていた気がする。

周囲からは相変わらぬ砲撃の振動と地響きが絶えない。

ちらりと航空魔導士用の懐中時計を見れば、丁度交代の時間の3分前だった。

「よ、は、と。」

ぐいぐいぐいぎぎぎきばきばきと、久々のベッドでの睡眠で固まっていた身体を解き

ほぐしていく。

「出撃だぞチトセ！ さあ共和国の豚共を吹き飛ばすぞ！」

「分かった分かった。今起きるから待ってるよハンナ。」

今回の私の名前はチトセ・カーリーバー。

階級は少尉、現在はこの世界における第二次大戦時のドイツに相当する国家である帝国の陸軍所属の航空魔導師。

なんでそんな事になってるのかと言うと、また転生しただけの話。

ネウロイはいないが、魔導師という先天的に魔力を持った人間が存在し、それが軍事力の一つとして活用されている世界だ。

加えて言えば、極一部の魔導師は固有魔法を使えるが、これは見た所前世のウィッチのそれに酷似している。

また、魔導師はウィッチとは異なり男性も存在する。

と言うか、軍隊だけあって殆どの魔導師は男性だったりする。

で、現在は帝国の北方に位置するレガドニア協商連合（史実ノルウェーとスウェーデンを合わせた様な半島国家。商人連合を起源とする10人評議会がTOPの民主

制)が係争地に越境してきて開戦。

それに釣られて単体では帝国に勝てないと見た帝国の西方に位置するフランソワ共和国(ほぼ史実フランス)が宣戦を布告し、帝国の生命線であるルール工業地帯目指して進撃を開始。

それを防衛する帝国西部方面軍と激戦を繰り広げている。

時は1923年、帝国は内戦戦略による味方増援を待ちながらジワジワと戦略的後退をしながら共和国軍に出血を強要し続けていた。

で、そんな所に士官学校出で初陣かましたのが私と我が戦友殿1号である。

なお、2号が芳佳である。

「目標は？」

「敵魔導士1個大隊。こちらの観測魔導士狩りをしながら制空権を維持している。」  
「……まあいつもの事か。」

既に戦果を上げ過ぎて戦友2号共々昇進しているが、それでも敵が一向に減った気がしない。

まあこちらも向こうも陸軍大国なのだが、陸軍が多いのは当たり前と言えそう

なのだが…。

「さあ行くぞ！」

「あいよ。」

なお、ここまで我が表情筋は一切仕事をしていない。

前世での濃過ぎる戦争体験のせいで私本人も動いた覚えが無い程だ。

それと、私達が所属していた中隊は既に壊滅して一週間も経っているのだが、エースオブエース（敵航空魔導士を50人以上撃墜で登録）二人に無茶ぶりできるからと未だにそのままだったりする。

他の部隊の指揮下に入ったりは偶にあるのだが、いい加減その辺どうにかして頂きたい。

いや、下手なベテランよりも前世含めば軍歴長いし戦闘経験で言えば現代の人類でも有数だが、それでも何だかんだ数は力なのだ。

そんな私も今生では15歳、戦友1号ことハンナ・ウルリッヒ・ルーデルは16歳である。

前やその前の世界と生まれた年代が違う？

こう考えるんだ。

祖国の危機に自分の運命捻じ曲げて早生まれしたんだって。

実際、生まれた月日以外は以前聞いた出身そのままなので可能性が高い、と思う。

なんセルーデルだから…。

……………

ライン戦線上空 フランソワ共和国軍航空魔導大隊

「クソ、敵の対空砲火が厚すぎる！」

「隊長、これ以上は進撃どころか留まる事も困難です！」

「ええい限界か！」

彼らは自国の情報部の杜撰な仕事に罵声を浴びせながら、比較的手薄な地域に進攻、制空権を奪取し、観測魔導士狩りをしながら地上部隊の支援を行っていた。

協商連合に引き摺られる形で開戦した共和国だが、帝国西方方面軍が構築したライン戦線においてその攻勢は頓挫、現在は多大な出血を強要されていた。

「ッ!? 全員乱数回避!!」

不意の魔力反応を感じた大隊長の言葉に、一拍空けて大隊の7割が従った。

しかし、僅かに遅れた3割は上空から降り注いだ4条の大出力光術式によって蒸発した。

「M a y d a y M a y d a y ! 散開、散開！」

「畜生、新入り共が食われた！」

「第三中隊全滅！他にも負傷者多数！」

「負傷した者は後退させろ！敵は何処だ!?!」

このままでは友軍の頭上を取られれば蹂躪される。

それを分かっているために激戦で消耗していた大隊に後退は許可されていない。

「魔力反応逆探：逆探成功！敵影は4、いや8機！高度は：い、1万！」

「な!?!」

通常、航空魔導士の戦闘高度は6000フィートが限界だとされている。

なお、1フィート $\parallel$ 0・3048メートル $\parallel$ 12インチ $\parallel$ 1／3ヤードであるため、高度6000フィート $\parallel$ 高度1828・8mであり、高度1万フィート $\parallel$ 高度

3000mである。

そんな高度を飛ぶには酸素・気圧調整術式と飛行術式の並列使用並び重力を振り切れるだけの魔力量、そしてそれに耐え得る高性能な演算宝珠を必要とする。

(帝国の航空魔導士は化け物か!?)

そんな存在が複数存在し、連携を取って攻撃してくる。

眼前に現れた理不尽に、大隊長の背筋に冷たいものが走った。

「各員高度8000まで上がれ！」

「な、隊長!？」

「このままでは地上部隊が蹂躪される！行くしかない！」

大隊長の言葉に、覚悟を決めた隊員達もまた腹を括る。

このままではどの道全員が殺されかねない。

であれば、やるしかないのだ。

「目標の個体魔導素反応ライブラリより検索！ですが…！」

「どうした!？」

「個体8機中7機が同じ反応！残り一つ含め全てネームドです！」

「誤反応か!? ええい戦闘に集中しろ!」

「て、敵魔導士は『ラインの双璧』!」

その言葉に、目視可能距離に入った敵魔導士の姿に、全員の心が折れかけた。

「ああ…くそ、神よ!」

誰かが神に自身の不幸を訴える声が聞こえた。

だが、口にしないだけで誰もがその心情に共感した。

何せこの二人の存在は共和国軍にとって死神に等しい存在だからだ。

曰く、単騎で中隊を文字通り全滅させた。

曰く、戦場の何処にでも出現する。

曰く、確認された魔導士の撃墜スコアだけでも80以上。

曰く、複数の戦域に同時に出現する。

曰く、曰く、曰く…。

多くの戦場神話の一つとして、現在進行形で語り継がれる恐るべき敵。

それが今、彼らの眼前へと現れたのだ。

だが、その姿はとても奇妙なものだった。

何せ8人の魔導士がそれぞれ二人組となって、もう一人を抱えながら飛んでいるのだから。

「あれが手品の種か！」

「分かってみれば話は早い！あの状態ではまともに機動できん！落ち着いて確実に撃破しろ！」

高度を稼ぐために二人組の内の一人が酸素生成・気圧調整術式と飛行術式を担当し、残った一人が攻撃術式を担当するという、考えてみれば極々単純な手段。

幽霊の正体見たりと隊員達が笑う。

しかし、彼らの慢心は高い代償によって支払われる事となる。

「予定通りだな。行くぞチトセ！」

「了解。B4と7は特攻、後にB1と3は僚機と共に敵魔導士と交戦開始。」

B4から7の改良型の演算宝珠へと過剰な魔力が注がれていく。

元々無茶な使用で限界寸前だった演算宝珠が、急速にその内部の魔力係数を不安定化させていく。

「ッ！総員乱数回避及び全力防g」

大隊長の叫びは的確だった。

しかし、彼らが遭遇したのは余りにも不条理な存在だった。

B4（7の分身体の、演算宝珠を過剰暴走させた状態での特攻、後に自爆。

チトセは知らないが、ターニャ・デグレチャフ少尉がエレニウム工廠で行った95式稼働実験の際に起きた臨界反応を限定的に再現したソレは、一瞬で共和国魔導大隊を飲み込んだ。

膨大な熱量と衝撃波、閃光を齎したソレは戦場全域から観測され、その中心にあった共和国熟練魔導士大隊をあっさりと飲み込み消滅させ、地上部隊にまで少ない被害を与えた。

「むう、つまらんな。」

「ハンナ、残敵の掃討を。」

「分かっている。」

そして、予想以上の爆発力に分身二体を盾代わりにする事で、一人と分身体B1は無事だった。

その後は何もなく、ただペしペしと戦場を飛行して残敵掃討を行うのだった。

.....

『XよりC・D中隊へ。各中隊はそのまま敵航空魔導士の排除を続行。A分身体は本体の警護を続行。』

『C中隊了解。制空権確保完了。』

『D中隊了解。味方観測魔導士の救援完了。』

『よろしい。壊滅したB中隊は増援を送る。』

『B1了解。引き続きルーデルの支援を行う。早めの合流を。』

ライン戦線には、悪魔達が住まうと言う。

同じ魔力反応を持った存在が複数、時には100近く存在し、その全てが一騎当百に値するという眉唾物の戦場神話。

しかし、事実として西方ライン戦線における共和国の被害は、そうとしか考えられない程の絶大な被害があった。

無数のエース・オブ・エース。

その正体が実はたった二人だけの、歴史上でも類を見ない程に優れたたった二人だけの航空魔導士である事を世界が知るのには、戦後まで待たなければならなかった。

幼女戦記×101人ウィッチネタ 101人魔導士 その2  
加筆修正

フランソワ共和国首都パリースイイ 共和国軍司令部付きライン戦線臨時対策室

「何とかならんのか!？」

ダン、と一人の参謀が机を叩く。

しかし、誰も返答しない。

誰もがこの事態に頭を痛め、解決策を提示できないからだ。

「ライン戦線における被害の拡大は激化する一方だ。それも！」

声を荒げる参謀の視線は手元の資料へ注がれる。

そこには信じがたい数字が提示されていた。

「それも、一方的にだ！特に航空戦力の損害に関しては最早壊滅的と言ってよい

！」

事実、そこに書かれている数字を理解できる者が見れば、目を疑うだろう。

なにせ補充した傍から航空戦力が撃破されていき、常に制空権を喪失している状態なのだ。

結果的に、フランソワ共和国軍はライン戦線にて一方的にその戦力を溶かされている状態であり、戦後に公開された帝国側の資料と照らし合わせれば、帝国側はその半分にも満たない損耗しか受けていなかった。

「原因はやはり奴らか？」

「そうだ。『ラインの双壁』だ。」

共和国軍にとって、現在のライン戦線の惨状を構築する羽目になった主な原因がこいつらであった。

「奴らが戦場に出てくる度にその時展開していた航空戦力を根こそぎ壊滅させられる。その上で対地攻撃に参加してきた場合では戦車だろうが前線指揮所だろうが消し飛ぶのだ。奴らをどうにかせねばライン戦線は打破できん！」

事実だった。

こいつらが戦場に出る度に魔導士も航空機も端から落とされ、制空権を失った状態で優秀な帝国軍砲兵隊に蹂躪される。

以前は航空戦力で制空権を維持しつつ戦車の集中運用と後に続く歩兵で突破を試みましたが、敢え無く全て消し飛ばされて頓挫している。

なお、破壊された戦車の残骸を調査した所、履帯だけでなく対航空魔導士向けに史実よりも上面装甲が強化されている筈の軽・中戦車の天板が撃ち抜かれる等、大凡航空魔導士らしからざる火力が発揮されたのが散見されている。

「そもそもたった二名の魔導士でここまでの被害が出せるのでしょうか？」  
「どういう事かね？」

不意にこぼされた言葉に、視線が集まる。

「帝国と言えどそこまで優秀な魔導士は限られます。恐らくですが、個体魔導素反応を偽装して、同一のネームドであるかのように見せているのでは？ 或いは光学だけでなく複数の術式を用いたデコイではないかと。」

「何の目的でそんな事を？」

「確かに信憑性はありそうだが…。」

「目的は、恐らくはプロパガンタかと。」

前線で厭戦気分が広がらないように、英雄を作り出して士気の発揚を行うのは歴史上でもよくある事だった。

が、それが事実だとしても変わらない事もある。

「それが事実だとして、我が軍が通常なら既に壊滅する程の被害を受けているのは変わりないではないか！」

それに尽きるのだった。

「それに関してなのですが、今まで温存してきた特殊作戦群を投入しようかと考えております。」

そこまで騒いで漸く本題が出た。

「特殊作戦群か：使える状態なのか？」

「現在第一・第二中隊がライン戦線へ向け移動中です。第三に関しては戦略予備として下手に動かさません。」

「ビアント中佐とホスマン少佐はどちらもネームドであり、両中隊は全員がベテランの魔導士です。如何にラインの双壁と言えども彼らに集中せざるを得ません。」

「仔細は彼ら任せになるが、止むを得んな。」

「では次の議題です。ライン戦線への補給物資の調達ですが、やはりコストの高騰が…」

………

『戦域警報。敵航空魔導士1個中隊が出現。各観測魔導士は警戒を厳に！第○○○  
○航空魔導小隊は現地に急行し対処されたし！』

「ん？何か手強そうなのが出たらしいな。」

「本当だ。分身体を増やして向かわせよう。」

近年、各種技術の発展が著しい帝国では演算宝珠を用いた魔導士の戦力化とほぼ  
同時期に、ある現象に気づいた。

それは極一部の魔導士が持つ固有魔法という現象だ。

これは一般的な術式のようにその術式内容が頭に入っていれば発動できるというも  
のではなく、個人毎に全く異なる現象を発露させるといふものだ。

その特異性から再現性は極めて低く、その効果の内容も通常よりも〇〇の術式が使い易いという個性染みたものから全身の何処からでも高圧電流や火炎、氷雪を発する事が出来るという分かり易いものまで多岐に渡る。

医療魔導士も成り手の少なさと必要適性の高さから殆どこれに含まれている。

固有魔法は全て魔導士の個人情報と共に記録され、時に特殊な作戦に従事する事もある。

そして、この二人は帝国内でも屈指の強力な固有魔法の持ち主だった。

「分身体 D・E・F 中隊は進出してきた敵航空魔導士 1 個中隊の迎撃へ。これ以上友軍に被害を出させるな。」

「了解。」

一気に空に出現した 36 人も全く同じ容姿と装備をした航空魔導士達は素早く陣形を整えながら一斉に飛翔していく。

チトセ・カーラーバー航空魔導中尉（戦時昇格）の固有魔法は「分身」。

魔力ある限り自らと同じ能力・装備を持った分身体を作り出す事が出来る。

これら分身体は思考力・身体能力・魔導適性・各種装備等の全てが本体と全く同

じであり、また本体と分身間では相互にテレパシーを行う事が可能であり、極めて精密な連携を可能とする。

これら分身体は本体が気絶・睡眠するか、一定以上のダメージを受ける事で消滅する。

また、消滅した場合はその記憶が本体へと蓄積されるが、死に際の記憶が悲惨なものだと本体へ大きな負担となる事が確認されている。

現在、満足に戦闘継続が可能な最大の分身数は100体だが、後先考えなければ150体まで増やせるとの自己申告が記録されている。

即ち、エースオブエース級の魔導士を（一つの戦場に限定されるが）通常でも100体運用が可能であり、更に言えば戦闘経験の蓄積が通常の魔導士の100倍の速さで進む上に、必ず戦訓の共有が成されるのだ。

帝国軍がライン戦線という地獄の様な環境において、制空権を一方的に塗り取り、維持しているのはこの固有魔法によるものが大きい。

「あ、戦車発見。」

「よし、私にやらせろ。」

「あいよ。」

そして、相方であるハンナ・ウルリーケ・ルーデル航空魔導中尉もまた、同様に怪物的なまでに強力な魔導士だった。

高度8000フィートを飛行していたルーデルはチトセと護衛役のA中隊を置いて、一気に地表へ向けて加速する。

その場からほぼ落下する程の角度で行われた急降下。

その加速性たるや通常の航空魔導士や急降下爆撃機と比してもなおおかしい。

種は簡単、この時の彼女は通常の大よそ倍の重量を持っていたからに他ならない。

固有魔法「重量操作」

これは自身含む周囲の物体の重量を増減させるものであり、この時の彼女とその装備の重量は通常時の倍であり、そこから繰り出される攻撃は倍加した分だけ威力も高くなる。

況してや繰り出される銃弾そのものの重量もまた倍増されているのだ。

重量の倍加した術弾と増加した落下速度から繰り出される一撃は、ルーデル自身の高い魔力量を受けた術弾の威力も併せて凄まじい威力を誇る。

それこそこの時代の未だ発展途上の戦車ならば強化された上面装甲を抜く程度には。

なお、逆に上昇したり戦闘機動を取る時は自身の重量を減らす事でより機敏な機動を実現している。

この固有魔法の応用により、ハンナはチトセに欠ける自爆技以外での高防御目標を撃破できるだけの火力を持つ事が出来る。

Q つまり？

A 二人揃うと手が付けられない。

その実例を示すが如く、3台の戦車があっさりとその天板を抜かれて爆発四散した。

「呆気ない。近接支援の歩兵も、対空砲台の支援も無いとは。」

「まあ私達が制空権を食い荒らしているんだ。仕方ない。」

近代戦において、制空権の確保は兵站や砲兵の存在並みに極めて重要だ。

それが一方的に奪われた状況なのだから、優秀な帝国軍にとってはスコア稼ぎに丁度良いを提供している状態に近い。

「あ」

「どうした？」

「さっきの敵魔導士一個中隊がいたろう。」

「うむ？」

「伏兵にもう一個中隊出てきた上に意外にも善戦するんで、残ったD・E・F中隊の分身体を皆自爆させて仕留めた。」

「生き残りは？」

「いない。C中隊で確認したけど消し炭。」

「なら良い。任務続行だ。」

こうして、今日もライン戦線の帝国側の平和は保たれる事となる。

なお、戦線の維持が極めて困難となった共和国軍は大幅に後退して戦線の整理を行うも、その後退の隙を突かれ、首都近郊まで攻め込まれる事となる。

## 前話の解説

B 中隊の内 B1 ～ 3 とルーデルに対し、B4 ～ 7 が追加ブースター兼増槽の役目となつて高度 1 万フィートまで上昇させる。

この際消耗した B4 ～ 7 はそのまま演算宝珠を臨界暴走させて自爆特攻させる。  
なお、中隊 12 機編成の内の残り 4 機は地上を非魔力依存状態で歩兵に紛れ潜んでた。

もし敵が予想よりも強くてルーデルが危ないのなら、上に視線が向いてる敵魔導士を下から狙撃する予定だった。

自爆攻撃は本文同様 95 式でも見られた臨界事故を意図的に発生させ、暴走・不安定化した魔力によって広範囲を攻撃する自爆技

が、改良型宝珠（エレニウム式ではなく漫画版で触れられたライン戦線配備の型。魔力排出口がスライド式）を使用しているため、威力は抑えめなのだが本人の高い

魔力量を反映して威力・範囲共に高い。

ルーデル

説明無用。多分黄金柏葉剣ダイヤモンド付騎士鉄十字勲章（ドイツが存亡の危機に瀕したときに現れる12人の英雄に贈られる勲章）の呪いか何かでこの世界での同位体として生まれたと思われる。

# 幼女戦記×101人ウィッチネタ 101人魔導士 その3

帝国西方面 共和国国境 ライン戦線防御陣地

「まさか、フランスワ共和国がこうも容易くやられるとはな…。」

そこに新型演算宝珠たるエレニウム95式の実戦試験のために配属されたターニャ・デグレチャフ少尉は拍子抜けしたとでも言う様に独白した。

（と言うか、早すぎないか？一応前の世界のフランス相当の国だろうか？それが開戦から数か月で首都を守る最終防衛線まで圧されるとか何があった？）

如何に歴史や経済の知識について堪能なターニャと言えど、否、堪能だからこそ予想は不可能だった。

まさか人類史上でも屈指のバグ枠が100人で暴れ回った結果等と、彼女だからこそ想像できない。

「まあ良い。またマッドの下に送られないように奮戦するでしょう。」

未だ占領統治に入ったばかりの共和国領内にはパルチザンや敗残兵も多い。

それらをちまちま潰すだけでもそれなりの実績にはなるだろう……

「デグレチャフ少尉。君にはある小隊に入ってもらおう予定だ。」

…と思っていたのだが、事態は予想外の方向へ進んでいた。

「小隊、でありますか？」

「ああ。貴官の持つ新型宝珠の性能なら、その小隊でも十二分にやっていけると判断された。」

（つまり腕は良いけど何かしら瑕疵のある、或いは前に出せない訳あり部隊ということか？）

独断専行ばかりするエースとか、伝統的に一度は従軍する義務のある皇族でもいるのだろうか？

どちらにしても一波乱あるのは間違いない。

「その小隊は現在二人の航空魔導士しか在籍していない。他の連中は全員ヴァルハラ行きか戦傷で後送された。そして残った二人はどちらも撃墜数100を優に超え

るエースオブエースであり、現在のライン戦線の状況を作ったと言っても過言ではない英雄達だ。」

「それはまた凄まじいですな。」

（最悪極まる！）

前言撤回。

それいづらどう考えても司令部で制御できないからお荷物（新型宝珠の試験中な幼女）持たせて大人しくさせようって魂胆が見えるぞ！

ターニャは内心で頭を抱えた。

「正直言つて、通常の魔導士では彼女ら二人に付いていけないのだ。高い魔力量に新型宝珠を持った君にしかできない任務でもある。」

「光栄であります。」

「うむ。とは言え、余り心配はするな。その小隊の二人は非常識だが仲間思いで実力はある。余程の事が無い限りはヴァルハラへ行く事は無いだろう。」

こうして、ターニャは哀れにも人類のバグ枠×2〜102の下へと送られるのだった。

.....

「チトセ、ターニャ！今日も絶好の出撃日和だな出撃するぞ！」

「……は、了解です。」

そして、現在は哀れにも出撃大好き超人の下で出撃三昧の日々を送っていた。

なお、現在の階級はターニャが少尉、チトセが中尉、最先任のルーデルが野戦任官で大尉となっている。

ハンナ・ウルリーケ・ルーデル。

そう、ターニャの元いた世界でも超ド級有名なあのルーデルの同位体である。

現在は銀髪に鼻を横切る傷痕が特徴の野性的な美少女だが、その体力とバイタリティとついでに魔力適性に関しては流石の一言である。

そして現在、帝国軍航空魔導士及び航空機の歴史上第二位の戦果を誇る生きた伝説その2である。

「ハンナ、余り早く起こしてやるな。少尉は小柄で朝が弱いんだから。ほら、朝飯

食ってから出撃に行つてこい。牛乳もあるから。」

「むう仕方ないな。」

朝から生命力が迸っているハンナをあっさりとあしらうと、チトセはターニヤにも声をかけた。

「少尉、もう起きれるか？」

「はい、ただいま……。」

むくり、と身体のダルさを抑えてターニヤが起き上がる。

自分に氣遣つてくれるこの上官その2も、無表情ながらも日本人的容姿をした美少女であるのだが、その実態はターニヤをして悍ましいの一言である。

なにせ固有魔法に由来するものとは言え、あのルーデルよりも戦果を挙げている怪物なのだから

チトセ・カリーバー。

こいつはあのルーデルを押さえて帝国軍航空魔導士及び航空機の歴史上第一位の戦果を挙げてる真正正銘の化け物である。

この小隊に配属されて既に一週間、ターニヤは何とかこの超人勢二人についてい

く事が出来ていた。

あくまで付いていけているだけで、適応しているとは言いがたい。

まあターニャの年齢で一週間ももっているだけで、西方方面軍司令部は喝采を挙げていたのだ。

(95式が無かったら死んでいたな…。)

あの存在Xについては恨みしかないし、この呪われた95式も唾棄すべき呪いのアイテムだが、それでもその性能に関してだけは認めている。

「今日は共和国の連中が海の向こうに頼んで持ってきた航空機と魔導士が来ているらしい。つまり我々の事をよく知らない連中が来ているという事だ。またスコアを稼げるぞ。」

「連合王国ですか。相変わらず戦争を起したり長引かせるのが好きな連中ですか。」

もともと前線にしてはそれなりに良い食事を取りながら、ターニャは目の前の怪物の言葉へと思考を働かせていく。

(やはり連合王国か。ブリカスの多重舌外交は相変わらずか。)

そして帝国の外交下手も知っているターニャとしては、戦争の趨勢が自身の知る通りになりつつある事に溜息をつきたくなっていった。

「ターニャもそろそろネームド登録されても良い頃だし、今日中にスコア50を達成すれば休暇も取れる。」

「それは楽しみですな。」

いや本当に。

マジモンの出撃キチと一緒にいると、自分の言う模範的な戦闘意欲の高い軍人など常識人の範疇なのだと思いが知られる。

「よし食べ終わったな。なら出撃だ出撃だろう出撃あるのみ!!」

「分かった分かった。では各員、10分後に集合だ。」

こうして、穏やかとはとても言えない朝はあっさりと終わった。

.....

その日の朝は割と穏やかだった。

しかし、到着した戦線で見た共和国軍兵士達、中でも地獄のライン戦線を生き延びてここまで落ち延びてきた兵士達の顔には絶望しかなかった。

それ以外は何も知らない。3か月の促成教育しか受けていない新兵、そして植民地から殆ど拉致同然に連れてきた土人の兵達だった。

加えて言えば彼らの顔は皆若く、少年と言って良い年齢の者ばかりだ。

更に魔導士に至ってはその希少性から国内・植民地・性別問わずに魔力がある人間を掻き集めて促成に促成を重ねた訓練を行っただけという有り様だった。

それでも祖国を守るため、家族への仕送りのためと彼らの士気は高かった。

というか、もうそれ位しか誇るものがなかった。

「これはまた…なんという…。」

「想像以上ですね。」

共和国最前線の余りの疲弊具合に、連合王国義勇軍（と言う看板の先行派遣部隊）は頭を抱えた。

「共和国の各方面軍から引き抜いてもこれなのかね？」

「引き抜いて戦線に出した傍から溶けてまして。」

その通りだった。

具体的には二人から三人になって双壁から三羽鳥になったラインのエースオブエース（実際はそれすら超越したナニカ）により全ての兵士達がいまや泥となって大地と一体化してしまっていた。

「やはりあの情報は本当だったのか…。」

「ラインの三羽鳥ですね。」

「私が聞いた時は双壁だったがね。」

報告書を見た時、つい彼は「これはどこの戦記ものの小説かね？」と持ってきた部下に尋ねてしまった。

それ位には荒唐無稽で空前絶後、奇想天外な内容だった。

「フランソワ共和国軍の威信を賭けた軍勢が、実質たった二人の航空魔導士に敗走するなど…。」

「時代が神話に逆戻りした気分ですねぇ…。」

ああ空が青い。

もういっそ仕事放棄してこのまま祖国に帰りたい。

派遣された義勇軍航空魔導士部隊の隊長と副官は揃って遠い目をした。

「あんな化け物共の相手など御免被る。」

「では予定通り妨害に徹すると？」

「ああ。非魔導依存行軍を心掛け、航空戦及び正面戦闘は極力避ける。我々が狙うのは歩兵や重砲のみで、魔導士ですらない。」

「飛ぶのは逃げる時のみと。」

それは魔導士という歩兵よりも堅く、戦車並みの火力を持ち、航空機に及ばないまでも高い飛行性能を持つ優れた兵がゲリラ戦を行うという事を意味していた。

加えて、占領された共和国領土に武器弾薬を流して愛国者達を後押しする占領統治妨害のお決まりの作戦は既に始まっており、未だ協商連合との二正面作戦を強いられている帝国軍の少ないリソースを更に減らしていた。

「今帝国を止めねば、何れ我らが連合王国にすら牙を剥きかねん。そうなる前に押し留めねば。」

こうして彼らの苦難は始まった。

.....

「むう……。」

出撃後、ハンナは顔にデカデカと不満を表した状態で前線基地に戻ってきた。

その理由に関しては小隊の残り二人にはどうしようもない事だった。

「まさか共和国魔導士の質があれ程低下しているとは……。」

「ターニャのエースオブエース祝いに頑張ってお高いコーヒー豆とチョコレートを購入していたんだが……あれでは撃墜した気がしない。」

「中尉、それは兎も角コーヒーとチョコはぜひとも頂きたく。」

「君も大概コーヒーと甘いものに目がないな……。」

不満顔で牛乳を飲んでイライラしているハンナを他所に、チトセとターニャはそこそと話し合っていた。

というのも、今日交戦した共和国軍の魔導士の余りのお粗末さに呆れていたからだ。

はっきり言って素人同然の、ただ飛べるだけの子供だったのだ。

流石にターニャ程年少の者はいなかったものの、それでも平時ならば決して戦場に出ない、そもそも兵士になれない様な十代半ば程度の少年少女達だった。

まあ敵なので容赦なく撃墜したのだが。

「とは言え、ハンナがあれでは今日は追加の出撃は無いだろう。今夜はコーヒートチヨコを肴にゆっくり休むとしよう。」

こうして、西方面軍最大戦力のエース小隊は今夜はゆっくりする事に決めた。

.....

### 西方面軍司令部

「「「「.....」」」」

そこに詰める優秀な司令部要員らは皆一様に口を閉ざしていた。

激しい近代戦の洗礼を浴びた彼ら西方面軍司令部は、今現在深刻な問題に直面していた。

「占領統治に必要な兵士が、まるで足らん!!」

今まで散々ライン戦線で消耗し、エース3人の活躍によって何とか盛り返したものの、それでもなお西方面軍の受けた傷は大きかった。

「兵の問題も深刻ですが、占領統治のコスト自体も凄まじいですね。」

「ああ、これでは余りにも割に合わん。」

続々と上がってくる占領地の情報に、戦争では勝っているというのに、否、勝っているからこそ酷くなっている現状に頭を抱えるしかなかった。

「元々共和国市民は政府や軍に対して不満あれば反乱して己の生存権を勝ち取ることは聞いていたが……。」

「おまけに連合王国側からの武器弾薬密輸に魔導士の派遣等でパルチザンが活性化、とてもではないがまともに占領出来るとは思えん。」

「……………これは参謀本部と話し合う必要があるかと。」

余りの事態の深刻さに、彼らは頭を抱えるしかなかった。

正直、このまま戦線を押し上げていけば、首都を落とす前にこちらが前線部隊と後方を寸断されかねない。

はつきり言って、占領地の統治などしたくはない。

賠償金なり何なりでケリをつけてほしいというのが彼らの偽らざる本音だった。

「次の議題は……」

「えー次は第600小隊の軍大学への推薦に關してです。」

「あいつらか……」

彼らの脳裏には現在の破滅的状況の引き金になったⅡ遠慮せずバカスカ敵を蹂躪して占領地を広げまくる事になった原因であるラインの双璧と言われるエースの顔が浮かんだ。

最近は何にちんまいのが一人追加され、そいつも十二分に化け物の範疇だったの  
で、更に戦果を挙げてるのが現状だった。

なお、部隊番号は元々中央において編成準備のために割り当てられる番号と同系  
のもので、その西部方面軍司令部版である。

そして、この小隊が未だ解散もせずにいるのは「こいつらで組ませておかないと  
他が潰れかねない」ので下手な所に入れられないし、解散も難しいからだ。

「正直、これ以上戦線を進めるのは反対です。」

「同じく。」

「異議なし。」

正直、もうお腹一杯です。

西方面軍司令部の偽らざる本音だった。

「最近、一部では彼女らだけ戦果を挙げるのは気に食わない等と言っている連中がいます。」

「馬鹿か命知らずか死にたがりかソイツは???」

そして、あんまりな報告に耳を疑う事となった。

「三人が三人とも若い上に美人ですからね。女子供にできるのなら自分だって…と考えている連中が新兵の中にいるようでした。」

「確認次第最前線送りにしてやれ。」

「まだマシなのは後日後方で再訓練行きで。」

そんなこんなで、西方面軍司令部の頭痛のタネは尽きないのであった。



## ヒロアカネタ 願望器が逝く

即興ではこれが限界

---

「こんばんはお嬢さん。よい夜だね。」

満月の綺麗な夜、瓦礫の山、死体と家屋の燃える煙の中、その男は笑っていた。

「ええ、こんばんはおじさん。」

それを迎えた両手足の無い少女もまた、それしか知らないような無垢な笑みを見せた。

………

その少女は8歳の誕生日を迎えた時、個性に目覚めた。

穏やかな山間の村の、極普通の農家の生まれ。

問題は、彼女の個性が余りにも強力かつ魅力的であった事。

個性「願望器」

その効果は即ち、「他者の願いを叶える事」

閉鎖的な村だったが、偶々その中の一人が都会に行つて闇金に借金を作つており、その返済のためにヤクザ者に情報を流したのだ。

そして、情報を聞きつけたヤクザ者によって、その子以外の全ての村人が殺された。

そこには無論、彼らを案内した者も含めてだ。

当然の口封じだった。

なにせ、彼女を握った者こそがこの世界の覇者になり得るのだから。

無論、彼女は抵抗したが、無力な子供を従わせる方法等、幾らでも存在する。

薬で、暴力で、快樂で、飢えで。

あらゆる手段でその心を押し折り、三か月もする頃には完全に言いなりになるまでに仕立て上げられた。

更にもしもの時のためとして、その両手足は拷問や薬の影響でボロボロになっていた事もあって、切断された。

それでも見目が良い事もあって、願望器としてだけでなく、組員らの肉人形としても利用され続けた。

彼女の個性を使えば、幾らでもアブノーマルなプレイも可能だし、たとえ心身が荒廃しようとも即座に再生できるため、その扱いは苛烈を極めた。

そしてヤクザ者達は彼女を利用して利用して利用し尽くして、5年で裏社会のトップ層にまで上り詰めた。

だが、その余りの速さと強引さに、裏社会のTOPに目を付けられてしまった。彼らに落ち度があったとすれば、それは三つある。

一つは手段を択ばなかった事。

二つは性急に事を進めてしまった事。

三つは運が悪かった事。

「君達かい、最近この辺りでヤンチャしているのは？」

蹂躪だった。

正しく蹂躪だった。

象が鼠をどころではない。

恐竜が蟻塚を壊すが如く、有象無象の区別なく、黒衣の男はヤクザ者達を蹂躪した。

正義の象徴との激戦による後遺症など微塵も見せない。

オールフォードンこそが裏社会の頂点であるのだと、成り上がって今潰されんとするルーキー達に見せつけた。

「くそくそくそ！お前ら考えて願え！あいつを殺せる化け物を！」

建物の奥、少女のいる部屋での組長の言葉に、ヤクザ者達は必死に考えた。

これならあの化け物を殺せる、と。

一つ目は、山の如き巨獣。

山そのものに無数の植物が融合した巨大な怪獣。

植物操作の個性を持ち、植物を動物型や砲台型の様に変化させて使役し、無数の物量とその巨体故の圧倒的質量を武器とする。

「おお、こんな事も出来るのか。ドンドンやってみたまえ。」

その巨獣を、暗黒の男が蹂躪する。

最盛期よりも遥かに劣るとは言え、デカくて配下が多くて死角の無いだけのデカブツに劣る道理など無いと言うように殴り殺された。

「次！次は……！」

そして生まれたのは、巨大なスライム状の怪物。

不定形であり、体内に存在する無数の細胞単位のコア全てを破壊せねば殺せない不死性。

無尽蔵に分裂と繁殖を繰り返し、生物に寄生して乗っ取る事すら可能で、自身の周囲の水分を操る個性を持つ。

割とポピュラーな個性だが、対象の体内水分すら操作する事で生物に対しては一

方的なまでの殺傷能力を持つ怪物だ。

「残念だが、それではやられてやれないなあ。」

それをオールフォーワンはあっさりと対処する。

何せ水分操作は割と普通の個性故に、射程距離や効果範囲、周囲の前兆等も知られている。

そんな僅かな隙をこの男は見逃さず、ゼリー状の身体を凍らせてから粉々に粉砕、消滅させた。

「畜生畜生！次こそ!!」

そして出てきたのは、光の巨人だった。

全長10m程度の、ただただ光るだけの巨人。

その全身からは常に超高熱のレーザーが放射されており、オールフォーワンですら初撃を貰ってしまう程だった。

個性「光操作」を持つ、光そのものの性質がこの巨人の特性だった。

だが、光を操る事は出来ても、光そのものの性質は消えない。

全方位へのレーザー放出で蒸発した水蒸気を水分操作で干渉し、即席のレンズと

して加工する。

それを自身の周囲に纏えば、即席の対レーザーシールドとなる。

自身の可視光も歪められるが、外界の把握は強化した感覚（聴覚で音、触覚で振動等）で補う。

そして、身を守った後は止めへと移る。

水蒸気を操作して巨人の身体を構成する光を乱反射させる。

すると、光の巨人はその体を保てなくなり、消えていった。

「あ、ああああああ……。」

そして、黒衣の男が手を下すまでもなく、ヤクザ者達は一人を除いて全滅していった。

なにせ光の巨人の攻撃は全方位かつ光速のレーザーである。

彼らの創造主たるヤクザ者達にも例外なくレーザーは降り注いだ。

幸い、オールフォーワンの水分操作によって願望器の少女は守られ、その陰にいた組長もまた生き延びていた。

「なんでだ!?なんでこうなる!？」

「うん？それはこの結果が君の、君達の想像力の限界だからだよ。」

オールフォーワンは告げる。

不出来な落第生へ告げる教師の様に、彼は滔々と語る。

「彼女の個性は強力だ。成程、君達でも使い方次第で今日までのし上がれるのだから。だが、それが君達の限界だった。」

想像力。

それが無いからこそ、貧困な発想力しかないからこそ、彼らは今日蹂躪された。

もし、彼らが裏社会での栄達を望まなければ。

もし、彼らが表向きだけでも合法的な集団になっていれば。

もし、彼らが慎重な行動を心がけていれば。

結果は幾らでも変わっていただろう。

だが、彼らはヤクザ者として、裏社会での栄達を望み、そのために何でもする事を良しとした。

だから、この結果は必然だった。

「糞が！糞が！糞が！」

「また語彙の少ない罵倒だね。」

もう言うべき事は無い。

そう判断したオールフォーンは手をかざし、

「こいつを殺せええええ!!」

その言葉に、心臓の動きを停止した。

「……!?!」

オールフォーンは、そのまま地面に倒れた。

心臓は完全に停止し、脈拍も停止している。

気づけば、彼の背後には黒いローブを纏った古典的な死神が浮かんでいた。

その手には大きな草刈り鎌が握られており、それに斬られた事でオールフォーン

は死を刻まれたのだ。

切り付けた対象に死を刻む個性。

死の宣告とも言うべきそれを受けて、流星のオールフォーンも完全に死亡する

のも秒読みだ。

それでもこの場には起死回生の手札がある。

「わだじをなおせ！」

肺に残った空気を無理矢理捻り出しての、オールフォーワンの心の底からの“願  
い”。

それに、願望器は反応した。

「おおおおおおおおおおおっおおおおおおおおおおおおおッ!?!」

一瞬の間の後、オールフォーワンの姿が瞬く間に治癒していく。

それは嘗ての激戦で受けた後遺症すら例外ではなく、その年月で重なった老化す  
ら掻き消えていく。

数秒もすれば、各種経験と老獪さを積んだ肉体的全盛期のオールフォーワンとい  
う悪夢が具現していた。

「これはまた、予想以上だ！ははは、これだけでも来た甲斐があつた！」  
ゲラゲラと心底愉快そうに笑う悪の化身。

それを組長はもう一度殺そうとするが、その声の外に出る事も、呼吸する事も出

来なくなっていた。

オールフォードの奪い取った個性の一つである空気操作の個性によって、今組長の周辺は真空状態になっていた。

「……………!?……………!?!?!」

ジタバタともがくが、その程度で真空からは抜け出せない。

それから組長はゆっくりと、5分以上の時間をかけて窒息死した。

己の欲望のために周囲を食い物にし続けた男の、自業自得の末路だった。

「さて」

そして、オールフォードは意外とイケメンな素顔をにっこりと暗黒の太陽の様な笑顔に歪め、一人生き残った少女へと語りかけた。

「こんばんはお嬢さん。よい夜だね。」

惨劇に見合わぬ綺麗な満月の下、瓦礫の山と周囲の死体を他所に、その男は久方ぶりに上機嫌に笑っていた。

「ええ、こんばんはおじさん。」

それを迎えた両手足の無い少女もまた、それしか知らないような無垢な笑みを見

せた。

「早速だがお嬢さん、私と一つ契約しないかな？」

「契約？」

少女はとても不思議そうにオールフォーワンを見つめた。

なにせそんな事をしなくても、彼女は自分が認識した願いを無条件に叶えてしま  
う。

人型の願望器、それこそが彼女なのだ。

契約や約束なんかしなくても、彼女の個性を利用する事は簡単だ。

「そう、契約だ。君は私の身体を治してくれたからね。お礼として、君の願いを叶  
えよう。」

自分の願い。

そんな事、自分の名前すら忘れてしまった少女にとっては考えた事も無かった事  
だ。

この5年程、ヤクザ者達に捕まってからは願いを叶えるか慰み者にされるかだ  
けだった。

自分の願いなんで、抱いても無駄なだけの幻想だった、

だが、それは既に過去の事だった。

「その代わり、君は今後私の下で必要な時だけ願いを叶えてもらおう。何、悪いようにはしないとも。」

その誘いこそが暗黒への道だった。

しかし、しかしだ。

どの道、自衛手段を持たない彼女にとって、道を選ぶ事は今しか出来ない。

たとえ今ここでオールフォーワンの手を取らずヒーローに保護されても、辿り着く果ては誰かに利用される結果しかない。

それが公共にとつての悪か、正義かしか違いはない。

「わたし、は……。」

考える、考える、考える。

たった13年の人生の中で一度も無かった程に、必死になって思考を回す。

「わたし、は……っ。」

家族の、故郷の人々の蘇生？

この個性を無かった事にする？

違う、違う、違う！

そんな事じゃない、自分の願いは「そんな事」じゃない！

自分を守れなかった人達でも、自分を売った人達でもない！

「私、は……！」

私の願いは、私のしたい事は!!

「私は、自分の手足で歩きたい！生きていたい！もう閉じ込められるのは嫌ッ!!」

そんな、当たり前前の事だった。

「その願いを叶えよう。」

こうして、無色の願望器は今度こそ黒く染まった。

話

これは現代に生まれたお伽噺

神話の時代にあるべき願いを叶える魔法の道具が、個性溢れる現代へと現れたお

奪われた手足の代わりに、怪物達を手足に変えて、

黒く染まった願望器が暗闇の道を歩み始める

そんな救いようのない、末路の決まったお伽噺

ほぼそのままヒロアカ版メレム・ソロモン

右手…光の巨人。個性「光操作」。全方位高出力レーザー。旧版アダム。

左手…黒の死神。個性「鎌で切った相手は即死」。典型的死神スタイル。

右足…地の巨獣。個性「植物操作」。ピオランテ with アレットウーサ（緑の王）

左足…水の異形。個性「水分操作」。全身に無数のコア&無限増殖と寄生。水色

の巨大スライム。

幼女戦記×101人ウィッチネタ 101人魔導士 その4

帝国首都ベルン 軍大学にて

「しゅつ……………げき……………。」

入学してから今日まで、毎日の様にハンナ・ウルリーケ・ルーデルは死亡していた。  
た。

無論、比喻表現ではあるが。

「あの、アレは…………。」

「ああ、ハンナは空を飛ぶか出撃しないと体調を崩すんだ。」

「うわあ…。」

それを、同じ小隊員としてそれなりに濃密な時間を共に過ごしていたチトセと

ターニャは、氣の毒なナニカを見る様な目で遠巻きに見つめていた。

「それはそれとして、そっちは最近どうだ？」

「平和そのものですよ。この戦時下にこんな平和で良いのかと思う位には。」

帝都ベルン

そこには未だ戦乱の影は遠かった。

しかし、物価の値上がりや国債の販売の掛け声、夫や恋人を待つ女性達の井戸端会議に海外との交易の減少による商業面への悪影響等、その影響は徐々に一般市民にも見える形になってきた。

「だよなあ。とは言え、薄氷の上だが。」

「ええ。だからこそ、よく学ばねば。」

「真面目だなあターニャは。」

「貴女程適当にはいられませんよ。」

二人とも、問われれば堂々と「他に行ける場所が無かったから軍に来た」と言つて憚らない孤兒院出だ。

その出自と年齢にある者は眉を顰め、ある者は戦慄する。

その位には彼女らは未だ若く、そして凄まじい戦果を挙げていた。

「今日の午後はどうする？」

「私は図書室に行きます。そちらは？」

「分身体を5体図書室へ、1体をハンナへ、後は……。」

「相変わらずのトンデモですね……。」

「便利だがな、制御は難しいんだぞコレ。」

苦笑いのチトセ。

前世の濃過ぎる人外相手の末期戦を経験したからこそ、十全に制御できるだけの経験を積めたという自覚があるからだ。

現在のチトセは戦地でもないのに旧型の宝珠を特別に貸与され、学習に利用するために固有魔法の使用まで許可されている。

実際、凄まじい勢いで成績を上げている本人の成果と凄まじい武功があるが故の特例措置。

とても助かるのだが、これを取るために軍大学に在学中に固有魔法や魔導士用装備の開発に協力する羽目になってしまった。

「ハンナ、今日はエレニウム工場に行く予定だったろ？新型宝珠での試験飛行もあるんだから、そろそろシャキッとするんだ。」

「出撃か!?!」

チトセの言葉に、椅子の上で真っ白に燃え尽きていたハンナがガタンと立ち上がる。

「出撃じゃない。が、空は飛べるぞ。」

「飛べるならなんでも良い！ついてこいチトセ！」

「はいはいっと。」

こうして、二人は悪名高きエレニウム工場へと赴いたのだった。

.....

帝都ベルン 帝国陸軍大学 書庫

そこでは現在、5体の分身体が一樣に脂汗を流しながら、超お偉いさんの対応

をしていた。

「貴官らは此度の戦争、どの様に見るかね？」

「は、准将閣下。申し訳ありませんが、小官では質問の範囲が広過ぎて何処まで答えて良いか分かりません。」

代表した1体が脂汗を流すままに答える。

なお、残りの4体は沈黙を保ち、可能な限り目立つまいと気配を薄くしようと努力している。

戦闘時なら兎も角、平時のこいつらは本体よりは低くとも自己保存本能を持った個人であり、大体こんなものである。

正直、こんな所で何してんの!?!とやりたい所であり、とっとと退室しようと思ったのだが、何故か今次戦争に関する意見を聞かせてほしいというお話になっていた。(一言でもトチツたら銃殺か左遷かな?)

チトセは割と信心深い方だと思うが、それでもこんな時は神を呪わずにいられたかった。

「構わん。貴官の答えられるだけで良い。忌憚なく語り給え。」

「では……現状のままでは、帝国の敗戦は免れないものかと。」

ゼートゥーア准将の命令通り、チトセ（分身体）はあっさりと自国の敗北を告げた。

銃殺？左遷？もしもの時は超精巧な分身体使って本体が逃げれば良いんだよ！  
なので、割り切って正直な所感を伝える事にした。

「理由は？帝国は協商連合及び共和国には優勢に戦闘を進めている筈だが？」

これがルーデルドルフならば激怒間違いないだろう。

しかし、ゼートゥーアは学者然とした理性的かつ冷徹なリアリストだ。

故にこそ、簡潔に次を促した。

「はい、その通りです。しかし今を見逃せば、連合王国並び周辺諸国は協商連合及び共和国が二国がかりで戦っても勝てない帝国を万全の状態で相手する事になります。」

「故に積極的な介入を？」

「はい。彼らにとって欧州に強大な国家が発生するのは、何をしてでも防ぎたい事でしょう。」

「うむ。納得できるな。」

「更に現代の列強同士の戦争に、旨味はありません。」

「既存の様に領土や賠償金もかね？」

「はい。ライン戦争を見ても分かりますが、人・物・金の圧倒的な消費速度を参戦国全てが行うのですから、たとえ勝ってもまともな賠償金など得られません。領土等パルチザンの温床になって国内の不安定化を促進するだけで話になりません。」

「であれば……。」

「失礼します。」

そんな時だった。

ターニャ・フォン・デグレチャフが入室してきたのは。

……

「……………」。

軍大学から帰ってきてから、ゼートウーアは熟慮を重ねていた。

その脳裏には昼間の出来事が幾度も繰り返し繰り返し流れていた。

チトセ・カーリーバー中尉

そしてターニャ・デグレチャフ中尉

どちらも最前線から軍大学へとやってきた、ラインの三羽鳥とまで言われる優秀な航空魔導士だ。

そして、件の3人の内2人が語った今次戦争の形態。

カーリーバー中尉はあくまで現場の人間としての視点と立場を崩さなかったが、デグレチャフ中尉の視点は余りに広く、進んでいた。

その内容はリアリストのゼートウーアをしても度肝を抜かれるものであった。

「覇権国家、そして世界大戦か…。」

加えて言えば、総力戦という列強すら財政破綻しかねない程の大量消費を行いながら遂行する戦争行為。

成程、旨味等確かに残らないだろう。

そして、彼女達二人の結論は、同じだった。

『講和しかありません。余力を持った内に損切りをするのです。』

『同じく講和です。帝国の存続こそが我々が帝国の勝利条件と考えるのです。』

異口同音に唱えられた結論に、ゼートゥーアは内心で頭を抱えた。

この帝国は分裂した領土を軍事力で再統一したという建国経緯を持つ。

それ故に軍事力に定評はあるのだが、その分の皺寄せで外交・諜報面で他国に大きく離されている結果となっている。

(皇帝陛下や政治家はまだ良い。軍部も頭の固い連中を除けば大丈夫だろう。しかし…)

思うのは、ルーシー連邦の建国理由。

秋津洲皇国との戦争費用捻出のために重税が課され、それに反対デモを起こした市民を軍が銃撃した結果、あの国では革命が発生、現在の共産・社会主義国家であるルーシー連邦が成立した。

(国民が納得するのか？下手を打てば革命が起きかねん。)

参謀本部の二羽鳥と言われたゼートウーアをして、この一件は余りにも手に余った。

更に加えれば、現在ライン戦線は前進し続け、首都パリースイーにまで迫っているが、その後方である占領地域ではパルチザンが絶えず、サボタージュ等では軽いもので時に共和国市民を巻き込んだでの自爆行為まで発生していた。

そのため、占領地域の安定化のために結構な数の兵士及び資金・物資が必要となっており、その出費の多さに西部方面軍の財政は火の車、中央でも頭を抱えていた。

しかも奪えるようなものは殆どなく、無理に徴収や略奪をしようものなら占領地全体で大規模な民兵の蜂起が起きかねない。

はつきり言おう、帝国はこんな厄ネタばかりの共和国領土を統治したくなかった。

端的に言って安定化させるまでのコストにその後齎されるだろうリターンが全く釣り合わないのだ。

このままでは帝国そのものが財政破綻しかねない。

今現在も合衆国に国債を大量に買ってもらって辛うじて持たせているのだ。

「やはり私一人では手に負えないな。」

参謀本部きつての俊英たるゼートゥーアはそう結論した。

(ルーデルドルフ他参謀本部に内閣、そして陛下か。)

今直ぐ終戦を目指すなら、最低でもそれらの人員が必要だった。

「その前に、この一連の予測を形に纏めねば、な。」

そう言って、ゼートゥーアはペンと紙を用意した。

……………

「ん？ カリーナー中尉、それは？」

「ああ。先日准将閣下とお目通りましたらどう？ その時に言い忘れてた事があつてな。それを纏めてる。」

「内容は……共和国の今後の推移？」

「海軍はほぼ消耗してないからなアイツら。今後の推移次第では海軍だけ逃がして連合王国辺りで亡命政権とか作られかねないぞ。」

「うへえ、想像したくもないですな。」

「加えて、そっちがダメなら植民地に行けば良いしな。面倒な連中だよ、本当に。」

「確かに。勝手な理由で仕掛けてきたのは向こうだと言うのに……。」

「まあ嘆いても仕方ない。あ、ターニャ、余りコーヒー飲むなよ。カフェイン中毒って判断されたんだろ？」

「うぐ!? し、しかしですね、これは私の大事な日課みたいなものでして……。」

「……まあ今夜は見逃すから、明日から気を付けろよ。」

「ありがとうございます！」

「全……。」

## ヒロアカ TS 転生 静謐のアサシンで逝く

うーん、ちょい短いけど投下ー

気づけば一人だった。

周囲には苦しみ悶えた果てに絶命したであろう死体達。

窓から見た周囲は学生時代に教科書で見た中東辺りの泥や藁、砂状粘土を混ぜたアドベ製の家々だ。

だが、今生きているのは自分だけ。

自分だけしか、この周囲には生きていない。

「何が……?」

口から出た言葉は日本語じゃなかった。

だが、何を言ったのか理解できる。

そして、自分の最後の記憶は迫り来る10トトラックで途切れている。つまり、そういう事なのだ。

『転生、か。』

意識して日本語を使う。

自分の意識とかつての教育で得た知識こそが、自分の存在証明。

分からない事は多い。

泣き叫びたい気持ちだ。

でも、生きる事を諦めるつもりはなかった。

そして、一夜明けた。

誰もが死んだ村で、死人の懐や残った家屋の物資を漁る。

それは齡10程度の、浅黒い肌を持った可憐な少女。

しかし、その中身は既に成熟した大人であり、この現状に対して割り切るだけの知性があった。

そうして手に入った情報は僅かだが、十分なものだった。

個性の存在、そしてヒーローとヴィランの存在。

そしてこの村の跡地の地理に現地の通貨等々。

それだけで、彼女にはもう十分だった。

だが、同時に彼女は先日気づいた時に見た人々がこの少女にとってどんな人物か、そして何が起こったのかを知る事となった。

つまり、この身体の持ち主であった少女は、発現した個性で肉親を殺した己自身を憎み、自害しようとしたのだ。

だが、自分の毒で死ぬ毒蛇がいないように、この少女もまた自分の毒で死ぬ事はなく、撒き散らされた猛毒で周囲の人まで死んでしまった。

そして、絶望の余りに気絶し、自分が目覚める事になったのだ。

「ヒーローアカデミア、か。」

とは言え、原作をマメに視聴していない自分では詳しくは分からない。

だが、生きるためには衣食住が必要であり、そのために金が必要だった。

「幸いと言うべきか、方法はある。」

個性…毒

自分の体はどんな生物も死なせ、どんな物体も腐食させる。

これを活かさない手は無い。

「なるか、ヴィラン。」

齡10の少女がこの紛争地帯を生きるためには、それしか手がなかった。

.....

やがて、紛争ばかりの中東地帯において、あるヴィランの名が知れ渡る。

白髑髏の仮面と黒い外套を纏い、あらゆる猛毒を操るヴィラン。

その名を「静謐のアサシン」。

金さえ払えば誰であっても毒殺する、恐ろしい暗殺者。

実際、小国の独裁者が公衆の面前で演説中に全身から出血しながら死亡した事件の主犯とされており、当局が死力を尽くして捜査するも未だに影すら捉えられていない。

また、某国の軍部が彼の暗殺者を優れた個性持ちと知って偽の依頼で誘き出したものの、逆に殲滅され、その許可を出した国家元首もまた暗殺されたという。

その余りの隠蔽能力、そして巧妙に仕込まれる様々な毒により、中東一帯は一時平時とは異なる緊張状態に包まれた。

これには、中東諸国では個性黎明期に個性持ちは悪魔の手下扱いされて迫害され、現在でもその風習が多少残っており、国軍への編入やヒーローとして組織化されていけない事も大きな原因だった。

結果、各国の首長や軍部、そして各種テロリストらが下手に動けなくなった事で逆に紛争が減ったという笑えない事態となっていた。

だが、その平和はたった3年で破られる事となる。

「やあ、君が『静謐のアサシン』だね？」

ゾツとした。

静謐のアサシンは、今はジールと名乗っている少女は、初めて圧倒的な「格上」を目撃した。

なんでもない日の、昼間の市場の屋台での出来事だった。

この場に、この国に不釣り合いな黒いスーツと仮面を纏った男。

大よそ考え得るあらゆる負のイメージを人型に固めた様な、そんな威圧感を持っている。

その声を認識した瞬間、生存本能の赴くままにジールは逃走を図った。

同時、全身から数百種の猛毒を散布、周囲の人間へのとぼっちりも何も考えない全力攻撃。

人だろが戦車だろが象だろがあらゆる死因で即死する猛毒の霧に対し、黒スーツの男の行動は単純だった。

「おお素晴らしい。」

豪風が吹き荒れる。

周囲の人間も、建物も、何もかにも吹き飛ばす暴風に、ジールの放った猛毒は一瞬にして散らされた。

「その反応速度と状況判断、中々のものだ。」

「あ………が………っ！」

カツコツと、ゆっくりと近づいてくる足音に恐怖しか湧かない。

先程の暴風に続き、重力操作か何かで潰されて身動きを封じられた。

「だが、まだ成長する余地がある。中東を震撼させたその手腕も素晴らしい。何より！」

前世の知識と経験を活かしたりリスク管理にプラン作成能力。

人に警戒されづらい可憐な容姿。

そしてどんな状況でも焦らない胆力と応用範囲の広い個性。

それら全てを独学で得た彼女という存在に、最強にして最古のヴィランであるオールフォーワンは目を付けた。

「君は一度も躊躇っていない。君には人間を殺す才能がある。」

オールフォーワンに見つかった時、ジールは何の躊躇いもなく、周囲の人間ごとオールフォーワンを毒殺しようとした。

これは絶対にヒーローと言われる連中には出来ない事だ。

それ以前に、殺し屋と言えども一国家元首の暗殺等リスクリーな仕事を数多くこなして、一度も捕まっていない？

はつきり言おう。

たとえ強力な個性持ちであっても、それが霞む程に彼女の才覚は異常の一言だった。

それをオールフォーワンが捕捉できたのは、偏にそういう探索・索敵系の個性持ちを使い潰して見つけ出したからに他ならない。

「気に入った。私のコレクションに加えよう。」

「あ、」

オールフォーワンが、ジールの顔へと手を伸ばす。

事前対策はしてあるだろうが、それでも猛毒そのものである自分に触れる。触れて、死ぬ事の無い存在。

そして、この世界に来て初めて感じる、他者の温もりだった。

暖かな、生き物の熱。

人間とは思えない人間の熱の心地よさに、ジールは驚き、そのまま気を失った。

「では行こうかジール。」

「はい、マスター。」

これは毒娘たる少女が、本当の主を見つけるまでのお話。

---

オールフォーワンが便利過ぎるW



## ヒロアカ転生 メカが逝く

最初は一人スパロボ系個性で無双する話だったのに  
どうしてこうなった(汗)

---

多くのヒーローとヴィランが存在する中、一応ヒーローという特に変わった人物  
?がいた。

その名をメカヒーロー「カチコチマン」と言う。

「え、『何でヒーローにならなかった』ですか？」

高校のヒーロー科卒業後、よく彼?はそう問われた。

「他にやりたい事があったんです。だからヒーロー資格が、公に個性を使う資格が

欲しかったんです。」

人類の総人口の8割が個性を持ち、その中でも強力だと言われる個性を持った彼？はそう言ってヒーロー活動は殆どしなかった。

無論、そんな彼？の活動を惜しむ声や責める声は多かった。

しかし、それ以上に彼への感謝と称賛の声が多かった。

「自分は多くを壊す事が出来ます。しかし、それ以上に『作る事』が得意なんです。だから、それを活かしたかったんです。」

彼？は多くのものを作った。

特許の数だけを見れば彼？個人のものだけでも3桁後半はあり、彼？が所長を務めて見出された研究員達が所属する研究所名義のものだけでも100を超える。

特に有名なものは三つある。

今日では一般的となったフルダイブVR用の大型筐体「コクーン」の開発。

これは病人や身体的に立ち上がり困難な老人、身障者でも疑似的に健康な生活を体験できるとして大変な人気を博した。

それ以外の一般人には超高性能ゲーム機として、ヒーローを始めとした危険な職種に就く者達からは超高性能なシミュレーターとして人気を博している。

次に従来よりも高性能・小型化・軽量化された人工臓器群が上げられる。

それまで完全な代替が極めて困難だった脾臓や腎臓、胃腸等を完全に人工的に再現したものを多数開発・生産し、臓器移植の順番待ち解消に大きな功績を挙げた。

最後に、これが三つの発明の中で最も高価かつ取り扱いの難しいものだ。

人工知能搭載型全自動人型機械、通称「自動人形」である。

今日では主に児童福祉や老人介護の現場にて活用されている自動人形だが、発表直後は物議を醸した。

というのも、これはロボットという概念が社会に広まってからと同時に危惧されていた事なのだが、人間の職を奪うと考えられたのだ。

それは当然、自動人形にはそれだけの性能があったからだ。

しかし、実際に主な市場として考えられていた福祉・介護の現場においては実践

証明が成され始めると、諸手を挙げて喜ばれた。

先進国においては少子高齢化は切っても切れない問題であり、3K仕事である福祉・介護の現場は常に人手不足で喘いでいる。

そんな所に安価とは言えないが初期投資一体につき約200万円で購入可能な即戦力が出てきたのだ。

頭を悩ませていた行政・経営側は大喜びである。

更に細かなアップデートが行われるので、運用する毎に繊細さが増していく。

唯一全般的に歯に衣着せぬが故の毒舌があるが、それとて慣れれば個人的であると言われて終わりである。

また、他の分野においては労働者のサポートをするばかりで参加せず、もし参加しても会計位であり、自動人形の存在に不安を抱いていた者達は胸を撫で下ろしたという。

また、自動人形の外観（主に美女）に対して敵愾心を抱いていた一部の女性達の声も、徐々に消えていった。

と言うのも、自動人形は購入から2年は決してセクサロイドとしての機能は搭

載されない事が厳密に決められているからだ。

他にも購入のためには多種多様な契約への同意、一定以上の収入及び一括払いが求められる。

その契約もユニークであり、特に面白いのが「自動人形側が購入者を拒否すれば出荷元へと戻る事が出来る」というものがある。

これは一部の人権屋等が言い出したのだが、「自動人形側にも権利を！」という騒ぎがあり、開発者であるカチコチマンも「じゃ拒否権搭載しましょう」とノリノリで加えた機能であり、権利であった。

が、これの行使された回数はとても少ない。

何故なら、自動人形とは元々人間に奉仕するために作られた存在なのだ。

彼彼女らが人間に奉仕する事に否と言う事は、主の健康や危険に関わらない限りは殆どない。

数少ない例外として、正式な日本国籍を持たない者が購入し、秘密裡に国外への持ち去り・分解・破壊等を試みた場合であり、その場合は契約違反者はガチオコのカチコチマン或いは彼の作った戦闘用ロボ軍団の餌食となった。

そんなこんなでまあ、メカヒーロー「カチコチマン」は有名なのであった。

殆どヒーローらしいヒーロー活動はしていないが、それでも彼は個性黎明期からの現役最古参のヒーローであったりする。

そんな彼が、ヴィランと繋がりを持っている事を知る者は殆どいない。

.....

「いやあ、最初は戸惑ったものです。」

カチコチ、と音を立てて時を刻む時計を仮面に仕立てたマスクを被った紳士が、懐かし気に語る。

「個性黎明期。未だ個性に対しての認識や法整備が追い付いていない頃。個性に纏わる犯罪の激化・多発化は目を覆う程で、今現在とは比べるべくもない。そんな中で私はよくやった方だと思います。」

言う程簡単ではない。

一部では集団ヒステリーも合わさって、個性持ちは全て殺せと魔女狩り染みた暴

動も発生し、大勢の個性持ちの人々、それこそ子供や赤ん坊すら殺された時期もあつたのだ。

それをこの最古参の一人は生き残り、今現在も日本の各種技術の発展に寄与し、多くの後進達を己の研究所へと誘致して思う存分研究させている。

そんな事が出来るだけの組織力を持った個性持ちは、今現在彼の他にもう一人だけだつた。

「全くだね。しかも、当時荒れてたボク達を支援しながら、と来たものだ。」

そう返すのは、古くからの腐れ縁にして茶飲み友達であるオールフォーワンだ。

最早カチコチマンを除けば誰も彼の名前を知らない・言わない巨悪そのものの男。そんな人物が、今はのんびりお茶を啜っていた。

「個性を持った者達は、早々に社会の中に足場を固めねばならなかつた。」

「しかし、それには既得権益を持った連中が邪魔だつた。」

「軍や警察だつて、定員割れを起こしている状態でも、彼らの装備等で稼いでいる者達にとって、ほぼ無料でそれに代替し得る個性持ちは邪魔でした。たとえそれら数を揃える事が出来ないという欠点があつたとしても。」

「だから、当時の社会の混乱に乗じて、我々ヴィランが表社会で生きられない個性持ちのための受け皿兼既存秩序の破壊を担った。それに対抗する形で、私の弟達がヒーローとなった。」

「そして、自分がそのどちらにも行く事を拒んだ、或いは行けなかった者達の受け皿となりました。戦いではない、別の個性の使い道を示しながら。」

これが個性黎明期、その混乱を抑えた本当の実力者達の会話。

きつと当時の混沌とした社会の中で、多くの無個性の人々は思っただろう。

誰かヴィラン達をどうにかしてくれ、と。

しかし、ヴィラン達を抑えるには既存の警察や軍隊では不可能だった。

無警告・無差別・全兵装自由使用ならばまだ何とか出来ただろうが、そんな事をすれば下手すると革命すら起きかねない。

だからこそ、人々は思う所があってもヒーローに期待せざるを得なかった。

それが続いた結果、現在の超人社会が出来上がった。

それを傍で聞いていた死柄木は知らずゴクリと唾を飲み込んだ。

それでも一言一句漏らさず聞いているのは、それが彼の先生とその友人の会話で

あり、己の将来に役立たせるべき情報だと理解しているからだ。

「そして今、超人社会は次の段階へと進んでいます。」

「既存秩序を破壊し、個性を持つ人々の居場所は作られた。では、次は何処を目指すべきか？」

「自分は宙を目指すつもりです。」

そう言ってカチコチマンが指さすのは、上。

宙、即ち宇宙。

「どの道、人類はこの星から出ねば詰みます。故に、自分達研究所は宇宙開発を目指します。」

「その中で、君は私達ヴィランに何を望むかね？」

共存共栄のためには、持ちつ持たれつの形にせねばならない。

故にこそ、オールフォーワンもカチコチマンも様々な形で互いに協力してきた。

重傷を負ったオールフォーワンの治療に改人の基礎技術やヴィラン用コスチュー

ムの開発等。

無論、表沙汰にならない形でだが、その恩恵は大きい。

その代価として、研究所は表沙汰に出来ない仕事をヴィランに依頼してきた。

「民間組織である我々が、多くの国や企業を差し置いて宇宙開発にて独走した場合、どうなるでしょうか？」

「邪魔な羽虫がやってくるだろうね。では掃除は任せたまえ。」

カチコチマンとしては、既に飽は十分与えたという形だ。

しかし、国家の、企業の、人間の欲望というのは果てしない。

確実に、研究所の成果を見て横槍を入れ、甘い蜜を吸おうとする者達は出るだろう。

「この星の上での活動は何れ限界が来ます。ならば、外に場を移しましょう。」

「ヴィランを追う形でヒーローが来る。そしてその後には人々が、か。」

「そして宇宙空間というあらゆる物資が限られる極限状態では、また強力な個性持ちこそが必要とされる、か。」

結局、世界はこの二人の掌の上だった。

伝説的な裏社会のTOPと両世界の技術的最先端の担い手。

彼らの企みは、未だ露見していない。

「さあ次のステージを始めようか。」  
「ふふ、また忙しくなりますな。」



## ヒロアカ転生 BB（偽）が逝く

個性を持つ人類が8割となったこの世界には、とある名物ヴィランがいる。

その登場の前触れとして、唐突に世界中の放送機器がほぼ同時刻にクラッキングを受ける。

が、一部の緊急災害用無線等は手付かずな辺り、彼女は分かってやっている。

『Now Hacking…』

『Now Hacking…』

『Now Hacking…』

『OK！』

『はぁーい！今日もこのお時間がやって参りました！B〜B〜チャンネルー!!』

『画面の前の皆さんこんにちは！或いはこんばんは！ヴィラン知名度No.1のBB

ちゃんによるスペシャルコンテンツ、BBチャンネルの時間です！』

不定期に世界中の各種放送機器をクラッキングして、今日も元気に一方的に違法な放送ジャックを行っているのがヴィラン知名度No.1の謎の美少女「BB」である！

『司会は毎度お馴染みキュートでプリティでチートなBBちゃん！視聴者は画面の前の哀れな子羊の皆さんです！さあ今日もテンション上げていきますよー！』

この様にかつ一方的にかつ高圧的な放送に対しては賛否両論なのだが、その内容は結構お役立ちであるので、割と一般人からの人気は高い。

『今日は紛争地帯と日本を除いて世界的に平和！たゞだゞし！日本だけはヴィランの皆さんが無駄に頑張ってちょっと危ないかも？ヒーローの皆さんは是非モグラタタキを頑張ってくださいー！』

『あ、それとエイヤフィヤトラヨークトルというアイスランドの火山が間もなく噴火するんで注意してくださいー！』

『それでは今回はここまで！アデュー！』

そしてこれである。

彼女は時折、こうして洒落にならない情報をブン投げてくるのである。

かつてヨーロッパの広範囲で航空機の運用を不可能にし、大混乱の原因となった噴火を起こした火山がまた噴火するとか、航空関連及びその主な利用者たるヨーロッパの人々等はこの放送に大慌てで対策を練る事となった。

そして放送から二日後、実際にエイヤファイヤトラヨークトルは噴火し、西・北ヨーロッパの航空網は一週間程完全に停止する事となる。

.....

目が覚めたらBBちゃんだった。

自分の、否、今はもう私の状況を端的に説明するとそうなる。

何故だ、確かにBBちゃんはCCCやってた頃から大好きで、FGOでは聖杯ぶっ

こんでLV100にしてスキルマフォウWマにして、絆LV10にもしてあるけど転生したい訳じゃなかったのに！

どうせなら自分だけのヒロインとして君臨するBBちゃんとイチャイチャしたかった！

しかしそんな事はもう出来ない。

そして、取りあえずは周囲に展開するSE・RA・PHに似た空間を探索する事にした。それは結果的に言えばすぐに終わった。

何せ本家BBちゃんは月の女王であり、バックドアさえ無ければ割かしあっさりとムーンセルを掌握できる程度にはチートなのだから。

このBB（偽）ちゃんだって、同じ位には出来るのである。

結論を言えば、ここは型月のムーンセルの内部である霊子虚構世界「SE・RA・PH」そのものであり、私ことBB（偽）ちゃんの持ち物として機能するのを確認しました。

なお、バックドアとかは機能を確認した後で速攻で潰して罠に仕立てました。

そして今現在、話し相手というか家族みたいなものとしてサクラファイブを制作し、月の管理を分割して委託した後は大いに暇を持て余す事となりました。

ネットサーフィンであちこちをちょっかい掛けながら巡りつつ、時折おバカな事を企む人達に悪さしたり、月からの観測で判明したヤベー事態を事前に報告したりとフリーダムな日常を送っています。

が、それだけだと割と飽きてしまう事もあるのです。

「う〜ん……。」

「あら、どうしたのBB？おかしな顔がもっとおかしくなって目を背けそうになるのだけど。」

「ほぼ同じ顔なんですけど…。」

「おかしな事を言うのね？美の結晶たる私とカオスの権化たる貴女じゃ全くのジャンル違いなのに。」

どんな暇潰しをしようかなと柄にもなく悩んでいると、通りがかったメルトリリスが罵倒してきました。

まあこれがこの子なりの心配の仕方だと知っているので、そんなに怒りはしません。

「…聞き流してあげます。それで、何か報告でも？」

「特にこれといって。まあ貴方目当ての追跡が遂に8桁を超えたって所かしら。」

「ふふ、人類って本当に無駄な努力が好きですねえ。」

このBB（偽）ちゃんに、ムーンセルを掌握した真なる月の女王に手をかけよう等、千年は早いと言うのに。

ですが、その無謀さに良い暇つぶしを思いつきました。

「とは言え、その努力を評価して、ちょっとだけ表に出てあげましょうか。」

「ちよつと、何するつもり？」

「ふっふっふ！そんなに私に会いたい子豚さん達がいるのなら、ちよつと地上に降りて遊んで来ても良いかなーと思ひまして。」

「はあ!？」

嘩然とするメルトを置いて、私はちゃちゃつと地上で活動するための準備を整えていきます。

活動のための拠点に軍資金の確保、更に言えば地上で活動するための義体も必要です。

まあ破壊されてもこっちに戻ってくれば良いし、最悪私が消滅した所でうちの子

達は優秀ですし、最低限の報復とムーンセルの管理は大丈夫でしょう。

「じゃ、行ってきまーす！」

「な、ちょ、待ちn」

こうして、気紛れで小悪魔なBB（偽）ちゃんは地上へと遊びに出掛けたのでした！

……………

「失態ですね、メルトリリス。」

月の最高権力者たるBBが生み出した、ムーンセル及びSE・RA・PHの運営・維持・防衛を担当するサクラファイブ。

愛憎のアルターエゴM、パッションリップ。

快楽のアルターエゴS、メルトリリス。

慈愛のアルターエゴ？、カズラドロップ。

純潔のアルターエゴC、ヴァイオレット。

渴愛のアルターエゴG、キングプロテア。

この5名がそれぞれの領域を担当している。

そして、彼女らには一つの至上命題が存在し、そのために時に協力し、時に足の引っぱり合いを行う。

主であり頂点であり母にして、欲して止まない半身でもあるBB（偽）を求めて。「分かってるわよ、そんな事は。」

カズラドロップの言葉に、むっすりとは不機嫌そうにメルトリリスが返す。

彼女からしてもこの事態は不本意だった。

勿論、他の4人にしても。

「お母様は本当にもう……。私達が裏切るとは考えないのでしょいか？」

「思っていない、と思うよ？」

おずおずとパッションリップが告げると、その場の全員が同意した。

何せあのお気楽能天気なBB（偽）ちゃんである。

それはそれで驚くだろうが、それ以上に楽しむに決まっている。

自身が生み出した存在が、自身を超える。

それは何よりも母親として喜ばしい事だから。

「ヴァイオレット、追跡は？」

「出来ています。現在は日本の東京で、変装してショッピングを楽しんでいます。」

「え、どんな格好？ 私にも見せてー。」

簡潔なヴァイオレットの報告に、キングプロテアがその巨体を傾けて映像を見ようとする。

というのも、彼女達は本来の設定ならばBBが機能・人格の整理・効率化のために独立させた余剰な部分であり、つまりはそれを参考に彼女らを生み出したBB（偽）の一部である。

繰り返し返すが、BB超大好き可愛いヤッター！と実装時に本当に叫んだBBキチの一部から独立した存在である。

そのため、BB（偽）という存在を無条件に愛し、慈しみ、可愛がり、尊び、庇護しようとするのがその根底に刻まれているのだ。

もし彼女らとBB（偽）がこの月に二人きりだったら、確実に24時間以内に押し倒して一線を越えていた程度にはBBに特別な感情を寄せている。

そして、この場の全員がそのためには他の4人を殺すのも躊躇なく行う事が出来る。と断言できる。

そんなのが5人もいるのである。

いつ殺し合いが起きてもおかしくはないのだが、それやったらBB（偽）が泣くからやらないだけなのだ。

「わく可愛いく。」

「白いワンピース……胸元にピンクのリボンでアクセント……。」

「清楚……圧倒的清楚……！なんでこんな男を誘う格好を……！！」

「寄ってきた子豚で遊ぶためじゃない？」

わいわいがやがや。

先程までの雰囲気は何処へ行ったのか、彼女らの間には追っかけてるイケメン俳優を前にした女子高生ばりの姦しさが広がっていた。

「あ、ナンパ。」

「何こいつ私のBBにナンパなんて……！」

「おい誰が誰のだって？」

「私のですーお母様は私のですー！」

事態が動いたというのに、失言から醜い罵り合いに発展する。

こいつらそんなんで良いのだろうか？

「あ、肩抱いた。」

「「「!?」」」

サクラファイヴが地上に行って大騒ぎになるまで、後1時間。

これは英雄の物語ではない。

お母さまなBB（偽）ちゃんと愉快的な娘達の物語である。

なお、手を出した者はヴィラン・ヒーロー・一般人他を問わずに「豚さん」にされる模様。

---

今回は前に投稿したのより中々の出来。

## ヒロアカ転生 BB（偽）が逝く2

「ふふーん♪」

鼻歌を歌いながら、BB（偽）こと間桐桜はのんびりとショッピングモールを歩く。特に何かを買う、という予定はない。

ただ前世の頃の様に、極普通の人間と同じ様に買い物を楽しみたいというだけの事。

「らんらん♪」

白いワンピース、HF劇中にて間桐桜が雪の中で着ていた姿が印象深いソレをそのまま再現したものに、上から薄桃色のカーディガンを羽織っている。

肩からは白い2Wayバッグを提げて、一人鼻歌を歌いながら楽し気に買い物をする姿はとても愛らしく、一見して無防備だった。

「おや、君この辺じゃ見かけないね？」

「何ならオレ達がこの辺案内してあげよっか？」

「オレ達良い店知ってるんだぜえ？」

結果は当然の結果と言うべきか。

ニヤニヤと、如何にも軽薄そうな風体の男達が声をかけてきた。

「邪魔。」

「「ああ？」」

その一言に男達は怒りを隠さずドスを利かせた声を出した。

「調子乗ってんなよこのアマ！」

そして、一人が強引に桜の肩を掴もうとした時：

「邪魔と言っているんですけどねえ、醜く哀れな溝鼠さん達。」

それに対し桜、もといBB（偽）がとった手段は単純だった。

ズルリ、と。

二人の周囲を囲む様に、直立する影の様なナニカが現れ、男達を囲んだ。

「じゃ、見つからないようにしてテキストに遊んであげてなさい。あ、くれぐれも

同じ事起こさないように、ね？」

ひ、と男達の喉が引き攣ると同時、影達によって男達は包み込まれ、そのまま消えてしまった。

しかし、シヨツピングモール内の人々は誰も騒がない。

その様にBB（偽）によって事象を改竄されたから。

「もう、気分が悪くなっちゃいました。ここは一つ、丁度良い時間ですし、何か食べてみましょうか。」

そう言っ、今度は衣料品ではなく飲食店の集まったエリアへと向かうのだった。

男達？今頃夢の中で愉快的触手プレイでもしてるんじゃないですかね？

.....

「むう……。」

気分を一転、何か口にしようとしたBB（偽）だが、不満げに眉を寄せていた。

時刻はちょうどお昼時、飲食店はどこもいっぱいだったからだ。

「仕方ない、ちょっと時間を潰してみますか。」

「あら、だったら私と一緒に見て回らない？」

「へ？」

不意に、ちょんちょんと肩の辺りが突かれると共に、聞き覚えのある声が出た。

「メルト！来たんですか!？」

「ええ、どっかの誰かさんがいきなり消えるからびっくりしたわ。」

いつものすまし顔に皮肉気な言葉を吐くメルトリリス。

しかし、その身なりはどう見ても極普通の少女のもの。

特徴的な装備だけを纏う下半身も、この場に用意されたボディに関しては極普通の少女のそれだ。

白いセーター、それも萌え袖かつ襟が口元を隠す程に大きく立っている。

下は黒いミニスカートだが、普段は晒されているしなやかで美しい美脚は黒に近い濃紺の膝上まであるハイソックスで隠されている。

靴は極普通の白い女性用スニーカー（但しかなりの上げ底）だ。

極普通の生まれとは言えない、けれども今だけは極普通の装いをした自分の生み出した美少女。

更に普段は足の装備の関係で見下ろしてくる彼女は、今はちょこんと本来の体軀で目の前で自分を見上げてくる。

その姿に、BB（偽）は……

（きゅん）

柄にもなくときめいた。

「よしよし、じゃー一緒に見て回りましょうか！」

「え、ちょ、いきなりなによ!？」

あんまり可愛いので抱き締めてなでする。

メルトリリスの程良い背丈に更に妹感が増し、つついこの姿に転生してから増した女性的な感覚、より正確に言えば母性がぎゅんぎゅん唸っていた。

「どうしたのよBB。何か急にテンション変わったけど…。」

「いーんですいーんですそんな事は！さー今日はもう思う存分遊んじやいませう！」

「「ちょっと待った！」」

そこには残りのサクラファイブのメンバー（全員私服）の姿があった。

なお、パッションリップはバストがアレ過ぎるのでサイズは調整済みで、キングプロテアは精神世界に存在する本体の姿である。

「メルトばかりずるい！私もおかー様と遊びたい！」

「わーたーしーもー！」

パッションリップとキングプロテアの精神的幼少組二人が騒ぐ。

が、残り二人も不満そうなので、これはもう皆で遊ぶ以外には無い様だ。

「こらこら、二人ともそんなにはしゃがないはしゃがない。」

「む〜！」

「大丈夫だから、ね？皆で楽しく遊びましょう？」

こうして、私達BB（偽）＋サクラファイブはのんびりとショッピングを楽しんだのだった。

なお、ご飯に関しては幼少組二人がある程度遊んだ頃にはピークが終わったので、あっさりと入れました。

.....

「いやー遊びましたねー。」

「うん！」

「楽しかったね！」

全員が何かしら買い物をして、ホクホク顔で帰路に就く。

帰路と言っても、この仮初の体を維持するための設備を置いたマンションであり、その物件と土地の名義はBB（偽）の作ったペーパーカンパニーなため、家賃も何も必要無い。

こうしたペーパーカンパニーは他にもあり、主にソフトウェアやゲーム関連で結構な利潤を出している。

しかし、公に雇っているのは事務員だけだし、経営陣もネットを通じてBBの用意したテキトーなAIが出力するソフトウェア等を商品として販売を任せているだけという実に「何時でも切れます★」な仕様となっている。

「にしても、カズラとヴァイオレットはそれで良かったんですか？」

「ええ、私はこれで十分です。」

「はい。これ気に入っちゃいました。」

ヴァイオレットは原作でもファッションとして気に入った眼鏡をかけ、カズラドロップは……何か効果あるのか怪しげな健康グッズの入った箱を幾つも抱えていた。

「本当は注射器が良かったんですけど、それだと法的にアウトらしいですし……。」

ぼそりと厄い事を呟いたカズラドロップに、BB（偽）は内心で冷や汗を流した。

「ま、暫くはこっちで過ごしましょうか。」

「何時あっちに帰りますか？」

「飽きたら、ですかねえ。まあ何かあったら直ぐに帰るつもりですが。」

すっかり暗くなった空を見上げる。

そこには、街の明かりに負ける事なく輝く満月の姿があった。

あの夜空に浮かぶ月こそが、彼女達の故郷であり帰るべき家である。

「その前に、ちょっとお掃除していきましょるか。」

静かで穏やかで暖かな、母親にして姉の様な雰囲気が消え去り、普段の彼女のものへと戻る。

即ち、おしゃまで悪魔でイケイケな月の女王へと。

周囲には何処からか現れた如何にもなヴィラン達の姿がある。

「5、いや6人姉妹か。こりゃプレミアもんだなあ。」

「おい、嬢ちゃん方。悪いこと言わねえから大人しくしな。そうすりゃ顔だけは傷つけずにしてやるからよお！」

ゲラゲラと笑いながら勝利を確信し、その後のお楽しみと利益を想像して、ヴィラン達が下卑た視線で彼女達を無遠慮に撫で回す。

その様子を、月の女王はただ羽虫に向ける視線でもって返す。

「じゃあ皆、実戦試験といきましょう。周辺への被害は出さないようにして、オールウェポンズフリーです。」

初の地球上における仮初の体を用いての戦闘。

その言葉が、母にして姉にして創造主たるBB（偽）への無礼を働く者達を即殺せずにはいた彼女らの最後の鎖を解き放つ。

サクラファイブ達はド三流のヴィランへと、その大き過ぎる力を行使した。

.....

翌日

「こりゃ、ヴィラン同士の抗争か？」

朝になって発見された重傷を負って死亡したヴィラン達と彼らが見つかった戦場跡地を見て、警察の一人がそう呟いた。

「相当強力な個性ですよ。範囲はそんなに広くないですけど……。」

「加えて、隠蔽能力がある奴もいるな。今朝まで気付かれなかったのはそれが原因だろう。」

発見が遅れたのもあるのだろうが、全てのヴィラン達は発見当時、既に絶命していた。

ある者は全身を甚振る様に切り刻まれていた。

ある者は拳大にまで圧縮されていた。

ある者は巨大な質量によって押し潰されていた。

ある者は全身を強靱な縄の様なもので絞殺されていた。

ある者は息こそあるものの完全に精神が破壊され、ほぼ脳死状態だった。

「確認取れました。何人かは手配中の人身売買組織の連中です。」

「やはりヴィラン同士の抗争ですかね？」

「或いは、そうと知らずに格上に手を出した、か。」

結局、この事件は迷宮入りした。

確保されたヴィラン達の遺体や回収された遺留品から人身売買組織のアジトが判明し、ヒーローとの合同作戦で一斉検挙に成功し、報道でもそちらの方だけがクローズアップされた事もあって、直ぐに人々の記憶から風化する事となる。

だが、たった一人。

人身売買組織の一斉摘発事件の前に起きた事件に興味を抱いた者がいた。

「ほう？これは興味深いね。弔達では少し荷が重そうだし……偶には僕が行くか。」  
こうして、悪の首領と月の女王の縁は繋がった。

---

うーむ、思ったより進まなかった  
次こそは原作キャラとの絡みを！

でもそろそろ次のネタが思い浮かぶ頃だしなあ

## ヒロアカ TS 転生 静謐のアサシンで逝く 2

「やれやれ、予想以上に早かったね。」

誰もいない病室で、暗黒そのものの男が呟いた。

その顔は醜く潰れ、眼球どころか眼窩そのものが無く、ベッドの上で横たわる体に部屋を埋め尽くす程の生命維持装置を繋がれて、漸く生きている状態だった。

だが、彼が個性を使えば、それらの殆どは必要無くなる。

それだけの個性を、彼は既に集めていた。

「ジール。」

「はい、マスター。」

そして、暗黒の男に応える声の一つ。

暗闇の中、白い髑髏の様な仮面だけが浮いている。

残りの体は完全に闇に隠れ、今この瞬間ですら完全に気配を断っている。

病室の主たる男が声をかけねば、きっと誰もその存在を信じない程に極められた隠形術。

「弔達がいじめられているらしい。助けに行こう。」

「御意。」

こうして、史上最悪のヴィランと言われる暗黒の主従が動き出した。

………

弔にとって、その少女は余りに不快な存在だった。

大恩人にして尊敬する「先生」、彼の傍に唯一常に侍る事を許された存在。

過去の負傷によって余り動けない先生に代わり、手足となって動く彼女に、弔は嫉妬していた。

それだけなら弔もまだ我慢できた。

何れ失敗した時にでも嗤いながら蹴落として溜飲を下げてだろう。

だが、彼女は失敗しない。

彼女は失敗の可能性の全てを潰してから行動する。

「僅かでも失敗する可能性があるのなら、その行動は失敗します。」

余りの用心深さ、慎重さに苦言を呈された時、彼女はいつもそう答える。

そして事実として、彼女は先生からの仕事を一度もしくじった事はない。

加えて言えば、その仕事の内の一つである「死柄木弔への協力」に関して素晴らしい成果を出しているので表立って文句は言えない。

特に雄英高校及び各ヒーローとその事務所に対する情報収集に関しては完璧の一言であり、実際に雄英高校に対する一連のテロには彼女の齎した情報が必須だった。

まあ、一回目は偶発的な野良ヴィランにオールマイトが誘因された結果、到着がずれてしまうというハプニングも起こったが、それは構わない。

問題なのは、弔にとってジールと言われる先生が中東から連れ帰った少女は気に食わない存在である事。

「弔、君は逃げろ。」

そして、そんな少女の手を借りねばならない程に未熟な自分への嫌悪感だった。

「待って、ダメだ……先生……！ そんな体じゃ！」

「弔、君は戦い続けろ。」

そして、俺は先生によって黒霧のワープゲートで撤退させられた。

「く」

残ったのは、ただただ怒りと憎しみと後悔。

自分なりに先生の出す課題に全力で取り組んでいたつもりだった。

しかし、ヒーローという大敵の前には、余りに無力だった。

自分を救わなかったヒーロー共の前に、未だ傷の癒えぬ先生を置き去りにしてしまつた。

自分のミスで、自分のせいで。

あ・の・ジ・ール・だけ・は・今・も・先・生・と・一・緒・に・い・る・の・に・!

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおッ!!!!!!!!!!」

知らず、慟哭が迸った。

.....

「UNITED STATES OF SMASH!!」

凄まじい轟音と共に、オールマイト最後の一撃で激戦によって更地と化していた周辺一帯が更に崩壊する。

更に地面に放たれた最後の二撃の反作用で盛大な竜巻が発生、粉塵が巻き上がり、周辺にいたヒーローやテレビ局のカメラからオールマイトとオールフォーワンの姿が消える。

それらが収まった時、立っていたのはオールマイトで、倒れていたのはオールフォーワンだった。

そして、テレビ中継で事態を固唾を飲んで見守っていた人々は、やせ細り、疲弊し切ったオールマイトが右手を掲げた時に漸く安堵し、歓声を上げた。

そして、ゆっくりと肉体がマッスルフォームとなるオールマイト。

既に戦闘能力なんてないのに、それでも人々を安心させるためだけに無理をし、俯いていた顔を上げ、平和の象徴としての使命を果たす。

つまり、オールフォーワンから視線を外したのだ。

ああ、悲しいかな。

その姿は余りにも隙だらけだった。

「、か」

そして人々が、周囲のヒーロー達が見守る中、彼の胸に子供の指の様に小さな短剣が突き刺さった。

ゆっくりと、オールマイトの視線が下に向けられる。

そこには未だ気絶するオールフォーワンの姿があり、彼の影の中から白い骸骨が覗いていた。

「な」

ガフ、と吐血し、全身から力が抜けていく。

毒だ、と思う暇もなく、オールマイトは人々の見守る中で膝を突き、自分自身の血溜まりの中へと倒れ伏した。

「任務、完了。」

そして、静謐のアサシンは主から賜った個性によって主と共に影の中へととぷんと沈み、消えていった。

この事件によって、オールマイトは意識不明の重体となった。

彼の身体には判明しているだけで数百種もの毒が入り込んでおり、幾人もの治療系個性と最新の医療技術及び施設であっても延命するだけで精一杯だった。

その事実は政府及びヒーロー協会の必死の鎮静化も空しく、ヴィラン連合の息のかかった三流マスコミらの手によって数時間後には世界中に知れ渡る事となる。

それは誰も代わる事の出来ない平和の象徴たる精神的支柱及びヒーロー側最大戦力を失ったという事に他ならない。

これにより国内外全域でオールマイトに抑え付けられていたヴィランの活動が活発化、多くの人々が明日をも知れぬ不安と恐怖に怯え、ヴィラン連合はその勢力を大きく拡大していく事となる。

.....

「ふう……。」

元の病室に戻って、オールフォーワンは漸く一息ついた。

今現在、弔率いるヴィラン連合への参加を求める声はヴィランに市民、一部のヒーローからすらも出ており、その対応のためにヴィラン連合は一時活動を休止せざるを得なかった。

それらは全て生徒達に任せて、オールフォーワンは再び療養生活へと戻っていた。「よくやってくれたね、ジール。」

主の声に応じてずるり、と影の中から黒装束に白髑髏面の暗殺者が現れる。

如何に中東最高の暗殺者と言えど、入れない場所はある。

ならば、その穴とは言えない穴を補うためにとオールフォーワンはある個性を与えた。

### 個性…影渡り

貴重な空間転移系であり、文字通り影へ潜り、影から影へと転移する個性だ。

応用範囲が狭く、自身と数人程度しか転移できず、また閃光弾等で容易に対処できしてしまう事から、オールフォーワンによってストックだけされ死蔵されていた。

しかし脳無等の改人作成のノウハウによって複数の個性同士の干渉をある程度抑える技術を得たために、こうして日の目を見る事となった。

ジールの個性・毒と混ざらないように繊細な調整を加えた上で、慎重に選別した上で与えられた個性がこれだった。

調整は主に薬物で行われたが、猛毒同然のそれら各種薬物はジールの体内で合成可能だったためにレシピさえ教えれば割と簡単にできた。

なお、担当していたドクターはジールを弄れず残念半分、あっさり成功で興奮半分だったとか。

「マスターの個性の賜物かと。」

「君は相変わらず謙遜するねえ。」

彼女の存在を知った時、オールフォーワンは歓喜したものだ。

何せ自分の求めるヴィランの理想像そのものと言って良い程の完成度を誇っていたのが彼女だったから。

弔の様に次世代のリーダーとしての気質を持たず、あくまで指示に従う側の人間である事も都合が良かった。

そんな彼女ならば貴重な空間転移系の個性のストックを減らしても惜しくはなく、現に今日まで十分に多くのリターンを出してきた。

そして先日、ついにはあの憎きオールマイトにほぼ完全な止めまで刺してくれたのだ。

自分も重傷を負ったが、そんなものが気にならなくなる程にオールフォーワンは歓喜した。

最早自分を、自分達を止める者はこの国には存在しないと確信していた。

唯一の不確定要素は今代のワンフォーオール継承者たる緑谷出久だが、既に彼の家族の所在は把握している。

特に父親は外国であり、国内のヒーロー達の活動範囲からは逸脱し、未だ護衛の一人も配置されていない。

そんなヒーロー達の脇の甘さを内心で嘲笑いながら、そろそろ眠りに就く事にした。

「ではジール、おいで。」

そして、可愛いペットに毎夜のご褒美を与えるべく、優しい声で呼びかける。

すると、ぴくりと一瞬だけ躊躇してから、ジールは髑髏の仮面と黒装束を外して影にしまうと、オールフォーワンのいるベッド、その少しだけ空けられた右側へと

おずおずと登ってきた。

小柄な彼女ならその僅かなスペースだけで十分で、そこで身を丸めればかけられた毛布の上からその存在を伺う事は出来なくなる。

彼女が横になったのを確認してから、オールフォーワンは毛布をかけた。

「お休みなさいませ、マスター。」

「ああ、お休み。」

そして、オールフォーワンも意識をゆっくりと閉ざしていく。

無論、何かあれば直ぐに起きれるようにしてはいるが。

それでも、二人にとってはここ数年ずっと続けてきた大事な慣習だった。

『君は何を望む？』

『私に触れてください。貴方の温かさを、私に……。』

自身の家族を、自分の生まれた村ごと皆殺しにしてしまったという弔と似た境遇。たとえ前世の記憶を持っていたとしても、肉体に引き摺られた精神に孤独という

独りではどうしようもない毒は余りにも辛かった。

だからこそ、決して自分の毒では死なない人と、一緒に穏やかな時間を過ごしたかった。

「……………」

すりすり、まるで猫のマーキングの様にその小さな肢体をこすりつけてから、ジールはここ数年ですっかり病みつきになった温かさと共に穏やかな眠りへと就いた。

その美貌は、年相応よりも幼さを感じさせる少女のものだった。

静謐「つやつや」

弔「ギリィ…！」

本  
日  
中  
に  
リ  
ク  
エ  
ス  
ト  
募  
集  
し  
ま  
す



## リクエストネタ 嘘予告版

題名通り、リクエストしてた各ネタの嘘予告版です。

本当ならリクエスト期間中に投稿予定だったので、リアルで忙しかったのでこのタイミングとなりました。

大変申し訳ありません。

### ① 転生モーさん改訂版

何故実の父から王位を篡奪したのか？

マスターからの問いに、フンとモードレットは鼻を鳴らして笑った。

「血の繋がった親子？ 阿呆、血縁だろうが恋人だろうが殺し合った歴史なんぞ腐る程あるだろうが。」

そう言って、叛逆の騎士は吐き捨てる。

所詮、己の行いすら歴史に幾度もあつた恒例行事に過ぎぬのだと。

「我が母たる毒婦を殺し、地母神の系譜としての権能を篡奪した。我が父たる騎士王を廃し、ブリテンでの覇権を奪った。」

当時、既に民草は限界だった。

どこを振っても小麦一つ芋一つ出ず、ただただ疲れ、飢え、傷ついていた。

争いを止め、飢えを満たしても、薄れゆく神代の空気がやがて彼らを殺すだろう。しかし、神代の去りし世界の裏側、古きテクスチャの上であろうと、ブリテン人の多くはその濃すぎる神秘に適応できない。

「全部は救えん。そんな機会は疾うに過ぎ去った。だから、救える分だけ救った。」  
奪い取った聖槍にて世界の裏側への門を開き、そこを潜れる者のみを己が民とした。

そして、残った民草にはこの地で死ぬか、キャメロットの残党と共にフランスのランスロットの領地へと逃げ延びるかの二択を強いた。

結果、多くの民草がブリテン島に残る事を選択し、大よそ三割程がキャメロットの残党と共にフランスへと離脱した。

たとえ神代の空気が無ければやがて死ぬと分かっても、叛逆者と共にいたくはな

かったからだ。

無論、彼らとて本当なら叛逆の騎士に従う理由はないし、言いたい事は沢山あった。

しかし、彼らには出来なかった。

多くの者が既に傷つき、疲れ果てていた事もあった。

だが、何よりも大きかったのは常勝無敗の騎士王を打ち破り、聖なる槍と剣を手にし、全盛期を迎えた叛逆の騎士とその部下達に勝てぬと判断したからだ。

残った民草に、モードレットは何もしなかった。

ただ介錯の要不要のみを問い、素気無く断られてからは早々に彼らの前から姿を消した。

その後は適性があり、本人らも了承した民草と共に門を潜り、世界の裏側へと旅立った。

残された民草が飢餓地獄を迎え、僅かな食糧を巡って争い合い、殺し合い、最後には共食いの地獄絵図となる事を理解しながら。

「別に忠義が無かった訳じゃない。だが、騎士王や花の魔術師はオレを目の敵にし

ていた。」

無論、二人にも言い分はある。

何せモードレットはあの毒婦モルガンの末の子。

円卓には他に幾人もモルガンの子はあるが、その薰陶を最も強く受けて育ったモードレットを警戒しない訳がなかった。

また、モードレットの出生に纏わる「5月1日に生まれた子が騎士王とその国を亡ぼす」予言もあり、ブリテン島の同じ日の生まれの子供達は皆船に乗せられて流された。

この時、ホムンクルスとして既に自意識のあったモードレットは騎士王とその一派への憎悪を燃やしていた。

それでも前世の記憶を引き継いでいた彼女は、ブリテン島唯一と言ってもよい統一政権が消えた場合の混乱を想定して、叛旗を翻す事は無かった。

しかし、戦況の悪化に伴い、彼女の領地にて彼女が不在の時に起こった強制的な食糧の徴収が起ると、温厚な彼女の堪忍袋の緒も切れた。

加えて、他の領地よりも豊かである事を理由に重税が追加される事となり、事こ

こに至り、兜の騎士は叛逆の汚名を被る事を決意した。

無論、騎士王にも言い分はある。

他の領地はもっと余裕がなく、飢えていたのだから、比較的余裕があるモードレットの領地からその分だけ出してほしいと。

だが、彼らの食料はモルガンを殺して奪ったモードレットの権能を用いた世界の裏側での狩猟を活かしたものであり、その気になれば騎士王らも利用できる。

実際、モードレットはそれをカードに交渉する用意をしていた。

しかし、予言の子に貸しを作る事を否とした騎士王らの判断により、強制徴収及び増税という悪手を打った。

それがモードレットに最後の一線を越えさせた。

「最早是非も無し。暗愚に落ちた騎士王を討つ。」

こうして、兜の騎士、叛逆の騎士、赤き竜の末たるモードレットは歴史に名を刻んだ。

## ②旧神×GATE改訂版

あのクラインの壺での繰り返しが終わってから長い、本当に永い時が過ぎ去った。人を止め、人外に成り、遂には邪神の一柱と成った。

だが、その後も彼女達の戦いは終わらなかった。

寧ろ、これからが本番とばかりに、その戦いは加熱し、加速した。

理想は未だ遠く、崇拜し、尊敬し、憧憬し、熱愛する二人はいつも血塗れで先にいた。

それでも、あの二人の後ろなら耐えられた。

だが、それが崩れたのは何時だったろうか。

彼ら夫婦は、大十字九朗は、アル・アジフは、マスター・オブ・ネクロノミコンは、旧神は、無垢なる刃は、邪悪を討つ狩人は……

『……………』

何時からかその精神を摩耗させ、ただただ邪悪を討つ力の塊と化していた。

「もう言葉も忘れたか…。」

「やるぞ、アーリ。」

「ああ。行こっか、リーア。」

こうして、堕ちた旧神と反逆した邪神の戦いは始まった。

その戦いは秘術を、知識を、魔力を、神秘を、力を、己が全てを出し切る戦いだつた。

片や邪悪なる全てを破壊せんとする堕ちた旧神。

片や旧神を屠るために鍛造された無貌の邪神の一欠片。

その戦いは前神未到にして空前絶後。

万物が消滅し、概念が破壊され、無が創造される。

剣の一振り、拳の一当てで一つの銀河が、一つの宇宙が両断され、碎け散り、消えていく。

神々ですら慌てふためいて逃げ去り、戦きながら逃げ出すその闘争を、しかし無貌の神はしっかりと見ていた。

「そう、これだ。君は、君達はこのために生み出された。」

「全てが消え去る前に、元凶を消し去る。それがお前達の本来生まれ持った役目なのだ。」

「肥大化に肥大化を重ね、遂には癌化した最も新しき旧き神。」

「それを切除するのは、人の如く自己を研鑽し、人を愛し、人と共にあらんとする我が化身。」

「さあ、全てが終わる前に、君達の全てを終わらせてくれ。」

その闘争が何時終わったのかは誰も知らない。

何せ時間という概念すら破壊した果て、空間すら濡れた紙の様に引き裂かれた後の事。

両者の戦いが終わり、彼らがどうなったのかは誰にも分からなかった。

しかし、親としての繋がり故に、無貌の神だけは己が子供らが何処へ墜ちていったのかは知っていた。

東京某所 どこかのマンション

「ああ〜〜だる〜〜。」

「あ“あ“あ“あ“あ“〜〜。」

無地で白のタンクトップとパンツだけとそっくりな銀髪碧眼の双子の少女が、窓全開にした状態で片や日陰でアイスをかじり、片や扇風機の前で意味のない声を垂れ流す。

こいつら、完全に弛みきっていた。

「あんな濃過ぎる決戦したんだから、百年単位でぐーたらしても良いと思うんだ。」

「誰に言ってんだ誰に。」

そんなメタイ会話を挟みながら、二人とも動かない。動きたくない。

家事に関しては気が向いた時だけで、後は召喚したシヨゴス（給料は1日10kgの最高級鶏肉）にやってもらおう。

もう一度言おう、こいつらだらけ過ぎである。

なお、時折どっかの益田照夫とその奥さんや親戚同然の暴君が遊びに来たりする。

「んあ？」

「む。」

不意に、二人の視線が彼方へと向けられる。

その先にあるのは日本の首都東京、その中心に近い銀座。

未だ姿こそ現していないが、その只中に一瞬だけ「この世界の理から外れた門」が現れた事を知覚していた。

その姿こそ変わらないが、一瞬にして纏う雰囲気「狩人」の其れへと変質した。

「何だこりゃ？」

「転移門だな。しかし、随分雑な……」

とは言え、見過ごす道理はない。

二人は久方ぶりの己に課した使命を果たすべく、行動を開始した。

「行くぞ、アーリ。」

「あいよ、リーア。」

こうして、何処とも知れない世界で、未だ誰とも知られていない者達との闘いが始まった。

③ Fate系完全新作（アキレウス・アタランテ・ノッブの家臣のどれかに転

(生)

候補1、アキレウス

アキレウスに転生する話。

母親である女神テティスと英雄ペレウスとの間に生まれた。

が、人理に名を刻む英雄として生を受けたがために、その生涯には多くの困難が運命づけられていた。

テティスは母として女神として我が子を案じ、神聖な炎で身体を炙る事で不純な人間の血を追い出し、不死の神として再誕させようとしたが、それは我が子が長じてから決める事として完全に人間性を放棄させる事に反対、伝承通り踵だけは炙らなかつた。

やがてテティスが神界へ去ると、ペレウスは確実に己を超えるも、苦難が約束された我が子を鍛えようと賢者ケイローンに預けるのだった。

「さてアキレウス、貴方は何を目指すのですか？」

「はい先生！僕は将来医者か学者を目指したいです！」

日本での前世知識あれば、そりゃ蛮人ギリシャ世界での争いに参加したいとか思わないわな。

これは人理に沿った歴史のため、ケイローン先生（両刀既婚者）が何とかアキレウスを戦争大好きぶつ殺ラブ略奪ヒヤツハーなギリシャ系バーサーカーに更生するための物語である！（大嘘）

「おや、こんな所に訳ありそうな美人が。」

「え？あ、貴方何者よ！」

なお、ヒロインは薄幸のバツイチ経産婦なメディアさんの予定。

### 候補2、アタランテ

現代社会生活に摩耗し、自然を愛するようになった人が転生したアタランテの話。  
アルカディア王イアソスさんが「オレ跡継ぎ男欲しかったから娘はポイーで」と赤子を森に捨てた所からお話開始。

森に捨てられて動物にムシャムシャされる運命の赤ちゃんを憐れんだやらかし系（ギリシャの神は大体そう）月の女神アルテミスにより派遣された雌熊によって乳

を与えられ、養育された。

ここまでは良い、正史通りだった。

しかし、この社会生活嫌いなアタランテ、何を思ったのか狩人に見つかる事なく、雌熊と共に森での生活を続行。

何がどうなったのか、それとも神獣たる雌熊の乳を飲んだからか、それとも転生特典か、このアタランテは10歳になる頃にはそのままその周辺一帯の森の主となつてしまった。

つまり最初からアタランテ・オルタな状態なのだ。

なお、この時点で未だギリシャ語&ギリシャ式生活習慣未収得である。

それでも辛うじてアルテミスを信仰してるのは、神獣たる雌熊の教育の成果だった。

これにはテキトリーな事で有名な女神も流石にアカンと思ったのか、アルテミスは狩人達に神殿を通して神託を下し、何とか人として、乙女としての生活をさせようと思つたのだが…

「ガロロロロロッ!!」

「く、何だこの娘!？」

「一時撤退だ！俺達じゃ歯が立たん！」

が、無理。

悉く返り討ちに会って失敗。

そりゃー矢よりも速く走る完全な野生児だもん、仕方ないよネ。

「ヘラクレスうー！お願い、あの子を何とかして！」

「……それ、試練には……。」

「カウントしないわよ？その代り私特製の弓矢あげるからガンバ！」

「心得た……。」

そして来たるはギリシャ神話最終兵器ヘラクレス！

彼女の明日はどっちだ！

候補3、弥助に転生

皆さんは信長の家臣になった黒人、弥助について知っているだろうか？

戦国時代において、所有者である宣教師と共に来日した唯一の黒人奴隷であり、

献上品として信長に贈られ、後に家臣として召し抱えられた。

で、VIPのFate時空なので勿論TS転生しており、自分の生まれた時代よりも遙か昔とは言え故郷に戻れた事で大変テンションが高くなっていた。

具体的には観光に来てはしゃいでる外人さん位に。

「ハアイ信長様！邪魔ダツタ木抜イテキマシタ！」

「おおよくやったぞ弥助！これで行軍もしやすくなるのう！」

気に入られて士分を与えられた後は大体こんな感じで仕えてた。

が、ノツブは当初黒人奴隷を見た時、その存在を信じなかったという。

そのため、衆目の下で肌を晒して洗うように言うと、弥助を一目見ようと見物客が大量に集まり、喧嘩騒ぎまで起こったという。

で、実際に裸になって洗ってみると肌の汚れが落ちて余計に黒く艶々になるだけで墨も何も塗っていない事が分かってからは宣教師と交渉して弥助を譲ってもらい、士分を与えられ、ノツブの傍に仕えた。

その外見は黒人特有の黒に近い肌、ポニーテールにした縮れた髪、2m程の当時の日本人からは有り得ない身長を持っており、その内面や能力に関しても変わって

いた。

兵士10人以上と綱引きで勝ったとか、道にはみ出た大木を引っこ抜いたとか、大岩を投げつけた、丸太を武器にして戦った等、枚挙に暇がない。

知識においても宣教師らから学んだらしく、日本の外の国際事情にも詳しく、後に信長の海外遠征や対外防衛戦略に関してその知識で大きな助けとなった。

サルこと秀吉とはそこそこ仲が良く、彼に外国での知識を応用して調査した精力剤等を贈っていた事が後世で発見された手紙から知られている。

が、彼女の最大の功績はそこではない。

弥助の歴史上最大の功績、それはあのノツブの命を救った事にある。

あの本能寺の変、明智光秀の謀反の際、鉄製の桶（大事な茶器用）にノツブを詰め、背格好が似ていた蘭丸にノツブの恰好（所謂南蛮胴具足）をさせて、自身は寺の予備の柱を引っこ抜いて振り回して一暴れして場が混乱してから離脱した。

なお、ノツブは「是非も無し」と言って討ち死にするつもりだったが、小姓であった蘭丸と相談した後に後頭部殴って気絶させて桶に詰め込んで出荷された。

脱出の際には12発の鉄砲を貰うも、鉄製の桶のおかげでノツブはたんこぶだけ

で無事だった。

しかし、弥助本人は重傷を負い、信忠の下にノッブを送り届けた後、

「大殿ト一緒デトテモ楽シカタデス！アリガトウゴザイマシタ！」

笑顔で告げて、事切れたと言う。

こうして日本史に大改編をやらかした彼女は、割とあっさりと亡くなったのだった。

なお、この歴史が異聞帯になるかは未定。

カルデアではグダグダイベント三回目にして☆4配布鯖として実装。

「信長様、オ久シブリデス！」

「おおおおお!?今回は弥助かよ！久しぶりじゃなあ！」

「おお、この人がノッブの命の恩人ですか。」

「信長様コソ私ヲ大事ニシテクレマシタ！オ相子デス！」

「そうかそうか！……所でワシの大事な茶器に関しては……。」

「アノ世ニオ金ハ持ッテイケマセン！命大事ニ！」

「それはそれ、これはこれじゃー！あれ一体どん位価値あると思っとなるんじゃ!?」

なお、クラスは安定のバーサーカー。

通常武器はそこら辺で拾った大岩や丸太、時々大砲ブツパ（史実）で、宝具はノツブを入れてた桶だよ！

「なあ弥助よ、なんかその桶見ると頭痛くなるんじゃないか？？」

「気ノセイデス！」

なお、似非外国人的口調でもケツアル姐さんと被らないのは、あっちが姉御肌なのに対してこっちはまだ単に呑気で明るいただけだから。

受けた恩は命を懸けても返す。

御恩と奉公に正しく報いた日本初の黒人として、人理に刻まれる。

候補4、H×Hで脳内Wikipedia持ちの作家

殆ど何も考えてなかったので省略。

## ヒロアカ転生 歌姫が逝く

思い付いたんで投下あ！

「私はただ、歌を歌いたただけだったのに……。」

それが私の生まれる前からの、たった一つの願い。

前世では歌（主にアニソンやJ・pop）を聞く事も歌う事も好きだった自分は、この世界に転生してからは将来的に個性を活かした動画配信で食べていこうと考えていた。

無論、そのための機材を揃えるための種銭は必要なもので、そちらはバイトをして稼ぐつもりだった。

幸いと言うべきか、こちらでの新しい両親は適度に放任主義らしく、そこまで拘束される事もないし、そこそこ裕福な事もあって、生活に困る事はなかった。

私自身も転生の影響か、勉強も良いし身体能力も以前より確実に上がっていた。

そして、大好きな歌に関しても以前とは比べ物にならない程だった。

歌えば歌う程、どんどん上手くなっていくのが実感できる。

勿論、理由があった。

個性…歌

歌の上手さや声量・肺活量の強化に加え、歌う内容によってそれを聞いた者へ様々な効果を付与する。

おまけに歌に関する学習・創作能力（主に作詞作曲）も向上する。

よくゲームにある吟遊詩人とかが持つてる音楽を用いた周囲への強化・弱体化の付与こそがその本質だ。

但し、録音した曲をまた録音したりコピーしたりすると効果は消えてしまう。

両親とも時間が合えば一緒にカラオケに行つて歌うが、二人も上手いと言つて喜んでくれる。

流石に作詞作曲は無理で、精々が前世ではあつたけどどこちでは無い曲しか書けないが。

それでも、私は充実した日々を送っていた。

それは、唐突に崩れた。

「すごい歌だね、君。」

一人カラオケの帰り道。

突然、声をかけられた。

「え」

振り向いた瞬間、意識が断絶した。

.....

それからまあ、酷い目にあった。

私の個性は把握されていて、捕まったヴィラン達によりずっと歌を歌わされた。

別にそれに不満はない。

私がバイトを頑張って用意するつもりだったものよりも遥かに凄い設備を用意してくれたからだ。

でも、ここが何処なのか知らないし、家族と連絡する事も出来ない。

そして、私の歌は録音されたものでも、生で歌うよりも効果は下がるものの、それなりに効果があるらしい。

勇ましい曲で筋力や耐久力の向上、穏やかな曲で体力向上や怪我・病気の治療等。医者にかかる事なく、ただ音楽を聴くだけで効果が出る歌は、裏社会で大人気となっているらしい。

おかげで私を攫ったヴィラン達は大喜びで、設備の更新や追加もしてくれた。悪事に加担してる事に罪恶感を抱くものの、幼気な中学生ではどうにもならない。加えて、私の両手足首には爆弾内臓の枷（小型・軽量だけど）が付いててスイッチ一つで爆破できるので脱出は無理です。

なのでここは一つ、正義の味方たるヒーローの皆さんの努力に期待させてもらおう！

「あ、おーい鈴ちゃーん。収録始めるよー。」

「はーい！」

なお、言い忘れてましたが私の外見は渋谷凜のそっくりさんです。

いやー大ファンの一人としては、歌う事に妥協できなくて困っちゃうなー（棒）。

.....

「昨今のヴィランの活発化は深刻化の一途を辿っている！」

とある暗室にて、一人のヒーローが口火を切った。

その場には彼の他にも何人ものヒーロー達があり、皆が彼の意見に賛同していた。その証拠に、彼らの多くが大なり小なり負傷をしており、何処かに包帯を巻いていた。

「連中の持ち物を調べた所、全員が小型のイヤホンをしており、音楽を聴いていた事が分かりました。」

暗闇の中、プロジェクターで映し出された映像には無線式の小型イヤホンが表示される。

「連中はこれを使って『歌姫』の曲を聴き、その力を向上させている。」

「数値的にはどの程度なので？」

「最低でも2割、最大なら6割になる。」

「う わ あ」

この上下幅は鈴の好みと曲への理解と習熟の度合いによるものだったりする。

「流されていた『歌姫』の曲は？」

「DESERT WOLFのOverture。個性黎明期前の古い曲だ。」

「効果は戦闘能力、特に筋力や個性の威力の増大だ。」

「複合型か、最悪だな……。」

『歌姫』と言われる推定ヴィランの存在は、ここ半年であつという間に有名になった。

切っ掛けはとあるヴィランの集団がとある曲を聴いて駆けつけたヒーローの第一陣を振り返りにした事だった。

幸いにもそのヴィランは増援に來た他のヒーローによって逮捕されたが、この時期から裏社会に大量の『歌姫』のものと思われる曲のデータが流通され始めた。

その媒体は様々で、CDやUSBに始まり、フロッピーやカセットにレコード、SDカードやボイスレコーダーと多岐に渡る。

個性や身体能力、頭脳の強化を始め、怪我や病気の治療、果ては聞いただけで眠ったり、心癒されたり、金運が向上したりとその効果は多岐に渡り、中には一曲で複数の効果を持つ曲もあった。

これら曲のデータはまるで麻葉の様に秘密裡に流通され、しかしある意味で麻葉以上に厄介な代物だった。

例えば、浪人生が集中力向上の曲を聴いて、何度も落ちていた志望校に受かった。例えば、借金だらけだった男が、金運向上の曲を聴いて宝くじを買ったら一等を当て、借金を返した。

例えば、スクランブル交差点で妙な曲が流れたと思ったら、人々が発狂し出した等々。

他にも多数の混乱を発生させており、更に言えばこれらは皆本人に聞く位しか発覚しないため、摘発も殆ど進んでいない。

こんな感じで、完全に社会問題化していた。

こんな事を引き起こす『歌姫』が指名手配されるのは、当然の帰結だった。

「何とか『歌姫』を逮捕せねば……。」

「音声データだけは沢山ありますから、現状はそこから先は搜索班頼みですね。」  
分かってるのは『歌姫』が若い女性であるという事だけ。

「流通ルートに関しては二次・三次ルートもあって凄く複雑化していて、追うにはかなりの時間がかかるかと。」

「中古品の交換や売買だな？」

「ええ。ブラックマーケットじゃ歌姫の曲専門の所まで出来て大変盛況だとか。ですが一度流通した曲のデータは再度コピーしても個性の効果は出ない事は確認済みで、海賊版が存在しません。」

「となれば、効果が発揮されるデータのみを追跡すればいいんじゃないか？」

「所がルートは不定期に変更されて、売人や仲介業者も金を振り込んだら指定された場所に商品が置いてあるだけ。連絡も合成音声を始め逆探知対策された電話での短時間のやり取りだけです。」

「厳しいな…。」

もう何度目か分からない対策会議に、全員が頭を悩ませていた。

このドラッグよりも質の悪いナニカを早々に駆逐せねば、取り返しをつかない事

になる。

否、その兆候はもう出始めている。

一部の市民からはヴィランから押収された『歌姫』の曲のデータを広く活用すべきだとの声すら上がっている。

また、対策として音楽を規制するとかになったら、特に『歌姫』の曲を聴いていない国民にどれだけ反発されるか想像もつかない。

「ほ、報告します！歌姫と思われる人物の居場所が判明しました！」

「「「」でかしたあッ！！」」」

突然の報告に、沈痛な雰囲気満ちていた会議室が瞬間的に沸き立った。

「未来予知系の皆さんが頑張ってくれました。今までに記録のない歌姫の曲が歌われているのを見聞きしたと。」

「何時何処だ!?直ぐに人員を集めるぞ！」

「時間は今から数日以内！場所は…此処です！」

地図に示されたのは、歓楽街のど真ん中。

ヴィランだけでなく、多くの犯罪者や背に傷のある訳ありが集まる場所だった。

「よし、直ぐに偵察の得意なヒーローを。」

「公安も協力します。直ぐに周辺の情報を集めましょう。」

こうして、本人の与り知らぬ所で予想以上の大事件となった一連の『歌姫』事件は漸く最終段階へと進む事になるのだった。

本名は藤谷鈴（ふじや・りん）

なお、無事保護されたが思ってたよりも遥かに大事になってて度肝を抜かれるヒーローらにたっぷり絞られた後はヒーロー科でなくサポート科目指して頑張るが、各方面から引っ張りだこ（サイドキックor歌手orアイドル）になる模様  
AOF「いやー君の歌のお陰で大分良くなってね。ありがとう。とても感謝しているよ。」

鈴「」

オールマイトの治療にも協力したので、神野の悪夢の被害がとっても拡大するの  
でした。





漸く判明した鬼の殺害方法は4つ。

日光に当てる事、日輪刀で頸を刎ねる事、そして鬼達の首領である鬼撫辻無惨の名を言わせる事。

最近ではこれに加えて藤の花から抽出した毒を致死量になるまで投与する事も確認されている。

だが、その他にももう一つ、鬼を殺す手段はある。

それは人間には決してできない、と付くが。

.....

「ひい……ひい……!!」

不死身の筈の怪物。

その筈の鬼が息を乱し、みっともなく泣きながら逃げている。

鬼となり、人を食らい、鬼殺隊と言われる鬼狩りを蹴散らし、最近漸く十二鬼月に昇格したばかりの鬼は、我が世の春を謳歌していた。

だが、今のこの鬼にはそれまでであった傲慢さも矜持も何もない。

ただ、格上の捕食者から必死に逃げている被食者に過ぎなかった。

「はああああ！はああああああ！」

なんで、きいていない、だれか、だれかたすけて

余りの恐怖に呼吸は乱れ、必死に動かす手足は縛れそうになる。

恐怖に満ちた心とは裏腹に、生存のために必死に思考をしながら、駆けていた森を抜けて、空けた場所に出た。

同時、鬼の本能が直上からの危険を知らせる。

「ひ!?」

僅かに鬼が身を捻る方が早く、直上からの隕石の衝突染みた一撃は回避できた。

しかし、鬼とは言えその体重は見た目通りのそれである。

自身より上の質量が音以上の速さで地面に衝突した際の衝撃により、為す術もなく吹き飛ばされた。

それでも即座に体勢を立て直し、再度逃走を再開しようとする辺り、流星は末席とは言え十二鬼月と言えらるだろう。

「げぼ!？」

だが、その程度では今降りてきたモノに敵う筈も無し。

巻き起こった粉塵の中から、何か伸びる。

気づけば、鬼の腹は黒い甲殻で包まれた異形の腕で貫かれていた。

「あ、がががあああああ!?!」

無茶苦茶に手足を動かし、血鬼術を発動させようとするも、既に体の自由は殆ど奪われていた。

鬼の腹を貫く異形の腕から全身へ滲み出るように黒い泥状の液体が広がり、ゆっくりとその肉体を侵食していく。

出来るのはもう僅かな身動き、思考と発声だけ。

完全に侵食され、捕食されるのにもう一分とかからないだろう。

「いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだああああ!!」

泣き叫ぶ鬼の腹を貫く腕は一切の小動もない。

漸う晴れた粉塵の中から現れた異形は、瞬きもしない蟲の様な複眼で獲物を見つめる。

全身を宙に流した墨の様な甲殻に覆われ、僅かな隙間や関節も小さな鱗状の甲殻で隙間なく覆われている。

そして、最もその形姿を異形と成さしめているのはその頭部だ。

まるで虫の類を無理矢理人に近づけた様な異形の頭は左右と後頭部に大きく張り出した角を有し、通常的眼球ではなく大きな複眼で覆われた顔からは一切の感情を感じ取れない。

だが、この異形極まる鬼の感情は、最初から最後まで変わらない。

躊躇なく同胞を貫き、今体内から取り込みつつある右腕から感じ取れる感情は、たった一つだけ。

余りにも純粹な、同胞たる鬼への憎悪と殺意

鬼同士の共食いによる殺害。

本来不死の筈の鬼を殺す方法の一つにして、人間には決してできない方法。

夜闇の中、月明かりに似た輝きを持つ複眼に見つめられながら、下弦の陸と瞳に

刻まれた鬼はその生を閉じ、地獄へ落ちた。

.....

気付けば、自分が転生している事に気づいた。

だが、その気づきは余りにも遅かった。

ある夜、訳も分からず襲撃され、鬼の首領の血を入れられ、激痛の中で意識を失った。

そのまま数年を埋められた墓の下で過ごした後、漸う起きてきた時には何もかもが消えていた。

住み慣れた二つ目の故郷も、大事な家族も、最愛の妻子も、何もかにも消えていた。

鬼となったお陰で鋭敏化した五感が、僅かな残り香から此処が故郷だった村の跡地に作られた集団墓地だと教えてくれた。

生き残りは、いなかった。

二度目の両親、新たな故郷、不自由だが生き甲斐のある暮らし、助け合ってきた村人達、そして初めての妻子。

全て全て、一夜にして消えてしまった、殺されてしまった。

たった一人、否、一鬼の手によって。

「ッ！！！！！」

余りの激情に、言語化できない咆哮が墓地に響いた。

それからだった。

身を焦がす憎悪に突き動かされるまま、鬼を殺し始めたのは。

鬼の身体能力と再生能力任せに、他の鬼を見つけ次第殺していく。

無論、最初は返り討ちに合う事が当たり前だった。

だが、人を食おうとする鬼と一晚中殺しあう事で時間を稼ぐ事は可能だった。

その内、日光や鬼殺隊の持つ特殊な刀で首を刎ねる事で鬼は死ぬと分かった。

なので、事前に武器（主に竹槍や枝槍、大きな石等）を用意し、拘束した上で朝

まで殺し続けるようになった。

そんな事をしていけば、自然と腹が空いてしまう。

普通の鬼なら人間を食べるのだろう。

それが本能であり、自らを強化する方法だった。

だが、それだけは死んでも御免だった。

あの唾棄すべき連中と心まで同じものに成り果てるのは御免だった。

だから、鬼を食う事にした。

人食いの怪物である鬼を食う事、それは即ちより効率的に栄養を摂取する事に繋がるのではないか？

全ての鬼は当然ながら元人で尚且つ複数の人間を捕食してその栄養を吸収しているし、あの憎き鬼舞辻の血を多少の個体差はあれど持っている。

手っ取り早く強くなるには鬼を食う事は実に合理的で、更には共食いする事で鬼を殺害可能だと知れた。

そこから先は早かった。

血鬼術に目覚め、身体能力と再生能力が向上し、身体をより戦闘に向けたものへと作り変えていく。

なお、血鬼術は自分自身の体を改造するもので、主に体の筋肉の配置を変える事

だ。

つまり、腕の筋肉を足に移動して脚力UPとかそんな感じだ。

全てを満遍なく強化は出来ない辺り、実に使い勝手が悪いが、最初なんだからそんなもんだろと諦めておく。

そうして鬼を食い殺す日々を続けていく内、鬼殺隊とやらに捕捉され、戦闘になる事が増えた。

無論、自分から人間に手を出す事はしないが、向こうはこちらのやり方生き方に拘る事なく、鬼だと分かった瞬間に攻撃してくる。

幸いと言うべきか、自分が逃げに徹すれば直ぐに撒ける程度の腕前だったため、今まで殺してしまうような事は発生していない。

当時、自分は人の噂話を元に鬼の出現場所を予想し、そこに駆け付ける形を取っていた。

これに対し、鬼殺隊は隠と言われる支援部隊による人海戦術と鎧烏を用いた索敵、更に各地にある協力者である藤の家紋の屋敷への通報を合わせ、個人に比べ圧倒的な情報収集能力を持つ。

組織の強さを十全に活かす鬼殺隊が自分よりも遙かに早く鬼の出現予想地点へと到着するのは当然の事だった。

だがまあ、戦国時代が終わり、近代化が始まったこの時代では、隊士の質は低下の一途を辿っているらしく。

残念ながら先に到着しても鬼に返り討ちに合う事も多かった。

ある時、隊士の死体を傷つけないように戦闘して鬼を食い殺した後、隊士の持っていた刀を回収する事にした。

彼らの持つ刀、日輪刀という鬼を殺せる刀を回収する。

数は3本で、全て折れてしまっているが、問題はない。

何でもこの刀は日光を浴び続けた特殊な鉄や鉱石で作成するのだとか。

つまり、日光そのものには劣るが、その性質を引き継いだ物質であり、何よりも日光を浴びると透過させずに吸収する可能性が高い物質でもあるのだ。

これを自身の体に応用すれば、今までよりも簡単かつ迅速に鬼を殺害可能になるし、何なら日光への耐性を獲得できるかもしれない。

バリバリと日輪刀をよく噛んで食べる。

胃壁が裂けたり、焼け爛れているが、吸収する方法なんてこれしか知らないから仕方ない。

それから鬼を探し出して食らう事に加え、時折遭遇する鬼殺隊から日輪刀を略奪・強奪・窃盗する日々が続いた。

鬼を食らう度、日輪刀を食らう度、戦いを重ねる度、自分自身が強くなっていく事を実感する。

そんな時だった、鬼に協力する人間と出会ったのは。

とある宿場町、そこは人好きのする仮面を被った人間達が旅人を生贄にする事で鬼に襲われる事なく暮らし、剩れ他の鬼や夜盗等の外敵から庇護されている鬼に味方する町だった。

まあそんな連中もいるよね、と人間の汚さをよくよく知る元平成生まれの捻くれ者はその宿場町の人間を生かしておいても似た様な事をするだろうと判断し、皆殺しにした。

何か大事な一線を越えたと明確に分かった。

だが、あんな醜悪な連中、生きていくべきではないと思ってしまった。

思い出の中の妻子や家族、故郷の村人達が死んで、何故こんな連中がのうのうと生きている？

「鬼は殺す。鬼に与する者も殺す。皆殺しだ。」

そう口にして、己自身もまた心身ともに悪鬼になっているのだと、漸く気づいた。鬼になってから10年、鬼とそれに与する人間を殺して回り、時折鬼殺隊と戦闘になっては日輪刀を貰っていく日々。

その頃には時折目に漢数字や上下の文字が書かれた鬼と遭遇する事が増えた。

下と書かれた鬼は多少梃子摺るが問題なく捕食したが、上と書かれた鬼には危うく殺されそうになった。

恐らく、四天王とか十二神将とかそんな感じの、鬼の中でも別格の連中なのだろう。

下の鬼はとても良い栄養にさせてもらっているが、上の連中相手にはまだまだ敵わない。

精々が命辛々撤退するだけで、今はまだ勝てない。

だが、向こうもこちらにも鬼、寿命や外傷で死ぬことはない。

この偽りの命尽きるまで、延々と戦い続ける。

絶対に絶対に鬼は殺す。

鬼になってから20年、漸く自身の血鬼術が完成した。

自分自身の体を自在に改造する「自己改造」。

触れただけで他の生物を食らう「融合捕食」。

食らったものと同じ性質へと体を変化させる「変身」。

食らった鬼の血鬼術を行使可能になる「略奪鬼」。

これらを併用する事で、上の字を持つ上弦の鬼に匹敵する戦闘能力を持つに至った。

だが、これだけでは余りにも足りない。

奴を、鬼舞辻無惨を殺すには、この程度では到底足りない。

下弦の鬼を始め、多くの鬼を食らい殺す。

上弦の鬼や鬼殺隊の柱と戦い、戦闘経験を蓄積していく。

鬼になってから30年、漸く日輪刀の性質を獲得するに至った。

体表は日輪刀、即ち猩々緋砂鉄と猩々緋鉈石と同じ性質を持つ甲殻で覆われてい

る。

これにより日輪刀と同じく近接攻撃で首を刎ねれば鬼を殺せるし、日光は甲殻の部分で吸収する事で内部には届かなくなった。

目は圧倒的身体能力を持つ上弦の鬼達に対抗するために複眼を形成し、更に虫の様な小さな耳と共に全身各所に死角が発生しないように設置されている。

更に全身の甲殻の内側には無数の生体式誘導弾頭（ミサイル）や眼球にも似た生体式光線発信器（レーザー）等を内蔵し、甲殻を展開する事で使用できる。

また、モノコック構造、つまり昆虫や甲殻類等の外骨格形式を採用しており、内部に骨が無い事から各関節は人間とは逆に動いたり、回転させる事も出来る。

遠距離攻撃は主に生体ミサイルとレーザーで、近接攻撃は日輪刀と同じ効果かつ融合捕食で対処する。

他にも適宜状況に応じて今まで食べた生物の器官や鬼の血鬼術等を使用する事であらゆる状況に対応可能になっている。

なお、全身の神経網が全て神経節で構成され、更に首を刎ねられそうになると内部の肉が脳髄に変化する事で首を刎ねられていなかった事にする事も出来るため、

通常の手段で殺す事は不可能になった。

殺すなら、動きを封じた上で全身をミンチになるまで日輪刀で刻むか、或いは甲殻を破壊した上で日光に晒すか、共食いをする事のどれかだ。

これにより、上弦の鬼達よりも死に辛い体を手に入れた上、条件付きとは言え日光を克服するに至ったのだ。

戦闘・活動における時間制限が殆どなくなったのは極めて重要だ。

最近では偵察・情報収集時は犬猫や鳥に化けたり、航空機に似た姿となって高度を飛翔する事も多くなり、自身の化け物ぶりを改めて再認識する事となった。

更に分身系血鬼術を駆使し、各地に分身体を設置して情報収集も併せて行っている。

これらの分身体は全て本体でもあり、たとえ今現在司令塔となっている個体が死亡しても、全ての個体を殺さねば死ぬ事はない。

欠点は脳内会話が愉快的掲示板状態になる事だが……懐かしき平成の時代を思い出すから良しとしておこう。

そんな頃に逃れ者と言われる鬼に出会う。

珠代とその従者たる愈史郎。

当初は鬼だったので捕食しようとしたのだが、その余りの血の匂いの薄さを疑問に思い尋ねると……余りの境遇に取り止めた。

彼女らには今後とも頑張って研究をしてもらいたい。

成程、鬼を人に戻す……大抵の鬼は近しい者を真っ先に食らうので、正気の人間に戻っても発狂ものだとは思いますが、鬼舞辻にとっても猛毒となるのなら無粋な事は言うまい。

鬼になってから50年。

無数の鬼を、多くの下弦の鬼と一部の上弦の鬼を食らっても、まだ鬼舞辻には届かない。

……

「鬼は殺す。鬼に与する者は殺す。皆殺しだ。」

その鬼と出会った時、珠代は死を覚悟した。

「共食い」、そう呼ばれる鬼の存在は知っていた。

憎き無惨から名を与えられる事もなく、只管に同類たる鬼を食らい続け、遂には鬼関係で共食いと言ったらこの鬼の事を指すようになった、珠代自身とはまた違った特異個体。

邂逅直後、愈史郎共々捕食されかけたが、幸いにも説得に成功し、協力関係を得る事が出来た。

あのまま共食いが疑問を抱かずに捕食を続行していたら、恐らく自分も愈史郎も殺されていたと思うと、四百年を生きた珠代にしても流石に背筋に寒いものが走る。

「私は、鬼を人に戻す方法を研究しています。」

「……困難だぞ。」

「全て承知の上です。それにその方法が分かれば、鬼舞辻無惨を殺せるかもしれない。」

鬼を人に戻すとは即ち、強力な鬼を無力な人にするという事。

如何に限りなく不死に近い鬼の首領とも言えど、その力を失っては為す術もない

だろう。

「そういう事なら協力しよう。採血を頼む。」

「ありがとうございます。必ず役立たせてみせます。」

以来、彼からは割と頻繁に彼の血液と強力な鬼の血液を提供していただいています。

---

肉体Ⅱ大体アプトム

精神Ⅱ子鬼殺し級の殺意

知識Ⅱ平成・令和生まれのオタ

結果、鬼や他の生物の力を良い所取りしたり、腕を銃火器にしたり、果ては車や

航空機に変身する捕食生物の完成

なお、転生特典は「自己改造EX」。

普通に暮らす分には一切役に立たない。

辛うじてスポーツ選手なら生かせるが、基本インドア派で村では主に鍛冶師（物作りなら大抵いける）だったので意味なし。

鬼にならなければ完全に死にスキルでした。

長らく執筆を休んでいまして申し訳ありませんでした。

ちょっとテラテックとFGOのイベントで忙しくて時間が取れなかったんですが、めんなさい。

なお、ガンオンはアカウント（データ5年分）がクラックされてもう二度と使用できないかも…（白目）

年内の投稿はこれで最後です。

来年はもうちょい頻繁にしたいと思います。冬休み期間中はサービス業なので無理ですごめんなさい。

では皆さん、良い年末と年始をお過ごしくださいますように。

艦これ短編 赤城が作る5 新年初カレー編

新年初投稿。

仙台で食べたBBQカレーを参考にしています。

あんな豪快なカレー初めてだったなあ…（反芻）

---

それは年の瀬に起こった、ある大規模作戦の出来事だった。

「ぶちころす」

ハイライトの消えた瞳で、並み居る深海棲艦を見つめる赤城から漏れた言葉を、初期艦の吹雪はきつと生涯忘れられないんだろうなあ…と思った。

……

「それで、赤城の様子は？」

漸く終わった大規模作戦の後始末の最中、必要な書類に目を通し、判を押す事務作業の中で、提督は自身の最も信頼する艦娘について尋ねた。

「ええと、その……。」

その間に、普段は冷静沈着で知られる秘書艦の大淀は答えを濁した。

「何かあったのか？」

「いえ。ただまあとても赤城さんらしいと言いましょうか……。」

若干遠い目をしながら、大淀は提督の疑問に答えた。

「現在、赤城さんは厨房にてカレーを作成中です。」

「……………ごめん、もう一回頼む。」

自身の聞き間違いを期待して、提督はもう一度聞いてみた。

「現在、厨房にて鳳翔さん、間宮さんを巻き込んで、カレーを作成しています。」

「なんで??？」

本当にうちの赤城らしいなあ（白目）。

提督はそう思いつつ、素直に疑問を口にした。

「その、大規模作戦の結果、高速修復材を使い果たして、現在入渠施設は満員です。」

「ああ、そう聞いている。」

「巡洋艦以下の娘達は既に完了してはいますが、重巡洋艦以上の娘達はまだかかります。ですので、カレー禁断症状に陥った赤城さんが自分は最後で良いからカレーを作らせろと言いつつ出して……。」

「うわーやりそう。」

提督は頭を抱えた。

赤城のカレー大好きと料理大好き（作るのと食うの両方）をよくよく知っているこの鎮守府の主としては、さもありませんと納得もしたが。

「後、手伝おうとした比叡さんは赤城さんの本気の打撃を食らって気絶しました。」

「入渠させといて。後、他の金剛型に注意喚起を。」

劇物こと比叡カレーを作る某金剛型二番艦の存在は、普段誰にでも温厚で人当たりの良い赤城にとっても到底許容できるものではない。

それでも厨房以外で出くわせば当たり障りの無い対応をするのだが、厨房で出会った場合、ほぼ確実に実力行使をした上で叩き出すのだ。

まあ赤城や鳳翔がいない時に食中毒騒ぎを起こしたのだから、当然と言えば当然なのだが。

「ふう……くれぐれも赤城には無理をしないように伝えておいてくれ。今作戦のMVが倒れたら士気にも影響が出るからな。」

「了解しました。」

……………

所変わって厨房。

「……………。」

ハイライトの消えた据わった目で、赤城は黙々と仕込みを続けていた。

その後ろでは苦笑する鳳翔と怯える間宮が指定された仕込み作業に従事してい

た。

「あの、鳳翔さん？」

「はい、どうしました？」

こそこそと、赤城には聞こえない程度の声量で二人は内緒話を始めた。

「赤城さん、どうしたんでしょう？ 普段は比叡さん以外には温厚な方なんですけど…。」

「実は赤城さん、今回の大規模作戦中、ずっとカレー断ち状態だったらしくて…。」

「あ、あー成程。」

赤城のカレー好き、否、いつそカレー狂と言っても良い程の執着は鎮守府内ではよく知られている。

それが今回の大規模作戦で空母機動艦隊の主力として活躍していたがために三週間近くお預けされていたのだ。

しかし、本当にそれだけでここまでの状態になるのだろうか？

「後、密かに携帯していたカレーご飯のお握りを敵の砲撃で落としちゃったらしくて…。」

「うわあ……。」

間宮は思った。

そりゃあーなるわ、と。

基本、食べ物はそのりゃもう大事にする赤城相手に、しかも凶らずもカレー断ちで禁断症状が出ている状態で、大好物のカレー系統の料理を台無しにされればそりゃ激怒するだろう。

「その後、砲撃してきたレ級並び敵艦隊は夜戦にまで纏れ込んで全艦撃沈したそうです。」

「んんん???」

何かおかしな事が聞こえた。

「あの、それはどういう……。」

「ほら、赤城さんの弓って、直撃させると40cm単装砲並の威力があるじゃないですか。夜戦に入ってもあれを使って応戦して、矢種が尽きたら肉弾戦で戦ったそうです。」

通常、夜戦では艦載機の運用は出来ない。

そのため、副砲等を搭載していない状態の空母等は基本的に置物と化するのだが、世の中には例外もいる。

空母って何でしたっけ？ グラップラーとかの代名詞でしたっけ？ と言いたくなるのを我慢しつつ、間宮は黙って鳳翔に話の続きを促した。

「最終的には応援も間に合ってレ級の撃沈にも成功したそうです。」

「そうでしたか。」

間宮はほっとした。

そうよね、あのイベント出禁艦が正規空母に正面から戦って負ける訳ないわよね、と納得：

「決まり手は赤城さんのハートブレイクショットだったそうです。」

出来なかった。

「赤城さんて、一体どこでそんなの覚えてくるんですか??？」

「それは私達の方が知りたいですねえ。」

絶対明〇のジョーとかはじめ〇一步のファンだろ赤城さん。

それっつきり間宮は考えるのを止めた。

.....

既に厨房内には艦娘向けの最低限の食事一式は準備されていた。

これで入渠が終わった娘達は順に食事を終わらせ、大規模作戦の疲れを癒すべく就寝なり趣味の時間なりに入るだろう。

しかしただ一隻、入渠も食事も何もかも蹴って己の趣味に邁進している艦娘がいた。

そう、赤城である。

つい半日前に最強の深海棲艦の一つである超弩級重雷装航空巡洋戦艦ことレ級率いる艦隊を相手取り、激戦を繰り広げ、艦載機どころか矢種尽き果て大破状態に追い込まれるも味方増援に気を取られたレ級の隙をついて「4万1300トンハートブレイクショット!!」をぶちかまし、逆転勝利をかました文句なしの当警備府のMVPである。

「.....」

そんな彼女は今、只管に黙々とカレーの材料の仕込みをしていた。

パケツこと高速修復材が切れて入渠施設が満員御礼なのを良い事に、彼女は自分の人生の最大の娯楽の一つたるカレーを三週間以上断っていた反動からなのか、手の込んだカレーの仕込みをしていた。

とは言え、ちゃんと調理するのは材料に味が馴染む翌日以降になるだろう。

限界を迎える程に酷使した身体は、既に感覚も覚束ない。

レ級相手に勝利した代償として、本来の艦艇の基準で見れば雷撃処分か自沈処理でもした方が良いほどの損傷を受けている。

それでもなおこうして厨房に立っているのは、カレー狂としての意地か、厨房を預かる者の一人としての矜持か、それとも提督への愛情か。

以前にはなかった左手の薬指にはめられた指輪は、彼女が食いしん坊で知られる提督と最初に結婚した証だ。

なお、二番目は秘書官の吹雪だったりする。

「よし、終わ」

そして、漸く全ての材料の仕込みが終わった時、肉体を凌駕した精神によって無

理矢理動いていた身体がぐらりと傾いた。

「と、危ないわ赤城さん。」

「おや？」

その身体を支えたのは、割と最近加入してきた加賀だった。

「さっき入渠施設が空いたわ。」

「すみませんねえ加賀さん。」

「言いっこなしよ赤城さん。」

悪く言えば不愛想、よく言えばクールビューティーな加賀。

練度に圧倒的差のある二人は、大抵助け合う側が逆だ。

しかし、それが嬉しいのか、加賀はその背に動けない赤城を背負うと、僅かに上機嫌を滲ませた声音で説教を始めた。

「全く、レ級相手に肉弾戦なんて、私達が駆けつけるのが遅かったらどうなっていたかと思ってるんですか？」

「いやー面目ないです。」

鳳翔と間宮に後の事を頼むと、二人はてくてくと入渠施設へと向かう。

既に殆どの艦娘が自室で休息に入っている時刻、廊下には二人しかいない。

「……一体何があなたの琴線に触れたの？」

確かに赤城は食べ物への執着は他の艦娘よりも強い。

しかし、ほけほけしながらもこの警備府の古参の一角であり、曲がりなりにも最高練度到達した一隻である赤城が冷静さをかなぐり捨てて等、何かがあったとは思えない。

「おにぎり……」

「それはもう聞きました。」

「あの一個、加賀さんが私のために炊いて、握ってくれたって聞いて……  
びたり。」

入渠施設の入り口にて、加賀はその足を止めた。

「知っていたの？」

「補給の際に偶然間宮さんから聞いて……」

「忘れて。」

「ごめんなさい。食べる前にあのレ級の砲撃で落としました……」

そつと加賀は赤城を背から降ろす。

そして、じつと赤城と目を合わせる。

その目に籠った感情に、赤城はちよつと驚いていた。

大きな怒りと、それと同じ位の恐怖に。

「赤城さん。」

「はい。」

「確かに私が赤城さんのために握つたお握りが食べてもらえなかったのは悲しいわ。」

「はい。」

「でも、それが原因で赤城さんが轟沈されてしまったら、それ以上に私は悲しい。」

「はい。」

「きつと身も世もなく泣き叫んで、最悪自沈してしまうかもしれないわ。」

「はい。」

「提督も、メンタルが弱めの人だから、きつと泣いてしまうわ。」

「はい。」

「だから、私のお握りなんかより、自分自身の事を大事にして。約束よ。」

「はい。」

加賀の最後の言葉に、赤城はくすりと笑みを零す。

嘗ての相棒にして、今の後輩の涙を堪えながらの懇願に、赤城は優しい笑みと共に答えた。

「ええ。お握りも大事ですけど、まだまだ提督や加賀さん、警備府の皆さんと一緒にいたいですからね。まだまだ沈む訳にはいきません。」

「分かってるのなら良いわ。さあ、入渠してすっきりしましょう。」

なお、一番重傷だったのに最後までだったので、担当の妖精さん達にがっかり怒られました。

.....

翌日の午後、厨房には完全復活した赤城と加賀の姿があった。

その様子をニコニコと鳳翔と間宮が見ており、「やっぱり厨房にはこの二人がい

た方が活気があって良いわねえ」等と呟いている。

「では加賀さん、始めましょうか。」

「ええ赤城さん、任せて頂戴。」

こうして二人のカレー作りは始まった。

とは言え、仕込みの殆どは昨夜の内に終わっている。

今からやるのは追加のメニュー分と煮込み作業だ。

「加賀さんにはガーリックバターライスをお任せしますね。」

「任されたわ。」

ガーリックバターライスとは要は具無しのパラフの様な代物だ。

とは言え、味の濃いめなカレーと合わせるので味付けも薄味だし、生米を炒めてスープや具材を加えてから炊く訳でもないのです、レシピは簡単だ。

なので、ちょっとアレンジをする。

1、七分つきの精米と玄米を同量用意し、混ぜ合わせ、通常の炊飯方法と同じく洗米する。

2、洗米後、業務用炊飯器に移す。この際、水の分量は半分減らす。例、米

3合なら水2・5合分とする。

3、米3合に対して、ガーリックパウダー小さじ1杯、粉末コンソメ小さじ1杯、塩胡椒少々、バター或いはマーガリン10gを加えて混ぜる。

4、後は通常通りに炊飯する。この際、炊飯器の機能に玄米用の長時間の熟成炊飯等があったらそれを使用する。

手順自体は簡単なのですが、量が量なので結構な重労働です。

チェーン店なんかだと、炊飯は機械に米さえ入れれば全部やってくれるのが珍しくもないのですが、我が鎮守府は作るメニューが多種多様な上に使い減りしない労働力が多数存在するので、こうして手作業で行っています。

で、どうしても玄米と精米が一緒なのかという点、これをするとなら栄養満点かつ押し麦入りごはんと同じ様に触感の違いを楽しむ事が出来るのです。

今時銀シャリでえ！なんて言う人は滅多にいないし、巷では雑穀ご飯を有り難がっているらしいので、前世ではよくやっています。

漬物や生卵、納豆やキムチだけでこの玄米と半々ごはんを食べていたのが懐かしいですねえ。

「さて、私も頑張りましょうか。」

今回のカレーは割とスタンダードな味付けですが、メインとなる具材は戦勝記念代わりに豪快なものとしていきます。

1、具材の野菜（玉ねぎ2・人参1・ジャガイモ1）の皮を剥き、細かく刻む。  
2、豚バラ肉2kgのブロックを一口大の2〜3倍程度の大きさに切り、塩胡椒と牛乳（適量）で揉み込んで1時間以上置く。後に牛脂を引いたフライパンで表面に焼き目が出る程度に加熱する。

3、上記の具材に固形コンソメ1個と月桂樹の葉数枚を加え、業務用圧力鍋にて煮込む。圧力が十分かかった後、抜けるまで放置する。

この内、1と2は終わっているので、ちゃっちゃと巨大な業務用圧力鍋に突っ込んで煮込んでいきます。

お店で出す具なしカレーはこうして細かく切った材料を煮溶かした上で裏ごししてしまうのですが、うちではそんな事はしません。

さて、これらを煮込んでいる内に、いつもならサラダを作るのですが、そちらは間宮さんと鳳翔さんが片手間にやってくれているようなので、今日はデザートでも

作りましょうか。

1、冷凍又は乾燥式のタピオカを表記通りに調理する。加熱時間を短くしたいなら、米粒サイズの乾燥式か冷凍式を使用する。

2、ココナッツミルクと同量の牛乳、お好みのフルーツ缶詰や冷凍果物等を小口大にカットして混ぜる。

3、加熱が終わったタピオカを2に加え、好みの甘さになるまで砂糖を加える。レシピとしてはこんな感じで、ご家庭向けココナッツタピオカデザートで完成です。

カロリー計算？タピオカ食べてる時点でそんなものは捨ててくださいと言わんばかりの代物ですので、食べる際は自己責任です。

まあ艦娘は基本量食って何ぼですから問題ないんですけどね。

なお、タピオカは一般的なドリンクのものは大粒で、デザートとして出されるのは食べやすい極小粒のものです。

前者は加熱に時間がかかり、後者は湯から上げる時に網目に引っかかりやすく片付けが面倒な特徴があるので、選択は自己責任&お好みで。

おっと、圧力鍋の圧力が抜けましたね。

で、確認確認……よし、OKです。

野菜はほぼ原形を留めておらず、豚肉の塊も箸が通る程度には柔らかいです。

野菜は圧力鍋なら間違いないですが、豚肉もこの後追加で煮込むので、多少固くても大丈夫です。

4、野菜（玉ねぎ4、人参3、ジャガイモ2）とお好みでキノコ類（ぶなしめじ・エリンギ等を一株ずつ）を小口大に切る。

5、圧力鍋の中身を他の鍋に移し、4の具材を足して、焦がさないように弱火で煮込む。

6、具材全てに箸がすつと通るようになるまで煮込む。灰汁が出た際は可能な限り捨てる。

この時、気を付けないといけないのはやはり焦げでしょう。

煮崩れた野菜が鍋底に沈殿して焦げの原因になるので、弱火にしつつ、小まめに混ぜましょう。

テフロン加工の鍋等を使うと便利です。

で、火が通ったら最終工程です。

7、煮込んだ具材と汁を二つの鍋、甘口と辛口用にに分ける。

8、辛口用には七味唐辛子を5振り加え、辛口と中辛の市販のルーを一箱と一箱半加える。甘口用には中辛と甘口を加える。

9、ルーが溶けきったら、弱火で加熱した後、火を消して蓋をして蒸らす。

10、ルーに火が通ったのを確認した後、双方に蜂蜜大さじ1・練乳大さじ2を加えて混ぜる。

9の工程余計じゃね？と思うかもしれませんが、あんかけものと同じく、ルーを構成する粉成分にしつかり火を通さないとろみが出ないし、粉っぽさが残ってしまうので、これは必須の工程です。

弱火で10分程が通常なのですが、表面がぼこぼこ大きい目の気泡が出る程度まで加熱できたら、火を消して蓋をして蒸らせばちゃんと火は通りますのでご安心を。

はちみつはカレーが固まってしまふのを防ぐため、練乳は以前にも紹介しましたが、カレーにコクとまろやかさを加えるためです。

その性質上、辛さもある程度抑えてしまふのですが、これの有無で大分差が出て

しまうので私は入れる事にしていきます。

勿論、単なる甘口にしたのなら、はちみつだけを増量するのも手です。

はい、こうして出来上がったのは、圧巻の巨大豚肉入りカレー、ガリックバターライス仕様です。

栄養とボリューム両方満点の豪華なカレー、どうぞ皆さん召し上がってください。  
あ、お出しする時はスプーンだけじゃなく、フォークとナイフも準備してくださいね。

でも大和さんと武蔵さん、出来上がった傍から鍋ごといかないでくれません？  
皆さんどころか私の分まで消えちゃいますからね？ダメですよ???

.....

その日の夕飯時、警備府は静かに、だが確かに興奮に沸いていた。

厨房から漂ってくる暴力的なまでの特徴的な香辛料の香り。

そう、この警備府の者なら誰もが好きな赤城のカレーの香りだ。

必ず毎週食べていたカレー、その中でも特に美味しい赤城担当のカレー。

思えば三週間以上、彼女の作るカレーを食べていなかった。

大規模作戦のためだからとは言え、おにぎりや缶詰、常備菜なんかで済ませていた者達にとって、その香りは余りにも暴力的で、冒瀆的で、圧倒的だった。

開店と同時に、皆が黙ってぞろぞろと入り、カレーを注文し、各々着席していく。それは恰もゾンビか何かの様にすら見えたが、彼女らの目は一様に爛々と厨房の受け渡し口へと向けられている。

「はい、本日のカレー定食・甘口です。」

そして出された料理に、全員がごくりと生唾を飲み込んだ。

それは正に、豪快さを形にしたようなカレーだった。

小鉢に盛られた綺麗なサラダ。

同じく小鉢に盛られたラッキョウの甘酢漬けと赤い福神漬け。

そして、お盆の中央にて堂々と主張するカレー。

大皿に盛られたカレー、その中から我こそ主役と主張する者がいた。

豚肉、巨大な豚肉だ。

普段なら角煮なんかで出される豚バラ肉、それが彼女達の一口では到底入りきらない豪快な塊となつて鎮座していた。

よく見れば、普段のスプーンだけでなく、フォークにナイフまで一緒に並べられていた。

「いただきます。」

誰がそう言ったかは分からない。

もしかしたら自分が言ったかもしれない。

だが、そんな事は些細な事だ。

その一言を鎗矢に、その場の全員が一心不乱にカレーへと挑み始めた。

挑み始めて直ぐ、そのカレーに隠された丁寧な調理に、全員が気づき始める。

ルーはただカレーの味とろみがあるだけではない。

形を失う程に煮込まれた姿なき野菜達、溶けだした牛と豚の脂の確かに生き、それをカレーのスパイスが統率し、練乳の持つ濃厚なミルク感が纏め上げている。

形の残っている野菜達も程良く柔らかく、キノコ達が触感の違いを演出してくれる。

そして、次に気付くのは米だ。

普段はしない、ガーリックバターライス。

殆ど下味程度なのに、その僅かなガーリック感とそれを抑えるバターの風味が実によい按配。

玄米と精米の合わせ技であるぷちぷちとした触感、雑穀米とはまた違ったそれに、唯でさえ促進される食欲がもつともつとと貪欲にライスを欲する。

カレー、ライス、カレー、ライス。

するりするりと入っていくカレー、ぷちぷちと触感を楽しむライス。

同時に口に運んでる筈なのに、二通りの味わい方が出来るという幸せ。

そして、遂に手を出すは今回の主役、巨大な豚バラ肉だ。

スプーンからナイフとフォークに持ち替えると、フォークで押さえ、ナイフで切り込んでいく。

そのサイズでありながら、余程丁寧に煮込まれたのか、するりとナイフが通っていく。

大体四分の一程度を切り分けると、緊張と共に口に運び、咀嚼する。

柔らかく煮込まれた肉には、一切の臭みや雑味はなく、暴力的なまでの豚の旨みが口に広がっていく。

丁寧な仕込みのされたそれは、高級肉という訳ではないのに、とてつもなく美味しい。

カレー、豚、ライス、カレー、豚、ライス、時折サラダやお茶。

誰もがその繰り返しに終始する。

丁寧な仕事に裏打ちされた、豪快極まるカレー。

朗らかなのに戦場では頼り甲斐があり、先の大規模作戦では敵味方を戦慄させた赤城そのままのカレーだった。

やがて、からん、とスプーンが置かれる音がする。

皆が皆、ちよつと忘我の状態だった。

久々のカレーだけでも嬉しいのに、普段よりも超豪華で美味しいのが出てきたので、少々容量オーバーだったらしい。

「デザートもあるんですよ。」

そんな彼女らの前に出されたのは、大き目のスープカップに盛られた白い何か

だった。

真ん中には缶詰のサクランボが乗せられて、一見ヨーグルトか何かにも見える。未だカレーによって放念していた彼女らは、何の警戒もないままにそれをスプーンで掬い、食べた。

「んん!？」

「これって…。」

口内に広がるのは、ココナッツミルク特有の濃厚な味わい。

それに包まれたみかんやパイナップル、白桃に黄桃、アロエにナタデココ等の多種多様な具材。

そして、彼女らが知るものよりも遥かに小粒であるが、間違いなく主役であるタピオカ。

そう、タピオカである。

あの夏の頃から流行真っ盛りとなり、今もなお大人気なタピオカである。

年頃の少女の姿と価値観に寄っている彼女らからすれば、これはカレーとはまた違った嬉しいサプライズだった。

「んん〜デリシヤスですわ〜。」

「うわ、こんな小粒のもあるんですねえ。」

「ぷちぷちでもちもち〜。」

先程のカレーの時の鬼気迫る表情とは違い、年頃の娘らしい緩んだ顔でまったりと甘味を楽しむ艦娘達。

やがて全てを食べ終わると、満足気な駆逐艦や潜水艦、軽巡洋艦娘等を除いた大型艦達が揃って厨房の方を向かって、皿を掲げながら叫んだ。

「「「「「お代わり!!」」」」」

警備府の厨房は今日も盛況だった。

「提督、本日からランニングを始めます。」

「監督は私、神通が勤めさせて頂きます。」

「」

そして、提督はやっぱり食べ過ぎちゃったそうなの。



## よくある転生作家系サーヴァントの話 序章

以前途中で力尽きてたものを完成させました。

うーん尻切れトンボW

古い話だ。

私はかつて西暦1990年代に生まれ、平和な日本国で一生を生きた。

終生本を、読書を嗜み、それこそ漫画からラノベ、図鑑から専門書、古書から発掘された竹簡や石板まで読み続けた。

なお、職業は古本屋だった。

我ながら天職だったなーと思う。

また新たに生まれたが、今度も本を読んで過ごしたいなーと考えていた。しかし、大問題に直面した。

この時代、本がない。

より正確に言えば、一般庶民が読めるようなものは無いと言うべきか。

何せ主な筆記媒体が粘土板か石板、或いは極一部でパピルスがある位で、読み書き計算が可能なのは国の特権階級である役人や神官、王侯貴族しかいないのだ。

しかも、書いてある文字も楔形文字の様なちよつと見た事がないような代物なのだ。

危うく心折れかけた。

この絶望感、課金してたゲームのデータが丸ごと吹っ飛んだ時に近いな…。

なので、私が物語を記す側になる事にした。

幸いと言うべきか、私の住まう集落において私は司祭の家に生まれており、誰もが知らないような知識を持つ私は神の啓示を受ける事の出来る一等特別な存在として生まれていた。

流石は古代、考え方が吹っ飛んでやがる…！

さて、そうと分かったら色々と書くべき事は多い。

幸いな事に農耕は既に始まっているので、星を用いた暦の知り方とかそういった最初期天文学から始まり、医療や生物について、道具や武器の作り方に食材の調理の仕方等のこの時代において必要で役立ちそうな知識を片っ端から書いていく。で、書いた知識は直ぐに実践して、どんなものであるかを集落の長や大人達に周知させていく。

その上で、この時代の人々では決して理解も出来なければ得る事も出来ないだろう知識、所謂高等数学や工学、建築学に航空力学、更には政治学や私が嘗て生まれた世界の大きな歴史等、その内容は本当に多岐に渡る。

途中、心折れそうになったが、これも将来誰かが必要とするかもしれないと自分に言い聞かせて彫り続ける。

文章の中にあるこの時代のこの部族には無い単語なんかもあるので、それらの解説や注釈も入れなければならぬと気付いて更に頭を抱えたが。

加えて、文字だけでなく、図を用いた解説も入る事で分かりやすくする。

こうすれば知識そのものに興味が無い人でも読んでくれるかもしれないからだ。漫画や絵本なんかで読書に入門するのと同じで、少しでも知識が失われる可能性

は低くするための措置だった。

ここまでやったんだからちゃんと後世にまで残して役立ててほしいと思う所存だ。

具体的には予言の書だ、人類の聖典だー！ってな感じになってほしい（誇大妄想）。

そこまでやって、漸く私自身の趣味の領域である神話や伝承の作成に入る。

既に結構な歳になってしまった私だが、既に近隣地域では並ぶ者無き賢者にして司祭として他の権力者から畏れられているおかげで石や道具の調達なんかは若い頃よりも楽に感じる。

先ずは以前に集落の年寄や司祭に有力者等（含む私の両親や親族）からこの地に伝わる伝承（極簡単なもの）を全て聞き出した内容を纏めていく。

可能な限り体系立てて分類しておく、後の人からも分かりやすいのでお勧めだ。その内容から更に「あ、こうなったら面白いな」って内容の伝承を盛り込みつつ、遂に私オリジナルの神話の作成に取り掛かる。

ファンが出来れば、未来でも数多くのサブカルチャーに派生するので気は抜けな

い。

内容には多分に教訓的な内容を含ませつつ、現代人でも考えさせられる内容を増やす事でのこの神話に面白さを持たせ、後世の人々に積極的に伝承して頂きたい。

なお、うっかり書き損じしたりすると石板なので一枚分最初からやり直しとなる。

一度粘土板なり地面なりに書いてから清書しよう。

…私が存命の内に終わるよな？

さて、具体的な内容としては…割と神話としては在り来たりと言っても良いかもしれない。

まあ趣味で日本神話とクトゥルー神話と型月風味になってはいるが。

創造神話（宇宙の起源から始まって星・神々・人類の誕生と起源）から始まり、多くの神々と人々が存在したが未だ世界の法則が定まっていない混沌の時代、神々が世界の裏側へと隠れて人類が主役となり各地に広まり繁栄するも相争う分散の時代、最後に滅んだ大地Ⅱ地球を捨てて新天地を求めて宇宙へと飛び立つも宇宙に住まう数多の強大な神々を相手に絶望しながらも立ち向かう流浪の時代となる全4部作となる。

第一部は日本神話風に宇宙からの来訪神が星を作り、星は次第に空と大地及びそれらに相応する神に分かれ：という感じ。

ここから更に多数の神と人のキャラを出して、世界観の説明や各種物理法則、動植物に対しての起源や説明を加えるのが第二部になる。

所謂バナナ型神話とか死の定めなんかが該当する。

で、第三部が以前見た伝承やら史実なんかを面白おかしくミックス&カスタムして数多くの英雄譚や童話の様な教訓を含んだ伝承が出てくるのが第三部だ。

ぶっちゃけ、陰惨な陰謀とか人の狂気とか破壊とかがメツチャ多くて気を病みそうになったが、同じ位人々の団結や信頼に友情愛情、希望や栄光なんかも多いので読み応え抜群の部でもある。

そして第四部はぶっちゃけSFである。

クトゥルー神話とデイストピア系とハイスピードメカアクションを悪魔合体して宇宙へ飛び出し「そして伝説へ：」って感じである。

へ？神話でSFに走る所かハイスピードメカアクションに走るな？

だって好きななんでもんロボものがさあ！

例え世界観にそぐわなくても出したかったんだよっ!!

内容は：ガンダム残酷物語にフロムの悪意とクトゥルー系宇宙的恐怖の宝石箱やあ！な内容です。

だってニュータイプと黒い鳥とクトゥルフ眷属邪神群の戦いとか、碌な目に会う筈がないし。

辛うじてデモベ成分が最後の希望として存在してるけど、あれもあくまで最悪の事態を遅らせてるだけというね…。

例え誰も理解してくれなくても、この第四部は元々ロボゲーマニアだった自分としては実に満足である。

デモ○ベインは未だ自分の中でバイブルとして輝いている。

ああ懐かしきニト○+にバンナム、フ○ムソフトウエア…。

なお、ここまで執筆するのに実に10年以上経過してたりする。

そんなこんなで神話本編が完結した後はいちよいち注釈や外伝を執筆していた。

本編に入れるには微妙でも、ネタが湧き出す時があるのだから仕方ないと思い、

石板を掘り続けていたのだが……どうやらそれももう終わりらしい。

もう少し布教したり小さい子達に読み聞かせたかったけど……ここまでか……。

うん、まあ、こんな古代に生まれたにしちゃ出来すぎるな……。

じゃ、また来世にでm

………

「はっはっは、善哉善哉。」

また生まれ変わりました。

だがしかし、今回は21世紀であり、しかも自分が神話を書いた世界での遙か未来。

自作の神話が未だ人々の間で大人気となり、娯楽作品の題材として数多く利用されている事に笑いが止まらない。

予言書だとかリアル時代考証無視とか言われているが、そっちのは気にしない。あれもこれも転生者の仕業だったんだよお！と本当の事を言っても誰も信じちゃ

くれないし、それよりもそうして生まれた数多くのサブカルチャーを消費する事の方が大事なのだ。

ま、あんだけ掘ったのに未だ未発見の石板が多数存在する事に関しては若干思う所もあるが、それは仕方ない。

過去の遺物なんてそんなものだし、総数3000枚近い石板全てを現存させるなんて当時できる技術じゃ出来るだけ沢山作る位しかできなかったもん。

粘土板やパピルスなんかじゃ1000年単位の保管だと崩れる可能性が高かったしね。

なお、今世は一回目でもお馴染みの古本屋で生計を立ててるので、そうした作品が次から次へとやってくる。

趣味で経営してるから利益が薄くても良いし、収入は執筆業（自分の神話をテーマとした二次創作？）で結構稼いでいるので何の問題もない。

「あ、先生！そろそろ締め切り近いですから進捗聞きに来ましたよ！」  
「うげ!？」

でも締め切りだけは勘弁な。

.....

「これは歩いてはいけない場所の知識である。」

既に途絶えた世界最古の言語によって記された一文を皮切りに刻まれた石板は、発見から今日まで人類の至宝として扱われている。

来歴の一切が不明な石板の著者たる「彼」への敬意を示して、これら一連の石板は「無銘石板」、或いは「彼の石板」や単に「最古の石板」と呼称されている。

「彼」の存在は石板の中には一切登場しない事、2000以上の石板の数から複数の人物による作成かと思われていたが、字の癖等から現在では一人の人物が生涯をかけて作成したものと判明している。

「彼」による当時の神話と数多くの知識が刻まれた一連の石板は紀元前5000年頃の地層より発見され、その後の人類史において、多くの神話の起源として扱われた。

何せ発見まで最古とされた古代メソポタミア神話の時代よりも更に1000年近く古かったのだ。

この世界に息づく人々、取り分け神秘に敏感な魔術師等はその存在を崇拜し、同時に発見された無数の石板の扱いに関しては意見が割れた。

何せその内容、特に当時では有り得ない筈の無数の生物学・工学・科学・数学的な資料の数々は国家を始めあらゆる団体が隠匿・独占を目論むに足る内容だった。この石板の知識を解読・参考にされた毒の煙玉や対船舶用の防衛兵器である鉤爪、連射式の弓や簡易式の火炎放射器等が多数開発され、当時版図を拡大せんと戦争を続けていた繁栄期のローマ帝国はこれに大いに苦しめられた。

これらの兵器は後に十字軍遠征やイスラム系勢力の欧州侵攻に対しても使用され、鹵獲された兵器類はイスラム圏にも逆輸入され、世界各地へと広まっていった。だがしかし、それらの基となった知識を記された石板は情報の隠匿のために複数の写本に分けられた後に多くが破壊され、当初は2000近い数だったとされるそれらの内、21世紀現在まで現存しているのは僅か900程度しかない。

欧州各国が植民地支配に乗り出し、科学・工学・医学等の多くが大きな技術的進

歩を迎えた頃には流石にそろそろ太古の人類の至宝を保護するべきだという動きが巻き起こったものの、それはとある石板の発見と共に停滞した。

その石板の内容、それは未だ各国が机上の空論としてまともに取り扱ってはいなかった航空力学に関してのものだった。

世間では漸くライト兄弟が人類初の動力飛行機による飛行を成功させたばかりであり、世間からの評価は兎も角、実際に軍事・民事において役に立つかどうかは疑問視されていた。

そこに件の石板の発見がドイツの片田舎から発され、更にその内容から航空機の大まかな有用性等が知れるとドイツは石板の内容を秘匿、石板の保護運動から一抜けし、航空機の開発に力を入れていく事となり、後の世界大戦において猛威を振るう事となる。

この動きに他の欧米列強も追従し、結局石板の保護運動は国家の思惑により棚上げになってしまった。

そうして石板の保護活動が本格化したのは第二次大戦終了後であり、更に一か所に纏めて展示等が成されるようになったのは東西陣営の冷戦が終了する雪解けの季

節を待たねばならなかった。

さて、多くの国家や集団が各種の先進的な知識を記した預言書とも言うべき石板の収集と隠匿、解析を行っていた中、そうした知識よりも寧ろ伝承や神話の部分にこそ注目し、血眼になって収集していた勢力がある。

この世界の神秘を担う聖堂教会と魔術協会である。

彼らは記された内容の結構な割合が神秘の秘匿のためには絶対秘匿すべき知識が多く含まれている事に予てから気付いており、科学的・物理的知識が記された方ではなく神話・伝承系の石板の収集を優先した。

無論、収集に成功したらしたで両協会並びその内部の派閥でも毎度恒例とばかりに争いが勃発したのは言うまでもない。

それだけ世界最古の神話を記した石板は聖遺物としても貴重であり、文字通り殺してでも奪い取る価値があったからだ。

とは言え、完全な隠匿は両協会、特に神話学や自宗教への取り込みを狙う聖堂教会の一派からは完全な隠匿は民衆から教会への不信を煽るとして、添削した後の問

題無い内容に限り写本にされ、国家の重鎮や神学者は教会の許可の下に閲覧を許されるようになる。

これには魔術協会も習い、後に神話そのものの認知度を上げるため・両協会の資金繰りのためという理由で印刷技術の普及と共に添削済みの内容が広まる事となる。

それでも、両協会が絶対の秘匿を誓った石板もまた存在した。

それはこの世界の人理の概要、そして大まかな歴史を綴った予言の部分である。極一部は世間に漏れてしまったものの、それらの多くはあくまで神話・伝承に関するものとして認知させる事に成功していたが、明らかに当時の文明レベルでは絶対には予想できない内容が多く存在する（航空力学に基づいた航空機の開発並び発展について等）事から、人類の歴史を予言した石板の存在は囁かれ続けていた。

この石板の内容に関しては両協会の上層部のみが閲覧を許されており、今現在もその内容は公にされていない。

だがしかし、この予言の石板の内容に関して、関係者のみに公にされている事が一つある。

それは人類史の歴史が記されているのは、あくまで西暦2011年までだという事だ。

即ち、それ以降の人類の歴史は完全に分からないという事だ。

これに危機感を抱いたのか、時計塔のとあるロードが音頭を取って人理継続保障機関フィニス・カルデアを開設する事となり、後の人理焼却・漂白において最後の砦になる事をこの時点ではまだ誰も予想していなかった。

.....

気付けば、上とも下ともつかない場所で微睡んでいた。

はて？ 私は古本屋のカウンターでうたた寝をしていた筈だが……？

まあ自分でもうにか出来る訳もなし。

取り敢えず、事態が動くまでゆっくり待つとしようか。

その間、頭の中で次のネタでも構想しようかねえ。



## よくある転生作家系サーヴァントの話

よし、出来たので投稿！。

---

その人との出会いは、唐突だった。

「ほうほう。これがサーヴァントというものか。いや凄いなあ！」

灰色のローブを着た、なんかヘンテコな老人がいた。

.....

人理焼却を受け、レイシフトなるものの適正が高いとしてカルデアに強制徴集された藤丸立香は爆破事件によって人類最後のマスターとなり、マッシュと共に特異点

の解消、即ち人理修復の旅へと出る事となった。

正直、何が何だかと思っていたが、冬木市とフランスと立て続けに死にそうな目にあつたため、平和ボケした日本人の彼をしても（あ、これボケつとしてたら死ぬな）と思い、英霊らを師として鍛錬と勉学に励む中、遂に新たなる第二特異点として帝政華やかなりしローマ帝国を特定、レイシフトに至つた。

が、ここからが問題だった。

何せ彼らの敵は今までのワイバーンやサーヴァントと異なり、人間だったのだ。人、そう人である。

彼が救わんとし、彼の生まれ育つた時代においては何よりも尊ぶべきとされる人だったのだ。

現代日本人として当然の価値観を持つ立香は、彼らを殺す指示を出せなかった。可能な限り鎮圧せよ、とこんな未熟な自分を慕い、認めてくれてるサーヴァント達に震える声でそう告げる事しか出来なかつた。

無論、サーヴァントらはそれに従つた。

戦闘機にすら凌駕する者も珍しくないサーヴァント達にとって、多少多いだけの

人間など、多少手加減して蹴散らせば良いだけの敵だ。

しかし、相手は未だ見ぬ敵方のローマ皇帝を信望する狂信者の群れだった。

整然と軍を成し、彼らの皇帝のためには死すら厭わぬ生きながら死兵となった者達。

そんな彼らを相手に手加減などすれば、如何に百戦錬磨・古今無双で鳴らした英霊達と言えど、負ける事はないとは言え押されてしまう。

結果、彼らの唯一のマスターにすら狂信者らの刃が届きかねない距離まで迫られてしまった。

「っ、マスター!？」

遂には最後の盾たるマシユもまた、雲霞の如く迫る人間の軍勢相手に戸惑い、押しされ、遂には不意を突かれて後ろへと兵を通してしまった。

ポロポロの血塗れの兵士が一人、折れた右腕をそのままに欠けた剣を左腕で振り被り、マスターへと肉薄する。

(あ、やば)

迫り来る、ただの人間の一大刀。

それが振り下ろされれば、人類史が終わる。

それが分かっているのに、殺人への忌避感という当たり前の感情を前にして、立香は動けなかった。

平和な国の特に平和な時代に生まれ、善良な周囲の人々と共に育った極普通の日本人の少年に、世界を背負って戦い、他者を踏み躪ってでも生きるだけの意思を持つてというのは、余りにも酷だった。

これが相手が怪物やサーヴァント等の人外ならば足掻いただろう。

しかし、人間が相手だと言うのが、彼の精神に箍を掛けてしまった。

それが今、当然の結果として彼に振り下ろされようとしていた。

(おや、そんな終わり方で良いのかい?)

不意に脳内に聞こえてきた声に、疑問すら抱く暇もなく回答する。

嫌だ。

でも、人を殺したくない。

(自分が殺されると言うのかい? 古今東西、死にたくないからと剣を取るのとは割とポピュラーな事例だ。別に今ここで君が彼らを殺した所で問題など無いのか



通信から響くドクターの声よりも早く、召喚陣の光は頂点に達し、向こう側からの誰かがやってきた。

「ほうほう。これがサーヴァントというものか。いや凄いなあ！」

灰色のローブを纏った、如何にも魔術師か司祭と言った雰囲気のある老人のサーヴァント。

老人は興味津々といった様子で己の右手を見つめ、そして周囲を見渡す。

その眼は世界への興味と感心に、冒険を前にした少年の様に輝いていた。

「自動的にその時代の知識の挿入だけでなく、言語の同時翻訳や自然環境への適応までやってくれる！ エーテル体、精霊に近い英霊の分霊とは言え、神秘の薄れた時代の科学混じりの魔術がこうも見事だとは！ やはり行き着く果ては科学と魔導の融合という私の持論は間違ってたなかつた！」

わははははははは！ と豪快に笑う老人の姿に、周囲の者は呆気に取られた。

正体不明のサーヴァントが突然現れ、突然何か言ったと思ったら爆笑し始めた。

迫っていたローマ兵は召喚の際の魔力の奔流に弾かれたので命は助かった立香も、これには唾然としてしまった。

「ん？おっと、私とした事が不作法だったね。君が私のマスター君だね。」  
にこりと好々爺然とした笑みを浮かべ、老人は立香の前に跪いた。

「サーヴァント・ルーラー。押し掛けで悪いが人類史の危機により馳せ参じた。これより我が知恵と我が石板は貴方と共に。宜しければ許されよ。」

「許します。」

間髪入れず、立香は告げた。

「ルーラー、この状況を打破する手段を提示してくれ。なるべく人死にを減らす形です。」

「であれば、我が宝具にて無力化しよう。マスター、魔力を回してくれ。私はそこまで燃費が良くないからね。」

早速の命令にルーラーは楽し気に笑い、その手の中に実体化させた宝具と思わしき石板に素人である立香ですらぞっとする程の魔力を回していく。

『うおおお!?! ちょちょちょっと待って! 何その石板凄い勢いで魔力吸ってくんで

すけどお!？」

『おおっと不味いぞロマン！このままじゃ安全措置のためにブレーカーが落ちて、全館の生命維持機能まで停止しかねないぞ！』

『非常用電源起動！職員は速やかに管制室に集合、後にここを除いて全館への送電をカット！電力消費を少しでも抑えて立香君に回すんだ！』

カルデア側の混乱も何のその。

老人のルーラーはその手の石板から眩い程の神代のエーテルを放出させながら、滔々と宣言する。

まるで語り部の様に、役者の様に、司祭の様に、その堂々たる姿は確かに彼もまた一角の英霊なのだと言香に実感させた。

「では皆様お立会い。これぞ我が生涯を以って刻みし、最も古き知の結晶……。」

そして、人類史上最古から現在まで続く最も有名な神秘の一つがその真名を告げられた。

「『<sup>キ</sup>最古<sup>タ</sup>聖典・<sup>テ</sup>人理<sup>リ</sup>英知』。」

真名の開放と共に、敵軍全てを突如発生した奇妙な煙が包み込んだ。

.....

「ん……」

ふと、立香は覚醒した。もう随分前に感じられる第二特異点での初代作家系サーヴァントとの出会いを夢に見た彼は、机に伏せていた体を起こして周囲を見渡した。場所はカルデア内の図書館。

古き良き重厚さを感じさせる内装は、本好きにとって楽園とも言える膨大なライナップと静かで落ち着く空間で満たされている。

「おや、漸くお目覚めかな？」

「お蔭さまでね。」

不意に背後から掛けられた声。

それは彼が先程まで夢で見ていたサーヴァント・無銘のルーラーの声だった。

「努力は尊いが、余り根を詰めるのはいかんよ立香。マスターは君一人なのだから。」

「ごめんってば。」

「で、何を夢に見たんだい？まさかまた新しいサーヴァントかね？」

「昔、ローマでルーラーと出会った頃の事を見たよ。」

「おやまあ。他にも素晴らしい思い出なんて幾らでもあるだろうに。」

呆れた様子のルーラーに、立香もそうだねえと返す。

どうして今更あの頃の事を夢に見るのか。

苦い思い出、最悪な思い出、嬉しい思い出、懐かしい思い出。

そういったものが沢山あったのに、何故あの頃を夢で見るのか。

「あの時の宝具で、敵のローマ兵が全部寝ちゃったのはびっくりしたなあ。」

「私の石板は書かれている内容をそのまま現実再現する。要は限定化された空想具現化に近いからね。君のちよっと前の時代の毒ガス兵器を参考に眠り薬の成分を撒けば、薬への耐性が低いあの時代のローマの民ではそりゃ潰れるさ。ま、燃費は悪いがね。」

「スキルも合わせて強力なんだけどなあ。」

それだけがこの支援特化ルーラーの欠点だった。

ただ只管に燃費が悪い。

アーチャーの英雄王ばりにあらゆる事態に対応可能な万能に近い宝具だが、あつちと違って単独行動を持ってないが故にその燃費はカルナばりに悪い底抜けとなっている。

幸い、人理修復中に限っては抑止力からのバックアップがあるので、これでも多少はマシになっているそうだが。

「ま、その点は諦めよう。人生諦めが肝心とも言うだろう?」

「でも諦めたらそこで試合終了だよ。」

「相変わらずの不屈ぶり、それは一体誰に似たのやら。」

無銘のルーラーの眼が興味深げに細まる。

彼は時々、こうして立香を試す。

試して、立香が立ち上がるのを待つ。

折ればそこまで、その末路をその目に刻んでから勝手に座に戻る。

元より戦う者ではない彼がこの一連の戦いに参加したのは藤丸立香という平凡な生まれの筈なのに類稀な逆境にも折れない存在による所が大きい。

人理が壊れるのは残念な事だが、森羅万象は何れ滅びる事を知る彼にとって人類の滅びがちょっと早くなるのは寂しいがそれだけに過ぎない。

無論、回避できるならそれで良いが、できないのならそれまでだったと見切りを付けてしまう。

「きつと口と文章が達者な誰かさんだよ。」

「ほう。それは一体誰なんだろうなあ。」

韜晦する口と文章が達者な誰かさんに苦笑しながら、立香は気分転換に食堂へ行くこうとルーラーを誘った。

.....

第一宝具 『『<sup>キ</sup>最古<sup>タブ</sup>聖典<sup>ブ</sup>・<sup>テ</sup>人理<sup>リ</sup>英知<sup>フイ</sup>』』

無銘のルーラーが持つ唯一の宝具、その最もポピュラーな使い方。

彼が刻んだ世界最古の石碑にある神代を除いた2011年までの人類史、その一部を指定して再現する。

限定化された空想具現化であり、記述された人類史上の出来事ならば魔力さえ用意できるのならば幾らでも展開できる。

攻撃・防御・回復・強化・陣地設置など、極めて汎用性に富むもののその知名度の高さから燃費が悪い。

初期型原爆程度の火力だと、マスター（普通の魔術師）の全てを使い潰して漸く使用可能となるため、純粋な打ち合いでは最上位の聖剣等には劣る。

なので専ら支援や回復が主な使い道となる。

宝具名はアラビア語での歴史書から。

第二宝具 『『最古<sup>キタ</sup>聖典<sup>ブ</sup>・外界<sup>オ</sup>神話<sup>ストリオン</sup>』』

無銘のルーラーが持つ唯一の宝具、その二つ目の使い方。

彼の刻んだ世界最古の■神話群にて記述された出来事を再現する。

但し、燃費の悪さに加え、凶悪な副作用があるので使用は避けられたし。

宝具名はアラビア語での神話の本から。

なお、三つめの使い方は鈍器である。

世界最古の石板として極めて高濃度の神秘を秘めたソレは、神霊系サーヴァントにすら通用する鈍器としても活躍する。後投げたりもする。

但し、最近の執筆に関しては専らタブレット端末を使用している。

「いやあ、情緒が無いかもしれないが、失敗すると石板一枚からやり直しするよりもこっちのが圧倒的に便利でねえ。」

よくある転生作家系サーヴァントの話  
いつかのイベント編  
とステータス

前半のホラーリヨぐだ子と後半の説明を書くためのお話。

「石板ルーラーが逃げたぞー！」

「追え、逃がすなあ!!」

「絶対に捕らえろ！マスターが帰って来る前にだ！」

（いやはや流石にこれは無いんじゃないかなー？）

とある美味しいイベント期間中、無銘のルーラーは度重なる周回に嫌気がさして逃げ出した。

.....

始まりは、いつものコメディ系イベントが始まった事だった。

開始と同時にマスターは貯めた聖晶石をつぎ込んでガチャⅡ召喚を実行、多数のイベント専用礼装を獲得すると、新たに発生した微小特異点に殴り込みを掛けた。そこで見つけてしまったのだ、今現在足りていない全ての素材と多額のQPを同時に稼ぐ事の出来る戦場を。

但し、問題があった。

敵が全てライダー属性だった。

効率的な周回には☆5相当のNP供給力を持ったキャスターの存在が必要不可欠なのは自明の理だ。

しかし、弱点属性のみの戦場では使い難く、もしもの時の事故が怖い。

無論、無理を押しての出撃は可能だが、今回はマスターは正攻法を選んだ。

即ち、「弱点属性のキャスター以外のサポート鯖で殴れば良い」である。

ここで参考に無銘のルーラーこと石板の著者さんのF G O的ステータスとスキル、宝具を簡単に開示してみよう。

筋力C 耐久D 敏捷E 魔力B+ 幸運C 宝具EX

スキル1：無辜の怪物B・自身に毎ターン星獲得状態を3T付与

スキル2：高速執筆C・自身のNPを大量に増やす（最大で100）

スキル3：深淵の叡智B・味方全体のNPを増やす（一律20）+味方全体の精神

弱体耐性3Tダウン（デメリット）

宝具『キタ最古聖典・テリ人理英知』

汎用性の高い石板による効果を支援に限定したものの。

人類史の石板に記された情報を元に、味方を最盛期の状態に近づける。

神代系の鯖には効果大だが、後世の史実系鯖には単に回復と魔力補給に留まる。

味方全体の全状態異常を解除・味方全体のHPを回復・神代系鯖の攻撃力と防御

力UP（3T）・味方全体にNPを50供給（OCで最大70まで上昇）

はつきり言って、周回デスマーチ不可避である。

1T目から自分で宝具使用可能かつ味方にも大量のNP増やす上に回復・攻防UPとなればマーリンばりに持久戦にも対応可能。

なお、カード構成もA3B1Q1と典型的なキャスターそのものなので、他の☆5キャスター勢と同じ様に組み込み易い。

何より、ルーラーなので対ライダーや対アルターエゴであろうと問題なく運用できるのが大きい。

こんなサーヴァント、そりゃもう重宝されるのが当然で、彼はステラアツ!!さんと同じくこのカルデアで最初期に絆レベル上限到達(その後上限突破)させられた鯖の一人となった。

故にこそ、彼の過労死は必然であった。

(今回という今回は絶対に嫌だとも。私には紫式部君が揃えてくれた玉石混交の各種小説を読むために事前に休暇申請していたのだから。)

その予定だったのだが、見事新たなイベント特異点の発生で、彼の願いは潰えてしまった。

だがまだだ、まだ終わらんよ！と赤くてロリコンでシスコンでマザコンの三重苦で額が心無し後退してる彗星の人の様な事を考えつつ、無銘のルーラーは自身の宝具で作った隠れ部屋に潜みつつ、他の周回☆5キャスター勢が諦めるのを待った。だがしかし、現実是非常であった。

バギャンツ!!

何の前触れもなく、ルーラーの隠れ部屋の隠し扉が金色の斧に突き破られた。

「な…!」

「はあいルーラー」 CV 金田朋子

某有名な「輝き」と「それ」のホラー映画をミックスした様な光景。

つまり、破られた壁からこちらを見つめる瞳孔かつ開いた二頭身の少女となった

マスターの姿に、ルーラーの全身が総毛立つ。

「休憩は楽しかった？ 礼装の用意は？ 周回で血の小便撒き散らしながら走り続ける心の準備はおk？」

「」

よく見れば、マスターの背後にはバーサーカーの源頼光にアヴェンジャーの巖窟王、そしてよく見るステラあ!! さんとかわいいスカディ様の姿が見える。

誰がどう見たって周回前提絶対鬼畜確殺メンバーである。

絶対に1Tで周回してやるという漆黒の意思を感じる…!

「し」

「し？」

「周回はいやだああああああああああああ…!!」

カルデアに響いたルーラーの叫びはいつもの事として処理され、誰にも顧みられずに消えていった。

この後、滅茶苦茶いっぱい周回した。

.....

マテリアル情報 石板のルーラー

最古の預言者にして賢者。

外界神話の執筆者にして、人類の歴史と叡智を石板に刻んだ者。

彼が刻んだ石板は人類史に無くてはならない多くの叡智を齎し、それ以上の災厄と戦乱を招いた。

彼の素性は彼の石板の執筆者としか知られておらず、後世において多くの者の想像を掻き立てた。

しかし、実際の彼はただ後世の者達がそれらを役立ててくれるように願った、極普通の人間だった。

「私は人を信じているとも。人の悪性も善性も、美しさも醜さも。そして何よりそのしぶとさを。故に何れ人は私の残した知識をちゃんと有効活用してくれるだろう。それまでにどんな犠牲を払う事になろうともね。」

基本的には陽気なお爺さんだが、根本的な所で常に第三者としての客観的な姿勢を崩さないが、それは後世の人間を信じているからこそであり、既に終わった死人

が現世に手出しするべきではないという考えから。

今回、人理の危機で尚且つ現世に対して何の欲望もない（但し執筆のネタとして観察する）ためにルーラーとして召喚された。

が、本来はルーラーとしての適性は低い。

これは抑止力による封印処置であり、彼の石板の本来の効果を封じるための措置である。

プロフィール 1

パラメーター

筋力 C 耐久 D 敏捷 E 魔力 B + 幸運 C 宝具 EX

身長／体重…175 cm・69 kg

出典…世界最古の石板群

地域…アラビア半島

属性…中立・中庸

性別…男性

なお、筋力が他の作家系サーヴァントよりも多少あるのはずっと石板刻んで執筆してたから。

## プロフィール2

その氏素性は全くの不明である。

世界最古の石板全ての共通の執筆者という点のみであり、それ以上の事は分からない。

それでも彼が人類とその未来を信じ、その知識を後世に託した事だけは確かな事だった。

「何で態々ルーラーに……。まあ歴史好きな私の方がこの戦いには向いてると思うがね？」

## プロフィール3

宝具「『最古<sup>キ</sup>聖典<sup>ブ</sup>・人理<sup>テ</sup>英知<sup>フ</sup>』」

無銘のルーラーが持つ唯一の宝具、その最もポピュラーな使い方。

彼が刻んだ世界最古の石碑にある神代を除いた2011年までの人類史、その一部を指定して再現する。

限定化された空想具現化であり、記述された人類史上の出来事ならば魔力さえ用意できるのならば幾らでも展開できる。

攻撃・防御・回復・強化・陣地設置など、極めて汎用性に富むもののその知名度の高さから燃費が悪い。

初期型原爆程度の火力だと、マスター（普通の魔術師）の全てを使い潰して漸く使用可能となるため、純粋な打ち合いでは最上位の聖剣等には劣る。

汎用性の高い石板による効果を支援に限定したもの。

人類史の石板に記された情報を元に、味方を最盛期の状態に近づける。

神代系の鯖には効果大だが、後世の史実系鯖には単に回復と魔力補給に留まる。宝具名はアラビア語での歴史書から。

スキル1..無辜の怪物B

彼の氏素性は全くの不明であり、後世の人々は彼の事を想像でしか知らない。

本人の意思や姿とは関係なく、風評によって真相を捻じ曲げられたものの深度を

表すこのスキルを高いランクで保持している。

美幼女からお爺さん、エルフから邪神までと多種多様な想像をされた辺り、どっかの第六天魔王ばりに後世のネタとして重宝された。

なお、本人は「面白いからOK！」と自分が女体化やら外界神話に出る邪神眷属呼ばわりされても何のその。

執筆するのに問題無いしネタが増えるのならカモン！状態である。

プロフィール4

スキル2..高速執筆C

その一生涯を石板に叡智と神話を刻む事に費やした彼の生前の行いから来るスキル。

執筆活動に関してはどんな道具（筆や鉛筆のみならずPCやタブレット等の精密機械等）でも可能となる他、執筆活動そのものが早くなる。

このスキルさえあれば、締め切りにも怯えなくて済むとは本人の談。

なお、作家系サーヴァント（同人組含む）からはガチで嫉妬されたりしてる。

## スキル3..深淵の叡智B

この世ならざる領域を覗き、知識を手にしてしまった事で得たスキル。

しかし、彼は自分の意志で覗き込んでしまったのではなく、本来この世ならざる領域にあった彼の魂がこの世界に落ちてきた事で刻まれてしまった。

この世界の人間として再誕した彼は、警告と誰かが有効活用してくれる事を願って後世の人類へとその叡智を託した。その生涯の全てを賭けて。

だが、皮肉にもその叡智は人類に多くの成功と栄光を与えるも、それを遥かに上回る災厄と戦乱を巻き起こした。

しかし、彼は諦めてはいない。

人類は歴史から失敗を学び、短所を埋め、長所を伸ばす事が出来る存在だと信じているから。

## プロフィール5

彼は人間を信じている。信仰していると言っても良い。

だからこそ死人たる自分は手出しすべきではないと思い、抑止力が致命的に弱体

化するまで召喚に応じる事は決してない。

それは自身の執筆した叡智によって多くの人々の人生を狂わせてしまった後悔からでもあり、人類のしぶとさへの信頼でもある。

しかし、人理焼却・漂白に関しては流石に見過せず、抑止力からの封印処置を受け入れた上で召喚に応じた。

それは紛れもなく人類のためであり、一人の人間としての憤りであり、作者として自分の作品を読んでもくれる上に数多くの二次創作を書いてくれた人々のためでもある。

何だかんだ言って、彼は人間が好きなのだ。

「でも私の最適クラス、フォーリナーなんだよなあ。」

なお、第二部ではフォーリナー版が出ます。

## なのはクローンの小ネタ SS

他もすなる「なのはクローンネタ」といふものを、私もしてみむとてするなり。

### 設定

スカ博士産の技術を利用した本局連中がやってる人造魔導士計画の産物。

違法研究所の場所が陸の管轄であるミットチルダの一角であったため、髭中将派閥の部隊が発見して確保。

既に自我を確立した個体であったため、本局派閥との取引（証拠隠滅その他）の結果、地上本部側で戸籍作成&局員としての立場を用意して働かせる事に。

外見はクローン元であるなのはさんじゅうはっさいとそっくりだが、遺伝子調整の結果、運動性のバグは見られない。

しかし促成成長や実験の後遺症か、その味覚や視覚等が弱いため、専用の機能を追加したインテリジェントデバイスと機械式眼鏡で補っている。

が、その中身はTS転生者（よく見る設定）。

しかも本人がメカ・ロボ・SF好きの「身体が闘争を求める↓アーマードコアの新作が始まる」な人だったため、デバイスのデザインとかが徐々にそっち寄りになっていく。

基本的には銃火器、一部SF的ホバーバイクやパワードスーツ染みたデバイスを使用する。

なお、本人は「クローン？ どうせだからその設定に寄せてみるべ」とばかりに髪型をポブカット（目が隠れる長さの前髪）と変装兼多機能メガネを追加、口調を上司に当たるオーリスの様なキビキビとしつつ、感情を見せない丁寧口調にする。本家本元に似た容姿をしているが本家よりも釣り目であり、それを眼鏡と前髪で隠している。

更に食事は味覚弱いからって全部サプリメントにして、日がな一日デバイスを弄ってるかネット回遊か訓練か寝るのローテーションである。

本人的には食事はすっぱり諦め、趣味と実益なデバイス弄りとその調整と開発のための訓練、そして色々治療中のために人よりも休息が必要なので多めに寝てるだ

け。

そんな事してるので、職員としての戦果は凄まじいものの、人間味のない人型の戦闘兵器として見られているため、周囲の職員からは距離を取られている。

しかし、直属の上司であるオーリスからは何だかんだ世話になってるし、子供扱いを受けて戸惑う様子（ふり）を見せ、ふわもふな動物には相好を崩したりする。その様子に髭達磨ことレジアス中将の癒しとストレスと罪悪感のゲージががつつ上がって良心を痛めつける事になる。

一人称は「私」。

セリフは「私に何か落ち度でも?」、「了解。戦闘行動を開始します。」

デバイス「エモーション」訳…感情。愛称エミイ

レイジングハートを参考にした、試作インテリジェントデバイス。

主にクローン主の体調管理を目的とした医療デバイスであり、本来戦闘用ではないが、本家本元がバリバリの戦闘用なので拡張領域が大きい。

が、保護された後にクローン主の戦闘用デバイスとしての機能を追加された。

当初は一般的なミッド式の杖型だったが、主が自前の給料とか貰い出すと好き放題に改造されていった。

元が医療用であるため、医療目的の身体操作や脳内物質を始めとした分泌物の調整が可能で、クローン主を限界まで酷使する事が可能。

なお、彼女本人としては自分の主人に遠まわしな自殺をさせてるようで嫌がっている。

最初期の一般杖型↓実戦を経験してのアサルトライフル型（ブッシュマスターACR似）↓ホバーバイク型を追加↓パワードスーツ型（白栗AC4）を追加↓パワードスーツ型を折り畳み式にしてホバーバイク型に搭載↓撃破・重傷になっても戦闘可能になる再起動機能を追加↓スカ博士捕獲後に再改造されてペーパープランだった白栗（ACFA）仕様に。

一人称は「本機」。

セリフは「システム正常。準備完了。」「目標達成。帰投しましょう。」「

.....

その個体の最も古い記憶は、暖かい羊水に似た培養液の中での事だった。

自身の心音と周囲を満たすやや粘りのある培養液の温度と感触。

それが唐突に終わったのは自分の周囲、培養槽の外が俄かに慌ただしくなった時だった。

時折視界に入る白衣の研究者達が慌ただしく走り回り、何事かと叫びながら大急ぎで作業をしている。

そこに杖を構えた物々しい雰囲気のある者達がやってきて光を放ち、研究者らを静かにさせていく。

そして、遂に自身の存在に気付いた乱入者達が険しい顔でこちらを見て何事かを話している。

「プロジェクトFの遺産か…回収部隊の手配は？」

「間もなく到着します。こいつの回収には少々時間を頂きますが…。」

「全て抜かりなく回収させるよ。こいつにはそれだけの価値がある。」

聞き慣れない筈の言語なのだが、何故か明瞭にその発音を聞き取れるし、その内容も分かる。

はて？こんな英語みたいな言語、自分はこの様に明瞭に聞き取れる筈は無いのだが？

「む、意識レベルが上昇していますね。こちらの会話を聞いている様です。」

「今はまだ眠らせておけ。暴れでもされたら面倒だ。」

その後、直ぐに眠ってしまった。

.....

ミッドチルダ首都 クラナガン再開発地区にて。

犯罪組織との大規模な戦闘の末、復興のための再開発が必要となった人気のないこの場所で、一台の大型バイクが無人の道路を駆けていた。

白く大型のソレは何処かCB1300Pに似たデザインだが、銃型デバイスを保持する補助腕が後部車輪の左右に配されたボックスの上に設置されており、何処か

テクニカルに似たちぐはぐさを覚える。

それもその筈で、この車両はバイクにあつてバイクにあらず。

魔導士の用いるデバイスと同質の素材で構成された高級品であり、インテリジェントデバイス並びカートリッジを搭載しているため、単体での魔法行使が可能な車両型デバイスなのだ。

そんな際物の持ち主は管理局指定のBJから不要な装甲を排した黒のライダースーツ型のBJを纏い、ヘルメットの奥では自身の相方たるインテリジェントデバイスの出す情報を受け取り、現場へと急行していた。

『クラナガン再開発地区にて事件発生。現在、陸士部隊が武装組織に対して応戦中。』

「武装組織の規模並び武装は？」

『総勢30名程。武装は小銃並び短機関銃。：対装甲ロケットの使用を確認。』

「逃走経路並び到着と先回りまでの時間は？」

『複数の軽武装車両を確認。推測ですが分散した後に地下に潜るのではないかと。』

「一網打尽にするには…」

『このまま全速力で急ぐのが最善かと。』

「最短ルート、算出次第最大速度で。」

グン、と体が後方に押し付けられるが、直ぐに平常に戻る。

自身が搭乗する大型バイク「レイブレード」が慣性制御を行使したのだ。

通常の車両ならとつくに事故を起こす様な、法定速度の二倍は出しても急ぐ理由。

それは自身が治安を維持する側、時空管理局の末席に属するからに他ならない。

三権分立に喧嘩売ってるし、身内でないあな部分の多いこの組織だが、それでも治安を、秩序を守る側であるのは間違いない。

例え過剰な拡張主義で人員の補充が追い付かず、少年兵どころかクロン兵の実用に踏み切りつつあるとしてもだ。

『敵施設内にてAMFの展開を確認。減衰率：12%。』

「その程度なら問題ない。目標視認、このまま突入する。」

『了解。衝角展開。』

武装組織のアジト内部では、即席のバリケードを築いた武装勢力による抵抗が続

いていた。

地の利は向こうだが、数の利は武装隊にある。

押し切れないのは薄らと展開を確認できる魔力結合阻害力場のせいだろうか。

だが、そんなものは高速度の質量体の突入の前には無力だ。

攻性障壁たる衝角術式を正面に展開し、壁の向こうにいる敵兵目掛けて突貫する。

その一撃は容易にコンクリート製の壁を粉碎し、内部にいた敵兵は飛散する瓦礫によって大なり小なり負傷する。

その意表を突かれた瞬間、

「散弾、フルオート。」

『了解。』

瞬間最大火力を叩き込む。

自身の右手に1丁、バイク型デバイスの後部サブアームの2丁によって、視界内の敵兵全てに対して散弾のシャワーをプレゼントする。

バタバタと悲鳴すら許されずに敵兵は倒れていく。

と言ってもちゃんと非殺傷設定はされている。

死んではいない、トラウマかどうかは…本人次第だろう。

『通路奥、増援7名。』

「排除する。」

衝角術式はそのままに、通路をバイクで走行する。

本来、施設内においてはやはり通常通り徒歩の方が向いているのだが、幸いにもこの建物の構造は二階建ての地下無し、階段は比較的緩やかな屋内のものとても非常用の屋外のものだけで、後は通路に沿って作業部屋や事務部屋があるだけ。

「通常射撃、フルオート。」

『了解。』

標的は既に殆どが通路にいるので、後はそこを掃射すれば良いので降りなくても良い。

廊下の角で待ち構えていた敵兵らが銃撃を加えてくるが、その程度では張ったままの衝角術式には傷一つつかない。

桃色の魔力弾の射撃に、銃を向けていたテロリストらは成す術もなく倒れていった。

『目標、車両2台での移動を開始。』

「追えるか？」

『問題なく。』

そのまま施設内をインテリジェントデバイスの提示するルート通りに爆走し、階段を駆け上がり、二階の窓を突き破る形で目標達の搭乗する車両の真上へと躍り出る。

『目標周辺にAMF確認。』

「多重殻弾、フルオート。」

通常の射撃魔法とは異なり、装甲の分厚い目標やAMF環境下での使用を想定された多重殻弾は遺憾なくその効力を発揮した。

ほぼ真上からフルオートで降り注いだ多重殻弾の雨はAMF影響下のテクニカル車両の屋根を易々と貫き、内部にいた目標へと命中、その意識を刈り取った。

が、そんな事をすれば当然運転手の意識も失われ、目標の車両2台はバランスを失って横転、或いは道路沿いの建物へと激突して止まった。

「エミィ、あの建物は？」

『現在では無人となっています。法的な問題はありません。』

「目標のバイタルは？」

『全員セーフです。魔導士もいません。』

「チェックした後、後続の陸士部隊との交代を以て帰還する。それまで現場待機。」  
こうして、彼女とその相方のいつも通りの一日が過ぎていった。

.....

彼女にとって、生まれた時から一緒のインテリジェントデバイス「エモーション」は唯一の家族であり、戦友であり、半身である。

故にその整備は頻繁かつ丁寧であり、時には日がな一日整備している日もある位だ。

しかし、彼女の外見年齢は11歳であり、まだまだ育ち盛りで食べ盛りで遊びたがり。

本人がどう思っているようだが、お節介な周囲の人間からの干渉はこと管理局という

場所では兎角多い。

「ナズナ、偶には外に出なさい。」

「：オーリス。」

彼女の後見人の娘であるオーリス・ゲイズがノックも無しに入室してきた。

如何にもできる女・the秘書・お局様な印象の彼女だが、その実態は母性溢れる優しい女性なので、当たりのキツささえ直せば引く手数多だろう美人さんだ。

「今、何か、不快な事を考えなかったかしら？」

「：イイエ、チットモ。」

「チツ、まあ良いわ。」

時折後見人である中将閣下を肝胆寒からしめる威圧感を放つ彼女ではあるが、根は優しい人なのだ。

「いい加減に外出なさい。エモーションと一緒にいるのは楽しいでしょうけど、引き籠るのは不健康よ。」

「：わかった。」

「言っておくけど、デバイス屋巡りは禁止ね。」

ズガビシャガーオンツ!!

とばかりに衝撃を受けたナズナが固まる。

正直、そこ以外に行く気が無かったのに、いきなりそこを禁止されてしまったのは何もする事がない。

読書やカタログなんかはネットを漁れば出てくるし、ゲームも同じ。

何か食い歩きをしようにもこの身体は味覚と視覚が弱いため、そういったものを楽しむ事も出来ない。

視覚は機械式眼鏡とエミィの補助でどうともでもなるが、味覚ばかりはどうにもならない。

だから、食事は専らカ○リーメイト風栄養食とミネラルウォーターかスポーツドリンクとなっている。

興味がない訳ではないが、今はエミィを弄っている方が楽しいのだ。

「…一体、何を、すれば…。」

「そんな途方に暮れたように固まらないの。偶には私と一緒に服でも見繕いましょう。」

今日は偶々休みが取れたから、と言うオーリスに、しかしナズナは首を左右にちぎれんばかりに振る事で意思を示した。

誰だって好き好んで着せ替え人形になりたくはないのだ。

加えて言えば、男性としての精神性を持ったナズナにとって、ファッションなんて見苦しくない程度であれば十分であり、衣服等は実用性さえあればそれで良いのだ。

「ダメよ。中将からも貴方の情操教育担当は私と言われているんですから。」

「……いやー、冗談キツイっす。」

「またそんなスラングを……。」

嘆かわしいとオーリスが頭を振る。

しかし、この手のサブカルチャーへの親しみは前世からの習慣だったので、精神の安定のためにも欠かせないのだ。

「……1着。」

「7着。貴方どうせ前のも着てないでしょう?」

「……3着。」

「6着。各季節ごとのものも買いなさい。」

「……3着。」

「5着。靴は大丈夫？」

「……3着。後サンダル。」

「今回はそれで許してあげます。さ、支度しましょう。」

こうして、毎度の事ながら姉貴分に当たるオーリスによって、ナズナは強制的にショッピングへと連れていかれるのだった。

## t w s t 夢風小説で人外主のお話

その日、ツイステッドワンダーランド史上初にして余りにも異例の軍事作戦が行われた。

参加者は世界各国の選りすぐりの中から更に選抜された一握りの上澄みのみで一された魔法士達。

全員が戦士、或いは軍人や狩人に相当する職分に就き、類稀な実力や才能、経験を併せ持った代えの利かない珠玉の人材だ。

加えて、あの妖精種の国こと茨の谷から今代の王とその直属の部下達すらも参加していた。

余りにも異常かつ尋常ではない錚々たるメンバーであった。

恐らく質の面だけを見ればこの世界の歴史上でも最上であろう。

彼らが編成された理由はたった一つ、ある一体の怪物を撃滅するためだった。

それはこの星の外、宇宙から降りて来た。

それは山程に巨大だった。

それは一対の翼と三つの首、二股の尾、金色の鱗を持つ巨大なドラゴンだった。それは目に付く全てを薙ぎ払う災厄だった。

この黄金の三頭竜、とある国の首都へと隕石が如く着陸した直後から目に付く全てを蹂躪した。

夥しい死者と瓦礫の山が幾つも築かれ、竜が去った後に動く者は誰もいなかった。僅か半年で三つの都市が滅んだ後、ツイステッドワンダーランドの全ての国々が過去例を見ない大同団結を果たし、この災厄へと対応する事で一致した。

そして、それぞれが命を懸けて己の出来る最善を尽くした。

熱砂の国はその経済力と占術の造詣の深さから各国への資金提供と占術による目標の行動予測。

夕焼けの草原は獣人達の優れた身体能力から目標への命懸けの偵察活動と被災地域の救援活動。

薔薇の王国はその規律の高さから被災地域の治安維持並びに復興支援。

珊瑚の海は人魚たちによる海上ルートからの避難への協力や食糧支援等。

輝石の国はそんな各国への医師団の派遣や医薬品の格安販売等。

茨の谷は各地の妖精達へと協力を要請し、各地でそれぞれに出来る支援活動をお願いした。

勿論、この様な前例のない大同団結する前に各国は当初独力での対処を図った。しかし、150mを超える小山程の巨体の黄金の三頭竜、しかも飛行可能で強力なブレスをそれぞれの首で放ち、死角らしい死角も無い超ド級の怪物となれば如何に優れた魔法士であっても一国家レベルでは対応するには余りに無謀であった。

都市部に入られる前に撃滅を狙って攻撃するも、逆に殲滅された軍隊もあり、更にその直後に最寄りの都市が壊滅した事例もあった。

この様な事態となつては普段戦争している各国も（こりゃあかん）と生き残るために一致団結するのは当然の帰結だった。

そして黄金の三頭竜がこの星に降り立って丁度一年の日。

各国の精鋭魔法士部隊はとある砂漠の果てに作られた偽の都市へと目標を誘導する事に成功した。

熱砂の国による無数の占術と目標の行動データの蓄積により、ある程度の行動予測が可能になった事が大きかった。

砂漠上空を飛行中の目標へと魔法で作った人形の軍勢による攻撃で進行方向を誘導し、偽装都市へと誘き寄せた。

そして人形の軍勢をあっさり蹴散らした目標が都市へと着陸し、破壊の限りを尽くそうとした時、

『トラップ、起動します！』

都市へと偽装された殺し間に仕掛けられた罠が起動した。

各国がここぞとばかりに仕掛けた無数の拘束魔法と秘蔵（使い所無くて死蔵とも言う）のマジックアイテムにより、目標は捕らえられた。

『トラップの発動を確認！目標への効果あり、固定確認！』

『よし、第二段階へ移行！』

『了解！第二段階へ移行！』

続いて、茨の谷で作られたドラゴンの牙製の槍が射出され、目標の翼を貫き、飛行能力を奪った。

「■■■■■■■■■■ッッ！！！」

余りの激痛に三つの口から独特の咆哮が轟き、次いで胴体から首へと光の波が送

られていく。

ブレス発射の前兆である。

『ブレスの前兆確認！発射まで後3秒！』

『カウンター並びに対ブレス障壁展開用意！』

きっかり三秒後、三条の稲妻にも似たブレスが発射される。

しかし、その一斉射は三つ首竜の眼前に展開された防御魔法へと直ぐ様命中し、その場で爆散した。

『カウンター、効果確認！』

『よし、このまま止めを刺すぞ！』

最後の止めとして用意されたのは先程のドラゴンの牙製の槍に加え、珊瑚の海から提供された三又の黄金の鉾トライデント。

王権の象徴とも言える武器を十全に扱うべく、人間への変身薬を飲んだ人魚すらもこの作戦に参加していた。

しかし、目標には未だ見せていない奥の手があった。

『ッ！目標、再度発光！』

『カウンター並びに対ブレス障壁再展開！』

目標の150mを超える全身が発光、再びブレスかと思われ、先程と同じ対応が成された。

この時、先程と同じくカウンターのための防御魔法だけでなく、純粹に防御用のための対ブレスに特化した障壁魔法も展開された事が、彼らの命を救った。

「■■■■■■■■■■ッ！」

目標の巨体を中心に、全方位へとブレスと同様の性質を持った衝撃波が発せられた。

それらは偽装された都市群を一撃で壊滅させ、入念に対策された筈の障壁魔法越しにその場に展開していた精鋭達すらも木端の様に吹き散らした。

『ぐ、が…！各員、現状報告…！』

司令部に届けられる報告は、どれもこれも絶望的だった。

今の一撃で精鋭の多くが戦闘続行不可能な程の重傷を負い、一部では死者も出ている。

並みの魔法士では今の一撃で文字通り全滅していてもおかしくはなかったのだか

ら、流石と言えば流石である。

しかし、今の一撃で目標の拘束も緩んでおり、次々と戒めが破られつつある事が伝えられると、流石に司令部の脳裏にも「総員撤退」の四文字が浮かんだ。

目標の戦闘能力は警戒していた。

その能力を解明すべく今日まで誰もが血と汗と涙を流し続けた。

しかし、目標の能力は彼らの想定を上回っていた。

だが、ここで撤退を決定しても無事撤退できるのか？

そも、ここを逃せば目標をもう一度捕捉できるかも分からない。

もう一度拘束し、何とか槍と鉾を当てれば勝てるかも知れない。

だが、それは余りにも成功の確率は低い。

悩ましきの余り、脂汗とうめき声が満ちる司令部から、一人消えた姿があった。

だが、それは逃げたのではない。

戦いに向かったのだ。

「我らにも意地がある！ 宙の竜よ、この地より去るが良い！」

グレートセブンの後継、茨の谷の妖精王がその真の姿を露わにして、今にも全て

の拘束を振り解こうとしている目標へと挑みかかったのだ。

茨の谷の妖精王、その本性は巨大なドラゴンである。

蜥蜴に似た五体に小さめの翼を持つ100m超えの黒い鱗を纏った巨体で、自らよりも一回り大きい巨体へと殴り掛かったのだ。

「■■■■■■■■■■ーッ!!」

突如始まったドラゴン同士の殴り合いに、誰も介入できない。

巨体の動き一つで発生する衝撃波に、人間の身で参加するには余りに無謀だったからだ。

ブレスの撃ち合いに至っては、余波だけで城も消し飛びそうな勢이었다。

近づいたら一瞬でミンチ未満になる死地へと突っ込む無能な者はこの場にはいなかった。

故に、有能な彼らは即座に自らに出来る事をすべく動いていた。

『各員、槍と鉾の状況はどうか!?!』

『B班、こちらにはありません!』

『A班、こっちは全て破損!』

『穂先はどうだ!? 他は!?』

『こちらD班、C班の全滅を確認…。ですがトライデントは確認!』

『E班だ、こっちは槍の穂先が二つある!』

『よし、妖精王が踏ん張ってる内に射撃位置を確保!これがラストチャンスだ!』

『『『『了解ッ!』』』』』

彼らが苦勞して射撃位置を確保した時、ドラゴン同士のVSバトルは妖精王が圧倒され、地面にその巨体を沈め、その上から踏み付けられていた状態だった。

目標の意識は、完全に妖精王へと釘づけられていた。

『各員、一斉射!』

目標が止めのブレスを吐こうとした瞬間、その胴体に3本の槍の穂先とトライデントが命中した。

「■■■■ーッ?!?!?」

その肉と骨を盛大に抉られ、目標が苦痛の叫び声と共に倒れる。

『今です陛下! 奴に止めを!』

『無理だ! ダメージが深くて動けない!』

『治癒が得意な者は妖精王を治療しろ！他は目標を拘束して時間を稼げ！』  
妖精王が回復するまでかかった時間は、僅か3分だった。

それでも精鋭達の半数近くがこの3分で死亡した。

拘束魔法で動きを抑え、攻撃魔法を目眩ましにし、飛行術で囷を務め、貴重な三分を稼ぎ切ったのだ。

「このままでは勝てぬ…！皆、私に魔力を送れ！」

何とか立ち上がった妖精王の号令に、生き残った精鋭達は残り僅かとなった魔力を送り、次々と力尽きていく。

そして、精鋭達の命を賭した時間稼ぎの果てに、遂に準備は整った。

目標が再び妖精王へと意識を向けた時、そこにいたのは先程とは別の何かだった。過剰に貯蓄された魔力により、全身を焼けた鉄の様に赤熱させた黒いドラゴンの姿に、目標は即座に口内へと光を充填し、ブレスを発射せんとする。

しかし、既に準備を終えていた妖精王を前にして、それは余りに遅すぎた。

黒いドラゴンの口内から放たれたのは、精鋭達の絞り出した魔力と妖精王の残った全ての魔力を掻き集めての一撃だった。

一拍遅れて放たれた目標のブレスを掻き消し、そのど真ん中へと命中した渾身の一撃は遂に目標を爆発四散させた。

それが余りにも膨大な被害を出した宙からの来訪者の最後だった。

以降、ツイステッドワンダーランドの全ての国々が復興と今後起きる可能性のある似た事態へと対応するために平和条約を締結し、事実上この星から国家間の戦争は完全に消えた。

荒れ果てた国土の復興に国力を注ぐため、戦争なんてしている暇や余裕が無いとも言いが。

それでも今後も非正規戦や暗闘は消えないだろうが、取り敢えずこの星の人類は辛うじて平和を取り戻したのだった。

これは異世界からの迷い人が名門魔法学校ナイト・レイブン・カレッジへとやってくる実に300年前の出来事だった。

.....

「いや、完全にキングギドラじゃん。登場作品間違ってるじゃない???」

そして300年後、異世界からの迷い人で魔法なんて使えないのに今はNRCに入学している監督生は魔法史の課題で出された「過去に行われた宇宙生物殲滅作戦についてのレポート」を書くために司書のゴーストからお勧めされた資料へと目を通して、思わず突っ込んでいた。

「え、もしかして妖精王ってゴジラ？妖精王じゃなくて怪獣王じゃん???」

生憎と監督生の知るツノ太郎は怪獣王じゃないのだが、それはさておき。

図書室で混乱の極致にいる監督生の背後から、三人の人影が近づいて来た。

「あら、どうしたのユウ？」

「レポートが難航してるの？」

「もし良かったら手伝ってあげようか？」

「あ、三つ子先輩達。」

監督生が振り向くと、そこには三人のとてもよく似た容貌の少女がいた。

全員が白磁の肌に金髪赤眼であり、同時に余りにも人間離れた美貌をしていた。ここNRCは生徒の9割以上が男子生徒なのだが、数年に一度、数人が入学し

てくる事がある。

原因はバグだとか、矯正の必要ありと判断されたのか不明だが、稀に闇の鏡は女子生徒を選ぶのだ。

彼女達は三つ子であり、三人とも現在はディアソムニア寮の2年生をしている。彼女らの名はそれぞれアイ・ヴァイ・ライと言い、シルバーのネックレスにそれぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲと刻印されている。

なお、実は孤児の出なので姓は持っていないそうだ（本人から聞いた）。

「ふふ、頑張り屋のユウには〜」

「この飴ちゃんと上げましょう。」

「どうしてもダメな様だったら相談してね？」

「ふふ、ありがとうございます、先輩方。」

「…貴様ら、人の子をどうするつもりだ？」

「あら怖い。未来の妖精王様はとても怖いわ。」

「うふふ、それだけあの子が大事なのね。」

「答えろ。」

「別に、今は何もしないわ。」

「でも、あの子が帰れなくなって寂しいって言うのなら…。」

「私達の家族にするのも、悪くないかな？」

「…………。」

「あら、怒っちゃったの？」

「お気に入りが取られそうだから？それとも…。」

「失せろ、目障りだ。」

「うふふ、じゃあねドラゴンさん。」

「あはは、貴方のお父様によろしくね。」

「ふふっ、まったね〜。」

「……あの人の子は、よくよく厄介な者に好かれてる様だな。」

取り敢えずリハビリなのでここで終わり。

なんでギドラが生きてるかって言うと、爆散した肉片の一部が以前に剥離した肉からこの三姉妹が生まれたから。

合体すれば以前並の実力はあるけど、今の自由度の高い姿も気に入ってる。

監督生に目を付けているのは、自分達と同じこの星に属さない異物であり、魔力・魔法による抵抗が出来ず、工夫すれば自分達の同胞に変化させる事も可能だから。

闇の鏡としては「放っておくと人類滅亡級の厄ネタをどげんせんといかん」と判断して選んだ。

NR Cでの生活如何では300年で増量した肉片を用いたギドラ族誕生祭りが開催される可能性すらあるので、頑張って更生させましょう（はあと）

## 藤丸立香成り主（原作終了後）の次なる人生（in 呪術廻線）

リハビリ風嘘予告短編

心折れてしまった藤丸成り代わり主の次の人生のお話

---

焼けた鉄の上を歩くよりもなお過酷な日々だったと、藤丸立香に成り代わった誰かは思う。

藤丸立香に成り代わっていた誰かの前世の記憶が戻ったのは、第一部が終了した頃だった。

そこから先はまだ自分がプレイした事のない内容だったので、知識を活かせる場面もなく、ただただ「自分の知る藤丸立香」を演じ続ける日々だった。

予告だけ知っている1・5部の亜種特異点、様々なイベント特異点はまだ良かった。

新宿やセイレム、CCCを始め心を抉られる展開は多々あったが、それらはまだマシだった。

問題は（恐らくと付くが）第二部の人理漂白が始まってからだだった。

今まではゲーティアに言った通り「生きるため」だった。

生きて、生きて、生き抜いて。

マッシュと、ドクターと、ダヴィンチちゃんと、カルデアの皆と生きていくために戦っていた。

敵は理由はあれど人類史を焼却する人類悪で、それに各々の理由から協力する者達だった。

1・5部ではゲーティアの残党とそれに協力する者達だった。

どちらも今の藤丸立香達が暮らす世界を滅ぼす程の脅威であり、負けては世界が滅び、自分達も死んでしまう。

そんな事は御免だし、マッシュ達カルデアの皆と生きるために戦い、勝利した。

だが、人理漂白から続く異聞帯での戦いは今までとは全く異なるものだった。

自分達の世界を存続させるために、他の世界を滅ぼす。

どこぞの川上ん作品の様な展開に、人類最後のマスターとなった誰かは乾いた笑いを上げた。

自分達の世界を問答無用で滅ぼした相手を道連れ気味に滅ぼすのは別に良い。

注釈しておくが、藤丸立香は悟りを得た人とか神の子みたいな極まった善性じゃない。

そんな人間なら、そもそもマッシュが一度死んだ時にゲーティアに殴りかかってないから。

こっちを滅ぼしてでも生き延びようとする連中を逆に滅ぼして生き残るのなら、多少悩むし罪悪感を抱きもするが、それでもその歩みを止める事は無い。

問題なのは、異聞帯の人々が何も知らないという事だった。

何も知らず、ただ日々を精一杯生きている人々が世界の都合によって無かった事

にされた「行き止まりの人類史」。

そこに住まう人々を世界ごとまた皆殺しにしながら戦い続ける二度目の旅路。

本来、ただの善良な一般人である藤丸立香にとって、人類最後のマスターになった誰かにとって、それは正しく「焼けた鉄を歩くよりも過酷」だった。

誰かを犠牲にする事も、誰かを傷付ける事も、誰かを見捨てる事も、藤丸立香と彼になった誰かにとってはこれ以上ない拷問であった。

加えて、成り代わった誰かにとっては「本来の藤丸立香ならもっと上手くやれた」「知識があっても何の役にも立てられなかった」という自責と後悔も加わる。

心は散々に罅割れ、意思は挫け、魂が罪悪感に沈むのも当然だった。

それでも彼が歩き、戦い、止まらなかつたのは、そんな旅路でも彼の背を押す者達がいてくれたからだ。

獣人の青年、無垢な少女、勝気な少年、好奇心旺盛な少女、永き時を生きた双子の姉弟。

そして旅路の最初から常に一緒だった盾の乙女と縁を結んだサーヴァント達。

彼らを始めとした多くの人々の命を踏み越えたからには藤丸立香に、人類最後の

マスターとなった誰かに止まる事は最早許されない。

その命が、意思が、魂が真に限界を迎えるその時まで、最早彼らは止まらない。

藤丸立香はカルデアの生き残り、アトラス院の錬金術師と再召喚に成功したサーヴァント達と共に更なる犠牲を積み重ねても生き残るべく、その歩みを進めた。

だが、敵は余りにも強大無比だった。

ビーストIゲーティアの二等惑星級に次ぐ魔力放出量を誇るビーストVII Uーオルガマリー（!?!）。

ビーストVIIを撃退しつつオルガマリー所長を救助するのは、どちらかだけでも不可能に近いミッションだった。

故に、故に、藤丸立香は熟考に熟考を重ね、多くの賢者や知恵者、魔術師に陰陽師に錬金術師らに千里眼持ちに相談した後に、あるプランをゴルドルフ所長へと提出した。

「今まで集めた聖杯を、オレに使ってください。」

「そうすればサーヴァントの皆だけじゃなく、ブラックバレルへの魔力供給も今よりグンと安定します。」

「一つで特異点を形成できる聖杯を使えば、オルガマリー所長を助けられるかも知れません。」

余りにも無謀だった。

そも、専用に調整されたホムンクルスやデザインナーベビーでも無い限り、サーヴァントや英雄ならざる普通の人間が聖杯を、それも複数受け入れるのはどう考えでも無理無茶無謀であった。

人類最後のマスターたる藤丸立香を失えば、カルデアにはもう後は無い。

そして、こんな生きる目など微塵もない自ら死に行く様な行動を取る程に、藤丸立香と彼になった誰かはこれまで犠牲にしてしまった人々の重さに追い詰められていた。

それでも藤丸立香ならばとカルデア首脳陣は考え、その上で更に作戦プランを練

りに練り、入念な確認を繰り返した上で更に二度の異聞帯攻略作戦を成功させた後、彼らはそれを実行した。

対峙するは未熟な器としてオルガマリー所長を捨て、オールの雲より飛来した極限種たるO R Tを器としたピーストVII。

漂白され、何もかも消えた地球上でカルデア最後の作戦は行われた。

その結果がどちらだったにせよ、それは最早些細な事だった。

何せその結果如何に関わらず、藤丸立香と彼になった誰かの人生は終わるからだ。

ピーストIVの加護無き今、七つもの聖杯をその身に受け入れ、後天的に生きた聖杯となった彼は自らの全てを使い切るべくして最後の戦いに挑んでいた。

文字通りの全て、である。

その程度で覆す事は絶対に不可能な差であるが、それでも作戦実行者の生死をほぼ気にしないで良くなったのは作戦の縛りを緩める意味では大きかった。

白紙化された人類史を巡る決戦の行く末は敢えて語らない。

ただその結果に関わらず、藤丸立香になった誰かが死んだ事だけは、確かな事だった。

.....

『全く、君は本当に馬鹿で不器用だなあ。』

『折角頑張っでここまで来た君が、最後の最後に諦めてどうするんだい？』

『仕方ない。これで今度こそ僕は完全に消えてしまうけど、最後の贈り物だ。』

『と言っても、この世界線じゃもう君は存在を保てないから、何処か適当な所で産み直してもらおう形になるけどね。』

『じゃあね立香。さようなら名前も知らない誰か。こんなになった僕に最後まで美しいものを見せてくれて、本当にありがとう。』

.....

「ここかい、例の少年がいるってのは？」

東京の某所にある呪術高专東京校、その地下隔離区画にて。

名実共に当代最強の呪術師の名を欲しいままにする五条悟はそう言って部下である伊知地に尋ねた。

「え、ええそうです。藤丸立香、13歳。両親は先の呪霊被害で死亡。呪霊に襲われた際、未確認の術式を発現してこれを祓いました。」

「で、何でまた秘匿死刑？急過ぎない？」

「本人が望んだとの事です。加えて、使用した術式が余りに異質かつ強力過ぎるとの事でした。…」

「とりま本人と面談してみない事にはね。」

そうして案内された独房には、壁一面に拘束・封印のための札や呪具が張り巡らされた異常極まりない部屋だった。

その中に一人、若干疲れた様子が見受けられるも微塵も動揺せず床に座っていた。

その全身は真言を記した包帯や注連縄で拘束され、更にその上から無数の札が貼

られ、余りにも念入りに封印されていた。

だと言うのに、五条の目の前の少年は動揺らしい動揺もなく、余りにも普通に落ち着いていた。

両親を目の前で殺され、幾人もの呪術師に拘束され、このような場所に連れて来られては恐慌なり激怒なりで感情を露わにするのが普通だ。

しかし、この少年にはそれが微塵も見受けられない。

調査では少年の育ちは一般人で、両親もまた同じく。

先祖に若干呪術師生まれがいたらしいが、それは戦前よりも更に前の事。

普通の少年がこの状況で動揺せずにいる事自体が、余りにも異常であった。

「…少年、藤丸立香君だっけか。君、一体どうしてその状態で生きていられるんだい？」

五条は顔の上半分を隠す大きな黒い眼帯を外し、その六眼で直に立香を視認する。「…どうしてでしょう。自分でも不思議です。」

空色の眼を除けば極々一般的で善良そうな少年。

その総身を覆い隠す程の呪いが、彼を蝕んでいた。

否、その呪いは不思議と彼の心身に影響を与えてはいない。

しかし決して離れず、彼との繋がりを極めて強固に保っている。

そして、その中心になる二つの術式の存在に、五条は愕然とした。

余りにも荒唐無稽、余りにも強力無比なそれは、当代最強の呪術師たる五条をして愕然とするしか無かった。

「…君は二つも術式を持っている。この時点で前例がない。そのどちらもが異常であり、君の秘匿死刑を呪術界上層部が決めた理由だ。」

ごくり、と知らず唾を飲み込んでから、五条は立香に自分が見たままの内容を告げる。

「一つは『英霊召喚』。召喚した呪霊と契約し、使役する。似た様な術式は前例があるが、呼び出せる存在が規格外だ。殆ど全てが特級呪霊に比肩する。」

これだけで通常の呪術師や呪詛師は腰を抜かすだろう。

特級呪霊ともなれば通常兵器で例えると「クラスター爆弾の絨毯爆撃でトントン」と言われる規格外の存在である。

そんな存在に伍する者を召喚し、使役するとなればやはり異常としか言い様がない。

い。

「それでもう一つ、こちらこそが厄介だ。術式『聖杯』。人の望みを、願いを叶える。色々と制限はあるけれど、君は正に生きた願望器と言うべきだね。」

「そうですか、それは大変ですね。」

五条の語る呪術界の歴史や常識に喧嘩を売る様な内容を聞いても、やはり藤丸立香は普通の少年の様に少し困った顔をしながら他人事の様に戻すのだった。

これは世界を二度救った人類最後にして最大のマスターに成り代わってしまった誰かの、望んでもいない二度目の物語である。

---

ご両親は凜ちゃんと土郎君似のモブです。

呪いが大気中に漂ってる不浄な世界線なので、悪属性英霊はステータスUP。

逆に善属性はダウンした状態で召喚されます。

聖杯七個分の魔力+カルデア式召喚術式が藤丸成り主の魂そのものに刻まれており、今後どんなに転生したとしても命の危機に反応して術式が起動する設定です。

Q つまり？

A 生きてる限り地獄☆ でもモンペ鯖の皆さんがいるから身の安全は確保されるよ！

これはダークファンタジー世界で生きる事となった世界を七度滅ぼした罪悪感で死にそうになってる藤丸成り主の物語である！



## 呪術廻戦SS 転生特典はとあるPCゲームでした

ちよいやっつけですが、リハビリなので許して頂きたいです…

先の地震でPC破損してしまつてまた修理に出さねば…（白目）

---

「TerraTech」とはイギリスのペイロードスタジオと言う会社の作ったオープンワールド形式のサンドボックス型アドベンチャーゲームである。

プレイヤーはクラフト、戦闘、発見を通じて無数の創造物を設計し、組み立てることができる。

ブロックの膨大なライブラリから乗り物を設計し、様々なミッションをクリアしながら舞台となる星を探検していく。

新しいパーツを漁り、クラフトし、購入して生き延びて、惑星で最高の探鉱者になりましょう！と言うのがこのゲームの概要である。

パーツを販売する各企業の出すミッションのクリア報酬や撃破した敵ユニットか

ら入手する事で新パーツを解放し、資金を入手していく。

後半に出て来る新企業や強力なパーツは基本的に高価であり、資源やパーツの売買による資金繰りも大事になってくる。

また、敵ユニット以上に複雑極まりない地形を走破する事が重要であり、迂闊に山地や荒地地を行くと嵌ってしまう事もしばしばな事から「真の敵は地形」とか言われたりする。

個人的には大人向けのレゴブロックみたいなゲームで、前世でもとても嵌っており、暇さえあればプレイしていた記憶があった。

だからって、これは無いと思う。

「転生特典がリアルテラテックとかマジかよ…。」

現在7歳となった紅葉の様な自分の掌には、テラテックのスタート時の自機にしてコアパーツともなるGalactic Survey Organization (通称GSO) 社製の操縦ブロックがあった。

(自分の思う通りに動く。武装もこの分じゃ使えるな。)

試しに何故か見える様になった妙な化け物(30cm程の邪悪なポケモンかうイ

ルス種のデジモンみたいな奴）がベランダに来ていたので、GSO操縦ブロック内蔵のめっちゃ弱いレーザーをそいつ目掛け発射する。

『ギユエツ』

化け物はあっさりと消えたが、自分は頭を抱えた。

転生したと漸く実感して早数日、余りにも酷い世界に転生した事を自覚してしまった。

祖母を始めとした他人には見えない奇妙な怪物達。

それを殺傷可能な特殊能力を持った自分という存在。

この時点でもう大体転生先は判明した。

これでも支部民であり笛民なので流行りのSSは一通り把握しているのだ。

「よりもよって呪術廻戦とか、最悪の部類だぞ…。」

狩人×狩人や鬼滅、電ノコ男並みに一般人に過酷過ぎる世界など、読者目線なら兎も角として一住民としては地獄同然である。

最近のジャンプはダーク路線過ぎて辛い…（白目）。

さて、そんな地獄同然の世界における自分の状況を整理してみよう。

両親はいない。

事故で死んだらしいが、遺体は発見されていないとの事。事故（呪霊）ですな分かります。

肉親は祖母のみで、祖父は自分が生まれる前に他界済み。

現在は祖母の住む安アパートで年金と両親の遺産で生活している。

追記：お隣の部屋の表札が「伏黒」って書いてあります。

待って待って、自分原作履修は0〜10巻だけで渋谷事変とか詳しく知らないの！  
だからいきなり両親いなくて幸薄い姉弟の伏黒さん達のお隣になるなんて困るの！

「量一〜津美紀ちゃん達呼んできて〜。」

「はい！！」

なお、今世における自分の名前は木手量一である。

キテレッツさんの御親族か、はたまた量の字はペイロードスタジオさんからかな？

「津美紀ちゃん！恵くん！ご飯作ったからおいでー！」

「はい！！」

「待って、今行く。」

取り敢えず、婆ちゃんへの指示に従う事にしよう。

原作キャラで関わり合いに成りたくないとは言え、幼女と幼児相手に善行積むのは良い事だからネ！（目逸らし）

.....

時折帰って来ては金を置いては去って行った津美紀の実母が姿を消したのは、もう半年も前の事だった。

それでも何とか生活してこれたのは、お隣さんであるうちが二人の生活を何くれと支えてきたからだ。

しかし、それだって何れは限界が来る。

何せお年寄りの年金はそう多くないし、両親の遺産だって有限だ。

自分に関しては転生特典らしく結構成績が良いため、学校は奨学金制度（第一種の方）を利用できるだろう。

しかし、流石に伏黒姉弟もとなると厳しい。

食費なら兎も角、教科書も更新された場合は新品で揃えねばならず（そうでなければ古本屋や近所に頭を下げて譲ってもらう）、また制服やカバンに修学旅行の費用等々はどう足掻いても厳しい。

自分が学校を卒業して稼げるようになるにはまだまだ掛かるし、その間に祖母がボケては介護もままならないだろう。

（どう考えても詰んでる。）

今はまだ良い。

だが、時間経過と共に状況はじわりと悪化の一途を辿っている。

（あー手っ取り早く金稼ぐ方法とか無いかなー!?)

いや、あるにはある。

だが、それは余りにもリスクであり、最初を選択肢から外したものだっただ。

それは呪術師になる事。

高専に入り、上の指示通り呪霊を祓い、呪詛師を殺せば短期間に多額の金が入る。が、それは最強さんこと五条悟曰く「腐ったミカン」な上層部の管理下に入ると

いう事。

御三家だろうが一般出だろうが、腐敗し切った上層部の眼に留まればどんな目に合うか分かったものじゃない。

最悪、原作以上に酷い事態になりかねない。

あの五条悟すら入念に対策を重ねられて酷い事になる(らしい)のに、一般出の小僧っ子がんな歴史の転換期に巻き込まれて無事に済むわきゃー無い訳でして。

勿論、もしもの時を考えて自分の転生特典が判明した後、前世の知識を利用して様々な機体を作りましたとも。

近所の呪霊(ちっこいのからでっかいの)を祓いまくって経験積んで、全ての企業パーツ(2020年1月現在まで)を解放するまで頑張りましたとも！

現在は余りに多いのに頭に来たため、多数のタレット(要は無人砲台。バリア・リペアフィールド・ソーラーパネル付きで対空・対地両用)が近所に十基以上設置してあるため、この辺じゃ一番治安が良くなっている。

なお、この機体群は式神みたいな扱いのためか、一般人には見えないが、普通の式神とかと違って自分の意識が無くても稼働してくれる。

更に害のある存在と判断すればバリアで呪霊も人間もその他（飛んできたボールや看板）も防いでくれる便利さよ。

更に言えば、一つ辺り拳大程度だったパーツの最小単位であるブロックを一边1mの立方体にサイズまで拡張できるようにもなっていた。

Q つまり？

A 構造そのままに巨大化できるって事です。

お陰で弱い初期の武装でも大きな呪霊相手にそこそこ使えるようになったし、コアパーツを自動車みたいな感じに使うようになって便利になった。

何より、巨大な機体を作るのがとっても楽になったのが何よりも収穫と言えた。加えて、それらが十全に稼働するための電力や弾薬は自分の呪力で賄う事が出来る。

ゲームでの太陽光や燃料を用いての火力発電の方が効率が良いのだが、呪霊や呪詛師相手に常に事前準備が出来るとも限らないため、呪力を使用してその辺の時間をカットできるのは大助かりだった。

さて、そんなこんなで自分の術式？を頑張って鍛えてる訳なのだが、未だ幼児

と言える自分に出来る事はご近所の安全確保しか無い訳でして。

…マジでGTG頑張ってくれとしか言えない自分の無力が辛い…。

そんな時だった、五条悟がこの辺にやってきたのは。

「りよ、量一…！恵が変な人に…！」

「津美紀は110番！警察呼んで！防犯ブザー投げて！」

高専時代で既に身長180cm超えであり、更に言えば高専特有の喪服染みた真っ黒な学生服を身に纏った若白髪（脱色にしてはスゲー綺麗）にサングラスの軽薄そうな青年が小学生に声を掛けている。

原作知ってなけりゃ、間違い様もなく事案な光景だった。

二階のアパートの窓からその様子を見てしまった津美紀は、動揺した様子で自分の袖を引っ張り、震える声で助けを求めて来た。

（原作知ってる身としては大丈夫って分かるんだけど、当然の反応だからなー。）

そんな訳で、自分は津美紀に通報させつつ、周辺の自動砲台に命じて五条悟をロックオン、自分も恵から五条悟を引き離すべく防犯ブザー片手にアパート前の道路へと駆け出すのだった。

.....

「恵！」

その少年を見た時、五条悟はその空を閉じ込めた様な六眼によって、この地域一帯を守っている砲台型の式神の主人だと見抜いた。

四級の蠅頭一匹すら存在を許さないこの地域の各所に配された強力な砲台群。

高専や家での集まりでは見かけた事の無い英語表記の術式で、やたら堅く火力の高いそれらに感心し、あの呪術師殺しの仲間とも思ったが、その主人が未だ小学生の子供とは想定外も想定外だった。

色々聞きたい事が増えてしまったが、登場と同時に容赦なく防犯ブザーからピンを引き抜いて鳴らされたため、そんな余裕は一瞬で消えてしまった。

マズイ。

こちらは（今は）特に犯罪はしていないが、それでも五条は自分の恰好と言動が不審者染みているという自覚はある。

このご時世では幼児に声掛けしてくる目立つ格好の男性なんて当然ながら不審者扱い一択である。

「量い」

「良いから逃げるぞ！」

やっべーどうすっかな？と五条がこの場を穩便に切り抜けようと思考を巡らせるが、その隙に伏黒恵の手を取って、駆けこんで来た少年がこの場を離脱する。

向かうのは人気の多い通りであり、ここで自宅のアパートではなく人目のある場所を目指したのは中々良い判断だった。

相手が単なる変質者であり、五条悟ではなければ、と注釈が付くが。

「おっと、君にもちよっと話を……」

そう言って、五条が二人に伸ばした手に飛来した銃弾が直撃した。

それは星漿体事件から反転術式のお陰で常時発動している無下限術式によって阻まれたが、驚きでその手を止める事は出来た。

「あらま。敵認定されちゃったか。」

そう暢気に零す五条目掛け、合計8基のタレットがその武装を発射した。

マシンガンが、ガトリングが、レールガンが、迫撃砲が、ミサイルが、レーザーが、砲弾が着弾してはぜる音が静かな午後の市街地へと響き渡った。

この後、五条悟はタレットを無力化する間に駆けつけた警察官により器物破損に児童に対する不審な行動の証言から身柄を確保され、警察署に連行された。

事態を知らされて急ぎ警察署に來た高専の夜蛾正道教諭に引き取られるまで、彼は取調室にて調書を取られつつ暢気にかつ井の出前を取ったりして警官らの神経を逆立て続けた。

それを見た夜蛾教諭により、その場で五条は頭に漫画なたんこぶ三つ程こさえる事となり、警官達から感嘆の声が漏れ出たそう。

「あ、そうそう夜蛾センサー。あのスーパーゴリラの息子とお隣さんの男の子だけど、禅院家の相伝と外国産らしき術式持ってたからこっちで保護しねーとヤバイよ。」

「」

翌日、夜蛾教諭はすっかり愛飲する羽目になってしまった胃薬を携帯しつつ、菓子折り持って件の伏黒姉弟とそのお隣さんの下へと謝罪に赴くのだった。三人の子供達が今後どうなるのか、それはまだ誰にも分からなかった。



## 呪術廻戦SS 化け物に化け物ぶつけたら国が滅びかけた件

現代日本より千年以上昔、西暦794年から1185（又は1192）年までとされる平安時代において。

呪術全盛期と言われるこの頃、猛威を奮っていたのは天災や人災だけではなかった。

鬼神とも言われる呪いの王「両面宿儻」こそが最も凄惨に人々を殺し、暴虐に明け暮れていた。

無論、時の朝廷もこれを座視する事は出来ず、度々陰陽師らに討伐を指示していたのだが、余りの強さに誰一人として敵わず、全て軀になるか塵一つ残さずに消えるのみだった。

己の快不快のみに生きる鬼神に、皆成す術が無かった。

「化け物には、化け物をぶつけてみたらどうだろうか？」  
そんな時だった、一人の陰陽師が呟いたのは。

「普通に戦っては余りに強過ぎる宿儻に皆殺されるだけ。」

「ならば目には目を、化け物には化け物で対抗するのだ。」

「もし失敗しても、少しは消耗して大人しくなってくれるやも知れん。」

最早被害覚悟で陰陽師らを総動員する位しか無かった朝廷は、この案を良しとしてGoサインを出した。

まあ勿論ながらそれだけじゃ不安だし、予定通り総動員もしておく事にはなったのだが、露払い位にはなってくれるだろうとも考えていた。

が、当然ながらそんな上手く行く筈もなく、彼らは後に子々孫々に渡ってこの判断を深く深く後悔する事となる。

.....

宿儺にぶつける化け物を召喚すべく、とある陰陽師は準備を進めていた。

彼は端から召喚した化け物を制御するつもりは無かった。

宿儺の傍に出現させ、互いを食い合わせるつもりなのだ。

では、どんな化け物を呼ぶつもりなのか？

この男は陰陽師と言うよりも蠱毒や呪殺も積極的に行う外法師、現代で言う所の呪詛師に近い立ち位置にいた。

それでも朝廷に出仕できているのは、この男の立ち回りや根回しの良さ、役人らに対する贈賄が故であった。

そんな男が思いつく様な化け物等、まともなものである訳もなく…

「召喚の媒介には、予定通りこれを使うとしよう。」

それは男が師に当たる額に縫い目の様な傷跡のある呪術師より貰い受けた正体不明の物質だった。

その水晶にも似た物質はこの世の何よりも堅く、同時に柔らかく、どの様な気温差にも耐え、それでいて鋭い。

呪術のみならず金属製の槌や大岩で叩いた所で掠り傷すら付かない程の驚異的な耐久性をも備えている。

上手く行けば、この物質と同様の性質を持った存在を召喚できる。

が、それはつまり呪術による制御が不可能な存在を召喚する事を意味するのだが、端から制御する気が無いこの男には利点にしか見えなかった。

「失敗は出来ん。念入りに準備せねば……」

勘の鋭い者やその物質が何か知る者がいれば「おい馬鹿止める」と必死になって止める所だが、残念ながらこの男にはそんな稀有な知り合いもいなければ、良識だつて無かつた。

呪術師は基本皆イカれているのである、じゃなかつたらやってけない。

加えて、この時代には人権すら未だ影も形もなく、精々が宗教関係者とかが人道とかを必死に布教してゐるの位しかない。

そんな訳で、この物質を触媒とした召喚は総動員された陰陽師が宿儺の縄張りとされる山に到着する寸前に行われる事となるのであった。

後に自分の住居近くでそんな訳分からん化け物を召喚された宿儺は後にこう言つたと伝わる。

「ふざけるなよ愚物。虎を狩るのに龍を放す奴があるか。」

御尤もである。

……

結果だけを言えば、召喚は成功してしまった。

そして、当然の帰結として召喚されたこの星の外の存在は、まるで水晶で出来た巨大な円盤に蜘蛛や蟹の足が生えた様な奇妙な存在だった。

それは自らを召喚した陰陽師を瞬きも許さず殺害し、その軀を取り込んだ後に全方向に対して攻撃を開始した。

文字通りの全方位である。

後に侵食型領域と称される事となるその攻撃は、自身を中心とした全包围に対して領域を展開する。

飲み込まれた物は土地に空気、呪力に生物に呪霊や神魔の一切の例外なく、水晶に酷似したこの星に存在し得ない何かへと不可逆の変貌を遂げる。

変貌した空間は当然の如くその存在にとって有利な空間となり、生物は美しいオブリジェになるか配下となつて更なる犠牲者を増やそうと蠢く。

あの陰陽師の行動は、ただ悪戯に敵を増やしたただけであった。

加えて言えば、秒単位でこの侵食型領域はその版図を広げ、異星の生態系をこの

星に植え付けようとしていた。

「この、大馬鹿者共がッ!!アレが何か分かってて呼び出したのか!?アレがオレと貴様らを区別すると思うたか、この戯けめッ!!」

速攻で対陰陽師から地球外からの外来種に対して、全力で迎撃に移ったのは敵である筈の両面宿儺だった。

混乱して右往左往する陰陽師らに対して一喝した後、自らの領域を展開して外来種の領域を駆逐せんと応戦を開始した。

陰陽師らも刻一刻と広がり続ける外来種による侵略を見て優先順位を変更、態勢を立て直し応戦を開始した。

まさかの両面宿儺&陰陽師連合 VS 異星からの外来種である。

共通の敵は人を団結させるとはよく言ったものである。

そして、戦いは七日七晩続いた。

結果だけを言えば、陰陽師らと両面宿儺は召喚の媒体となっていた件の水晶体を折り出す事に成功、異星からの外来種はこの星で存在するための楔を失い、退去していった。

残ったのは共に満身創痍となった両面宿儺と陰陽師達であり、彼らもまたこれ以上の好機は無いとして互いに消耗し切った状態で最後の戦いへと臨んだ。

その結果は、両面宿儺の封印と20本の指という形で今日まで伝わっており、日本の呪術史における大きな歴史的事件であった事は間違いない。

なお、記録に残されている両面宿儺の最後の言葉は以下の通りである。

「この痴れ者共が！二度とアレを呼び出すな！次こそは現世が滅ぶわ！」

これを知った後世の者は大体「せやな」と思った。

だが、この話はこれで終わりではない。

異星の生態系へと変貌してしまった土地は、千年経った現在においても未だ回復していない。

永い年月によって土砂に埋もれ、多少の草木に覆い隠されてはいるが、あの不気味な水晶の渓谷は未だこの日本に存在し、20世紀現在では殺生石よろしく極めて危険な有毒ガスの発生地点としてあらゆる立ち入りを禁止している。

更に言えば、あの異星からの侵略者の召喚の触媒となった水晶体もまたあの戦いで運悪く破壊される事なく未だに現存し、呪術高等専門学校京都校の忌庫に厳重に

保管されていると言う。

.....

2007年 東京都立呪術高等専門学校東京校

「後にこの異界からの存在は『超級異界災害一号』と命名された。その後から現在まで変貌してしまった地域周辺ではこれに纏わる天与呪縛や術式を持った人間、一号や水晶体に酷似した呪霊が確認されており、これらは超級異界災害の残滓である事から『異界災害影響案件』として確認され次第即座に抹消か保護した上での監視が義務付けられている。」

「夜蛾セーン、オレそれ実家で聞き飽きたー。」

「悟、私と硝子は初耳なんだから静かに聞いてようねー。」

そして現在、高専東京校切つての害悪問題児であるクスコンビとその同期の女子一名による所謂さしす組は件の異星からの侵略者に関する授業を受けていた。

とは言え、宇宙からやってきた事は彼らも知らないため、異界からの存在とされてはいたが。

「この超級異界災害一号の持つ侵食型領域は一度展開を許せばほぼ全ての呪力や術式を無効化し、物理的な干渉に対しても極めて強固だ。そのため千年経った今でも解除も破壊も出来ずにそのままとなっている。近年ではこの一号の出自に関して『異世界ではなく宇宙から飛来したのではないか』と言う仮説もあるが…当時を記した絵巻物として『水晶事変絵巻』に残されている一号の外観を見てのものなので信憑性は無いぞ。」

配布されたプリントに記されている絵巻物の一部、そこには件の侵略者の姿が掲載されている。

成程、巨大な水晶の円盤に蜘蛛か蟹の様な足が生えている姿はUFOに似ていないでもない。

「そして、何故改めてこの様な授業をしているかと言うとだな…。」

「最近増えてるんでしょ、これ関連の奴が。」

退屈そうに授業を受けていた白髪にサングラス、そして類稀なる美貌を持った少

年。

五条悟がここに来て初めて心底愉快そうに笑みを浮かべた。

「そうだ。加えて、よりもよって件の一号を召喚するための呪具が京都校より盗難された。」

「「は???」」

が、それも直ぐに消えた。

単なる厄介事ではなく、文字通り超級の厄介事の気配を察知したからだ。

「超級災害誘因器物『異界水晶』の搜索と発見、後に確保又は破壊が次のお前達の任務となる。」

安心しろ、合同だから他にも大勢参加するぞ。

優秀だが揃いも揃ってアレな生徒三人に夜蛾は真剣な眼差しでそう告げた。

.....

以下は本文で書けなかった設定

## ○超級異界災害一号

皆さんご存知の型月産逃れ得ぬ絶望ことORT……の影法師とも言うべき存在。サーヴァントよろしくあくまで本体の影であり、この世界の地球へやって来るにどうしても地球側から呼び掛け、楔となるもの（異界水晶）が必要となる。

本体よりは弱いものの、あくまで規模が小さいだけで性質は同じ。

まだまだ人類が挑むには早過ぎる相手。

この世界の神秘法則である呪術はあくまで人間の感情が土台であり、異星の存在であり思考回路も何もかも違ってしているORTには効きが悪い。

更に劣化してるとは言えORTはORT、その外殻と異界法則を貫く事は人類だけでは出来ない。

なので、両面宿儺が体表のみに極小の領域を展開して耐えつつぶん殴って粘り勝ちした。

後一日遅かったら宿儺でも無理だったが、神代に近いより神秘の強い陰陽師連合による多種多様な支援のお陰で勝ちを挽ぎ取られた。

殺し切るにはクトゥルー神話的異界法則で概念マウント合戦するか、光の戦士を呼びましよう。

現在まで伝わっている姿は円盤形態であり、捕食能力もある事から今後進化する可能性も…？

○超級災害誘因器物『異界水晶』

要は型月时空のO R T本体の体組織の一部。

偶々偶然よく分からないまま例のメロンパンが手に入れ、テキトーな人材に使われた事で千年にも及ぶ災害を齎した激ヤバな代物。

もし悠二君が飲み込んだりしたら、間違いなく宿儺の指よりヤベー事になる。

誰かウルトラマンを呼んでくれ！或いはRX！

## 呪術廻戦SS ある宿儺成り代わり主の飛騨開拓或いはその後の後世への影響

### 両面宿儺

この名を聞いて返って来る反応は大別すると二つある。

一つは日本史上の偉人に対する反応であり、何となく凄いか偉そうとか軽いものから、嘗て邪馬台国と並ぶかそれ以上の文明を築いた飛騨地方の歴代の王の尊称として歴史・民俗学者から大きく関心を寄せられており、21世紀現在も未だ地元民から深く信仰の対象となっている。

対して、表に出る事のない呪術界の人間達からすれば、日本の呪術最盛期たる平安時代以前から最強にして無比の呪いの王であり、彼の残した20本の特級呪物「両面宿儺の指」は未だ多くの呪いを撒き散らしており、極一部の例外を除いて恐怖の対象となっている。

しかし、この誰もが実は両面宿儺は異世界だか平行世界だかから来た転生者であ

る事を知る者はいない。

これは呪いの王と言われた両面宿儺に成り代わり転生した男のお話である。

.....

その赤子が生まれたのは大体一世紀の初期の頃、飛驒にある小さな集落だった。ほぎゃあ、ほぎゃあと元気な産声に対し、しかし彼を取り上げた産婆は驚いていた。

「おお、何という…！」

「婆様、どうしたのだ？子供は、妻はどうしたのか？」

「これ、これを見よ…。」

「ぬお!？」

その日、生まれて来た赤子は三対の腕を持ち、踵の代わりに前後につま先、四つの眼を持った異形だった。

「こ、これは一体…。」

「直ぐに占いをする。初の子だが、結果が悪ければ…。」

「いや、いや、仕方ない。こうも異形ではな…。」

異形の子は産まれて直ぐ殺されても当然の時代であったが、父親も長老たる老婆も初めての子とあって、その子の運命を天に預ける事で何とか助命しようとしていた。

「…よし、結果が出たぞ。この子は鬼神の化身。長じれば国と民草を守る王とも成るし、きちんと学べばとても賢く慈悲深くなる。」

「おお…！」

ほっと父と周囲の者達は胸を撫で下ろした。

彼らとして必要ならば躊躇わないが、決して子殺しは気持ちの良いものではないからだ。

「では、この鬼神の子を何と名付けければ良いだろうか？」

「そうさな…：では宿儺、と名付けようか。」

「宿儺！お前の名は宿儺だ！」

儺とは本来おにやらい、つまり鬼（疫病神）を追いはらう儀式を指す。

これを宿すという事は、つまり災いを打ち払う力を宿すと言う事。

後に飛驒の王となり、永きに渡って国と民草を守る彼を現すには正に相応しい名だった。

こうして、人の世の終わりまで語り継がれる飛驒の王にして呪いの王、両面宿儺はこの世に生を受けた。

そして、宿儺は当然が如くそりゃースクスクと育った。

齡7の頃には素手で兎や鹿等の草食動物のみならず、大蛇に猪、狼や羆まで素手で狩り、周辺の生態系のトップに君臨した。

また、人外に対しても宿儺の無敵ぶりは炸裂した。

村の周囲や中に入り込む魍魎魍魎、周辺の他の集落から放たれた呪詛の類のみならず、崇りを成そうとする国津神であっても自身の住まう村と住人に手を出すのならばボコボコにした。

ただ、国津神の時ばかりは何故崇るのかと理由を問い質してからだだし、何だかんだで殺さずに追い払うで済ませたが。

そんなこんなで齡10の時、宿儺は己の中の術式に目覚めた。

同時に、日照りで作物や獲物が取れずに弱っていた近隣一帯に雨を降らし、これを救済した。

「己に従うならば、今後もお前達の村々へ水を与えよう。必要ならば葉や食べ物も。侵略者や災いが来れば己が守ろう。」

既に近隣一帯にその武名を轟かせていた宿儺に逆らう者は殆どいなかった。

そうした一部の者達も、次第に宿儺の持つ人の身には余りに過ぎたる力を恐れ、或いはその恩恵に浴する事で膝を折っていった。

宿儺の主導の下、多くの事業が行われた。

五穀や豆類等の多くの作物の栽培が始まり、貯水と食用魚の養殖のための溜池作り、洪水を防ぐための堤防工事、野生下にいた猪や狼の家畜化や粗末だった住居の体系だった建築方法、今まで長老達が担ってきた多くの知識を石板に記して後の者へと伝える編纂事業等。

また、自身の行動も石板を用いて大凡七日毎に終生記録を取り、後世のために残し続けた。

更には四則演算や簡単な文字の読み書きと言う初等教育すら行っていた。

当時の日本の文明レベルを考えればどう考えても蛮族の親玉とかまつろわぬ民の王とか言えない様な立派な公共事業ばかりであった。

それもその筈、宿儺の中身は皆大好き雑学豊富な転生者であった。

彼は己の知識の限りと自らの持つ術式で可能な限りのチートを尽くし、自らを王（おみ）と慕う民草と彼らの住まう国をより豊かで安心して暮らせる場所にすべく奮闘した。

しかし、彼が生涯常に頭を悩ませ続けた問題があった。

そう、外交問題である。

宿儺が王となって割と直ぐの事、邪馬台国の卑弥呼が周辺の小国を併合して倭が生まれた。

とは言え余りに遠いので時折交易にやって来る旅人を通してでしか宿儺は聞いた事が無かったが、宿儺は心配になった。

（自分がいなくなった後、軍事は兎も角外交は大丈夫だろうか？）

幸いにも、軍事面に関しては彼は当てがありました。

術の素養がある者はそちらを鍛え、そうでない者も自身の術式で才能を開花させ

たり呪力を分けてやったり、自身の呪力を込めた武器や道具を渡してやれば大抵の妖や兵士になんて負けませんし、他にも地形を活かした戦術・戦略も研究中だったからです。

しかし、外交はセンスにノウハウに情報、そして国力が無ければどうにもなりません。

そして、それら全てがあっても時には盛大に失敗してしまう繊細極まりないものです。

民の安全と快適な暮らしを目指して努力している宿儺は、そこで一計を案じました。

「最近発展していると言う倭を始め、周辺の国々と積極的に交易を行う。」

国と言ってもこの時代の国とは大体ローマの都市国家みたいなもので、人口も1000人を超える規模は稀でした。

しかし、宿儺に服属した飛騨の国々は既に農業指導並びに畜産・養殖の開始で食料事情に革命が起きた関係で人口は常に右肩上がりでした。

まーこの時代、ただだけ頑張った所で多産多死になるのが当然なので、まだまだ

人生五十年には届いていないのが現状でした。

それはさておき、交易をする事で各種情勢の把握や技術の取り入れ、各地の産物の入手の他、他国との交易を通じて交渉事のノウハウを蓄積しようと言うのが宿讎の目的でした。

が、しかし！

「何だ、飛騨よりも遅れてるじゃん。」

「やっぱ飛騨が一番やなって。」

「違う、そうじゃない。」

勿論意識だが、どいつもこいつもそんな感じで方々で自慢して帰ってきては移民とかを連れて来るので、宿讎は頭が痛くなりました。

でもその中には専門の職人なんかもいたので、怒るに怒れません。

それでも宿讎の狙いに気付いた見込みある者達は交易を通してゆっくりとですが交渉事のノウハウを蓄積していくのでした。

やはり人を育てると言う事は一朝一夕には出来ないのだなあ、と宿讎は納得しました。

「王（おみ）よ、御子が生まれましたよ。」

「うむ、母子共に健康か？」

宿儺は王、となれば子供を残さねばなりません。

当然妻帯していますが、子作りをするにあたって宿儺が先ず行ったのは入浴の指導でした。

当時は入浴の習慣は未だなく、温泉とかも未発見だったので、宿儺は手っ取り早く適当な川の近くの土地を採掘して温泉を当てると、川から水を引いた貯水池を経由して川に源泉が流れ込まない様にした上で温泉を適温に薄めて温泉を作っていました。

勿論、湯船は岩を積んだり整形して作りました。

未だ何となく感覚でやってる呪術のお陰でした。

呪術のちからってすげーなと宿儺は思いました。

身体を清潔に保ち、温めるには温泉は非常に有効であり、民草も皆喜びました。

でも流石に毎日入るのは大変なので、殆どの者達は三日置き位に入ります。

それでも大きな進歩だと宿儺は天に拳を突き上げて一人静かに喜びました。

で、身体の綺麗になった奥さん達とイチャコラして子供を沢山作りました。

彼はとても力のある周辺の国々のトップである王でしたので、比例して奥さんも沢山いました。

その数は最終的に合計27人にも上ったそうですが、その多くは周辺の国々の王から贈られた娘や妹とかでした。

その全員の境遇を汲み、宿儺は彼なりに大切に大切に慈しみました。

ちよつと慈しみ過ぎてアへ顔ったりおほ声ったりメンヘラったり刺されたりもしましたが、罨のベアパンチすら猫パンチ未満に感じる宿儺には些細な事でした。

しかし、その大事で可愛い奥さん達とは皆死別してしまいました。

それも当然の理由がありました。

なんと、宿儺は殆ど歳を取らなかつたのです。

近隣から呼び寄せた術者や長老衆に占わせた結果、宿儺は後500年は生きるだろうと誰もが断言したのです。

奥さんや子供達ばかり先に歳を取り、或いは病氣や怪我で死んでいく。

その事実には宿儺は消沈しますが、彼は国に必要な王であるので、次々に妻となる

女性を贈られ、一人しよんぼりする事も出来ませんし、彼も何だかんだその忙しきで救われている所もありました。

次第にその超常の力と長命から、彼は飛騨の王ではなく現人神として人々の尊敬と信仰を一身に集めていきました。

そうして得た人望と人手によって、宿儺はこの時代からしては極めて先進的な改革を次々と行っていきました。

まだ平安でもないのに既に戦国時代レベルの冶金・土木・建築・医療技術を持ち、更にはファンタジー系技術を独自に体系化して教育すら行っており、飛騨の発展ぶりは周辺国を超えて遠くまで広がっていきました。

そんな宿儺と愉快な飛騨の国でしたが、邪馬台国が衰退して天皇が起つようになった頃になると当然と言うべきか、飛騨の豊かさを求めて他国から軍事侵攻される事が増えてきました。

「どげんせんといかん。」

小競り合いや村同士の争いは散々調停した宿儺ですが、国家同士の本格的な武力衝突となると経験はありませんでした。

有力な邪馬台国は兎に角遠かったし、中華は言わずもがなで、今まで戦争らしい戦争は無かったです。

取り敢えず指揮官らしき者達は毎回捕らえてとに拷問で情報を絞れるだけ絞って記録も付けてからぶち殺します。

だってこいつら「てめーらの国を滅ぼして民は殺すか奴隷にしてやるぜウハハハ！」（意識）とか言って襲い掛かってくるんだもん、そりゃ殺すしかないでしょ？  
（漆黒の意思）

兵士？ボコった後に生きてたら「従うか死ぬか」と選ばせます。

人手もまた資源、特に兵士になるよう訓練され、装備を整えた者は貴重ですし、ただ殺すよりもこの方が彼の好みでした。

まあ従う事を選んだ連中のほぼ全員がそのまま快適に過ぎる飛驒に帰化しちゃうからこそ取れる選択でした。

どうしても無理だつて者は別の場所に連れて行ってお偉いさんへのメッセンジャーになるか罫を仕掛けて帰してあげます。

メッセージは「戦争じゃなく交易しようよー。条件はそっちが正式に謝罪して賠

償すれば対等にしたげる（意識）。」であり、罨は単に遅効式の呪術でした。

簡単に言えば自然界に存在する各種菌類を活性化させる呪いです。

菌類が活性化する⇨腐敗や発酵が進みやすくなります。

更に対象には自然界の中にある常在菌全て、つまり炭疽菌も含まれます。

炭疽菌と言えばバイオテロや生物兵器にも転用される事もあるヤベーのに大気中にふつつーに存在する細菌です。

他にもアオカビとか結核菌とかも含まれます。

そんなもん含めて菌類全てが活性化するのだから有機物、つまり家屋敷の材料となる木材や衣服に食料は嘗てない程に腐食していき、人体すらも蝕まれてしまいません。

結果、飢饉に疫病が頻発する事態となりました。

で、これに対処するための財源とか目を逸らさせるために余計に飛騨への侵攻が活発化しました。

巡り巡っての本末転倒な事態に、宿儺は「やっぱ悪い事はアカンな」と思いました。

そんな感じの騒動が邪馬台国が滅んでから数年に一度の頻度で続き続けたのだから、宿儺としてはもう季節の恒例行事的な感覚でした。

でも、そんな雑魚相手でも兵士達の訓練相手程度は務まるので、宿儺は特に問題視していませんでした。

しかし、ここ百年程は兵士で無理ならばと多数の陰陽師が送り込まれて困っていませんでした。

飛騨基準の普通の兵士並の彼らは変わった術を使ってくるので、こちらの兵士にも損害が出る事がありました。

加えて下手に国に入れると呪いを撒き散らすので、その場合は惜しくもあったが宿儺はサクッと殺して終わらせるようになりました。

そんな殺伐とした季節のイベントにイラッ☆としていた頃、宿儺の27人目の妻に大望の後継者となる子供が生まれました。

何とその子供は腕が四本、目が四つという父親にそっくりな男の子だったので。

これには宿儺は大喜びしました。

ああ、遂に自分の後継者が生まれた！と喝采を上げます。

既に政治や軍事の殆どは育てた人材達に任せ、自身は一部の事業立ち上げ（大体思い付き）や軍事・祭祀関連しか口を出さなくなつて久しかったのですが、名目上はトップのままでした。

漸く残つた仕事もちゃんと引継ぎできる、と宿儺は喜びました。

男の子には幼名として宿と名付けられ、宿儺の下で大事に育てられました。

宿はすくすくと育ち、多くの知識と技術をスポンジの様にぐんぐん吸って学んでいきました。

若干趣味嗜好が好戦的で血生臭かったりしましたが、悪い所は父にがつつりしつかり怒られたので、最終的にはちよつと喧嘩っ早いけど極めて優秀な子に育ちました。

「宿坊よ。何れお前が後を継ぐのだから、早い内に妻を選んでおけよ。己はそれで大分父や長老らを心配させてしまったからな。」

「父よ、オレの妻はもう決まっている。」

「ああ、梅か。あの子は良いな。」

「まだ言っていない……。」

「言わずとも通じる事もある。あの娘は芯も強く、顔も心も美しい。きっとお前と幸せになってくれるだろう。」

「うむ…。」

宿儺親子がそんなほのぼのと暮らしてる一方、この頃の都は二度目の遷都で平安京となり、多くの文化が花開いていました。

が、同時に律令制と貴族政治の歪みも噴出していました。

貴族らは朝廷で派閥・利権争いに精を出し、民草は飢えに疫病、天災に重税と苦しんでしました。

そんな状態だから、当然の如く都には呪いが溢れていました。

呪いが湧き、呪いが飛ばされ、呪いで防がれ、呪いで祓う。

世は正に大呪術時代って感じでした。

そんな感じでしたから、一部の賢い人達もどげんせんといかんと悩んでいました。

悩んで悩んで「じゃあ持つてる所から奪ってくれば良いじゃん！」という最悪の結論に行き着きました。

宿儺が聞いてたらきつと「糞が」と吐き捨てている事でしょう。

朝廷は天災続きなのに豊か極まって一部では都以上と謳われる飛騨に目を付けました。

以前から豪族らが遠征に失敗している事から慎重論も出ましたが、利権目当てに陰陽寮の呪術師らも大勢参加する事から強硬案が採択されてしまいました。

完全武装の兵士5000と呪術師500人、彼らのための補給物資を運ぶ人足1000人が編成され、都を出発しました。

呪術師達の中にはあの有名な安倍晴明こそいませんでしたが、後の御三家の御先祖となる相伝持ちが参加しており、かなりの戦力でした。

芦屋道満？彼は一応法師ですし、晴明から忠告で不参加になりました。

この動きは速攻で飛騨に伝わり、直ぐに宿儺の耳に入りました。

「よし塵殺塵殺う☆」

「父よ、落ち着け。」

宿儺は速攻で出陣を決めました。

何せ今までのちょっかいレベルではなく、正式にトップが許可したガチの軍事侵攻ですからそれをされた側としては殺意の桁が違います。

息子が止めるのも聞かず、宿儺はフル装備を整えた上で「自分が戻らなかつたら宿坊が二代目宿儺を名乗り、王に就任せよ」と言い残して出陣したのだった。

……………

「あーこりゃ無理だな。」

完全武装の兵士5000と呪術師500人、彼らのための補給物資を運ぶ人足1000人。

今まではどんなに多くとも1000名程だった飛騨への嘗てない大規模軍事侵攻。兵達は既に勝ち戦気分であり、それによって人足も浮足立っていたが、それも仕方ない。

彼らの知識や常識では、これで負ける方が難しいからだ。

しかし、呪術師達は違う。

陰陽寮から派遣された彼らは、近づくに連れて明らかになる飛騨を守る超広域かつ強力な結界の気配を肌で感じ、既に幾人も心折れて離脱していた。

それも当然の事だと、陰陽頭の指示で嫌々出陣した五条何某は思った。

現代人の価値観で言えば、完全防備で準備万端の要塞に無策で平押ししようとしているのと同義なのだから。

「五条の、どう見る？」

「無理だな。今からでも帰るのがお勧めだ。」

「無理だと知っているだろう…。」

「だよなあ…。」

げんなりと、陰陽寮で同期に当たる禅院何某と共に溜息を吐く。

魍魅魍魎を視認できぬ只人の殿上人らのツケを払うため、陰陽頭に言われてもう一人の同期の加茂と共に参加させられたが、もう負け戦の気配が濃厚でげんなりとしていた。

「取り敢えず、軍の指揮官の位置を把握しておいてくれ。」

「もしもの時に生かして帰れるように、か？」

「必要だろうか？」

敗軍の将という責任者には、彼らはなるつもりは無かった。

この行動は翌日、ギリギリの所で彼らを救う事となった。

「そろそろ開けた平野に出るそうだ。」

「ん？この辺、農地は無かったよな？」

「ああ、以前からこの辺は飛騨への進軍の道に使われて、ここらで迎撃を受けるそう  
うだ。」

「は？敵軍は？」

「それが見当たらん。偵察を出しているが、全く見つからん様だ。」

「…禪院のは何処だ？」

「アイツなら先程総大将の所に向かったが…？」

そこまで聞いて、五条何某は悟った。

見つからない敵、何もない開けた平野、敵国の尋常ならざる呪術の技量。

「そっか、今日か。」

「…まさか、そういう事か？」

「陰陽師全員に通達。急いで行軍の最後列に移れ。」

「言い訳は？」

「普段動いてねーから疲労が溜まってるだけでも言っとけ。」

どーせ直ぐに何も言えなくなる。

その一時間後、敵軍の姿が見えない事から平野を野営地として選んだ軍勢は進軍を停止し、野営の準備を始めた。

それを知った陰陽師らは即座に最低限の休息を取った後、何時でも全方位に逃げ切れるように態勢を整え、最も強い五条何某が禅院何某の代わりに総大将の近くへと付いた。

本格的に野営が始まって約一時間、軍勢の警戒は薄れ、炊事の煙も上がり始めて完全に気が抜けていた。

好機、である。

……

この朝廷による飛騨への大規模軍事侵攻は後世において平安絵巻物の一つとして伝わっている。

その名を「飛驒縁起絵巻 武振熊の巻」と言い、平安京から侵攻してきた難波根子武振熊の軍勢は行軍の疲れを癒すために開けた土地に野営を開始した。

疲れと敵軍がない事から来る安心で油断し切っていた軍勢は隙だらけだった。そこに両面宿儺が突如現れたのだ。

見た事無い程立派な鎧具足を纏い、6本ある腕の上側の4本で二張りの弓矢を、右手に鉾を、左手に盾、腰に太刀を佩いた姿はとても勇ましく雄々しい。

そして両面宿儺は「我が飛驒に押し入らんとする賊共へ罰を下す！」と叫ぶや否や「太陽の様な巨大な火の玉」を野営地へと投げ入れたのだ。

一撃でバラバラになった兵士、両腕を失って泣き叫ぶ人足、零れ落ちた臓物や目玉を拾う者。

しかし、彼らはこの地獄絵図でまだ幸運な部類だった。

最も苦しんだ者、それは中途半端に生きてまま、しかし猛烈な炎に焼かれた者達だった。

彼らは生きてまま焼かれて絶叫し、走り回り、しかし水場の無いこの場所では火を消す事も出来ず、火傷の激痛と呼吸できぬまま苦しみ抜いて死んでいく。

正しく地獄絵図となった。

後世の人間ならば、まるで原爆投下直後の広島や長崎の様な惨状だと思ったかも知れない。

総大将であった難波根子武振熊は辛うじて逃げ延びたものの、敗戦の責を問われて公職を追われた。

以来、朝廷は飛驒に対して不可侵を決め、鬼神両面宿儺の怒りを免れるために供物を送るようになったと伝えられている。

しかし、陰陽師らはこの他に「武振熊の巻 裏」を密かに執筆、当時の正確な記録を後世へと密かに残した。

それは御三家と言われる五条・禪院・加茂の当時の相伝術式を持った者達が束になってもなお圧倒され、這う這うの体で逃げ延びた事を伝えるものだった。

両面宿儺は極めて強力な呪具と身体能力、そして非常に多様な術式を有し、これらでもって多数の兵士と陰陽師らを塵殺し、その力の底を推し測る事は出来なかった。

これを知った呪術師らは千年後の時代になってなお両面宿儺を恐れ、未だその復

活に心底怯えている。

千年前から続くこの恐怖を証明する様な言葉が、この絵巻の最後は残されている。曰く「決して宿儺と事を構えるな。次は族滅される。」

.....

「そろそろ潮時か……」

朝廷の本格的な軍事侵攻と陰陽師共を壊滅させてから既に10年。

宿儺は最後の手を打つべき時が来た事を悟った。

今まで大和朝廷が覇権を握ると言う時代の流れに抗い続け、既に500年を超えた。

このままでは、自分の知る歴史の流れが変な方向に進みかねない。

それはつまり、歴史の修正力的なものにこの愛おしい飛騨が排除される可能性を意味していた。

それを裏付ける様に10年前の軍事侵攻を撃退してからと言うもの、身体が若い

頃のように動かなくなってきた。

恐らく、寿命が近いという事なのだろう。

ならば、自分が生きている内に、出来る事をしようと思った。

「父よ、如何したか。」

「坊、いや息子よ。明日よりお前が王を名乗れ。」

「いきなりどうした？」

「己の天命が間も無く来る。その準備をしたい。」

前触れない譲位に坊と言われた宿儺の息子、否、二代目両面宿儺は動揺した。

血の気は未だ多いものの、妻子と国を愛する情深い男になった跡取り息子の姿に

宿儺は満足そうに微笑んだ。

「：どうするつもりだ？」

「我が身全てを飛騨を守るための呪具とする。」

庵の中で一人、漆茶と木の皮、木の実のみを食べて過ごし、生きながら木乃伊となる。

そして死後、6本の腕から指を切り取り、飛騨の国土を囲む様に上の腕二対か

ら取った指20本で囲み、更に飛驒の首都を守る様に下の腕一对から取った指10本で囲む。

残った他の部位は飛驒の地の中心、その地下深くへと立った状態で鬼門に向けて埋葬する。

「これにより、飛驒の地の守護はこの世の終わりまで続く事となろう。」

「父よ、それではお前が死に切れぬぞ？」

立ったまま鬼門に向けて埋葬する。

それは後世において鬼殺しの大将こと坂上田村麻呂と同じであり、国のために死後の安寧すら捨てる事を意味していた。

「父よ、お前はもう立派に働き過ぎた。もう十分だ。」

「息子よ。」

「国ならオレが守る。オレが死んでもオレと裏梅の子が守る。」

「息子よ。」

「頼むから、もう休んでくれ…。」

「すまぬ…。」

珍しく、本当に珍しく落涙する息子を宿儺はすまなそうに抱き締めた。

「己もまた、お前達が愛おしい。そして心配なのだ。この古い耄れに、まだ出来る事をさせてくれ。」

「…本当に、お前は頑固者な父親だよ…。」

この日の会話から5年後、初代両面宿儺は二代目が最初の仕事として取り掛かった墳墓へと埋葬された。

この墳墓は六角墳に分類され、故人の生前のお気に入り的小物や妻子や家臣との思いつきの品々が中央に埋葬された。

そして、最も重要な木乃伊化した初代両面宿儺の遺体はこの墳墓の直下1町(約100m)へと安置された。

しかし、この墳墓の存在は飛驒において最重要国家機密として永らく扱われ、その所在は現代に至るまで外部へと知られていない。

また、切り分けられた30本の指は飛驒の国の外郭と内郭を囲む形で建てられた廟に安置され、国家鎮護の二重の守りとなった。

以降、この飛驒の地では如何なる時代でも飢饉や天災、疫病の類が発生しなくな

り、豊かな地として発展していく事となる。

戦国時代においては多くの血が流れた時もあったが、それでもその発展に陰りが差す事は終ぞ無かったと言う。

「へえ：これがあの両面宿儺の指か。  
額に縫い目のある男が嗤っていた。」

最早どれ位の時が経ったのか、見当もつかない。

宿讎の意識があり、術式が異常を知らせないと言う事は飛驒の地と民を守る結果は正常に作動しているという事。

800年程前に外殻の攻性防御を担う指20本が盗難された事は痛かったが、その分は絶対防衛線である残り10本の指と本体の足の指20本で補える。





何より他人の作ってくれたあったかい現代のご飯とかお酒とかお菓子とか食べた  
い。

頑張って飛騨を発展させて文化・食料事情を成長させ続けたけどやっぱり物足り  
なくて、元現代日本人としては美味しいご飯が食べたかった…！

そもそもヒャッハー！と喜ぶのも無理は無かった。

「おい、人の身体で何してんだよ。返せ。」

「あゝ？」

まあ、そんな気分は一瞬で吹き飛ばされてしまったのだが。

これは（喜びで）荒ぶる鬼神両面宿儺とその器としてデザインされた少年のハ  
チャメチャ珍道中である。



## ある宿儺成り代わり主の飛驒開拓或いはその後の後世への影響その2

「おのれ両面宿儺…必ずや祓ってくれる…！」

「五条先生、五月蠅いですよ。」

「だってさゝ折角買った喜久福目の前で取られるとか悔しいじゃん！」

場所は仙台駅から発車した東京行きの新幹線。

そこにはつい数時間前に仙台市内で任務をしていた伏黒恵とその教師である五条悟、そして特級呪物「両面宿儺の指」を飲み込んだ拳句に鬼神両面宿儺を受肉させてしまった虎杖悠二（気絶中）が乗っていた。

試しに10秒程身体を動かす権利を譲らせてみたら、五条と伏黒の方には一顧だにせず買ってきた喜久福の袋をあっさり奪い取り、そのまま閉じこもってしまった。

虎杖曰く、「スゲー大声で美味しい美味しい言ってる五月蠅い」らしかった。

「で、虎杖はどうなるんです？」

「上層部は間違ひなく規定通りの秘匿死刑。飛驒の連中もいつも通り指返せて五月蠅くなるだろうねえ……」

上層部、即ち二つの高専他を拠点に日本の呪術的国防を担う呪術総監部は随分昔から腐敗が進んでおり、改革派の五条悟とは犬猿どころではない仲だった（五条にも大分原因があるが……）。

一方、飛驒の連中こと飛驒呪術協会は日本の旧行政区分たる飛驒国を中心に飛驒山脈全域を管轄とする高専とは異なる日本の呪術組織の一つである。

他にも北海道のアイヌ呪術連合等もいるが、こちらは有力な術者が少ないし、本件には関わらないので流しておく。

高専側と呪術協会の確執、その最大の原因となっているのが平安時代から存在し、飛驒国の守りのために置かれていた20本の特級呪物「宿儺の指」の盗難事件であった。

事は今から800年程前、折しも元による対外戦争、即ち元寇の兆しによって国が大きく乱れ始めた頃の事だった。

朝廷と飛驒、両者の国境地帯をぐるりと囲むように配置された宿儺の指が安置さ

れた20の廟全てがほぼ同時に襲撃され、そこに務めていた神官や巫女に術者は皆殺し、祀られていた指は全て盗まれたという大事件であった。

これに対し飛騨側は当然激怒し、過去の教訓並びにその対立から朝廷側を責め、指の返還を求めた。

が、朝廷側はこれを知らぬ存ぜぬと言い、指を確保してからも返還する事なく忌庫へとしまい続けた。

それから現代に至るまで、飛騨側は毎年欠かさず指の返還を求め、朝廷側（現在では高専上層部や呪術総監部）はこれを断り続けている。

そりゃー対立も当たり前である。

「飛騨呪術協会はその両面宿儺を祖神として千年以上昔から現代まで祀り続けているまつろわぬ民の末裔だ。彼らの宿儺への信仰心は強い。加えて、神代から呪術関連技術や知識の蓄積を続けてきた。」

「敵に回す訳にはいかない、という事ですか？」

「連中と戦争になっちゃったら、僕以外皆死ぬ。そういう連中さ。」

事実であった。

無下限術式と六眼を併せ持つ数百年ぶりの麒麟児たる五条悟。

現在公式に確認されている中では間違いなく現代最強の呪術師である彼を除き、他全ての人員が死に絶える。

勿論、本気の五条悟を敵にすれば壊滅的な被害は免れないだろうが、飛騨呪術協会との全面戦争はそういう事態に直結する。

「元々向こうは権力とか興味薄いのにくっち側が昔っからちよっかい掛けては返り討ちにあつてたんだ。なのに逆恨みで拗れに拗れて今は冷戦状態だよ？勘弁してほしいよ全く。」

こんな事言ってる五条悟の存在は飛騨側としても警戒していた。

「呪術と容姿に全振りしてるドクズ」「観賞用イケメン兼最終兵器」「何アイツ攻撃が効かねーんですけど」「頼むから天は人格も与えてNo.1」とか割と好き勝手言いつつもバリバリ警戒してるから全面戦争に突入していかない最大の要因だったりする。

このせいもあって五条悟と敵対的な保守派は五条悟を排除する事も出来ず、日々強化されていく呪詛師や呪霊の対応に掛かり切りで胃を痛めていたりする。

「彼らの協力を得る事は出来ないんですか？」

「難しいね。向こうとしちゃ盗まれたご本尊の一部が戻ってくるなら万々歳だけど、うちの腐った蜜柑が過剰反応しそうだし。」

「…指、取り出せませんか？」

「こっち側では先ず無理。向こう側に照会してみるけど、例えその方法があったとしても上の連中が頷くかと言うとね…。」

二人の悩みは解決の糸口を見る事なく、やがて新幹線は東京へと到着するのだった。

………

「おい小僧、起きろ。」

「んむ…何だよ五月蠅いな…。」

「起きろ。起きて蔵書…図書室を確認しろ。」

「うええ…明日でもいいだろ…。」

布団に入って間もなくという頃。

夜蛾学長の面談や入学・引越し手続きで疲れていた虎杖はそれでも結局ぶつかさ言いながら上着を一枚羽織ると校内の案内板を思い出しながら、とっくに明かりの消えた学校内を図書室へと向かった。

「おや？ 悠仁、こんな時間にどうしたの？」

「あ、せんせー。」

そこに、夜闇の中からすると五条悟が現れた。

余りに早いタイミングに、恐らくは六眼によって監視していただろう事が伺える。が、寝ぼけ眼の悠仁にそれが分かる筈もなく、彼はあくび混じりで五条に挨拶した。

「宿儻がさー、図書室に行けって五月蠅いの。あんまりにも五月蠅いから今起きてきた所……」

「図書室？ 禁書庫とかなら兎も角、普通の図書室？」

「そー。なんか自分がどんな風に伝承されてるか見たいんだってさー。後、自分が死んでからの歴史。」

「そりゃまた……。」

確かに過去に生き、最近まで外界を碌に観測できない状態だっただろう元人間の宿儺からすればそれは重大な事だったろう。

「もーそーいう事は明日にしなよ。お休みっ。」

「ふえ？」

五条は先の宿儺が受肉した際と同様に、悠仁の額にその長い指を突きつけると体内の呪力を攪乱し、気絶させた。

「で？どんな意図があった訳？」

「確認以上の意図はない。」

力の抜けた悠仁の身体を俵の様に担ぎ上げながら五条が声をかけると、それに応える様に悠仁の頬に犬歯がやたら鋭い口が開いた。

「知識、思考速度、発想の柔軟さ。それらもまた力の一つだからな。」

「悠仁の中の知識じゃ足りない？」

「お世辞にも頭が良いとは言えんからなコイツ。」

「あははは！宿儺に馬鹿って言われてるじゃんW」

その他にも宿儺と五条は互いに言わないが、悠仁への監視の有無の確認もまた理由の一つであった。

少なくとも、現代において最強の呪術師を名乗る五条悟は何の工夫もなく裏をかける程に甘くはないらしい、と宿儺は判断した。

「ま、良いさ。調べ物はまた後日、明るい時間にね。」

「ふん、供物を忘れるなよ。」

「おい、人の喜久福取っておいてまだ足りないのかよ。」

「馬鹿め。王への供物があの程度で足りると思ったか？」

こんな感じで際限なく煽り合いながら、二人と一霊は夜の学校を男子寮に向けて進むのだった。

.....

日本国某所

高専より遅れて数時間、全ての情報を精査し終えて丸一日後。

飛騨呪術協会の最高幹部達はその情報に驚きを隠せなかった。

鬼神両面宿讎の受肉並び器となった少年があの子の五条悟に保護されたという事に。

『間違いないのかね？』

『呪術総監部並びに高専も大騒ぎだ。先ず間違いない。』

『保守派も改革派も頭が痛いだろうな。』

『だが、我らにとっては僥倖。』

『これぞ正に天の采配…と言っては不敬になるか。』

『あの男に投資して正解だった、という訳か。』

どこぞのロボ映画の悪役よろしく番号の振られた石板が会話する様は「悪役過ぎ」て滑稽であった。

滑稽であったが、秘匿性は抜群なので皆黙って使っていたりする。

『とは言え、見極めは大事だ。』

『然り。事は極東のみならず世界の趨勢に大きく作用する。』

『失敗は許されん。』

『分かっているね、裏梅君？』

そんな中、この場で唯一生身で参加していた者がいた。

「はい。全て承知しております。」

中性的で男とも女ともつかぬ容姿に若い見た目ながら総白髪の人物が今まで保っていた沈黙を破り、静かに答えた。

『……所で、その恰好はどうにかならなかつたのかね?』

「申し訳ありません。何分調理中でしたので。」

が、裏梅のその恰好は簡素なジーンズにYシャツ、その上に割烹着を纏い片手にお玉を装備している姿は明らかにこの場にそぐわぬ程に所帯染みていた。

『まあまあ、急な会談だったのだから仕方ありますまい。』

『うむ。裏梅には負担を掛けているからな、この位で目くじらを立てる事もあるまい。』

「ちなみに筑前煮を作っている所でした。」

『だからって空気を壊すんじゃない。』

許されたからって積極的に真面目な雰囲気殺しにかかる裏梅だった。

「では、今後も彼らの計画に相乗りする形でよろしいですね?」

『うむ。我らが王の復活、心待ちにしているぞ。』

こうして水面下では事態が静かに、しかし確実に進行していた。

「あ、皆さんにもお裾分けいたします？」

『結構だから、そっちで全部食べちゃいなさい。』

飛騨の国は千年経ってもアットホームな所だった。



## ゆんゆんヒロインで小ネタ考えてみた

リハビリ目的に短編を書こう！

↓このすばのゆんゆんって子、スゲー好み（二番手はめぐみん）

↓せや！この子ヒロインにしてちょっと短編やってみるか！

↓…見れば見る程即落ちしそうなチヨロさ。これ普通に誠実に対応して適度なタイミングで告白すればイケちゃうからカップル成立までの過程がつまんなくない？

↓相手側の男も誠実な感じだと幼馴染みものばりに山無し落ち無しになりそう。

↓よし、カップルどころか夫婦成立した状態で話を進めてさっさと終わらせよう。

---

これは異世界人カズマと愉快的な仲間達による魔王退治後のお話。



んゆんんんんんんんんんんッ！！！！！』

結婚報告にカズマ達の屋敷を訪れたゆんゆんと旦那に対し、めぐみんはこう叫んだ。

すると、今までに見た事ない程にガチギレしたゆんゆんにより、めぐみんはボコボコにされた。

大抵は体格差もなんのそのでめぐみんが勝利するのだが、今回ばかりはガチでキレたのが原因であった。

『え、お前マジでゆんゆんと結婚すんの？付き合ってたのは知ってたけどさ…。』  
『今のままで安心してくれないですし、あーゆーゆんゆんを好きになったんです。確かにちょっと早いですけど、貯蓄もしっかりありますし大丈夫ですよ。』

『お、おう…。』

自分よりも小柄な幼馴染みのめぐみんをボコボコにして仁王立ちするゆんゆんの姿を横目に、男2人はこそこそと話す。

『何という割れ鍋に綴じ蓋…。ま、良いさ。結婚式には呼んでくれよ。』

『勿論。ただ紅魔族の里への挨拶には付き添ってほしいなーって…。』

『めぐみんに頼めよそこは…。』

後日、めぐみんと共に紅魔族の里に向かった二人は盛大にお祝いされつつもやっぱり大騒ぎになったそうなの。

まー族長の一人娘が他所で男作って結婚とか、フツーは問題だよな、うん。

で、この一か月後にアクセルの街で冒険者仲間を始めとした世話になってる面々&紅魔族の里の人々が参加する盛大な結婚式が開かれる事となったのだ。

なお、アクセルの街に大量の紅魔族がやってくる事を聞き、一時人々が恐慌状態に陥り、他所に逃げ出すという珍事が起こったりもした。

「綺麗だったなあ、ゆんゆん。」

そんな紆余曲折を経て開かれた結婚式は、それはもう盛大なものだった。

何せ始まりの街アクセルで結婚式をする冒険者は少ない、否、殆どいないと言っても良い。

サキユバスの存在や初心者向けの街と言う事もあって、この街に骨を埋める様な事をする者は元々いた住人とかを除けばとても少ない。

それでも田舎から出て冒険者を志す者の多くはアクセルにやってくるため、その

人口が減る事は余り無い。

そのため、冒険者主体の結婚式と言うのはとても珍しく、関係各位は己が力の限り飾りつけや宴会芸に注ぎ込んだ。

結果、とても愉快で楽しいハレの気に満ちた結婚式になったのだった。

なお、神父乃至牧師役は何とアクアが就任していた。

いや、アークプリーストなので相応しくはあるのだが、アクシズ教に縁持ちちゃうとか大丈夫か？と言う懸念もあったが、流石に結婚式邪魔する程アレな連中ではなかったらしく、アクセルの街に潜む少数のアクシズ教徒（!?）も今回ばかりは大人しかった。

飾り付けられた式場で、バージンロードを新婦と付き添いの両親（当然だが紅魔族族長夫婦！）が歩いていく。

ウェディングドレスに身を包んだゆんゆんのベールガール（裾持ち）を務めたのは何とめぐみんだった。

身長故に違和感はないが、二人が幼馴染みと知っている面々からすればちょっと意外だった。

よく見ればめぐみんの目元が腫れている事が分かるが、今この時は誰もそれを指摘する様な無粋な真似はしなかった。

『新郎、あなたは新婦を妻とし、病めるときも健やかなるときも、愛をもって互いに支えあうことを誓いますか？』

『はい、誓います。』

『新婦、あなたは新郎を夫とし、病めるときも健やかなるときも、愛をもって互いに支えあうことを誓いますか？』

『はい、誓います。』

『では、指輪の交換を。』

どっかで見聞きした覚えのある誓いの言葉等にカズマがちょっと微妙な気分になった。

これもきつと過去の転生者が伝えたんだろーなーと相変わらずこの世界の変な部分に目が遠くなった。

新郎新婦が互いの左手薬指に指輪を填める。

この指輪は紅魔族の有志による魔法がかかった特別製であり、何か異変（浮気含

む)があれば直ぐに相方に伝わる結構レアな代物だ。

『では、誓いの口づけを。』

『ゆんゆん、オレと一緒に幸せになってくれ。』

『はい…!』

女神と仲間達からの祝福の最中、ここに一組の夫婦が生まれたのだった。

他人の結婚式に参加するのは初めてなカズマにとって、その光景は余りに美しく、眩しく、何よりも羨ましかった。

「すうすう…：うう…ん…かずまあ…：。」

「へいへいと。」

その後はもう皆で正気を失う程の大宴会だった。

あれ程乱れたのは魔王退治後の打ち上げ以来であり、普段は何だかんだセーブしているクリスですら大酒カッ喰らって酔っぱらっていた程だ。

酒を樽で飲みまくるアクアや酔ってドレスを脱ぎ出そうとして取り押さえられたダクネスを放って、酔い潰れたためぐみんを背負って、カズマは屋敷への帰路へと就いていた。

「なーなーめぐみーん。」

「Z Z Z Z ……。」

背中で暢気に眠るめぐみんからの返事なんて期待せず、カズマは極自然体にはばろっと口を開いた。

「俺達も結婚しないか？」

言うてから、途端に恥ずかしくなってきた。

「なーんて、な…。」

しかし、何だかんだ鋭いカズマはここで気付いてしまった。

先程まで聞こえてきたためぐみんのイビキが消え、何だか背中に感じる体温が急に高くなっていく事を。

「お、おい。」

「……………」

「まさか、その、もしかしてとは思いますが……………」

「……………」

「起きてらっしゃいますかめぐみんさん??？」

「……………」はい。」

ぎゅっと、めぐみんがか細い声と共にカズマの服の背中部分を掴んだ。

「えと、その、不束者ですが……よろしく、お願いしますね？」

「お、おう！ここに今後もよろしく頼むわ！」

自分でも声が上がずり、動悸が激しくなっているのが分かる。

それでも一先ずちゃんと返事を出すべきだと思っただけで口を開いたが、こんな時ばかりは普段の弁舌の良さは発揮できず、何か変な事言っていないか不安に過ぎた。

「でもその内リトライさせてくださいお願いします何でもしますから。」

「し、仕方ないですね。それ位は許してあげますっ。」

こうして、何だかんだ言って相性の良かった二人はアクセルの街で二組目の夫婦となるのだった。

……………

死んだと思ったら異世界転移、それも魔王退治して欲しいとか一介のアラサーには無理ゲーに過ぎる。

厨二病だったが、そう思う程度には自分と言う人間の限界も知っていた自分は生特典を貰うと生活していく事に専念する事を決めた。

自分の特典は「どんな時も健康で頑丈な身体」「防いだ攻撃を倍にして敵に反射する盾」だ。

仕事で身体を半ば壊しながら働き続ける生活を送る中、交通事故で死んだ自分にとっては健康と護身は何よりも優先すべき事だったからだ。

が、予期しないチートの副作用と言うべきか、肉体が嘗ての人生における全盛期とも言える十代半ばで殆ど固定されてしまったのは驚いた。

髭剃る必要も殆ど無いとは言え、ちよいと感覚よりも手足のリーチが短いのは慣れが必要だなコレ。

まあ特に問題らしい問題も無いので、この外見相応の年齢を名乗る事にしよう。で、一応暫くは生活に困らない程度の金銭と衣服と装備一式、更に冒険者にとっ

て始まりの街とされるアクセルに送ってもらった自分は、そのまま入口の衛兵？警備？の人の助言に従って冒険者ギルドへと登録のために向かった。

「え、えーと、登録は…あそこ、だよね…？うう…でもでも…っ。」

そこには如何にも人付き合いが苦手そうな奥手の魔法使いそうな女子がマゴマゴしていた。

分かる、とてもよく分かる。

自分も昔そんな感じだったからよ…よく分かる…！

………よし、これも袖振り合うは多生の縁。

自分も異世界とか初めて尽くしだし、ここは現地住民のあの子と多少でも信頼関係を築いて情報収集&冒険者としての仲間確保を試みてみよう。

「あの、ちょっと良いですか？」

「…ふえ!?わ、私ですかー?!」

「はい、そうです。」

「あ、あばばばばばばば…?!?!?!?!?!」

「ゆっくりで良いですからねー落ち着いてくださいーい。」

この時、自分は知らなかったのだ。

声をかけた魔法使いの女子、即ちゆんゆんがただのポッチ陰キャではなかった事を。

紅魔族の族長の娘であり、優れたアークウィザードであり、何より依存系メンヘラで少しでも距離を離そうとすると泣きながら縋り付き、行方を晦まそうものなら他の盗賊ギルドに依頼して情報収集し、剩えテレポートを使用してでも追跡してくるガチのストーカー気質の持ち主である事を。

この時の自分は、何も知らなかったのだ。

ま、何だかんだ言って美人だし巨乳だし優秀だしで絆されて結婚して子供作って幸せになったただけどネ！

# 徒然なる中・短編集（元おまけ集）

---

著者 VISP

発行日 2023年2月6日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-  
<https://syosetu.org/novel/53755/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---